EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03058 3058

高山書店
京神田神保町
(291) 0286
3795

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

purchased from
a gift by

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION

博文館發兌

淨瑠璃本書類

饗庭篁村君校訂 近松時代淨瑠璃 全壹冊

饗庭篁村君校訂 近松世話淨瑠璃 全壹冊

水谷不倒君校訂 竹田出雲淨瑠璃集 全壹冊

幸堂得知君校訂 忠臣藏淨瑠璃集 全壹冊

博文館編輯局校訂 淨瑠璃名作集 全壹冊

水谷不倒君校訂 江戸作者淨瑠璃集 全壹冊

水谷不倒君訂 紀海音淨瑠璃集 全壹冊

水谷不倒君校訂 續近松淨瑠璃集 全壹冊

水谷不倒君校訂 近松半二淨瑠璃集 全壹冊

水谷不倒君校訂 並木宗輔淨瑠璃集 全壹冊

上記十册 同價一册 六拾錢郵税十六錢

大和田建樹君編纂

日本歌謠類聚

全貳冊 洋裝上製金文字入 正價金壹圓貳拾錢 郵稅金三拾貳錢

第一編……かみつよぶり○其一大歌○其二童謠○其雜曲

第二編……なみつよぶり○其一神樂歌○其二催馬樂○其三風俗○其四今樣○其五雜曲

第三編……ちかむかしぶり○其一宴曲○其二謠曲○其三小歌○其四雜曲

第四編……ちかつよぶり○其一小唄○其二琴唄

第五編……ちかつよぶり○其一淨瑠璃○其一地方唄○附錄

紙數一冊一千餘頁

我國開闢以來二千五百年間の歌謠は載せて本書にあり、時代を以て古今を分ち種類に依て雅俗を別にし、一讀人をして昭々其沿革を詳にせしむ、大和田先生が之を輯むるに幾星霜の勞苦を費れしかは、曩に出たる謠曲通の一例に於ても推知するを得べし

故大橋乙羽君著

千山萬水

洋裝上製美本
正價金五十錢
郵稅金十　錢

本書は辱くも九重の御覽を賜ふの榮を得發售以來既に十三版を累刊するに至るの盛運に會す總紙數六百五十餘頁各地の山大川古蹟勝景等優美なる寫眞版を挿入して一々懇切に評述したれば實に一面完全なる旅行案内なると同時に婉麗なる大文章なり

故大橋乙羽君著

續千山萬水

（九版）

洋裝上製美本
正價金五十錢
郵稅金十　錢

東洋古來第一の美本として、内外の喝采を博したる千山萬水は其の記する所の地東北に止まりしを、烟霞の癖は更に著者をして、東海畿内中西國南より北陸諸州を跋涉せしめぬ。是に於てか續編あり之を初編に比するに、經る所廣きに從ふて寫眞に上れる絕景亦頗る多し。裝幀の美麗亦優なるも劣ることなし。

文學士久保天隨君著

檜木笠

全壹冊洋裝袖珍正價四拾錢郵稅八錢

天隨氏が鏟山攪海の筆は一種豪健疎宕にして其姿致到底他の摸倣追隨を許さゝる者あり誠に百代の珍と爲すべし本書は氏が最近の紀行文二十餘篇を蒐めたるものにして文中時に詩俳を加ふ試に一讀すれば紛々たる俗塵を隔離して相伴うて遠く去り青山白水の寰區に逍遙するの感あるを得む

故大橋乙羽君著

耶馬溪

全壹冊洋裝袖珍正價四拾錢郵稅八錢

賴山陽をして耶馬の溪山天下に無しとまで絕叫せしめたる豐の馬溪、亦著者の踏する所となり、其明晳の紀文と、靈妙の寫眞は本書となれり、從來斯勝を髣髴する者は、獨り山陽の紀文ありしに著者は山陽の未だ到らざりし所迄到り、其未だ寫さゝりし奇勝を寫したれは、斯書を一讀する者、遊意勃興、好嚮導を得たるを謝せざる可からず

故大橋乙羽君校訂

紀行文集

（續帝國文庫第二十編）

全壹册洋装菊判脊皮クロース製金文字美本
正價金六拾錢
郵税金拾六錢

目次（一）

●東遊記
●西遊記
●日本行脚文集
●諸國軍人談
●東遊記後編
●西遊記後編
●筑紫紀行
●奥の細道

岸上質軒君校訂

續紀行文集

（續帝國文庫第二十四編）

全壹册　洋装背皮金字入
正價金六拾錢郵税拾六錢

本書收むる所の紀行文長短四十七編年代を以て之を次序す變遷沿革の跡を考ふるに便せんが爲なり貫之朝臣の土佐日記は紀行文の祖と稱せらるゝも單行の文も少からずはた文詞古晦にして解し難きふしもあれば之を省き嚴島柳幸記を以て卷首に揭げぬ

岸上質軒君校訂

續々紀行文集

（續帝國文庫第卅五編）

全壹册洋装背皮金字入
正價六十錢郵税十六錢

遠くは鎌倉時代より、近くは徳川時代の末に至るまで、學者の紀行文中、最も趣味あるもの數十篇を集む。艱難を極めたる旅行記あり、壯快なる冒險談あり、風流なる遊記あり一篇自ら一篇の妙味を具へ、而も通觀すれば時世に伴ひ、風俗志尙の轉變を見るべし、娛神臥遊の絕好伴侶なり

石橋思案君著

筆と紙

全壹册洋装袖珍
正價金三拾五錢
郵税金六錢

此書收むる處滑稽小說に『正反對』『名物袋織』『細君大明神』等の奇編あり講義に『都々逸文學』論說に『和洋美人比較』『好男子變遷』等の妙編あり其他小品に雜記に收錄する約四十種讀者は殆んど送迎に暇なからん作者が十年の心血收めて此卷にあり、

江見水蔭君著

月と梅

全壹册
洋装袖珍正價廿五錢郵税四錢

諸泉滾々として湧き想地漾々として溢る水蔭子の材料に富み短編に長ずるは明治文壇の珍とするに足るべし。此編子が短篇の傑作數十種の他に相撲小說、時代小說、訪問實記等を添へたり、子の視察が多方面に渡りて趣味百樣に躍出ぜるは景色整ふ月と梅、

故樋口一葉女史著　女史肖像入

校訂 一葉全集

本書目次

●にごり江 ●やみ夜 ●曉月夜 ●玉欅 ●雪の日 ●軒もる月 ●ほとゝぎす ●うち紫
●われから ●大つごもり ●うもれ木 ●五月雨 ●琴の音 ●うつせみ ●この子 ●わかれ道
●ゆく雲 ●經つくゑ ●闇櫻 ●わかれ霜 ●花ごもり ●そゞろごと ●十三夜 ●たけくらべ

全壹冊洋裝
菊判大和綴
正價四拾錢
郵税八錢

江見水蔭君著

鐵道小說 滊車の友

全一冊洋裝袖珍
寫眞銅版口繪
正價金參拾錢
郵税六錢

●鐵道小說……二拾種　●鐵道笑話……三十八種
●鐵道客譚……拾種　●滊車遊戲……拾六種
●滊車雜記……拾種　●鐵道俳句……二種
●鐵道案內……　●附錄……四種

鐵道旅客が車窓中のつれ〴〵を慰むる書物として江見水蔭君が新案の『滊車の友』は世に出てぬ、巻中記する所短編小說二十種滑稽談四十種なり。

公爵近衛篤麿君題辭
權典侍千種任子君題詠
大河内一子刀自題詠
饗庭篁村君序文《十版》

旅行案內

全壹冊正價金廿錢郵税六錢

本書は避暑旅行者は勿論、溫泉巡遊者、山水吟咏者の須臾も座右を離すべからざる、者は無二の奇書にして、山水の位置名所舊跡の存在、旅行用心集など精細に記載しあれば、世の紳士淑女隨一の好伴侶なり。

寫眞銅版口畫

●宮城二重橋●伊勢大神宮●日光神橋●日光陽明門●伊豆網代海濱●奈良春日神社●信州木曾浴鶴巖●武州金澤瀨戸●伊豆豐後耶馬溪佛阪●紀州瀞八丁●北海道專榮湖●豐前宇佐八幡宮●播州舞子濱●陸前松島●信州善光寺●上州妙義山●富士白糸瀧●相州箱根塔之澤●上州榛名湖●伊豆熱海江州三井寺●藝州宮島●駿州富士橋●防州岩國錦帶橋●宇都嵐山渡月橋●大阪道頓堀●駿州興星岩寺●臺灣淡水河

英國海軍大尉エム、リード氏著
日本　櫻井鷗村譯補

勇壯少年冒險奇談 初航海

（袖珍美本三百餘頁）

全壹冊洋裝正價金廿五錢郵税金六錢

勇壯少年の冒險奇談として面白きこと此書の如きもの恐くは天下になかるべし今や三版を出版せり、願くは御愛購あらんとを。

（三版）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

熊田宗次郎君著

再版

明治才媛美譚

全壹冊六百餘頁　洋裝美本　正價金五十錢　郵稅八錢

明治才媛美譚は、猶ほ百花園の如し、淸瘦梅の如きもの、艶麗櫻の如きもの、濃麗牡丹の如きもの、嬌紅海棠の如きもの、芳姿芙蓉の如きもの、幽香菊花の如きもの、皆收めて卷中に在り、然れども本書の取る所は、姿色にあらずして、德操に在り。妙齡の令孃にして、父母に孝なる、兄弟に友なる、朋友に信なる、婢僕に慈なる、而して才學に卓絶、智識の俊邁なる、苟くも婦女の龜鑑たるに足るべきものを擇びて之を取る、女子は必ず讀まざるべからず、女子を有し女子を敎育するものは必ず讀まざるべからず、家庭の讀本蓋し之より善きは無けん。

華族女學校學監下田歌子女史題詠
三輪田眞佐子女史序文中島儀一君著

訂正三版

新撰小學女禮式

全壹冊洋裝正價金廿五錢郵稅六錢

世の開明に連れ時の文化に伴ふて淑女の令風又改善の域に進まざる可らず、今や中島氏本書を著はして婦女家庭の要義たる禮式を新選し洽く女教の軌範を網羅せり、且つ文章平易流暢にして幼兒と雖も能く讀了せられ挿畫又た本文を補ふて用意精密なれば、貴姬令孃は素より家庭上には缺くべからざる禮書なり。

本書要目

○家庭の敎　○女禮禮　○立禮作法
○座禮作法　○進退作法　○諸品取扱樣
○婚姻の部　○新撰儀式　○新舊結物
○新舊包物折方　○水引結びよう俯向の圖

讀賣新聞記者　鈴木光次郎君編

第六版

明治閨秀美譚

全壹冊　袖珍　正價金貳拾錢　郵稅四錢

浸潤膚受の力は實に驚くべきものありて存す。古來哲人傑士の、其母より受くる感化の大なるは、史傳之を示して炳焉たり、婦人は實に社會の潛勢力

賢母良妻の國家に裨補する所誠に測る可らざるものなり。本書は

明治閨秀の言行實錄にして、實に社會の龜鑑たり

中島湘煙女史序
三宅花圃女史序
津田梅子女史序
巖本善治君跋
中村不折君畫
櫻井鷗村君著

現代 をんな氣質

金壹冊袖珍美本
定價卅五錢郵稅六錢

多大の魔力を有し知り易きが如くにして而も大に覺り難きものは女性なり、本書はこれ特殊の眼光を以て婦情及び家政の微を穿ち幽を極めんとするもの優に當代の異彩文字たり、女流は之を見て首肯する處あるべく男性は以て大に學ぶ處あるべし

巖谷小波君著

女波男波

全一冊　洋裝袖珍六百餘頁

小說の艶に過ぐるを斥く勿れ、個中大寓意あり大風刺あり。論說の罵に失するを咎むる勿れ、這裡大抱負あり、大見識あり。若し夫れ附錄の變女大學に至りては變生男子が大氣焰、大の男も三舍を避くべき、蓋し當代の大問題なるべし、嗚呼大なる哉此書や。實は寸珍の美本とす、呵々

正價金四拾五錢　郵稅八錢

饗庭篁村君著

聚寶盆

全壹冊　洋裝袖珍五百頁

著者自から我家の至寶と稱する小說、脚本、紀行等を聚めたるものなり、其文情筆致、笑ふうちに溫情あり、啻に輕妙滑脫とのみ許し去らずして精讀再誦すべき珍書なり。

正價金三十錢　郵稅六錢

內田不知庵君著

文藝小品

（再版）全壹冊　洋裝袖珍美本

著者特別の犀利なる筆鋒を以て、機警なる批評精到なる敍事文、其他雜著となりしもの積んで堆を成すに到る、本書は其精英を拔き、更に訂正して上梓せるものなり。清警明暢、一讀趣味津々たるの快あるべし。

目次

○綠蔭茗話○落葉○詩文の感應力○詩文の粉飾○詩辯○戰後の文學○政治小說を作るべき好時機○如是放話○市川白猿○東花坊支考○ラセラス傳の作者○老車夫○外六

正價金參拾五錢　郵稅六錢

齋藤綠雨君著

あられ酒

（參版）全壹冊　洋裝珍袖美本

覺想精緻、文章硏錬、而して一種警拔の妙を有するもの、是れ綠雨先生の文にあらずや。今先生が新舊の小說及び隨筆を集載し以て此一冊を爲す。社會百般の現象は、悉く捉へ來りて、言々句々人の肺腑を刺し嬉笑怒罵筆に隨て紙面に飛躍す、請ふ好文の士、一讀して此言の忘ならざるを諒せられよ。

正價金貳拾五錢　郵稅六錢

中央新聞社編

名士の嗜好

●黑田長成侯●德川家達公●福地源一郎君●岸田吟香君●大倉喜八郎君●馬越恭平君●戶田氏共伯●山尾庸三子●廣澤金次郎伯●秋元興朝子●喜谷市郎右衛門君●福岡孝悌子●守田長祿君●古市公威君●河瀨眞孝子●松平正直君●野村素介男●益田克德君●渡邊昇子●田中光顯子●鄉純造君●板垣退助伯●伊藤雋吉男●伊藤勇吉君●土方久元伯●曾禰荒助君●吉田要作君●藤波言忠子●山縣有朋侯●渡邊國武子

全壹冊袖珍正價廿五錢郵稅六錢

文學士大町桂月君著

大絃小絃

全壹冊　洋裝袖珍本金文字入

大絃急雨の如く、小絃私語の如しとは、琵琶の聲のみならんや。桂月先生の文は、世已に定評あり。此書收むる所數十編、議論に、記事に、叙事に、才氣潑刺筆力縱橫、或は莊重雄大、或は輕妙自在、觀察も亦奇警にして銳利、以て普通文の模範とすべく、以て作文の指南とすべし、天地間、實に此痛快の文なかるべからず。文を好むの士、願くは一本を備へられよ。

定價金參拾錢　郵稅六錢

森田思軒君譯

十五少年

全一冊洋裝菊判頗美本　正價金三十錢　郵稅六錢

▲日本新聞評…佛國ジユウールスヴエールスの著、森田思軒氏の譯する所なり、我國の小說一般此種の者に乏し、かれお伽草紙の如きもなまめきたるもの多く、少年活潑の氣を養ふには似つかはしからざるなり、此著一種の冒險談實に男子の快讀に適す多とすばき也。

若松賤子女史譯

小公子

全一冊洋裝菊判頗美本　正價金三拾錢　郵稅八錢

●近世歐米の讀書社會を震動し劇場に演ぜらるゝこと數回一代の流行を左右して一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめたる奇大の勢力ある原書なり。女史之を譯する極めて巧妙にして又一時に喧傳せり、中島湘烟女史は題し、以て遺稿に寄せり

田山花袋君著

(三版) **南船北馬** (三版)

全壹冊洋裝袖珍五百頁

隨處に感興を作り到邊にと想を著するは花袋子の紀行文なり、ことに子は暗勝の景に富みて殘山剩水處として至らざるなく、處として探らざるなければ、その紀行文には珍談奇話百出して或は溪村の夕或は深山の夜、或は怒濤岩を嚙むの邊、或は山中の湖畔など、他の紀行文には見るべからざるの妙あり、編中志摩巡り熊野紀行の如き其精彩の躍々たる眞に一幅の寫眞圖なり。

正價金四拾錢郵稅六錢

田山花袋君著

(再版) **續南船北馬** (再版)

全壹冊洋製袖珍美本

目次

●雪の函館●淺間橫斷記●草津嶺を踰るの記●狐島●南洋の遺跡●並木づたひ●陸羽の一面●瀨戶內海●播磨名所●鎮西の諸勝●一步一景●箱根影記●雪中の木曾●華嚴と霧降と裏見●戰場ヶ原●栗山卿●老僧●三ねの松●冬の日光●多摩の水源●富士川を下るの記

正價金四拾錢郵稅六錢

慶應義塾々長鎌田榮吉君著

第五版

歐米漫遊雜記

全壹冊 洋裝四六版 紙數五百頁

▲正價金四拾五錢 郵稅八錢

著者往年歐米に遊ぶこと年餘其歷程の廣汎なる觀察の細微なる他に其比を見ず、隨觀隨錄したるるものの今之を一卷に收輯す、英米獨佛露伊其他各邦の文物典例國勢は勿論博物館美術館劇場著名なる建物、舊趾、名蹟等仔細に敘述して餘蘊なし、加ふるに著者が齎らせる珍奇なる寫眞十數葉を挿入す、最近歐米の旅行案內として必讀の新書なり。

侯爵山縣有朋君
侯爵伊藤博文君
伯爵井上馨君
子爵故品川彌二郎君
題字

水田榮雄君著

大英國漫遊實記

全壹冊 洋裝四六版 紙數七百頁

▲正價金七拾錢 郵稅八錢

英國が世界第一の富强國たる根本は何ぞや、此書著者が滿三ヶ年間、千辛萬苦前人の未だ入らざる所に入り、未だ見ざる所を見て、英國の富强の根本を究め各地工業繁榮の實況を細寫し、精微透徹讀む人をして身自ら英國に遊び各工場の內外諸部を巡視するの感あらしむ、尙英國風俗の眞相、名士の訪問記等得易からざる記事多し、山縣侯本書に題して「平和之戰爭」といひ、井上伯は「思深慮遠」といへり、日本立國の急務、工業振起にあり、本書が今の時勢に必讀の良書たる多言を要せず。

落合直文君 小中村義象君 合著

七版

新撰日本外史

全壹冊 總クロース金文字入

正價金壹圓貳拾錢 目方四百匁

概目

○第壹編 御矛の雫（神代）
●第貳編 大和錦（大和時代）
○第參編 唐錦（同上）
●第四編 藤の下言（藤原時代）
○第五編 躑躅の咲分（源平時代）
●第六編 星月夜（鎌倉時代）
○第七編 芳野の櫻（南北朝）
●第八編 北山の時雨（室町時代）
○第九編 五月闇（戰國時代）
●第拾編 桃山の春（豐臣時代）
○第拾壹編 江戸紫（德川時代）
●第拾貳編 千代田の宮（明治時代）

歴史の要は事蹟を推究して眞相を記するにあり去れば文章の明暢を欠くときは讀者眞相を解するに苦しむこと多し、本書は能く實際の眞相を得たるは勿論文章雅健にして一讀手を繹くに忍びず、上神代より下今日に至る一貫秩然として復得易からざる良史なり。

勢多章之君編

古人評論

全一冊 正價金貳拾五錢 郵稅六錢

本書は左記の現代名家が各其の好む所信ずる所内外古今の偉人傑士聖賢哲士を評論せしもの一讀以て其人となりを想見するに足る近來著書の如きも評論として眞に江湖に此類例なき好著なり

本書評論者

●公爵近衛篤麿君●公爵二條基弘君●侯爵西園寺公望君●伯爵東久世通禧君●伯爵土方久元君●子爵谷干城君●子爵曾我祐準君●子爵渡邊國武君●子爵福羽美靜君●子爵海江田信義君●子爵長岡護美君●男爵末松謙澄君●男爵白根專一君●男爵尾崎三良君●男爵小澤武雄君●男爵北垣國道君●男爵石黑忠悳君●細川潤次郎君●男爵金子堅太郎君●松岡康毅君●津田眞道君●渡邊洪基君●矢野文雄君●法學博士田口卯吉君●外二十四名

干河岸貫一君編撰

近世百傑傳

全壹冊袖珍數紙七百頁 正價金五拾錢郵稅八錢

本書の綱領は勉強、耐忍、忠孝、節義の事蹟を歴叙し、以て少壯年者修身立志の基礎となす可く、以て老成の人も亦齊家處世の龜鑑とし、子弟を訓誨するの骨目となすべきに在りて、彼の寛政間に物故せし六無齋林子平より幕末に至るまでの名傑一百人の傳記を集載せるものにして、邦傑あり文傑あり、才傑あり、開國家あり、攘夷家あり、刀圭家あり、書工あり、其各傳の終には必ず編者の論評を掲ぐ。一讀者に感動を與へ、頑懦を起すの効益大なる可く、世の志を養び行を砥勵せんと欲する諸君は試に本一を購覽して斯言の誇強にあらざることを實驗せられよ。

袖珍美本短篇小說

江見水蔭君著

戀

戀愛小說家としての江見水蔭氏が戀に關する小說數十種を合せて一卷とし附錄としては氏が得意の詩篇數十種を添へたれば、艶は固より艶なりと雖も、濃を避けて淡、俗を捨て雅、情緒の纏綿は巫山の薄霞、縷々の內に猶ほ讀むべきは戀の本體なる、神聖にして毫も卑猥なる文字を挾まず、されば戀する人も戀せざる人も最愛の友とせらんれんとを

全壹冊洋裝袖珍紙數六百頁
正價金參拾錢　郵稅六錢

鶯亭金升著

新撰落語　福

サア出ました／＼、一休曾呂利も舌を捲て逃げ出す、金升君が新作の落語、おまけに滑稽小說まで附て居て二百五十餘種ズラリと並んだ玉揃ひ、見れば誰でも笑はぬ者はなく笑ふ門には福が來る、福の神の嫌ひな人は御覽なさらずとも宜しいはお好きな御方が試みにお覽あれ法螺をふくのふくとは大違ひで御座い升。

全壹冊洋裝袖珍美本紙數三百頁
正價金參拾錢　郵稅四錢

江見水蔭君著

星

天界の星は或る意味にて數の無窮を現はすか如く人爲の星は江見水蔭氏が思想の無窮を現はすものにて卷中脚本あり短編あり時代物あり滑稽物あり冒險談あ訪り問錄あり文士口演あり材料の豐富なる實に闇夜の星も啻ならず其能北斗星の如く文海航行の指點とならんは決して誇大の言にあらざるなり。

全壹冊洋裝袖珍紙數六百頁
正價金五拾錢　郵稅八錢

巖谷漣山人著

笑

此書題して笑といふも思出し笑の理深きにあらず世辭笑の追從も學ばず虎溪三笑の禪味もなければ時平が七笑の惡きもせず畢竟後となきニタ／＼笑ひ、一人よがりの馬鹿笑に過ぎれど若し夫れ世間の冷笑ともなるべし．兎角は福の神呼出しの呪笑ひたまへ讀みたまへと申す

全壹冊洋裝袖珍紙數五百五十頁
正價金四拾錢　郵稅八錢

内田不知庵君著

新版

社會百面相

全壹冊 洋裝菊判
コロタイプ口繪入
正價五十五錢
郵稅 八錢

犀利鋭扱の觀察精緻流麗の文筆と相待つて巧に現代社會の眞相を穿ち文壇近時の寂寥を賑はしむる者是れ本書即ち不知庵先生の百面相にあらずや巻を開けば政事家あり紳士あり商人あり書生あり學者あり軍人あり醫者あり社會のあるとあらゆるものは悉く先生の筆中に收められて表裏前後左右より其妍醜を照破し巧みに眞相を寫す况や其文趣味豐富にして讀下無限の興を添へ喜怒哀樂の情に耐へざらしむる者あり乞ふ一本を左右に備へられよ

東西二十四傑

●全壹冊 洋裝袖珍美本
●正價三十五錢郵稅六錢

●源為朝……(桂月)
●ハンニバル……(天溪)
●秦始皇……(鯉洋)
●シーザル……(空花)
●山田長政……(烏城)
●コロンブス……(天溪)
●項羽……(賀軒)
●加藤清正……(秋香)
●パートル大帝……(華水)
●大石良雄……(青軒)
●フリドリヒ大王……(成友)
●鄭成功……(露伴)
●ワシントン……(不染)
●木戸松菊……(水哉)
●鐵木眞……(紫山)
●子ルソン……(左川)
●新田義貞……(蘭雪)
●北條早雲……(麗水)
●唐太宗……(嫻齋)
●ガルバルジー……(春汀)
●李鴻章……(柏軒)
●モルトケ將軍……(霞城)
●木村重成……(小波)
●ジャンダーク……(樗牛)

大橋乙羽君著

歐山米水

本邦未曾有の美本

全壹冊
正價 壹圓五拾錢
郵稅 拾錢

本書紀事は二百餘ページ口繪歐米各國の風俗勝景色刷五十六面別に日本書大家橋本雅邦翁筆の文珠菩薩寺崎廣業君の美人又コロタイプ精巧版あり表紙は我國に其例なき和洋折中の新裝にして扉は十遍ずりの美觀あるものを附す日本無比の美本といふも決して空言にあらざるなり

近世

世界十偉人

全一冊袖珍上製
正價金五十錢
郵稅 八錢

●(伊國)カミロ、カヴール……松村介石
●(土國)オスマン、パシア……小山正武
●(露國)ゴルチヤコツフ……中西牛郎
●(獨國)ビスマーク……松本君平
●(支那)曾國藩……川崎紫山
●(英國)ベーコンスフイルド……尾崎行雄
●(日本)西郷隆盛……三宅嶺雪
●(米國)ハミルトン……島田三郎
●(佛國)ナポレオン三世……高山林次郎
●(澳國)ルイ、コツスート……石川安次郎

明治三十五年六月十二日印刷
明治三十五年六月十五日發行

定價金貳圓五拾錢

著作權所有

著者　幸田成行
東京市日本橋區本町三丁目八番地
發行者　大橋新太郎
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　佐久間衡治
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場

發兌元
東京市日本橋區本町三丁目
博文館

の負むべからざるは昔人もまた多く之を言へり、散亂心の戒めざるべからざるは、驕慢心の戒めざるべからざるより甚し。人の聰明は四十歲五十歲に至つて必ず衰耗すべきものなれば、聰明未だ衰へざるに及んで一心散亂の惡習をなすこと無く、而して人々自己が爲さんと欲するの業をなすの地をつくるべき也。

め尚むに足らず、俗人は驚きて異とこそ爲せ、識者はいかで偉なりとせん。たま〳〵左手に圓を書き右手に方を書くが如きことを能くする人も無きにあらねど、たとひ實に之を能くすとも多とするに足らざるのみならず、事もと例外に屬すれば、常人の學んで之を能くすべきにあらず。牛董は偉人なり、されど人の如何にして君は引力につきての大發明をなし玉ひたると問へるに答へて、我は不斷心によつてと答へたり。不斷心とは散亂心の反對なるべし。龍樹菩薩は大賢なり、されど散亂の心は風中の燈火の如し、明らかなりと雖も物を照らす能はず、と說けり。まことに風の中の燈とは巧みに散亂心の働きを形容せるものかな。聰明の人やゝもすれば中年にして愚鈍の人の凌ぐところとなるあるは、數々世人の眼にするところなるが、予の實驗にては、其原因大抵は聰明の人の散亂心を以て事に當るによつて結局敗者の地位に立つに至るが如し。蓋し聰明餘りあれば心に餘裕あり、心に餘裕あれば勢ひ散亂動搖せんとす。聰明の青年、書を讀めば書甚だ讀み易く、算を做せば算甚だ做し易し。こゝに於て因緣の去來し神情の駛せ逸するに任せて、一心散亂動搖し、日を累ね月を積みて終に頑癖をなすに至る。散亂心を以て事に處し物に接するの習ひをなすに至れば、聰明また聰明ならず、風中の燈光甚だ力無く、愚鈍の人の專心無適にして事に處し物に接するの習ひをなせるものに勝つ能はざるや必せり。

天資甚だ高きもの終に庸凡の人の下風に立つに至る。まことに惜むべく憾むべきにあらずや。聰明

心の一處に注ぐ能はずして、動搖定まり無きを散亂心といふ。たとへば書を讀むに當つて一心紙上にあること能はず、或は鳥の聲を耳にするの因に心直ちに鳥のあたりを指して馳せ去り、或は車の窓前を過ぐるによつて心また車を追ふて去るが如し。これを散亂心を以て事をなすとはいふなり。古の人はこの散亂心を以て事をなすことを忌むこと甚しく、學問にせよ、功業にせよ、爲して成らざるあるは、大抵この散亂心を以て事に當るが故なりとまで思考せりとおぼし。如何にも散亂心を以て事を爲して、能く成さんとは、まことに覺束無かるべし。散亂心を以て事を爲して成す能はざるの實例は、算術を學ぶに當つて、何人も明らかに認むることを得べし。推考の力を要する算術上の問題に對して、若し心を其問題に專注する能はず、いたづらに昨日見しところの演劇の光景を想像し、若くは今夜某處に於て觀んとするところの幻燈を想像し、若くは自轉車に乘りて走る愉快を想像しなどせんには、推考の力はこれが爲に鈍りて、腦中の混亂を惹き起し、結局茫然として自失するに至るべし。されば算術上の問題に對してのみならず、如何なる場合にても、散亂心を以て事を爲して能くすべからざるは、定まりたるとなり。世には聰明絶倫の人ありて、一時に多くの人の口々に訟ふるを聞き得、また手をもて書を作しながら心には詩を作り得るなどの人も無きにあらず、かゝる人々歷史にも見え、眼のあたりにも見ることとなれば、散亂心をもつて事を爲すも差支無かるべしといふ疑ひあらん。されど實は八人藝といふもののめきたることを爲し得たりとて毫

また其味のいづれが美なるかをも云ひ得べし。おのれをして優人の技を評せしめんには、おのれ愚なりと雖も如何で仕入れ通となるを敢てするに堪へんや。この義は鐵鎚餅の堅うなつて銀餅の平に〳〵御斷り申候。されど君の意必しもおのれをして技の評を爲さしめんとにはあらざるべく、蓋し其意はおのれの愚直に藉りて以て世の仕入れ通を諷せんとにあるなるべし。眞に仕入れ通の面惡きや出來の小魚の分際を以て人魚ほど長生したるやう物知りめかし演劇海の大魚をば或時は取巻きて其威を假り、又或時は侮りて自己が跳ねつ返りの名を成さんとす。分不相應に口のみ大きく、如何なるものにも咬りつかんとするは、譬へばだぼ鯊といふものに似て、自己は魚なりと思ふべけれど、釣師には魚籠に入れられずたゞ〳〵取つて投げらるゝのみ、魚あつかひにはせられぬ如く其言ふところも優人には頭から取り上げられずと聞き候が、是の如き仕入れ通の爲すところは、批評といふこととの價値を卑くするほかには何の結果をも世に與へず、苦々しき限りと存じ申し候。これらの通もおのれの如く早く技の評など思ひ止まつてたゞの見物となり果せば、少しは劇海の水の濁りも漸く澄みて評の道の光も漸く透徹するに至らんと、氣は釣綸の直なれど、旋毛は曲れる鉤の刺あること迄申上候。草々。

其四十六　散亂心

甘さも彼等は知り居るべき也、看る者の眼に止め心に浮ばすほどの事は如何で彼等の知り居らざらんや。然るに彼等に打對ひて、露天で割籠は開きつけても花電燈の下で辨當食ふをば心地好しとは思はぬ程の劇塲馴れぬ己如きが評など爲さんは、愚に過ぎたることゝ存じ候。世に忌はしきは一知半解の聾の聞取法問耳學文もて我賢顔に口をたゝき、花の中にも枯木を搜す啄木鳥根性のせゝこましく、あのゝものゝと批を入れ廻り、或は孔雀の羽を拾つて自己が色無き身を飾らんと思ひし譬喩の鴉の如くに、誰が型は如是、誰が案じは如是、かう〳〵かく〳〵かあ〳〵と聲喧しう噪ぎ立てゝ、見もせぬ古人の仕たことを、身の金箔に借りて異う高ぶる、俄仕立の評者に候。おのれの如きも往來ひする友には老いたる見功者を一人二人有たぬといふにもあらねば急拵への劇通となりて、黑々と評を仕濟さんも、或は爲し得べきことなれど、横山町仕入れの袋物、十把一トからげの分際で、型の形のと小癪を云ふ仕入れ通には成りたからず候。君のあづかり玉ふ此雜誌もまた、もとより仕入れ通をして黄色い聲を立てさするところとも覺えず候。さすれば石碣村の阮某と名乘りをあげんと思ひ居れるほどの小生をして何なりと認めさせんとの君の意は、おのれに劇評を求むるが如くにして而かも眞に劇評を求むるにはあらざること、たとへば智多星の特に來れる其意は鯉魚を索むるが如くにして而も眞に鯉魚を索むるにあらざりしが如くなるにはあらずや如何に。君おのれをして鮒を評せしめんにはおのれは必ず其いづれが荒川の産なるか其いづれが中川の産なるかを辨じ、

其四十五　劇評を求めらるゝを辭するの書

十一日見物致候歌舞伎座劇につき何なりとも存寄相認むべき由の御催促委細承知仕候。併しながら平生村居の無事に慣れて市中の目まぐるしきを厭ひ、木挽町に車を走らせんよりは中川べりに一竿を携へて、桝の内に窮屈を堪へんよりは桶魚籠に腰を休むるかた、吾が性に合ひたりと思ひ居るほどの野人に候へば、日曜といふ日曜は昔の繪師の書きしといふ其馬鹿者の馬鹿仕事、魚釣三昧に日を送りて、なか〳〵芝居を見にも參らず、球泛子のうき〳〵と面白く世を經るも、板錘子の沈みがちに詫びて身を取りなすも、人それ〴〵の心々なり、我には吾の樂みありと、大江の水の澄ましかへつて、深みに潛める冬の鮒の別に求むるところも無く過し來り候ものから、たま〳〵評判の喧しきに誘はれて、生且淨末の一出一入に一日の眼をさらせばとて、直に兎角を云ひ出でんは、まことに烏滸の限りにして、面羞しき沙汰に候。團十郎菊五郎秀調は云ふに及ばず、丑之助英太郎の年若きに至るまで、孰か心を勞し身を役して技を演ぜざらんや。しかも此等の諸優人は、其最も勝れたるは團菊より其最も劣れるは世に知られざる輩に至るまで、皆多少の天賦にかゝる才能を有し、前定にかゝる因緣を有して、名を藝苑に列ね、其最も長きは數十年より其最も短きも數年に亘るの間、鍛錬切磋の功を積みて、身をば舞臺に寄せ居るものなれば、酸きも彼等は知り居るべき也、

徂徠は儒中の漢高楚項なり。其人材を論ずるや唯一言のみ、而して其一言の氣象活大、作用活潑、人をして達者にあらざれば決して說破する能はざるを思はしむ。其言如何、曰く、人才は疵物にあり。

其四十四　氣質

萬人に通ずるは道理なり、一人の私は氣質なり。氣質の偏りたるを撓むる工夫を知らざるを、生れだちのまゝの人といふ。惡しとにはあらざれど、さてそれにては世の困りものなり。また自己が氣質を撓めんともせざるを横着ものといふ。まことの剛勇にはあらぬこと論無けれども、横着懶惰のものに限りて、自己が氣質のまゝに振舞ふを剛勇なりとなせり。天眞爛漫などいふ語は、常にかゝる輩の巢の上に懸けらるゝ額面の文字なり。氣質のまゝにするを可とするは猶可なれどもやがて其輩は慾のまゝにするをも可とするに至らんとする傾きあること毎々世上に見かくるところなり。さる輩には修行といひ工夫といふことも既無益のものゝやう見做さるゝ習なるこそ餘りに人らしくも無くて口惜けれ、と我が師事せし人の幾度と無く說き聞かせたまひしを、此頃いと身にしみて思ふ折多し。

先づ他を論ぜずして己を檢せしめんとするの用意まことに切實なりといふべし。我は心靜かなるか速きか、重きか、輕きか、粘きか、さくきか、此六つの心の上にまた、我は奢つて無禮なるか、へりくだりて慇懃なるか、正しき欲にて心奇麗にたしなむか、邪欲にて心むさぼるか、短氣の意地あるか、堪忍なるか、物能くすといへども、ねば口なるか、辯才あきらかなるか、心は明らかなれど我身は醜劣にて至らぬ者の眼には耄れて見ゆるか、心剛なるか、心強なるか、合十七の品々我身心に何が備はりたるかと能々思案工夫の分別を遂げて我身にて我心を知らずば叶はざることなり、大身はいふに及ばず小身なりとも善き被官を見出して親兄弟の如く大切に存じて馳走して意見を得て我が惡き意地を治して後に人を鑑定まば大形十人が九人をば善惡見定むるに相違あるまじと相心得べきなりと云へる如きは實に至論と云ふべきなり。また論じて曰く、人の樣子にて其技能を見定むる儀喩へば小刀のかさね（厚さのことなり）薄く造りたるは楊枝など削りて見るに深入りするものなり、かねあぢ堅き小刀にては竹を削るにのらぬものなり、（刄の入らぬをいふ）竹には、かねの甘き小刀至當なり、（竹を削るには刄の鋼の軟かにて身の薄きが可となり）と。これまた人才おの〳〵其適所あるべきを云ひて比喩甚だ妙なりといふべし。

其四十三　徂徠

堯天下を許由に禪りたるに許由これを受けざりしかば後世の人皆これを高しとして異論あるなし。しかるに陳眉公は云ふやう、堯の時は盡大地是洪水、盡大地是獸蹄鳥跡、其後水土の漸く平かなるを得て民に稼穡を敎へしなり、蓋し洪荒の天地たゞ一片乾坤の草稿を具へ得るのみ、何ぞ曾て受用のところあらん、天子の尊さも、茅茨剪らず樸角斲らず、鉶簋の食聊か以て饑に充て、鹿裘の衣聊か以て寒を禦ぐ、惟天下の樂みを享くる無きのみならず、且天下の憂を叢むるあらんとす堯の黧く舜の黒きも固より其の宜のみ、許由又何の艶羨む所あつてか之を受けんやと。皮肉なる論といふべきなり。面白きことは面白けれど、輕薄なることは輕薄なる此類の論、たゞ茶話として聞くべきのみ。

其四十二　甲州流軍學

甲州流と世に稱ふところの一家の兵法あり。其甲州武田氏的傳なるや否やは知るべからざれども、蓋し信玄の遺法と甲州諸士の傳ふところの談とによりて、やゝ才識あるものゝ蒐めて之を成せしものにもあるべきか。說くところ實驗の餘に出でたりと思しくしてよく情理に適せるものなきにあらず。人を相ることを說きて人を相まんとおもはば先づ我が心身を能く沙汰して正路に氣を持つて毛頭私無く思案工夫の分別仕るべきなり、と云へるごときは、言卑近に類すといへども、實は正大、

其三十九　平賀源内

平賀鳩溪は功利をむねとしたる人なること言ふまでも無し。このごろ秩父に游びて、源内秩父にて鑛掘りし由聞けるが、さる云ひ傳へあることにや、と問ひたづねしに、左樣にい、秩父の極めての山奥に中津川といふところの候が、人跡もほと〳〵通じがたきあたりに候、そこに源内の掘りし由申し傳へ候鑛山の候、と土地の老いたるものゝ答へたり。此事虛談にもあらざるべきか。文化文政の頃幕府にて取調べしものにも、明和年中平賀源内中津川村の乾なる字椹久保等の鑛山を掘りしよし記されたり。猶よく考ふべし。

其四十　林和靖

林和靖といへば人皆淸高の隱士其德甚だ仰慕すべきやうの人なりとおもふ。されど、客の西湖の圖を持し來るものありて、其圖孤山の下樹木幽邃の處に題して林處士廬とありければ、和淸欣然として頷きしと云ふ。其猶世を遺るゝ能はざりしこと知るべきなり。

其四十一　陳眉公の奇言

其三十七　雪中庵蓼太

蓼太は、五月雨やある夜ひそかに松の月の句を以て世に知られたるものなるが、其平生は奢侈を極め、食事する時は必ず高貴の人などのする如く懸盤を用ゐしといふ。されば田舍人などは其形勢のもの〳〵しきに心を驚かし、氣を奪はれて、包みて來し謝禮の金を改め增すが多かりしとぞ。苦々しき俳人といふべきなり。但し此談は虛實如何にや。

其三十八　神功皇后

神功皇后の征韓の御偉功は誰か仰ぎかしこみて稱へまつらざるべき。されど其事の本末をよく知る人は稀なるやうなり。皇后に神の憑り給ひて、西方に玆國に愈れる國あり、美女の眉引きなせる向つ國なり、金銀を首めに目の輝く種々の珍しき寶其國に多し、新羅の國とぞいふ國なる。と皇后の申し玉ひて、西征を天皇に勸めさせたまひしは人の知るところなるが、皇后の御母君は、葛城の高額比賣命と申したてまつりて、新羅の國より歸化せし天日槍より六世の孫にわたらせたまふよしは、心づかぬ人多しと見えて、人々も語りぐさにはせぬやうなり。心して征西の事の由來を考へ見るべし。

し。
詩人よ、不幸にして卿は盲人の杖に摸たるゝことあるべし。其杖ひそかに毒を以て塗られたりと見ば其盲人を殺すも可なり。されど幸にして詩人たる卿は彼を殺さんよりは、彼の盲人の揮ふ杖の何物をも摸たざることの如何に多きかを想ひ見よ。恐らくは卿は劍を按ぜんとするの前に飯を噴せんとするならん。
人の碁を圍み局に對するに當つて傍より喋々助言するものあり。憐むべき其類の助言者は閭巷の間に相噬み相鬪ふ黃犬黑狗の援兵たるに適するのみ。詩人も不幸にして狗の援兵たるに適するのみの者に或は嗾せられ或は叱せらるゝことあるべし。されど卿は幸に喜怒することなかれ、尾を振ると牙を露すとの醜は卿の演ずるに忍びざるところならん。
鷲は天の高きに翔けりて双眸の裏に幾十里の山河丘谷の位置形勢を納るゝものなり、蚯蚓は地の卑きに居て少許の泥土を吞吐するものなり。詩人よ、鷲若し地圖を作りたらんには見よ、卿の路を行くに益あらん。蚯蚓の描きたるものを見て以て地圖となすなかれ、卿は精細に蚯蚓が描ける圖を檢するとも畢竟はたゞ彼は自ら描きたる怪しき圖の一端に彼が遺骸の横たはるを見んのみ。
こゝに忽然として聲は滅しぬ。鬼語にやあらん鬼語にやあらん。

に逢ひつゝわれ、我は薔薇の種子なれば、我は玫瑰の花なれば、と思はしむるだけの力あり。百舌鳥は自ら飛び行きて樹の最も高き枝に止まる鳥なり。されど自ら飛び行かで同じ高さに到るものあり。其翼に巣くへる微蟲なり。其國の詩の歷史が成せる勢力にのみ依りて高き處に到らんと思ふことあらば、卿は百舌鳥の翼に寓せる名も無き微蟲とならんとせるなり。卿よ聞け、低き枝にある藪鶯の聲とゝのはぬにもをかしき節はあるものなるを。

詩人よ卿の一字の師たるべきも卿の同志の友たらざるものは、草に埋れたる古き井を古昔の都の跡に尋ねて其處に家つくれと勸むるの人なり。卿の師にも友にもあらざるものは今は燒野となりたるところに瓦の缺けたるものと柱楹の燒え殘りたるものとを拾ひて綴ぢ集めて家つくらんとするの人なり。卿を慫慂て草なく木なき沙漠のたゞ中に井を鑿らせんとするものあらん、其は人にあらず氣のみ昂りたる跛馬なり。卿の前路には卿の行を無益なりとして遏めんとするの關守あらん、卿は其關守と爭ふなきも可なり。其は無益有益の二言よりほか解せざる關守の壽の菌の如く短くして終るべければなり。又姪女の美目好笑をもて卿を流連せしめんとするものあるべし、其は世の榮華を插頭にせる力の極めて强き魔なり。卿は其女に執られたる袖を斷つを悋むことあるべからず。而して猶卿は際涯無き曠野に迷ふことあらん。迷ふとも行け。驀直に行け。卿仆れて死すとも卿の枯骨は卿の子孫のためによき途の標たるべし。日に晒さるゝの骨は地に埋めらるゝの魂よりは甲斐あるべ

掠めて飛び翔へる燕の聲の喃々たるを聞くあらば卿自ら聊か慰むに足らん。蟻は蟲の至つて微なるものなり、されど其苦行の善果は三冬の淋しき日にあたつて蟋蟀の徒に誇るに足るなり。詩人不幸にして微なるものと他に云はれんか、又自らまことに微なりと覺らんか。造化は卿に蟻を示せり。俯して庭前の蟻を見よ、蠢々として動くもの恐らくは卿を勵ますならん。

世を擧つて詩人を知らざらむか、詩人は幸にして詩人たりしなり。幸にして詩人たりし卿は深山に美しく咲き出でゝ人に知られず散る花の如何に多きかを想ひ見よ。おのれの人に知られざる時、詩人ならずば、恐らくは卑き恨と憫むべき慍とに堪へざらむも、幸にして卿は詩人たり、太古より今に至るまで今より最終に至るまでの深山の花を想ひ得て明らかならんには、試みに卿自ら問へ、花は人に知られざるを恨みて其芳香を噴くことを怠りしことありしやあらずや、慍りて怠るべきかあらぬかを、請ふ試みに仔細に問へ。想ひ得て實に明らかならば世離れし山の奥に咲きて一點の塵も蒙らざるゆかしき花の幽香は必ず卿の胸に薰ぜん。而して幽香の薰ずるは卿の恨と慍とを拭ふが如くに解き去るべし。

薔薹の油は其種子しめ木にかけられて初めて出で、玫瑰の精は其花らんびきに逢ふて後に成るなり。世は詩人を酷く待ち冷かに遇することもあるべし。されど幸にして詩人たる卿は其を微笑もて甘受し得べし。幸にして卿の有せる美しき想は卿をして今こそ我は搾木にかけられつゝあれ、らんびき

ぶりも忘れし如く止みて其年は暮れぬ。未年春の初芝に居を移せしが、近くに西洋家具を製作する工人の住へるが多きより、出入毎に我が寺島にて一度起せし念はまた燃やされて、五月頃より其念は我を驅りて吾が手に彼の遺恨ある同じ鉋を握るに至らしめぬ。同じ樣なる種々の失敗は記すも懶きまで繰り返されぬ。種々の人によりて說かれたる種々の敎へは、確實に其一半をもて我を將來の成功に近づかしめ、其一半をもて我を現在の失望に居らしめたりし。かくして我は今や單に鉋に就ては殆ど成功を見んとするに至れり。されど我は猶一の小箱をも一の桝形の煙草盆をも造る能はず。そは云ふまでも無く、鋸、錐、鐵鎚、罫引等のものに就て失敗を重ねざればなり。噫鉋にすら月日を經る是の如し、書棚、文机を造り得るに至らんは抑々何の日の事にかあらん。遠い哉く。

其三十六　鬼語

春の夜のいと靜にして瓶中の花かすかに匂ふ時、我がほかに人無くして然も聲あり、心を專にしてこれを、聽くに曰く。

燕は鳥の至つて小なるものなり、されど其飛ぶや千里の遠きに過ぐ。詩人不幸にして小なるものと他に謂はれんか、又果して小なるものなりと自ら覺らんか。造化は卿に燕を示せり。煙の柳の梢を

果て丶、ある日は齒を切つて自ら忍びつ丶礪ぎは仕ながらも、我から我が愚なることに力を勞するを嘲り罵り非難冷笑する心起り來りて堪ふる能はざるに至りしこともありしが、自ら我を壓して忍ぶやうになりての後は左まで長く忍ぶこと叶はず、末には自ら廢するに至りたり。

同じ寺島に住める文士某翁を訪ひし折の事なりし、我が愚しき實際を打明かしては語らざりしも、單に刄物を研ぐことの難きよしを云ひ出して我知らず喞ちしに翁も心輕き好き人なれば、されはなり、人の性分といふべきか天禀といふべきか別に木片拾ひを仕たる覺えありといふにもあらで一寸研ぐにも直に能くきるやう研ぎなし得る人あり、また盆などの器具を日常拭くにも不思議に或人の拭きたるは末には漆にても塗りたるやう光澤を發し或人の拭きたるは汚れ居らずといふまでにて光澤を發せず、俗にきれ手つや手といふもあながち云ひ消し難くして然る事もあるやうなりと眞率に語り出で、後は餘談に入りたり。まことに然る事もありぬべし、吾が祖母は所謂つや手にて吾が家の他の者等のつや手ならぬは現證なれば、我は自ら我が所謂きれ手ならぬ男歟とひそかに我を疎みおもふを免かれざるに至りぬ。其時は最初に紙片竹葉を截り得し折の自負の滿足の影の胸に浮びたるに任せて、我は恐らくは所謂きれ手の方なるべしとは口走りしなれど。

身は漸く舊に復るを得ければ、勤めて運動をなすべき必要も無くなりしと、興味なき勞働を引續きて爲さんことの厭はしきと、他の種々の事に紛る丶とより、何時と無く、さしも熱心に爲せし鉋な

人の長く用ゐたるものは、大抵裏刄の刄口知らぬ間に中凹くなり、砥の面に密着せざるやうなり居るが故如何ほど礪ぎても削ること能はざる由なり、我に一挺の鉋あり、君に貸し與ふべし、此は嘗て露店にて購ひしなるが、此鉋を購ひし時、家を出づるに前だちて、其當時家隣りに住み居し大工に、今夜鉋を購ひ來らんと思へるなるが、鉋は誰の作か優れたる、と問ひしに、誰の作にても火に燒けたるものならずば刄あるもの丶削り得ぬは無し、たゞ裏のきれ居らぬを購ひ來り玉へと敎へ呉れしにて知り居れり、我も戯れに小細工することを好めば敎へられし如く裏のきれざるを購ひて直に用ゐ試みしに、足下の失敗の如く失敗を得けるまゝ、怫然として敎へしものを責めけるが、敎へし者は笑ひながら、是は臺の惡きなりとて吾が鉋の臺を二三度削りし後我に回し與へ呉れたり。久しく用ゐざれば今は知らず今までは快く削り得たり、足下持ち歸りて用ゐ試み玉へと心輕き好き人なれば我に其鉋を示し呉れたり。これに失ひたる勇氣を再び得て心嬉しく家に歸り、吾が鉋を撿むれば、果して裏のきれ居りて、水平なるもの丶上に刄を觸しめ透し視れば中央の部は全く物に觸れざる程なり。さてこそ失敗の根本はこれなりけめと先づ悦びて、急に砥石を引出し來り、高き部を礪ぎ減さんと勤めける。

昨日も磨ぎ今日も磨ぎて、日々怠らず腕の萎ゆるまでは磨ぎしが、遂には全く倦み果つるに至りても猶我が思ふごとくには磨ぎ成し得ず、興味無く、且つ變化なき此勞働には精も魂も流石に盡き

此時他に新に一つの鉋を購ひ求めんと思はざりしにはあらざりしが、此の現在せる鉋をさへ用ゐ得ずして終るほどならんには又他の鉋を購ひたりとも遲速はあれ其鉋を用ゐる能はざること猶今の如き時に遭遇することあるべきなれば、其は今日の難きを來日に委ぬるの計と云ふべく、拙きを掩ふ手段にかしこきと同時に拙きを保つの手段にも賢きものと嘲みてもあるべきことなり、されば成功は難くとも遲くとも現在せる此鉋を用ゐ得るに至るまでは新に購はずしてあるべし、此鉋を用ゐ得るに至りて後新に購ふべきに定まらば其時購ふべし、又此鉋の質の惡きならて、此鉋を用ゐ得ざるに定まる程ならば、箱作ることも煙草盆造ることも爲して成し得べきもあらぬ我なり、自ら斷ぢて此小木工業者たらんとの望みを抑ふべし、但し、此鉋を用ゐ得ざるに定まりたりとは何の日に我自ら謂はん、はた人誰か敢て言ひ得ん、と頑固にも執拗にも自ら思ひかへして、新しきを求めんとは終になさて、鮫やすり木賊の類を購ひ、心を勵めて寛くして捗らぬ業を試み初めたり。

多くの日を費して臺木を水平面に改め得は仕たれど、木を削り試むるに及びて、折角苦心して得たる結果は、例の親友を招待するの準備として設けたる茶菓に過ぎざりしことを知り、我は泣かんばかりに力を落しぬ。其後は運動すべく定めたる時間を他の事にのみ費して口惜き鉋を見もかへらで過ぎしが、年やゝ長けたる某を訪ひし時、此事を語り出て、見て易げなる事も爲しては難きものなりなど云ひければ、某は笑つて、我は聞けることあり、鉋は、裏の斷るゝと云ひて、其道に習はぬ

るに、此度は鐵の色もいよ〳〵澄み徹りて秋の水の如くなりしにぞ、かくてこそと早くも心に三分の悅びを含みしが、其悅びは束の間に失せて例の親友にまた訪はれたり。
次の日某といふ男來りて雜談に時を移せし末我試みに鉋は如何にせば能く物を削り得べきやと問ひけるに、鉋の刄は少し圓みを帶びたるが好しとの答へを得ければ、直に其說に從ひしが、其結果は前來の結果に比して優るところ無かりし。
其後幾日か過ぎて年老いたる人の我を訪へるがありしに、年老いたる人なれば思ふに長き歲月の間に蓄へ得たる豐富なる經驗の中にかゝる事もありしならんとひそかに推して問ひしに、そは能くも知らねど鉋は臺木によりて好くも惡くも働くものと聞けり、左ほど磨ぎ玉ひしならば刄に鈍きことはあるまじ、臺木を吟味し玉ふ方よからん、たゞし我は鉋といふもの手にしたる事も無きほどのものなれば精きことは告げ得ずと云ひぬ。これは眞に理あることにて臺木の惡からんには刄の板に觸る邊の平均を得べからざる筈にて、從つて使用に阻碍を來すべきいはれありと思ひて、其後吾が鉋の臺木を定規にて檢るに甚だ不規則なる凸凹を寬やかに爲し居れるを認めたり。此の爲にこそ無益の勞をなしつれと思ふものから急に水平面ならしめんと企てぬ。されど他に鉋無ければ水平面を得べき方なく、少時考へ得ざりしが、愚にも鮫やすり、木賊、乃至は金剛砂布を用ゐるか、さらずは砥石の類を用ゐてと案じ出したり。

業を中止して、單に本來の目的に協はしめんための所行として淺草あたりを散歩しけるに、ある家の修繕普請をなせる大工の易げに板を削り居りしが眼に留まりて、歸る道すがらは昨日一昨日の失敗を如何にして明日か明後日かは拭ひ去り得たし、との考へにのみ思ひ入りぬ。砥石の水平ならぬは鉋を磨ぎて成功せざる所以なるべしと思ひ得ければ、次の日は沓ぬぎの平めなる石にて先づ砥石を平かにせんと試みけるが、こは極めて短き時間にて目的を達し得たり。些細の事にはあれどこれに心勇みて、此度は必す成功せんと徐に例の鉋を磨ぎて日を暮し、其次の日も午後の四時頃より磨き初めて夕に到りぬ。思ひ做しにや前には鋭さを加へたるやうなれば明日は恐らく快く削ることを得べしと樂みを抱きて止みし其明る日、十分の自信をもちて例の板に臨みしに、兎角の論なく直ちにまた我が親友とも云ふべき失敗といふ者の來訪に遇ひしかば、鉋を投げ捨てゝ綾瀨の方に逍遙し、それより二周間ばかりのほどは、心に其事あらぬにはあらねど、身は其事に關らず、或は庭を掃ひ或は魚を釣り又は例の散策などして日を過ごしける。

一日散歩の次に一工人の鉋を磨ぎ居れるを認めしかば猶豫なく趨つて就き見るに、彼は吾が家にては剃刀を磨ぐためとして備へある砥の類の砥にて急がす滯らず磨き居り、其傍には既に用ゐられたりと見ゆる砥の横たへ捨てられたるが、其は全く我が熟知せるものと同じものなりし。これにて白き砥もて磨ぎし後猶緻密なる質の砥もて磨ぐべきことを曉りしかば家に歸りて例の鉋を磨ぎけ

鎚、鉋の類は家に藏せるが有りしかば、取り出でゝ其塵埃を去り、先つ鉋を檢むるに少し鏽は被たれど刄は幸にして缺け損じ居らず、菜刀など磨がんために備へられたる砥石を引出してこれを磨ぐに、頓て刄の裏表とも光り輝きて鋭げに見え渡りければ試みに紙片竹葉など截つに露礙はりなく截ち得たり。器械は皆とゝのひぬ、いでや先づ手初めに小箱造り出ださんと、有り合はせたる板をとりいで、勢よく削りかけしに、心地よく板の刄を迎へて削らるゝ音してくる〱と卷きたる鉋屑の風の扇りに飛んで墜つるかと思ひのほか、がつちと音して鉋は板の一端に緊乎と咬着きしまゝ、曳けども〱更に動かず。こは過つたり、我が腕に熟錬の冴といふものなければ、かくありつらめと再び鉋を持ちあらためて此度は前より猶ひとしほ力を込めて曳けど同じく思ふにも似て削り得ず、刄の出で過ぎたるがためかとて刄を少し後へ退かしめて削れは、あだに板の上をば辷るのみ。仕損じては仕替、仕替へては仕損じ、終に其日は削り得ず、力疲れて面白からず止みぬ。

初日の失敗は左まで我か心を沮ましめず、次の日は徐に功を成さんと籌りて一時間餘りも鉋を磨ぎしに、其の利きことは濡れ紙を截つをも難しとせざるに至りぬ。

かゝれば今は仕損ずることあるべからずと板に臨みて削り試みしに昨日と同じ失敗の繰り返されしばかりにて何等の效をも見る能はず、其日も同じく不快に止みぬ。

二日の失敗は我が心を沮ましめざるにあらねば、三日めは流石にまた鉋を磨がん勇氣の無く、木工

しとおもはれねば、少時は思ひ迷ひしが、吾目的にさへ協ふべきことならば足るべし、做すことの成らざるはさまで憾みとすべきにもあらずと悟りて、小き箱を作り煙草盆をつくりなどする簡易なる木工の業を我が日課となすべく擇び定めたり。事の成らざるは憾みとせじとは思へるものゝ、爲して成らざるは口惜からぬにはあらねば、心の底にはひそかに、我必ず箱を作り出さん煙草盆を作り出さん、書物入るゝ箱をも文机をも作り出さんと多くの望みを懷き、且つ其望みを空の中の雲の如く消え果てはせしめざらんとの弱からぬ念を燃しぬ。

されど其業に就きては其當時悟得せしことのあるにもあらざるのみならず經驗をなせしことすら全く無かりしなれば、たゞ鋸をもて木を截り鉋をもて削り釘をもて綴ぢんには小き箱は成るべきなりといふのみの事のほかは知らぬなりし。さるに自ら木工業者たらんとせしは、闇の夜には盲人の眼わる人より却て大膽なるが如く、難易の程も知れぬ境には無智識無經驗の者の却て多少の智識あり經驗ある人よりも大膽なるの理にて、我はあはれにも大膽なりしと云ふべきのみなりしなり。

かくて無智識無經驗の與へたる膽力に誇り亢ぶれる我は寺島より淺草に出で、鋸を購ひ、揚々として家に歸りしが、其の折の心の中には云ひも得ざる愉快をのみ充てたり。其は云ふまでも無く無智識無經驗の二人が伴ひ來りたる空想といへる者の餽れる物なり。

事に屬すること勿論にして少くとも將棋をも碁をも能くするものならでは之を云ひ難からん。或士の碁の趣味は寬にして長く將棋の趣味は烈にして深しと云へるは如何のものにや。將棋と碁と手數は孰か多きやとの問も能く人の發するところなれど、これまた容易に決する能はざることなるべし。看壽といふ將棋家此問に對して工夫し出せし由に云ひ傳ふる詰手は六百手に餘りて終に敵をして脫する能はざらしむ。予頃日之を演し試みしが、半途に至らずして眼花神昏たゞ瞠若として自失するのみ。暑中休暇は來らんとす、風通しよき小亭に主客對座して閑に韜略を戰はせ、やまとの神仙はかうしたものと勝負を爭ふもまた妙ならずや。

其三十五　わが失敗

去る午の歲の病後のことなりき、弱り果てたる身を疾く舊の態に復らしめんがため日に少しづゝの運動をなすべしと思ひ立ちはせしものゝ、愚なる男の他の遺せし物にても拾はむとするが如く、事もなきに眼なれたる吾が家近きあたりをあるかんも興なしなど慮りたる末程よく身を勞すべき細工事して自ら慰めんと心をきはめぬ。さて何をか吾が業として取るべきぞと考ふるに、やゝ做し得べしとおもはるゝことは運動せんといふの目的に協はず、好く目的に添へることは容易に做し得べ

ひ。

盤も假物なり馬子も假物なり、畢竟は心と心との爭ひなり。實際の戰爭よりは遙に抽象的の戰爭なり。盤則馬法等は存すれども實は全く純抽象的の爭ひなり、確實なる智の一の作用の勝劣の爭ひなり。玉突の如く手腕の如何の算入せらるべき遊戲にはあらず。甲者と乙者との間に差異あること無きや否やとの疑ひあるを免れざる人工的物品を勝負の一の要素として成り立つ遊戲にはあらす。即ち玉突競弓の如きものにはあらす。天運即ち人の智慮の及び難きもの丶如何の算入せられて勝負の決せらるべき如き不精確のものにはあらず、即ち彼の花合せ骨牌双六等の如く一半は智慮に及ばざるところあるが如くして勝負の決せらる丶不精確のものにあらず。腕力、權力、想像力、器世間力等の攙入することを毫も容さゞる遊戲なり。純一の意思に協はすべき思惟の精確なると精確ならざるとに由つて勝負の決せらるべき至高至純の遊戲なり。たゞ其の忌むべきは碁、と同じく思惟の學問の不健康なるが如く思惟の遊戲なるが故に不健康なるを免れずして、また全くの遊戲なるが故に或は時に交際の一助なることのほかは副產物として吾人を利益するの點これ無きことなり。

碁と將棋と孰が趣味深かるべきやとの問は恰も琴と三絃と孰か面白かるべきやと問ふ如く甚だ愚かなる質問にして將棋に於て深く趣味を解せる人は將棋を趣味深しといふべし碁の趣味を深く解せる人は碁を面白しといふべし。但し趣味の性質は必す大同小異なるべきが比較して之を說かんとは難

座して勝負の機に肝膽を碎き先手後手に思案の底をはたく時は、食ひ氣も無くなつて菓子皿の羊羹より心構への田樂ざしに秘藏の香車を摘み居る、相手は澁茶の冷ゆるを忘れて握りし桂より烟りを立たするといふありさま、風流といふも餘りあり。爾時二人の心中にはたゞ四十の馬子おのれ〱の神威を振ひ能事を逞くして、或は睨み或は搏ち、或は飛躍し奔突し、或は忽然として變化しつ蛟龍畢に池中のものにあらざるを示し、或は悠然として自ら衞り羽翼既に成りぬと誇るもあり、紛〱片々として蓮花の天より墮ち神將の雲衢に馳驅するが如きを觀るのみ。戸外を美人が通ればとて出て見やうとも思はねば情婦から文が來たればとて桑の平内が蚊にさゝれたやうにもおもはず。よしや十千万兩今儲からずとも歩一つわれかし宗桂も御氣のつかれぬ妙手をあらはして此の將棋に勝たうものをと取引先から來た電報も傍へ置いたまゝで封をきらず。極樂も願はず地獄も避けず、名利榮養の浮世のいさくさは悉皆からりと棄てゝ仕舞ふて、蚤に咬れても瞋恚を起さで闘はずに居る襟懷は王猛に比して一段ゆたかに、火の消えた煙管を其儘啣へ居る趣きは無絃の琴を撫するより可笑味まされりと云ふべきか。此の境界の樂しさは卑き慾の滿足なんどを得たる樂しさなんどゝは日を同くして語るべきものにはあらずと云つべし。

睡氣さゝね時念佛を申されよと尊き僧は敎へ、用事仕果てゝ後付合ひせんこと然るべしと良き師は許せりとかや。人誰か職務無からん、職務を濟まさて戰はば將棋には勝つても風流の罪はまぬかれ

ツ目殺しの法ぐらゐを手ほときにして、それより段々、こうやらしやちうやらせきやらと六ッかしいはむづかしいだけに面白きことを吹き込まれたりければ、三太郎大きに面白がりて、今までの惡業をいつとなく忘れたやうに廢めて仕舞ひ、おとつさん一番闘ひませう、もう昨夜のやうな手には乘せられませぬぞと二十五目風鈴つきで食つてかゝれば、このごろのやうに凝られてはこれはまた藥が高じて玩物喪志、ちと毒になるやうな氣遣ひも出て來た、と頭を掻きながら相手になるといふ始末にて月日を過ごしけるが、これがため三太郎一生は後の代の烏のやうな歷史家にほじり出さるゝほどの惡事も爲さず、たゞ少し足らなかつたろうといふだけが傳へられて濟みけるよし。桀だの紂だのいふ男も碁なりと知つて居つたら、盤に對つて居る間でも人の命の五つ六つは助かつて飛んだ隱德になるべきに、ふびんやな五目ならべも知らなかつたと見えて酒池肉林などゝ下らぬ遊びを仕た末があたら身代を棒に振つて仕舞ふたとなれど、また一說には桀紂ともに碁は殊の外强かりしが賭碁を多く打ちしより心いらひどく慈悲無くなりて遂に天狗道に扯き入れられ、さてこそ殘忍不德の振舞重なり天下を亡ふに至りしとあり。いづれにしても正道に碁の樂みに遊ばざりしより大難に臨みしに至りしものと見ゆ。吾邦の將棋は何人の工夫し出せしものか詳ならねど、理屈はいづれ碁に同じく、人心の妄動を制し人欲の途轍無きを治め八十一格の盤上に八万四千の煩惱を封じ込むるを本來の大作用とはなすなり。されば雨の日のしめやかなる雪の夜の靜かなる折ふしなど二人對

畫もまた然り、彫刻もまた然り、文學美術の其他の分科もまた皆然り。かくては我が日の本の兵士には伴なひ得ざる專門家なれ。

要するに文學美術にたづさはる者は、平時に在りても戰時にありても最も自由を與へられ又最も自由を有すべきものなれば、特に平時にありても依報の如何に懸念するが如きことなかるべきの覺悟を有して、固く純粹なる目的を懷き、戰時に在りては能く國民の精神の一致せざるべからざるを體し知ると同時に、職分の獨立せざるべからざるを思ひ慮りて、永久の賞罰を下し得る大權力者たることを忘れず、飽まで自重して誠意事に從ふべきのみ。

今や我は自家に異變を生じて詩國より引退せざるを得ざらんかと苦悶しつゝある者なるに關らず、二三の士の戰爭についての我が意見を徵し問はるゝにより、敢て所思を述ぶること是の如し。

其三十四　將棋

人の心は動いて止まらざるものなれは、靜ならねばならぬぞとは能く諦めた無理なことなり。されど動くに任せては、小人閑居して飲み度なり三人寄つて三分亡くなす智慧を出すを免れず。そこを見透して馬鹿な兒を持たれた聖人が第一番に碁といふものを工夫し出し、これ三太郎や一寸來な每日〳〵良からぬことをして遊ばうより爺が面白い事を敎へて遣るほどに智慧があるなら試みよ、と四

文學者美術家は如是して製作に於て其能く成功したる曉には、國家の權力にも敢て劣らざるの權力を有するものなれば、詩的永久書的永久乃至其の他の文學的美術的永久の重賞嚴罰を與ふるを得べきにより、例へば一詩客若くは一畫師の精神奮起して眞に興發し機動きたるところより成らん詩若くは畫は、末來に長遠なる光彩を遺すと共に現世に絶大なる功績を樹つるとあるべし。例へば彼の喇叭卒を詠じたる詩の出たりとせんに、其詩に賴りて喇叭卒の美名の千年に垂れ萬國に響くに至るものとせば、即ち其詩客は詩的永久の重賞を與へたるものにして、與へ能ふものは人爵時榮に過ぎざる國家の權力に比較して如何に其詩人の權力の勝れたることぞや。又彼の吾が兵の死屍に刄を加ふる如き敵國の兵士の不義を諷刺し若くは冷笑し熱罵したる詩の出たりとせんに、其詩によりて敵國の兵士の不義の醜名の千年に存し萬國に流るゝに至るものとせば、其詩人の與へたる詩的嚴罰の功果は國家の爲し能ふ功果より或は大なるものあらんとす。畫も然り、彫刻も然り、文學美術の其他の分科もまた皆然り。嗚呼々々かゝる製作品の望ましくもまた望ましきかな。さはさりながら、麥は年を越えざれば熟せず牛は九ヶ月を經ざれば分娩せずと聞くに、興の足らざる詩の粃と、目的あやしき詩人の流産との如きは敢て望ましからず、例へば喇叭卒の節操の高きによりて其の詩の傳播し、豚尾兵の殘酷の甚しきによりて其詩の記憶せらるる如きものありとせんか。こはこれ悲むべきことにて、依報に於ては兎に角に、詩の本來より云ふ時は其詩客は失敗恥辱を取りたるなるべし。

に異象の生ぜざる限りは得らるべきものなれど、依報はたゞに詩の質と時の狀との相觸るゝ作用より得らるべきものなるが故に、大詩客の好詩篇も惡しき依報を來すことあり、俗詩客の惡詩篇も好き依報を來すことあり。此理を知らば、好きも惡きも依報は詩客を輕重せずまた詩篇をも輕重せさる道理の眞に明らかなると同時に、依報の如何によつて左右せらるゝ詩客の心肝詩篇の價値も推し測り知るべし。依報は何ぞ云ふに足らん。戰爭やそれ詩を如何ん。詩客文人畫師樂家各々自己がたづさはれる道に盡して進むべきのみ。然ありてこそは日の本の兵士に耻ぢぬ詩客なれ、また文人なれ美術家なれ。

平時にありても戰時にありても文學美術にたづさはるものには、強ひて爲すべきといふ務めあることなし。又強ふるといふに好き結果の成らんことは萬々一のほか特に斯道に於ては有り得べき事にはあらず。此故に文學者若くは美術家に對つて其現時の戰爭等についての製作品を出せよと強ふるものあらんには、これ非理の甚だしく又無知の極まれることとなるべし。然りといへども國民の職分の獨立と國民の精神の一致とは相容れざるものにはあらで、相得ふること無きを得べきものなれば、望ましきは文學者美術家の駁雜ならざる目的を懷きて其現時の戰爭等についての製作品を直に若くは未來に於て出さんことを欲するの眞情あらんことこれなり。これ擁護國家愛重正理等の雄偉高尙なる精神と、脫離塵網啓發天機等の飄渺幽玄なる職分との親和圓融を望み得べき地步なればなり。

て何の疑惑か畏怖かあらん。

されど戰爭の影響として、文學美術の少時は世に輕しめ見られんこと勢に於て免かれ難きの數なれば、或はこれによりて惑を生じ怖を抱く人もあらんかなれど、此は是文學美術の第二義界を支配するに過ぎざる世の運といふものなれば、詩客乃至樂家等の之を憂し悲しと思へばとて之を喞ち之を恨まんは甚だ當らざることとなるべし。そは文學美術其者本來の性質は、世間の風潮感情等によりて一厘一毫も増減消長せらるべきものならざれば、戰爭の影響はたゞ詩客乃至樂家等の手より、依報即ち器世間の報酬を増減消長するのみにて、正報即ち靈臺上の報酬をば増減消長はせざるが故なり。極端を云へば詩人乃至樂家等は、天も取る克はず地も奪ふ能はざる靈臺上の報酬のみにても自ら甘んじて滿足すべきほど多幸なるものなれば、其依報をば全く失ふの不幸に遭へばとて、悠然として獨り孤峯に立つて笑つて吟哦するの覺悟なかるべからざるものたり。然るを如何ぞ自ら卑うして此の依報の増減消長に驚き騷ぎ顚倒狼狽の醜を露はすべきものならんや。例へばこゝに一詩客ありて一篇の詩を綴るとせんに、其詩客は其詩を綴るの現在に於て、机に凭り筆を執り俯仰思索するの間に、詩の正報即ち自己心中無限の快樂を必ず受くることとなるべし、さて後其詩を公にせば、其詩の質と其時の狀との間に走る化學的作用に似たる離合與奪の作用はよりて初めて詩の依報即ち世間の冷遇或は歡迎等の各種の結果を生ずべし。かゝれば正報は何時の世那方の國にありても詩客其の人

らずなり、烈々なる火炎の上に塵埃の留まるを容さゞるが如き態あるに至りたるは、最も宜なり、かゝる折から浮きたる物語文なんど好みて讀まむものは、恐らくは腸腐りたる人とや云はれむ、其を編み綴らんものはまた心無き人との誹りをや來さん。此も宜なり、彼も宜なり。さはさりながら戰をば海の彼方にのみ在りと思はむは物忘れしたる過失やあらん、將又思ひ淺き過失やあらん。それ農夫の劍は鍬なり犂なり、工匠の砲は規矩なり準繩なり、學者の水雷は魚形にあらぬ球狀の頭顱なり、商家の艨艟は檣無くて桁のみある算盤のほかあるべからず。百種の職に身を置くもの、各自進めの喇叭の聲を天より受けて其道々に突貫奮鬪なしてこそ、眞實に國も力つきて、寂光極樂世界をば占領するにも至るべけれ。彼の敵國の俚諺にすら、將軍馬を下らず各自前程を走るとさへ云ふものを。況んや有爲の我が國民の單に精神の一致といふことを知るのみにて職分の獨立といふことを忘れ果てゝは可なるべきや。文學美術は戰爭とはやゝ緣遠きものながら、これに自己の身を委ぬるもの、如何に造化の使者なればとて如何に大魂の寵兒なればとて、自己が住める國土の大事を、蘆の葉音と耳に聞き做し、陽炎燃ゆると眼に看做さんには、其國民の一としては形はれざるの死の罪を加へらるべきこと固よりなるべけれど、さればとて又自己が職分の獨立といふことをしも、忘れたらんには、文學美術に對しては云ふもさらなり其國民の一としても望ましからぬことなるべし。詩客文人畫師樂家等、各々守るべき分の度もあり、行くべき道の定まりもあり。假令戰爭起ればと

四句の偈の率都婆を三句時雨けり　　僧、把月

たがひに我句こそ妙なれと誇りあひ、またたがひに他の句をおもしろがりあひぬ。

十一月

山寺の仁王たぢろぐ吹雪かな　　僧、把月

野猪の牙ふりたてる吹雪かな　　男、西子

あかゝりを吹き埋めたるふゝきかな　　ほとゝぎす

十二月

節分や母子の年の近うなる　　ほとゝぎす

節分やよむたび違ふ豆の數　　男、西子

せつぶんや肩すぼめ行く行脚僧　　僧、把月

是にて一年も終りたればまづは一ツづゝ年をとつたりめでたし〳〵と笑ひあひて、筆にはのらぬ快樂さに倘むつまじくかたりあひける。

其三十三　戰時の詩人

海一つ彼方の國との戰爭起りてより、我が國人が心の奮ひ立ちて、小說なんどいふものには眼も遣

砧より節むづかしき鳴子かな　　時鳥

小山田に秋をひろげる鳴子かな　　男、西子

小禽めが唯識所現の鳴子かな　　僧、把月

時鳥様のは古臭しと西子評し小山田にはしてやられたりと時鳥も我も服しぬ。唯識論はやかましや置いて玉はれ御說法と時鳥にも西子にも我笑はれければ、茄子の馬に豪傑を乘せたる因果應報にてかゝる拙き句の出來たるなるべし、我が拙きにはあらず物の報の所爲なりと戲れける。

九月

大小の朱鞘はいやし紅葉狩　　男、西子

二三枚とつて重ねるもみぢかな　　ほとゝぎす

やあもみぢ一切經のわすれもの　　僧、把月

皆よしなれど一切經殘らず御覽になりて御經の中に紅葉の事なしと決定られしにあらねば臆斷の外道なるべしと時鳥に打ち込まれ、さあそれは、さあ〳〵になつて大きにひるみけり。

十月

浪人を一夜にふるす時雨かな　　男、西子

爪琴の下手を上手に時雨けり　　ほとゝぎす

六月

負ふた子のひとりぬれけり夏の雨　ほとゝぎす
きたまゝて衣あらはむ夏のあめ　僧、把月
中々にはだかいそがす夏のあめ　男、西子

これは時鳥さまに皆まけたりと我いへば時鳥はまた御僧のものぐさきにはおよばずと云ひ三人大いに笑ひけり。

七月

豪傑も茄子の御馬献たまつり　僧、把月

と吟じ出すやいなや、また邪見をはじめられしか、さりとては酷き悪口なり、聖人は然様は無きものをと轉げかかりて時鳥笑ひ、我にあてつけたりやと西子は苦々しく笑ひければ、魂祭りは僧にとつての好時機、われをば出家させたる恨の返報おぼえたるかと我も笑ひける。

見た貌の三ッ四ッはありたまゝつり　男、西子
團子もむ皺手あさましたまゝつり　ほとゝぎす

急に時鳥さまのおとなしくなられしは返報など恐れられしにや可笑と西子からかひける。

八月

三月

ひよ〳〵と遠矢のゆるむ日永かな　　男、西子

うたゝねの針にさゝれる日永かな　　ほとゝぎす

意久地無う坐禪くづるゝ日永かな　　僧、把月

坐禪の句はほとゝぎす殿と同資の句なりと西子難じければ

眼の皮の華嚴にたるむ日永かな　　僧、把月

四月

朝起は妻にまけたりほとゝぎす　　男、西子

ほとゝぎす御目はさめて候歟　　ほとゝぎす

定を出た其わかつきやほとゝぎす　　僧、把月

御僧ひとり仲間はづれになられたりとほとゝぎす笑ひぬ。

五月

藻の花や小川に沈む鍋のつる　　ほとゝぎす

浮萍や出どこも知らず果もなし　　男、西子

浮くさや禪僧擔ぐすくひ網　　僧、把月

色氣わりと白狀するとも今更発さじ入道して僧となり玉へ我は此儘たゞの男ほとゝぎす樣は矢張其まゝ女性にて、三人ともに想を一年十二ヶ月に馳せめぐらし、各々俳句一ツづゝ云ひ出して談話のかはりにせんは如何にとの西子が發言、それは一段物靜かにてあはれも自然と深い事申し出さるゝ樣になり中々面白いでござりましよとほとゝぎすが同意に、無理無躰剃髮染衣の木のはし竹のはしとされたるが內々不平ではあれど是非なく苦笑ひに承知して、手近の卷紙に銘々の句を認めにかゝるがいなや先登第一は西子。

一月

烏帽子きる世ともならばや花の春　　男、西子

おそろしき殿御めでたし花の春　　ほとゝぎす

墨染の我も笑はむはなの春　　僧、把月

二月

一鞭にその數知れずおち椿　　男、西子

いもうとの袂さぐればつばきかな　　ほとゝぎす

ほろ／＼と椿落つるや大般若　　僧、把月

妹のたもとおもしろしと西子も我も服しける。

中々に思ひ知るてふ言の葉はとはぬに過ぎて恨めしきかな

さあらばおもひ知られざることの恨めしからざるにや、それもまた恨めしかるべし、をかし。

其三十二　みつ巴

屋根には何の音もせて軒の玉水にのみそれと知らるゝ春の雨しづかなる日、飛石に下駄の響きやさしく、訪ひ來りし女あり。はていぶかしや草庵に女客禁物なるに誰人かと立迎へ見れば、かねて知れるほとゝぎすといふ明眸皓齒の風流者、園女千代尼を時代違ひて朋友にせぬ事のみ此世の恨なりと白粉離れのした述懐を櫻桃の蕾の脣から遠慮氣もなくするやうな女。はてお珍らしや前世以來でござる、まゝ〳〵ずつとお通りといへば、天鵞絨襟うつくしき合羽脱ぎすて頭巾かなぐりとつて坐につき、二ッ三ッ互ひに三千里外の浮世話しなどするところへ、また〳〵門あくる音のするに、今度は誰ぢやと見れば西子と名乘る豪傑男、武道執心今にはをかしき強がりなれど丈山宗因の風流も擯斥けぬ人なり。これはおもしろうなつてまゐつた、三人そろへば話しは鼎にじいわり熟えむ、餡掛豆腐にお茶の御飯でも御馳走しましようほどに夜までかけて談り玉へと亭主ぶつて如才ないつもりの挨拶する時、談話もたゞでは憎い奴の噂可愛い人の事などに渉つて、罵詈に罪をつくり惚氣に煩惱を増長さするやうなり自他とも妙の妙でなければ、なんと亭主は抹香臭ければ假令實は

とおもしろし。西行などの眼より見ば咸陽阿房などいへるもたゞ念の入りたる獸の檻なるべし。

（二十五）

あふことを夢なりけりと思ひわく心の今朝は恨めしき哉

愚痴の極情の極を云ひ得たり。

つらくとも逢はずば何の習ひにか身の程知らず人を恨みん

恨の極情の極なり。

つれもなき人に見せばや櫻花風に從ふ心よわさを

優にやさしく恨めるものかな。

ひとかたに亂るともなき我戀や風定まらぬ野邊のかるかや

あやしくもおもひみだれしものかな。

（二十六）

物おもふ心のくまをのごひすてゝくもらぬ月を見る由も哉

よき述懷の歌なり、かやうおもひて世を過さば我人ともに青空の如く、美しう一生を終ることを得む、神秀禪師の偈の意にや。

（二十七）

前のは凄し後のは悲しく

(二十三)

霜冴えて汀ふけ行く浦風をおもひ知りげに鳴く千鳥かな

西行の歌なり西行の歌なりとのほかにはいふべき言葉もなし。

風冴えて寄すればやがて氷りつゝ還る波なき志賀の辛崎

かへる波なきといへる巧なり。

(二十四)

ひとり住む片山蔭の友なれや嵐に晴るゝ冬の夜の月

月はいまだ妙ならず、寒月妙なり、寒月いまだ妙ならず、嵐に晴る冬の夜の月妙なり、嵐に晴る冬の月いまだ妙ならず、ただ臭氣ある人の少くて無心の雲は檐を遶り不斷の樂聲は溪に在りといふほどなる山かげの庵に荒涼凄絕の寒夜の月を友とするにいたつて初めて妙なり。西行の歌なり。歌は佳ならざるも我たゞ其風情をおもひやりてそゞろに心浮かれ、あはれ早く酒も欲しがらぬほどの男となりて巖岨ち風怒る荒山中に我も入らむと思ふをまぬかれず。深山の冬の景色はあらまし知りたれど籠り居たるとの無ければ冬の夜の風情をばいまだ知らず。いかに悲しきものか知らねど獸の檻にも似たる都會の俗家よりはわびしからざるものとや古昔の人の思ひけむ、い

おほし。修行して遠くまかりける人のおもひ隔てたるやうなる事のはべりければとて、よしさらは幾重ともなく山こえてやがても人にへだてられなむといはれし如きは、爭諍の態こそあらね恐ろしき情の動きかたは明かにあらはれたりといふべし。

（二十一）

清見潟沖の岩こす白浪に光をかはす秋の夜のつき
　畫中の歌なり此歌の中に畫はなし。畫の如しといはば此歌を譏るなるべし。
中々に時々雲のかゝるこそ月をもてなすかざりなりけり
　童子の口より和尚の夢をかたらせたるごとき歌なり。雲をり〳〵人をやすむる月見哉の芭蕉が句はこれより案じやいだしけむ。

（二十二）

雲消ゆる那智の高嶺に月たけて光をぬける瀧のしらいと
雲晴る嵐のおとは松にわれや月もみどりの色にはえつゝ
　此二首前のは妙なり、後のは時代の臭あり。
秋風に穗末波よる苅萱の下葉に蟲のこゑ亂るなり
秋ふかみよわるは蟲の聲のみか聽くわれとても賴みやは有

(十八)

わづらはて月には夜も通ひけりとなりへつたふ畦の細道

夕されや檜原の嶺を越行けばすごくきこゆる山鳩の聲

となりへつたふあぜ道もをかしければすごくきこゆる山鳩もをかし。西行はあれ鼠の如何なるものをも噛むやうに如何なるものにも歌をよみけり。あらをかし。すゞのまがき苅田のひつぢなんぞは笏もちて殿上にかしこ顔せる人達の詠み出んことおぼつかなかるべし。あれ鼠なれば猫を捨てしも道理あり。

(十九)

夕露を拂へば袖に玉消えて道分けかぬる小野の萩原

情をもつて景を寫せるなり、これのみならず上人の歌にはかゝる類いとおほし。

(二十)

中々に心つくすもくるしきに曇らば沒りね秋の夜の月

前に出せし厭ふとてしも晴れぬもの故といへるは雲につきて想を起したれば恨みながらも雲を容赦し、これはまた月をめづるあまりの愚痴なれば罪なきものにも恨を負はせたるをかし。たゞし上人は反動的に強く情の働き玉ひし方にやありけむ、此歌の意とおなじやうなる傾きをもちたる歌

（十三）

よゝふとも竹の柱の一すぢにたてたるふしはかはらざらなん

おもしろし、西行われにかゝる諫言をあたへしと思へば。

（十四）

月すめば谷にぞ雲はしづむめる嶺ふき拂ふ風にしかれて

山中に住みたる事なくば此歌のよき事を知らじ。

（十九）

あらし吹く嶺の木葉に友なひて何地うかるゝ心なるらん

巨靈虚空に躍る。

（十六）

玉みがく露ぞ枕に散りかゝる夢おどろかす竹のあらしに

夢に富士が嶺の雪を咀みて明石の浦に足や濯ぎし。

（十七）

ませにさく花に睦れて飛ぶ蝶の浦山しきもはかなかりけり

何事を觀じたるやと思ひ見ばあやまりなるべし。たゞかゝる歌なり、さる景色なり、おもしろし。

同くばかきをぞさしてほしもすべきはまぐりよりは名もたよりあり

西行の駄洒落はさすがにをかしきかな、諸謔もこれほどなるはあしからず、よき狂歌なるべし。

(十)

心から心に物をおもはせて身をくるしむる我身なりけり

かゝることもまことにあり、いつはりならぬ歌といふべし。

(十一)

いくほどもながらふまじき世の中に物を思はでふるよしもがな

我のみぞ我が心をばいとおしむわはれむ人の無きにつけても

ともに戀の歌なれどもよき述懐の歌ともいはるべし

恨みはかゝるぞ憐れ深き。荒磯の岩にくだくる浪なれやつれなき人にかへる心はといへる如きはよき歌なるべけれどあさましくてまことの恨みにはあらざるやうきこゆ。

(十二)

世の中をそむくたよりやなからまし憂き折ふしに君があはずば

若し人嗔り打たずば何をもて忍辱を修めむといへるをよくもよみたるかな、おもへば憂きことにあふはめてたきことに逢ふよりもめでたし。

（六）

有れはとて頼まれぬ哉明日はまた昨日と今日の云はるべければ

無常迅速刹那々々の轉變をよくも云ひたるものかな。

（七）

渚ちかく引き寄せらるゝ大網にいくせのものゝ命こもれり

まことに大網の中も一つの世なるべし。かゝるをかしき歌は西行ならでは詠み得じ。あはれをかしき歌かなをかしき歌かな。誰か大網の中の魚ならざるべき。

（八）

霞しく波の初花をりかけてさくら鯛つる沖のあまふね

よき俳諧躰の歌なり。和歌としいへばいつも定まりたる詩材を用ふものゝ如くにていとかたはらいたきに上人のみは餘の歌よみのやうに狹きこゝろを有たざれば、さくら鯛をも材とし、てりうそ、こがらめをも材とし烏貝雀貝をも材とし興をいつはらず情をかくさず詠み出らるゝこそおもしろけれ。ある人歌よみを嘲りて詠よみは戻者なり孔雀さへ見つけてさがす稲負鳥と笑ひしが上人は戻者の歌よみにはあらざりけり。

（九）

雲にたゞ今宵の月をまかせてん厭ふとしても晴れぬ物故

月をめづる心は恨みの風情に含まれて然も雲をば憎まざるさまのやさしさよ、あはれ世の憂事に逢ひても此の如くありたけれ。

（三）

曇りなき鏡の上に居る塵を眼にたてゝ見る世と思はゞや

世をさるものとあきらめて我をかへりみれば世は恨むべきにもあらず、おそろしき人の眼は我が鏡の塵を拂ひくるゝものなるべし。

（四）

捨やらで命を終る人はみな父のこがねをもて歸るなり

范蠡が長男の心をよめるなり。鋭き心を起して小き慾を捨てずばむかしの愚昧ものゝ黄金を惜みたると何か異ならむ。

（五）

雲雀立つ荒野に生ふるひめゆりの何につくとも無き心哉

心性さだまらずして長き世を短き夢とすごす我が上人の上をや慨きてよみたりけん、歌のさまも優にやさしくあはれ深くして靜かに十度も吟しかへさば如何なる人にても涙こぼるべし。

其三十一　夜半の鐘

栗の落葉のかさこそと霜を飛ばす風にさゝやき爐の埋火も弱々しくなり行く頃、ひとり小机に對ひて靜かに世の態のをかしきことと人のふるまひのあやしきことと、さては我が心の甲斐なくも暗愚なることなどを思ひめぐらす折柄、かねて好ける山家集をとりて讀み下せば、ある時は氷を含む如き心地し又ある時は雲を捉へたらむやうなる心地のして、嬉しとも悲しとも云ふべき言葉なきまでおもしろくおもはる。まことや西行の歌は夜半の鐘のやうにいと淋しくて身にぞ浸むと人の曰ひしが露いつはりならず聞ゆれば、我が耳に入りて心に響きしほどの歌をぬきがきして思ひ寄りたること一ト節ふたふしつゝ記し添へたるを夜半の鐘と其まゝ名づけぬ。

一月二十三日の夜

（一）

あらしのみ時々窓に音づれて明けぬる空の名殘をぞ思ふ

夜嵐のみの音づれて明けたる空や如何ならむ、心の塵も吹き拂はれて三度吟ずれば我が胸すゞしきを覺ゆ。

（二）

ゐたるより巧みなるはもとよりなれどある夜ひそかにの七文字大切の機といふものなれば此機をとらへたる手柄は菊伍にあるべきこと勿論ならむ。かく云はゞ蓼太をおとしむるやうにて雪門の人などは腹立ち玉はむが左にはあらず、材の取捨に眼高きは手腕の高きをいたす一つの困にして蓼太の眼は勿論何十段も菊伍に超えたることうたがひなし。二句の關係をいひ出せるは紫蘇太と名を署したる男なり。

其三十　白雨

白雨や智慧さまざまのかぶりものといへる麥林の句はいとをかし。ある友の許にて此句意を蕪村が畫けるを見て、蕪村が何と此句を味はひしかをさとりぬ。人こゝろみに、夏の夕暮さつと降り來る大雨に通り町あたりを想ひやり或は千住龜井戸あたりを想ひやり見よ。變化無限螺貝の光りを放つ又青又紅なるが如き句とはかゝるをやいふべき。強ゐてはもとめがたき吟なり。雲の帶やゆふたちをはく山の腰といへるごとき句ぶりは、あまりに厭はしからずや。夕立のたちを太刀にかけたる一句の品玉はをかしからぬにあらねど、品玉なれば一寸の間こそおもしろけれ長くはおもしろからず。さる句をたゞに厭はしとおもふことあながちに無理にはあらざるべきにやいかゞ、たゞわれは嫌ふといふてのけむ。

れば、何の造作もなく一所に寐たるに、昔時を忍びて互にをかしがりもをかしがられも仕たらむ風情、まことに卑しき方にはおちずして愛情をかけたる寒氣の云ひあらはしやう、手ぎはよき働きなり。

其二十八　篠崎東海の言

篠崎東海が東海談に、畢竟師匠どりをする故學ぶものせまくなるなりといへるはよくいひ得たるものなるべし。固陋の宗匠などを師とたのみて多く書をも讀まず思ひをも鍛はざる人の俳句などは、いつ見ても同じ埒の中を跳り出さず、さしたる過誤のなきかはりには手柄もさらになし。琵琶葉湯俳諧とにても云ふべきにや。和歌にも詩にも小説にも枇杷葉湯の多からむには其道やがてほろぶべし。

其二十九　蓼太が五月雨の句

蓼太が、さみだれやある夜ひそかに松の月といへる句は、こがらしやある夜ひそかに雪の花といへる菊伍が句をおのが才にて變じたるなるべし。想のめぐらしかたをも字のくばりかたをも、句の勢といふものをも、こと／＼く奪ひたりといふべく、五月雨に松の月を用ゐたるは木枯しに雪の花を用

を研つて敢て恨とせず。嗚呼我古人に愧づることあり。悲や哀や恨や痛や辱や悶や罵言や怨悪や一切業果や、來るものは來れ愈々來れ、來つて我を責め我が業因をして消せしめよ。

其二十七　人情

姑の出たあとぬくき炬燵かなといへる俳句あり。或人曰く一應はおもしろし再應はおもしろからずと。一應は然るべき人情、いつはり無きところなれども、よくおもへば然あるべからざる人情、あやまりあるところなればなるべし。

嫁姑まるき心や初なすびといへるは春望が句なり。予おもへらく、一應はおもしろくして再應はおもしろからずと。一見は美しけれどよくおもへば、秋茄子を嫁に食はすなといへることを種子にして作者が出せる品玉なればなり。邪はあしゝ正はよし、強ひて正ならんとするは自然に邪なるよりは詩歌俳諧の道にて取らざるところなるべし。いづはりはおもしろからぬ幻術なり、巧なりとて何かあらむ。

老夫婦ある夜をかしき寒さかなといへる默齋の句はまことにをかしき句なり。爺は入れ齒嫗は懷爐の齢となりて若き頃の痴話も悋氣も夢のやうになりし何十年の共棲の後、ある夜の寒さにわが衾を君こそ着ませ、我が蒲團をそなたこそ敷けと互ひに睦じうかたらひ合ひし末、他人どしならぬ仲な

如く機の然らしむるが如し。これを厭ふものは能く其眞に達せざるところあればなり。悶擣險難の忽生漸生忽滅漸滅するもまた有意の如く無意の如く、情の然らしむるが如く命の然らしむるが如し。これを厭ふものは能く其極を究めざるところあればなるべし。蓋し理に達すれば敬むことあつて畏るゝことなく、命を知れば安んずるところあつて恨むところなからむ。こゝをもつて君子は、夬に、復に、遯に、大壯に、勢を得るに、勢を發するに、退いて守るに、動いて觸るゝに、皆善からざるなく、剛にして放にせず、柔にして奪はれず、毅然として自ら保ち、温乎として他に接し、理を愛し命を樂むを得る乎。嗚呼々々悲夫、我が理を愛し命を樂むことを得さるや。我それつひに小人にして終けるべき乎。

其二十六　損益

損は益の道なり、升は困の道なり、懼るゝものは安し、傷つくものは慰めらる、艱む則ち吉、滿るは即ち缺く、心の貧しきものは多福なり、忍辱は多力なり、火に逢はざれば金純ならず、湍を出す沱若たらずんば運祥ならず、境苦ならざれば學固からず、身閑なれば氣壯ならず、大丈夫は難を辟けず易に就かず、獃兒は藥を恐れ毒を親む、鎧袖一揮すれば好漢輒ち敵の多からざらんことを恐るゝのみ。此故に阿那律の奮つて道の進むや兩眼を失するを顧みず、神光の憤つて法を求むるや一臂

らんことを欲し食の佳饌ならんことを欲し錦繡を纏ひ樓閣に居らんと欲する類これを依欲とす。小人は常に依の小欲に驅られ、大人は時あつて本の大欲をも斷ず。依の欲は心を偸むの盜賊にして本の欲は恩を賣るの惡魔なり。又依の欲は氣を和ぐるの美女にして本の欲は身を保つの忠臣なり。古來幾多の隱遯者の如きは大抵恩を賣るの惡魔の奴たるに過ぎず。鄙といふべし。內欲にも二種あり。依欲は即ち對世間にして名譽等を欲するこれなり。技術の精ならんことを欲し學問道德の進んことをを欲する類は非對世間にして本欲なり。小人は常に此依の小欲に驅られ大人は死すとも此本欲を捨てず。內依欲は外依欲と姉妹たり。外本欲は內本欲と弟兄たり。但大奸雄は四欲に跋扈して而も獨滿足を得んとするの大意欲を抱き、大聖人は四欲を蟬脫して而も普く滿足を得せしめんとするの大意欲を抱く、嗚呼何ぞ我が欲の小なるや嗚呼何ぞ我が欲の小なるや。

其二十五　理に達するの人

北風の凛冽たる人これを厭ふ、これ豈厭ふに足らむや。密雲の暗澹たる人これを厭ふ、これ豈厭ふに足らむや。悶の突如來如焚如死如棄如として生ずる離の九四の如き人これを厭ふ、これ豈厭ふに足らむや。係するに徽纆を以てし叢棘に寘かる三歲得ざるといふ坎の上六の如き險に處する人これを厭ふ、これ豈厭ふに足らむや。風の發止し雲の來去する、有意の如く無意の如く理の然らしむるが

易を味ひ、更に泰否師比の往來變化の理を尋ぬるに邈々渺々として我心死するが如く我身亡するが如し。

其二十三　風車

人情我を活かしむる乎人情我を死せしむる乎、天理我を育するか天理我を毒する乎、仁は恩を生じ恩は桎梏を人に被らしむる乎、義は法を生じ法は樗蒲をして世に行はれしむる乎、貨は剝を招き剝は文を奪ふ乎、大壯は晋を來し晋は傷つく所あるを免れざる乎、生は生を亡する所以なる乎愛は愛を殺す所以なる乎、玄の又玄、言說及ばず思量逈に遠し。これを蒼天に質せば天答て曰く、知らずと。去つて巷閭の間を逍遙すれば、たまく一童子あり、手に風車を持して莞爾として笑つて之を視る。其狀大善知識の如し。然れども我得るなきなり。嗚呼々々古人什麼を說けるや。

其二十四　四種慾

人靜まつて感愈々多く、爐火既に盡きて茶を喫せんと欲するも得るあたはざる因に嘗て思ひ得たることを復び思ふ。蓋し外慾に二種あり、渴して喉を潤さんことを欲し饑て肚を實せんことを欲し、乃至寒には身を掩はんことを欲し雨には身を躱さんことを欲するの類これを本慾とす。飮の美味な

其二十一　酒

酒入れば舌出づ、舌出づれば是非生ず、是非一たび生ずれば彼我相爭ひ甲乙互に睽きて心また平かなる能はず、我即ち修羅道に墮す矣。感深ければ慾衰ふ、慾衰ふれば飮食減ず、飮食急に減ずれば憂苦交々到り怖畏自ら湧きて志堅きわたはず、我即ち餓鬼道に墮す矣。酒の感慨を惹くは石上に火を弄して却つて露を來すが如し。火は酒なり感慨は露なり。感慨の酒を惹くは貧者の寒に耐へずして熱湯に浴するがごとし。寒は感慨なり熱湯は酒なり。若し夫れ歎じて醉ひ醒めて悲まば水火神を傷り寒熱身を殺し、我即ち長く地獄に墮せん矣。嗚呼大丈夫いづくんぞ此三足の鼎中に煮らるべけんや。

其二十二　天意

人事悉とく皆必ずしも人爲にあらじ、悲むべく恨むべきものを把り來つて仔細に觀ずること一回二回三回四回、飜覆思考する數十百回すれば、漸く悲の骨且つ碎けんとするの悲痛中に薄らぎ、恨の血殆〆氷らんとするの恨苦中に解け、我を悲まんとするに悲むべきものなく、他を恨まんとするに恨むべきもののなきを覺ゆ。こゝに於て所謂天意なるものゝ存するなきやを疑ふを免れず。靜かに周

は擧家王子の家の佛事に參せる隙を盜に覗はれぬ。久しく航海して不在なりし兄は歸り。王子の一家は露知らざりし間に既に赤羽に移り去り。案頭金鳳釵等數種の書あり、是れ吾兄の携へ歸りて我に贈與せれらしものなり。平泉志あり、是れ奥州の友人の殊に寄送せるなり。尊德翁傳の刻成りて而して是非とも加ふべしと命じ置きたるはしがきを脱し去りあり。博聞社は印刷物の校正を我に逼り、仙臺の某氏文壇社の某氏は書を寄せて我が文を需め、債鬼は毒語を遣りあり好友は恨語を寄せあり、他に尙記し難き雜事の我にせまるもの二あり、厭ふに堪へたる俗事の我を煩はすもの四五にとゞまらず、悲むべきことと喜ぶべきこと、驚くべきことと歎ずべきこと都て一時に身邊に蝟集し來りて、又慚愧又懊惱又窮又恨、後悔一方に生じ痼癖一方に湧き、少時は呆れに呆れけるが一喝案を拍ち、先づ其處し易きものより處し急にすべきものを急にし、他は明旦をまつて爲さんと寢に就きしが、睡らんと欲して睡り成り難く、何の山色水聲の眼耳にあるなく芭蕉翁は千里以外に去りて金鳳釵は空しく枕邊に委し、心は眞に六窓堂裏の一獼猴の如く騷ぎて寂寞たる精舍の主人公一點の殊勝氣なし。酒を呼ばんにも及ばす、茶を需めんにも小僮既に睡り爐中豆火もなし、終に已むを得す奮發して修慈分を讀むに眼痛み神疲るゝに及んで、是の如き衆生身見と邊見とあるをもつての故に我想あり、若し智慈の藥を得ば此見を滅除し、所有の我想亦隨て止息す、是の故に我まさに是の如く慈を修むべし、といへるのところに至り、卷を拋つて默思良久し。

寂々の光景を來し、酒は愁人の肚腸に入りて化して懺悔の涙となり、なまじひに外來の縁なきため心池氷を結び身樹霜に惱み易し。斯くすること復一周間例の如く一も得るなくして、遂に歸家せんと欲し、午前に塔の澤を發し午後に國府津を去り日暮れて新橋に着しつ。今朝晏起時をあやまりたるがために約ある某會に列するあたはざるやうなりしを恨みながら車を僦ふて家に嚮ふ途中、流石に山色水聲猶とゝまつて眼底耳裏にあるがごときを覺え、人馬紛々の熱鬧市街を通過するも心中幾分の快味を帶びしが、路の次に某書肆を訪ふて偶然蝶夢の蕉翁傳三卷を得たり。去年芭蕉の一生を尋ね校せし時積翠の句選年考と此書とのみを得ざるを遺憾とせしに年考九卷は亡友羅文子の周旋によつて借覽することを得しも未だ此書を見るには及ばざりしが、圖らず此を得しければ、書は思ひしほどのものにはあらざるも事は亦一快を呼ぶに足り、今夜此書を靜讀して風流飄逸の翁が面目を想ひやり且は眼底耳裏の山水を想ひやりて眠りに就かば夢もまた淸風明月の地に遊び魂も花霞み松おぼろなる趣きにあくがれんと竊によろこびて、ものぐさき我が庵に着きしに、嗚呼、嗚呼、朝露夕電とはかねて知りたる世の態ながら、王子にある吾が兄の次子は我が告げずして出遊せし後數日にして夢の如く亡せ果て茶毘一片の煙り痕なくなりぬ。去月末の暴風雨にあたり我が庵破れ飛ばされんとせしとき屋上に登りてそを防ぎ呉たるほど矍鑠快活なりし隣家の老翁も我が出でし後忽焉として頓死し了り、哈々たる笑聲を復たび聞くによしなくなりぬ。加ふるに寺島に住せる兄が家

其十九　情と痴と

永夜抛レ人何處去、絕二來音一、香閤掩、眉斂月將レ沈、爭忍不二相尋一、怨孤衾、換二我心一爲二儞心一、始知二相憶深一、といへる顧夐が訴衷情躰の詞の結末、我が心を換へて儞の心と爲さばはじめて相憶ふの深きを知らむとの二句痴を極め情を極む。然るに汪藻が小重山躰秋閨の詞、月下潮生紅蓼汀、殘霞都斂盡、四山青、柳梢風急墮二流螢一、隨レ波去、點々亂二寒星一〇別語記丁寧、如今能間隔、幾長亭、夜來秋氣入二銀屛一、梧桐雨、還恨レ不二同聽一の結末二句は痴ならずして而して能く情を極む。大抵情を描かんとすれば痴に墮し痴を脫せんとすれば凡に墮す。知らず痴即ち情なるか情即ち痴なるか。蓋し痴態を描くことは尙易く情趣を描きて凡を脫せんことは實に易からずといへども畢竟するに痴凡固より病とするに足らず、唯眞ならざるを憂へむのみ。

其二十　修慈分

胡思亂想一刻又一刻、心は急風に騷ぐの斷雲となり思は野火に燒かるゝの荒草に似たり。漸く愁の煎迫するを覺えて、鬱悶に堪へず、審思諦考の力衰へ倉々蒙々の境に沈み去るを免れ難く、强て譃語し敢て爛醉し以て纔に我を慰め我を慰せんとするも、笑聲は無心の虛空に沒して却つて鳥啼き山

わたつては醉は醒に若かず飽は饑に若かず頑健なるは微恙あるに若かず濁富ならむは淸貧ならむに若かじ。醒、饑、病、貧我之を四妙となす。而して尙私に謂ふ人を屠り火を放ちし罪を抱くあるあらむには愈々益々もつて妙ならむ。醉飽健富は是れ人天の交接を妨げ親和を碍するの大奸大賊、殺人放火の罪は母天子人の間に立つの顯考叔なり、醒空病貧は正に是れ悍馬を制するの羈韁なり荆鞭なり。

其十八　病中讀書

我頃日病を得て筆硯と親まざる旬日に過ぐ。蓐中危坐して時に枕頭の書を讀むに、神氣衰耗遙に精力の平生に及ばざるを歎ずるを免かれずといへども、また欲衰へ意靜なるが故に心六塵の境に馳せず思一卷の文に沈みて幸に未見の義を見出し未得の興を得來ることなきにしもあらず。寶光明經卷第二中の、大丈夫猛利の意を生ぜば發心の力人中の王の如くならむといへる語、無邊の恭敬心を發起せば我人の憍慢皆棄捨せんといへる語、若得發心不退力、彼以根利現光明、若得根利現光明、彼常遠離惡知識、若己遠離惡知識、應當求法訪善友といへる語などの直接緊切に我を勵まし我が惡癖に中り我が前途を指示する者を見出して、奮然として起ち赧然として耻ぢ豁然として安んずる所を得し等みな是れ病中の一得、一快字を叫ぶに足るといふべし。

其十六　天地悠々

陰暦八月十三日の夜、寺島よりの歸路我たゞ一人心靜かに淸らかなる月の光を浴びつゝ墨堤を步みしに、見渡す限りの景色平常よりはあはれ深く眼に映り、岸を浸す滿々たる江水緩く流れて漕ぎ行く舟の艪聲も物悲しく、水は寒煙を引て江樹を沒すと李白が云ひしもかゝる眺めかと橋場待乳あたりを遠く望みながら、草がくれに吟ずる蟲の歌に送られ迎へられ融々として獨行けば、晝の雨に洗はれし樹々の梢より雫はら〳〵と折節の風に散り零ちて我が袖を濡し、薄絹のやうなる微雲時に月を掩ふて我が心を傷しむるに、何とは知らざる感の胸に湧きて仰いでは觀俯しては歎じ、前に古人を見ず後に來者を見ず、天地の悠々たるを念ふて獨愴然として涕下るといへる古詩を想ひ出てしまゝ高らかに誦すること數回、肅殺荒涼の秋氣を感じて心神殆ど氷りの如くなり、茫然として我我を忘るゝこと久しかりき。

其十七　醒饑病貧

夜ふけて兀坐すれば興味極めて多し。蓋し一年の中風冷やかに月淸むの節最も妙。三秋の中雨靜かに葉落つるの日最も妙。一日の中人定まり蟲唫ずるの時最も妙。若しそれ人定まり蟲唫ずるの時に

其十四　人を議するの愚

甲人乙人を議す。議せらるゝものは議せられしによつて一絲をも増さず一毫をも減ぜざるなり。唯憐む、議するものは即ち人を增減上下する能はずして却つて自己の學問見識の深淺高低、抱負襟懷の大小寛狹を露出し而して又丙人の議するところとなることを。噫、鼎を扛げて臏をたつ尚可なり、日を議して盲を證す、また太甚しからずや。

其十五　鶴の一聲

我が家に多きものは鼠と蚊とのみ、藏書も少く膳椀皿小鉢も少く書幅の壁間にかくべきもの ゝ如きは唯一二あるのみ。然りといへども疎放の性質藏書の少きを憂へず什器の足らざるを苦しまず、唯寒時も熱時も春日も秋夜も常に倘信が蜆子の像に對するにいたつては心樂まざるあるを覺え、時に好書幅を購ひ求めんと欲することの無きにはあらざりしが、頃日偶然某老人が、利休の子道安は五六年間常に鶴の一聲と云へる花入に花を活けて終に一度も軸物かけたることなかりしよし語るを聞きて後、復敢て探幽應擧の妙書を强て求めんともせず、足ることを知つて心稍安んじぬ。

其十二　善人多くは孩兒

孩兒は善人に似たりといへども善人にはあらず、故に孩兒は僅に愛するに足るのみ敬するに足らず、又素より學ぶに足らず。然るに閭里の間に稱せらるゝ善人なるものゝ實は多くは孩兒のみ、無知識なるのみ、無思慮なるのみ。是を以て知識あり思慮ある惡漢の笑ふところとなり輕んずるところとなる。

其十三　利休の語

嘗て隱士某を訪ふて閑談時を移せしが、主の彼も客の我も飾らず憚らず思ふ儘を互ひに打ち出して或は笑ひ或は歎ずるほどに半盞の茶一籃の野菓も甚だ味あるを覺えて、小室空庭もまた、口密腹劍の徒が立つて跛するなく坐して箕するなく、然も知つて敎へず思ふて露さず、禮に美にして情に乏しき交際をなすところの高堂廣園より大に喜ぶべきを感じたり。因にいふ、千の利休が語に、客亭主たがひの心にかなはふよし協ひたがるはあしゝ、又、寂たるはよし寂させたるは惡し風流ならざるところ却て風流求めて風流なるは風流ならざるなり、とあるは流石に一道の宗匠ほどありて面白き言といふべし。

悦ぶのみ。讀者に在ては即ち適意の文字を得、作者に在ては即ち不當の稱讃を被むる、如是の順境は可なり、若し一轉すれは即ち讀者不適意の文字を厭ひ作者不當の罵評を受くるの逆境たり。嗚呼苦哉。

其十　芭蕉西鶴

芭蕉は四十歳前後にして漸く芭蕉たり。西鶴も亦殆然り。之を思へば當世の作者の概して取るに足らざるも無理ならず。四十歳よりさきの事かな、四十歳よりさきの事かな。

其十一　不讀書と讀書と

今歳二月頃より多く文を作らず多く書を讀まず、家に在る時は即ち花を養ひ竹を洗し或は角觝の戯をなし或は樹を攀ぢて、一半は老人を學び一半は兒童の如くし、外に在れば即ち浪りに舌を鼓し浪りに新知己を求め、數々宴安の席につらなり、數々他の閑事に自己を役し、大工左官の輩乞食貧民の徒に親しみ、剪髮結髮を業とせる男女等が瑣談を聞き、雇人請宿酪酒店不潔なる割烹店などにも入り込みしが、七月に入りてよりまた黃卷を把て勤めて之に親しむに當り身の倦み憊れざるを覺え、又嘗て知り得ざりし趣味の古人が詞賦文章中より湧出し來つて我を襲ふが如きを覺ゆ。

戯ふるゝ蝶の重さよけしの花　尾谷
蝶も自が重みを知らむけしの花　第楓

同じく罌粟の花を題として同じく蝶を取り合はせ、同じく蝶を取り合せて同じく其極めて輕きところより罌粟の花の極めて美に極めて弱々しく何とも云へぬところを讀者に伺はしめ悟らしめんとす。同巧同趣にして前後相異なり。嗚呼いづれを好しと人は云ふらむ、予は知らず。蓋しいづれも上乘の句にはあらざらむ。

其九　偶然鳥聲を聞く

無事兀坐、身に病なく胸に物なき時偶然窓外に鳥聲を聞けば其何の鳥たるを問はず極めて愛すべきを覺え、自ら破顏微笑するをまぬかれず。這裏の道理を尋ぬるに鳥も人に喜ばるゝに意無くして歌ひ人も鳥に聞くに意無くして笑ふ、詩文亦かゝる場合よりして人に喜ばるゝことあり。審美の靈眼を眞に具へたる人にあらざるよりは大抵自己の影を壁上の詩に推すのみ。故に胃病者の甘きを愛するが如く游冶郎は纏綿痴情の光景を寫せるものを讚し、熱わるものゝ鹹を苦しとする如く不平家は和樂融々たる光景を寫せるものを冷視す。壯士が血を愛し婦女が涙を愛するも畢竟は詩賦文章の裏に在る眞血眞涙を認めて愛するにはあらで自己の惡血痴涙を以て有緣の詩文を掩ひ然して偶々獨り

伴は是當成聖人、孔子は是已成聖人、露伴は是れ當成詩人、沙翁顯悅は是已成詩人。嗚呼快なる哉。唯明人忍慧強く能持如是法にして初めて佛ともなるべく聖人とも詩人ともなるべし。恨むらくは我が忍慧弱く不持如是法、羊は是已成畜生、露伴は是當成畜生、炎口は是已成餓鬼、露伴は是當成餓鬼なることを。大丈夫滿腔の血、順流逆流、半順半逆流、乃至鬱滯不流潰裂迸飛すべきところは此快恨二字打成一丸裏にあり。

其七　おたつ

皮籠摺或は七部集其他に所々散見するたつといへる者の句あり。予が曾て作りし文中に用ゐし女の名は是より思ひ寄せたるなり、

見るも憂しひとり住居のたまゝつり

わの中へまろびて見たき青田哉

皆同じ人の句にして予の面白しと感ぜるものなり。さるは句の面白きよりは作句者を風流温籍の好人物ならむと想像して面白がるなりけり。

其八　同巧同曲

李伯時初めは馬を畫きて後は觀音を描く。然るに之を賞する白痴漢あり、悲しい哉。馬を畫きたる時と觀音を描きたる時と相較し前の技拙にして後の技巧ならば賞すべし。唯だ前には畜生を畫き後には菩薩を畫きたる畫題其者の卑高小大の故を以て或は貶し或は褒さば、馬を鑄成したる黃金と菩薩を鑄成したる黃金と同じ黃金なるを知らで一を眞鍮といやしみ一を眞金と尊む兒女の分別に均しかるべし。今の多數の批評家は李伯時にすゝめて菩薩を描かしめんとするの人なる哉。

其五　心赤髮愈白

心は一腔の火に似て髮は數莖の雪の如し利害相摩鑽し心赤くして髮愈々白し冉々歲暮の人忽ち爲る行路の客と、此詩何の巧處奇處なく却て拙處凡處あるを覺ゆ。然れども予此詩を愛す、而して何の故なるかを知らず。技を以て論ずれば素より價なし想を以て論ずるも亦異なし。さるに唯だ漫然として之を愛するは畢竟嬰兒の或人を見ては泣き或人を見ては笑ふが如き不思議の感に我が胸中を領せらるゝに因るか、或は又詩果して好き歟。詩は滲元に出たり。

其六　當成佛已成佛

汝は是れ當成佛、我は是れ已成佛と菩薩戒經に說かれたり。露伴は是當成佛、瞿曇は是已成佛、露

其三　冶工と佛師と

美術家も人なり、故に美術家たるの故を以て其人の放逸無慚を免すあたはざるは勿論なり。されど人間の一としては飽まで人間たらざるべからざる如く美術家の一としては飽まで美術家たらざるべからず。さるに美術家の一として有すべき覺悟にまで人間の一として有すべき覺悟を闖入せしめ雜居せしめ或は內の覺悟を逐ふて外の覺悟に代らしめんと欲する者あり。かゝる輩は全と片とを辨ぜず統と偏とを知らざるものなれども、人間一般の上より見れば毒を流さゞるに似て其實美術界に太甚しき弊を貽るものなり。況や區々たる小笠原流のごとき禮式を以て正宗貞宗が膝を律し運慶湛慶が居ずまひを糺さんとするに於てをや。嗚呼冶工は冶工の膝の立やう佛師は佛師の坐りやうあり。假令神の前佛の傍に至るとも其鎚を把り其鑿を持するに當つては諸肌脫ぎ大胡坐かきて何の憚かるところかあらむ。詩人の如きは能ふべくんば基督にも教へ瞿曇にも教ふべきものならむ。彼等が唾壺を捧げて不死の神丹這裏にありと受賣する千金丹の賣子然たる輩に教へらるべきものにはあらず。

其四　李伯時

なる初冬のさびしさ。
一、浪のうへにあか〳〵とさしのぼる日を拜むとき。
一、親類友達などの消息得たるとき。
一、借金をかへしはてたる時。

其二　土屋安親

土屋彌八安親後入道して東雨といふ。鏨工に妙を得て宗珉と雙び稱さる。實に一世に冠たること能はざるも亦百年に誇るに足るの手腕を有せる英靈底の漢たり。其或人に與ふるの書中に曰く

何事も技倆を好く致し度候はゞ心のむさき事なきやうに是第一なり、細工人は一生貧なるものと心得、つねに心のよごれぬやうにいたしたく候。

と、嗚呼是れ東雨が東雨たる所以のものにあらずや。貧苦も富貴も東雨が鐵桶の如き胸郭を穿つ能はず鑽るあたはず、而して其鐵桶中に能く蓄へられしものは唯眞に美術國裏に住せる人のみ採り釀し得べき其國の花の蜜のみ。富を欲するも心のむさきなり、名を欲するも心のむさきなり、道に協はむ善に與せんと欲するも亦心のむさきなり。さる人の胸廓は海綿の如く孔多くして何者をも能く浸漸透過せしむる代りには決して最も良きものを釀し出すをあたはざらむ。

れ去り、尙又微溫湯にて髮洗ひ果たるあげく、犢鼻褌一つしたばかりにて椽側に突立ち、頓て糊強く付きたる裕衣を着たる心よさ。

一、庭前に只一樹の梅が香、夜半の寢覺の枕に通ふおもしろさ。

一、片田舍の學校のあたりにて無下に衣服もきたなき見等が打つれて遊びながら、同音に鄙びたる聲はりあげて君が代歌ふありがたさ。

一、白髮頭の漁夫老ぼれたるが、酒に醉て昔時の態をあらはし、放言豪語風雨を叱咤し波浪を喝退する勢たけく、坐客避易すれども關はず、終には其處に倒れ臥して雷の如き鼾の聲、傍に居て其爺の何を夢みて居るかと考ふるおもしろさ。

一、草鞋のはき心よき。

一、廣き野面いつぱい繁り合へる草の葉末に一々露の玉なして、天上唯一輪の月の千萬となり、一々其露の中に宿れる景色、露滋しどうまあ月を踏分けう。

一、雨の日友達の筆のあとと心の趣きを見る。

一、雪の夜粥をすゝりて舊き我が旅の記を繰り返し見るに彼の山此の川眼の前に徘徊するおもしろさ。

一、風さはがぬ朝早く起て袖寒きを冐し、靜に歩めば落葉ひら〳〵とひるがへり、魂魄引締るやう

思ひながら如何なる人の住ふ事かと怯ろしく、こは〳〵戸をたゝきて難澁の仔細語れば、親切なる老婆の出來りてそれは〳〵お困りなりしなるべしとやさしき言葉かけくれたる悦ばしさ。

一、おもしろからぬ俗事に身を疲らせ心をわづらはせたる後、夜ふけて燈火かすかなる一室に錆ざる刀拔き放して手元より帽子先まで切先より鐔際まで幾度か見送り見迎へ頓て突立あがり、ひと揮りふた揮り打揮つて虛空を切る音を聞きたる心よさ。

一、年老たる法師の安らかに經よむを靜に聞居たる中、何事も自然と忘れ、唯々香烟の肝に染みたるありがたさ。

一、五歲か四歲の女の兒が麩を池の中に幾個ともなく投込みて、鯉龜などの食ふさまを餘念なく見入りたるあどけなき橫顏のうつくしさを望みたる。

一、終りは知られぬものながら蝸牛の長閑に這ひあるく樣子の風流なる。

一、作り話しを實の事と心得、頻りに鼻の頭油ぎらせて田舍人の語るを聞き居たる。

一、夏の日はげしく窓を射て書齋に默坐するも中々つらく、朝鮮團扇に水うつて自らあふぐも暑さ凌ぎ難く、氷水吞むも汗ばかりいたづらに湧て効なき折しも、思ひ切て手拭と浴衣引提、恐ろしき炎天を傘なしに急ぎて步み、湯屋に行て肉もはじける程あつき湯の中に躍り込み、少時齒をかみしめて苦しきを我慢したる後、出來れば滿身紅をぬりたるやうに赤く、汗は玉なして一時に流

共に眺め、澁茶一盞に談話一ッ二ッしたるうれしさ。

一、三四里離れたる所に閑居せる友を訪ふて、互におもしろく風流の話し修行の話しの間に一ッ二ッは浮世の戀のものがたりなども交り、誰に遠慮なく高笑したる揚句、飯時になりて菜ごしらへも主客の別なく共にはたらきて、然も作り出せし煮物のしほからきに眉皺めし可笑しさ。

一、顏の色うつくしき十一二歳の男の子に八百善の料理せし肴食はせても左程よろこばず、淺草公園の賑やかさ見せても嬉しがりもせざりしが、我畜ひし小犬を欲しげなりし故それを與ふべしと云へば、眼中一段の麗はしさを增し、罪もなく笑みかたまげ、はや我ものぞと其犬の頭をなで首筋を抱きて樂しみ深さうにしたる長閑さ。

一、恐ろしく峙立ち巖の上に我たゞひとり突立ては、長風裾を煽りて袂に滿ち、脚下に騷ぐ雌浪雄浪、折から差し來る潮の勢にいよいよ烈しく凄まじく、滔々どッと一打するごとく、碎けて飛ぶ白玉の、ばらりと虛空を掠めて落ち、滿身ぬれひたりたる心よさ。

一、思ひもかけぬ山道に踏迷ひ、行けども行けども森くらく霧たちこめて、方角を失ひ目當を忘れ、腹さびしく心細く、おぼつかなくもひとり步む中、日はつれなくも我を見捨てゝ天地薄墨色となり、杉の葉の風に鳴る氣味惡さ。今は絕躰絕命と觀念しても勇氣少しもなく、懷中水を湛ふるごとく寒をおぼえし時しもあれ、幽なる火の光を見つけ、それにたよりて破屋を得、やれうれしと

折々草

其一　愉快

一、旅行の空に月を越え年をかさね、さまざまの憂き事つらき事に逢ひつくして、人の心の冷やかなるさま、錢の力の大きなることなど悟り、懐寒く袖露けき荒野に浮世の味はつく〴〵からきものぞと知り、今は松風蘿月を友とし片里の小菴にも身を幽かに終りなんと思ひたるが、故郷に歸り來て我家の前の柳の樹まづ眼につき、内に入りて久しぶりにて母上が縫ひ玉ひける蒲團にくるまりて安々と寐たるうれしさ。

一、昔しは共に物あらそひなどしたる友だちに、思ひ寄らざる旅の空にて逢ひたるうれしさ。

一、生命は何程ぞ、夢中に飛ばせし何年、今さら取り戻しはならず、口惜し〳〵、勵め勵めと、怠りがちの意馬に鞭ち、漸く半日ほども餘念なく學びたるに、肩も凝り眼も疲れたる折ふし、豫て知れる美人の問ひ來りて、向島の園育ち、姿はいやしくも香は高きこのはな、君が瓶中に收められなば嬉しかるべしなど〻、打笑ながら贈りくれたる早梅、其ま〻譯もなく床の間の瓶に投込みて

出度姻緣を了し、復び玉梳を相合して美滿の結局に終るを寫せり。中に就て蝴蝶夢は姑く論ぜず他は皆佳趣あらざる無し。恨むらくは予の不幸にして漢卿の作六十本の其半をも見るを得ざるより漢卿の果して如何なる作家なるかを窺ふを得ず、隨つて評論を加ふる能はざるを悲むのみ。

如く尊敬嘆美せらるゝもの）の裁判譚を叙せり。包待制に就きては予一括して之を說くの日あるべければ今敢て蝴蝶夢を說かざらん。金線池は吾が近松の網島の小春とは又少しく異なれど同じく意の强き妓女杜蘂娘といへるを主人公として、自己の熱慕せる情人韓輔臣を金錢池上にて自ら强て冷待するの奇景を描き。玉鏡臺は、媒妁者の地に立てる温太眞が計を設けて自ら新郎となりしより倩英といへる女兒の既に婚して猶服せざるの嬌痴の態を寫し。謝天香は友人柳耆卿をして發憤勉勵功名を遂げしめんとの心より耆卿を罵り耆卿の愛妓天香を我が方に引取れる錢大尹といふものゝ深意を知らずして其引取られ居る其天香を主人公として寫せるもの。荆楚臣重對玉梳記といへるは一に對玉釧と稱するものなるが、予の見たるものには賈仲名撰とあり。これ果して誤刻に屬するや或は眞に漢卿の撰にあらざるや、又或は喬孟符にも柳眉兒金錢記の作ありて石君寶にもまた同題の作あるが如く漢卿にも仲名にも同題の作ありて、予が見たるものは實に仲名の作なるか、又同題の作の相混じて予の看たるもの仲命の名ありと雖も實は漢卿の作に係るか、予の學の固陋なる見聞甚だ博からざれば的確の考證を得る能はずと雖も、蓋し恐らくは仲名の作の今傳はるもの金安壽に過ぎずして、對玉梳に仲名の名あるもの校刻の誤りなるべし。對玉梳は荆楚臣といへるもの狎妓玉香と別れて上京試に應ずるに臨み、玉香釵環を與へて其資を助け、又一枚の玉梳兒を折りて一半を自ら取り一半を郎に與へ他日相會する時の記とせんと約し、郎の去りて後具さに辛酸に耐へ、終に芽

に在り。吾が妻を奪つて那裏に往くやと趕ひつゝ爭へど休書を與へたれば引章を如何ともする能はず。盼兒に對ひて約束を履まんことを逼れば、千枚誓紙で世を渡る妓女の一々約束だてを履まば花柳に門戸も無からんと冷笑して肯んぜず。已むを得て衙門に訴へ出づれば、安秀實早くも盼兒の指揮に從つて衙門に周舍といふもの我が妻引章を強奪せんとすと訴へ出てあるにぞ周舍却つて重く叱せられて事全く落着し、引章秀實と夫婦となり終る。

救風塵の一篇滑稽は甚だ滑稽なれど絕て惡謔詼の詞無く自然に人をして微々と笑ひを含ましめ、世に多く如斯きの眞に存するを思はしむ。また優に一佳作と稱するに足ると云ふべし。吾が邦元祿以後天明寬政に及び近くは二三十年前までに至る間花柳の事を敍せる小說劇曲共に少きにあらざるも皆陳々相襲ひて、一の常套を脫し一生面を開ける此篇の如きもの無し。其着眼のみにても既に妙とすべきに況んや精咀細嚼すれば雋味浸々として出づるの警句奇辭極めて少からざるをや。愼鸞交を說くもの必ず笠翁の情を觀るに隻眼を具せるを稱して已まざるも何ぞ知らん笠翁に先だつこと數百年にして既に此の漢卿の在るあつて救風塵一篇既に其の母姉たる無きをや疑はしむるものあるを。嗚呼元の才人豈に侮り易からんや。

蝴蝶夢は元に於て最も流行せる裁判劇（裁判劇とは甚だ穩當ならざる稱なるも吾が邦の大岡政談の如くなるものを假稱せるに過ぎず）に屬するものにして例に依て宋の包待制（吾が邦の大岡越州の

の着眼の異先づ讀者をして何ぞ其才の豐なるやを叫ばしむるに足ると云つべし。
汴梁の歌妓宋引章といへる者、初めは安秀實といへる男に意を寄せしが周舍と呼ぶ伶俐の男に會ふてより之に意を寄せて終に妻とならんとすれば之を聞て安秀實は安からず思ひ、名妓の趙盼兒といふに此事を歎き聞ゆるに盼兒は姻緣の料り難きこと愛戀の誤り易き事を說きて秀實を慰め、今も猶汝引章を惡まずと云ふならんには我汝のために力を出さんなれど、我が言に引章が從ひたりとて喜ばず從はざるとて煩惱すまじと云ひて遂に安がため引章に見えて安が賴もしく周舍の賴もしからぬを說けど引章は思ひ飜さて、安に嫁がば夫婦共に蓮花落（乞食歌）を歌ふばかりならんと云ふに盼兒是非無く歸りて秀實に此態を告ぐ。秀實失望して上京せんと言ふを盼兒は少時忍びて待てと諭す。引章は盼兒が言葉を肯かで周舍に嫁ぎしが時經るに隨ひて愛情當初の如くならずなり周舍に虐待打撲さるれば苦痛に堪へて書を汴梁の母が許に寄せ趙盼兒が救を求むるに、盼兒は果して我が云ひし如くなりと引章が短視にして遠慮無かりしを憫み、我之を救ひて周舍に引章を休せしめんと云ひ、遂に自ら盛裝して瓶酒熟羊江羅を準備し車輛鞍馬奩房を將つて周舍が家の地方に到り十分周舍に意ある態を示して我汝に嫁せんと欲すれども汝に引章といふものあればと云へば周舍輕薄の心うつりして盼兒を納れんが爲に引章に休書を與へんと家に歸り、强て休書を引章に與へ、再び盼兒が家に到れば既に去て在らず。驚きて之を追へば盼兒は既に引章を帶びて汴梁に歸らんとするの途

よく描寫し出されあるは予が此の梗概を記せるを讀みても蓋し人の想像し得るところならん。第二折藥殺の一段ゝ紫婆々を殺さずして却て驢兒が父を死せしむるに至るところ作者が思を構ふる決して尋常圈套に墮する庸叢の比にあらざるを見るに足れり。第四折亡魂弄燈の一事は元劇に於ける魂旦の常所作にして甚だ其佳ならざるを覺ゆるも敢て深く忌むにも及ばざるべし。

望江亭、竇娥寃二篇をやゝ詳しく說きたれば實にまた予は漢卿が爲に救風塵をやゝ詳しく說かんと欲するの情無き能はず。前者は共に是佳は即ち佳なるも未だ一筆も情を竊ぎ情を弄する眞僞錯雜の魔窟中の婦人の情狀に寫し及ぼせるものにあらざれば、所謂情なるものを知透して而して之に加これを善使巧用することを知透せる花柳の聰明美人を主人公として描ける救風塵の自ら別頭に屬せる佳趣は、之を紹介せざらんと欲して而も難んずるところなり。然れども獨り關漢卿に厚くして馬致遠に疎なる能はざれば救風塵以下は畧叙して已まんとす。

○救風塵

救風塵の奇なるは戀慕するもの若くは戀慕せらるゝものを主人公とせずして媒妁者の地位に立つものを主人公としたるに在り。第一者第二者を主とせずして迷鄉に入らざる第三者の冷眼溫情妙慧辣手を以て惑へる美人失望せる才子の導師となりて好緣を結ばしむるに至れるを描けるもの、實に作者

々を藥死すとあれば、こは不思議になりと再び底下に壓して他の文卷を讀まんとするに燈火例によつて半明半闇となる。再び燈を剔て取り讀めばまた竇娥公々を藥死すとあり。さては鬼あり冤枉ありや仔細無くては叶ふまじと其卷を例の如く底下に置きて別に一卷を見んとするに燈は例によつて暗くなるを剔んとして亡魂と撞見すれば、天章劍を擧げて卓を擊つ。竇娥は遂に現はれて天章を拜し、端雲の往事より冤枉に死せるまでの一伍一什を告げ、三年の亢旱六月の下雪皆な孩兒が爲すところと云へば天章大に哭して、明日汝のために必ず屈を伸べんと云ふ。亡魂これを聞き暫く下る。

夜も明くれば天章は州官を糺問し、張驢兒蔡婆々等を召換して一々鞫明するに亡魂忽にあらはれて驢兒を責むれば驢兒も強辯し難くて大に窮困するところへ解子最初の犯人賽盧醫を押へ來れば、一切暴露して情實明かに解け、張驢兒は木驢に釘上して一百二十刀を剮し死に處すと宣告せられ州守房吏等は杖一百永く敍用せられざるに定まり、賽盧醫は遠地に配せられ、蔡婆々は天章に收養せらるゝに定まり、竇娥のためには水陸道塲を做して冥福を修するを約し、これにて竇娥冤一劇終る。

竇娥冤一劇第三折の悲壯なる光景は主人公の美人なるだけに特に妙ならずんばあらず。僅に楔子と四折との中に於て竇娥の烈性、賽盧醫の愚、張驢兒の惡むべき、蔡婆々の憫笑すべき、州官の昧皆

地に落つることなく皆飛んで此の白練に必ず濺ぎかゝるべし、若し靈聖のこと無くば湛々たる青天を如何にせん、今三伏の暑き日なれど、鄒衍が憤りには六月に霜も飛びしと聞く、妾が一腔の怨氣噴て火の如くならば六出氷花も滾として綿の如くに降り來り妾が屍首を埋むべし、天公期すべからずと云へばとて、東海曾て孝婦の寃に三年雨なかりし事もありしと聞く、妾死する後三年は楚州に恐らく雨あらせじ、見給へ浮雲は我が爲めに陰く、悲風は我が爲に旋り初めぬ、寃枉に死ぬる身の一念の如何で果敢なく散り消ゆべき、と云ひ終て大に哭するを劊子は終に斬殺すれば、血は飛んで盡く白練にあり。雪は霏々として落ち來り、冷風凍雲夏としもなく空の景色の變り行くに皆々驚き異みて、監斬官も這死罪必ず寃枉あらんと云ひ、屍首を直ちに蔡婆々に與へしむ。

第四折　端雲に別れてより今は十六年を經たるも日夜思ひ出しては孩兒や如何にと心に懸けぬ時も無き竇天章兩淮提刑肅政廉訪使の職にて淮南楚州々廳に到り燈下にて州務の文書を撿するに、劈頭第一我と同性の竇娥毒藥公々を殺すといへる文卷あれば、嗚呼我と姓を同うせるものにも不赦の大罪を犯せるもののありと歎じながらも此は結了せる文書なればと其文卷を底下に壓して猶他の文書を讀まんとするに睡り萠せば書案に伏して睡るところへ竇娥の亡魂現はれ出づ。天章驚きて端雲と叫べば夢は破れて痕無く消えぬ。夢醒めたれば再び文卷を見んとするに亡魂燈火を弄ぶとは知らで忽明忽滅するを怪み燈を剔る。其間に亡魂は文卷を翻すを天章は知らず取て讀むに竇娥公

て罪せらるゝ、竇娥は今にも斬られなば遊魂頃刻に森羅殿へ赴きて天地も怨みたき思ひ、日月朝暮に懸り玉ひ鬼神生死を掌り玉はゞ清濁を分辨さるべきに盜跖顏淵を混淆して善を爲すもの貧窮の上命も短かく惡を造すもの富貴にして而も壽あるとは何たる事ぞ恨めしゝ、天も地もまた硬を怕れて軟を欺くことを做すか、元來却つて水に順つて船を推し勢に隨ふばかりのものか、好歹を分たで何が地ぞ、賢愚も錯り勘へて何が天ぞ、あゝたゞ涙の漣々と流るゝばかり是非も無し、願くばたゞ妾の願ひを聽きて玉はれ前街を通らば妾は恨むべし後街を行かしめ玉ひなば死しても恨みなき聊些しの路の遠きをば厭ひ玉はるな方々よ、孤身隻影親眷無く聲を呑み氣を忍びて空しく嗟く妾が父上は十年ばかり御面も拜まねど前街裏を行かば養ひ玉はりし恩ある母上に重き首枷冷き鎖帶びたる身のあさましき態を見せまゐらせて由無き御歎き悲しみをかけ御身躰にも障るやうなる事あらんかと心苦し、と牽かれ行きながら云ふところへ涙滿面にて蔡婆々は來り、變り果てたる女兒の樣を見るより聲を放つて泣けば、竇娥は懇に慰めて、都て我が福の沒きより故左のみは深く啼き玉ふな、たゞ時には半碗兒の水飯、一陌兒の紙錢を手向け玉はれと云ふ中に、はや時は到りぬと劊子は婆々を引き退けて枷を開き放す。竇娥は惡びれず跪きて監斬官に、我が站立すべき一領の淨席を乞ひまた丈二の白練を旗鎗上に桂げ玉はれと乞へば監斬官これを許して云ふが如くにせしむ。竇娥は練下に立ち蓆に坐して、妾まことに寃枉にて死するものならば頭の落つると共に一腔の熱血は半點も

祐け玉ふ、身に覺え無き事なれば汝と共に官に出てんといへば、可愛さ餘つて今は憎く、云ふにや及ぶと張驢兒は蔡婆々竇娥を拖きて去る。

縣令祇候を引て出づるところへ張驢兒竇娥を訴へ出づれば、竇娥は初めよりの顚末を述べて願くば明鏡淸水の御法德をもて妾が肝膽虛實を照らし玉へと云ふ。驢兒は口賢くも、我が姓は張、他の姓は蔡、婆々の我が父を招かでは如何て我等の彼の家に在るべき、被告の申せし如くのことならば要も無きに我みづから吾が父を殺せしに當る譯にて世に其樣なる通せぬ理のまたあるべしとも思はれず、日頃剛性なる這の媳婦、御手柔らかなる事にては容易に服罪いたすまじと云へば愚昧の縣令は論もなく、人はこれ賤蟲、打たずんば吐かじ、左右疾く打てと命ず。かしこまりぬと祇候の打つ棍棒肉を飛ばし血を潑すれど竇娥は猶屈せで寃を叫ぶにぞ、汝の毒を置きしならずは疑は彼の婆々にあり、左右婆々めを打てと命ず。婆々を打たせては叶ふまじ我は銜寃負屈の鬼となるとも養育の恩ある母を打ち殺させては子たるの道は立ち難し、寃枉は天地の知り玉はん今は是非無しと切齒して竇娥は泣く〳〵罪に伏せば、蔡婆々は堪へず、そなたが姓命は我が捨てさせしも同じ事なりと悲み哭けど事定まりたる今更甲斐無く、重枷を枷せられ遂に竇娥は死囚牢に投ぜられ頓て斬らるゝに定まり、驢兒は叩頭して恩を謝し去る。

第三折　公人皷を打ち劊子旗を立て刀を提げ監斬官と共に竇娥を押護して法場に到る。罪にもあら

知らぬものから婆々に勸むるに、婆々は吃せんとして嘔氣を催し、我この湯は今は得飲まず、我に代りて汝飲めといふ。老夫は婆々に二度三度勸むれど敢て飲まざれば遂に自ら吃するに、毒藥なればば堪らばこそ、心地惡しゝと云ふが早きか倒れて其まゝ息は絶えぬ。蔡婆々を殺さんとて備へしものを吾が父の飲みたれど、それとは明かせぬに詮方無く、見す〱父を殺したる驢兒は過誤につい て忽ちまた意を轉じ、こは情無し我父を毒殺せしよと叫び出づれば、左なきだに老夫の死せるに驚き呆れたる蔡婆々、羊酒段匹花紅財禮も無くて吾家の人の如くなりし老夫の死せるに人の思はくもうしろめたしと思へる竇娥は、何事を云はるゝと慌て止むるに、何事とは何事ぞ我が父を藥殺しながらと叫ぶ。妾が調へたる羊腸兒湯に何の怪しきことやある、汝自ら毒を放たて誰かは毒など放つべきと竇娥は云ひ解けど驢兒は冷笑つて、我父を殺して我の何とすべきことぞ、道理もなき愚なる事を云ふものめ、近隣の人々聞き玉へ竇娥吾が父を殺せりと叫べば婆々は動顛して、まづ〱靜かにといふ。驢兒は得たりと圖に乘りて靜かにといへば靜かにもすまじきでは無けれど魚心無ければ如何で水心あらん、竇娥の片意地を捨て果てゝ我が意に隨はゞ免しもせんが左無くば官に訴へて三推六問の憂き目を見せ父の仇をば取らでは置かじ、但し我意に隨はゞ事を穩便に濟ませ呉れん二つに一つの返答せよと飽まで慾を遂げんとする非道の言葉は惡けれど蔡婆々は弱りて竇娥に對ひ、我がため驢兒に從ひてよと云ふ。されど竇娥は更に屈せず、三推六問も何か怖れん、天は正しきを

張驢兒は如何にすれども竇娥の意に隨はざるを怒れるに加へて蔡婆々が病につけるにいよ〳〵面白からず思ひ、遂に婆々をば藥殺して兎角の論なく竇娥を我が意に隨はせんと惡意を增長して、賽盧醫が南門外の淋しきところに藥舖を開けるを見かけ、毒藥を合して與へよと云ふ。盧醫は驚いて與へずといへば、汝前日蔡婆々を殺さんとせしを我が見しぞ必ず調合せずとならば汝が惡事を訴へんと强逼す。盧醫は是非なく藥を與ふれば驢兒は藥を得て先づ去る。こは我が一念の差より恐しき事の生じたり今見し男は先に婆々を救ひしものと覺えたるが毒藥を求め去りたる上は事露はれなば連累は逃れぬ我が身のこゝに在らんは極めて危ふし、涿州に行きて老鼠藥にても賣らんとて去る。

蔡婆々病に臥せるを張驢父子問ふて、病體如何に、欲しきものは無きやと云へば、身は十分に快からず、たゞ羊腸兒湯を吃したく思ふばかりと蔡婆々は云ふ。孩兒よ汝竇娥に對して羊腸兒湯を做さしめよと驢兒に命じ驢兒また竇娥に命ずれば、竇娥は張父子の家に在るをいぶせくは思へど爭ひ難く、蔡婆々の節操毫も無くして自己が身を厭ふばかりに、沙を洗つて大水に投じ山に上りて頑石に化せしやうなる昔時の人に耻ぢもせで張父子を家に入れしを、憤りはすれど云はるゝまゝに羊腸兒湯を調へて持ち來れば驢兒は試みて、こは鹽少し、汝去りて取り來れといふ。竇娥は心もつかず鹽を取らんと去りし後にて手早くも驢兒は毒藥を內に放ち、鹽を持ち來りし竇娥に向ひて宜き程に下せと命ずるにぞ、竇娥は鹽を下して之を勸む。驢兒が老父は吾が子の驢兒が毒藥を下せりとは

妾にも事欠かずして孤獨の生涯にも苦無きやう計らひ置き玉ひたるに舊恩愛を土芥と見て如何で不道理のさる事を諾ひ玉へるや、あらうたてし、母上は男を招き玉はゞ自ら招き玉へかし妾は全く肯はず、と竇娥に道理の當然を云はれて返す言葉は無けれど、我とて好みて爲すことには固よりあらねど彼の驢兒父子は門首にありて何ともなすべき術無ければと云ふ中に彼の驢兒父子は入り來りて、強て禮を行ひ拜せしめんとすれば竇娥は怒つて、退れ、村老子、半死囚、一旦丈夫を持ちたる妾、如何でか汝等の非道の望みの犧牲となつて節操を失ふべきやと罵る。驢兒は猶強て竇娥を扯き倒せど竇娥は屈せずして堂を去る。蔡婆々はひたすら驢兒等を宥めて、汝に活命の恩を荷へば我豈報はであるべきや、たゞ我が媳婦はむづかしき彼の如くの氣性のことなれば急ぎては何ともなし難し、既に我が兒の汝を婿とせざるに我のみ汝の老人を招くといふもなし難し、たゞ是よりは好酒好飲汝父子の好むまにまに供養すべければ我が媳婦の回心轉意するを待ちて何とかすべしと勸むるに、驢兒は呟きて不滿の顏色、何といふとも高が女、心に從はせで置くべきや、全生今世他を妻となさずば我も男兒と云はれじと飽まで情慾を果さんとす。

第二折　蔡婆々を勒死せんとして果さゞりし賽盧醫、死には至らしめざりしも自ら良心に責められて苦み大に悔いしも、再び婆々に面を見られんことを怕れ、別處に至りて別に生を營まんと悄々地に行李を收拾して去る。

兒の婦とするに仔細あらじ承知せよと意外の事を云ひ出して逼る。婆々は呆れて金錢の謝禮は爲すべけれど此は吾が意にも及ばぬことゝ辭めど二人は肯んぜず。驢兒は繩をば手に拿りて、婆々め二言と不の字を云ふな賽盧醫が繩こゝに在りと云へば勸死されんも圖られずと婆々は是非なく二人を引て去る。天章が女の端雲は三歳にして母に別れ七歳にして父に離れ名さへ竇娥と改められて蔡婆々が兒と十七歳にて夫妻となりしが不幸にもそれにさへ先だゝれて今は二十歳の寡婦の身の上、前世の燒香足らずして今生の禍かくも多きか、人にも來世のための修福を勸めまほしく思ふまで重ね〴〵の憂き艱難、晝は物さへ欲しからで夜は寢ね難の事のみ多く、昨夕の夢も今朝の心の愁にばかり閉ぢられて錦爛熳たる花の枝の繡闥に横たはるも涙の種、剔團欒たる月の色の粧樓に掛かるにも腸を斷つ滿腹の間愁、一人となれば猶思ひの紛れ難くて婆々の歸りを待つところへ、張驢兒父上に逼られて涙漫々として住めもあへず婆々は歸り來れば、忙しく迎へ接しながら、若し債を促りて他と爭ひなどやし玉ひつると問ふに、婆々は不思議の禍に逢ひたることより張驢兒父子の始末を語りて、我を勸死せんと迫るより是非無く自己のみならず汝の上まで他の云ふ如くに許したりといふ。聞くこと毎に驚き呆れて、母上それは何言ひ玉ふ、その霜雪の白き髮を梳きて今さら雲霞の文ある衣を着たまはんとや齡も六旬を超え玉ひて新に夫を持ち玉はゞ誰かは笑ひ中さゞらん、他に救はれ玉ひたればとて想ひても見玉へ當初母上の御夫主の母上のため田園を求め蚤晩の羹粥寒暑の衣

開くるといへば盤纏も婆々より得ずしては得る道絶えてあらざる身の此事を拒みては應學の費も得難く隨つて功名を遂ぐる時なし、と歎息しながら竇天章は端雲を引て蔡婆々を訪へば待設けたる事とて蔡婆々は悦で迎へ入れ、借錢の文書を還し猶上京の費として拾兩の銀子を與ふるにぞ天章も悅んで端雲が上など賴み置き、後を追ふ女兒の悲聲を背に淚を揮つて出發す。

第一折　賽盧醫といふ庸醫蔡婆々に十兩の銀子を借りしが本利積つて二十兩となり、還すべき力は無し促らるゝとは急なり、遂に良からぬ心を生じ居るところへ、十三年前竇天章より端雲を貰ひて我が兒の妻と豫め定めしも、婚後二年ならで我が兒は病死し、端雲と共に淋しく此三年ばかりを暮せる蔡婆々は錢を索めん爲に入り來れば盧醫は欺きて我に隨て我が床上に來らば還すべしと云ひ、郊外人無き處に誘ひ行きて突然と繩を以て勒殺せんとす。婆々は驚きて逃れんとすれども力及ばず殆んど殺されんとする折しも張驢と云ふもの其父と共に來かゝりて聲をかくれば賽盧醫は驚きて逃げ去る。婆々は生命の恩人と悅び謝して、問はるゝまゝに身の上の事勒死されんとせし譯まてを語れば、これを聞たる驢兒は忽ち翻つて惡念を發し、爹々よ聞かずや婆々が家には若き寡婦ありといふ事なれば吾等生命を救ひ遣りたる恩義を枷に我は其寡婦の婿となり爹々は此婆々を取らんには妙ならずや、家には銀子も多かるべければ我等は好運を攫みしといふものなりと父に云ふに父も忽ち同意して、婆々よ儞に丈夫なく我に渾家なければ儞は我が老婆となるべく汝の媳婦は吾が

他を略せんとの意より出でたるに他ならず。望江亭とは大に其趣味を異にせる竇娥寃を說くにもまた稍詳くせば一人に甚だ密にして他に疎なるが如き嫌無き能はざるも漢卿はこれ巨匠大家、實に二篇を詳說し盡すとも猶其一斑を示すに過ぎざらんとす、況んやまた單に望江亭の如きものを說きて竇娥寃を說かざらんには甚しく漢卿を誤解せしむるに止まるべきをや。これ予の關卿に限りて二篇をやゝ詳說する所以なり。

○竇娥寃

楔子　夫に先だゝれて八歲の孩兒と共に唯二人暮らせる蔡婆々といふもの出でゝ、竇秀才といへるものに先年二十兩の銀子を貸せるが今は本利積もりて四十兩となりたれど何程促りても貧秀才の埒明かず何と爲すべき手段も無し、さりながら彼の秀才には七歲になる美しき女兒あれば貸金の代りに彼の女兒を乞ひ受けて我兒の媳婦となさんと思へるまゝ此事を秀才に說けるに秀才も是非なく承諾して今日は吉日なれば女兒を送らんと約したり、頓て秀才も見ゆべければ貸金を促りに外へ出づることもせず待ち居らんと云ひて去る。

縹緗萬卷の書は讀み盡せるも時運通ぜざれば功名遂げて、貧の是非なしとは云へ妻の殘せるたゞ一人の女の端雲までを四十兩の銀子の恩に代へて蔡婆々に與ふるとは口惜し、されど今春選場の

妾を捉らへて欺騙致し強て連理の枝を析き並頭の蓮を斷たんものと不法を仕かけましたるが何卒御上の御威光を以て是非を御糺し下さるべしと訴へ出づれば白士中は女を退け置き今は却つて衙内を捕へんとす。衙内は窮して、爾の罪も我は饒すべき間我が被告となるも饒し呉れよ、それはそれとして汝には好夫人ありと聞きつるが我に一面を得せしめよと苦しき中にも慾は忘れて云へば士中は心の中には笑ひを含みながら、さらば汝の言葉に任せん、左右後堂より夫人を請じ來れと命ずる聲の下より頓て夫人の譚記兒は、身は常に柳陌に眠り脚は花街を離れずと聞ける揚衙内に今日初めて見え奉る妾こそは士中が妻の譚記兒なれと出で來りて挨拶するを見れば服裝は異りたれど正しく張二嫂に紛れ無し。さてはと衙内張李の三人は開きたる口も閉ぎ得ざる處へ御史の李秉忠といふも の入り來りて、楊衙内妄に不實を奏し私怨を報ぜんとせし事の露はれたれば我聖人の命を奉じて此處に來れりと自ら明し、衙内の官職を削り杖八十を加ふと宣告すれば士中夫妻は朝恩を謝して歡喜し終る。

此劇第三折末に馬鞍兒一曲ありて張千李稍衙内三人遞唱合唱すること猶傳奇の齣末に集賢賓若くは然らざる絶句等を各人遞唱して後合唱する常套の如し。これまた記憶すべき一異例に屬す。

此劇未だ必ずしも甚だ佳ならず、また未だ必ずしも漢卿の面目を盡さず。然るに予の之をやゝ詳說せるものは此篇と竇娥寃一篇とは自ら兩極端なるかの如く見ゆるを以て其の兩極端を詳說し

勢劍を借し給へ此の金牌もて我が戒指兒を作り給はれなど云ひ、猶酒を勸め歌を唱ふる中に醉に得堪へて三人とも睡りに就けば張二嫂は三件の物を袖にして、あらあり難や、金牌虎符を取り得し上は心安し、今より人の磨滅を受けず百年の契りを完うして、我等は美孜々として芙容の帳裏、春風に笑ふて暮らすべし、此痴漢等は冷凄々と揚柳の岸邊に殘月に伴へかしとて退き去る。三人は後にて心づき驚き騒げど其甲斐なく、人にも知らせ難き過ちに趺脚して叫び醉腸を焦して悔るばかりなり。

第四折　白士中衹候を領して出で、彼の楊衙内めの來るべきが勢劍金牌は無き筈なり、何として我が首級を取らんと此處には來るやらんと待つ處へ楊衙内は張千李稍を引て出で來り、士中を見るより、それ拿へよと云へば張千は拿へんとするに、何の罪あり何の符驗ありて我を拏らんとするやと士中は更に屈する色無し。罪は汝に覺えあるべし我は聖人の命を奉じて汝を捕ふるなれば爭ふなかれ勢劍金牌もありたれど其は盜まれたれば今は無し、されど猶こゝに文書ありと云へば、押返して念じ聽かせよと云はれ、さらば讀み聞かせんと懷中を撈りて片紙を取り出し、詞寄西江月と讀み出せば、こは是淫詞と奪ひ取られ、狼狽して復一片紙を撈り出して讀みかゝれば、詞寄夜行船と聞くより早く同じく淫詞にあらずやと士中に再び奪ひ去られ、我ながら呆れて茫然たる折しも張二嫂は衙門に來りて御訴へ申上げまする、權豪に倚つて酒色を貪る濫官員の楊衙内と申すが夫のある

給ふ御旅路にやと云へば、潭州に到りて白士中を殺さんとせらるゝなりと問はぬことまでを李稍の云ふ。相公這州を過ぎ給ふに一聲知らせ給はゞ迎接の人も夥しく船の上には五十坐の笙歌擺設もあるべきをといふ漁婦の言葉一々憍慢の胸にこたへていよ〳〵心傲りたる衙内は遂に李稍に向ひて大夫人とはなさゞるも二夫人として寵愛なし包髻團衫繡手巾心のまゝ受用せしめんほとに彼をば說得して吾が意に從ふやうせよと云へば李稍は之を傳ふるに、漁婦は自ら衙内に對して事の實否を確めし上、いつはり無しとの答を得て、貞烈に誇るといふにはあらねど曾て人には熱せざりしに我が心ははや亂れんとす人のためにせば徹すべし人を殺さば血を見るべし妾を何とし給ふや眼去眉來の御情に氷情玉潔なる能はざらしめ給ふぞ心苦し、珠冠見霞帔兒を戴きかけて三簷傘下に侍女に圍まれ網打ち船の今日に換へて香車に坐する身となして給はらんとや、あら嬉し、と思ふ色をば露はせば衙内はもとより張李まで悅び興ずる事限り無し。姿の美はしきのみにはあらで一句を出して對せしむれば口を銜て直に妙對をなし出すに文字の心得もありと知られて皆々の悅び斜ならず、頓て衙内は西江月の一詞を寄すれば二嫂は夜行船の一首を回す。これに愈々妙々を呼びつゞけにして三人共に大醉する時、相公は甚麽によりて白士中を殺し得給ふと二嫂はまた問へば、衙内は流石に要なきことを問ふを休めよと云へど心なき李稍は勢劍文書を示し張千は金牌を示して、此等のものあれば士中の如何に爭ふとても甲斐無きなりと誇り顏に云ふを、をかしとは聞きながら戲れて、此の

杯を侑むるかと思へば早くも自ら飲むて、咎めらるれば攝毒いたせしと云ひ紛らす、衙内も見非なく、さらばよし、我は慢々と飮むべければ此處近くの民船を趕ひ斥けよと二人に命じ、月に對して猶酒を酌む。(此邊例の間の狂言の如し)

此處へ簑衣蒻衣せる一婦人竹籃に金色の鯉魚を入れたるを提げて現はれ出て、船を纜ぎて岸に上り、楊衙内が酒を興し居る望江亭目ざして進み來り、馴々しく李稍に向ひて萬福を唱ふれば、李稍は誰とは知らざれど、其美しさに嬲り心もて、見し事あるやうなる面ざしと云ひ、張二嫂にはあらずやといふ。漁婦はそれ〱其の張二嫂と自ら明かして、李稍張千に打對ひ、あはれ妾がため相公に云ひ入れ給ひて此の鯉魚を召し給はるやう計らひ給はれ、妾みづから細膾を切りて御下物を作るべければと云へば二人は興に入りて衙内にかくと通ずる、其尾について早くも席に入り萬福を唱へて、妾が孝順の心ばかりに金色の鯉魚を將ち來り、相公に獻ぜんとて參りたり、膾を切りて參らせんと云ふ其風情の花あり香あるは漁夫には惜きばかりなれば、色好みの衙内恍惚として、嬉しき汝の心入かな、されど如何でか小娘子をして鱠を切りて美はしき其手を俗了せしむべき、李稍我がために薑辣を加へて煎よかし、我は娘子と飮まんと思ふと、うつゝ無き態をあらはすに、張千李稍は妙々々と頻りに叫びながら時を得たりと酒を吃す。二嫂は徐ろに口を開きて、相公此度は何處へ赴かせ

しめんほどに傷み悲み給ふなかれ、妾みづから楊奴を尋ねて其樣子により彼を計り、膝打りしかせ頂つかせし上、船横はり纜斷えて江心に漂ふの思ひあらしめんと、士中が耳に口寄せ何事をか低語なし去る。後に士中は氣遣ひながらも、吾が夫人の機謀見識に據れば一箇の楊衙内はさて置き十箇の楊衙内のあればとて夫人の手をば出て得ざらんといひて去る。

第三折　張千李稍を領して楊衙内出て來り、我みづから潭州に到り、白士中が首級を取らんと、かくは旅路に上りしが從者の多きも事の洩るゝ基と特に召連れず、張千李稍二人のものは我が腹心なればこれのみを帶び來りしと云ふ。張千は李稍と共に衙内に對つて追從阿諛の醜を盡して、一は相公の鬢邊に虱子の居りたりとて之を拂ひ去る眞似すれば、如何にも長き舟旅に髮も梳かねば然もありしか、我がため思ふいやつめと衙内は之を賞す。一はまた之に效ふて相公鬢上一箇の狗蚤ありたりとて同じく之を摘み去る眞似す。此の這斷めがと衙内は叱す。張李は腹び主人が鬢を拏りて今日は八月十五夜にて澄み渡りたる此の月の色、空に見過さんは本意ならず、我等酒肴を設け備へて月を賞せんと云へば衙内は怒りて、公事の身にある我をして酒を吃せしめんとは不埒なりと云ふ。左な仰せられそ我等に他意のあるにはあらず孝順の心ばかりなり我若し酒を吃しなば血を吃せんと張は云ひ、我また酒を吃するならば疔瘡を患へんと李は誓ふ。儞等まことに吃せずとならば我三杯を傾けんと吝き衙内の云ひ出すを待ち居たる二人心得たりと果卓を持ち來り酒壺を出して主人に一

恨めば士中は迷惑して、つや〳〵さる方の事にはあらずといへど、中〳〵に聞き入れず、必定前夫人よりの書なればこそ妾には左まで隱し給ふなるべけれ、舊きを捨つるは難くして新なるを迎ふるは易きもの、新なるは半路の姻緣にて舊きは綰角の夫妻なれば御心の中も推しまつるに隱させ給ふぞ御恨みなる、悔り玉ふな妾とて裙釵の身ながら人の眼色の讀み取れぬほどのものにもあらぬに欺き果せ給はんとは御情無き御心なり、よしあし垣の隔て心の募りて互に面白からずなり、水盡き果てゝ鵝の飛び去るやうなることに至らぬやう望むものを惡くな取り給ひそと猶怨ずるに、白士中今は包みかねて、云ふても御身を苦しまするばかりと思へば云はでありしが、よしなき其の疑を解かんため仔細を告ぐべければ必ずともに無益の煩惱ばし起し給ふな、まことは母よりの文なるが、もとはと云へば卿を我が娶りしを恨みてよりの事にて、花々太歲と人も忌み怖るゝ彼の楊衙內が聖天子を欺罔し奉りて我に罪あるやう奏し做し、勢劍金牌を申し受けて此の潭州に來り我が頭を取らんとするよし、母上の我を心づかひし給ひて豫め知らせ給はりしが、做すべき術も思ひ得ざれば獨り苦みて悶へ居しなり、ゆめ〳〵浮きたる事にはあらず、たゞさへ驕傲の權豪なればあしらひ難きをまして自ら勢劍金牌を挾みて來る上からは生くる瀨なか〳〵あり難し、と歎息しつゝ語り聞かす。さてはさる事にて深くも忍びて惱み坐せしか、御心ゆたかに持ち給へ、花々太歲と人は云ふとも何怖るべきことのあらん、彼めが心の傲りを挫き計の便宜を失はしめて滿船空しく月明を戴せて歸ら

譚夫人を娶り得たる白士中は夫人が啻に花顏柳腰の美あるのみならで聰明敏慧事々精通せざる無きに十分滿足して悅び居りはすれども戀の遺恨よりして楊衙內の我を傷害せんとすることもやと愁ひて衙門の要事は果てたれども前廳に閒坐なし居るところへ、士中が母親の書を齎らして院公の遠路來り訪へるに接し、何事やらんと封を開きて見れば、揚衙內聖天子を欺き奉りて勢劍金牌を拜領し、潭州に下りて儞の命を奪はんとする由なれば好く準備を做して害を免るべしとの消息なり。さては既に楊衙內めが計に中れり、如何にして可ならん、と驚きながら先づ院公を休息せしめて兀坐困悶やゝ久しく動きもやらで愁ふるを、あまりに退廳の今日は遲き事よ常ならば此の衙門の後堂に疾く歸り玉ふて妾と攀話さるべきにと怪みて出て來る譚夫人は、新官を接するにもあらず緊要の文書至急の公事に忙しとも見えざる我が夫の何をして居玉ふやらん竊に窺ひ見るべしと、見るに士中は一張紙を手にして深き思ひに沈めり。海は深きも底を見るべし人は死しても心を知ることはならずと世の諺に云へるも今更思ひ當れり、恐らくは前妻の書を得たるより幹樹に勝る梢無しとの喩の如く心の中に妾を娶りしを悔い給へるにはあらずや、さもあらばあれ爲んやうありと相公と喚びかけ入り來れば、士中は憂き事知らせじと書をば手にして、何として自ら前廳には來り給へるといふ。瞞き給ふな前夫人より文もや遣され給ひしか、如何で公事も果てしに今日に限りて後廳にも入らせ給はず思ひ深げに打案じ居給へる、相守るべくば相守り、別るゝが宜からば別るべきにと

は猶推反して、ひたすら出家と云はるれど意に中る丈夫もあらば嫁し玉ふとて惡しかるまじ、其美はしき若き身にて草木と共に埋もれむ出家呼はりのみし玉ふやと云ふに流石の譚記兒も、然云はるれば其も然り、我とて實深き人のあらば強ち世を背かん心は無けれどゝ答へ終らぬ中、姑々は咳嗽すれば白士中は忽ち現はれ出てゝ慇懃に挨拶す。記兒驚きて去らんとするを姑々は留めて放たばこそ、門を關して出で去らしめず、夫人那裏に去り玉ふぞ我は鄉が爲らに媒人となりて此人を儞の夫とならしめんと思へるものをと云ひ出し、果ては强ひんとさへすれば、記兒は思ひもかけざることて驚きながら、士中を見るに、憎くもあらぬ男振り、心も淸げに見え渡るのみならず、姑々が日頃の邪ならぬ行を視て知れるものから、隔墻の花を把つて强て連枝の看を做さんとする人の振舞は心に叶はねど、決して我を輕慢せで白頭必ず相守らんとの士中が誓ひに心解けて、譚記兒遂に白士中と淸安觀に親事を成す。

第二折　太歲と人も云ひ自己も誇る權豪勢官の楊衙內、譚記兒の顏色ある由を聞きて娶りて小夫人となさんと思ひ居りしに白士中が爲め帶びて潭州に去られしと聞き嫉妬に堪へで、天子に白士中貪花戀酒公事を理せずと奏して遂に其罪を糺すべしとの命を受け勢劍金牌を賜はるを得たれば、我自ら潭州に到りて白士中が首級を取り、戀の恨怨を晴らして、記兒をも併せ得んと獨語して、張千、汝、李稍に命じて潭州に到るの準備せしめよと云ひ、去る。

一たび白姑々を訪はんとて入り來り、此由を云へば、姑々は悦びて、儞の媳婦は近ごろ如何など問ふに、さればなり吾妻は病によりて旣に逝けりと本意無げに答ふ。こゝに於て姑々は其の不幸を慰めて、左のみ力を落すまじ、我が此觀に毎日のやうに來りて物語りする譚記見といふ未亡人あるが才色共に勝れたり、今日も頓て來るべき間、汝は壁後に隱れ居て意に滿ちたりと見るならば我が咳嗽を號として出で來るべし、我汝の爲めに良き緣を結ばしめんと云ひ、士中を壁後に隱れしむ。かくとは知らぬ譚記見は、不幸にして早く夫を失ひ三年の寡を守れる身の錦帳春闌けて繡衾香散ずる日夕の光景物悲しく、花にも長太息、竹にも涙、氣吁すれば花も片々と亂れて雨と墜ち、淚灑げば翠竹も染みて斑となるばかり、朝雲暮雨は人の上、鳳隻鸞單の吾が愁ひ、慰む便宜も更に無きまゝ、今日も白姑々を尋ね訪はんと觀に來りて姑々に會ひ、妾は最早世にある望みも無ければ御身に從ふて出家なさんと思ふなりと云へば、姑々は出家の身の羨ましからぬ數々を述べて諫むるに、賴みし人に後れしより語らふ友も無き我が身は、白姑の淸靜なる生涯をいと羨ましと思ふなり、浮世の味もやゝ嘗めて人情も早知りたれば塵緣の羈絆も何かあらん、蛾眉を掃ふて要もなき此の白粉を洗ひ落し粗茶淡飯に甘んずべし、心猿意馬を牢く維ぎて仇し榮華を眼に掛けざることは聊か覺えもあり、雨の村里雪の山は、看る時容易に畫く時艱しといへど、思ひ入りぬる山には如何て住めざることのあるべきや、藥も燒くべし丹も煉るべし、我をば出家せしめ玉へと姑々の言葉を少しも肯かず。姑々

○關漢卿

元の時代の劇曲家中蔚然として秀づるもの實に三四に過ぎず、而して關漢卿は其一なり。其作にかゝるもの六十本、煩を厭ふて一々擧げずと雖も之を知らんとせば曲論若くは曲話に就て其題名を伺ふを得ん。予が見る事を得たるもの僅に八種、玉鏡臺、謝天香、切鱠旦、竇娥寃、蝴蝶夢、謝玉釧、救風塵、金線池これなり。竇娥寃は悲壯、蝴蝶夢は悲酸、切鱠旦は滑稽、其他は大抵普通の喜劇に屬す。切鱠旦或は望江亭といふ。譚記兒といへる美人を主人公として聰明の女子痴漢を弄するの奇話を叙し、美人薄倖ならず痴漢自縄自縛するの異光景、讀者をして快笑絕倒せしむるものあり。たゞ我が筆の拙なるが上に一々本文によりて叙する能はずして其梗概を擧ぐるに止まるを以て原作の佳趣を傳ふる能はざるを憾みとするのみ。

○望江亭

第一折、女道士白姑々といふもの清安觀にありて、吾が姪の白士中官を取らんとて京に上れるが數年音信無し首尾好く及第して志を得たりしや一人の姪なれば心にかゝる事よと云ふ處へ、昨日金門に書を上りて今朝墨綬已に懸魚の身となりし白士中、潭州の令に除せられたれば、赴任の前に

酒店にて鄭孔目吾が家の動靜を知らぬ顏して問ひ、人の風說にては我が不在中蕭娥の姦夫を引入れて我が孩兒をば虐待すると聞きしが萬一然ることもやと質すに、張保は鄭孔目とは知らねば散々に蕭娥を罵りて、那の賤人は魯の義姑ならで其夫も刑法を掌る身ながら漢の蕭何には似もつかぬ痴漢、孩兒は家にて食を與へられねば街市を歩みて人の冷飯殘肴に活き、凛烈たる風雪の日にも頂を縮め肩を聳やかして寒きに縮みながら乞ひ行くあはれさ、其母閻羅は燒鵝とか云ふ由と云ふ。一句一言斷腸咬牙のことならぬは無きに鄭孔目は苦惱して、此處あたりにも其二孩兒の來ると云ふか若し來りなば我に遇はせよ物取らせんと云ふところへ恰も該兒は來れば張保は二人を紹介するに、見るより父子は抱き合ひて涙に咽ぶばかりなり。孔目今は我が名を名乘りて奸夫の姓名を糺し問ふに張保は恐れて姓高と云ひしぎり敢て悉く言はず。孔目是非なく忍びやかに家に歸りて、奸夫淫婦の在るを認むれば忍耐ならで門を踏開し、捉へんとするに奸夫高成は早くも逃ぐ。得たりと蕭娥の陳辯するを、皆まで聞かず刺殺して自ら衙門に訴へ出づ。第四折には、賊を拿るには贓を要し姦を拿るには雙を要するに、其明證を得ずして妻妾を殺せる罪輕きにあらずとて鄭孔目は杖八十遠惡島配流に定められれば、高成自ら望みて鄭を打ち之を解し去る。二孩兒は外所ながら父に伴ひて殘羹剩飯を叫化しながら酷寒亭に到る時楔子に見えたる宋彬小嘍囉を引卒して突出し、姦夫高成を捕縛し鄭嵩並びに孩兒等を擁して山に上り、全く畢る。

れば互に面白からで孔目終に高成を罵り打つを第一場とし、同じく祗候の趙用といふ者、孔目が家に回らで蕭娥が家に流連し鄭が妻子の悶苦するを見兼ね、鄭が妻に囑されて賽娘僧住二兒を引きて孔目を蕭家に訪ひ、詐つて汝の妻死せりといへば流石の鄭孔目も驚き悲み家に回らんとす。蕭娥は却つて自己が鄭家に入り得るを悦ぶを第二場とす。蕭娥喪服を着て詐り哭し鄭家に到るに鄭家の妻は病床には在れど未だ死せざれば心算違ひて謗る、病婦は二兒に十三の鑰匙を交付して終に死す。こゝへ衙門より人來りて、府尹相公の孔目に命ありて直ちに公文書を攢造して京師へ往けとの事なりと云ふ。悲みは堪へねど、私事のために公事を等閑にすべくもなしと趙用に諫められて孔目は二人の幼兒家の後事を蕭娥に托して去らんとすれば二兒は父に跟て行かんとする悲酸の中に冷然たる蕭娥は女々しと夫を叱れば孔目遂に家を出て去るを第三場とす。第二折には蕭娥二兒を打ち窘むるところへ、鄭孔目に從ひて京師へと出て行きし趙用一紙の文書を遺れたりとて引返し來て此態を見るより大に驚き、突入して蕭娥に其不仁を責むれば蕭娥は口賢くも妾は酷き事をなさずと云ふ。趙用爭ひ難くて自己が事を濟まし立去らんとするに二兒は趙用が袖に縋りて叔々我を伴ひ給はれ復打たるゝが辛ければと云ふ。趙用これに胸痛みて、嫂々必ず哥々に免じて孩兒を打つを休め給はれと繰返し云へば、蕭娥は怒りて、うるさの人やと趙用を逐ひ出して門を閉ぢ、待て待て孩兒等、われ酒を飲み飯を濟ませて心長く汝等をさいなまんと云ふ。第三折には京師よりの歸るさ鄭州城外の

の惡むべく恨むべき所作に反映せしめたるは酷寒亭に存して水滸傳に存せざるところなれど、此等の描法は我邦の劇家の常套に屬して吾等には毫も奇と感ぜらるゝこと無し。曲は瀟湘雨の如く此篇も亦文藻富贍と云ひ難し。恐らくは是顯楊之の筆の喬孟符等と自ら樣を異にし路を異にせるによるか、されども白は却つて瀟湘雨と共に趣味多し、疑ふらくは作者の自ら爲せるものならん。體裁は殆ど後の傳奇に類して、楔子には宋彬曲を唱へ第一折第二折には趙用唱へ、第三折には張保唱へ、第四折には復宋彬唱ふ。宋彬、趙用、張保皆是正末に屬すと雖も、一劇の中に於て是の如く唱者を替ふるは後世傳記には固より多々なるも元人雜劇には多からざるの例なりとす。酷寒亭もまた兩世姻緣を記せるの躰に倣ふて其梗概を記せんに、最初楔子には護橋龍宋彬といふ者人を殺して其罪死に該るを、孔目鄭嵩其の行を壯として救はんとするの心を生じ、糺問の時、誤つて人命を傷けたるにて殺意ありしにあらずと云へと陳述の方法を敎へ遣れば、李府尹の前にて罪を鞫さるゝに及びて宋彬敎へられし如く陳述す。因て六十杖を加へられて沙門島に配せらるゝに定まり、宋彬救命の恩を感じて鄭孔目を拜して義兄となし去る。こゝに於て敎坊の年期滿ちたる行首蕭娥といふもの官衫祓子をも納めて良人に嫁せんと來る。鄭孔目蕭娥を携へて府尹に此の事をいへば、府尹禮案中より名字を除きて自由の身とならしむ。孔目豫てより蕭娥とは狎れ親めるものから直に蕭娥の家に去る段を寫せり。第一折は衙門の祇候高成といふ貪花戀酒の漢蕭娥の家に來るに、鄭孔目こゝにお

頓て父の前に二人を拿り到れば天覺は二人とも免るさじといふところへ崔老出で、翠鸞に縋りて徊士の生命を乞ふに、たゞ歡娛を記して寃を記せざるにはあらねど女の心は飽までも軟らかにして父に乞ふて徊士を赦し玉はれと云ひ、徊士も今さら罪を悔れば、こゝに再び鸞膠の斷絃を續ぎて芽出度も夫婦團圓父子再會の喜びの莚は開かれぬ。

楊顯之は喬孟符の如く綺麗濃艶の筆を有せりとは見えず、曲甚だ無奇無異、一字の光彩一句の雋味紙上より立つて直に人を襲ふものあるなしといへども、全篇結搆の巧なる力を用ゐずして然も讀者を泣かしむるものなり。第三折の悲しき、第四折の滑稽にして而も悲しき、誰か之を妙ならずと云はん。躰裁の異は既に云へるが、第四折中、天覺翠鸞等の白の極めて長き、また試官の女の醉太平一曲を唱へて鳳冠を除き霞帔を脱して縣令の夫人たるを得ざるに至れるを云ふが如き（前折の照應なり）皆異例に屬するものといふべし。

○酷寒亭

酷寒亭の趣向甚だ水滸傳中の某處に肖て人をして水滸傳中のものにあらざるなきやを疑はしむるものあり、宋江張三郎、武松武太郎、楊雄石秀等の話を知るものは必ず此の酷寒亭を讀むに從つて之を想起する事あるべし、たゞ水滸傳中には甚だ乏しき幼兒と大人との間の情を捉へ來つて兇婆毒漢

も得せず嚥みも下せず。哎呀天よ我は今此處に在りて此苦み、父上は那裏に如何にして居玉ふやらんと歎息す。かくとは知らぬ舘の中の張天覺はうつら〳〵と睡るかとすれば翠鸞のありし俤を夢に見しが、誰とは知らねど物音させしに驚かされて老の身の夢は脆くも破れ果て、疎雨瀟々と物淋しき孤舘の秋の夜を寐られず、興兒め汝我が命を愼み守らで物騒がしき音をさせしよな不埒者、打つべき筈にあらずやと叱れば興兒はまた驛丞を叱して之を打つ。打たれて驛丞は門外の解子めに騒ぐなかれと云ひ置きしものを憎しやとて解子を打つ。打たれて解子はまた、これも汝のためと翠鸞を打つ。翠鸞はいよ〳〵悲み歎く、天覺は頓てまた睡り醒めて興兒を打てば興兒は驛丞、驛丞は解子、解子は翠鸞を打つ。かゝることを繰り返す間に山寺の曉鐘響き渡れば、夜を通じて靜まらざりし門外の者どもは何なるべき拏へ來れと天覺は命ず。興兒心得て解子と翠鸞とを拏へ來れば天覺何者とこれを見るに思ひもかけぬ吾が兒女の枷をば被り鎖をば帶びて罪人となり居たるなり。互ひに驚き互ひに悦び、先だつものは涙ながらに翠鸞始終のことを語るを聞くより天覺大に怒り、無禮非道の崔通めを誰かある疾く拿へ來れ、と云へば、翠鸞願くば情無き人に思ひ知らせたくも思へば妾をば秦川に遣はし玉ひてよと乞ひて祇從を從へつ秦川さして車を向く。

今は彼の女も棒瘡のため途に死せるならんが何として解子は未だ歸らざるぞと崔通獨語するところへ廉訪使の祇從を從へて翠鸞は入り來り、廉訪大人の命ぞとて崔通並びに其妻を捕へて去る。翠鸞

が爲めに我までが此雨風に會ふて濡るゝと頻りに呟きて翠鸞をせきたて／＼逐ふて行く。

第四折臨江驛の驛丞、廉訪使の此地を過ぐる由を聞きて館を打掃し待ち受くるところへ、姪の崔甸士も音信なく女兒の翠鸞も出し限りなるを氣遣ひて自ら秦川縣に到り樣子を見んと思へる崔文遠、旅路に大雨に遇ふて此家を借らんと入り來る。逐ひ立てんとは思ひたれど老人なれば驛丞は、廉訪大人の見え給ふ筈ゆゑ汝騷ぐまじ廚房簷下に宿すべしと命じて共に去る。張天覺は祇從興兒を引て出來り、驛丞に迎へられて館に入り、我今日は身も痛く疲れて連日鞍馬の勞も出てたる思ひあれば少時心寬く休まんと思ふほどに決して人をして騷がしむるなかれ、若し我が睡りを安からしめざるやうの事あらば儞を打つべし、心得たるかと興兒に命ずれば、興兒は心得て驛丞を呼び出し、大人の御息みなさるゝ間は決して騷がしき事無きやうすべし、若し御睡りを驚かすことあらば我儞を打たんと命じ、驛丞は心得たりと云ふところへ、ヱヽ風雨はいよ／＼酷くなりて來りしが此雨の儞を淋殺するならば沙門島まで長き路を行かでも我は濟むべきものをと無慈悲なることを云ひ／＼解子翠鸞を逐ひ立て來り、此地の公館に宿借らんと開門を叫べば、驛丞出でゝ儞は何人ぞ今宵は廉訪使大人の御歇みなれば騷ぐなかれ、たゞ門外の廂下に居よ騷がば儞を打つべきぞと云ふ。解子は是非無く門外に立つて自ら一枚の燒餅を出して打ち吃ふに、肚は眼の暈くばかりに饑え身は立ちながら眠るほどに疲れたる翠鸞之を少しく乞ひ得て食はんとすれば胸塞がり咽喉も悲鳴に叫破せしか吃ひ

謀を得たり顔して居給ふとも冥きところには神在して覽給ふものをと翠鸞は悲み瞋れど力及ばず、解子に押送されて去る。後に甸士は妻に對ひて必ずともに我に前妻ありしならずと云ひ解き、後堂に酒なりと飲むべしと飽まで妻に諂ふて同じく去る。

第三折　張天覺與兒祇從等を領して出て、一たび江州に去つてより早くも三年の月日を經たるが聖人老夫の剛直清正を愛し給ふて廉訪使となし玉ひ勢劍金牌を賜はりて先斬後奏の權を與へられぬ、こはこれ濫官汚吏を體察し不明の詞訟を審理せしめんとの深き御意より出でたるなれば老夫かく衰邁はなせりと雖も勞を憚るべきにあらず、但翠鸞を失ふてより旦暮愁ひに沈める身の眼も昏く鬢も白めるに、今この秋の時に會ひて鄕園千里鞍馬十年凄風冷雨の悲しき景物一つとして涙の種ならぬはなし、與兒よ雨さへ降つて來たり、急ぎて行かんと進み行くに、はや臨江の驛近くなりぬ、と與兒の云へば、さらば臨江驛に權に駐まるべしとて皆々去る。

枷鎖を帶びたる翠鸞解子と共に出でゝ、痛みある身ながら追ひ立てられて是非無く恠風暴雨の中を涙を呑んで引くに、雲は黑くして天を遮り風は烈しくして石を走らせ雨は箭幹の如くなれば、棒瘡の痛み饑餓の苦みもひとしほに、或は滑り或は倒るゝを呵責脅迫して容赦なき解子の無慈悲、涙は秋の夜の雨より多くぞ落つる翠鸞が道行く人の影も無く白茫々と野の出水の天に連る夕間暮脛さへ埋もる泥深き中を辿りつ無實の罪に苦しめらるゝ辛らは眞に地獄なり。されど解子はひたすらに汝

處に見ゆるが其なりと敎へられて心もやゝ勇み、門に到りて、誰ぞ通ぜよかし夫人の特に尋ね來りたり、と云ひ入るゝを、聞きて祇從は驚き呆れ、こは何と云ふ、わが相公には夫人あるものを賤しき汝の無禮なりと叱る。さては糟糠の婦を棄てゝ別に花ある人を納れしや、三年の月日の長き間、半星兒も肯て志を失はざりし此の妾を如何になれとや思せるならん、兎にも角にも我がために一聲かくと通じてよと云へば祇從も是非なくて奥に導き入る。何士が妻は聞くより疾妬の角芽だちて、先に妻無しと云はれしに如何で今となり夫人と名乘るものゝ來れるや腹だゝし、精驢禽獸、腹だゝしの人やと怒る。何士は妻の怒りを怖れて、他は我家に買ひ置きし奴婢なるが我が家の銀壺臺盞を偸みて走りし不埒者、行衛を尋ねても知れざりしに今日來りしは火に入る夏虫の愚に似たり、左右我が爲めに彼奴を拏へて憂き目を見せよと跡形もなき濡衣を着せて自己が累ひを免がれんとすれば、翠鸞は驚き恨みて、琴瑟和合を望みしに賤しき人を先づ迎へて却つて妾を竪に横にさいなみ玉はんとや、あら恐ろし、天地を指さし誓ひ給へる誓詞も未だ耳に消えぬにと云ふ。口きかせては惡かりなんと侍者に命じ、無理無躰に打ち撲たしむれば、紫痕斑々身に印して刀もて刺すが如き疼み、魂消ゆるばかり苦しむを、猶此の近くにあらせては夢安からずと思ふものから逃奴の罪に擬して沙門島へ流さんと解子を喚び出し、汝此女を沙門島に解し到れ、路上に死せば猶好しと無慈悲の命を下す。天は慈悲無きものならじ、頓て見よかし汝の伯父上見えなば何と云ひ譯あるべきぞ、人を詐り

聯し來れと云へば、旬士は相公吃一頓、淸晨飽到晚と聯ぬ。かゝる愚にもつかぬことにて趙錢の好秀才々々々々と感服する如き常套とは云へ惡謔の甚しきもの、幞頭を除き羅襴を脫して女婿に與ふるが如きもまた然り。雜劇の躰裁として例へば金錢記の曲は盡く飛卿の唱ふるところにかゝり兩世姻緣、楊州夢の曲は皆玉簫牧之の唱ふるところにかゝれる如く、都て曲は主人公のみの唱ふるものなるに瀟湘雨の此の段には醉太平の一曲を唱ふるものこれ主人公にあらず、恰も我邦能曲の間の狂言あるが如し、これ躰裁の異なる點なり。

旬士等皆去つて翠鸞出て、思ひ出づれば三年前崔老がために旬士が妻と定められし身の操固く今日まで昨日まで待ちつるが音信も無くて吾が夫は何となり玉ひしか知らざりしに、人の噂には及第して秦川の令となり給ひし由、女子の脚の弱くもあれ秦川に行き尋ね見よとの崔老が御言葉に旅裝なして、山河遙に來ぬるかな、あら恨めしの人の心よ、月の都に桂枝を折り金闕に宣賜を蒙り給へば心傲りして妾をば捨て給ひしか口惜しゝ、羅衣を透すの金風は颼々として肌寒く、空に舞ひ旋る敗葉はしづ心無く亂るゝ淋しさ、林梢は遠く掩映して山勢は長く參差たる寒村荒驛過ぐる身の、口は乾きて舌苦く、淚に霞む眼は暗し、笠に草鞋に、褄端折りに、馴れぬ旅路の辛さにつけ想へば實無き人の恨めし、官となり給はゞ伏侍するものあらんに忙しとて紙半張の文を寫す暇も無しとか、情無きにも程あるものをと歎きながら行きて秦川縣に着けば、崔旬士が私宅は那裏と人に問ふに、彼

らぬ舟を見送るやうなる恨みあらしめ玉ふなと染み〴〵と云へば甸士もまた我若し儞に負きなば天も蓋はざれ地も戴せざれ日月も照臨し玉はざれと堅く誓ひて、別ちあへざる袂を分ち、急ぎて京へ上り行く。

第二　折試官趙錢侍者を帶びて出で、目下一擧子に崔通字は甸士といふものありて卷子を攛過せるが我彼を以て第一とせんとすれど未だ面試せねば確とは定め難し、左右我がために崔秀才を呼べといふ。崔甸士喚ばれて出で來れば、試官これに對つて字を問ひ詩を聯ねしむるに、一として能くせざること無ければ大に悦びて、吾が女婿とせんとするの意あり。侍者をして崔生既に婚せるや否やを問はしむ。未だ婚せざらば如何に既に婚せしならば如何にと崔生は押返して問ふに汝若し婚なくば相公小姐の婿に汝をなさんとし玉ふなりと侍者の答ふるに崔生打案じて我が伯父の家に約したる女はあれど他は伯父の親養せるにもあらねば恩情左まで深きにもあらず、能く神祇を瞞くべきも機會を失すべからずと云ふものを、如何で試官の意を迎へざらんと思ひ決め、小生未だ妻を娶らずと云へば、試官大に悦びて甸士を女婿となし秦川の知縣たらしむるに定め、醉太平の一曲を唱へて樸頭羅襴を脫し、自己は赤條々となりて之を甸士に與へ抃舞して去る。

此一段惡謔尤も甚しく躰裁また異樣に屬す。試官甸士を試むるに、東頭筆を下して西頭に落つ、是甚麼の字と云へば、甸士是一の字なりと云ひ、一箇大青碗、盛的飯又滿といふ二句を出して汝

翠鸞を呼び出す。若し此の漁翁の救ひを得ざりしならば一江の春水を趁ふて東に向て流れ去るべかりしを今や一寸の心に千古の恨みを懐き兩條の眉に十分の憂ひを鎖して父上の御身や如何にと案ずるもの丶我を路人の如くは見て親女の如くもてなし給はる老人の御情有難しと思へる翠鸞は身を起して、父上何の御用ぞと快く席に出づ。こは我が姪の甸士といふもの、功名を取らんとて京に上る暇乞ひに今日來りたり、甸士よこれは我が近頃得たる義女にて翠鸞といふものぞと互に紹介はすれば二人は初見の禮正しく挨拶し果て丶座に列す。甸士が氣質は知らねど身兒は俊俏、龐兒は秀で丶言葉つきも優しければ定めし性兒も溫潤情兒も厚かるべしと憎からず思ひて見れば白凉衫を着けたるばかりの身の裝ひも風流にて厭はしとすべきところも無し。甸士はこれに猶增して鄙里に見難き好女子と口には云はねど思へる心は文遠に見て取らる丶程なり。文遠これに心安堵し、二人に自己が思ふ由を云ひ出だせば甸士は忽に承諾なせしも翠鸞は流石に生の父上の生死も知れねば心濟まずと先づ淚のみ溢れ出で丶氣も我からは進み得ざるを、何とて泣くぞ喜びこそすべきものなれ諺にさへ女大なれば留むべからずといふものを何時迄一人身にてあり得べきやと一人呑み込みて文遠は遂に二人に禮を行はしむ。翠鸞辭み得ずて式を濟ませば、これも定まる緣の夫と思ふものから、京へ上り玉ひて久しくなるとも妾をな忘れ玉ひそよ、文もしば〳〵おこし玉へよ、心の口をいつはりて今の御言葉を反故になどし玉はぬやう祈る身の誠を必ず酌み玉ひて、妾をひとり柴の門に倚りて歸

に牲を供へ紙錢を燒きて渡り給はずは神靈の怒りにや觸れんと云ふるを、老夫は是國家の正臣他は是國家の正神なれば何ぞ祭禮を要せんやとて強て渡るに果して風波大に起り、張天覺等皆水に溺る。排岸司は漸く翠鸞を救ひ得て岸上に投げ置き、猶彼の大人を救はでは我が事濟まずと再び水に入り、其後消息無し。我は幸にして生命を拾ひしものゝ、父上や如何になり給ひけんと深窓に育ちし身のただに心を煎るばかりにて何となすべき術も知らず泣き悲み居る翠鸞の傍に一老人出來りて仔細を聞き、さては貴き人の姬にて御座すか我は崔文遠とて這の淮河の邊に漁を世渡りのたつきとして暮すものなり、日も暮れんとするに濕りたる衣着て何時まで此處に居玉ふこともならじ、兒も無き老の身の我を厭ひ玉はずば義女として養ひまゐらすべし、御父上の御在所知るゝやうにも屹度心がけまゐらすべしと世に優しく云へば翠鸞は是非無く之に從ふて去る。

第一折　辛も生命を繼ぎ得し張天覺は女を失ひて搜せば露の手がゝり無きに江州へ到るべき日は逼りて左右兩難何ともし難く、小女翠鸞を收留せるものあらば重賞を與ふべしと沿途に告示して心ならずも江州さして下り去る。漁父崔文遠は老て兒無きを預て歎き居けるに翠鸞を得て養ふに、翠鸞も慕ひなづけば、愈々悅び樂み居るところへ姪の崔甸士といふもの上京應試の暇乞ひに來りければ、まづ幾日は逗留せよと云ひて甸士の風姿を看るに堂々として行末も賴みありげに見え渡るまゝ、必定此漢立身もすべく思はる、あはれ翠鸞の婿にして我世を讓らば後安からんと心の底に思ひ浮めて

去る、延賞もまた韋皐が言の信とせられざるに、先だつて奏過せんと云ひ皆々去る。これ第三折なり。第四折は云ふまでも無し聖人御前彼の圖の存せるが證據となりて扨は此の玉簫は彼の玉簫の生れ代りなるらんと誰しも悟り、聖上の御言葉によりて芽出度團圓に至るなり。兩世姻緣概畧斯の如し。さばかり喬孟符をのみ詳しく語らんも用無きことなりとおもへば兩世姻緣は畧して楊顯之にうつり談ずべし。

○顯楊之

顯之が作、小劉屠、劉泉進瓜、黑旋風喬斷案、師婆旦、酷寒亭、蒲魯忽劉屠大拜門、湘瀟夜雨等の十本ありと傳ふ。臨江驛瀟湘秋夜雨の雜劇は元劇に珍らしくも其の第三折第四折に言ひ難きの妙あつて有情の人をして涙無き能はざらしむるものあり。直ちに之を吾邦今日の劇に移すも名優をして演ぜしめば必ず觀客の好評を博さんこと疑ひあるべからず。酷寒亭は壯士恩に報ふの快談を綴りたるもの、甚だ妙ならずと雖も而も屬目の値無きにあらず。先づ瀟湘雨を語るべし。

○瀟湘雨

楔子　張天覺女兒翠鸞と共に朝命を以て江州に下る途次淮河渡に至るに、排岸司は、這の淮河の神

傍に媚びつきて居るほどなり、何として好かるべきや、兎に角に我王媽々のところへ一走り行かては濟まじとて去る。入り交りて韋皐、玉簫、小侍女と共に出て、赤心相待ち白首相期する中の睦まじく酒を酌みて語り合ふところへ許婆婦り來りて韋皐を志氣無しと云ひ、對門の王大姐が家の張姐夫、間壁の李二姐が家の趙姐夫も皆科場に趣きて一官半職を得んとするに汝は空しく此處に纒はりつきてゐるや、知りしものゝ汝を志氣沒しといふは可けれども知らぬ者は吾が家の汝が前程を誤れるやうにも云ふぞおぞましき、と都へ上れがしに云へば、韋皐は終に發憤して、我もまた男子漢、立身揚名の時無くてや、いざ我都へ走り上りて黃榜の招に應ずべし、玉簫大姐よ我官を得ば儞は夫人縣君となるべき身ぞと悲を抑へて出發す。これ第一折なり。玉簫病を得て漸く重く、自ら一箇の影身圖を畵きて韋皐に寄せんと欲し、描き成して後鏡を覽て長吁し、玉小二に圖を托して遂に死する是二折なり。昔時は一書生、十八年後の今日は鎭西大元帥となつて威權赫々たる韋皐の軍門に玉簫の母來りて吾女の遺下せる圖を贈る。こゝに荊襄節度使張延賞といふもの、韋皐を招待して宴を張り、女の玉簫をして酒を侑めしむるに、韋皐は酒を侑むる女の名を玉簫とは知らねども往時の吾が玉簫に異らねば低聲にて玉簫といふに、有と答へられて愈々奇を感じ、頓に談話を試るを延賞大に怒りて無禮の惡客となし劍を拔て之を逐ふ。韋皐も怒りて兵をもて延賞が家を圍みけるが玉簫の言葉に從ひて、然らば聖上に此事を奏して此奇緣を完ふせんと韋皐は

も似たる情無の彼の老府尹めの、我が今日は春風得意長安の道を行くを見て婿に招かんとは面白からず、と知章の取りなしも更に肯かず白眼に看過し去らんとす。其處へ李太白は聖天子の命を奉じて、韓飛卿王府尹が女婿たるべしとの御意なりと傳ふれば飛卿も遂に我を折る心の底には無量の歡喜を含みつゝ、芽出度合巹の禮を行ひ夫婦とも〳〵闕を望んで萬歳を呼び歡喜拜舞して聖恩を謝す金錢記これにて終る。

第一折の中柳眉兒を飛卿の初めて見るの一段、何等の佳趣、何等の妙筆、作者の才また羨むべきものありといふべし。第三折飛卿柳眉兒を夢みて醒むるところ、我見他恰行過這牡丹亭又轉過芍藥圃薔薇後の數句は實に清遠道人が還魂記の驚夢の折の柳秀才杜麗娘を擁し去る段に轉過這芍藥欄前緊靠着湖山石邊といへる句の藍本たりと古人の云へるものなり。全篇を通じて波瀾曲折の少なからざるが中に飛卿が性の能く表出されたるは讀者も既に認めらるゝところなるべし。

附　兩世姻緣

上廳の行首玉簫女の母許婆出でゝ、我が娘の玉簫は吹彈歌舞琴棋書畫能くせざることなく風流聰明にはあれど口惜きは成都の人の韋皐といへる男と狎れて片時も互ひに傍を去らず、今日も今日とて對門の王媽々が誕生を祝ふため手帕を送りて來よと命けしに、それさへ厭ひて彼の秀才の

亂の所行を能くも爲せしとぞ、後園の中に撞入せし所以も今こそ知れ果てたれ、無恥不德なる不埒者、家奴等此奴を高く吊せと怒つて命ずれば韓飛卿は再び高く吊されぬ。かゝるところへ賀知章來りて、天子今日飛卿の卷子を御批ありて、此人文章李太白の下にあらずと叡感あり。即ち飛卿に入朝加官の宣旨下りたれば我こゝに飛んで來りしと云へば府尹は顏膨らしながらも、聖天子の御命とあれば是非もなし家奴等彼奴めが縛を解けと云ふ。知章は飛卿に命を傳へて速に入朝すべしと云ひ、我儕のために秦晉の緣を全ふせんと云ふに飛卿悦んで去る。知章府尹續て入る。

第四折　李太白出て、吾が故友韓飛卿九龍池上に於て酒より是非を惹き出せる次第を一々小官聖天子に奏過せしに、天子笑ひを含み玉ひて飛卿に官を加へられ且つ賀知章と我とに飛卿がため親事をなせとの御意なり、いて賀知章を尋ねんとて去る。王府尹柳眉兒と侍女とを從へて出で、彼の韓飛卿狀元及第を得たりと聞く、知章學士を媒として狀元を招き婿とせんと今日かく彩樓を結起して皷樂を準備し、狀元の來るを待てるなりと云ふ。飛卿は知章と共に玉驄花帽の今日の身は昨日に異りて快げに來かゝる時しも皷樂は起り繡毬は飛んで身邊に落ちぬ。知章も傍よりかにかく云ひ自もそれとは心に悟れど、府尹が再び我を吊せし恨みに傲骨いよ〳〵嶙峋たる飛卿は、あら耳聒しの音樂や、こは繡毬にはあらずして風雹の落ちて來しなるべし、多情の嬌女に語を寄せて別に一個の前程を尋ねしむるが却つて好からん、碧桃花下鳳鸞の交りを拆き白玉樓頭翡翠の巢を燒くに

ことを勸むれど此方は思ひある身の酒にも浮かで、掃愁帚も鬱悶の情懷を掃ひ得ず釣詩鈎の名はあれども風流の症候を釣り了せず、勉强して口には到らしむれど思鄕害酒の爲とも無き胸の煩ひを散ずる由なく、金獸玉鈎日用の物不足なく杯盤餚饌不美の物は無けれど春衫羅袖寬くなりて瘦せ瘦れ行く身の味氣なさ、經天緯地の才はありても拿雲握霧の手はありても、月は西廂に暗く雲は楚岫に迷ふ愁ひ、あゝ若し小姐に一面の幸を得ば、よし狀元の郎とならでも眉は聊か皺めじものをと心こゝに在らざれば話相投ぜす。府尹は訝かしと思ひながら、先生頃日何の功課を作し玉へるや、と問へば飛卿は周易を習ひ居れりと云ふ。先生周易を看玉ふと云はるれば必定獨得發明あるべし老夫も隨喜觀看せんと書を取つて看んとすれば金錢はらりと落つ。飛卿は慌て府尹は怪みて坐もしらけしが眼ばやき府尹の見れば聖天子我に賜ひし開元通寶の金錢なり、此は心得ずと詰問するに、飛卿も流石打明けてはそれと云はれねば答へ暗きを、左もこそあらめと府尹は猜して急に柳眉兒を招き出し、汝に與へ置きし金錢はと問へば、柳眉兒も驚きながら九龍池上に遺したりと云ふ。默れ憎きものめ、吾が家三世犯法の男無く五世再婚の女も無かりしに汝家門を辱しめぬるよな、男子生れては之が室あらんを願ひ女子生れては之が家あらんことを願ふ父母の心は人皆之有るに倆父母の命媒妁の言も待たで鑽踰の振舞なせしとは憎みても猶餘りあり、退け賤人と罵り逐ひて、好秀才よ好周易を見つるものかな、無學のものにてもあることか書冊を撿しては聖人と面を對する身を以て胡

すれば、小姐はこゝに現はれ出づ。鈎襪柳腰、東風に背き立つて佯つて遇ざる爲しつ、語らんと欲して羞を含み半泥金の袖を掩着して笑ひを洩らせる風情、まことに人を惱殺すれば、あれよと走り寄らんとする間に姿は消えて夢は醒めぬ。あはれ夢なりしか恨めしや、たま〳〵逢ひて語らねど意は互に投じ合へるを、這の牡丹亭も過ぎて又芍藥圃薔薇後を轉過し去りて見えずなりしよ、風月の心何の日か遂げて雲雨の意幾時か休せん、小姐は何とや暮らすらん、銀箏上の寶雁秋に横はり粧鏡裏の青鸞膓も斷つ思ひあるべし、斗帳は篆烟を掩ふて濃やかに深被は江雲を擁して皺む房中の光景何とあるべき、雨は梨花を打つ黄昏の後、綠窓間吟詩をや題する、南樓獨坐月をや待つと戀に亂るゝ心あやなく、小姐より贈られたる彼の金錢を取り出して神明に祈り占を見るに、單々〳〵、拆々〳〵と出てゝ得たるは六十四卦の中に最も凶なる天地否也。否は閉塞の意とあれば其事通ぜず諧はぬ態なり、されども内に發生の意のあれば先凶後吉、やゝ頼みあるところあり、錢よ我が這の眼中の人は何處ぞと問ゆるところへ、我王府尹韓飛卿を家に請じてより一月餘り事忙しくして議論を上下する間も無かりしが今日は聖天子より十瓶の御酒を賜はりたれば飛卿が書房に携へ到りて樽酒論文の清興を得ばやと、家僕に酒餚を携へしめて王府尹出で來れば、老相公の見え玉ふなりと從者は飛卿に報ずるにぞ、なに老相公の來玉ひしとや此方へ入らせ申せと云ひつゝ忙しく金錢を取つて書冊の中へ藏し、然らぬ顔して請じ入る。府尹は恩賜の御酒なる由を告げて頻りに飛卿に快飮せん

一應飛卿に問ひ玉はれと強て云へば、甲斐なからんとは猜しながらも、知章此事を飛卿に通ずるに、平生の傲慢とは違ひて快く諾ふにぞ、こは心得ず、除授も遠かるまじき身を以て如何て輕々しく人の門舘となるを甘んずるやと驚き呆れて詰り問ふ。答ふるも煩はしと云はぬばかりの顏して、曾て卜者の我を見て我が命裏には官となる分無くしてたゞ門舘先生となる分ありと云ひたるものをと云ふ飛卿が心には、嬉しや知章疾く我をして桃源洞中に學科錢を收拾し宋玉の敎へ子と巫娥をならしめよと一方ならず悦べり。知章は心ならずも飛卿が承諾したるを阻むべくも無ければ此由を府尹に傳へて悦ばせ、飛卿を誘つて一先づ去る。

第三折　王府尹の兒王正、馬推官の兒馬求といへる二頑童出でゝ一月ほど前より王家の門舘先生となりし韓飛卿といふ人に就き修學せるが、不思議なる先生もあるものにて一個月經れども曾て一句も敎へ呉れず、たゞ長吁短氣して詩も作り玉はねば字も寫し玉はず、怪しくも或時は淚など流して口の內に小姐小姐と呟き玉ふは何とも合點の行かざることなり、と語り合ひて散々に飛卿を罵り嘲り、鄙俗の詩など作りて之を誹り去る。後より飛卿出でゝ、此家に來りしより既に一月餘りになりぬ、茶飯の管待薄からねど未だ心願を遂げて小姐を見ることを得ず、書を讀み字を寫すもいと懶し、心緒悠々として恨長く、遣興詩を成さず淸愁只酒に對するばかりなり、病患は將に成らんとして飮食は進むこと少し、連枝比翼はさて置きて甚の時か天緣の輻輳を得んと獨語し、困倦の餘り坐睡

卿は縛されて悲しくも遂に吊されぬ。かくとは知らぬど賀知章は飛卿が上を危みて踪を追ふ道すがら、路人の言により酒を帶びたる秀才の王家が後園の門に走り入りしと聞き、若くは飛卿にあらずやと入り來り見れば果して其人は高く吊されたり。見よ我が云はざりしことかと驚き呆れて府尹に謁し、天子も御噂わりし韓飛卿をば放し玉へと云へば、那處に韓飛卿は何とされしと云ふ。彼處に吊し置かれたるこそ即ち韓飛卿なれと指して云へば府尹も驚きて、こは我高才雄筆の士に罪を得たりと急に家僕をして縛を解かしめ、改めて初對面の禮嚴に、久しく大名を聞きしも尊顏を見るを得ざりしに老夫萬幸今日拜芝を得たり、先には先生を認め得で衝瀆の罪を得る頗る多し願はくば赦し玉へと云ふ。飛卿も全く我が盃酒多喫の愚なりと挨拶して相互ひに意解け合へば、王府尹つくづく飛卿を見るに、人物軒昂にして言語明晰、二人となかるべき俊士なるにぞ坐に敬慕の念を生じて、知章に對ひ、此人卷子を出したれども未だ除授をば蒙らぬ由、老夫彼を請ふて家に在らしめ早晚老夫と經典を討論せんとす、敢て門館と做さんとにはあらねど客を我が家に留めんと思ふばかりなり、されど飛卿の諾ひくるゝべきや否やを知らず、あはれ學士老夫がために飛卿が心を問ひ玉はれと云ふ。知章は之を聞きて、いやとよ其義ならば問ふまでもなし、腹には司馬の才を隱して心には禰衡の傲を抱ける此人頓て除任授官の御沙汰もあるべきに如何で屈して人の爲めに門館先生となるべき、復び然ることを云ひ玉ふなと豫て飛卿が氣象を知るものから云ひ退くれど、府尹は兎に角に

眺め、問へども桃李は言はで我が烘々たる醉眼の空しく芳草に迷ふばかり、あれ〳〵那邊に見えたる門の裏へと小姐は入りし態なり、いで追つきて物云はんと花園の裏に突入すれば王家の僕は驚きて、汝は甚麼人、如何で這の裏へは走り入るぞと咎む。心急きたる飛卿は焦ちて、此處が何處なれば汝は我を然は阻むぞよ、我は是醉ふて深宅大院に撞入せしか夢みて瑤臺閬苑に迷入せしか、則ち我は尋ねて天台を見ざる漢の劉阮よしや侯門深きことと海に似たりとも色膽の大なることは天の如し、此裏より大學への道の程はと埒無き事を云ひて欺かんとする此時恰も王府尹は官莚より退きて回り來り、飛卿を見るより甚麼人と駿騎を下り玉鞭を執りて問ふ。我は是の詩壇酒社文章の士、狗黨狐朋の惡少年にはあらずと飛卿は答ふれど、尋常百姓の家にすら門禁あるものを如何で我が後園の裏には紛れ入りし、曲者とこそ覺えたれ、家奴等ぬかるまじ取圍め、汝が本貫氏名より身の上包まず云へ聞かんと府尹は詰り責む。實に官人は權ありて秀才は言ひ難しとかや、汝が玉簪珠履の客我を圍めば我は如何でか逃げ得べき、父も無ければ母も無く兄弟親劵無き身の上、生涯はこれ斷簡殘篇、河南に生れて帝都に寄居し曾て貢院に向つて卷子をも攛了せるもの、頓ては金榜に名も顯はるべし、如何でか敢て金谷の園を踏み荒らさんの意あるべき、實に錯つて玉洞天に迷ひ入りしのみと云ひ譯暗き夜にかゝりて人家に入りし身の過ち、姦に非ずば盜なるべし必定賊に極まつたりと府尹は肯て饒すことなく、家僕等他を吊し置け、他が帶びたる酒氣醒めし後慢々として糺すべしと命ずれば、飛

苦の事盡くわり回頭一望の中にと詩の句をば吟じたりと云ふ。わら笑止や口頭の言の葉の深くも信ずべからざるをと打消せば、いやとよ信物をも與へて去りぬ、斷送し了りて客愁ひ多く、買はんと欲するも春に價無き此の信物、羅帕藤箱玉納ならず、開元通寶の金錢なりといふ。さては位官貴き人の小姐なるべし、心せざらば却つて身の殃とならんと警め、日も暮れたれば回るべしと諭し、宰相人家の女子戯るべきにあらぬものをと過むれど、姻緣まことに天賜なり、落日平林晩鴉噪ぐも何かあるべき、王侯世家なればとて直ちに趕ふて香閨繡闥に到り、宮鶯を儔ふて上陽の花を銜み出でんと云ひて遂に走り去れば、心騷ぎのせらるゝ事かな、飛卿滿腹の文章ありながら功名の心乏しくして疎狂不羈なる是の如し、此の一去恐らくは過失ありぬべし、左右那裏とも云はず、あれ追ひ縋れ、過失さすな、と去る。

第二折　王府尹が家僕府尹が家の後花園中にありて主人の歸りを待つところへ、韓飛卿慌々と走り出て、互に情はありながら戀を知らざる侍女の那の小姐をば促して去りしより趕ひ及ばんと走りしに想ひも掛けず賀知章に引き止められて時を失しぬ、小姐は那裏に往きしぞや此の沿路をばいざや尋ねん、五十の金錢姻劵を買ふ、不思議の天緣全からば武陵の溪より仙桃の花片も流れ出てゝそれぞと知らせよ、心もと無や姫と我とは相離ること遠からざりしに這の粉墻を轉過して玉姿は早く見えずなりぬ、弱水三千蓬萊を隔つる思ひ恨めしく、畵橋の水は情無く流れて楊柳の烟りは春愁を鎖す

伺ひ居て風流の話柄とすると怕れながら飛卿は跡に到りて手帕を拾ひ披きて見れば黄金錢なり。さては尋常百姓家のものにあらずと思ひもあへず再び見れば、彼人は既侍女に促され細車に乘りて殘り惜しげに顧眄なしつゝ聞けよがしに、心間萬般哀苦の事、盡く在り回頭一望の中にと詩の句を口ずさみて終に去りぬ。是は如何にせん、彼の人に去られて此處に在らるべきや、我に貫き金錢を與へて表記信物となしつる上に首を回らして心間萬般哀苦の事盡く在り回頭一望の中と吟じて去りし他の情に負きはなさじ我もまた生死を顧みず那處といふことをも問はて追ひ縋らんとて去る。

從者を引いて賀知章出來り、左右見よかし前頭に走るは韓飛卿ならずや、と云へば、如何にも飛卿に疑ひ無く候、韓秀才待ち給へかし、と從者は叫ぶ。我を叫びて何とかなすと止まれば知章は、されば也飛卿、酒宴半に逃れ出てゝ九龍池上に來れるとは何たる振舞にて候ぞ、殊に九龍池上はこれ戲れなんどすべく無き處なるから三分の酒を帶びたる汝の醉に乘じて過失もせば如何なる事を惹き出さんかと憂ひて趁ひ來りたり。疾く我と與に家に回りて酒を酌まんず卒來れと云ふ。酒はさて置き玉液も瓊漿も今は得飮まじ、大切の事のあるなればと云ひつゝ飛卿は走り出す。引止めて、那裏に走りて去ることぞ如何の大切の事のあればぞと問ふ。さらば語るべし、九龍池上にて天女の如き美人に遇へるが宿緣あればにや我と他と眉去り眼來りて情早く熟し、別に臨みて彼の天女は心間萬般哀

々と碧きを抽ける長閑さに、初聲洩らし行く子規春の歸るを送らんとやすると翫賞の興央なるところへ、侍兒を從へて柳眉兒は、雲鬟茶蘼の架に掩映し湘裙凌波の襪を微顯し、笑を帶びて春纎を露はし香羅帕を撚りながら出來る。人も妬むべき俊俏の龎兒、誰をして畫かしめし淡き眉兒、名畫の美人も及ぶべからず、飛卿恍惚として魂も躰に附かず瞻視るに、柳眉兒もまた飛卿が人物軒昂なるを見て眼梢見斜に抹すれば此方は愈々心も心ならず、共枕同衾の事はさて置き近よりて幾句兒の話を說くを得ば一時半霎便ち死するもまた甘心し罷まんと思ひ亂れて、あはれ鶯燕蜂蝶花間の四友も人のために美を做すならば、告げよかし我を姓は韓名は雄字は飛卿といへる者と告げよかし彼の人に、紫燕兒は畫簷外護に嘈雜し、黃鶯兒は柳梢上日に呱哳す、蜜蜂兒は暇無かるべし、蝴蝶兒汝を煩はさんか、鶯兒は怕る汝の友を尋ぬるところ伴侶に迷ひ了るを、燕兒は怕る汝の泥を啣むところ生涯を老い了るを、蝴蝶兒は我怕る汝の春寒を怯れて花内に宿らんを、蜜蜂兒は我又怕る日暮樹邊の衙にとゞまらんをと甲斐無く惱み悶ゆる間に、日は傾きぬ遲なはりなば老相公の好くは思ひ玉ふまじきにと侍兒は美人を促し立てぬ。飛卿が思は四眼相見る中に彼方の胸に映りて柳眉兒も亦情無からず、何をか贈りて信物となさんとすれども身邊には又一物もあらざれば平生身を離さず佩びし彼の金錢の五十文を表記となさんと私に案じ、何とて彼處に立てる人をのみ見玉ふやと侍女の怪み訝るを云ひ紛らして金錢を拾へとは眼に示しつゝ人知れず其處に遺したり。人もや

へば九龍池にや志し玉ひつらんといふ、常の人ならんには打捨てゝもあるべけれ飛卿は酒色に貪戀して奈何ともし難き性のものなり、若も九龍池上に到りて貴紳高位の人の妻妾美女などを見たらんには如何なる事を惹き出さんも知るべからず、趕ひ尋ねて疾と引き歸らでは叶ふまじ、馬牽けよ左右、と命じて去る。

這の書劍の生涯、幾年か窗下に班馬を學びぬ、吾豈匏瓜ならんや頓ては一擧科甲を得て名を天下に揚げ瓊林の宴に御酒を飲み宮花を挿む時あるべし、世は事をかしや珷玞の石を以て價を待ち、斗筲の器にて人に誇る秀才もまた少からず、想へば昔日楚の屈原は假惶々として醉ふて歩兵厨に倒れ、晉の謝安は黒嘍々として睡つて葫蘆架にあり、是の如きの秀才も軒車駟馬大纛高牙を消うるに福無かりしぞあはれなる、我滿服の文章はあれども未だ功名の遂げんや否やは知るべからず、同志の友の李太白賀知章は天下の大儒たるが如く皆翰林の學士たり、我は猶是一个の書生なれども賀知章と樽酒文を論じて日を送りぬ、今日も今日とて彼と共に酒酌み交して居たりしが聽けば九龍池に都の士女の一捻紅を賞する由に席を逃れて出來れり、既此處はこれ九龍池、佳人才子の夥しさよ、紅點翠綴眼もあやなり、香車に楚娃を載せたるは各剌々として雕輪落花に碾り、王孫駿馬に乘ぜるは撲騰々として金鞭落花に裊み、遊人指那裏の酒家には虛飄々として青旗落花に颺れり、嫩綠の草には蛙鳴き連れて千絲亂るゝ淡黄の柳に鴉の宿れるも趣きありや春の色、水溶々と湲に流れて杜若萱

○金錢記

第一折　髮を束ね朝に隨ふ三十年、官は京兆の尹にして威權も乏しからず、心は秋水の如く清く廉直忠良なる王公弼といふもの、早く妻を失ひて柳眉兒といへる年十八なると唯二人幸福に日を送れるが、曾て天子より賜はりたる開元通寶の金錢五十文を愛女の事なれば柳眉兒に與へて隨身の辟邪寶となさしめ置きぬ。今日は三月二日とて明日は天子の御仁惠をもて士庶一般に九龍池畔に楊家の一捻紅(牡丹の名)拜觀を許さるゝ恩命ありたる其日なれば、聖意を畏みて我兒にも拜觀せしめばやと、繡房中に女工を做し居る兒を呼べば柳眉兒侍女と共に出來る。餘事にもあらず明日は有難き聖意にて一捻紅拜觀を命ぜられたれば汝も侍女を從へて參るべし、途中は老成の僕二人をして送らしむべければ憂ふるに及ばじ、九龍池の周圍に紅繩の撁き繞らされたるが界にて、其裏は文武官員妻妾兒女の見るべきところ其外は軍民百姓妻妾兒女の見るべきところと定められたり、汝も細事に乘りて紅繩内を有難く遊玩いたし來れ、と命ずれば、柳眉兒も心得て候とて皆同じく去る。

賀知章從人を引いて出來り、我幸に官は禮部侍郎に至り集賢院學士をも兼ぬれど、李太白と共に是も幼きよりの友なる韓飛卿といふもの試に應じて卷子攛過しつるも未だ及第仕官の運に至らねば聊か懷を暢べしめんが爲め私宅に於て蔬酌を備へけるに酒半酣に至りて何處にか往きぬ、家人に問

麒麟影に寫入せらるべし、こゝに於て絲蘿を結んで菱花鏡に配上すれば、雪月風花遊蕩疎狂の病も盡く去りぬべし、今日兩眼惺々として一枕南柯の夢初めて醒めぬ、と云ひて衆皆歡喜一塲し畢る。

揚州夢の一劇、梗概是の如し。平板無波甚だ曲折頓挫無く、特に楔子も宴席、第一折も宴席、第二折は客ありて主無きも是亦牛家の奴果卓杯盤を安排するあり、第三折も宴席、第四折も宴席、貪花戀酒を以て謫罪を被らんとせしほどの杜牧之、常に他人の酒を白喫して自家の毒を撒出し來るも可笑しく、實際塲に上さば如何なるべきか。此劇『白』甚だ凡庸、喬氏が手に成らざること論を待たず。予が略述せし上文に若し一佳句もあらば、實に『曲』中より來れるものと見て可なり。第一折中張好々が美に驚くところ、倒二金餅鳳頭一、捧二瓊漿玉甌一、蹴二金蓮鳳頭一、並二凌波玉鈎一、整二金釵鳳頭一、露二春纖玉手一、天有レ情天亦老、春有レ意春須痩、雲無レ心雲也生愁といへる那叱令の詞は、天有レ情以下の三句梁廷枏の賞するところとなれり。予矮人觀塲の誚りを受くるも亦測るべからずといへども、作者が沒巴鼻なる所謂美なるものを沒巴美的に形容し去りし妙は賞せざらんとして而して能はざるところなり。其他佳句また乏しからずといへども、たゞ全篇を通じて變化少きは此の揚州夢に些の遺憾なき能はざる處なるが、金錢記に至つては大に之に異にして喬氏が才必ずしも此に止まらざるを證するに足れり。

第四折　揚州三年の任滿ちて京に歸れる牛僧孺の數々杜翰林を訪へども會面を得ざるにより、これ必ず張好々と說話するを得ざらしめし其恨を懷きてなるべし。今日金字館に宴を張て我を招ける白文禮も揚州に在る時より數々老夫に對つて好々を牧之に與へよと云ひつるが、彼の京に來り居て老夫を招けるこそ幸ひなれ若も今日牧之の到ることもあらば我自ら主意ありと云ひて去る。引替りて白文禮從者を引て出來り、昔揚州にて牧之が行を送りし時托されたる一事を今に果さず、牛太守も京に上り杜翰林も他に出でずあるこそ幸なれ今日二人を此金字館にて相會せしめ、何とかして彼の事を完成せしめんと待つ。富貴崢嶸も戀はざれば談笑平生、白馬紅纓も望まねば、此處に來りて、獨り醒むる屈平よりは能く醉ふの劉伶を學びて、湖海の愁を澆消し風雲の興を洗滌し月朗風淸に負かじよと歡飮するところへ、牛太守の御入りなりと報ずると頓て牛僧孺入り來りて文禮牧之と相見す。表は言葉に圭角も立てねど裏には心の解け合はぬ牧之は遂に好々のことを云ひ出でゝ、白員外の口を借り申し入れしも既三年になりぬ、彼事は允し玉はずやと問へば文禮も口を添へて、郞才女貌相當るの好姻緣を如何ぞ覺し玉ふなると云ふに、僧孺は思ひ設けたる事なれば、從へ來りし好々を喚び出して、牧之に與ふることを諾す。こゝに曾て豫章の太守たりしが今は陞つて京兆府尹となれる張尙之は、牧之が情を花酒に放にせるにより朝廷罪を加へられんとするを奏し宥めて此處に來り、僧孺等衆人と相見て此事を牧之に傳ふ。牧之こゝに於て飜然として今より後は功名を立てゝ

彼の人をさへ得たらんには再び蝶使蜂媒に惹れて迷ひもせず、佐友狂朋を信じて浪蕩もせず、たゞ水魚相逢ひ琴瑟和同し、柳債花錢の愚をなさゞらんものをと歎じて去る。

第三折　揚州の豪富白文禮といふもの杜翰林の公事果てゝ京に歸るを送らんとて筵席を設け待つところへ、招かれたる杜牧之は例の家童を引いて、錦機織り就す傳情帕、翠沼栽え成す並蒂花、何の日か青鸞同く跨がるを得て、彼の多情の楊柳、解語の海棠を我がものとせんと、うつゝ無く思ひ惱みながら到り、文禮との酒間此事を語り出づるに、彼の好々は原豫章の太守張尙之が家にありしが、今は牛太守が義女となつて秘愛せらるゝものとの文禮が言に、さては見しことあるやう覺えしも宜なり、三年以前張家にて見し女童は今の牛家の嬌娥に疑ひ無し、憶へば瑞文錦一段烏犀梳一副詩一篇を與へし彼も同じく好々と云ひしと覺えぬ、さらば我とは緣無きにあらずといふべき間なり、烘霞の醉臉、勝雪の素肌、思へば思ふほど風流俊雅に成長せしものかな、あはれ願はくは員外我爲に月前星下の佳誓をなさしめよ、我また落花流水の感情を他には動かさじと思ひ入れ深く依囑すれば、文禮之を諾ひて猶酒を勸むるに、牧之は心こゝに在らざれば我が請の肯んぜらるゝと直ちに繰り返し〳〵我再び浪酒閒茶意を裙釵に留むることをせざるべき間、美滿の姻緣を成らしめよと、自己が急煎々虛飄々たる情懷のみを述べて去る。文禮は後に呆れ果てゝ、若し此事の成就せずば他の性命をも送り了るべしと獨語す。

よと牛家の奴に命じ置きて、高く繡簾を捲き起し案に憑りて閒坐一會するに、何時となく我を忘れて家童と共に睡りに入るところへ、張好々四美人を伴つて來り、杜老爹、杜老爹と呼び覺まし、太守は公事の忙はしきまゝ且く妾等をして相公に伏事せしめ候なり、對案兀坐の興無くて睡りやし玉ひつらん覺め玉へ覺め玉へ、と優しく云ふ。伏事といふことやある、先づ此方に寄りて此席に共に居よかしと云ひ、從へ來つる四小娘子は何人なりや、歌舞をも會するものなるか、と問へば、玉梅、翠竹、夭桃、媚柳と申し侍りて頗る歌舞をも會し候と答ふ。是は趣きあり、然らば皆いざや快く酌み交はさんと、昨日今朝事同じからず、煖溶々たる脂粉の隊、香馥々たる綺羅の叢、紅遮翠擁の妙風情、あら面白や、と杯を擧ぐるに、四女は唱ひつ歌ひつして、意中の人は傍にあり、樽中の酒空しからず、筵前に曲は未だ終らず、賓酒的の渴肚囊、看花的の饞眼孔、歡喜妙緣を結下して玉嬋娟を伴着し相守り相從ふ樂み未だ盡きざるに、忽然として好々は、太守や來り玉ふべき、妾は且く回り去らん、とて坐を立つかと見れば夢は覺めて、在りし美人は影も無く、餘香も留めぬ翠雲樓上、今や同じく醒めたる家童の我に對するあるのみなり。蓬萊八洞の樂みは華胥一枕の夢と消へて、彩雲廣寒宮を飛下するの思ひ、憮然として困騰々たる醉眼朦朧と見れば日も既晩れて明晃々たる燭影紅搖ぎ、繡被香寒うして玉樓人去り、錦樹花飛んで金谷園空しき風情、恨むにも猶餘りあり。如何にやせまし如何にせん、風雲の氣槪は都て陽臺の夢と做り、花月の思情は猶太華の峰より高し。

に迷ふにつけ、這の女子曾て何處にてか見し覺えありと獨語をなし、僧孺が、學士既に酒を飮まずば汝回り去つて休めと命ずるに、美人席を去れば、牧之も辭して別るゝに臨み、一番相見すれば一番老るよと主人の言ふに、爾の鬢角邊、霜華漸く稠く、彩袖上酒痕舊に依るはさもあらばあれ、我は正に是老に到るもまた風流と唱ふて去る。僧孺は吾が義女を那處にてか見たるが如しと云ひし牧之の獨語を聞き咎めて、酒病詩魔依然として舊の如き彼の牧之が好々を見たることあらんには恐らくは豫章城にてなるべし、今は三年も經たるに、他見て眼裏にありとも如何で他の手裏には到り得させんや、とて、奴を呼びて、牧之再び來らば我は家に在らずと說きて彼を翠雲樓上に誘ひ、間坐することと一會せしめ、興なからしめよ、彼も回り去るより他無かるべし、と云ひて牧之を阻まんとす。

第二折　牛家の奴、太守の命を奉じて翠雲樓を打掃し、杜學士や來ると待つところへ果して牧之は家童を引き連れて、衫袖濕りて酒痕香ばしく、帽簷側きて花枝重しといふやうなる埒無き態にて出來り、翠雲樓に上るに、酒肴を安排して牛家の奴之を待ち迎へたり。日高くして花影重く、風香しく酒力湧くの時節、酒は琉璃の鍾に琥珀の色美はしく、葡萄の佳醞にも勝りて金莖の玉露を瀉ぐが如く、樓は黃鶴仙白兎翁も往來すべく高く聳えて霓裳月宮に到るかと疑はるゝばかりなり。されど昨日酒に中りて、今朝猶覺むるに懶かりしほどなる牧之は酒も得飮まざれれば太守來らば我に告げ

し宴を開く。牧之稍醉ふて幾杯か錦橙の漿を酌んで洗淨す談天の口、一枝碧桃の春を折つて占定す拿雲の手と興ずるは即ち興じながらも猶足らざることあるを仄めかす趣きあれば、僧孺は歌舞を善くする女を喚び出し來りて學士に伏事せしめんとて、好々那裏に在るやと呼ぶ。三年前は張尙之が家に養はれし張好々の、尙之と僧孺との舊友たるが爲め僧孺が方に與へられて今は牛太守が義女となり居る好々喚ばれて席に入り來れば、牧之是は誰ぞと問ふに老夫が義女にて好々といふものの僧孺が答なり。好々が身の上を聞き知るべくも無き牧之が、三年前に比べては美しさも愈々增して大人びたる此好々を見て、それぞと明らかに知るよしは無けれど、窈窕嬝娜たる其風情に心を奪はれて忙然となり、あら美しさよ、天に情あらば天もまた老いん、春に意あらば春須らく瘦すべく、雲無心なるも雲また愁ひを生ぜん、花は比べんには風流あらず、玉は比ぶれば溫柔ならず、鶯も魂を消し燕も羞を含まん、蜂と蝶とも皆呆顏して菫蔻梢頭に歇在せんと驚嘆し、强ひて一杯の酒を換ふるに、艷愈々艷嬌益々嬌にして梨花露を擎げて粉酥凝るが如く白く、海棠雨過ぎて烟脂透るばかりに江潮せる麗はしさ言ふべくも無ければ、霜毫銀牋直ちに一詩をなして之に贈り、應答の語話相投じ談笑の局面やゝ熟するに及びては覺えず春風に玉甌を倒すの醉趣、尋常の路柳墻花ならずと見るものから却つて彩雲の容易に收まるを恨んで銀甲輕く掬き金縷低く歌へるを聞きし身の、我は是江州の司馬、彼は是蘭舟の商婦にあらざるも、何となく愁淚靑衫を濕ほすの情趣あつて、捨て難き思

て年方に十三歳なる善歌巧舞の女に、今日招きし牧之見えなば歌舞一回して他が爲めに酒を勸めよと命じ、又奴の張千に牧之來らば夙く知らせよと命ず。程なく牧之來り到れば賓主相見の禮常の如く、宴酣に及んで太守期せし如く好々をして歌舞せしむるに、唱ふこと一曲すれば金縷悠揚として雲譲に行き、舞ふこと一回すれば採袖輕盈花影を弄するの風情あり。牧之恍惚として瑞文錦一段、犀角梳一副と詩一首とを贈りて辭し歸る心の中には、甲斐なき功名を博着せるため浮萍浪梗の身の是非無くも此豫章城を出去らねばならざることよと物憂く思ふ意あり。

第一折　張杜と共に忘年の友たる揚州の太守牛僧孺、牧之の公事によりて州に來るにつき一席宴を設けて之を待つ。牧之は招かれて家童を從へて、煬帝の往時廣陵に幸し玉ひつるを追想しては、錦纜龍舟も今は見えてたゞ堤柳の千古の閑愁を惹くばかりに殘り、春光老い瓊花痩せたるを嘆じ、江山舊の如く歌吹猶湧くを見ては、三分の明月十里の江樓、綠水芳塘玉榜浮び、珠簾繡幕金鉤に上る景致、一百二十行の經商財貨、八萬四千戸の人物風流、平山堂觀音閣には閒花野草芳ばしく、九曲池小金山には浴鷺眠鷗閑に、馬市街米市街には龍の如き馬聚まり、天寧寺咸寧寺には蟻の如く人稠く、香酥鳳髓を備へたる茶坊、檀板鶯喉賑やかなる酒樓、彼所には金盤の露瓊花の露佳醞を釀し成し、此處には大官羊柳烝羊珍饈を列し、官場の蹴鞠、教坊の俳優、士女の美衣、花柳の豪華、何一つとして大都の氣象を帶びざる無きを感じながら僧孺が家を訪へば、待設けたる事とて禮を施

○喬孟符

喬孟符或は喬夢符に作る、其同人なること疑ひ無し。作るところ揚州夢、兩世姻緣、謅玉釵、節婦碑、荊公遺姿、勘鳳情、黃金臺、金錢記の八種ありといへども、予の目を寓するを得たるもの金錢紀、兩世姻緣、揚州夢の三本に過ぎず。金錢記は賀知章、李太白等が友の韓飛卿を主人公として巧に卓犖不羈の才子を描出せるもの、結構布置共に妙にして作者が一番の狡獪手段、讀者を瞞過し去りて奇を叫ばしむる處あり。兩世姻緣は妓女玉簫の情郎を慕ふて相思病に命を終りたる後、荊襄節度使張延賞が、義女に愛執の一念憑りて以て未了の緣を了するの事を叙せるもの、前半は香消玉碎の光景悲むべく、後半は冥界陽世の關聯異とすべし。たゞ揚州夢は奇なく異なく、構思簡に用筆雅に、杜牧之張好々と耳緣を結ぶの一段を把り來て詩趣豐饒に叙過せり。今先づ揚州夢を語りて金錢記兩世姻緣に及ぼすべし。

○揚州夢

楔子　豫章の太守張章之といへる杜牧之と幼より友たるもの、牧之が翰林侍讀となり居て公事のため豫章を過ぎり京に回らんとするを以て餞行の宴を張らんとし、梨園より得て養なへる張好々と

蓋し元人も亦有眼の人のために心血を塗したるもの、覆瓿貼壁の資とせらるゝを免がるゝを得たるを悦んで深く其恩を荷はんとす。

如何にして元劇を紹介すべきや、これ豫め考ふべきの事たり。有調有韻の文は之を異國語に飜するに至つては直ちに其興味を失ふべきこと必然の勢あり。然らば即ち飜譯は徒勞に近く、且つ飜譯は一二篇に對して、或は可ならんも數十篇に對しては讀者も譯者も共に厭倦の念を生ぜんとするの患ひあり。單に解題して便ち已まんか、隔簾の美人瓶中の美酒たゞ人をして思を惱まさしむるあらん耳。然りといへども二者以外に其路の取るべきものなしとせば、予が手に成らんとする不精確の粗飜譯、沒興味の惡飜譯、乃至嫫母の傅粉に同じき徒勞の粧飾を取れる拙飜譯等を少數の篇什に對して爲すに止めんよりは、成るべく多數の篇什に對して稍々詳しく解題をなし且少しく其佳處妙處を指示せんとするの、遙に人をして元劇の如何なるものなるかを理會せしむるの點に於て勝れるを認め、併せて一人數篇あるものは其題目の如何に關せず其同一手に出づるものを列擧する方其作者の如何なる氣習あり手段あるかを伺はしめんがために便あるべきを認むるにより、予は此方法を取つて先づ揚州夢の作者喬孟符を首めとして漸次に元劇を語るべし。讀者幸に其玉石混淆して佳作の拙作と伍し名匠の凡匠の後となるあるとも之を咄々せずして靜かに元時代には如何なる作者あり如何なる戲曲ありしかを見よ。

れし金聖嘆も、琵琶記に筆を加へて自信甚だ過ぎたりと云はれし李笠翁も、元曲に熟せずんば如何ぞ肯て大膽の事をなさん、牡丹亭の佳作ある湯臨川も元人喬孟符の句を襲用せざらんには如何ぞ梁廷枏に指摘し出さるゝことあらんや。文學も美術も後世の人士に取りては、前人常に大功を立てゝ、後人をして佳篇を出し妙作を出すの餘地あらしめざるが如くなれども、仔細に觀察すれば、後人は常に積聚の勢力を利するを得るの好位地にありて、古人の恩賜を自在に受用し、韓蘇李杜をも馬となし牛となし、王馬關喬をも車となし輿となして、而して千里の遠きに馳せ二河の玉を採るをも得べきなれば、後人の佳篇妙作の中には常に前人の力の陰然寓在して大に其功を助けつゝあるを思はざるべからず。此故に明清の佳劇を談じて元劇を談ぜざらんには、明清劇のため甚だ慶ぶべくして元劇のため又甚だ憾むべきにあらずや。予淺學といへども彼の如く盛なりし元の劇が此の如く吾が邦人に冷看せられて絕へて人の元劇のために一言を發するをも聞かざるを憾みとして、聊か元劇を世人に紹介するあらんとす。

元曲五百四十九本、予の目を寓するを得たるもの實に其の一斑に過ぎず。思ふに其書の我國に舶來せるもの甚だ多からざるのみならず、支那にありても既に其半以上を逸失せるなるべし。予の元劇を得て之を咀嚼せんと欲したるや日淺しといふにはあらざるも、得るところ猶飽くに至らず。蓋し一人の眼の力の及ぶところ搜索渉獵固より洽き能はず。好學の君子幸に之を得て之を保つあらば、

が如しとは古人の盧綱を評せる語にして、蒼龍の秋水に吟ずるが如しとは李良辰を評するの語、蔣康之を評するには玉磬の明堂に撃たるゝが如く溫潤愛すべしと云ひ、李通を評するには玉笙璠管を吹くが如く淸且潤といへる、此等の語皆移して以て吾邦謠曲家を品すべきのみ、俗劇の俳優を品せんには此等諸評語を以てすべからざるを覺ゆ。元來支那劇はオペラ若くは能の如く觀ると云はんよりは寧ろ聽くといふことの主たるものなること固より言ふを待たざるなれば、從つて前に云へる如く作者の苦心焦慮は能く韵調を言はんと欲するところに協はせて之を表現するに在りしこと知るべし。たゞ予が異域後代に生れて之を視聽直覺する能はず、從つて其間微妙の消息を悟る能はざるは之を如何ともすべからざるなり。

還魂記等の四夢を以て有名なる湯若士、香祖樓雪中人等九種を以て鳴りたる蔣心餘、奈何天等十種を以て知られたる李漁等は近來吾が邦人の間に喧傳せらるゝに至りしが、此等諸才人並に明淸の作者の元人に超越せるもの少からざるあるは疑ひも無しとはいへ、元は實に支那の劇の淵源たり根本たるを以て後世の才子、眼に元人を空しうするものと雖も必ず先づ元劇の堂奥に入りて之に寢食して、而して後自家の大旆を樹て門風を揚げしこと猜するに餘りあり。況んや人に尙古の陋習ありて古則舊法に從はざれば劈頭誹謗を免れざるの支那にあるに於てをや。傑士何ぞ必ずしも我より古をなさん。才子何ぞ必ずしも書を讀まざらん。西廂記を改竄せしを以て小兒事を解するを爲すと罵ら

如何なるものなるかを推究し了りて後これを以てこれに臨み、初めて其の篇什の價値を云ふべきのみ。

雜劇は自ら雜劇なり、傳奇は自ら傳奇なり。雜劇と傳奇とは子母の如く姉妹の如しとは云へ、同一系統にして同一面貌を具せりとは云へ、同中自ら異ありと云はざるを得ず。蓋し雜劇はたゞ四折、傳記は十數折以上其多きは數十節に及ぶを以て、局面の布置結構自ら異なきこと能はず。強ひて之を解說すれば、雜劇は出場の人亦甚だ多からず、之を演ずるの時亦甚だ長からず、恰も我國の謠曲を演ずるが如くなりしなるべければ即ち能の如しといふべく、傳奇はやゝ之より複雜にして我が邦の能と俗劇との那方に近きかを云はゞ俗劇の方に近きものなるべし。予の耳目の及ぶところの狹きや、雜劇を演ぜしものゝ狀況如何なりしやを想像する能はずといへども、雜劇を演ずるものに尙びしところは其の知音善歌にありしこと、今の能役者に對するものゝ、表情の擧動も其の巧なるを望まざるにはあらざるも先づ其能く音節を知り朗歌を善くするにあると同じ比例なりしを認むるなり。吭唇搖頭彈指頓足の態を作して唱ふが如きは實に忌みしところに相違無かるべく、遊雪の太虛に飛ぶが如く上下無礙悠々揚々として歌ふは眞に聽者の悅んで之を迎へしところなるべし。元の知音善歌の士其名今に傳はるもの盧綱李良辰を初めとして合せて三十六人あり。思ふに博雅の士は猶其多くを知れるならん。神虎の風に嘯くが如く雄にして且壯、又腰鼓百面以て蒼蠅蟋蟀の鳴を破る

て語れば遂に第二に墮し第三に墮す。妙を語る抑々難いかな。

今の世の所謂才子なるもの、假令酒精の如く滲透性の靈智を具するにせよ、徂徠白石の著書三四を讀めば直ちに徂徠の神髓を抉剔し白石の肚膓を剖解し盡せるが如きを粧ひて、便ち徂徠白石を自家俎上の一片肉となし、縱斷横截爲さんと欲するところを放にして以て乃公手中の刀の利を見よと示すが如きものあり。此輩に遇へば古の所謂才人なるもの左褒右貶前縱後縛、火に上せられ水に投ぜられて肉泥とならざるもの殆ど希なり。これ今の才子に在つては快或は快ならん然れども古才人に在つては寃もまた寃の甚しきものあらん。予賫性鈍魯、敢て今の所謂才子諸君の驥尾に付して五六本を讀みたればとて關漢卿を論じ四五篇を目にしたればとて馬致遠を評するを欲せず。是實に予の愚昧淺學を以て管見蠡測を逞くせば漆桶不會の誹の忽ち至らんとするを恐るゝのみならず、古人を殃ひすることもまた甚しからんを思へばなり。

角の長短を以て牛の良否を論ぜば其の誤るもの十の五ならんとはいへ其の中るものも蓋しまた絶無にはあらざるべし。然るに牛を論ずる所以のものを以て馬を論ぜば如何。智者を待たずして其非なることを知るべきのみ。此故に實錄を以て小説を責むるものあらばこれ妄なるのみ、歴史を以て演劇を論ずるものあらばこれ愚なるのみ。今の所謂小説に責むる所以のものを以て元劇に臨み、吾邦の所謂劇を以て元劇に臨まばこれまた非なるべし。若し元の雜劇を論ぜんとせば、たゞ元の雜劇の

子一の悞入挑源も孟漢卿の魔合羅も關漢卿の謝天香も皆然らざるは無し。第二折以下は定例と認むべきものある無く。調を選ぶ作者の意に隨ふが如し。これを元人雜劇の軆裁の大概とす。
假令宋より以後、詞韻は詩韻に比して寬嚴の差大に異り、入聲を以て平聲に代へ、上聲を以て平聲に代ふるの例あるにせよ、また例へば髮を讀んで方雅の切となし、馥を讀んで房夫の切となし、握を讀んで杳となすが如きは、常に元劇に於て見るところなるにもせよ、元劇を讀んで吾人の記せざるべからざるは、元劇の我が日本の謠曲若くは淨瑠璃の時としてたゞ調ある句法を用ゐるのみにて他は散文とやゝ同じきと大に其趣きを異にするの點にして、其曲の調即ち句法及び平仄の定規に依らざるべからざるの煩と、一韻を押して一折を終るの苦とは、蓋し吾が邦人の特に推測せざるべからざるものなり。此等は作者に在りては太だ苦心なるも、異邦の讀者には動もすれば忘れられて等閑に看過し去らるゝこと情の必然とは云へ、又其の平仄韻調等に於て作者の經營し成せる巧妙の趣味は多くは異邦の讀者に理會せられ難く、又たま〳〵理會せらるゝも其人の之を他の人に語るに及びては、恰も蓮華瓣上の露の掌裡に取られ盞中に移さるゝに至つてたゞに一滴の凡水となつて更に眞珠の如く銀丸の如く輝きし風情一點もなきに同じく、妙味は直ちに失はるべしとは云へ、妄に險韻を押し優に難句を遣る等の作者の苦慮焦心は假令想像の上のみにても、苟も有調有韵の文字を談ずるに當つては大に之を認めざるべからざるものたり。由來所謂『妙』なるものは不能語の中に存し

目を存するもの五百餘種悉く皆科場の作と云はんは甚だ過ぎたる說といふべし。假令塡詞の科ありしにせよ、雜劇を以て士を取りしにせよ、如何ぞ又自ら思ひを遣つて獨り娛むの士が窓下閑草の作なしと云ふを得んや。合汗衫、薛仁貴等の如く娼夫の手に成りしといへるものさへ存するを見れば、一時風氣の尙ぶところ我が明治二十一二年の頃少しく文才あるものは男女老少の別なく競ふて小說を作れるが如くなりしやも亦測るべからず、况んや如何に空文浮詞を以て人を高下するは支那古來の陋習慣とは云へ、雜劇を以て士を取ると云ふは迂愚もまた極まれるの制にして、萬々有るべからざるの事に屬するをや。且又是の如き選擧の新制あらば、史必ず之を載せざるべからざるをや。要するに、これ皆予が辯ぜざるところと晉叔の言ひしもの甚だ好し。强ひて此事を明らかにするとも特に大なる益あること無し。たゞ予は元時代に雜劇の勃興盛行せるは後人をして此を以て士を取りしかと說かしめしまでに非常なる勢ありしといふを以て滿足せんのみ。

傳奇は姑く措きて云はず、元人雜劇は皆四折より成れること金聖歎既に之を言へれば、假令未だ一篇を讀まざる人も恐らくは之を知れるなるべし。而して四折の外に楔子あるあり、楔子無きあり、楔子通篇の首に在るものあり、折と折との間にあるものあり。各折長短定まらず、白曲を合せて一折三千言以上なるもの少からず、猶其以上なるものもあり。曲必ず各々其句法あり、韻法あり、而して一折を通じて一韻なるを常例とし、第一折は必ず仙呂點絳脣の調を用ゐて起ること、例へば王

これ一疑なり。藤花亭又曰く、同一故事且つ同一正名、而して人各々一本あるものは、疑ふらくは當時主司定むるところの題目にして、今世に傳はるものは即ち其の科場の選本今の魁墨の如く然らんと、然らば即ち其の科場といひ、主司といふもは何ぞや、主司定むる處の題目に應じて、科場の選本たるの榮を得たるものは徒に其才を稱揚せられて已みしのみなるか。同一故事同一正名、而して人各々一本あるもの、これ一疑なり。楚昭公の劇の如き末折未だ必ずしも彊努の末といふべからざるものなきにはあらざるも予が讀みしもの丶末折は多くは平凡無奇、僅に一場を終結するに過ぎざるものなるはこれ何のためぞや、豈作者の皆末折に至りて力盡き才究せるの致すところのみならんや。給を風簷寸晷の下に取るが故にはあらざる歟。これ一疑なり。西廂記の如き其の白もまた作者の手に出でたる疑ひなき例外のもの無きにあらずといへども、雜劇の白の多くは鄙俚踏襲の語ありて、讀むものをして厭倦の情を發せしむるものは、豈又、主司定むるところ題目外曲名と韵とに止まる、其賓白は演劇の時伶人自ら之を爲すといふの說を證するにはあらずや。藤花亭自らも云へる如く包龍圖の故事を演ぜる灰闌記、神奴兒等の賓白太半相同じきは演者臨時添造せること疑ひ無し。果して然らば何の故に作者の賓白をなすを肯んぜずして特に狐腋と狗尾とを雜綴せるが如き觀を後世に遺すを豫め憂へざりしや。これ一疑なり。此他曲と白との照應せざる、調を選ぶに同竇に墮するを厭はざる等、疑點として推究すべきもの少からず、然りと雖も飜つて又之を思ふに元曲今其

水の將に決せんとするや一蟻穴を得て而して忽ち千里に漲溢し、火の發するに當つてや一點の星火も風を得れば或は阿房を燒く。予は元劇の勃興せる亦恐らくは如斯にして、古來行はれたる自己の情懷を抒ぶるの詩の反面に、忽然として敍事詩の一躰とも云ふべき劇の發達せるならんと思考して、積勢の必至機運の必會と說きたれども、猶他に一の考ふべき點あり。即ち人爲の力の或は之を誘導助成したるならんといへること是なり。明の臧晉叔は曰へり、或は謂ふ、元の士を取るや塡詞の科あり、今の括帖の如し、然れども給を風簷寸晷の下に取る、故に一時の名士馬致遠喬孟符の輩といへども第四折に至つては往々彊弩の末なり云々と。明の沈德符もまた曰へり、元人未だ南宋を滅せざる以前雜劇を以て士を試むと。吳梅村もまた、當時此を以て士を取ると云へり。此等の諸說固より當に本づくところあるべきなれども、藤花亭主人は之に疑を存して、之を元史選擧誌に考ふるに固より明文無し、或は又傳聞の誤りならんと說けり。予の學の淺くして識の陋なる、固より異邦に生れ後代にありて元の果して士を取るに雜劇を以て之を試みしや否やを斷ずる能はずといへども、試みに沈吳の說に左袒して推究するに、或は此を以て士を取れりと云ふの中れるを信ぜんとするに至るの傾きを生ずる無きにあらず。蓋し史に其明文無しとするも又傳聞の誤りとするも、史に文の存せざるを以て直ちに事に實無しとせば、古今の事の無實に屬するもの、其の太甚だ多きに堪へざらんとす、傳聞の誤りとせば、其所謂誤りなるもの丶本づく處の眞なるもの無かるべからず、

りしなり。蓋し詩の盛なりしは詞の起る所以を致し、詞の唐に萌芽し宋に蕃茂せるは元の雜劇の勃興を致せる所以なることは固より論無し。故に言を換へて之を云へば周より元に至るまでの長時間の詩の發達並びに唐より元に至るの間の詞の發達は、元の雜劇に對して非常に有力なる後援をなせるものにして、此の大勢力ある後援を有せる元の雜劇が、前人未到の地に一旗幟を立てゝ忽ち廣大なる領土を開拓せるもの、一見甚だ奇なるが如しといへども、又敢て怪むに足らずといふべし。されば其起るや是の如きの好縁を具して、而して千有餘年間起らんとして起らず恒に病みて恒に死せずの境に在りし敍事詩の因子が一朝頭を擡げし事なれば、勃然として俄に榮え、關漢卿、白仁甫、馬致遠、喬孟符の輩、妍を鬪はし芳を競ふて、時に乘じ勢に倚り、各々其雄を逞くせるもの、實に元の羣英の才の世を傾動し、元の士庶の好尚の之をして然らしめしのみにはあらず、又大處より打算し來れば積勢の必至、機運の必會といふべきのみ。たゞ憾むらくは予の學淺き未だ多く元人の劇を讀まずといへども、其題名を知るを得しものの馬致遠十三本、王實甫二十二本、關漢卿六十本、白仁甫十七本、喬孟符八本、尙仲賢十本、庾吉甫十六本、高文秀三十五本、鄭德輝二十本、鄭廷玉二十一本等を首として李文蔚、李壽卿、吳昌齡、武漢臣、李直夫等各々枚擧に遑あらず、作家の名は存せるもの合せて八十一人、四百四十四本、作家の名を失せるもの合せて一百五本、之を總べて五百四十九本なり。嗚呼また盛ならずや。

の語は數々口にせらるゝに至れり。嗚呼元劇何ぞ必ずしも皆妙ならんや、明淸の劇又何ぞ必ずしも皆陋ならんや、而して獨り元劇の宋詞と並べ稱さるゝは實に僥倖に屬するが如しといへども、千古の蓁蕪を披いて別に敍事詩の一躰卽ち劇の一隴畝を文學國に成せる元人の功未だ急に沒すべからざるものあるに歸せずんばあらず。人の劇を談ずれば必ず先づ元を稱する豈又全く其所以なしとすべけんや。

支那の詩は事新らしく予の言ふを須たずして實に極めて古き時代に於て發達し、爾後甚しき蹉躓なく駸々として步武を進めたるは人の知るところなり。然れども一時の始末を綜べ、若くは一人或は數人の利害感情性質意志等の相賊相生して以て人生の吉凶禍福をなせる發動歸結の顚末を綜べて、之を有韵有調の文字に表現せるものを求むれば、假令古樂府の數篇、木蘭女を詠ぜる詩、焦仲卿夫妻を詠ぜる詩等間々散見するにはせよ、其發達の極めて遲鈍にして此類の篇什に乏しきことは如何に支那詩を嗜好する人といへども恨を吞んで然りとせざるを得ざるところなるべし。然るに不思議にも自述詩の旺盛を極めたる唐宋の後に於て忽然として詩星は異方面に微光を洩らし、漸く煌曜の威を揚げて遂に明淸幾多の才子をして其風流韵雅の使命を凡界に傳へしむるに至り、支那詩を嗜好する人をして殆ど一毫の憾なく、有り、有り、我に富贍藻麗雄大高妙の敍事詩ありと絕叫せしむるに及べり。而して此詩星の光りを頭上に戴きて初めて支那文學の一分野に現はれたるものは元人な

元時代の雜劇

支那文學を論ずるに當つて若し其文を談ぜんには人必ず秦漢を稱すべく、若し其詩を談ぜんには人必ず唐を稱すべく、又若し其詞を談ぜんには疑もなく必ず先づ宋を稱すべし。これ秦漢唐宋以外の時代に文章詩詞等の無きが故にはあらざるも、文章詩詞等の特に其時代に於て發達繁榮して赫奕たる光輝を放ち、以て其時代を蓋へるが爲めなることは云ふまでも無し。劇の元に於けるもまた然り。明清の劇の佳なるものなくして獨り元劇の稱せらるゝに至りたるにはあらざるのみか、元以後の劇の却つて前者をして顏色なからしむるもの固より乏しきにはあらずといへども、其の元に於て忽然として劇の特に發達繁榮したるは、實に後世の光輝を奪ふて、劇をいふものをして先づ口頭に元の一字を上ぼせしむる所以なり。之に加ふるに秦漢は文章の源泉たり唐宋は詩詞の標的たるが如くに、元は雜劇傳奇の祖先たるを以て、假令後世の才人俊士、大元の文學を幾呑吐するが如きものと雖も、苟も指を此技に染めんとするに至ては、先づ元劇に若くは淺く若くは深く造詣するところなかるべからざるより、元は幸福にも劇に於て最も輝ける時代と目され、其一臠を味ひし人にも宋詞元劇

りしに、此二種の假名世に出てゝより、吾輩は音を表する文字と義を表する文字とを併せ用ゐて、限りなき便利を享有し、支那の文明を吸集して而も我邦自然の發達を害せらるゝこと無く、支那とは全く異りたる光彩を放つ國民として今日に存在するを得たるは、まことに悦ぶべき限りならずや。猶豪傑の起るありて、我邦に利あらん字の制を考へ定むることもあらんには、我等が幸福の如何ばかり増長せんも知るべからず。大なるかな、此の數十字の假名の功や。

ル。流の字の右の足なる『ル』を取りたるなり、流の呉音『る』なり。
レ。礼の字の右の一畫を取れり。
ロ。呂の字の『口』を取り『白』を省けり。
ワ。和の字の右の『口』の字のみを取りて、『ロ』の字と紛るゝを避けたり。一説に『曰』の字の『ワ』なりといふ。和の字の説の方可なるに似たり。
井。井の字の全躰なり。訓によれり。
ヱ。慧の字の中の『ヨ』を我邦古俗『ヱ』と書けるにより、それならんといふ。惠の字の省といひ、衞の字の中の上の『五』の變せるなりといふ説もあり。慧の字の説よろしきに似たり。
ヲ。乎の字の變なり。古くは『ゥ』とも書けりといふ。乎の呉音『を』なり。
片假名は右に說ける如くにして成れり。蓋し片假名の成ること草假名よりは聊か早きに似たれば、草假名中の、へ、つ、り、等は片假名を取れりとの說さへあり。右に掲げしは皆現今用ゐるところの片假名なるが、此他に今行はれざる片假名の躰あり。用なければ省く。片假名は古に於ては、草假名より前に兒童に學習され書冊なんどにも用ゐられたること歴々證すべし。
草假名片假名に關しての大概は右に縷述せるが如し。嗚呼此の二者の發明無からんには、我邦は殆ど支那の屬國の如くなり、國民が性質氣風よりする自然の發達をも遂ぐること難き運命に沈むべか

フ。不の字の『ア』を存し『ハ』を省けるなり。

ヘ。反の略といふ。定說なし。疑はしきをもつて、こゝに斷言せず。

ホ。保の字の『亻口』を省けるなり。

マ。末の字の『ニ』を存し『小』を省けり。『マ』といふやうに連結の勢をなせるは、自然に筆の勢によりて何時となく生じたるなり。

ミ。三の全體にて其訓によれり。

ム。牟の字の『ム』にて『牛』を省けるなり。

メ。女の字の省文なり。訓による。古くは『メ』『乂』『乄』など〻書けりといふ。女の字の省なること見るべきなり。

モ。『毛』の字の省文なることと一見して知るべし。

ヤ。也の字の『乜』を取りたることと知るべきなり。

ユ。弓の字の上頭『ユ』を取り『ㄅ』を省けるなり。訓によれり。一說『勇』の字の上頭なりといふ。

ヨ。與の字の右の肩なる『ヨ』を取れるなり。

ラ。良の字の『ラ』を取り、其他を省けり。良の呉音は『ら』なり。

リ。利の字の左を略し、右を取れり。

ス。須の字の右方の『頁』の下部『ス』のみを取れりといふ。須の呉音は『す』なり。

セ。世の省文なり。

ソ。曾の字の『ソ』を存し『冒』を省けるなり。

タ。多の字の省なること一見して見るべし。

チ。千の字の全體なり。千の訓『ち』なり。これは『エ』の字の例の如く訓による。

ツ。諸説紛々本字明らかならず姑く疑はしきを闕く。

テ。天の字の省なり。『于』を存し『乀』を省きたるなれば、古くは『于』と書けるもあり。

ト。止の字の『ト』を存し、『ユ』を省けるなり。これも『エ』『チ』の例の如く訓によれり。

ナ。奈の字の『ナ』を存し、『示』を省けるなり。

ニ。二の全體なり。呉音による。

ヌ。奴の字の『女』を省けるなり。奴の呉音『ぬ』なり。

子。『ネ』『子』は『子』の全文にして訓による。『ネ』は『禰』の左方を存して右方を省けるなり。

ノ。乃の字の『ノ』を存し『㇋』を省けるなり。

ハ。八の字の全體なり。

ヒ。比の字の略なることと一見して知るべし。

イ。伊の字の『イ』を存し『尹』を省きたるなり。
ウ。宇の字の『宀』を存し『于』を省きたるなり。
エ。江の字の『工』を存したるなり。江の訓は『え』なり。これは字の訓によりたり。
オ。於の字の偏のみを取りたるなり。
カ。加の字の省なり。一見して知るべし。
キ。幾の字の省けるものなり。古くは『し』と書きたるもあり。今のは幾の字中の『戈』のみを取りたるなり。
ク。久の字の『ク』を存せるなり。久の呉音は『く』なり。
ケ。介の字の省なり。異説多けれど介の字の省とするが可なるべし。
コ。己の字の『コ』を存して『し』を省けるなり。己の呉音『こ』なり。
サ。定説なし。古は『七』と書けり。『七』は『左』の省なり。『サ』は何の字のと限らで汎く草冠といふものゝ形に取りて『草』の音を『さ』として用ゐたるものかとおもはる。『薩』の字の冠なりといふ説あり。『藏』の字の冠なりといふ説あり。『散』の左方の上頭或は『茶』の字の上頭、『丼』の字の下の『廾』なりなどいふ説さまざまなり。
シ。之の字の全文なり。

るもの、古の音圖にあり。今の、アカサタナハマヤラワと次第せらるゝと甚だ異なるを見るべし。また縦行も、古は、カケコクキ、ラレロルリなどいへるあるを見れば、これも古今の間に其排列の次第の變じたることあるを見るべし。

アイウエオ等の片假字の字躰は、空中より忽然として人に得來られたるものならず。これも草假名と同じく本づくところありて造り出されたるものなり。されど、草假字の單に草書の法によりて造り出されしとは違ひて、片假字の方はいよ〳〵簡にして其本字の何といふ字なることは一目の下には推測り得ざるほどなり。まことに此一體の文字ほど巧みに造り出されたるはあらず。支那の字に本づくといへども然も實に我邦人の神智によりて最簡至便の表音字として世に出でたるもの草假字と共に我邦文明の歩武を進むるに如何ばかりの功を成せしか測るべからざるものあるなり。

片假字は其名の示す如く、本字を省略割取して而して其本字を標するものとしたるにて、其法を支那に取りたるや、或は全く邦人の創思に出でしや明らかならず。本字を省略割取して本字を標するとは、例へば吾輩が『雁』の字の『厂』のみを書して雁の字を標し『魔』の字の『广』のみを書して魔の字を標するが如きをいふ。さて片假字の生じたるさまを知らしめんがため、次に一々片假字を擧げて其本字を説かむ。

ア。阿の字の『阝』を存し『可』を省きたるなり。故に古くは『卩』と書きたるものあり。

庶の學びたるといふことは、以呂波讃の作者を推測するに當りてまた別に意を立てしむべき價値あり。されど、こゝには强ていろは讃の文の作者を尋ぬべき要無ければ、姑く擱きて論ぜず。たゞ草假字は如何にして何時頃世に生り出てしかを說き得たるに滿足して已むべし。即ち我邦草假字は、大概延暦前後に至り自然の必要より何人の創作せしとも無く支那文字固有の書法の草躰より一轉して無義の表音字として世に出づるに至れるなりといふを以て草假字の記事を終るべし。

片假字もまた草假字と同じ必要によりて造り出されしものなること疑ふところ無し。天平勝寳中吉備眞備、我邦に當時用ゐられたりしところの假字即ち音を表すがためとして用ゐられたる文字の偏旁點化を省きて片假字を作りたりといへるは、古來の傳說なり。此事正史の記事無しといへども、片假字の行はれ初めたる年代より推し、また其あたりの時代に吉備公を外にしては、かゝる賢きことと仕出したまふべき人も無かるべく見ゆることなど考へ合すれば、いかにも倭片假字反切義解の說の然るべく思はるゝなり。但し片假字の方は草假字とは其出生の所以を聊か異にして、學生をして漢文の書を讀むことを學ばしむるの次に本文の字旁に讀みざまを注記するの用として智者の手より作り出されしかとおぼゆ。さて今用ゐらるゝところ音の排列は誰人の定めしところなりや定かならず。眞備公其大分を成して、空海ヰオの二音を增補せりともいふ。兎に角に當切は排列の順序も今の如くなりしや否や訝し。縱行は、アイウエオ、横行は、アワヤナタラハマカサ、と次第せられた

わりしことと疑ふべからず、次には第二の副の目的として佛教主義の觀念を衆庶に注入せんとして例へばアイウエオといふが如き無意義なる文字の排列を避くるを利益なりと信ずると同時に、涅槃經四句の偈の意に甚だ近き意を含ませたる一文章を綴り、以て一方には誦習に便にし一方には佛教鼓吹の具とせるなるべし。されば、以呂波讃は主には草假名手本の用として、副には佛教鼓吹の爲として綴られたる文なること明けし。是の如くなれば以呂波讃の作者は、其當に施爲すべきことの順序として、自己の手より、若くは他の人の手を假りて、讃の文によつて書したる草假名の法本を民庶に與ふべき事情なり。若世に傳ふる大和國當麻寺の空海筆いろは讃出雲國神門寺の空海筆いろは讃の模本等の眞に信すべきものならんには、いろは讃の作者は恐らく空海と定むべきが如し。而して幾多の傳説は皆草假字の字體の作者としてならで以呂波讃の作者として空海を傳へたるものなりしことを認めらるべく、こゝに、幾多の傳説其面目を一洗せられて而して復活すべきなり。河海抄に引ける江談の一節の如きも、假名手本を弘法の作といひたるにて、假字を弘法作といひたるにはあらず。諸傳説もまたよく考ふべきなり。

されど以呂波讃を假字まなぶ法本とするは、空海の頃よりはいと後れたる世に至りて初めて行はれたる事と覺しく、延喜の頃は手習ふ人のはじめには難波津の歌淺香山の歌などを學びたるべき證、古今集の序、源氏、枕草紙の文等に見ゆ。延喜の頃いまだ以呂波讃を學ばずして難波津淺香山を衆

云ひがたし。

蓋し以呂波假名の字躰は決して空海若くは空海ならずとするも其他の人一人の創作に出でざるべきことは論無し、以呂波の字躰は全く草法によりて自然に發生し來れるものなり。さて然らば以呂波の讃は如何にして出で來れるかと云はんに、こは、恐らくは空海若くは空海ならずとするも某一人の手に成りたるものなるべし。意義暢達して加之言外に一作用を具せるは、自然に生じたる文字の排列たるに止まるものにあらざることを明らかに證せりといふべし。（一作用とは音の重複無きを指して云ふなり。猶下に說くところあるを見るべし。）以呂波の讃の作者についても、いろはにほへとちりぬるを迄は勤操の作にして、わがよたれぞつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせず、は弘法大師杵築明神の夢想に從つて作るところなりなんどいふ說あり、また大巳貴命天八意命と心を合せ制作したまへりなんどいふ說あれど、いづれも巫覡僧徒の妄說信ずるに足らず。以呂波の讃の文こそは或は弘法の作りしなるべしと思はるれ。さてまた其文は特に同じ音の重複を避けて而して我邦人の發する音の大概を盡したるに考ふれば、明らかに音を表はすべき字として用うべき字を一々通り敎へんがために綴りたるものなるべし。さすれば、此の以呂波讃を作りし人の目的は、衆庶に表義の支那字の文を以て用を便ぜしめんことは到底成るべからざることなるを思ひてか、然らずば時勢の表音の字を要むるに乘じて、表音の字として用うべき文字を敎ふるに

らかなる證なりと云へるも其人のためになか〳〵口惜き謬誤とこそおぼゆれ。字母とは信友の解けるが如く以呂波四十七字の義にはあらず、佛家に四十二字門を說き、または聲字實相の義を立つることなどあるを信友は心づかず、空海が悉檀を傳へ來しをも思はざりしとおぼしく、如何はしき解の下しかたなり。四句といへるも、必ずしも涅槃經の四句とは限らざれば、涅槃經四句の意の寓せられたりといはるゝ以呂波讃を造りたるを指したりと其詩の句を解せんも、いさゝか意を以て迎へ過ぎたる解なり。四句とは四句の躰の偈を指すのみ、たとへば七言の躰の詩を七言といはんが如し、いかで必ずしも某の詩と限るべけんや。また況や以呂波の讃は四句と云はんより八句と云はんかた然るべきをや。縱ひ數歩を讓りて信友の解せし如く解すべしとするも、以呂波の讃をば空海の作りたりとする證とはなるべけれど、以呂波假字の字の躰を空海の作りたりと認むべき證たるべきかどは詩句に見えざるなれば畢竟するに信友が明らかなる證といひしは甚だ力無き證なり。また僧觀賢が空海の諡號を請ふ表に、兼究臨池之妙緇素皆成倚賴倭漢推爲楷模といへるを擧げて、こゝに倭漢といへるは倭字漢字の義にて倭字とは當時の草假字をさして云へる文ときこえたりと信友の云へるは、いよ〳〵背ひがたし。倭漢と云ひたるのみにて、いかで倭字漢字をさして云ひたるなりと云ひ得べけんや。此他空海を以呂波假字の作者とするの說、倭片假字反切字解の序、行阿假字遣の序、河海抄に引ける江談の一節等皆後世の人の傳說たるに止まりて的確の證無ければ如何とも

此他猶數多くあるべけれども、さまではとて省く。前に云へる如く、また今擧げて示せる如く草假字といふものは、要あるまゝに自然草書の便により沿ひて、何時よりとなく誰が爲しとも無く最簡最便の姿なして世に現はれ出で來りしものなること、假字に一々本字ありて、而して其本字より假字の形あるに至りしは草書の法によりたるに照らして明らかに、しかも其本字は大抵假字躰の文字行はれざる前にありて借字として音を表すために用ゐ慣らされたるに照らしていよ〳〵明らかなり。されば弘法大師のいろは作り出したりなどいふ傳に泥みて、いろはの讃も、假字の字躰も、皆弘法大師の手に成れりと思はんは、餘り大づかみなる心得かたといふべきなり。

弘法大師と尊み稱ばるゝ空海の文學に精しくして筆法に長けたりしは疑ふべくもあらず。されば空海こそ、以呂波の祖なれといへば、人皆いかにも然あらんと思ふべし。されど空海が以呂波を造りしといへるは、八句四十七音の以呂波の讃の文言を綴りたりといふか、また以呂波の草假字の字躰をつくり出でしといふか、文言をも綴り字躰をもつくりしといふか、三通りに心得らるべければ、そゝろに空海いろはを作りたりと云はんは甚だ非なるべし。伴信友といへる人は、凌雲集に載せたる從五位下内膳正仲雄が海上人(即ち空海)に謁すといへる詩の中に、字母弘二三乘一眞言演二四句一と見えたるを證として、空海がいろは假字作れるなりと云ひたれど、信友といふ人は、字母といひ四句といへるを、空海こそ假字の作り人なれと胸中に先づ思ひたるため解き僻めたりとおぼしく、明

遊。遊の字なり。其音による。

羅。羅の字なり、音による。

里。里の字なり。

梨。李。上のは梨の字。下のは李の字、共に其音によるなり。

累。累の字の草書にて、其音による。る と書くは非なり。累の字の下は糸なれば右點を特さらに一折して る と書くべきやうなし。尊圓親王なども誤つて る と書けり、然るべからずと眞澄說けり。

流。流の字なり。其呉音による。

類。は類の字なり。

連。連の字なり。其音に據る。

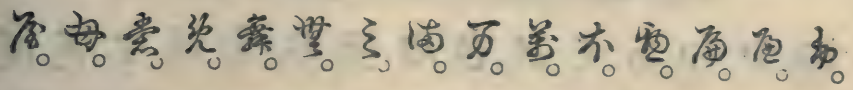
路。路の字の草書なり。音による。

井。井の字なり。其訓による。

衛。衛の字なり。其音によりて「ゑ」とす。

越。越の字なり。其呉音「をッ」による。

乎。乎の字なり。其呉音による。



布の字なり。
遍の字なり。其音による。
扁の字なり。音による。
。共に辨の字の草書のいたく轉じたるなりといふ。
本の字
萬の字。音による。
万の字。音による。
滿の字。音による。
三の字。其訓による。
無の字なり。其呉音「む」なり。
舞の字なり。其呉音による。
免の字なり。其呉音「めッ」による。
裳の字なり。其訓「も」なり。
母の字なり。其呉音による。
屋の字なり。其訓による。

津。津の字なり。其訓による。

亭。亭の字なり。

登。登の字なり。

那。れ。那の呉音「な」なるによる。

耳。耳の字なり。呉音による。

丹。丹の字なり。其訓による。

努。努の字なり。其呉音に據る。

怒。怒の字なり。其呉音に據る。

年。年の字なり。

能。能の字なり。

者。者の字なり。其訓による。

盤。盤の字なり。[illegible]と漸く轉じたるとおぼし。元愷は「[illegible]」も「者」なりといへり

飛。飛の字なり。

悲。悲の字より來る。

婦。婦の字なり。

遣。遣の字なり。

氣。氣の字なり。氣の呉音は「け」なり。

介。介の呉音「け」なり。『介』は介より出づ。白石は『化』の字より出づるとし、文雄は『兮』の字とすれども、皆從ひがたし。

古。古の字より出づ。

佐。佐の字なり。

志。志の字なり。

春。春の字の呉音の響き「す」なり。春の字の『春』の字となれること論無し。

須。『須』の呉音「す」なり。

數。數の字の草なり。

勢。勢の字なり。

楚。楚の字なり。

所。所の字なり。呉音「そ」

堂。堂の字なり。音「たう」なれば、疑ひ無し。

徒。徒の字なり。呉音による。

なるが、これまた本字定かならず。或は梵字の『●』より出づるとなし、或は『无』の字より出づるとなし、或は毛の字となす。猶後の學者の明らかなる辨別を待たては定めて是と言ひがたし。

此他の草假字數躰あり。いづれも皆古の借字として用ゐられしものゝ、眼やすく書きなだめられて一種の形をなせるものなれば、其本字無きはあらず。左に其各躰の草假字の本字を擧げん。

あ。阿より出づ。

え。盈より出づ。

お。於の俗字の扵の草なり。

か。可の草なり。

か。閑の字の草なり。

き。起の字の草なり。

き。支の字なり。支は普通の音は「し」なれども、「き」と讀むこともあり。令支といふ地名は、「れいき」と讀むべき由、師古の注の漢書に見えたるありといふ。されば『支』の假字は『支』の字の草書なり。

く。具より出づ。

け。希の呉音は「け」なり。字は『希』より出でたること云ふまで無し。

もは毛より出づ。『毛』『𠂢』『も』と思ひめぐらして其然るを知るべし。

せは世の字より出づ。

すは寸の字より出づ。『寸』『寸』『す』と變じ來れるのみ。

以上は皆普通に行はるゝ草假字の其本字より出て來れるを說けるなるが、此外に、つの字、への字の二字は、本字定かならず。つの字は肥人書に本づくといふものあり。非なること言ふまでも無し。今つの字に就て種々の說を擧げんか。細井廣澤は『門』の字とし、貝原篤信は『鬪』の字とし、澤元愷は據るところを知らずとし、契沖は川の字とし、信友は片假字のツより出でゝ本は川の字なりとす。予はまた予の臆說を有すれども猶前人の諸說を破りて自己が見を敢て立てんには、足らざるところあるを覺ゆれば今は言ひ決むること無し。への字もまた其本字について定說無し。『邊』の字の省ける文なりといひ、『八』の字の省なりといへるは同文通考に擧げし說にして、『丶』の字の轉用ならんとは契沖の考へなり。『皿』の字の草とするは元愷が說、『反』の字の略ならんといふものあり、『閉』の字の省ならんといふものあり、紛々として定まるところ無ければ、平春海も、への字の事は諸家の說的當せりとおぼゆる釋なし、皿の草とせんとすれば、古書に皿の字を假字に用ゐたる例無し、反の字の省とせんは、片假字の上にはさもあるべし、草假字のへ文字を片假字より來れりとせんは如何と疑へり。されば、への字もまた其本字を言ひ決めがたし。んの字は、はぬる音をあらはす假字

こは『己』の字より出づ。自己の己の字の呉音は『こ』なり。『己』の變じて『こ』となり『こ』とはなれるなり。

えは衣の字より出づ。衣の呉音は『え』なり。『衣』『え』『え』と變じ來れるなり。釋文雄が兄の字の訓の『え』によりたるならんといへるは非なり。

ては天の字なり。『天』『て』『て』と思ひめぐらして知るべし。

あは安の字より出づ。『安』『あ』『あ』と思ひめぐらして其然るを知るべし。

さは左の字より出づ。『左』『さ』『さ』とおもひめぐらして其然るを知るべし。

きは幾の字より出づ。『幾』『幾』『き』『き』と變じたるさま推し知るべし。

『ゆ』は由の字の變なり。『由』『ゆ』『ゆ』なり。

めは女の字より出づ。これは『と』の字と同じく訓によれり。澤元愷は『妙』の字の草書なりといひたれど平春海の云へる如く女の字なるべきこと論なし。

みは美より出づ。美の呉音『み』なり。『美』『美』『み』『み』となり來れるなり。

しは之の字より出づ。『之』『え』『し』『し』とおもひめぐらして其然るを知るべし。

ゑは惠の字より出づ。惠の呉音『ゑ』なり。字躰は『惠』『惠』『ゑ』と變じ來れるなるべし。

ひは比の字より出づ。或は曰く飛の字の省文の飞より出づと。

そは曾の字より出づ。『曾』の『曾』となり『そ』となれるなり。
ねは禰の字より出づ。禰の呉音は『ね』なり。『祢』『ね』となり、『ね』となりたるなり。
なは奈の呉音なり。『奈』『奈』となり、『な』となりたるなり。
らは良より出づ。良の呉音によりたるなり。『良』は『良』となり、『ら』となりたるなり。
むは武より出づ。武の呉音『む』なり。武の草書『む』なり。
うは宇の字より出づ。『宇』『宇』『う』となりたるなり。
ゐは『爲』の字の草躰なり。
のは乃の字より出づ。乃の字の呉音によりたるなり。『乃』『乃』『の』と次第に變じたるなること明らけし。新井白石が肥人書より出てたらんかといへるは取りがたき説なり。
おは『於』の字の變なり。
くは『久』の字の變なり。久の呉音は『く』なり『久』『久』『く』と變ぜるなり。
やは『也』の字より出づ。
まは『末』の字より出づ。
けは『計』の字より出づ。『計』『け』と變じ來れるなり。
ふは『不』の字より出づ。

(細井廣澤は『と』の字は『土』の字より出でたりとなし、澤雪城もまた『土』字の破草となし、日本紀通證には『止』の省文とも『苫』の省文ともなし、信友は『趾』の省文の『止』の省文なりといへり。今皆取らずといへども、こゝにたゞ其說を存す。新井白石岡田眞澄等の『止』の草となすもの疑ふべからざるなり。)

ちの字は『知』の字より出づ。『知』は『ち』となり『ち』となれるなり。

りの字は利の字より出づ。『利』の『り』となり、『り』となり、『り』となれるなり。

(片假字の『リ』より來れりとする說あり。)

ぬは奴の字より出づ、奴の呉音は『ぬ』なり。『奴』の字の草書の『ぬ』となること言ふまでもなし。

るは留の字より出づ。留の呉音は『る』なり。『留』の『る』となり『る』となれるなり。

をは遠の字より出づ。遠の呉音『を』なり。『を』は『遠』の甚しく畧されたるなり。

わは和の字より出づ。『和』は『わ』となり、『わ』となれるなり。

かは加より出づ。加の音『か』、『加』の草躰『か』なり。

よは與の字より出づ。與の省文『与』にして『與』の草『よ』となり、『よ』となれるなり。

たは太の字より出づ。『太』『た』『た』と次第に變ぜるなり。

れは礼の字より出づ。礼は禮と同字にして音『れい』なり。『い』となりたるさま推すべし。

草假字は如何にして支那の本字より出で來り、終に我邦特有の文字となりしか。今卒然として草假字に對ひ、其本字を求めんとすれば、甚だ求め易からざるものあり、學者の考説また必ずしも一致せざることあり。されど草假字は所謂借字の略書せられしによりて自然に簡易の體をなすに至れりとのことは、那の字に於ても明らかに見ることを得べし。

今試みに今日行はるゝ草假字は如何なるところより出で來れるかを示すべし。

いの字は以の字より出で來れるなり。『以』を草書にして『以』となり、『以』となり、『い』となれるなり。古人の筆蹟を檢めなば、いの字の左の方の畫の却つて小に、右の方の畫の却つて大なるを見ん。

ろの字は呂の字より出で來れるなり。『呂』を草書にして『呂』となり、『呂』となり、『ろ』となれるなり。

はの字は波の字より出でたるなり。『波』を略して『波』となり、『は』となり、『は』となれるなり。

にの字は仁の字より出づ。

ほの字は保の字より出づ。『保』の『保』となり、『ほ』となりたるなり。

との字は止の字より出でたるなり。上にあげたる、いろはにほ等の字は、字の音を假りたるなれど、これは字の訓を假りたるにて、止の字は「とゞまる」の義にて即ち『と』の訓あるより、『と』の音を表する字としてこれを用ゐたりとおぼしく、『止』の字『と』となり、『と』となれるなり。

假字は此の困難を排除すべきために簡易なる表音字として自然に現れ來れるものなり。其創作者は何人なりや定かならず。伴信友は空海を以て伊呂波假字作れる人なりと説きたれども、遽に信ずべからざることなり。蓋し今日表音字として吾等が日々に用うるところの草假字即ちいろは假字は、一人の手に成りしものにあらざること疑ひ無く、たとひまた某一人の手に成りしとするの證ありとするも其人は決して眞の創作者と稱すべくもあらぬ道理あれば、强ひて何人の手に成りしかを論ふの要無きなり。

されば草假字といふものは如何にして成りしかといふに、實に異しきことも無くして、前に擧げたる借字の自然〳〵に書きなためられたるより成りたるのみ。漢字の歴史を語らんは事長ければ姑く擱かんが、漢字の書體數ある中に最も字畫を簡易にして、見るにも眼やすく、書くにも筆ずくなゝらしむる書體を行書といひ草書といふ。さて此の行草の二體は我が邦人の爲出でたることにあらねば、草假字もまた實は我が邦人の爲出でたるにはあらず。草假字實は數々借字として邦人が用ゐ習ひたる漢字の草體に過ぎざればなり。

かく云へば、所謂草假字は支那の人によりて與へられたるものゝ如くなれど、支那の表義の字を轉じて表音の字となし、而して表音の字たるに適ふべきやう簡易の一體を賦し定めたること、實に我邦の前人の偉功にはあらずや。

邦の人は長へに邦語を以て文章を綴ることを得ず。全く支那文をもて用を辨ぜざるを得ざるの不便を忍ぶか、然らずばまた字畫煩はしき支那字を無意義の表音字として用ゐざるを得ざるの不幸を辭する能はざらんとす。今日まで邦語をもて文章を綴るあたはざりしとせば、我邦は如何なる狀態に陷り吾輩は如何なる運命に沈めるや、まことに測り知るべからざるものあるべく、また邦語をもて幸に文章を綴りたりしとするも字畫煩はしき支那字を無意義の表音字として長へに用ゐ來りたりとせんか、その不幸の大なることまた言ふべからざるものありしなるべし。幸なるかな、我邦の前人のこゝに於て假字の二種を發明して不便不幸を排除しつ、長く後人をして其德に頼らしめたることや。

二種の假字の未だ世に出で來ざりし前の邦人が記錄をなすに困難なりしは言ふまでも無し。安萬侶が古事記の序に、已に訓に因て述べたるものは詞心に逮ばず、全く音をもつて連ぬれば事の趣き更に長し、といひたるは如何にも當時の人の苦心をよく盡したるべき言なり。邦語を漢文にせんとすれば飜譯の難言ふべからず。さりとて邦語をもて文を爲し、漢字をもて音をのみ傳ふるの具とせんとすれば、本來表義の用をなせばこそ漢字の煩はしきも其猶功を認むべきを、單に表音の文字としては、其功あるべきところは失せて煩はしきかどのみ殘るなれば、其煩はしさ堪ふべくもあらず。前人の困難推察すべきなり。

其字の本義の如何は顧ざるものなり。假名といふものゝ發明せられざる以前の書を見れば、吾等は實に上代の人の苦んで字を借り音を表はせるを認む。珥比麼利莬玖波塢須擬氏異玖用加禰莬流、伽餓奈倍氏用珥波虛虛能用比珥波苦珥伽塢、と書きて、僅に、にひばりつくばをすぎていくよかねつる、かゞなへてよにはこゝのよひにはとをかを、といへる歌を表せりとせば、如何ばかりか上代の人の煩はしきおもひを忍びて不便極まることを敢てせしかを知るべく、またかゝる不便煩累のために如何ばかり人智の流通の妨げられ人文の發達の害はれたるかを知るべし。

蓋し文字に表義の文字と表音の文字とあり。支那の文字の如きは、音を表せざるにはあらねど、表義の文字に屬すべきものにして、例へば山といふ字魚といふ字の如く、文字たゞちに各其義を表せり。アといふ文字、カといふ文字のごとき我邦の文字は、表音の文字にして、アの字カの字などは何の意義をも表せるにあらず、たゞアの音カの音を表せるまでなり。表義の文字の必ずしも音を表せざるにはあらず、表音の文字の必ずしも義を表せざるにはあらねど、文字の性質上此の二の大別あるなり。さて我邦もと文字無くして、支那の文字を借り用ゐしが、彼邦と我邦との語形語法の異なるより、我邦にて我邦ぶりの語形語法を用ゐて事を記し情を抒べんとすれば、勢ひ表音の文字として本來は表義の文字なる支那字を用ゐざるを得ず。然らずば我邦は我邦にて別に新に文字を作らざるを得ず。支那との語法語形の異なるにも關せずして邦人の文字上に新機軸を出さゞる上は、我

ること、實に匡房の云へる如く此朝に根ざしたりといふべきなり。文字は即ち支那の文字なり。されど我支那の文字我邦に渡りてより、我邦人其利を被りたること實に測るべからざるものあり。されど我邦と彼邦と語の形を異にし、また語の法を異にすれば、我邦の事を記し、我邦人の情を述べんとするに當りて、少からぬ不便あるべきは免かれ難き勢なり。まして祝詞宣命謠歌の類は、たゞに其義をのみ傳ふれば足れりといふべきものにあらず、其言の葉のつゞきざまをも誤謬無きやう傳へては叶はぬものなれば、こゝに借字といふこと起らざるを得ざること、これはた免かれざる勢なり。

借字とは、其字の音を用ゐて義を用ゐず、彼邦の字を借りて我邦の語を其まゝに現すをいふ。また稀には字の義に屬ける我邦訓を用ゐて、其義は顧ず其訓の語の形のみを取れるもあり。これらの借字は、支那と我邦と其語を異にし、而して我邦別に文字無きより、音の符として生ぜざるを得ざりしところのものなりしなり。たとへば比苫の二字を借りて人といふ義と、「ひと」といふ音をあらはし、務露夜の三字を借りて窖屋の義と「むろや」といふ音とを表すが如きは、全く其字の本來の音をのみ用ゐて、其字の本來の義は用ゐず、彼邦の字を借りて我邦の語を其儘にあらはせるものなり。

沙邪禮浪、浮而流、長谷河、可依磯之、無蚊不怜也と書きて、さゞれ浪、浮きて流るゝはつせ河、よるべき磯のなきがさぶしさといふを示せる如き、沙邪禮は即ち前の例に同き借字にて字音を用ゐ字義に關せざるものなり。無蚊と書きて無きがと讀ますする蚊は即ち字の義に屬ける我邦訓を用ゐて

の手よりして小銃なるものを知るに至らしめしが如くなるべし。

第四　假名の卷

我が邦上古に文字といふもの無し。たま〱上古既に文字ありきといふ説をなすもの無きにあらずといへども、畢竟ずるに後人の言にして遽に信ずべからず。大同三年に齋部廣成宿禰が撰びて上れる古語拾遺の序に、蓋し聞く上古の世未だ文字あらずといへる、大江匡房が筥崎宮記に我朝始て文字を書し結繩の政に代ゆることは即ち此朝（應神帝朝をさす）に創まれりといへる、また三善淸行が昌泰三年の勘文に、上古の事口傳に出づといへる如き、古人の言皆我邦上古に文字無きに一致す。蓋し前人吾等を欺かざるなり。上古文字無きは那の邦か然らざらむ、別に疑を挿むを須ゐざるなり。

蘇那曷叱智、天日槍等は、早く我邦に來りたれど、これらの人も文字を傳へたりとは見えず。其後神功皇后の新羅を討ち玉ひてより、やうやく文字も我邦に入りやしけむ。正しく明らかに史に見えたるは、應神天皇の十五年に百濟王阿直岐といふものを我邦に遣はせしが、この阿直岐能く經典を讀みしかば太子莵道稚郎子これを師として學ばせたまひたるを、我邦人文字の用を知りたる最初とすべし。これより漸く文字を知るもの我邦に多くなり、從つて文字を用ゐること行はるゝに至りた

今や獨逸の「まうぜる式」佛蘭西の「ぐらー式」英吉利の「りー式」澳國の「まんりへる式」伊太利の「ぞゑてるり式」等いづれも互に劣らざらんことを欲せるなれば、昨日の新は今日の舊となり、今日の奇は明日の凡となり如何なるもの丶生じ來るも知るべからざるの勢あり。鉛彈は今や小口徑銃の施條をして効無からしむるに近しとて其質の軟弱なる點甚だ嫌はれ、白銅彈等採用されんとする傾あり、大口徑の小銃より小口徑の小銃の方効力多かるべしとして研究せらる丶あり。駸々として歩を止めざる兵器の改良進歩は底止するところを知らざらんとす。

大砲は非常なる進歩をなし、「あ丶むすとろんぐ會社」にては百十噸砲即ち砲の長さ四十三呎八吋、施條部の口徑十六吋四分の一、彈丸の力厚さ一碼の鍛鐵板を貫くといふにて其猛力あることを知るに足るものを製出せるに至れり。而して此巨砲二三人の力にて小銃を弄するが如く動かし得べしといふに至つては、誰か器械の力の大にして人間の智の爲さゞるところ無きを感せざるものあらんや。此他猶砲に速射砲あり機關砲あり、彈に破烈彈あり榴彈あり、拳銃獵銃の微に至るまで千樣万式專門の士ならでは知悉し能はざるほどの多數の品類あり、今こ丶に擧げんことは、固より我が能くすべきところにあらず。おもふに是より我邦の人士の兵器に就ての發明、たゞに、村田有阪氏等が單發連發銃に止まらず、肥後氏山内氏等が信管に止まらず、下瀨氏等が火藥に止まらず、必ず續出勃發して、歐米をして我に學ぶところあらしむること、昔時種子島時代に於て、朝鮮と明とをして我

しといふ。種子島時代の銃と今日の村田單發銃とを比較して其進歩の實際を云はんか、古銃は施條無く、今銃は施條ありて彈丸の飛行の路を畫一ならしめ、遠く達し深く徹らしめ、昔時のは前裝式にして戰場に搠杖替搠杖を携へ、其彈藥を裝するに煩はしき物と少からぬ時とを要せしが、今のは後裝式にして兵士はただ既に藥筒によつて一塊の物と爲されたる彈藥を裝するや否や搬軌を引くべきのみ。昔時のは火繩式なれば、急に應すべき態度を取つて戰場に在る時は一日に火繩を費すこと六尺、千人の兵一月の間に十六万尺の火繩を要するが如き賢からざる不經濟を敢てせざるべからざるの狀を生じ、隨つて伊達政宗の臣加藤太といふもの丶如く火繩火藥を悋むの情を生じて大事を過らんとするの事無きを保せず、且雨覆といふものを爲るとも烈風強雨の時は火繩の火の消えざるを保すべからず、云ふべからざるの不便の幾干と無く伴ふを免れず。今のは藥筒の後端に雷管付着し居れば總て是等の不便無し。昔時のは圓彈なれど、今のは長彈にして彈頭蛋形を爲して空氣の抵抗を殺ぎ、昔時のは箭を三たび放つ間に彈を一發放つに過ぎず、今のは箭を一たび放つ間に三發も四發も放つべく、連發銃に至つては箭を放つ如きに比すべくもあらず、昔時の銃の有效距離は幾干なりしや明かならず、今の銃は千五百碼にも超ゆ。昔時と今との比すべくもあらぬこと知るべし。

單發銃だに猶昔人が夢にも思はざるべき進歩の地位にあり、連發銃は我邦にて用うる村田式のもの八連發にして其火藥は無煙なり。昔人これを見ば辟易して嗟嘆せんのみ。

搬軌を二段下しにして一段おろせば火蓋自ら啓き二段下せば打放つやうになせる二段おろし改良式によつて全く除かれたり。此他各流派の競爭によりて進步改良の點少からざりしは疑ひ無かるべきも如何にせん泰平の世にて武を用うるの地無かりしと、今日の如く鳥獸を獵することを中流以上の者の敢て爲さゞりしとより、儀式的のみの演習射的の繰返されしに止まりたれば、左したる進步改良の實蹟も無く、また多少の進步はありしとするも、其間西洋にては長足の進步をなせるがために、德川氏の末に至りて、銃砲の實地に復用ゐらるべき時來りたる際は、我邦に三百年前より存在せしものは實地に用ゐられて其効を現はすこと無く、新式の舶來銃用ゐられて、各其特質の長短を現したり。火繩銃の斥けられて燧擊銃用ゐられ、次て雷管打の銃用ゐられ、後裝銃用ゐらるゝに至りしは、幕末より明治の初年に至るまでの間に行はれしことなるが、此間に我邦人の爲しことゝして稱すべきことは殆ど無く、ただ西方の諸國が急足の進步の跡を追ひて其及ばざらんことを務めたるの觀ありしのみ。

明治の文明は未だ甚だ誇るに足らざれども、既に軍器に於ては若干の記載すべき事實を有し、其事實の價値、前代の邦人が德川氏以前に有せし如き低きものにあらず。村田氏有阪氏が盡力に成れる單發村田銃、幷に連發村田銃の如きは、其製造簡易にして機械の複雜破れ易き弊を去ることを得たるが上に、運用至便命中正確、我國兵器として外國の兵器に對し、優に相當の地位を保つに足るべ

鐵を用うるに至りしこと、彈を鑄るに一連十丸づゝの鑄型を用ゐしこと等は、皆銃砲の行はるゝに附隨して起りたることなり。

されど當時の銃砲の今日に比ぶれば甚だ幼稚なりしは云ふまでも無く、當時の驍將本多忠勝をして、鐵砲一發の間には箭は三度放ち能ふほどに、いかほど烈しくとも鐵砲の中に乘り入ることは安し、さし箭の中には入り難しと云はしめ、また蒲生氏卿をして、足輕は鐵砲を放つや否や其鐵砲を「わつそく」に掛けて敵中に切り入るべしと令せしめしにても推すべく、皆其の玉籠めと發火とに煩はしき手數と少からぬ時間とを要せるを表はしたりといふべきなり。されば其頃の鐵砲を手にせる兵卒も、一日の戰爭に僅々數發の彈を飛ばすに過ぎざりしこと知るべく、二銃砲の効力も左まで大ならざりしが如く思はるれど、然も銃砲の力の偉なるは、流石の武田氏が鐵石もまた比し難き猛將勇士等をさへ長篠に脆くも死せしめ、秀吉が中國攻の功を速迅ならしめ、伊達家の騎馬鐵砲をして驍名を天下に恣にせしめし等侮るべからず爭ふべからざるものありしなり。德川氏の治世には、島原陣以後砲煙彈聲の起ること無く、隨つて兵器の進歩を見ること無しといへども、此間にもまた多少の進歩ありしには疑ひ無し。大阪陣の時、水野日向寺勝成の士廣田圖書、勝成と共に明石掃部が陣を破り、敵に鐵砲さし向け、一ト聲と引鐵を下しけるに、火蓋を切り置かざりしかば火繩立消えして彈出づべきやう無く、危くも梁瀨又右衛門といふものに打取られんとしたりといふ譚の如きことは、

の將士の意を惹きし歟を見るに足るべし。天正四年にはまた南蠻船の大なる砲を大友氏に贈り、大友氏其勢の猛烈にして山河國土をも震盪するが如きをもて國崩しと名けしといふことあり。おもふに足利氏末路三四十年間に、小銃大砲の舶載されしこと決して一地方二地方のみならず、また三度四度のみならず。幾度か幾ヶ所に舶載せられしなるべし。此故に諸說紛々として定め難きなるべけれど、畢竟種子島氏の功、金兵衞淸定の勞は埋沒すべからざるもの丶第一なるべし。

鐵砲の西洋にて發明され、且つ我邦に舶載されし時、恰も我邦の戰亂相繼ぎし際なりしは大に鐵砲の流布を速からしめ、且つ其應用に於ける改良並に發明を促せること爭ふべからず、河野氏木砲、赤石火矢、內海火矢、棒火矢の類、皆是永祿より元龜天正を經て慶長元和に至るまでの間に邦人の巧思より成りしものにて、猶記錄に洩れたる發明改良少かるべしとは信ずる能はず。砲術も當時甚だ盛に研究せられて、津田監物が津田流、泊兵部少輔一火が一火流(一火は筑前の人、天正中種子島に學ぶといふ)田布施源助忠宗が田布施流、稻富伊賀入道が一夢流、井上外記正繼が井上流、西村丹後守忠次が西村流、藤井河內守が一二齋流、三木茂太夫が三木流等其他枚擧に遑あらざるほどの流派の數〻いづれも四五十年間に勃興せり。武田家の火繩の製法、米倉丹後の竹束、大野流荻野流等の小筒の火矢にて敵城を燒くこと、鉛彈ならぬ鐵の切玉を用ゐて甲冑を打貫くこと、軍馬の甲の變革、三十目程の玉をも膂力あるものは馬上にて發せしほど將士の其技に熟せしこと、楯に

鐵砲無きまゝ工夫して榎の木を彫り拔きて中空となし、玉藥を籠めて打出したる由見ゆるは、恐らく木砲の權輿なるべし。川中島の合戰弘治二年三月廿五日の夜軍に、武田信玄の士望月平太夫といふもの鐵砲をもて上杉謙信を狙ひ擊たんとせしに謙信これを怒つて鐵砲と共に平太夫を切り捨てし談は人の知るところなるが、たとひ謙信が用ゐし刀、有名なる赤小豆割長光なりとするも、鐵製の砲を切らんこと覺束なし、恐らくは平太夫が用ゐし鐵砲銅と錫との合金製なりしならんか、西洋にても往時は砲銃の類を造るに銅錫の合金を用ゐ、これを「がんめたる」(砲金の義)と稱せしなり。永祿年中河野通直と大友宗麟と和して後、通直大友の領地より鐵砲鍛冶數十人を招き致し、多く銃器を造らしめしが、猶海邊を護るには大砲こそ利あるべけれとて大砲を造らんとするに、鐵にては急に作り得べくもあらず、松の生木を刳り穿きて筒とし、鐵輪を入れて固めとし、彈藥を籠めて試みに發火しけるに、木筒裂けて保つこと能はず、繩を以て筒を絡へども同じく損ず。さま〲失敗を重ねたる後、竹の輪を造つて桶の箍の如くに緊しく締め、其後これを試みけるに、木筒初めて破れざるを得たり。こゝに於て宇麻早風の海邊には木砲を備へ付けて護りしといふ。天文二十年を以て大砲我邦に入りしとすれば、それより僅に十年ばかり、天文十二年小銃種子島に入りしとすればそれより僅に十餘年ばかりにして、我が邦人にやがて此の木製大砲の發明ありしなり。戰亂打續きたる世の勢の是を然らしめしには相違無きも、鐵砲の利の大にして功の烈しきは、如何ばかり當時

初めて渡されしなり。泉洲堺は當時繁盛なる市場なりまた製造地なりしが、堺の民は前にも記せし如く恐らくは鐵砲といふものにつきて豫て知るところにてもありしにや、遼遠なる道を厭ふことも無く、種子島まで下り來て清定に就き、造銃の術を學び歸り、堺に於て盛にこれを作り、武器の必要多かりし世に少らぬ利を博したり。當時種子島へ堺より下りしものの橘屋又三郎といふものなる由、南浦文集等には見ゆといふ。されど堺の口碑には井上某といひ傳へたり。いづれが正しきや知らず。或は共に實なるべきや。堺には鐵砲又として知られたる又三郎、或は井上某以後、德川氏の治世を通じて明治まで連綿として造銃の工人絶ゆること無く其業を繼續し來れり。

小銃は右に記せる如くにして我邦に行はるゝに至りしが、やゝ口徑の大なる大砲ともいふべき類のものは、其行はるゝに至りし因緣、小銃の方と關すること無く、全く別途に出でたるごとし。蓋し小銃の傳はりしより大砲の傳はるに至れるまでの間の時短くして、邦人をして小銃の理を推して大砲を造らしむるに及ぶの遑あらざりしが故なるべし。小銃の傳はりしより九年目にして大砲は豐後の大友氏の手に、南蠻の房酋といふものより傳へられたり。周防の國人、赤石內藏介高基といへる馬術家、これを盜み取つて長州に走り、明人に就て火藥の方を受け、終に後世に明石火矢と云はるるものを遺せりといふ。弘治元年藝州の陶と毛利との戰に、毛利方のもの陶方を襲ふて、三浦房淸が手に鐵砲六七挺ありしを奪はんとせしも奪ひ得ざりしかば玉藥の入りたる筥を奪ひ歸りけるが、

すべきを、歌さへ知らぬ異邦人を夫とせる身の心細さはそれさへ叶はず、たゞ我ひとり、泣くのみなり。されど船長も若狭の態の常ならぬを見て訝しみ、心地にても惡きや如何になど尋ねければ、おもふに任せぬ言葉づかひの、たど〳〵しくも歌の意を語りて聞せけるに、人の誠は徹るものにて、船長も若狭が其切なる情を憫れとし、時至らばまた種子島に行きて、汝をして父に見ゆることを得せしめんと慰めたり。年も改まりて、彼の船長また東方に貿易に出づるに及び、種子島に船を寄せ、若狭をして父と對面して、積る情を語らはしめぬ。此方は日頃鐵砲の底塞ぐ道を得んとのみ思ひつめ居たりし其矢先に、前年來りし其船の來りしことなれば大に悦び、底塞ぐ法を糺し問ひ、やうやく鐵を卷いて收むることを會得せしかば、こゝに初めて我邦にて鐵砲といふものを作り出すことを得るに及びぬ。清定の苦心まことに淺からずといふべし、これ實に我邦造砲の權輿なり。

以上陳べたる物語の中底を塞ぐといふを見て、今行はるゝ後裝銃をのみ眼にせる人は怪むべけれど、後裝銃はいたく後に出でたるものにて、小銃の世に出でたる初の頃は、後裝銃といふもの更に無く、皆前裝銃にて後部に詰まり塞がりたるものなりしなり。

清定鐵砲を作ることを全く會得したりければ、忽にして數十挺を造り、時堯にこれを獻じけるに、時堯大に悦び、厚く賞し、家臣等にこれを頒ち刀槍弓箭以外の武器となし、猶また薩摩の島津氏、豐筑に雄を稱せし大友氏等にもこれを贈りしと見ゆ。足利氏へは天文の十二年島津氏の手より鐵砲

長若狹の美しきを見て心動きければ、終に其法を傳へ、若狹を携へて去りぬ。我が業成るべき緒を得たる悦びは然ることながら、また其爲に我が娘を異邦人に與へて、海原遠く去らせたる心の裏の悲みは如何なりけん。娘もまた父母に別れて故鄕を海の此方に見捨てたる思ひ、如何に苦しかりけん。金兵衛清定は既に其法の大概を得たれば、日々に鎚を揮ひ鐵を鍊りて、やうやく鐵砲らしきものを造り得たるが、さて實際に當りて見れば、おもひのほかなる手拔ありて、筒の底を塞ぐことを學び置かざりければ、表面は甚だ能く似せたれど、形のいたづらに似たるのみにて、實の効は無きものを造りたるに止まりたり。清定憮然として歎息し、こは口惜くも鈍きこと仕たり、何とかして底を塞がでは叶ふべからず、と思ひはしたれど法を知らねば如何ともする由無く困じ果つるのみ。清定の娘の若狹は、父に離れて異邦人の妻となり、遠く西の方に至りしが、日の出づるにつけ入るにつけ、風の吹くにつけ吹かぬにつけ、故鄕戀しさに堪へざるものから、一日胸中の思ひに得堪へで、一首の歌を詠じて、

　　月も日も大和のかたぞなつかしき
　　　わが双親のあるとおもへば

と調は如何にも拙けれど、心の誠を言葉に綴りぬ。同じ雲水萬里の涯に在ればとて、共に棲む男の我邦人ならんには、歌の心をも悟りて我が憂さを慰め呉るゝこともあるべければ、聊か心を寛くも

親み、船の長、一人は牟良叔舍といひ一人は喜利支多孟太といふものなる事をも知り得たりけるが、此時はじめて牟良叔舍等が有てる物に、長さは二三尺ばかり、鐵を張りて筒となせる其本に機關ありて、藥を盛り鉛彈を裝し置けるに火を點ずれば電火雷聲忽ち發して彈の飛ぶところ壁を穿ち垣を摧き、飛禽走獸も避くるに遑あらざらしむるものあることを見たり。時堯これを聞きて、其器二挺を購ひ得、これを鐵砲と呼び、日夜練習を怠らず、其年九月の節句の日より的をかけて撃ち試るに中らずといふこと無し。時堯の臣等も、始は怪みて恐れしが、漸く之を學ぶことの利あるべきを悟りて、われ等も學ばんと云ひ出でける。時堯乃ち篠河小四郎といふものをして火藥調合の法を學ばしめ、刀鍛冶八板金兵衛清定といふものをして鐵砲を造る法を學ばしむ。こゝに紀州根來寺の僧杉の房といふもの、この事を傳へ聞きて遙に敎を乞ひしかば、時堯津田監物といふ門人を遣はして一挺を杉の坊に贈り、火藥の法と發撃の道とを傳へしむ。津田監物は杉の房と同く紀州の那賀郡小倉の人なれば、或は津田監物は杉の坊が使などにてやありけむ、この監物は即ち後年津田流または自由齋流と稱へられたる砲術の祖なり。

八板金兵衛は鐵砲製造の事を時堯に命ぜられしより、鐵砲造る術を西人に問ひしが、西人等これを秘して敎ふることを欲せず。金兵衛是非無く、我が娘に若狹とて年若く美しきがありけるを船長に示して、鐵砲造る術を學び得させ給はんには我が女を奉りて箕箒を執らしむべしと云ひける。船

正七年に鐵砲我邦に來りしとの説は、彼にて未だ發明されざるに我邦に齎されたりといふに當れば、たとひ其事眞實なりとも、然らば其傳へられしといふもの小銃にはあらで火砲の類なるべしと云はざるべからず。大永六年は彼にて小銃の發明されしより十餘年を隔てたれば、小銃我邦に來るまじきにあらず、享祿元年、享祿三年、天文七年等の説も、皆有るまじき事とは思ひ難し。されど前にも云へる如く諸説いづれも的證無ければ、姑く疑ひを存じ置きて、虚實を妄斷せず、其明らかなる傳説あり確徵ある種子島時堯が鐵砲を得たる始末を説かん。

種子島は大隅國の南の方十八里ばかりの海中に在る周四十里ほどの孤島なり。天文十二年八月廿五日、其狀異なる大船一艘島の一端西之村といふところの浦に來りしが、船中の客百餘人、其扮裝も眼慣れず其言語も通ぜざれば村人は空しくこれを怪しみ訝るのみなりし折柄、幸にして船中に五峰といふ支那人ありしかば、村の宰西村織部丞といふもの之と文字もて物語りして、僅に人は葡萄牙の人、船は商船なることを知り得たり。織部丞乃ち文字をもて言葉に代へて、こゝを距つる十三里に赤尾木といふところあり、我が宗家の世々居るところにして人家も數千戸あり、商買も盛なり、こゝは港も好からねば、赤尾木に到りて船を繋がんかた然るべしと敎へ諭し、一面には此事を島主時堯に告げぬ。時堯これを聞きて扁艇十艘をして彼の船を曳いて赤尾木に來らしむ。二十七日といふに船は赤尾木に入りたり。日向の瀧源寺の僧忠首座といふもの五峰と筆談して、しきりに相

ルド三世」の佛國を攻めし時、「クレシイ」の役に四門の大砲を用ゐたりしを、歐洲にて火砲の用ゐられし最初となすといふ。されど火藥火砲の歐羅巴より東の方に起りしは殆ど疑ひ無きことにて、耶蘇紀元一千三百十二年一千三百二十三年等に火砲の使用されたること亞拉比亞人の書に見ゆといふ。東洋にても西洋にても小銃は火砲より其行はるゝこと稍後れたること同じき現象なるが、上に述べたる如く火藥先づ發明され、其後程經て火砲發明され、さて又其後小銃は發明されしなり。小銃の使用は耶蘇紀元一千五百十七年「ヌーレンベルヒ」に於て火繩銃の發明されしが最初なるべく、今の如く雷管を用うることをも知らねば藥筒を用うることを知らざるより、當時の小銃使用者は、彈丸を飛ばすための粗粒なる火藥と、口火として用うる細未なる火藥とを携へしのみならず、彈丸、火繩、彈丸を籠むるための籠矢等を携へざるべからざりしなり。

さて外國にて小銃の世に出づるに至りしまでの狀態は、前に述べし如くなれば、我邦に小銃の傳へられしは、思ひのほかにいと速やかなりしなり。假に千五百十七年を以て小銃世に出でし最初と定むれば、千五百十七年は我が永正の十三年に當るを以て、天文十二年は火繩銃の西洋にて發明されしより僅に二十八年なり。今より觀れば、彼邦の物の我に齎らさるゝに其間二十餘年を經たりとは、有るまじきことのやうなれど、交通の容易からざりし當時にありては、新しき物の彼より我に達するには、寧ろ至當の年月なりしと云ふべきのみ。後太平記、應仁記等に見えたる文龜元年若くは永

錬金家なりし「バルトールド、シュワルツ」といふもの、我邦南北朝以前に發明せしとも云ひ、我邦の北條時宗の頃の英國人が著書に見ゆれば、其書を著せし「ルージャー、ベイコン」または「マグナス、ゲリイカス」といふものゝ發明せるなるべしとも附會し、印度の法典に據れば、火藥の發明は、いと古くして、摩西の時に既に東洋に起り、「フイロ・ストレータス」の「アポロニヤス、タイヤニヤス傳」に見えたる亞歷山王が印度の「オクシドラシイ人」を攻めんとせしも「オクシドラシイ人」は神の保祐を受け居りて城の中より雷火電光を打出し敵を惱すを以て之を攻むるを敢てせざりしとの事は、即ち「オクシドラシイ人」火藥を用うることを知り居りしことを證すべしといふものあり。伊太利の著作家「ウファノ」の如く、耶蘇紀元八十五年頃には既に支那にては火藥のみならず火砲さへ用ゐられたりといふものあり、「レーノーファーベ」の火藥火砲起源史には、火藥を說きて中古の初に希臘人幷に亞拉比亞人が用ゐたる「希臘の火」といへるものは即ち火藥なりと云ひ、其源は支那人に出づるものとせり。かくの如く異說紛々として從ふべきところを知る能はざるが中に、「ベーコン」若くは「ゲリイカス」の發明にかゝるといふ說の誤謬なることは疑ひ無し。

火藥の起源かくの如く明かならねば、火砲小銃の起源も、甚だ明かなること能はず。趙翼の說に據れば、宋金の間の頃より火砲の技は起りたるが如くなれど、姑く支那を措きて論ぜず、西洋の記錄に據れば、耶蘇紀元千三百四十六年、(即ち我が南北朝の楠正行卒せし頃の事なり。)英國王「エドワ

島は南海の一島にて地も廣からず人も多からねば、種子島を目指したりとせんは、通ぜざるところある議なり。さすれば、明人の手よりするも、葡萄牙人等の手よりするも、我邦人の手に鐵砲若くは類似のもの〻與へられしこと時堯以前に絶えて無かるべしと信ぜんよりは、或は有りしなるべしと思はんこと聊か勝れるに似たり。前に擧げたる傳說皆憑るべきの證無しとは云へ、いづれも皆同じく天文十二年以前に鐵砲渡來せりとの事に歸し、また西國浪人の傳へしといひ、或は當時の商業地たりし和泉の堺にて得しといひ、南蠻船より大友氏の得しといふ如きは、いづれも道理ある傳說なるに近ければ、他日精細なる考證家の考索を得ば、如何なる事實の的證を得んも測るべからず。されど、假令鐵砲の我邦に傳はりしこと時堯に始まらずとするも、時堯が鐵砲を我邦に廣く行はれしむるに至らしめし偉功は決して其光輝を蝕まる〻こと無かるべきなり。

種子島時堯は、平清盛が孫左馬頭行盛の子種子島信基の末なり。信基より時堯に至るまで十五世、世々種子島、屋久島等十二島を有して變ることなし。我邦鐵砲の廣く行はる〻に至りしは實に此時堯の功による。今時堯が鐵砲を得たる事の本末、ならびに我邦人の鐵砲を造るに至りし終始を記すに先だち、まづ外國にて鐵砲を何時の頃造り出でしや何處にて造り初めしや等を大概ながら記すべし。

銃砲に要する火藥の發明は、何時の頃、何國にて何人の手に成りしか明かならず。獨逸の僧にして

氏に仕へたりといふ。田布施流といふ砲術の一流は實に源助忠宗に出づといへば岡崎に鐵砲來りしとの傳說の方は兎まれ角まれ、源助の砲術の技の祖となれるだけの事實は無きにあらざりしなるべし。天文十二年、大隅國種子島に葡萄牙の商船來りて、種子島時堯の鐵砲を其商船より得しは、確實なる證あることにて、いさゝかも疑ふべからざる談なるが、時堯の鐵砲を得たる時を以て、鐵砲の初めて我邦に渡來せし時なりと爲さんは、猶早まりたる考へ定めなるべく思はる。まことに時堯の鐵砲を得たるより鐵砲といふものは我邦に行はるゝにも至りたるなれば、時堯の功の大なるは何人か敢て爭はん。また時堯以前に鐵砲を我邦に傳へしことに就ての傳說は、前に擧げたる數條の如くいづれも精確なる證據無きことなれば、今誰か遮りて其中の一條こそ眞の事實なれと主張するものあらんや。されど、我邦と我邦の對岸なる明との交通は、足利氏以來甚だ疎かりしにあらずして、明には小銃こそ當時猶無かりし如くなれ、火砲の技既に行はれ居りしことなれば、商船の往來につけて、鐵砲若くは鐵砲の如きものゝ我邦に齎し來られしこと無しとは限るべからず。況や當時南蠻と概稱せし外國の商船の支那ならびに我邦に來りしことは決して種子島に來りしを以て嚆矢となすといふにもあらずして、其の所謂南蠻なるものは即ち我邦に鐵砲を傳へしところのものなるをや。種子島に波爾杜加爾國の商船の來りしも、蓋し種子島を目指して來りしにはあらざるべく、風のため、潮のため、若くは地理に暗かりしか其他の事故のため種子島に到り着きしなるべし。種子

柏原天皇の御宇に當つて、南蠻國より鐵砲渡來すともいひ、或は永正七年渡來すともいふ。但し其の何の國如何なる人の手に入りしや明らかならず、且つ之を傳ふる書に因りて文龜元年と永正七年との差異あれど、共に島津義久の使の天文十三年十二月二日新に獲たる鐵砲を當時の將軍足利義晴に獻ぜる折に說き述べしところにかゝるのみなれば、深く信を置くには足らずといふべし。永正七年鐵砲始めて渡りし由は天文十六年村上義清越後へ落ちて上杉謙信に物語りし言葉の中にも見ゆれど、是また容易に信ずべからず。降つて大永五年に鐵砲二挺甲府へ來り、又同く六年井上新左衛門といふ西國浪人鐵砲を携さへ來たりて武田信虎に示せしといふ傳說あれども、いづれも確證あるにあらねば、果して然りしや否や疑がはし。享祿元年和泉國堺の港にて玉瀧坊法印賴慶といふもの鐵砲を購ひ得て、小田原の北條氏綱に獻ぜしといふ。堺にて得しといひ、西國浪人の齎せしといふ如きは、皆聊か然もあるべきことのやう思はるれば、或は他日此等の說の證の見出さるゝこともあるべき歟。姑く其傳說を存して虛實いづれとも臆斷せざるを可とす。享祿三年の夏、南蠻の商船九艘豐後の府內に來りければ、國主大友入道宗麟、保首座といふ僧に命じて、彼の船中に三官といふ明人ありしを賴ひ筆談して意を通ぜしめけるに、蠻人等數多の貨を獻じけるが、中に三尺ほどの火器あり、其名を鐵砲と名づけたりといふことあり。天文の六年には、鐵砲三州岡崎に來りしといひ、河內の人田布施源助忠宗といふもの、此年六月南蠻國に赴き砲術を學び得て歸朝し、後戸田左門

安政丙辰の旭莊が記あり。曰く、筑前國鋸島或掘レ地獲ニ此器一、以贈ニ仙崖師一、師又贈ニ素兄一、爾後三十年、不レ識ニ其何物一、近砲術書渡來、中載ニ此圖一、曰ニ蒙古砲一、始知弘安中虜兵所用也。其砲維新用ゐしところの臼砲に似たりといふ。されど、果して其砲元賊の用ゐしところのものなるべきや否や遽に定め難し。筑前の土中より砲の出でたればとて、直に元賊の用ゐしところなりとせんは、考慮精しからざるに似たり。下文に說く如く大友氏頃にも鐵砲の渡り來しことあればなり。

阿老丁は讀んで「あろうわつぢん」と爲すべし。A-Lao-wa-ding (Alai-eddin) 木發里は讀んで「むふぁり」となすべし。(Mu-fa-li) 蓋し西曆千二百年六十年に當つて蒙古の有するところなりし「だいあるべえかる」(Diarbekir) の北東の一堡塞「まをふぇりん」あたりなるべしといふ。亦思馬因は讀んで「いすまいん」となすべし。I-sz'-ma-yin (Ismael) 旭烈は讀んで「ひゅれい」となすべし。(Hu-lie) 阿亦二人共に波斯の技人にして「かたばると」を造り且つ用うることに妙を得たり、と西人の書に見ゆ。「かたばると」は即ち投石車なれば、二人の造りしところ今の所謂鐵砲なるものとは大に異なれるが如し。砲の字は本來礮に同じく投石車の義なり。

其後久しくまた我邦人は砲熕の類の新しき物に接することと無かりしが、文龜元年辛酉の歲、即ち後

れば、今の銃砲とは、其名同けれど其實甚だ異なるやう思はる。されど當時初めて知りたるものを描きたる事なれば、圖もまた悉く眞なる能はざるべきは必ず然るべき理なり。元の至元八年、即ち前に記せる戰の前々年、元の世祖使を遣はして砲匠を宗王阿不哥に徵せしかば、宗王阿老瓦丁、亦思馬因の二人をして馳せて京師に至らしめし由、元史に見ゆ。阿老瓦丁は回々氏、西域木發里の人、亦思馬因も回々氏、西域旭烈の人、二人共に砲を造ることを善くし、阿老瓦丁は潭州靜江等の郡を破るに其功を顯し、亦思馬因は元兵襄陽を攻めし時、城の外、東南隅に砲を置きて撃ち立て、襄陽城中のものを怖れしめしといふ。亦思馬因の襄陽を攻めし時、一砲譙樓に中る、聲震雷の如しとある文を考ふれば、精粗の差こそあれ大概は今の大砲の如きものにやとも思はる。蓋し支那にても火砲の業は宋金の間に起り、亦思馬因の造れる砲をも新砲とせるに據れば、當時の砲も未だ精なるに至らざりしことと推測るべし。阿老瓦丁等が當時我邦に來りしことは無きやうなれど、其後また元の至元十八年、我紀の弘安四年に元賊再び寇せんとするに臨み、賊將范文虎、馬二千を禿失忽思の軍と回々砲匠とに給せんことを請へることあるに考ふれば、文永十一年、弘安四年兩度の來襲の際、賊軍には回々の砲匠ありしことなるべし。兎に角邦人の火砲といふもの世にあることを知りたるは、元寇の時を最初とす。

世に元賊用ゐしところの鐵砲ならんといはるゝものあり。筑前國鋸島より掘り出せしものにて、

銃砲の類は凶器なれば、これ等の物有る人の世は、まことは疎ましき限りなり。されど、既に世に此等の物あれば、我邦にもまた此等の物無かるべからず。理に據り暴を制し、安を保ち侮を禦ぐの用をなすもの、此等の物に超ゆるは無し。おもへば忌はしき物もまた頼もしき物ならずや。乃ちこれ等の物の無きより有るに至り、粗より精に至るも、人の世の進み行く路に當りて蹊み過ごさゞるを得ざるの勢なりといふべきなり。

我が邦人は元の寇に遭へるまで、世に火器のあることを知らざりしなり。元の忽必烈立ちて王位に即きしより十五年、我が邦にては龜山天皇の文永十一年、元の大軍我が對馬壹岐を屠り、肥前の海沿ひなる地方に攻め寄せ、轉じて筑前の博多にも攻め寄せたりし時、太宰少貳入道覺惠、大友出羽守頼泰等防ぎ戰ひしが、十月三十日の博多の戰には、我軍賊の鐵砲のため大に打惱ませられ、猛將勇士の死物狂ひとなりて爭ひし甲斐も無く、今津、佐原、百道原、赤坂あたりまで侵されたりき。我が邦人の鐵砲といふものを知りしは、恐らくは當時の事なりしなるべし。初めて雷と響き電と迹る鐵砲に出會ひしことなれば、我が軍の苦み困ぜしも無理ならず、士卒の死傷は云ふまでも無く、其の恐れ驚きしさまも推し測らる。敗れしは將士の罪にあらず、我に無きの利器彼に在りたればなり。

元の軍が當時有せし鐵砲は何如なるものなりしや、詳しく知ることを得ず。蒙古襲來の圖などに據

紙つくることの衰へ廢れたるところも無きにあらねど、幾干もあらずして、百事緒に就くと共に、全体に於ては非常に發達し、各地方共同改良の實を擧げんとするの聲高く、新しき品の出づるも少からず。官にては印刷局に抄紙部を置き、外國の智を使ひて、我邦の材を用ゐ、古昔には比類ふべきものも無き精好の品、例へば紙幣用紙の如きを製し出し玉ふあり。西洋紙の用多くなるまゝに、明治八年には王子製紙會社立つあり。西方はに神戸製紙場立ち、中部には潤川水源を利用して不二製紙會社立つあり、其他一々擧げ難しといへども、其盛んなること恐らく開國以來未だ曾て有らぬことなるべし。そもそも國の文明の度は其國民の紙を使用する度と相應すとぞ聞く。されば今我が邦の抄紙の業甚だ幼しといふにはあらねど、猶外國より輸入する紙無くては叶はざるまでに年々歳々我が國民の紙を費すは、實に喜ぶべきにはあらずや。されど、是は我が國民の文明の度の進みたる上よりして喜ぶなり、紙つくる業の上より云はゞ、我が國民の用うるほどの紙をば、我が邦にて造り出でず輸入を仰ぐは口惜からずや。紙つくる料となすべきものゝ生ひざる邦にはあらざるなれば、願はくは我が邦の抄紙業猶一段の進歩あれかし。吁々、誰か立つて明治の紙神となるものぞ。紙の史の大概を述べて一度は喜び一度は憾みて、こゝに我がおもひを聊か記す。

第三　銃器の卷

ることを得ざるは、此篇を筆にするにあたりて深く憾むところなり。又、奉書は越前の岩本、大瀧、新在家、定友、不老といふ五ヶ村より出づるを上品とし、丹後、因幡、加賀、美作、阿波、土佐其他より出で、鳥卵紙は越前より出づるを佳とし、攝津の名鹽より出つるを次とす。（名鹽は近古名ある產紙地なるが今は衰へて亡びたるに近からん）平安朝頃の紙を產せし國々を擧げたれば、今また紙譜によりて、德川氏の頃の紙を產せし國々を擧げんに、山城、大和、攝津、美濃、信濃、上野、下野、陸奧、出羽、伊豆、常陸、若狹、越前、加賀、丹波、丹後、但馬、因幡、出雲、播磨、美作、備中、備後、安藝、周防、長門、淡路、阿波、伊豫、土佐、石見、筑前、筑後、豐前、豐後、肥前、肥後、日向の三十八國なり。德川氏の頃の抄紙の業の盛んなること想ふべし。文化の初め江戸の中川儀右衞門和唐紙岩石唐紙を造り、文政十一年には、同人深川扇橋邊にて、縱十間橫五間厚さ二分ほどなる寶來紙といふ紙を造りたりと傳へらる。今云ふところの「ぼうる」の類の物歟。何のために然るものゝ造り出でしといふことを知らず。天保二年には、前に述べし江戸の竹屋紙は大に其製法を改め、十文字紙を以て材料とすることに心づきしより、當時士民の多く愛で用ゐし黑聖多默革に擬したるものを造り出だして大に行はれたりといふ。壺屋紙も蓋し此の前後に於て、今の如きものを出すに及びたりしなるべし。

明治の御代となりては、すべての制度の變革と共に、一時は全國製紙業の狀態も大に動きて、或は

越前の國より傳へしとなり。寶永に至りては、土佐に於て、上には山内侯の紙方役所を設け、多くの金子を捐て丶其業を庇ひ護らる丶あり、下には播磨屋九郎左衛門、掛川屋喜三兵衛、譽田屋彌左衛門等の資金を出して大に紙造る業を盛ならしめんと計るありければ、其功いかでか空しかるべき、土佐は忽ち夥しく紙を出すに及べり。享保には長門の美禰郡東分村の茂兵衛といふもの、乞丐の言を用ゐて同郡製紙の濫觴をなし、寶暦には茂兵衛其功によりて齋藤の姓を賜はりしといふ。紙をもて革の用をなさしめたるは何時を初とすべきか明かならねども、伊勢に名高き壺屋紙の起原は天明年間にありて、同國飯野郡稲木村の池部清兵衛といふもの丶透き徹り見ゆる油紙樣のものを以て烟草袋などを造りしを、後年壺屋紙と人の稱ふる革の如き紙の出で來し源泉とす。これと殆んど同時に、其のいづれが先かは知らねど、江戸四日市にても山本清藏といふもの、同じ類の革擬ひの紙を造り初め、後年竹屋絞の煙草袋と世のいふところの者の二葉を出しぬ。これより少し前安永の六年京都の木村青竹の遺稿、紙譜といふ書世に出づ。其書の成りしは享保十三年即ち出版に先だつことと五十年餘なるが、當時の紙の品類産地などは、これを外にしては能く知るを得べき書無く、まことに今より百數十年前の我邦抄紙の業の大概を知るべき料なり。其記せるところによりて推測るに、大鷹類は、備中、越前、丹後、阿波等より出て、備中の産を勝れたりとするに似たり。備中の大鷹類は、同國松山城の廣瀬にて柳井勘左衛門といふもの漉き出せし由なるが、此人の事蹟を詳しく知

其他は多く美濃より納めしなるべく、御簾屋と稱へしものは、即ち武儀郡の御手洗、上野、小倉、蕨生、大矢田、谷口等の村々に數戸づゝありて公用の紙を抄きしものなり。されば美濃の國は、平安朝より引續きて紙つくる業に就きては他の諸國の後に落ちず榮え來りしこと疑ひ無し。因幡の氣多郡河原村の抄紙業は、寛永の頃彌平といふものゝ美濃の人より其法を傳へしに起り、石見の津和野侯領地、濱田侯領地の抄紙業は、慶安に至つて愈盛んになりたり。此頃より元祿の頃にわたりて、石見の美濃郡紙祖村の人に齊藤六左衛門といへるものゝ、大に紙つくる業のために勤め勵みたる其功沒すべからざるものあり。周防の澁熊の廣兼又兵衛といふものゝ良き紙造り出したるも、此の六左衛門が力に依り、濱田侯の封内に製紙の業の盛んになりしも、此の六左衛門が濱田領の楮樹植ゑ增し方ならびに抄紙世話方を命ぜせれたる折の盡力に依るといふ。されば石見周防の地、今も多く紙を出すは、其地楮の類を生ずるに適へると、藩主の奬勵宜しきを得たるとに因るとは云へ、六左衛門の如き志篤き人ありたるに依ることも亦多かるべく、濱田侯の當時其功を賞して苗字帶刀を免したるも、まことに然るべき事なりといふべし。大和の吉野は、これまた早くより紙造れるところなりしが、萬治の頃、吉野のもの、紀伊の有田郡三田村の笠松佐太夫といふに招かれて其處に赴きしは、後に紀伊をして保田紙といふ一種の紙を產するに至らしめたる基をなせり。因幡の智頭郡家奥村の紙を出すに至りしは、同國の河原村の方の美濃の法を傳へしとは異にして、元祿の頃、

右の理由あることとなれば、泉貨と書くを正しとすべし。上に説けるが如くなれば、長曾我部元親の暴力もて罪無き人を苦めしは、思のほかの結果をば世に出せしとも云はゞ云ふべく、そゞろに人をして天の意の測り難さを感ぜしむ。しかも志を得て勝ち誇りたる元親は今はた何の徳をか我等が住む世に遺し置けるぞ。縦へ當時に威は揮はざりしとも、泉貨等が遺せし其功は、三百年後の今に至りて猶未だ盡きず、日々夜々に若干かの人を益しつゝあるなれば、彼の虚しき名を擁きて眠れる梟雄よりも、此の實の利を施して逝ける隱士こそ世に取ては謝すべき人なれ。越前の此頃良き紙を出せしは、柴田勝家が封地に就きし時、奉書類を織田信長に獻ぜしといふにて知らる。降つて慶長の頃なるべし、加藤清正の筑後の溝口より矢壁新左衛門、下川孫兵衛、原四兵衛等合せて十人を従へて肥後に入り、加藤細川二家の用紙を抄き、且民間にも其餘りを賣ることを得せしめしは、後年肥後に名高き細川紙其他の產あるに至らしむるの基をなせり。當時筑後に紙つくる者の多かりしは右の談にて推すべく、また越前、土佐、周防、長門、伊豫あたりに紙つくる業の行はれしも、確としたる證こそ乏しけれ猜するに餘りあることにて、伊豫の大洲に周防山口より楮苗を移し植ゑ、それより土佐の野山に及ぼせしも慶長の頃なりしなるべしとの傳説さへあり。美濃の紙つくる業の盛んなりしは、天正の十五年に紙漉槽に税を課したる事あり慶長の十七年に漉屋と稱する抄紙業者の諸役を免ぜられたる事ありし等にて知るに足る。徳川氏の用紙は、奉書、大鷹などはいざ知らず、

て榮えたるもの丶一族なりしが、國虎もまた先に元親に滅されしより同く成山村に隱れ居て、憂きが中にも二人互に問ひつ問はれつ暮し居けるに、ある日旅の人彥兵衞といへるが此村を過ぎて、圖らず二人に打對ひ、紙つくる業を語り出でたり。彥兵衞は伊豆の修禪寺紙（修禪寺紙は伊豆の國修禪寺村より出づる紙にて中古以來の名高き紙なり、橫に漉簀の痕ありて色淡く赭し）の製法に精しかりしかば、二人は彥兵衞を引留め、主客ともに力を協せ、終に七種の色紙を造り出すに及びたり。前にも說ける如く土佐は早くより紙を出せるところなれば、三人の功を成せるも、其因るところ無きにはあらざりしなれど、後年山內氏の土佐を領するに及びて、彥兵衞を擧げて紙改役とせし事ありたりといふに付きても彥兵衞等が功の少からざりしを知るに足る。こゝにまた伊豫國宇和郡に四郎谷村、林乘村、廣田村、倉村の四村を領して西園寺某の旗下に屬き居りし土居太郎左衞門（一說には兵頭太郎左衞門勝正といふ、兵頭氏の土居氏と後に改めしにや、野村の農土居七藏といふものは太郎左衞門が後なりとぞ）といへる人ありしが、此人も長曾我部元親のため領地を奪はれ、世に出づべくもあらずなりて、名を泉貨と變へ、平野村といふところに落魄れ住む身となりたる後、心を紙抄く業に寄せて、質いと硬き一種の紙を創めて造り出したり。後の世泉貨紙と稱ふるは即ち此人の造り出せしものにて、伊豫泉貨の名今に高く、用途も廣く產額も大なれば、宇和郡の紙抄く業するものども今猶泉貨を崇め祀るといふ。俗に仙過の二字を以て此紙の名に當つるは誤謬にして、

抄紙の業をなすもの斷えて復興りしにもあるべきか、過つて石見の國の紙つくる業此時より興るなど、混じて思ひ迷ふことなかれ。されど此頃此村々にて紙を抄き初めしは、後に鹿足郡より紙を出すに至りし萌芽なりしには疑ひ無し。後醍醐帝の頃には土佐に於ても紙を出せし由なり。されど是亦土佐の抄紙の業此時に興りしとにはあらず、遠き前より紙を出せしことは疑ふべからず、足利氏の末の頃、大内氏は明に我邦の紙など贈りしやに云ひ傳ふ。おもふに、紙は支那より我邦の産の方、はるかに品優りたり、又大内氏の封地は、平安朝の昔時より明治の今に至るまで紙を出すところなり、されば、然る事もありしなるべし。支那の人の我が邦の紙を賞美せるは、我邦の刀を賞美すると同じければ、大内氏我邦の紙を贈りたりとは、實に然もあるべき事なり。永祿の頃、周防の玖珂郡波野村に中内與左衞門といふもの出で、田をつくること難き地に楮を植ゑ紙を造ることをなし、後の人より呼んで紙祖神となさるゝに至れり。蓋し其人の行ひ篤くして遺せる功の少からぬに因りてなるべし。天正は群雄割據して戰ひ已む時無かりし頃なるが、奇しくも長曾我部元親の其暴威をば逞しくせし嚮は紙つくる業に及びて、由緒ある人を紙抄く者の群に逐ひ入れしより、紙抄く業の上には、氏も無き土民ならぬ人を得たるまゝ、其人によりて利を被りぬ。元親の頃、土佐に蘇我清宗といふ人ありしが、元親の爲に殺されて家亡び、其妻尼となり養甫といひて辛くも土佐郡成山村といふところに潛み居たり。養甫と緣ある安藝三郎左衞門といふもの、これも安藝國虎といひ

に當時に在りて其業を做したりしに似たり。今諸國の紙を造る地に就て其傳說を尋ぬれば、或は德川氏以後に業を起せしやう云ふもの多けれど、そは源平氏以來世久しく平かならざりしために、或は業の中絕し或は傳の湮滅したるより、平安朝の頃早くもおのれ〲の國に於て紙を製せしものありしを忘れたるによるなるべく、實は、諸國の紙を造りし濫觴は多く平安朝若は其前に在りしなるべし。

平安朝以後、抄紙の事につきては久しき間別に聞くこと無し。おもふに地によりて、其業の廢れるあり、起れるあり、或は漸く盛んなるに至れるあり、漸く衰ふるに至れるありしなるべきが、大概は、取り出でゝ言ふべきほどのことも無くて過ぎしなるべし。還魂紙といひて、一度紙となりて用ゐられたるものを解きて復抄ける紙は、吾嬬鏡の注に據れば、淸和天皇の崩れさせ玉ひし時、勅書を集めて抄き成したる紙に大小乘の經を書寫したることありしを嚆矢とすべきやうなるが、おそらくは然もあるべきか、縱ひ然らずとするも其起りは大概其頃近くあるなるべし。降りての世にいふ紙屋紙は即ち還魂紙なり。

北條氏の世を治めし弘安の頃、石見の津和野を吉見弘信といふ人の領せし折、其封内靑原村、柳村、大井谷村などにて始めて粗なる紙を抄き出せし由傳ふ。靑原などの村より紙を出せしは或は其時より始まりしなるべし、されど石見にて紙を製せしは猶遠き前に在ること旣に說ける如し。或は一時

知ることを得、随つて紙つくる業の行はれし廣さ狹さに照らして全國に於ける紙つくる業の盛なりしか盛ならざりしかを、大概ながら測り知るべし。主計寮式によれば、伊勢、尾張、三河、駿河、甲斐、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、近江、美濃、信濃、上野、下野、若狹、越前、加賀、越中、越後、丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、播磨、美作、備後、安藝、周防、長門、阿波、讃岐、伊豫、土佐、大隅、薩摩等は紙を貢する國々なり。されば紙の產額は、今を去るとの遠きにしては先づ豊なるかたなりと云ふを得べき歟。抄き造ることの法も、後世と甚だしく異なること無く、たゞ楮など紙の料とするものを煎爛かす時にあたり、今は蕎麥稭の灰汁を用うるを、木連といふものゝ灰汁を用ゐたりと覺しきが異ると、また一つは、今は直に簀の上に紙料と黄蜀葵漿との混りたるを受けて抄くなれど、當時は簀の上に或は紗を敷きて、それにて抄けるが異るとのみ。されば抄きかたも甚だ備れりといふべく、簀の痕無からしめんがために紗を簀の上に用ゐたる如きは、心つかひも密やかなりと稱ふべし。檀紙は皺あるものなるが、此頃より後猶少時の間のは、板に貼り付けて乾かさず繩に懸けて干したる上、朝露にあてゝ少し打ちたるならんと藤原貞幹のいへるは實に然なるべし。こは聊か迂濶なる方法を執れるやうなれど、古の人の事を做す法然もありしなるべし。

平安朝の頃、抄紙の業の開けたること上に述べたる如くなれば、後世紙を出すところの地、大抵既

る源順が和名抄に載せたる斐薄紙は即ち當時上流の人の消息文などに多く用ゐたる薄葉といふものならん。この紙また多くは色あるものにして、美しかりしことと、はた品類多かりしことは、物語類に散見する記事によりて知らる。諸國より産せしとは云へ、肥前日向などより多く出でしかと前人の說あり。檀紙は、みちのくのまゆみの紙といひ、みちのく紙といへるものにて、其肌繭の如く皺理あり、厚く白くして美しく、枕の草子の心ゆくものゝ中に擧げたる、白き淸げなるみちのく紙にいとほそう書くべくはあらぬ筆して文かきたる、といへるもの即ちこれなり。源氏物語末摘花の巻にみちのくがみの厚肥えたるに匂ひばかりは深からしめ玉へり、とあるもまたこれなり。たゞし古の檀紙は、檀即ちまゆみの樹の纖維もて造りしや、今の檀紙は楮もて造れるものなり。また陸奥紙といへば陸奥より出でしや、近古陸奥より檀紙の如き良き紙を出すこと無く、延喜の頃にも陸奥の紙を上ること無し。これ聊か疑ふべし。紙屋紙、苦參紙などのことは前にあげたれば、復言はず。蓋し平安朝の紙すく業は甚だ進みて、其品類も多く、産額も夥しく技術も巧なりしといふを得べきまでに至りたるなり。

平安朝頃の紙の品類は前に擧げたれば、産額と技術に就て聊か述べん。當時全國にて産せしところの大概幾何ばかりなりしやは、もとより知ることを得ざるところなるが、幸ひにして、いづれの國ぐにて紙を造ることを爲せしやといふことは、主計寮式に紙を貢する國々を擧げて記したるを以て

参紙は果して苦参もて造れる紙にて、さる紙ありしや否や定かならねど、麻布紙以下數種の紙は、明かに知れわたりて疑ひも無く當時に行はれしものなり。麻布紙は麻布を細く刻みて造れるものにして、最も貴きものなりしこと言ふまでもなく、黄、縹、紅などに染めなして、宣命を書する折など用ゐられしと見ゆ。恐らくは美濃の國にて圖書長の監督を受けつ抄き出せし歟。今も美濃は良き紙を出す地にて當時より既に紙を貢ぐことありし國なれば、内藏式に、年料所藏色紙四千六百帳、云々毎年差二圖書長一人一遣二美濃國一造レ之といふ文あるより、又麻布紙は色紙なるべきにより、然は推測るなり。

猶博く考へて明かに言ふべし。麻布紙よりは下りたる品も見ゆれど、これはた普通用うべきものにあらず、位記を書する料として用ゐられしなれば、其質の佳きことと思ぶべし。上總國、下野國にて此の紙を抄き出せしなり。穀紙は、穀即ち楮なれば、今の美濃紙などの如く楮もて造れるものなり。これを出す地の多きは論無し。(穀は楮にして穀は百穀の總名なり、誤つて疑を狹むなかれ)斐紙は蕘花の一種結香と同し瑞香科の植物もて抄ける紙にて、後に鳥卵紙と云ふ類の者なるべしといふ。源氏物語の明石の巻に、此度はいといたう萎びたる薄やうにいと美しげに書き玉はりなどいへるは、即ち此紙の薄手に抄きたるものなるべし。薄葉、中葉、厚葉なぞいふは皆鳥卵紙の類にて、鳥卵紙といふは即ち厚葉、薄葉とのみいふは鳥卵紙の薄く抄きたるものなりしなり。延喜より少し後れた

ら、これ皆人麿が紙つくる術を敎へたりといふを德として祀るといふにはあらず、おもふに石見、長門、周防は紙を出す地にして、人丸は石見の戶田村かたらひの里に生れ出でたりとの云ひ傳へもあり、また實に石見の守たりしこともあり、且其文事に名ありしより、人丸神社も其地方に多きものから、人丸紙つくる術を民に敎へたりとの傳說の出でしにあらずや。こは我がひそかに獨り考へたるに過ぎず。或は眞に人麿民に紙つくる術を敎へしやもまた知るべからず。そは姑く措きて、平安朝になりては、平城天皇の頃に紙屋院を設け、官用の紙は多く其處にて製せしめたまひたること、猶今印刷局に製紙の一部を置きて、官用の紙の民間にて製せしめがたき類のものを造らしめたまふが如くなりき。後には紙屋には還魂紙のみを造り出すに至りしより、紙屋紙といへは、還魂紙のことゝせらるゝやうになりしが、初は種々の良き紙をも造り出せしこと疑ひ無し。源氏物語の鈴蟲の卷にも、新に阿彌陀經を造るに、唐の紙は脆く、朝夕の御手ならしにもいかゞとて紙屋の人をめして特に仰せごと給ひて心ことに淸らかに抄かせたまへるに、云々とあり。枕草子にも紙屋紙の名見ゆるにて知らる。

延喜の頃の紙つくる業の大に開けたるは、延喜式によりて推測るべく、また其の製しかたも窺ひ知るべし。蓋し當時造り出されし紙は、麻布紙、麻皮紙、穀紙、斐紙、檀紙、紙屋紙などにして、阿苦紙、苦參紙などいへるもありしなるべし。阿苦紙は如何なる紙なりや未だ詳しく知らず、また苦

頃には、既に紙つくる術大に開けたりと覺しく、大和の法隆寺東大寺などに今獨存するところの紙、麻紙あり、楮紙あり、精粗一ならず、蓋し支那朝鮮より朝廷にて召し寄せられたる紙にはあらざるべしと思はるゝは、これより幾後干の年も隔たらぬ延喜年間に出でたる延喜式に、凡年料所造紙二万張（廣二尺二寸長一尺二寸）料紙麻小二千六百斤（一千五百六十斤穀皮一千四十斤斐皮並諸國所進）云々など、我邦製紙のありさま大概なから推測り得る記事あり。またこれより前いくほども隔たらぬ大寶の頃の大寶令には雜紙手四人雜紙を造ることを掌るといへる文あるによりて必ず大寶延喜の間なる天平頃に我邦の人の紙を造る術は漸く進みたるべきを勘ふるに足ればなり。

光仁天皇の寶龜元年に造らせられし百万塔に納むるところの無垢淨光陀羅尼など、往々にして存するものは其質堅く厚くして、色は持に蟲を避けんために黄蘗の汁もて染めたると覺しく黄を帶びたる茶色なせるが、恐らくは楮紙なるべし、千餘年を經たる今日猶其の巻けるを展べて亘久しくして後これを放つに直に再び舊の狀に復りておのづから巻くまでに硬しといふ。其質の良きこと知るべきなり。これより前文武天皇若は元明天皇の頃、柿本の人麿石見の國の守護たりし時、民に紙をつくる法を敎へ、石見をして多く紙を出す國となるに至らしめしといふことは紙漉重寶記緒言に見えたれど、口碑に傳へしといふまでにて、據るべきこと無ければ信じがたし。石見の美濃郡高角に人丸大明神の社あり、長門の萩にも同じ社あり、周防あたりにても人丸明神を尊む習はあることなが

とも言ひがたし。

神代のことは暫く措きて言はず。人の世となりては推古天皇十八年の春三月、高麗王僧曇徴法定を貢す、曇徴五經を知り、且能く彩色と紙墨とを作し、幷せて碾磑を造る、蓋し碾磑を造る是時に始まる歟、と日本書紀に見えたるを、國史に見え初めたる紙に就いて紀事とす。此文を熟くも讀まずして、我邦紙つくる技は、曇徴といふ僧の爲し始めしやう云ふ人あれど、正しく紙つくること曇徴より起りしならんには、明かに記さるべし、如何で碾磑を造ること此時に始まる歟と記さるゝついでに紙を造ること此時より始まると記されざることあらんや。文の勢を以て考ふるに、紙を造ることの濫觴是時にあらざることと推測るべし。

應神天皇の十六年百濟の王仁經典を傳へてより既に三百年ほどなる推古天皇の御代までの其間、我邦に紙を造ること無かりしと想はんは、少しく道理を缺くに近からすや。されば紙を造ること曇徴の時に始まりしにあらざるべきこと殆ど疑ひ無し。口惜きは、古き書の記すところ無きと推古天皇以前の紙などの存するものもあらぬとにより、何時何人の如何なる紙を造りそめしといふことを知るを得ざることとなり。

曇徴が造りし紙は如何なる紙なりしや、弱くして裂け易き紙なりしかば聖德太子更に楮紙を作り出し玉へりとの傳說あるによれば、餘り良きものにはあらざりしなるべし。其後奈良朝の天平勝寶

り、油を施されては水を防ぎ濕を避くるの功を遂げ、紙衣となり、紙布織となつては帛に代り、壺屋紙となり竹屋絞となつては革に代るなど、其用らるゝ途の廣きこと一々擧げて言ふべからざるほどなり。猶世の進み人の賢くなるに從ひ、如何なる用あるものとならんか豫め測り知るべからず。其効用の一ツあらんだに、人の世に利を與ふること少からぬものとすべきを、まして其効用の數限り無きに於てをや。まことに紙は吾人に幸福を與ふること大なるものといふべきなり。

我國にて紙の初めて製し出されしは、何時の頃のことなりしや明かならず。天照大御神の天の岩戸に隱りませしとき、諸の神等廣く厚く稱辭を啓して再び世に出させ玉はんことを祈りたまひしことあり。其時天兒屋命天の香山の眞坂木を根こぢにして上枝には八咫鏡をとり懸け、中枝には八坂瓊曲玉をとり懸け、下枝には木棉とりしてゝ、太玉命をして其を執り持しめたりと古き書に見ゆ。此の木棉は粟國忌部の遠祖天日鷲命の作れるところなりとは同じ書に見ゆることとなるが、其天日鷲命こそ我國にて紙を作り初めたまひし神なれと云ふ説あり。木棉とは即ち紙を作る料となるところの楮の纎維にてつくれるものなれば、楮の用は神代に於て既に知られしこと云ふまでも無し。されど楮の當時織物として麻と同じく用ゐられしは疑ふところなけれど、紙として用ゐられしや否やは今急にこれを定めがたし。たゞ阿波國には今も天日鷲命を祭れる社ありて、其祝が家に、天日鷲命は紙を作り初め玉ひし神なりと云ひ傳へたるは眞實のことなり。みだりに斷じては、然なり

あり。嗚呼誰か立つて日本の陶器を世界に冠たらしめ、日本文明の光輝に世界の人民をして浴せしむるものぞ。いたづらに前人の餘澤に浴して、自ら立つて人を益することを知らざるは、大丈夫の欲するところにあらざるなり。

第二　紙の卷

書は人の智慧のあつまれる府にして、紙は書の文字を載するものなり。されば我等は、書といふものゝ功德の大なることをおもふと共に、紙といふものゝ功の大なることもまた思はずばあらず。支那の人は、紙無かりし前は、竹を編みたるに文字を記し、西洋の人は、革を鞣したるに文字を書しといふ。其不便なりしことは言ふまでも無く、また其書の得がたかりしことも察するに餘りあり。紙といふもの出來てより、何の國も、人の智慧の注ぎて溜れる海にも比ふべき書、また人の智慧の源となりて湧く泉にも比ふべき書といふものは、廣く行はれ傳はるに至り、隨つて一旦發したる人の智慧は空く廢るといふこと少くなり、人の智慧の積り〳〵たる果は文明の光の滿てる今の世のさまをなすに至れるなり。紙といふものゝ、世の開くることに與かりて力あるは、極めて大なることといふべし。

紙の用は文字を載するの具となるのみならず、障子に貼られては、光を節し、温を保つの料とな

上の現狀に考ふるところありしやも測るべからず。淡路燒の創立に苦みし珉平の如きも然り。四國は廣大の地なるに關はらず窯業地無きに近ければ、阿波と其主を一にせる淡路に於て陶磁器を產するに至らんには、其便益を我に受くべきものゝ甚だ少からざるべきは論無し。たとひ珉平は自ら此意ありて事を爲さゞりしとするも、淡路燒の勃興するに至りしは、此事情之を然らしめしこと少からざるべく、蜂須賀氏の獎勵せしものまた此故に出でたるなるべし。

明治は前代とは甚だ異なりて、從來は日本の內の陶器なりしもの今は世界の中の陶器となりて、從來は日本の內の窯業者なりし者今は世界の中の窯業者となり、而して從來は日本の中の評によつて其地位價値の定られしもの今は世界の評によつて地位價値の定らるべきものとなれり。日本內の競爭に止らず世界內の競爭となれり。外國の智識技術をも我之を取て以て我用となし得べき代りには、我が邦の智識技術をも彼また取つて以て彼が用となさんとするに至れり。我が邦の名工は彼の邦の名工と戰はざるべからず、我が邦の製產は彼の邦の製產と戰はざるべからず。彼の邦の技一步長ずれば我が邦の技は一步後に立たざるべからざるに至れり。交通の關係は至つて便なり、經濟の關係は至つて敏なり。一國の文明は直に世界の文明に影響する世となれり。我が邦は世界の文明を吸集するのみにて足るべからず、將に世界の文明にも光明を贈與すること無かるべからざる世となれり。いたづらに我邦の加藤景正吳祥瑞あるを誇るなかれ、西洋にもまたパリシーの如き感ずべき窯業者

に於ては寧ろ益無きもの丶如くなれど、我邦に於ては甚だ然らず。至當の方法、或は好事に近き施政も、皆佳良なる反應を現はして、到るところに好成績をあらはせり。特に德川氏の人民に對する政綱の一として、且つ我邦人民の溫順優美なる性質の一として、上よりは職業世襲を勸め、下は自らこれを敢てしたる結果は甚だ偉大の効力を現はし、名工の後には名工出で、巨匠に嗣ぐに巨匠ありて、九谷に、有田に、京都に、薩摩に、秘法の受授全く、發明の續出盛に、經驗の積まる丶と共に其技精きに至るの勢を成せり。たゞ一地方の法を惜みて、他地方に傳へざらんとせし如き卑むべき保護等は、無効に歸して、人文の發達は私しすべきものにあらざるの天意を實際に於て示したるに過ぎず。商業上の關係もまたもとより蔑視すべからざるものなり。九州の窯業の發達せるには長崎港の商業上に力ありしことの與れること論無く、會津相馬の二侯が、各其臣をして、製陶の業を起さしめしは、其封僻遠の地にありて、西部諸州の民の如く陶器を使用するの幸福を其民に受けしむる能はざる經濟上の現象より、東北に窯を設けんとせしなるべきこと云ふを待たず。尾張の新窯甚だ盛なるに至りしは、當時東部地方に製陶地無かりし折柄、京都よりも猶東に在りて、我邦の主力の存せる江戸に近き地なれば、經濟上の勢ひとして瀨戸は關東に陶磁器を供給する唯一のところとなりしより、江戸市人をして一般に磁器類を呼ぶに瀨戸物の語を以てするに至らしめしこと論無し。民吉の奮起せしもの、一は土地の歷史より刺激もせられたるなるべけれど、一は當時の經濟

らず。蓋し他邦の美品を眼にすれば、之を摸し、若くは之を凌駕せんと欲するは氣概ある人民の常の情にして、此情やがて一國の文明を致し衆庶の福利を増進するの基となるものなり。されば天然に陶器を製するに適する土の出づる出でざるは其地方の窯業をして興り或は興らざらしむるに力あること論なけれど、地質上のみならず、交通上の勢よりして、大に一地方の窯業をして盛不盛あらしむべきこと論無し。本土の中樞として百貨の輻湊し、智識の匯會する京都付近に窯業の盛にして、また大陸諸邦と交通の近き西部諸州に同じく窯業の盛なるに至りしは實に此の爲なり。平安朝前後の三韓支那との交通は藤四郎以前の我邦窯技に關し、北條氏前後の宋元との交通は藤四郎頃に關し、足利氏の明との交通は祥瑞頃に關し、豊臣氏以後の明、清、南方西方諸外國との交通は、また其頃に關せること疑ふべからず。大躰に於ては我邦東方に交通すべき國を見出さゞりしより、西方諸國の、外邦交通の衝に當りて外邦の物を眼にする機會多きところの窯業發達せるは交通上の之を然らしめしこと多きに居るといふべきなり。次に歴史上の關係もまた甚だ力多きことと言ふを待たず。瀬戸に民吉の奮起せる、薩摩に十左衞門の奮起せる如きは言ふまでも無く其地の歴史の此等の人々を刺激して立たせしなり。時代の風俗好尚の及ぼす力はこれまた甚だ大にして、點茶の流好は足利時代より豊臣氏ならびに徳川氏初年の製にかゝるものを雅致高趣ならしめ、元祿以後華美の風俗は、諸方の窯業地をして漸く五彩金銀絢爛の器を出さしむるに及べり。人爲の保護奬勵等は大躰

るところにして金屬の器に磁釉に似たるものを燒きつけて、鍋皿の類をつくり、或は屋瓦の代用品を造る。坩堝の進歩は明治の遙に前代に勝るところのもの丶一なり。蓋し、智識は東西の粹を集め、材料は各國の產を得る今日、これより明治の新工人の、往昔の加藤景正、吳祥瑞、後藤才次郎、野々村仁淸、薩摩の十左衞門、琉球の致元致眞の如きものの出づるあらんには、歐米の精を奪つて我邦の美を發し、世界に雄を稱せんも決して空望にはあらざらむとす。それ常滑は精美妍麗のものを出すところにあらず、もとより、肥前薩摩、九谷、京都等に肩を比すべくもあらぬ地なり。然れども一旦鯉江父子の新窰を案出するや、今は其功によりて工人の依りて立つもの千人に餘り、これがために福を被るもの限り無からんとす。父子が我邦に贈る功、間接直接に如何ばかりそれ大なる事ぞや。常滑の小だに是の如し。況んや窰業を以て天下に鳴るの地に於てをや。其民人に慶福を與へ、國家に利益を贈ること、量り知るべからざるものあらん。是の如くにして人文進步し、是の如くにして人類幸運に到らんとす、其功また我邦に對してのみならずといふべし。區々蠻觸の爭ひに誇りて戰史に名を止むるが如きもの、何ぞ云ふに足らんや。苟くも明治の民として立つあらんとするもの、いたづらに心を虛榮に馳すること無く思ひを實利眞福に寄せて、其擇むところを知つて可なり。

加藤景正以後の窰業の發達は大概上に述べたる如し。凡そ陶磁器の發達は以上に照し見るも、朝鮮支那が我邦に影響せること甚だ大なるを見るべし。呂宋安南交趾ならびに阿蘭陀の影響もまた少か

ふもの、結合成りて、濫製を禁め、內外の信用を博せんと勤むるあり。七年の墺國博覽會に名聲を得、同九年の米國博覽會には深海墨之助、手塚龜之助、深川卯三郎等彼國に航して、外國の好尙、技術等を捜るあり。九谷には九谷陶器會社起りて改良の實を擧げ信用を鞏くせんとするあり。淡路の珉平燒は珉平の姪によつて復興され、出雲は脆弱なれど雅致ある製品を出し、會津、相馬、共に赫々の功無けれども、泯滅に至らず、瀨戶、備前、薩摩、猶其名を保つ。京都には清風與兵衞（現存）精良高雅のものを製して、蔚然として古名工と肩を比するあり、道八六兵衞（共に四世、たゞし六兵衞今は六世歟）共に先人を辱しめず。乾也（今亡し）は東京に雅器を造り、河原德立は彩畫燒付に新法を出して鮮姸巧麗大に內外人の賞讃を博し、今戶燒以外に一の窯產物無かりし東京を重からしめ、歐洲の學術を應用して堅硬精良の器を出さんとする植田學士の孜々倦まざるあり、工業學校の起るあり、東京はまさに智識の技術の中樞たらんとするの勢あり。されど從來窯業を以て鳴る各地方もまた各學校を設け良工を出さんとすれば、其いづれか今後の窯業に大功を樹つるの人を出すべきかを知らず。常滑は頑硬粗大のものを出すを以て製產額を增し、美濃も明治十二、三年頃は盛大を極めたり。明治に至りて新に起りし窯技の中にて偉とすべきは七寶燒にして、濤川惣助氏の名は人の知るところなるが七寶燒一技は他日別に說くべし。また新出の窯技中にて大なるは煉瓦製造なるが、皆歐米の製に倣ふのみ、未だ邦人の一機軸を出せるを聞かず。琺瑯燒また近き頃起

の手により白石窰起りて、氷裂紋の白磁に彩畫描金あるものを出すあり。安政五年には（一說に慶應三年といふ、應應の方或は正しき歟。）九谷のもの京に名工永樂善五郎を招きて、畫風を高尚にし金爛色彩一段の精を益すあり。當時の名工莊三、友山等永樂に學ぶところありしは云ふまでも無き歟。取り出でゝ云ふべくもあらねど伊勢の川方燒は萬延に起りたり。京の粟田の錦光山六代宗兵衞は、在來粟田燒特色たれどまた一方より云へば缺點たる素地の淡黃色を改めて純白となし、併せて堅硬の度を增したるは文久の頃なり。元治慶應と明治の初年とは世間の動搖甚しかりければ、一時は各工業萎靡せしに隨ひて、窰業もまた盛なるを得ず、加ふるに從前の制度悉皆土崩瓦解せしため、或は侯伯の保護を失ひて、其業地に委するものあり、或は制度の頽れたるより濫製粗品を出して一時の利に眩み百年の計を忘るゝあり、歎ずべき狀況に陷る方多かりしが、一方にはまた、外國の交通大に開しより、輸出の範圍の廣まりて我が工人を幸運の靡き邀ふるあり、他邦の智識の流れ入りて彼我の間の比較より生ずる互の位置の明かなるに至れるが、我が工人を刺激するありて、喜ぶべき機運は漸くに生ぜり。名工道八の三世は明治二年を以て有田に聘せられ、三年には錦光山宗兵衞の彩料を研究して美品を出すあり。京の淸水の陶工宮川香山の橫濱の商鈴木保兵衞に迎へられて太田燒を創め、內外に眞葛の名を揚げて古來陶器に就いては聞ゆる無かりし關東に光輝を與ふるあり。有田に於ては名工辻氏の後の辻勝藏、細緻の透彫を巧にして名を發するあり。香蘭社とい

にして醬油を釀すことを業とせしが、一旦心を製陶に傾くるや、天保五年を以て尾形周平を自ら京都より招き致し、研究すること二年、周平歸るも猶怠らず、所有の地を賣つて貲に充て、親戚勇左衞門といふものより十六町の地を與へられたるをもまた賣りて業に犧牲となすに至りければ、熱心には必ず味方ある道理にて勇左衞門之に感じ弟の恒左衞門も家產を抛つて力を協すに及び、やがて茶褐色の釉鬱白色の釉を製し出したり。藩主蜂須賀氏も之を嘉して、官窰を築き、珉平をして事に當らしめければ、珉平いよ〳〵奮つて同く十四年には支那靑花、艶黑等の釉を發明し、陶質美麗彩畫鮮硏、製產の額甚だ大に、一時收入近傍十一ヶ村の收獲米價と均しきに至れりといふ。十數年の苦心まことに空しからずといふべきなり。弘化の初には薩摩天辰の窰より錦樣、龜鼈甲燒等を出し、川內其他の地方の需用に供するに至れりといふ。嘉永に至れども江戶は猶陶業に於て稱せらるべきこと無し。されど西京の人三浦乾也弘化若くは此頃より江戶に於て元祿の乾山を慕ひて樂燒に施彩釉せるごときものを出し、また介蟲花卉の類を造つて眞に逼らしめたり。伊勢の安東燒は一時廢れしが、倉田久八起つて多年の辛苦を積み、復興に力を用ゐ、終に舊樣とは異なるも他日象眼燒と稱する眞鍮線を嵌せるものを創製するに至れり。同じ伊勢なる飯野郡射和村に竹川竹齋といふもの、古萬古の作者沼浪氏の族なるをもて志を立てしにや內山宗五郞をして業を督せしめ、世に所謂射和萬古を製し出せるは安政の二年にして、同じ頃、飛彈には大野燒あり、肥前白石には京都の人走波

傳七またよく磁器をつくるを以て知らる。伊勢には森五左衞門といふもの、萬古燒の廢れたるを憾みて弟と共に陶業を興し、古萬古即ち沼浪氏の作品とは趣を異にすれども、また世好を惹くに足るの新製を出し、加賀には赤畫勇次と渾名されたる工人、八兵衞九兵衞等と共に若杉窰に名を發せり。（能美郡）名工少からざる此時代に續ける天保年間には、方救の子方壽常滑に成功して新窰を造り、現今の常滑燒の基を成せり。此間の辛苦殆ど二十年ならんとす。父子二代、此父此子、其熱心感ずるに餘あり。大和の鹿背山燒は此頃起つて支那の古器を摸し、また我邦磁祖の祥瑞が風を摸し、播磨に東山燒興りて有田の製品を摸し、青磁等を出せり。肥前にては有田に久富與次兵衞起つて阿蘭陀支那等へ輸出の道を拓き、長崎に甕山燒起つて土を支那より仰ぎ、呉須樣の器を出す。紀州侯は永樂了全を招きて自國に其技を傳へしむ。萬古は愈々改良し、九谷はます／＼勉勵す。京にては帶山六代の與兵衞粟田燒に一生面を開き、道八伏見に伏見燒をなすあり。犬山にては領主の奬勵あり、道平あり、兼松某あり、薩摩にては朴正記の苗代川の製品を精くして錦彩を美にするあり、特に此間に於て感ずべきは、彼の琉球陶業を興せし仲村渠致元の後の致眞といふものゝ自ら奮つて支那の福州に渡航し、厦門人趙世品を師として彩色法を學べることゝ、淡路の加集珉平の淡路燒を興せることとなり。致眞の福州に至りしは天保九年にして、珉平の自己が本業を廢して製陶にのみ從事するに至りしは文政十二年なりといふ。珉平は淡路の三原郡稻田村の人、十八町歩を有せしほどの富者

出せしめて、明治前天明後の間に一生面を開ける時代なるが、窯業に於ても、今人の記臆に存する名工輩出せり。先づ文化に於ては、尾張家の臣平澤九郎の雅致あるものを出すあり、美濃の多治見に瀬戸新窰の分窰として美濃燒の起るあり、對馬の嚴が原には吉田又市の起りて朝鮮瓷器を學べる如きもの、又は白磁青花のものを出すあり。京都は紛々として百華爭ひ發くが如くに、永樂全五郎了全出でゝ明の永樂年間製品を摸して紀州侯の感賞を得るあり、高橋道八出で、六兵衞二世出で、清風與平出で、水越與三兵衞出で、龜亭平吉尾形周平は相謀りて、平吉門人熊吉をして各地に製陶の法を搜らしめ、有田に倣ひて青花磁器其他の美品を出すあり。特に帶山五代與兵衞は陶質青瓷を創めて造りて禁裏に獻ずるあり。尾張には鯉江方救といふものゝ新窯を工夫して辛苦し、他年常滑燒を起すに至るの基をなすあり。九谷には吉田屋傳右衞門（一説八左衞門）宮本屋宇衞門と謀り、飯田屋八郎右衞門と力を協せて、八郎畫金爛といはるゝ赤釉金彩の鮮麗なるを出すあり、大藏壽閑のやがて興るあり。續いて文政に至るや常滑に長三郎あり、其工の名を博し、同國に豐助ありて漆を抹し金を施すの樂燒を創む。美濃には美濃燒やうやく盛に、前に比しては拙なるも宇治には朝日燒復興り、尾張犬山には犬山燒起りて支那の吳須を摸し、元祿の乾山を摸したり。名工木米、本名青木佐兵衞は名を京都に發して紀州侯に召され、青蓮院宮に愛され、清人朱琰笠亭の陶說を參考とするなど、志寛に氣高ければ、其製品も鄙ならず、摸古の作等おのづから一頭地を拔けり。幹山

しに止まれど、奥州の會津にては佐藤伊兵衞といふもの藩命によりて關西に歴遊し、陶法を學び歸りて磁器を製するに至りたりといふ。されど盛に製し出せしや否や知らず。たゞ東北に西部中部ののみ占め有てる陶業の知識の分たれたるは、此頃を以て初とすべき歟。おもふに江戸以北廣濶の地方に一の製陶地の聞ゆる無ければ、自然の勢は、前にしては相馬侯、後にしては會津侯を驅つて其足らざるを補はんとせしむるに至れるなるべし。肥前地方は依然其製品の佳と産額の大とを以て日本第一たりしなるが、尾張の瀬戸は、窯業智識の根源地たる西部とも遠く、本土の中樞たる京都とも隔たりたれば、其地は我邦陶祖とも云ふべき加藤景正の據りし地なるにも關はらず今は時勢に後れて、また人に誇るべき光輝をも有せざるに至れり。こゝに於て寛政の末年、瀬戸の人加藤民吉といふもの奮然として起て、肥前の有田に到り、四年の辛苦の末陶工某の女婿となり其法を得て歸り、初めて良好の磁器、即ち今日關東に生れたる吾人が瀬戸物といふ類のものを製出するに至れり。(一説に民吉磁器を製し出せしは文化四年なりといふ、六年ほどの差なり)享和は僅に三年なるが、此間には、民吉が九谷の陶祖ともいふべき後藤才二郎と酷肖たる事蹟を繰り返して瀬戸中興の人となれるを除きては、記すべきこと、郡山の城主柳澤氏か赤膚燒を復興せしめしと筑前侯の須惠窑に皿山奉行を設けしとあるのみ。(薩摩肥前等には前より皿山奉行ありて保護監督を兼ねしなり。また尾張侯の瀬戸中興に際して相當の保護監督ありしは云ふまでも無し。文化文政天保は詩人文人を輩

ばまた徳川氏の世の中にて元祿とは趣味異なる彩華を放てる時代なるが、肥前の波佐見窯は氷裂燒を發明して感賞を受け、唐津は領主小笠原氏の命によりて白紋雲鶴等の雅品を造り出し、幕府に獻呈して嘉納するところとなるの譽を得、備前の伊部にては、今も世人が其特式として認むる方形の酒壺を創案したり。利休、遠州等の如き點茶家絶えて、久しく工人以外の者の、所謂工匠の氣無き意匠の製陶業者に與へらるゝこと無かりしが、寛政には出雲の松平不昧侯風流を愛し點茶を好むの餘、工人善四郎に意匠を授けて高致のものを造らしむるあり。惜いかな小堀遠州を問ひたる薩摩の八藏八郎右衞門の如き工人は無かりし。されど薩摩は此頃一旦廢れたる帖左樣を復興し、又彼の十左衞門は研究を怠らず、寛政五年六月堅野の陶工星山忠兵衞を伴ひて復鹿兒島を出で、肥前筑前等の諸窯を訪ひ、長門の萩を覽、備前の伊部を過ぎ、京都に出でゝ當時に名ありし金華山宗兵衞を訪ひ、尾張の瀬戸に入り、御深井の法を搜り、伊勢に萬古安濟の秘を伺ひて復京に入り宗兵衞に樂燒の傳を受け、六年一月郷に歸りて、積年の學びたるところを大に用ゐたり。十左衞門志を立てゝ陶法を學びそめし明和五年より積算すれば殆ど前後二十五年ならんとす。また勤めたりといふべきなり。當時薩摩の造るところ白磁に金襴の彩紋うるはしく、美なること錦も如かず、薩摩の陶器絢爛鮮麗の名天下を壓せんとす。天保度に朴正記の如きを出せるもまた其餘光自ら郷人を勵ませしものあるべき歟。關東は猶微々として奮はず、江戸の今戸燒は中條某わづかに土器の瓶子を製せ

間に於て藤堂侯の命により、安濃津に起されたり。五左衛門の弟子瑞牙の手に成りて、安東燒、または阿漕燒と稱せらるゝものこれなり。當時の作の今存するもの、古萬古と共にいづれも佳品にして人に賞せらる。寶暦には肥前の松浦侯、所謂平戸燒を奬勵保護して、精品を出さしめ、後世の良工も(例せば有田香蘭社の深海墨之助氏の如し)歎賞するところの松樹唐兒の奇品の如きを出すに至り、犬山燒は尾張の犬山に起れり。錦光山三代茂兵衛は將軍家重公の命を受け天目茶碗を製し、寶暦五年に上りて、我が家聲をあげ、明和に寶山(文造)十五代の平兵衛といふもの、赤畫、堆朱、沈金彫樣、阿蘭陀摸等の製品を出し、近世の名工六兵衛の祖愚齋といふもの京都に起つて妙法院宮より印を賜はり同く八年には筑前の國に新藤安平須惠燒を起したり。明和五年は實に薩摩の小山田窰の川原十左衛門(歸化の韓人の末なり)が歳二十三にして奮起して、鹿兒島の堅野の陶場に赴き、河野仙右衛門に就て陶法を修め初めたる年なり。これより十左衛門の勉苦すること十二年、猶滿足せずして大成を期せり。

安永三年薩摩の天長村に有田の工人を聘して、平佐鄕の主、皿山窰を起し、肥前伊萬里の辻氏四代喜平次は常陸椽に任ぜられて良きものを出し、其八年には薩摩の十左衛門肥前有田に行きて修業怠らず。加賀の能美郡には九谷の傳統ならずして、別に本多貞吉といふもの林八兵衛と共に磁石を發見して、京都の工人等を招き、有田風の青花の磁器を作り出し、時の人々の賞美を惹くあり。天明

のなり。今戸燒は、かゝる世の中に僅に白井氏二世の釉を施すに至れるのみなりしが、長門の萩にては三輪休雪の四世いよ〳〵其品を出すに及べり。琉球の士、仲村渠致元といふもの元祿十五年より壺細工をなせるが、從前は土器燒締の類のみにして一の陶器といふべきほどの物無きを憾とし、致元辛苦の甲斐ありて享保の八年に陶器をつくり出し、同く十四年に白色のものを造り出したり。これ同島に良好の土ありて致元の功を早くしたるには疑ひ無きも、致元辛苦を敢てする無くば如何で迅速の發達あらん。同く十五年には致元ます〳〵技に忠に、身を孤舟に托して薩摩の鹿兒島に渡り、堅野の陶工星川忠次、林新右衛門に學び、また苗代川の溥龍官に學びたるは、其道に篤き志、國王の追賞するところなりしも、宜なりといふべし。元文度に至りて大書すべきは、桑名の豪商沼浪五左衛門といふもの萬古燒を興して後年伊勢の一國産となすに至るの端を開きし事なり。五左衛門は幼より製陶を好みて、長ずるに及び支那交趾阿蘭陀の雅品を摸せしが、其作世人に賞せらるゝに及び江戸に召されて小梅村に地を賜はり、幕府御用陶師となり、家もと萬古屋と稱せるをもて萬古燒と稱せりといふ。(五左衛門江戸に召されしは天明六年なりといふ説あり、安永六年に死せりといふ説あり、二説甚だ遠ければ、いづれか誤謬なるべけれども、其いづれに從ふべきを知らず、かされて云ふ事あるべし) 但し沼浪氏の製品は當今の萬古燒とは甚だ異にして、九谷の統に屬すべきものなりといふ。されば現今の萬古と別つため古萬古をもてこれを呼ぶ。萬古の分窰は直に寛保年

種の樂燒を起して大樋燒を創むるあり。江戸は製陶の史に於て聞ゆること無かりしが、天正の末頃にもあるべし、今戸に於て起れる今戸燒漸く發達して、貞亨に至り白井半七といふもの點茶家の用うるところの土風爐を造るに及べり。たゞ此時は既に西部諸州ならびに京都近傍にて磁器を造り出せるのみならず、尾張の御深井窯にても津金庄七の敎ふるところによりて、縱ひ其製品は後年の尾張製品の如くならずとするも、磁器をさへ造り出すに至れるに、江戸にてはたゞ今戸燒を出すに止まれること、全く製陶に適する好き土無きに因るとは云ひながら、甚く進歩には後れたりといふべし。元祿年間は、德川氏文明の最も輝ける一時代なるが、諸技藝の花と匂ひ星と照れる如く、窯技に於ても前にあげたる諸名工の存せるほかに、尾形乾山の如き人も出でたり。乾山は有名の畫家尾形光琳の弟にして、幼より陶器造ることを好み、終に乾山燒の一種を造り出せり。蓋し其陶法傳統は光悅の樂燒に倣ひ、仁淸の法をも參酌して成れるものか。造るところの品韵致に富みて精巧ならざるところに精巧なるところあり、ほの〴〵との古歌の意を寓したる香合の如き美麗高雅を極むといふ。攝津の三田燒は此頃に在つて支那の靑磁を模造して妙に其眞に逼るとの名を博せり。寶永年間に至つては、京都の帶山白色綠色柹色黑色等の畫樣を施し、享保に至つては、肥前の鍋島氏、岩屋川の官窰其秘法の洩るゝを厭ひ、大河内村に移して特に藩士等を其工に充て、精良瑩潤の佳品を造り出し、私に販賣すること無からしめたり。これ後世より櫛手と呼びて非常に貴重せらるゝも

倉崎權兵衞の樂山燒を起すあり。承應には肥前いよ〳〵盛にして分窰多くなりまさり、明暦には田代某歸鄕して相馬燒を起し、肥前三河内の彩畫は燦然たる光を放ちたり。萬治には權兵衞が弟子加田半六出雲に富士名燒を起し、支那人陳元贇歸化して尾張に元贇燒を起すあり。九谷の陶祖ともいふべき後藤才次郎は、此頃にやありけん主君の命を奉じて、當時製陶の術最も進歩したる肥前の唐津に赴き、唐津の人の秘法を惜みて容易には傳へざるを知るや、燃ゆるが如き心を抑へて、大望を推し匿し、陶家の奴と身をなして、新水の勞をまめ〳〵しく取ること三年、やがて心ならぬ女にはあれど其主が媒妁するまゝに妻を娶りて、我一生此の唐津に止まりて此處の土となるべき狀を示し、辛くも其主の許容を得て陶業に從事すること四年の後、今は盡く陶器つくる秘傳を得たりと思ふや初めて我にかへりて、妻子を振り捨て、大聖寺に逃げ歸りて主君に此の顚末を報じ、はじめて九谷燒と誇りても云ふべき佳きものを製し出したりといふ。寛文に至つては山伏元立院大隅の國に起りて、身を忘れ家を省ず、薩摩の帖佐苗代川二流の傳統に賴らずして肥前の法に基き元立院燒を起すあり。大和の三輪休雪の長門に在りて萩燒に優れる松本燒を興すあり。肥前に波左見窰の起るあり。有田の名工辻喜左衞門の磁器を朝廷に獻じて榮譽を得るあり。延寶の初年に當つて粟田に高橋帶山出づ、これ明治の名工與兵衞が先なり。天和には筑前の黑田氏中野燒を創めしむるあり。樂燒には京都の吉左衞門一入の弟長左衞門の、加賀の大樋町に行きて、飴釉と云はるゝ飴色の釉施せる一

法を洩したる罪に行はれ、久兵衛はまた、幸右衛門の罪せられたる由を聞きて、氣の毒なりとおもふ心の堪へがたさに發狂して遂に身歿りたりといふ。これはこれ寛永より少し後れて明暦の頃の事なりとも傳ふれど、いづれにしても、八藏といひ、仁清といひ心を苦め智を竭して、技術のために、自己の足らぬところのものを人に求めて補ひしことと感ずるに餘りあることゝいふべし。かくの如き人々の心血の瀝に文明の花の漸く肥えて、其後はじめて春風に爛熳と開くものなるをおもへば、我等は古人に何の言葉を贈りてか其恩惠を謝せん。寛永二十年にして正保となり、やがて慶安となり承應となるや世はいよ〳〵穩にして百工いよ〳〵開くべき時となりければ、人民の自ら立つは云ふまでも無く、侯伯の保護獎勵も少からぬまゝ、陶業はますます月に年に進みぬ。正保には粟田に錦光山起り、寶山出で、宇治には例の小堀氏によつて朝日燒起り、仁清は大和に赤膚燒を起し、尾張の徳川侯は加藤四郎左衛門十五代の孫を起して御深井燒を出さしめ、岩代の會津侯は水野源左衛門をして會津燒を起さしむるあり。肥前には中尾窯起るあり。肥前伊萬里の進歩は非常にして、東島徳左衛門といへるが其初め長崎より傳受し來りて喜左衛門といへるに授けし彩繪の法は、呉州權兵衛等が苦心により大に改良せられて、今や長崎を歷て海外に出づるに至れり。慶安に至りては、磐城相馬の中村侯其臣田代某をして京都の仁清に就きて製陶の術を學ばしむるあり、大聖寺侯其臣後藤才次郎田村權左衛門二人をして九谷村に窰を起さしむるあり、出雲には萩の高麗左衛門が弟子

謂美術眼ありて、其可とするところのものは、一代の流行をなすべきほどなりしなれば、入藏父子の敎を遠州に乞ひたるは道理なることなり。されば、後世古高取と呼び囃して珍品と稱し雅器と賞せらるゝ高尙の製品は是の如き苦心によりて成れり。こはこれ西方の人の中部の人より學びて自己が美を成せし談なるが、また一方には、中部の人の西方の人より學びて功を收めたる談あり。即ち名工の名を博して京の粟田燒を今日あるに至らしめし根源を成せし野々村仁清が上なり。仁清はもと丹波の人なりしが、年若き頃土佐の尾戸村にありて歸化せる朝鮮人佛阿彌といふものに陶器つくることを學び、元和の頃京都に出てゝ宗伯に從ひ、技を以て仁和寺の宮の仕へしより仁の字を賜はるを得て仁淸と號したり。こゝに壺屋久兵衛といふ陶器商ふものありしが、當時肥前には既に陶器の彩畫の法開けたるに關はらず京都にては猶錦手といふやうなる美しきもの作ることを能せざるを憾みとし、肥前の人にて靑山幸右衛門といふ男と心安く交れるを幸として、其人の彩畫金燒付の法を知れるを、さまぐ\に賴み聞えて、少しづゝ洩し貰ひ、仁淸に謀りて如何にもして美しき彩畫金燒付のものを造り出さんと思ひ込みたり。仁淸も自己が技藝の上の事なれば、及ぶほどの力を盡して、さまぐ\に工夫しけるが、名工の事なれば、一を聞て十をも悟りけん、終に其企畫成就して、創めて美しきものを造り出しぬ。封建の制度のむづかしげに、同じ日本の中ながら此國彼國其主を異にして、自國の祕密を洩すことの堅く禁められたる折なれば、此事聞えて幸右衛門は、自國の祕

を整備するを得て、西方に新光輝を放ち、從つて我邦中部と西部との間、古派と新派との間に、智識の交換流通嗜好の變化遷移、幾多の衝突若は融和等の事ありしなるべきより、德川氏文明の多趣多樣なる光彩は漸く現れ來りたり。此間の消息を微細に觀察せば幾多の面白き現象ありしなるべきは、下に擧ぐる名工仁清の談によりても大概を推し得べきなり。光悅空中の前後して樂燒を造りしも此頃にして、庄左衞門助右左門等の父九左衞門等と共に粟田燒を起せしも此頃なり。點茶家の巨擘小堀遠州の時好を支配して、信樂より遠州信樂を出さしめ、膳所に膳所燒起らしめ、伊賀に遠州伊賀を出さしめ、志戸呂に志戸呂燒を復興せしめし等は、皆寛永年間に屬す。今日華麗精巧をもて人の悅ぶ九谷燒の如きもまた實に此頃わづかに起りて、今日とは甚だ異なる、點茶家の好むべき陶質のものを出せしなり。丹波燒は茶器を出すに至り、唐津は後世に所謂掘出唐津を出し、薩摩、帖佐燒は着々佳品を出し、高取燒もまた良品を出す、鵤幸右衞門の伏見人形を出せしもまた元和寛永の頃なるべし。此際各地の工人の各自其業を勵みしは、推察するに餘りあることなるが、特異の例を擧ぐれば、一は筑前の高取八藏父子が京に上りしことなり。八藏は加藤淸正に從ひて歸化せし韓人新九郎の子なるが、おのれ西方の邊陲に居りて京畿の好尙を知ること能はざるより、黑田家の命を奉じて子の八郎右衞門貞淸と共に上京し、當時の好尙流行の由つて出づるところなる點茶の道に於て其最も勝れたる小堀遠州に親炙したり。遠州はもとより鑑賞に詳しく、今日にて言はゞ、所

随へ歸りしに起り、また後年肥前の一大國産たる有田焼は同じ年鍋島直茂の其臣多久長門守といへるに李參平といふものを從へて歸らしめしに基く。加藤清正は尊階といへるを從へ歸りて八代焼の源をなし、細川忠興はまた尊階を招きて上野焼を起さしめ、黒田長政は八藏（朝鮮にての名審かならず、歸化して八藏と名のれるなり）新九郎（これも朝鮮人なり、八藏の舅にして初は清正に從ひ來れるもの）をして高取焼を起さしむる等、西國諸侯の朝鮮人を歸化せしめて、其長ずるところの技により業を起さしめしもの少からず。また別に國主の慫慂によらずして、自ら歸化して窑業を起せる高麗左衞門と稱したる李敬の如きものあり。李敬は長門の萩に止まりて韋登（朝鮮地名）風のものを作れる人なり。三河内窑もまた此頃朝鮮人某によりて起りしもの。對馬窑もまた文書に其記事なければ蓋し朝鮮人の手に起りしならん歟。慶長十一年に、肥前三ッ股にて平左衞門なるもの三ッ股焼を起せる如きも、四隣諸侯の領内に新なる産業起れるより、刺衝せられ且つ誘導せられたるに疑ひ無し。これより我邦陶業は進歩の運を早めて、他年の光明ある地に達するもいと近くなれり。されど此時歸化せる諸工皆必ずしも至深の智識と最好の便宜を有せりといふにもあらねば、或は知つて博からざりしもあるべく、或は材料を得るに困難せしもあるべく、當時は猶百事緒に就きしのみといふを至當とすべし。元和より寛永に至つては、機漸く熟し來りて、從前よりの系統に屬する諸工も世の太平の運に向ひたるため、自ら智巧を發し、また慶長度に渡來せし工人等も、諸般の事

らしめ、信長の命によりて來れる明の瓦工一観といふものは、信長が安土に城を築くに當つて、明式の瓦を製して、今日の式の瓦の祖先たらしめ、天正十六年には長祐聚樂の第に參りて千利久の意匠に從ひ關白秀吉の命により樂燒を造り、樂字の印を賜はりて樂燒の名稱を始めて起す等の事あり。蓋し此頃より諸國の工人も、或は衰へたるを興し、或は新に奮ひて、漸く製作に勤めたると覺しく、備前の伊部も稻の種子壺のみを造らずして茶器等を出すに至り、又此頃より寛永に至るまでの間に朝鮮唐津といふもの唐津に於て造られたりといふ如き傳説あり。京都に於ては此頃より慶長年間にわたりて、正意、萬右衞門、源十郎、宗伯、宗三、源介、六左衞門、茂右衞門、新兵衞、吉兵衞、道味、江存等名ある工人あり。天文の頃は燒〆の土器をつくるに止まりし御菩薩の四代は茶碗を造るに及べり。降つて文祿朝鮮征伐の役あるに至つては、恰も神功皇后の彼國を征し玉ひしが當時の文明に大影響を及ぼせし如く、彼國の文明を吸集したる我邦は、急に長足の進歩をなしたりとは云ひ難きも、德川氏三百年の文明の萌芽をこゝに得たりけり。

文祿年間一旦和議成りし時、ならびに慶長三年秀吉薨じて、我師の韓地より歸れる時、出征の諸侯の中にて心ある人々は彼國の文明を取つて我國の福利を增さんと欲し、各種の工人等を携へ歸れり。後年薩摩の一大國產たる薩摩燒は、實に慶長三年島津義弘の彼地より歸るに及びて、(一說に文祿年間)彼土の人伸、李、朴、卞、姜、鄭、陳、車、林、白、朱、崔、沈、盧、金、何、丁の十七姓を

を傳へしは、景正の行きし時は不幸にして宋末亂離の折柄なり窰業に名あるところも或は衰へ居れるなるべく、道路も梗塞がりたるべければ、勢ひ景正は雅致あるところの砂器を造る法を得たるに甘んじて歸れるなるべく、祥瑞は明の時に當りて加之青華の磁器を出すところの地方に着したりしより、其法を傳へて歸れるなるべし。祥瑞以前は、肌白く滑澤なるに青く美しき色の顏料用ゐたるものは無かりしに、祥瑞歸りしより、今日の如き磁器の出づる源泉始めて起りたり。祥瑞の功大なりといふべし。祥瑞には五郎七五郎八などいふ徒弟ありしが、憾むべし製磁の原材乏しかりかりしより其徒弟等は景正の子孫の如く功を立つるを得ざりき。五郎太輔歸朝の後十餘年を歷て、大永年間に志戸呂燒といふもの遠江の金谷の北の志戸呂村に起れり、其造るところは葉茶壺花瓶の類にして、磁器にはあらず。これより世は足利氏の衰運に當りて、戰亂いよ／＼烈しく、萬民塗炭の苦にありたれば、織田信長の京畿を鎭むるに至るまで三十餘年の間は、永祿に丹波燒の微に興れるほか稱すべきこと一も無し。信長の漸く志を得て、京畿靜なりといふまでには至らざるも從前の如く騷擾せざるに及びて、天正より文明の光ふたゝび見え始め、彼の阿米夜の男の長祐は信長の命により千の利休が意匠によりて天正五年に父の遺法に基づき黑赤釉の樂燒茶碗を造り、信樂はまた、後世に利休信樂と云はるゝ雅品を出し、和泉の湊村は當時の點茶家の賞するところとなりし砂鍋を出し、點茶家の宗匠古田織部は瀨戸の工人をして織部燒と稱する草書或は紋章あるところの茶器を作

志野燒といふを起さしめたり。薩摩に窰業起れるも此頃かとの說あり。唐津の製品に奥高麗といふけ、此頃より天正までの間に成れるものなり。應仁より二十餘年を經て永正の頃に至り、萩燒は長門に起り、陶質緻密にして釉の色やゝ白く赤みを帶び、信樂燒は發達して紹鷗信樂といはるゝ雅致あるものを出し、京都在の澁谷の人元吉といふもの深草燒を改良して釉を施すことを始め、歸化人阿米夜といふもの夫婦京都にありて樂燒の一種を創めたり。當時は天下太平にして隆運の世なりといふにはあらざりしかど、義政以後點茶の事流行して、上流の人々これを玩びければ、點茶にも最も必用なるより陶器の進步生ぜしなるべく、紹鷗などいふ點茶家は、蓋し其時代の製品をして韻致高からしめたる因をなせる人なるべし。かゝる折柄、永正の十年六月に至り祥瑞五郎大輔といふ人支那より歸り來れり。此人は我邦の陶業史には、加藤景政と並び稱さるべき人にして實に我邦青華磁器の鼻祖とすべき人なり。其支那に入りしは何時なりしか明かならねど、永正の初年若は文龜頃なりしなるべし。祥瑞は伊勢松坂の工人、山田則之といひて同國飯高郡大口村に生れ、幼年より陶器を造ることを好みしが、終に彼の藤四郎景正の如く、支那に入りて其法を博く搜り、江南に在りて陶磁器を製せし後、我都に歸りて肥前の地に窰を築き、青華の磁器を製し出せり。景正が行きしは宋の世なりしが、祥瑞の行きし時は明の世なり。されば彼の邦の窰術も變化せしには疑ひ無けれど、景正の頃にも青華の磁器無きにはあらざりしに、景正これを傳へずして祥瑞に至つて始めて之

美しさ一段を増したりといふべし。また黄色釉のみ施せるものをも出したり、これを後世より黄瀬戸といふ。この二代藤四郎の末の頃弘安年間に、近江の甲賀郡信樂といふところにて、陶器を造り出せるが、當時作りしものは、たゞ僅に稻の種子を蓄へ置く壺の類に止まりしといへば、言ふに足らざることとなれど、後年信樂燒といふもの起る源をなせり。それより伏見天皇の永仁年間三代藤四郎出でゝ美濃の金花山の土を取り、後世に金花山と呼ばるゝものを造りたり。此藤四郎の存生中なるべし、後伏見天皇の正安年間、南禪寺の僧經正といふもの、深草の瓦工に陶法を授けたりといへば、深草よりも少しは陶器を出すに至りしなるべし。後醍醐帝の建武の頃、四代藤四郎、世に破風と呼ばるゝものを製し出しけるが、此頃伊賀には伊賀燒起れり。近江の信樂に近き地なれば其地より法を傳へしか、釉の色は青黄鈍白にして信樂燒より堅しといふ。肥前の唐津より堀り出すことある根抜といふ類の陶器も此頃より文明頃までの間に成れるものなるべしとぞ。これより下りて、世漸く亂れたれば、足利義政の應仁の頃まで百三十年ほどの間、たゞ應永年間に備前の伊部にて稻の種子壺などわづかに造り出でてしといふ傳說のほかは、窯業に就いて聞くところ無し。おもふに北條氏執權の間世の康かりしため少しく起りし文明の光も南北朝の亂に復失せたるなるべし。足利氏の世は、能くは平安ならざりしが、義政の文事を愛し太平を粧ひし結果としては、應仁の頃、瀨戸に伯菴といふもの起り、黄瀬戸といはるゝを造り、義政の臣志野宗信といふもの瀨戸の工人に命じて

土、釉を用ゐて作れるを後世の人唐物と呼び、其後我邦の土にて作れるを一般に古瀬戸といひ、晩年に造れるものを其號によりて春慶といふ。猶後世の茶人などの與へたる稱呼甚だ多けれど畧す。今は渡宋以前は前にも述べし如く釉かくる術をも能く知らねば、口禿手など醜きものを作りしが、今は焼き樣の次第をも傳へたれば、一切の焼物に土を以て鞘を作り底を下にして焼き出せば、釉も能く熔けて被かり、土も和ぎ馴染みて、外觀も實質も共に佳きもの成るに及べり。窑の搆へかたも、以前とは違ひて、よく火の力を散らさゞるやうに築けること疑ひ無く、所謂瓶子窑といふ進みたる式のもの出で來れるなれば、我が邦の窰業はこゝに一段の大進歩をなせりといふべし。四郎左衛門が春慶と名乘りて、世に飛春慶などいふ釉の飛びてかゝれる面白きものを造れるは、四條天皇の頃にもあるべき歟。さて一人まづ進めば一國また進む道理なれば、四郎左衛門の出でゝ今までに無きものを造り創むるに及びては、其の弟子となり、其法を學びて、似たるものを作り出せるもの少からざるべきは自然の勢なり。かくて四條天皇、後嵯峨天皇、後深草天皇、龜山天皇の頃は、漸く新しき窑法世に廣まりしなるべし。龜山天皇の文永年間に至りては四郎左衛門の第二世の人ゝ、後世より眞中古と呼ばるゝものを造り出し、黄色の釉を新に發明して、いよ〳〵美しき茶壺などつくりぬ。其製品、初代藤四郎（藤四郎とは加藤四郎左衛門を略して呼ぶ名なり）のたゞ茶褐色の釉のみ用ゐたるとは異にして、茶褐色の釉を施したるが上に黄色の釉を斑に施したるなれば、

出手といふものは悉く四郎左衞門入宋前のものゝやう云ふ人あれど、そは必ずしも然らざるべし。掘出手といふものは、渡宋以前赤津といふところにて製せしものと斷言せる人もあれど如何にや。」

さて四郎左衞門は彼地に渡り、處々に陶法を學びて後、安貞元年の八月といふに五年ぶりにて歸朝し、肥後の川尻に船の着きたるまゝ其處にて小壺を造り、北條氏ならびに道元禪師に贈りしといふ。父の元安は四郎左衞門が彼地に在りし間、如何なる罪ありてか備前の國に流され居たりしかば、其處に至りて暫く留まり、やがてまた山城の深草に潜める母の許に上りつきしが、母歿りしに及びて、如何で陶器を製するに適ふべき佳土を見出して、我が志を無にせざらんと、大和山城は云ふに及ばず近きわたりの諸州を歴廻りしが、悲しきかな佳土を見出す能はず。心も心ならざりしなるべき四郎左衞門、今は京近くに佳土も無し、さりとて此儘止むべきにあらずと、東をさして旅路に上りけるが、尾張の國に入りて知多愛知の二郡を過ぎ、其時の山田郡、今の春日井郡瀬戸村の地に來りて、初めて我が思ふ如き土を得、多年の本懐こゝに伸ぶべき緒を得たりと悦ぶこと大方ならず。終に窯をば瀬戸に築きて、支那にて學びし法に依り、壺の類を燒き出したり。四郎左衞門の造れるものは今も猶名門豪家の珍藏するところとなりて、其尙ばるゝこと一ト方ならず、織田豐臣の頃にてさへ壁ゝ黄金もたゞならず重んぜられ、小さき茶壺一つすら元龜天正の豪傑をして之を得ては悦び之を得ずては樂まざらしめたるほどなりし。四郎左衞門が佳土を得ざりし頃、支那より齎し歸りたる

元安といへり。其初聲を揚げたるは土御門天皇の建仁三年、即ち源實朝の將軍となりし年なり。幼き頃より好んで土など捏ねて器を造りしと云ひ傳へらる。やゝ長じて久我大納言道親卿に仕へしが、其志にあらねば、五位に叙せられしにも心止まらず、身の榮達を望まんともせで、年來我が邦の窰工の支那に及ばざることと遠きを慨き居たりしあまり、道元といふ僧の佛法を修めんために支那に渡航するに從ひて、海原遙に波を凌いで彼の國へ渡りつきぬ。道元は京の人にて、宋の天童の如淨禪師に曹洞の禪を授かりて歸り來りし後、我が邦に曹洞の禪を始めて興せし越前永平寺の開山なり。四郎左衞門の道元と共に彼地に渡りしは、後堀河天皇の貞應二年、支那にては宋の寧宗帝の嘉定十六年にて、其時景正年わづかに二十一と聞えたり。此頃宋と我が邦との交通は、少しは開け居りしに疑ひ無く、これより前に將軍實朝は宋に入るの志を起し、内大臣重盛は彼土の育王山に黄金を寄せたるなどの談も史に見え、佛師、醫師などの彼國より我邦に來り居しことなどあれば、彼土の產の陶器の我邦に輸入せられしも少からざるべく、彼邦の事情も心して知らんと思へる我邦人には、おぼろげながら知られたるなるべし。されば四郎左衞門の渡航も闇夜に礫など投ぐる如く心當無しに爲出でたることにはあらざりしなるべくや。世に四郎左衞門渡宋以前に尾張にて造りしと傳へらるゝ陶器あり。口禿手などいふものにて、形も釉も彼邦ぶりを學びたると覺しけれど、器の口を下にして燒きたる故に、口に釉かゝらずいづれも、精巧ならぬものなりといふ。又世に厚手掘

釉を施したるものは上に説ける如く、おそらくは平安朝の初の頃より、我邦に出で來れるなれど、猶其加銹したる器の民間のもの丶用となるまでに廣く行はれしにはあらず。釉の料も我邦に於て製し出さる丶にあらねば、舶載に待しは固よりのことにて、さては其釉の貴きことは云ふまでも無く、また加銹したるもの丶貴きは、言語に堪へたる事なるべし。朝庭宮中などにてこそ用ゐられたれ、普通の人は眼にする事だに、ほとんど及ばさりしならん。されば、加銹の法は既に世に出で、加銹したる器も、やうなく現れ出でたりといへども、猶無きが如しといふも不可なきなり。

遣唐使を遣はさる丶こと、唐末の亂に止みしが、彼支那の亂漸く平ぎ、宋の世となりて、彼土の文物復び盛んなるに及び、我邦もまた北條氏の政治惡からずして天下少しく康きに當りけるが、こ丶に於て加藤四郎左衞門景正といふものあり。獨り立つて、我邦の陶業に空前の偉勳を樹てぬ。神武天皇の命によりて推根津彦の八十平瓮を造りしより、四郎左衞門の出づるまで實に一千八百年ほどなり。此間の人民が有せし陶器の類は、以上の所説によりて其おほよそを猜するを得べければ、如何に古昔の人の、今日の我等に比して、幸福薄かりしかを、よく〳〵想ひ見るべし。

上古より加藤景正の出づるに至るまでの、我が邦陶器のありさまは既に述べたれば、いでこれよりは景正以後に移らん。

加藤景正は藤原姓の人にして、通稱は四郎左衞門といひ、大和の國諸輪の庄道蔭村の人にて、父を

かゝる滋賀の山寺の廢蹟に就きて搜索して得たる青瓷の器の欠片は、土の色鼠色に青みを含めるに、其釉は綠色に鼠色を含めるものにて、薄からず懸れるが、光澤も少く透明にもあらずといへば、猶甚だ佳ならざるものなること知るべきなり。青瓷は當時珍重されたるものにして、後に至ても供御に用ゐられしほどのものなれど、猶かくの如しとすれば、進步したりしとは云へ當時の陶つくりの技の狀態、幼きものといひつべきなり。寬平の頃より遣唐使止み、唐末の亂のため支那との交通も自然疎くなり、我邦の工業の進步も、中たゆみしたる姿となり、釉の舶來も絕え〴〵となり、加銹することも止みたりと覺し。これにより數百年後の鳥羽天皇の用ゐ玉ひし御齒固の式の料のものだに、猶例の青瓷にして尾張の國の製にかゝるものといふ。桓武天皇より鳥羽天皇までは、其間三百年も隔たれるに、口惜しくも、其間にさしたる進步無かりしは、これによりて覗ひ知るべきなり。

尾張長門は延喜の令によりても、よき陶器を出せりとは推測するを得るなるが、こゝに鳥羽天皇の用ゐ玉へる青瓷の尾張の貢物なるを見れば、尾張の製陶は他國に比して進めることいと明かなり。右尾張の製にかゝる青瓷の器碗は、旋盤をもて作り、糸底を作り出せりといへば、其形に於ては、遙に進步したるものなり。されど其の土の色は鼠色に青みを含めるに、釉も滋賀の山寺の跡より出でたる青瓷の欠片の釉とおほよそ相同じといへば、加銹の點に於ては、少しも進步無きに近しといふべし。

りしといふを、あながちに斥けがたし。

釉もまた何人の初めて用ゐたりといふことを知り難し。おもふに、文武天皇五年に筥陶司を置かれし頃、朝鮮などより釉も渡來せしか。されど、釉かゝれるもの其時代に製せられたる證乏し。奈良朝以前より、窰の制やゝ精しくなりたる結果として、火の力強くわたるために、用ゐられたる土の質により、自然と火力の働きにより硝子質のものを吹き出して、釉かゝれものにはあらずやとおもはるゝものさへ出づるには至れり。雄略天皇以後、史冊に其記事無きも、百濟なんどより、さまざまの工人の來りたることあるべければ、或は釉を少しは携へ來れるもありしならんかとおもはれ、また朝鮮支那より輸入品に釉のかゝれるものありしならんと思はる。奈良朝頃のものとして今存する加銹のものは、いづれも我邦の製作にはあらで、輸入のものなるべしといふ。桓武天皇大極殿を葺くに瓦を以てせしめ玉ひし時の、其瓦は碧釉を施せしものなりしといへど、其釉は我が邦にて製せしものか、輸入のものか、知らず。釉といふもまた、今日我等のいふところの釉とは、異なることは論なし。當時京都の鷹が峯の瓦工其瓦を製せしといふも、詳しき傳說あるにあらねば別に考ふべきところ無し。たゞ平安朝の初頃よりは加銹したるものも、漸く出で來れるなるべきか、但し其釉は恐らくは支那朝鮮等より舶來せしなるべく、猶我が邦にて製し出すを得たるにはあらざる如し。延曆五年、卽ち桓武天皇の都を愛宕葛野の兩郡に跨がりたる地に遷されしより八年前の建立に

彼處此處の遺物、彼時此時の陵墓等を十分に比較しつ調査しつして、其上にて僅に、定め得べきことなれば、今妄斷は敢てしがたし。たゞ、早くより三韓傳の壺などには旋盤目あり、こゝをもて推測して、神功皇后以後、仁德天皇以前なるべしと曰ふ說あるなり。されど猶旋盤の用ゐらるゝこと廣からざりしなるべく、蜷川氏などは、僧行基の、陶器つくる技を敎へたりといふ傳說のみ諸國にありて其製作と見ゆるのもゝ少も無きにより、行基の敎へたりといふは、陶器つくるにつけて、旋盤用うることを敎へしにはあらぬかと說けり。行基若し廣く世に旋盤用うることを敎へたりとすれば、旋盤といふものゝ初めて用ゐられたるは神功皇后頃とするも、其廣く世に用ゐられたるは、聖武天皇の頃なるべきか。僧行基は、我が邦の陶器つくる技に取りては、母の如き關係ある百濟の國の人の系統にて、しかもまた神代より陶器つくるをもて知られたる和泉の國の大鳥郡に、生れたる人なり。此人天智天皇七年に生れ、天平の末に大和の菅原寺にて終りを示し、年二十四より八十二までの間、行化を事とせし高僧にて、工巧の道に明らかなりし人と見ゆれば、蜷川氏の推測の如く、諸國に行化するのついでに、旋盤用うるすべを工人等に敎へさとせしかも知るべからず。行基燒などいふ名の和泉の大鳥郡より出づる陶器に冠せられしも、全く行基の高德によりて後人故も無く付會せしとばかりは云ひ難く、また山城の愛宕郡淸閑寺村字茶碗坂といふところは行基の器を製せしところなりなどいふ傳說あるによりても、行基が何事かは知られねど陶器つくる技に與へたることあ

明らかに其業の史の上に、劃して以て前後を分つべき一界線をなせるものなれば、今また假に此時までを一小段として、此前の製陶のありさまを、いさゝかこゝに述ぶべし。

四郎左衞門景正は、我邦の陶器の上に、新なる光輝を與へし人にて、此人出でざりし前と、此人出でし後との我邦陶器の業の狀態は、大に差あり。旋盤といふものゝ工夫は、何人の考へ出せしや、何時頃、何人の新羅人、百羅人などより傳へしや定かには知り難けれど、極めて古くよりありしものにはあらず。旋盤出來ざる前は、板の上に陶土をのせ、兩手にて其土を引き展し、形おほよそ成りたる後、篦、木片の類もて、成るべくは器の面の滑澤なるべきやう膚をならせしものなるべく、其迂遠なることと甚しきは寧ろ悲むべきほどなれば、旋盤出來ざる前に比して旋盤出で來し後は、製作に速かさを增すと共に製作の數をも自然に增すに至れるは疑ふべくもあらず。また燒くことより生ずる苦惱は兎も角も、燒かざる間すら歪なくは造ること能はざりし手づくねの不便は旋盤によりて除くことを得たるなるべし。されば旋盤の出で來れるは、製陶の業には、いと大なる進步なり。さて此の旋盤を用ゐたるは、史冊に傳へられたる明文なきにより、明らかには何人といへども言ふ能はざることながら、恐らくは、神功皇后の後、仁德天皇の以前にありしなるべしといふ。これらの事各處の山陵などより出づる古き時代の遺物につきて、其旋盤を用ゐて造りたるものゝ證として見ゆる旋盤目の有る無しにより、また其出でたる地の何時の世の山陵なるかを確に知るを得たる後、

那と交通の道さへ開け居しほどの我國勢とて、人々漸くに文明の光輝に浴して其明かなるに就くに至れりといふべし。

平城天皇の大同三年、筥陶司を大膳職に合し、土工司を木工寮に合せられしと、淸和天皇の貞觀元年河内和泉の人々陶山の地を爭ひしとのほかは、延喜の朝まで陶器の事に關りたる記事、史冊の上に見ゆることなし。醍醐天皇の延喜五年畿内及び七道諸國の陶器を出す地は、役に代ゆるに其製せる物を以てすることを得せしめたまひ、畿内は池由加、瓺等の大瓶は各一口をもて八十日の役に充て、水椀如き小さきものは十三合を十日の役にあて、七道諸國は、池由加、瓺等各一口をもて三十日に充て、蓋ある椀二十口を十日に充つるなど詳しき制を定めたまへり。當時の陶製のくさぐさの物の名など、其令の中に見ゆることもいと多ければ、如何なるものを其頃多く製出せしか、おほよそながら測り知るを得。尾張長門の二國、此頃諸國にすぐれて精巧なるものを出せしと見ゆ。これより後、承平天慶の將門純友の亂あり、皇權やうやく衰へ、武臣やうやく勢を得て、平氏、源氏、北條氏相續いて起り、世つねに安からざるより、工人其業に安んずる能はずなりしと見え、いづれかといへば、陶業は衰へたるに近く、後堀河天皇の御世に、加藤四郎左衞門景正の出づるまで、聞ゆること無くて終りたり。

加藤四郎左衞門景正は、我邦の製陶の技の上に、新なる光輝を添へし人にて、此人の出でたるは、

世漸く開けて、三韓との交通いよ〳〵繁くなり、佛像經卷等も渡り來るに及び、ひとしほ彼と我との往來相續ぐに至り、彼邦の文物我邦に流れ入ること日に月に多くなりまさりて、崇峻天皇の元年、百濟の國より畫工、鑪盤博士等と共に、瓦博士麻奈父奴陽貴文陵貴文昔麻帝彌の四人を獻じければ、是より瓦といふもの初めて我邦に起り、屋を葺くに瓦を以てすること漸く行はるゝの端を發せり。屋瓦の無かりし頃は、木の皮、萓、笹、板の類をもて葺けるなるべきが、其雨には汚ち、早には乾裂るゝなど如何ばかり不便にして煩はしかりしものなるべき。今や屋上には瓦あるに至れり、室中の器もやゝ精ならんとす。我邦の文明も進めりといふべし。

付記。某博士の著書には、瓦博士の來れるを用明天皇元年のことゝせり。如何なる據りどころあるや知らねど、崇峻帝の時のことの誤りなるべし。

其後大化元年に當り孝德天皇土師連に屬せしところの土師の工人を收め、新に筥陶司を置きて、これに隷せしめ、土工司を置きて、瓦を作ることを掌らしめたまへることあり、文武天皇の大寶元年には更に筥陶司の職制を定めたまふことあり。桓武天皇の都を宇多に遷したまひて平安城を築き大極殿を建てたまひし時は碧瓦をもて殿の屋を葺かせたまひしなれば、其頃の製陶の技の、進歩は上代に比するときは實に雲泥の差ありしなるべく、且また此頃支那より其商賈の陶器を齎し來れるものありて、上流の人の賞玩するところとなり、茶碗といふ語も出で來しなれば、此前より既に支

ば、土師連の祖、吾笥といふもの、攝津の國の來狹々村、山背の國の內村、俯見村、伊勢の國の藤形村、丹波、但馬、因幡の私の工人を獻じ、供御の陶器を造らしめ、これを名づけて、贄の土師部と曰ひしことあり。贄と〻肉類の事なり。かく工人の處々に在るによりて推察すれば、製陶の法も今は漸く開けて、そこかしこに其技をむねとするものも多くなりしと見ゆ。來狹々村は今の攝津の能勢郡宿野村といふところにて來佐々神社といふ社ある地なり。村民尙近き頃まで土盌を造りしといへば、古より傳はりしこと以て知るべし。內村は即ち山城の綴喜郡の宇治にて、今尙旭燒といふ一種の陶器あり。俯見村は山城の紀伊郡にて、今猶深草伏見あたりに土器師あるは其遺れるなり。藤形村は伊勢の一志郡にて、今に其古昔の風遺りて陶器を製するや否やは知らねど、稀に古陶器を掘り出す由なり。丹波は天田郡に土師鄕あり、因幡は八上郡、知頭郡に土師鄕あり、但馬は出石郡に垣野といふところありし由、古きものに見えたれば、其あたりより工人は出でたるなるべし。

付記。蜷川氏は淸器と史に見えたる文字を解して齋器となし、されば此時常に用ゐらるゝものは新にして巧なるを用ゐ、祭器は古き制にして朴なるものを用ゐられたる事とおもはると說きたり。或は然りしなるべし。然解するときは、特にかゝる詔の下りしによりて見るも、當時既に一般に用ゐしところのものは、著るしく上代のに比べて異なりて巧になれるを推測するに餘りありといふべし。

上古製陶のあらましは說きたれば、これよりまた史にかへりて、雄略天皇以後を言ふべし。雄略天皇は、百工の術をして歩を進ましめんと思したまひしより、西漢才伎歡因知利といふもの丶、もろ〳〵の技に巧なるもの多く韓國に在りと奏せるを聞しめし、吉備上道臣弟君を使とし、歡因知利はもと韓國の人なるにより、これを副へて、先づ道を百濟に取り、勅書を賜ひて技巧あるもの等を獻らしめ玉ひしに、弟君故ありて妻樟媛の殺すところとはなりしが、樟媛もとより忠義深き人なりしかば海部赤尾といふものと丶もに、百濟の獻れるところの手末才伎を將て大島に在りて、ついで遣はされし日鷹吉士堅般固安錢と共に歸りぬ。これによりて天皇大伴大連室屋に詔して、新に來れる工人の高貴、堅貴、因斯羅我、定安那錦等を河內の國の桃原といふところに居らしめ玉へり。此新に來し工人の中にて高貴といへるものは、即ち陶器作ることをなすものなり。されば此時より、さま〳〵の工業我が邦に一段開けわたりしなるが、百濟の陶法勿論此時より前方に比べては詳しく傳はりしなるべし。天日槍從人の子孫の鏡谷に在りて陶器つくれることはありしなれど、其時は時も遙に上つ方なり、また日槍の從人必ずしも陶器造ることに長けたりしにもあらざるべければ、云ふに足らず。此雄略天皇七年に高貴といふもの丶渡り來しこそ心を留めて記え置くべきことなるべけれ。

皇の十七年三月土師連等に詔して、朝夕の御膳を盛るべき淸き器を進らしめたまひしか

神功皇后の三韓征伐以後は、邦人等彼の邦の陶器の當時の我より進みたるをも眼にし或は持ち歸り、或は交通大に開けしより智識の自然融通せるまゝ、所謂三韓傳の陶器なるもの現はるゝに至れり。其陶器の色は青黑色にして其質至つて剛く、其特色としては器の内面に青海波樣の紋あるもの多し、今にすら此紋をつくる事多しといへば、いと興ある風といふべし。外面には細線または井筒樣の紋あり。近く薩摩に高麗傳の陶器師あり、其製また今に土器の内に青海波をつくる。其仕やうは、土を引き展すに、青海波紋を彫りつけたる木をもつて土の内よりあてがひ、外よりは小筋ある木をもてあてがひ、内外たがひに土を挾み展ばして壺をつくる由、と近き頃の書に見えたれば、昔時のいはゆる三韓傳のものを造ること亦是の如くにして造られたるが故に、外面には小線あり内面には青海波樣の紋あるなるべし。これ等の器の現はれ出でし頃まで、人智を積みかさねて、はじめて、やゝ燒窯らしき燒窯の嬰兒ともいふべきもの世に出で來しといふ。其窯は蓋し登り窯といふ工夫の積みたるものにはあらず、向ふのかた、眞直に築きたる類のものにて、窯中へ土窯を入れて燒くこと數十日、燒き終りの時松の葉などにて一トしきり薫べ、終に風の口、火たき口とも土にて塗りふさぐなるべしとぞ。嗚呼窯らしき窯は出で來ぬ、されども何ぞ其窯の猶幼稚なるや。神武天皇の命によりて椎根津彦の八十平瓮を造りしよりおよそ八百餘年は既に經たりしなり。世の文明におもむくことまた易からざるかな。

が祖先の時代にはかゝる狀態にて、正しく方にもあらず美く圓くもあらぬ苦窳たる且釉無き拙き須惠母乃、若くは甿良迦、若くは手抉、椀の類を、幾多の苦心、幾多の勞力によりて僅に用に供するを得たるなり。我等が祖先の不便如何ばかりなりしなるべきや。

近き頃も山城幡枝の木之村にて祭器を作るに、土を掌にのせ、臂にて壓して形をつくるといへり。いと古き風の遺れるなるべし。特に其造るところのもの、祭器にして他のものならぬは、古き式の遺るべきよすがありといふべきなり。其を燒く窰は四方の高さ三尺ばかりに土を築き上げ、徑五尺ばかりに造りて、窰の中央に土器を列ね上方下方とも薪材を充て、火を點じて、其能く燒けたる度を視て、上をも下をも土もて塗りふたぎ、空氣の通はざるやう注意し置き、火氣こと／＼く去りたる時、取り出すなりといふ。大和春日の社に用うる土器の類も、これと同じ法にて造るといふ由なり。これ等の窰と云へば窰なれども、猶陶器窰と云はんは如何とおもはるゝほどの窰は、恐らくは地を凹くして火を土器の上に燃やせしより後、少時して出でたる、やゝ進みたるものにはあらざるべきや。前の垂仁天皇の條に擧げし鏡谷は、今の鏡山の近くにて陶器村なり、野州郡に屬す。蜷川氏の說によれば、此時の陶器新羅傳なれども、其製法等よく具はらざれば、此以前のものよりは固けれども、鼠色に赤黑色の濃淡あるもの多く、何とも知れぬ小線の付けるもの多しとなり。おもふに質の固くなりしは技の進みたるなれど、猶甚だ未しきものなるべし。

れより陶器を製することの道は漸くに開けたりといふべし。されど、窯といふものを設くることを知らざりし頃は、如何にして其偶然の發見より知りしことを用ゐて、土器に火の力を與へて硬くせしならん。陶器のことに詳しき前人說いて曰く、其頃の陶器製法は、窯を設くるといふことも知らねば、地を少し掘り凹め、其處へ手づくねの土器を入れ、其上に薪を置きて火を燃やし、その度既に適するを認めて、すべてを乾きたる土もて覆ひ、風にあたりて破れざるやうにせしものと思はる。さて其穴の中程にありて火の氣の十分に透りたるは色赤く燒け、又上の方にありて空氣の近きため火の氣の十分に徹らざるは、赤色の中に黑き斑文あらはるゝに至り、又隅の方にありて烟のために燻ぶりたるは眞黑になれるならんと。こはもとより想像に過ぎぬことなれば、全く是の如くならんといふにはあらねど、毫も據るところ無き言にはあらず、如何にも古昔の人の爲せしところ然もありしならんと思はるゝなり。果して是の如くなりしとすれば、上騰する勢こそは强けれ下降する働きは弱き火の事とて、如何ばかり多くの薪を燃やして其後辛くも燒き得たるなるべきか、また其燒く時如何ばかり心ならざる結果を得て、或は失望し、或は驚き悲みしか。其勞働の容易ならずして、其成功の僅少なるべきは、云ふまでも無き事なるべし。今は我等二千餘年の末に生れて、古昔の狀態とは大に異なれる世にあれば、數緡の錢を手にして陶器賣る肆に就けば、直に心に欲しとおもふものゝ、形もよく質も惡からずして裝飾の書若くは花文さへ添ひたるを得ること容易なれど、我等

醜くして、如何にも食ふべきものなど容るゝには堪へざる如く我等の眼より見ゆるも是非なき事なり。もとより、かゝる狀態の時代には、釉藥などいふものゝ用ゐらるゝことあるべくもあらねば、其の造られたるものは皆、今日の最も劣れる品にも比ぶべきならず。或は赤く燒け、或は黑き斑文赤く燒けたる中に少し現はれ、或は美しからず黑くなりて、いづれも好ましからぬものゝみなり。されど、いたづらに古昔の人の愚にして拙きを笑はんは心の淺きことなるべし、我等は今いさゝか旋盤といふものによりて圓きものを形づくることを知り、定規といふものをもて方なるものを形づくることを知り居れど、これ等のもの未だ世に出でぬ時に我等生れ合はせたるものとして、さて我等土器の一つだも造らんとせば、我等は如何に苦しみて思ひ、徒に勞るべきか、我等は如何なるものを作り出だすことをすべきか、察するに難くもあらぬことなり。これをよく〳〵思ひて、古代の人の不便を察し、苦心を思ひやるべきなり。

また今日は、陶器といへば、入誰か窖といふものに入れてこれを燒くものと知らざらん。されど、窖といふもの、發明無き時に生れたる我等が祖先は、如何にして土もて造れるものを燒きて堅くなしけん。試みに窖といふもの無き世にありて我等陶器樣のものを造らんとすると假定せば、其困難の一ト方ならぬは察し得べし。蓋し、土を燒きて堅くすることを知りしは、恐らくは偶然の事より起りもしたらんが、土を燒きて其を硬くすることを知りしは既に大なる一段の進步といふべく、そ

古代陶器を作りしさまは如何なりしなるべきや。書籍もこれを載せず、口碑にも詳しく傳はらねば、こゝに說かんこと甚だ難けれど、燒窰の事を云ひ出でたると、雄略天皇以前を我邦陶器の史の一小段となすも可なるとにより、聊か其大概を此處に說くべし。

前に擧たる神武天皇椎根津彥をして平瓮等を造らしめられし條に云へる天香山は大和國十市郡にあり。また嚴部といへるは、土瓶にして祭に用うるものなり。手抉とは、手指をもて手抉りて造るゆゑの名なり。すべて、いと古きものは、多くは苦窳ありて、其形正しき能はず、土燒なりといふ。蓋し古昔にありては、別に我が一生の業として、陶器造ることを爲すものも無く、分業といふこと行はれざる間は、一人にて武人ともなり獵夫ともなり舟人ともなり工人ともなりしなるべければ、其拙きことは自然の勢なり。特に人の智巧も今のやうにはあらざれば、方なるものを造らんとするにも、正しき定規を得ず、圓きものを造らんとするにも、旋盤を知れるにもあらず、如何で苦窳無きものを得ん。恐らくは圖の如くに、水にて好きほどに練りたる土を掌に載せ、右の臂もて押し窪め、または押し平めて、やゝ大なるものは、これを作り、やゝ小なるものは手指をもつてよきほどに、つくねたるなるべし。若し旋盤と箆とを用ゐんには、やゝ精巧なるものを得べく、また旋盤と箆とを用ゐずとも、分業の法行はれて、常に一つ事をのみ爲さんには、多少巧なることを得べきなれど、いと古くは、其いづれの道をも欠きたることとなるべければ、今日たま〳〵存する古きものゝ

よろしからずと天皇の思したまひしより、野見の宿禰といふもの進み出でゝ、君王の陵墓に生ける人を埋むること良しからじ、と奏して、出雲の國の土部百人を喚び上し、自ら土部等をつかひて、埴土を取りて人、馬其他くさ〲の物の形を造り、天皇に獻上り、今よりはこの土物をもて生きたる人に易へ、陵墓に樹て、後葉の法則とせん、と奏しけるに、天皇これを可としたまひて、宿禰の功を賞め、土師の職に任じたまひ、姓を改めて土部臣としたまひし由見ゆ。此條によりて見れば、平生陶器工の多く居れるならでは、突然出雲より其工人百人を出すべくもあらぬにより、此頃は既に分業の法らしきこともも幾干かは行はれ、出雲には陶工多かりしなるべし。

これより後は、景行天皇の御代に、肥前の佐嘉の神に、大山田女、狹山田女といふ二人の女の言に從ひて、大荒田といふもの、下田村といふところの土を取りて人馬の像を造り獻りしといふことあり。允恭天皇の御代に、探湯瓮といふ瓦器の湯を沸かすものを誓のために用ひしめたまひしといふこと史に見ゆ。

允恭天皇より前にあたりて、神功皇后の三韓を征したまひしことは、疑ひも無く、我が邦の凡ての文明の度を進めたるなるべければ、陶器つくる技も、必ず其影響を被り、幾段か進歩なせるなるべし。蜷川式胤といふ人の說に據れば、燒窯といふもの、即ち陶器を燒く窰の工夫は、此頃少しく進みたるなるべしとなり。

和泉の國の大鳥郡といふところには、いと早く神代より陶器を造りしものあり。其地を陶の邑といひ、後に至りて陶器莊とも大村の鄕ともいへり。

近江の鏡谷といふところのものに、垂仁天皇の御代、若くは其前に、よく陶器を造れるものあり。これ等は、新羅の國の人、天の日槍といふものに從ひて、早くより歸化せしものゝ子孫にて、其の造りしところの陶器も、いさゝか從前のとは其さまを異にし、其造りかたをも異にせるものなり。天の日槍といふものは、其名こそ垂仁天皇の御代に初めて見えたれ、まことは其人恐らくは大巳貴神の頃に來りしものなるべければ、世にいふ新羅樣の陶器も、何時より造り初められしか確實には知り難し。天日槍の新羅より來りしを、垂仁天皇の御代とすれば、新羅樣の陶器も、其御代より造り出されたりとすべけれど、其人の來りしを神代の事なりとすれば、猶早くより新羅樣の陶器造り出されたるべければなり。

附記。日本歷史などの少年諸君の讀み玉へるものには、或は天日槍の歸化せるは、垂仁天皇若は應神天皇の御代の事として記せるもあるべければ、かく言ふを聞きて訝り玉はん人もあるべけれど、これには說あることなり。餘事にわたれば此處には言はねど、天日槍の來りしは神代のことならんとする方、よろしきに定まれるやうなり。

さてまた此の天皇の御代の三十二年に、皇后日葉酢媛の命かくれさせたまひたる時、殉死の道を、

土もて器物を造ることとは、當時既にやゝ進みたる、狀態をなし居れるなるべく、土をもて器物造ることの初められしは、猶遠きむかしなるべし。上に擧げしは、皆、いと古き世のことゝして、歷史に見えたることとのみなり。書籍には見えずとも、當時猶さま〴〵の形狀なせるものゝ數多くありて、それ〴〵の用をなせることとは人々よろしく推察すべし。

神武天皇の御代となりて、陶器造ることとの見えたるは、天皇位に即きたまふ前、戊午の歲の九月、八十梟師、兄磯城などいふものゝ軍、要害の地を塞ぎて、皇軍の路を絕ちし時にあり。如何にして醜虜を平げんかと、天皇御心安からず思して寐ねたまひし夜の夢に、天神あらはれたまひて、天香山の社の中の土を取りて天平瓮八十枚ならびに嚴瓮を造りて天神地祇を敬ひ祭り、また嚴の咒詛を爲せよ、かくせば則ち虜自に平がん、と訓へたまひしにより、且は弟猾の同じことを勸め奏せしにより、椎根津彥と弟猾との二人をして弊れたる衣服を着け簑笠を被、箕をかつぎて、老翁老嫗の姿をなし、虜の眼を欺きて敵地を過ぎ、天香山の土を取り來らしめ玉ひ、二人恙無く土を得て歸り來るに及び、八十平瓮、天手抉八十枚、嚴瓮を造らしめ、丹生の川上に上りて、そをもて天神地祇を祭りたまひしといふ。其の平瓮を以ては飴を造りたまひし由なれば、おもふに、其の器の肌膚も甚しく粗きにはあらざりしなるべし。されど、もとより後世のものなどゝは比ぶべくもあらざるものなりしならん。

れて大なる器なり。むかしはもろ〳〵の菓を甕の中に置きて酒を釀せしと見ゆ。また、素盞嗚尊新羅の國に降りまして曾尸茂梨の處にましませる時此の地には吾居るを欲せずとて、遂に埴土をもて舟を作り、これに乘つて東に渡り、出雲の國の簸の川上なる鳥上の峯に到ります、云々とも古き書に見えたるによれば、信とし雖き談なれど、神代より埴土をもて物を作りしことは無きにあらざりしと見ゆ。

また、大巳貴尊葦原の中つ國を奉りたまひし段に出雲の國の多藝志の小濱に天の御舍を造りて水戸神の孫櫛八玉神を膳夫として天の御饗たてまつる時に禱ぎ白して、櫛八玉神鵜になりて海底に入りて底の埴を咋ひ出でゝ天の八十毘瓮迦を作り、云々と見ゆ。毘瓮迦とは、甕などの如く深くはあらぬものなれども上に記せる如く埴土にて作り、さま〳〵のを盛るべき料のものなり。されば此條には神代の人の土をもて器を作ることいと明らかに見えたりといふべし。

八千矛の命、すなはち大穴牟遲神の正妻須勢理毘賣命の出雲より倭の國に上りまさむとして裝束し立たす時の條に、こゝに其后大御酒坏を取らして立ちより指擧げて歌ひたまはく、と云ふとあるによりて見れば、酒坏などもありしこと疑ふべからず。

神代の酒は如何なるものか明らかには知るべからず。されど、酒とあれば水とは違ひて必ず幾干かは浸み透す力あるものなるべきに、其を釀すべき甕、其を盛るべき坏などのあるをもて考ふれば、

往古の事は、まことに窺ひ知り易からず。されど、造る人無くて甕、碗などの、おのづから世に現れ出づべくもあらねば、往古の人もまた力及ぶべきほどは考慮を費し技巧を盡して、おのれ／＼が用に充てんために、さま／＼のものを造り出せるなるべし。試みに往古よりの人々の陶器の類をつくりしありさまを述ぶべし。今我等の用ゐるやうなる滑らかにして清げに心よき碗、堅くして大なる甕などの容易には世に現れ出で來らず、多くの人々の心の働きと手の働きとを積み重ねて、多くの年月を經たる後、わづかに、これらのものゝ我等が前に現れ出で來れるを知るべく、また今我等が用ゐるものは、其内には多くの年月の間の多くの人々が功勞を含める價値なか／＼低からぬものなることを知るべし。

陶器の我が邦に創めて造り出されしは何時のことなるべきか明らかならねど、神代にも既に其名見ゆ。古き書に、素盞嗚尊安藝の國の可愛之川上に下ります、そこに神あり、名を脚摩手摩といふ、其妻の名をば稻田宮主簀狹之八箇耳といふ、此神まさに姙めり、夫妻共に愁ひて乃ち素盞嗚尊に告して曰く、やつがれ生める兒多しといへども、生むごとに輙ち八岐の大蛇ありて來りて呑む、一の在るを得ず、今吾まさに產まんとす、恐くは亦呑まれん、こゝをもて哀み傷むと、素盞嗚尊乃ち敎へて曰く、汝もろ／＼の菓をもて酒八甕を釀むべし、吾當に汝のために蛇を殺すべし、云々といふ條あり。これによりて、神代にも陶器の類ありしこと知らる。八甕といふ八は其數にて甕は腹ふく

得せしめんとするのみ。たゞに文明史を説かんとするが如きは固より著者が願にあらず。文明の庫と稱ふる實に此意によりて此筆を役せんと欲すればなり。

第一　陶器の卷

我等は今の此の開けたる御代に生れあはせたれば、飯を盛るには肌膚滑らかにして清げに心よき碗を用ゐ、水を貯ふるには堅くして大なる甕を具ふることを得れど、此の碗、此の甕の如きもの無き世に生れあはさば、我等の不便に困むこと如何ばかりなるべき。皿、鉢、壺、瓶子なども、今は得ることの難からぬまゝ、取り出でゝ言ふべきほどのものとしも覺えざれど、これを得ること易からぬ世にあらば、其の貴さ如何ばかりならん。人は自己が身の健やかなる時は、健やかなることの眞實の價値を知らず、健やかなることを失ひたる時、はじめて健やかなる事の眞の價値を知るものなり。これと同じく、瓶子あり、皿あり、壺、鉢あり、甕あり、碗ある今の世のよろづのもの滿ち足らひたる間に在りては、これらのものを、取り出でゝ言ふべきほどのものともおぼえず、其の眞の價値をも殆ど知らねど、試みに我が身を、これらのもの皆乏しかりし往古の世に置きて考ふる時は、如何ばかりこれ等のものゝ容易には我等が前に現はれ出で來らざるものなるか、また如何ばかりこれ等のものゝ價値あるべきかを悟り知ることを得べきなり。

至りしやといふところを能く見透し得んには、我等はまた精神の上にも益を得べきこともとよりなり。何によらず一事を成すは易きことならず。されば古昔の人の能く成して後世に幸福を添へしことの記録とも云はゞいふべき文明史の裏面のかたには、撓まぬ精神、周密なる心づかひ、鋭き智惠、熱き情などをもて、困難に勝ち、失敗を怯れず、終に其の爲さんとしたることを爲し遂げたる狀態の、我等の精神を奮ひ起さしむるもの少からず。たゞ其事、戰史の上の人のは非常の時のことにかゝるもの多く、文明史の上の人のは平和の時のことにかゝるもの多ければ、隨つて戰史の上の人の事は、我等の心を驚かし胸を躍らしむるやうなるが多けれど、文明史の上に見はるゝ人の方にはさる事少し。さる代りには。文明史の上にあらはるゝ人の事の方は、却つて我等には切實にして、手近く、直ちに教訓となるべきこと多し。『文明史の裏面は直に踐むべき道義の教訓なり。』

此の文明の庫の著者は、嚴なる義に於きての文明史を說かんとするにはあらず。されど、いさゝか自ら期するところあつて、『人間のものは必らず人の手によりて造り出されたるもの』なると、『人の世のものは必ず造りはじめし人ありて造り出されたるもの』なること、『人間の幸福は必ず人によりて造り出されたるもの』なることを明かし、『人の情の正しく美しき働き』に乘じて、『幸福の歷史』『人類の功績の記錄』とも稱へんには稱へ得べきものを編み、『今の人をして自己の位置を覺り、』『淸くして健なる愉快を感じ、』且つ『直に踐むべき道義の教訓』を古人の精神、言葉、行爲の中より認め

ろに送ることは、常陸の久慈郡諸澤村の中島藤右衛門といふ人の工夫によりて初めて世に生じたることとなるが、今より十年ほど前の調べに、其法によりて常陸より他國へ出すところの蒟蒻粉一年に其價三十萬圓なりといへり。されば三十萬圓の蒟蒻粉を食ふほどの人々は皆中島藤右衛門が工夫の德に依れりといふべし。蒟蒻を粉に製したる如きは、いさゝかの事にはあれど、年々に蒟蒻三十萬圓を食ふほどの多くの人々に中島藤右衛門の工夫の德は正しく及ぼせる理なれば、文明史の上には取り出でゝ記さるゝまでならぬ人も、戰史の上に大なる墳墓を遺せる人々に比ぶる時は、遙に人間に對ひての功績大にして遠く、其人死すといへども其力長く活くといふべし。戰史は爭鬪の史なり。文明史は幸福の史なり。戰史の上には墳墓の大なる人いたづらに多し。文明史の上には長く死せずして働く人多し。戰史の上には今の我等に影響を與へざる人多し。文明史の上には今の我等に德澤を遺せる人多し。まことに『文明史は愉快の書なり』といふべし。

戰史を讀みて、忠勇義烈よく其職に盡せし人の事を記せる段に至れば、我等は、遠き古昔の人の正大剛明の精神たゞちに我等が心に浸み透りて、我等が精神に一ト方ならぬ影響を與ふるを覺ゆ。こは古人の正しくして剛き精神の德の我等が上に働くにて、我等が其爲に益を被るの大なること、今こゝに我等の、茶碗を有し、綿ふらねるを身につけ、蒟蒻を口に上すを得るが如きに比ぶべくもあらず。されど、文明史の上に見はるゝ人々の、如何にして世に一つなり二つなりの幸福を添ふるに

『文明史は人をして自己の位置を覺り知らしむるものなり』ともいふべし。

戰鬪のことを主として記したる史を戰史といふ。戰史の上に現るゝ人々には、男兒の中の男、俊傑の中の俊傑として、人に尊まるゝ人少からず。されど、文明史の上に現るゝ人々は、戰史の上に現るゝ人々に比べて、ひとしほ好ましき人々ならずや。火を放ち、城を屠り、人を殺し、地を掠めたりし人々は、今我等に何の功績を遺し置きて示せるぞや。戰史の上に人々の多くは、いたづらに人の眼を惹く墳墓を遺せるに止まれるこそ悲しけれ。忠勇義烈の人々のほかの人々は、如何なる猛き士も、土の中の枯れたる骨の有るにも甲斐無くして、今の我等に尊敬仰慕さるべき些少の功績だに遺らざるを如何にせん。例へば、佐久間玄蕃、武田勝頼等の如きは、皆たゞ徒に人の眼を惹く墳墓を遺せるのみ。其墳墓は即ち戰史の中の幾枚の紙のみ。文明史の上に見るゝ人々はしからず。いたづらに人の眼を惹く墳墓は遺さゞれど、其人は身死して猶長く死せず、骨は朽ちながら猶長く働きて、日々夜々に其恩惠を我等が上に加ふる人々なり。例へば此の五助の茶碗によりて、我は今湯を飲むに便宜を得ることとなるが、此の茶碗の我に與ふるところの功德の中には、正に加藤四郎左衞門加藤民吉二人の働きあるが如し。また例へば、我今綿ふらねるによりて身を溫暖に包み居るなるが、此の綿ふらねるの我身に與へ呉るゝ功德の中には、畠山義信といふ人の力明らかに含まれ居るが如し。猶一つ小くも見ゆることに就きて例を擧ぐべし。蒟蒻といふものを、粉に製して遠きとこ

或は本より支を追ひ、或は支より本を考へ上下、東西、表裏、毫末にても尋ぬべき路あらば、尋ね進みて此の文明の由つて來れるところを究めんとするは、心あさからぬ人々の、しば〳〵敢て自ら爲すところにて、これを文明史の攻究といひ、其の攻究の結果の世に現さるゝものを文明史といふ。自他ともに知りたきは文明史ならずや。『文明史を知らんとおもふは人の情の正しく美しき働きなり。』

人間の幸福多くして厚きを文明の世といひ、其の文明の世の成り立てるさまを記せるを文明史といふなれば『文明史は即ち幸福の歴史なり。』

人間の幸福は必ず人によりて造られたるものなれば、幸福の歴史は、人の幸福を造りいてゝ世に遺れる功勞を記さんこともとよりなるべし。されば『文明史は人類の功績の記錄なり。』

我等は我等の祖先と同じやうに世に住めりや。否や。また、我等が子孫の世に立つ狀態は我等が世にある態と同じやうなるべきや。否や。我等は如何なる世に立てるなりや、我等は如何に今の世を思ひ做し、如何に我等が身を思ひ做して然るべきや。これ等のことは、空に物を思ひてのみ自ら覺り知らんこと難し。上つ代の人々の世にありし狀より、今の世の狀をまて、よく辨へ知り、またよく比べ量りて、さて後僅に覺り知るを得べきことなり。人の世の幸福の歴史といふべき文明史は、幸福の少かりし古より多き今に至るまでの間のさま〳〵の推移變遷を記さんこともとよりなれば、

は、餘りに心無きわざにて口惜きことなり。されば、我等は、能ふ限りは此の人間の幸福の由りて來れる源に溯りて、此の人の世のものを造るところの人と、造りはじめし人とを知り、如何にして造りはじめしか、如何にして造れるかをも知らんとぞ思ふ。此の心の願は、人の當に起すべき情なるべければ、我等のみならず如何なる人も、必ず起すところの正しき情の働きなるべし。

人の世の幸福の多くして厚き世を、文明の世といひ、幸福乏しくて薄き世を、未開の世といふ。今の世は文明の世なるべきや。未開の世なるべきや。我等が心の中の望みより云へば、猶足らぬところある世にはあれど、これを往古に比べ見るに、まことに幸福の多くして厚き世なれば、文明の世なりと假に稱ふとも誰かは否と云はん。此の文明の世の源は即ち未開の世にて、幸福乏しく薄かりし世より以來、やうやくに一つ二つ宛人の世の幸福の增し添ひ、歲月を經るにつけて其の幸福の積り溜りたるが即ち幸福多くして厚き文明の世なり。文明の世は譬へば大河の流れの如し。大河の流れは、一朝一夕にして忽地に成れるにはあらず。必ず小萩が葉末の露、小笹が上の薄雪などの、集ひ〳〵て草がくれに流るゝほどの小流の、幾干となく聚まりて後、成れるものなり。文明の世は、遠き往古の未開の世より、少しづゝ〳〵人の造り出したる幸福の聚まり積りて成れるにて、必ず一時一世にして忽地に成るものにはあらず。されば、文明の由つて來るところを思ふに、其流まことに遼遠にして其源ほと〳〵尋ね難し。されど、或は今より古に溯り、或は古より今に及ぼし、

前なるものも後なるものも、何人かの手の中の力より出で來りたるものなり。試に觀よ、人々、誠に觀よ、人々。自己が身は彩絲をもて縢られたる毬子の如くに、多くの人々の頭より出で手より出でたる恩惠の絲によりて間鏬も無く縢られたるを覺ゆべし。

人若し卒然として、光美しき珠、香ゆかしき花などを貰ひたらんには、必ず其珠其花を我に與へくれたる人の、如何なる人なるかを知らんと思ふべく、また其人の如何にして其珠其花を我が前に持ち來らせしかを知らんと欲ふべし。こは然るべき人の情なり。さるに若し其人の名をも問はんとせて、たゞに其珠を受け、其花を受け、また其人の如何にして其珠其花を將ち來らせしかをも知らんとせで、たゞに其珠を受け、其花を受くるものあらば、我も人も、其人を智ある人なりと云はんや、はた愚なる人なりと云はんや。必ずや心あさき人なりと云ひて、賤み疎むべし。珠、花の如きものをだに、たゞに他より受け納れて有ち居らんは、實におろかなることなり。まして、人間の幸福といふものは、珠、花などゝは比ぶべくもあらぬものなるに、其をいたづらに受くるのみにて、その幸福の由つて來るところをも知らずにあらんは、智ありとせんや愚なりとせんや、云ふまでも無く心あさきものなりとの誹謗は免るゝところ無かるべし。前に述べたる如く我等が身は幸福に包まれて、譬へば彩絲をもて縢られたる毬子の如くに、多くの人々の頭より出で手より出でたる恩惠の絲によりて間鏬も無く縢られたるものなるに、此の人間の幸福の由つて來るところを知らざらん

見ゆるにはあらねど、其の制度あるがために、我等は遠きところの友に些少なる價をもて事を告げ情を知らすことを得るの幸福を享くるなり　かゝる幸福は、自然に世にあらはれ出で來りしものなるべきや。あらず。これもまた、人間の太初には無くして後に出で來れるものなるを見る時は、必ず其の制度を考へはじめし人あり、其の制度を行ひはじめし人ありて、さて後、人間に一つの幸福の增したるなるべし。『人間の幸福は必ず人によりて造り出されたるものなり』といふことは、目に見ゆるものゝ與ふる幸福についてのみ云ふべき言にはあらず、凡ての人間の幸福について爾云ふを得べき言なり。

すべての人間の幸福は必ず人によりて造り出されたるものなること既に說ける如くなれば、今さま〴〵の幸福に包まれて、暖に衣、ゆたかに食ひ、安らに住み、苦まで往來し、樂みて生活する我等は、必ず我等が前の人々、即ちくさ〴〵の幸福を造り出して我等に與へつ遺しつせる人々の恩惠を被れるものなること、云はでも明かなることなり。人々試に自己が身の前後右左にありて自己が身を幸福にするものを見よ。いづくにか所以なくして地より湧き出で天より墜ち下りたるものあるべき。いづくにか人の手に成らざるものあるべき。いづくかに何人かの造りはじめ考へはじめしより出で來りたるにあらざるものあるべき。いづくにか我等が前の人々の恩惠によりて生じ來れるにあらざるものあるべき。右のものも左のものも、何人かの頭の中の考へより出で來りたるものなり。

に世にあるものならで、必ず人の手によりて造り出され、必ず造りはじめし人ありて造り出されたるものなること疑ひ無ければ、我等が今日享け居るところの幸福なる狀態は、即ち必ず人の手によりて造り出され、また必ず造りはじめし人ありしによりて造り出されたるものなり。例へば、我が今我身を温暖に包むところの此の心地よき紀州ふらねるといふものを有せる幸福は、直接には和歌山の織工によりて與へられ、間接には此の綿ふらねるといふものを造りはじめし紀州名草郡中の島村の畠山義信といふ人によりて與へられたるなり。また此の太織の羽織は上野の伊勢崎より出でたる品にて、價低き割合には好きものなるが、今我がこれを被て寒を防ぐことを得る幸福は、上野の那波郡國領村の高柳與四郎と、同じ國佐位郡木島村の高木幸助との二人の太織縞を織りはじめしにより、また今の織工の手によりて、我が身に與へられたるものなり。我等が享くるところの幸福は、如是身に衣るものゝ上のみの人によりて造り出だされたるにはあらず、我等が禽獸と異ひて、雨露を凌ぐべき家といふものを有てる幸福も、生命を繼ぐべきくさ〴〵の食糧を有てる幸福も、上に說けるところの理をもて推し測りて、必ず人によりて造り出だされたるものなることを知るべし。『人間の幸福は必ず人によりて造られたるものなり。』

上には形あるものゝみについて說けり。されど我等が幸福は、形あるものゝためのみにて完くせらるゝにはあらず。例へば郵便の制度の如きは、其の制度といふものゝ小刀、茶碗、衣類の如くに目に

足らぬところある考慮ならずや。

此の小刀もまた然り。たゞに清長の手に成れりとのみ思はんは猶淺はかなり。清長より前にはじめて小刀を造らんとし、またはじめて小刀を造りたる人ありてさて後清長出で、清長出でゝ、さて後、此の小刀世に現れ出でたるなるべし。此の筆、此墨、此の硯、皆同じ理によりて、これらの品々を造りはじめたる人々の無くば、これらの品々今忽然として人々の手より此の世に現れ出づべくもあらぬことを知るべし。『人の世のものは必す造りはじめし人ありて造り出されたるものなり。』造りはじめたる人は、譬へば苗の如く、造りはじめんとしたる人は、譬へば種子の如し。造らんとしたる人は莖の如く、造りたる人は穗の如し。種子より苗は出で、苗より莖は立ち、莖ありて後穗は生るなり。是の如くにして、人の世の物はいよ〳〵多くなり、用はます〳〵よく足りて今日の我等の世の如き樂しき世は成れるなり。我等は今双合織の衣を纏ひ、太織の羽織を被、小倉の帶をなし、雲齋裏の足袋を穿き、紀州ふらねるの肌衣を着けて、こゝに坐せり。もとより富みて驕れる人に比ぶれば云ふには足らねど、開けざる國、若くは世の、民の寒さ凌ぐべきほどの衣をだに有たで、火をのみ頼みて冬を過ごすに比ぶれば、いと幸福なりといふべく、これらのものあるがために、寒さにも堪へ、冬をも爐の傍にのみ居らで過ごし得るなり。されば、これらのもの、我等に幸福を與ふることはいと大なりといふべし。さて上に述べたる理によりて推すときは、これらのもの皆自然

れど、造らんとする人と造る人とのみありて、造りはじめんとしたる人と造りはじめたる人との無くば、如何なるべきや。若し、世に、造りはじめんとしたる人と造りはじめたる人との無くば、造らんとする人は、造らんとする念の的を知らず、造る人は、造る術の道を知らざるべくして、其物猶世に現れ出づること無きに近からん。されば先づ造りはじめんとしたる人と造りはじめたる人とのありて後、造らんとする人と造る人との出で、それよりやがてさま〴〵のものは世に現れ出て來るなり。此の茶碗は、まことに五助といふ人の手より造り出されたるなれど、猶よく考ふれば、此の瀬戸燒といふものを造りはじめんとしたる人と、造りはじめたる人とのありたればこそ此の茶碗も五助の手より造り出されたるなれ。さなくば如何でまた忽然として五助といふ人の手より現れ出て來るべき。遠くは六百餘年ほど前に加藤四郎左衛門藤原景正といへる人あり。近くは文化の頃に加藤民吉といへる人ありき。四郎左衛門は瀬戸に陶器をはじめて造りて世に出し、民吉はまた磁器をはじめて其地より世に出しゝ人なり。これらの人々ありて後、五助といふ人も、かゝる佳き品を造り出すなり。これらの人々無くば、五助といふ人かゝる佳き品を造るべくはあらざらんもまた知るべからず。されば四郎左衛門民吉等ありて後、五助あり、五助ありて後此茶碗あるなり。これを思へば、此の一つの茶碗は、陽には五助の手に成り、陰には四郎左衛門民吉等の功によりて、さて後、こゝに現れ出て來れりといふべし。かゝるに若しはじめの人の功を忘れて、思はざらんは、聊か

あり。この筆、墨、硯は如何に。これらは所以なく世に現れ出で來れるものなるべきや。否。否。これらもまた自然に世に現れ出で來れるにはあらず。此の筆の軸に、高木壽穎製と記したる紙の貼りつけあるを見れば、此の筆は必ず高木穎壽といふ人ありて後現れ出で來りしものなり。古梅園製といふ文字の黄金の箔もて記されたるによりて考ふれば、此墨は必ず古梅園と呼ばるゝ家に造られたるなり。さて此の硯は、何の記も無けれど、人の手工の加へらるゝこと無くばかゝるものゝあるべくもあらぬほどに、人の手工の加へられたる痕いちじるきを見れば、これもまた何人かの手によりて造り出されしこと明らかにして疑ふべからず。されば、これ等のものもまた皆造らんと思ひつ働きつしたる人ありて、さて後、世に現れ出で來れるなり。必ず自然世に現れ出で來りて人のために用をなせるにはあるべからず。この理を推して、地、水、空氣、日月などいふ天然のものゝほかのさま〴〵のものに、皆こと〴〵く、造る人なくして世に現れ出で來れるならぬを知るべし。針の如く細く小なるものも、貝の扣鈕の如く輕く微なるものも、所以無くして忽然と此の人の世に現れ出で來れるものにはあらず。『人間のものは必ず人の手によりて造り出されたるものなり。』

既に說ける如く、人間のものは必ず人の手によりて造り出されたるものなり。されど人の手工のみにて、人の世のものゝ造り出されたりと思はんは、いさゝか足らぬところある考慮なりといふべし。まことに、人間のさま〴〵のものは皆、造らんとする人と造る人とのありて後、世に現れ出づるな

文明の庫

緒言

人の世にあるほどのものは、如何なる幺微なるものも、所以無くして忽然と此の人の世に現れ出て來れるものにはあらず。こゝに茶碗あり。此の茶碗は、所以無くして世に現れ出で來りしものなるべきや。否。否。またこゝに小刀あり。此の小刀は、所以無くして世に現れ出で來りしものなるべきや。否。茶碗も、小刀も、天より墜ち下り來れるならず、地より湧き出で來れるならず。必ず此の茶碗此の小刀を造り出ださんと思ひたる人あり、造り出ださんと働きたる人ありて、さて後、それらの人々の心により手によりて、はじめて人の世に現れ出で來れるなるべし。此の茶碗の外面の底を見るに、五助と記しあり。されば、此の茶碗は、五助といふ人の手より造り出だされて、こゝに我が或は茶を飲み或は湯を飲まんとする時の用をなせるなるべし。また此の小刀の手元を見るに、清長と彫りたるが見ゆ。さては、此の小刀は、清長といふ人の造り出だしゝため、こゝに始めて世に現れて、我が竹を截り木を截る用をなすなるべし。かくの如く茶碗も小刀も、造れる人ありて世に出で來れるにて、所以なくして忽然と世に出で來れるにはあらず。こゝにまた、筆あり、墨あり、硯

に比べては末に至りて做し易き傾もあるべし。されど碁も末に至りては做し易くなるやうなれば、みだりに難易を語るは愚なることならん。我國の將棋は馬子を取りては用うることとなれば、末に至りては却つて爭ひも烈しく興も深くなるなり。將棋却つて碁より難しとや云はん。眞實は碁も將棋も之を弄するに難易あるべからず、負くるはいづれも易く、勝つはいづれも難かるべきなり。

の御代にわたりて陸軍の士の案じ出し、師團將棋といふは、二人は戰ひ、一人は之を判ずるなれば、三人ならでは玩ぶ能はず。清朝になりて鄭破水といふものゝ案じ出せし三友棋は三人して相戰ふ棋なり。司馬温公の七國將棋は七人して戰ふも三四人して戰ふも意のまゝなり。七國將棋は江戸にて少しは行はれしこともありしにや、これに巧なりし女のありしこと馬文耕の武野俗談に見え、また七國將棋譜の和解も出版せられしことありしなり。

○將棋をもて遊ぶ方法

今の將棋をもて遊ぶ方法は本式のほかにもいと多し。ふり將棋、うけ將棋、はさみ將棋、どけ將棋、とび將棋、ぬすみ將棋、はぢき將棋、くはへ將棋など是なり。此中ふり將棋、ぬすみ將棋、はぢき將棋は小兒の戲れにして大人の爲すに堪へざるものなり。うけ將棋最もおもしろく、どけ將棋最もをかしからん。

○圍碁象戲の難易

五雜爼に將棋は圍碁に比ぶれば倣し安しとの言あり。支那の象戲は棋子を取り棄てにするなれば、末は盤上に棋子の數いと少なくなりて、爲すべき手も多岐ならざるに至るなり。されぱまことに碁

○大橋柳雪の飄逸

大橋柳雪は將棋をもて祿を世にする大橋家に生れながら心淡くして名利に繫がれず。江戸を出て、京阪近畿の間に遊ぶや、豫め官に請ふて得たるところの暇期の既に盡くるをも顧みずして家に歸らざりしかば、遂にまた將棋の宗家の人たるを得ざるに至れり。されども柳雪はこれを事ともせずして心のまゝに遊び居たりしとぞ。耳は聾ひたれども技は鋭き人にして、宗步には先輩なり。古家康は年若き時信玄と戰ひて弓矢の道を硏き、終に天下に覇を稱せしが、柳雪の宗步に於けるは、譬へば信玄の家康に於けるが如くなりしといふ。

○大橋家の墳墓

或人おのれに語つて曰く、將棋司大橋家の墓は押上村の瓦斯糸紡績會社の近くに在り、さすがは將棋の道の宗家の墓ほどありて、いづれの墓碣も皆將棋の棋子の形をなし居れりと。

○將棋の種類

大將棋、中將棋、小將棋、支那將棋、西洋將棋はいづれも皆二人にて勝負を決むる遊びなり。明治

の之に應ずべき計策を得ずして苦めることあり、如何にせば好からん、など云ひ出づること數次あり。其は如是せば可らんなどいふ宗歩の答へ流石に大抵は理に當るをもて事無き日も少からねど、宗歩とて神といふにもあらねば其答へ太郎松を服するに足らぬことも無きにあらず。さる時は太郎松も面を擡げて、さばかりの計策は我もまた知らざるにあらねど、然すれば如是せらるゝを如何にせん、と詰る。詰られては宗歩も萎み難く、其は如是して防ぐに何事あらん、と誇る。いやいや、左らば如是して攻めつけんに猶抵抗ふべきや、といふ。もとよりの事なり、何をか恐れん、如是して守らん、といふ。如是追はゞ、と逼まれば、如是避けん、と空嘯く。如是掠らば、と罵れば、如是報ひん、と嘲る。始は談話に過ぎざりしものも漸く爭ひのやうになりて終には龍虎の激しき戰ひとなり、互に杯を啣みながら餘の談もなく、四目相睨みて彼一句此一句と、打太刀受太刀鎬を削つて辛くも宗歩の勝と決まるに至ることも間々ありしといふ。さる折太郎松歸りし後宗歩其座に居合せたる弟子共に打向ひて、辛くも壓しつけて歸したるが、まことは我が初ッ手のいと惡かりしなり、汝等今我が勝ちたるの故をもて我手を好き手なりと思ふなかれ、我なればこそ勝ちたれ、嗚呼危かりし、太郎松め、したゝかに我を窘めたるかな、などゝ笑ひながら云ひ出でゝ汗を拭ふこともありしとぞ。

さは目一つ長くして十五間にすべし、厚さ二寸六分、足の高さ三寸六分、太さ二寸二分、足は目一つ入れて付くべし。中將棋盤、廣さ一尺四寸、十二間に割る、長さ一目長くすべし、それを十二間に割る、厚さ二寸二分、足の高さ二寸八分、太さ一寸八分、足の入りは八分なり。小將棋盤、長さ一尺二寸にして九目に割る、廣さ一目狹くして九ッ目にすべし、厚さ一寸八分と。大將棋盤中將棋盤は如何にや知らず、小將棋盤は長さ廣さ共に右の如くなれど、厚きは三寸五分ほどなるを今は用ゐる習なり。古はいと質素なりしなるべし。

○市川太郎松天野宗歩と且飮み且戰ふ

市川太郎松は宗歩と交り深くして而も技もまた宗歩に讓ること多からず。宗歩は七段太郎松は六段、其差は香車半枚のみなる上、太郎松も將棋を好むこといと強くして、少しの間にも工夫鍛錬を怠らざるものなりければ、宗歩も等閑の輩とは一つに視ざりしなるべく、太郎松もまた天の孔明を生ぜるを恨みたる周瑜の感を懷きしなるべし。されど二人とも心淸しきものなりければ隔て意も無く交通ひ居けるが、宗歩も太郎松も酒を嗜めるものから二人相會へば酒を呼びて睦み語らふは大慨常のことゝなり居たり。飮酌の折から互に好める道なれば、太郎松問を發して、過ぐる日某處にて心を留め來しところが、如是々々箇樣々々の爭の時、敵より是の如き妙手段をもて取りかゝられ、味方

對はざるの日のみ多くなり行けば、勤むるには精しくなり怠るには荒み行く道理なれば自然心疎くなりて聊か其技の衰へ退く習なるに、宗歩のみは日々遊び暮して馬子を手にする折のいと稀なるにも似ず、いざとて敵を見て戰ふ時は、其技の毫も退かざるのみならず却つて益々鋒鋩鋭利に、恰も寶刀の新に硎より發せしが如くなりしかば、會ふものいよ／＼驚き嘆じて避易せざるは無かりしとぞ。たゞし宗歩の如斯なりしは、表面には日々遊び暮しながらも、心の中には折に觸れて何時といふことなく自ら問ひ自ら答へて思を覃し技を錬りしが故と覺しく、其證には宗歩何日の夜も眠れば則ち囈語せざること鮮く、囈語すれば則ち將棋のことを言はざること鮮く、其の三一の角、四六の歩などゝ指揮命令する語氣など、いと明かにして而も嚴しく、恰も覺めたるものゝ言ふごとくなりしといふ。今の棋聖小野翁の如きも、若き時宗歩が家にありて其夜半の聲を聞きしこと毎々なりと予に語り玉へり。古の文人には腹稿の譽れあるものありしが、宗歩の如きは腹戰をせるものといふべきなり。

○將棋盤の定寸法

享保二年に成れる大匠雛形六卷は工匠の據りどころにするところの書なるが、其第六卷小坪規矩追加の冊に將棋盤の定寸法見えたり。曰く、大將棋盤、廣き一尺六寸にして目數は十五間に割り、長

りしといふ。

○天野宗歩一世を壓す

天野宗歩幼名は留次郎、文化十三年江戸の菊坂に生る。歳甫めて六才にして十一世の大橋宗桂に其技才を知らる。宗桂の教を受けて技大に進み、諸國に周遊して到る處に技を鬪はし、遂に京都に止まつて群雄を控制す。宗歩氣象卓犖不羈と雖師を尊むの情甚だ厚きを以て、身を終るまで七段を以て甘んず。蓋し七段以上の技無きにあらざるも、自ら高くして以て肩を我師に比べんとするを欲せざるなり。されば天下の棋客は、一世の雄たる宗歩が自ら卑うして七段に居るの故を以て、英傑の資わるものといへども自ら七段以下に屈せざる能はざりしといふ。

○宗歩腹戰

宗歩は技倆拔群なるのみならず氣象もまた不羈なりければ、酒を嗜み客を愛して、力士などを家に養ひ、却つて棋客と局に對することは稀なりしといふ。世の棋客に取りては宗歩は如何ともすべからざるの強敵にして、宗歩に取りては世の棋客は眼中に入らざるの豎子輩なれば、宗歩が杯を啣みて笑傲するの日多くして局に對して考慮の時少かりしも怪むに足らず。左れど如何なる棋聖も局に

かりしと云へば、眞に蒼天將棋の爲めに此人を世に降せしもの丶如し。左れば宗英以前に宗英なく、宗英以後にも宗英なく、歴代の棋聖長短あり高低ありといへども其間に立て巍然として獨聳ゆること猶富嶽の群山を拔くが如しといふ。其著はすところの步式二卷は晩年に古法を按じ新意を加へて成せるところの書にして、實に將棋の聖經なれば、今の棋聖小野翁の如きも常に人に對ひて、步式および其二篇を見よ技は自ら進まん、と敎へらる。宗英死して今殆ど百年ならんとするに、しかも其殘膏餘瀝猶斯道の後進の枯腸枵腹を潤して生氣漸く盛んなるに至らしむるは、其力量もまた大なりといふべし。

○京傳の娼妓絹篩

山東京傳の作の洒落本に娼妓絹篩といふものあり。洒落本の題は世に行はれたる書に似せて選ぶ例いと多く、たとへば格子戲語の孔子家語に擬し、三敎色の三敎指揮に擬し、遊子方言の揚子法言に擬せるが如し。されば京傳の娼妓絹篩は將棋絹篩といふ書に擬へて其名を選べること疑ひなけれど、今存するところの將棋絹篩は宗英の門の福島順棋著はすところ、文化元年の板にかゝるものなれば、此絹篩に擬したるにはあらぬなるべし。福島の絹篩のほかにも大將棋絹篩など今も猶稀に存すれば、別に將棋絹篩といふもの古くより世に行はれ居しならん。順棊名は龍治、信州の人、技は七段に至

を與へんとすれども辭して受けず、四段に甘んじて身を卒はる。而して其著すところの擒將圖百則、則々皆奇にして、局を終へて後これを見れば盤上の馬のならび方自ら大の字を爲すあり、梯子の形をなすあり、井桁の形をなすあり、或はまた馬の表裏を以て其歳の月々の大小を現すあり、人をして愕然として其巧思の神を欺くを嘆ぜしむ。其書を將棋極妙といひて今猶存す。別に著はすところ將棋玉圖あり、また世に行はる。

○添田宗太夫

添田宗太夫は元祿頃の人にして、技は七段に至る。其著すところの贏局圖百番、局を終ればまた皆字樣をなし器形をなすこと君仲作るところのものゝ如し。其作るところ聊か君仲に讓るに似たりと雖、而もまた年代君仲の前にあること數十年、不幸にしてたまく世に著はれず、憾むべきなり。

○大橋宗美鬼と呼ばる

大橋宗英は安永天明より文化に至るまでの間に雄を稱せるの棋聖にして、其人と戰ふや一正一奇千變萬化、古名將の兵を用ゐるが如くなりければ、天下の棋客皆終に屛息俯首して之を呼んで鬼宗英と稱するに至りしといふ。宗英は性質率直和淳將棋以外に何の好むところもなく何の長ぜる技もな

をも恐るゝに足らぬものゝやうに云ひ做し、且つ將棋龜鑑といふ書を著はして、宗桂と自己との稽古差しの將棋の中にて自己の勝ちたる分を多く擧げ、また作りごとなども加へ、五一の金の手は自分差し創めたりなどゝ誇りしかば、宗桂大に怒りをなして、其方は聞えざる致方をするものかな只今までは其方稽古の爲め相手となりて遣はしたるが其方左樣の不心得を致す上は、此度眞實の勝負を決して、其方勝ちたらば六段を許さん代り、負くるに於ては與へ遣はし置きたる五段の免狀を取り上げ向後我家の相手となることを許すまじ、と約束し、今までは稽古のために香落平手交りに指したるところを角落一番香落一番と定めて指し爭ひ、宗桂終に二番とも勝ち、五段の免狀を取り上げしといふ。多川はまた關野井とも云ふ歟。其宗桂との免狀を賭けたる爭ひは延寶五年八月に決せられたるなり。象戲龜鑑は甚く賣れざりしものと見え後正德年中に至り山崎勾當といふものゝ著として新に序など加へ、別のものゝやうにして鬻がれたり。將棋の道には限らぬことながら特に此道は上手よりは下手を測り知るべし、少しにても下手よりは上手を測り知る能はざるものなれば、驕るはいと〲愚なることなり。

○桑原君仲の異才

桑原君仲俗稱は駒次郎、九世宗桂の門人なるが、謙退の德ありて人に勝ることを欲せず。宗桂五段

解○七一桂打六一玉八二桂打七二玉四五龍馬七八醉七二龍馬八八太八七金七九太九九香六八太七七金五八太六七金四八太九八飛三九太四九香同太五八金三八太八三龍馬二八太四七金三八步同金一七太二七金同金一八飛ナル二六太一六金二五太一五金二四太一四金二三太五六龍馬二二太二七龍王二六步三二步一一太二一金打

此擒將手の奇なるは、五四の龍馬にて玉と醉象とへ當りを付けられたる時、玉の救ふべからざるを見て之を棄てゝ八七の醉象と醉象を進め、醉象を太子として猶ほ戰ふ所にあり。玉を獲らるゝも太子猶存すれば負とならざる法則なれば、玉を獲らるゝ代りとして龍王を獲りたるところ、醉象とい ふ馬なき今の將棋には見ることを得ざる味ありといふべし。

○伊藤看壽七歳にして宗看を驚かす

伊藤看壽名は政福、寶曆年間の人にして、伊藤宗看の弟なり。年方に七八歳の時擒局の書を閱て、宗看を顧みて之を評しけるに、其言甚だ妙なりければ、宗看大に驚きて非常の兒となせりといふ。其作るところの擒局の圖、將棋圖考の卷末に見ゆるものは、實に六百十二手なるが、看壽の之を作りし時は年甫めて十三なりしとぞ。驚くべきかな。

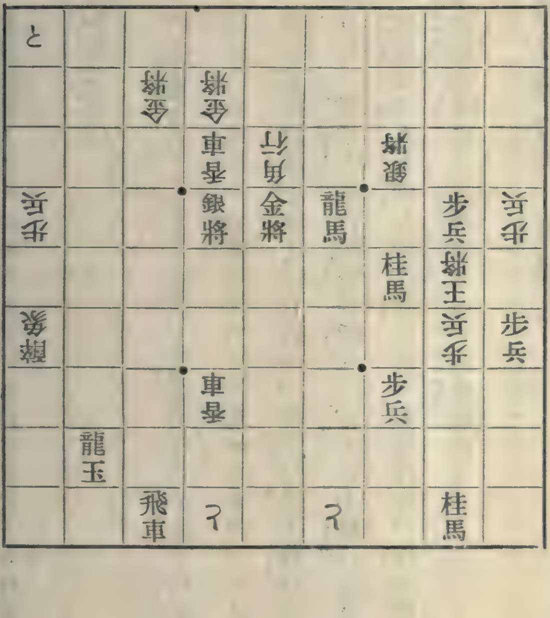
○大橋宗桂多川勾當を屈す

多川勾當は大橋宗桂門人にして、宗桂の敎を得て技大に進みしが、技の進むに從ひて心驕り、宗桂

に載せ漏せしが、將棋の史を究めんとするもの丶一顧すべきところのもの也。

○醉象を用ゐある小將棋の擒將圖

象戲綱目五卷は寶永四年の板なるが、其第四卷に小原大助といふもの作るところの擒將圖ありて、其圖中に醉象の馬あり。其圖の鼇頭に殊に、古風作物と書して、むかしは今の小象戲に醉象を添へて差しけるとぞ、と附記しあり、林氏の奇巧圖式の序も思ひ合されて珍らしければ次に其圖及び解を擧く。



しなりといふ。此事を誤り傳へて將棋に耽るものは親の死期にも會はずなどゝは云へるなり。

○將棋と本願寺上人

將棋名將鑑と云へる古き書に、右大將賴朝と文覺と蛭が小島にて差したる將棋の譜、土佐坊正俊と伊勢三郎義盛と堀川御所にて差したる將棋の譜などゝいひて載せたるは、いと戯れたる作りごとなるが西本願寺眞如上人といへるは實に將棋を好まれしにや、檜垣是安と戰ひたる譜、元祿十一年板の將棋指覺大成といふものに見ゆ。指覺大成は敦庵の辯ぜし如くいと疑はしき書なれば無きことを誣ひしにやとも思はるれど、本願寺上人と明らかに記したるを見れば、作りごとゝのみも考へられず。檜垣是安は四代目大橋宗桂頃の人にて諸書にその差將棋遺れり。

○將棋と吉備眞備と大江匡房と

寶曆三年伊藤看壽著はすところの象戯百番奇巧圖式に林信充の序あり。其序に曰く　象棋家傳へ稱す、先王の時、吉備公再び唐朝に聘し、小象棋を得て歸る、其圖狀を案ずるに、兩營玉將の首に酔象あり、左右金將の首に各猛豹あり、然れども其精思を得るなきなり、大江匡房素兵理を窮む、因て象豹を去りて而して中華に傳ふ、今の行ふところ是なり、云々。此序は余これを將棋雜考

さま〳〵を其儘現すことを本願とせる三馬が筆のことなれば、これを取り出して褒むべきかどは無けれども、まことによく當時の湯屋將棋を差す者共のありさまを描き出して眉目活動の妙あり。三馬馬琴の頃は將棋大に行はれて、上は公侯より下は漁樵に至るまで之を弄びしなり。

○將棋を弄ぶもの親の死期に會はず

世俗好んで將棋を弄ぶものを罵つて、親の臨終にも會はざるに至らんといへり。これ其の原づく處を知らで云ひ傳へたる誤謬にして、語の意は本將棋に耽るものを戒めんとするにあらで局に對しては他念なく嚴肅に勝敗を決すべきとを言へるなり。德川氏の時は大橋伊藤の二家將棋を以て祿をうけ居たるとなるが、もとより將棋に詳しきのみの人々の事なれば、平日は何の勤務もあるにあらず、たゞ年毎に十一月の十七日御城に於て將棋を鬪はせ、之を將軍の覽に供するを其務となせるなり。されど考深き人の互に負けじと爭ひたらんには一時二時にて果つべくもあらぬに定まれるとなるを以て、其日に先ちて豫め寺社奉行役宅にて勝負を決し置き、其差口通を十七日には式立ちて演ずるを常とす。さて其寺社奉行役宅にて二人相鬪ふ間は、眞の爭のとなれば、勝負の決まるまでは幾日に渡るとも家に歸るとを免さゞる掟にして、縱ひ親の死期に臨むとも、將棋を以て仕るもの丶一年に只一度の勤務のとなれば、之を顧ることとなくして一局を差し切らては濟ぬ筈なりと定めたり

計をもて立働くなど中々をかし。されども要するに將棋の行道の變じたるものに過ぎず、たゞ彼は遊樂の事、此は戰陣の事と異なれども、其趣向は一途に出でゝ、馬子のきゝ道將棋の常法等をたねとなし牽强付會を逞しくしたるのみなり。卷末に、案の外、作者も若やぐ戲作の下ぐみ、仕上げて烟草に將棋の草紙と御評判、ことしも變らずめでたし〳〵、とあり。稿を成せしは前年六月と見ゆ。

○將棋と巣林子

近松門左衞門作るところ山崎與次兵衞壽門松に與次兵衞治部右衞門將棋を差す段あることは人の知る所なり。たゞし一段の文字、固より將棋を主とせずして、將棋を假りて金銀を散じ與五郎を救ふべきを諷するにあるを以て自から將棋の事に貼く能はざるは無理ならぬことながら、將棋の道を知るものより見れば筆に働きといふものなくして痒きところに手の屆かぬ思あり。淨閑が手に金銀多きことを示さんとて、淨閑が手には金三枚、銀三枚、歩も御座る、といはする句の如きは、讀むものをして失笑せしむ。おもふに近松は弱將棋にして、支考にあはゞ歩三兵くらゐにあしらはれしならん。

○將棋と三馬

三馬が浮世風呂の中に、やくざものども將棋を差すの條あり。寫眞機蓄音機などのやうに、浮世の

○將棋と馬琴と

曲亭馬琴は寸陰をも惜みて著作に從ひし人なるが、其若き時に當りては將棋を弄ぶことを嗜みしにや。著すところの小說雜書の中に、將棋に關するの書二部あり。一は春駒將棋行路、一は盤州將棋合戰なり。象棋行路は享和元年の板にして、馬琴三十四歲の時の作とおぼしく、其大概を語れば、一部の趣向將棋の駒を人として書けるものなり。先づ女郎を玉とし客を王とし、玉を手に入れんと王の望むより事起り、玉方には大盡の角行やりての香車などあり、王は金銀を捨てゝかゝれは、敵は桂馬をもて金銀を褌にかけしめ、または兩天秤棒をもて王を惱ませなどす。また王は鎗ぶすまに會ひて、はだかとせられ、窮して雪隱に匿れ、龍王の忠節によりて纔かに身を免るゝ條あり。桂馬と歩との屋根の上の戰に、桂馬は歩のため嚙み倒さるゝをかしさあり。例の理屈癖はかゝる小册子の中にも見ゆれど、繪ぐみなど思ひのほかに可笑く出來たるものなり。卷末の半丁に、將棋の馬を組みて人の體をなせる圖あるが、其圖には玉をもて頭となし、飛車角行桂馬金銀等をもて胴手足となし、股間に金を配し、香車を垂下せしめたるなど、馬琴三十餘歲の時の作としては、人をして呆れ惑はしむ。おもふに馬琴も支考と同じく少しは將棋を弄びしならん。盤州將棋合戰は、文化十四年の板にして馬琴五十歲の時世に出だせるものなり。玉の將監と王の將也との爭ひに龍王十郎の謀

り。』かくて兩陣兩王に對して、始めはと歩の一手より、進むにも先あり退くにも先ありて、中比は二手透、三手透を爭ひ、終は一手透に勝負を決す、みなたゞ先進先退の兵法にして、上手といつば心おだやかに、下手といつば目見えず、詮ずるところは取舍の前後を知りて、命を捨つると捨てざるとは、その時の損得を見るべし。『露曰く、一括して總稱す、結束甚だ妙、名將の兵を率ゐるが如し。』しかれば唐にも日本にもこれらの道理を說き盡して、諸葛が門には八陣の圖を張りて神機妙算の謀をめぐらし、宗桂が家には將棋經をつくりて奇戰擒將の法をあらはす、畢竟は油斷大敵の四字より儒佛老莊と說きひろげて、四十八手の兵法ともなり、八十一目の將棋ともなれば、孔子も晝寢を戒めて、象戲でもさせとは叱り玉へり。『露曰く、博奕といふものあらずやの聖語を飜し來つて、象戲でもさせと叱り玉へりとなせる、輕妙、頤を解く。こゝらに俳諧文字の眞趣は盡くべし。』況んや盤上のあそびを見て、その身の貴賤をもはかるべく、其心の利鈍をも知るべければ、よろづに其師を擇びて、先は對盤の法を知るべきことなり。『露曰く奇を收めて正に歸す。開闔法あり、起結則あり。此一篇の如きは、俳諧文字中の正格といふべし。』

支考も自ら將棋の賦は做し得て佳なりと思ひしなるべく、村野航が讀㆓將棋賦㆒といふ文を、賦の後に附けて世に公にせり。讀㆓將棋賦㆒の文もまた惡からず。

手間の取らざる働きなるべし。されど敵王に出むかひ、こゝを防ぎ、かしこを遮るに、敵は其の腹をくゞり、しりへに抜けたる時は、四枚一所にありながら金將一枚にも及ばざるは、我々が官位の低ければと、今さら身の程を喞つに似たれど、しかし金將の悠々然として此時の益なきを怒れるなるべし。こゝに桂馬こそをかしきものなれ、進む時は物の影より飛び出でゝ危きに臨みて退くこと能はず、さるは猪の勇氣に似て、鼻のきかざる殊にをかし。いにしへ張儀蘇秦がやからは辯舌をもて敵國を計り、物のひまを窺ひて不意を討たんとす、これらは仁勇の沙汰を離れて、だますに手無しといふ法なり。ある時王城の夜軍に高塀を越えんと差覗きたるを、銀將はひそかに歩兵衞にさゝやきて彼が鼻をつらぬかせたれば、見ぐるしき痛手を負ひながら後悔することたび〳〵なり、是を桂馬の高あがりといひて、世智にかしこき人をいふなり。されば桂馬のつり詰といひ、又は桂馬のはなし詰といふは、彼が家の奥の手にして、敵の油斷を覗へば、先は手見禁の軍を好めることなり。（桂馬の高あがり、つり詰、はなし詰、など今もいふ語なり。手見禁は讀んで字の如し、他の手を見ることを禁ずる也。）香車は角髪の小姓立なるが、さる事侍りて外ざまにはありながら此度の軍に一手柄して家の面目をすゝがむと思へる、其勢ひ一筋にあらはれて、素槍は彼が家の一流なるべし。しかるを一陣に進む時、歩兵の算用を仕ちがへて、ひしと槍先を止められたれば、こなたよりひかへて爲べかりしものをと、此の後悔は若氣のいたりともいふべし。（露曰く、筆もまた香車の勢あ

下數行蛇足贅疣なり、削るべし。》ある時陣中に烏滸のものありて、いかに角行と云へる名の山伏に似たらんは、さばかりの軍師に然らずとさゝやくに、やがて官名の時は龍馬と名乘りて、四方八面に威風を振へども、人の御手はと問ふ時に、角助々々と云はるゝも本意なし。《此段は角行の名につきて滑稽に云ひまはせり。たゞし今は角助〱などゝ仲間らしき名を呼ぶことは行はれざるに似たり。》さて金將は王城を離れず、常に其傍に侍りて諸卒の賞罰を沙汰するものなり、たま〱飛角の防ぎ難きことあれば、銀將のために後陣をさゝゆれども、本より官高く祿おもければ、みづから組打の勝負を好まず、居ながら銀桂の下知をなして、やれ〱と云ふ中に、おほくは桂馬筋の木戸を破られ、逃ぐるに一寸も飛ぶこと能はず、或は桂馬におびかれて中段にまよひ出でたるに乘替の馬にもはぐれたる時は、かち立の歩兵に嬲られて、生きながら敵の手にわたる、是たゞ世の常の榮耀に誇りて、その身の重き故なればなり。《露曰く、言長くして趣短し、文氣振はず。》然るに銀將は歩兵を能く使ひて、常に先陣の名を蒙むる、あつばれ侍大將といふべし。彼は不思議の尻に力を持ちて、敵を後ろさまに押し出すに、香車道の木戸を破らずといふ時なし、むかし朝夷奈が首引も滿王野が鞠引も、此尻の沙汰には及ばざるならん。さてこそ金飛車の小股を潜りて、屹度後戸を支へたるに、いづれ組むで名のらずといふ事なし、さるは韓信が股ぐらを潜りて、大將の名をあげたるにわらざらんや、これを俗には足駄の法といひて、銀將の家の軍略なれば、彼が嚢沙の智惠よりも

歩覗歩にして、爰に小敵を見ては侮らざるのいひなり。《成歩は重賞に勇む猛士にして、覗歩は身を殺して仁を成すの烈夫なれば飛車もこれには當り難きをいふなり。》さて角行は物の蔭に扣へて千里の外の勝を窺ふ。いづれの時よりか石田といへる馬組に、香車道に身を隱し、おほくは金銀と引組み、飛車のために命を惜まず、死後の勇氣をふるふより、かの仲達も遙かに恐れつべし。《石田といへる馬組は、石田撿校の案じ出せる陣方にして、敵の未だ戰意を發せざるに乘じ、急に突擊惡鬪して我が上將を失ふをも顧みず、只管敵陣を粉碎するを主とするものなり。されば此段は我が角行の死して却つて敵陣の大に亂るゝ樣を云へるにて、三四句の中によく、石田の陣法戰畧を説き盡せり。たゞし角行死して敵の亂るゝは、孔明死して仲達猶退くとは、大に其情を異にすれど、ことさらに疝氣筋に故事を引きて其間に一種のをかしみを覺えしむるは、例の俳諧者流の文字の一つの筆致なりと知るべし。》或は飛車龍王に我が城を破られ、かの搦手より落ちゆく時に、敵は其路を遮らんと、王城の備の歩をつきて、銀をあがり、桂をはぬれば、おのづから鶴翼の透間を得て、おもひもよらぬ王手、飛車手をかけて不思議の勝を得る事は、全く角の家の秘法にして、千死を出てゝ一生に逢ふといふべし。さるは軍のならひにて、勝に乘りたるあやまちなるをや。その頃京童の口ずさみにも王手飛車手にかゝる角行と謠ひたれば、自他の手爾波のいかゞならんにと、連歌俳諧の異論におよびたるは、かゝる陣中の風流にして漢楚の戰ひにもさる例は侍りき。《露曰く、そのころより以

に銀角のにらみありて、といへるは互に中飛車にして互に角筋へ銀を出したる場合をいふなるべし。》兵書には爰に逸勞の法ありて、すること無くば端の歩をつけといへり。《露曰く、忽重く、忽輕く、忽正、忽奇、一句は處女の態あり一句脫兎の勢あり、眞に是俳諧文字。》或は中段に飛車の出る時かしこに歩兵の漂ひたるを見て、先は軍の血祭りにと、横さまにそれを蹴立つるに、やゝもすれば銀桂に道を遮られて、歸らんとするに度を失ふ。それをしきぶの太輔と異名して笑へば、味方は大將を討たせじと、馬の足立のしどろなるより、不慮の敗軍におよぶことあり。さるをや千鈞の弓は鼷鼠のために放たずといへる兵書の誡も爰なるべし《中段に出でたる飛車の歩を貪りて歸路を斷たることは、有る習ひなり。しきぶの太輔は、歩を他の馬の下に敷くことを敷歩といへは、味方の歩の上を迷ひありく飛車をば、式部の太輔といふいかめしき名に寄せて嘲り罵りし當時の洒落なるべし。今は云はぬ語のやうなり。》さはあれ敵城に乘り入りて王のかたはらを睨む時には、かしらより桂馬をはね、しりへより銀をかけ、搦手より金をうち捨てゝ、桂香の際に責めよすれば、鐵城岩壁も防ぐにいとま無く、是を龍王の平押といひて飛車の家の軍術なり。《此段は飛車の働きを能く云ひ得たり。敵の玉の腹に金をうち捨てゝひた〳〵と責めつくるを、今は俗に送り狼などいふ。》されど家の子の香車に油斷して、彼がために刺し通されてあへなき命を失ふことも、流石の名將の色にまどひて小冠者に寐首取られたるためしならん。《露曰く、一揚一抑その妙を極む。》たゞ恐るべきは成

金銀其他をもて護らするなり、右がこひは之に反するなり。》雁木、片櫓など《いづれも圍ひかたの式の名なり、雁木は其形雁木の如くなれば然云ふならん、片櫓は櫓を組みたるが如く圍ふを以て云ふ。雁木といふは今行はれざるに似たり、片櫓は今も行はる。》金銀桂香を八手に分けて、飛車と角行とは軍師の位なるべし。むかしは漢に張良あり、蜀に孔明あるが如き、諸軍はすべて其下知に從はずといふものなし。《露曰く、飛車と角行とを軍師に擬して、諸軍はすべて其下知に從はずといふことなしと云ひ落したる手際甚だ巧なり。文を觀るものも點頭し、棋を知るものも點頭す。》さればは銀將以下の諸卒ありて、敵の城中に乘り入る時は、直に一官を得て金將の位となる、是を將棋の勸賞といふ。《露曰く金將となると云はずして金將の位となるといへるは流石に支考の文なり。意を立つるに權衡あり、筆を着くるに銖錙を爭ふといふべし。》此故に歩兵は楯の羽をならべて先に進めば諸將は其陰に敵陣を窺ふ、《露曰く、一筆に容を描き情を描く。》飛車はよく香車をつかひ、角行はよく桂馬を使ふ。此二騎は彼が調練に馴れて、その旗下の勇士といふべし。さて飛車は居飛車あり、四間飛車あり、中飛車は古法の軍立なれば、中央に銀角のにらみありて進む方に一兵の損あり。《居飛車は居たるまゝの飛車をいひ、四間飛車は左より第四條の路に飛車を移し置くをいふ。中飛車は玉の頭の上に飛車を置くことなるが、二百年も前の支考の時既に古法といひて暗に其利少きことを示せるに、今猶此陣立を好む人あるもをかしく、下手の中飛車といへる諺も思ひ合はさる。中央

甫に傳へ、古川章甫これを其子市川章甫に傳へ、章甫これを片瀨佐右衞門、島田久兵衞、松屋源右衞門の三人に傳ふとあり。此中島田久兵衞は江戸の人にして毛塚源助と殆ど同時代の五段の棋客なること大橋宗英選むところの將棋奇戰に徵して明かなれば、徂徠の將棋も寬政あたりまでは稀に之を玩びしものもありしと見ゆ。されど今はこれを知る人殆ど絕えたるなるべし。因に記す、徂徠の作るところの將棋は、廣象戲譜一卷ありて、其式今に存するを得たりといへども、不幸にして、騎總、天馬、軍師、旗、鼓、霹靂等の馬の行度に誤謬ありて、用うべからずといふ。憾むべきなり。

○將棋と支考と

古は庾開府象戲賦あり。我邦の支考これに對して負けじ魂を振り起せしとにはあらざるべけれど、其作るところの將棋の賦は、才筆縱橫、所謂俳諧文字の上乘といふべきものなり。其文に曰く。

象戲は蠻觸のあらそひを表して、我朝には將棋といふ。もとより張陣の法ありて、盤上に智惠をたたかはしむ、國に明王の仁あらば、家に忠臣の義なからんや。勝負は時の運によらず、上手と下手との詮議なるべし。〔露曰く、一語徹底。又曰、下手は時の運に乘りて勝ち、上手はおのが智に躓いて負く。〕そも〳〵馬組の法といふは、左がこひ、右がこひ、〔左がこひは我が王を左のかたに寄せて

手跡家の口傳なり、とありといふ。おのれ未だ本書に就ては見ざれど、如何はしき愚なる口傳なりといふべし。

○將棋と徂徠と

徂徠は將棋を好みて初段ほどの力はありし由なるが、人の後につくことを肯んぜざればにや、或はまた兵を談ずることを好みたる餘りにや、みづから一種の將棋を創めたり。其譜今猶存すれば、好事の士は就いて見るべし。譜の序に、今因二古制一而廣レ之、聊且俾三童蒙一嫺二軍伍之名一とあるが如く、其馬には將あり、記室あり、親兵、力士、舍人、舍餘、軍吏、軍匠、神僧あり、中軍、旗鼓、護兵、千總、砲總、百總、前衝、後衝、佛狼機、象、弓、弩、砲、馬兵、騎總、步兵、步總、牌總、牌、車總、車、先鋒等ありて、甚だ軍伍の實に近し。馬の數、一軍九十、兩軍相合せて一百八十、局の大さ、縱橫、各十九路なり。片山兼山、其譜に序して、命世之人、雖下執二掌拮据之際一胸中別有二悠々閑日月一而優爲上レ之、信哉、といへるはさる事ながら、當時の宗桂は之を許して、乃公に相談にてもありたらんには今少し面白くして世に行はれもするやう仕てまゐらせんものを、と云ひしとなり。棋聖小野氏所藏の毛塚源助（江戶小網町に住す、大橋宗順門人、技は六段に至る寬政天明頃の人）自ら書するところの冊子の末に、廣將棋傳來の系圖あり。これによりて見れば、徂徠より古川章

有、日本に一面の駒にて御座候、御望の旁は私方へ御申可被成候、所望仕、進可申候、とあり。併せ考ふべきなり。

近き頃の人にて董齋馬の銘を書きしといふ。おのれ之を眼にせしにはあらねど、たしかに董齋の名のありしものを見しと語れる人あり。普通將棋を好む人の用うるは、金龍、眞龍、安清などの造れる馬なり。金龍は眞龍よりも勝れ、眞龍は安清よりも勝れたり。金龍眞龍などの造れるは玉將の後に銘あり。駒の文字もいと正しくて讀み易く、玉は二枚とも必ず玉と書しありて王とは書さず。安清のは銘なけれど、其文字飄逸の趣きありて、おのづから一家をなせば、一見して知るべし。これより以下の馬は世にいふ番太郎馬にして、其品甚だ陋しく、其文字殆ど讀むべからず。此他人々の好みによりて造らせたる馬には、よき人の筆になれるもさま〴〵あるべし。

○玉將につきての俗說

いはゆる番太郎馬の一方は玉とあれど、一方は王とあるがために、局に對する時、貴き人の方へ玉といふ字の馬を與ふるは禮なり、などいへる俗說あり。取るに足らぬこととふべし。されど一つは玉と書き、一つは王と書くも新らしからぬことなるにや、愛囊抄は文安年間に成りたる書なるが、其中に象戲の馬のことをいひて、一つは玉と書き一つは王と書くは國に二王あるを忌むなり、これ

一點の有無によりて相分るゝのみならず、王の字に點なきもまた玉と讀むべく、古文は王と玉と甚だ相異ならざるなり。王の字の横の三畫の中の一畫上に近きものは帝王の王の字にして、横三畫相等しきものは珠玉の玉の字なれば、今の將棋の馬に、一方を玉と書して一方を王と書せるも過誤ならず、たゞこれを玉將と呼ばずして王將と呼ぶは過誤なるのみ。今の棋聖小野氏の如きは常に玉とのみ呼びて未だ曾て王と呼はず。これ其正しきを失はざるものといふべし。

○馬の文字

水無瀨兼成卿男子無くして高倉永家卿の子親具を養子とす。後に至りて兼成實子あり、氏成といふ。こゝに於て親具家督を辭し剃髮して一齋と號す。一齋能書の名ありければ豐臣秀次公一齋をして將棋の馬の銘を書かしむ、これ水無瀨家將棋の馬の銘を書する始なりといふ。世に水無瀨兼成撰める將棋駒の記といふ者一卷ありて此事を記せりとぞ。享保六年大阪北御堂前毛利田庄太郎といふもの板にて堂島新地原喜右衞門といふもの、作れる象棋名將鑑といふ書あり。其卷の二の十二丁裏の鼇頭に、水無瀨大納言樣墨書の駒あり、此駒にて永押無之坐敷にて指事無かれ、元祖古安立禁筆にて御座候、橘屋平右衞門より四代前七郞右衞門手直りにて御座候に付安立仰せらるゝは、其方へ駒を一面拵へ吳可申との御事にてやうやく一年にて出來扨々見事なる駒にて御座候、醉象の駒二枚

し。但し信玄のこれを見て無興したりといふも、信玄の信玄たるところ想ひやられていとおもしろし。

○王と玉と

朝川善庵の隨筆に、予先年大橋宗桂の需に應じて其著述せる將棋の書に序することのありしに、王將といふ馬子は何とも疑はしき名なり、王ならば王、將ならば將といふべし、王と將と混稱するの理あるまじとて、將棋の諸書を攻證するに、開祖宗桂より四代目宗桂まで代々著述するところの將棋圖式に、雙方とも玉將とありて、王將の名なし、よつて思ふに、玉を以て大將とし、金銀を副將とするなるべし、左すれば金將銀將の名も據ありて、ひとしほ面白くおぼゆ、蓋し五代目宗桂以後双方の同じく紛はしきを嫌ひ、一方は一點を省きて差別せしにやあらん、と今の宗桂に語りしに、宗桂曰く、それは必ず然るべし、其わけは、毎年十一月十七日御吉例にて、御城に於て將棋仰せつけられ、其圖譜を上るに、双方とも玉將と書すること先例にて、王將といはぬとのよし、家に申傳へ、今に代々玉將と書きて上れども何故といふことを知らざりしに、これにて明白なりと、遂に其嘗て著述せる書を將棋明玉と名を易へ上梓し、予が序を卷首に載せたり、と云へり。將棋明玉は其書今存す。玉將を王將とするの非なることは、まことに善庵の說の如し。たゞし王と玉とはたゞ

將棋雜話

○香車の差物と勇士と

江戸彰義隊の勇士に天野八郎といへるもの丶香車を旗印とせるは近き頃のことなれば知る人多し。まことに香車は進むことありて退くことなき馬なれば、勇士の此れをもて旗印として吾が意氣を示さんは、さもあるべきことなり。されば知る人稀なれども古にもまた此を我が標となせしものあり。甲州の勇士初鹿野傳右衛門これなり。甲陽軍鑑品第三十五、信玄小田原責めの條に、相模川を前にあて丶岡田、厚木、かね田、三田、つまたに陣取り玉ひ、次の日は田村、大かみ、八幡、平塚に陣取り、それより國府津、前川、酒匂まで寄せ、次の日は小田原へおしつめ玉ふに、加藤駿河守の子、他苗になり、初鹿野傳右衛門、差物に香車といふ字を書きたるに、信玄公御無興なされ候、其時酒匂の川出でたるに付き、傳右衛門に瀨踏みを仰せつけられ候、傳右衛門、其歳二十五歳なれども、走り廻り才覺ありて、此人時代には、小山田八左衛門、初鹿野傳右衛門とて、信玄公御旗下の若手の者なれば、酒匂の瀨踏み能く仕り候、とあり。此の傳右衛門は、後に武田勝頼長篠大敗の時も土屋惣藏と唯二人して飽までも勝頼を護りたるほどの勇士なれば、香車の差物したるも相應といふべ

致し、又其位置に於て、巧みに一致し、『銀將』は其實に於て支那象戲の『象』の如く、『金將』は『士』の如くなること。即ち今の將棋は却つて支那象戲に近きこと。

五。今の象戲の馬子は『取り棄て』ならずして甚だ支那象戲と異るが如くなれども、是は後奈良帝の改革し玉ひしによるとの口碑あれば、蓋し此相違は近古に於て生ぜしにて、初は彼此の法則相違からざりしものなるべきこと。

六。支那の今の象戲は唐の象戲と聊か相違あるに似たれど、我邦の今の象戲は却つて玄怪錄の文に相當るものあること。即ち天馬斜飛度三疆といへるは『桂馬』の如く、上將橫行擊四方といへるは『飛車』の如く、輜車直入無廻翔といへるは『香車』の如くなること。

七。唐と我邦との交通は甚だ繁くして、彈碁の如き支那の後人の知る能はざる遊戲をすら當時我邦に傳へたれば、象戲もまた當時唐より傳へずといふべからざること。

是の如くにして予は今の日本象棋の傳來に前揭の臆說を存するものなり。

今の日本象戲の最も古く知られたるは大橋宗慶（後に宗桂といふ）の技を以て信長に謁せし時にありといふ。宗桂また秀吉に謁せし事あり。秀次また將棋を好みて、水無瀨一齋（大納言歟）をして馬の銘を書せしめたりといふ。宗桂德川氏の容るゝところとなりし後の事は人多く之を知り且つ慶長の頃宗桂と本因坊との技を鬪はせし記錄の如きは今猶儼存すれば復之を記すを要せず。

致にして、勇士の奮闘して而も餘裕ある態を形せりといふべき也。中將棋は今廣く行はれずと雖も亡びて傳はらざるにはあらず、京都には或は猶之を知りて玩ぶ人なきにあらざらん。今の棋聖小野氏の如きも之を玩びしことありしと云へり。今の普通に行はるゝ將棋は其初めて世に傳はりし時明らかならず、人多くは謂へらく、今の將棋は中將棋より出で、中將棋は大將棋より出づと。然れども決して其確證あるにあらず。たま〳〵古書に先づ大將棋の散見し、次に中將棋の記せられ、最も後れて今の將棋の見えたるによりて、强て小見解事の態を粧ふのみ。予は今の將棋の傳來の必ずしも大將棋中將棋の後にあらざるべきを想ふものなり。然れども是亦一家の推測のみ、須らく證を擧ぐるを得るの日を待つべき也。たゞ予が推測の順序を擧ぐれば左の如し。

一。予が邦の象棋は支那より（直接或は間接に）傳來せしものならざるべからざること。

二。大將棋其他の煩雜なる將棋は支那人の製作としては其馬子の名目等も無雅に過ぐるの疑ひありて、邦人の加意によりて成りしものにあらずやと考へらるゝこと。

三。古書に大將棋中將棋等と記して、特に大中等の字を冠せるは、却つて當時に別の象戲ありしを示すにあらずやと考へらるゝこと。

四。今の普通の將棋の馬子中、『步兵』『香車』『桂馬』等は其稱呼に於て支那象戲の『兵』『車』『馬』と一

ろう發心の事といへる條の中に、上略『知時こゝこそ逃れぬ死所よと云ふまゝに手勢三百騎ばかり一歩も退かず、青鷺信濃守が手にかけあはす、勇士と勇士との出あひなれば、よのつねに打ちあふて、花を散らして戰ひたり、端武者は落ちつ打たれつ、僅に一騎當千のつはものばかり戰ひ殘りたる其ありさまは、かちまけせめたる中將棋の盤の上、ところ淋しく駒のあしなみ入り亂れて鳳凰はなりて八方を破り、飛鷲角鷹は威を奮ひて、(飛鷲を飛車とせる本あり、わろし)あたりを居喰ひする其働きにも似たり、破りつ破られつ、まくりつまくられつ、ひとりも殘らじと戰ひたり、』とあるは、中將棋の既に當時に行はれて、一般の人に知られたりしを證するものなり。中將棋は其局縱橫各十二格、其馬は、玉將、醉象、麒麟、鳳凰、奔王、獅子、各一、金將、銀將、銅將、猛豹、香車、反車、角行、盲虎、龍王、龍馬、飛車、竪行、橫行、仲人、各二、歩兵十二を以て一軍とし、敵を合せて總計九十二馬なり。蓋し文明の當時特に中將棋といへるによりて考ふれば、將棋の行はれしもの特に中將棋のみならざりしに似たり。然れども他に確證なければ、鴉鷺合戰物語の文は、單に中將棋の當時に行はれしを證するの材とすべきのみ。中將棋の法、鳳凰は化りて奔王となり、八方に走るを得るに至るなれば、『鳳凰は化りて八方を破り』といへる文辭は據るところ無き誇張にあらず、飛鷲角鷹は、共に大威力ある馬にして、且つ我が位置を動かさずして他の馬を掴つて取るの權あり、これを將棋の語に居喰ひといふ、さればあたりを『居喰ひする』といへるも實際に協へる巧みなる筆

る象棋を上に揭げたる大象戲とすれば、大象棋の世に玩ばれたることは知るべきなれども、大々將棋、摩訶大々將棋、泰將棋等は、何人の何の時に於て之を玩びしや、更に聞くところ無し。たゞ世に傳ふる將棋の奧書に、「嘉吉三稔卯十五寫焉加一校云々。右象戲種々之圖、曼殊院之宮所持之本申請所記置也、龍集天正壬辰清和下澣、權中納言兼成禿齡七十九」とありとなれば、恐らくは妄人の妄りに是の如き圖說を作れるにもあらざらん。今の將棋に『角行』と名づくる馬子ありて人其名の奇なるを疑へるが如きも、古に横行、竪行等の馬子ありしに照らし考ふれば異とすべくもあらず解せらる。又大將棋以下の諸將棋の馬の名に虎豹熊猴等あるは、晁無咎の『象戲々也、黃帝之戰驅猛獸以爲陣、象獸之雄也、故戲兵而以象戲名之』と云へるも思ひ合はさる。特に大象戲の『醉象』は變じて『太子』となるべき權を有し、摩訶大々象棋の『醉象』も『王子』となりて、『玉將』死するも『太子』あれば猶戰ふを得るが如きは『象』の重ぜられたる徵として注意すべき價値無しとせず。但し泰將棋、摩訶太々象棋、大々象棋等の世に行はれたることは之無きに近かりしならん。如何となれば是の如き多種の馬子を廣き盤上に運用して勝負を爭ふが如きは、消閑の遊戲としては人の智力を勞すること甚だ多きに過ぐればなり。

『花鳥餘情』の作者、足利氏時代の文學者として名高き一條兼良の文明八年（耶蘇紀元一千四百七十八年）の作にかゝる『鴉鷺合戰物語』卷四、にはとりろうこく博士禪法、九月二十六日合戰、わ

わらず、然れども摩訶大々象棋の甚しきには及ばず。其馬子は玉將一、變じて自在天王となり、無明一、變じて法性となり、金將、銀將、銅將、鐵將、瓦將、石將、土將、各二、變じて奔金、奔銀、奔銅、奔鐵、奔瓦、奔石、奔土となり、提婆一、變じて教王となり、醉象一、王子と化り、香車、反車、驢馬、桂馬、猛牛、飛龍、各二、及び夜叉一、羅刹一、金剛一、力士一、狛犬一、皆變じて金となり、盲虎二、猛豹二、蟠蛇一、臥龍一、古猿一、淮鷄一、猫刄二、は變じて奔虎、奔豹、奔蛇、奔龍、山母、仙鶴、奔猫となり、獅子一は變ぜず、鳳凰一、變じて奔王となり、麒麟、一變して獅子となり、悪狼二變じく奔狼となり、盲熊二、嗔猪二、老鼠二は變じて奔熊、奔猪、蝙蝠となり、奔王一は變ぜず、鈞行一、摩竭一、龍王二、龍馬二、角行二、竪行二、横飛二、横行二、右車一、左車一、歩兵十九、は金となり、仲人二は奔人となり、一軍の馬の數九十六、兩軍合せて百九十二枚なり、其馬の名目既に多きに過ぎて其變化の名目また甚だ多ければ、仲房ならざるも之を記するに堪へざらんとす。然るに泰將棋といふものありて、其局は縱横各二十五格、其馬の總數は三百五十四、愈々人をして其煩はしきを厭はしむ。されども今其馬子の名の、上に掲げたる諸種の將棋の馬子以外のものを擧ぐれば、鯨鯢、玄武、猛鷲、飛鷲、横龍、羊兵、銀鬼、金鬼、近王、角鷹、孔雀、行馬、朱雀、等に過ぎず。此中飛鷲角鷹等は中將棋に其馬ありて、大將棋、大々象棋、摩訶大々象棋、等に其馬無きものなるが、是は聊か注意すべきことなりとす。左大臣頼長の試みた

鳳凰一、麒麟一、悪狼二、嗔猪二、猛牛二、奔王一、龍王二、龍馬二、角行二、竪行二、横行二、飛龍二、飛車二、歩兵十五、仲人二、一軍の計六十五、敵を合せて總計百三十個なり。されば之を晁氏の廣象戲に比するに其路は少く、其馬は多し。知らず悪左府の戰つて敗れしといふもの此將棋なりしや否や。

又別に大々象戲といふものあり、縱横各十七格、其馬は一軍にて、王將一、左將一、右將一、奔獏一、奔王一、龍王一、奔鬼一、方行一、龍馬一、走車一、飛車一、鳩槃一、夜叉一、天狗一、釣行一、香車二、近王一、金將二、麒麟一、鳳凰一、猫刄一、踊鹿一、老鼠一、獅子一、古鵄一、行馬一、飛龍一、盲猿一、狛犬一、毒蛇一、反車二、長龍一、銀將二、馬麟一、變狸一、角行一、水牛一、變狐一、竪行一、金翅一、銅將二、鐵將二、石將二、木將二、東夷一、西戎一、北狄一、南蠻一、白象一、香象一、青龍一、白虎一、前旗一、猛虎二　猛豹二、猛熊二、悪狼二、嗔猪二、猛牛二、横行二、右車一、左車一、歩兵十七、奇犬二（奇の字疑ふべし）計九十六枚、二軍の總計百九十二枚なり。馬の名によりて考ふるに邦人の製作にかゝるが如し。

又摩訶大々象棋といふものあり。其局は縱横各十九格、即ち晁氏廣象戲に同じ。此象棋の特色は馬子の化りて勢力を增すこと甚だしきにあり。例へは玉將は化りて自在天王となり、不正行度して他の馬を越え盤上いづれのところにも行くを得るに至るが如し。大々將棋の馬もまた化らざるに

べき證あるにあらず。

明月記は予は帝國圖書館の藏本に就きて之を讀みたり。然るに此記の佳本少きことは人の知るところにして、圖書館所藏の六十一卷本は承元二年より建曆元年に至るの二年欠け、又建曆三年より元仁元年に至るの十一年欠くるを以て、建保四年の條は予之を目にせず。雜書の引くところに從ふのみ。他日若し佳本と稱せらるゝところの九十六卷本に寓目するを得ば之を對校せん。台記もまた世に佳本少し、圖書館本は台記別記を混入したるものにして、康治元年九月の部欠く。

宋の晁氏の廣象戯は、象戯あつて而して後に出でたるものなるが、我が邦の大將棋もまた先づ將棋なるもの有つて而して後に出でたるにや、然らずんば特に大の一語を冠すること甚だ唐突なるに似たり。然るに世人多くは先づ大將棋中將棋等のものあつて然して後今の將棋は世に出づるに至れりとなす。是れ理に於ては通ぜざるに似たりといふべし。又或は宋に遊べるもの偶然先づ晁氏の廣象戯を傳へたるなりとすれば、其說は即ち通ずべきも過巧の嫌無きにあらず。又明月記に載せたるは必ずしも大將棋にあらずして、台記に載せたるのみ大將棋なるやも測り知るべからず。是皆遽に決すべからざるの疑案なり。

今傳ふるところの大將棋といふものは、縱橫各十五格の局にして、其馬は、王將一、金將二、銀二、銅將二、鐵將二、石將二、桂馬二、香車二、醉象一、盲虎二、猛豹二、猫刄二、反車二、獅子一、

子の數甚だ多き大將棋を指して云へるなるべし。同じ書に『建保四年十二月十日、宇治御幸記、其傍置₂圍碁双六將棋等盤₁』とある將棋は何種の將棋盤にや知るべからず、蓋し亦大將棋の盤歟、文簡なれば考ふるところ無し。たゞ此等の古書の記するところに因つて、源平氏以前より一種の將棋の我邦上流に行はれたるを知る。村上天皇御世の頃には將棋無くして崇德天皇以前に既に行はれたるものとすれば、恰も支那の宋初より南宗の高宗の立てる頃までの間に、我邦の將棋は那邦よりか齎らされたるものとせざるべからず、然らずんば支那象戲に本づきて邦人之れを造れりとせざるべからず。醍醐天皇以後は遣唐使の事止みて朝廷と對岸大陸諸國との修好の往來漸く疎なるに至るの傾きありしと雖も、僧侶商賈の往來は全く絕えたるにあらずして、當時支那に於て象戲の既に世に行はれ居たることは、我邦象戲の淵源に就きて有理有力なる想像を起さしむるに足れり。又接ずるに和名類聚抄は能く庶物を類纂網羅すと雖も、未だ必ずしも善を盡せりとはすべからず、類聚抄に載せざるものと雖も當時に存せし事物もとより多々なるべければ、偶類聚抄に載せざるの故を以て象戲を當時に存せざりしならんとするは輕率の判斷に近し。况や類聚抄の今存するものは脫文誤字の少からずして盡く從ふべからざるものなること人の知るところなるをや。想ふに村上帝以前、唐との交通頻繁にして邦人の彼土に遊學するもの碁を傳へ琵琶を傳へし頃、象戲もまた齎し歸るところとなつて傳へられしにあらずや。此は是れ予が眞の想像に止まりて之を信ず

が『和名類聚鈔』には其卷の四、雜藝類第四十四の部に、投壺、藏鉤、打毬、蹴鞠より、圍碁、彈碁樗蒲、八道行成等に至るまでを載せたれども象戯を載せず。蓋し當時猶象戯無かりしならん歟、疑ふべき也。象戯の二字に和訓全く無くして音を以て今も呼ぶに照らし考ふれば、我が邦の象戯もまた本土の人の創造に出でずして、支那の象戯をば支那若くは琉球、朝鮮等より傳へしか、或は支那の象戯に本づきて邦人自ら別に新意を出し之を造りしならんも今遽に之を知る能はず。保元の亂の主謀者にして源爲朝の肘を掣せしを以て有名なる惡左府頼長の自ら記せる文に『康治元年九月十二日、參レ院、於二御前一與二師仲朝臣一指二大將負一。余頼、』『台記』(康治元年は耶蘇紀元千百四十二年に當る。)と見えたるに據れば、之より以前大將棋といふもの行はれ居たりしと考へらる。又特に大將棋と記せるを以て思ふに、或は別に大將棋ならぬ將棋も世に行はれ居りしならん歟、是亦測るべからず。康治を去る六十年餘にして、『建暦三年四月廿七日、中略、又云、四位仲房、此間聊病氣、昨日自云、心神已不レ辨前後太惘然、是已及二死期一、試差二將棋一、即與二侍男一始二將棋一、其馬行方皆忘、不レ終二一盤一云已以爲二覺悟一是即死期也、太心細、欲見家中懸、侍男巡二見家中一了安坐念佛二百反、即終命、不幸短命太可レ悲、生滅之理聞レ之心神不レ安、彌恐怖』との記事當時の和歌の宗匠として末代に名を留めたる藤原定家の記せる『明月記』(卷四十第四十四葉)に見ゆ。今の象戯の如くならば縱ひ死期に及ぶも恐らくは馬法を忘るゝには至らざるべければ、文中に將棋と云へるは察するに亦馬

一。今の支那象戲は今の西洋象戲と其系統上の關係必ず存すべきこと。
二。今の支那象戲は支那人の創案に成りしものにあらざるべきこと。
三。今の支那象戲は印度の『ちやつらんが』の見孫なるべきこと。
四。今の支那象戲と西洋象戲との關係は直接ならず、即ち父子的ならずして、間接に、即ち兄弟的なること。
五。今の支那象戲の印度より支那に傳はれるは、佛敎の東漸力盛なりし時代ならんと思考すべき理あること。
嗚呼象戲は一小技のみ、而もまた印度より發して東西に流布せしものとすれば、區々一小技もまた世界文明の潮流の痕を徵するに足るの一左劵にあらずや。

三、日本將棋

象戲、象棋は支那にて用うる字面なり、之を將棋と書するは日本の俗なり。日本の今の將棋は、玉將の死活を以て勝敗を決するものなれば、將棋の二字も通ずべきに似たり。されども將棋の二字は畢竟妙ならず、唯其通用に取るのみ。
我邦の象戲は其起源明らかならず。村上帝（西曆九百四十七年より六十七年に至る）の時の人源順

如くなりしや否や知るべからず。支那と印度との境域相接せる地理上の關係は、象戲の印度より支那に傳はれりとの事實をして有り得べきこととなりと想像せしむるの力あり。又晉以來支那と印度との交通は漸く滋く、佛法流布の目的を抱ける印度人の支那に入れるもの、如きも踵を接し、秦には鳩摩羅什、佛駄耶舍等を首とし、宋には求那跋陀羅等を首として、齊梁の際にも來者を絕たず、魏には吉迦夜、菩提流支、般若流支の輩、隋には沙那崛多の輩の來れるあり。此等の僧徒は支那の宗教史及び文學史上に沒すべからざるの功績を留めたるの故を以て其名今に至りて滅せざるなれども當時支那に入りしもの、中の平凡にして名を後世に遺すに至らざりし輩の多々なりしは疑ふべきにあらず。唐に至りては交通愈々滋くして、彼より我に來るもの、みならず、我より彼に遊べるものも玄奘、王彥策の輩ありて、唐人の印度に關する智識の廣大なるは（佛教の方面を除くも）印度の地理書として西域國志（六十卷、今亡ふ）等の著述の少からざりしにても知るべきなり。されば象戲の支那に起りしを唐初若くは唐以前とすれば、印度と支那との交通の歷史は、實に象戲の印度より傳はれりとの事實をして有り得べきこととなりと想像せしむるの力ありといふべし。

支那象戲の印度より來れるものならんとの想像をして眞の事實と化せしむるに足るべき古記等は不幸にして未だ一も予の發見する能はざるところなれども、以上縷述せるが如き硏究推測の順序に因りて得たる予の假定の結論は左の數點に歸す。

も、直覺的に若しくは推理的に『支那の象戯なるものは印度より入りしものにして西洋象戯と共に其父母を一にせる兄弟なり』との斷案を有するに至るを免れざるならん。

前に支那象戯と西洋象戯との一致點として列擧せるところのものは、實は即ち支那象戯と印度象戯との一致點なり。されば此事實は直ちに支那の象戯が必ず印度より入り來れるものならんとの推斷の爲に有力なる證據となるものなり。是れ支那象戯は印度に淵源すとの説を爲さしむる一證なり。

若し又今の支那象戯の支那に起りしものならんには、其馬子中に『象』の列せらるゝは甚だ異なりとせざる能はず。如何となれば馬軍、車軍、歩軍は支那の實戰に於て數〻用ゐられたりと雖も（此中、兵車は多くは古代に用られし也）象の戰闘に用ゐられしことは稀有の事に屬するを以て、戰闘の狀を摸したる象戯の馬子に、特に『象』といへる一馬子を加へんことは、支那人の創意に成れるものとしては寧ろ之有るべからざるのことなりとせざる能はず。之に反して印度にては實際の戰闘にも所謂『戰象』なるものを使用すること其常習にして、特に其象戯『しやとらんが』は象、馬、車、歩の四科を摸せるものなりと云へば、支那象戯に象馬車卒の四馬子の共存することは明らかに『支那象戯は支那人の手に成りしものならずして印度人の手に成りしもの』なることを證するにあらずや。是亦支那象戯は印度に淵源すとの説を爲さしむる一證なり。握槊雙陸の類、及び音樂の或種類の胡に出でしことは支那人も亦自ら認むるところなるが、象戯もまた西方より支那に入りしこと猶是の

其稱は輔翼者、大臣、將軍等の義を有せるものなりしと云へば、支那象戲に於ける『士』の馬子と相同じと云ふべく、而して『士』の位置及び『くゐーん』の位置の同じく共に『王』に密接せるが如きは、愈〻東西の象戲の何等かの關係を有するものなる事を證する者といふべき也。

是の如くに西洋象戲と支那象戲との一致點甚だ多きは、人をして三樣の想像を懷かざるを得ざらしむ。其第一は、支那象戲は西洋象戲に淵源せるものにあらずやとの想像是なり。其第二は西洋象戲は支那象戲の子孫にはあらずやとの想像是なり。而して其第三の想像は、西洋象戲も支那象戲も共に或他の古き國の一種の象戲より出でしものにあらずやとの疑なり。然るに第二の想像は、西洋の諸家の詳密なる象戲史の考察によりて容易に碎破せられ、一毫の疑ひも無く排除せらる。又第一の想像は西洋象戲史共通の說なる『象戲は東方より來れり』との有力なる主張に反し、且つ西洋象戲の歐羅巴に初めて行はれたる時期と年代上に矛盾し、また歐羅巴と支那との交通の事情上に相副はざるを以て、容易に雲消霧散せらる。たゞ第三の想像に至りては、急に排斥すべき理由を見ず、寧ろ之を精細に稽査すべき價値あるに似たり。

西洋の象戲の印度より出でしことは、既に西洋象戲の條下に說けるを以て復び說くの要無きも、試みに西洋象戲の歷史を尋ねて印度の象戲に溯り、而して眼を轉じて印度の象戲と支那の象戲との關係を一瞥するの傍、支那と印度との地理上及び人文上の近接せる狀態を考へんには、蓋し何人と雖

西洋象戲の『ばうん』は全隊の前列にあり。西洋象戲の『ぱうん』に相當するところの支那象戲の『卒』もまた同じく全隊の前列に在り。西洋象戲の『るつく』は全隊の後列部の左端及び右端に在り。『るつく』に相當するところの支那象戲の『車』もまた同じく全隊の後列部の左端及び右端に在り。西洋象戲の『ないと』は『るつく』に隣りて一格だけ王に近き位置に在り。支那象戲の『馬』は即ち『ないと』に同じものなるが、同じく『車』の隣格にして王に近き方に在り。西洋象戲の『びしよつぷ』即ち古の『びる』は『ないと』の隣席にして愈〻『王』に近き位置にあり。之と同義の名を有する支那象戲の『象』もまた『馬』の隣席にして愈〻『王』に近き位置に在り。是の如き馬子の名稱の一致及び其位置の一致は、西洋象戲と支那象戲との間に何等の關係點も無きものとしては、奇に過ぎたるの事實ならずや。蓋し名稱の一致の如きは或は偶然に之あるを得べきも、其馬子の名稱の一致と同時に其位置の一致するが如きは、偶然の事實としては寧ろ有り得べからざるの事に屬す。こゝに至りては何人も恐らくは西洋象戲と支那象戲との間に何等かの關係あるにあらずやとの疑を懷かざるを得ざるべし。

『象』『馬』『車』『卒』の四馬子のみならず、東西象戲の關係は『くゐーん』の馬子の上にも存するを見る。『くゐーん』は女王の義にして、支那象戲には女王の義を有する名稱の馬子あると無ければ、二者相關せざるが如くなれども、『くゐーん』の馬子は古は『ふぉるつ』又は『ふぉるざん』等と呼ばれて、

那の象戯の世に出づるに至りしと思考せらるゝ時代の狀勢を顧み、且其象戯の有するところの性質を觀察して、東西の比較を試みる時は、何人と雖も意外なる新しき感を惹き起さゞるを得ざるに驚異するを免れざるべし。

西洋象戯の印度より出でゝ所謂『しやつらんが』(象、馬、車、卒の四科の義)の變形たるは、西洋象戯の條に既に說けるところなるが、今西洋象戯と支那象戯とを其性質上より觀察するに、二者其淵源するところを同うするにあらざるより以上は是の如く一致すべくもあらずと思はるゝまで巧みに吻合するを見る。試みに西洋象戯の馬子の名稱と支那象戯の馬子の名稱とを比較せよ。何ぞ其の相同じきや。西洋象戯に於ける最微力の馬子『ばうん』は西班牙語『ぴよん』より出でゝ『ぴよん』は從卒の義なりと云へば、是れ支那象戯の『卒』と一致するにあらずや。西洋象戯の『るつく』は『らーす』又は『ろーす』といへる印度語に出でゝ其義は兵車なりといへば、是れ支那象戯の『車』と一致するにあらずや。西洋象戯の『ないと』の馬子は騎士の義なれば、是れ支那象戯の『馬』に當る。西洋象戯の『びしよつぷ』は僧正の義なれども、ふおるぶす氏の說に據れば、此馬子は古は波斯人に『びる』と呼ばれしものにして、『びる』は即ち象の義なりとなれば、是れ支那象戯の『象』に相當するにあらずや。以上は馬子の名稱の相同じきを擧げたるなるが、馬子の位置の相同じきも一奇とせざるべからざるものあり。

き古書に於て決して見る能はざるの談なるのみならず、支那の俗書にすら是の如き說を載するもの無きに似たり。たゞ明の謝肇淛は、象棊は相傳へて武王紂を伐つ時に作るとなす、即然らざるも亦戰國兵家者流なり、蓋し時猶車戰を重ずればなり、と說きて、象戲の製作を甚だ古しとなせども、予は其說に服すべき理由の甚だ乏きを以て『今の支那象戲と同系に屬する象戲の支那の上古に存せしといふ證據は認むる能はず』とするものなり。楚辭說苑等に見えたる象棊、並びに北周の武帝の製せし象戲の、今の支那象戲とは別種のものに屬するならんとは、既に論じたれば之を復びせずして、謝氏の言を評せんに、謝氏が象戲を以て武王の作れるにあらざるも亦戰國兵家者流の手に出でたるならんとするの理由は、單に象戲の馬子に一の『車』あるの故を以て、車戰の行はれたる時代、即ち(戰國時代)の製に係るならんとするに過ぎず。何ぞ其理由の薄弱にして斷定の急遽なるや。幾種の馬子中單に一の『車』あるの故を以て車戰行はれたる時代の製に係るとするが如きは、谿に入りて一杏樹を認めて滿谿是れ杏樹なりとなすが如きのみ、其鹵莽の判斷たる論ぜずして知るべきなり。謝の說の論ずるに足らざる是の如し、あるゐん氏の說の如きは度外に置きて可なり。

是の如くなれば西洋の象戲と支那の象戲とは、其傳來上に於て年代相當らざること明らかなれば、直接には何等の關係をも有せずといふべし。

然りと雖も西洋の象戲の傳來に關する諸說を讀み、又其象戲の有する所の性質を觀察し、而して支

のなるか、或は他の國より支那に入りたるものなる歟の疑を生ぜざるを得ず。されども不幸にして支那の史書には此點に對して明答を與ふるもの無きに似たり。象戯に關して多少の思索考證を試みたる支那の好事家も、此點に對しては一言も言ひ及ぼさずして已めるを以て、支那の古書に就て此疑問を解くの緒を得んことは望み少きことなりと云ふべし。たゞし事物の傳來の研究は、必ずしも古書の搜索にのみ頼るべきにあらず、直ちに類を同じくして地を異にせる事物に就きて比較校量を試みるもまた研究の一方法なり。されば象戯の由來するところを研究せんとするに臨み、何等の徴をも古書の搜索に得る能はずんば、之を異方同類の物の比較に就きて求むべきなり。即ち單に支那の象戯に就きて其由來を究めんとすることの無效たるを認めんには、他邦國の象戯と支那の象戯とを比較して之を研究するを有效なる研究の一方法とすべきなり。西洋の象戯は其傳來の系統殆ど明らかなるを以て、支那象戯とは直接に何等の關係をも其傳來の歷史上に有せざること極めて明白なりと雖も、而も其彼此の戯の性質の比較校量は、支那象戯の由來を推測研究せしむる上に於て幾干の思考點を與ふること無しとせんや。

西洋象戯の起源に就きて各種の說あるが中に、いゝるす、あるゐん氏が、西洋象戯は支那に淵源すとの說を唱へたりしことは、既に西洋象戯を論ぜる條に載せたるところなるが、其說は實に憑據無き俗說にして、あるゐん氏が云ふるが如くに韓信の象戯を創造せしと云ふが如きは、支那の信ずべ

を詳かにし難し。司馬光の『七國象戲』は、其局縱橫各十九路、魏、齊、韓、楚、秦、燕、趙の七國各相爭ふ方法にして、一國に十七棊子、局の中央に『周』の一棊子あれば、總て百二十子、一國十七棊子の中、『象』一、『偏』一、『裨』一、『砲』一、『弩』一、『弓』一、『刀』一、『劍』四、『騎』四、『行人』一なり。其之を使用して遊戲するの法は、『古局象戲圖』一卷ありて世に傳はれば、就て見るべし。

今の支那象戲は、『萬寶全書』『積玉全書』等の俗書にも之を錄し、帝國博物館にも其實物を藏すれば、今こゝに之を說くの要無し、好事の士は就て見るべき也。(但し帝國博物館には、琉球象戲と付箋ありしと覺ゆ。蓋し其物は即ち琉球の物にして、象戲は即ち支那の象戲なるのみ。

支那象戲に關して支那の史書に散見せる記事を綜合して予の研究推測し得たる結論は左の數點に歸す。

一、今の支那象戲は宋の時代に於て今と大差無き形式方法を以て玩ばれたりといふ事。

二、今の支那象戲の先人とも見るべき一種の象戲は唐の時代に於て行はれたりといふ事。

三、今の支那象戲の先人と考ふべき一種の象戲は、唐以前の、唐を去る遠からざる時代に於て存せしならんといふ臆說の理有りと思考せらるゝ事。

四、今の支那象戲と同系に屬する象戲の、支那の上古に存せしといふ證據は認むる能はざる事。

是に於て推究の結果として、支那の象戲は支那人の創意によりて支那の國內に忽然と發生したるも

知し、其馬子の名稱及び員數の今の象戲と吻合するを知り、從つて之を使用して遊戲する方法の今と差異無かるべきことを猜するを得。後村の詩は實に支那象戲の考證に於て重要の地を占むるものといふべき也。

後村の詩は象戲の狀態を描寫して詳察を極むと雖も、象戲の局に關しては、限るに大河界を以てすとの一句あるのみにして、其馬子を進退するの路の幾條なる歟を說かず。然るに晁無咎の『廣象戲序』には『蓋局縱橫路十一、棊三十二』とあり。因つて考ふるに宋の象戲は其局今と異なるに似たり。今の局は縱十路、橫九路にして、是の如くならざれば布陣列棋の法甚だ齊整を欠くに近し。然れども劉詩に據つて考ふるに其大概に於て古と今と吻合すれば、蓋し或は今の局の『砲』の位置の異りしのみならん歟。是は予の假想に過ぎざれども、『砲』の二子は、今の局面にては『士』『象』『馬』『車』の陣列を離れて突出し居れども、若し此二子をして士象馬車と同一列に在らしめば、即ち十一路となるべければ、宋時に在つては或は『砲』の二子も他の馬子と共に同列に在しや知る可らず。されど是は眞に予の想像に過ぎざれば、別に憑るべきの證を發見するにあらざるよりは、强て主張すべき理を有せず。

晁無咎の『廣象戲』は當時普通に行はれし象戲に本づきて之を廣めしものにして、其局の路は縱橫十九條(今の碁盤に同じ)其棊九十八なりしといふ。然れども今其馬子の名稱及び遊戲の方法等之

象奕一首呈葉潛仲

小藝無レ難レ精、上智有レ未レ解、君看橘中戲、妙不レ出ニ局外一、屹然兩國立、限以ニ大河界一、連營稟ニ中權一、四壁設ニ堅械一、三十二子者、一々具ニ變態一、先登如レ挑レ敵、分布如レ備レ塞、盡レ銳貫ニ吾勇一、持レ重伺ニ彼怠一、或遲如レ圍レ莒、或速如レ入レ蔡、遠砲勿ニ虛發一、冗卒要ニ精汰一、負非レ繇ニ寡少一、勝豈繫ニ彊大一、昆陽以レ象奔、陳濤以レ車敗、四馬郭令來、一士汲黯在、獻レ俘將策勛、得レ雋衆稱レ快、我欲レ築ニ壇場一、孰可レ建ニ旗蓋一、葉侯天機深、臨レ陣識ニ向背一、縱未レ及ニ國手一、其高亦可レ對、狃レ捷敢饒レ先、諱レ輸每索レ再、寧爲ニ握節守一、安肯ニ屈レ膝拜一、有レ時橫レ槊吟、句法猶雄邁、愚慮僅一得、君才乃十倍、覇圖務レ幷レ弱、兵志貴レ攻レ昧、雖ニ然屢克獲一、詎可ニ自侈汰一、呂蒙能馘レ羽、衛瓘足レ縛レ艾、南師未レ宜レ輕、夜半防レ砍レ寨。

此詩中の『屹然兩國立、限以ニ大河界一』の二句は宋時の象戲と今の象戲と異ること無く、二人にて勝敗を爭ふ遊戲にして、其局の中央には『河界』の存せしことを證し、『三十二子者、一々具ニ變態一』といへるは、其馬子の數に於ても今と增減無きことを證す。『遠砲勿ニ虛發一、冗卒要ニ精汰一』の二句に據れば、『砲』(馬子の名)と『卒』(馬子の名)との今の如く具はりしを知るべし。『昆陽以レ象奔、陳濤以レ車敗、四馬郭令來、一士波黯在、』の四句は、『象』『車』『馬』『士』の四馬子の名を用ゐて詩の技巧上の妙を示したるものなること明らかなり。されば此詩に據りて當時の象戲は、二軍の馬子の總數三十二、一軍の馬子の數十六、其中『砲』二、『象』二、『馬』二、『車』二、『士』二、『將』一、『卒』五なることを推

しことと知るべきなり。憾むらくは記述詳しからずして其製審かに知り難きのみ。唐以後に至つては考ふべきこと少しと雖も、蓋し唐の象戯に多少の變革を與へたるのみにして（必ずしも唐の象戯の法を變じたりとは云ふべからず、唐の象戯の法式の詳なるとは知るべからざればなり。）士民の間に行はれたるべしと信ずべき證左少からず。晁無咎の新意を出して象戯を擴張し、其局を十九路となし、其馬子を九十八子となして、所謂『廣象戯』を造りたるが如きは、當時唐以來の象戯の世に行はれたりしことを語るところの一證なりといふべし。また耶蘇紀元一千七十年代より八十年代に亘りて政治上に重要の地を占めたる有名の司馬温公が『七國象棋』を作りて、春秋戰國七國爭鬪の狀態を寓したる新式の象戯を造れる如きも、亦以て象戯の當時に流行して、名流貴紳と雖も之を高尙の遊戯としたりしことを語るところの一證となすべし。特に劉後村の葉潛仲に呈せる『象奕』の詩一篇は、極めて明らかに象戯の宋に行はれしことを語り、且つ其上流に行はれしことをも暗示し、之に加ふるに詳細に當時の象戯の如何なるものなりしかを記するを以て、一毫の疑ひ無く吾人をして宋時代の象戯は即ち今の支那象戯なることを想像せしめ且つ信憑するを得せしむ。後村は名は克莊、字は潛夫、淳熈年間（耶蘇紀元一千百七十年代）の進士にして、日に能く萬言を誦し、文を爲すに筆を援れば立に成る。其葉潛仲に與へたる象戯の詩は、象戯に對して形容摸寫の妙を極めたれば、こゝに其全篇を擧げん。

冢中に象戯の局と馬子との存せしといふことなれば、話は或は文士の寓談に出づと雖も、蓋し寶應以前五十年乃至百年二百年以上に於て既に象戯の存せしことを牛僧孺同時の人々の認め居たりし事を知るに足れり。若し西洋象戯の印度より波斯に入りしを耶蘇紀元第六世紀若くは第七世紀とすれば、支那象戯の起りし時代も（其他國より來りしや將自國にて發生せしやは姑く措く）殆ど同時代なりと推考するも可なるに似たり。魏周の時代に如何なる象戯の行はれしやは史書に其文無ければ知るべからずと雖も、儒棋といひ、武帝の象戯と云ひ、象戯の新に製せらるゝこと少からぬに據りて考ふれば、當時或は別に先づ象戯なるものありしにはあらずやとの想像は既に之を說けり。今之を寶應年間に古墳を發掘して象局と馬子とを得たりといふに對照すれば、唐以前既に魏周の代に於て今の象戯の同系に屬する象戯存在せしにやとの想像の惹き起さるゝも理無きにあらずと云ふべきならずや。されど是は單に想像のみ、未だ事實と定むべからず。

『巴卬橘園中霜後見二橘如一レ缶、剖開、中有三老叟象戯、一叟曰、橘中之樂不レ減二商山一、但不レ得二深レ根固一レ蔕、一叟取二龍脯一食レ之、食訖、化爲レ龍、叟乘レ之而去。』此は是亦幽怪錄中の一節なり。

此文また此を藏むるところの叢書によつて異同あり。不レ得二深レ根固一レ蔕の下に、爲二愚人一摘下耳、の一句あり。老叟の言に、汝輸二我瀛州玉塵九斛一の一句あるものあり。

牛氏の筆に象戯の事を載すること一條のみならざるを以て考ふれば、唐の文宗時代に象戯の行はれ

に知るべき也。車《馬子の名》の直進して廻らざるは即ち今の卒《馬子の名》に類す、恐らくは其他も盡く合はざるなりと胡氏の云へるは、さることながら、馬子進退の法式の如きは時によりて變革さるゝこと異とするに足らず、此文の記するところの象戲の、今の象戲の祖先たるは疑ふべからず。胡氏以前數百年の宋の高承が、岑順の事を引きて、今の世の爲すところのものと同じと云へるに據れば、床の象戲と唐の象戲との關係を知るべく、而して宋の象戲と今の象戲との關係は、極めて明らかなる別證あれば、高承の言を信じて玄怪錄記するところの象戲は今の象戲の祖先たりと斷ずるに一絲の疑ひ無しと云ふべき也。

高承著すところの書に後人の竄入あらんとの疑あることは予之を知らざるにあらず。其文中に、馬といひ、卒といひ、車といひ、砲といへるは、皆今の象戲の馬子の名なり。偶々象《馬子の名》あるを云はざるもまた唯筆の之に及はざりしのみならん。唐の象戲に若し實に象なくんば、宋人晁無咎の『廣象戲序』に『象戲々兵也、黃帝之戲驅ニ猛獸一以爲レ陣、象獸之雄也、故戲兵而以ニ象戲一名レ之、』と云へるも、特に黃帝を引出して象戲の名の起源を說けるだけ甚しく相應はしからずといふべき也。

されば玄怪錄記するところの象戲は今の象戲の祖先と假定して、其起るところの年代を考ふるに、寶應元年は唐の肅宗の末年にして耶蘇紀元七百六十二年に相當し、而して當時既に埋沒したりし古

一時に決すべきなり。

且岑順の一條無しといへども、同じく象戯に關する巴卬の橘園の談は、今の『幽怪錄』中にも見ゆるを以て、蓋し岑順の一條もまた必ず記載せられたりしならむと信ず。今『莊岳委譚』の錄するところに從つて其文を擧ぐ。曰く、『寶應元年汝南岑順夢一人被レ甲報曰、金象將軍與天那賊ニ會戰、順明レ燭以觀レ之、夜半後東壁鼠穴化爲ニ城門一、有ニ兩軍一列レ陣相對、部伍旣定、軍師進曰、天馬斜飛度ニ三疆一、上將橫行擊ニ四方一、輕車直入無ニ迴翔一、六甲次第不ニ乖行一、於レ是鼓レ之、兩軍俱有レ馬、斜去三尺、止、又鼓レ之、各有ニ一步卒一、橫行一尺、又鼓レ之、車進、須臾砲石亂下、云々、後家人覺ニ其顏色憔悴一、因發ニ掘東壁一、乃古冢、有ニ象戲局一、車馬具焉。』

按ずるに諸書載するところの此條の文辭、大同にして小異、詳略出入あり。事物紀原に引ける文には、汝南岑順の下に於ニ陝州呂氏故宅一、夜聞ニ鞞鼓聲一、介冑人報曰、とありて、下文また小異あり。

是れ疑ひも無く象戲の唐に行はれたるを證するものにあらずや。從ひ其象戲の法式は今日の支那象戲に同じからざる點少からずとするも、馬（馬子の名）の斜に三路を行き、卒（馬子の名）の横に一路を行くは正に今と同じ、と胡氏の謂へるが如く、其同じき點もまた少からず。特に其記事の大躰に據りて測るに、其記事中の象戲と今の象戲との、關係なきものにあらざるべきは、極めて明白

の如く當時象戯ありて世に行はれしとするも、其象戯と今の象戯との關係は是亦寧ろ有る無きに近かるべきをや。此故に別頭に他の證據を得るにあらずんば、今の象戯は北周に淵源すとすべからず。」

今の支那象戯と密接の關係ありと思考せらるゝもの、古書に見えたるは、唐の牛僧孺が『玄怪錄』を最も古しとせざるべからず。牛僧孺は耶蘇紀元八百三十年頃の人にして、其『玄怪錄』に載せられたる象戯に關する岑順の談は耶蘇紀元七百六十二年の事に屬す。不幸にして予は所謂『玄怪錄』に就て岑順の一條を見ずと雖も、宋人著すところの事物紀原に之を引用せるのみならず、謝氏五雜俎胡氏筆叢等にもまた之を引用せるを以て之を疑はず。

牛僧孺の玄怪錄といふものは予實に未だ之を見ず。『說郛』匀百十七に牛僧孺『幽怪錄』あり。また『玄怪記』といふものありと雖も、此は徐炫といふものゝ著にかゝれり。『唐人說薈』には『幽怪錄』王惲著とあり。蓋し說郛に收むるところの『幽怪錄』は即ち古人引用せるところの『玄怪錄』にして、幽玄の二字の意義相近くして字書もまた聊か似たるところあるより、本來同題の書の偶々異稱を呼ばるゝに至りしならん。且又幽怪錄を收むるところの『說郛』、『龍威秘書』等は支那の叢書の通弊として、概ね本書の舊態を存せず、本書を節略抄撮して刊に付し、其包含收容せる書史の多きを衒へるものなれば、象戯に關する岑順の一條は偶々其排棄されたる部に在りしがため今は存せざるなるべし。叢書中のものならざる單行の玄怪錄若くは幽怪錄を得て之を讀まば疑惑

馬子といふに過ぎざるべきこと極めて明らかなる『彈棊賦』中の詞に過ぎざるを以て、今の象戯と關係無きは、從つて極めて明らかなる事なりとす。

北周武帝造るところの象戯の全く今の象戯と異ることは既に之を說けり。たゞ武帝の象戯を造ることを試みし所以に至つては、今の象戯と關係無きや否や疑ひ無き能はず。蓋し當時既に象戯なるものあつて世に行はれ、而して武帝之に因つて別に新に『武帝の象戯』を創造せし歟もまた測るべからず。如何となれば巧思奇智あるものと雖も突然として一種の遊戯の法式を案出するは寧ろ難事に屬するのみならず、殆ど稀有の事たるを以てなり。加之象戯の名は既に春秋戰國に存せるなれば、其數百年後の武帝の當時に在りて變遷改革を積みたる象戯の存在流行したらんもまた測るべからざるにはあらずや。此は是予が想像に過ぎざることとなるが、此の想像を强むるは、後魏の侍中肇の儒棊といふものを撰せしこと是なり。『性謙にして競はず、曾て儒棊なるものを撰ず、蓋し博奕の流なり』とは魏書の語るところ。『儒棊格』一卷は其眞僞を保すべからずといへども、今猶存すれば就て見るべし。是亦世に先づ象戯なるものあつて流行せるが故に、謙德ある君子の之を新裁して訓戒の意を寓せるものと爲せりといふことを語るの消息にあらずや。

されば魏周の間に一種の象戯存在流行せしにはあらずやとの想像は全く理無しとすべからざるものあるな。然りと雖も想像は畢竟想像のみ、之を事實なりとはすべからず、況んやまた果して想像

た如何ともすべからず。唯庾信王褒等の文に據つて考ふるに、其制は詳く知る能はずと雖も、而も今の象戲と何等の關係無きことは、何人も之を斷言するを得べし。庾開府が賦の文に『地理を方畦に回し、天文を圓壁に轉じ、荊山の美玉を分ち、藍田の珉石を數ふ。』と云ひ、『既に玄象を舒べ、聊か金秤を定む。』と云ひ、『四方の正色を取りて五德の相生を用う、月建に從つて左轉し、黃鐘に起つて順行す、陰翩れば即ち顧兎先づ出て、陽變すれば則ち靈烏獨り明らかなり』と云ひ、『乍ち圖を披いて久しく玩び、或は經を開いて而して熟々尋ぬ。』といへるが如きは、實に今の象戲と何等の交涉沒きの言にあらずや。當時の賦の文體は、多くは其題目に對して形狀指標の言をなし、舖張彫刻を究めて奇を出し態を成すを常とするものなれば、當時の象戲にして今の象戲の如くならば、今の象戲と何の交涉無き是の如きの言句を重疊すべき所以萬々之ある可らず。且つ王褒の序に據りて考ふるもまた斷じて北周の象戲と今の象戲との純然別系統のものに屬するとは推知するに難からず。されば今の支那象戲の起源を論ずるに就ては、北周の武帝が象戲を造れりといふの一事は全く、反顧すべき價値無きところのものにして、たゞ象戲の二字に就て彼此相關せるのみと云ふべき也。

韻書の記するところによれば、象棋の二字は蔡伯喈の『彈棊賦』に見ゆと。伯喈は漢の初平年間に死せる人《耶蘇紀元百九十二年死》にして、北周の武帝に先だつこと三百餘年なり。然れども予が所藏の『蔡中郎集』には象棋の二字無きのみならず、縱ひ象棋の二字の存するあるも其義の象牙の

りと雖も武帝の造りし『象戯』と今の支那の『象戯』とは、其制を同うするもの歟、否歟、其系統を一にするもの歟、否歟、即ち今の象戯と武帝造れるところ象戯との關係如何は、自ら是れ別問題に屬するを以て、今の象戯は北周の武帝の創造にかゝると速斷せんが如きは甚だ鹵莽なる判定とせざるを得ず。

『丹鉛總錄』には、周の武帝製するところの象戯を以て決して今の象戯にあらずとなし、今の象戯の如きは芸夫牧豎も俄頃に解すべし、豈文人の注、百僚の講を煩はさんや。と云へり。また胡應麟の『筆叢』には《巻廿四辛部第二十二葉》北周武帝象經二十巻あり、楊用脩今の象疑にあらざるを疑ひて謂へらく其巻數太だ多しと、然れども今金鵬等の譜（金鵬とは『金鵬變勢』等の象戯の書を指す》往々數十巻なるものあり、何ぞ異むに足らんや、たゞ其序の御覽に見ゆるものを見るに《御覽とは宋の時の類書『太平御覽』を指す》絕だ今と同じからず、而して唐後殊に考ふべき無し、とも云へり。丹鉛總錄の言、筆叢の說、共に皆理無しとせず。要は北周の象戯の性質の如何なるものの歟を知りて、之を今の象戯に比し、而して其關係を推考すべきのみ。

北周を去ること遠からざる隋の頃には、『象經一巻』王褒の注のもの、王裕の注のもの、何妥の注のもの等存せしと見ゆ。若し象經並に其注釋等の今日に存せんには、明瞭に周の象戯の性質を知るを得べきも、『隋書經籍志』に見えたる此等の書は、不幸にして後に傳はらざるに似たるを以て、ま

んには、今日の象戲に關係薄きをば如何にせん。西洋人の傳ふるところに據れば、韓信象戲を造れりとなれど、是亦僞傳にして憑るべきの證無し。

楚辭說苑以後象戲の二字を典籍詩文に見ざること數百年にして、北周の天和四年に至り、（耶蘇紀元五百七十年）武帝自から象戲を造り、象戲經を制したりといふの事あり。支那の正史の一として信ずべき『周書』（第五卷第十五葉）には、武帝天和四年の條に『五月己丑帝制二象經一成。集二百僚一講說。』と明記さる。此故に支那の人士の象戲の起源を論ずるものは、多くは皆武帝を以て創造者となし、天和年間を以て象戲世に行はるゝの初となす。周の武王紂を伐つ時に作るといふの僞說は（五雜俎に見ゆ）蓋し北周を誤つて姬周となし、武帝を誤つて武王となせしより生じたる謬傳にやあらん。

象戲といふもの北周の武帝の手によつて創造せられ、而して其象戲の法則典範を記したる『象經』といふものゝ成りしことは疑ふべからず。『周書』に其記事の明白に存ずるのみならず、武帝の臣にして當時の文人たりし庾信の『象戲賦』（庾開府集卷一第二十三葉）並に『進二象經一表』（同集卷一第三十九葉）の二篇の文字ありて今に存し、又庾信と共に才名當時に高かりし王褒が『象經』の注を作りて稱賞せられしことは『周書』（卷二十三第一葉王褒傳）に見え、其『象經序』は『王司空集』（第七葉）に現存するを以て、象戲の北周に當つて創造せられたることは一毫も疑を容るべからず。然

楚辭以後の載籍に見えたる『象棋』の二字は、漢の劉向が『說苑』の一章、（卷十一、善說篇、第十葉）雍門子周といふもの孟嘗君に對して說く段に見えたるを以て古しとなすべし。今若二足下一千乘之君也、居則廣厦邃房下二羅帷一來二清風一倡優侏儒處前迭進而諂諛燕則鬪象棋而舞鄭女とあり。象棋に對して語を費すこと甚だ簡なれば、其象棋の如何なるものなるやは知るべからざれど、孟嘗君は薛の君にして、宋玉と相前後せる人なれば、蓋し其象戲の戲も招魂に見えたる象棋の戲と同じかりしなるべき歟。殊に招魂に據りて考ふるも、雍門子周が言に據りて考ふるも、當時の象棋は今の象棋の如く覃思竭智して以て勝敗を爭ふものならず、燕樂の間に笑語しつゝ玩びたるものなること詞章の前後の狀に照らして明らかなれば、決して今の象棋にあらざることを知りぬべき也。されば說苑に見えたる象棋も今の象戲とは殆ど關係なきに近き也。

是の如くなるを以て、楚辭と說苑とに據つて、蓋し周の衰ふるに及び諸侯兵爭各謀略を以て相勝たんとす此時に方りて巧思之士乃ち象戲を作りて以て兵機を寓せるならん、と云へるが如きは、今の象戲の起原を談ぜんとする上に於て甚だ力無き想像たるに過ぎずと云ふべき也。

支那に於ては、宋玉、孟嘗君等より古きこと猶數百年なる周の武王、殷の紂王を伐つ時に當つて象戲を作れりとの俗傳あり。然れども、實に一の傳說たるに止まりて、何の證據あるにあらず。縱ひ武王の象戲を作れること眞なりとするも、其象棋にして宋玉雍門子周等の云へるところの象棋なら

ものなりしや今急に詳しく知る能はずと雖も、宋玉が詞を味はひて之を考ふるに、其の指せるところの戯は、後世の所謂『六博』『五木』の戯の類にして、六箸十二棊を以て勝負を爭へるものならん。六箸を投じて六棋を行る、故に六簙となす、と云へる註の文に據れば、曹を分つて並び進んで遒つて相迫る、と云へる第二句も甚だ明らかに解すべし。されば梟を成して而して牟て五白を呼ぶ、とあるも今の象棋の事としては毫髮も通ずる事を得ず。梟は梟の形を刻せるものにして、博の子に、梟、盧、雉、犢、塞の五あるが中、梟は最も有力のものなる由、鮑宏の博經に見えたれば、已に梟を得たるものから、欲するところの五白を得んとして、五白を呼びながら箸を投ずると云ふが、句の意なるべし。晉の制せる犀比とは、晉の國の工の簙基を作るもの犀角を比集して以て雕飾を爲す、と註の文に見えたり。此等の詞句を熟讀玩味し、且つ古來の戯法を傳へたる五木經、博經等を參照すれば、招魂に云へる戯は、今の象棋の戯とは其性質を異にしたるものにして、圍碁の戯とも類を同じうせず、烏曹氏の創造せしと云ふところの『博』にして、寧ろ我が邦の『双六』、西洋の『がんぶりんぐ』の類と其性質に於ては近似せるものなること分明にして爭ふべからず、且其『象棋の二字は、象牙を以て作れる博奕の子を指せること疑ひ無きを覺ゆ。されば、象棋の二字は楚辭に見えたれども、楚辭に見えたる象棋と今の支那象棋との關係は、たま〳〵存せし其文字上の關係のみと云ふべき也。

死活に係ることとなれば、之を『將棋』と云ふも甚だ其理あり、古より將棋と書し來りたるも然るべく思はるれど、支那にては其戲また同じく『將』の一馬子の死活を爭ふに在るに關らず『象戲』『象棋』と書して『將棋』とは書さゞるものに似たり。惟ふに我邦に在りても最初は『象戲』と書し『將棋』とは書せざりしならむ。

『象戲』の二字の支那に在りて最も夙く見えたるは、宋玉が『招魂』の一節なるべし。(楚辭全集卷七第十六葉)菎蔽象棋有六簙些分曹並進遒相迫些成梟而牟呼五白些晉制犀比費白日些鏗鍾搖簴揳梓瑟些とあり。宋玉は楚の懷王が臣屈原の弟子なれば、二千四五百年前既に『象棊』なるものの有りしと云ふべし。其辭の意は、宴安歌舞の悦ぶべきを述べて魂を招くの次に、象棊の樂しみ玩ぶべきをも述べて、魂をして歸り來らしめんとするに在れば、當時既に象棊の戲の世に行はれて子女の玩賞するところとなり居たるは極めて明白にして爭ふべからざることゝ云ふべし。然りと雖も其文に依つて考ふるに、招魂に見えたる『象棋』の戲は決して今の支那象棋にもあらず、又今の支那象棋の祖先にもあらず、何等の關係も無き別種のものに屬すること疑ふべからず。云ふ所の象棊は乃ち是象牙を以て棊子を爲せるものにして、蓋し即ち圍棊の戲、後世の象棋に非るなり、とは前人も既に道破せるところにして、實に招魂に見えたる象棋は決して後世の象棋にあらず。たゞ圍棊の戲とするは其說背んずべからざるに似たり。宋玉時代の象棋は如何なる方法を以て勝敗を爭ひし

ころのものは、此にあらずして彼に在り。急に評して徒に邦人に對しては關係薄く興味少き西洋將棋を呶々するものとなすなかれ。

二、支那將棋

支那將棋の起源も亦西洋將棋の起源の如く、曖昧にして確に知るべからず。淺薄なる智識と、寡少なる搜索推究の勞とを以て、輕率なる判斷を下さんが如きは、固より易々たることに屬すれども、其判斷の信じ憑むに足らざるを如何にせん。此故に將棋の起源を確知せんと欲すれば、其事の一小戯技に屬するの故を以て之を輕視せず、愼重の態度と耐久の精神とを以て、引證すべき載籍を爬羅捜索し、且つ之を正解詳評し、而して後始めて斷案を下すべき也。

朝川善庵が支那の將棋に就きて、『蓋し周の衰ふるに及びて諸侯兵爭し、各謀略を以て相勝つ、此時に方り巧思之士乃ち象棊を作りて以て兵機を寓せるならん。』といへるが如きは、決して急に信ずべからざるものなり。

支那の將棋を論ずるに先だちて一言すべきは、支那には『將棋』の二字を以て連ねたる一語の存在せざるに近きこと是なり。『將棋』の二字は、蓋し邦俗通用の文字にして、支那には用ゐられたること無きが如し。我邦の戯には、『玉將』、『金將』、『銀將』等の馬子ありて、特に一局の輸贏は『玉將』の

るを得るも之に働くを得ざりしなり。されば兩軍の僧正同一條の路に上つて互に相進むも相擊つこと無きの奇觀を呈せり。是の如き制規は第十五世紀迄は歐洲に於て行はれしと云ふ。ふぃるぶす氏の說に從へば、此の馬子は波斯人には「びる」(象の義)と呼ばれしが、阿剌比亞人はPの音字を有せざるを以て之を「ふぃる」と記し、指定冠詞の「ある」を加へて「あるふぃる」と呼び、遂に伊太利には「あるふぃいる」と呼ばれ、佛蘭西には「ふぉる」又は「ふぉー」として呼ばるゝに至りしとなり。

「ばうん」は今最初の一動作に於ては二格を行くを得と雖も、古は唯一格を前進するを得しのみにて、今の如くなるを得たるは第十六世紀の初期よりなり。其第八格に到るに及んで「ふぁるじん」となるを得るの則は、古より存せしと見ゆ。

「るっく」「ないと」は古今相同じと見ゆ。

盤は今皆市松模樣なるものを用うれど、第十三世紀頃より後の流行ならんといふ。

「るっく」は「ろっく」より轉訛せる語にして、其原は「らーす」又は「ろーす」といへる印度語に出て、其義は、裝ひたる兵車を指す。

「ばうん」は從僕の義にして西班牙語「ぴよん」より出づとなり。

西洋將棋の大概是の如し。以上は西書に據つて記するところなるが、後に支那日本の將棋を說くに當つて參照すべきところ少からざるを以て煩瑣を厭はずして之を揭げたり。予が言はんと欲すると

の前半より古からざるべしとなり。

女王の馬子は、其名、其性、其力に奇異なる變化を受けたるなり。其初此馬子は「しゃとらんじ」にては「ふぁるつ」又は「ふぁるざん」「ふぁるじ」「ふぁるじん」抔と稱せられし馬子にして、其名は輔翼者、大臣、將軍等の義を有せるなり。されば固より女王とは稱さるべくもあらざりしが、其稱羅甸語化せられて「ふぁるじあ」又は「ふぁるしあ」と呼ばれ、佛人に訛られて「ふぁえるす」「ふぃえるじ」と呼ばれ、「ゐぇえるじゅ」と呼ばれて終に女子を稱するの語に近似するに至り、轉じて女性となりしと云ふ。猶他の一説に據れば、從前は「ばうん」の第八格に達するや必ず陞級して「ふぁるじん」となりしが、其狀勢佛蘭西の「だーめ」の戲に似たりしを以て、「だーめ」に女子の義あるまゝ、一轉して「ふゐるじん」の馬子は女性と目さるゝに至れるなりといふ。

按ずるに「だーめ」は我邦の「飛び將棊」「によいによい」支那の蹙戎（酉陽雜俎續集卷四に見ゆ）の類にして少しく異なるもの也。

古は此馬子一格を限りて對角線に行動するのみにして常に盤上の弱將たりしなり。然るに今の如く大能力を有するに至りしは第十五世紀の半よりの事にして、從つて各將及び步兵も亦其能力を大にするに至りしなるべし。僧正の馬子も亦今の如くならずして從前は纔に對角線に二格を行くを得るに過ぎざりしのみならず、其中間の一格に對しては、馬子の在ると無きとに關せず之を躍過す

ん、など〻云へるに對して、將棋の法に寄せて云へるならん。）上説は信ずべからざるものにもあらざるが如し。されど、あぶろふぇだは、其自ら記せし事蹟に後るゝこと五世紀の人なり。

將棋の歐洲の西部及び中部に入りし徑路も亦明らかならず。西班牙人は「もすれむの勝利」より之を傳へ、伊太利は、びざんちんより之を傳へ、北の方佛蘭西に入り、またすかんぢなびや及び英國に入りしならん。一説には、十字軍の時、土耳古のこんすたんちのーぷるにて軍士之を學びて歸れるより傳播せしとなれど、西暦一千六十一年法王阿歷山二世に上れるおすちあの監司、牧師だみあなすの書に照らして、第一十字軍以前既に伊太利亞に於て將棋の行はれしを知るべきを以て、自ら其説は破るゝものと云ふべし。だみあなすは僧侶の將棋を弄ぶを憤慨して、神人の間に立つ者如何ぞ閑戲に耽りて身を瀆すべけんや、將棋を弄ぶ者は罰せざるべからず、と云へるなり。當時猶他に僧侶の將棋を弄ぶことに就て論議せしもの無きにあらざるを見れば、既に其廣く行はれしこと察すべきにあらずや。

將棋の起源と傳來とは大概上述の如し。今聊か其沿革に就きて語らんか。

「王」の馬子は今古其步法を同くす。たゞ「かっすりんぐ」は歐羅巴の創案にして、（かっすりんぐとは陣形を變じて王を衛るを云ふ。）古は「かっすりんぐ」の定法無く、今の「かっすりんぐ」するが如き時に臨みて、二格三格を一躍し、或は桂馬筋にも一躍するを得たりといふ、（案ずるに我邦中將棋の獅子の步法の如くなるを得しならん。）「かっすりんぐ」は第十六世紀

かるは將棋の戯の後に、ぺぴんの兒のために殺されたりと云ひ、女王いれんは廣大なる將棋盤をしゃあれまん帝に贈りしと云ふが如きは、皆無稽の談にして、りんて氏の言に據れば、ばわりや王子におッかるといふものも無く、女王いれんの大將棋盤の談の如きも烏有のことに屬すとなり。

はらん、ある、らしっどに關する傳說中少しく信ずべきが如く見ゆるもの無きにあらず。あぶるふぇだの記せる「もすれむ」の史冊中に、羅馬人の帝ないすほるすより阿剌比亞人の王はらん、ある、らしっどに贈れる書及び其復書、並びに其事實是なり。帝の書は普通の問候の辭の後、『予は女帝の後を襲ひて位に即きしが、女帝は汝を視ること「るっく」の如く、（るっくは將棋の馬子の名にして猶日本の飛車の如し。）自ら視ること「ばうん」の如くなりしを以て、（ばうんも亦馬子の名にして比へば日本の步兵の如く最小弱の者なり。辭の意は味はひて知るべし。）汝に納むべき額の二倍以上の貢租を供するを免れざりし。されど其はたゞ女性の柔弱と怯懦とのためなりしのみ。いま予は汝に求む、汝が曾て女帝より得しところのものを此の書に接するの後に於てたゞちに償還せんことを。汝若し遲疑せば吾が劍は吾が出入を清算せんのみ。』と云へり。はらんの答辭はびざんちん帝の書の背面に記されたるが、至明至切のものなりき。いはく『大慈大悲の神の御名に於て、教主はらん、羅馬の狗ないすほるすに書を賜ふ。予不信教者の母の兒なる汝の書を讀めり。予が答は、汝見る可し、汝聞くべからず。』と。是の如くにして教主はらんは直ちに兵を提げて羅馬諸州に殺入し、ないすほるすをして其答を眼にせしめ、且つ和を乞はしめたりといふ。（はらんの辭に、汝見るべし、汝聞くべからず、とあるは、るっく、ばう

其濫觴より幾歳月を經たるかは明かにし難し。

將棋の起源の明らかならざるが如く其傳來もまた明らかならず。其印度より波斯に入りし年代の如きも確定し難し。波斯の詩人ふぁるづしの其史詩中に、印度の王より大使を派して將棋の局と馬子とを波斯王なうしらわんに示し、此秘手を解するか、然らずんば貢租を入るべし、と責めたり、と云ふ事見ゆ。なうしらわんは、じやすちにあんと同時の人にして耶蘇紀元第六世紀に當りて位に在りしなり。されど、ふぁるづしは王に後るゝこと殆ど四百五十年なれば、其言必ずしも信憑するに足らず。但し波斯阿刺比亞の人々の記錄に據りて考ふるに、將棋は印度より波斯に入り、會々阿刺比亞人波斯を有するに至りしを以て（耶蘇紀元第七世紀）其人民間に行はれ、次で其時代は明言する能はざれども第十一世紀若くは第十世紀に當り直接間接に歐洲諸國に傳播するに至りしなり。阿刺比亞より歐洲に入りし事は十分明白にして、其の「王子」を歐語に「ちぇっく」といふも、「詰み」を「めえと」といふも皆阿刺比亞語の「しぇー」といひ「めえつ」と云ふより出でたるのみならず、馬子の名稱等に就きても考へ知るべきものあればなり。

耶蘇紀元第七八世紀間には將棋に關する傳說少からずといへども信ずべきもの甚だ少し。しぁあれまん帝、はらん、ある、らしっど敎王等に就ての奇談あれど、二者皆將棋を知れりといふの證無く、しぁあれまんの治世に當りて將棋歐洲に入れりといふが如きも無證の說なり。ばわりやの王子おっ

を用うるが如き博戲は「まぬ」の嚴禁するところなればなり。氣候の酷熱は載籍を永存せしめざるを以て、印度の簡冊は大抵三百年乃至四百年にして朽腐敗滅に就く。玆を以て其古記舊編は斷えず轉寫さるゝことなるが、其際後人の攙入を被り終に本來の面目を失ふに至る。是の如きは印度の古の論じ易からざる所以なり。

ふぁん、でる、らっさ氏は、初めふぉるぶす氏說を奉じて言を爲せしが、後ふぁん、でる、りんで氏の說に從ひて、自說を改めたり。

以上諸說を綜合して考ふるに、將棋は他の邦國に先だつて印度に存せしこと推知すべく、且此戲の名と馬子の名とは、たま〳〵以て此考察を强むるに足るものあり。ふぉるぶす氏の言の如く、「しゃとらんじ」といへる語は阿剌比亞波斯の人民間の外國語なること疑無く、また今英語にて「ぴしょっぷ」と稱する馬子の阿剌比亞名は「あるふぃる」と稱することとなるが、「あるふぃる」は即ち象の義なり、此等は皆將棋の印度より出でゝ西漸したるものなることを想はしむるものならずや。

然れども將棋の眞の起源を稽査せんとすれば、一も確證の得べき者ある無く、たゞ信ずべからざる古傳說あるを見るのみなり。吾人が最古の證據として有するは耶蘇紀元九百五十年に當つて阿剌比亞のますぢが記せし文書なるが、其言に依れば「しゃとらんじ」はますぢ以前既に久しく行はれたりしとなり。是の如くなれば將棋の世に存すること既に千年以上なることは疑ふべからざれども、猶

別に確證の存するあるにはあらざれど、將棋は耶蘇紀元第八世紀に至る間印度に流布せし佛教の信奉者中に發生せしならんと、りんで氏は想像するに至れり。

蓋し佛教の信奉者は、目的の如何を論ぜず戰鬪殺戮を敢てすることを罪惡とし、英雄の來世は必ず非常の苦報を受くべきものとなせり。然れども人類の勝つことを好むの天性は鬱勃として熄止する能はず、終に此の「血を見ざる戰鬪」を案出して以て修羅の毒狀に代へ、聊か壯夫の覇心を銷せしなるべし。

此故に氏はまた、「ふぁあ、はんてっど、げーむ」を以て印度の將棋の古き戲法なりとするふぉるぶす氏の說を取らずして、「ふぁあ、はんでっどげーむ」の戲法は波斯の戲法よりも猶近き世のものならんと云へるじょーんすの說と歸を同うし、「ふぉあ、はんでっど、げーむ」の如きは却つて本來の印度の將棋に基づける近き世の戲法なりと爲し、且つ如何なる戲法の將棋にせよ之に關する古典等の確證は存すべきもあらずと排擊せり。

ゐりやむ、じょーんす氏の譯本は一の古き證據たりしも、其內容の明かにせらるゝに及んでは、實に自ら崩潰せり。如何となれば、其文中に、ゐぁさ、ごうたま（瞿曇）二聖の事を記し、ゐぁさは王子ゆぢしちらに「ちゃつらんが」を敎へ、瞿曇はまた將棋の法に就て一條の說を示せりとの記事あれども萬々是の如きのことは有るべからず、「ちゃつらんが」は骰子を用ゐて勝負を爭ふものなるに、骰子

といふが如き語は、全く波斯語中の外國語にして、本來の波斯語にあらずと說けり。
西暦一千八百七十四年ふぉん、てる、りんて氏は其精力を盡したる著書「將棋の歷史及び文學」を伯林に於て發刊し、將棋の起源を論じたる種々の說の大抵荒唐無稽なるとを云へり。氏の說も又此技は印度より出でゝ波斯に傳はれりとするものなるが、ふぉるぶす氏の勤勞して立てたる「ちゃつらんが」說は、氏の爲に顏色を失するに至れり。氏曰く「ちゃつらんが」といふ語は印度の古詩人等に軍隊の稱として用えられたることは之あり、遊戲の名として用ゐられたることは絕えてなし、眞の印度の古典籍に將棋の事の見えざるは、梵典を學べるものゝ皆共に認知するところにして、彼の「ぷらなす」の如きは、從前上古の書として信受されたれども、近來の硏究に藉りて其耶蘇紀元第十世紀より以上のものたらざるは明白なり。且又「ばるしやぷらな」の謄本の英國博物館及び獨國圖書館に藏せらるゝものには、ふぉるぶす氏の引證したる記事の條無く、偶々氏が引きたるところのものに相當すべき記事は、西暦千八百七十二年ゑべっく氏の譯せし印度の書「らぐなんだな」に見ゆと雖も、「らぐなんだな」は、びゅれる氏の意見に據れば、耶蘇紀元第十六世紀のものにして、今を距る猶未だ遠からざるものなりと。
ふぉん、てる、りんて氏の考證搜索の結果の意見は、將棋の耶蘇紀元第八世紀に於て印度に存せしことを認め、而して其濫觴の地も亦蓋し印度ならんといふに在り。

梵典の譯本に基けるはいらむ、こつくす氏の説を扶く。ふぉるべす氏謂へらく、「ばるしや、ぶらな」一に記載せられし「ちゃつらんが」の「ふぉあ、はんてっどげーむ」は、將棋の根本の戯法にして、梵語を用ゐし人民、即ち古の印度人の手に成り、且久しく世に行はれしものなり、其始めて造られたる年代は甚だ遠くして考へ難けれど、蓋し耶蘇紀元第六世紀に先だつこと三千年若くは四千年なりしならんと。

氏はゐりやむ、じょーんす氏譯本中に見ゑたる四箇の王(馬子を指して云ふ)に命令引率されたる四軍の如何にして變じて相抗するところの二軍となりしかを解釋せんと欲し、(按ずるに、ふぉあはんど、げーむの戯法には、四箇の王の馬子あるなり、)引證を有せざるも又甚だ苦に推究せり。其説に曰く、四王中の二王は隷屬附庸の狀をなして、「もにとる」或は「かうんせろる」となり、一は白軍に列し、一は黑軍に列するに至りしなり。而して今日の女王の馬子は此「かうんせろる」の馬子の變じて成れるものなりと。

按ずるに「もにとーる」又「かうんせろる」の語は共に勸解する者の義なり。今行はるゝものならずと雖も我邦の一種の將棋の馬子の名に「仲人」といふものあれば、譯して「仲人」とせんこと或は可なるに似たり。「仲人」の事は日本將棋の條下に述ぶべし。

又氏は、波斯の「しゃとらんじ」は分明に印度の「ちゃつらんが」に淵源すと論證し、「しゃとらんじ」

ふべし。然れども氏は其說に憑らず、別に波斯に存せる證據より推考して、將棋の起源の地は實に印度なりとの說を爲し、「ばるしや、ぷらな」に記されたる將棋の戲法の如きは、波斯の將棋の戲法よりも猶近世のものなるべければ、此技の起源を論ぜん證左としては寧ろ力無しと爲したり。且又氏は、將棋の起源を印度に歸するに關はらず、公正の見を以て、我未だ曾て將棋の事の婆羅門古典に記されたるを眼にせずと云へり。氏謂へらく、印度の將棋、即ち梵語に「しやつらんが」と稱するものは、耶蘇紀元第六世紀に當つて、印度より波斯に入り、古の波斯人の口氣に因りて「ちやとらんぐ」と訛稱され、而して波斯は偶々直に、語の頭聲尾聲を表するところの文字を有せざる阿剌比亞人に國を奪はれしを以て、「ちやとらんぐ」は再び轉じて「しゃとらんじ」と稱さるゝに至り、此稱却つて今の波斯人の間に行はれ、終にまた印度の俚語となるに及べるなりと。

又一千七百九十九年出版の亞細亞查問記第七卷に見えたる、ゐりやむ氏の說に關するものにして、氏は古の梵書に見えたる「ふぁあ、はんでっど、げいむ」は今の將棋の最も舊樣のものにして、緬甸並に波斯の戲法は相承の次第に於て第二第三の地に立つべきものなりと思考せり。其他ふらんしす、だうす氏、ふれてりっく、まってん氏等もまた、はいで氏系統の說を爲せり。

だんかん、ふぉるべす氏の「將棋史」は一千八百六十年に出でたり。此書ゐりやむ、じょーんす氏の

氏の時代は猶因つて以て古代印度に關する智識を得べき梵語古典の寳藏に入ることの容易ならざりしがため、此二點の障礙に少からざる不利を受けたり。

西暦一千七百八十三年より一千七百八十九年に亘り、ゐりやむ、じょんす氏は「亞細亞査問記」といへる書の第二卷中に於て、はいて氏の說を襲ひて、將棋の起源の印度に屬すべきを論じたり。其說に據れば、邈として尋ぬべからざる上古より印度に行はれて梵語に「ちやつらんが」と呼ばれたるものは即是將棋にして「ちやつらんか」は四の「あんが」の義、四の「あんが」とは象、馬、車、卒の四科を指せるなりといふ。

印度のべんがる府に住みて其地の亞細亞協會々長たりしゐりやむ、じょんす氏は、夙に梵語に就て確實深邃なる智識を有せし人なりしのみならず、將棋の技を解し、且つ之を嗜みしを以て、將棋に關して論議を試みんには、はいて氏に比するに甚だ多く利便を具有せりと云ふべきなり。

ゐりやむ、じょんす氏の將棋に就きての說は、畢竟骰子をもて演ずるところの「ふぉわ、はんてつど、げいむす」の記事を含める「ばゐしや、ぷらな」といへる印度の書の飜譯並びに註釋なるが、氏が、らあだかんと丶云へるものより聞きしところに依れば、將棋の起源は世界の第二期に於て、らまの錫蘭島首府を包圍して攻擊せし時、楞伽王らばんの妃、王を慰めんがため之を創造せりと、印度の古法典に見ゆとなり。此說果して眞ならば、將棋の傳はれるは蓋し既に四千年乃至五千年なりと云

按ずるに、此說韓信を以て現今行はるゝところの歐洲將棋の鼻祖とせんとするに似たり。奇もまた甚しといふべし。然りと雖も西書の記するところに據れば、漢の高祖の帝と稱せしは、耶蘇紀元前二百六年なり。されば、耶蘇紀元前百七十四年は、韓信死して後二十有餘年なり。蓋し支那の俗間に、韓信を以て將棋の鼻祖とするの說ありて、あるゐん氏偶然これを聞きしなるべければ、あるゐん氏に罪は無きことなれど、此說固より正しき出處も無く、また年代並に事情の齟齬等も有りて、通じ難きの異說たるを免れず。猶下に記すところの支那將棋の條に於て評すべし。

佐官はいらむ、こっくす氏は、あるゐん氏の書に註して曰く、支那の將棋は、ちょく、ちう、ほんきと呼ばる、(恰當すべき文字考へがたし)兵學の遊戲の義なりと。

又醫士えぬ、ぶらんど氏は西曆千八百五十年ろんどん府にて出版せられたる其著書「波斯の將棋」に於て、將棋の創案者の波斯人たることを主張せり。氏が說に曰く、將棋は實に波斯に起り、印度に傳はり、歲月を經て後復其故鄉波斯に歸りしなり、然れども其端を波斯に發せしに關はらず、印度に於て最も莊嚴に發達し、且つ尊信せられたるを以て、其起源もまた印度人に存するが如きの觀を呈するに至りしのみと。

おっくすふぉるどの學士はいて氏は、西曆一千六百九十四年「て、るーぢす、おりえんたりぶす」中に將棋の事を記して一說の首唱者となりたり。されど氏は、將棋の技に通ぜざりしのみならず、

蘭王らばんの妃、哲學者ざあきせす、希臘公子ぱらめです、はーめす、ありすとーとる、らいどうちれん兄弟、せみらみす、ぜのびや、紀元二百年前に死せしあてらす、支那官人はんしん、波羅門しさ、波斯の天文學者しやとれんしや等を目するに將棋の創製者を以てするもの無きにあらず。然れども其說多くは荒誕自肆、信ずるに足らず、或は誤謬分明にして歷々指摘し得可きものあり。例へば、るーだす、らとらんかろーらむ、及び、るーだす、かるからーらむといへる羅馬の遊戲と、とーるばるど即ち投板戲といへる威爾斯の遊戲と、ふぃすちいると云へる愛蘭土古代の遊戲とを以て皆是將棋と同一系統に屬する遊戲なりとする說の如きは、極めて容易は打破さるべし。如何となれば將棋は其性質室內の遊戲たるべきこと論無きものなるに古代愛蘭土には室內の遊戲の行はれしこと全く無くして、其民戶外の遊戲をのみ好みたること明らかなればなり。

又將棋は支那に濫觴すとの說は、ろーやる、あいりっし、あかでみい事務局にて出板せられたる西曆一千七百九十三年いゝるす、あるゐん氏が、ちやるもんと伯に與へたるの書に見ゆ。其書の意に曰く。支那語に所謂ちょんき（象戲若くは將棋、象棋の文字に當るならん。）は貴者の遊戲の義なり、王りうばん（劉邦に）や。）即ち後にきやんなん帝となりしところの（きやんなんと云へるは解し難し、江南の二字歟と思へど江南にては當らず。）かおつ（高祖に）や。）の治世に於て、せんし國（陝西歟、齊歟。）征討軍の將はんしん（韓信に）や。）冬期駐軍中部下の兵士等が懷鄕の念を發するを慰めんがため此を案出せり、傳說に依るに、はんしんが、せんし國を征せしは耶蘇紀元前百七十四年なりと。

將棋雜考

一、西洋將棋

現今行はるゝところの西洋將棋の起源は、蓋し曖昧にして明らかならず。然れども其曖昧にして明かならざるは、幾多の學者をして其起源を探究せんとするの念を抛擲するに至らしめざりしのみならず、たまたま以て考證の勞苦を敢てするに至らしめたり。

此一遊技の發軔に就きては、異說紛々として一定せず。或は希臘人これを始めたりと云ひ、或は羅馬人これを爲れりと云ひ、婆毘倫人なりといひ、しいじや人なりと云ひ、(しいじや人は土耳人の先人なるべし。)埃及人なりといひ、猶太人なりといひ、或は波斯人なり、支那人なり、印度人なり、阿刺比亞人なりと云ひ、又或はあらうかにや人(あらうかにや人は智利國の南方に住める一種族にして印度人なり。)かすちりや人(かすちら人は西班牙高原地の民。)愛蘭土人、威爾斯人なりとも云へり。之に加ふるに單に某の國民某の種族の間に成れりと云ふのみを以て足れりとせず、何人の創意に屬するかをも考定せんと欲する人々ありて、やふぇつと、せむ、そろもん王、錫

しには及ぶべくもあらねば、雁阪を過ぎんことは思ひ斷えつ、さればとて大日向の太陽寺へ廻らん心も起さず、ひた走りに走りて大宮に午餉す。ふたゝび鄉平橋を渡りつゝ、赤平川を鄉平川ともいふは、赤平の文字もと吾平と書きたるを音もて讀みしより訛りて鄉平となりたるなりといふ昔の人の考へを宜なひ、國神野上も走りに走り越し、先には心づかざりし道の邊に靑石の大なる板碑立てるを見出しなどしつゝ、矢那瀨寄居もまた走り過ぎ、暗くなりて小前田に泊りたり。

十日。宿を立出てゝ長善寺の傍より左へ橫折れ、觀音堂のほとりを過ぎ、深谷へと心ざす。幸に馬車の深谷へ行くものありければ、武藏野といふところより、それに乘りて松原を走る。いと廣き原にて行けども〳〵盡くることなし。名を問へば櫛挽の原といふ。夕日さす景色もさびし松たてる岡部の里と爲相の詠めるあたりも此原つゞきなり。よつておもふに、岡部の里をよめる歌には松をよめるが多きやうなり。深谷につきて汽車に打乘り、鴻巢にいたりて汽車を棄て、人力車を走らせて西吉見の百穴に人間の古をしのび、また引返して汽車に乘り、日猶高きに東京へ着き、我家のほとりに歸りつけば、秩父より流るゝ隅田の川の水笑ましげに我影を涵せり。

業なるべし神主禰宜等十人ばかり皆嚴かに裝束引きつくろひて祝詞をさゝぐ。宮柱太しく立てたる神殿いと廣く潔らなるに、此方より彼方へ二行に點しつらねたる御燈明の奧深く見えたる、祝詞の聲のほがらかに澄みて聞えたる、膽にこたへ身に浸みて有りがたく覺えぬ。やがて退り立ちて、こゝの御社の階の下の狛犬も狼の形をなせるを見、酒倉の小さからぬを見などして、例のところに歸り、朝食をすます。これより猶荒川に沿ひて上り、雁阪峠を越えて甲斐の笛吹川の水上に出で、川と共に下りて甲斐に入り、甲斐路を歸らんと、豫ては心の底に思ひ居けるが、こゝにて問ひ糺せば、甲斐の川浦といふ村まで八里八町人里も無く、草高くして路も絶え〴〵なりとのことに望を失ひ、引返さんと心をきはむ。日本武尊の常陸より甲斐の酒折に至りたまひし時は、いづれの路を取り玉ひしやらん。常陸より甲斐に至らんに、武藏よりせんには、荒川に沿ひて上ると、玉川に沿ひて上るとの二路あり。三峯、武光、八日見山を首めとし、秩父には尊の通り玉ひし由の云ひ傳へ處々に存れるが、玉川の水上、即今の甲斐路にも同じやうの傳説無きにあらず。又尊の酒折より武藏上野を經て信濃に至り玉ひし時は、いづくに出で玉ひしならん、酒折より笛吹川に沿ひて上り玉ひしならんには必ず秩父を經たまひしなるべし。雁阪の路は後北條氏頃には往來絶えざりし處にて、秩父と甲斐の武田氏との關係淺からざりしに考ふるも、甚だ行き通ひし難からざりし路なりしこと推測らる。家を出づる時は甲斐に越えんと思ひしものを口惜しとは思ひながら、尊の雄々しくましませ

きこゝろにのみ今に存れるにはあらずや。我邦には獅子虎の如きものなければ獸には先づ狼熊を最も猛しとす。されば狼を怖れて大神とするも然るべきことにて、熊野は神野の義、神稲をくましねと訓むたぐひを思ふに、熊をくまと訓むは或は神の義なるや知るべからず、(或曰くまは韓語、或曰、くまは暈にて月の輪のくま也)たゞ狼といふ文字は惡しきかたにのみ用ゐらるゝならひにて、豺狼、虎狼、狼聲、狼毒、狼狽、狼顧、中山狼、狼湌、狼貪、狼竄、狼籍、狼戾、狼狽、狼疾、狼煙など、めでたきは一つもなき唐山のためしいとをかしゝ。いはゆる御狗を出すところは此山のみならず、來し路の寶登神社、贄川の猪狩明神、薄村の雨神神社なども皆人の乞ふに任せて與ふといふ。秩父は山重なり谷深ければ、むかしは必ず狼の多かりしなるべく、今も猶折ふしは見ゆといふのみか此山にては月々十九日に飯生酒など本社より八町ほど隔りたる處に供置きて與ふといへば、出で來ぬには限らぬなるべし、おそろしき事かなゝど寒月子と竊かに語り合ひつゝ、好きほどに酒杯を返し納めて眠りに就くに、今宵は蚊も無ければ蚊屋も吊らで而も涼しきに過ぐれば夜着引被ぎて臥す。室は紙障子引立てしのみにて雨戸ひくといふこともせず戸の後鎖することもせざる、流石に御神の御稜威ありがたしと心に浸みて嬉しくおぼえ、胸の海浪をだやかに夢の港に入る。

九日。朝四時といふに起き出でゝ、手あらひ口そゝぎ、高き杉の梢などは見えわかぬほど霧深き曉の冷やかなるが中を歩みて、寒月子とも〴〵本社に至り、階を上りて片隅に控ゆ。朝々の定まれる

に息つきて、幾何も無き命を生くといふ。をかしき男かなと思ひて、さま〴〵の事を問ふに、極めて石を愛づる癖ある叟にて、それよりそれと話の次に、平賀源内の明和年中大瀧村の奥の方なる中津川にて鑛を採りし事なども語り出でたり。鳩溪の秩父にて山を開かんと企てしことは早くより其の傳説ありて、今も其跡といへるが一處ならず殘れるよしなれば、ほと〳〵疑ひ無きことなるが、知る人は甚だ稀なるやうなり。功利に急なりし人のことゝて、或は秩父の奥なんにども思ひを疲らして手をつけ足を入れしならん。按摩すむ頃、袴を着けたる男また出で來りて神酒を戴かるべしとて、十三四なる男の兒に銚子酒杯取り持たせ、腥羶はなけれど式立ちたる膳部を据えてもてなす。こゝは古昔より女のあることを許さねば、酌するものなどすべて男の兒なるもなか〳〵にきび〳〵しくて好し。神酒を戴きつゝ、酒食のたぐひを那處より得るぞと問ふに、酒は此山にて釀せど、其他は皆山の下より上すといふ。人馬の費も少なきことにはあらざるべきに盛なることなり。此山是の如く榮ゆるは、こゝの御神の御使の御狗といふを四方の人々の參り來て乞ひ求むるによれり。御神は伊奘諾伊奘册二柱の神にましませば申すもかしこし、御狗とは狼をさして云ふ。もとより御狗を乞ひ求むるとて、符牘のたぐひを受くるには止まれど、それに此山の御神の御使の奇しき力籠れりとして人々は恐れ尊むめり。狼の和訓おほかみといへるは大神の義にて、恐れ尊めるよりの稱なれば、おもふに我邦のむかし山里の民どもの甚く狼を恐れ尊める習慣の漸く其故を失なひながら山深

んため建てたると覺しく、恰も廻廊といふものを二階建にしたる如く、折りまがりたる一トつゞきのいと大きなる建物にて、室の數は大凡四十もあるべし。一つの堂を中にし、庭を隔てゝ對ひの樓上の燈を見るに、折から霧濃く立ち迷ひたれば、海に泊まれる船の燈を陸より遙かに望むが如し。此處は水乏しくして南の方の澗にくだる八町ならでは得る由なしと聞けるに、湯殿に入りて見れば、浴槽の大さなど、賑へる市の宿屋も及ばざる程にて、心地よきこと思ひのほかなり。參詣のものを除き、こゝの人々のみにて百人に近しと云へば、まことに左もあるべきことなるが、水をば今は新らしき裝置もて絕ゆる間なく汲み上ぐるといふ。夜の食を濟ませて後、爲すことも無ければ携へたる地理の書を讀みかへすに、武甲山藏王權現緣起といふものを擧げたる其中に、六十一代朱雀天皇天慶七年秩父別當武光同其子七郞武綱云々といふ文見え、また天慶七年武光奏し奉りて敕を蒙り五條天皇少彥名命を藏王權現の宮に合せ祀りて云々と見えたり。さてはいよく武光といふ人もありけり、緣起などいふものは多く眞とし難きものなれど、僞り飾れる疑ありて信とし難きものゝ端々に却つて信とすべきものゝ現はるゝ習なることは、譬へば渡金せるものゝ角々に眞の質の見はるゝが如しなどおもふ折しも、按摩とりの老いたるが入り來りたり。眼盲ひたるに如何でかゝる山の上にはあるならんと疑ひつ、呼び入れて問ひたゞすに、秩父に生れ秩父に老いたるものゝ事とて世ばなれたる山の上を憂しともせず、口に糊するほどの事は此地にのみ居ても叶へば、雲に宿かり霧

し。いよ〳〵雲採、白石、妙法の三峰のふもとに來にけりと思ひつゝ勇み進むに十八九間もあるべき橋の折り出りて此方より彼方にわたれるが、其幅わづか三尺ばかりにして、しかも處々腐ちたれば、脚の下の荒川の水の青み渡りて流るゝを見るにつけ、流石に胸つぶれて心安からず、渡りわづらふばかりなり。むかしは獨木橋なりしといへば、その怖ろしさ云ふばかりなかりしならん。やうやくにして渡り終れば大華表ありて、華表のあなたは幾百年も經たりとおぼゆる老樹の杉の幾本となく陰暗きまで茂り合ひたり。これより神の御山なりと思ふ心に、日の光だに漏らぬ樹陰の涼しささへ打添はりて、おのづから身も引きしまるやうにおぼゆ。山は麓より巓まで、ひた上り五十二町にして、一丁ごとに町數を勒せる標石あり。路はすべて杉の立樹の陰につき、繞り繞りて上りはすれど、下りといふこと更に無し。三十九丁目あたりに到れば、山急に開けて眼の下に今朝より歩み來しあたりを望む。日も暮るゝに近き頃、辛くして頂に至りしが、雲霧大に起りて海の如くになり、鳥居にかゝれる大なる額の三峰山といふ文字も朧氣ならでは見えわかず、袖も袂も打ちしめりて絞るばかりになりたり。急ぎて先づ社務所に至り、宿假らん由を乞へば、袴つけたる男我等を誘ひて樓上に導き、幅一間餘もある長々しき廊を勾に折れて何番とかやいふ疊十ひらも敷くべき一室に入らしめたり。

あたりのさまを見るに我等が居れる一ト棟は、むかし觀音院といひし頃より參詣のものを宿らしめ

けたるにて、名に副ふものは一も無し。窟禪定も仕はてたれば、本尊の御姿など乞ひ受けて、來し路ならぬ路を覺束なくも辿ることや、久しく、不動尊の傍の清水に渴きたる喉を潤ほしなどして辛くも本道に出て、小野原を經て贄川に憩ふ。荒川橋とて荒川に架せる鐵橋あり。岸高く水遠くして、瀨をなし淵をなし流るゝ川のさまも凡ならぬに、此方の岩より彼方の岩へかゝれる吊橋の事なれば、塗りたる色の總べて青きも、なか〳〵に見る目厭はしからず、瑞西あたりの景色の繪を目のあたり此處に見る心地す。贄川は後に山を負ひ、前に川を控へたる寂びたる村なれど、家數もやゝ多くて蠶の糸ひく車の音の路ゆく我等を送り迎へするなど住まば住み心よかるべく思はるゝところなり。晝食しながら、さま〳〵の事を問ふに、去年の冬は近き山にて熊を獲りたりと聞き、寒月子と顏見合はせて驚き、木曾路の贄川、こゝの贄川、いづれ劣らぬ山里かな、思へば思ひ做しにや景色まで似たるところありなど、語らふ。贄川を立ち出でゝ猪の鼻を經、强石に到る。贄川より隧道を過ぐるまでの間、山やうやく窄り、谷やうやく究まりて、岨道の岩のさまいとおもしろく、原廣く流れ緩きをもて名高き武藏の國の中にもかゝるところありしかと驚かる。左れど隧道を過ぐれば、趣き變りて兀げたる山のみ現はれ來るをかし。上りつ下りつして强石を過ぎ、川のほとりに至る。川のむかひは即ち三峰にて、强石は即ち多くの地圖に大瀧と見えたる村の小名なり。大瀧といふも、贄川といふも、水の流れ烈しきより呼び出せる名にて、假名は違へど贄川は沸川ならんこと疑ひ無

が、燭を執りたる婦に從ひて寒月子が恰も其岩の下を行くを後より見れば、さなきだに燭の光りのそこゝに陰影をつくれるが怪しく物怖ろしげに見ゆる中に、今や落ちかゝらんずる勢して、したゝかなる大きさの岩の、人の頭の上に臨めるさま見るものゝ膽を冷さしむ。それよりまた梯子を上り、百萬遍の念珠、五百羅漢、弘法大師の護摩壇、十六善神などいふを見、天の逆鉾、八大觀音などいふものあるあたりを經て、又梯子を上り、匍匐ふやうにして狹き口より這ひ出づれば、忽ち我眼我耳の初めてこゝに開けしか、此雲行く天、草芳る地の新にこゝに成りしかを疑ふ、心の中のすがすがしさ更に比へんかたを知らず。古より此窟に入りて出づることを窟禪定と呼びならはせる由なるが、さらば此窟を出でたる時の心地をば窟禪定の禪悦とも云ふべしなどゝ、私に戯れながら堂の前に至る。此窟地理の書によるに昇降およそ二町半ばかり、一度は禪定すること廢れしが、元祿年中三谷助太夫といふものゝ探り試みしより以來また行はるゝに至りしと云ふ。窟のありさまを考ふるに、或は濶くなり、或は狹くなり、或は上り、或は下り、極めて深き底しれぬ谷などのあるのみならず、岩のさま角だゝず滑らかにして、すべて物の自然溶け去りし後の如くなれば、人の造りしものとも思はれず、七寶所成にして金胎兩部の蓮華藏海などいふ法師等が說はさて置き、まことにおのづから成れる奇窟なるべく、東の出口と西の入口と相隔たること窟の外にても凡そ一町ほどなれば窟の內二町あまりといふも虛妄にあらじと肯はる。たゞ窟の內のさま〴〵の名は皆强ひて名づ

はざるまで口は狹きに、行くては日の光の洩るゝ隙もなく眞黑にして、まことに人の世の聲も風も通はざるべきありさま、吾他が終に眠らん墓穴もかくやと思はるゝにぞ、流石に歩もはか〴〵しくは進まず。されど今さら入らずして已まん心も無ければ、後れじものと從ひて入るに、下ること二三十歩にして窟の內やゝ廣くなり、人々立ちて行くことを得。婦燭を執りて窟壁の其處此處を示し、これは蓮花の岩なり、これは無明の瀧、乳房の岩なりなどゝ、所以無き名を告ぐ。此窟上下四方すべて滑らかにして堅き岩なれば、これらの名は皆其高く張り出でたるところを、似つかはしきものに擬へて、昔の法師等の呼びなせしものにて、窟の內に別に一々岩あるにあらず。道二つに別れて左の方に入れば、賓頭盧、賽河原、地藏尊、見る目、嗅ぐ鼻、三途川の姥石、白髭明神、惠比須、三寶荒神、大黑天、辨才天、十五童子などいふものあり。およそ一町あまりにして途究まりて後戾りし、一度舊の處に至りてまた右に進めば、幅二尺ばかりなる梯子あり。このあたり窟の內濶くして却つて物すさまじ。梯の子十五六ばかりを踏みて上れば、三十三天、夜摩天、兜率天、忉利天などいふあり、天人石あり、彌勒佛あり。又梯子を上りて五色の瀧、大梵天、千手觀音などいふを見る。難界が谷といふは窟の中の淵ともいふべきものなるが、暗くして其深きを知るに由なく、さし覗くだに好き心地せず。蓮花幔とて婦燭を岩の彼方にさしつくれば、火の光朧氣に透きて見ゆるまで薄くなりて下れる岩あり。降り龍といへるは龍の首めきたる岩の、上より斜に張り出でたるなる

に、こゝのは都ての黒きが中に白くして赤き流れ斑の入りて彩色をなせる、いとおもしろし。憾むらくは橋立川のやゝ遠くして一望の中に水無きため、かほどの巖をして一入の榮あらしむること能はず、惜みても猶惜むべきなり。堂のこなた一段低きところの左側に、堂もる人の居るところならんと思しき家ありて、檐に礬板懸り、それに禪教尼といふ文字見えたり。こゝの別當橋立寺と豫て聞けるはこれにやと思ひつゝ音なひ驚かせば、三十路あまりの女の、髮は銀杏返しといふに結び、指には洋銀の戒指して、手頸には風邪ひかぬ厭勝といふなる黒き草綿糸の環かけたるが立出でたり。流石に打治めたるところありて、全くのたゞ人とも見えぬは、これぞ礬板の面に見えたる人なるべし。奥の院の窟の案内たのみたき由を云ひ入るれば、少時待ちたまへとて茶を薦めなどしつゝ、やをら立上りたり。何するぞと見るに、やがて頸長き槌を手にして檐近く進みより、とう〳〵と彼の礬板を打ち鳴らす。禽も啼かざる山間の物靜かなるが中なれば、其聲谿に應へ雲に響きて、岩にも浸み入らんばかりなりしが、此音の知らせに其と心得てなるべし、筒袖の單衣着て藁草履穿きたる農民の女とおぼしきが、鎌を手にせしまゝ那處よりか知らず我等が前に現れ出でければ、そゞろに梁山泊の朱貴が酒亭も思ひ合はされて打笑まれぬ。婦は我等を一目見て直ちに、蠟燭、鍵などを主人の尼より受け取り、いざ來玉へと先立ちて行く。後に從ひて先に見たる窟の口に到れば、女先づ鎖を開き燭を點して、よく心し玉へ、など云ひ捨てゝ入る。背をかゞめ身を窄めては入ること叶

巖と心留まりて、ふりかへり見れば、すぐ其傍の山の根に、格子しつらひ、鎖さし固め、猥に人の入るを許さずと記したるあり。これこそ彼の岩窟ならめと差し覗き見るに、底知れぬ穴一つ窅然として暗く見ゆ。さてはいよ〳〵これなりけりと心勇みて疾く嚮導すべき人を得んと、先づ觀音堂を索むるに、見渡すかぎりそれかと覺しきものも見えねば、聊か心惑ふ折柄、寒月子は岨道を遙かに上り行きて、こゝに堂あり堂ありと叫ぶ。嬉しやと己も走り上りて、其處に至れば、眼の前のありさま忽ち變りて、山の姿、立樹の態も凡ならず面白く見ゆるが中に小さき家の棟二つ三つ現はる。名にのみ聞きし石龍山の觀音を今ぞ拜み奉ると、先づ境内に入りて足を駐めつ、打ち仰ぎて四邊を見るに、高さは凡そ三四百尺もあるべく、亘りは二町あまりもあるべきいと大きなる一トつゞきの巖の屛風なして聳え立ちたる其の眞下に、馬頭尊の御堂の古びたるが、いと小やかに物さびて見えたるさま、畫としても人の肯ふまじきまで珍らかにめでたければ、言語を以ては如何にしてか見ぬものをして點頭かしむることを得ん、まことにたゞ仙境の如しといはんのみ。巖といへば、日光の華巖の瀧のかゝれる巖、白石川の上なる材木巖、帚川のほとりの天狗巖など、いづれ趣無きは無けれど、こゝのはそれらとは狀異りて、巖といふ巖にはあるが習ひなる劈痕皺裂の殆ど無くして、光るといふにはあらざれど底におのづから潤を含みたる美はしさ、たとへば他のは老い枯びたる人の肌の如く、これは若く壯なる人の面の如し。特に世の常の巖の色は、唯一ト色にしてをかしらぬ

け光の山などゝの稱の起りたるならんか。いと古くより秩父の郡に據りて榮えたる丹の黨には、其初めてこゝに來りし丹治比武信、また初めてこゝを領せし武經などの如く、武の字を名につけたるもの多ければ、或は武光といふものもありしかと思はる。たゞし地の名より人の名の起れる例は多けれど、人の名より地の名の起れる例はいと少ければ、武光は人の名ならんとの考へもいと力なしなど思ひつゝ、桑圃の中の一すぢ路を行くに、露もまだ乾ぬ桑の葉の上吹く朝風いと涼しく、心地よきことといふばかりなゐ。武光山より右にあたりて山々連なり立てるが中に、三峰は少しく低く黑みて見ゆ。それより奥の方、甲斐境信濃境の高き嶺々重なり聳えて天の末をば限りたるは、雁坂十文字など名さへすさまじくよぶものなるべし。進み〳〵て下影森を過ぎ上影森村といふに至るに、秩父二十八番の觀音へ詣らんにはこゝより入るべしと道のわかれに立札せるあり。二十八番の觀音は、其境内にいと深くして奇しき窟あるを以て名高き處なれば、秩父へ來し甲斐には特にも詣らんかとおもひし處なり。いざとて左の方の小さき徑に入る。枝路のことなれば、濶からず、平かならず、誰が造りしともなく自然と里人が踏みならせしものなるべく、草に埋もれ、木の根に荒れて明らかならず、迷はんとすること數次なり。山沿ひの木下蔭小暗きあたりを下ること少時にして、橋立川と呼ぶものなるべし、水音の涼しげに響くを聞く。それより右に打ち聞けたるところを望みつゝ、左の山の腰を繞りて岨道を上り行くに、形をかしき鼠色の巖の峙てるあり。おもしろきさまの

まつりの行はるゝときは、御花圃とよぶところにて、口々に歌など唱ひながら、知る知らぬ男女ども、こなた行き、かなた行きして、會ひつ別れつしつゝ、相戯れて遊びくらすを習ひとすとかや、かゝる習ひは、よその國々も少なからず、むかしの「かゞひ」といふことなどの名殘にもやあるべき。磐城の相馬のは流山ぶしの歌にひゞき渡りて、其地に至りしこととなき人もよく知つたることとなるが、しかも彼處といひ此處といひ、其のまつる所のものゝ共に妙見尊なるいとをかしく、相馬も將門にゆかりあり、秩父も將門にゆかりある地あるなど、いよ〳〵奇し。やがて立出でゝ南を向きて行くに、路にあたりていと大きなる山の頭を壓す如くに峙てるが見ゆ。問はでも武甲山とは知らるゝまで姿雄々しくすぐれて秀でたり。横瀬、大宮、上影森、下影森、浦山、上名栗、下名栗、の七村に跨れるといへる、まことに左もあるべし。此山のとなへをいつの頃よりか武甲と書きならはしゝより終に國の名の武藏の文字と通はせて、日本武尊東夷どもを平らげたまひて後甲冑の類を此山に埋めたまひしかば、國を武藏と呼び、山を武甲といふ、などゝ說くもののあるに至れり。說のいつはりなるべきは誰しも知るところなれど山の頂に日本武尊をいつきまつりありなんどするまゝ、猶或は然らんとおもふ人もなきにあらず。されど文字も古くは武光とのみ書きて武甲とは書かねば、強言其のよりどころを失ふといふべし。さてまたひそかに思ふに、武光のとなへも甚だ故無きに似て、地理の書などにも其說を欠けり。けだし疑ふらくはこゝらを領せし人の名などより、たけ光の庄、た

にあはれに覺ゆ。我等のほかにも旅人三人ばかり憩ひ居けるが、口々にあらずもがなのおそろしき雨かな、とつぶやき、此家の主が妻は雷をおそれて病める人のやうにうちふしなやむ。左れど兎角する中、さしもの雷雨もいさゝか勢弱りければ、夜に入らぬ中にとてまた車を駛せ、秩父橋といへるを渡る。例の荒川に渡したるなれば、其大なるはいふまでもなく、いといかめしき鐵の橋にて、打見たるところ東京なる吾妻橋によく似かよひたる節あり。同じ人の作りたるなりといふもまことに左もあるべしとうけがはる。ほどなく大宮につきて關根屋といふに宿かれば、雨もまたやうやく止みて、雲のたえ〴〵に夕の山々黒々と眼近くあらはれたり。こゝは秩父第一の町なれば、家數も少からず、軒なみもあしからねど、夏ながら夜の賑はしからで、燈の光も多く見えず、物賣店々も門の戸を早く鎖したるが多きなど一つは強き雨の後なればにもあるべけれど、流石に田舍びたりといふべし。この日左のみ歩みしといふにはあらねど、暑かりしことゝていたく疲れたるに、腹さへいさゝか痛む心地すれば、酒も得飮まで睡りにつく。

八日。朝餉を終へて立出でまづ妙見尊の宮に詣づ。宮居は町の大通りを南へ行きて左手にあり。これぞといふべきことはなけれど、樹立老いて廣前もゆたかに、其名高きほどの尊きは見ゆ。中古の頃この宮居のいと榮えさせたまひしより大宮郷といふこゝの稱へも出で來りしなるべく、古くは中村鄕といひしとおぼしく、和名抄に見えたる其となへ今も大宮の内の小名に殘れりといふ。此祠の

りて、そゞろに人の事を好む心を動かす。されど敢て乞ふて掘るべくもあらねば其儘に見捨てゝ道を急ぎ國神村といふに至る。此村の名も國神塚といへるが此あたりにあるより稱へそめしなるべし。今宵は大宮に假寢の夢を結ばんと思へるに、路程はなほ近からず、天は雨降らんとし、足は疲れたれば、すゝむるを幸に金澤橋の袂より車に乘る。流れの上へ上へとのぼるなれど道あしからねば車も行きなづまず。兎角するうち夏の夕の空かはりやすく、雨雲天をおほひしと見る程もなく、山風ざは〳〵と吹き下し來て、草も木も鳴るとひとしく、雨ばら〳〵と落つるやがて車の幌もかけあへぬ間に篠つく如くふり出しぬ。赤平川の鐵橋を渡る頃は雷さへ加はりたればすさまじさいふばかりなく、おそる〳〵行くての方を見るに、空は墨より黑くしていづくに山ありとも日ありとも見えわかず、天地一つに昏くなりてたゞ狂はしき雷、荒ぶる雨、怒れる風の聲々の、亂れては合ひ、合ひてはまた亂れて、いづれがいづれとも無く、がう〳〵として人の耳を驚かし魂をおびやかすが中に、折々雲さけ天破れて紫色の光まばゆく輝きわたる雷魂の虛空に跳り閃く勢ひ、見る眼の瞳をも燒かんとす。ところは寂びたり、人里は遠し、雨の小休みを待たんよすがも無ければ、しとゞ降る中をひた走りに走らす。やうやく寺尾といふ處に至りたるとき、路のほとりに一つの家の見えければ車ひく男驅け入りて、おのれらもいこひ、我等をもいこはしむ。男等の面を見れば色もたゞならず、唇までも靑みたり。牛馬に等しきこととして世を渡るいやしきものながら同じ人なれば流石

降りたるとき、人々の隱れたりし處ならむ、と後のものゝ思ひしよりよびならはせし名にやあるべき、詳くは考ふべき由無し。大淵、小柱、金崎、皆野、久那、寺尾等、秩父郡の村々には、氷雨塚と稱ふるもの甚だ多く、大野原には百八塚などいふものあり、また贄川、日野あたりには棒神と唱へて雷槌を安置せるものありと聞きしまゝ、秩父へ來し次手には、おほむかしのかたみの氷の雨塚といふものゝさまを見おぼえ置かんとおもひしまでなりしが、休めるところの鼻のさきに其塚ありと聞きては、心もはづみて興を增しつ、身を起してそこに行き見るに、塚は小高き丘をなして、丘の上には翠の葉かげ濃やかに竹美はしく生ひ立ちたり。塚はやゝ圓形に空虛にして疊二ひら三ひらを敷くべく、凡て平めなる石をつみかさねたるさまたとへば、今の人の煉瓦を用ゐてなせるが如し。入口の上框ともいふべきところにいと大なる石を横たへわたして崩れ潰えざらしめんとしたる如きはむかしの人もなかなかに巧みありといふべし。寒月子の圖も成りければ、もとのところに歸り、此の塚より土器の缺片など出したることを耳にせざりしやと問へば、其の樣なることも聞きたるおぼえあり、猶氷雨塚はこゝより少しばかり南へ行きたる處の道の東側なる商家のうしろに二ツほどありといふ。さらばそれも見んとて媼にわかれ立出で、それとおぼしき家にことわりいひて突と裏の方に至り見るに、大さの稍々異なるのみにて、こゝのも其さま前のと同じく、別に見るべきところもなし。たゞこゝにはそれと知れたる外に穴の口全く埋もれしまゝにて、いまだ掘發さゞるがあ

思ひもかけぬ草叢より、けたゝましき羽音させていと烈しく飛びたつものあり。何ぞと見るに雉子の雌鳥なれば、あはれ狩するときならばといひつゝ其まゝやみしが、大路を去る幾何もあらぬところに、雉子などの遊べるをもて思へば土地のさまも測り知るべきなり。かくてやうやく大路にいでたるころは、左まで道のりを歩みしにあらねど、暑に息もあへぐばかり苦しくおぼえしかば、もの賣る小家の眼に入りたるを幸とそこにやすむ。水湯茶のたぐひをのみ飲まんもあしかるべし、あつき日にはあつきものこそよかるべけれとて寒月子くず湯を欲しとのぞめば、あるじの老媼ゐなかふどの心緩やかに、まことにあしき病なんど行はるゝ折なれば、くず湯召したまはんとはよろしき御心づきなり、湯の沸えたぎらばまゐらせんほどに、しばし待ちたまへ、といひて傍の棚をさぐりて小皿をとりいだし、懐にして立出でしが、やがて歸り來れるを見れば白き砂糖を其皿に山と盛りて手にしたり。くず湯に入るべき白き砂糖の無かりければ老の足のたど／＼しくも母屋がり行きもどりせしとは問はでも知らるゝに、こゝらのさびしさ、人の優しさまのあたり見ゆ。たゞし今の世の風に吹かれたる若き人はかうもあらぬなるべし。かくてくず湯も成りければ啜る／＼さま／＼の物語する序に、氷雨塚といふものゝこのあたりにあるべき筈なるが知らすやと問へば、そのいはれはよくも知らねど塚は我が家のすぐ横にあり、それその竹の一簇しげれるが、尋ね玉ふものなりと指さし示す。氷雨塚とは太古のいまだ開けざる頃の人の住家、若くは墓穴のたぐひを、むかし氷の雨

算盤を懐にしたる人々のそこ〳〵に行きかひ、絲繭の賣買に聲かしましく罵り叫く。文化文政の頃に成りたる風土記稿にしるせる如く今も昔の定めを更へて二七の日をば用ゐるなるべし。晝餉を終へたれど暑さ烈しければ二時過ぐる頃やうやく立出づ。四方の山々いよ〳〵近づくを見るのみ、取出でゝいふべき眺望あるところにも出會はねば、聊か心も倦みて脚歩もたゆみ勝ちに辿り行くに、路の右手に大なる鳥居立ちて一條の路ほがらかに開けたるあり。里の嫗に如何なる神ぞと問へば寶登神社といふ。さては熊谷の石原にしるしの碑の立てりしも此御神の爲めなるべし、ことさらに參る人も多しと覺ゆるに、少しの路のまはりを厭ひて見過ごさんも流石なりと、大路を横に折れて、蟬の聲々かしましき中を、山の方へと進み入るに、少時して石の階數十級の上に宮居見えさせ玉ふ。色がらすを嵌めたるぶりつきの燈籠のいと大きくもの〳〵しげなるが門にかけられたるなど見る眼いたく、あらずもがなとおもはる。境内廣く、社務所などもいかめしくは見えたれど、宮居を初めよろづのかゝり、まだ古びねばにや、神々しきところなく、松杉の梢を洩りて、いさゝか吹く風のみをぞなつかしきものにはおぼえける。こゝの御社の御前の狛犬は全く狼の相をなせり。さてこれより金崎八幡の鳩、春日の鹿などの如く、狼をこゝの御社の御使なりとすればなるべし。さてこれより金崎へ至らんとするに來し路を元のところまで返りて行かんもをかしからねばとて、おほよその考へのみを心頼みに、人にさへ逢へば問ひたゞして、おぼつかなくも山添ひの小徑の草深き中を步むに、

とて立ち出づ。末野を過ぐる頃より平地やうやく窄り、左右の山々近く道に逼らんとす。やがて矢那瀬といふに至れば、はや秩父の郡なり。川中にいと大なる岩の色赤く見ゆるがあり。中凹みていさゝか水を湛ふ。土地の人これを重忠の鬢水と名づけて旱つゞきたる時こを汲み乾せば必ず雨ふるよしに云ひ傳ふ。また二つ岩とて大なる岩の川中に横はれるあり。宇瀧の上といふところにかゝれる折しも眞晝近き日の光り烈しく、熱さ堪へがたければ清水を尋ねて辛くも道の右の巖陰に石井を得たり。さし當りては鬢水よりもこれこそ嬉しけれと汲みて喉を潤ほしつ、此井に名ありやと問へば無しといふ。名の無くてすみぬるも心にくし、たゞやすらかに巖陰の清水と名づけばやなど戯れて過ぎ、やがて本野上に着く。おのづからなる石の文理の尉姥鶴龜なんどのやうに見ゆるよしにて名高き高砂石といへるは、荒川のこゝの村に添ひて流るゝあたりの岸にありと聞きたれば、晝餉食べにとて立寄りたる家の老媼をとらへて問ひ質すに、此村今は赤痢にかゝるもの多ければ、年若く壯なるものどもは、そのために走り廻りて暇なく、且はまた高砂石見せ參らする導せんとて川中に下り立ち水に浸りなどせんは病を惹くおそれあれば何人か敢て案内しまゐらせん、まして其路に當りて假の病院の建てられつれば、誰人も傍を過ぎらんをだに忌はしと思ふべし、道しるべせん男得たまふべきたよりは無しとおぼせといふ。要なき時疫の恨めしけれど是非なく、猶かにかくと其石のさまなど問ふに、強て見るべきほどのものとも思はれねば已む。今日は市立つ日とて秤を腰に

左の方に水の光見えたり。問はずして荒川とは知るものから、昨日と今日とは見どころかはれば同じ流れながら如何なるさまをかなせると、路より少し左に下る小徑のあるにまかせて傳ひ行くに、たちまちにして小かなる家を得たり。家は數十丈の絶壁に最も危くも棧づくりに裝置ひて、旅客が欄に凭り深きに臨みて賞覽を縱にせんを待つものゝ如し。こは面白しと走り寄りて見下せば、川は開きたる扇の二つの親骨のやうに右より來りて折れて左に去り、我が立つところの眞下の川原は、扇の蟹眼釘にも譬へつべし。ところの名を問へば象が鼻といふ。まことに其名空しからで、流れの下にあたりて長々と川中へ突き出でたる巖のさま、彼の普賢菩薩の乗りものゝおもかげに似たるが、其上には美はしき赤松ばら〳〵と簇立ち生ひて、中に聖天尊の宮居神さびて見えさせ給へる、繪を見るごとくおもしろし。川は巖の此方に碧の淵をなし、しばらく澱みて遂に逝く。川を隔てゝ遙か彼方には石尊山白雲を帶びて聳え、眼の前には釜伏山の一トつゞき屏風なして立連なれり。折柄川向の磧には、さしかけ小屋して二三十人ばかりの男打集ひ、淺瀬の流れを柵して塞き、大きなる簗を造らんとてそれ〳〵に働けるが、多くは赤はだかにて走り廻れる、見る眼いとをかし。こゝに毘奈耶迦天を祀れるは、地の名に因みてしたるにやあらんなど思ひつゞくるにつけて、竹屋の渡しより待乳山あたりのありさま眼に浮び、同じ川のほとりなり、同じ神の祠なれど、此處と彼處とのおもむきの違へば違ふものよなど想ひくらべてそゞろに時を移せしが、寒月子の圖も成りたれば、いざ

居續ける東京ならねばこそと半は夢心地に旅のをかしさを味ふ。

七日。朝いと早く起きいでゝ、自ら戸を繰り外の方を見るに、天いと美はしく横雲のたなびける間に、猶昨夜の名殘の電光す。路は荒川に沿へど磧までは、あるは二三町、あるは四五町を障てたればば水の面を見ず。少しづゝの上り下りはあれど、ほと〳〵平なる路を西へ西へと辿り、田中の原、黑田の原とて小松の生ひたる廣き原を過ぎ、小前田といふに至る。路のほとりにやゝ大なる寺ありて、如何にやしけん鐘樓は無く、山門に鐘を懸けたれば二人相見ておぼえず笑ふ。九時すこし過ぐる頃寄居に入る。こゝは人家も少からず、町の彼方に秩父の山々近く見えて如何にも田舍びたれど、熊谷より大宮鄕に至る路の中にて第一の賑はしきところなりとぞ。さればにや氷賣る店など涼しげによろづを取りなして都めかしたるもあり。とある店に入り、氷に喉の渴を癒して、此氷いづくより來るぞと問へば、荒川にて作るなりといふ。隅田川の水としいへば黃ばみ濁りて淸からぬものと思ひ馴れたれど、水上にて水晶のやうなる氷をさへ出すかと今更の如くに、源の汚れたる川も少く、生れだちより惡人も鮮かるべきを思ふ。こゝの町よりたゞ荒川一條を隔てたる鉢形村といへるはむかしの鉢形の城のありたるところにて、城は天正の頃、北條氏政の弟安房守氏邦の守りたるところなれば、此あたりは其頃より繁昌じたりと見ゆ。寄居を出離れて行くこと少時にして、水の流るゝとおぼしき音の耳に入れば、さては道と川と相近づきたるかと疑ひつゝ行くに、果して

谷、深谷、本庄、新町以上合せて六路の中、熊谷よりする路こそ大方は荒川に沿ひたれば我等が住家のほとりを流るゝ川の水上と思ふにつけて興も多かるべけれと擇び定め來しが、今この岐路にしるべの碑のいと大きなるが立てられたるを見ては、あるが中にも正しき大路を取りたるかとおぼえて心嬉し。廣瀬、大麻生、明戸などいへる村々が稲田桑圃の間を過ぎて行くうち日はやゝ傾きて雨持つ雲のむづかしげに片曇りせる天のさま、そゞろに人をして暑さを厭ふ暇もなく心忙しく進ましむ。明戸を出はづるゝ頃、小さき松山の行く手にありて、それにかゝれる坂路の線の如くに翠の影の中に入れるさま、何のことは無けれど繕はぬ趣ありておもしろく見えければ、寒月子はこれを筆に寫す。おとう坂といふところとかや。菅沼といふにかゝる頃、暑さ堪へがたければ、鍛冶する片手わざに菓子などならべて賣れる家あるを見て立ち寄りて憩ふ。湯をと乞ふに、主人の妻、少時待ちたまへ、今沸かしてまゐらすべしとて眞黒なる鐵瓶に水を汲み入るれば、心長きことかなと呆れて打まもるに、そを火の上に懸るとひとしく、主人吹革もて烈しく炭火を煽り、忽地にして熱き茶をすゝめくれたる、時に取りてをかしくもまた嬉しくもおぼえぬ。田中といふ村にて日暮たれば、こゝに唯一軒の旅舎島田屋といふに宿る。間の宿とまでも云ひ難きところなれど、幸にして高からねど樓あり涼風を領すべく、美からねど酒あり微醉を買ふべきに、まして膳の上には荒川の鮎を得たれば小酌に疲勞をやすめて快く眠る。夜半の頃ほひ神鳴り雨過ぎて枕に通ふ風も涼しきに、家

四邊に棒を取り回し、枠の如くにしたるを白布もて總て包めるものありて、何とも悟り得ず。打見たるところ譬へば絲を絡ふ用にすなる籰子といふものゝいと大なるを竿に貫きて立てたるが如し。何ぞと問ふに四方幕といふものぞといふ。心得がたき名なり。石原といふところに至れば、左に折るゝ路ありて、そこに寶登山道としるせる碑に對ひあひて、秩父三峰道とのしるべの碑立てり。徑路は擱きて云はず、東京より秩父に入るの大路は、數條ありともいふべきが、一つは青梅線の鐵道によりて所澤に至り、それより飯能を過ぎ、白子より阪石に至るの路なり。これを我野通りと稱へて、高麗より秩父に入るの路とす。次には川越より小川にかゝり、安戸に至るの路なり。これを川越通りと稱へ、比企より秩父に入るの路とす。中仙道熊谷より荒川に沿ひ寄居を經て矢那瀬に至るの路を中仙道通りと呼び、此路と川越通りとを昔時は秩父へ入るの大路としたりと見ゆ。今は汽車の便ありて深谷より寄居に至る方、熊谷より寄居に至るよりもやゝ近ければ深谷まで汽車にて行き越し、そこより馬車の便りを借りて寄居に至り、中仙道通りの路に合する路を、人の取ることも少からずと聞く。同じ汽車にて本庄まで行き、それより兒玉町を經て秩父に入る一路は、兒玉郡よりするものにて、東京より行かんには甚だしく迂なるが如くなれども、馬車の接續など便よければ此路を取る人も少からず。上州の新町にて汽車を下り、藤岡より鬼石にかゝり、渡良瀬川を渡りて秩父に入るの一路もまた徑路にあらざれど、東京よりせんには餘りに迂遠かるべし。我野、川越、熊

知々夫記行

八月六日　知々夫の郡へと心さして立出づ。年月隅田川のほとりに住めるものから、いつぞは此川の出づるところをも究め、武藏禰乃乎美禰と古の人の詠みけんあたりの山々をも見んなど思ひしことの數次なりしが、或時は須田の堤の上、或時は綾瀬の橋の央より雲はるかに遠く眺めやりし彼の秩父嶺の翠色深きが中に、明日明後日は、此身の行き徘徊りて、此心の欲しきまゝ林谷に嘯き傲るべしと思へば、樂しさに足もおのづから輕く擧るごとく覺ゆ。牛頭山前よりは共にと契りたる寒月子と打連れ立ちて竹屋の渡りより淺草にかゝる。午後二時といふに上野を出でゝ高崎におもむく汽車に便りて熊谷まで行かんとするなれば、夏の日の眞盛りの頃を歩むことゝて、市中の塵埃の匂ひ、馬車の騷ぎあへるなど、見る眼あつげならざるは無し。とある家にて百萬遍の念佛會を催し、爺嫗打交りて大なる珠數を繰りながら名號稱へたる、特に聲さへ沸ゆるかと聞えたり。上野に着きて少時待つほどに二時となりて汽車は走り出でぬ。暑し〳〵と人も云ひ我も喞つ。鴻巢上尾あたりは、暑氣に倦めるあまりの夢心地に過ぎて、熊谷といふ驛夫の聲に驚き下りぬ。こゝは荒川近き賑はへる町なり。明日は午頭天王の祭りとて、大通りには山車小屋をしつらひ、御神輿の御假舍をもしつらひたり。同じく祭りのための設けとは知られながら、いと長き竿を鉾立に立てゝ其を心にして

ぞ聞く。まことに世の犯罪の中にて、土地の人の土地にて爲せるは幾許もあらぬものなれば、然ることもあるべきにや。田舍人の東京にてしたゝかなる眼にあふ如きは多く此心得無きためなり。

一。旅にて見なれぬものを多く食ふことなかれ。生れて初めてかゝるものを食ふぞとて、したゝかに食ふが如きは、いと烏滸なることなり。

一。妻子兄弟父母などゝ旅したらんは、旅の中にても勝れて樂しき旅なるべし。たゞし少しの路なりとも徒歩にて行かんなどゝ思ふ時は、一行の中の最も弱き人の脚の左のみ自ら勤めて歩み得べきほどを尺度にして、歩むべき道程の心算をすべし。此の注意足らざる時は大に愉快を少うすることの湧くものなり。ゆめ〳〵我を以て人を律するなかれ。

以上は皆我が自ら愚なる實驗を積みて聊か知り得たることとなり。旅の心得めくもの書きてよとの囑に烏滸がましとは知りながら、かくはしるしぬ。

一。同行のもの三人以上なる時は、よく〳〵金錢出納の事など豫め約束して定め置くを可とす。二日三日と日數重なりては人々我が好み〳〵になさんとて人のおもはくを省みるに及ばざるやうになるものなれば、口にまでは出さずとも心の中には互に誹りも罵りもするものなり。奢侈を悦ぶ人あり、悦ばぬ人あり。酒を喫む人あり、喫まぬ人あり。戯言いひて婢など嬲るを興ありとおもふ人あり、苦々しとおもふ人あり。これらの人々共に旅するに當りては、年若きものほど多くは人を憚らず、世慣れたるものほど常に自ら克ちて、兎に角に右に立ち左に立ちて同じ山水にさまよふなれど、一日二日の中こそよけれ四日五日となりては心易くおもふことの増すにつけ飽かずおもふことも増し來て、酒喫まぬ人は酒喫む人を忌み、戯言いふ人は戯言いはぬ人を嘲るやうにもなるものなれば、よろづの事に離れぬ關係ある金錢出納の上などには最初よりおろそかならぬ注意を下し置くを宜しとす。

一。旅日記は必ず其日〳〵に記すべし。一日怠りては次の日いよ〳〵怠り勝のものなり。甚だしく疲れて筆持つをだに堪へ難くおもはゞ、他日記臆を喚び出すに足るべきかど〳〵をなりとも記し置くべし。

一。旅にては旅の人を恐れよ。其土地の人は自己だに良からぬ心持たずば左のみ恐るべくもあらず、たゞ旅の人に心せよ、悪き人といふべきほどの人ならぬも、旅にては良からぬことをするものゝ

一。旅にては酒を過ごすとも大抵二日醉などはせぬものなり。されど多く用ゐんは愚なるべし。特に午の休甜に酒を多く飮まんは、おもしろからぬ事を生ずる源たるべし。心すべきなり。

一。十分の力を用ゐて路を貪り行かんは風雅も薄く心も忙しく無下に拙き旅の仕方なり。旅にては、常に七分の氣力を用ゐて三分の氣力を剩し置くべし。十里行くべきを七里行きて宿り、五里歩むべきを四里歩みて休むほどにすれば、心もゆたかに身も苦まぬまゝ見ることも聞くことも自然詳しく密やかになり、旅行の興も多く益も多く、また萬一の事起るとも氣力乏しからねば能く之に應ずるを得べし。然るに我が氣力の有らん限りを費さんには、事に當るに餘地といふもの無ければ、おのづから萬般の事を懶くのみおぼえて見るも聞くもおろそかにするに至るべく、また萬一の事など起らんには精神まづ萎靡して身もまた變に應ずるに堪へざるべし。朝に多く語る人は夕に勢ひ弱るものなりと旅に慣れたる人は言ふ。味ある言なり。

一。木賃などに宿らんもまた興あるべく、間の宿の淋しく衰へたる宿なんどに一夜寢んもまた興あるべけれどおほかたは好き驛の名ある家に宿假るを可とす。榮ゆる家は、おほかた婢僕なども心利きて、膳部のものも鮮らけく、よろづにつけて好き事多し。あやしきところに宿りて萬一の事などあらんには、人必ず我を愚なりとて責めん。奇を好む心にのみ身を委せんは、なか〳〵愚なる事なり。

使はんことを特に旅にありては心掛くべきなり。

一。旅に在りては、みだりに他人の事に關はること勿れ。思ひのほかなることの出來て身を退かんにも退きがたく、心にもあらず時日金錢を費し心を苦めては巳みがたきことに遇はんも知るべからず。すべて我が豫想せざりし事に深く立入らんは、面白きことに遇ふ源ともなるべけれど、好ましからぬことに遇ふ源となるかた多しと知るべし。

一。脚を傷めては旅の興を失ふこと極めて大なり。肉刺といふものは、皮の擦れて熱するより生ずるとおぼし。心して生ぜざる前に防ぐべし。人によりては、これの生じやすき皮膚を有てるものありと見ゆ。既に生じたらんには、睡るに先だちて、飯糊に煙草の灰寶丹などを練り交ぜ、厚く紙につけて貼るべし。靴ずれは、木綿の靴襪を用ゐるか、毛絲のにても汚れ垢づきたるを用ゐるより生ずるものなり。これも豫め防ぐべし。石鹸を解きたるを靴襪にも足にもしたゝかに塗れば、まさに靴ずれの生ぜんとするをも防ぐ功あり。既に生じたるには、また例の肉刺を治する法を用ふべし。肉刺靴ずれなど足にありては歩むことを厭ふのみに心取られて、彼の名高き付句にいへる如く、三里と聞いて行かぬ松島といふやうなることにもなるものなり。

一。奇を好むに過ぎて、あらぬ路などに踏み入らむこと然るべからず。我のみならむには猶可なり、ゆめ他人と共によしなき山中などにさまよふべからず。

八里と算らんには大なる過無なるべく、戰時の定めの里程に則りて六里と算らんには安全なるべし。また次には、携ふべきものゝ品々を遺漏なく考へ定めて準備ふべし。こは行かんとする地方の狀態により、また我が取るべき身の躰裁とにより、取捨に大なる差異あるべけれど、まづ、手拭ひ、小風呂敷、半紙、筆、墨、小硯、小刀、齒磨粉、楊枝、時計、地圖、外用藥、興奮性の内用藥の例へば寶丹の如きものなどは携へては叶はざるものなり。穿きかへの靴襪、若くは足袋、襦袢、若くはしやつなども少し長き旅には携ふるを可とす。雨具は紳士風の旅をせんには餘り用無けれど、學生風の旅せんには油紙など其準備として携ふるをよしとす。婦人など同行して、おのれ一行を保護すべき任を帶びたる時、短銃の類を携へ居らざらんには、萬一不幸の起りたる時、心くばり足らざる人との誹を避くるに路なかるべし。

一。旅に在りては、みだりに錢を使ひて人に誇るやうなることとすべからず。末には愚なることの湧き出づるものなり。また餘りに物惜みすべからず。少しの金をもて大なる便を得、または良きものを得んとするは、甚だ愚なることなり、悔無くては已むべからず。渡舟賃を拂ひて剩錢を其まゝになしつ顧みざるが如き振舞するは、惡き車夫などの眼をそばだゝすことゝ知るべく、また大槪の定めを越えて値低く馬車など傭はんとするが如きは、脚に病有る馬に乘りて岨路に墜とされ、車の前蔽ひ無くして泥を浴びせらるゝなどの事に遇ひ勝ちなる基なりと知るべし。金錢を正しく

は悲しからずや。無學にして旅するは、たとへば夜行くが如く、すべての美しきものをも認めずして過ぎん。

一。學問は急に如何とも爲しがたし。されど注意といふことは、我が心の置きかたにて、深くも淺くもなるべければ、旅にありては、如何なる物にも事にも勤めて深く注意すべし。注意は知識を生ずるやがてに其人を趣味豊なる人となして、すべての事物につけ興を多からしむるものなり。學淺くとも注意だに深くば、旅はなか〳〵興多くして、しかも其人旅したるがために少からぬ利をば得んこと疑あるべからず。

一。旅立たんとする前、地理の大概は必ず預め知らざるべからず。次に行く手の地方の氣候をよく〳〵問ひ糺して衣服など相當の準備すべし。開けたる御世なれば、如何なる山の奥にても困ずるやうのことは有るまじきなれど、地方氣候といふことに心づかで何の準備も無く立出でたらんは、聊か愚なるに近くして、しかも或は悔あるべし。次には、大概の道づもりをなすべし。何日我家を出でゝ何の路を取り、那里に至り、何日歸るべしとの心定めは、如何なる心まかせの旅にも、大概は無くて叶はぬことなり。道づもりは、我が一日に斯ばかりは歩み得べしと思ふ道程より二割ほどを減きて算るを可とす。我がおもふほどは歩めぬものなり。一日に十里を行き得べしと思ふは人の常ながら、遊覽の旅なるに日々十里づゝ歩まんは、聊か苦かるべし。日に行くことと

旅の心得

一〇旅して口惜きは、我が財を有つこと少きよりも我が學を積めることの未しきなり。歴史に詳く通じ居らんには、わづかに遺れる古の河の流れ、城の墟、或は破れたる寺、頽れたる塚なんどに臨みても、限りなき感を起し、人知らぬ興をおぼえて、身にしみ心に留まる事も多かるべきを、何事のわかりし處とも知らで、我が學の疎きまゝ趣味も無く、草鞋のみ數多く穿き破りて、そこそこに通り過ぎなんは、口惜きことの一つならずや。地理を熟く知らんには、路の通塞をも難易をも胸に曉るものから、日暮に猶宿るべきところを得で迷ひありくなどいふ愚しきめにも會はず、たゞわづかの迂路せざりしため惜き名勝を見遺すといふなる事も無く、よろづに付けて心たしかに便多かるべきを、地理に暗きため、あらぬ心づかひをなし、良からぬものに欺かるゝなど、口惜きことの限りなり。草木禽獸につきての智識乏しきも、すべての物を大様にのみ見て過ごすほどに、異なる鄉の珍らしき花禽を眼にしながらたゞ紅き花咲き居たり白き禽翔け居たりとばかりおぼえて、何一つ明らかに識るといふこと無く、後に人に問はるゝことなどあらん折、知らず知らずとのみ答へんは、これまた口惜からずや。農工の事につけても、畫彫刻の道につけても、すべて我が學淺ければ我が趣き乏しきまゝ我が興も薄く、千里の路を行きて疲勞のみおぼえたらん

るまで高きところなり。常陸坊海尊の仙となりしといふ仙翁岳も遠からず、山深くして世に離れたる境とも云はゞ云ふべし。

廿三日。關、渡瀨を過ぎて、名高き材木巖を見る。まことに斜に材木を積めるが如し。雨強く降り來りければ、大に困じたれど、互に勵まし合ひて、小原を過ぎ、夜の九時といふに白石に着きぬ。米澤より白石に至る此間をば、

山中七ヶ宿

といふとかや、捨て難き眺めあるところにして、例へば木曾路の小きものゝ如し。白石よりすれば、小原より渡瀨あたり面白かるべく、湯原を過ぎて軈て米澤の方を見下す眺望もをかしかるべし。

夜いと深く汽車に乗りて、廿四日午後家に歸り着きぬ。

の渡頭を渡り、本合海の宿に一夜の枕を定む。寂びたる間の宿にして、旅舍も清げならず、我等を請じ入れたる一室の中には、斑狗の皮を敷き滿てたるなど、款待ごゝろにはあるべけれど却つてあさましう見えぬ。

二十日。本合海を立ちて、舟形を過ぎ、猿羽根峠の眺望を賞して、尾花澤に至る。こゝより道路はいと坦夷に、車の走りわづらふところも無し。最上川は路より遙西の方に在るなるべし。楯岡天童を經て、山形の町に入るに、町は細く長くして思ひのほかに賑はし。酒田より此方は一向に歸りを急ぎて心周章たしう人力車を走らせつれば、興いと薄きに、土地もまた人の眼を惹くに足るもの無きところなれば、筆にすべきことだに無し。

廿一日。山形に名高き萬松寺を訪ふて阿古屋の松の物語りを聞く。中古の僧などの作りけん非情成佛の談、流石にをかしき節も無きにあらず。上の山の温泉に浴して晝餉し。中山赤湯を經て米澤に着く。こゝは同行の乙羽子が故郷なれば、顏見する乙羽子が悅び、顏見る其兄君姉君等が悅び、かたみに隔て無き親族の物語りに秋の一夜も短しと見えぬ。明くれば、

廿二日。乙羽子が兄君治兵衞氏と共に、三人して龜岡の文珠に詣づ。境內いと廣くして、堂の作りざまも古びたるに趣きあり。こゝにて治兵衞氏と別れ、二井宿を過ぎて湯の原村に宿る。米澤は山間の平らなるところなれど、高畠よりは漸く爪端上りとなりて、此處は夜風も身に浸みて寒う覺ゆ

け、吹浦より藤崎を經て酒田に入りぬ。三崎山の路は其往時いかばかり嶮しかりけん、其地勢によりて考ふるに、西は海東は鳥海山なれば、今猶一人の力をもて此の路を壞らんには、由利郡と飽海郡の往來を斷つをも得べし。されば私に思ふに、三崎山は御關山の訛にして、有耶無耶の關は必ず三崎山の中にありしならん。然るに然ばかりの道を心安く越ゆることを得るやうにせしは

南光院永順

といふ僧の力なりとかや、其德まことに仰ぐべきなり。吹浦は鳥海山大物忌神社あるところにして、恐ろしき山を負ひたるだけに何と無く物寂びたるところなり。吹浦より酒田に至る六里ばかりが間は、いづれも皆海風荒く砂舞ひて人の行き惱むところなりし

佐藤藤藏、服部外右衞門、曾根原六藏、本間宗善、堀善藏、

等の人〻の松を植え林を造りしがために今の如くなるに至れりといふ。

十九日。酒田を立ちて最上川を渡る。茫々たる蘆荻人をも車を埋めんとす。餘目、狩川を過ぎて淸川に晝餉したゝむ。こゝは川近きところにして、筵帆張れる川舟のいと大きなるが幾艘となく過ぐるを見る。兩岸は山逼りて流れは水深う川幅はいと濶し。上れば下る稻舟の歌も思ひ合はされて、舟楫の便りよきことと悅ぶべし。古口といふところより夜に入りて、ぬば玉の闇のおやなきに最上川

の入にも此事見えたれば、沙彌はたゞ戯談を傳ふるのみにして罪無けれども、其始め有らぬことを云ひ出したるものゝ、黠智惡むべし。すべて物の名などに理由ありげなるむづかしき稱を付け字を當つるは下りての世の人心にして、古昔の人はおほまかなれば、寺の名などにも、たゞ安らかに其土地の名を負はせて呼びたる例いと多し。されば此寺の初の名は蓋し蚶潟寺といひしなるべし、蚶滿寺と記せるは必ず潟の字を誤りたるならん。蚶滿の二字は語を爲さで、如何なる人も首を傾くべきなれば、終に蚶滿珠寺と改め、また干滿珠寺と改め、やがて皇后山などゝいふ山號をさへ添へ、御船出したるところを唐が崎などゝ付會するに至れるなるべし。又或は、蚶潟を古くは蚶方とも書きたることあれば、蚶方を誤つて蚶万と讀み、轉じて蚶滿となすに至りたるやも知るべからず。いづれにもせよ皇后山などゝ稱へたりしは、諱むことを知らずといふべきなり。さて蚶潟の跡も見たれば鹽越を見捨てゝ南へと濱傳ひに奈曾川の奈曾の白橋を渡り過ぎ、關といふ村にかゝる。こゝは有耶無耶の關のありしところと云ひ傳ふ。鳥海山いと大く見えて進み行くに從ひ我面を壓するが如し。三崎山といへるは鳥海山の根の西になだれて海に入る者にて、其端を大師崎といふ。此のあたりは、眞に一夫も万卒を障ふべきところにして、有耶無耶の關も若くは此邊にありしならんと思はる。或は曰ふ、有耶無耶の關は山形より仙臺へ越ゆる途中の笹谷峠これなりと。今そのいづれか眞なるを知らず。海中に千貫岩といふありていと面白きさまをなせり。峠を雨に越えて、湯の田に一杯を傾

鹽越

は潮越しの義なるべし、海近うして、濤の音おどろ〳〵しう響く里なり。わびしき土地なれど蚶潟は此處の續きなれば、宿取りて一夜を心細う送る。

十八日。朝いと夙う起き出でゝ

象潟

の跡を訪ふに、九十九杜八十八潟の往時は、夢となりし幻となりし、其俤だに今は無くて、水田漠々露瀼々、花の上漕ぐ釣舟の跡絶えて、茲に殆ど百年、稻の穗浪のよるばかりなり。これ皆昨日より眺望に入れる鳥海山の爲せし業にて、奥の松島にも勝りしといふ象潟の勝景は、嘉祥に成りて文化に亡びしと云ふ。桑田碧海の譬喩、今さら驚かんは愚なる事ながら、流石眼のあたりに之を見ては、又もや今我が立てるあたりの渦巻く淵と成らんも知れずと、そゞろに頷元寒き思ひす。蚶滿寺といふを訪へば、小き沙彌出で來りて、これは西行櫻なり、これは時賴躑躅花なりなんどゝ片腹痛きことを云ふのみならず、神功皇后此地より船出し玉ひしを以て山號を皇后山といひ、纜を解き玉ひたるところを唐が崎といふ抔と語り出づ。進藤和泉といへる者の著せる出羽國風土略記卷

秋田

に入りぬ。小林といへる宿清らにして好し。

十七日。象潟の跡を見んとて秋田を立出づ。御物川は幅廣くして出水の時などは嘸かしと思はるゝ大河なり。路は、日本海を右にして南へとのみ走り、これといふ面白きところも無けれど、顧みれば雄鹿の島山のいと鮮かに海に浮める、名殘を惜むかと思はれて、辛かりしも今は中々に懐かしき心地す。松が崎といふところにて濱籬結ひめぐらしたる家を見しかば、かゝる籬を此地にては何籬といふやらん、と問ふに、何籬とも申さず、たゞ風はぢきといふなり、と答ふ。率土が濱にて呼ぶ名の優しきには似て、口惜き物の云ひやうかなと笑つて過ぎ、やがて石脇といふところに到る。此村の人

石川善兵衛

といふ人、弟直吉と共に松を値ゆること九百萬株、天明八年より弘化三年に至りて、遂に一大防風林を成し、餘恩は今に遺れりといふ。古雪川を渡り、本莊に晝餉して、平澤三守を過ぎ白雪川を越えて金浦に至り、夜を籠めて辛くも鹽越に着きぬ。

村長某の許に夕飯し、其處にて新に郷導する男を傭ひ得、ひたすら路を急ぎに急ぎて、暗に歩むこと一里ばかり、月に歩むこと四時間ばかり、夜は子の刻ともおぼしき頃、金川といふところの諸井といふに着きて、辛くも日本の中に入りたる思ひをなしたり。雄鹿の島にある事、此夜を籠めて唯二夜なれど、七日がほども過ごしたる心地して、我が頭にも霜や置たらんと迷ふまで疲れければ、一瓶の麥酒にも痛く醉ひしれて、現心も無く床に入りぬ。

十六日。金川を出でゝ比詰脇本を過ぎ舟越村に着き、小憩みす。今日の路は皆平らにして、しかも細徑にあらず。舟越は左に八郎潟を控へて、天王村と橋一つを隔つるところなり。潟は浪靜かにして水遠く、蜑の小舟の往來も安げに秋田の山々の影を蘸せる塵無き空の青う澄める、見る眼涼しく胸透く心地す。こゝより人力車に乘りて、松原續き沙清き路を馳せさせ、四時頃

土崎

に着きて一丁といふに晝餉す。かゝる都遠き土地に身を安んじたるほどなれば、もとより主人に伊尹の腕はあるべくも無けれど、しかもまた易牙の技には最長けたりと覺しく、汁も鱠も花あり香あれば、雄鹿の島風に痩せたる二人は、牢獄より出でしものゝ里の祭禮に會ひしも如是やとばかり飲みつ食ひつ、暮近くなりて纔に立出で、車を飛ばして

かれ。某の詩に、斷崖聳え立つて滑らかにして磨けるが如し、一線の微蹊薜蘿を攀づ、と云へるも誇張に過ぎたる言ならで、まことに恐ろしき路なればなり。雄鹿の

絶　景

は、即ち此の戶賀より加茂を經て門前に至る間にあるにて、手が崎、かぎかけ坂、すむかの濱、棧橋巖、蓮花島、立島、孔雀島、ぶだい崎、龍像岩など、いづれも皆奇ならざる無く妙ならざる無し。憾むらくは棧橋巖など高きところより遠く望むをもて其趣きを究むるを得ざりしが、すむかの濱に下り立ちて岩蓮花などいふ草に座しつゝ、小山の如き大岩の聳え立てるを前に見、大地も今や崩るゝかと思ふばかりの物おそろしき濤の轟きを耳にしたる風情、一生忘るゝこと無かるべし。すべて此間三里ばかりがほどの奇景は再遊を得るの日、詳く覽て後記すべし。舟より見てこそ興もあれと思ふところを、陸より見て記さんは、人を誤る虞も無きにあらねば、こゝにはわざと省きて記さず。

門　前

に着きたるは日も暮れがたなり。宿からんにも旅人を待つ家の無ければ、双六といふところに至り、

ぬ』のも往古は是の如くなりしやらん、詳くは我が知らぬことなれど、今の『あいぬ』の獨木舟は船匠の『しき』と稱ふる船底の板のみ獨木にて、船の横腹は幾枚かの板どもを綴ぢつけ矧ぎつけて造るなり。されば釘をこそ用ゐざれ、實は獨木舟といふ名には相應しからぬまで進みたる際のものなり。然るに此處のは、全く一つの大なる杉の木を刳りて造り成したるものにて、其長さは四尋五尋もあるべく、其幅は三尺もあるべきなれば、『あいぬ』の舟よりも猶人の智慧といふものゝ加はり居らぬ眞實の獨木舟なりといふべきなり。もとより此雄鹿の島は往古『あいぬ』のいと多く住みて榮え蔓りたるところと覺しければ、獨木舟の制の今に遺れるも怪しむべくはあらぬことなれど、島とは云ひながら我が東京とも地續きなるところにて今猶かゝる刳舟を用ゐ居らんとは、流石に思ひも懸けざりしかば、乙羽子もろとも驚き呆れつ、あはれ提げても歸り得べきものならば隅田川面に泛めても見まほしと語り合ひぬ。此舟の價は昔より米三石と定まれるよし、いづれも皆此島山の杉をもて造るなるが、かゝる舟なれば其壽命もまた甚だ長く、二百年以上のものにて今猶用ゐ居るも少からずといふ。心を留めて熟く見るに、『ちぎり』を嵌めて割るゝを防ぎ、埋め木して朽ちたる痕を補へるも見ゆれば、實にも折々如是なし行かんには幾百年をも保ち得べからんと、點頭かれぬ。さて門前の方へと次第〳〵に進み行くに、道は果して嶮しくなりぬ。この戸賀より加茂を經て門前に至る途は、必ず日和好き日を待ち得て例の獨木舟にて見巡るを可とす、夢にも强ひて陸地を行くな

のを此處に追ひつめて打取り玉ひたり、と土地のものゝ云ひ傳へたるもをかしく、まことに追ひ詰められたらんには逃れ難きところなり。これより門前に至らんとするに、折惡く海荒れて濤高ければ、誰一人船を出さんといふもの無く、馬を僦はんとすれば、馬なんどは通ふべくもあらぬ路なりといふ。多しといふほどの荷にはあらねど、むづかしき路を行かんには攜へ得べくもあらぬ重さのものをさへ持ちたれば、荷を負ふべき男を僦はんとするに、男等出て來りて荷を檢めしが、三人ならでは斯程の重き荷は負ひ難し、路極めて險しく危ければ、といふ。天に棧するほどの路にせよ、餘りなる云ひかたかなとは乙羽子も我も思ひたれど、未だ踐みも見ぬ路のほども測り難く、且は嚮導無くては如何にとも爲ること叶はぬまゝ、是非無く三人の男を僦ひ、やゝ淸げなる漁家を見立てゝ乞ひて晝飯を濟ませぬ。大瀧丸さへ生命を失ひたる究鄕なれば、大根の味噌漬に米の飯を得たるは、まだ〳〵嬉しき仕合せなり、と打笑ひつ、いざとて立出づるに、此の邊の濱の眞砂地に引き上げある舟どもを不圖見れば、舟といふ舟は皆

獨木舟

なり。獨木舟は古の所謂蝦夷が島人も之を用ゐれば、然のみ珍しとすべくもあらねど、此地のは「あいぬ」の用ゐるものとも聊か其造りざまを異にすれば、そゞろに眼も留まり心も惹かる。「あい

吸ひし聖には掛けても及ばぬ男どもなれば、是非無く茶漬飯を食ひて淋しき夢に入りぬ。膳の上のさま云ふまでも無し。

十五日。雨止みて風もまた弱りぬ。戸賀といふところに至らんとて馬を求むるに、僅に一頭を得たるのみなれば、是非無くも之に荷を負はせて立ち出づ。樹立は乏しくて草のみ生ひたる山に差しかゝり、加茂は彼方ならんとばかり、大概の心當を憑みに馬を進む。此島の人の物に拘らぬこと驚くべきなり。されば我等の郷導と賴める馬士の如きも、山の峯に上りては四方を見渡して、こは過ちたり、如是來るべきにはあらざりしと云ふこと一度二度のみならず、人影さへ無き山中に、あらぬ道を迷ひ行かしむること少からねば、地圖の上にて推測れば一時間半か二時間ほどにて到り得べき道程を、四時間餘り只歩みに歩みて、正午近き頃辛くも戸賀に着きたり。途すがらの眺めに、これといふところも無く、たゞ峯に立ちて昨日來し方を一目に見得たると、戸賀の灣を俯きて望み見たるとのほかには、二の目潟といへる小き沼を見たるのみ。

戸賀

は戸賀灣を控へたる小村にして、いと寂びたる土地なり。沖の方に打向ひての左手の磯山なんど、巖峻しく聳えて、自から此處を浮世の外に劃るものゝ如し。むかし坂上田村麿、大瀧丸といへるも

思はしむるまでなり。請じ入れられたる室は疊二十ひら餘りも敷くべけれど、たゞ濶きのみにて快しとはいふべくもあらねば、折からの雨風の音の聞こゆるにつけ、燈火の力の弱くて隅々の明るからぬにつけ、壁障子などの近からねばおのづから薄寒きにつけ、曠野のたゞ中に座りたらんやうの心地して、我が咳嗽の響に我から驚き、我が頭の影の思ひのほか大なるを怪むなんど嬉しからぬ心地のみす。あはれ小さくとも淸らにして明るく温暖ならん室もがなと我も他も喞言がましく幾度か喞てど甲斐無し。今日はいと苦しかりしが、温泉のあるといふこそ幸福なれ、いざや浴みして、疲れをも休め、濕氣をも掃はんと、婢を促し立てゝ浴場に入るに、浴殿はいと廣く湯槽はいと大くして、燈火はいと暗ければ、何と無く物凄じくて快からず。且つ湯槽をば板もて悉く塞ぎありて、之を取り除かんとすれば、人無きが故にや一トしほ音なんどの響きあひて耳に障るも忌々し。やがて蓋ひの板を悉く取り棄てゝ躍り入れば、湯はいと低温くして、水の如く、出でんとすれば、肌栗立つ。雨風の聲、瞬く燈火、泳ぐべき湯槽、水に近き湯、此夜此情、あはれとや云はん、かなしとや云はん、此上はたゞ酒に憑らでは如何で濕氣を拂ひ得んと、急に浴を終へて酒を呼びたり。正宗、澤の鶴とも云はゞこそ、如何なる鬼殺しなりとも飲んで呉れんと、片唾を嚥みて待ちかけたるに、婢揉手して、近頃火を失したるがため酒の酸になりたるはあれど、酒は其後未だ調へ得ずといふ。あまりの事に、酸き酒にてもと乙羽子の云ひ出でたるは身に染みてあはれなりしが、流石に、酢を

少しも心得ぬ身なれば、今度は、此馬少しは脚を疾みてもあらましなど思ふも可笑し。かゝるほどに忽ち乙羽子にも追ひ及びて、相川を過ぎ、暮るゝ頃北の浦に着きぬ。北の浦は、清げなる家などもありて、海近く山近き好きところなり。家づくりなんども此邊より聊か他處とは狀異るやう見え、丸太をもて組みたる

千木

やうのものゝ屋の上に置かれたるが、幾度か眼に入りたり。今は神社の屋の上に飾りとしてのみ置かるゝ千木の、實の用は風を防ぎて屋を按ふるにあるなるべし。北の浦よりは海邊を離れて、いと暗き路をたどり〳〵湯本の暢神館といへるに着きしが、夜ははや九時に近かりければ館のものなども怪み訝りて、少時は二人を猶降る雨の中に立たせながら其狀貌を右視左視て後わづかに此方へと云ひ出でしほどなりけり。

湯本

は溫泉の湧くをもて夏は賑ふところなれど、秋風早く吹きて草早く枯るゝ寂びたる島のことなれば、今は既客もほと〳〵無く、我等が宿りし暢神館の如きも、大なる家のいとゞ淋しく、そゞろに物を

時かゝる馬に乗り合はせたる心元無さを思ふにつけ、脚を病める馬をば知らぬ顔して人に與へたる男の腹黒さ、いと腹立たしくして堪へ難ければ、汝は健やかなる馬を貸すべき代取りて、脚惡き馬を貸したるよな、贋銀使ひめ、銀貨の重量の常例より輕きを汝に與へんには、汝は我をば暗きところに送るべし、普通ならぬ馬を貸したる汝が所爲、贋銀使ひと幾許か異へる、馬若し中途にして騎るに堪へざるに至らば、汝が背に鞍を負はせては、免すまじきぞ、と目を瞋らせて酷く罵れば、馬士もまた眼を白うして我が面を見詰めしが、爭ふべき詞は無きに物も云はで歩む。雹は止みて雨のみとなりたれど、日は漸く暮れんとするに、寒さはます／＼添はり行けば、跛馬の鞍の上の興無さ云ふばかり無し。兎角する中彼方より馬に乘りたる旅客の一ト群通りかゝれば、我が馬の口取り彼方の馬の口取りと、何事か囁き合ひしが、やがて、馬を換へまゐらすべし、といふ。さては馬士どもの各自吾が家へ歸らんと思ふより、其客を易ゆるなるべし、さらずば吾か甚しく怒りたるため湯本に着きて後如何なる事を云ひ出さるゝやらんと怖れて如是云ふなるべし、と思ひつゝ、鞍より下りて、此馬には心して乘り玉へと、彼方の男に告げ知らせ、馬も馬士も更へ得たるが心嬉しくて、代りの馬に直に跨る。馬は健やかなり、男も心利きたれば、急げ、急げ、湯本に着かば物取らせん、と云ひて馬をしたゝかに打つに、此度の馬は癇強なればにや、一鞭當つると齊しく、ひた走りに走りて止まらず、男は遙に後に殘りたり。馬は歸路に心の勇みもありてや飛びに飛んで走る。馬術は

る御代なるになんど思ひつゝ只管馬を走らすに、風はいよ〳〵狂ひ、海はいよ〳〵荒れて、馬すら堪へがたく見ゆるまで浪高く打寄するに至れば、心も漸く心ならず、我には父母も上に坐すなり、疾くこそ此の磯路を行きぬけめ、と念ずる中、天のさま忽ち怪しくなりて、領吹く風も異様に冷じく覺ゆると共に、見さくる海の面黒みわたりて、さつと一としきり雨交りに雹の降り來れる其勢ひ面を向くべくもあらず。馬は訴ふるが如く悲しく嘶き、風は嘲むが如く雲に號び、おどろ〳〵しき濤の聲は、琵琶の撥音急にして四絃一時に斷えまくする雹雨の物を打つ音と共に、激しく魂魄を驚かす。しばしは鞍の上に身を縮めて、手綱取る手も袖の中に藏しつゝ、馬諸共立縮みに立ちたりしが、やがて雄心振り起して屹と前途を見渡せば、波の彼方の遙に遠き汀を歩ます乙羽子が姿は朦朧模糊として夢より淡くも、豆かとばかり最と小く、雨降る中に蹣々と動けり。あら心細の眺めかな、助け助けられては同伴の甲斐も無からんを、いかで斯ばかりは後れけん、いざ追ひつかんに汝も務めて走れかしと、馬の口取りを罵り勵ましつ、雹雨の息つく小止みの間を見て、したゝかに鞭打つて馬を走らすに馬の躓くこと幾度といふ數を知らずほと〳〵落ちんとしては膽を冷すとも度重なれば、馬に騎る道には暗けれど、心づきて、此馬は脚を何とか爲つる、傷など負ひ居らずや、と詰り問ふに、仰の如く後脚を少し傷め居るなり、されば願はくは烈しく鞭打ちて急がし立て玉はざれ、走らせんと仕玉はゞ、躓くことのみ多かるべし。といふ。これを聞きて、かゝる土地にかゝる

本山の山々南を塞ぎて聳え連なれるのみならず、北に荒海を受けて風濤の正面に立てる一帶の土地のことなれば、村數も至つて少く、人氣もまことに稀なるところなり。路は大方斷えつ又續きつする高き或は低き砂の丘を左にして、右手には漫々たる蒼海を望む浪打際に線の如く通れるなり。折から天さへ鼠色に曇りて吹き下す風も何と無く悲しげなるに、今宵宿らんと思ふ湯本までは、路の程猶遠しと思ふものから、しきりに馬を急がせて行く。乙羽子の方は、馬も健かに、口牽く男も強ければ、走ること遲からねど、予が方は馬も老いたるにや疲れ勝に見えて、口取りも物ぐさき性なるにや澁る〳〵歩めば、後るゝこと或は一丁、或は二丁に至り、數次罵り勵まして、やうやく前なる人に追ひつくかとすれば、間も無く頓て又遙に遠く隔たるに、心煎られすること限無し。道は進むに從ひて漸く惡く、左の方の砂山の斷崖なして海に逼り臨めるものから、浪打際のいと狹くて、雪を捲く大濤の雷の如く轟き渡りて、白銀の山の崩るゝが如く碎けかゝる時は、見る〳〵一面の水となりて、馬も我も諸共に流れ失すべき心地する迄路を呑み陸を嚙む其恐ろしさ云ふばかり無し。馬は賢き獸なれば、かゝるところにも能く慣れて、物驚きする性のものなるにも似ず、誰が教ふるとも無けれど、大濤の碎くる響にも、腹を浸す水の進退にも、周章迷ふこと無くして、浪の來るや否や脚踏み固めしまゝ確と佇みて身動きだにせず、水の去るを見て動き出すなり。むかしの親知らず子知らずと云ひしも、かゝる景色なりけん、今は越後の海邊にも孝子の泣くべきところは無くな

砂丘の彼方に見ゆ。大口に着きたるにやと問へば、大口は既疾く過ぎて神谷に着きたるなりといふ。さては馬牽く男の一向に近きを貪りて眞の路を取らず、大口にも立寄らで海沿ひを馳せさせしなるべし、と悟りて、來し路の路としも覺え難きさまなりし所以をも解き得たり。馬も此地にて換ふる筈なり、晝餉も此地にて爲さでは叶はぬなれば、馬牽きの、此方へ入らせ玉へと云ふまゝ、馬を下りて只有る家に入る。家は土間のみ徒に濶くして、すべての物皆怪しげに黒光りせる眞の賤が伏屋なり。大なる爐に履のまゝ足を踏み込みて、何にもあれ食ふもの疾く持て來と促し立つるに、飯は冷飯なり、汁も膾も魚無く菜無ければ力及ばずと主人の妻の侘しげに訴ふ。あらもどかしや、今日は湯本まで行き着かでは叶はぬなれば、時をば空には過し難し、よし〳〵冷飯持て來、鍋持て來、鷄卵あらば其を有るほど持て來、と罵り促して、取る手遲しと鍋を爐の上の自在鍵に打掛けて、自ら鷄卵雜炊をつくる。宿のものどもは眼を張りて我等が爲ることの手早きを驚き視るもをかし。兎角して腹を膨らしける間に、馬も鞍裝ひして此家の男等に牽かれ出づれば、いざとて再び馬に打乘る。神谷より島の西北の盡頭なる入道崎まで弓なして曲れる海沿ひを

北浦

とも北磯とも云ふ。名をのみ聞くだに頸筋冷ゆる心地すなる寒風山を首として、それに續ける眞山

といふものあり。秋田の木山方吟味役なりしが、これを憂ふるの餘りに、海濱一帶數百町歩へ松を栽ゑて土砂の飛散を防ぎ止めんことを思ひ立ち、十一年の長き間、松苗を栽うることを怠らず、終に林を成すに至りしかば、流石の强き風も然までは暴れ立つことを得ずして、能代の町の民家も砂に埋めらるゝこと無く、道行く人馬も心安く過ぐるを得るに至りしものから、從つて土地の榮えを增すに及びたりと云ひ傳ふ。事は遠からぬ文政年間のことに係り、林は眼の前なる此の林なりと思へば砂の白きを踏むにつけ、梢の翠なるを看るにつけて、そゞろに其人を懷かしみ、其功を高しとするの情に堪へず。落葉搔く賤の兒等が鄙びたる節をかしう長閑に唱ふ聲を聞きつゝ、鞍の上に獨り人の力の大なることを思ふ。此人猶此他に、不毛の地を拓きて杉林となし、また秋田六郡の山林に關する書七拾餘卷百餘圖を編製したりといふ。其志の篤くして意の誠なる、企て及び易からずといふべし。やがて松原を出でゝ海に沿ふて進む。見渡す限り眞砂地遠く打續きて、磯打つ浪の雪と碎け花と散るほかには、眼に入るものもあらばこそ、家無く、人無く、樹も草も無く、海人の小舟の沖行くも無く、路さへ有るか無きかなり。蓋し雄鹿は大海の中に突き出でたるのみならず、背後には八郎潟を負ひたる半島にて、ほと／＼離れ島も同じことなれば、それに接く路の美しき大道ならざるべきは然もあるべきことなるが、さりとてはまた淋しさに過ぎたる光景かなと思ひつゝ、四里餘り五里ばかりが間ほど、更に變らぬ眺望の中を行くに忽然として萱葺の家の棟四つ五つ六つ

二人して昨夜議り定めたるなれば、天のさま好からずとは思ひながらも、人の心を挫かじと何知らぬふりして立出づ。人もまた予が心を挫かじとて何知らぬふりをなせるなるべし。旅亭の前より馬に打乘りて、先づ大口といふところを指して行く。能代の市街を出づると直に砂いと深き松林に入る。心無き人は空に看ても過ぐべし、知るものは知る能代の

防風林

は是なり。羽後の海に瀕める地は、おほよそは砂濱のみにして、船を繫ぐべきところも、いと〳〵乏しきが中に、分けて雄鹿の島より北には、唯一つの能代あるのみなるが、其能代も能代川の末の川港にして、頼もしき碇泊塲ならぬ上、むかしは風すさまじく烈しくして、水の上はもとよりの事、陸の住居さへ安きを得ざりしなり。其故を如何にといふに、礙ふるものなき日本海を渡り來る風の、直に此方に衝き當ることとなれば、其勢の猛きこと喩ふるに物も無きほどにして、石礫を飛ばし土砂を捲き、天を晦うし地を撼かし、行客を倒し、民家を埋め、人をして如何ともすべからざるを歎ぜしむること、秋冬は一ト月に二度三度のみならざりしを以てなり。然るに

加藤清右衛門

まさへたゞならず、書のやうに麗しく我が眼には映りぬ。川やうやう大きくなればまた帆舟の行き交ふも、ひとしほ趣きあり。こゝの川舟には何の風を好しとするぞ、と馬丁に問ひたるに、「あゆの風」なりと明らかに答へたり。「あいの風」とは云はで古き詞を其まゝに正しく「あゆの風」と答へたるもいと嬉し。夜に入りて雨やうやく晴れたれど、寒さいよ〳〵加はりたれば、憚り無く濁聲を揚げて詩を吟じ歌を唱ひ、纔に胴の顫ひを忍ぶ。

能代

に着きたる時は既に八時を過ぎたりければ、餓ゑと疲れと寒さとに眼瞼も凹みたらん心地したるが、例の一陶の酒、數々の下物、秋田の習ひの貝燒までを得て、やうやく心強くなりて睡るを得たり。

十四日。雨は已みたれども、天猶陰りて雲亂れ騷ぎ、をり〳〵日の光の洩るゝかとすれば又忽ち暗くなりて、昨夜の名殘の風も未だ全く衰へず、何となく物悲しく心安からぬ日なり。雄鹿の嶋を廻りて秋田に出づべきか、八郎潟の畔を行きて御座が岬など經べきか、いづれの路を取りたるがをかしからん、潟を右にして車を走らさんには、身を苦めずして而も淺からぬ興を覺ゆべけれど、島に遊びて馬を馳せんかた、憂きことはあるにせよ猶面白さも深かるべし、一日二日は惜むに足らず、此地まで來りながら奇峭雄峻を以て名ある雄鹿の島を探らで已まんは、後に至りて口惜かるべしとて、

引の男爭ひ來りて、休ませ玉へや、晝餉し玉へやと口々に喚ふ。土地の開け居ること此を以て知るべし。齋藤といふに憩ひて濕氣拂ひの酒を酌むに肴には鮭の氷頭膾などいふ心利きたるものさへ現れ出てければ、二人手を拍つて、鑛山師などの多く徘徊して金を散ずるの地は山中なりとて侮り易からずと云ふ。

今宵は能代に枕定めん心算なれば、晝餉もそこそこにして、改めて傭ひたる馬車に打乘る。岩瀨といふところにて少時憩ひたるに、道のほとりの小家にて樺櫻の皮もて印籠煙草入れなど造りて賣るものあり。精製のものは、しなやかにして美し。能く長く保つべしとなれば、廉價からぬは然る事ながら、價を問へば案のほかに貴し。東京にては「かづの細工」と云ひて、物ずきの人は稀に硯箱會席膳など有てり。むかし「かづの」といふところにて多く造りしと見えたり。「かづの」もこゝを距ること遠からぬところなり。このあたりより

能代川

を左にして下る。此の路の景色いと好し。川は激しき流れならねど、水淸くして悠々逼らず、それとも知れぬ樹々の色深く、紅葉せるが、岸よりさし出でゝ影を浸せる、まことに錦をさらすかと見ゆ。小繫といふところを過ぎて、琴の音橋とやらん、名さへゆかしく耳に響く橋のあたり、岸のさ

ぬところなり、且は此地もまた溫泉の湧き出づるあるをもて、おのづから開け居り、旅亭も思ひのほかに好し。たゞ此のあたりに來れば、曾て一たびは過ぎしことあるところなるに關はらず、婢などの言葉の訛り甚しくして、やゝもすれば聞き取りがたき節あるには、心空に焦ちて、ほと〳〵困じ果つ。着きたる時旣に夜更けたれば、何事も得爲さで、沿後たゞちに眠に就く。

矢立峠

十三日。夢も無き眠より寤めて、例の如く先づ今日の天のさまはと觀るに、恨めしくも雲暗くして小雨はら〳〵と降れり。されど空しく此地に留まるべくもあらねば、乘合馬車に乘りて立出づ。矢立峠は杉の樹いと多く、谿にも澤にも森々と生ひたり。車は烟雨の中を衝きて山の岨道を縈り廻り進めば、白雲は追ふが如く逃ぐるが如くに尾上を呑吐し溪に去來して、常盤樹の翠の色の雨にひとしほ增せる林樾を或時は蔽し或時は示す。雨も流石に興無きにあらず。

大館

は峠より四里もあるべし。山間ながら平なる地にて、盛岡、三ノ戶、弘前、能代よりの三條の路、こゝに至りて結ばるゝものから、家數も少からず物賣る肆も賑ひて見ゆ。馬車の止まるやいなや宿

ひ、濤の狂ひ、海の方を見晴らしてこそ朝夕もをかしからめ、それを心無くも如何で緊しくは塞ぎたる、と土地のものを詰れば、湯の島はだか島雲濤なんどの何のをかしきことあらん、假令また實にをかしきにせよ見たまふごとく此處は西北に海を受けたれば、北風西風などにて海荒るゝ時は、磯に碎くる濤の飛沫は、珠なして雨と降り霰と迸り、音たてゝ檐を打ち窓を襲ふ、其いぶせさ言ふばかり無し、されば此の濱籬といふものを設けて冬の夜の夢を護り、あらしの日の患を免るゝ便とするなり、と澱み無く答ふる言葉の底には針を含みて、都人の憂きこと知らぬを刺るが如し。我過てり我過てり、實にさる事もあるならん、さるにても濱籬といふ名のしほらしさよ、雪ふり花といひ、濱籬といひ、陸奥の外が濱邊に來て、しほらしき詞を聞くものかな、と獨りひそかに悦びて歸る。

やがて小湊の方より汽車の來れるに乘りて青森に至り、青森より官線鐵道の汽車に乘り換へて弘前を經、

碇が關

に着く。こゝは矢立峠の麓にして、右も左も山々重なり、たゞ一條の絲の如き路、秋田の大館に通ずるほかには、行くべきところも無き袋の底のやうなるところなり。されど往來の人の少くもあら

淺蟲

といふところに着きしかば、晝餉せんとて汽車を出づ。こゝは青森灣に打向へる侘しき一ト村なれど、温泉あるを以て人に知らる。されど我が年猶若かりし時、こゝを通りしに、其頃は鐵道も未だ成らざりし折のことゝて、家居などの淸らなるも更に見えず、たゞ纔に田舍人の土臭きが神を暢し身を養ふところたるに過ぎざりしが、今は嚴めしき家も立ち、心利きたる宿も出來て湯殿も廣く、湯槽も大きくなり、なにがしの温泉と世に云ひ囃さるゝとも羞かしからぬ狀態を具ふるに至りぬ。これ皆交通の便の善くなれるが爲なるべし。浴して後、快く晝餉仕果てしが、猶次の汽車の來らぬまゝ、そこはかと無く漫歩きするに、路の邊に丈矮き草の白き小なる花を戴きてむら〳〵と茂れるあり。はじめは遠目の推量りに蕎麥の花かと思ひけるが、近づきて其然らざるを知りしかば、遊び居たる里の兒に名を問ふに、雪ふり花と云ふ。白ければ雪ふり花と云ふ歟と問へば、頭を打振りて、此の花の咲くとやがてに雪の降る故といふ。やすらかにして面白き花の名なるかな、歌にも詠まゝほしなど打興じながら海の方を賤が家並の間より眺むるに、湯の島とて頂尖れる島山いと近く見えて、漁船一つ二つ其倒影に漕ぎ上り、また漕ぎ距たる。このあたりの家々皆海のかたには高さ一丈にも餘るべき柴籬を結ひ圍らしたりければ、何とて如是はするぞ、湯の島はだか島の眺望、雲の漂

ホテルといふに晝餉を爲し、再び汽車に乘じて盛岡に至る。仙台より北の方は、地も漸く北に偏り且は路も漸く高きに上るを以て、窓より見ゆる野のさま山のさまも、おのづから寒き國のおもむきを現し、自然生の漆の紅葉せるが夕陽に映りて際立ちて赤く見えたる、又薪負ふ馬の歩みも遲く暮烟蒼然たる山陰を行くなど、いづれか秋將に冬ならんとする悲しき景色を示さゞるは無し。夜に入りて盛岡に着き、陸奥館に宿る。館は高樓大厦といふかたにはあらねど、よろづ清らに心地好く、もてなしぶりもけや〱しからで却つて好し。膳に生鮭の照燒の上りたるは、寒き國に來りたる一つの德なりなど、笑ひ語りて酒を仰ぐ。昨夜は岩手山に初雪の降りしよしなるが、今宵は降らであれよかし、さらぬだに旅は淋しき夜半の寐ざめを風の冷えまさらんは嬉しからじ、なんど呟きながら、微醉に乘じて睡眠に就く。

十二日。青森へと志して汽車に乘る。路は北上川添の谿間を、ひた上りに上るなり。好摩より沼宮内あたりは、地いよ〱高く。山いよ〱深く、窓より望む四方の景色も、おのづと荒莫凄凉の趣き多く、麥隴桑圃を見ること少し。中山に至りて川究まり勢變り、此度は馬淵川添の谿間を下る。一ノ戸、福岡あたり、山逼りては流れに近づくところ〱、寒林悲風に咽び、碧潭危崖に搤せらるるさまなんど、旅の情を慰むるに足る眺めも無きにはあらず。尻内よりは渺茫たる野原を過ぐること多く、野邊地よりは海を見て走る時多し。午の刻さがりに

り、稻葉の渡りなどいへるは、此橋の上にや將下にや土地の人に問はまほしなんど思ふ間に、早くも岩沼の驛に着きたり。此驛にて汽車を待ち合はす間、空しく時を過さんも愚なることなり、笠島の神に詣で、實方中將の奥城所を吊らはん暇は無くとも、

武隈神社

拜みまゐらするほどのことは叶ふまじきにもあらざるべければ、いざ〳〵參らん、とて車を急がせて行く。大華表を望み見て車を下り、神前さして歩み寄りつ、ふと頭を擡げてみれば、華表にかゝれる扁額には、竹駒神社と記しあり。むかし此の御神竹馬に騎り玉ひて此處に來たまひしにより武隈の文字或は竹駒に易ふ、と閑老志に記せるも思ひ合さる。境内いと廣く、枝垂櫻の花は今無けれど眼につくほどなるもありて、隨身門などの物古りて寂びたる、いと好し。三條公の筆を揮はれたる翔鳳の二字もいと目出たく、本社の神さびたるもいと尊し。むかしは無智の民ども此の御神を狐なりとや思ひ僻め居けん、畏しと云はんも愚なり。三拜して後、二木の松をも尋ねばやなど云ふ中、時はや逼りぬ、疾く停車場に返り玉はでは、と車夫の云ひ罵るに、已むことを得て引返せば、危くも汽車は今や輾り出さんとするところなり。とつかはと車を下りて車に入り、漸くほつと息つけば岩沼の驛は既背後に在り。程無く増田を過ぎて仙台に着きしかば、此處に一度汽車を下りて、仙台

夜ふけて中村に歸り、田代氏を訪ふ。

相馬燒

相馬燒は優しく美しきものにはあらざれど、其堅くして破れ易からざると、狩野氏の書風の躍馬の摸樣のをかしきと、粗朴のうちにおのづから愛すべき雅致無きにあらざるとを以て名ある窰器なり。田代氏は相馬燒といふものゝ世に出づるに至りしそも〳〵より關係ある家にして、今猶これを造り、これを鬻げるなれば、夜は深けたれど問ひ驚かさんと、門を敲きて强ひて入り、さま〳〵のものを購ひて歸る。予は幸ひにして二重底の湯呑にして櫻の花片の透しと例の躍馬の摸樣とのあるものゝ唯一つ有り合はせたるを買ひ得たり。こは曩昔は「おとめ」と云ひて、むざとは得がたき式のものなりしなり。

十一日朝いと夙く中村の停車場に至りて岩沼までの間汽車に便乘せんことを乞ひ、許しを得て之に乘る。客車の往復は未だ始まらねば、材木など積みたる車の上に毛布を打敷きてそれに坐せり。新沼浦近くに至る折から朝暾あか〳〵と浦の果より差し上りて、さらぬだに心地好き曉天の景色を、ひとしほ爽快ならしめたり。駒が嶺坂本を過ぎ、廣き原を貫きて吉田にかゝり、亘理を經て、やがて阿武隈川の鐵橋に臨みぬ。流石に聞えたる大河なれば、流れの幅も濶く、水の勢も駛し。袖の渡

そこより江戸へ送るべき米を船積みして出しゝところなりといふ。松川より原釜に至るには、中村の方へと少し戻りて、高すか地藏といふ地藏堂のほとりより右に折れて入るなり。「ほつき」といふ貝の殼を幾個と無く尊前に棒げたるは、先刻に見し觀音菩薩に瓠供へたるにも增してをかしく、貝の裏の白きが月の薄明りにも著く明らかなれば、訝しみて土地のものに問ふに、耳遠くなりたるものども自己が年齢の數ほど貝殼を此の御佛に奉りて復び舊の如く耳敏くならしめ玉へと、祈り申せば靈驗ある由を云ひ傳へて、然は爲るなり、といふ。觀音には瓠、地藏には貝殼、をかしきものをのみ供ずるところかな、と打笑ひて過ぐ。原釜といふところも浦を控へ洋に臨めるところにて、海水浴する人々のために新に建てたる旅亭の樓上より月光を便りに眺むれば、五龍の岬といへるが突き出でたる上に五龍首權現見えさせ玉ふほかには物も無く寂寞として、眼の限りは茫々たる大洋の海霧を帶びて横はるのみ。猶樓を下りてそこゝゝ逍遙するに、かさ岩といへるが黑みて見ゆる、潮風に瘦せたる松の立てるが月にいよ〳〵寂びて見ゆる、大津濱一帶の沙平かに遠く曲りて浪斷間なく白く碎けて散るが見ゆるほかには眼に入るものも無けれど、荒凉の中おのづからまた味ふべき趣きありて、特に今宵は後の月の風露のさまもたゞならず、身にしみて物のあはれをおぼえぬ。夕餉せんとて膳に向へば「しゝ茸」とて、色いと黑き茸、「べろ、」「くろがら」などいふものを侑めらる。「しゝ茸」は其色厭はしけれど味あしからず、「べろ」は妙ならず、「くろがら」はよし。

み。たゞ飛鳥の水門に寄る浪の卷き返し卷き返して轟きわたる壯快のさまのみは、此に在りて彼に無き狀なれば、金澤の此地に讓らざるを得ざるは論無きことなれど、都近き便宜は彼に在りて此に無きことなれば、此地も金澤に讓らざるを得ざる節ありと云ふべきなり。

中村より此浦に遊ばんとするものは、先づ水莖山に至らんとならば、宇田川の北岸より横に入るべし。これ吾輩が取れる路にして、松川に至らんとするには如何に行くべきやと尋ね問はんには、必ず此路を敎へ示さるべきなり。されど若し松川村に至ることを旨とせずして、松川浦に遊びて風光の美を賞せんとならば、宇田川橋のほとりより小舟を僦ひて下るを佳とす。また陸路よりせんとならば、宇田川の南より東に折れて百槻（百の字をどうと讀むは百目木などいふ地名の讀みかたの例なり）を經、南飯淵にかゝり岩の子村に出て、それより船を僦ひて浦の中を遊びあるき、水莖山に至りて踵を旋すべし。宇田川北岸の路を取るは、蓋し松が浦の風景を賞せんには、拙き路の撰みかたなるべし。

網など打たせながら暮るゝ頃松川に歸り、月を踏んで原釜に至る。

原釜

は海水浴場となれるを以て、この頃遊び人おほくなれるところなり。舊は中村侯の米廩の在りて、

の羽の音に添ふる夜半は、おのづからなる趣き深き眞實の歌も詩も成るべし、然なくとも浮世の塵の中ならぬ水の上の孤屋の、月に潮の湧く夕、時鳥に雨のそゝぐ曉などは、如何に氣も清み神も往くばかりの風情やあるらん、あはれ我が身に暇多からば、一夜は「あぢごや」にまろ寢の夢を結びても見ましものを、と打興ず。

十二本松の名もをかしきところ〳〵に松の大樹の立てる岸邊を、行くかとすれば、離れ島沖が島などいふを眼の前に見る。島はいと小けれど、幾歳の水波に洒れたれば、姿も枯び色も白みて鏡の如き水の果に浮びたるさま、畵にかける龍宮城を望むが如し。文字が島に至りて、船を蘆荻の間に繋ぎ捨て、陸に上りて、さて浦のさまを見渡すに、折から日は傾きかゝりて、雲の隙洩る光のひとしほ強く照りわたれば、黄金溶けて流るゝ漣漪人の眼を燒くばかりに耀き、近くは沖が島より遠くは松川、千じま、水莖山、淸助森、十二本松など起伏出入して一幅の大畫幅をなし、漁舟の緩く往來する「あじ小屋」の閑に立てる、裸裎にして草の衣だに纏はぬ小嶼、岸老いて松の翠の蓋を張れる大嶼、いづれ吟哦の材丹青の料たらぬは無し。むかしはこゝに相馬侯の別業のありしと云ふも、實にもと點頭かれて、風光の美は人の今古を問はず、誰が眼にも同じやうに映るものと知りぬ。

松川浦の風景の美さのおほよそは、武州の金澤に近くして、猶それよりは萬般のさまの大く美しく、水も鏡に汀も長くして、面白き姿せる島などの一つ一つのみならず浮びて見ゆるを異なりとするの

れば遠く陸を離れて寂しき浦の波の上にかゝるいぶせき廬を結びて何者の籠り居るやらん、打見たるところは、世をも忘れたるげに物寂びて、風雅を極めたりと覺ゆれど、人ありや將人無しや、人あらば往來すべき船の見えぬもいぶかしき限りなし、水の上に庫など設くべきやうは無けれど、若くは物を收むるための小屋などにや、と深く怪みて問ひ質せば、老いたるは若きと顏見合せて打笑ひつ、知り玉はねば疑ひ玉ふも道理なれど、如何で水の上に倉など設くべき、正しく人の居るべきために引結びたる假廬なり、土地の習ひにて、かゝるものを幾個と無く浦の中のそこゝに建て置き、人其中に潛みて物音もさせず靜まり居り、魚の心長閑かに近傍を過ぎ行くところを候ひて豫て伏せ置ける罾網を引起し、何くれと無く數々の魚を獲て果敢なき賤人の生活とはするなり、されば見玉へ網を起す時に當りて力とするところの杭の立たぬも無し、往來すべき船の見えぬを訝りたまふは然る事ながら、之を守る者二時がはりに代りあふ定めなれば、船はいつも陸よりする人を載せて來り、小屋よりするものを載せて去り、小屋のほとりには止まること無し、小屋をば土地の言葉には「わじごや」と申すなり、秋も名殘となりて潮煙り吹く風の、夜は特さらに冴ゆる折など、小屋の中に在りて、獨居の憂さを慰むべき歌だに得唱はで、空しく陸よりの船を待ち詫ぶる情など都の人は夢にも知り玉はぬなるべし、と云ふ。あらおもしろの「わじごや」や、實に〳〵若き盛りの男の、戀の心の燃ゆる折など、此のあはれなる小屋に籠りて、思ひを對岸の燈の光に惱ませ、恨みを水禽

其さま、畫ける南海普陀山の如く、まことに危きが上にも危きは、斷えず滿つ潮退く汐の岸を潰すがためなるべし。いざこれよりは船を僦ひて松が浦の波平かに水滑らかなるが中を彼方此方と乘り廻し、意飽くまで探勝の興を縱にせんと同行の乙羽子の曰ふに、さらばとばかり山を下りて舟を求む。幸ひに親子づれの漁夫の投網をもて漁りあるけるに遇ひしかば、喚び止めて其舟に打乘り、一葦のゆくところに任せて、半白の老夫、腰簑せる若者と共に、我等もまた終に畫中の人となり了んぬ。

松が浦は本扇頭の小景にあらず。むかし相馬侯其十二勝を撰みて畫卷を作りしより、今に至りて猶土地の者等の指を折りて數へ立つるほどなれば、風景の妙の一望に盡くべくもあらぬは固よりのことなり。若きが頻に櫓を押す間、老いたるを捉へてさま〱の事を訪ふに、此浦に添へる村々は、松川、尾濱を首として細田、和田、岩の子、新田、梅川、柏崎、磯部の九村なりといふ。此中松川より和田に至るの四村は北側に屬し、其他は南側に屬する由なるが、浦に臨める村の數少からぬに考へても浦の大さを測り知るべし。

船やうやく進みゆく前途にあたりて、ふと見れば四阿づくりの小さき家の、水上に泛べるが如く建てられたるもの、甲處乙處に在り。雨をも風をも纔に藁苫のたぐひにて防ぐのみとおぼしきしつらひにて、其大さゝへ疊二ひらほどもあるべき歟、まことに膝を容るゝに足るばかりと見ゆ。如何な

遊行雜記

松川浦

明治三十年十月十日。午後相馬の中村を立ちて松が浦へと志ず。松が浦は今松川浦と呼ぶ。地名の漸く訛り漸く移り易りて終に其舊を失ふこと、いづくも同じ。中村の市中を流るゝ宇多川の末は即ち松が浦に入るなれば、路はひたすら川に添ひて下り居るのみならんと思ひ居けるに然は無くて、行くこと一里ばかりにして右に折るゝとやがて涯無き洋を左に見たるを以て、川の流れよりは遙に北の方を歩みたるを知りたり。小松の生ひたる沙の丘を上り下りして行くこと少時して浦のほとりに出づ。水莖山といふ小山ありて、其上にさゝやかなる觀音堂見ゆ。夕顏觀音と土地の者の呼びならはしたるは、鄙びたれども流石またをかしからぬにはあらず。何の故とは知らねど瓠を幾顆と無く供へ奉れるも、見る眼おもしろくていと興あり。先づ大士の尊前に一拜して後、心靜かに四方のありさまを見るに、此山背には大洋を負ひ脇には浦を擁きたれば、眺望に富むこと大方ならず。遠く松が浦一帶の明媚の景色を眸中に収むるは云ふも更なり。近く太平洋の濤凄じく寄せては返る飛鳥の水門を脚下に見るなど、多く得難き趣きあり。堂後は幾弓の地も無くして懸崖たゞちに水に臨む

のに似て少し小し。さて食を終へければ、急ぎて車に乗り、松が浦へと志す。原の町のかたより こゝまでの間、行方の郡なれど、おもかげにして見ゆといふものをと笠郎女が詠ぜし眞野の萱原は いづくなりとも心さへつかで過ぎぬ。原は雲雀野、鹿島の近くの小池の原などありしが、眞野とい ふ地の名は郷の名にも村の名にも聞かざりけり。

なあけれど、なあーい、なよーい、あを、みてくらす、なあーい、こーころ」となり。猶聞く耳のつたなければ聲の長し短しなど、違へるなるべきが、歌の詞のみを云へば、對ひ小山の崖の躑躅花、およびなけれど見て暮らす、となり。また一つ、「相馬〳〵と木萱も靡く、なあなだやあ、なびく木萱に、實花が咲く、なあなんだよう、はあ、じらさのきっき」といふをも聞く。歌の節さすがにをかしき趣き無きにもあらず。少時して乙羽子歸り來りて、我も相馬節聞き得たりとて予に告ぐ。同じきものは省きて、別なるを記せば、「相馬ながれ山習ひたきやござれ五月中のさる御野馬追」といふのなり。二人とも猶このほかにも聞き得たれど、よそにも唱ふ歌なればしるさず。

十日。原野町を立ちて鹽崎鹿島を過ぎ、晝頃中村に着く。こゝはむかし相馬侯の居たまひしところなれば、家も多く、人のゆきゝも繁し。宇田川といふを渡りて、晝餉せんとする折りしも、我等が居たる樓の下を眞白の衣の法師のものめきたるを被て、頭にも白き布を巻きて其二つの端を耳の上より肩まで垂れ、法螺の大なるを吹き鳴らしつゝ行くもの三人四人あり。いづれの山かの山伏と見ゆ。東京にはかゝるもの今は無ければ、二人とも珍らしと見る。樓は宇田川を前に控えて、疊六十ひらばかりを敷き滿てたる三層建てなれば、清らかなりとは云ひ難けれど、心晴るゝばかりなり。此川の末こそこれより我等が見んとおもふ松が浦なれなどゝ指さし語りあひつゝ、膳に向ふに、たゞ一つ皿の上につけたる魚の長さ七八寸にて皮黑きがあり。問へば「かじか」なりといふ。北海道

そゞろに人をして秋を感ぜしむ。雲雀野を出ではづるれば原野町なり。原中なれば名に呼びしなるべし。路の右手に當り、少し離れたるところに、燈火の光り多く見ゆ。何ぞと問へば、遊君居るところにて、栗の木林と稱ふる地なるよしなり。其地の名の鄙びたれど、猶やさしきかたもあるに、秋ふけぬ栗の木はやし夜行かば毬もや踏まん月明くとも、と戯れ、また、いで問はん栗の木ばやし秋ふかし笑みてもあらめ落つるばかりに、と戯れて大に笑ふ。原の町は、町も富岡には勝りたり、風俗もあしからず、特に我等が宿りたる家の人々皆心やさしくもてなし呉るゝに、昨日の苦しさも今は笑ひのたねとして、心地よく夜食を濟ます。食後、乙羽子は芝居見にとて立出づ。我は鳥屋小僧のことを思ひ出して行くべき心もせねば、とゞまり居て筆を取り、よしなしごとなど書す。五十ばかりの按摩取りの來りければ、これをとらへて、肩もませながら、目盲ひたる人は能く歌を唱ひ音を知るものなり、相馬節知らぬことはあるまじ、唱ふて聞かせよ、錢とらせん、と責む。鄙びたる歌なれど、物惜みするとおばさんも口惜ければ、聞かせまゐらせん、まことは物の音さすることも世すぎの片手業にいたすものなればとて、揉み終へて後、小聲に唱ひ出す。燈火ははや行燈に代へたれば、室の中やゝ暗く、あたりの人々は寢しづまりたると覺しくて、廣き家の夜の秋なれば、蟲の聲などこそ枕に近からね、何となく物淋し。聞きたるまゝ少しも易へて歌と囃しとを一トつゝきにしるせば、「むかひこやまの、なあーよい、なあーよい、がんけのつゝぎ、なあい、はあよーび

古きを好む人にはをかしきものならん。藥師佛を彫りたるかたに至り見るに、これも同じ式に成れるものなり。藥師も觀音も雨露をふせぐため、さしかけの小屋葺き下したるが、藥師の方、よく護られたるより、今に猶いさゝか其御姿明らかに見ゆ。これらのみならず此丘には、あなたこなたに土に彫られたるさま〳〵の佛の御像あり。此丘のいはれなどよく考へんには面白き事あるべく、月日經て我が考へを云ひ出でん折もあるべし。もとのところに立返りて、また車に乘らんとするに、道のべの小家に、老いたる人の小刀もて鹿の角の小さく方なるを猶かにかくと削り居れるあり。博奕の事を幾度となく耳にしたれば、疾くも骰子ならんとおもひて、さしのぞくに、其物中空にして上下は塞がらず、一面には小孔一つ、また他の一側には小孔二つ開きたり。何とも猜し得ねば、それは何するものぞと尋ね問ひて、雉子よぶ笛なりと始めて知りぬ。試みに吹き鳴らしてよとて吹かしむるに、其聲細く幽微にして、雉子の雌の聲よくは聞き知らぬ我には如何にもと思ひかねたれど、車ひく男どもの言葉によれば、此笛の音を聞きて寄り來ぬ雉子はあるまじとなり。小高を過ぐる次、半谷氏を訪はんとせしも、日傾んとして心急ぎせらるゝまゝ訪はず。羽二重織る機の音の忙しきにつけ、我等も車をいそがせ、尾花なびかし吹く夕風の襟に寒きにつけ、早く宿からんとおもふ。名高き野馬追ひば昔時こゝにてせしなりといふ原にかゝりしほど、月さしのぼりて、山々遙に連れるが中の廣野を照らせるいと物悲しく、おくれて歸る草つけし馬引く男の、聲あはれに相馬節唱ふも、

強き酒なるに驚くのみ。將門をいたゞくやがて七人と一人をみたりよつたりや我など案じつゝくる間に我知らず夢に入る。泉澤ぞと乙羽子のいふに驚きさめて、車を下り、道の左手の小高きかたに向ふ。鎌を腰にし浮爛勒の實を手にしたる男に導かして、先づ觀音を拜せんとす。未だ其處に到らずて丘の裾を行く時、ふと顧れば其間二町足らず距りたる道の眞中にて土方とおぼしきもの老いたる農夫と爭ひて、ひた打ちに其頭を打つ。道は東の方の田中にあり、我等は西の方の丘の下に立ちたれば、未刻下りの日の光り鮮やかなるが、爭ふ二人を明かに照らして、拳をふるへる男の憎々しき赭き面、濃き眉、瞋れる眼など畫の如く見ゆ。乙羽子は、心さかしくして物に堪へぬ人なり。强きもの丶弱きを凌ぐを見て、見るに見かねしや聲を揚げて遙に叱り止む。叱ること二度三度に及びければ、赭き面の男も手を止めて北へ去り、老いたるは南へと走り逃れぬ。老いたるは乙羽子をいと嬉しき人とおもへるなるべし。さて觀音といふに詣りて見るに、埴土やうの丘の片面を削りて凹ましたるに、觀音ならびに多くの菩薩の像を彫りて、それに色彩つけたる石灰やうのものを塗りたるなり。多くの年月の雨風にあひたるに、土もはらゝぎ落ち、塗りたるものも剝げ去りたれば、よくは觀がたけれど、おほよそを云へば、かゝる脆き土に工を施すほど淺はかなる考の人の手に成りしものとて、珍らしきは珍らしけれど、人をして、あな能くしたりと云はしむるほどのものにはあらず。おぼろげに見ゆる像の最も高きにあるは地より三丈も上なるべし。兎に角に古きものなれば、

て礎をしきりに撼かし崩せば、我等二人に後れしものは、南よりするものも北よりするものも皆渡ることを得ずなりぬ。彼の棒もてる男は何ぞと人に尋ぬれば、橋など造る事を業とする所のものなりといふ。其男の心の清きや如何に、おほかたは推し知るべし。我が乗れる車ひける男は博奕して勝てりと誇る。乙羽子が車ひける男は負けたりと喞つ。風俗もまた推して知るべし。北より來れる車ひく男に會ひて乙羽子の車ひける男のものいひけるより、彼もまた能く博奕するやと乙羽子うら問へば、彼こそ因業留とて此わたりに立對ふものもなき男なれといふ。其名によりて其人となり推し知るべし。浪江といふところに晝食する次に、罐詰の正宗やあると問へば、正宗は無けれど、よき酒の罐詰ありといふ。名をたゞせば將門といふ。相馬の將門はをかしとて我一人これを飲み試みるに、少しく燒酎の味す。乙羽子は其名を惡みてか飲まねば、我一人して、日の丸の御旗と遞信省のテの字の旗との打交ひたる樣を描きたる趣味無き酒盞にて仰ぎつくす。こゝにて我が車ひく男替りたり。新に出で來りたる男を見れば、素肌に赤き縞の双子織の袖すら窄くもあらぬ袷を着て、草鞋なき足の脛あらはに、しかも高股まで見ゆるほどに端折したる扮裝いと似合はしからず。をかしき姿なるよと問ひ質せば、これも博奕に負けたるためなりといふ。昨日に引きかへ天うらゝかに風和ぎて、秋ながら春の如くなれば、衣もほと／＼乾き果てゝ、野行き山行く旅の身も憂からず。されど眼ざましき眺めもあるにあらねば、心倦みて、いたづらに醉の發するをおぼえ、たゞ將門の

なり。二人は泣かぬばかりになりて、濡れたる此品を身につけ、濡れたる「ずぼん」を穿ち、立出でんとして、靴をと云へば、昨日馬士の馬につけ來りし其まゝ猶繩からげになしありしを取りつくろひもせで出す。馬につけたることなれば、靴はしたゝかに水を含み、中に入れ置きたる靴襪は濡れ、靴を倒まにすれば酒杯に一つほどの水の湛へられたるがしと〳〵と流れ出づ。乙羽子も我も憤る力さへ拔けて、情なしと思ふのみ、今は口にさへ出さず。西鶴が、旅人落着くと松吹く風にあしらひ、大方の事は返事もせず、莨若の火一つといふも、行燈が鼻の先にござるといふ、水風呂が遲いと急げば腹に十月はようござつた事と笑ふ、と書けるも、かゝる家に宿りたるおぼえありてなるべしと、身に染みて昔時現今ともにあさましき鄕のあさましき人心を悲しむ。おもふに、彼の藝妓と呼ばるゝは、元祿の旅泊の人詐し女といふにも當るべし。坐敷に呼び寄せ、假初の醉の紛れに懷中までも手を入れなどせば、草靴ずれの跟も揉みて吳るゝべく、水したゝる靴襪をきぬ〳〵の別れに穿かすやうなることも無からんと、乙羽子一言我一言、宿を立ち出でゝ後わざ笑ふ。我が乘りし車は一二町行きて壞る。車のやがて壞るべきを知り得ぬにはあらぬに、我を載せたる男の心のきたなさ知るべし。

車をかへて進む。やがて熊野川といふ川にいたる。昨日の雨に橋半の杭ゆらぎ礎くづれかゝりて、車行くべくもあらず。我等はからくも崩れかゝりたる礎を攀ぢて橋に上りしが、一人の男太き棒も

眠りに入りぬ。

こゝは今楢葉郡の標葉郡に近きところなり。楢葉はもと郷の名にして郡の名ならず。奥羽觀迹聞老志に標葉郡の誤りなりとやうにいへるは如何にや、和名抄の磐城郡の末のところに楢葉の名見ゆ。今の楢葉郡は即ち標葉郡磐城郡の間の郡なり。あづま路のしねは境に宿りして雲井に見ゆる筑波山かなと古歌にいへるは、標葉と楢葉との境か、楢葉と磐城との境か、または標葉と行方との境か。筑波に近きかたにて地勢高きは今の楢葉と磐城との境なるべし。雨ふりたれば筑波見ゆるやと久の濱わたりにて顧みる心も無く、また今の道は古き道に必ずしも依らぬものなれば、思ひ究めん便宜にもならずとおもひ、且は此日の雨の烈しく路の惡きに懷中册子取り出だす暇さへ無くて已みしほどなるに、腰折れ一つだに得よまずて、標葉堺も雨の煙の中に過ぎぬ。

九日。凄じかりし雨は昨日夜に入りてより霽れ、今朝の日の色ことに麗はし。雀見のやうに晴を悦びて起き出でたる我等は、朝餉疾く出せと急がし立てゝ、一時も早く今日の山水の眺めに昨日の憂かりしを忘れんとす。食事も果てたれば、昨宵あづけ置きたる脚半「ももひき」など持て來よといふ。あと應へて婢の持て來たるを見れば、泥に汚れ雨に濕れたるほどに水もて能く濯ぎ火もて能く乾かしてよ、と言葉を卑くし誠籠めてくれ〳〵も賴み置きしをも何とや聞きけむ、おほかたは牛の角に露置きしほどにも思はざりしなるべし、あゆひも濡れたるまゝなり、もゝひきも汚れたるまゝ

は左まで悪しからず。かゝる室の塞がりもせであるものをと、つぶやきながら隣の室を見れば、そこにも客は無きなり。かゝる事は宿屋の常なれば咎むるに足らずと我は乙羽子をなだめ乙羽子は我を宥むれど共に其心平らかなる能はず、をかしからぬ人のあしらひざまする家かなと底の心には厭はしくおもふ。湯あみして後、雨の濕氣したたかに受けたればと酒を用う。されど二人とも醉ひ難きに苦む。食はすものなど皆、美味からずといはんよりは、情無しと云はんかた然るべきほどなるがためなり。水戸の赤水といふ人のむかし此地を過ぎし時は風俗もよかりし由なれど、今は好しとは云ひがたかるべし。彼方此方の室にて三絃の音起り、いやしき歌かしましく唱はれ、はすはなる女の笑ひ聲これに打交りて聞え、夜ふくるまで已まず。婦に對ひて、あれはと問へば、宿り玉ひし人の藝妓召したるなりといふ。さてはさきに我が湯あみにとて樓の下に行きし時見たりし女等、絹に似たるもの身に纏ひて、猥りがはしく色つくれるさま、此處の婢としても娘としても似合はしからずと思ひしが、藝妓なりしやと云へば、如何にもそれなり、召し玉はずやといふ。いづくのものぞと問ふ。皆東京の人といふ。我は東京の生れなれば忌々しくおぼゆるに口惜さも交りて、言葉を出すさへ物憂くおぼゆ。茶代の受け取りに添へて「ばいれえと」といふ卷烟草を出したるほどの家なれば、是も非もあるべからず、眠らんばかりなり、眠らんばかりなりと乙羽子も云へば、我も然思ひて、乙羽子が携へ來りたる「ころんびいふ」を二人の此夜の命の綱として、からくも食を竟へ、

ころびて、其さまいと悲しげに見ゆ。征矢なしてふり來る雨にいとだてのたてもたまらず破れにけるかな、といひて共に笑ふもなか〳〵苦し。荷を負はせたる馬は馬士に引かせて、先づ富岡のそれの宿に到らしむ。さて豫め富岡の宿の主人をして我等の到らん時よろづを惡しからずもてなすやう心構へなさしむるべく馬士に言ひ含め遣りたれば今は心安し、雨も甚しければ少しく憇はんと、道のほとりの小家に入りて湯を乞ひ、火にあたゝまり、煙草など吸ふ。此あたりのものなるべし此家に來て物語りなし居れる男の一人に、眼圓にして口は一文字をなし、硬き髮、赭き面、怒れる肩のおのづから心弱からぬをあらはし、緊りたる肉つきの見るから力強げなる男あり。何者ぞと問ふに不動といふは其綽號にて、鐵工は其職業なり。此男馬の蹄鐵を造ることに巧にして、また如何なる荒き駒をも猫の如くにもてあつかふによりて、いさゝか名あるものなる由なりければ、乙羽子はしきりにさまざまの事を問ひたゞす。歌ぶくろの中にや取り入れられけん、いとをかし。かくて時を經つ、乙羽子は不動よりあんぺら蓆を得て、彼のやぶれ絲經蓋の上に引まとひ、立ち出づ。日暮るゝほどに富岡へ着きて、期したる家に入る。馬士もて豫め云ひ知らせ置きしにも似ず管待いと薄く、赤く枯れたる疊六ひらばかり敷きたるいぶせき室に請じ入る。雨水湛へられたる椽を翹足して歩ませられたるすら腹だゝしきに、室さへ思ひのほかなる事なれば、こは口惜しと先づ人の口よりもよく物言ふものを取らせて乙羽子室を換へんことをもとむ。こなたへとて頓て婢の導きたる室

み、と歌うたひて自ら慰むれど小町を負へるにもあらねば興あるべくもあらず。からくして廣野にたどりつきたれど、晝餉せんとするに、いづれの家も皆、まづ上りて休み玉へ、飯もやがて炊きてまゐらせんなどいふ。ゆくては遠し、雨の日は暮れやすきに、さる心長きことすべくもあらず、疾く飯くはせよ、といへば、面ふくらして、さらば御心のまゝに仕たまへ飯の炊きたるは無しといふ。乙羽子もわれも、世渡りの冥利といふことも知らぬものどもめ、憎さも憎し、さらばおのれらが家の疊に足も載すべきかと、憤りて小さやかなる家に入り、腹ふたげに河漏四五椀食ひて立出づ。われらを酷くもてなしたる家々には頸白く髮光れる女見えたり。木戸といふに至る間、例の馬車の軸折れて其まゝ道に棄てられたるもの一つあり。馬車あつかふ男にや、あやまちして傷を負ひたるが油紙被せられつ、板戸に舁かれて雨の中をいづくへか伴ひ行かれたるもの一つあり。また泥の深きところに車を曳き込みて馬の力も人の智もこれを何ともすること叶はで、積荷を下し、車を挽き出さんとせるもの二つ三つならずあり。車の轂までを地に呑まれながら、猶強ひて車を行らんと、馬士どももおのが友等の力をかりて雨の音の中に濁聲ふりたてつ鞭をふるひつ、馬を罵り勵ますもの五つ六つならずあり。これ皆路のあしきためなり。されど雨さへつゞかずば、かくまでには至らざるべく、雨つゞくとも馬車さへ少くば、またかくまでには至らざるなるべし。木戸を過ぐる頃、乙羽子は前より來る雨を防がん防がんと彼の絲經蓆を引き合はせ引き合はせするほどに、背の方の絲は

黒さよ、など云ひ罵りてありけるが、進むに從ひて路は惡くなり、田の中を歩む如くなる心地するところも幾處となく現はれ來りけるに、二人とも顏見合せては、いづこへ足踏み入れんと、ためらふこと數次なり。さして山徑の岩根さかしく胸をつき足を嚙むといふにもあらず、磯路の石みだれ横たはり彌しだゝみの我を苦むるといふにもあらねど、ひた滑りに滑りては、泥の深さ踝をかくし脛を埋むるばかりなるには、ほと〳〵困じ果てゝ、粟津に惱みし木曾殿の心は逸りながら思ふに任せざりし恨みもかくやと、心煎られのみせらる。これ皆荷馬車の輪の道を壞せしがためなり。廣野といふところに至るに、道のほとりに破れたる馬車曳き棄てられ、馬は少し隔たりたるところの草中に殪れ臥せるがあり。人は何とも仕難さに助けなど乞はんとて去りやしけむ影も無し。あはれ、馬よ、命絶えたるならんかと立寄り見れば、さすがに猶死にもせで、うごめきたれど、雨ふせぐべきよりにまでと打被せられたる油紙をさへ今は輕しとせざるべきさまなり。これも路の惡きに强ひて重荷を車につけつ、馬をのみ責めたるため、泥の深みへ陷りてかゝる事出で來たるなるべしとて、舌をふるひて恐れ驚きつゝ猶進むに　車の輪の力に路の凹みて深き穴となれるを其のまゝになし置きてはまた車を行り難きため、枝葉ながらに斫りたる松の太さ三五寸周りなるを横たへ敷きて、車輪の陷らざるやうなしあるより、素足に草鞋のみ穿きたる身の堪ふべくもあらず、雨水に冷ししらまされて血こそ出でね指端を傷つくること大方ならず。むばらからたちそぎ竹や道の小石に足いた

しきところなるを、むかしは如何なりけん。彼の大岩のあたりは濤毎に雷霆なして轟きわたり、そゝろに人の心を寒からしむ。襤褸を被たる五十ばかりの男の、髪亂れて長く、面黒く瘠せたるが、降る雨にかぶりものもせず、嶮しき路にはきものもせず出て來たれるに遇ひて、さま〲の事を問ふに、昔時はほかに道無くて、此の岩の袂山の裾を濤打つ間を覗ひては馳せ拔けしなりといふ。岩には松翠に、くねりて生ひ、山の崖には橐吾の花一トむら一トむら幽に咲きて、かゝる凄じき境をも神の書にせよ歌にせよと示したまふが如く見ゆれど、古人は我等のやうに心ゆるらかに眺むるひまも無かりしなるべし。こゝへは四倉より汽車を下りて來るかたよし。久の濱よりするは、東京の方より來ん人には少し損なり。我等は北の方へと歩みを反して、また富岡に至る。もとはよき驛にもあらざりしが、鐵道の設けらるゝにつきて、其事にたづさはる人々多く足を止むるより、おのづから物賣る店、飲み食ひさする家も多くなりしにや、新らしき家の人の目を惹くやう異樣につくれるなど見ゆ。車を傭はんとするに、一里三十錢なりなど云ひて、しかも、路惡ければ數々車を下りたまふことありと知り玉へといふ。餘りのことに腹だゝしければ、乙羽子は、賤の男の被ぐなる絲經蓆といふを購ひて雨凌ぐ料とし、予は乙羽子の言葉に從ひて其雨衣を借り用ゐる、やうやく烈しく降り來る雨を事ともせで、富岡まで歸る馬に行李を負はせつ、馬士と三人して立出つ。少時のほどは路あしからざりしかば、車ひきどもの左までもなき路をこと〲しく云ひて錢貪らんとしつる腹

ち來る。水田を隔てゝ並松立てるにそれと知らるゝ道を右にして駛せしは平を出でし初め、高からぬ丘小山の起きつ伏しつせる間を駛せしは草野四倉を過ぎし頃、隧道を出でゝ海見つゝ駛せしは久の濱に車を下る前なりし。久の濱より波立の寺に詣でんと半里ばかり磯づたひに後戻りす。道の邊に多き小草に、丈矮くして美しき色に小さき花さけるあり。ところの名はと問へば、べにぐさといふ。名も優に、花も花の數にも入らぬが、あはれなれば、例のあやしき歌など案ず。道の左に波立藥師と刻りたる大きなる石の立てるところより磯の方に下りて、細き流れの細き橋を渡り、樹の間を潜りて堂にいたる。堂は茅葺なれど醜からぬ建てざまにて、古びたり。飛驒の内匠が造るところなどいへるは如何にや。西行の歌として傳へらるゝものに云へるなみたちの寺とは是なり。されどなみたちとは今は呼ばで、はたち、はつたち、はたぢなど聞ゆるやうに呼ぶ。波立をはたちと讀みたるは、はたちに波立と字を當てたる後なみたちと讀めるか、新堀を日暮里と字を當てたる後、日ぐらしの里と稱ふるに至れる例もあれば、かゝる事は定めては言ひ難し。野崎左文子の地誌にはつたちと傍訓あるは流石によくたゞされたるものなり。堂より下りて波打ち際に出づれば、涯無き海より來る濤、遠く起り近く寄せて、飛沫は風に卷かるゝ雨よりも烈し。左は遙にとりがみの岬に至るまで、右は寺の背の山の嘴の水に入るところに見上るばかり峙立ちたる大岩まで、みな古歌にいへる木奴美が浦の中なるべし。駒なづむと此濱を詠じけんもいつはりならず、今にてすら淋しく路あ

るならひとて、香の物の菜を、こゝにては何といふと問へば、芭蕉菜なりと婢答ふ。圃にある時のさまを見ねば明らかには云ひ得ねど、たう菜といふものを其さまの似たるによりて、さは呼べるなるべし。食後たゞちに睡らんもさすがなれば、芝居ありと聞きて、小婢に案内させつ三四町ほど隔たりたる治樂館といふに行く。歩めば木の軋る音こそすれ棧敷さへ折り廻はして設らはれたるなど思ひのほかに濶き搆へなり。觀る人充ち滿ちて、ところ狹きほどなれば、其數も百を以て算ふるに足るべく、我等が隣りの棧敷には髮の油に黑く、面の白粉に皙き女の一群も見ゆ。曲は如何なるものぞ、と首さし出して觀るに、頭のいと大なる男の殿に打扮てるに對ひて、瘠せたる男の賤しきものに打扮てるが、雀を賣るといふ齣にて、近ごろは雀も少き故一羽の價三十兩なりなどいふ白あり。我等二人とも何の曲とも知らねば、これは何といふものぞと、伴ひたる婢に問へば、これは鳥屋小僧といふものなるを知らせられずやと、冷やかに答へて、物知らぬ人なるよと云はぬばかりにもてなす。曲も面白からず、夜の更くるをも恐れたれば、やがて月を踏んで歸りて、眠りにつきぬ。乙羽子は關の趾訪ひし記をつくる。

八日。朝夙く起き出でゝ天を仰ぎ觀るに、雲紅に美しくして風しづかに迷ひ、雨を含めるさまなり。今日も此家の食はすもの好し。猪口に一寸ほどの小鯛の鹹めに煮付けたるを罌粟ふりかけて出せるなど侮り難き心のきゝかたなり。久の濱までの汽車に乘りて行くほど、空は薄黑くなり霧雨お

の嶽の東なる湯本の湯のことなりや、明らかならねど、湯本の方は今もさばこの湯と呼ぶなり。飯阪の村人の口碑には、日本武尊の浴させ玉ひし由、を傳へたりと聞けど、記紀にも尊の事しるしまつれるくだりに、さばこの溫泉の名見えねば、尊の果してさばこの溫泉に浴し玉ひしやをも、またそのさばこのいづくなるべきやをも考ふる便なし。陸奧あたりを尊の巡りあるかせ玉ひしと見ゆるは、書紀の文に、則從上總轉入陸奧國とあるより蝦夷既平自日高見國還之西南歷常陸至甲斐國とあるまでの數行の記事に過ぎず。しかも船路行かせたまひしことのみを記したれば、磯邊づたひに遠くも北の方に進ませたまひたるなるべしと猜しまゐらし得るのみ。そはとまれかくまれ三函の湯といふなる湯本にも泊りたくおもはざりしにはあらねど、少き日の内に多くの處見んとするなれば、明日の朝の早き汽車に乘らんとて、平の町にやどりしが、こゝは一時は縣さへ置かれたりしほどの地なれば、市街も廣く人も多く、立並べる家居のさまも賤しげならず、我等が一夜の宿と定めし家などは、坐敷のさまも人のあつかひもなか〳〵鄙めかず、我等二人が坐につくややがて薦めし茶の色も香も好く、ふところゆたかなる鉢に煉羊羹を入れて出したる其器も其味も優に都びたり。浴じて後、膳にむかふに、海には遠からず山には近きところなれば、煮たる、炙きたる數々のもの皆よし、蘿蔔の菊形に刻みたるを甘煮にしたると青蕃椒の砂糖煮にしたるとを付け合はせとしたる生鮭の鹽燒は、おしなべて東京にて食ふ生鮭の美からぬにより特に美くおぼえぬ。土地異れば名の異

は今の道を離るゝこと幾干もあらぬ海邊の如くおもはる。越え難きまで峻しき山の端海に突き出でたる其磯に狹き路ありて其處に關の据られしなるべしなど日比豫め想ひ居たりしものから、我が想ひの餘りに違ひしに、少し魂拔けし心地して、道もせにちんちり松葉散り候がなん猶名こそあれ關の跡、とつぶやく。今の道の出來し初めは舊記に存して知れたることなれば、確に古の道にあらず、たゞいぶかしきは古の人の磯を行かずして好んで峻しき道を行き、隨つて關をも山の上に設けしことなり。山を下りて車を待たせし家に立寄り、碑摺りたるを買ひ、櫻の化石を見る。古き櫻の今は石になりたるを關の址より掘り出すといひて、人に物ずきの心を動かさしめ、購ひ求めしめんとす。まことに櫻の化石とは見ゆ。されどいづくより掘り出すにや。ここを立出でゝ海邊を行くに、九面の濱の景色いとよし。夕靄海づらに起りて、沖の方より漸く黑み來る入相のあはれさ、離れ岩の海に立てるあたり、特に秋も末つ方の淋しさを見せて、人をしてそゞろに濤の音には歌をおもひ風の聲には句をおもはしむ。名古曾停車場よりまた汽車に乘じ、七時半といふに漸く平町に着く。二人とも疲るゝこと甚し。

下

古の人の、さばこの御湯といひしものは、今の岩代の信夫なる飯阪の湯のことなりや、岩城の湯

昔幽けく、たゞ秋風の松に咽んで、尾花のゆらぎ涙立つのみ。きくたの關くきだの關よしなくの關といひしも皆此關の事なり。宮城の利府の近くに名古曾の關ありしといふ說あり。取るに足らざることゝいふべし。たゞ其關のありしところは今の碑のあるあたりなるや。前人記して曰く今通行の路は(おほよそ今の通行の路に同じかるべし)後人關くところにして古昔の地にあらず、里人相傳ふ往昔の道は關本村より里根川の北岸に分れて作といふ地を經、古關の跡あり、是より關の松山寺の東、關田目梶原氏の古城の西を過ぎて關田村に至りしといふ、今の道は里根川の東北なりと云ふ。されば今の關の趾といふは里人の相傳によりて定まりたることにや。常陸陸奥の國境ありしなるべければ、猶證もあることとなるべし。

聞老誌といふものに、相傳、大古素盞雄尊東征登此山頭、經此地而號名古曾關、後人山上立宮社祭牛頭天王、以素盞雄垂跡之地、六月望日行祭禮矣、とあれど、これもいふに足らぬことゝいふべし。我人ともに、名高き吹く風をの義家の歌に山櫻かなとあるによりて、おもふとも無しに山の間にあるべきところのやう思ひなせど、小町の歌には、見るめかる海士の行くへのみなと路に名こその關も我すゑなくに、とあり。歌によりて考ふれば、關は山の上なるべくもあらぬやうなり。また、西行の歌として傳ふるものに、九面や浪打寄せて道もなしこゝをなこその關といふらん、といふがあり。この歌によりておもへば、決め定めたる歌のさまにあらぬゆゑ嚴しくは云ひがたけれど、關

むべきところ〳〵と走るもありて、赤き臑あらはに逞しげなる男の往きかひいと急なり。大空は雲の涙立ち沖つ風さやけくなりぬ雨ふらんとす。また、舟のへに舟人立ちて天の原ふりさけみつゝ雨來んといふ。などと口ずさみて、ひそかに雨こんのこんは雨こんこんのこんなりと正太夫氏にや注せらるべきと思ひつきつ、其響きの何となくをかしきに獨り興ず。兎角する中、膳部も供へられ、乙羽子も來りければ、そこ〳〵に食を終へて、こゝを立ち出て、直に名古曾の關の趾へと車を走らす。道よからねど遠からねば、やがて關田といふところに着く。關の趾へはこゝより山の方へ八町ばかり入るとなり。車を關の碑の石摺賣る家の前に乘り捨てゝ細徑につき、上る。汽車の路を越え、山田の畔に添ひ、次第に樹の間草の間を分け上り行く。春夏ならば汗すべき路なれど、險しきにはあらず。山の頂上とも覺しき處に若からぬ松幾株か立ち、さるつぼうといふ葉の硬くして美しき矮さき樹など叢がり生へる此方に、關の趾の碑淋しげに見ゆ。碑は筒井伊賀の書にて古きものならず。其處より幾干も隔たらぬ松影に、小さき石祠二つあり。關東の宮といひ、奧州の宮といふもの、このことにや、これらも古きものにはあらず。此の處こそ關のありしところなれと道しるべの男は云へど、おもふに定かならぬことなるべし。東には九面の濱を望み、俗に稱ふる黑浦の名にも似ず磯打つ浪の雪と白きを見る。西は甚しく高くこそあらぬ山々連り聯りて起伏一ならず。道廢りて跡おぼろげに、眼の及ぶ限り人の影なく、雨持つ空の薄暗くして雲の色さへ悲しめるに海が下の蟲の

化しかゝりたるかとおもへば皆一様なるがいぶかしく、さま〴〵に考へたれど何ともおもひ得で、從へたる男に問へば、過ぐる日此湊の内にて船の破れたりけるが、其積みたりしせめんとの、日數經るまゝ海の底にて箍は斷へ樽は裂け散りたれど其物はかくてありけるを、やうやく此處まで引き出し來りたるなりといふ。北風には浪立ち狂ひて心安く船をとゞめ難き湊なりとは聞きしが、如何にもと、これにて嵐の日の此湊のさまも思ひ遣らる。隧道をくゞりて石磴を上り、此あたり眼に見ゆるもの皆凉しといへる蕉翁が句の碑立てるあたりに徘徊して煙草ふかしなどす。見わたせば渺茫たる太洋のまことに涯無き雲濤のさま、我よ人よのわたくしごゝろを忘れしむ。藥師堂もまた此處より望めばひとしほ好し。見るべきところもこれまでなるべし。いざ、とて來し道を歸るに、隧道の中より此處のわらまし千里鏡などにて窺ふごとくに見ゆるさまいと興あり。乙羽子は猶そこら寫眞せんとて其處に行き彼處に行く間、我一人先づ海に對へる家の樓に上り、晝にはいたく後れたれば腹饑えたり、疾く飯出せ、物食はせよと命じて、さて少時欄によりて眺むともなしに外を眺む。雲の色やゝ暗く、風ひやゝかに吹きわたりて、何となく天の凄じげになり行くに、灣内に風雨を心づかひて入り込める漁船どもの舟子等ざわ〳〵と騷ぎ立ちて、來るぞ、來るぞ、雨が、と罵りわめくあり、小傳馬の櫓を忙しく推して長きもおひ綱を陸地に繋ぎ置かんとするあり、棧橋の方にも聲々かしましく、苫を搔き抱いて我が船へと馳せつくるあり、濕らさむものと網を擔ひて、納

夜の睡りも足らぬ勝なりし上、途すがらの景を下物としては一杯一杯と重ねしまゝに、多くも飲まぬながら酒の氣に身を蒸されて筋も骨も緩みけん、車のゆるゝも心よくおぼえて、うと〳〵と眠る。川尻、高萩、磯原など皆夢心地に過ぐ。いづれも海近きところなるが、磯原あたり濱邊に下り立ちて鹽木破貝を踏みつゝ辿らば好き眺めあるべきところなるべしと見ゆ。關本といふに汽車を下りて先づ平潟へと車を僦ふ。其間遠きにはあらねど路あしゝ。平潟は水を控へ山に劃られたる窄き地なり。岸は風の日の浪に崩されて畵に相應はしきさまをなせど、灣は水の底の岩に礙へられて船を容るゝにゆたかならず。棧橋といふものいづれの港のもおほかたは陸地と丁の字の形をなして設けらるるに、此地のは岨に沿ひ水に駕して、蜀の棧道の圖を見る如くに造られたる、先づ眼につくの眺めなり。灣の南寄りの東の方に藥師堂あり、やゝ高き岩の端に立つ。堂のつくりざまもあしからず、樹木よきほどにこれを掩ひ、水その岩の下を繞れば、打見たるところおもむきなきにあらず。乙羽子はこを寫眞し果てければ、共に灣の北寄りなる八幡社の方へと歩をかへし向ふ。濱傳ひに爪端上りの路少し行けば隧道あるに、それには入らで先づ曲りて入りこめる水を隔てゝ、高きにある社を望む。社は取り出でゝ云ふべきほどにもあらねど、一むら茂れる森の半を隱し半を見せたるになか〳〵風情あり。乙羽子が寫眞する間、何心も無く岨の下なる磯を見れば、其形ぶり〳〵といふものに似て大さ米苞ほどなる青黑きもの數多く浪打ち水かゝるあたりにまろび居れり。材木などの石に

えたる小さき魚は、此霞が浦より出づるなり。君に隨ひ從へるによりて文字をば公魚と書き、新庄侯の封地にのむ棲むものなればとて⿰魚新とも書くとぞ。まことには如何なる漢字をあつべきや知らず。はた〳〵といふ魚の佐竹侯に從ひ、青魚の松前侯に隨ふといふたぐひのことなるべし。水戸の停車場に近くなりて、右には七崎八澤の風情多き仙波の湖を、左には名高き公園を見つゝ進む。茂樹千林翠黛を涵し荷花十里芳芬を吐くと人のいひけん湖の、今は樹の葉も落つるに垂とし花の匂ひも疾くに盡きたる時なれど、さすがに秋は秋のおもむきまたたゞならず、柳の梢やゝ透きて塘吹く風のゆくへ寒げに、水鳥の二つ三つ末枯れ行く浮萍の間に遊べるなど、いと物寂びて靜かなり。咲けるを雲と疑ひ、散るを雪とまどひて、打興ずべき春も忍ばるゝ櫻山の麓を過ぎ、杉立神々しきが中に在したまふ東照宮を左の方に仰ぎ、弘道館も彼處なりとのみ見て通る。乙羽子もわれも一たびは遊びたる地なれば、常盤の園の此頃のさぞかしとはおもはざるにあらねど車を下りんともせず、こゝにて野口翁に別る。水戸を經て後、やゝしばしして佐和といふ小さき驛に至れば、停車場も大きからず、燒きたる杭にはりがねを貫きて圍ひこめる其の構の外はたゞちに莖くれなゐに美しき蕎麥の、粉雪をいたゞく花咲き渡りて、昨夜の雨匂ふ土の色さへ人の眼にこゝろよき畠につらなれるなど、いと鄙びておもしろし。久慈川過ぎて、左りに丘を見、右に海を見る。水青く浪白き眺めを眼にするは今日初めてなり。乙羽子もわれも、旅立たんとする心がまへの事しげさに二日三日ほど前より

匂ふけもなし車にしわれれば、と、我は我がはかなき思ひを懷中冊子にかきつく。南千住の停車場までは室中我等二人のみなりしが、其處より乙羽子のかねて知れる野口翁乘り合はす。むづかしげならぬ人なれば初めて會ふたる我なれど、そのそこに見ゆるは何といふ山かしこに流るゝは何といふ川などゝ問ひて、幾度となく敎へを受く。柏の停車場あたりより右に手賀の沼を見る。螺鈿に用うる貝、東京近くにては此沼より出づるもの堅くして好き由、かつて或人に聞きぬ。我孫子、取手を過ぎ、蠶飼川を越ゆれば、はや衣手の常陸の國なり。筑波根のにひくはまゆのきぬはあれどと詠みし古き歌も、此國ざかひの川の名につけて思ひ出さる。牛久といふところに到れば、牛久の沼先づ眼に入る。鯰鰻など多く此沼より出づる由なり。女化の原のほとりを行くに、やがて荒川沖といふ停車場を過ぎければ、をかしき地の名なりと我も人も笑ひを催ほす。藤森弘庵が筆に上りて光りを揚げたる霞が浦も、松原のはづれより現はれ來りて、土浦に着く頃、汀の草の遠く煙り水の遙に天と接はる優しのありさまを全く見せぬ。特に打續きたる雨の後とて、人家も水に浸り、市中より停車場へも船にて往來するほど水嵩増したれば、常よりはあはれに見えたるなるべく、小田北條のあたりの山々は左の方に見ゆれど、其後方なるべき筑波の山は猶雨雲の名殘に立かくされて、そことも知れず、折々洩るゝ薄き日さしの掛け乾しといふことしたる稻の苅穗を僅に照らすなどなかなかに淋しき眺めなり。わかさぎといひて、雛祭りの時は必ず供ふべきものゝやう東京のものゝおほ

うつしゑ日記

上

十月七日朝早く寺島の家を出でゝ、上野の停車場へと心ざし、車をいそがす。五時をわづかに過ぎたるばかりの頃なれば、道のほど曇り天の猶ほのぐらく、墨田の堤に人影も無く、某の工場の汽笛水に響きて寂しさを破るさへ、却つて秋の曉の靜けさを添へ、霧立ちこめたる川面茫として海の如くにて待乳の山の定かならず見ゆるなど、眼に熟れたる土地ながらおもしろし。上野に着きて待つ間も無く乙羽子來りぬ。共に先づ行かんとおもへる磐城の方に汽車の出づるには猶數分時を剩したれば、此の暇にとて乙羽子奴をして酒と酒盞とを買ひ來らしむ。兎角する中其時となれば、誰しも同じ心なるべし、我も人も忙はしく車に乘る。六時二十五分といふに車は動き初めて、爲すことも無き車室の中に此日の天の雨にやなるべき此夕の宿の悲しくやあるべきなど、かたみがはりに想ひを語らふ我等二人を全く旅の人となし終んぬ。百里の路に杖笠の備へもせず、煙草のけぶりゆるく立てつゝ、樹の間、籔蔭、田圃の中を、見る眼忙しきまでとく走る身の安らかに坐して行くこと、今さら云はんもおろかながら汽車といふものゝ恩惠なり。されば、はにふ行きはりはら行けど旅衣

やうになりたりければ五重塔の傍より抜けて松葉館といへるに至り、ほつと息して疲勞を休めぬ。此家は高みに寄りて構へ成したれば大森の海も眼下に見えて吹き來る風も心地快く、一浴して椽に立てば衣を千仭の岡に振ふと洒落ても可き思ひあり。二人とも此地まで來たれば既家に歸りたるも同じ事とおもふまゝ心を寬くして一日の可笑かりし事ども語りては笑ひ、笑ひては瓢簞の中ならぬを酌みて陶然となり、頓て汽車一ト飛十時といふに家に歸りぬ。

して、繫り船一つある其手前の汀に夫婦とおぼしき農の牛蒡を洗ひ居れるあり。芋洗ふ女西行ならば歌よまんといへるも思ひ合されて可笑く、牛蒡洗ふ男女を乙羽なりければ忽ち撮影したり。矢口には一箇所位はと樂みにしたる甲斐も無く、到りつきて見れば新田の祠は燒後新に成りしものなれば、神社には似合はしからぬ煉瓦と漆喰の腹合せの玉垣も口惜く、艶消し硝子に鐵の捧など見えたる本社も片腹痛く、詮方なければ是は擱きて池上の方へと心ざし進むに春の日なれど漸暮近くなりて、本門寺の森を眼遠に望む頃には夕陽の光り黃ばみ來りて餘光幾千も無からんとす。此邊にて今一枚と技師油斷無く見廻しつゝ行くに、道の側に石の塔あり、何かの供養に用ゐたる卒塔婆一二本を入れ置けるものも其傍近くありて、村童の遊び居れるも時に取りて風情を添えたり。是をと早速黑き布を被ぎて技師の覗き居る最中に背後の方より、是も村のものなるべし十四五の女の兒の風呂敷包みを袖にして來りしが有りしかば、これを生擒りてと、立たすべき位置を見計らひ置きつゝ予は例の調子好き愛嬌ある聲にて、小姐〳〵、ちよいと此處へ來て立つて吳れぬか、と呼び掛けしに、其聲は銅鑼の如く聞え、其態は攫んで食ひさうにでも見えしにや但しは須磨に流離ひし昔の雲客にも優りたる殿御と予を見て羞かしがりしか、面にさつと紅色を潮して脚速に元來し方に引返し逃げ行きて再び來らざりしは氣の毒にもまた可笑かりし。日もいよ〳〵落ちかゝりたれば是を打止めにして本門寺に詣りしが、技師は疲れに疲れて一段一字の例の阪を上るに臨みては千鳥がけに攀づる

眼の塵も洗ふばかりなるも、此邊はたゞ茫々と濶く平かなるのみにて川手前の上の方に淺間の祠の續きの丘あるほかには眼に障るものも無ければ、此處と定めて指すべき方も無し。此眺望に手を空くすべきにはあらねど如何はせんと技師も予も水の面を見居けるに河中の淺き瀬に立ちて蚊鉤といふものもて懷中刀ほどの大さなる若鮎を釣れる男あり、又岸近く引寄せられたる老船あり、川原に四本鉤の鐵錨あり、これらを取合はさばとの技師が考へに、醉興にも予は大多力をもつて錨を船の艫に移し、船の中は水入り居りて足踝を沒すべく見ゆるまゝ船縁に蹲み居て再び水晶鏡の中の人となりぬ。此處より川原傳ひに矢口まで行き得べしとの事に水邊こそ猶好きところもあるべけれど逶迤屈折て川添を行き、鵜の木の光明寺を遙に左の方に見て、彼をと語り合ひしが上越す景の前途にあるべしとおもふより其儘に過ぎ、下平間の渡しも何時か後にし、矢口の渡し近く進みしに、堤と川との間に小草の菌なして白き傘を假の日除とし、川下の方へ向ひて眞景を描せる若き油畫師あり、其同伴と見えたる二人も彼是同じ程の年齡なるが、是は既描き終へしと見えて坐せる傍の草の上には畫の一二枚あり。此の邊河は面白く彎り流れて麥の綠なる菜の花の黃金色なる、遠く見ゆる榛の樹楢の樹の連たり續きたるが涯は霞と一つになりたる、姿こそ見えね、那處にて鰍ぎゝぎゝところころと雲雀のはや啼くなど、取出でゝ云ふべき奇も無けれど眞に田舍の春の態を代表すとも云ふべき景なれば、畫家の擇みしも流石に理ありと思ひつゝ會釋して其前を過ぎりつ、行くこと幾干ならず

えざれど庵あり。人に尋ね問へば御松庵とて日蓮上人が毒龍を點化せし故跡と云ふ。池を洗足の池と云ふも由ある名なるべし、大士袈裟掛の松今は枯れたれど竈の下にも入れられず伐りたるまゝに存されたり。故事は兎に角に遙隔ちたる對ひの岸の出張りたるところに八幡の祠の鳥居の水際近く立ちたる、また其左りの方の地勢彎曲して水の流れ河の末かなんどを見る如く奥深げに入り込みて見ゆるなど中々に無味なる圃續きを朝より見し眼には風情あり。惡き後は好きもの、先づ〱店を開くべしと技師も勢つきて、疲勞は全く忘れ果てつ、急に車より器械を取下し、二枚此處にて撮影したり。これより心に張の出で來て、多摩川緣に出でなば猶好きところもあるべしなど語り合ひつゝ丸子指して行きけるに下沼部といふ地にて小流に架せる「けゐちやう橋」といへるを過ぎる因に左手の方を見れば、里童等七八人流れに横はりたる小舟に乘りたるあり川中に立てるあり岸に立てるありて何事とも無く遊び戯れ居たり。予が眼にも可笑と思はざりしにはあらざりしも、たゞ是小說の添へ景物と見過しけるに技師は流石にたゞは通らず、好題目ござんなれと器械を取出して撮影さんと試むる折しも自ら寫眞中の人たらんと柄の長き鍬を持ちて其を洗はんと流れに下り立ちたる農夫あり、流に傍ひたる路を柴負ふて行過ぎまくする少年あり、益々興ある材の麕集たるに、暫時の間ぞ、其儘〱と彼等に聲かけて制しつゝ首尾好くパチリと寫したるは出來上るべき圖のみならず其事もまたいと興ありし。かくて程無く丸子の渡船場に出しが、いつもながら玉川の清き流れ見る

るだけの事は爲るから此を附けて行つて呉れと賴みて答も待たず旣器械の入りたる箱を車の上に打載せつ、ほつと息を吐きしは敏捷かりしが、不圖心づきて熟く視れば、平めなる籠に山盛にして筵もて掩ひある車上の荷は、是は抑如何に、其往古何某禪師は此品の乾きたるをもて芋を燒きしとか聞えたれど凡夫の我等より觀ては嬉しからぬ肥料用の物なり。勸めし予も悪ぜし技師も呀とばかり少し萎みしが、通といふ言葉はかゝる時人を慰むるに非常の力あるものとて、汝一句、予一句どうも通だ、實に此邊が通といふものさと互に無理壓に通の一語を以て其光景を讃せしは苦しくもまた可笑かりし。されど眸中の天地相も變らず平々凡々たるには愈々面白からぬ感のみ高まりて、少々は待つても彼の次の汽車で川崎の方へ行きしならば此樣もあるまいものを、アヽ急がずばとは古い奴が巧いことを云つたものだなぞと腹の中に下らぬ想を湧しつゝ步みけるが、池上村字道々橋といふ處にて車挽ける男の一寸休んで參りませうといふに是非無く我等も一服と腰を休めにかゝりし途端、道の右手に家列に欠けたるところありて其處に例の何やらの標の石の立ちたる態其奥には寺ならずば宮にても有るべく思はるゝが見えしかば、試みに趨りて其處に到り見るに、忽然として眼界新まり、ばら〳〵と立ちたる樹の間より和かなる春の日に照らされて漾々たる水の面も一ト入美しく凪ぎ渡りたる大きなる池の見えたり。今日初ての好き眺めを見出し得たることゝて占たり〳〵と叫びながら猶進み行きて見るに、出島樣になりたる地の樹木好きほどに生ひたるが中に寢ては見

譯には行かない、まるで詰らぬところで歩行損としても二丁の往復で濟むことゝ技師を勸めて横に折れしに、二丁行き三町行き四町も行きたれど、それぞと思はるゝものにも會はず、技師は豫てより那處其處へ行かうといふ決定した目的無くて行く我等には迷ふといふことも無しと說き居たりしも、如是なりては餘り面白からず、左樣〳〵は長閑氣にもあり得ずして人にさへ逢へば摩耶尊へは此路を行きて可きか惡きかと問ふやうになりぬ。行くこと良久くして終に佛母山摩耶寺といふを得たりしが、見つきの一寸好き割合には是また撮影すに好き點少く、全く徒勞となりければ、本意無く池上の方へと行くに、予は手にせるもの瓢簞一つのほかには何も持たざれど技師が肩より懸けて持てる器械の一箱は二貫目の上は慥にあり。日は溫煦にして重ね小袖に羽織にては些汗ばむを免かれぬほどなり。醉ひてはならずと心したりし目黑の小酌も幾分の四肢倦怠を增すには力あるべし。これにて二人とも大に弱りたるに搗て加へて路は變化無く興味無く、器械を組み立てゝ覗いて見やうといふ處などは藥に仕度も無ければ、ほと〳〵辟易して似而非勇氣を鼓しての冗談の聲も漸く途切勝となり行きけるが、適々若きと中年との二人の男と何やらを荷にしたる車を聯ねて挽き行くものあり。予は技師が重荷負ひたるを先刻より氣の毒に思ひ居ければ、幸のことなり君其荷だけを車の荷の小附に仕て貰ひ玉へと賢しら立ちて勸むるに、肩も相應に痛くなりたる技師一も二も無く同じて、オイ〳〵此車は那處まで行く、ムヽ丸子の渡しの方へか、丁度好い、それなら汝の帆待にな

邊りまで行きて、それより多摩川畔を上らんものをと間の拔けし時出るは愚痴のみ。別に良き分別も無きまゝ怜悧らしき顏して待合室に居たり立つたりなし居けるが赤羽行きの車の頓て出づるといふに、さらば其方にて目黒の方に行きて見ん、もとより川崎と限りたることも無ければと急に飛乘りて譯も無く目黒に着きぬ。停車場を出でゝ少し不動堂の方へと歩むに甘諸先生の墓これよりと道しるべせる石立てり。我等聊か恩を受けたる心地すればなど戲れながら道より右の方へ入りて見るに、碑は小高きところに在りて、取出て云ふべきところも無きものなれば、况して寫眞などにはすべくもあらず。二人共に興醒めて其處より直ちに不動堂の裏に拔けしが、不動堂も人の知る如く然まで撮影したきものにもあらず。樹がくれの鐘樓、龍の口より落つる瀧、さては經藏二王門も或は妙ならず、或は日光の工合惡く、或は見限の巧くつかねば技師は手を空しくして坂を下り、予も啣へ煙管て總門を出てぬ。門前の茶屋〳〵が店頭に立ちて口々に客を招く女どもの頭を光らせ面を白くせるも、まさかに撮影し難く、たゞ徒に筍飯の美を思ひてや技師先づ內田といへるに入り込み、實は今朝晏起してと可笑しき腹の中の消息を洩しけるも罪無きことなりし。晝には猶間あれど此處より先は然るべきところも無ければ共に十分に腹ごしらへして、いざとて立出でしが池上の方へと行くこと長からずして摩耶尊これより二丁と記したる石あるに、甘諸先生にも猶懲りず、何にせよ此樣いふところへ入つて見て人も餘り知らないやうな面白い景色を見出さなくては妙といふ

春の一日

塵埃紛々たる銀坐通りにも春色溢れて、柳の風に舞ふ姿さへなまめき渡り、小娘の頭に挿頭の櫻の花やゝ多く見ゆるやうになれば、可惜好い天氣の日曜を机の傍でのみ暮すといふことあるべからず、出玉へ〳〵、僕は寫眞機を携へて趣味ある眺めに出合つたらパチリピシャンとシャッターを用ゐて撮影すほどに君は出來事の興ある節もあらば筆に仕玉へ、太郎右衛門が櫓には桃紅に、次郎作が背戸には李白く、小社の側の椿の花、麥圃の間の菜の花といふやうに花づくめの天地、那處へ行くとも面白からぬことはあるまじ、此度の日曜には必ず御誘引申しますから出かけ玉へとの乙羽庵が勸めに、元來長閑氣宗の宗徒にさるものありと自ら誇り居る予なれば後へは退かず、心得たりと答へけるが、永き日も經つて見れば疾く、忽ち約束の其朝となりぬ。天の色、鳥の聲、いづれか春ならぬは無き無類の好き日和なれど、時節が時節だけに詩の本文通り曉を覺えず眠り過して九時頃漸く朝の食を爲し居たる折しも、これも眠過したるらしき乙羽庵は寫眞機一具を携へて洋服姿の甲斐〴〵しげに打扮しつ訪ひ來りければ、さらばとて此方は一瓢をぶらつかせて躍り出し、兎に角に新橋へと足を向けしが、停車場に着きて見れば下りの汽車は既出し後にて猶四十分も待たざれば橫濱行きは無しとなり。每度馴れたることとなれば忌々しくも思はねど、今少し疾く來たらんには川崎

ひ做せるも無理なる過誤にはあらず。おもへば人物の評は數千載の歷史を明めたる人の評山水の評は五大洲を跋渉したる人の評ならでは信ずるに足らず。信じて後に言の違へるを責めむは責むるもの、愚なること先づ責めらるべきものならむ。かくいへばとて須磨明石の景色の少しも惡きにはあらでやすらかに好き景色なり。舞子の濱の松もよく、淡路の島の近きもよし。舞子の歌女樓にて

　涼しさや會話吹き消す沖の風

かくて、大阪に留まれる中舊稿の校正を了へ、奈良見物紀州めぐりは身體工合の惡きより厭になつて、何時でも行かれる地はまたの事となすべく考へ定め、むら〳〵と家に歸りたくなりしまゝ飄然として谷中の草庵に戻れば、庭には草滋り室には蜘蛛の圍かゝりて、小僮ばかり淋しげに留守して居たり。されど我が庵とおもへば疊のごそつくも物憂からず、旅返りと自ら題して

　三景の夢に飽かうぞ竹むしろ

と下らぬ高慢を吐き、明くる日向ふ島なる父上母上はじめ妹弟の無事な顏を見ける。折ふし庭前の紅蓮の三ッ四ッ尚ほ殘りて美しく咲けるを看て

　蓮の香に醉ふて寢まらむ親の家

込みけるが、鴨川の納涼の風情見に出て丶新潟の間違とは反對に、昔知つたるもの丶掛け聲を受け、やあ珍しい汝は當時は此地に居るか、さても其後何としやつた、と忙しく話しかくれば、まあ〳〵此方へ斯樣ござれと案内されぬ。

其一二十八

九谷燒のやうな舞妓は野客の眼の中のものならず摺鉢の底の如き景色は三日めに厭になつて京都を背後になし大阪へ赴きぬ。俗評には洒落たところとでもいふべき北濱に宿とりて盡日水の流れを看て暮し、夜に入れば則ち小舟に乘りて凉をとるに、舟凉みの風情は東京西京にも無き態にて大俗却つて生風流より遙に妙あり。一日西村天四子の紹介にて加藤紫芳渡邊霞亭二子に初めて網島に會ひしに生憎其日は我腹工合殊にあしくて名士を前に置きながら談話さへはか〴〵しうは得せで可惜舌長の美人どもに囀らしけるもいとをかしく、流れを下りて歸るさの舟中某子の唱歌を謹み謹みて默り込みつ丶聽きしも愈〻をかしかりき。柵草紙の紹介にて秋渚好尙梅崖諸子に會ひ、共に須磨明石に遊びしが、須磨も明石も想ひしほどの眺望にはあらず。都て都會近きところの名所は詩に歌に稱揚せらる丶こと多ければ評判こそ盛んなれ實は然までならざるが常なり。殊に眼界狹き都人士の評ほど賴みがたき者は無ければ須磨明石が如何ばかりか好き景色のところのやうに云ひ做し思

其　二十七

天橋を觀るに觀所二つあり。一つは但馬の城の崎丹波の福知山などへ行く方の舊道の中の樗峠なり、此より見れば天橋を横一文字に觀る由。一つは即ち傘松の下にて、少し斜なれどまづ縱一文字に觀るなり。樗峠はやゝ遠く傘松はよきほどなれど、人によりては樗峠より視るを最も好しといふ。我は成相寺より下りて此度は船を先に遣り置き、我一人天橋の松の間を歩みて橋立明神の所よりまた舟に乘り、切戸の智恩寺に詣でける。天橋の松樹は丈の長短不揃にて、老いたるもあればまた左まで大きからざるもあれど、下枝皆揃ふといふ云ひ傳へあるだけに必ずといふにはあらねど大抵揃ひ垂れたる景色歩行きて視ればいとおもしろし。磯清水は今汚れぬ。智恩寺はよき寺にて山門も塔も本堂も俗惡ならず、宮津の濱の淫風を鎭めて呵慾の文殊法王子居たまふところなり。門前の家にて名物「智慧の餅」「才覺田樂」など賣り居ければ、此上才覺が出ては天狗道にでも墮つるであらうと笑ひながら田樂を食ひ、目の下尺何寸といふ鯛の獲り立てを刺身にさせたり潮煮にさせたりして隨分通を極めしに酒をこそ飲まざれ勘定二十錢に滿たずとは呆るゝほどに廉けれど、さらば家でも不潔かといへば濱に臨める三階作り左程俗でも無きが妙なり。それより龍燈の松涙が磯など横に見て宮津に歸り、明る日馬車にて福知山に行き、其また翌日京都に入り、態と皮肉に馴染無き家に泊り

高が塗盆に豆を撒いたやうな者ぢやと嘲らむ、天橋を最も美と稱する客あらば、茶腕に黒もじ落した同然と笑つて退くべし。然あらば木曾の山路の景中國瀬戸内の眺めなどの中に日本一の者あるかと問はば詰らぬ問かなと一氣に呵して斥くべし。畢竟三景皆佳なれども甲乙の位付は爲るが野暮なるべし。況んや山峙水流の地の美は無限の變化ある天の美に及ぶべくもあらず、紅霞白雲夕陽明月電閃雪飛の天の美は無心の小兒の空より齎す花の笑顔仁義につくす大丈夫が同胞のため澆ぐ珠涙の美なるに較ぶべくもあらぬに、何とて小さき日本の中の三景なんどの優劣上下を事おも〳〵しく語るに足らむや。彫蟲篆刻も壯夫は之を屑しとせず、品山評水揚々たるは男兒の私に愧づべきことなり。古今錦心繡腸の客筆下生花の才を抱いて一生一萬八千日枉げて山水のために注脚を作るごときは唾して棄つべき風流魔ならむ。人の人にして山水を詠ぜば固より不可なし、山水の臣にして山水を詠ぜば山水神靈に佞するの小人、醜厭ふべく陋賤むべし。優劣上下を評ずるごときは山神水靈に負くもまた鮮しとなさず。山水はたゞ觀たるがよし、詩も無く句もなく理屈もなくたゞ觀たるがよし、たゞ觀てたゞ樂まば風流は足れり、橋立は淸し松島はうるはし宮島はやすらかなりといふ位に一言し置て我は口を噤まむ。あまりに人の優劣論耳朶に觸れしまゝ、おもはず理屈屋になりて大俗に墮しける我あさまし。

の下に到り、さあ此所より天橋御一覽あれといふ舟子の言葉に初めて首をめぐらし顧視すれば、實に日本の三景の一つと云はるゝ景色にて、與謝の江與謝の海を劃れる白沙青松、浮ぶが如く、六里の翠色萬頃の波光と詠じたるさま畫にも及ばず筆にも及ばず、「見ずば知らずと答へまし」と烏丸卿の詠ぜられしこそ負惜みの無き眞實なれ。岩瀧の村芳野の山、九世の文珠堂は近く前にありて黑崎の鼻は左に遠く、釣する蜑の小舟の往來、賤が家より立つ煙り、みな詩趣ありて面白し。「天の橋立股眼鏡」とか稱へて登臨眺望の客皆一度は仕て見るものゝ由なれば、可笑くて堪らねども全景に背を向け身を屈め、頭を垂れて股の間より伺へば、眼の加減にや今までは淡彩畫のやうに淡く見えし景色油畫の如くパノラマの如く見えて水の媚び山の粧ひ一としほにおもはれ、水中に天あると疑へばまた天上に水あるに似て長橋これに架せるありさま、踏まへどころもなき蒼穹に虹の立てると異ならず、際涯なき海に浮島の漂へるにもまた似たり。いざや煙草と地に坐して時の移るも打忘れ、觀ること之れを久うして、

はしだてや此江の上はあまの川

我嘗て松島を小雨そぼ降り微風吹く日に觀、嚴島を波平かに日麗かなる時觀しが、薄雲去つては天明かに復出て來ては山樹煙る日此橋立を一覽し畢へ、まづ三景のあらましを知りたれば試みに之を評せむに、宮島を最も好しといふものあらば我扇頭の小景と罵らむ、松島を最も妙と誇る人あらば

(二)働き實にかしこく、無難に客を送り込めば、婦女などは本船に移るとひとしく胸撫で下してほつと息つくばかりなり。さて海上は事も無く平穩無異の夢見ながら金ケ崎に翌朝着きぬ。恒良尊良兩親王のかしこくも兇賊どもに取り圍まれて籠り禦ぎ玉ひし金ケ崎の城は即ち此地の山の手にありしなるべく、心あるものども兩親王をまつらむと當時神祠の造營中なり。敦賀も一寸覗いてまた直に船に乘り、其日の暮方丹後の國宮津につきて、
波間からぴんと出たり浦の玉兎

其二十六

天や、曇りたれど橋立一覽の念勃々として止み難ければ、小舸を僦ひ朝夙く客舍を出でゝ鏡の如き江上をゆら〳〵と漕がせ行くに、舸は小なれど苦をかけ毛氈を布き火入まで備へたれば乘り心いと好し。櫂樹て網乾せる態さへ恰も繪なる漁村を左に戀の船付の新濱後にして漸く松影婆娑たる長洲即ち天の橋立に沿ひ、北へ向ひて進む中、汝は名所の講釋せよ、舟は我が漕いて遣ると船頭を休ませて自ら艪をとり、和泉式部が此所で小式部の內侍を產みましたなんどゝいふ無茶な談をきゝけるものをかし。頓て籠り神社の前に船着きければ社前の茶店に一ト休みして下駄を藁草履に代へ、直ちに成相山に上るに路は嶮しけれど苦しきほどにもあらず、右に折れ左に曲り、上り〳〵て傘松

住むこと無く此地邊に住ふが得策ならむ。物價も廉く人も優しく山水遊觀の地も少からねば、冬季は格別餘の三季は住むに住みよき小樂園ならむ。水戸の公園より佳き公園にも二三時間彷徨ひつ休みつすれば少し倦きの來て、紀念の銅像博物館の眼鏡橋など無くもがなと徐々惡口を仕始め、ぐるりと周つて金石道に向ふ途中、尾山神社の層樓を、下手が描いた龍宮城の大手のやうぢやと笑つて評し、西の方へと歩み出しぬ。

其　二十五

何國も同じ車夫の詐言憎む迄も無けれど、我を田舍漢と看て金石まで些少の道程の處を二十何錢といふに、馬鹿野郎め確乎と仕居れ、土地の者の癖に里程を知らずば教へて遣らう歟と烈敷一喝すれは、直に弱腰になつて半分ばかりに負くるも可笑しく、元來風儀の惡からぬ地なれば下司さへ狡猾を附け燒刄にしたるばかりにて、狡猾に善良の鍍金したるとは差ひ、いと與し易し。金石は艀船のむづかしきところにて、我今まで諸所の艀船にて乘りしが此所のに比すべき險惡なるに乘りしこと無し。是ぞといふべき風ありしにもあらず、又波立てるにもあらざりしが無言で來り無言で去る所謂「ウテリ」といふもの、其恐ろしさ氣味惡さ、舳の上がる時は艫の方に轉げ艫の方上る時は舳の方に轉げんとす。されど舟子の熟練もまた賞すべきものにして「ねりがい」操つて水かぶらぬやう臨機

幡、森下と段々徒歩に人力車に過ぎ越して金澤へ着きしが、日尚高ければ、途中の聞き覺えを心頼みに旅亭などへは這入り込まで、市の入り口に路を狹みて構へたる藤茶屋柳茶屋二軒の中の（共に趣きわる家なり）柳茶屋といふに一ト憩して直ちに兼六園に車をつけさせける。園は自然の山水により營み設けし者とて風致極めて佳く、老木枝を交へ清流響を發する間に小橋を架せる捨石を置ける皆それ〲に見ごたへあり。元來地形高ければ谷を隔ては遠近の山々を望み、少しく下ては奔瀉涼風を起すの瀧を看るべし。それのみならで俗惡ならざる樓あり亭あり掛け茶屋あれば雅談小酌するにも好く煙草休みも興無からず。通は初めて此市に入るとも必ず突然園に走り込みて諸事遠慮氣遣ひなしに十分のさばり遊ぶべし。金澤は人氣寛濶にして風流ある所と人の噂するに違はず越中邊とは大きに異りて、男女の言語もいよ〲京に近く、風俗も上び、人多くは温雅にて狡猾慓悍らしきは少く、商人もまづは客を覗て價を變る「みかけ賣り」の如きことをせず、旅のそのにも心置かれのせぬ土地なり。さる代りには市中活氣乏しく戶數も減り行く樣子なりとか。普通の見より論じなば何とかせねばならざる場所と少しは批を入るべきか知らねど詩的に評せば好もしくもまた好もしきところといふべし。あてにはならねど我が感情では仙臺よりも好いて觀たり、新潟よりも好いて觀たり、稍似て非なる名古屋よりも亦また好いたる地とおもひぬ。（繁昌の度は名古屋もとより勝れるなるべし）公債なんどを握りつめて營業しまふた屋の生活する人世に益無き人などは東京あたりに

れど此國船持多くて、孰も商業にかしこく才鋭く、隨分四方に横行して他國の者に後れを取らじと忍び難きことをも忍びて爲ること一般の氣象と云ひても然るべく、これにて德義の制裁さへ力弱からずは愛すべきところと褒めてこそ至當なるべけれ。海邊ならざるも富山高岡などの人の進取に富める活達の氣象は加賀の金澤などに比して詩人的愛情無き普通の眼より觀は畢竟讃辭を贈らざるを得ず。我神通もなき身にて一瞥見の所感を賴みに豫言を爲さむは烏許なれども、明治生れの者どもが日本の舞臺を占むる頃には必ずや伏木歟岩瀨か高岡富山歟何處か知らねど此國の中より精悍强氣の商人出でゝ天晴碧き眼玉の奴輩を敵手に功を立つるならむと斷言するを憚からず。願ふは氣宇を濶大にして、高岡の米相場に勝を得し圖に乘り金澤へ打つて出づるごとき取るに足らざる勇氣を弄せず、北海道をのみ金庫とおもふごとき守株の見にも慊かざる壯士の、初は鷄口となつて落地の米粒を啄むを辱とせず後は獅子吼をなして冲天の鳳の膽をも破るやうなる意氣を發せむことなり。扨伏木より高岡まで眼に新しき眺望も無く、たゞ「垂れ筵」をせる家の多きが心に止まるのみなり。高岡は商人の勵み强きところにて市井の雜談に少時耳を假せば旅の者にもそれと解るぞかし。それより立野福岡と行く道すがら笠つくる料にとて、賤の家々の女どもが菅苅りて乾すを看て

　菅干すや狗うづくまる椽の下

書くも恥しきことながら藍の花の風情を初めて知りしもをかしく、獨り笑しつゝ石動、竹の橋、津

に理をつけ、悠然と膝を拍つて舟辨慶を謠ふと記せば大きに體裁はよけれど實は有り觸れし詩を吟じ歌を誦せる中、船ゆら〳〵と大搖ぎに搖ぐと見る間に釣り下げたる船用洋燈煽りに煽られて發矢とばかり天井に衝突かれば光明たちまち滅して、眞黑闇となりたるは好い氣持にもあらざりけるが、小童を呼べど聲達せぬか來ざりければ、自ら歩み寄つて鼻を撲たるゝ途端の拍子に洋燈を把へ、船通だけに底を回して火屋より抽き出し、袂の燧木幾本か費して漸く火を點じ今度は搖がぬやうに苦心して縛りつけゝる。我幸ひに船に乘るをば馬車に乘るより樂におもへば、それより頻りに寢るとを工夫し初めて、終に中央に大の字なりして仰ぎ伏せば好逑をおもひもせての輾轉反側を免るゝことを會しつ、一ト眠りして明くれば越中伏木港なり。宵の騷ぎに腹の減りしこと大方ならねば宿屋の婢を魂消さするほど朝飯食ふて、いで高岡へと歩み出しぬ。

其二十四

農夫は「鍬を用ゐれど鋤を用ふること無く」牛追は鞭をもて驅り使ふことを爲せども「鼻の障子に籐を通して控制することを爲さぬ」ほど萬般風流寛濶なる佐渡の人氣とは異りて、越中濱方の者の甲斐々々しきは云ふまでも無し。日本諸國に渡海を業とするもの雲霞の如くあれど越中船の奴等のやうに卑劣根性有つたもの他にはなしと罵るものも無きにはあらねど其は一方の酷評なるべし。さ

さまオイ〳〵と呼び掛けしが、何所かに訛りある聲つきにて何か知れざりしも返辭され、南無三こりや人違とずつと通り過ぎながら、面はやすいもの世に二つあるまじきにあらずと一人で可笑がりける。先方では定めし厭な奴に遇ひしと思ひしことなるべし。これが萬一我が恨みある女かなんどなりしならば天晴膝栗毛を遣つて退け、紀行に書けぬ事をも仕出來せしなるべし。おもふに一九はかゝる實際を種子にして巧みに品玉を遣ひしなるべし。

其二十三

名士を訪はずして古墳を訪ひ美人と語らず老嫗と語ること我が旅に面白しとするところなれば、越の雪肌麗はしき女達をも顧みず「阿萬阿袈裟」の往時をも忍ばで好色修行の功名を笑つて兒孫に附し、八百八後家の市を後に飄然と直江津へ向ひ發しける。甚句で名を知りし米山、初君といへる遊君の譚で記臆し寺泊りも横に見過ごして直江津に着きしが、遊思猶衰へで此港より高田長野輕井澤東京と歸るに堪へず、雪見には轉ぶところまで旅には悲しくなるところまで、行け〳〵迷ひ見になれと、伏木へ船の進むまゝ身を任せけるが、波風いと荒くして潮の光る夜のさま凄く、なまらばなれと、伏木へ船の進むまゝ身を任せけるが、波風いと荒くして潮の光る夜のさま凄く、なまじひに上等劵買ひしため室中に唯一人しよんぼりと、起つて見つ臥て見つ、空しく廣きを喞つ心我ながら愚にもまた可憐氣なり。されど相人のありて嘔吐の聲聞かせらるゝよりは是もまた可と無理

湯せるもをかしく、頓て出帆知らせの汽笛に、そりやこそと艀船に飛び乘りて、砂金袋の形せる佐渡の國をぞ離れける。佐渡は概して孤島の常とは云ひながら風俗輕薄ならず、人の活氣の乏しき代り狡黠のもの殆ど無く、性質鈍なる我等にはいと好もしくおもはれて、我若しいよいよ世を厭はば木曾路の中か此島の中かに潜み遁れむと知れぬ未來を測るほどなり。されど十年二十年過ぎ、諸國のものゝます〳〵入らば如何に變化をなすやらむ、今は里程を尋ねても五十丁一里で答ふるまでに人々古風を失はず、言語も「らりるれろ」に異しき訛ある他には厭はしき調子無く、（女の語氣はちと妙ならぬも）よしや鯛の刺身に山葵生薑の不自由はあるとも住みて可厭なるところならねど、往時は「草割」といへる小刀もて故き衣を割きて緯とし麻やら「しな」の絲やらを經とし織れる「割織」を着しものが今は漸く着ぬやうなり行く狀態なれは、終には百姓の忰が瓦斯絲織の衣服着て「めしよん」の煙管を啣へ、爐邊で高慢に政治法律哲學の受賣評論するやうならむ歟。兎に角新潟大川端より上等往復二圓內なれば遊歷の士は見るべき地なり。二日の朝早く船着きければ別におもしろくもあらねど市立つ古町通りを復散歩して公園に到り、山水の眺望にも飽きしまゝ旅宿に歸りしが、流石に北陸の大市なれば萬般都びて唯年ゆかぬ兒童等が雪賣りあるく他には異れることをも眼耳にせず、

雪賣りの聲かくるゝや柳かげ

夜に入りて勸工場など素見しける歸るさ、我が知れる男の暫時は愛で迷ひし女其儘の女に摺れ違ひ

塚原へは塚原へはと五月蠅くも問ひ、漸く行くべき路に出て、根本寺につきけるが、此地は其初めたゞ島人の亡骸を送りしところの由なるも、日蓮流されて居を此地に占めしより法華の宗風一國を吹き靡かすに至りし本據となり、頓て立派の寺も成りしとかや。境内も廣くして山門本堂阿佛に勝り、稍莊嚴といふに足れども其往時は如何に寂しき小庵なりけむ、撰時鈔開目鈔等を覗へば稜々たる骨頭昂々たる氣象あらましながら仄見ゆる彼日蓮上人が、鎌倉の令に世を窄められて是非なくも一乘妙典の眞法を持し四箇格言の利劍を佩びつゝ捨つるが如く此島に流され、僅に此所にて生命をば夜ごとに阿佛が忍び忍び餽りし糧もて繼ぎ保てる悲壯の光景勵苦の樣、追想するも毛骨竪ちて、何百年を隔てし我すら拳を握り眥を決し南の天を睥睨しつゝ、轉意氣をぞ摸せんとしける。

其二十二

饑は窮士に美味を與ふといへる通り、新穗の町に疲れ弱りし身の甘からぬものをも甘く喰ひて晝餉を畢へ、少時の間と横になりしに、とろとろの大とろ〳〵と睡りこけ、眼覺めし頃は日も西山に傾き居ければ周章ふためき港町さして路を急ぎ、辛くも夷町の旅宿に着きける。此地に何某といへる九十餘の老人ありて樣々の石を蒐め有てるよし聞きこみけるが金石通にもあらざれば看たとて他を煩はすのみのことはあれ、何の甲斐もなきことなりと訪ひもせて、船待つ間に心忙しく鬚剃り入

とこそ敗れ玉ひたれ精神氣魄なみ〳〵ならざりし卿の、恨を娑婆に遺し憤りを黄泉にもたらして田夫野人が塚の石にも劣りたる如斯一基の卒堵婆と化し玉ひしかと感慨そゞろに胸を衝いて愴然たるを免かれず。嗚呼五蘊假に形を成せしも四大今空に歸す首を將ゐて白刄に當て截斷す一陣の風といへる一偈を殘して從容死に就かれし風流さは他に類も多かるべし、最後に近づきて愛子への遺訓に、秋霜三尺なるも曾て貞松を埋めず士之を見て眼睛を豁開し洒々落々として乾坤の間に獨立せよと認められし風流さは、流石に禪味を甞めて和翁と號されし程ありて、あはれ天雷海潮底の壯語、剛邁特往の一氣直に塵寰裏の挫屈否塞を透脫し去つて屑ともせられざりしさまさへ明らかに見えて、いと慕はしく懷かしく、夫䇂々たる一孤兒をもて險山を踰え蒼海を踏み讐を敵城の中に復せし阿新も實に此卿の雄健なる氣象を受けし故なればなるべしなど、それよりそれと種々のこと想ひつゞけゝるが、一拜して辭し、塚原の根本寺へ詣らむと定かならぬ路を辿る途中、撫子の姿やさしくちらほらと咲けるを見て

なでしこや夏草滋る夢の跡

道踏み迷ひて何所とも知れぬ山中にかゝり、步めど〳〵道らしき道に出でず、大きに心を傷めしが、薄き板をば背負ひ來し男に遇ひて問ひ糺せば、此所は澤田の山なりといふ。さては「檀風の城墟」かと先日聞きしことを思ひ出して尋ぬれば、知らぬとばかり云ひ退けられ、後戻りして逢ふ人ごとに

て日野權中納言資朝卿の御墓をも弔はゞやと阿佛を目ざし進み、一時間半ばかりにて到着しける。

其　二十一

「溢手の碁盤波」も海荒れたれば見ること叶はで、宿縁あればにや彼此と足を留めし新町をも後になし、阿佛々々と尋ね行きける。阿佛とは元來

君ませば此地も花洛とおもふにぞ
　　わがふるさとは戀しくもなし

と詠みて赤心をあらはし御物憂さをも慰めまつりし順德上皇の侍臣遠藤左衞門尉爲盛が上皇崩御の後佛門に入りての名にて、此島へ流され來りし日蓮と淺からぬ因緣を結びしより乃ち一寺此所に成るやうなりしなれば、今はたゞ阿佛とし云へば寺のとにも寺ある村のことにも通ずるなり。寺に到りて見るに左まで莊嚴といふにはあらねど、北陸道蓮宗の棟梁たる寺格だけに五重の塔などもありて相應に堂あり坊あり稍稱すべし。門を入ると直の右手に正慶元年世を去り玉ひし資朝卿の墳墓ありて、土少し盛り上げたるが上に如何にも小さき石の五輪の塔立てり。土は近き頃態好く盛りたるなるべき歟知らねど塔は眞に當時の物なるべく、地を拔くこと二尺ばかりの高さにて大さは普通の家の柱ほどに過ぎす、あまりに口惜くも藐爾なるに傷ましさは彌增して深く、圖り玉ひし

ひて

いざゝらば磯打つ浪にこと問はむ
　隱岐のかたには何事かある

とあそばせしも確に此地なれば、志あるものゝ僅に碑を立てそれとばかり知るゝやう標し置けるも中々に物悲しう涙をひく種なり。それに少しく離れて川田翁の文の碑たてり。一讀し了つて山にさしかゝるに、麓に御廟の宮あれど有りのまゝに記しまつるも憚りなきにあらざるほど莊嚴を缺けり。漸く上り〳〵て山を究むる時此こそ御陵なれど童のいふに、心地遽に迷ひながら事の態を伺へば、方十五間ほど二尺餘の高さの石垣折り回らせあるが中に青松叢立ちて石の燈籠二基と誰人か供へ奉りし花とあるのみ、

おもひきや雲の果まで流れ來て
　眞野の入江に朽ちはてむとは

の御製さへ胸に浮びて木の間がくれに見ゆる海さへ恨めしき心地し、たゞ〳〵恐れ入りたてまつりて地上にかしこまりぬかづきけるに、山寂々として人語絶え蜩の聲ばかり細く清げに聞えしもひとしほ靜さを增して、おろかしき身にも浸み〳〵悲しさをおぼえ、懷舊の涙に得堪へで咽び入りぬ。さてあるべきにあらざれば、御靴石御船石（後人假託の名なるべし）等を視て新町に歸り、道を更へ

といともかしこき御詠あそばされし後は郭公の鳴かずなりしと云ひ傳ふる八幡の里を經て、辛くも車を得しかば、明日は御陵をも拜し奉らむと新町に走りつきて宿りぬ。鳴けば聽くの御歌は疑ふべくもあらねど何所にて詠ませ玉ひしにや確と八幡にてか否か定めがたし。

其二十

胸もつぶるゝほどの强雨に降りこめられて三十日三十一日と新町に滯留し、鰺「ふくらげ」も鼻について弱りしが宿の扱ひの親切なるに少は慰む便もありし。佐渡は大抵客舍に浴室の無き習慣なれば、相川とおなじく四厘もつて湯に行きしに、十年も前つ方東京の寄席に出たる蜘蛛男養老勇扇が寄席に出るよしの張札ありしかば、さても成程、佐渡が島ぞと感服なしける。八月一日雨からりと晴れて日ざし麗はしく、禽の鳴く音も冴々しきに我が心も引き立ちて里の兒を案內に賴み、眞野山の御陵拜せんと立ち出で、まづ戀が浦に到りしに、今にてさへ淋しき新町の町外にてたゞ浪の音するのみなれば、其往時仙洞の玉の御床を下りさせ玉ひ天さかる鄙の鄙なる離れ小島の此浦に着かせ玉ひし上皇の大御心如何におはしましけむ、同じ時隱岐の國へ降りましまし〻皇の御上をおぼしやり玉

番下れり。總じて然りといふにはあらねど、子を產む他には亭主を慰むることも知らいで、緞帳の噂し、菓實駄菓子の買ひ喰ひし、兒が泣けば五月蠅がり、夏の日を寐て暮らし、味噌も摺つたるを買ひ、夫の辨當も年中煮豆で押片付くるやうなる嘉左衞門に少しは他國のかゝる狀を見せて遣りたくなりぬ。高任坑といふをも見しが趣きは同じことにて、猶道遊坑次太夫坑など數限なく坑はあれと別に殊なる由も無きに左返はと相川に歸り、八幡迄行といふ男あるに幸の道連なりと其男の用事果るを少時待ちて、午後五時半頃客舍を出てしが、男は此國の農夫にて、我を待たせたるを甚く謝し詫び、其代りには御荷物を負ふてまゐらすべしといふ。それには及ばずといへどいや是非とも何か爲てあげねば濟みませぬと強て云ふ其老實さいと可愛し。さらば賴まんと風呂敷包みを預けて彼是語らひながら聞けば、山は多けれど農事は能く勤むる國俗にて萬事兎も角も足り、人氣も險惡なると無しとぞ、おもふに眞に然なるべし。河田原にて日暮れ雨さへそぼ降り來りければやゝ心細くなりしが、寄せてはかへす浪の音を聞きながら暮烟の籠むる松の陰漁村の中を過ぐるなど風流實に餘りあり。承久三年畏れ多くも兒臣北條義時が計ひとして此島に流され玉ひし順德上皇の少時は住はせ玉ひて

　　鳴けば聽くきけば都の戀しきに
　　　此里すぎよ山ほとゝぎす

ち交りて働き、甲斐々々しげなる姿して十二三歳より十五六歳なるが「杓子」と呼ぶものにて稜角立てる鑛を忙はしく搔き集むるもあれば、箱を据えたる車に積みてごろ〳〵と推行き、がら〳〵と打ち明くるもあり。迂闊り立ちて路を塞げる我等をば、ゑい邪魔な退いて吳りやれなど言葉つき緩からず罵るも男々しくて好もし。金銀の出づる出でざるを鑑定して取りもし捨てもするところは皆女ばかりにて、絲取り場などの如く長き臺を前に大勢ならび居り、直徑一尺ほどの笊に洗はれたる鑛を盛りては頻りに女の搬び來るを、笊ごと受け取りては一顆々々手に取るが早きか左りに投げ右に投ぐる其迅速なること馴れたればこそとはいへ傍觀の者にはいたづらにても爲し居るやう見ゆるまでなり。我試みに旣に分けたる良きと惡きとを二つ取りて何點に鑑定の標準やあると眼を皿になし視たれども首の傾くばかりにて甲乙ともに同く見え些少の差異も了解らばこそ、空しく笑はれたるのみなりしが、此のむづかしき業をなす姉樣達はゝ一日に十時間も働きて手腕高きが二十錢かそこらとかや。鐵鎚をもつて鑛を割るも女の役にて其場に入ればかち〳〵こつ〳〵の音絕ゆる間なく、左の手の指を各自襤褸などにて纒ひつ、辛も稜角さかしき鑛を取ては右に持る鐵槌にて丁丁と擊に、あはれ火花も迸るべし。世には木賊を指甲にかけて紅さすともある習なるに、同じ女の斯る態して日を送るさへありけるよと、坐に東京の下司女が「あくたれ」、上州女が氣嵩、能登女が挊ぐ、外房州が强き抔、海人絲取のそれ〴〵、我記臆えしを想ひ起して比較を取るに首府のものが一

一端に丸きものゝ付き居る「荷杖」といふに荷をもたせて立ちながら僅に憩ふもあるに、見る身の扇遣ひさへ流石に氣の毒なるを覺ゆ。聞けば一日七八錢より精々十錢乃至十一錢ほどしか此態でも得られぬものゝよし。おもへば麥酒よ「らむね」よと無益に費へる錢は無しと、つく〴〵感じつゝ進むに、溪の水こそ清からね峙立てる巖おもしろきに抜ぶり好き松緑を凝らして高所に低所に點綴せるいと景色よきところに出でぬ。相州または美濃路なる「筆捨ての松」どころにあらで、清絶韵絶の眺め、多分彼方の岨にある家の亭主は神仙ならむと迷ふほどなり。

　　松すゞし其下にござるは鐵枴歟

岩間漏る清水滴々として頭上に落ち來る隧道を過ぐれば、路の傍に樋の設けありて水其中をたぎり流れ、拳ほどづゝに摧かれたる鑛石自然と勢ひに連れ輾轉流れ下るやう裝置しあり。大切坑の役所に到りて復案内を乞ひ、大竪坑といふに行き昇降器にて鑛石の上り來るところ、石の大小を選り分くるところ、良き惡を取捨するところなど見けるが、此坑深さは千尺もあるべく、縱横卍字に掘り穿てる底には坑夫も何千か居るならむ、冷かにして心よからぬ風の脚下より吹き起る心地して瞰き視るさへ嬉しからざる坑中の態は嘗て模形にて大概知りたり且は要なき者も入坑は許されざれば強て願ひて入るともなさゞりしが、採鑛の事にたづさはれる人などは支廳長に願ひきこえなば見るとをも許さるゝなるべく見ては甲斐なき事なるへし。幾度にも幾度にも鑛の大小を分つには兒童も立

べし。後にて心付けば市街の道普請にまで金魚鉢に入れて置きたきやうなる白き小石を用ゐあり。見ぬ人以て大概を察し玉へ。此地の名產なる堅き石の肌につける赤き粉の「無名異」といふ品をもて燒ける陶器を賣る家につきて見しに、往時は底に鬼の面をつけ內部にお龜の面を描きて「鬼は外福は內」の意を寄せたる猪口のみに定まりしものなれど、今は樣々のものを製して時好に媚ぶるも商賈なれは咎むべくもなし。正眞の此土のみもて作りし陶器を飮食の具に朝夕用ゐれば諸毒を消して溜飮なとの患を去る由。覺束なき話なれども氣は心なれば一つを母上の爲め一つを我が料にとて購ひ歸り、明日は行くべき鑛山の繪圖など見ながら眠りける。

其十九

いざや鑛山一覽と、先づ御料局支廳に到りて製鑛所拜見を願へば、役人親切に案內指導して、陶汰塲より熔鑛所、分銀分銅鍛冶木工所、汽罐塲まで見せ玉はりぬ。されど一々記をつくりて採鑛冶金の梗槪も知らざる人に會得の行くやう畫圖も用ゐて陳べむことは煩はしくも覺束なければ此所には省きて載せざるべし。さて構內を立ち出でゝ虛空を駛る小車の鐵線傳ひて石を搬ぶも上眼に見捨て次第々々に川添ひ道を通り登れは「せなこうじ」(身の傷みを防ぐ料に藁にて編み製り背に負ふ物)つけたる女どもの或は石炭或は鑛又は雜物なと負ひて喘ぎ〳〵上るあり下りあり。荷を受くるため

の頃か渡り、此地にて千句獨句をせし連歌の巻近頃までありしが今は燒け失せし由、

朝顔にしのゝめ長き空もがな
日影ほのめき露殘る庭
秋寒き霜の籬のかたふきて

是其第五の巻の三句なり。それより五十里澤根なんどの海邊を過ぎて小さき峠一つ越え、相川の市に着きけるが、一切の役所も此所にあり、鑛山にも近きことなれば、戸數も三千ほどあるべく、思ひの外に賑やかなり。客舍の背面の七面天まつれる小山に上りて眺望するに濱の景色も波荒れ砂明かにして自然孤島の風情をあらはせる趣き心細くて好し。濱に到りて見るに鷄卵ほどのより豆ほどのにいたるまで石皆白く圓くして光輝を含み色美しく、玉川砂利の如き俗惡なるは一つも無く、間には朱きこと紫銅の如きもあり、白きが中に紫紋あるもあり、青く滑かなるもあり、瑪瑙を欺く色のもあり、(眞の瑪瑙歟、此國瑪瑙を產するなり、白き小石も皆金山の岩の果なるべし)餘りの美しさに旅の身なるを打忘れ幾箇とも無く拾ひ〳〵て、重いものを何となさると伴へる小女に笑はれしも一興なりしが、掘り出し好きの篁村子など此濱に若し來られなば、いや此は妙だ此も異だと矢張袂をぶら〳〵にさるゝなるべく、況して鮎狩に石まで持つて歸家られしほど多情なる南翠子などに迂濶り見せなば此島にある由の赤玉石舍利石貝の玉質の化石等探し出さむと濱を動かぬやうならる

とては運といふ奴癪に障るものかな、浮世を渡るも如斯もの、目的のところへ着きはせで大抵思はぬ邪魔に遇ひ分別思慮もせざりし所へ五尺の此身を將つて行かゝる習例なれば、取り出てゝ珍しげに喞つにも腹立つにもあたらず、强て羽黒へ詣らねばならぬ譯も無きこそ幸ひなれ、疲我を起して後戻りなし、忍耐力は能く事を成すと高慢するにも當らぬ故、執着貪着の念を斬つて捨て、ずんと洒落たる乾髑髏、雨にも濡れよ日にも炙られよ、隨緣無惱の游戯三昧、此方や構やせぬ運が惡くもと澄ました顏付になるも自らをかしく、翌る朝鼠ヶ關へは船寄りしが此樣な何方つかずの詰らぬところへはと上陸せて、其午後越の新潟に着き、願ひは易き錢些少に浴衣を急仕立させて、汗に塵埃に汚れしを脫ぎ、信濃川の流れを見、市中を散歩し、足踏み伸ばして好い夢をみける。

其十八

朝いと早く信濃川より小蒸汽船に乘つて、其日佐渡の國加茂の郡夷の港に着き、

小扇の今日はぬすむや沖の風

一ト休みして勇を皷し相川に向ひ發す。名に高き金北山金剛山檀特山の峰續きを右に望み、左に淋しき江を見つゝ行き、越の湖とは此なりやと問へども定かには分らず、歌代金澤平泉などいふ村を過ぎ河原田の町に出づ。此近邊に昔時東福城のありしなるべし。宗祇の弟子の宗忍といふもの何時

多く泊めて置かるべきを誠實ある亭主の敎へ有難しと、禮云ふ片手に勘定濟ませ、端艇に移りて本船を待ち、頓て乘り込めば早くも波を蹴て走り出すに快きこといふばかりなし。されど夜深くなりてより雨しきりに降り出しければ、甲板に立つて長嘯することもならず、北海道戻りの雇衆、小間物の行商人、才取らしき男なんど丶伍をなして、垢臭く人の息臭き中に睡ることいぶせし。午前一時頃酒田の沖へは着きけるが雨はます〳〵烈しうなり、天墨よりも黑ければ陸水の境界も分らず眞闇にて、吹きすさぶ風に立狂ふ浪の音物凄く、雲を貫き空虛を燒きて果知らぬ海原照らす電光の閃めき渡りて眼を射るも恐ろしきに、怖れをなしてや但しはまた雨風の音に汽笛の聲を聽きつけざるにや何程待てども艀舟出で來ず、船員も心をいらだて乘客も氣を揉めど其ぞと見るべき灯の光も現れねば、船長是非なく乘客に對ひて、酒田へ上陸の筈の御方には御氣の毒なれど端艇出で來ねば力及ばず、浪高く雨強きに天の模樣もいよ〳〵宜しからず見ゆれば直に新潟へ向け駛るべし、勿論明朝の光景によりては鼠が關といふに（酒田より廿五里も上の港）寄れば其所よりなりと新潟よりなりと上陸御勝手なるべしと船僮をして意を傳へしむ。やれ〳〵是は大事が湧いた、酒田へ行く者を五十里も先の新潟へ遣られて堪るものかと罵るもあれば、廿歳の女を嫁に望んで五十の婆に來られたやうぢやと笑ふもあり。我も内心大不平にて失敗〳〵また失敗、道中第二の大失策、飛んだ船に乘り合はせたと天を恨めど喧嘩も出來ず、一體全體我が運の拙く定まつてあるなるべけれど、さり

りとの俗説あり。）いざさらば土崎へ取て返し、酒田羽黒庄内早く看んと車に乘じて忙しく歸り、土埼の船問屋にて聽けば、馬鹿々々しくも其船は廿七日に延びたれば此所の札は盡く書き更へてござりまするとの挨拶なるにぞ、忌々しくも腹だゝしく、左樣と知らば秋田に悠々滯留して敦厚らしく見ゆる人氣の底を割つて得と合點もすべきものを、と臍を噛めども及ぶべからず、また出直すも厭氣になつたり、此所で記行の後れしをも取り復さんと決定なし、船待つ筈にて宿とりぬ。待遇すべて實意ありて港には似ず人々の言葉遣ひも俠ならず。されど、流石に船附なればや珍しくも錢湯の中にて「鳥も通はぬ八丈ヶ島」など歌ふ聲をきゝぬ。

其　十七

秋田より前途酒田までの路は好からねば、車もはか〳〵しく進みて快く駛るといふやうには行き難きよしなるに、炎天に照りつけられて未だ悉皆回復はせざる身の復病など得てはと、待つに日長く退屈すれど指を折つて廿七日の早く來よかしとおもふ折しも、廿六日の晝三時頃亭主外より歸り來て、唯今別に一つの船の碇も下さで一寸と港口に立ち寄り直に酒田へまゐるのがまゐりまする筈でござりまする、前程を御急ぎなさるならば端船に乘つて船の來るを御待ち付けありて御乘込みなされませと知らせ呉るゝにいと嬉しく、風儀の悪敷土地ならば然る船ありとも知らせずに一夜なりと

への船は此地よりあるべき筈なれば車上油斷なく目を注けしも今日出づる船無しと見て秋田に入り、車夫の案內するまゝ肴町の或旅舍へ着きけるが、取込みのある由にて氣の毒らしき顏付して謝絶られ、肝癪はぢり〳〵と起れど旅に例無き事にもあらねば、まゝよ何處へでも面倒な位官など無き身は置かば置かるべし、絹布に包まれ宵は寐るとも明くれば傘と小包のみの着たなり蝸牛、角眼だゝずと背にした殼の圓く優しく心を持てと、別に好き宿搜す氣も無く、只ある家に入りて疲勞をやすめ茶を喫し、「おもしろくたゞ心ぼそかれ」と其むかし守武の云ひしに憂き旅や後の笑の種ならむと附けて、僑陳如は客舍三昧で悟りもしける者をと疝氣筋に故事まで想ひ出し、我知らず面白くなつて戶外に飛出て町々を步きさまよひけるが、不圖眼につきしは土崎より酒田へ今日出帆の船あるむね塗板に白く書きて揭げ出せる告標なり。失敗々々、さては土崎て見脫したりしや殘念なり、此邊に止まつて大きな蕗を尋ね見るともさして妙なることにもあらず、小野の小町の產地の由だけ今も市中の人物は概して下劣ならざれど、美女を發見したところで一中で唸るほど樂には「小町御前をおーひまゐらせ」と此の暑いのに背負ても歸られず、「君故ならば此生命何か惜まむ白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消えなまし」と生命の捨賣を爲うまでには餘生を未だ見限らねば、慕しくも無い少將の芍藥圃も見たくなし、へ少將小町を戀ひわづらひて通ひ〳〵し夜每夜每に一株づゝの芍藥を持ち行きしとかにて院內銀山への路の中小町の碑ある所より遠からぬ地に芍藥圃殘れ

き。

其十六

廿四日朝心地いよ〳〵好く、何と無く滿身に愉快の充ち盈てるを覺ゆれば、活潑に起き活潑に食ひ活潑に車を馳せしめ、虻川に到り、道の左り手の三吉神社ある山に上りて復湖景をば一覽するに、此所は御座が崎よりも地の高ければ眺望も違ひて、鳥海は稍近く寒風は離れて見ゆ。時刻も昨は夕、今は朝なれば風情異りて快活なること昨に超えたり。背には連綿たる山脈を負ひて脚下に踈なる漁戸を瞰み、眼飽かぬ大湖を前に控へて微吹く風に旅衣の袖ひるがへらせ突立てば何の都會へ歸りたくも無し。

　　涼しさや湖風ぬける空社殿

ところ柄にて耳に入る蟬の諸聲も薫り來る風の中に趣味を添ふれば興に乘じて打戯れ、

　　空耳歟うつくし湖と蟬の鳴く
　　日傘忘るゝ老木の蔭
　　草鞋の右を左に穿きかへて

など我と車夫との實況を寫せしも例の違法との沙汰にや遇ふべき。さて土崎を通り過ぐるに、酒田

に類なく優しき景にて、あはれ一句をと枯腸を搾れど滿目の詩趣に一念空しく混沌として取り出で云ふべき言の葉も無く、假令芭蕉に句ありとも我首肯はじと思ふのみなりき。一日市に近づける時しも太陽爛々として雲に紫金の笹縁付けつゝ、萬頃の波の果に沒れ行けば、山色水光一呼一吸の間に變り變りて、壯絶美絶、又幻絶、稻田に落つる我影の丈六丈七丈八と見る〳〵延びるも最淋しく、實にや佛家の觀法に落日觀を初とせしも所由ありけりと思はれて、惚れ〳〵と西方を瞻望るに、何に感ずるとは無けれども唯乾坤の玄機に撃たれて胡念亂想は心窩を去り、車の走るも我が生けるも何時しか忘れて恍焉と、未だ知らざりし不可說の樂しさを覺え、後にて思へて狂氣らしくも不覺の涙を浮めぬ。嗚呼むづかしき欲界の亂麻の中に幻の歡喜をばかり貪るべきかは。天を樂み人を避くる自然外道は憫むべき「固陋の獨善獸」なれども、非情の中にも懇なる人よりは好き師あり友あり、多數の人の有てる妻より嬉かるべき優しの者もあるべし。所詮は自己が才德を、進んで人を化するに足らずと自ら認めて、退き守るべく決定せば、城を枕に屑よく戰死なさんず覺悟にて魔賊の使を斬つて捨て、一生何十年自然界に立籠りて花鳥風月山水露雪と風流淸和の一家を成さむも强て惡とは云ひ難かるべく、然る人にすら成り得ずして昨日は東今日は西、電光よりも短き命に節操無くして終らむ人こそ忌はしくもまた悲むべけれ。など、「鯉ほど大なる潟の鮒」の繪に飯食ひし後思ひつゞけて睡りけるが、此日接せし人は皆質朴にして善良なりければ、寢心さへも寛なるが如くなり

鶴形にて早ければ晝餉濟ませ、十二里ほどを既越して能代へ着きしに未だ二時過ぎず、今より泊まるも愚なりと町々を見物なして復例の切符を買ひ、鵜川新屋敷鹿度一日市と九里ほどを飛ばして大川といふに暮れたれば宿りぬ。此間鶴形より能代までには川の流れ岩の峙立ち車を停めて坐に賞すべき眺望あり。能代より鵜川の間と覺えしが或家の前にて

抱かれ居る兒の跳るなり凌霄花

新屋敷を過ぐる頃より名に高き八郎潟の景色を貪り觀るに興いと深し。景色の餘に好きまゝ同くは湖に面せる家にて夕晨の風情をも看むと鹿渡にて湖側なる家に入りしに、家は好きも西の方を盡く塞ぎありしかば失望して他の客舍を伺ひしに亦皆然り。松島と並べ稱すべき程の好景を他所にして世を馬車馬の一條駈け、渡世一方傍視せず暮らすは尊き心掛ながら風流の無さ過ぎるは些恨しくも無きにあらずと喞ちながら立ち出でゝ、三倉が鼻といふ小高き處にさしかゝりしに、此所は聖駕を駐めさせ玉ひて龍顏和やかに少時は山水を賞でさせ玉ひし地と承はりぬ。同じくは御坐が端とか御坐が崎とか改め呼びたし。我等も煙草一服と腰を坐ゑて、川田翁が南面岡の碑の下に憩ひ、雪隱どれる淺翠の鳥海山を遙の左に、招かば來べき深翠色の雄鹿寒風の山々を眼の前にして八龍王（八龍湖とは碑文の中に甕江翁の書けり）も棲みつべき漫々たる湖を瞰下せば、夕暮方の波烟り汪々として漁舸を籠め、斗字に張り出て乙字に彎れる崎やら浦やら田圃やら陸地の都て青々たる他所

叢立てる矢立峠を越え、大館の驛に一宿するに、既此地は山一ッ隔たるのみなれど、縣も異へば、耳に入る風俗眼に映る山の景色も自然と差ありて、隣室の客の談話の種も土地異れば品異る鑛山の噂などなり。鹿角は多分此處より近かるべければ若や「華櫻細工の文庫」などあらむ歟と尋ねしも精良品無かりければ止みて、木綿蚊帳の中に一睡の夢結ぶ間も無く、櫺子洩る朝日影に枕撥ね退け、能代へ通船の有り無しと其模様とを聽き糺せば、船はあれども河水涸れて不足なる故夜の十時頃まてかゝるとも確に着くとは受合ひ難しとの甲斐なき事に力無く、此炎天に十餘時間蒲柳の質の身を曝して何の堪るべきや、ふたゝび病の出もせめ、さらば面白くはあらねど車々と車を呼びしに、此縣の車夫には心機敏活の者ありて工夫し出せしにや、「約束切符」の制ありて、乘客は何所より何所迄と定め次第規定の賃を預め拂ひて幾葉にも割き得るやうなり居れる切符を買へば、途中にて繼更の讓渡しの酒錢の骨折のと面倒なる事を云はれも爲れもする氣遣なく、宿々にて乘換へ〳〵いと迅速に行かるゝやう、車夫共各自專屬せる改良英運二つの組ありて取計らふ方法になり居り、手違ひも無く實行さるゝ由なれば、我は能代まで改良組の切符を買ひて進みける。大館を過ぎて小山の彼方此方に立てる間を行くに此邊は明治の新戰場にて、所々に官軍何某戰死の跡秋田藩誰某戰死の跡と形ばかりの標杭の樹てるもあはれ深し。綴子といふに到り切符を割きて此所までの分を車夫に與へ、たゞちに乘り更へて小繫に到り、また乘り換へては切符を與へ、二ッ井富根と段々馳せ、

のほどあるべく、丹碧塗りたる中門も好く、社殿の眞背面に天を摩して岩木山の立てる多からぬ眺めなり。それよりまた寛一歩漫一歩日暮れて弘前に戻りけるが、病やゝ本物らしくなりければ、藥嫌ひの身も我を折りて寶丹の厄介になり、うつら〳〵と眠らず覺めず一夜を明かしける。翌日も滯留して手加減に怪しき藥を製し、今日一日で治れ〳〵、治らねば明日からは眞の病人になつて呉れるぞと覺悟を定め、無暗に服し無理に寐ぬ。旅としいへば美しうはあらぬ少女の詞優しく慰め呉るゝも身に浸みて嬉し。

あつき日や病夢さまよふ水の音

其十五

廿二日の朝。身も浮くばかり汗かけるに驚き覺むれば、頭顱に輕く心地すが〳〵し。嬉しやと飛び起きて身體を拭ひ髪を洗ひ、極めて少量の飯食ひ了ひぬ。いざやこれより碇が關越え、大館へ出でゝ其所より能代へ川船で下るといふ大通の寸法を試み、土崎、秋田、酒田、羽黒山を視て廻つて東北第一に根強く王師に抗せし庄内の人情をも見定め、加茂へ出で新潟直江津輕井澤より家に歸らむと、弱りたる身の意を強め、馬車に乘つて走りに走れば大圓寺の五重の塔も遠見のみして、遂に弘前の市を見捨て、此所にも溫湯あるよしの大鰐を驅抜け、碇が關を過ぎて津輕秋田の境界なる杉

は無き様子なり。湯壺は唯だ一ヶ所あるのみにて、人々宿より手拭と柄杓とをぶらさげ浴衣掛け或ひは犢鼻褌一つなどにて出向き、男女貴賤の別ちも無く浴るなれば隨分清潔とは云ひ難し。我も試みに一浴して熟く様子を伺ひしに赤く黄ばみて濁れる湯の中に三十人餘りも入り居て（湯槽はいと大きなり）饒舌るもあり默するもあり、柄杓て、頻りに浴びるもあり、湯を導ける瀧口に頭を出して打たするもあり、殊更柄杓を持てるものは皆力を限りに湯を汲みては我が身に強く打澆ぐなれば、飛沫は烈しく掛れど遠慮もせねば咎め人も無けれど、油頭の古女房が解けし髮を其儘にどんどゝ自ら頭上に湯澆ぐ風情など傍觀にはいとあさましく、傍に居られたものでは無し。折角五里に近き道を困苦して來は來しものの畢竟久戀の地にあらねば早く歸るには如かじと、そこ〳〵に晝飯を終へて勘定濟ませながら、挽物細工でもするところ歟、紙捻細工などは此邊にて爲ざるや、と宿の嬶に問ひしに、挽物も紙捻も何も爲ませぬが、たゞ「あくびのつら」で詰らぬ者を作る斗りでござりますると云はれ、餘り可笑き返答かなと念を推して聞けば山女（通草歟）の蔓なるに獨り大笑ひしけるが、此邊の訛り大低かゝる工合にて耳馴れざる間は一寸聞き損ずる事あり。さればとて弘前の城下者のは分り難きとなく、女の語氣など却て東京の下司のより遙に優く風流ありといふべし。扨都合よき戻り馬も無かりしかば、雨晴れしを幸ひ頭痛寒氣の頻りとすれど歩まば或は妙ならむと徒歩にて百澤に下り、岩木山下居の宮に詣りける。舊は兩部なりしなるべく山門の大きさは頓て淺草寺

たゞ閑靜幽雅の溫泉場もあらば其處に二三日身を休め心を養はむと、彼山の近所に若し溫泉は無き歟と尋ぬるに、御座りまするとも御座りまするとも、朶華（宛字なり）の湯と申す名湯のござりまするほどに、御出になつて御覽じませ、赤越といふ家が宜うござりますとの答を得、嬉しさのあまり直ちに人力車を命じて弘前を發し、此市の商家の暖簾の大抵は白くして幅廣く幔幕のやうなるに吳服太物西洋小間物和洋藥品など記せるを面白がりて見、家每に火の用心の警板つるせるを面白がりて見つゝ町を出外れて、稻葉戰げる田の間を行き、漸やく裾野にさしかゝる折しも、黑雲掩ひかゝりて雷鳴しはじめければ、やれ又難義に逢ふことかと鬼胎を懷く中、殷々轟々と烈しく鳴り來りて雨さへさつと降り濺ぐに、車夫は驚き恐れて、路傍の桑の小枝を折り取り、自己が饅頭笠の臺坐に挿むやら、車の母衣の裏に挿すやら、果敢なき咒術を爲すも可笑し。頓て百澤村に着けば、此所よりは馬ならでは到り難しとのことなり。是非なく馬を僦ひ雨を衝いて透迤たる山路を小川幾條か涉り〳〵進み、辛くも山腹なる朶華に到れば、案外至極失望千萬幽雅どころか雜沓猥籍、耳喧しき騷ぎ三味線の響き、放歌狂吟の聲、混亂熱鬧云ふばかり無く、目ざせる家には客充ち滿ちて明間なしとの謝絕を食ひ、餘儀なさに馬士の導くまゝ或家へ入りて兎も角もと憇ひけるが、此地は景色のさして好きにもあらず、便利もさして好きにもあらず、されど湯の能く病には効ある歟して在方の人群集せるが上に遊山の客も少なからねば、三四十戶の家何れも一室に三四名五六名の客無き

ある箱館はまたの事として弘前に向ひ發す。浪岡といふところに尋ねたき跡ありしも果さで、美人と相乘りのがたくり馬車の風情をかしく、十二里一ト走り、弘前の町に着きしは既夜に入りてなりしが、此町素敵に陰氣にして、何れの家も皆戸を締め店を閉ぢ、燈光も洩さず、寂寞森閑たる態餘り不思議なれば、盡く明き店かと尋ねしに夜に入れば如斯する土地の風なりとぞ敎へられける。電氣燈ぢや瓦斯燈ぢやと騷ぐ所もある世に是でも濟ませば濟む事か、嗚呼靜謐の市街なりと呆れて褒も貶しもせず、石場といふに宿かりけるが、夜嫌ひの此地にも遊廓はあるよし、其所ではまさかに店を閉ぢても居まじと冷笑ひしが行かねば知らず。隣家の耶蘇敎の讚美歌に耳を痒がらせながら枕につきける。

其十四

津輕富士とや人の申す岩木山は例の金字形をなして弘前市の西の方に高く聳え、土用最中の今尚斑に雪を載せたり。これに上るはいと恐しく危くて屈强の男もほと〳〵生命懸にて僅に頂上に到り得る位なれば、三國一の富士山さへ足にかけたり何條これ程の山を恐れんやと少しの經驗を賴みに上る京地の人などは、數々辛き目に遇ひて山巓にも達し得ず逃げ還るが多き由なり。我はまた岩鷲山にて受たる邪氣の發してか心地例ならず頭重く腹痛むこと切りなれば登臨なんどは思ひも寄らず。

にかち〳〵壁にこつ〳〵、鼠の如く煙管を走らせては打當けるも愈々をかしく、自ら智慧の無きを笑つて罪の無き夢に入りぬ。

其 十三

頭痛烈しくして身躰惡寒を覺ゆれど善知鳥神社に參詣し、社前に樹てある西南の役戰死者の碑を見、依田學海翁の文など讀む中、碑の石に曰くあるを見付け出しぬ。谷中に住みてより我朝夕碑碣の間を出入するまゝ何時しか石塔通となりしが、大凡石碑の類仙臺石御影石大理石寒水石蠟石の類を除き普通の物には曰くあらざるもの極めて鮮く、大體は孔あり缺あるを蠟松脂等の細工にて知れぬやうになしあるものなれば、初は奇麗なるも雨露風日に正躰を現されて遂には石工の詐術の剝ぐるとき穴埋め龜裂繕ひ露見し、いと醜き狀となること、宵の美人の白紛剝げて曉天の痘痕女と化るより甚だし。されば、恐ろしや娑婆を捨て果て石塔となりても人の詐欺にかゝる世、建てられたりし前の碑も半月形の嵌石あれば、あはれ何十年後には學海翁の名文も一二字讀めぬやうになるべし。神明樣香取樣廣田神社等巡覽し、碧雲關と額打つたる寺など見しも是ぞといふ事なく、米町にて古本屋を素見し、二十冊ばかりの津輕一統志といふ書を何程ぞと問ふて四圓五十錢と答へられ、呆れ果てゝ宿に歸りしが、何時まで此地にありしとて無益しければと旅費の工面の成りしを幸ひ、見たこと

停車場前の茶店に少時休ひ、頓て汽車に乗りて小湊淺蟲皆嘗て知つたる所を過ぐる中、不圖心付きしまゝ、狹布の里の今など知れる人もがな、と室中の人に問へど、知りて答ふる人もなく、錦木の談話をすれば青森の長谷川（貸座敷）の評判を聽かせられ、善知鳥の因縁を聞けば、演劇の筋を講釋さるゝに恐れ入りて口を噤む間も無く青森と驛夫の呼ぶ聲すれば、急ぎ下りて旅店に投ず。奥の果にはあれど流石は北海道への通路の咽喉の地ほどありて、市街も稍賑やかに旅亭の婢の手口も能く働き、萬端痒い處に麻姑の手なり。されど其代り物價も廉からず、人氣も淡泊質朴とは許し難けれど惡いといふてはさらに無く、唯やゝ複雜なる許りぞかし。日記など書きながら隣の室にて談らふをきけば、箱立の繁昌なる樣眼に看る如く、むら／＼と臥牛の山巴字の港藏前の通り邊も見たくなり、往時滿腔の不平を洗ひし湯の川の溫泉にも行き度なりしが、懷中を探れば一圓にさへ滿たず、身躰には岩手山以來熱氣ありて勇氣おのづから足らず、成るとの成らぬは金の浮世にて、成らぬことの成るも金の浮世ぞと卑劣の想の湧くも甲斐なく、少しは旅といふに心細くなりしが、金の一字は考へたとて及ぶ者にあらずと思ひ捨てゝ、「はまぐりの秋は梢になるを視て」といへる句の不思議なるを飛梅千句讀みつゝ思案し、漸く濱栗なりと合點などなしける。後は句を味ふにも倦きて、先の日或人の爲し不破名古屋の影を映すとを眞似び、襖に有心か無心かの男の影をいと拙げに二つ躍らせけるもをかしく、又其後は一ノ關にて覺えし「すゝ竹遣り」を烟草管にて稽古し始め、障子

御寺の談義に會堂の祈禱に芝居の愁歎場に相對の會話に見し事少からざれども、此近邊の女のやうに手放しの大聲にて「ハアアッ」、「ヒーッ」とちやるめらの如き聲を發して泣くを聽きしこと無かりしに、此日初めて壯なる泣き聲を聽きおぼえ、面白さに堪へねばハアアッ、ヒーッと小音に其泣き方を我が喉に摸して鍛練しながら田名部に下りける。

其十二

おそれ山よりも「木の葉石」の出づるよし豫て耳にしたれば索めしも得ることあたはず、空しく大畑の方へ湖より流れ落つる精進川に魚の住まぬ談（硫黃の氣の强ければなるべし）など聽きて睡に就きし明る朝早く例の馬車にて田名部を立ちしに、尙何所やらに硫黃の香の殘れる心地す。午前橫濱に着きて、此地に石田三成の末孫住めることを噂にて知り居ければ尋ねしに、我こそ即ち石田が末と名乘つて出し人には逢ひしが、系圖も何も祝融の災にて失ひたりといふに珍らしき事實を嗅ぎ出しも得ず、馬を傭ひて此度は定まれる道を步ませずに波打涯を馳せさせながら、中程にて百數十の牛どもの前途を遮りて或は睡り或は游び居るに些く弱りはしたれど、叱々叱と追ひ立てゝ駈け拔けなどし、獨り興に乘じて馬士を置き去りにし游魚を驚かし、（此邊水極めて淸きに日の光りも折節烈しかりければ、魚の影底沙に印するを歷々と視る、興いと深し、）遂に野邊地へ四時頃着して、

て行き玉ふ。我はたゞさし傘のわづかの蔭に涼をとりて佇立みつゝ

乞食僧の鈴の音たるむ暑さかな

と一句しては、ひそかに自ら樂み、

順禮に我が手の中の小扇の風報謝せん受納め玉へ

と打ち興じては內々微笑みけるが、不圖耳を貫く悲鳴の聲を聽きて、何事ならむと聲する方に走り到れば、此處にも御坐すなる地藏尊の前に、何をかおもひ出しけむ三十歲越したる女の人目も耻ぢずよゝと泣くにて、其同行と覺しきも或は忍び音に泣き、或は眼をしばたゝく。中に老いたる嫗が、いたづらに泣くよりは念佛申せとて、ひたすらなまだ〳〵と唱ふるもあはれなり。おもふに近き頃最愛みたる兒を亡ひしが荒涼たる賽の河原に來りて當時を思ひ起し、未來を憶ひ遣り、愴惻の念に堪へずなりしなるべしと、傍觀の我さへ氣の毒になりけるを、悟り顏せる若き男の馬鹿々々し、又泣いて居る、と冷笑しながら通り行きけるも人の心々なり。血の池といふ小さき水溜りやうなるがありて、髮の毛の如き水苔長く生ひ鬖々として水底を隱せるを、此處は產の難などにて死せる女の沈淪せる奈落につゞけるところぞと案內者のいふに、例の情深くして智の足らぬ妄信強き女性達は、我が姪我が姉など思ひ出してや「血盆經」をつゝめる小さき紙包を寺より貰ひ來りて苦を救はむと投げ入れ投げ入れ、地藏觀音を念ずるあれば、此處にも悲鳴をあぐるあり。露伴隨分女に泣くをば

し、それより左へ折れ行くに、地は皆硫黄を含める岩にて、ところ〲に青く黄ばみて硫黄其儘なる土あり、岩の罅孔にぶく〲と音をなして釜の湯の熱沸るやうに水の湧き居るところもあり。岩にさへ赤鬼青鬼等の名ある位の土地なれば、地も皆異な色合にて白ッ茶けたるさま何と無無氣味なるを、辿り辿りて猶進めば、慈覺大師の小さき石像あり。慈覺は深解堅信の碩德、天台には數無き我朝中古の名僧にて、そも〲台宗を築き固めたりとも申すべき俊哲なれば、日蓮にこそ獅子身中の蟲と罵られたれ、罵られて以て德を知るべく、容れられずして其大なるを知るべし。まことに錫を遠近に飛ばして道を南北に說き、甘露法雨に陸奥の外が濱邊の蜑漁師をまで潤ひ得るやうに敎導き玉ひしと尊むべく、崇むべし。其所より賽の川原といふを傳ひ行くに、一二丁の間道のほとりに、何方より集まり來しものか乞食物貰ひ其數を知らず駢び居て、或は彌陀三尊の軸をかけ、或は觀音不動の像を飾り、或は白衣を着、或は笈摺を掛け、彼方には怪しき聲して摩訶もだらまにはんどか波羅はりたやと五鈷鈴振りながら唸るあれば、此方には普陀落や岸打つ波は三熊野のと悲しげに小娘の歌ふ。此經難持に太鼓の相の手入りが右にあれば、左邊には松蟲敲きて、三寸息の斷えぬれば六親歎けど甲斐も無しと誦し立つる。叫喚號呼の聲々は虛空に揉み合ひ、亂れ合ひ、合して毫も諧氣なき一つの稀有の響をなし何とも名狀なし難き不快の感じを人に與ふるにぞ、心弱き女性達は怪異なる此山の景色と鬼氣旺んなる此狀態とに胸を擊たれて既心も心ならずなり、一厘二厘づゝ投げ

牛の蹄の櫛買つて莞爾つく小娘もあり、折角油でこてつけたる髷を横に推し歪めながら天窓の頂上に大きな灸をして貰ふて有難がる大の男もあり、地藏堂は相應に廣けれど參籠の者充滿して足を容るべきところも無く、堂の左りの方にある菩提寺といふにも同く籠人充滿せり。これは堪らぬ、所詮かなはぬ、足を休めん家もがなと彼所此所見廻はすに何家も皆人の山なれば、掘立柱に假の屋根、丸に四ツ目の紋など染めたる麻幕打てる小屋掛けの二三軒あるが中のやや人少き方に、是非なくも這入りて憩み、出されし茶をば一ト口喫むに水に硫黄の氣あればや其味異にて妙ならねば大きに弱りしが、これ〳〵御亭主晝飯にはまだ大分早き故温泉に入つて來てから御造作に預りませう、一寸温泉は何所に在るか敎へて下されと尋ぬるに、其邊に見ゆる小さい家は皆風呂場でござりますると云ふ。左樣か、さらばまづ入つて來ませうと手拭ぶらさげ立ち出てたり。

其十一

浴室の戸を推し開きて内部の樣を伺ふに、幸ひ若きと老いたると中位なる年增との三人の女客よりほかには人も無く、おもひの外に靜かなれば、草鞋とく〳〵赤裸になりて、無躾御免と躍り込み、隅の方に蹲まり居けるが、長湯は却つて疲勞の基と好い加減に上りて、前に憩ひし茶屋に戻り、椎茸油揚なんどゝ共に煮たる素麪四五椀飯一椀からくも食ひ了ひて堂の後面の方にある不動尊を一拜

湖は即ち往時の噴火口なりしなるべし。されど火山の常なる金字形をもなし居らざれば思ふに往昔大破裂の際峰巓飛んで砕けしか、又は陥落などせしなるべく、それ故却つて四圍にのみ小巒を望むやうになりけむ、何にせよ道は此がためにいと平易ければ、高尾山を事々しく噂するやうなる江戸見にも少し辛防さへすれば登り得べし。我は一人うそ〳〵と湖水近く行きかゝりしに、硫黄の香鼻をつきて胸わるく、大木を輪切にしたるやうなる、石幾個となく、砂礫の路央に敷きあるを何ぞと問へば、硫黄滓なり。頓て湖邊の砂利道を辿り、三津川と記せる太き杭立てる小川のほとりに到れば、流れの中の石は皆硫黄の花を被りて、或は黄ばみ或は白み、自然の色は少しも無し。太鼓胴づくりにしたる狹きよぼ〳〵橋の、橋板に罅ある、欄干の破れかゝりたる、見るからが餘り妙ならぬを渡り、終に地藏堂に到り着きけるが、此處はまた如何なること、わや〳〵がや〳〵雜沓して、宇曾利山延命地藏尊と土地訛りを立派に萬葉假名で表し染めたる大旗小幟を幾條となく腥き風にはたつかせ、善男善女右往左往に徘徊し、どんざを衣たる爺もあれば、緋金巾の脚布あらはに友を呼びながら駈け廻る姉樣あり、頸よりかけたる蝦蟇口をぶら〳〵させ居る醉つた若衆、駄菓子を噛り〳〵歩く兒童、念佛を齒齦で咬みながら申す老媼樣、おもひ〳〵の人さま〴〵滅多無性に賑かにて、また〳〵と生温き水の浸み出て居る境內に、祭日當込の商人香具師も少からず、何でも一錢五厘店、正眞熊の膽、薄荷水、下駄屋、居合抜き、弘法大師御夢想の御灸など、何れも囃立て說きたつれば、

名にも似合はぬ恐れ山みち、煙管啣へて猶登るべし。
婆衆は腰をたゝきこそせめ、野郎の骨を折るとぞなき。
地獄近しと人は云へども、塵寰を隔つ雲も居ぬなり。
あはれ此邊で鬼の兒も出よ、晩酌の下物に殺て遣べい。

と果敢なき戯語を一句一句捻り出しながら歩めど蹉躓もせぬ氣樂さに、ます／＼附けあがり、銅鑼聲發して韻文とやら人の名づくる者を無造作無茶苦茶に且つ作り且つ吟じけるが、其中我みづから可笑くなつて噴飯せしまゝ記憶に殘りし二三句を擧ぐれば、あゝ水！どんどゝ鳴る、あゝ風！、颯々と吹く、水は冷い歯を鳴らし、立ちたる巖に咬ひつく！風はやさしく手巾で、旅客の領の汗を拭く！、天の美！、地の美！、自然の美！、といふやうなものにて、十分ばかりが間はべら／＼と吟じつめたりし故、大抵五千言以上の大作を成したりしなるべけれど、幸福なとには皆忘れたり。さるほどに道は下りとなりて、木を横たへては、足がゝりとなしあるやうな所のみ段々多くなりしかば、そろ／＼危險くなつて來たと腹では思ひしも、下りのことなり多寡が一里ばかりなり何程の難義やあらむと駈け下りしに、五丁行けども下りなり十丁行けども下りなり、遂に三十丁餘下れば豫てきゝける湖水の見ゆるにぞ、さあ既到着したりける歟、さりとては愈々樂な山と、四方の景色を眺めつゝ徐々歩みを移しける。一體此山云ふまでも無き休火山にて、碧水鏡の如く湛へたる今の大

いよ御山へぞ地獄へぞとおもひ寐に寐しが、家兄の家の庭なる池に臨みて幼き弟の釣綸を垂るゝより、其傍に妹の佇める、「ポン」と名づけたる白狗の戯るゝ樣まで、まざ〳〵と夢みて夜半過ぎに何となく眼覺めけるもをかしき旅の情なりけり。

其十

朝鳥の聲朗かに鳴きわたれば誰も彼も先を爭ふて起き出で、山に上る準備それ〳〵なり。我は別段急ぐことも無けれど、暑くならぬ中こそ可けれと飯を終はるや否や直に立ち出て、道案内の碑をたよりて、小草の露の乾かぬ間に百十三丁走り去らむと、木の根を飛び越え岩角踏み越え、いと勇ましく進みけるが、其身の輕き事牛若丸にも優りたるべくおもはれて我ながら感に堪ふるほどなりければ、たちまち二里餘を歩みて、やれ〳〵餘り上り耐への無き山かな、山も少し嶮岨て無くては、「如何だね、あいよ」で出來た戀のやうで風流が足らねば有り難からず、これではおそれ山もお洒落山ぐらゐなもの、何も慈覺大師が幅を利かせて我が開いたと高慢をなさる程の事も無く、拙者でも洋杖一本で路を開いてのけるべし、露伴に於ける恐れ山上りは蟻に於ける氷り砂糖上りより御易いこと、思へば可笑い極樂道の此先何て地獄のあらうか、有つたら大方お臍が沸かすお茶湯地獄でがなあらむと、霧山岳に萎みしときとは大違ひの大勇氣にて、

たゞ一人「みそはぎの花」を摘み居し女の兒の色白にて鄙育ちには似ず姿ものごしも優しく見えければ、

　家遠しみそ萩つむは孤兒か

正午少し過ぎに横濱へ着き、馬車の田名部へ歸るものありしに乘じて行く途中、眞黒なる身體に桃色の犢鼻褌一つしたるのみの七八歳の男兒共折々付きくる實に五月蠅し。日もやゝ落ちかゝるまで、相も變らぬ海邊を通りて、漸く田名部の町見ゆるあたりに到れば、路の右手の原中に梵字書ける太き杭の寂しげに樹ちて影いと長く地に曳ける光景何と無くあはれに、七本に一本十本に二本は立枯れたる片側並樹の松風の耳朶を吹き、人影見えぬ遙の野末に牛の長鳴きするなど、さも〳〵陸奥らしくて、夏にてさへ如斯なるに秋などは如何に物悲しからむと徐ろに感じける。敎へられたる山理といふに宿りしに果して此家さへ御山參詣の衆充滿て賑やかなり。されど待遇も敏活といふにあらねど親切にして賴もしく麁略なること無し。立ち働く女どもが土地訛りも一生懸命になりて能く聽分くれば語氣語形ともに優しき節あり。「もぢり姿」も色めかで好く、夫有るものゝ必ず齒を涅め居るも義理堅くて好し。(もぢり涅齒は此地に限りたるにあらず此邊すべてなり)一錢もつて錢湯に行き、隅の方に屈まり居て人々の語り合ふ話を聽くに、皆それ〳〵の禮儀ありて質朴の長閑氣なることのみなり。水は鐵氣ありて大きに惡けれど恐山の麓なれば是非も無き事なるべし。明日はいよ

の馬どもの各がじゝ自由に振舞へるも我等の眼には新しゝ。此邊すべて牧場にて道は即ち牧の中につきあるなれば、此牧、彼牧の境に到れば桔槔の如き裝置にて明け放すとも自然と閉づるやうなしある柵門ありて必ず道を遮りあり。野馬共此中に居て時には我が乘れる馬の後に跟き來るも不氣味のやうにて風流なり。玫瑰は「はまなす」と呼びて薔薇の類にやあるべき、北地の海岸に多き由は誰も知りたる草木育種などにも記しあり。花紅くして美しく、枝ぶりも俗ならず、實は紅熟せば食ふ可しとか。香水は如何して製するかと問はるれば其處までは知らねど何にせよ賞めて然るべき花といふべし。されども二里行き三里行けど變らぬ景色草木に些〻退屈を催して馬上に小說を案じ句を案ずるに、案じて碌な者は成らず。

「文覺」の手になとられそ玫瑰花

隨分解らぬ惡句なれば解したふりする人には文覺上人が玫瑰花を食ふて生命を繼ぎしことありとても牽强附會らるべく、それも是非なし。わからぬついでに猶解らぬ句を此處に記し置かむ。解らずといへども理無きことは云はれぬものゆゑ、人此邊を旅行する時自然と會することあらむ。須磨の蜑の矢先に鳴く郭公の風情も其地の事を見聞せては誰か曉り得んと高慢の辯護するもつたなし。

雲の峯や長汀曲浦太陽の香

傘投げて寢んず「狐の花」の床

野邊地の宿の甞て過ぎたる時とは様子何と無く異りたるやうなれば、段々心を注け見るに家作り皆新しく、道路の中央に布きある石のみ舊觀を存したれど、他は皆有爲轉變の道理を洩れで、聽けば二三年前の火災に殆んど全宿燒けたる由なり。安田といふ家に宿假るに久しぶりにて二階に爐のある座敷へ通され、そゞろに往時を懷ひ出して、北海道も戀しくなりぬ。さて寢床につく前にあたりて、恐れ山へはたしか此處より東北へ入るとおもひしが、行程は何里ばかりにて途中の宿々は何々といふぞと尋ぬるに、此處より横濱まで七里、横濱より田名部まで七里、田名部より百十三丁、即ち恐れ山地藏堂でござりまするが、東京の御方にも似ず能うこそ御存知、來る十七日舊暦の廿四日は一年の大祭にて、今より近郷近在の男女遠きは津輕松前の者まで參詣群集し、御籠り致して居りまする、然し餘り賑やか過ぎてお山には御宿りなさることも叶ひますまいなれば、田名部の山理と申すに御案内いたしませう、其家より御山かけて又其家に御泊りなさるべしと敎へられ、偶然の功名を偶然の失敗の後に得たるは好けれど、十四里行きて又其先なりと聽き、所思相違に厭氣萠せしが、いや〳〵高が一日路なれば如是時來合せしも地藏尊との因緣なるべし行きて見るべし行きて見ん、と心を決め、翌る朝早く馬にて立つに、七里の賃錢五十錢とは隨分廉からねど乘つてみれば鞍の上にてさへ倦きるほどなり。左に斷えず海を眺めつ茫々たる原中を歩まするに、菖蒲玫瑰遠く近くに咲き香ひ、さま〳〵の禽の歌ふ聲長閑く、立てる、坐れる、睡れる、當歲、二歲、三歲以上

風流にも宿の亭主が青き柏の葉に包みて呉れたる掬飯も不用なれば待ち居たる馬士にあたへ、馬に乘て柳澤に戻り、先達に遣れとて骨折貫ぐるみにて八錢五厘を遺し置き、馬を廢して濡れ衣物を着たまゝ乾かしながら盛岡まで歩み、汽車一ト飛び野邊地に着きぬ。今朝は「大武丸」と云ふ鬼住みし由の山に上り、今宵は北の果の海邊に來て「あぶらめ」(魚の名)に晩飯を甘く食ふ、おもへば露伴も時間と錢には感心に鹽の辛い男となりぬ。岩鷲山は尚大雨や降るらむ盛岡にて看し時には密雲堅く鎖して裾さへ能くは見えざりしが、彼六人の猛者達は大方鵰まで御山の私雨に洗はれたることなるべしなど、我が腹の尚痛さにつけて思ひ出しける。彼の笹小屋にて我を刺せしは後にてききしに坊主子蚊といふ恐しき蚊にて、蚊と蝿との合の子の如き形狀して、其嘴如何に毒あるにや、嚙まれし痕より血浸み出してぼろぼろと小豆のやうになり流れ落ち、肉一體に膨れ上りて臑は脚氣病みと同じく捺せば指痕を遺すまでなるなり。此記をなすは十八日、咬まれしは十四日なれど、今だに足は醜き鹿の子なれば我が如く蚤蚊に弱きものは遺恨骨髓に徹して、憎きこといふばかりなし。

虱にもせめて似よかし坊主子蚊

其九

は三分を用ゐ七分を藏すといふ我が主義にも矛盾する節無きにあらねば登山中止と決心し、其代りには今日野邊地まで駛り、明日は恐山地獄を又失敗か知らねど一覽せんと邪見我慢を紛らかし、如何にも我は慰みの登山なれば此馬鹿雨風で厭になつた、六人のやうには疊の上でのみ生活せるもの故到底あるけぬ、腹も痛い、足も傷めた、濡れ鼠で氣持も惡い、下山する、案内せいと云へば、六人の衆を待せあれば下山の御案内いたして居る譯にはなりませぬ、彼衆は今日御山かけてから盛岡まで馬を通さるゝ筈故と答ふるにぞ、さてはとまだ夜の明けぬ所以も分りぬ。ゑゝ愚圖つくな、骨折賃は遣るは、「下りは迷ひ易い」、知るゝところまで導けと無理に強ひて、此より此一條を行かば笹小屋のあるところへまゐりまするといふところ迄案內させ、其處に待つて御出なされませ、必ず〳〵我等下山する迄御待なされませと何故にや馬鹿念を推して云ふを聞き捨に下れば、果して笹小屋あり。雨猶強く道分明ならねば其中に入り、取れかゝりたる横の方の莚一枚とりて地に敷き、素裸となり衣を絞りなどし、寂然と趺坐して爲うこと無しの灰身滅智、燐寸も濕りたり煙草も喫めず、ひたすら日を待つ內頻りと臑を刺すものありて痒し。少時して時鳥閑古鳥等鳴き、夜は全く明けたれば、先達の言葉をば三里も外に撥き飛ばし、飛ぶが如く麓に下るに、道も晝見れば恐ろしくも何とも無く多寡の知れたるものなり。馬返しに近づくに及んで日は東山の頂きより出で、雨全く止みて東雲火の如く、快活さ云ふばかりなし。思はず再び一喝すれば諸鳥の暫時聲を扣へたるもをかし。

れはなるほど邪見の蟲が牙を咬み我慢の角が額に芽ざして、獨りで上れぬ山も無く、獨りで住めぬ世もあらじ、先達などに後れたりとて彼等が馬なら我は牛ぢや、足が違へば是非は無し、追ひつかむとせずともづう〳〵しく遣つて行けと、內心早く夜の明け放るれば好しと念じながらのろのろと上る事少時して上よりおーいおーいと呼ぶ聲す。此方より呼びかけし時は聽かぬかのやうに早速と行きながら今度は其方から心配に堪へて呼ぶか可笑や、と思ひながら意地惡くも返辭せで殊更に立ち止れば、呼ぶ聲ます〳〵近し。尙默すれば尙近し。尙々默すれば尙々近し。これは面白し、此方の腹には彼方の腹が會せて彼方の分別には此方の分別が分らぬ時には斯程まで勞逸の差があることか、おもへば世を渡るにも如是ことが多かるべしなど想念の他事にまで涉る間に先達一人戾り來て、我が爲に餘計の道歩ませられし不平の顏付可笑く、御前は信心ではござらぬの、慰みごとて御山はかけられませぬ、高い山をもかけられたらしくもなし、左樣一人後になられては六人の衆を等閑にする譯にはまゐりませず私が困りまする、と宛も我が罪かなぞありて神聖なるお山に登り得ぬものかなんぞのやう思ひ做したる口氣にて人の顏をぢろ〳〵視ながら云ふ。なんの此奴が南部領の他には草鞋捨てた事もあるまじきに我へ對つて慮外なる言ひ草と小兒らしき考へも一寸起せしが、思へば云ふ所も先達としては無理ならず、又此處まで來て上りきらざるも忌々しけれど、根が慰みに、此男と彼六人とを突放し、一人となりて精力を盡し、甲斐なき雨の日に頂上へ登るも無益しく、且

方の露伴も都育ちの悲しさに數々後れて「置てきぼり」を喰はせられ、祇陀院坂とかいふところにかゝりし頃は遙に後れて、何所か知れざる溪底にて「其處は鎖を傳はれよ」と彼等の敎へ呉るゝ聲を聞くのみとなりぬ。心細さは云ふばかりなけれど眞闇なる谷に向ひ鐵鎖を傳ひ曲折して行き、それより大滑りなどいふ素敵に滑る道を歩むに、上りは急なり、雨はあり、滑つては膝頭をつくに痛さ堪へ難し。それこれする中左は深さ知れぬ谷、右は高さも測られぬ小石の路にかゝると等しく、果して風の吹き出して峰より下す雨烈しく、帽子の眉庇より落つる水瀧の如く、一歩も進めるものにあらず、杖つきたてゝ佇むに、何程行きしか知らざれど同行は既遠く去りしか呼べど答ふる聲も無し。此邊すべて草も無く、海苔取る如くに亀朶を植ゑて高みより絶間なく落ち來る小砂利は道を沒されざるやうなし、且は路しるべなり路踏みかたむる便宜なりとなしあれば、一人となりても道には迷はず、徐々と又行きかゝるに其亀朶さへも無くなりたれば、流石の男も敗亡し、立往生となりかゝり、袂を吸つて喉を潤し、我ながら野獣の樣になりて喝する一聲、風伯雨師を叱せしが功能さらにあらばこそ、暴れ降り暴れ吹きます／＼太甚し。失敗失敗大失敗、かゝる日に無理して身體を痛めなどせば詰らぬ話し、山に上りきりたればとて眺望もあるまじければ、記行に光のつくでもあるまじ、所詮歸るには如かず歸るには如かず、嗚呼馬返しへ來らざりし前に歸らば如斯は苦しまで濟むべかりしをと悔る途端に下帶まで濡れし故にや腹痛みていよいよ悲しくなりけるが、如斯な

地を罩め、先に行きたる人影も見えず、たゞ我が馬士の菅笠のみ仄白く見ゆる態淋しといふも愚なれば、同行に追ひつけ追ひつけと急がしたてしが、半里餘も過ぐる時漸く追ひつきぬ。上りやら下りやらの路は格別惡からねど、霧は何時しか雨となり空さへ暗くなりまさるに、鳥すらまだ啼かず脚下の草すら何と馬上よりは辨へ難し。馬鹿々々しき時分より立たせたるものかな、他國の者なら知らぬこと、土地の人には何の風吹かば雨となり、何の風吹かば晴となるといふこと位は分るべきに、天氣の見計ひ時刻の加減も無く我等を山に追ひ上せしことと片腹痛しと、づぶ濡になるに隨ひ忌々しく、それとも此雨頓ては晴るべきものならむ歟と、共同で皷ひし先達に天氣の惡しき愚痴を譏せば、雨はもつと大きくなりませうが風が出ねば好うござります、と平氣で答へられ、勇氣も何もげつそり減りしが風は多分出まいなと念を推すに、風も出さうでござります、御山は荒れさうでござりますと又平氣で答へられ、せめては風は出まいと云はれて其を心の頼みにせんとせし胸算がらりと破れ果て、いつその事に歸らむかともおもひしが、折角此所まで來しものを歸るも口惜しと我慢を起し、面白くも何とも無きを堪へ〳〵て二里半ばかり馬返しといふところまで到りたれど尚夜は明けず、此所より馬を返すなりといふに馬を乘り捨て、徒歩となりて熊笹雜草脛を沒する中を行く。暗さは暗し足元は見えず雨はますますどしや降りとなる、同行六人は屈强の男なり妄信者なり、「御山の荒れるは有り難い」と却つて勇を增し聲を掛け合ひ突進すれば、我等が黨では隨分强がりの

自ら製造して食ふことと情婦など持たぬ身の威張つたものなり。

手盛りして飯食ふ宿やほとゝぎす

其八

九時の時計の音は耳にして十時の音は耳にせず寢入しに、もし〳〵と搖り起されて、お山に行かるるなら御準備なされと云はれ、同行者に後れじものと急ぎて前の小流に顏を洗ひ、膳へ向ひしなに時計を視れば十二時前なり。餘りの事に、不審して尋ぬるに、時計は後れて居りますといふ。何時間後れて居ると糺せば、能くは分りませぬといふ。呆れかへりたれども夜も頓て明くべしと飯を濟まして外面を伺ふに小雨靡々として猶夜深き光景なり。されど同行者六人の馬は來りて人々立ち出づれば、我も衣服の尻端折して素膕に紺足袋草鞋掛け、なんの脚袢は無くてもと剛氣に力みながら蝙蝠傘さして出掛けむとするに、傘など持つて行かるゝものにはあらず、杖をば貸して進ぜんと、天秤棒ほど太くして端に鐵を被せたる六尺餘長のものを貸され、此杖がいるとかと些驚きながら、旅中は忠告用ゐるべしと其意に從ひ、初や－い初や－いと家は何處か知れねど道の傍にある由きゝし我が約束せし馬士の名を呼びながら進むに、少時して初公のつそりと出て來る其悠長さ言語同斷小腹の立つまで寬々たり。漸く馬に跨がりて岩手神社の森を潛り山の裾野を分け行くに霧漠々と天

て、秋の風情も想ひやられ、澤地には菖蒲の花の今を盛りと五々七々紫の花の「心」といふ字に咲けるも美し。「ぢやく、たまぢやく、ぐゝぐゝく」と鳴くと奥の人の聽く雲雀の聲をも忘るゝ頃、柳澤に着きしに、客舍はいぶせきが唯一軒にして、我より先に六七人の田舍客あり。是非なければ其家に宿借りしに、茶を持つて來ることもせず、椽側に水手桶置きたるに茶碗の添へありて同宿の者の自在に汲みて飮むを見、これにつく〴〵恐れ入りて徒らに煙草を喫かす中、或は裸體或は襤褸を纏ひたる兒童の六七人群り來りて「錢子撒いて吳れ」と五月蠅云ふ。我笑ひながら錢子まいたら何のやうの花の咲いて何のやうの實の生る歟と云へば、笑ひもなさず、言葉も出さず默然として皆去りける。引きちがへて無客馬を牽き連れ來りし馬士あり。宿の椽先の塵掃き居りし老人と何か挨拶するに、互ひに地上に手をつき腰を屈めて我等が疊の上にてする如く禮儀正しくす。これにも異な感じのするに、御飯あがれと亭主の導くまゝ從ふて古疊のごそつく大きなる一室に入れば中央に味噌汁の大鍋と大飯鉢（鉢なり）と大鐵瓶とを据ゑ置き、膳をずらりと周圍に駢べありて、亭主も嚊も給仕はせで引き退く風流さ凄いものなり。平椀は燒麩と隱元さゝげ、香のものは泳ぐほど醬油を掛け吳れたる菜にて他には何も無し。何某姬が手盛にて飯をぱくつきしため情夫に愛想つかされし昔話は聽きしが、美女の給侍に卑劣な虛飾をして三杯めにろつと出さむよりは此方も可しと打笑ひつつ、梅若丸とも申すべき優形御尋常の露伴も少し酒呑童子の方になり、佛樣に獻ぐるやうな山盛を

場近くにて晝餉したゝめ、甞て此邊を通りし時好き山なりと心で賞めし「南部の片富士」に登らむと片原町を過ぎ、士郷の村に一ト憩みし、馬を傭ひて柳澤といふ山麓の村に向ふ途中、さして景色よきにはあらねど所々に鳥居ある他何も無き曠野の中を馬ぽく〳〵歩ますれば、老鶯の數鳴くに合はせて山郭公の落ち返り鳴き、「ドロ」の樹の葉の風に吹かれてさや〳〵と音を生じ、三光鳥の月日星と叫ぶ、皆詩趣ありて面白く、三光鳥は何と鳴くぞと馬追童に尋ぬれば、「一杯一錢五厘」とも鳴き「月二十五圓」とも鳴くと答へしなど中々興あり。段々と上り行く折しも野兎の躍り出したるに鳥銃通の太華山人を思ひ出し、それより共に金毘羅參りせしこと、九州行きせしことを思ひ出し、櫻島の枇杷が急に喫べたくなり、多度津で蓴菜食はされしが切りと可笑くなり、雷火豊の卦の論難に山人を蒸ませし我が詭辯を思ひ出せしが、此紀行の最初に遯の卦の爻の辭を載せしと自然の照應をなすを、ひとり妙妙と鞍の前輪敲きて浮かるゝ時、ゆかしき鳥の一ト聲を聽きぬ。我も淋しいか飛んで行くと古人の云ひし閑古鳥とは即ちこれなり。

倒れ樹に蒼苔むせり閑古鳥

と即興其儘我ながら拙しとより云ひやうなき句を吐きぬ。閑古鳥には樣々說あるべけれど我はかまはで妄りに閑古鳥の句をなす。高慢と人の云はゞ云へかし、其鳥の聲を人里遠く草茂く老樹の蔭の小暗きあたりに聞きし人は强ひて我言をば否まざるべし。さて尙馬を進むるに野面の萩のいと多く

東京でも此を歌ひますかと眞面目に問ふ。我此返辭にはほと〳〵弱りしが、何年か江戸へも行きませねば知りませぬと、人惡けれど是非なく答へける。十一時過ぐる頃歸りて床につけば四隣靜にして遙に「なます鳥」の敲く聲聞こゆ。此方三絃鳥よりは幾層倍か風流勝ちたり。

其七

中尊寺境内の阿波の介が舍利塔の由來を耳にせしより、其當時の餓死の光景など想ひつゞけつゝ、寂しき夢に入りて、明くれば既七月の十三日なり。空しく此地あたりに日を費さむよりは山に嘯き河に唫じて尚幾干の人情風俗を心に映ぜしめ、斷橋古碑に思ひを疲れしめむと、霧雨はら〳〵と降りつ止みつする中に一ノ關を立ち出でゝ、汽車は疾いもの、正午過ぐる頃盛岡に着きぬ。最明寺殿西行殿こちの芭蕉樣も白無垢御前で旅されたといふことを聽かねば風流を迴るものは如斯したものと例の通り下等室に乘りしに、盛岡を脱けて一ノ關にて捕へられしとかいふ罪人四五名に巡査二名の附き添ひたると同車したるも可笑しく、好い者が手帳の中に入りたりと二十餘里駛る間仔細に意に注けて伺ひしに、年長なる一人少しは見堪へある人相にて其他は修業がまだ青さうなり。柹色の衣着せられ麻繩に緊しく縛られたる心の中傍觀よりは憫然に推せらるれど當人にあつては如何ならむ測り難さに、あはれ疾く阿波の介となりて一念の發起滿身の舍利を成ぜよと祈りける。盛岡の停車

を買ふに、鼻緒の前坪の孔のみ一つ明き居て後の方の孔は二つとも明き居ぬを不審して尋ねしに、火箸を燒いて御勝手に御明けなされと答へられ、へゝーとばかり恐縮しける。此下駄一足一錢五厘、廉價か高價か更に分らず。

其六

いかに露伴子、かゝる土地の料理屋も後學のため觀て置くが宜かるべし、我等案內仕らんずと鄕內といふ仁の發議に贊成者あり。我盛夏は酒を愼めども下地は好なり、御意は可し、御伴いたさむ、と早速其意につきて誘はるゝがまゝ淸風亭とか號ぶ家に入る。萬事手ぬるきだけは中なれども家作りも松田や雁鍋の眞似などならで堪へられぬ厭味は無し。酒も佳し下物も惡からず、給仕の小女も東京近在の茶屋の如く俗惡にはあらず。大きに心よく談笑して陶然と醉ひしが、さて藝妓とやらいふものには些ゝ萎みたり。座に來るや否御座附に引續けてペコ〳〵ツン〳〵と彈きづめに彈き鳴し、庭の蛙に遠慮も無く歌ひづめに歌ひたてゝ騷がしきを即ち與と心得たるらしき顏付いと凄く、馬車の喇叭でも懷中せねば牛若丸でも敵ふまじく思はるゝほどなれば、まして甚句都々逸騷ぎ小唄を叱言より惡み蛇蝎より嫌ふ我は心耳を閉ぢて默然たりしに、頓て緣かいなの百萬遍はじまりぬ。おもへば「きびす」「かはいそ」などの出ぬも可笑し。座中に「おいとこさうだ」を歌ふものありて、

する頃、しやうたん〳〵と大きなる聲す。我は瓢簞と聞き違へて瓢簞あればとて何の聲ぞと思ひながら指させる方を見れば、瓢簞にはあらずして朽ちかゝりたる大木の松の幹の高きところに色白く大きなる蕈の五六本簇まり生ひたるなり。人の見つけなば唯置くものではなし、小旦那下郎が肩に御乘りなさつて蝙蝠傘でお取りなされ、と袢纏を脫ぎて風呂敷の代りとなし置き、赤裸になつて松の根方に蹲くまるにぞ小旦那恐る〳〵其肩を踏む。坊主ゑんやらやと立ち上がる。我遠くより打視るに臼より太き松に貼して肥え逞しき赤銅色の男の上に白皙の美少年の乘れる態いと與あり。しやうたんは傾き立てる幹の裏にあり、人は幹の表にあれば、木に貼ける眼とゞかず、見當無しに傘を振ふ。傍觀の我は氣を揉みて、も少し左りの方を打て、いやも少し右の方をぢや、も少し上ぢや否下ぢやと小兒が痒い背を母に掻いて貰ふやうなことをいふ中、蕈の蓋は裂けて落つれど肝心の莖は取れず。坊主は堪へかねて、下郎楷子を借りて來ませうと云ひ出し、麓の茶屋まで駈けて行きしが、頓て岩疊づくりの四間楷子を汗水になりて擔ぎ來り、路中より直に程よく立て掛けゝる。されども中々ごろつきて上るとの危きに我と坊主とは楷子を確と抑へ居れば、小旦那勇を鼓して上り、遂に首尾能く捩ぎ取りしは大骨折りの事なりし。しやうたんは蓋し松膽と書くべし、松蕈とは全く別のものなり。さて「しやうたん」をば茶屋にて湯がゝせ酢味噌て食ふに、さして美味くはあらざれど淡泊にして惡からず、わづかに松の香のするを賞むれば妙とでも云ふべし。歸路山の目にて「猿下駄」

爲るところを觀ば様々のをかしみあるべしとは胸に浮びしが、いやまて、雜沓を恐るゝ性の我なり、且は別段病氣も無し、强て然る地に到らでもあるべしと思ひ返し、櫻の花の尙ほ殘れる歟知らぬといはるゝ奥山へ行くとは、一は熊谷氏の切なる諫に從ひ、一は嶮岨に我と怖れをなして、廢案と決定し了り、車を得て一ノ關に歸りける。其翌日平泉見んとて同じ人と共に行き、劍舞の起源について名を聽きし梵字が池、病者の賴む獨鈷水、塔の在りしところ殿の在りし所なんど、平泉志を坐右に置きて記をつくらば隨分高慢氣に書き列べ得べき武士どもが夢の跡を一覽し、高館に九郎が木像と對面す。像は山車の人形くさくして感服もせねど地は北上川に臨み東稻山に對ひて景色よく、懷古と前書して「山聳え河流れたり秋の風」と蓼太が詠みし句の巧さも成程と合點せらる。それより中尊寺入り口の茶屋に車を乘り捨て、歸路に寄る故香魚の鹽燒でも喰はするやう準備せよと通がつて命令くれば、眞正直に愛想氣無くも、香魚は生憎ござりませぬとの返答に是非なく、それは情無いが河水の加減で無いとならば詮方なし、何か調理の支度して置けといふ。何にも彼にもござりませぬと答ふ。二人とも此一言に閉口して、何にせよ飯を食はせて吳れと心細く賴み置き、車夫一人連れて境內に上る。辨天堂經藏金色堂等誰も知りたる事なれば筆にするまでも無し。連れたる車夫は坊主頭の氣輕者にて、笠をば茶屋に忘れ來しまゝ、正午頃の日の熱さに湛へて、路傍の蕗の葉を頂き其上に手拭被りて步行くなど風流の擧動なす面白き男なりしが、山を下りて今や出はづれんと

と、日本三景の一とも云はるゝものを比較にとりて松崎復が溪橋の碑に記しゝは些過ぎたる歟知らされど、此景て客舍さへ寐覺の「たせや」ほどのが有らば申し分なし。確乎とした試驗せしにはあらざるべきが河中に溫泉の沸き居るよしなる故、若し此地にして修禪寺の如きに至らば妙益々妙、大厦高樓も頓て出來んが、左無くとも蓋し客舍は追々好くなるべし。碑文など讀み了りて熊淸とふに戾り、酒は鍬鍛冶の正宗なら可けれど豆腐屋の庖刀なるべしと飮まず嫌ひを怜悧がりて頭から用ゐず、飯のみ食ひ了ひて、書を一ノ關の知人所謂小旦那株の熊谷某に與へ、前夜來疲れしまゝに、ころりと橫になり、ぐつすりと寐入りけるが、覺むると頓て二里餘の閒を車いそがせ例の小旦那はや來らる。水の音好く、松の聲好く、蛙の歌好く、月も好く、機轉はたらき齎らせられたる麥酒も今宵はひとしほ味好し。

其五

栗駒山登臨の意切なりしも、須川の溫泉には在鄕の人など四五百人は籠り居るなるべしとの事に吃驚し、一度は虛說ならむとおもひしが念を推して糺せば、まことに溫泉の効驗あるため米味噌持參の御客樣群集の由疑ひなし。七八年前は雨露を凌ぐばかりの笹小屋のみありし趣きなれど、其頃にてさへ夏は相應に賑ひしとかや。されば若し其處へ攀ぢ上りて陸羽の人々の氣保養やら身養生やら

てもよきほど岩石重疊して、赤松其が上に生ひ、碧水其罅を行く風情、まことに塵外の想を發せしむ。天工と名づくる橋ありて、構造も俗惡ならず、岩より岩に架け渡せる樣畫中のものなり。それを渡りて左りすれば小やかなる堂めきたるものありて觀覽の便宜となしあるにぞ、下駄脫ぎ捨てゝ上り込み、勾欄に頰杖突張りながら觀れば觀るほどよい景色にて、少しく木曾の寢覺に似て趣きはまた大きに異れり。彼は溪邃くして水に遠く、臨川寺よりはたゞ對ひの岸の岩の立てる、河中の石の狀の奇なる、淵の蒼々たる、水の尾の瀨をなして奔るを見るに過ぎねど、此は溪邃からで水に近く、橋よりは瀧を見るべく堂よりは瀨を見るべく、淵の蒼き、岩の奇なる、殊更岩の上に老松幾株翠を凝せる、水の幾派にも分れて流るゝ、固より此彼に優るとは云ひ難きも彼終に此が兄たりとは却つて中々に稱し難し。ましてや寢覺は幾干の山坂を超えて後漸く到るを得べき境なれば都會育ちの老人女性には難義なる地なれど、此地はかゝる好景の常として里遠きところにあるものなるに引かへ、絹足袋穿いた柔弱男にもいと容易く駒下駄掛けにて行かるゝやうな市街（一ノ關）近く道好きところに在るは眞に稱すべし。爾のみならで今は葉時なれど、櫻の樹さへ少なからず見ゆれば、花時の眺望如何に淸絕美絕なるらむ、想ひやるだに松の翠の間に佐保姬の刺繡して出だす櫻花、甲所に一簇の雪乙所に一團の白雲と現じなば、流れも巖も一倍の光彩を發して水妙香を傳へ石落紅を點ずる風流實に賞するに足る事なるべしと思はる。松島は大にして麗、嚴美は小にして奇なりなど

んでゝ氣象自から雄なるありさま好もしく、一ノ關にて汽車を飛び下り、朝餉したゝむるもそこそこ、彼雪のある大きな山はと指さし問へば、栗駒山と申しまするとの答へに、さては耳にだけならば馴染の無きにもあらず、樣子によりては上りてみむと、道の順など尋ぬるに、つまりは此磐井の河上にして、行程凡そ十何里、たゞし人力車は三里ぐらゐ限り役立たず、馬にも中途で御別れなさらねばならぬと覺しめせ、御病氣ありて須川への御入湯ならば兎も角も、御遊覽あそばさむなんとの儀ならば御不所存千萬に存じまするすが御止め申すではござりませぬ、何はあれ此所より二里半ほど彼所への道を辿りてまゐらるれば嚴美と申す地のござりまするが、其所へは態々杖を曳かるゝとも然るべきまで御覽に甲斐あり、其所へ行て尙能く御尋ねなされし上輕忽ならぬ御思案に御定めなされと、宿の主人が助言道理なり。さらばと人力車を僦ひて嚴美に向ひ發す。大町地主町を驅け拔けて磐井の河の假橋渡れば花川戸とかや申して主に旅の衆に投げの情をかけまくもかしこき手管ありや無しや女郎達の居玉ふところなり。それより鍛冶町竹山橋、次第々々に「ごろた石」多き路をたどりて田圃の間を行けば、里の兒の用水に泳ぐ、水車の轆る、いづれ田舍の常態ながら面白し。杭打坂を下りて上り、沓が鼻とかいふところにいたれば、對岸の岩聳へて潭水靜かに湛へたる景色眼覺むる心地す。やがて五串に着けば、聞きしに違はで流れの態も尋常ならず、とある家に一ト憩して後溪のほとりを漫歩し、徐に眼を轉じて水激し巖叫ぶ方を覗下すに、溪を成す皆巖なりといふ

法を先日八王子歸りの汽車の中では發明せしが、敵手なければ今の役には立たず、そろ〱睡魔に侵さるゝを、佛說離睡經知つたばかりで行へぬ身には禦ぐ力乏しく、幸に坐りながら眠るほどの事は書齋の中でも仕馴たれば他の人ほどには苦まで、うと〱と夢に入つてはまた夢を出で夢を出でゝはまた夢に入る魂魄の洞入り洞還りを演ずる折しも、不圖心付けば我より遙に離れたる椅子の上に、姿勢も崩さず肩も歪めず、端然と坐し居玉へる御年若の女性あり。さりとては不思議なり、御面相は好き御育ち柄とも受取れぬに御殊勝なる御身だしなみと感伏して尚能く觀るに、御衣服は數寄屋で御髮は大方島田髷らし。罪な事ながら尚能く〱觀たてまつれば御下駄の好みも御帶の好みも都て我等が眼にさへ鑑定屆くまでの田舍流なるが、御髮だけは確乎に正眞江戶ぢや江戶ぢや、と手拭の上から見透して面白がりけるが、果して仙臺すぎて夜の明け放るゝ折しも、其傍に寢て居られし母者人らしきと何か分らぬ言葉にて、くど〱と話談し、きゝと笑ひ、少時あつて淺黃に紺字入りの手拭を脫り玉へば、母者人らしきは前後より打眺めて、能くまあ毀さいで居ると賞められける。いよ〱東京みやげの御髮なればなるべし。

其四

仙臺以北へ進むにつれて見えつ隱れつ我に伴ふ山あり。山姿奇峭といふにはあらねど高く群山に抽

やいたといふところを過ぐる頃。月さしのぼりて有りふれたる小山に小松の取り合せもおもしろく見られ、薄墨の地に星の落ちたる如く西瓜の花の白う咲けるも趣きありければ、何とかして此西瓜の花の風情をば一句に仕立てん仕立てんと頼まれもせぬ苦勞をしけるが、情は會し得て十分なれど一片の句をも遂に做し出し得ず。手はかならずしも心に副はざることの眞なるを覺えける。

其三

汽車走ること幾時間、霞と共に都を出て秋風吹く頃漸く着きしと昔時は詠みし白河をも過ぎ、郡山二本松福島と次第〳〵に夜更くれば、當世男の知つたか振り、高慢を鼻の先にかけ眼鏡して喋々とやり居たる政治談もやみ、千筋の單衣に紺の小倉帶、銅の矢立と角筒の煙草入を腰にした人の、繭相場絲相場の論も止み、東京の旅籠屋は不親切ぢや何所のは親切ぢやと餘り頼みがたき諸國旅籠屋評判も止み、月の好いのを餘所にして人皆小さき腰掛の上に芋虫の如く海老の如く狗の見の如く横たはり臥し、知らぬ同士の乘合なれば互に一寸の油斷をもせぬ乍ら安逸を爲たき念の止み難くて眠りを貪ぼる心々いとをかし、といふ我身も倦み屈して、美味物詮議に時間を疾く經過すると申す妙

易心後語

其一

蜚遯は利あらざること無し、心得たりと旅の支度にかゝるまでも無く行李一つに一切の埓を明けて、母様何所へか旅行してまゐります。よろしい早く御歸りなさい。はい此夏だけを冗に費はぬつもりでござりまする。途中能く心を用ゐるがよいぞ。大丈夫御氣遣なされまするな、左様ならば。と忽ちに我家を飛び出して上野の停車塲に到れば、例の通り汽車に乘り後れなり。されども毎々の事なれば、口惜がるやうな初心の思入はせて、臨機應變廣小路の緣阿彌大人が俳諧窟をおとづるれば、流石の大通も乘り後れとは察し玉はず、たゞ何所へか御出掛けかと問ひ玉ふにぞ、北の方へまゐる覺悟と答へて、それより甲是乙非の憂き話をかしき話など語り合ふ間に、發車の時は來りぬ。いざやとばかり辭し去らむとすれば、老人氣質の情深くもわざ〳〵送りて玉はるさへあるに一句を餞せらるゝこといと嬉しく、乘りたる汽車の窓より首さし出して脇句をつくる間も無く、ピーと笛鳴つて、言文一致ならばぽつ〳〵と書く風情となりける。

七月十三日。天氣よし。斬妖劍を賦す。

七月十四日。天氣よし。つまむ時螢にあまる力かなといふ句をたどりて、東に推して西に倒す狡猾の手段を會す。

七月十五日。于蘭盆なれはと家に歸る。やはり我が家は寢心よし。

山中のわたくし雨といふものなるべし。

七月七日。一日靜坐す。

七月八日。朝九時に起きいづ。昨夜寐ることおそかりし故なり。昨夜雨大きに降り、樹間遠近に「土鶯」の啼けるをきゝしに、降雨聲中に赤子の呱々と啼くが如く、極めて悲しかりし。雨ふる時鳴くものなるよし。

七月八日。朝早く起きて散歩す。「サゴの樹」といふものをとる。實赤く美しく、葉に細く白き短き靭毛あり。「紅蕈」といふものゝ木より生ひたるを初めて視る。色は烈火の如くして形は「猿のこしかけ」の如し。食ふべし、味美ならず、香なし。

七月十日。一日靜坐す。

七月十一日。天氣變りやすく、晴れては雨ふり雨ふりては晴る。夜土方人足と共に語る。極めてをかし。越後柏崎の話をきく。此者自らいふ、幼年の時、油を買ひにやられし途中、油壺をもつたるまゝ、ふと心かはりて故郷を去りたるより今に歸らずと。

七月十二日。一口劍を漸く終ふ。十日の夜脱稿せしが、清書にかゝりて、百枚以上にもなるべく見えしかば、漸く昨夜より削減にかゝりて三十七枚に書きちゞむ。此事終りければ、また溪などに漫歩す。後面の山高く上る。

分ばかりのしなやかなる鬚の如きものを卷舒して紙に觸れしむる其の狀可愛げなるに、我動かば恐れ驚きやせんと我は唯一心にながめつゝありし間に、つひに眠りに入りけるが、半夏鳥の聲にさめて思はず頭をもたぐれば我肩よりひらりと飛ぶものあり。何ぞと見れば彼蝶なり。

　蝶ひとつわれに添寐の山家かな

とあまりのをかしさに實境を詠じて尙餘味をもとむるに無量の趣きあり。

　飛ぶ蝶に我誹諧の重たさよ

此句吾意を得ること深し。

　梅雨晴れに硯の乾く眠さかな

などつまらぬ興も其時はおもしろかりし。

此夜もねふり難し。嬉しき事のはかなき事のみおもひつゞけて今此記をなす時十二時半なり。頭もまた少し痛む。

七月五日。民友社に送るべきもの書かではと筆を取り、憤發して原稿書き初む。蟬の聲しづかなり。頭痛烈敷して泣きたきほどなれど、讀賣新聞社へも原稿送らねばならず、やがてこれをも認め終る。

七月六日。朝やゝ曇る。昨夜よく眠るあたはざりしが、此日は極めて早く起出つ。日いまだ出でざる山中の景色何ともいふべきことの葉もなく、淚さそはるゝほど物淋しく嬉し。夜また驟雨きたる。

のぞ。

七月四日。昨夜感慨胸にみちて少しも眠るあたはず、漸く曙方にまどろみたるまゝ、寐すごして九時頃起出たり。大雨ふりしきりて何事をなすべしともおもへず、天井より雨の漏るなどまことに風流なり。十一時頃からりと晴れぬ。遠山翠り深く白雲腰に纏ふ狀おもしろし。淺間山、相馬ヶ嶽、榛名山、伊香保等ありくと見ゆるかとおもへば忽ち又雲にかくれ忽ち又雲より出づ。變幻出沒眞に妙なり。

久しき雨にて、晴れたるなれば心よきこと限りなく、障子からりと明放して例の古き天神机によりかゝり、頰杖つきて寂然と靜座し、鳥の聲溪の水音に耳をすまし、靑空に行通ふ雲の行衞などながめやる折りしも、若葉にそよぐ風に乘りてひらくと飛び來りし唯一つの蝶我が面をかすめて部屋の内に入りけるを追はずもあるべしと其まゝにまかせつゝ、扨も山家の閑長さはこゝなり、汝は莊子が夢の精かそれならば共に世のをかしさを語らむなど胸の内に戯ぶれおもひて、無心有心の間にあそぶ此蟲のうらやましさよ、露を食ひ霞を喫し、翩々として執着の煩惱を離れ、何事をも二つの翼にゆだねて厭はしき所をば去り嬉しきところには遊ぶ自在の身のをかしさよと感歎しつ、振りかへり見れば、またむらくと飛で机の前に投げ置きたる一葉集の、朝露によごれて凉し瓜の泥といへる句の上にとまりぬ。焦茶色の羽うつくしく行義よくならびし紋見事なり。何をか爲すらむ二三

くのまるゝよしなり。赤城山中溪間所々にあり。これを前橋へ出す。前橋より東京へも出すなるべきか。煎じて飮めば疝氣にきくとぞ。向ひの山に白き花さけるを霧の晴れ間に見付て、あれは何ぞと問へばさるすべりと答ふ。一躰此山中栗、さるすべり、ブナ、楢、白樺多きは目撃したる所なれど、さるすべりは赤き花さく故に百日紅と字も書くと覺えたれば、少し怪しみて尙き〻糺すに、紅梅白梅のある如く白き花のさるすべりあるなりといひければ、我途中にて見たるも悉く白の花さくものと分りたり。紅き花さくものは此山中極めて少く、「ムグタ」と俗に云ふ由なり。又白樺の皮を見る。東京にて書狀筒となし賣れる者を樺の皮とは今はじめて知りたり。極めて能く剝がるゝものにて大凡二十枚餘にはがるゝなるべし。それを我剝ぎきたりて自ら短册の如くなし、歌をかゝむと少時打あんじて、段々考ふるに、樺を今は「かば」といふ、此地の人又は木曾の人は「かんば」といふ、是れ古くは「かには」といひて栝棬の類を作るに釘も絲も用ゐで此皮にて埒あけしなり。今も「栗山火桶」「栗山手桶」など然り。其は即ち一種の「かんば」にて櫻の如く美なり。木曾にても此邊にても彼と此とを分つ爲めに常のものを白樺といふ。皮の色白くして他のものは赤ければなり。赤きものは即ち「かにはざくら」といふものにやあらん。やがて歌成る。丁度栗の花の風情を一昨日の途中にて初めて能く知りたるなれば其の花をおもひ、且又、世の人の見付ぬ花や軒の栗といへる翁の句をおもひ出しぬ。栗の花はむらがれる葉の上にさくものなり。いたつて見すぼらしく、物淋しきも

かりなし。但しこれも修行なり。世の多くの人は不便の中に住す。かゝる不便を事々しく不便々々といふは實に羞かしきことなり。

家には婆と中年の女と、考亭主と若き亭主との四人あり。皆好人物にて親切なり。犬あり強く逞まし。ササグヤ（小熊歟狸の一類歟）貉等を取るよしなり。鷄四五羽あり、此外なにもなし。鶺鴒、ほとゝぎす、イトヽ、十一ツ鳥（半夏鳥ともいふ）など爭ひ鳴く。前山翠深くして霧海の如し。深夜兀座すれば、心神澄み渡りて妄念雪の火に逢へるごとし。欣喜眠り難く山中の風流を稱しながら夢に入る。

七月二日。月も既に變りたり、居所も既に變りたるに如何なればにや昨夜のゆめの都へ通ひけるに、夢の名殘もながめけり、雨の夕も雪のあしたもといひ玉ひし後京極殿の歌おもひ出しておもふ事ありけり。

日就社に送るべき原稿一篇をわづかに書く。頭痛はげしく、心冴えねば尙こゝに止まる。

七月三日。日就社に送るべき原稿を書く。

雨やまずして霧ふかく、我心の如く濛々たる天氣、氣分はなはだあしゝ。細辛柴胡などいへる藥草あるよしきゝて取らむとす。細辛は其葉牽牛花のごとく、其鬚根香あり、樟腦と丁子を合せたるごとき香なり。是を陰乾にして煙草の中へ入れて喫するときは香氣四方に漲りて煙草も一入つよく甘

つたなしと心中におもひつゝまた歸りに其所を通りて聞けば、から〳〵と笑ふ聲して、誰を撰擧させん又は撰擧されんなど云ふは白痴が女に迷ふやうなものなりと一人の男が語るに我おもしろしと感じて蚊帳の内に入りぬ。

七月一日。朝早く前橋をたちて人力車に乘り、小暮といふにて下り、馬を僦ふて進む。小暮まで二里二丁、小暮より大洞までは五里なり。途中雨降り出で、大きに惱む。二里半餘を過ぎ箕輪といふに近くなりし時、野中に五六頭の牛ありて、相互に挑み爭ひ、角にて泥を掘り柴木を飛ばし合ひ、さしかゝり行く我いと危ふし。暫らくして如何なしけん一の牛奔走して忽ち我乘りし馬の横腹に角もあたるかとおもふほど近より來るに馬は驚きて跳あがりたれば道の左り手の低き方に投け出されたり。横腹はしたゝか打ちたれ共幸に怪我もなし。再び馬に乘りて地獄谷に到る。是より大洞まで一里の道は雨中きはめて難義の由なれば此處に止る。

地獄谷といふは地藏峠の下にて、西手に高き山あり。それに引つゞきて荒山鍋わり山を南の方に望む。三面は山々にかこまれて一面わづかにひらく。風景佳なり。湯に入りて雲の往復するを見る、此心實に妙なり。夜に入りて雨いよ〳〵降る。空山の孤屋あはれ深し。洋燈をもて來るを見るに、ホヤ無し。油煙室中に渦まきて、鼻の孔黒むほどなり。日就社に出すべき原稿を一篇辛くも書く。羅文子に郵書をわたふ。此は明朝此家の男大洞にもち行きてそれより小暮まで出すなり。不便さ云ふば

地獄溪日記

明治廿三年の六月三十日思ひ立て上野より汽車にて前橋に着く。日暮れたれば油屋といへるに一泊す。此家は去年の一月同行四人にてとまりたることあれば萬事都合よしと思ひたるなり。されども彼は商買にて一日幾千の客に接するものから早くも我顔を忘れたる然もあるべし。去歳は銀杏返しなりし娘の今は丸髷に結ふて内義ぶりたるとりなし賢しく下女を使ふ言葉つきもまことに世慣れたり。僅に十六七ヶ月にて人はかく變るものかと驚かれ、我をかへりみれば其頃は無かりし下頷に今は疎なる髭あることそ悲しけれ。之を憶ふに世は皆かく變遷して刹那もとゞまることなし。をかしや〳〵と戀無常を冷笑つて懷中の一葉集を取り出し見るに、行末は誰が肌ふれむ紅の花といふ句ありて心につくことはなはだし。意を尋ぬるに妙句といふほどには思へざれど、その句よりさきの、鼓子花のみしか夜眠るひる間哉といふ句の意の分らぬを考ふるに考へまとまり難し。あきれはてゝ烟草ばかりふかすに、お床のべませうと入り來りし婢は三十あまりの逞しき女にて、他國ものにや語音異なり。起居さう〳〵しく、がたぴしと床の間の花瓶に蚊帳のつり手を打つけなどするいといぶせし。寢衣になりて用たしに行く。廊架にてはからず聞けば若きと中年との男との酒興に乘じて、明日の勝負〳〵といふ。何かとおもふに國會議員の撰擧さわぎなり。箇樣の事にやきもきする人を

り言葉は無くて火にあたりし。其日はじめて吹雪の中をあゆみ、鼻にて息するさへ苦しきものなるを悟り、醉狂の旅をいさむる吹雪かなの句を我眞心より吐出しき。今病を養ふ箱根山下、山上雪しろきを見て記す。ゑせ強がりはせぬものなりけり。

其十四

雪は藍關を擁すとも馬をなぐらば馬は前みなんに、疝氣が持病か引込思案の老爺殿、弱虫故におもしろの景色も知らいで男らしうもない泣言ぬかされけりと、舌をべろりと出して人をあなどりしは、無法ざかりの年頃なりし。霏々たる玉屑山かぜに飛び、翩々たる鵞毛虚空にひらめく中を、突と走り、のろりと眺め、一二里の郊外に足の指を眞紅にして、豪傑がる大椀の酒を仰ぎ、ステッキを握りて豹子頭林冲みたやうな顔をなせし十七八のむかしもをかし。去年一月九日はまた奈良井の宿に眼さめて、枕の下通よふ風冷たきを覺え、夜具の襟濕みなく、さらぬだに夢破れて尙殘る父母のおもかげ、胸も凍るばかり何となく悲しきに身を縮め寒を恐れて起出もせざりしが、雨戸にさら〳〵と物の觸るゝ音、さては雪ぞとやがて起上り、戸をひらきさま首さしのぶれば、寒風劍の如く寐ぼけ面に斬りかくる勢ひ、何かは以てたまるべき二言と云ず息も絶々迯入りしが、忽ち思ひ返して今日此木曾の雪景ながめでやはと奮發し、朝めし例より十分になし果てゝ、藁靴はきしめ跳り出で、さしかゝる山の麓のあやしき家に入り、地酒三椀を傾け、意氣猛く盛んに鳥居峠に登りし。半腹に至る頃醉早くもさめ、寒さは骨に徹し、身躰ものび〳〵とはせず、背をすくめ、ふところを狹うし、痩我慢ばかりを力にて頂上に達すれば、人もあるかなきかのゆがみたる家あり、うれしやと駈入

人の旅行日記ほどあてにならぬものはなし。道灌山を山と心得、神田川を川と心得たる程の人、碓氷峠一つ越しては天下第一の嶮山と記し、木曾川を見ては日本無双の急流としるす。まことに馬鹿氣たる頂上なり。松島見ぬ人が金澤の景色を甚しく譽め、華嚴の瀧しらぬ男が小野の瀧を大なりといふ類は笑ふに堪へたる事ぞかし。山川草木などを地學者めき博物學者めきて記せる嗚呼の日記を見て信ぜば、片腹痛き誤謬を生ずべし。大抵の旅行記を見んには、實地の虛ばなし、虛言の實際ばなし、として見たるがよかるべしと思はる。小說は元來作り話しなれども良き小說は實の影法師の綜合にて、作者といへる燈火に依ッて發したるものなるべければ、其全躰の事實は實際あらざるも、一個々々の由來を尋ぬれば正しく實際より來れるもの多し。旅行日記は旅行日記其物が實在の山川草木等を直ちに現はすなれども、能く考へ見る時は、日記々者の六根に吸收せられたる山川草木等、即ち日記々者の腦中印影を現はし出したるものに過ぎず。故に極言すれば實際と密着せる虛談とも稱すべく、實在と密着せる妄想の記錄とも云ふべし。小說は虛の實なり、旅行記は眞の妄なり。小說を讀みて實にあらずと責むるもの素より野暮ならば、旅行記を讀みて眞と認むるものも亦野暮の骨頂なるべし。我古人の旅行日記にあざむかれたるが如く思ひし事數々なりし故終に此の如く考へ定む。恐らくは眞の眞なる旅行記は讀むに足らず、虛の虛なる小說もまた讀むにたらざらんか。

るべし。つく〴〵思ふに京傳はまことに能く江戸に住みし者なり。さればこそ草鞋はく法も知らず、吉原の趣きを穿つて洒落本の妙に人の頤をも解きしなめれ。種彥は萬事に注意深く瑣々たることにも油斷なく、其古書を看るや愼密周到、一字一句をもゆるがせにせず、つまらぬ當產の俳諧連歌、古人が詠捨の吟までに十分の觀察を費し、批評を下し、精細なる眼を以て照し、堅牢なる腦裏にこれを採集したりと覺し。されば唯だに草鞋の紐の結び樣からげ樣を知りしのみならず、恐らくは草鞋の作り樣、藁のあつかひ樣までも心得たるならん。まことに種彥の文章流麗にして椋の葉もて磨り上げ、光澤布もて拭ひあげたるやうなるも道理なり。言を換へ是を云へば京傳はそのまゝにて種彥はつとめたりといふべし。京傳は單に妙音を發する小鳥の如く、種彥は東西南北に飛めぐりて而して後妙味を有する蜜を作り出す蜂の如し。京傳の如き天賦の妙音も有せず、種彥の如き經營の苦心をもなさず、漫然として文を作り詩を作るは羞かしき事なり。種彥か、種彥か、我等は種彥の小心をまなびて、書をも讀み、世をも觀、山川草木を觀、爛たる日、皎たる月、蕭々たる雨、霏々たる雪、淅瀝蕭颯たる風をも觀じ、大聖大賢仙佛神の意をも伺ふべきものなるに、何ぞそれ空しく心のみ大にして氣のみ急なるや。

其十三

座敷は一面緑り色の絨段しき詰め、壁も天井も我等が名を知らぬ美しき紙にて張り、釣洋燈見事に薩摩の花瓶に西洋流で青木と花物を心と根占の別ちもなく、めちや〳〵に突込てあり、金色の蠅除玉の大きなるがつるしてありしもをかし。やがて膳の出たる時見れば、皿にはびこる牛の燒肉、なにふなしにて、可惜色男が口の端を油だらけになし、わんぐりと食ひ付きけるは、前の世て白犬なりし證據と云はれて辯駁爲し難かり〳〵。斯て飯も終り少時たちて、持はこぶ夜具は更紗の厚蒲團然も二枚、上に眞白なフランチルを掩ひたるも嬉しく、ふく〳〵としたる郡内の搔卷も嬉しく、大きなる黑天鵞絨の枕も嬉しかりしが、寐て見れば、是は不思儀、いとなまめかしき香鼻を撲ッて、美人の傍に居るやうな心持す。是は不思儀と段々糺すに、搔卷の襟に白粉の香の殘つたるなりけり。尙能く糺すに枕に髮の油の香もありて鼻につき、中々眠らるればこそ、殊に如何なる美人の此中に如何なる夢見たらんかなど〻思ふ心も拙かりし。

其十二

溫雅と人に許されし愛鶴軒主人の物語りにて知りしが昔時山東京傳と柳亭種彥と共に郊外に相携へて行きしに、草鞋はかんとせし時京傳は如何にして草鞋をはくべきものとも知らず、種彥笑つて京傳のために草鞋の紐を結びてやりしとぞ。此話多分初代種彥に親炙せし梅彥翁の愛鶴軒に語りしな

共に宿中男のよしあしなど噂して四時となれば、白粉付るも流石に女らし。權十どのに貰ッた珊瑚の根掛いつの間にやら鼠に食はれたとの繰言、此半襟は大切にもつたが平金だけに既う見ッともなくなッたなどゝの歎息は、此時分出づる事なり。笑止〳〵、あはれの者や、夜這といふ惡戯、當時は爲る客もなければ、(?)一日の勞働に疲れてグッスり寢たる曉、よみ人しらずの短冊に腹たつ事もなけれど、其代り馬爪の櫛一枚ねだるべききつかけもなく、噫浮世は宿屋の澤庵、からいものとぞ極まりける歟。

其十一

ある宿にて天明時代の古綿入りたるかと思ふばかりの堅き夜具に寢て其寒き事堪難かりしが、又或山里にては慥に元祿年間の綿の入りたる蒲團にくるまりはせて寢たる悲しさ。是が小道具かなんぞならば古色掬すべしなど悦喜する所なれど、綿の元祿には大きに閉口せり。其癖かゝる家の亭主が自慢は、床の間に鐵舟が眞筆位のものなり。元祿とさへ言へば遊女が使ひ捨し紙のあまり、隱し結びの平元結の一寸ほどなるきれつぱしまで賣れる當世、此綿を仲買したらば口錢も十分に取れるべし。才子よ〳〵田舍をあるいて、古綿買ひませうは如何に。

又或繁華なる土地の上等なる家に泊りし事ありしが、萬事當世ぶり、茶瓶までどうやら西洋じみて

くる事たび／＼なり。總じて身分ある人の外の客は、大抵此の家も、蒲團が暖た頃が別れと思ふより愼しむ心なく、無遠慮の沙汰に及び、大口きゝて野放圖もなき白痴を盡し、姉樣、おまへ、トンテル、何間ありますなどと馬鹿氣たる事紮す唐人の多きには返答も絶て呆れける。中にも恐ろしき客は白銅貨一ツ袂に打込で酒の相手長々しく爲せ、マア一ツ飲め、飲まぬか、禁酒か、誰が爲の禁物ぞ、男のためか、さりとては可愛い御心ざし、我等其處に惚て差すさかづき、唇だけも觸れて還し玉へ、と上戸の舌のよりがらみと申す惡巫山戯す。女ほと／＼困りきッたる折から、向ふの室て手の鳴るを機にいつもより尻輕く、立ながら返事して逃出し、此方の襖あらくたてゝ彼方の襖靜かに明け、御用はと云へば床をのべてとの仰せに、蒲團搔卷肩にかけて長廊下の往來す。是が故にや、足首平たく大きうなりて、宿下りに一枚の秘藏小袖着たる時も好色男に彼は一新講の何屋が婢と鑑定さるゝ口惜しさ。倘口惜きは輪番の厠掃除、昨夜の醉どれめが仕たる不始末の後を片付る事、遺恨鼻に徹してつく／＼果敢なき身を歎きけるが、たまさか好き目にも逢ひて、東下りの業平見た樣な男に手の甲のひゞをいたはられ、又は世間女の騷ぐ俳優の顏を給仕しながら穴のあくまで眺めぬ。まことに禍福は塞翁の馬の鈴鳴る朝まだきに起て早立の客を扱ふに眠きを堪へ、行燈の蔭に宿まりたる寒さのつらき後、座敷掃除して思はぬものを拾ふこともありけるが、大抵午前九時半より十一時頃迄は差したる仕事もなく、晝食まゐる客のちらほらも苦にならず。二時三時は朋輩と

其まゝなれど新しきカバンは破られて今さら殘念なり。今まで幾度も旅してかゝる目に逢たる事なく、道中不覺を取たる例なかりしに、口惜くも居眠りしたる間に仕事されたり。但しスリ奴も古煙草入れ奪りては、あたら仕事を煙りとなし、明て口惜しき煙草入れ、後悔及ばず落膽して苦心も無益、ア、惡事も甘い譯には行かぬものと大悟したるべし。奪られたが彌次なら奪たが喜多八、いづれ迯れぬ鈍間同士、この樣な男なら一緒に道中いたして苦しからずと笑ひける。

其十

旅泊の人たらしと西鶴は一代女の中にかきたれど、宿屋婢の境界、今と昔時とは二百年の月日經て相違せり。街道いづれの宿にても旅籠屋になさけ臭きをんな今はなし。(?)上等の家にて双合の着物、唐縮緬と綿繻子の腹合せの帶、白足袋はくもありはかぬもあり、島田、丸髷、銀杏返し、若きは天神髷、赤いもの掛けて頭ばかりは東京丸出し、唇からは磯の香のする言葉を吹き出し、或は手つき足つきに山蔭の枯木のやうな所をあらはす事をかし。されどそれ等はまだ好し、下等に到りては手織木綿の綿入れ裾短かく、桃色木綿の脚布、見るも氣の毒なり。然しいづれも世馴れて客が敎へ遺せし戯言、洒落といふものも少しは心得たるより、田舍の道者をむざと侮り、隨分不親切も働らきけるが、適には野夫の剛情者に逢ひ、却ッて大きに油を取られ、お部屋の小言、朋輩の笑ひを受

顏に口紅事々しく付けたり。此二人はともかくも可笑き所ありながらも好し。其他に至りては南部の酒痕あるを着たるあり。フランチルの樣になりし唐縮緬の繻絆の袖、紅もかくては鄙しと嘆ずべきあり。此一行のものども、藝者にもあらねば娘連にては勿論なし、達摩か草餅か、何にせよ惡き商賣の女なるべしと眼を注ぎて尙能々見るに血色皆冴えず、暗曚の氣天庭を蔽ふて、眸子開き、肥りたる女も爪の色薄黑き所、何しても夜深くまで騷ぎ罵りて起居る者なるべし。或家の前にて彼等一時に下り立ちたれば、隣席の人に、あれは何ものと問へば、小田原の娼妓なりとの答へなり。白晝往來の自在なることそ片腹痛けれと云へば笑つて答へず。一昨日の夜火事ありて餘程燒たれば淫女どもの商賣し難くて、ぶら〳〵と往來を懷中手などにてあるき居る樣いとをかし。

其九

馬車は湯本に着て尙午前なり。取敢ず湯を浴て心氣和暢するを覺え、湯あがりの苦茶一杯、是又快なるものなり。景色よき所にもあらざれど溪河の音嬉しく俗耳を洗つて、卷煙草は今朝より喫し盡したればとカバンを開き煙草入れを需むるに家に忘れ殘したるや無し。無い筈はないが、今朝たしかに入れたと覺ゆるにハテ不思議と搔きさがすに何時の間にかカバンの横は鋭どき小刀にて切り裂かれありたり。扨てはスリ奴が紙入れと間ちがへて煙草入れを取りたりしやと尙能く見るに財嚢は

其八

國府津といふ聲に耳を驚かされ、其まゝ飛下りて小田原より熱海に行かんとせしが、熱海は時節柄賑かなるべし、賑やかな所が見たい位なら東京に居るがよし、向ふ島の有馬、根津の磯部、萬事の自由足りて賑やかにも遊び得べく、靜にも眠り得べし。何ぞ殊更に伊豆の國まで足を勞して五尺の大德利に燗をするに及ばんやと最初より溫泉入浴のつもりにもあらざれば先づ横道へ入らずに國府津より小田原を經て湯本までの鐵道馬車に乘る。小田原の市中を通る頃七八人一時にどか〳〵と乘り込むものあり。其中一人は四十ばかりの男、其外は皆女なりしが、其躰裁を記せば、其女の中にて一番美くしきは年の頃十八九、梅花の香ぷんとさせて、髮はおとなしき島田に結ひ、色スガ糸にあだを見せ、縞縮の小袖、ふきを思ふさま多く出して、鶯茶の羽織、チョッキリむすびの紐は綠に、ちひさき三ところ紋染めぬかせたり。帶は割合に品惡く、然も幅せまく、綿入りの悉多織みた樣なもの。疊付の塗下駄、唐天の太緒野暮らしく、三十五錢か四十錢とは出ぬ履物なり。新しき足袋是は田舍の悲しさにぶく〳〵して親指の先きにそら豆一つ住ふだけの明地ありし。扨此女は何物なるべき、言葉つき少し訛りありて顏は薄化粧せるこそあやしけれ。次の女は二十三四、銀杏がへしにアルミ臺らしき黄金の細簪をさして、黒の羽織御召の着物、繻子の帶、下駄もまづよかりしが素

となり、喋舌家も口車は器械車の響に及び難く、おとなしくなりて詰らぬものなり。されど二十分も經ば煙草の火をやりとりが話しの發端となり、馬士聲はりあげて隣席の赤子の眠りを驚かしなどする男あり。美しき太陽、品川沖に顏を洗ッて現れ玉へば、雲の色鼈甲の如くなるもあり、紫に見ゆるもあり、萬物復活して人々自然と元氣付き、雀鴉のやうに思ひ〳〵のことを喋舌る。中にも可笑かりしは、あなたも東京見物の御歸路か。左樣々々東京は實に感心な所でござるの。イヤ感心は感心だが思ひの外に不便な所でござるの。何故ですか。我等は東京に遠い親類がありまして生れて初めて今度逢まして其家に厄介になりましたが、或日國許へ手紙をやらうと思ッて狀袋と卷紙を買ひ、其次手に娘へ土産の花簪と、嚊へ土産の前垂地と、婆樣へ土産の珠數と、姪子や娘へ羽子板を一枚づゝ買うとしましたが、イヤハヤ不便なことには卷紙を買ッた家では紙屋でござるから簪はないと斷られ、簪を買ッた家では吳服屋でござらぬといふし、珠數買ッた家で羽子板は無いかと問ふたら年の暮でなければ賣る者はありません、ましてや珠數屋で羽子板などは賣りませぬと叱られ申したが、何とハヤ歲の暮でなければ賣らぬなどゝは不便な話、我等の方では良いものは無いが紙も簪も切地も珠數も羽子板も燒酎も下駄も一軒の家で皆埒が明て仕舞ます、アハヽヽヽと の高話しなりき。

せるあり。さては此商人徹夜して賣るものか、流石は大都、相應の利得あればこそ寒夜の霜を恐れず大道に身をさらす人ありと感じける。頓て向ふより車輪の音凄じく轟くや凍りたる地の上、一散に走り來るもの五六輛あり。函を載せて屈竟の若者我劣らじと走るを何事ぞと見れば、指金堂信文堂新聞配達會社など各々細長き提灯に名をあらはし、北方に向つて駈ること飛ぶがごとし。アヽ昔時はあるまじ、開化の聖代の商賣、是でこそ成程百里先きの仙臺で今日の東京の新聞今日見らるゝなれと嬉しかりし。銀座通りは日就社の二階明るく、入口の戸も半分開き、日報社のクヾリ戸に出這入の男繁し。新橋を渡る頃南の方より一人乗のろぬり車美しく勢ひ能く駈け來るあり。客はと見れば色は知れねど多分縮緬らしき頭巾に頭をつゝみ大きなるショウルを掛て姿やさしき女なりしが、川に沿ふて千歳の横を過ぎぬ。何者なるべきや分らず。停車場に行けば此處には最早人多し。是も都なれば〳〵。

其七

乗合船は銘〳〵の國自慢、名所古跡の噂さ、三都相撲の誰が強い誰が弱いといふ論、音羽屋成田屋の身振り聲色、どこの宿の旅籠の親切不親切、其家の飯の色の黒さまで、話しに帆をかけ艪を推して、言葉の泉、川の流るゝ如く湧きあがり面白きものなれど、汽車の相乗りはまた通常の人も少し遠耳

ほ讀切らざる書どもを今宵讀み盡さんと心を勵まし讀むに、北女閭紀原一冊古事記三冊淨瑠璃丸本一冊半を見て大きに疲勞する中にも、槍の權三おもしろき事眼をさますに足りし。二月一日午前四時半机によりしまゝ少しまどろみつゝ五時に起き出でゝ顏洗ひ飯朝したゝめ、慌てゝ出立す。カバン一ツ、外套も着ず、蝙蝠傘一本、カバンの中には俳書一冊、煙管烟草入れ、筆硯のみ。

其六

我東京に生れたりといふ人却ッて愛宕山の石段の數を知らずして、たま〳〵田舍より見物に來りし人此樣な事を覺えて歸るものぞかし。我等、東京中知ッたりといふ人もまことは三時より五時頃までの東京を知らぬなるべし。我家を出で五時十分頃御成道を歩みしに瓦斯燈最早消えて天の少し明るきばかり、しん〳〵寂寞として人力挽の提灯一ッ二ッ見ゆるもさびしく、眼鏡橋の上に晝は躍ッて騷ぎたる埃塵も眠りて廣小路の柳狂はず、しづかなる中をチラリホラリと通る人、彼は誰ぞと知るよしもなく、モウロク頭巾をかぶらざる者なければ、我初めて此頭巾の効を知り、血氣の男もモウロク頭巾かぶる寒さ哉といふ意にて一句つらねたしと思ふ内日本橋近くなれば、蒲鉾屋の庖丁の音おもしろく拍子とりて、トントントヽトンの響きにあかつきの空の星ひとつ落ち二つ落ちて行く樣、妙筆ならでは寫し難し。橋を越して後小さなる屋臺に燈火細く、小障子に拙く鹽あん大福と記

となく謹愼の心起りて、馬鹿々々しくも一日たれこめ暮しつ、二日も籠り居、三日も晩まで籠り居たり。全く卦面の心にかゝるとのみにはあらねど、卜する心旣に疑ひ深く迷多きなりければ、自然何もせずして怠りがちなる埋み火の傍に獨酌微吟するばかりなりけり。果は酒に亂れておもしろからぬ事のみ募り、是ではならぬとおもひ切て廢酒はしたるも其後又々何となく心打しめりて涙もろくなり行き、平常は何んとも思はざりし書を讀みてさへ悲しさ限りなく、無心の小兒の遊戲を見ても泣き、磊落の友人と談話してさへ涙ぐみぬ。自己も何の故とは知るよしもなし。筆も果敢々々しくはとれず、文章書つらぬん事など思ひも寄らざりし。適々友と共に散歩して淺草觀世音の御鬮を友人の引きけるより、われも眞似して御鬮とりたるに、第七十七番の凶、渡舟波浪急なり咫尺天衢を隔つといふ句、判の詞には、病氣助からず願望叶ひ難し待人來らず、よめとりむことり元服わるし旅だち惡しとあるを得たり。流石に人間は弱きもの、高が賽錢あげればこそ觀音も光ッて居らるれ、打捨置かば閻浮檀金の御身躰も潰しとなッて失せ玉ふべし、何の金佛、木佛、石佛の偶像仲間、しかも其偶像さへ關係せぬ御鬮を抽くごときは、花札を引くより間のぬけたものとは思ひながら、流石に何も彼もわるし〳〵と出ては氣持よからず、閉口したりけり。其の翌日、強く感ずる事あつて終夜寢られず、二十九日の夜も寢られず、三十日の夜も考ふる事絶間なく、晝はその癖うつら〳〵として仕事も出來ず。三十一日革袋一つをもとめて明日は旅行せんと支度す。借りながら倘

一大きなる峠の峰より此方の水と彼方の水と共に飲むべからず。異風の食物驚くべからざる事。

一道中すべて西行じみたるを尊しとす。

右條々の外に捨子を拾ひ、鷄合戰の彌次馬に出る等は隨意たるべし。

明治二十二年七月

其五

生命は五十年、其間の事何を記しても旅の記に相違なけれど、暫時の旅の事しるさねば人は旅の記とゆるさじ。是をかしき事なれど又普通のさまなり。今我記するは旅行日記の種類にあらず、唯舍の窓の下に、思ひ出づるまゝの、其事彼事を筆まかせになぐり書せるなれば、かりそめにたゞ客舍雜筆とは名づけつるなり。

去年はおもしろき年なりし。元日早々年頭の御禮もぬきにして野州の友人を訪はんとて飄然として立いで、初鳥の聲、初日の出の色、注連繩吹く風の薫りをば、皆田舍の空に見てしより、一月の間を盡く旅に費やしたれば、元氣は日に旺んに心猛くなりまさりて嬉しかりしが、今年一月一日旅行せんとて朝早々起出しに、折ふし机上に人より借りたる周易のありしまゝいと怪しげにも占ひしに、火山旅の卦を得て六爻變を得、鳥其巢を焚かる、旅人初めは笑ひ、後は號びよばふといふに何

一遊廓をば徘徊すべし。但ししらふの時に限るべし。

一都ての人に和しくすべし。拳骨を振まはす事謹むべし。爭闘して勝ちたる後、松並木の間を通る時、殊の外恐ろしきものなり。

一宿屋の娘下女など、姿美しく、眼付に品ありとも、未練の逗留なすまじき事。

一宿屋にて掬飯貰ひたらば大切にすべし、途中にて乞食などに與ふべからず。

一知らぬ女一人と道づれになるまじき事、惡しきもの多し。

一相宿を悦ぶべし。謝絶て後美人俳諧師などなりし時は口惜しからん。

一宿帳正直に記すべし。柿本人丸嫌疑を受けて御上の御手數を掛くるなどはおもしろきことならず。

一無暗と近道抜け道などを問ひたづねて歩むべし、迷ひ込みても大抵生きて歸るものなり。但し午前の事たるべし。

一宿屋にて髮鋏み髭剃りするは無風雅なり。必らず脚半のまゝにて其目印ある家に入り込むべし。

一馬車などに乘るは心得あるべし。

一草鞋は價の昂きを買ふべし。

其四

むかし大淀三千風といふあやしき男ありけり。風雅に剛の者、又元祿頃の一奇人なるが、餘香を殘せし行脚文集中に平凡の文字めきて平凡ならざる所あり。但し私に思ふにひねくれたる男にて、芭蕉のすらりとしたるに及ぶべくもあらねど、ひとふしありてをかしき洒落者なりしなるべし。日本全國大概草鞋の下にしけるが、其初めなりけん行脚の掟といふものを自ら作り出して頭陀袋に藏め置きたるよし。我もまた嘗てそれに倣ひ、旅もせぬ先きより認め置きたる旅路の掟なるものあり自家の醜は自家發すべし、人に發せらるれば醜愈々醜なり。即ち左に記さん。

旅路の掟

一艮き衣を着るべからず。雨上りの泥濘道にて牛馬の爲に思はぬ汚れを受くる事などありても粗服したらんには腹立薄く心安かるべし。

一相手きらはず馬士にも順禮六部にも緣あるものには愉快に話しすべし。但し自慢話は場合によるべし。

一酒は深山の中、大海の邊の外は用うる勿れ。新識の人と飲むを堅く禁ず。眼の力を弱くし、心の働きを鈍、し、淫慾を增長せしむるものなれば能々心すべし。

其三

産聲揚げたるが日本橋、それから踏出して品川川崎神奈川、段々と小田原あたりまで是れ十歳位までの所。箱根の山が聲がはりする頃、府中が丁度二十五六歳。三十四十が三河路尾張路伊勢路、人間五十年東海道五十三驛に異ならず。我等毎日々々日脚を運んで結局は京都まで到着した時が此の旅行の終りなり。其五十年の旅の中にて、草鞋まめに痛を堪ゆるは學問修行、惡友と交はりて墮落するは護摩の灰に付かれたと等し。飯盛に財布の底をはたきて乞食ながらに道中するは何方の旅にもあり、用心々々。然し暫時の旅には誰しも錢巾着を内懷中に入れて掠られぬやうなし、草鞋を鹽打して儉約を守り、轉ばぬ先の杖を用意し、支度萬端若しもの時の寶丹まで油斷なけれど、五十年の長旅路、落着く先は極樂か地獄かといふ大切な旅路には左程の支度も用意もなく、第一磁石と頼む者も持たず、ふら〳〵と出立こそ危けれ。危ふし〳〵、實に危ふし、斯くいふ拙者も餘程危ふし。然らば短き暫時の旅心を一生の旅に用うるは是れ賢人か聖人か、浮世に尊き人なるべし。我は暫時の旅にも用意すること少く、一生の旅には尚更用意なし。此旅行には此心、彼旅行には彼心、おもへば覺悟惡き男なり。

知れば、何の事もなく浮々とあるく樂みの無究なるを信じて、今日もまた旅にとて立出づ。

其二

旅するもの、やゝもすれば何の山見ん、何の川眺めん、何處それの景色、何處の松の木、何處の巖見んなぞと云へど、山川の景色、松の木、巖などのおもしろきにはあらず、其等の物に占られたる餘りの虚空のおもしろきなりといふやうの說を誰やらにきゝし事あり。實に何を見ん何を眺めんなどいふは既に旅行の眞趣を知らざる一大煩惱ぞかし。かやうの人は、北の海に浪題目の見えぬとて何百年前の法師を相手に山師めと修羅を燃やし、古武が原を檢査したれど天狗の骸骨も落ちて居なんだなぞと誇り罵るなり。或は金閣寺に行きてわびすけの葉をむしり取りて土産になし、又は青森で善知鳥を見たが東京のモグリッチヨと似たるものなりなんどゝわめき立て、末の松山に松がなしとて怒り、吉野に櫻が千本は無し實際三百七十九本と半分なりなどと唱ふ。是等は論外の事なるが、尚又それ程にはあらずとも、南圓堂に藤の花見にまゐるなどゑせ風雅の人の能く云ふ事なれど、頭から大俗惡極まつた話し、子守娘が鵞鳥の瘀瘤を見に動物園へ行くより劣つた事なり。西行芭蕉も其樣な遊歷の仕樣はせず。唯々何心あるかなきか位にて旅したるが無碍三昧にてをかしかるべし。

客舎雑筆

其一

心は猛火の如く烈しく強く向上の一路を辿るを要し、氣は潭水の如く靜に平かに溫和の美德を成さんことを欲すとは思ひながらも、扨自分の料簡にも任せぬが自分の行爲なり。武藏野のむかしの樣はなくとも見渡す限り平坦なる大都に住むで、自然と其土地に化せらるれば、何時となく氣は平に大やうになりて濶達らしき言語振舞もなせど、眞實は心の衰へ行て、火の炎上するやうな勢ひ拔け、向上の一路を等閑になし、天に對して烈しく強く働くべきを忘れ、唯ひたすら人に向つて社交的に働くばかりの者となりける。されば、毎日々々心なく談笑飲食して、それなりけりに暮す事殘念とや云はん遺恨とや云はん。むづかしい理屈は我分らねど、人々箇々頭上に各々通天の一路あり、唯此の一路を見出さず、又は見出して辿る能はざることそ口惜とも云ふべけれ。養は躰を移し居は氣を移すと、孟子の妙言もあり難し。我は旅して植物も採集せず、動物鑛物に眼も呉れず、地理地質季候氣象其樣な事は知りもせねば探らうともせず、ひとり山形水勢を觀じて人情風俗の根柢を知らんなどいふ事には尚以て遠し。然れど從來の經驗に徵して、旅は氣を移し心を錬らしむるものぞと

少時して二氏に從ひて來り居し春陽堂主人席にあらはれ、夜に入りて太華山人も京都より來りしかば、我を合はせて五人となり、賑はしく睦ましく皆々遊び暮しぬ。

七月一日我人ともに國市津に至りて一酌し、山人と春陽堂とは先に歸り、三昧は大阪に歸りぬ。我は篁村と共に猶此地の濤の聲松の風を一夜の夢の中に領し、二日の朝いと夙く歸り、恙無く此長き旅を終へぬ。

武庫山摩耶山つらなりたてるに、浪平けく海霞みておだやかなる景色そゞろに人をして睡りを催さしむるばかりなり。酒は醇し魚は鮮らけし、山水は趣きあり、坐上にむづかしき人は無し、こればかりにても興は深かるべきを、此家の娘にや年まだ極めて若き女の眉にほやかに面白くて何となく涼しげなる丰采せるがあだ口なども多くはきかで起居靜かによろづをとりなして席に侍し居ければ、酒も常よりは過ごし、陶々として心よく醉ひ、日暮るゝ頃に漸く歸りぬ。

三十日山人は天囚と共に京都に入り、我は猶大阪市中を覽んとて殘り居けるに、共に東京を出でゝ思はぬことより引き分れし篁村と此地の三昧との名をもて函根より電信來りけるを何ぞと開き見れば疾く來よかしとのみ記せり。如何はせんと一度は思ひ迷ひしが、招かるゝを辭むも道理無し、此地はまた見るべき折もあらん、ことさら篁村には問ひも語りもすべきこと多ければ、と心を決めて汽車に乘り、京都にて山人を誘ひたれど山人は病を得たりとて同行を肯んぜざりければ、獨り函根へと心ざし走りぬ。

國府津にて汽車を下り、塔の澤の鈴木といふ篁村三昧が定めたる宿に着きたるに、浴後の酒の醉に心よくてや篁村は睡りて、三昧ひとり起き居たり。寒喧の挨拶などするうち篁村も睡り寤めて起き出でければ、其恙無きを互ひに悦び合ひ、木曾山の雲のやうに心にかゝりてありしものも此地の靈泉に洗ひ去られし心地しける。

訪ひしが、此人にも我は初對面なり。豫て人の言によりて、肥え太りたる身幹短き人ならんと猜し居けるには甚しく違ひて、色白く丈高くやゝ痩せたる肉つきの卑しげならぬ風采せる人なり。言葉は徐かに聲は清くして明らかに思慮あるをあらはし、首を傾ふけず背を屈げざるに極めて勝つことを好む氣質を示せり。要事果てゝの歸るさに博物場に入り觀たれど、これぞとおぼゆることも無かりければ、天囚が方に立歸りて、主人ともども堺に遊びぬ。

住吉は萬葉時代よりの歌名所にて戀わすれ貝人わすれ草濱の松風磯波の音なんどさま〳〵に云ひなされ咏みなされたるところなるが、四社明神の鳥居前あたり松むらだてる景色よし。海水浴といふこと今は到るところの浦々に行はれて、都人のことさらに十里二十里の路を行きし上、暑を避くるかたへに身をすこやかに保たんと海士が兒のさまを學ぶも多けれど、此浦こそ海水浴の早くより行はれたるところと云ふべけれ。むかしは毎年六月の十四日此地の潮水に身を浸せば病あるものは病を治し恙無きものはいよ〳〵恙なきやうなり得るとて近きあたりの者ども爭ひあつまり、海中にひたりし由なり。大和川一つ隔てたる堺の濱に今は例の海水浴場にとてよき家ども列び建ちあれば、我等は、小町茶屋といふ茶屋ありしとか聞きつる安立町を過ぎて、蘇鐵に名高き妙國寺を一見し、菊一文字とやら文珠四郎とやら自ら稱して刀物賣る家々の男のとゞむる袖をふりはらひ、濱邊に出て、茅海樓といへるに入り、浴して後欄に憑りて眺むるに、淡路島は睡れるごとく横たはり六甲山

樣なり。我も人も身を忘れて男の手に持てる危き者を奪ひ取り、何故ありてと口〻責め問へど男は獸なんどの如く踩き暴るゝのみて物言はず。人々を驚かしたるをわびつゝ女の、此者は日頃少し病ありしがかゝる暴風雨に遇ひしより心急に狂ひ出でしならんと云ふによりて初めて狂人と知れければ、ふたゝび危きとを仕出さぬやうにと人々打寄りて緊しく縛めけれど、船長は狂人を船の中に置くことのよからぬと志賀の島蔭に泊り居ることの猶安からぬとのために、船を博多の港まで返しける。

二十七日の朝五時風も凪ぎ雨も晴れて海の上安らかになりしかば船直ちに出帆して十一時半馬關につき、二十八日朝八時多度津に入り、其日午後三時神戸につきぬ。汽車にて直ちに大阪に到り、山人は西村天囚を我は宮崎三昧を訪はんとて停車場にて分れけるが、三昧は東京に行きて在らざりければ、桃谷なる天囚が許を訪ひて初めて會ひ、山人もろとも四方八方の物語りせし末、留められしまゝに辭みもせで夜とゝもに語り明かしぬ。天囚の名は豫て聞きしが會へるは初めてなり。身の丈高くて色は白からねど容貌醜からず、起居あら〳〵しく言葉に覇氣多し。されど才氣ありて、人を怒らするやうのことはせず、よろづ打隱さず振舞ひてよく人をして笑はしむるなど中々に世馴れたるところある人なり。

二十九日朝飯了りて、後大阪朝日新聞社長の村山龍平といふ人に乞ふことありて山人と共に尋ね

せはしく上陸して、西鶴が一代男の世の介は五十九歳の秋こゝに來り、櫻町といふに着きたれど、我等は三十にもならで大波戸につきたり、たゞ丸山に十二の長櫃を運ばせ、其の中より京にて十七人江戸にて八人大阪にて十九人の太夫が姿を摸せる人形を取り出さんことは及ばねど、人の饗應ならんには頼山陽さへ妓夫をせし由の花月樓の鶴の枕に一夕の夢を結ばむことも敢て辭せじと戯るれば、饗應接待する人の有らねば幸に足下も道德堅固の譽れを得むあなめでたしと山人も笑ひながら打連れ行きぬ。市街は流石に古よりの港なれば賑やかにして、坂多きは面白からねど萬般の便利かくること無し。新々長崎土産といふ書によりて詳く記さんには旅の記を長くするの惧れあれば市内の模樣を寫さず止まん、其書に記せるところ大抵我等を欺かざりき。

夜また船に乗りて二十六日の午後一時博多につき、三時拔錨して玄海灘にかゝりしに、先には錦魚を蓄ふべしと云ひし海も此度は風暴れ浪騷ぎて、まことに人の怖るゝも無理ならず、船の左右上下にゆらめき傾き浮きつ沈みつすること木葉の如くなれば、船長も是非無くて、志賀の海人は布苅り鹽燒き暇無みつげの小櫛を取りも見なくにと古き歌に云へる志賀の島蔭に舟を返しける。乗り合はせし人々誰しも安き心なくて、烈しく降る雨を恨み高く立つ浪を恨み猶怖しく吹き荒む風を悲しみ、口々に神の御名佛の經文なんど唱ふるもあり誦するもあれど、我と山人とは自若としてありけるに、同じ室の中にて、周章しき女の叫び聲す。何ぞと顧るに、兵器の光り眼を射りて女と男と挑み合ふ

り半は夕の濁音行に訛るそれさへ心しても聞き悟りがたきを、まして語氣の緩急本來の語形とも甚しく我等が用ゐるものとは異るなれば互ひに解せぬも是非なし。風俗は惡しとまでにはあらざれど亂後の故にや表は一應强くして裏は却つて懦弱のやうなり。市街を行きて淫猥なる絃歌の聲を耳にせんなど〻、鹿兒島に入らざりし前我が夢にも想はざりしところなるが、來りて見れば案の外に媚きたる歌の聲さへ時に洩れ聞えたるには驚きぬ。されどもまた肅殺の氣ある琵琶の聲の、とある家の中より響き來しなど流石に薩摩隼人の本據たる地なりと坐に人をして感ぜしめたり。

二十四日に入りて、今日は此地をも見捨つべきなればと櫻島產の味いと甘き枇杷の實などした〻かに食ひ、市街は昨夜既に巡り見つれど復來ることもあるまじければと其處等を漫歩などして宿に歸り、四時の出帆を待ち受けつ〻山人と切りに西鄕隆盛の人となりを論じけるが、末には此國生れの人に朱紫を被り官爵を啣めるもの〻當時きはめて多きよしに移りて、駿馬駛れば蒼蠅も千里を行き老龍躍れば魚鼈も九天に上ると云ひ放ちて啞然として大きに笑ひける。

四時舟に乘りて八時出港しけるに雨しと〻降り出で〻水天の際も分らぬまで海黑く、浪は穩やかにあれど甲板に上ることさへならぬにか〻らむよりは風すさまじく舟搖る〻とも晴れてあらむかたこそ望ましけれと小さき窓より外を伺ひては無聊の不平を洩しつ〻、やがて甲斐なき夢に入りぬ。

二十五日の午前十一時長崎に着きしが、此船また頓て此地をも出づるとのことに、山人もろとも心

縹色木綿にさま〴〵のけば〳〵しき裾模樣置けるを着、又は大きなる紋つけたる布子を着たる、國風とはいへ看る眼珍らしく、今も尙さるところありやと見ぬ人は疑ふべくおぼえける。日暮るゝ頃鹿兒島に着きてさて、此地よりは琉球に行かば知らず、左なくば歸るより外なきこととなれば心寛かに休まんと、松魚の「さしみ」に一陶の酒、連日の疲れを櫻島山眺めながらの微醉に消しぬ。

二十二日雨珍しくも降りたるに街頭の塵埃も鎭まりて櫻島の淡くかすかに薄々と見ゆるなど興なき眺めにはあらず、されど客舍窓下の徒然さ、また云ふばかりなし。

二十三日朝雨晴れたれど昨日港に入るべき筈の汽船なほ來らねば出發すべき望みも無くて二人空しく寂寞を守り居けるに、十時頃船は入りしかど今夜拔錨すべきの定め明日の午後五時と改まりしかば、日暮るゝ頃市街を徘徊なして模樣を伺ひたり。築紫の果なるに亂後のこととなれば、市街も淋しくて風俗も鄙び、商賈の輩と書生の輩との區別も無く男は皆裾短く袖窄き衣被て「ヘコ」帶といふもの腰に纏ひ、言葉つきも尊卑の隔て無きが如く他國生れの我等には聞ゆ。女は大抵陋くして身分よき者の娘妻なんどのほかは細帶ばかりして帶結べるもの無く、言葉も鳥の囀るやうにて聞分け難きこと一方ならず、陸奧の果の女の言葉は猶ほ解くべし此地の女の言葉は遂に辨へ難しと我等をして嘆聲を發せしむるばかりなり。物購はんとするにも言語半は通ぜず、末は互ひにもどかしがりて怒りを起すに及ぶこと一度二度のみならず。一體此地の人ラ行の音を能く言はずして半はア行に訛

二十一日向ふ田町とも人の云ふ川内を立ちて市木といふに至る途中、晝餉を食ふべき家なきに弱りて我は色いと黑き蕎麥二椀を食ひしが、山人は何としても其蕎麥食はんこと難しとて飢を忍びたる、旅とはいへどあはれなりし。市木もよき町にはあらざれば此家にて晝餉せん彼家にて晝餉せんと擇むうちに既過ぎぬ。伊集院までは尙四里もあらんに晝餉せでは叶はじ、今は如何なる家にても湯をさへ吳れなば自己が指の鹹氣を嘗めても携へたる掬飯をなりと食ふべしと定めけるに恰も路の鍵の手に曲がれる隅のところに家ありて、其家の牀几に腰打掛け食事をなし居る女ありければ、山人突と走り入りて、汁にても煮たるものにても燒きたるものにても得させよかしといふに、生豆腐の外は何も無しと亭主らしきが答へける。よし、さらば生豆腐得させよ、ひややつことて夏は都府にても殊さらに人のすることぞ、と云へど、後の言葉を亭主は解き得ざりしと見え、平皿の大きなるに方形の豆腐を其まゝ載せ、庖刀の稜もて兜ならば八幡座といふべきところを少しく刳りたる其凹みへ醬油を注ぎ湛へ、清からぬ箸添へていざとばかり侑めたり。無造作なるには山人も驚きしが是非なく箸を取りて食ひ居けるに、吹溜りのことなれば風の街道を掃ふと頓て豆腐も茶褐色に染まるべく、塵埃紛々と舞ひ亂れて此家の中に躍り入るさま傍觀にさへも物憂き限りなり。我は晝餉を終に得食はで伊集院に至り、それより車を僦ふて鹿兒島に向ひけるが、城下に近づくに及びて、此日本願寺別院の開堂式ありし由にて其へ詣りし近在の媼嫗どもの五々七々と斷續して歸るに逢ひぬ。いづれも

一枝の上に宿しながらに二聲三聲四五聲つゞけて鳴き居たるに、我も山人も呆れはてながら初めてよく郭公の姿を見たり。鵯より瘦せて全體褐色ながら喉のあたり少しく色異れるやうなり。歌にも俳諧にも此鳥は、或は夜の深きに或は朝のまだきに、或は雲黑く月洩れがてなる空、或は星稀に樹立繁き間、若くは雨中なんどを鳴き過ぐるものゝやうに云ひ做して其風情あるを賞せるが多きに、如是眼の前にて數鳴きては鳩にも劣り百舌鳥にも劣り燕子雲雀にすら勝らず聞えてをかしからぬこと云ふばかりなければ、これより後、見て見劣りするものをほとゝぎすと嘲み笑ひ、ほとゝぎす才子ほとゝぎす文章ほとゝぎす女ほとゝぎす酒ほと通ほと醉ほと君子などゝいふ怪しき言葉を二人が間に用ゐるに至りぬ。四里の間に少時とて立寄るべき清水流るゝ柳かげさへあらざりければ大きに弱りつかれて阿久根より車に打乘り、西方といふところにて晝餉せしに、取り出てゝ云ふべき景色にはあらねど海邊なれば少しは風も涼しく眺めもよく、やゝ蘇る心地したり。されど舌も縮むやうに覺ゆるまで鹹き魚と燒豆腐との潮煮には流石の山人すら恐れて食はず、素麪三椀をもて僅に飢を凌ぎける。此地より、川内まで例の如く興味なき路なれど梅子の黃熟せるもの枇杷の佳香ありて味美なるものなどありけるに山人はやゝ不平の聲を休めぬ。此邊到る處人造肥料を用ゐて他處の如く人馬の糞を用ゐず。また婦人の田圃に勞働するもの甚た多く、容貌いづれも黑く逞しくして、日本の人歟あらぬ歟と疑はるゝほどなるに相語らひ居る言葉さへ我等が耳には聞き解きがたし。

る事四五度に及びぬ。

二十日朝いと夙く寤めて面を洗ふのついでに不圖此家の者の睡り居たる方を見しに緑の蚊蟵を吊りて心よげに臥し居たり。さては昨夜我等二人は蚊に苦みしが此家の者はそを知りつゝ我等に蚊蟵をば貸さゞりしよな、關東の人の情にては自己は蚊に咬まるゝとも客には蚊蟵を與ふべきを、如何に西方邊土の者のさもしき心がらにせよ、唯の商人にも非ず農夫にもあらで、旅客のためにこそ世を過ごし居れ、さるに自己等は夜を安く寐て能くぞ我等を苦めつる、と齒をかみて怒りたれど甲斐無し。餘りの腹立しさと凡てのものゝ物ぐさき不快さとに朝飯も能くは得食はで阿久根といふに向ひ出立でたり。舊路は六里新路は四里と聞き、心得たりと新路を行くに、石礫を敷きたるばかりにて未だ踏み固むるに至らざる途なれば傷めたる足の一入痛みて耐へ難く、特に風景も無く、趣味も無き一直線の路なるが上、日の熱さ髪をも焦さんばかりに酷烈なれば、山人も我とひとしく喘ぎ〱滴る汗を拭ふのみなり。例の共同道中記の中に我自ら記して曰く、特に露伴は一昨日以來素足に草鞋のことなれば一足毎に苦み惱みて針の山路を亡者の辿るが如し、嗚呼豹子頭もこれでは叶はぬと露伴思はず歎息を洩せば水滸傳の作者もこんな路を旅行した覺えがあつたからあの妙趣向を得たのであろうと太華も下らぬことをいふ云々。

路傍の一樹に不如歸の聲あり。仰ぎて見れば烈〱たる日の光りに浴して郭公先生晏然と横に出たる

逢ふこともなき海上の孤舟にて、烏羽玉の暗き夜に入りたる何となく心細く、我が吸へる煙草の火の唯一點此の暗の中に赤く見ゆるなど、詩興として自らをかしと思はざるにはあらねど實は少しく愴然として物言ふことも鮮くなりゆきたり。我は此所にて、如何なる怖ろしくまた好ましからぬ時に望みても、至れる詩人は實感以外に其實感を忽ち再現して自己が靈臺の上に奇しく妙なるものと映らしめ、然して欣然と自ら樂むことあるべきならむと想像しぬ。

たゞさへ心細く悲しきを舟子のおろかなるため米津なりとてあらぬところに舟を寄せければ、いよいよ心いらちて前途も覺束なくおぼえけるが、寄せしところは米の津よりなほ此方にて、船の底急に淺瀨につかえたり。陸には何事の爲にや老樹の蔭にて盛んに火を燒き居りて、人々の罵り騷ぐ聲さへ聞ゆれば、此方よりは頻りに喚びかくれど、沖の方は暗きが上に我が舟に火も無ければ、彼方にては心づかでや答へだにせず。舟子は是非なく水に入りて舟を推し出し、ふたゝび漕ぎ渡らひて辛くも米の津につきぬ。夜も更けたれば旅宿を擇ぶ暇も無くて舟子の導くがまゝある家に入りて宿借りしに、家は大きけれども何となく物ぐさく、蒲團の如くやわらかなる疊は踏むたびに熱き氣を吹き出して室の内の生暖かさ極めて快からず、それのみならず我等を待遇ふ婢の二人とも甚敷梅毒の舊痕ありて、燭火に映じて鬼の如く見ゆるさま始んど人をして面を掩ふて走らしめんとするばかりなれば晩餐も得食はで睡りにつきしに、蚤蚊の多きこと比ふるにものなく、山人と相顧ては大息す

してみしまに行かん波たつなゆめと長田の王の詠じ玉ひし野坂の浦も知るべくあらぬに、此國に來ながら此國の名所一つも見ずして過ぐるよと笑ひながら、肥後近き薩摩の米の津まで舟を僦ふべく言ひ定めける。此わたり人力車の轅みな象の牙のやうに天仰ぎて反れるを山人と怪み噂さしけるに、今また海路の二十五里を越ゆべきはずにて僦ひたる舟の來れるを見れば、こはいかに長さ四間にも足らざるべき小舸なり。ところの習ひにて車の形ち舟の式の異るは云ふにも足らねど水烟り渺々として島山遠く蜿蜒たる外には眼を遮るものもなき此灘をかゝる船にて渡らんこと父母あるもののなすべきこと歟と少時怪み迷ひけるが、旅人は皆これにて渡る習ひなりといふにいさゝか心強くなりて遂に乘りこみたり。初めは風乏しくて船の行くこと極めて遲かりしが、少時して強風起こりければ樋島天草上島の間に避けたり。石灰燒けるなど見ゆる迫門を出ではつるころほひよりよきほどに風蓬々と吹き出だし、十分に張りたる白帆の破れもするかと見ゆるまで膨らみ孕みて少しく傾きたる船の舳先の水に突き入るばかり烈しく浪を截りて進む心よさ駿馬に鞭うつて曠原を馳するとは又異なりて趣きあり。水股の沖を過ぐる頃太陽西の方に沈めば、雲は赤金の色なして輝き、浪は熔けたる鐵の炎焰をあげて流るゝが如し。おもしろの眺めかな歌も及ばじ書も及ばじと山人と共に舷を拍つて賞歎する間も無く日輪全く沒りて、暮烟蒼然と海上を罩め、舟の中の隅々次第に薄昏くなり、浪の頭の雪を卷くやうなるばかりぞ仄白く見えぬ。流石に漁火もかつ見えず、行きかふ舟に

にて浪りに丸藥を食ひしが此丸藥は前日少時同伴となりたる賣藥商に賣りつけられたる効能あるべくもあらぬ諸毒消丸とて熊本より發賣せる爲永春水一派艶史中にある女などの前齒もてぼつりと噛むべきものなり、されど露伴の噛みしは風流韵事にはあらで痛苦の餘り窮鼠猫を噬む格にて噬みしなり云々と。

晩飯後山人は市街を散歩して二本樹といふ九州に名高き遊廓を看んと出で行きしが、頓て面白からざりしやうの容貌して歸り來りぬ。我は足を傷めたればと打臥し居て、山人が購ひかへりたる朝鮮飴を味ひ、其儘はかなき睡りを貪りける。朝鮮飴と赤酒とは此地の名物にて共に味わろからぬものなり。

十九日の朝六時起き出で見れば足の痛みは異らねど頭の重きはやゝ薄らぎたり。いざとて朝餉を了ふと直ちに車を傭ひて此地を立出で、花岡山を右に見て川尻の町に着き、緑川を越えて宇土に至り、宇土より松橋といふ船つきの淋しき町に至りつきぬ。まめなれとあだ名はたちぬたはれ島よるしら波をぬれ衣にきてと大江の朝綱がよめる風流島は此途中の緑川の末にある小島なりとぞ、見ねば如何なるところか知らず。清原元輔など此國の守となりたるには似ず歌名所も大國の割合には少きところにて、音にきく鼓の瀧も、此地より船にて薩摩に渡らんとするなれば葦北郡を經るよしなきまま見るに及ばず、八代の池もその如く、宇土の小島は尋ねしも知れず、あしきたの野坂の浦に舟出

日十七錢より多くは得がたき由なれば、其他は推して知りぬべし。四時頃高瀬といふに辿りつき、足を傷めたればとて車を傭ひけるが、田原坂にさしかゝりし時は特に車を下りて途の傍なる茶店に憩ひ、田夫村嫗の語るにまかせて十年の亂のをりの雜談を聞きたり。坂は亂後に道を治めしよしなれど假令ひ治めざる頃にせよ左まで峻しかるべしとはおぼえられぬ地勢のところにあり。經ヶ嶽、聖德寺山、吉次嶺、那知山と連り聯りたる山々の玉名郡を山本郡飽田郡より區劃せるさへ高しといふべきにはあらねば、坂も見ぬ前に想ひしとは違ひて大きからず。されど戰ひなんどのをりには斯ばかりの坂をも占むると占めざると奪ふと奪はれざるとの間に大きなる利と不利とのあるべければ、今も道の傍に殘れる家の銃丸の痕の見る者をして膽寒からしむるまで兩軍の鬪ひや烈しかりけむ。八時熊本に着し、舊城内を通りて洗馬町に宿かりぬ。三歳の兒も其名を知り其義勇をば慕ひ戀ふ加藤清正の築ける城とて世に著しきほどはありて、此地の舊城は堀り繞らしたる塹深く、屈曲出入して築き上げたる石壁高く、物知らぬ我等が眼にも天晴金湯の堅めかなと嘆りける。一體久留米より熊本に出づる其路三條あり。三池を過ぐるもの本道にして我等が取りしは徑路の一つなり。此日行程十八里なりき。

此日我は暑に中りて苦しさ耐へがたかりければ、人より貰ひたる丸藥のありしまゝ効の有り無しは覺束なけれども試み用ゐしに、山人例の毒筆をもて例の道中記に記して曰く、露伴暑氣中りの氣味

後に思へば筑前に櫨樹多くして人民其益を受くるは那珂郡山田村の人高橋善藏といふ者の遺澤にして、善藏は貞享元年に生れ寶曆十九年に死せしが、享保年間に櫨實の効益あるを聞き自ら薩摩肥後に赴き栽植培養の法を學び得て歸家の後試み作りしに果して利益の多かりければ斷然畑作を改めて櫨樹を栽培しけり。定まりたる利ある畑作を改めて眼慣れぬ櫨樹をば植ゑたるを見て村民等は初めこそ嘲り笑ひたれ後には其利多きを知つて倣ひ植ゑるに至りしより遂に今日あるを致したりとぞ。又善藏は死に臨める時、我が亡き後の記標には石もて碑を設け木もて卒塔婆を建つるに及ばず、たゞ櫨の樹を塚上に植ゑ置き呉れなば願ひ足れり、我が一生の精神は櫨の樹に籠れるなればと遺言しけるよし、心を存すること篤くしていと殊勝なるものといふべし。

十八日午前七時半熊本へと心ざして出發し、我も山人も草鞋がけとなりしが、此日炎熱極めて烈しく、太陽曒々と頭上より照せば道の小砂利もきらめき渡りて眼前に輝き、おもしろき眺も無くて興乏しき途を苦みばかり多くなしぬ。南の關といふ少しく人家あるところにて晝餉を食べしに、萬般快からぬことのみにて極めて心憂く悲しく覺えけるが、旅なればと忍び耐へて、此あたりの狀況を探りけるに、李四張三が物語りなれば深くは憑るに足らざれど、都て生活の度低くて粗野なる樣子なり。職人の中にては何處にても何時にても最も高き賃銀を得るものなる大工すら此地にては一

特さら雨の霏々と降れゝば、さびたる廻廊、古き梅の樹、苔むせる捨石などの濡れ色ひとしほ面白く、廟後に數ある小祠の我等が歩むにつれて隱見し小さき瀑布の常には增してと覺しく勢よく落つるもまた興あり、池邊に蔭暗きまで生ひ茂りたる大樹あるを山人は指して、この樹かならず蒙古事件を傍觀せしなるべしと評しける。

晝餉を終へし後、菅公の生涯を俗人の說くものゝ必ず稱する天拜山を模糊たる雨中に望みながら宰府を出てしが、現存せる米屋といへる藥舖を指して、此家こそ菅公時代よりの舊家なれ、當時此地には三戶より多くは民家なかりしが、左遷せられ玉ひて、菅公此地に來ませしとき今の主人より五十三代前の此家の主人いとよく恤はりかしづきまゐらせしとぞと人の敎へくれぬ。果して實なりや否やは知らず。宰府二日市の間の路傍には櫨の木多く、大抵皆藁繩もて枝を其幹に縛ひつけ實の熟するにつれて重さの增すとも枝の折るゝこと無きやうに備へたり。山人は知り居たれども我は蠟を得べき樹を精くは知らざりしかば、爲さでもあるべきことをしたるかなと怪みけるが、問ふに及びて初めて悟り、次をもつて其實の價を尋ねけるに、實は一斤にて一錢五厘乃至二錢五厘ほどのよしを樹蔭に佇めるものゝ答へぬ。二時三十分二日市につきければ同五十分發の汽車に乘りて、三時四十五分に久留米へ着し、路傍にて絣織るため經絲を整理ふる、屋裏にて「とんはたり」と機の音さするを見捨て聞捨て、雨の晴れしを幸ひ羽犬塚といふところまで步み、昨日は博多の町にて初めて

こき御惠みの露に沾ほはしめまほしとぞ思ひける。廻廊荒れ果て人稀なれば山人も我も心靜かに三拜して社内を立出で、博多の町へと戻りしに、此地は流石に住古より聞えたるところとて男女の往來車馬の馳せちがひこと繁くして西中島橋邊の賑やかなるさま東京の人形町あたりの如く、久留米絣博多絞博多帶地など美しう懸け列ねて賣る家夥多し。女の久留米絣に紅木棉の裏つけたるを着て眞紅の帶したる類我等が眼にはけやけく見ゆれど概て若きものゝ常とする習ひかとおぼしくて市中に見受くること少からず。海容館といふに宿かりて五層樓の第一高處に睡り、今宵は夜のものも清く室の内も潔ければ快く睡りて重ね〴〵し疲れを休めんと復た二人相顧みて笑ひつゝ、美き夢に入りぬ。

十七日。朝六時二十五分の汽車に乘りて二日市に至らんと昨宵には思ひ定めたりしも前々日よりの疲れに二人とも睡り過ごして時を誤りければ、蚤の攻めざりしためにこそかゝるめには逢ひたれとまた〴〵苦笑ひしつゝ、已むを得ず十時二十分の汽車に搭じぬ。同五十分二日市に着し、濛々と煙る雨を犯して直ちに太宰府にいたりしに、府中の町名に梅大路などいへるがあるにもはや往時忍ばしくて懷舊の情に禁へず、晝餉たぶべく豫め定めたる家に行李あづけ置きて菅公廟に詣でけるが、廟はもとより丹碧金銀を施さゝる素樸のものなるが上に星霜を經たるなればいと神さびて何となく崇くおぼえられ、二の太鼓橋の高く架せる、神池の環曲して靜かに水を湛へたるも皆景致あるに、

十六日の午前三時といふに船此港に入りて直ちに發すといふを聞き居ければ蚤の攻むることの苦しさを兼ねてうつら〳〵と睡りもせでありしに、四時頃にや汽笛の鳴る響きして船入りたりと思ふ間も無く婢のあわただしく我等が室に闖入して、船は入りたり疾く乘り玉へと告げければ、急ぎ行裝を治め宿の拂ひをも濟ませしに、頓て亭の僕の來りて、こは博多に行くものにはあらで大阪へ上るものなりといふ。さては女かしましくして事を誤りたるよと悟り、大きに怒れど詮方なし。七時に至りて三保丸といふ博多行きの船やうやく入りたれば、兎角の論無く其に乘りしに、船は小きが上に老い朽ちかゝりたるものなり。夜來胸わろきことのみなれば聖賢ならぬ我等は何かにつけて腹だゝしくおもひ勝ちなりしも恐ろしと人の云ふ玄界灘の浪平かにして金魚をも放ち畜ふべく見えしには少しく心の蟠りも解くるが如きを覺えたり。五時頃博多につきて、足袋の中に石礫の入るやうなる路を强て歩み、柳町の一端を過ぎて先づ箱崎の八幡宮に詣らんと、濱傳ひに十餘町ばかりて松蔭翠りに沙遠白き間を迴りて行きぬ。傳説には此地もとは蘆津の浦といひしが應神天皇の御胞衣を箱にして松の根方に納めまつりしより箱崎と更へ呼びたりといふ。八幡宮は海に對ひて鎭座あり。煙波渺茫として遙かに朝鮮支那と連なる八重の潮路の壓するが如く高きところに金字まばゆく敵國降伏と讀まるゝ醍醐の帝の震筆の額のかゝれる云ふばかりなくめでたく、おもはずも旅の衣の袖まくりして西の天を望み、あはれ頓ては此の海の水のつゞく限りの國々をば打從へて我が天皇のかし

耳に入らず、突と船に入りて漸くに躍れる胸を休め、ひそかに少しく周章過ぎしを我ながら鈍ましかりしと悔みける。

十五日朝九時頃馬關に着きて猪名川丸を辭し、藥師寺に上陸して暫時休みたる後市街を見あるきしに、此市は一體に道幅狹くして芝の日蔭町ほどなり。物の價高く、人の勢ひ鋭く、米商會所賑はしく、稻荷町といへる妓館在る處家並びよく豐かなるさまに見ゆ。昨夜の船の中にて若き女の毛繻子の襟かけし淺葱地紅無し友禪の「半天」を着しを見て東京とは甚だ風俗も異れる者かなと思ひしが此處の若き女の緋鹿子と友禪とを續ぎ合せたる袖いと長き「半天」を着たるを見かけていよ〱驚きぬ。物賣る女の「はんだい」を頭にいたゞける多度津に異らず、祭文めきたるものを歌ひながら琵琶彈じて錢を乞ふ乞丐なんぞ眼新し。

山人の鑑定にて此家好からむと擇びたる旅館は東京を出でしより未だ曾て見ざるほどの陋惡のものにて夜に入り寢に就けど蚤の多きに夢も結び難ければ、我は山人を恨み山人は自ら恨めど、さりとて市街も物音靜かになりたるに他の家を喚び起して其に投ぜんことも爲しがたきまゝ、忍びて一夜を明かさんと、共に起き出でゝ我は長々しき文一つを作り、山人は某雜誌の原稿幾枚かとなつかしき方への書一通とを書きたり。心まかせならぬ旅路の口惜さより思ひもかけざる勤勉をなしけるをかしさに二人相顧みて互ひに苦笑ひを洩しぬ。

なる仙境を欺くべき處かと思ひしに、大華表も海中に屹として聳え廻廊も緩くめぐり群鹿も徘徊し居れるには誤りなけれども、畫なんどにて見しにはいたく實際の劣るやう覺えける。されど神殿の廣くして建築の意匠に佳趣ある、大華表を少し離れたるところより島を望みたる景色のよき、いづれも見下すべきにはあらず。殿の楣間に掲げ列ねたる額は流石に名高きだけありて能く見んには必らず日數かゝるべく、一覽したるばかりにても心に殘り留まるもの蘆雪の山姥を初めとして僅に一つ二つのみならず。十八間に二十五間の大伽藍開經堂は吾邦の船の史上に名高き安宅丸と緣あるものにて豐太閤の建て玉ひしものなるが今猶巍然として丘に據つて立てり。五層塔も古びてよし。紅葉澗は水淸く淺く流れて底沙を見るべく、楓樹よきほどに繁りて翠の蔭を吹き渡る風さへ思ひなしにや涼しきやうなり。水に架し巖に倚りて淸楚なる小亭の二つ三つあるが中の一つに就て飮みし後廣島に歸りしが、此島の物賣りどもの名產宮島細工を買ふてよと勸むる聲々の喧しくして輕薄らしきは胸わるきを覺ゆるほどなりき。

猪名川丸といふ船の夕暮がたに馬關にむけて出づるよしに、さらば一夜をまた此地に過ごさんよりはと車をいそがせて船つきの所に馳せしめしが、車の駐まる途端に船は動き出して「あゆみ」の板を今や引き去らんとせるところなれば、あわてゝ下駄を脫ぎ持ちて「あゆみ」を渡るに渡ると半にして帶の端無く解けかゝるを片手もておさふる機、下駄を片足水に遺しぬ。心いらだてば人の笑ふ聲も

共同道中記に「露伴後選和歌集を讀みて大に其拙劣なるを罵り、我なら如是歌は瞬く間に百首を詠まんと威張りしが、狂歌を併せて僅に五首、しかも後選どころか五錢出しても聞きて呉るゝものなかるべき腰折のみなり、因て當人も大に悔い、以後決して酷評はせぬと誓言せり」云々と山人は我がことを記し、我はまた「太華山人一處女を目して船中第一となす、能く〳〵見るに一眼は睛の上に魚鱗のかゝれる徧盲なり」云々と記しけるが共に專實なれば互ひに如何ともする能はざるまゝいよ〳〵恨みを結びおひしが、吳の港に寄りて六時半頃船漸く廣島に着くに當りては流石に異りたる旅宿を定めて分れ〳〵にならむともせず、セメントの波よけ赤煉瓦の便所等に此地の盛んなるを驚きながら一里餘を車にて馳せ、例の如く同じ家に旅宿とりぬ。

十四日車を僦ふて名物大石餅を草津に賞味もせで、たゞ宮島ばかりを心の的に過ぎけるが、此地は二千餘の人家多くは魚賣りのよしにて、赤脚に草鞋を穿き袖窄き衣を捲り上げて外見も外聞も捨てたる甲斐々々しき姿をなし、天秤棒を肩に樣々の魚類を擔ひつゝえいさ〳〵と駈けあるく女ども三々五々と廣島の方へ行くに逢ひぬ。土地がらとて女も働らけば働くものかなと思ひつゝ地御前といふに到れば此處には嚴島の神の御旅處あり。昨年の風雨に破れたりとて屋根は落ち崩れ柱は傾きて見る影もなし。此地より一里許りを小舟にて宮島へ渡るなれば我等も舟を僦ひて渡りけるに、宮島は大華表海中に立ち廻廊緩くめぐり朱欄水に映じて奇樹異花の間を神鹿靜かに徘徊するといふやう

を熱くして來よ汁をも何ほ一椀持來れと散々に罵りて腹膨るゝほど物喫ひしまふと直ちに立ち出で、ふたゝび汽車に乘りて多度津に戻りぬ。

女の魚賣りの頭上に「はんだい」を載せて賣り行くも我等が眼には珍らしく、赤き色の飴、柚餅子は美味からねども此地の名物なり。夜に入りて雨ふり出したれど太鼓三味線の音の市中の靜けきまゝ却つて能く響き渡り聞こゆ。淺くとも多度津の沖の蒸汽船浮ては居れど主に碇をおろして居るわいなといふ此地の俚歌とおぼしきをこちたく繰り返し／＼て何家かにて歌ひ騷ぐ喧しさ耳に障りしため山人は此夜も寐がたかりしよし。

十三日朝起き出で見れば昨夜よりの雨なほ止まず、山人は眠りの足らざりしとて白兎のやうに紅き眼して、しきりに何事をか獨語き居けるが、大龍丸といふ船の西の方へと出づるも頓てなるべければ、さてあるべきにあらずとて急がしたてゝ朝餐を共にし、七時頃船に投じぬ。雨太甚しければ甲板に上ることもなり難くてありしが、尾ノ道にて船少しく停まりし間に、物賣る船の男の菓子保命酒蒲鉾などゝ口々に呼びながら此方の船に小舸を漕ぎ寄せて、購ふ者あれば玉網に物を入れて高く捧げ出だせるは見る眼珍らしく面白く覺えぬ。また船の中に種々の素麵を造り出でたる男のありて、捻り素麵飛白素麵阿波の鳴戶の渦素麵などゝをかしき名呼びたてゝ乘り合ひたる人々に賣らんとせるには山人も我も忍びかねて笑ひぬ。此日如何なる故にや山人と我と中あしきこと太甚しく、例の

脊に負へる男、白き脚半つけたる婆、一目みてそれと知らるゝ大髻の徒のくもが右往左往に行きかふ中に揉まれ〳〵て數千級の石磴を漸くに上りつめ、今はたゞ名にのみ聞きし象頭山金刀比羅神社を初めて拜せしに社殿の構へも莊嚴にて尊さいはいふばかりなし。寶物拜觀を許さるれば入りて見しに古書畫の見るべきもの少なからず、崇德帝の雲間の郭公の御歌特に我等が心を惹きて悽愴の感胸に湧き、山人と顏見合はして坐に當時の御光景を想ひ浮めまつりぬ。我は畫のことに通ぜざれば、たゞいたづらに過ぎしが此處の襖は應擧の筆になれるが多く、又額堂には狙仙容齋なんど遠からぬ人の筆に成れるまでありて何れも面白きものゝよし後にて山人の語りける。奉納金の額と奉納せし其人の名を鐫りたる石の碑の夥しく路傍に立てると、白き衣に赤き袴を裾長く着けたる巫女の往來せるとの他には記すべき事も覺えず、下山して極めて大なる一亭に入り午餐を喫せしが、饒舌の婢の問はぬと迄を語りて、旅館へも妓を聘き得るは此地の習ひなれば一夜は宿りてをかしき語りぐさもつくり玉へ、都に殘し止め玉ひたる御方の耳に入り眠に觸るべくもあらぬところなれば誰をか憚り玉ふべき、心きゝて口かしこく一ふしありてをかしきもあり、姿やさしく面きよらに何とは無けれど懷かしきもあり、いづれをなりと御心のまゝに計らひまらゐせんとの意を鄙びたる言葉もて說きすゝむるに、山人も我も怒りを發して、宿りたくば汝が言はでも宿るべし、宿りたく思はねば汝が如何に言ひたりとて一夜なりとも宿るべきや、無益のことを云はむよりは疾く飯をつけ茶

母公の髪も白くはなるまじ、嚢中の貯しきは心の弱みなれども他の人々よりは、二人ともに忍び力強ければ由無き君がすゝめによりかゝる憂きめに遇ふやうになりぬと喞ちがましく他を恨まむことは絶えて無からむ、されば、またといひては面倒なり、直ちに此地より舟に乗りて彌次郎兵衞喜多八がせしごとく一度は金毘羅にも詣り嚴島をも一覽し九州の地をも次を以て踏み置かむといよ／＼決定し、八時といふに船に投じぬ。須磨明石も夜なれば知らず、下等の室内夜もすがら人々ごとごとゝ音させ騒ぎて眠らぬに我等も張三李四が輩の喧しく笑ひ罵る聲を耳に入れざるを得でうつらうつらと明かしける。

十二日の拂曉朝霧濃く薄くかゝれる四國中國の山々を望みて甲處こそ何といふ島なれ乙處こそ何といふ崎なれなどゝ詳しく知れる人の指さし示すを聞きつゝ甲板上に佇立て袂吹きかへす風の涼しく冷やかなるに眠らざりし精神の疲れを洗ひけるが、横雲斷れて東の天明るみ渡りたりと見る間もあらせず紅なる曦の光りの方より迸り出でたるさま見る眼も眩くばかり美しければ人皆手を拍ちて快きかなとぞ悦びあひける。八時過ぎ多度津に着きて朝餉もそこ／＼琴平に向ひて出づる汽車に打乘り、四國に名高き善通寺をも路の右手に其五層塔[illegible]り眺めやりて過ぎぬ。琴平は人家稠密櫛比して幅は狹けれど石疊の道長々しく通りたるに諸國よりの參詣人の足音絶ゆる間なく、隨つて旅亭の極めて大なるもの少からず、又旅人宿兼貸坐敷營業の招牌を掲ぐるも[illegible]我等は絲經蓆を

朱塗にしたる花剪刀とを臺に載せ持ちてしとやかに入り來りしは彼女にて、常のすげ無きに引き換へ笑を堪へたる容貌ひとしほ麗はしく、慇懃に手をつきて珍らしくも彼より口を開き、定めて徒然におはすべし、せめては花にても御手づから活け玉ひて少しは慰み玉ふよすがともなし玉へかしと誰やら作の脚本にてならば云ふべき調子にて、意ありてか意無くてか花を活けよとすゝめ呉れけるにぞ山人も我も少しく仔細のあるありて默然たること良久しかりける。兎角する中午飯の膳の出でにければ彼此ひしとく口を揃へて、花より團子、あゝ腹の耗つたことよと申しける。

菖蒲花の一劇を目に覩心に記されしを山人大きに口惜しく思ひて此日の共同道中記には、露伴鴈皮を捻りて糞鼻褌の紐を作り、借りたる針を奪つて蝙蝠傘を繕ふと惡樣に我がことを記せしもをかしかりしが、互ひに罵り嘲るまでも無く此地も倦きたれはとて飯後に立出て、車を僦ふて神戸に下るに、山伏嶺といふ處に沼ありて綠水靜かに湛へたる景色わづかに觀るべきのみにて他に眼をひく者も無し。四時半神戸に着きて名物なればと大塊の牛肉を下物に土地からの美酒を頻りに仰ぎ飲みけるが、耳朶熱くなり顏色紅となるまゝに、此行元來京阪を經て直ちに歸るべき心算にて家を出でしなれば初めこそ我等も此地より船にてか或はまた京を經て汽車にて歸らん歟などゝ云ひ居たれ、終りには酒壘塊に澆ぎて膽は天樣に大きくなり、此まゝ歸るとやあるべき、一道を行くも旅行なれば八道をく行も旅行なるべし、今歸りたればとて一月二月後れて歸りたればとて細君の頰も膨れず

知れず、と山人の戯むるれば、ぶらんでい神社あるこほろ神社など出で來玉はんには君を首として氏子となるべき人々の如何に多からむとて我も戯むれき。鳥地獄、有明櫻、皷が瀧、これまたさしたる事も無し。十日は一日を戀慕の情のまこといつはり悲しき嬉しきそれ〳〵の論議に費しけり。我は初めて着せし夜に西鶴について少しの所思を認めて民友社に送りし後は筆取ることもせず、山人もまた初めこそ机に對ひ居たれ二日三日と過ぐるにつれては亭主とも心やすく物語り娘ともざればみて物云ひ交はすやうなれるまゝ、自然耳は笑語に傾きて心は書卷に遠ざかりがちとなり、互ひに益無く時を費せしが、此家には前に記せし物堅き主人と夫を亡ひたる其娘と娘の子かと思はるゝ嬰兒と齡は主人の二女とも云ふべけれど面ざし娘の樸實に見ゆるとは異りて婀娜めきたる女との外には婢僕の輩のみなるに、主人と娘とは折節我等と心やすく言葉を交せど彼の婀娜めきたる女ばかりは幾日たてど我等に近づくこと無ければ、美を負みたるやうにも見えて少しは面憎き心地し居けるを圖らずも十一日の朝其女は主人の愛でおもへるものにて彼兒は主人がなさせしものなりと聞きしかば、妬さの餘りといふにはあらざるべきも一時の興を釣らんとて山人例の拙き筆もて、長火鉢に老漢の頰杖つきたる向ふに若き女の嬰兒を懷きて立てる圖を畫き成し、上に「老後の樂み」と題して之を贈りければ、取り次げるもの果して見せしや又彼女の果して見しやは知るよし無けれど我は切りにをかしがり、山人はしきりに高慢げなりし間も無く、美しく咲ける莟める菖蒲の花と手を

が、我は黄濁の湯の中に居て美からぬ女に肌觸れらるゝなど極めて恐ろしければ隨分頓着なき性なれど耐へ難くて早くも歸りぬ。此歸るさ往くさに隨ひ伴ひて何くれと無く世話する女を往時は湯女と呼びしにて年老いたるを大湯女と云ひ若きを小湯女と云ひ、いづれも其坊により通り名をつけありけるよし、髮も衣裳も結ひぶり擇みぶりにほと〳〵定まりありて、小湯女は客の酒の席をも幇け「有馬名所」といへる唱歌をも望まるれば一ト節歌ふほどのことはしたれど、さりとて公に情を賣りしにはあらずとぞ。中には美しきもありて京阪に近きところなるまゝ喧しく傳へられしもあるなるべく、彼の「松になりたや有馬の松に、藤に卷かれてねとござる」といへる歌の如きも素麪坊の湯女がことを云へるなるべし、お藤とは其坊の湯女の通り名なればなり。今は廢れてさる事無し。

此日より十一日まで爲すことも無く遊び暮せしが九日の午後近きあたりを見めぐりしに、溫泉寺藥師溫泉神社なと別にこれといふべきこともなし。をかしかりしは往時鐵砲水と人の云ひて毒水のやう思へるを近き頃此は自然生の炭酸水なれば用ゐて健胃の効ありと知りしより急に井の如くしつらひなほして神社樣のものを建てたる傍に奉納の俳句多く記せる懸燈籠をさへ設けたてたるが、其燈籠に「奉獻炭酸水神社」云々とありしにて、山人も我もおもはず笑ひ出し、炭酸水神社とは式内式外にも嘗て聞かざる面白の神社かな、世の開くるにつけて昨日は知らざりしもの丶今日は出で來る習ひなりとて、頓てはちん〳〵びや神社らむね神社などいふものゝ氷賣る舖々には勸請されむも

賞することも無かるべし。雲に駕し霞に歩まむなどいふ及び難き願ひにもあらねば此山駕籠を今少し大きく造りて二人三人仲好き同士の相乘りも成り將棋さすことも成るやうせむには旅行もひとしほをかしからんと、慾は際限無く、愚なることゞも思ふ中「檜灰」とかいふものを塗して筆つくる料にとて毛の膩を去らんと働き居る人、筆造りの家、鬚籠其他さま〴〵の竹細工もの鬻ぐ舖など見かくるやうなれば、はや有馬に着きたりと思ふ間も無く輿丁は我等を下の坊といふ客舍の前に下しぬ。山人は曾遊の地なれば知れる家のありたるなれど何家も同じことなればと內に入りて一周間ほどの逗留を賴み聞ゆるに、我等の人相を怪しき者と見ひがめてか物堅き家の習ひにてか、直ちに坐敷へは請じ入ずして五十ばかりなる齡の肥え逞しき亭主先づ我等が本貫姓名を糺し、何彼と暫時問答して後漸く一室に請じ入れたり。室は狹からず又陋しからねば二人とも不快なることも無く酒を呼び下物を命じて、酒後の飯、飯後の茶、いと心よくものし了り、さて老婆に導かれて浴室に到りけるが、元來有馬は僧行基の開きし以來世に聞えたる溫泉場なれど今に尙戶々に浴室あるに至らで所謂「坊」と稱ふる二十の客舍其他の亭より下婢に浴衣を持たせなどして沸き出づる地に建てられたる一堂に就き浴するなれば、さまで濶からざる湯槽の中は混鬧して男の手の觸れしに驚く處女もあれば眞の病者に近づかれて氣味わるげに避くる壯夫もあり。山人は汗出づるまで浸り居らねば効驗なしとて、熱くはあらぬ湯の中に汗の珠の禿顱の瓔珞かとも見ゆるまで迸り湛ふに至る間漬かり居し

まき筆日記

五月六日の朝いと夙く起き出てゝ東山の翠色加茂の流れの音も今日を名殘りと見捨て聞捨て、神戸行きの一番汽車に乘りて、有馬の溫泉へと心ざすまゝ大阪をも突と通り拔け、住吉〳〵と驛夫の呼ぶ時心得たりと飛び下りけるが、此所より有馬へは三里に足らぬところなれど打仰ぐばかりの山を望みて上ることとなれば嚢中に錢あつて萬般自由のきく里にては草鞋を買ふて徒步よりせんとはチト云ひにくきも無理ならず、殊更湯治客を目的に自己が身を昨日より今日へ今日より明日へと送り迎へて辛くも世を渡る輿丁ども三四人、腰掛茶屋に煙草休憩と立寄りたりし二人に對ひ駕籠をすゝむれば、忍耐なりかねて同行の太華山人まづ乘らむと云ひ出し、我もつゞいて乘るべしと和し、遂に二挺の駕籠を連ねて路の邊の草花を品し樹ぶりを許し合ひなどしつゝ長閑に進むことゝとなしぬ。駕籠は小さく淸らかにて究屈ならぬにあらざれど日障ひあれば熱からで、旅籠同樣のものなれば涼風時に懷に入る其心よさ云ふばかり無し。縈り廻りて上るすがら前には摩耶六甲の山々の赭く禿げたるところ〳〵に小松の簇生へるを見、背には晴れたる海の平らかにして日の光りを受けたる帆舟の彌白く見ゆるが遠く近くに浮べるを見るなど眺望の興少からず。此惡路をば徒步にてならば喉の渴き涸るゝに悲しみ汗の沸き流るゝに恨らみて樂し氣も無く互にせはしく顏を見合せ好き景色を

二十五日。大阪に到りて西鶴を誓願寺に吊ひ、「ほいかご」を天滿宮近くに見、市中を逍遥して夜舟に乘じ伏見に至る。

二十六日。大津に出で丶逢坂の關蟬丸宮なんどを冷やかに一瞥し、草津より石部に至りて宿す。

二十七日。關に宿る。

二十八日。關を出で丶龜山まで歩み、水茶屋丶に憩ひ居けるに、不思議なる草鞋の穿きやうをなし居れる男の我が傍に來て慇ひしより問答をなせし末、共に四日市まで行くなれば競走せんとの議に決し、負けたるは酒を振舞ふべし、但し途中は休むも休まざるも晝飯するもせざるも隨意との約にて、四日市の汽船宿を到着點となし、走り初めしに、數次勝負ありて畢に勝ちは勝ちたれども、其男は我が目印と出し置きたる檜笠を認め得ずしてか認めて知らざる如くせしか遂に來らざれば、空しく足を痛めしを悔いて、しかも船は明日ならでは出ざるよしに、愈々我が愚を怒るのみ。

二十九日。四日市を發して三十日の夜一時横濱に上陸し三十一日家に歸りぬ。時に囊中一錢も無くなりければ、自ら經濟の妙を得たるに誇ること甚し。

ッこ」を衣たる男なり。到るところに桑の葉足らざる時餅米を以て蠶兒に飼するといふ奇法を說法しあるくにて、聞く多多くは冷笑に附し或は毫も肯んぜざれど、先生少しも屈する色無く、切りに餅米論を立つる其語氣論法極めて奇異に面白ければ、我は局外者なるを幸ひ弟子入りなして種々の事を學び、遂に中津川に同宿なしける。

十二日。大井、まきがね、竹折、かまどを經て高山に宿りぬ。途中土岐川の邊景色妙なり。名古屋に出でんと心を決して十三日高山を發し、多治見、內津、明智、坂下、大曾根を經て名古屋に着しぬ。

十四日。大洲の觀音を初め市中各所を巡覽し、云はるゝがまゝに知れる人の許に宿りぬ。

十五日。古書を鬻げる家を洽く涉獵せしが得るところ無し。

十六日。逗留。

十七日。逗留。

十八日。雪降りければ猶逗留す。

十九日。汽車に乘じて長濱に着し、直ちに汽船にて大津に到りぬ。

二十日。義仲寺に詣でゝ芭蕉の墓を掃ひ、石山寺に式部が往時を忍び、汽車にて京都に入りぬ、

二十一日。二十二日は洛中を見物せしが、病を得て二十三、二十四の二日は空しく客舍に呻吟す。

杯と對治たる勢に乘じ、日照山に義仲を吊ひ福島に至りしが吹雪愈々烈しければ是非無く此地に一宿と決しぬ。此日行程わづかに四里なり。

十日。風止みて天麗らかに晴れたれば雀躍して出發し、名高き木曾の棧の跡をも危く知らずに過ぐるまで爛醉して過ぎ、岨を踏みはづして人に助けらるゝなど愚の極を盡して、寐覺のたせやに名物の河漏を晝食の代りに食ひ、臨川寺の景色を雪だけに面白く觀、立町を過ぎ、萩原村に益無き計畫をなし、須原に着きて先づ今日は此限りと宿りぬ。

花漬とて種々の花を小さく平たき箱の中に排列し、玄冬素雪の今猶枝頭に在つて開けるが如く妍芳の美を保たしめたるを賣りに來る女あり。さても風流なる商賣かなと賞して二箱三箱購ひ求めぬ。

十二日。須原を立ちて野尻、御戸野、妻籠を經、馬籠にかゝりて不圖野猪の肉あるよしを聞き、悦んで食ふに、ふぶり臭きが上に肉硬くして、しかもじやり〳〵と舌觸りするものあり。能く〳〵見れば皮を交へあるに驚きて問へば、此邊にては皮を剝ぐといふこと無く、藁火を以て毛を焚き去り、其じやり〳〵とするところを賞翫なして食ふとの話しに、噂に聞きし薩州の人の野猪食ふことも虛言ならずとは思ひ寄りしが、如何にしても此じやり〳〵に感心は出來難ければ苦笑して箸を取らず。此地にて檜笠を賣るものあるに逢ひたれば購ひて被り、落合、まきさか、中津川と同伴者を得たる勢に乘じて歩み、中津川に宿りけるが、同伴者は、身の丈高くしァ、火事裝束の如き「さし

は俳諧を好みしよしなれば、蝸牛を題にして一句所望し、眠りに就きぬ、
九日。合宿の人朝飯を終へし後、

雨をよぶ機嫌の角歟かたつふり

の一句を我に與ふ。句意暗に我が未だ大道に參せずして徒らに氣を恃み情に任ずるを老婆心もて警め呉るゝに似たり。何の小癪なとは思ひしも鳥居峠に相分るゝに及びては我が考への非なるを慚ぢぬ。
夜來大きに風起りて雪吹き下ろす勢ひ凄じく、大吹雪となりければ、宿の老婆は我を氣づかひて止めんとせしも、我が肯んぜざるに是非無く、「つまご」のさきに唐辛子を入れよなど敎へ呉るゝこと親切なり。相宿の人と共に立出でしが、我は雨具無く傘も持たねど急に融けざる灰の如き雪なれば苦にもせず鳥居峠にかゝりたり。路は急なり、地は凍れり、風は甚だ猛烈にして時には我を吹き倒さんとし、呼吸をさへに遏むることあり、寒さはいよ〳〵凌峭たり、峠の頂なる汁粉屋に入りて一ト休みしたるに家の内にてさへ躍り込む雪斬り入る風に心の平和を攪亂さるゝばかりなれば、戶外に出でゝ宮の越まで到らん氣力さらに出でず、流石の我も心弱りて

醉狂の旅をいさむる吹雪哉

さてあるべきにあらねば勇を鼓して峠を下り同行に別れて宮の越を過ぎ、例の丼酒つゝけ飲み五

し、額のびやかにして鼻筋通り、菩薩眉、菩薩眼したる少女の面は櫻色に美はしきが小さき朱唇を今や動かして何か物言はんとしつゝ出て來りしに出で會ひて、年增は小聲に何をか耳語しつ彼鍋を渡せば、少女は無言にて上品なる顏を我が方に向け星眸一轉して羞を含みつ、直ちに鍋を提げて奧の方へ入りけるが、うしろ姿もすらりとして黒き布子をこそ着たれ襟のあたりは書になんど見るが如く淸げに、黒き地へ赤く飜れ梅やうのものゝ染められたるメリンスの帶まで貴く見えたり。思はず我は茫然として其後少時は年增の女に何を云はれしやら何を云ひしやらも分らざりしが、草鞋のさきを火に焦がして足の指の熱くなりしに驚きて見れば剝げたる膳の早や我が側に据ゑられたるに又驚きて箸を取れば、あれまだ盛つてはござりませぬといふ。怪まれやしけんと少し羞ぢておとなしく待つ中、小さき鍋の蓋取りて盛りて與るゝを見れば雜炊にて、成程さきに御飯が冷えて居りまするが雜炊にしてあげませうかと云はれしに、ウ、と答へしやうの氣持す。此の始末にて酒も飲みそこねたれば十錢足らずの勘定して急に戸外へ飛び出せしに、寒風袂に入つて胴慄ひ止めがたし。本山、櫻澤、贄川にて一々丼酒を飲み、奈良井の德利屋といふに宿りけるに、老實親切なる婆の談話いとをかしく、合ひ宿したる人の談話もおもむきありき。合宿の人は我が親ほどの齡の人なれども、落魄してか好んでか知らねど基督敎の書を賣りあるき聖子の惠みに無智の輩を浴せしめんと寒中此地等の山間を重荷負ひて巡回する人なり。流石に信濃の國の人にて基督敎に入らざりし前

ひ、一覧して後、睡りに就きぬ。

八日。朝起き出で見れば、日は鮮やかなれど夢の中に雪降りしと見え山も湖面も薄雪被れり。某には別れて獨り鹽尻峠に馬を歩ますること少許して、首を回し諏訪の方を見れば全湖一眸の中にありて諏訪の町は繪に見る如く、駒が嶽なんど云へる山々の雪に銀色なして巍々と聳え連りたるが中に南方少しく缺けたる間遙かに富士が根見ゆる景色、駿河町より見るとは違ひて此上も無く優美なり。

鹽尻にて馬を下り、徒歩にて洗馬の宿に入るに、往時は日本第二の大道なりしなれば此地等も賑はひたりしなるべきが、今は旅館なんども大きなる往時の建物を其儘に痛く荒れ衰へたるが多し。晝飯せんと然るべき家を索めつゝ行きしも、意に滿つるもの無かりければ、少しく心急きて、如何なる家にもあれ飛び込みて一杯飲まんと猶見廻はしつゝ行くに、路の右列のいと大きくて又いと荒れたる家の店頭の大圍爐裏にて何をか煮るらん盛んに焚火をなし居たり。(店頭に大圍爐裏ありて冬は盛んに火を焚き客を待つこと岐蘇の旅宿の習ひなり。)少しは既に木曾慣れたれば草鞋のまゝ爐の中に踏み込みて、大分美味さうなものを煮て居るね、何でもよいから暖かいもので飯を食はして貰ひたいと云へば、鮮やかなる血色したる年増の爐に對ひ居たるが、我が唐突に入り込みしに驚きたる顏しながら急に鍋を取り下して隱すが如く奧の方へ持ち行く途端、奧の方より齡は十四か五なるべ

末に「ろの字」と書したるが一枚あり、名にしては珍しきが上、いづれも同人の筆と見ゆるに一人二名あるべき理無く、餘りの不思議さに仔細を尋ぬれば、「いのじ」「ろのじ」は共に名にて雙生の姉妹なる由顔を赤めながら女房の答へける。

暮るゝ頃和田に着きて綠川といへるいと大きなる家に宿りしが、途中寒さに堪へずして昔時の雲介とかいふものゝ如く大抵醉ひ居たり。石あれ坂には呼吸の苦しきを感じ、長窪にては人に罵られ、此日一日妙ならで面白からねば、野猪の肉を下物に大飲なして快眠せんと名高き和田の大峠の近きまゝ必ず猪肉は得らるゝならんと猪肉を需めけるに、それさへ意に任せず、是非無く不平を懐きて眠るに其寒さゝへ又論外なり。

七日。朝、馬を傭ひて、昨夜同宿せしより同伴となりたる北海道福山の養蠶會社とやらの某子と共に和田峠にさしかゝるに、時は一月なり、天は曇りたり、衣は唯一枚なり、峰々谷々の雪の上を吹き來る風襟にも裾にもいと寒く、馬上にがた〳〵顫へるほどなり。馬士等が美人と噂する女の家に一ト憩みして、午後二時頃諏訪の龜屋といふに着きぬ。宿るにはヤヽ早けれど湖水の眺めも珍しく、溫泉の湧くも好もしければ、此家に止まることゝ決して、悠々と湯に入り、悠々と飮み、鯉のつくり身に舌鼓撃つて、凍り渡れる湖の景色を賞しけるが障子を開きて湖の方を暫時見居れば酒たちまちに醒めて膚の粟立つには困りたり。同伴となりたる某の養蠶所を見に行かんと云ふに從

たり。癪に觸つて礫にも食はず、勘定そこ〳〵飛び出して停車場に到りけるが、此處より皆々は歸らんといふ、我け猶歸らじといふ。結局袂を分つに定まり、横川行きの汽車に我先づ乘じて、失敬、左樣なら。

横川にて汽車を下りしに、ある家の前に野猪、猿、野兎なんどを東京に送らんとにや以上合はせて十匹ばかり列べあり。此寒さに彼野猪めを味噌煮て食はゞと思ひながらも、輕井澤の一番汽車に明日は乘りて道中成るべく儉約をなし、京、大阪をも見て歸らむと、油屋で思ひ浮め高崎の停車場で思ひ定めしことなれば、碓氷峠を暮れぬ間に越えんとの覺悟に前途を急ぐまゝ、其肉一片價幾干と問ふ間も無く碓氷の舊道を上りかけぬ。馬車路は勾配緩く舊道は急なれば、八町一町などいふところありて馬車路の八町は舊道の一町に對する場所あるより、馬車には敢て後れもせざりしが、半途にして疲れたれば馬車に乘じ、日暮れて後輕井澤に着きぬ。此夜の寒さ甚しく、碓氷一つ上れば如是も氣候の變るものかと、我が衣の薄きに、ひとしほ深く驚きける。

六日。雪の淺間山を望みつゝ小諸を經て田中まで汽車にて走り、それより長久保へと心ざし歩みけるが、雪ちら〳〵と降り出でければ路傍のある家に良々久しく憩ひ居けるに、家の兒の新年試筆したる唐紙の半折ものゝ壁に貼付されたるが風に煽られて其端の奧の室より見えければ、心を注けて視るに、ありふれたる和歌を書きたる末に「いの字」と書したるが一枚あり、同じやうなるものゝ

いぶせき小屋に老爺ありて酒を賣り下物を賣る樣子なれば、就て飲まんと土間の焚き火の傍まで踏み込み、酒はあるか、下物はあるか、飯はあるかと口々問へば、酒を問ひしものは滿足すべき答を得しが、下物を問ひしもの飯を問ひしものは、ござりませぬ、ござりませぬ、あるものは油揚の煮たのゝ古いのと饂飩ばかりでござりまするとの答を得たり。よし、まづ酒を熱くして呉れ、そしてそれから饂飩を煮て呉れ、ム、其中へ油揚を打込んで呉れ、時候柄ゆゑ怪くなつても居るまいから、と三方四方よりの注文に老爺のまごつくを彼案内せし男の助けて、酒の燗も頓て出來、饂飩も終に煮え上りたり。飯の無きは悲しけれど饂飩の美味さ案外なれば、饂飩は瀧澤に限る、油揚の煮たのは古いに限ると戯れつゝ、腹も膨れたれば今夜は前橋宿りとしてそろ／＼出掛けんと小通龍に立寄りて南へ／＼と心ざし、六里計りの下りなれば一ト飛びにして前橋の油屋に着きしが日は未だ低くならざりける。大なる浴室、剝げざる膳、生魚、色の白き飯、美き酒、しなやかなる夜具すべて昨夜には異りて心よければ、狼殿をも茶話の料として笑ひ語り、いと安らかなる夢に入りぬ。

五日。烈風を冒して高崎に到り、一日より未だ雜煮餅を食はざりければとて、汁粉ぞうにと看板揭げし家に入りしに、婢の辯舌は敏捷なれど雜煮は敏捷に食はせ呉れず、さては此家はと愚鈍の我等も悟るところある頃漸く持ち來りたるに早速蓋を取りて見れば、餅は極めて小さくして、花に切りたる鮹、小松菜、蕎麥屋で使ひさうな蒲鉾の薄切り、といふ取り合せに、生賢しくも柚一片を入れ

ば、よしや其處までの路少しは辛くも一覽なすべき價値あるべしと昨夜此家の老媼に聞き置きしことより相談一決して、勇氣滿々と一同雪を踏み出立しぬ。

踏み出せし時こそ足の尖も冷やかなりけれ、少し歩みては却つて雪に「ほてり」の出づれば、愈々皆々勢ひよく、瀧澤といふ地に着くまで憩ひもなさで歩みたり。瀧澤は三面山に包まれたるところにて岩窟の中に不動堂あり、堂の手前に一神祠あり、其祠を守る一人の男に案内賴みて大通龍の巖の上に登りたれど別に奇も無し。御嶽勸請の巖に上りしも亦たゞ路の危きのみに別に奇とせん眺望も無く、忠次が潛みしといへる穴には李山を初めとして四五歩づゝ入り見たれど吹き入れられたる落葉足を沒するが上に下向きなる穴なれば足元危く、其上一種言ふべからざる異臭のするに、蟄蛇の中に在りといふ言も或は眞ならんと忽ち又這ひ出てける。

瀧は堂社の背面の横手にありて小ならず、轆轤と音して直下する勢ひ凄じく、特に雪後にはあり、四方の石壁には滴水凍りて氷柱をなしたるが水晶の簾の如く懸りあり。其美しさ奇絶妙絶と褒めても足らぬ心地するまでなれば、一行大に快を呼びて、嘆賞の聲を絶せず、雪踏み分けて來しだけありと悅びしが、酒が無くては李白も困ろう、あゝ寒くなつて來た喃、と口には云はね思ふまゝ案内者を促して又堂の傍に出でむとする途中、張水偶然雪上に小兒の步みし趾と思はるゝ足跡を見て指さし問ふに、案内者は笑ひながら猿の足跡、珍しくもござりませぬと答へぬ。

谷を次第に傳ひ、路ある方に漸く出でぬ。隨ひ行くこと二里半ばかりに及び、天は全く黑くなりて地は一面に白くなれる頃、漸く敎へられたる室澤の旅宿につきて、ホッと息つき冷汗を拭く途端に腹の痛きまで飢え疲れしを感じける。

我等に先立ちて宿り客の行商と覺しき者一人ありしが、家は隨分いぶせくして、膳部なんども悲しきほどなり。酒は云ふまでも無く惡きに下物は鹽鱒、油揚の類、初めこそ咽喉にも通りたれ後には口にも上せ難し。餅は無きかと張水云へば、舊曆で搗きますからとの答へ。暖かいものを欲しいと李山云へば、もう何もござりませぬとの挨拶。仕方が無い、寐やう〳〵と蒲團敷きて貰ふ間に厠に行きて、手を淨むつるいで、不圖天を仰げば、月の光り微かに雲の下より洩れて遠樹の影黑く、萬籟死したる中に狗の聲のみ何處にてかする其物凄き譬へん方なく、狼の話しさへ思ひ出して急に駈け戻り夜着の中くにるまりけるが、既に身を丸くして寐たる張水の何を云ふかとおもへば、ア、今日は正月の三日だのに。

四日。朝、起き出づれば日の光り鮮やかにして其美しさ云はん方無く、むら鳥の聲も朗らかに鳴きて常盤樹の小枝の雪を蹴こぼす活潑の風情を觀る心地よさ又譬ふべきものも無し。これより瀧澤を經て前橋に出づるはさして困しき路にもあらず、瀧澤には岩窟に不動尊あり、奇巖の上に大通龍小通龍あり、御嶽の神を勸請なしあり、國定忠次の潛みしといふ洞穴あり、十何丈の瀑布ありといへ

親切に、これより上への細徑は柴苅路ゆゑ頓て盡きて柴と草との中に入つて終ふばかり、前橋へは此地から到底今日の中には行けぬが、室澤といふところへ行けば一夜は宿れる宿屋があります、わし等は其村の者で薪を取りに來ましたが今歸るところですから其所へ行つて今夜だけ宿るとならば馬に荷をつけて終ふまで待つて一緒に御座らつし、大間々の人が途方も無い話しをしたので、成程地藏峠も此山の續きには違ひないが態々遠路を見に行く山でも無いに、大方酒にでも醉つて居て其樣な話しをしましたらしい、また御前樣方も醉興な、いらぬ山歩行きでござりますは、第一此處等にまご〳〵して居て狼にでも出會つたら鎌一挺持つて居ないで何となさると敎へ呉るゝに、狼の一語を聞くや聞かずや慄然として四人一時に胴ぶるひなし、それは大變、御蔭で助かつた、併し眞實に狼が出るかね。出るも出ないも、今頃は室澤の村から餘り遠く無い瀧澤邊へさへ出ます、何せよ名高い赤城山の續き、しかも近來狼が東の方に引越して來ましたから、と云はれ、愈々驚き怖れ、そんなら早く荷をつけて呉れ、室澤村まで連れて行つて呉れ、それ見玉へ露伴子、君の說に從へば狼に出會ふところだ、但し君は之でも上へ上へと行くなら獨りで勝手に行き玉へと、男に賴むやら我を攻擊するやら、思ひ〳〵に饒舌る樣面憎けれど是非も無し。よろしい、あやまつた、僕も室澤に行く、恐れ入つたよ、其代りには狼が出たら僕が殿りして對治するは。エ、まだ負惜みを云ふね、狼が出たら一番に逃げるだろうなどゝ云ふ中彼男等は荷をつけ終れば馬を曳いて谷より

ば人も角を引込して、互ひに枯草の中に坐し、相談せんと氣をおちつけぬ。されど相談したりとて別に好き智慧あるにあらねば、是非無く皆々我が說に從ひ、山頂指して猶進み行きしが、行くこと二時間ばかりして日は山蔭に遂に沈み、溪間の方より暮れかゝる折しも冷風颯と吹き來て雪はらはらと墜ち來れば、さあ大變だと四人とも青菜に鹽と萎れかへる中に三人は不平の色あり。今はいよいよ窮したれど幸ひ掬飯は猶腰にあり、「やけ」にになりても一夜位は何とかならぬことあらじと我まづ少しく無法になり、齒を切つて三人を後にし、歸らば歸れと云はぬばかりに、無言で切りと先立ち進むに、雪は愈々降りまさり、袖は漸く白みたり。それにも關はず我一人は後をも見ずして進みしが、不圖心づけば三人は附き來らず、遙かの下にて猶遙かの谷間に對ひ何やらむ聲を限りに談るやうなり。何事ならむと引返して樣子を見るに、谷の底には馬二匹人二人ありて、馬の脊に柴を付けたるとは眼に知るれど距離遠くして黃昏なれば人の面は能くも分らず、道を問へども聲達せねば、手眞似をするあり下り行かんと試むるあり、李山は我を冷やかに見て、小柴隱れの彼の馬を僕が見出したから好いやうなものゝ、君の瘦我慢に釣り込まれてどしどし行かうものなら危ふく見脫すことであつた、もう大丈夫だ、彼所まで下りて行つて路を問はう、と云ひつゝ杖を賴りにして馬を目的に下り立てば皆々續いて谷に下りぬ。我も是非無く谷に下りて柴刈り男の傍に到り、李山後得なんどの蔭に手持無く立ち居れば、男は極めて我々を怪しみながらも先づ後得の洋服姿を重じとしてや、いと

も怪しくなつたね、一體始終眼の前に屹として居る彼の山は何といふ山だろう、あれが地藏峠では無いか。さればさ、僕も先刻から多分地藏はあれでは無いかと思つて居るが、若しもあれなら大變だ、今でさへ十分草臥れて居るに此上猶彼の山まで上らせられては死んで仕舞ふ。死んで仕舞ふなんとぞケチなことを云つては困る、勇氣が沮喪して仕舞ふではないか。君が困ると云はないでも勇氣は疾に沮喪して仕舞つて居る。エヽ馬鹿な、弱いことを云ひ玉ふな。ト云ふ君が跛足を引いて居るのはどうだ。そんなことを此處で論じても役には立たない、跛足を曳いても何でも今から後へ歸つては「おけらの水渡り」だ、假令ば路を誤つたにせよ一筋道を左へも右へも折れず突切れば何處へか出るに極つて居るから安心して僕の後へついて來玉へ。ところが君。ナンダ。ナンダツて君、君が安心して居るなら君の後へも付いて行かうが君のは瘦我慢だから恐ろしい。瘦我慢でも仕方が無い、君等も瘦我慢をしさへすれば好いさ。瘦我慢はいけない歸ろう、馬鹿なことだ。イヤ瘦我慢といふのは忍耐のことだ、結構なものだ、螻蛄のやうに半途で後へ復る奴があるものか、君等のやうなことを云つて居ては大事は迚も出來ないよ。イヽヤいけない、瘦我慢はいけない。ナーニ好いよ、ヘン瘦我慢で亞米利加は發見されたサ。イーヤイーヤ、瘦我慢は非を遂ぐるのだ、ムヽさうだ、過つて改めざるのだ、瘦我慢には飽まで不同意だ。エヽ喧しい、そんなら兎に角煙草でも吸つて何とか相談を付けやう、天時地利共に非なるに人の和まで失つては仕樣が無いからと、自己を虛しうすれ

征伐にでも出掛くるやうに立出でたり。

戌亥の方に折るゝ小徑を認めて大間々を後になし、段々進み行きけるが、雪もよひの曇り空どんよりとして、風は無けれど人家離れし茫々たる原中を歩むなれば自然と餘計に裾寒き心地し、一里半ほど過ぎし頃には皆々の顔青ざめたり。されど一小村を過ぎて寺は見えねど墓地とおぼしき石塔卒塔婆の數立てるところにさしかゝりて、不圖數多き石塔中に大德利の上に大酒盃を伏せたる形を石もて造りて亡き人の標記となしあるものを見出せし時は、多分これは亡者の遺言かなんどで造りしならんが如何に酒好きなればとて餘りをかしき注文ならずや、これでは子孫が墓參しても馬鹿々々しくて可笑くなるべし、まだしも下戸で牡丹餅を竹の籜に包んだ形を遺さぬだけがよかるべきが流石に田舎の人の仕事と皆々笑ひ評しなどしつ、大きにショゲたる氣を勵まして又進むに、次第々々山深くなればにや、路は狹く風は冷やかなる處に出で、いと大きなる山の脊に馬の鬣などの如く松の並樹の生へるを望みて覺束無くも辿りたり。

三時過ぎと覺しき頃になりても彼の剝製屋の主人の云ひたる沼あるところにも出でず、地藏峠と思はるゝ峰にも出でず、たゞ松の樹の馬鬣の如く其脊に生ひたる大山ばかりは我等が眼の前に姿も變へず巍然と立てど呼びて答ふる者にもあらねば心細さを增すのみにて、路をば尋ね地藏峠を那方と尋ねんにも行き逢ふ人の全く無きに如何ともせん方無く、どうも路に迷つたやうだ、左樣さ、どう

て「剝製」の價高く賣るゝことより鴛鴦の山でも獲らるゝことなんどまで聞き出だし、煙草の火を假り床几に腰を掛け、さも親しげに話しこみて、此あたりの山水の眺望佳きところをすら悠々と問ひかけゝれば、我も少しく嘴を容れて　今來た途中渡良瀬川の景色は隨分好かつたが彼より眺望好いところが近くにあるなら敎へて呉れ、と云ひ出すに、主人は大口開いて笑ひ、あんなものを好い景色と云ふやうでは仕方が無い、地藏峠に行つて見なさい、あんなものとは雲天ばんてん、すツぱらしいのに驚くだろう、との答へ、如何にも語氣たしかに眞實らしければ我を初め殘る三人も釣り込まれて乘り地になり、それなら其處を一覽したいが其處より今日の暮れぬ中に前橋までは行かれやうか、また其處までは那の路を那の方向に取つて行けばよいのか一々敎へて呉れと眞顔になつて尋ぬるに、阮小五とでも云ふべき主人は反り身になつて煙管を打振り、先づ辨當を腰にして、此處より上へ少し行けば戌亥の方へ折れる小徑のあるを辿りて行き、それより後は、横へ折れゝば花輪か又は棚澤なんどゝ云ふ村へ行くばかりなる故たゞ何處までも眞直に上り上りと心掛けさへすると直に地藏峠、それから前橋へは下りの路ゆゑ五里や六里は一ト走り、日暮までには容易のことだ、と手に取るやうな挨拶なり。よし〳〵、それなら我等四人、一番互ひの足だめしに地藏峠を駈け上りて直ちに駈け下り、前橋の旅亭で味美い下物に美味い酒、十分愉快に飮まうでは無いか、との發議たちたち採用されて、面倒のついでに掬飯までを主人に賴み、各自それを腰にして意氣揚々と鬼が島

ち注連張れる門邊に風そよ吹きて紅白の其飾りの飜へるさま繪にしても看るべく風情あり。旅宿に着きて「おもて二階」に通り、酒酌み交はして一日の勞を休めけるに酒やゝ發して耳熱する頃、樓下の路上に人の數行く氣はひしてチ、チポーンと東京にて「こわいろつかひ」の用ゐる銅鑼の響きしければ、繁昌の土地なるゆゑ田舍なれども「こわいろつかひ」の正月の賑はしさに乘じて市を歩くならんと早くも推して、まぜつかへす積りの聲高く「成田屋ヤ」と我等の一人の云はんとせしが其時遲く此時早く他の一人が窓の障子をサラリと開けしに「假聲使ひ」と思ひのほか葬禮なりしに叫聲の後半だけを呑み込みし其をかしさには皆噴飯しける。

一月三日。朝早く起き出でたれど那處に行くべき的も無し。さりとて歸らん所存も無ければ、大間々へと假に定めて九時頃渡良瀬川を越え晝少し前大間々に着きぬ。桐生とは違ひて市も淋しく家並びも劣れりなど評しながら警鐘の高く懸れる梯子の立てる近くに羽毛美はしき種々の鳥獸を「剝製」にしたるを吊し下げて賣れる家の眼につきしまゝ皆其家の前に佇みしが、生肉をも賣るらしき樣子なれば、我突と入りて兎の肉を買はんとしけるに、獵師か然らずば博徒ならむと思はるゝ身幹大に眼圓き逞しき主人とおぼしき男朗らかなる聲して、兎は無しと答へたり。張水はまた吊したる鼯鼠を指さしてこれは何といふものだと問ひけるに、「もゝんぐわー」だ、と一聲に答へられ、身を縮まして我と共に退きける。其勢の當り難きに李山も問答せざりしが、世馴れたる後得は流石に驚か

く此方へ一直線に韋駄天そこ退けと走り來りて足踏み伸ばし、サア見玉へ此草鞋を、今度こそは大丈夫だ、先刻から君等に笑はれたれが實は僕やんごと無き生れだから草鞋の結びやうなどは知らぬサ、然し君等に尋ねる時は嘲笑ばかりて敎へては呉れぬと見たゆゑ少しも頼まず、今彼所にて柔和さうな老夫を見かけて張良が黃石公に對する如く慇懃に草鞋の紐の結びやうを尋ねたところ、二度三度はかうしてあゝしてと口で敎へて呉れたが僕がまご／＼して居るのを見かねて自ら結んで呉れた、彼奴はもとより善人だが是れ一つには則ち僕の相貌堂々威風凜々天晴英雄豪傑と彼奴等の俗眼にも見えたからだ、どうだ君等も恐れ入つたか、明治の張良は黃石公に草鞋を結はせるッサ、と威張り返りて喋々語るを、後得くす／＼笑ひ出して、ナアニ、君、あの爺は君を馬わしらひにしたのだらうッ。

大の字山も見ては左までならず、足利學校も我等の感を惹くに足らず、古い本を見たとて高慢の料にもならねば、其門前の日當りよき地の梅の早咲二三輪を賞して足利を出拔け、サアこれから何處へ行かう、桐生へ行かうか、それ宜かろうと桐生へと心ざして日の暮に着きぬ。名高き機織場ほどありて町中を流るゝ小溝の水の力假りて水車を裝置したる家極めて多く、水車かけぬ家は却つて少きまでなり。今日は二日の切荷とて駄馬は紅白の長き縮緬乃至木綿の色美はしきを幾條と無く懸け飾りたるを曳くもの多く、馬こそ心は無かるべけれ、鈴の音ちやらちやらと床しく響き、綠の松立

りのことなれば其所に至りて何とか言はんとは思ひしも、由無き嘴を容れて何事か我が肩に落ちかゝり來んとき退きもならざるやうの場合にならば妙ならず、且は我さへ先刻には好ましからず思ひし女なればと、其まゝにして又睡りにつかんとせしが、流石に直には睡りかねて曉天近き頃辛くも夢に入りぬ。

一月二日。いざ出立といふに臨みて後得子は洋服に新調の美しき外套を被たる草鞋穿きの姿甲斐甲斐しけれど我等三人は或は赤脚に或は「メリヤス股引」に草鞋穿きて裾高く端折りたるさま餘程馬鹿氣て見えたり。されど誰しも剛情我慢の男なれば反身になつて市を出外づれけるが、李山一人後れたるを何ぞと見れば、結びしと無き草鞋の紐を今日初めて結びしなるより早くも解けて足に纏はるを、路傍に腰を屈めて結び直し居るなり。オイ〱李山、君は今年幾歲だ、草鞋の紐が結べないか子。ひやかし玉ふな、今度は大丈夫と云ふ間もあらせず一町ばかり歩むと又直解けたり。ソレ又解けた、紐が後に下つて居る。イヤナニ今度こそは大丈夫だ。ヤア又解けたでは無いか。エゝ大きに御世話だ、これなら屹度好い。ヤア紐は解けないが君の流義では草鞋を横に穿くのか、踵が地を踏んで居るはと三度四度笑はれて李山大きに弱りしが、少時して不圖又李山の見えざるに、例の草鞋がまた解けたかと笑つて一同後を見れば、遙の後にて百姓らしき一人の男と路の傍に何をするか屈み居るに、オヤ〱李山め此地らに叔父様も持つまいに何を長く話して居るのか、と云ふ間も無

は此地を出て那處を的といふは無くともぶら〳〵旅をしては如何だ、異つた土地に異つた下物で飲んだら同じ惡酒でも少しは可笑く醉はすだろう、後得子是非出かけ玉へ、正月二日姫はじめ好しとばかりは極るまい、四人男の旅行はじめも中々思はぬ興があろうとの我が發言に、後得野暮を云ふ「がら」で無く、オット合點好かろ〳〵とグッと飲み干し、ツイと差しぬ。いよ〳〵明日の相談定まり、兎に角足利學校を一覽と出掛くるに決し、猶さま〴〵それよりそれと見物の次第など語り合ふ中我と後得とは醉痛く發して席にも得堪へぬまで心地苦しくなり、舌の働きもあやしく眼の視ることも覺束なくなれば、亭婢等は其言ひざま視ざまのをかしとてか何かにつけて笑ひ罵り、李張二人も介抱するやうにはもてなせど私かに悅べる色あり。さては鐵心流の酒令などゝ我を欺きて大醉の憂き目を見せつるよ、然樣とは悟らず口惜くも淺き謀計に乘せられしかと怒りて物言へど呂律たしかならで涎のみ口角に溜れば、亭婢等はます〳〵笑ひ、李山張水も遂に笑ひ出すに、其忌々しさ云ふばかり無けれど足も危ふければ立ちも上らで猶泰然と坐り居つ、李張二人のさも美味げに飯を喫するを見ながら飯も得食はで我は其まゝ倒れたり。

夜ふけて眼覺め見れば、何時舁き込まれしにや臥床に身は橫たはり居たり。人々は鼾の聲のみさせて快げに眠れるが、遙に離れたる室にて亭婢の何事の過失して責めらるゝにや、泣聲になりて罪を謝するに打交ぜて何物をもてか、ひた〳〵と身を撲つ音聞ゆ。一月一日にはあり夜は深くあり、餘

携へて諸共に陶然として醉郷に入る場合無し、幸ひ僕が聞き覺えしには鐵心といふ一酒客の此の道理をば嚙みわけて案じ定めし一令あり、そも其一つの令といつば、先づ一座をば見わたして最も酒量の少き人を本位と定めて其人より五合強きは五合だけ飲み三合強きは三合だけ飲み又一合だけ僅に強きも一合だけを預め飲み、それより皆々一齊に小杯をもつて飲み交はし、さしつ抑へつ悠々と笑ひ語りて歡を盡し、さて最も少量者の足れりとするの時をもて其男より次第〳〵強き者まで杯を收め、宴徹して禮に終り、茶と煙草とに餘情を語る、といふやうな妙式なり、なんと君等も此式に從ひて飲み見玉はぬか、僕等自ら利して云ふばかりでは無ければ、後得君も賛し玉へ、といふに張水は一番がけ兩手を擧げて贊したり。後得もまた此奴は妙と云へば我さへ煙に卷かれて、遣るべし遣るべし、僕から飲まう、僕は甚だ失敬ながら李張二子より三合強い、後得子もまづ其位は無論強いに極まつてるゆゑ僕と二人で先づ初めやう、と椀の蓋にて仰ぎはじめぬ。亭婢の呆れ張李の驚く顏をじろりと橫に睨みて豪傑ぶりたる我と後得、面を蓋ふばかりのものに春の湖ほど滿々と注がせしを一杯一杯又一杯と、さも得意に重ね飲みしが、流石に終りの一杯を傾けて乾す頃ほひには腔中ほとんど火の如くなり、眼より炎焰も出かねぬ心地しけれど、後得はいざ知らず、我はことさら泰然たる風を粧ひ、柱に憑りて身を反らせ、小杯を取り飲みはじめぬ。

此地は別に見るところも無いといへば興は一席二席の酒の談論笑語に盡きたといふもの、何と明日

ず騷がずの命令に、田舍の者とて譯が分れば運びは早く、酒は忽ち現はれたり。菜漬、燒海苔、鷄卵といふ「おまへだち」より下物も二種三種出たり。夜來の疲れを忘れ果てゝ、我は昨夜の始末より一別後の彼を語り此を語り、李山張水をも紹介すれば、彼も丹次郎閑居後の歷史を語り出し、其事彼事と談話は倭文の苧環くりかへし盡きず、往時を今に今に往時を絢りまぜて、主人一句、客一句、まぜかへし一句、のろけ一句、攻擊一番、罵詈一番と終には少し亂るゝまで饒舌り合ひけるが、果は李山傾き張水潰へ、天晴一の剛の者やと自ら任ぜし露伴さへ倒れて其後何も知らず。

夜來の疲勞にぐつすりと醉ひ倒れしが不圖眼覺めて見れば、これはまた何たることぞ、日は既西に沒らんとして、李山張水は腹空しければと晚飯の膳を控へたり。後得はと問へば、亭婢笑ひながら御相手が無くなりましたので御歸りになりましたが、御呼び申してまゐりませうかといふ。呼べ、呼べ、飯を食ふといふことがあるものか、李張の二君待ち玉へ、何か滋養になるもので少しく飮むのも惡くはあるまい、一體君等は弱卒だから困る、と不平を云ふ片手に面を洗ひ口を淨めなどする中に後得は笑ひを含みて入り來りぬ。又もや之に興新まりて例の暴れ飮みとならんとする時、李山は我を顧みて、君と後得先生とは腹中の樽大きくして我と張水とは小さければ、君等の醉はぬに我等は醉ひ、我等の苦むやうなる頃君等は興に入る樣なり、これでは互ひに面白からず、筒茶碗で龜の子が飮み平皿で鶴が吸ふといふ古い話に似たことなれば一方妙なら一方不妙、いつも一座が手を

ば、上野の公園を出ぬけて玉子道へかゝりし頃には、寒くもなり氣味惡くもなり又心淋しくもなりて、二人は不承〳〵に、我は瘦我慢に、默々として步み、放吟高歌の擬勢も拔け、面白からず前進せるさま他より許さば狐に憑れし男もなるべし。

一月一日の太陽輝き渡りて初烏ほがらかに鳴き、注連繩戰がして曉風心地よく吹けば三人ともに勇氣回復し、浦和より汽車に賴つて、法螺話し、居睡り、あばれ食ひの中に、佐野に着きぬ。直ちに後得を訪ひ、御免なされ御免なされと案內賴めば年老いたる奴僕樣の男出來りぬ。兎角問答する間に後得も自ら出來りぬ。近くに住めるものなんぞの年禮なんどに來しならんと迂濶り出でたる後得の思ひも寄らぬ我等に押しかけられたるに流石呆れて言葉も無く、此方を見詰めて立つたるに、此方は得たりと勢よく、イヨ御芽出たう、相變りませず今年も御懇親を願ひまする、と毒氣を吹掛くれば、ます〳〵彼方は驚きて、一躰どうした仔細で來た、イヤどうしたのかうしたのどころでは無い、飮んで、醉つて、思ひ出して、ツイと出掛けて、遊びに來た、何にせよ早く飮める家へ案內して呉れ、それから飮んで、それから話して、それから飮んで、それから緩りと話しをして、それから二三日快く遊ばう。ム、分つた、僕について來れば好いさと心も輕く身も輕く其まゝ下駄をチョイ穿きにして、通は斯樣さとスタ〳〵、料理兼宿屋へ案內し呉れぬ。

オイ江戶ッ兒は氣が早いぜ、乃公が敎へた例の通りに何が無くても先づ酒を出せ、との後得が急か

うちするは女兒の態、したいこととして死んだのが到底死ぬなら一割徳だは、よし、乃公は佐野へ行かう、と半分は無法になつて終に決定し、さて、これ〳〵の仔細あつて僕は兎に角旅行する、厭で無ければつきあひ玉へ、失敬ながら公等はまだ不潔きはまる武藏野の一坏土外に山青く水遠白き天地あるを更に御存知あるまいが當世それては青い〳〵、一所に僕と出掛け玉はゞ野州上州そこら其邊、此懷中のあらん限りを共に遊んで歩行かうに、なんと合點し玉はずや、毎年きまつた雜煮餅、重詰の「おせち」、鱈昆布の吸物、「のし」いたゞかせられて屠蘇を飲ませられるなんといふ馬鹿氣たことを繰りかへしたとて手柄になる譯でもあるまい、行き玉へ〳〵新年旅行がよいでは無いか、ナニこれから歸つて明日出るも何だ彼だとて却つて面倒が起るに極まつて居る、明朝にならば汽車が後から必ず來るゆゑ安心して浦和の方へのこ〳〵と直に此處から出掛けやう、あんまりそれは過激だと、過激も絲瓜もあるものか、人世過激が尤も妙さ、白粉をつけて臙脂を點して髮を結ふて爪をとつて衣服を着換へて新しい下駄を穿いて其後やうやく戸外へ出るとは女の兒のすることさ、頂天立地、どこへ行つても男で候ものが些細なことに關ふものか、家へは途中から郵便を出せばよいさ、いやなら厭ときつぱり云ひ玉へ、強て勸めはせぬけれど、と半分は强迫的に慫慂すれば、二人も遂に其氣になつて、行かう〳〵、勘定ッ。

醉のいつまで醒めずにあるべきにもあらず、愛敬提灯の蠟燭幾町の闇を照らし行く得べきもあらね

特に優しく我を遇し呉れたる男なり、究して究して究し抜いても薄いながら髯髭ある面して父母に小遣ひ錢乞ふも悲しく、又大切の朋友に目腐れ金の合力頼むも腹の見らるゝやうにて口惜ければ、たまく妹に貰ふ五十錢壹圓を儉約に儉約し、鐵道馬車に乘りたいところを辛防して僅に煙草を買ふ程なさけ無き頃、ヤア珍らしく來て呉れたのに御馳走は何もないが幸ひ夕河岸の鰯がある、ちと下卑ては居るが此の天麩羅に茄子の揚げ出し、外には出來たところで瓜もみ位だろうが、マア不承して遣つて呉れ玉へといふやうな調子で厭味の無い待遇を訪ふ度毎にされては、嬉しさ眞に骨に徹し、婦女の情かは知らねど涙さへ腹には溢れて、何時かは此方から倉島の「正宗」金田の「羽がひさき」でも待つて行つて彼の向島の家で飮みたいと思ふ心はありながら左樣も成し得ず濟ます中、酒の惡さうな田舍へ彼は行き、錢が無ければ此上も無く不自由の都に我は殘れば、對酌會話は固よりの事、音信さへも絶えくとなりぬ、あはれ此地が野州か野州が此地かであるならば直にも尋ね行きて、どうだ、年忘れだ、盛んに飮んで夜を明さうかいと飮みかくべけれど、汽車の通ずれば近いやうには思ふ者の佐野といへば三十里餘距りたり、最終列車も既に出たり、今日行つて明日歸るといふ譯にもならねば、己みなんく、思ふだけが畫餠なり、と是非無さにあきらめて、エースト、これを「おつもり」にしやうと大碗の酒を「ぐいのみ」になし、しばらく「舌なめずり」してじろじろと四圍を見廻はすに興味索然何となく面白からず。エ、イ、思案分別は賊子のすること、うぢ

打忘れて悦氣滿面酒席に臨みぬ。李山は高く笑ひ張水は低く語りて我と三人鼎足に坐し、今年を今日限りぞと人々の東西に駈け南北に馳せ行く燈光車聲燦々轔々たる紛如たる市街を俯瞰しながら一杯杯又一杯、醉の廻るに舌も廻る末は互ひに豪傑がりて、仇めかしき絃歌をこそ厭へ放吟狂舞を何か厭はんとて、李山は鞭聲肅々と樓榭も搖ぐ計りの聲して歌ひ出せば、張水は起つて劍舞を試み、笑傲謔浪已む時を忘るゝ中に夜は更けたり。

明日は元日なり、常の日とも違へば夙くより起き出でゝ初鴉の聲をも聞き初日の出をも拜みたしと思ふに夜を更かし過したは妙ならず、いざ歸らんと「ふところそだち」丈に張水の先づ云ひ出づれば、李山も和すべきありさまなり。我は興猶盡きざるに二人の歸らんとするを見て面白からず感ずる途端善く飲む我が友後得の此坐にあらば如是はあらじとの想ひ胸に浮びけれど、訪ふとも急には會はるまじく其男の今は隔たり住めるに、悵然たると良〻久しく、言葉も無くて平椀の手酌の酒をぐびり〳〵と飲み居けるが、歡樂極まつて哀情多しとやら云へる通り、今目前の得意極まつて知心の友の居らざるに悲しくなり、嗚呼、一二年來我が落魄して袖に涙をこそかけね腹に不平の煙り絶ゆる間無く渦巻ける折柄、知らざるは然もあるべきが淺からず知れる者すら街頭相遇ふも面を背け行きて他の酸苦をば蔭ての茶話の料と爲すやうなものばかり多かりしに、彼の後得は左まで深き交りを結びたりといふにもあらねど、我管仲の才無きも幸に有ちし鮑叔が情ある友三人四人の其中にて

醉興記

面白く無くて面白く無くて、癇癪が起つて癇癪が起つて、何とも彼とも仕方の無い中の閑を偸むで漸くに綴り成したる露團々は賣れたり、書肆への談判一切を委ね賴み置きたる李山張水二人の友は幾十枚の紙幣を手にして我が許に來れり、もとより拙き稿にはあり又名をさへも人に知られぬ一書生が初めての作なれば賣れんことをば私に覺束無くは自己からも思ひ居たるものゝ、汝が筆に成りしものなど如何で世間に出づべきやと我が文を金港堂に視せしことの今朝發覺せる際父上の一語に罵り斥けられしには流石口惜さの波胸の海に立ちて、願はくは價低くとも賣れよかし惡紙になりとも我が號の印せられて上れとかしと祈り居けるに、五六時間たゝば明治二十二年と曆も改まるべき十二月三十一日の午後になりて我が目下の望みの達し得たるなれば、心地よさ云ふばかり無く、いやどうも年末の折柄御奔走下されて有り難うござります、御禮のつもりでと申すでは無けれど忘年の一會を今夜下谷邊で催しませう、松源でも三河屋でも御好み次第、ナニ八百善が靜かで宜かろうとか、宜しい左らば左樣しますから一歩お先へ御出かけ下され、後から迂生も參りますと二人を出し遣りて一枚「ぬのこ」に吳絽羽織、はをるが早いか突と走り出で、上野へと心ざす途中にて財囊を買ひ烟草を買ひ、サアもう是で澤山だと、極月の晦日なれば何くれと吾が家の忙がはしきをも

には犬に取り巻かれ、人に誰何せられて、辛くも拂曉郡山に達しけるが、二本松郡山の間にては幾度か憩ひけるに、初めは路の傍の草あるところに腰を休めなどせしも、次には路央に蝙蝠傘を投じて其上に腰を休むるやうになり、終には大の字をなして天を仰ぎつゝ地上に身を橫たへ、額を照らす月光に浴して、他年のたれ死をする時あらば大抵かゝる光景ならんと悲しき想像なんどを起すやうになりぬ。

廿九日。汽車の中に困悶して僅かに睡り、午後東京に辛くも着きぬ。久しく見ざれば停車塲より我が家までの間の景色さへ變りて、愴然たる感いと深く、父上母上の我が思ひ做しにやいたく老い玉ひたる、祖母上の此四五日前より中風とやらに罹り玉へりとて身動きも得仕給はず病蓐の上に苦しみ居玉へるには、いよ〳〵心も心ならず驚き悲しみ、弟妹等の生長せるばかりにはやゝ嬉しき心地すれど、いたづらに齡のみ長じてよからぬことのみ仕出したる我が今も猶往時ながらの阿蒙なるに慚愧の情身を責むれば、他を見るにつけ是にすら悲しさ增して言葉も出でず。

廿四日。仝じく。
廿五日。朝、基督敎會堂に行きて說敎をきく。佛敎も此敎も人の口より聞けば有難からずと思ひぬ。
廿六日。如何なしけし頭痛烈しくして如何にもしがたし。
廿七日。同じく頭痛す。
廿八日。少許の金と福島までの馬車券とを得ければ、因循日を費さんよりは苦しくとも出發せんと馬車にて仙臺を立ち、日猶暮れざるに福島に着きぬ。途中白石の町は往時民家の二階立てを禁じありしとかにて、打見たるところ今猶巍然たる家無し。片倉小十郎は面白き制を布きしものかな。福島にて問ひ質すに郡山より東京までは、鐵路既に通じて汽車の徃復ある由なり。其乘劵の價を問ふに、殆んど嚢中有るところと相同じければ、今宵此地に宿りて汽車賃を食ひ込み、明日又歩み、明後日又歩み、何日までも順送りに汽車へ乘れぬ身とならんよりは、苦しくとも夜を罩めて郡山まで歩み、明日の朝一番にて東京に到らん方極めて妙なり、身には邪熱あり、足は猶痛めど、夜行を取らでは以後の苦みいよいよもつて大ならむと、終に草鞋穿きとなりて歩み出しぬ。二本松に至ればはや夜半ちかくして、市は祭禮のよしにて賑やかなれど我が心の淋しさ云ふばかりなし。市を出はづるゝ頃より月明らかに前途を照し呉るれど、同伴者も無くて唯一人、町にて買ひたる餅を食ひながら行く心の中いと悲しく、錢あらば〳〵と思ひつゝ漸々進むに、足の疲れはいよ〳〵甚しく、時

渚あれば、黒き岩、黄なる崖あり。子美太白の才東坡柳州の筆にあらずば如何か此光景を捕捉しえん。さてそれより鹽竈神社にまうでゝ、もうこの碑壺の碑前を過ぎ、芭蕉の辻につき、青葉の名城は日暮れたれば明日の見物となすべき心算にて知る人の許に行きける。しほがまにてたゞの一錢となりければ、其を神にたてまつりて、

　からから〱とからき浮世の鹽釜で
　　せんじつめたりふところの中

はらの町にて

　宮城野の萩の餅さへくへぬ身の
　　はらのへるのを何と仙臺

廿日。朝、曇り、午前九時知る人をたづねしに、言葉の聞きちがへにて、いと知れにくかりければ、

　いそがずはまちがへまじを旅人の
　　あとよりわかる路次のむだ道

廿一日。此日もまた我が得べき筋の金を得ず、今しばらく待ちてよとの事に逗留と決しける。

廿二日。全じく閑窓讀書の他なし。

廿三日。全じく。

天の翼あれども翅々の捷なく、丈夫千里の才あつて里閭に榮少し、十錢時にあはず銅貨にいやしめらるなぞとむづかしき愚痴の出所は此な者と御氣が付かれたり。漸く或家にて草鞋を買ひえて勇を奮ひ、八時半頃野蒜につきぬ。白魚の子の吸物いとうまし。海の景色も珍らし。

十九日。夜來の大雨漸々勢衰へたるに、今日は待ちに待ちたる松島見んとて勇氣も日頃にましぬ。いでやと毛布深くかぶりてゑいさ〳〵と高城にさしかゝれば早や海原も見ゆるに、ひた走りして、遂に五太堂瑞岩寺渡月橋等打めぐりぬ。乘合ひ船にのらんとするにあやにくに客一人もなし。ぜひなく財布のそこをはたきて船を傭へば、ひきちがへて客一人あり。忌々敷ことかぎりなし。されどおもしろき景色にめでゝ煩惱も輕きはいとよし。松島の景といへば唯々松しまや噫まつしまや〳〵と古人もいひしのみとかや。一ッ〳〵やがてくれけり千松島とつらねし技倆にては知らぬこと、われわれにては鉛筆の一ダース二ダースつかひても此景色をいひ盡し得べしともおもへず。東西南北、前後左右、或は大或は小、高きあり、ひくきあり、みの龜の尾ひきたる如き者、臥したる牛の首あげたる如き者あり、月島星島桂島、踞せるが如きが布袋島なら立てる如きは毘沙門島にや、勝手に舟子が云ひちらす名も相應に多かるべし。松吟庵は閑にして俳士髭を撚るところ、五太堂は寂びて禪僧尻をすゆるによし。况んやまた此時金風漸々として天に亮々たる琴聲を聞き、細雨霏々として袂に滴々たる翠露のかゝるをや。過る者は送るが如く、來るものは迎ふるに似たり。赤き岸、白き

十七日。朝早く起き出でたるに足傷みて立つこと叶はず。心を決して車に乘じて馳せたり。郡山、好地、花巻、黑澤尻、金か崎、水澤、前澤を歷て漸く一の關に着す。此日行程二十四里餘なり。大町なんど相應の賑ひなり。

十八日。朝霧いと深し。未明狐禪寺に到り、岩手丸にて北上を下る。兩岸景色おもしろし。所謂一山飛で一山來るとも云ふべき景にて、眼忙しく心ひまなく、句も詩もなきも口惜しく、淀の川下りの彌次よりは遙かに劣れるも流石に彌次よりは高き情をもてる故なるべしとは負惜みなり。登米を過ぐる頃、女の兒餅をうりに來る。いくらぞと問へば、三文と答ふ。三毛かと問へば、唯と云ひ、三厘かといへば又唯と云ふ。尙くどく問へば拂然として、面ふくらかして去る。暫くして石の巻に着し、其より運河に添ふて野蒜に向ひぬ。足はまた腫れ上りてひとあし毎に劍をふむごとし。苦しさ耐へがたけれど、錢はなくなる道尙遠し、勤といふ修行、忍と云ふ觀念は此時の入用なりと、齒を切つてすゝむに、頓て草鞋のそこ拔けぬ。小石原にていよ〳〵堪へ難きに雨降り來り日暮るゝに垂々んたり。已むを得ず負へる靴をとりおろして穿ち步すに、一ッ家のわらじさげたるを見當り、うれしやと立寄り、一ッ求めて十錢札を與ふるに取らず、通用は近日に廢せらるゝ者ゆゑ厭ひ嫌ひて、此村にては通用ならぬよしの斷りも無理ならねど、事情の困難を話してたのむに、いぢわるき婆さらに聞き入れず。なく〳〵買はずに又五六町すぎて、さても旅は悲しき者とおもひしりぬ。鴻雁翔

殊にうまきなぞと口より出まかせに曉舌りちらせば、亭主、さらば一升まゐらせむ、食ひ給へと云ふ。其面つきいと眞面目なれば逃げんとしたれども、不圖思ひ付きて、先づ殼をとりて玉はれと答へける。亭主噴飯して、扨々をかしきことを云ふ人よと云ふ。をかしさはこれのみならず、余は今日二時間計りにて十五里步みぬ、又をかしからずや、と云へば、亭主、否々、吾等は老たれども二時間に三十里はあゆむべしと云ふ。段々聞くに六町一里にて大笑ひとなりぬ。晝めし過ぎて小繋まではもくら〳〵と足引の山路いとなぐさめ難く、暮れてあやしき家にやどりぬ。きのこづくめの膳部にて盡く閉口す。

十六日。朝いと早く暗き内に出で、沼宮內もつゝと拔けて、一里計りにて足をいため、一寸餘りの長さの「まめ」三個できければ、步みにくきこと此上なけれど、休みもせず、終に澁民の九丁程手前にて水飮み飯したゝめ、淚ぐみて澁民に入りぬ。盛岡まで二十錢といふ車夫あり、北海道の馬より三倍安し。遂にのりて盛岡につきぬ。久しぶりにて女子らしき女子をみる。一體土地の風俗溫和にていやしからず。中學は東京の大學に似たれど、警察署は耶蘇天主堂に似たり。兎も角も靑森よりは遙によろしく、戶數も多かるべし。肴町十三日町賑ひ盛なり。八幡の祭禮とかにて殊更なれば、見物したけれど足の痛さに是非もなし。此日岩手富士を見る。又北上川の源に沼宮內より逢ふ。共に奧州にての名勝なり。

鳥目を種なしにした殘念さ
　うつかり買たくされ卵子に
やす玉子きみもみだれてながるめり
　知りなば惜しき錢をすてむや

是より行く手に名高き浪打峠にかゝる。末の松山を此地といふ說もあり。いづれに行くとも三十里餘りを經ずば海に遇ふことはなり難かるべし。但し貝の化石は湯田といふところよりいづるよしにて處々に賣る家あり。中々價安からず。かくてすゝむほどに山路に入りこみて鬱蒼たる樹、潺湲たる水のほか人にもあはず、暫く道に坐して人の來るを待ち、一の戸まで何程あるやと問ふに、十五里計りと答ふ。駭然として夢乎覺乎狐子に騙せらるゝなからむや、と思へども、猶勇氣を奮ひてすゝむに、答へし男急に呼びとめて、何方へ行くやと云ふ。不思儀に思ひて、一の戸に行くなりと生いらへするに、彼笑つて、噫、おのし、まよふて損したり、福岡の橋を渡らねばならずと云ふ。余こゝにおいて愈々落膽せり。然れど其まゝあるべきにもあらず、日も高ければいそぎて行くに、二時斗にして一の戸驛と云へる標杭にあひぬ。又々怪しむこと限りなし。ふたゝび貝石うる家の前に出で、價を問ふにいと高ければ、いまくしさのあまり、此蛤一升天保くらゐならば一石も買ふべけれと云へば、亭主それは食はむとにやと問ふ。元よりなりと答ふ。煮るかと云ふに、いや生こそ

名物なれど喰ふこともならず、みやげにもならず、うれしからぬものなりと思ひながら三の戶まで何程の里程かと問ひしに、三里と答へければ、いでや一走り、といきせき立て進むに、峠一つありて登ること亘々長けれども盡きず、雨はいよ／＼つよく面をあげがたく、足に出來たる「まめ」遂にやぶれて脚折るゝになん／＼たり。並木の松も爰には始皇をなぐさめえずしてひとりだちの椎はいたづらに藤房のかなしみに似たり。隧道に一やすみす。此時またみちのりを問ふにさきの答は五十町一里なりけり。とかくして淚ながら三戶につきぬ。床の間に刀掛を置けるは何の爲なるにや、家つくりいとふるびて興あり。此日はじめて鮭を食ふに其味美なり。

十五日。朝、雨氣ありたれども思ひきりて出づ。三の戶、金田一、福岡と來りしが昨日は晝餉たべはぐりてくるしみければ、今日はむすび二ツもらひ來つ、いで食はんとするに臨み玉子うる家あり。價を問へば六厘と云ふ。三つばかり買ひて尙進み行くに、路傍に淸水いづるところあり、椀さへ添へたるに、こしかけもあり。草を茵とし、石を卓として、谿流の縈回せる、雲烟の變化するを見ながら食ふもよし、且つ價も廉にして妙なりなぞとよろこびながら、仰いで口中に卵を受くるに、臭鼻を突き味舌を刺す。驚きて吐き出すに腐れたるなり。嗽ぎて嗽げども胸わるし。此度は水の椀にとりて見るにまたおなじ、次もおなじ。是にて二錢種なしとぞなりける。腹はたてども飯ばかり喰ひぬ。

まで海岸なり、野邊地の本町といへるは御影石にやあらん幅三尺斗なるを三四丁の間敷き連ねたるは如何なる心か知らねど立派なり。戸數は九百斗なり。とある家に入りて晝餉たべけるに羹の內に蕈あり。椎茸に似て香なく、色薄し。されど味のわろからぬまゝ喰ひ盡しけるに、半里程歩むとやがて腹痛むこと大方ならず、淚を浮べて道ばたの草を蓐にすれど、路上坐禪を學ぶにもあらず、却て跋提河の釋迦にちかし。一時斗りにして人より寶丹を貰ひ受けて心地漸くたしかになりぬ。おそろしくして駄洒落もなく七戶に腰折れてやどりけるに行燈の油は山中なるに魚油にやあらむ臭かりける。ことさら雨ふりいでゝ秋の夜の旅のあはれもいやまさりければ、

さらぬだに物思ふ秋の夜を長み
　　いねがてに聞く雨の音かな

食ふものいとをかしく、山中なるに魚のなますは蕈のためしもあれば懼れて手もつけず。椀の中のどぜうの五分切りもかたはら痛きに、とうふのかたさは芋よりとはあまりになさけなかりければ、

鹽辛き浮世のさまか七の戶の
　　ほそきどぜうの五分切りの汁

十四日。朝早く立て行く。間なく雨しと〳〵ふりいでぬ。きぬ〳〵ならばやらずの雨とも云ふべきに、旅には憂きことのかぎりなり。三本木もゆめ路にすぎて、五戶にて晝食す。此邊牛馬殊に多し。

此行風雅の爲にもあらざれば、吟哦に首をひねる事もなく、追手を避けて逃ぐるにもあらざれば至急と足をひきずるのくるしみもなし。さればまことに彌次郎兵衞の、一本立の旅行にて、二本の足をうごかし、三本たらぬ智惠の毛を見聞を廣くなすことの功德にて補はむとするふざけたことなり。

十二日。午前田中某に一宴を餞せらるゝまゝ、うごきもゑせず飲み耽り、ひるいひ終はりてたちいでぬ。安方町に善知鳥のむかしを忍び、外の濱に南兵衞のおもかげを思ふ。淺蟲といふところまで村々皆磯邊にて、松風の音岸波の響のみなり。海の中に「ついたて」めきたる巖あり。其外しるすべきこともなし。小湊にてやどりぬ。此あたりあさのとりいれにていそがしぶる乙女のなまじひに紅染のゆもじしたるもをかしきに、いとかはゆき小女のかね黑々と染ぬるもの多きもむかしかたぎの殘れるなるべしとおぼしくて奇なり。見るもの聞くもの味ふ者觸るゝものみないぶせし。笥にもるいひを椎の葉のなぞと上品の洒落など云ふところにあらず。淺蟲に温泉あるよしなれどみちなかなればいらずありき。途中帽子を失ひたれど購ふべき餘裕なければ、洋服には「うつり」あしけれど手拭にて頰冠りしけるに、犬の吠ゆること甚しければ自ら無冠の太夫と洒落ぬ。旅宿は三浦屋と云ふに定めけるに、衾は堅くして肌に妙ならず、戸は風漏りて夢さめやすし。こし方行末おもひ續けてうつら〳〵と一夜をあかしぬ。

十三日。明けて糠くさき飯ろくにも喰はず、脚半はきて走り出づ。清水川といふ村より又々野邊地

三日。午後函館に到りキトに一宿す。
四日。初めて耕海入道と號する紀州の人と知る。齡は五十を超えたるなるべけれど、矍鑠として殆んど伏波將軍の氣慨あり。これより千島に行かんとなり。
五日。一旦湯の川に歸り引かへして復函館に至り、假寓を定めぬ。
六日。無事。
七日。靜坐讀書。
八日。おなじく。
九日。市中を散步して此地には居るまじき筈の男に行き逢ひたり。何とて父母を捨て流浪せりやと問へば、情婦のためなりと答ふ。歸後獨坐感慨之を久うす。
十日。東京に歸らんと欲すること急なり。されど船にて直航せんには囊中足らずして、興薄く、陸にて行かば苦み多からんが、興はあるべし。囊中不足は同じ事なれど、仙臺には其人無くば已まむ在らば我が金を得べき理ある筋あり。且はいさゝかにても見聞を廣くし經驗を得んには、陸行に如くなしと遂に決斷して青森行きの船出づるに投じ、突然此地を後になしぬ。別を訣げなば妨げ多からむを慮り、たゞわづかに一書を友人に遺せるのみ。
十一日。午前七時青森に着き、田中某を訪ふ。

舗にて購ひて歸りぬ。

午後我がせし狼籍の行爲のため、憚る筋の人に捕へられてさま〴〵に說諭を加へられたり。されども聊か思ひ定むるよし心中にあれば、頑として屈せず、他の好意をば無になして辭して歸るや否や直ちに三里ほど隔たれる湯の川溫泉といふに到り、而して封書を友人に送り、此地に來れる由を報じ置きぬ。罪あらば罪を得ん、人間の加へ得る罪は何かあらん。事を決する元來癬を截るが如し、多少の痛苦は忍ぶべきのみ。

此地の溫泉は今春以來如是大きなる旅館なども設けらるゝやうなりしにて、函館と相關聯して今後とも盛衰すべき好位置に在り。眺望のこれと指して云ふべきも無けれど、彼市より此地まで、或は海濱に沿ひ、或は田圃を過ぐる路の興も無きにはあらず。空氣殊に良好なる心地して自然と愉快を感ず。林長館といへるに宿りしが客あしらひも輕薄ならで、いと賴もしく思ひたり。

三十日。淸閑獨り書を讀む。

三十一日。微雨、いよ〳〵讀書に妙なり。

九月一日。館主と共に近き海岸に到りて鰮魚を漁する態を觀る。海濱に「濱小屋」といふもの東京の「長家」めきて一列に建てられたるを初めて見たり。

二日。無事。

み黒み行く浪の上に暮れ殘りて白く見ゆるに「都鳥」も忍ばしく、父母すみ玉ふ方、ふりすてゝ來し方も流石に思はざるにはあらず。海氣は衣を撲つて眠り美ならず、夢魂半夜幾回と無く驚きぬ。

二十七日。正午舟岩内を發し、午後五時壽都といふ港に着きぬ。此地は此あたりにての泊舟の地なれど、地形妙ならず、市街も物淋しく見ゆ。また夜泊す。

二十七日の夜ともいふべき二十八日の夙くに出港せしが、浪風あらく雲亂れて、後には雨さへ加はりたり。福山即ち松前と往時は云ひし城下に暫時碇泊しけるに、北海道には珍らしくも流石は舊城下だけありて白壁づくりの家など眸に入る。此地には長壽の人他處に比べて多く、女も此地生れなるは、品よくして色麗はしく、心ざま言葉つきも優しき方なるが多きよし。氣候水土の美なればなるべし。上陸して逍遙したきは山々なれど雨に妨げられて舟を出でず。頓てまた吹き來し強き順風に乘じて、船此地を發し、暮るゝ頃函館に着き、直ちに上陸して此港のキトに宿りぬ。建築半ばなれども室廣く器物清くして待遇あしからず。いと心地よし。

二十九日。市中を散歩するにわづか二年餘見ざりしうちに、著しく家列びもよく道路も美しくなり、大町末廣町なんどをさ〳〵東京にも劣るべからず、公園のみは寒氣強きところなれば樹木の勢ひもよからで山水の眺めはありながら何となく飽かぬ心地すれど、一切の便利は備はりありて商家の繁昌云ふばかり無し。客窓の徒然を慰むるよすがにもと眼にわたりしまゝ小說を文魁堂とやら云へる

突貫紀行

身には疾あり、胸には愁あり、悪因縁は逐へども去らず、未來に楽しき到着點の認めらるゝなく、目前に痛き刺激物あり、慾あれども錢なく、望みあれども縁遠し。よし突貫して此逆境を出でむと決したり。五六枚の衣を賣り、一行李の書を典じ、我を愛する人二三にのみ別をつげて忽然出發す。時まさに明治二十年八月二十五日午前九時なり。桃内を過ぐる頃馬上にて、

きてゐたるものまで脱いで賣りはてぬ
いで試みむはだか道中

小樽に名高きキトに宿りて夜涼に乗じ市街を散歩するに、七夕祭とやらにて人々各々自己が故郷の風に從ひ、さまざまの形なしたる大行燈小行燈に火を點じ歌ひ囃して巷閭を引廻はせり。町幅一杯ともいふべき龍宮城に擬したる大燈籠の中に幾十の火を點ぜるものなど、火光美しく透きて殊に目ざましく鮮やかなりし。

二十六日。枝幸丸といふに乗りて薄暮岩内港に着きぬ。此港は嘗て騎馬にて一遊せし地なれば、我が思ふ人はありやなしや、我が面を知れる人もあるなれど、海上煙り罩めて浪もおだやかならず、夜の暗きもたよりわしければ船に留まることゝして上陸せず。「都鳥」に似たる「ごめ」といふ水禽の

行ひに敏き君子となられしなり。それ聞くと思ふと修むるとは、學を成し德に入るの道なるに、聞いて思はざるが故に凡人となり、思ふて修めざるが故に君子となるあたはず。然るに先生は聞思修の三を能くせられたるが故に、聞くこと少きも思ふこと多く、思ふこと少きも修むること多く、修むること多かりしが故に得ること極めて多く、遂に萬人を動かすの人となり玉ひしなり。其終りを考ふるに、道を樂みて富貴利達を求めず、天を敬して窘窮屈辱を厭はず、悠々然として王侯も奪ふあたはず妖邪も破るあたはざるの愉快を持し、一點の苦なく滿懷の樂ありて世を逝り玉ひしなり。それ念と行と得とは、上昇と下降との由て生ずる法なり。鄙き念を發するが故に小人となり、過れる行ひをなすがために好人となるあたはず。然るに先生は大にして高き念をいだき、淸くして堅き行ひを持し玉ひしが故に、大にして高く、淸くして堅き報果を得られしなり。先生の傳を讀むもの其事迹を記臆せんより能く其事蹟の生ぜし所以を思ひ、其成功を羨まんより其成功のよつて來る源を思ひ、然して先生の思ひたまひしところを思ひ得、先生が發念し給ひしところを念じ得ば、はじめて能く先生の傳を讀みたるものといふを得べし。これを傳の終りの語とす。

なる答をなし置き、衣笠歸るとひとしく先生と呼び出し、『我が處置は我が思ふところありてなり。汝を廢寺に住はせ置くも何の局外より啄ふせらるべき理あらむや。衣笠なるもの陪臣の分として無禮の言を發し、我が處置を誤れりと云ひて去りぬ。汝彼を戒めて如是ことを云はしむるなかれ。』と裏に針有る怒言をいだされける。先生唯々として逆ふことなく退き玉ひしが、衣笠此事を聞て大に怒り、『愚人に問答無益なり。我ふたゝび彼ごとき小人を見じ。』とて直に下館に歸りけるが、他人さへ斯く口惜くおもふほどなるに先生は少も恨み怒れる色なく、悠然として居給ひける。然るに或人また此事を聞き、齒を切つて大に怒り、代官に面會をもとめ、道理をつくして責め糺し、代官の語究するまでに責め詰りしが、先生また此事を聞きて、有らずもがなと歎じ玉ひける心の中こそ廣かりけれ。

かくて先生日光神田開墾の命を受け、刻苦事に從ひけるが、中途に果敢なく沒したまひぬ。

其十六

先生は博學多才の人にあらずして、博學多才の人よりも尚大に世を益せし人なりと云ふべく、先生はまた悟道得眞の人にあらずして、悟道得眞の人よりも尚高く世に秀たる人なりと云ふべし。其初めを考ふるに、貧賤に身を鍊り寒苦に心を鍛ひ、常に學問を實際より離さずして、遂に道に明かに

りしものに多し。君民を愛しまた豐丸君を愛し給はゞ、必ず豐丸君をして艱苦の何者たるを解し、下民を憐みたまふ御心の出るやう御養育あるべし。』と申しければ、先君もまた愛を割き、草野に養育のことを任せ玉ひけり。然りしより後草野心を盡して御養育申しゝかば、生長したまふに及びて能く下情に通じ、自ら艱苦に堪えたまひ、在國の時は領邑を親く巡檢し、百姓の苦を問ひ、大雨面を撲つ時にも暴風袖を扯斷るばかりの時にも駕を用ゐることなく、民間に近き親み、仔細に勸農の道を說き、孝悌の敎を垂れ玉ひければ、老若男女感動して、各自業を勵み德に進み、仕法の結果も早く擧りけるなり。

其十五

先生其後天保十四年にあたりて奧州小名濱、野州眞岡、同國東郷三所の代官の屬吏を命ぜられたりしに、眞岡の代官はなはだ愚にして、先生の法を用ゐざるのみか、先生の功をも沒せんとし、官舍をさへ先生に與へずして獨り威を振ひけれど、先生これを爭はず、神宮寺といへる數年無住の破寺に入り、風雨も凌げぬほどなるところに晏然として居給ひける。然るに嘗て先生の恩を蒙りし下館藩の衣笠某、先生を訪ふの次に此景狀を見て、あまりの事と打腹立ち、代官に打ちむかひて、『賢者を遇するの道是の如くして可なる乎。』と散々に云ひければ、代官腹中に怒りを發し、面前には曖昧

池田胤直君命を含みて草野正辰と共に天保十三年の十一月先生に初めて見え、衰憊を救ふの道を尋ねけるが、それより數〻兩人して道を問ひ法を求むるに、先生一々明白に敎へ給ふこと、炬を執て闇を破り、箇々の物を指點するが如くなれば、兩人いよ〳〵感激して又他事もなく再興の策を行はむと勉めける。こゝに於て池田は一旦歸國し、中村領内の出租、寛文より弘化まで百八十年間の調べたなし、これを寄せて相馬の分度を定め經濟の大本を立てんことを請ひければ、先生日夜肺肝を碎き、丁寧親切に思慮せらるゝこと數月にして、未來六十年の間の長計を定め、全部三卷の書を作りて、再興の道を此に竭して與へ玉ひけるに、君公これを覽たまひて悦び玉ふこと斜ならず、急ぎ池田に命じて實行を期したまひける。それよりつひに弘化二年をもつて宇田郡成田坪田の兩村に施法ありしを初めとし、諸村の競つて發業を乞ふに任せ、漸々に手を下して回復の實を擧げたまひけるに、年々發業の村五十に及び、十年の後安政三年に至りては、全く舊に復するもの十五邑、廢地の開くること數千町、分度外の産穀萬餘苞に及びける。

是の如く相馬は先生の法によりて實功を擧げしも、是れ一ッは草野池田等が誠忠の然らしむるところ又一ッには相馬侯みづから能く先生の敎を奉ぜしによれり。侯は幼名豐丸君とて先君の寵愛いと深く、幼稚の時は膝下離さず養育仕玉ひしに、草野正辰諫言を奉り『豐丸君を愛したまはゞ深宮婦人の手に任せたまふべからず。明君は必ず婦人の手より出てずして、暗君は常に深宮の内に人とな

は君彼人を師として國家中興の業を托し玉へ。』と言上しければ、君大に悦びて、『誠に汝の言の如くならば得難き偉人といふべし。速かに在國の諸臣に此事を告げよ。』と命じたまひける。草野難有き旨申して君前を退き、筆を操つて直に先生の高徳所論を遺なく認め、此人を擧げ用ゐてはといふ意を含めて在國の池田胤直に贈りける。

池田も書面を草野より受けて、二宮先生をます〳〵慕ひ、國家の興復此人によりて成るべし、と喜びしが、諸士等は各自己が小さき心に比べて世に先生の如き人あることを信ぜず、却つて先生の心事を疑ひ、或は仕法の覺束なきを云ひ立て、草野は老耄せる故に二宮を溢美たるなるべしなんど云ひ囃し、誠實に服することなければ、池田は言を竭して、二宮の出所、大久保侯に擧げられし因縁、櫻町の成績などを語り聞かせ、諸士の疑惑を破らんとしたり。江戸にても草野諸士に向つて種々に說き聞かすれども、或は疑ひ或は難ずること國元に異らず。されば草野は一計を案じ、勘定奉行の輩を我が從者のやうになして、先生と會ひ論談するごとに襖の外にて之を聞かしむるに、其高論名說實際に的切なるにぞ、感動なして心服するもの漸く多くなりにけり。されども國元の衆議尚區々にして決せざりければ、其よしを聞き玉ひて君侯すなはち池田を召し、『汝を呼べるは餘の義にあらず。いよ〳〵我二宮を擧げて興復の事を托せんとす。汝よろしく草野と共に力を盡し此事を成せよ。』と命じたまひける。

某を先生の許にいたして教を乞はしめたり。されども先生思はるゝよしありて面會を許したまはず、人傳に仕法の一班を示したまひけるのみなりけり。先生の大德今は世にかくれなく、遂に幕府に達して天保十三年の冬登用せられたまひけるが、其頃先生大久保侯の邸に在りて江戸に居られければ、草野正辰は好き時なりと悦ひて再三再四面謁を請ひ、漸く許されて相會するを得たりしかば、草野まづ禮を厚くし辭を下うし、相馬領の景況を述べ、誠心誠意之を救ふ所以の道を求めける。先生つく〲草野を見たまふに、齡は既に七十を超へて名利の慾に使はれず、心はひとすぢに君を翼け民を安んぜむとするのみにて、天晴好き忠臣なりければ、已むことを得ず諄々と安民治國の大道を惜むこと無く告けられけるに、草野又虛心にして之を聽き、一を聽きて二に擴め、深く記し正しく解し、水をもつて水を受くるが如く、先生の言を胸に納めて大に悅び歸りけり。

草野は一度二宮先生に逢ふてより胸中に蟠まりし何十年來の暗雲一時に晴れし思ひをなし、悅ひ勇みて君に見え、『臣等中村再興の事に心を委ね力を盡せしも、智淺く德足らず、事いまだ成らずして、不才の罪免かるゝところなく、ひそかに君恩を謝し奉るべきの期なきを歎き居りしに、幸に二の宮先生にあふことを得て其所說を聞きしに、盛衰の來る所以、厚生利用の大道を掌を指すごとく敎へ諭し給へり。加之彼人德を具へ智を備へ、眞に有道の君子にして兼て濟世の豪傑なり。願はく

ずして永く邦の昌んなるべき所以なければ、繩入をなせしより後漸々領民衰貧に赴き、天明度にいたりては上下甚だしく窮し、加之卯辰兩年の兇荒ありしため百姓死亡離散せること夥しく、田圃は荒れ蕪れ、收納は三の二となり、何如ともなし難きにいたりしが、文化度にいたりては尚も疲弊に疲弊を重ね、負債は三十萬金に超え、一年の租税は利にも足らざるが上に、借債は年々に增し、收入は年々に減じ行くにぞ、君臣ともに之を憂ひ、何とかなして回復なさんと千々に心を碎きしが、中にも草野正辰池田胤直の二人、忠義を勵み、勤儉を說き、一途に國家を再復せんとし、弊を革め奢を省き、賞罰を明かにし勤惰を糺すほどに、一藩の者却つて深理を解せずして怨み嘲むもあるにいたれど、草野は心を動さず『大事を成さんに尋常の覺悟にて成るべきや、我輩二三人命を捨むは覺悟の前なり。』と、池田と共に心を合せ、用を節して民を休め、租を免じ荒地を拓き、負債を償ふの道も大略は整ひたり。かゝる事十年其功漸く顯れんとするに當りて天保己申の兩度の飢饉に折角の貯蓄を皆失ひ、計畫一朝にして空しくなり、再び上下艱難に陷りしが、草野此時既に七十を越え、池田もまた五十を過ぎたり。『嗚呼我輩三十年の間千辛萬苦を盡しゝに、事業は半にいたらずして、功は半途に廢せんとす。悲きかな。』と二人とも歎息すること數々なりき。

草野池田の二人は二宮先生といへる人ありて孔孟の心に兼ぬるに管晏の才を以てし、爲すこと成らざるなく、計ること當らざるなきよしを聞き、久しく其德を仰ぎ、遂に君に申して中村の郡代一條

先生に求めける。されども先生辭すること例の如く、『我は小田原侯のために力を盡して猶足らざらむことを恐れ居るに、何とて他邦のために力を頒つことを得んや。』と答へ玉ひければ、下館侯より小田原侯に請ひ求め、上牧衣笠をして禮をもつて救濟の道を先生に依賴したまひける。先生是非なく下館のために分度を定め出入を計して、大本を立て、上牧を諭して俸祿を辭さしめ、以て諸士を義に勇ならしめ、其後二ケ月の國用米財を先生の手元より與へ、四ケ月の國用を宗家石川侯より惠ましめ、二ケ月の國用を下館市の富商を說て出さしめ、一年の貢稅をもつて元金の幾許を返し、さて從來の利金の中より元金の減ぜしまゝ自然生ぜしだけの剩餘をもつて每年元金消却をなすことに定められけるにぞ、流石困乏なりし下館も負債償却の道開けて、稍疲弊を回復し得るやうなり、また領中灰塚下岡崎蕨に三邑に先生の門下を遣りて勸農撫民の仕法を行はせられければ、其德三邑のみに限らず所在勤儉の美風をなしけり。

其十四

こゝに奧州相馬侯中村領は高六萬石と聞えて地開け民豐なるところなりしに、元祿年中群臣相謀りて繩入をなし、田圃の廣狹を嚴しく糺し、三萬八千石を打出しければ、貢稅を出すこと拾七萬苞に及び、倉廩充ち滿ち、一時は極めて盛なりしが、根に培ずして長く榮ゆる筈の樹なく、民を富ませ

なる仔細にや小田原にては先君以來の仕法を廢し、領民の先生の許に往返するを禁ずるなど、不法の處置多かりければ、流石の先生も怏々として樂まず、愁然として歎じ玉ひ『嗚呼我が道こゝに廢せり。予聞く君子は天をも怨みず、人をも咎めずと。予もまた誰を怨み誰を咎めん。皆我が誠心の足らざるよりなり。我道の本源たる小田原既に我道を廢したるに、我他に行きて此道を立てなば、小田原の非を顯すに當りて眞實に心苦し。諸方の仕法をも一時に廢して以て小田原の非を掩はんか。』と、先生理を見ること明かにして一生疑惑をいだくこと少き君子なりしも、此時は困苦心勞に疲れ玉ひけるが、小田原先君の墓に詣りて此事を告げ、合掌時を移して、如何なる心や抱かれけん默然として流涕せられぬ。其後先生身を終るまで心中つねに小田原に再び安民の道行はれんことを祈られけるとぞ。

其十三

常陸國下館侯は常州および河内國にて二萬石を領せらるゝなれど、天明度の飢饉より領内の民衰へ貢稅減じ、上下疲弊甚だしくなり行き、負債ばかりも三萬金餘ありて一年の租稅も其利を償ふに足らざるほどゝなりければ、如何とも爲し難きに至りしが、郡奉行の衣笠某なるもの君命を奉じて櫻町に來り、一度ならず二度ならず先生を音問れて遂に面會を得、一藩の困難を陳べて救濟の道を

に先生の道を行はんことをのみ求めけるにぞ、先生も勢の如何ともし難きを思はれ、一二邑に手を下して例の如くに廢れたるを擧げ、荒れたるを拓くの道を施し玉ひけるに、もとより先生の徳には歸きたる民なれば、其結果も早く擧りて德風の及ぶところ七十二村にまでわたりぬ。されども先生しば〳〵國本分度確立せしや否やを尋ねらるゝに、家老等は其は國家の大躰なれば容易に決すべきにあらずといふのみにて少しも埒明かず、遂に先生をして飄然と櫻町に歸らしむるに及べり。領民等は先生の去られし所以も行かれしところも知らねば、唯みづから誠意の足らざるを悔ひ居たりしが、櫻町に歸りたまひしよしを聞て、諸村の里正細民等わざ〳〵野州まで來り、衰邑興復の仕法を歎き願ふて止まねば、先生日夜敎ふるに修身齊家の大道をもつてし、日々數千言皆其人物に應じて諭さるゝに、至誠の敎誨に感激して寢食を忘れ涙を流すもあるにいたりぬ。此間先生の敎を會して故郷に歸り衰廢を擧ぐるものさへ少からず、先生つひにまた民を憐むの情止み難く、天保十年の冬野州を發し小田原に歸られけるが、翌年の春はまた野州に歸り給ひける。

其十二

小田原領内の民先生の德風に化し、七十二邑の民競つて業に勤め、辛苦を忍び、殊勝の行狀多かりければ、他邦の者さへ風を聞て感じ、奮つて起つもありけるとぞ。然るに弘化三年にいたり、如何

して飢民を救ふことを坐上の空論とせば何の時か決せんや。小生も斷食して此席に臨まん、各位もまた斷食し給へ。』と、雷の落つるが如く警め玉ひければ、流石に衆人迷を去り、即刻倉を開くことに同意しける。先生たゞちに坐を起つて倉廩に走り、早速藏を開け、と命ぜらるゝに守者また君命なければ開かずといふ。先生また、然らば我と共に斷食せよ、と大音に諭されけるにぞ遂に倉廩を開きける。先生すなはち苞數を點檢べ、運送の手配りを定め、終日終夜休み給はず、撫恤に心を盡されけるが、かゝるところへ鵜澤某來りて大久保侯逝去のよし告げ知らせけるに、先生此由を聞きたまひて大いに悲み歎き、『嗚呼我が道究せり、我此君に値遇してより十餘年來、千辛萬苦を盡せるに事半にも至らずして逝去し給ひては、以來誰と共に此民を安んぜんや。』と前後不覺に哭き玉ひしが、『いたづらに歎きて何か益せん。今飢饉にして民の死生の時なるに、豈怠りて濟むべきや。一刻も空費せず、君の意を躰して救ひ賑はさんのみ。』と、涕を拭きつゝ巡回し、及ぶたけの力を盡しければ、飢民の助に頼るもの四萬三百九十餘人、領內饑寒に死ぬもの無かりき。されば人民みな深く此恩を荷ふて、先生を慕ふこと父母を赤子の慕ふがごとし。

大久保侯逝去の後、小田原の老臣等先君の命を奉し、先生に請ふて領內に先生の仕法を行ひ玉はんとを求めければ、先生乃ち根本よりして分度を定め出入を籌るの大法を說き聞かせ玉ひけれども、老臣等其器にあらねば、其說を行ふに堪へず、兎角に云ひ紛らして根本の改革をなさず、たゞ實際

んとして果さず。治國安民の任を彼に托するに及ばずして、我命こゝに盡るといへど汝等志をつぎ心を合せ、我孫を補佐して二宮を擧げ、國家を安泰ならしむべし。』と、懇々と遺言して終に長逝したまひける。

先生は大久保侯の命を受くるや否や早くも小田原に至り、『君予をして窮民を救はしめんがため、手元金千兩を我に賜はり、米粟は小田原に於て藏を開きて用に當よと命じ給へり。速かに米庫を開かん。』と太夫等城詰のもの等救荒の評議區々なる所へ云ひ出したまひければ、諸士等一度は喜びまた一度は疑ひ『倉廩を開くべきよしの命令未だ我等に下らず。君命にあらずして廩を開かば後日の咎まぬかれ難し。此旨を早速江都に伺ひて其後命あらば開くべし。』なんど云ふものもあり。紛々として衆議決せず。先生其時聲を勵まし、『怪しかる人々の言葉かな。今民の命旦夕に迫り、君侯病苦をも忘れて之を救はんと憂ひ慮ひたまへり。然るに各位君のために圖りて忠に民のために圖りて仁なるべき職に在りながら、君意民情を外にして、咎を恐れ、空言空坐するとは何事ぞや。我來らずといへども、先倉廩をひらき、民の死を救ひ、然して後に君に告げ、自ら罪に服するも尚可ならずや。然るに我君命を傳ふるも尚疑ひて江都に伺はんなどゝは、餘りに手緩し。往返の間に民の死するものそれ若干なるべきや。されども各自身の罪を恐れて、民の死を顧みざるやうの覺悟にては我言ふとも無益なるべし。唯此評議決するまでは各位もまた斷食して民の飢苦を分ち給ふべし。飽食

を見玉ふより色を作して、『これ小生には不用のものなり。謹みて返上いたさむ。今數萬の國民飢渴に逼れり、遙に臣を呼び出して之を救ふことを命ぜられたれば、取るものも取りあへず出府いたせるなり。ひそかに思へるに、臣の來るや否や、如何にして民を救はむと問ひ玉ひ、臣に下すに米粟を以てせらるゝならむと。然るにかゝる物を賜はらむとは思ひもかけず。此禮服を寸斷して飢たる民に與ふるとも何の用にか立たんや。無益の賜を受けむこと思ひも寄らざることなり。』と曰ひたまへば、侯これを聞て、『我過てり、其物を二宮に與ふることなかれ。』と云ひ玉ひける。さてまた役所より、先生を招きければ先生『嗚呼われ今一時も早く小田原に行かんとするばかりなるに、我を役所に呼ぶものは我に祿位を與えんとするにてはあらざる歟。祿位を我一人受けたりとて民に何等の益あらんや。與へんとせば千石を與ゆべし。直に飢民に頒ち與へんのみ。』と恐るゝことなく至當の論を述べたまひけるに、侯またこれを聞給ひ、『二宮の云ふところ一々道理なり。祿位を與ふることとなかれ。今我が手元の金千兩を二宮に與へん。領民を助るための米粟は小田原の藏を開くべし。外に金をも與ふべし。』とて、一々其如く仕給ひければ、先生は直に小田原に行き玉ひける。

大久保侯病中二宮飢民救助のために小田原に行きしよし聞かれて、『金次郎我が言を承知せしか。病中の安心何か之に如むや。』と悦ばれけるが、それより日々に病重り行かれけるこそ是非なけれ。侯もみづから起たざることを覺り給ひ、辻吉野鵜澤三幣などいへるを枕邊に召され、『多年二宮を擧げ

其十一

天保七年の飢饉にあたり、駿河伊豆相摸の小田原領の民の困苦は最烈しく、草根を堀り樹皮を嚙むほどなりければ、小田原侯家臣をやりて先生を野州より召し出さんとし給ひけるに、先生肯ひ給はず、『今凶饑の時にあたり、此地の民を救はんとして寸隙さへ無きに、我を召し給ふとは何ぞや。尋問の事あらば君みづから來りたまふべし。』と答へられけるにぞ、使者は怫りて此旨返り言申しけるに、『我過れり。』事の仔細も告ずして呼び招かんとしたる故、其樣に答へしは道理なり。汝ふたゝび彼地にいたり、加賀守過ちたり、と二の宮に傳へ、且小田原領民飢渴に逼り居れば早く來りて飢民を救ひ、我が心勞を安めんことを賴む、と傳へ言ふべし。』と大久保侯の言ひたまへば、使者は復櫻町に行きて委細を傳へけるに、此度は先生命を奉じて、此地の憮恤終り次第彼地に立越えんよし答へ玉へば使者は悅び歸りける。君侯此事を聞き給ひ、大に悅んで群臣を召し、二宮の功あるは既に明白なれば之を賞する道なくてはあるべからず、祿若干を與へ用人格に取り立つべしと命ぜられける。先生野州の處置を終り直に出府せられしに、折しも君侯病發して上下ともに憂ひわづらひけるが、侯は二宮來りしよし聞て大に悅び給ひ、先づ是を賞せよと命ぜられ、いよ〳〵恩祿を下し給はらんとするの前日麻上下を賜はりけり。普通の者ならんには恩賜の禮服とて悅び受くべきに、先生は之

謹みて先生の教を請はんと切に願ひければ、先生やむを得ず諄々と君たるものゝ心得、用を節すべきこと、君を新にすべきこと、分度の大法等を說き聞かせ『國の貢稅十年の古帳を持ち來れ、我經濟の道を明かにし、再興の法を立てゝ與へん。』と云ひ玉ひければ、中村大に悅び、歸京して復命し、君の命により豐凶十年の租稅の簿書を持ちて再び櫻町に赴きける。

玄順ふたゝび來りければ、先生算者を集め、夜を日に繼ぎて既往の租稅を調べ、豐年凶年の平均をなし、其中を執つて出入の度を定め、盛衰の理を辯じ、餘財を生ずるの路を開き、民を安んじ、弊害の源を塞ぐの策を立て、數十日にして數卷の書を成し、此を中村に與へ玉ひければ、中村はまた此を持つて歸り、君公に一々先生の言を申しつぎけるに、兩君此書を熟覽し、いよ〱感歎景仰して、富國安民の仕法を先生に托されける。されども先生は義を堅く守りて、我は大久保侯の命にあらざれば動かず、と辭まれければ、細川侯つひに大久保侯に照會せられ、而して後再興の事を請はるゝこと益々切なり。是に於て先生は數年隨身修行せる大島某をやりて役夫數十人と共に常陸の國谷田部下野國茂木兩所に行かしめ、德を布き農を勸め、盛んに再興の道を行はせられければ、人民大に悅び元氣振ひ興り、分度外に米粟千五百苞を出すやうになり、負債を返濟し得ること數萬金に及びけるとぞ。

玄順の君細川侯は既に六十を越え給へど子なくして有馬侯の次子辰十郎と呼ばせらるゝを養子とせられけるが、養君英才ありて、國家の衰へ上下の困めるを憂ひ給ひ、或時玄順に對つて、『我有馬の家に生長して困難の何物たるも知らざりしが、此家に來るに及びて、負債山の如く、領民貧賤にして、上下ともに困しめるを知りぬ。汝若し思ひよることもあらば試みに之を救ふの法を云へ。』と、命ぜられければ、玄順乃ち平伏して、『衰へたるを擧げ、貧しきを振はんこと、非常の人物にあらざれば能せざるところなり。我等ごとき愚人の到底及ぶべくもあらねど、斯に一箇の俊傑ありて二宮金次郎といふ。君此人を用ゐ給はゞ或は十分其功を奏せん。元小田原の近在より出で、德あり智ありて能く事を成し風を化す。小田原侯擧げ用ゐて櫻町の開拓を托せられしに數年にして功業成りぬ。私におもふに此人を用ゐ給ふに若くことあらじ。』と言上しければ、辰十郎君大に悦び給ひ、たゞちに玄順を二宮の許に遣されけるが、先生此時は既に櫻町に歸り給ひたる後なりければ、玄順空しく歸りて此由を申しけるに、侯もまた辰十郎君より聞き及ばれて二宮を賴もしく思はれたる故、野州まで私に行きて是非に二宮の敎を受け來れとの命なり。玄順よつて延の地藏に行く躰をなし、君命を含みて櫻町に至りける。

玄順櫻町にいたりて先生に見え、細川家疲弊の事、領内困苦の事、養君および老侯仁心の事、群臣の異議を再興の業に挾まむ虞あること、君家の債既に十萬金餘なることなどを一々具に言ひ出で、

とぞ。是皆先生の餘光なりといふべし。君子の德は蘭の如し、接するものをして衣袂おのづから香ばしからしむ。とは、それ先生の如きを云ふ乎。

其十

支家細川侯の藩醫に中村玄順といふものあり。性質小知にして辯才あれど、業拙くして經濟の道に暗く、相應の扶持を受けながら漸々に借債をなし、遂に積て二十五金餘となり、如何ともなし難きにいたりしに、二宮先生なる人ありて常に無利息金を貸し、人の艱難を救ふよしを聞き、當時江都西の久保宇津家の邸に先生の居られしを幸とし、直に西の久保にいたり、横山といふものに頼りて面謁を請ひけるが、先生これに逢ひたまはず、玄順來ること再三に及びて余義なく横山の爲に逢ひ給ひけるに、中村大に悦び、二十五金恩借の事を云ひ出ける。先生顏色を正しくして『人臣の道は自己の身を致し心を盡して君のためにすべきのみ。君家の事は口にもいださず、一己の安心を求めんとて態々我を煩はすとは心得難き事なり。求めらるゝ金員は僅に二十五金に過ぎずとも、其志望我が心に反すれば請に應じがたし。ふたゝび來るなかれ。』と、云はれければ、玄順少時は答も得爲ざりしが、良久くして自ら謝し、『先生の言によりて我が過失を悟りぬ。以後も何卒敎導を惜み給はざらむことを願ふ。』とて立ち歸りける。

仰のごとく行はん、とて大磯に歸りしが、先生の前に在りし時は鄙しき心の起らざりしといへども、家に歸りて考ふれば、今さら五百金を捨つることの惜きやう思はれて、流石に決斷しかねたれば、浦賀の二人は、一同家に歸りて他の緣者とも相談なせし上決すべしとて浦賀をさして歸る途中、鎌倉にて日暮れ雨烈しくなり、已むを得ずして豫て歸依せる某寺に至りけるが、其寺の和尙湛海とて其頃に秀れたる人、今二人の日暮に及びて來りしを見て、何故に今頃此所へ來りしや、と問ひけるに、二人は如斯の仔細にて歸家する序なりと答へたり。其時和尙感歎して言を正し、『二宮先生の言實に至理といふべし。然るに汝等は善を聞いて進むあたはず、鄙しき狐疑の心を懷き家に歸りて相談せんとは抑々何たる事ぞ。速かに決斷して道を行ふべし。今宵の一宿は我汝のためを思ふて謝絕るなり。早く〳〵善に進め。何の遑あつてか汝等雨を厭ひ夜を厭はむ。』と激しく敎へ諭しけゝ。二人はいよ〳〵驚き畏れ、家に歸りて親戚にも告げ、ふたゝび大磯にいたりて孫右衞門にも和尙の語を告げ、遂に一器一物も殘さず賣り鬻ぎて、驛の長たるものに五百金を預けゝれば、衆人も却つて愧ぢ悔い、是より積年の怨恨互に解けて、驛人も孫右衞門を從來の如くには思はず、孫右衞門も大に悅び、節儉を守り、困苦を辭せず、非道の利を貪らず商買して叉、相應に貯蓄も出來たり。其後官より、大磯驛引立の策もあらば各自封書をもつて申し出よとの命ありし時、孫右衞門また先生の命を奉じて、許多の財を出しければ、孫右衞門一度は牢舍にも入りしが遂に褒詞をさへ賜りける

身を艱苦の地に置き、他人に安樂を分たんとするときは、自然に一家も再興すべし』と敎へ諭したまひければ、孫右衛門等大によろこび、切に敎に隨はんと請ふとき、先生『孫右衛門の家破れ餘財も燒亡したりとて、舊年の富商たれば殘れるものなきにあらじ。其を集むれば何程の價となるや。』と問ひたまふ。『されば悉皆集めなば猶五百金はあるべしと存ず。』と答ふ。『よし、其五百金を家に置くときは禍災の種子猶殘れるなり。速かに之を去るべし。餘財は汝の家の毒なり。元來汝が家に大災を來せるも皆其財のためなれば、若し其餘財を去るあたはずば、禍災なほも此上に來りて、必ず汝の家亡びん。』と說き給ふ道理は炳然なれど、慾にくらめる孫右衛門等は、五百金をも猶不足として無利息の金を先生より借らむなんどいへる野心のありしところへ、餘財をさへ去れとの言葉に、心中はなはだ惑ひを生じ、默然として答なし。先生また『我が敎ふるところは君子の道にして、小人の忌むところなり。餘財を去れよとて河海に捨よといふにはあらず。我が不肖をば自ら責めて、五百金を驛內の貧苦を救はんために差し出し、何になりとも此金を宜しく計ひ給ふべし、と云はゞ、其所に汝の禍災の根は拔くるべし。さて汝はかねて船をもつて江都に通船し運賃を取れるよしなれば其にて命を繫ぎ、十分慾を抑へ身を屈し、艱難困苦を甘んずべし。其所に汝の幸福の芽は萌すべし。若し又一切我が言の如くして、猶驛人等汝を憎み汝の家ます〱危からば、我速かに五百金を與ふべし。かならずともに憂ふるなかれ。』と敎へたまふ。四人は夢の覺めたるごとく驚き悟りて、

もに小八が走り至りて、頻りに歸りたまはんことを願へど先生なかなか許し給はず、其まゝ止まり給ふこと數日に及びぬ。されば幸内是非なく小八にも仔細を語り、共に靜に孫右衞門の歎願を云ひ出けれども、先生急に許し給はず、數日を經て其請ふこと切なるを察し給ひ、已むを得ずして四人を呼び入れ、『汝等我が業の妨をなすべからず。我は小田原侯の命にて爲すべき業を有ち居れば汝等が願ひは知るところにあらず。』と大鐘を撞くごとき聲にて云ひ放ちたまへば四人は畏れて聲も出し得ず。頓て宗兵衞にだり出て、低頭平身して切に孫右衞門一家を回復するの道を教へたまへと、しきりに乞ふてやまざるにぞ、先生また聲を勵まし、『孫右衞門は自己の罪を知らずして他を恨むの色あり。其妹は予が一言をきゝ兄のために艱苦を盡せるに、本人たるもの一婦人にも如かず、我意を張つて、他の力を假り、怨みに怨みを報ひんとするとは言語道斷なり。我は身を勞して諸人のために荒れたるを拓き乏しきを救はんとす。汝は非を飾り他を苦しめんとす。其道相反すれば、速かに歸りて汝は汝の滅亡の道を行へ、何ぞ我道を妨ぐるに及ばむや』。と言ひ給へば、孫右衞門汗を流し涕をたれ、宗兵衞とゝもに慈仁の敎を請ふに、先生やうやく面を和らげ、『物すべて免かるべからざる道理あり。汝が家不德にして富みたるが故に終に彼の如き報を得たるなり。然るに汝の愚蒙なるは、みづから瓜を植て瓜の實れるを怒るごとく、罪を他に歸して自己を顧みることを知らず。嗚呼一家回復の道を我に求むるとも、道は汝の心にありて他にあらず、若し我が非を知り天の道を敬し、一

にても貸し玉はるべし。』と云ひけれど、孫右衞門も浦賀の二人も己が賤しき心に較べて、世に大人のあるを知らず、疑ひおもふばかりなりしが、其年小田原侯の命にて先生櫻町より相州足柄上郡竹松村に來り給ひ、貧邑再興の道を行はせらるゝに會し、大磯より僅に十里に足らざるところなれば、危ぶみながらも試みんと孫右衞門等四人は先生の居給ふ竹松村の里正が家に至りけり。やゝ日も暮るゝ頃に四人は竹松村に到着して、里正の幸内といふに面會し、一家回復の良法を求めんがためにわざ〳〵來れるよしなど云ひ出けるを、浴室にありて聞かれたる先生は、彼孫右衞門なるもの容易に道に入るべきにあらず、今來りしはそも何をか我に求めんとするなるや、とて直に浴室より脱け出で、二里餘も隔りたる新田村の小八といふものゝ方に眞夜中頃に至り給ひ、遂に一泊せられけるが、斯とも知らず幸内は、餘り先生の入浴長きをあやしみ、浴室にいたりて見れば影も形も無し。是はと各自おどろき近傍を搜し索むれども先生の在るところを知り得ねば、空しく心を騷がすのみなり。幸内は、『是は必ず孫右衞門の來れるを察し給ひて他村に行かれしならむ。』と云へば、これを聞きて孫右衞門等四人は愕然として大に愧ぢ、我等眞實は先生を試みんとして上面をつくろひ來りしに、早くも虛僞なることを察して去り給へるか、あな畏ろしと歎息なしつ、それより先生の行狀なんどを幸内に問ひたづぬるに、自己等が鄙恪き心に比較べては雲泥なるにます〳〵愧ぢ、懺悔の心を生じけり。明れば幸内人を四方に馳せ、やうやく小八の家に居給ふよしを聞き知り、四人とゝ

願ふべしと。」而して汝の妻此事を能く爲し得ば、或は孫右衛門が迷を開き心を飜へすの初めとなりて、天の眷顧も其所に降り、災禍も其所より漸く盡くるに至らむ。これ一粒の種子も之を蒔きて時を經ば、大にして多きものとなるべし。幺微なりといへども人の誠心一旦感發する時は天をも感ずるに至るべし。』と說き諭し玉へば宗兵衛厚く謝し、感じ悦びて家に歸り、委細を妻に物語るに、妻も眞實の道理に感じ、それより惡衣惡食して自ら兄の悲みを分ち、生家より持ち來りし物をも皆賣り代なして生家回復の一助となしける。宗兵衛の兄芳助といふ者、獄にいたりて竊に先生の說、妹の行ひ等を孫右衛門に告げければ、流石の孫右衛門自然に慚愧の心を生じ、不覺の涙に我慾の汚穢いつとなく洗ひ去られ、其時よりして、身の罪を悟り他を恨むる念も薄らぎ、朝夕我身が惡かりしと獨言さへ殊勝になれば、官にても孫右衛門を放し玉ひけり。孫右衛門免されて家に歸り、見れば母を失ふて泣き悲む二人の兒、歎息しつゝ其後の有樣を告ぐる番頭夫婦、見るもの聞くもの悲からざるはなく、是も誰故驛人等が故とおもへば無念さ遣る方なく、一旦自己の惡きを悟りしも又もや人を恨む念強くなり、死せる妻の親及び其緣者の浦賀にあるを訪ひ音問れ、三人寄りて恨を報ひ家を興さむことを謀れば、宗兵衛はあさましき人々が心かなと歎き悲しみ、何卒邪徑に孫右衛門を墮落せしめまじと遂に計略を設け、『二宮先生といふ方あり、斯く〳〵の行ひある君子にして、智慧明かに仁慈深き俊傑にて坐せば、仔細を打ち明け一向に歎き願はゞ再興の資金として千兩程は無利息

遺して、世を怨みつゝ亡くなりける。此由を牢の中にて聞きたる孫右衛門憤悶ますく甚だしく、『我やがて此牢舍をば出て後、恨みの重なる驛人めらに恨みを復さで置くべきや。妻の死せるも誰が爲ぞ。』と涙を流して狂ひ悶ゆれば、官にては倘許したまはず、入獄の間三年にさへなりにけり。孫右衛門の妹の夫宗兵衛といふものは豫て先生の敎を聞きしことありしが、川崎屋の不幸も餘りといへば重なり重なりするに、如何とかして救はむとすれど其道なく、遂に櫻町まで來りて仔細を陳べ、何卒孫右衛門を救ひ玉はれ、と歎き願ひければ、先生つくぐ歎じて云はるゝやう、『瓜を種えて茄子はならず。左程の禍災其種子無くてはあるべからず。思ふに孫右衛門の家に來るべき禍害の根元かならず深く遠く、人力に及ばざるまで免れ難き宿因あるなるべし。容易もつて彼が苦を救ひ禍を轉ぜんこと知慧分別の及ぶところにあらず。』と少時は言葉も無くて居られしかば、宗兵衛猶も悲み歎き、再三再四敎を請ひ、一身の力あるだけを盡しても孫右衛門を救はんとおもふ由を陳べければ、先生其情を憫み玉ひ、『孫右衛門が心改まらぬ以上は彼の禍災を拔き難し。それ禍災は不善の報なり。此故に彼を救はむとせば先づ其根本なる心の持ち方より改めさせねばならず。今こゝに唯一つの道あり。汝の妻となり居る孫右衛門の妹に汝能く諭し聞かすべし。「生家の廢亡は最早遠からず、汝之を救はんとせばつくぐと兄の牢中の苦を想ひやりて、悲酸を共にし悶愁を分つの覺悟を抱き、麁食を食ひ惡衣を着し、生家より持ち來りし衣類器物を盡く賣り代なし、一心に生家の回復を祈り

三度四度と同じ答をきゝし末は憤りを生じ、『平生より吝嗇にして義理を知らぬ孫右衛門め。江戸に行きしといふも恐くは却つて自己が利得を圖らんがためなるべし。强慾の報思ひ知らせて呉んずもの』と、一人云へば十人應じ、十人唱ふれば百人和し、日頃より川崎屋を快からず思へるものども數百人黨をなして、手に／＼鋤鍬鳶口など持ち、一時に亂れ入りながら、怨恨の件々呼はりつゝ壁を崩し柱を曳き倒し、金銀家財を散らし撒き、十分無法を働きて勝鬨をあげ引き去りける。孫右衛門が妻も子も番頭も抵抗ふどころか僅に逃れて、懼れ悲むばかりなり。孫右衛門は何事の有りしとも知らず歸り來て見れば、我家は壞され器財金銀は譯も分らず爲されたるに、一度は呆れ終には怒りて、『憎き驛人等が擧動かな。此返報見せずには置かじ。』と恨みけるが、此事早くも官に聞えて吏員來り、驛人等を諭し又戒め、其上孫右衛門を捕へて禁獄し、『汝豪富の身をもつて卑悋の心强く、慈悲一點も無き故に驛人の怒りをひき、奇怪なる騷動を起させたり。』と散々に責め諭しければ、孫右衛門ますます口惜しくおもひ、種々事情を述べて我が惡からぬ由をいへど容易に許されずして牢内に置かれけり。不幸も續くものにて風烈しき夜、驛内に火事起り、無殘にも孫右衛門が家は破されしが上に又燒け亡せければ、妻の歎きは一方ならず、家は壞され夫は牢舍にあり、其のみならず火災にさへ逢ふとは何事ぞや、とまだ幼稚なる二人の子を搔き抱きては愁へ口說を、番頭夫婦も慰めかれしが遂にそれより病を生じ、日増に重りて回復せず、枕元にてよゝと泣く二人の小兒を後に

廢し負債を生じ、人氣は衰へ貢稅も減するやうなりけり。されど年を經て烏山侯自ら悔ひ玉ひ、先生の言に從ひて菅谷を召し返し、再び回復を圖られけるに、弘化の頃菅谷病にて沒しければ遂に烏山再興の道は絕えけることそ口惜けれ。

其九

こゝにまた東海道大磯驛に川崎屋孫右衞門といふものあり。穀物の賣買を營業として豪富と人に云はるゝほどの身なるに、ひたすら利潤を取ることをのみ考へて吝嗇なること甚しく、貧賤を憫れむ心など少しもなかりければ、世間不通用といふ廉にて仙台通寶といふ諢名さへ負はせられ居けるが、天保七年の不作は何處も異らず、大磯にても驛中の貧しきもの等は餓ゑて死なむばかりに窘みけるに、孫右衞門は早くより金錢米穀を散じて之を救はんともせず、たゞ世間の豪富等が各自應分に財を出し施し救ふを見て、內心は一粒一錢たりとも費すは厭はしくおもへど是非なくも江都に出で、米麥の價値など聞き合はせ、價を廉くして我は賣らんか、但は施さんかなんどゝ思案に暮れ居けるが、大磯の貧民どもは斯と知らねば、己等が活路なきまゝ救ひを求めんと孫右衞門が留守宅に押し寄せ、番頭に逼りて施與をせよと云ひ込みけり。番頭は主人たゞ今これ〳〵にて江戸に行き居り不在なれば少時待ち玉へ、とことわりを云へど、饑渴に迫りしもの等は心さへ自然荒び居れば、

るとは知らて人々は、『殺生は佛の戒め給ふところなるに、僧侶の身として魚を漁ること、あるまじき行なり。』とて譏りけれども圓應少も省ず、『我は民を救ひ給ふ先生に此鮎を供養せんとするのみ。』といひて、僕に漁りたる鮎を荷はせ、自ら櫻町に行けば、路行く者等これを見て、奇怪なる和尙かな、と罵るもあれど、一向耳にも入れず、先生のところに至りて鮎を呈しければ、先生悅びて之を食し給ひけり。かくて圓應一二日櫻町にありて默然たりしが、卒然として暇乞ひなし、歸らむとするほどに、先生は、『和尙いたづらに此所まで來りしにはあらざるべきに、何一ツ聞く事もなくて歸るは如何なる故か。』と問はれけるに、圓應謹みて、『初め來りし時は思慮の當否伺はんとて參りしが、先生の傍に侍ること二日にて悉皆了りたれば、今は別に尋ね申して先生を煩はすに足らず、烏山の所置既に決れり。』といひて歸りければ、先生も感歎せられて、彼僧のやうなるは復得がたし、と褒められける。圓應は歸りてより屢鮎を漁り、殘らず賣りては銀に代へ、安民仕法の入用の中に入れけるとなん。

圓應は其後菅谷と共に相州厚木領に先生の良法を布かんとて行きしが、流行病を二人ともに得て歸り、菅谷は助かりけれど圓應は果敢なく病の爲に世を逝りぬ。先生之を聞いて深く圓應の死を悲み、『菅谷一人となりては烏山折角回復に向ひたれど此後如何なるべき。』と愁ひ歎かれけるが、果して其後菅谷は讒者のために追ひ却けられ、德足らざりしかば道を守ること成らず、烏山また良法を

天保七年は諸國共に米穀實らず、士民大に苦みて或は草の根を食ひ木の皮を食ふほどなりければ、途に飢て倒るゝものもありし位にて、烏山の領内の民も飢渴に苦しみ、遂には一揆を起して市中の富家を脅かし、動搖すること夥しく、城中の群臣等之を聞きて、若も彼等城内に亂入するなどの事あらば、是非に及ばず大砲にて打ち拂はんなど評議するほど騷ぎたちしが、小田原侯よりは、『烏山は親族なれば救ふべき道あらば救へよ。』と二宮先生に命ありければ、先生即ち二千餘兩の米粟を櫻町より送り玉ふに十里の間烏山まで人馬絡繹として斷えざれば見る者驚かずといふとなし。かくて天性寺の境内に十一棟の小屋をしつらひ、領内の飢民に粥を焚て與ふるにぞ、數千の人民惠みの露に渴き枯れたる喉を癒して、生命を助かり騷動も止みぬ。圓應和尚は大に悦び、日も夜も一切夢中にて撫恤に心を盡しけるが、是より烏山の君臣とにも深く二宮先生を尊み、侯は素より太夫小吏に至るまで一致して、何卒烏山の疲弊を救ひて長く安泰ならしめ給へ、と一向賴み聞えけるに、先生則ち節儉勤勉の道を說き、興復の仕法を授けられしが、果して一兩年にして廢地の開けること二百二十四町、出粟二千苞に及びける。これ皆先生が寬仁至誠よりして德風に烏山の君臣上下を薰染せられしよりなりけり。

圓應は深く先生の德を仰ぎ行に服し、先生の仕法より他に安民の道あるなし、と信じて、菅谷と力を協せ、切りに心を盡しけり。或時圓應みづから川に入りて網を張り鮎を取りければ、深き心のあ

ば、國亂れて民安んぜざるは固よりなり。汝みだりに僧の身として國君の道を奪はんとするや。荒地を與し民を救ふは君の道なり。説教祈禱なんどこそ法師の爲すべきことなれ。汝の志不善にはあらずとも、爲すべきことを誤れり。汝民農夫の饑渇を悲まば何ぞ國君に告げざるや。我が門前に死せんとするより、何ぞ汝の寺の中にて汝の道に死せざるや。汝は汝の道を誤り國君は國君の道を誤るやうにては、民の苦み何時か免れん。疾く〳〵歸つて汝は汝の道を行へ、疾く行け。』と、天地に響く大音にて理非明白に示し玉へば、剛直の圓應自ら非を飾ることなく、頭を垂れて默然たりしが、坐を立ち玉ふ先生の陰を拜して感激し、我が過失を謝し歸りける。

圓應歸りて委細を菅谷に傳へければ、菅谷聞てます〳〵感じ、遂に其君に言上して君よりの書狀を請ひ、直に櫻町に至り君命を述べ、直書を出して頻に領內の民を救はむことを求めけるに、先生歎じて云はるゝやう、烏山侯仁心深くして飢民を救はんことを求め玉ふとも、我が預るべきことにあらねば是非もなし。されど我が主君小田原侯の緣者にて御坐せば、烏山侯より我が主君に申し込まるべし。小生よりも言上せん。其上にて烏山の民救ふべし、と我が主君より命あらば、其時小生力を盡さむ。さりながら此順序を踏むには日數かゝるべし。其間の切逼を救ふに此をもつてせらるべし。』と二百金を菅谷に與へ玉ひければ、上下必逼して一金の融通さへ絕えたる饑饉の際、一面會の好にて直に二百金を與へられたるに菅谷茫然と夢路をたどりて歸りける。

圓應は獨行して櫻町に來り、先生に對面せんと申し込みしに、先生人をして『佛者は佛者の道あるべし。我は今たゞ廢邑を興し民を安ぜんとするのみなり。出家に逢ふて談話など爲る閑なし。』と謝絶らせ玉ひけるが、圓應は泰然として退かず、『我出家なりとて其志は民を憫み救んとするのみ。今烏山の、民饑渇に逼りしにより見るに忍びずして玆に來り先生の敎を請ひ救はんとするに、先生對面を許し玉ばずとて空に歸るべきや。』と云ひければ、取次の者此言を先生に傳へけるに、先生尙取り上げ玉はず、『烏山の民の安否は其君のあづかるところなり。』と打ち捨て置き玉へば、圓應これを聞きて、陣屋の門前の芝原が上に寂然と端坐し、『我進退は烏山の民一同の死活にかゝれり。先生に逢ふて道を聞くことを得ずんば今はた何とかなすべき。我先生に逢ふことを得ずんば死すとも歸らじ。此處一寸も動きはせじ。よし飢死して民の死に先だゝん。』と、袈裟衣は霧塵に垢れ、餓は漸く逼れども、厭はす萎まず、一心に民を救はんばかりにて、鴉は塒に歸れど歸らず日暮れ夜更くれど石もて削りなせる羅漢の如く坐り込みける。翌日にいたりても猶去らねば見る人驚き、此由を先生に告げゝるに、先生怒りて『怪しからぬ法師かな、此所に引き來れ。』と命ぜらるれば、圓應やがて先生の前に來りぬ。

先生其時聲を勵まし、堂々として說き玉ふやう、『汝誤れり。人各々職分あり。領主は領主の職務、臣下は臣下の道あり。僧は僧の道あるべし。領主の務めを僧行ひ、臣下の道を領主の行ひなどなさ

方案を授け、遂に其所をも繁昌のところとせられぬ。

其八

こゝに野州烏山の大久保侯の領地、風俗惡しく民遊惰にて、漸く衰へ行き、戸數も減じ荒蕪地のみ多くなり、上下ともに困難の折柄、侯の菩提寺天性寺の和尙に圓應といふものあり、性質剛くして學問に暗からず、佛の道も畢竟は苦を拔き樂を與ふるより他なきを悟り居れば、いたづらに經を讀み香を拈ることのみをせず、弱きを憐む心盛んなるより、農家の日に〳〵衰微し行くを見るに忍びず、自ら得たる淨財を散じて、他所よりも流民を招き領内の民をも諭し勸め敎へ勵まし、許多の荒地を開きて田となし畠となし、國のためまた民のため心を盡して計りしが、天保七年に至りて饑饉起り、農夫等が難義すること一方ならず、圓應奮つて飢渴を救ひやらむとすれども到底もつて力およばず、折角爲し來りし事業も敢果なく水の泡と消へ、百日の功一時に廢れんとする有樣となりければ、大いに憂ひ悲みけるに、芳賀郡櫻町の衰廢を二宮金次郎といふ豪傑ありて再興に着手しより以來既に十年、頗る回復せりとの噂を聞き、家老の菅谷といふものに相談なし、共に行かむと云ひけるに、菅谷も豫て先生の噂を聞き知り居れば、『噂の如くならば二宮先生は當世の俊傑なるべし、今烏山領中民を撫育するの道さへ立たず、和尙其道を得ば告げ知らせたまはれ。』と云ふ。それより

『不埒千萬他の便所を何故破せるや。』と罵るにぞ、僕は謝罪て、『小生は二宮の僕にして、某の家へ使に行く途中斯く〳〵の始末にて。』と、其仔細を語れど一向赦さず、ます〳〵怒りて、『二宮の僕ならば尚さら赦さじ。汝たゞ其儘に置くべきや。』と六尺棒追取りて打擲かむとすれば、僕は驚き逃げ歸るを、逃さじものと追ひかくる勢すさまじく、仲裁する人ありといへど少しも聽かず打たんとするに、先生仔細を聞き玉ひて悠然として立出玉ひ、怒氣盛んなる某に向ひ、『微に觸れて倒るゝほどの便所ならば、便所のみ其如く脆きにあらずして本屋も定めし破損して居るなるべし。便所は固より普請し得させん。其序をもつて本屋までも新に作りて與らん。然すれば我僕に恨なきのみならで我僕の粗忽せし緣にて幸福を汝の得ることとなれば、我僕もまた汝には恩人ならむ。』と云ひたまひければ、某も流石に愧ぢて家に歸りけるが、先生虚言は云ひ玉はず、果して立派に家を作りて與へられければ、無賴の某も且つ驚き且つ感じ、先生の慈愛弘大なるに動されて、自ら愧ぢ悔ひ、酒も博奕も止め、農業に心をつくす良民と化りける。これを見聞くもの皆先生の寬仁なるに服し、櫻町の惡風漸く變じ行きて善に傾き初めける。

常陸の國眞壁郡青木村といふところも其頃次第〳〵に衰へ行き、何とも爲べきやうなくなりしが、二宮先生の櫻町に居たまひて三年ばかりが程に、荒れ果たる三ヶ村を回復し玉ひし由を聞き、其所の地頭里正など先生の回復の方法を求むることいと切なりければ、先生能く敎へ能く導きて回復の

る一人の役夫は終日木の根をのみ掘りて切りに勸め、他の人の如く荒地鋤きかへさんともせざりしに、其物井邑の開墾成就せる時、他邦より來りし役夫等を歸村せしめらるゝに臨み、先生其老夫に十五金を賞與せられ、『汝の數月の骨折を見るに、他は功名の顯れやすき地をのみ撰みて鍬を把り犂を動せど、汝は自ら年老て力も足らねばと謙遜りて休息もせざる上、勞働の結果も眼につかぬ木根掘りを事とし力を盡せること眞に廉潔なる心掛なり。今與ふる財は天より汝の心掛を賞して賜はるものと心得、遠慮なく納るべし。』と機嫌よく賞めたまひければ老夫は涙を流して先生の惠み深きを悅び、衆人は先生が虛僞と正直とを明かに洞察し玉ひて、其上善を賞し僞を誡め玉ふ心の深きに感じける。

其七

先生物井村の農夫某の心を改めしめ玉ひし話あり。或時先生の僕、命を受けて或家へ使に行ける途中にて、下痢かなんぞの氣味にてもありしものか、急に厠を尋ねしところ、柱ゆがみ、壁の代りに薦の垂れあるほどの破れかゝりの厠ありけるに、周章しまゝ衝と走り入らんとして、倒れむとせるを僅に支へありたる竹竿に觸れければ、固より倒るべかりし厠のことなれば、たちまち傾き覆りぬ。家の主人は大酒飲みにて博奕好きの怠惰者、心良からぬ男なれば此樣を見るより大きに怒り、

れども直きものゝ負くる所以なく、先生大久保侯に召さるゝに及びて、明かに其仔細を述べければ、理非明白に知れわたり、侯は却つて讒言せしもの等を罪せんとし玉ひけるに、先生また其をとゞめ、『讒言にはあらず、彼等も忠義を盡さんとせしは同じことなれど、唯、思ひ誤りたるばかりなるべし。』と、とりなしければ、此事を聞て吏員等は大きに驚き自ら耻ぢ、深く先生の寛仁なるに敬服しける。明けても暮ても先生は唯一心に小田原侯の囑をはたし櫻町興復せんとばかりにて、露ほども他の念をさしはさまず、役夫等よりも早く出で役夫等よりも遲く歸家て、勤るものを擧げ賞し怠るものを勵まして監督すこしも誤らず、切りに事に勤められけるが、先生と共に人夫を指揮する吏どもは、固より心を持することの深く慮を回らすことの密なるといふ人にもあらねば、或時一人の役夫が汗を流して鍬を揮ひ必死となりて働くを見て、かゝる者をば定めて先生の賞し玉ふならん、と淺薄にも思ひ居りけるに、先生は其様子を見玉ひて賞詞さへ玉はらざる上、遂に聲を勵まして『汝我を欺かんとして其様に眼の前ばかりにて激烈く働くとは不屈至極の者なり。汝終日其如く働き得るものならば我爰にありて試して見ん』と明かに洞視して其正直ならざるを責められければ、役夫は驚き恐れ入りける。『さても怪しからぬ者め。汝の如き不正直の者あれば大きに他の者までも表面のみ繕ふ惰夫となるなり。人を瞞かんとするものは我容さじ。』と倘散々に叱り懲し玉ひければ、一同、『先生の思ひ玉ふところは我等が淺薄なる考慮とは格別のものなり。』と感じける。また年老いた

其六

櫻町の陣屋といふは、屋根破れはて壁くづれ、ぼう〳〵として生ひ茂れる雜草軒の下を埋め、狐狸の巣となりて見るもいぶせき有樣なれど、先生これを毫も厭はず、草を刈り拂ひ大破を繕ひて其所に住み、日の出るより日の入るまで何日も休まず巡り行き、人民の善惡、農事の勤惰、地の質、水の便、田圃の界など皆こと〴〵く見極め玉ひければ、遂には四千石の土地一寸あまさず胸に納めて明かに知らずといふことなし。かくて善を賞し惡を諭し荒蕪を拓くことを教へて、自身木綿の手織布着て、味噌を嘗め、冷飯を喫ひ、千辛萬苦を事ともせず、まづ第一に百姓等が摸範と我身をなして切りに勤め勵み玉ひける。そも〳〵先生の開拓の法は、天地開闢の初に鑑み、人事進步の理に照らし、まづ一反を開いて一石を得れば、其半をば耕作の用に充て、餘りの半を來年の開田料とし、毎年毎年其如くして幾萬町の荒地も開くべき筋立なるが、櫻町といふところの民、殊の外の惡しきもの共にて、枯木の如く頑固なる心には惠みの露の恩も感ぜず、いたづらに理屈張り狡猾して惰懶ることとのみ能く知れる輩なれば、容易に先生の行を學ばざるのみか、却つて正しき人を忌み嫌ひ、さま〴〵に先生の業をさまたげゝる。折しも豫て先生の業を助けに小田原より出張し來れる吏員ども、先生の深き心を悟らで人民と先生と思へるところの違へるを見、大久保侯に讒言しけり。さ

田を開きて其産米一石あらんに、五斗を食とし五斗を來年の開拓の手當となし、年々その如く爲し行かむに、何億萬畝の荒地を開くも他の財要るべき筈の無し。我が日本國皆すべて最初は荒地に異ならざるに、斯く開けしも異國より財を注れての故にはあらず、宇津家の采分四千石とは興復の後にも化ならねど二千石には必ずなるべし。』と、滔々利害を明かに述べて答をなしたりけり。これを聞きて侯は喜び、『一切汝に任さんほどに、勤め勵みて我が爲に荒蕪を開き民を安ぜよ。』と命じ玉ひければ、先生遂に命を受け玉ひけり。

先生つく〴〵思はるゝやう、我一苞の米を種とし、やうやく廢れし家を起して僅に祖先を辱しむるを免れしが、今君公に見出され櫻町再興の大事を命ぜられぬ。君命を全くせんとすれば家を顧るに遑なきは勿論の事、さすれば折角興しし家のまたもや破るゝは目前にあり。家を大切となさば櫻町回復のことは覺束なかるべし。如何はせんと考へ玉ひしが、我が一家を全せんとして櫻町の數百家を廢すると、數百家を全くせんとして一家を廢すると固より同日の論にはあらず。よし、我心決するところあり。と考へ定め、祖先が墓にも我妻にも仔細を告げて、家をも振り捨て身命を抛ち、是非に櫻町回復せんと、今年わづかに三歳なる彌太郎といふ一子を引きつれ、道具も田圃も財にして、故鄕を立出で遙々と下野國芳賀郡櫻町へぞ着きにける。

て衰へ行き、宇津家の難義も一方ならざりき。されば大久保侯之を憂ひて、群臣の中より器量あるものを撰びては少からぬ入費をかけ、回復の成功を期し玉ふに、一度其地に臨めば奸民に欺かるゝもあり、處置度を失ひて他國へ走るもあり、罪を得るもの數人に及びて、誰一人すゝんで櫻町興復を擔當んといふものなし。大久保侯二宮を此難地に臨ましめんと思ひつかれ、乃ち命を下して先生に此事を任ぜられしが、『我は農具を把て田圃に立つことを知るばかりなり。里を興し民を安んずることなど中々に及ばず。君命重ければとて身を省れば御請申し難し。』と先生答へられければ、使者も是非なく其通り復命するに、大久保侯ますます禮を厚くし、幾度となく命を下し玉へど、先生は唯一心に我が業を勵み玉ふのみにて固辭する三年に及べるに、侯もまた懇命を下さるゝこと三年猶やまず。是に於て先生遂に心を決するところありて、文久四年先生三十五歳の時先櫻町を觀に行きて後、歸りて侯に言上するやう、『櫻町は地瘠せ民惰り衰廢もまた甚しといへども、輕薄の人情を改め田圃の耕耘を怠らずば、興復の望み無きにあらず。されども其興復の用度何程と定め難きに、君前々は土地興復を命ぜらるゝごとに許多の財を下し玉へるが故其事成らず、以後は一金も下し玉ふなかれ。』と諤々として飾り無く云ひ放てば、侯は不審の眉を皺め、『財を下してさへ興復の出來ぬものを財も用ゐず功を擧るの道ありや。』と問はせ玉ふ、『さればなり、財を下し玉はゞ里正村民互に其を爭ふのみにて人情愈々惡しくならんのみ。荒蕪を開くには荒蕪の力を用ゐるべし。假令ば一段の荒

らぬやう以來は千石を永年の分限と定め、三百石を餘分として別途に備へ置かるべし。然すれば長く貧窮となる憂なかるべし。』と教へて後席を退き、奴婢共を呼びあつめて、『汝等五年の間約束たがへず我が指揮に隨ひ辛苦を忍びし故に今是の如くの次第なり。就ては汝等の忠義を賞し此を分ち與へん。是我が與ふるにはあらず主人の恩賜なれば謹みて受けよ。』と、我が受けたる百兩を分ち與へければ、奴婢ども驚き悦び、心無き儕輩も先生が慈心深く襟懷清しき徳に感じ動かされけるが、先生遂に服部氏より一物も受けず飄然と家に歸られたる廉潔き、慕ふても尚慕ふべきことなり。

其五

當時小田原の大久保侯賢明の君にして、我が領内に溫良恭謙の徳を具へ厚生利用の才を懷ける二宮金次郎といへる者あることを聞き玉ひ、重く擧げ用ゐて安民の道を開かんとし玉ひけるが、門閥格式の卑く下りたるものは假令徳あり才ありても人の尊まざる時勢なりければ、まづ二宮に諸人の到底成ざることを命じ、其功を遂げさせて後他の者等が僻心を其功にて折きし上擧げ用ゐんと思ひたゝれける。

斯に大久保侯の分家、旗下の宇津といへるは四千石をとりて野州櫻町を領せるが、土民の風俗極めて惡く、遊び惰くる者のみ多くて、中古四千苞を納しところも僅に八百苞を納むる程に田野荒廢り

急に人を遣はし仔細を語りて頼み入りしが、先生之を肯入れず。服部ます〳〵敬服して眞實を盡し身を謙遜り、また他事もなく頼むこと再三再四なりければ、先生終に慨然として承知し、是より先に人の勸めによりて娶りたる妻に家事を任せ置き、服部が家に到り、先其不始末を責めて自省み耻ぢしめ、『過失を知らば過を補はんと勤むべし。過失を補はんとせば身を責むべし。身を責むるは食を飯汁と限り、衣を綿衣と限り、慾を無用の事に充すべからず、と此三ヶ條を守るにあり。』と諭し、次に其家の從者どもを諭し、誓つて五年間我が指揮に隨ふべしと敎へ、それより貸金者を呼びて仔細を語り聞かせ、さて先生が一代の説の根本なる分度といふ法を立て、入る物を計りて分度を引き去り、中分の活計をなすやう計ひ、自ら奴僕の代りに家事を勤めける程に、五年瞬く間に過ぎて千兩餘の借財影も止めず無くなりしが上に三百兩を餘しけり。先生其三百兩を服部夫妻に示し、『今は借金も無くなりて三百兩も餘れり。此中百兩は君の手元に置きて非常の時の用にし玉へ。又百兩は奥方に與へて奥方もまた家の復衰へざる豫備とするやう爲し玉へ。殘りの百兩は如何樣とも勝手にし玉へ。』と云へば、服部大きに感歎して、『我が家すでに退轉せんとしたるに今かくなりしは皆すべて汝の力なり。三百兩殘らず謝恩の印ばかりとしても尙足らずと思へるに、三百兩は後來の爲とて我等に與へられしなれば辭み難し。せめては此百兩を受け納めて家業の助とも仕て玉はれ。』と差出せば先生悦んで受け納め、『御言葉に隨ふて此百兩は申し受くべし。是より後再度不如意にな

『少きを積みて多きをなすは自然の道なり。今こそ僅に一苞なれ。是を種とし勤勞なさば我が家興すこともなるべし。』と、法を考へ力を盡して、油斷なく勤めければ、遂に多くの收入を得たり。されば先生はいよ〳〵悅び、數年の間の養育の恩を謝して獨立の身となり、人住まざれば柱傾き軒朽ち腐れて蔓草ばかり勢よく纒ひつきたる我が舊の家に立歸り、草を拂ひつ屋根繕ひつ、相手も無しの獨り住、必死となりて家業を力め、粗衣も厭はず粗食も厭はず、漸く有餘の出來れば積みて、一紙半錢空にはせず、千辛萬苦に堪忍びて田圃も終に買ひ戾し、立派とまでには行かざれど一家を全く興しける。嗚呼先生の行末大なる業をなせしも此時までの心掛よりして成れるといふべし。

其四

其頃小田原侯の大夫に服部十郎兵衞といふものありけり。一千三百石の大祿を受けながら、家事不如意にして借財も一千兩の餘に及び、元金は元より利金さへ償ふこと難く、必死と困り果て今は耻かしきこととなれど職をも辭せんとするまで貧に窘みけるが、栢山村に金次郎と呼ばるゝ男ありて、早く父母に離れ、田圃も他の物となりしに、僅に作り出したる一苞の米より廢れし家を起したり、それのみならず心濶く行正しく慈悲深くして他を憐む非凡の人なれば、此人を賴みて一家の再興を委ねなば必ず容易く退轉に及びかゝれる此家を興さんと、或人の知らせければ、服部大に悅びて、

類等は此樣を見かねて互に相談なし、仲と季との二人をば川窪某引き取りて、萬兵衞といふ縁者が許に先生一人は養ばれしが、萬兵衞元來吝嗇にて人情も知らぬものなれば、晝は終日勞働て夜はわづかに學問の道をば辿る先生を、無理無躰にも罵つて、『我汝をば養ふに、多分の入費かゝるところ、未だ力なき汝の働き、何條それを補はむ。然るに其をも省ず自分の勝手の夜學の爲、我が油をば費すこと不屆なり。』と叱り懲すを、無理とは知れど爭はず。さりとて一生文盲の人とならんも殘念なり。我自力にて學問なさば、まさかに叱りもせざるべしと、川縁の荒地に菜を蒔きて七八升の實を得たるを嬉し悅び燈油に代へて、夜ゝ獨り苦學すれば、無慈悲の萬兵衞また罵り、『學問爲るより繩を綯ひ、我が家事なりと手助けせよ。』と强慾のこと云ひ掛けたり。それにも先生逆はず、繩綯ひ筵織り油斷なくして、其後ひそかに燈を點し、衣にて燈光の漏れぬやう庇せし上に師も無けれど勵み勉むる我心を我師となして鷄の鳴く頃まで每夜讀書せし辛苦のほどは察しても淚のこぼるゝばかりなり。

其　三

先生萬兵衞がところに居る中、家を興さむ興さむと思ふ心は一日も撓まず去らず胸に在れば、人の關はぬ土地を耕し、人の棄たる苗を拾ひて、其所に植つけ一苞あまりの收實を得たれば大きに喜び、

流石恩愛に引かされて、母は夜毎に、見を思へばや眠りもせざる樣子なり。先生これを見るよりも、『何故每夜やすく〳〵と寢玉ばざるや。』と言問へば『乳の張る故に寢難し。』と言ひ紛らして他所を向き、淚を隱し、悟られじと爲らるゝ胸の苦しさを、早くも察して先生も、淚にうるむ眼を數瞬き、『何程貧にせまればとて赤子一人殖ゆるとも減るとも別に違ひもせじ、富をおもふて夜さへも碌々御寢なされざる其悲みを母樣に掛けたてまつる其よりは、小腕ながらも小子が明日より山に薪伐り、其を鬻ぎて弟を、養ふほどの事はいたさむ。早彼子をば取り返し玉へ。』といへば母も悅び、夜更も厭はず隣村に到りて事の仔細を語り、可愛我が子を懷に抱きて歸る荒屋の、いぶせき中にも親子四人まづ恙なく打揃ひ顏見合はすを樂みに、それより朝は朝未明、霧立ち迷ふ山に入り、薪を採りつ柴刈りつ、歸途は其を賣代なし、夜は夜半まで繩を索ひ草鞋作つて、一寸の日影も惜み身を使ひ心を使ひ母の爲弟のためと先生は日每に勵み且は又、人と生れて聖賢の道も知らずに過ぎなむは口惜きことの限りなりと、僅に得たる大學の書を懷中に常離さず、薪伐る山路の往返歩みながらに讀み玉ひし心掛こそ尊けれ。

先生早く父を失ひ、つぶさに艱苦を嘗めたるに、又もやわづか十六の年に母さへ疾に罹り、天地に祈り回復を求めし甲斐もあら悲し、三人の子を殘し置き冥途へ旅立玉ひければ、田地家財も既に無く唯淋しげに殘りたる、何一ッ無き荒屋に、まだ幼稚二人の弟を搔抱き歎き悲しむばかりなり。親

先生と崇め稱へられて、今も尙數多の人々に神の如く尊ばるゝ近世の君子とも豪傑とも申すべき人ありけり。素より世に希なる大器量の先生の事なれば、一生の嘉き言善き行ひは一々茲に陳べ難きほどあり。唯此書には其のあらましを記して二宮先生を少年諸君に紹介せむとす。若し此書によりて二宮先生を、おぼろげながらにも想ひやりて心裏に認め、且は其德行を慕ひ學ぶ人いで來なば、此書は眞に名譽ありといふべし。

其　一

二宮先生とて生れながらに君子にても豪傑にてもあらざりしなり。先生は天明七年七月二十三日、相摸の國柏山村といへる片田舍に生れ玉へり。家は貧しきが上に酒匂川の洪水先生の五歲の時一畝も殘さず先生が家の田圃を荒らしければ、いよ〳〵貧しきを重ねて、先生と先生の弟三郎左衛門富次郎の二人とを育つることさへ容易からぬほどなりけるが、先生其中に漸く長じて、草鞋を作り其を賣り、量こそ一合といへば少けれど大なる情は籠れる酒を求めて夜每に父に侑め玉ひける。かくて先生わづかに十四の年、賴みとしたる父にわかれ、貧苦彌增し艱難ます〳〵極りしかば母は是非なく憂を匿して、『汝と三郎左衛門とは如何樣にしても養ひ得べけれど、末子までには力及ばず。詮方なければ末の子をば緣者の許にあづくべし。』とて、心强くも富次郞を他所に預けて立歸りけるが、

二宮尊德

はしがき

幼童に對して強く其心を動かすべき怪談奇說を賣弄するは予の忍びざるところにして、其想を卑からしむべき瑣談雜說を賣弄するもまた予の欲せざるところなるが故に、余は予が常に小弟小妹に對して暇あるごとに話說せしところの古人實傳中の一の特に偏僻ならざるものを擇んで少年文學中の一篇となせり。此篇即是なり。

報德記、二宮翁夜話、二宮翁畧傳、報德手引草、應報鑑、報德外記等、報德學に關するもの大抵閱盡したりといへども、報德記の他は本傳に關すること少ければ敢て參酌せざりき。

其一

いたづらに起き、徒に眠り、空しく食ひ、空しく衣て、何事も爲す無きは禽獸に餘り遠からぬ人なれば、尊ぶに足らずといふべし。學んで知を蓄へる人は尊ぶべし。勤めて業を成せる人は又尊ぶべし。志して道を求むる人は愈〻尊ぶべし。誠ありて德をほどこせる人は又愈〻尊ぶべし。二宮尊德

旃陀羅が子と自ら書せしを以てなるべし。さりながら此を以て直ちに穢民が子と自白せしなりと解せんは少しく膠柱の譏を免れぬ讀法にて、文の勢をも知らず語の働きをも知らざるものといふべき乎。旃陀羅と日蓮が云ひしは漁夫を指したるにて、殺生をなすものなれば然云ひしと見て過失無かるべし。強て旃陀羅を直に穢民の義とせん以上は東夷の二字をも東夷西戎の東夷と解して安房の國を日本本島以外の夷國とも見るべきにや。陋劣なる讀法、究屈なる讀法と云つべし。但し或は眞に穢民ならむも知らねども、單に自ら旃陀羅と書せしが故に穢民なりとの事ならば承諾がたき談といふべし。特に日蓮が出生旃陀羅なるの故を以て日蓮を斥くる傾きを人の有せんには、そはまた眞に笑ふべきことにして、我は其人に釋迦が大に旃陀羅のため氣燄を吐きて波斯匿王を叱したるの大說法を知らざるやと唯一言して已まんのみ。我自己が法華宗に屬せる者なる故に如是云ふにはあらず、訐て以て直となすものをにくむといへることをも顧みて、猥に古人を傷くるを名譽の如く思ひなす人の少からぬを憤りてなり。古人を妄評するの愚は古人を妄信するの愚と經緯をなせど其長さは一なり。我は考證家をば惡むにあらず、考證家に附隨して自己の卑劣なる感情の焔を揚げて滿足するものを惡む。我は考證家をば敬愛す、考證家に從順にして無邪氣なる感情の水靜に古人の面貌を影寫するものを最も敬愛す。

の誹謗冷笑せらるゝを好む傾きあるものなれば高祖遺文一冊も讀まざるに早く此等の書を讀みて日蓮もまた是の如きのみと速斷し、自己が卑むべき感情の甲斐無き滿足を得んがために自ら爲すとは悟らずして、苟も一宗派の開基たる人を捉へて一時の談笑の資となし、放言自ら高しとするものあり。それ歴史の考證よりは假令古來聖人となせるものを翻して愚夫となすことあるとも悲むに足らず却て喜ぶべきなれど、然にもあらざる輕躁家の淺薄なる思考を抱き言語をなすことあらむは、古人のために累とするには足らざるにせよ其人のため悲むべし。我は必ず此篇の讀者が然る輕躁家の愚を學ばざるべきを信ずといへども、萬一又或は他の似而非才子等が傍より深密傳などに據りて諸子が此書を讀むことを冷笑せむ時の心得にもと記し置くのみ。

因に云ふ。日蓮を穢民なりといふ人深密傳を讀まざる者にも多く有り。果して眞に穢民なりしや、然らざりしは、我敢て知れりといふほどの確證を有せずといへども、穢民の歴史と日蓮が父の故郷に存せし血族母が血族等の系譜とを得るにあらざれば、穢民といふべき證もあらじ。富木入道は聊にせよ肉縁の續きあればこそ十餘年の學資をも送りつゞけたるなるべけれ。富木胤繼とも云ふものゝ緣類に穢民あらんとは思ひ難し。然れども日蓮を穢民といふには、少く據所あることにて、日蓮が佐渡御勘氣鈔に、日蓮は日本國東夷東條安房の國海邊の

細を論ぜんことはもとより一朝一夕の能くすべきにもあらざれば、こゝには事蹟の趣味ある點を略記するのみ。縱ひ日蓮上人は議すべきところ少からぬ人とするとも、一漁夫の子と生れ出でゝ天下の反抗を事ともせず、堅く自己の所信を執つて、世には從はず世をば從へしもの、大才大器と云はざるを得ず。看る人宜く堅忍不拔のところを看取して以て法華の一宗の今存するもの偶然ならざることを知り、且は自ら鑑みるの料として日蓮傳を味ふべし。

付て記す。世に大聖日蓮深密傳といふものあり、法華宗に反對の者の手に成りしと覺しく、奧書に六老僧の名を署しありて左も眞實しやかには記しあれど、陽に揚げて陰に抑ふるの筆法、甘きを表にして辛を裏にするの語氣、陰險危譎を極め、看るものをして一讀の下に其著者が心術の卑劣なるを想像せしむるに餘りあり。例せば日蓮は穢民の兒なり、穢民の兒なれども一宗を建立せるが故に尊むべし。日蓮は穢多の兒なれば出家を望みしも諸宗の僧侶聽かざりしより恨を報いんとして他年念佛無間等の語をなしたり。日蓮は狐を使ひたり。春日明神の鹿を使ひ三王權現の猿を使ふ例もあれば奇瑞を現ずるの計を得たるものなり、なんどと言へるが如き。記するところは都て日蓮を尊めるが如くにして、却て讀者をして無言の間に日蓮に對し惡感情を懷かしむるやう記したり。想ふに著者は狠毒なる想像家にして、少くも狠毒の點に於ては我が邦の一切の文客にも勝れたる想像家なるべし。然れども人は他の人

へば左にては無くして蕨のみ立ならびたり。谷に下りて海苔や生ひたると尋ね候へば誤りてや見るらん芹のみ茂り伏したり。古郷の事遙に思ひ忘れて候ひつるが今此の海苔を見候て由思き心思ひ出て憂く辛し。云々と。身延に入りてより自身は靜に讀經著述の外他事なく、撰時鈔なども當時の作なりしとぞ。宗風日々に盛んにて棄邪歸正の者極めて多く、頓ては三間の草堂人を容るゝ能はずなりて遂に大伽藍自然と建つに至りければ、初めて身延山久遠寺と稱しける。一方にはまた豫言の如く、蒙古果して襲來せしかば、日蓮が勘文虚僞ならず、と知るも知らぬも驚歎なし、改宗の者日に多かりし。

第二十　涅槃

弘安五年八月頃より心地例ならずして食事も稍減じけるが、自ら思ふところやありけむ武州池上の宗仲が邸内の本門寺に入りて、日昭日朗日興日向日頂日持の六人を六老僧となすこと、我が遺骨は身延に納めて六老輪番に守護すべきこと、經一麿は日朗を師と賴みて學問成就せば京都に上り我が法門を弘むべきこと、各弟子旦那もろともに信念減退あるべからざる事等、遺誡すべて終りて、十三日の卯の時頃六十一歳にて入滅しければ、法第檀越等茶毘に附して眞骨を奉じ鎌倉を立ち、其月二十五日に身延へ着して葬りぬ。法華の宗祖日蓮が一代大畧斯の如し。其行狀性質心事意見の微

第十九　身延

甲州に波木井實長あれば先づ彼方を志してと日蓮鎌倉を立ちて甲州に至り、身延の幽閑を愛して、我こゝに一庵を得んと實長に頼み聞え、それより諸方を遊化して信州篤木にまで至り、歸れば身延の山麓に三間四面の草堂は既成り居りて人を待てり。日蓮大に悦びて此處に止まり住しけるが、自ら身延の景況を人に與ふる書の中に叙して曰らく、駿河の國は南にあたり、彼の國の浮島が原の海の際より此の甲斐の國波木井の鄕身延の嶺へは百餘里に及ぶ。餘の道千里よりも煩はし。富士河と申す日本第一の早き河北より南へ流れたり。此河は東西は高山なり、谷深く、左右に大石高き屛風を立並べたるが如くなり。河水筒の中より鴻矢を射出したるが如し。此河の左右の岸を傳ひ、或は河を渡り、或時は河早く石多ければ舟破れて微塵となる。かゝる所を過行きて身延の嶺と申す大山あり。東は天子の嶺、南は鷹取の嶺、西は七面の嶺、北は身延の嶺なり。高き屛風を四ッ衝立てたるが如し。峯に上て見れば草木森々たり、谷に下つて尋ればば大石連々たり。犬狼の音山に充滿し、猨猴の鳴て谷に響き、鹿の妻を戀ふる音哀しく、蟬の響き喧し。春の花は夏咲き、秋の果は冬になる。たまたま見る人は、山樵薪拾ふ姿、時々訪ふ人は昔し馴れし同朋なり。彼の商山の四皓が世を逃れし心地、竹林の七賢が跡をかくせし山も斯やありけむ。峰に上りて若布や生ひたると見候

豫言の如くなれば、他國侵逼の難も必や來らんなど云ひ合ひける。鎌倉よりの命にて同じ國の中雜太郡一ノ谷へ改めて遷されけるが、如何に窘むるも如何に狹むるも痛しとも痒しとも感せざる日蓮、ますく雄威を揮つて印性房といへる至極の念佛者を屈し、弟子檀那等の鎌倉に在る者には數々書を送つて道心を勵まし、觀心本尊抄を著し、大曼陀羅を成し、爲法の精神一日とても懈怠するなし。かゝるところに、文永十一年二月十四日北條時宗思ふところあつて日蓮を赦免せんと賴綱に命じ、宿屋衞左門其狀を受けて彼の日朗に渡せしかば、日朗夜を日に繼ぎて來り、三月八日一ノ谷に着きて、赦免の狀を傳へければ、日蓮日興もろともに歡喜比ふるものも無く、翌日本間重連に告げ、三月十五日赤泊より越後柏崎に渡り着き、三月廿六日に無事鎌倉につき、弟子旦那等が豫て設けし夷堂橋の庵室に入り、宗門萬歳萬々歳と一同歡喜踊躍なしぬ。さしも惡みし日蓮を時宗赦したりけるは、同族時盛、日蓮が爲法の勇氣に感激せると、又其の豫言の的中せしに恐れを抱きたるとより、時宗を慫慂て然はさせしとぞ。法華弘通の大法將歸りし上に五月二日宗門弘通の免許下りしかば、一宗の悅び錦上に花を添へたる心地して、法弟等の勇氣十倍し、高く法鼓を撃つて四方に說法する間、日朗の弟子日澄は一ト問答に小町の眞言寺を落して改宗せしめぬ。大學三郎は家を轉じて寺と爲せば、宿谷左衞門も邸內に一寺を建つるに及び、昔時の讎も今は多く隨順なして入門なし、法華の威風凜然と諸宗の者をして眼をそばだてしめける。

書を飛ばし、衆議を凝らし異存を合して、皆一時に日蓮が住へる塚原に押寄せ、彼一言を發する間に我等は十言二十言云ひ、對論をもて壓服せんと一決し、文永壬申の正月十六日塚原が庵に押寄せたり。これを聞く近郷近在の者ども、今日こそ我等が頼みたる方丈の、惡僧日蓮を挫ぎ玉ふらめ、とて先を爭つて聽聞に集まりければ、さしも廣き塚原も餘地を剩さず見えたりける。平日人跡絶えたるところに思ひの外なる人音は何事やらんと日蓮外面を見てあれば、各宗の僧侶圓顱を列ねて口々に罵り騷ぎ居たり。さては言論を戰はせて我を屈せんと來りたるなるべし。いで其義ならば理を推し道を說きて是非善惡を明にし、彼等の迷を解て遣らん。望むところの事なりと立現れて衆僧に對ひ、法門のため各位は推參ありしと覺えたり。其義ならば此方にても望めるところ、隨意に何なり日蓮が所立を批たば批玉へ。一々答へまゐらせん。と泰然として云ひけるに、いで云ひ負して吳れんずと眞言念佛禪宗等のもの、喙を尖らし鼻を皺めて、樣々詰問し初めけるが、嵯峨とはしても霜柱の朝日に向かへば碎くる如く、辯賢げに云ひ廻しても燭火の明は月に及ばず、各々說破し盡されて、退くもあり、立端を失ふもあり、或は眞に慚愧して忽ち降伏するもあり。地頭の本間重連も席に列りありけるが感服なして歸依なしける。二月十八日早船乘りて鎌倉に事ありと知らせしかば、本間は鎌倉に馳せ上りぬ。天台の僧に最蓮といふもの罪ありて配流せられ來けるを降伏せしめ、開目抄を草し終りなどしけるところへ、日興熊王鎌倉より來り、吾妻の兵亂を物語り、自界叛逆も御

鎌倉の土牢に苦められて天日を見ることも無く暮したる日朗は、師の日蓮が佐渡へ行かるゝ前に遣して置かれし書を見るより涙さし逼りて、今夜の寒ずるにつけて愈々我身より心苦しさ申すばかりなし、とある其文言の肝に應へ、明けても暮れても師の文を讀みては歎き、歎きては讀みければ、心無き牢守どもゝ其誠心に動かされて、自然と日朗が德に歸し、念佛を捨てゝ題目を唱へ、法華に心を傾けゝるが、一時牢守の者ども盧橘の實を七八箇日朗に供養しけるに、日朗これを見るよりも、嗚呼これ此は我が師の坊の好ませ玉ふものなるが、師は遙なる佐渡にあり、我は此處なる牢中にあり、獻げんとおもふ心はありても儘ならぬ身の口惜し、と潸然として泣きければ、牢守どもゝ堪へ得で、師弟の情とは云ひながら道理せめて憫然なり、と遂に密々談り合ひて、左までに思ひ玉はむには、我等私に圖ひて汝を暫時牢中より出し、日蓮房の坐すなる佐渡へ渡らせまゐらせんが、構へて疾く行き疾く歸り玉へ、と、旅費を奉ずるもあれば乾粮を獻ずるもありて、人鬼は無き世の習ひ、最親切に計ひける。天にも上る心地して日朗佐渡に急ぎ渡り、塚原に到りて師の手を頂き涙に咽びながら、牢守の情に如是參ることを得たりし由云ひ出て、齎し來りし種々のものを捧げて流涙の師の愁をぞ慰めける。日蓮佐渡に流されても少しも屈するところ無ければ、阿佛坊を改宗せしめしを初として、縁あるに任せ四圍の者を漸々化導したりしかば、佐渡一國に歸信する者彼所に三人、此所に五人と、其數少からずなりけるにぞ、念佛其他の宗旨の者等は安からざることなりと額を集め

計ひとして此島に流され玉ひし順德上皇の侍臣に遠藤爲盛といふもの、上皇崩後阿佛と名乘りて妻もろともに只管南無阿彌陀佛を稱へ、無類の信者となりてありしが、心剛なる漢子なれば、此度鎌倉より、彌陀を罵り念佛を無間の業と誹謗する日蓮といふ賣僧めが此島山に流され來し由、往時よりして此島に流されし者の生きて返さるゝ例なければ、阿彌陀の怨敵打殺しても大事無からん。もとより北條殿にさへ捨殺し同樣に見限られたる日蓮め、我が宗の仇、憎き奴、いで一ト打と力足蹈み、大刀腰に横へて頭巾目深に打被り、雪蹈み分つて塚原の庵に來りけるが、見れば甲斐無き痩法師なり、一ト問答して究せしめ、其時取つて押へつけて首搔切らんに難くもあらじ。と、土足のまゝ會釋も無く堂に上りて立はだかり、我は念佛の行者なるぞ、汝猥りに舌を動かして法華ばかりが成佛なし、其他は無間に墮つるなんどゝ口より出任せに罵るよし。確の證據あれば可、左なくば生命は助けじ。と大聲あげて白眼つけつ、刀の柄に手を掛けたり。日蓮恐るゝ色も無く、物々しき其問事かな。汝念佛行者ならば他の經文を說くまでも無し。汝が賴む阿彌陀經に、舍利弗舍利弗舍利弗と三十幾度か呼ばれたる其舍利弗は其經にて得道なせし證據やある。法華經第二の會坐にして却つて華光如來となりしとあるにあらずや。と當意即妙の一言を冒頭となして、諄々と細く說きて聞かすれば、阿佛は夢の覺めたる如く、目前慚愧後悔して法弟となり、これより夫婦かはる〴〵に人目を忍びて食を送りぬ。

後を圍まれて出立し、二十一日の夕越後の寺泊りに着きけるが、道すがらも機をさへ得れば折伏の舌鋒鋭く、多くの信徒を得たりけるは、感ずるにも猶餘りあり。かくして二十八日に角田といふより出帆して佐渡の羽茂郡松が崎甲の瀬といふに着船し、三十日に新穂なる本間重連が邸に着き、十一月一日重連が下知として大野の郷塚原といふに追ひ放たれける。この塚原といへるところは、其頃人家もあらずして唯茫々たる原なるのみならず、死者を埋むる荒涼たる地なれば、寒鴉の聲も心細く、往來の人も殆んど無きに、たゞ一間四方ばかりなる辻堂めきたるものあるばかり、其とて屋根荒れ藁筵も敷きて無ければ、折しも降り來る雪は面を撲つて舞ひ、氷柱は法衣の袖を綴ぢ、北國孤島の冬天の寒氣は骨を削る如し。日蓮今は食も絶えて此の雪中に飢ゑて死ぬか凍へて死ぬとか思はれければ、先づ肌につけし釋迦像を雪の上に安置し奉りて、磐石と坐を定め、合掌讀經の聲凄しく、昔時釋迦佛雪山の苦行も如是や坐しけむ、將唐土の蘇武とやらんが胡國に囚はれ氷雪の中に孤忠を全うせしも如是や有りけむ、我は法華經の御爲に死なば死すべし、身は惜からず、假令は飢に逼られて屍を此降る雪の下に埋むるとても聊なりと此土の敎主本師釋迦佛の御心に協はむには露恨み無し、轉重輕受の法門に身を委ぬれば、日本第一法華の行者の日蓮をかゝる憂目に會はす北條等が振舞も愚昧と愍みこそはすれ、惡みもなさじ、怒りもせじ、と齒を切つて端坐すること五日の間、雪より他に喉を潤すものも無くて御法を糧となし居けるが、こゝに畏くも承久三年兇臣北條義時が

盛の信力こそ有難く候へ。と書したり。十月三日土牢に籠められし日朗等に與ふるの書には、今月七日佐渡の國へ罷る。各々は法華經一部づゝ遊ばして候へば我が身並びに父母兄弟存亡等に回向まし〳〵候らん。今夜の寒ずるにつけて愈々我身より心苦しさ申すばかり無し。牢を出でさせ給ひなば明年の春必ず來り給へ。見えまゐらすべし云々。同く五日太田曾谷金原三人に與ふるの書には、涅槃經に轉重輕受と申す法門あり。先業の重き今生に盡きずして未來に地獄の苦を受くべきが、今生に斯る重苦に値候へば地獄の苦ぱつと消へて、死候へば人天、三乘、一乘の益を得る事候。不輕菩薩の惡口罵詈せられ、杖木瓦礫を蒙るも故なきにはあらず。過去の誹謗正法の故かと見えて、其罪畢己と說かれて候は、不輕菩薩の難に値ゆゑに過去の罪の滅するかと見えはんべり、是一。又付法藏二十五人は佛を除きたてまつりては皆佛のかねて記し置き玉へる權者なり。其中第十四の提婆菩薩は外道に殺され、第二十五の師子尊者は檀彌栗王に頸を刎られ、其他佛駄密多、龍樹菩薩なんども多くの難に値へり。又難無くして王法歸依いみじくて法を弘めたる人も候。これは世に惡國善國あり、法に攝受折伏ある故かと見え侍る。正像猶かくの如し、中國又然なり。これは邊土なり、末法の始なり。かゝる事あるべしとは先に思ひ定めて期をこそ待ち候ひつれ、是二。云々と認めたり。何れも寸毫の撓み無く、又激越度を失ひたる態も無きが中に、大磐石の動がさるが如き堅固の決心の潛めるを見つべし。十月十日、日向、日興、日朗の母、熊王なんどに送られつ、警護の武士に前

嘆の涙の雨に袂を濡らしつゝ、言葉も無くて居たりけり。されども堅忍不抜の氣象の日蓮かゝる際にも屈せず、十三日十四日の兩日に法華に改宗せしめしもの男女合せて七十八人、僧分の者二十五人と聞えけるは、眞に其所論の當非は扨置き、不幸薄命の最中にあつて自己が事業に尚勤むるの勇氣の烈しさ恐ろしさ末世の龜鑑とするに足れり。九月十三日より十月十日まで此處に在りし間、四條金吾富木播磨、其他の者より或は間訊或は報知の狀に答えて送りし書狀少からぬが、何も勇氣勃々として悲惻の感に胸を痛め、神氣の沮喪せし體無し、龍の口の難後、直に富木に答へし狀は左の如し。曰く、上の責めさせ玉ふにこそ法華經を信じたる色もあらはれ候へ。月は虧けても滿ち、潮は干ても滿つること疑ひなし。此も罪あり必ず德あるべし。何しに歎かん。此十二日辰の時御勘氣、武藏の守殿御あづかりにて十二日丑の時鎌倉を出でゝ佐渡の國へ流され候が、當時本間の依智と申すところに、六郎左衞門尉殿の代官右馬太郎と申すものあづかりて候が、今四五日はあるべげに候。御歎はさる事に候へども、是には一定と本より期して候へば歎かず候。今まで頸のきれぬこそ本意無く候へ。法華經の御故に過去にて頸を失ひたらばかゝる小身にて候べきか。又數々見擯出と說かれて、度々失にあたりて重罪を消してこそ佛にも成り候はんずれば我と苦行をいたす事は心ゆゑなり。又四條金吾に與ふる書中には、法師品に云く、則遣二變化人一爲レ之作二衞護一、疑ひあるべからず。安樂行品に云く、刀杖不レ加。普門品に云く、刀尋段々壞。此等の經文よも虛事には候まじ。

刀の光りは見る人の膽をも冷すばかりにて、氷か水か電光か、えいと聲かけ振上ぐると齊しく空に閃きて既に斯よと見えたる折しも、黒風一陣雨を卷て驀然として天より下し來、一天墨の如なりて尋常ならず見えしかば思はず心を奪はれて退きたりける其所へ、日蓮が命助けよ、との北條殿の命を帶びて、南條七郎馬を飛ばせて來りければ危く生命は助かりけり。

第十八　佐渡

一旦の生命は助かりしも、愛甲郡依智の郷本間六郎左衞門重連に預けらるゝの由にて、即刻依智に伴はれ、六郎左衞門重連所領佐渡にある間の留守を管れる三郎左衞門に護られて、少時命を待つところに、本間右馬尉といふもの鎌倉より馳せ歸りて、日蓮佐渡に流罪の由なり、と下し文を持ち來り、頓て又本間十郎といふものも鎌倉より歸り來て、さても鎌倉にては名越の庵室に殘れる日照上人を初めとして高弟多くは由比が濱邊の宇土といへるに潜み隱れけるに、日朗日進の二法弟は馴れし庵をば去るに忍びて徘徊嗟歎ありしゆゑ、鎌倉殿より馳せ向ひたる兵士のため日蓮が同類なりとて搦め取られ、宿屋左衞門が預りとして土の牢にぞ籠められけると鎌倉中の取沙汰なり。と語るに流石日蓮も、我は越路の浪の末、雲の果なる佐渡が島山に流さるゝ身、日朗等はまた鎌倉の土牢に呻吟する身となりしに、正法のため辛苦を受くるは歎くべきにはあらずとするも、師弟の情とて悲

笑ふもあり、雀躍なして悦ぶもあり、法弟信徒の泣き顔をも知らざる如く見過して心地好しとぞ云ひ囃しける。屠所の羊のそれならで、死に臨むでも泰然たる日蓮御靈の社前にて隨ひ來りし熊王といへる童を其祠の背面の四條金吾賴基が許に走らせて事の始末を告げしめければ、取るものも取り敢ずして兄弟四人は走り出て、法衣の袖に取り縋り涙ながらに隨ひ行きぬ。やうやく龍口の磯近くなりける頃、今日我が賴める上人の頸打たるゝ由聞ゝて驚きし信心の老婆、餡餅を作りて最後の供養し奉らんと赤豆を煮居しが、煑ゆる間無くて師は既門口を過ぎ去るべく見えしかば、狼狽て握飯に胡麻鹽を傳けしを鍋蓋の裏に載せて走り出で、我が師よ、婆が志を受け玉はれ、と追ひかけゝる者ありければ、快く之を喫して刑場に臨みける。馬より引下されて荒薦の上に居ゑられし日蓮、今は是までと靜に讀經すれば、日朗日進日興日向、四條池上荏原等は聲を限りに題目を唱へ立つれど、聲さへも涙に曇りて出でばこそ、堪へ兼てや血氣の四條金吾は、師若し法に斃れたまゝば生きて何せん、小生も殉死なさん。と云ひけるに、莞爾と笑を含みし日蓮、いかに殿原騒ぎ玉ふな。法華經のため命を捨つるは悦ばしくこそあれ悲しくは無し。何を女々しく歎き玉ふぞ。我願はくは法のため身を犠にして亡き父母より卿等までのためとならん。と神色平日に變ること無し。劊子依智の三郎は刀抜きそばめて後の方に廻りはしたれど、流石に凡夫の料簡にても尊さ知らるゝ出家をば切りは切りかね幾度か刀を扣へて躊躇けるが、其儘濟むべきことならねば心を決めて立ち寄りたり。

問さるゝに及びけり。されど日蓮屈することと無く懸河の辯を揮つて、逆まに其糺す者の口をも塞ぎたりければ、平左衞門等ます〳〵惡みて、上を侮り下を誑り、佛法に口を籍りて國事を私議する其罪赦し難しとの評決を以て、日蓮を斬に處すべく定めける。

第十七　瀕死

文永八年九月十二日、評定所の命として、左衞門頼綱兵士三百餘人を率ゐて名越の庵室に押寄せたり。日蓮此時五十歳、群集に對して法談せる最中なりしが人馬の物音たゞごとならぬに戸外を見れば、馬上の頼綱聲あらゝげて、者共會釋するなかれ。疾く踏ん込んで大惡僧日蓮坊主を引縛れ。と烈しく下知を傳ふるに、心得たりと從ふもの等ばらばらと堂上に駈け上りぬ。すは大事ぞ、と聽衆は騷ぎ法弟等は泣き悲めど、上の命なれば爲べきやう無く、徒らに叫び驚くばかりなるに、付け入る齋藤三郎は日蓮を取つて引据え、少輔坊は經卷を以て打擲なし、雜兵等は虎の威を籍る狐の振舞、散々に狼籍亂暴して、彌陀の仇をば今日復しぬと云はぬばかりに堂上を踏み荒らし、佛壇を打碎き、鬨の聲を揚げて引上げつ、肌脊馬に縛めたる日蓮を乘せて市中を引廻しけるに、豫て惡みたる諸宗の者共、あれ見よ狂僧めが成れの果を、日頃念佛を罵つて無間に墮つるの業と云ひ、眞言を嘲みて亡國の法と言ひしも、報は覿面、自己先づ此世の罪に身を亡す愚さ笑ふに堪へたり、と後指さして

して日蓮に歸すべしと云ひ送り、壽福寺にも對決を挑み、淨光明寺にも法華の大王戒に對して小乘蟁蝱戒豈相對に及ばんや、と戰書を送り、多寶寺長樂寺等にも同じ趣きの書を送りぬ。上執權より下鎌倉中の高僧に如是猛烈の書を送り置きて一方には弟子檀那等に、大蒙古國の簡牒到來に就て十一通の書狀を以て方々へ申せしめ候。定めて日蓮弟子檀那流罪死罪は一定ならんのみ。少しも之を驚く莫れ。方々への强言は申すに及ばず、是併ながら而强毒之の故なり。日蓮庶幾せしむるところなれば各々用心あるべし。少も妻子眷屬を憶ふこと莫れ。權威を恐るゝ莫れ。今度生死の縛を切て佛果を遂げ令玉へ。鎌倉殿宿屋入道平左衛門尉彌源太建長寺壽福寺極樂寺多寶寺淨光明寺大佛殿長樂寺十一通の狀を書て諫訴せしめ候ひ畢んぬ。定めて仔細有るべし。日蓮が所に來て書狀披見せしめ玉へ。恐々謹言。と認め終りて告げたりけるは、大膽不敵とも信念强盛とも云ふべきことぞ無かりける。

文永六年法弟の列にまた一人の日進といふを加へ、甲斐より富士へ登山の際に鹽屋平内渡邊藤太夫等多くの檀徒を得、文永八年には大旱に際して極樂寺良觀が雨を祈りて効無きを責めなどしけるが、彼の蒙古よりは文永六年四月、同じく八年春、又もや使を遣し來り、人心愈々動搖しける。これにつけて、去る五年に十一通の書を發してより、諸宗の者等日蓮を惡み思ふこと一方ならず、其肉を啖はむとまでの憤怒を包みて樣々に讒訴なせるも度々なりければ、遂に問註所に召寄せられて鞫

屬、皆是邪法跋扈して正法閉塞さるゝがためなりとて、宿屋左衛門入道に、今年大蒙古國より牒狀之ある由の風聞す。經文の如くんば彼の國より此の國を責めんこと必定なり。然るに日本國中には日蓮一人西戎を調伏するの人たるべし。兼て之を知り論文に之を勘へ置きぬ。君のため、神のため、國のため、佛のために内奏を經らるべき歟。委細の旨は見參を遂げて之を申すべし。と云ひ送りけり。然るに返事なかりければ、其十月復び書を與へて、彼を調伏せられんこと日蓮にあらずは協ふべからず。日蓮が申す事御用ゐなくんば定めて後悔之あるべし。所詮は萬祈を抛つて諸宗を御前に召し合はせ、佛法の邪正を決し玉へ、と平の賴綱にも書を送り、法華を謗する者は三世諸佛の大怨敵なり。天照大神八幡大菩薩等此國を放ち玉ふ故に大蒙古國より牒狀來る歟、自今已後各々生取られ他國の奴と成るべし。此趣き方々へ之を驚かし愚狀を進ぜしめ候。と北條彌源太にも書を與へ、同じ日建長寺の道隆禪師にも、國難正に逼りて我が安國論に記せる如くに成りたるが、日蓮が申す事を御用ゐなくんば後悔之あるべし、此趣き鎌倉殿宿屋入道殿平左衛門尉殿等へ進狀せしめ候、一處に寄り集りて御評議あるべく。と云ひ送り、同日極樂寺の良觀上人には、速かに嘲弄の心を飜して早く日蓮房に歸伏せよ。鎌倉殿を初め建長寺其他へ披露せしめたれば對決に如かず。淺近の法を以て諸經中王の法華に向ふは、江河と大海と華山と妙高との勝劣の如くならむ。日蓮は日本第一法華經の行者なり、蒙古國退治の大將なり。と書送りて法戰を挑み、大佛殿別當にも、早く我慢を倒

法華經殉死の大士吉隆頓證菩提と念じつゝ、其法名を妙隆院日玉聖人と贈りて、出家の儀式を萬般に用ゐ、僧同然に待遇ひける。彼の法敵の景信は小松原の爭鬪の節面に微傷を負ひけるが病の本となりて非業の死を遂げゝれば、傳へ聞く者これ佛罰と畏れ怖れて、歸依の心を起すが多く、頑冥無知の者どもゝ漸く迷に遠かりぬ。これより日澄は眞言寺の僧を折伏し、日蓮はまた上總下總常陸下野を跋渉して、下總には鼻和にて眞言の一寺を蓮乘寺と改めて法華の宗に入れ、藻原にては齋藤兼綱を歸依せしめ、上總にては奥津に佐久間十郎左衞門重貞一家を改宗せしめ、下野にては宇都宮の城主下野守景綱はじめ其姉を化導し、鹽原藤原の山奥までに法華の香風を薰ぜしめけるが、文永丁卯母亡くなりければ、小湊に歸りて佛事を濟まし、其年の冬を富木胤繼の館に越して、其子の十六歳になれるを僧として日頂と名づけゝる。これまた後來六老僧の一と數へられしものなりけり。

第十六　奮進

文永五年正月十八日大元よりして牒狀あり。其言ふところ通問結好に在りといへども、新勝建國の雄威に乘じて稍脅迫の語氣を含み、無禮の廉無きにわらねば、朝廷公家も鬼胎を懷きながら其使者を追ひ歸しけるが、人心何と無く動搖して、國中安き景色ならず。日蓮豫て安國論に記せるところに符合せる世の形勢をつくづく觀て、是のみならず正嘉の地震、文永の彗星、大飢饉また大疫

器の類を持てるは信徒の其中に四五人よりしかあらざれば唯氣を焦るばかりなり。鏡忍坊は既に切られて乘觀長英また危ければ、法門の者皆こゝに殺し殲さるべく見えしところに、天津の工藤吉隆三四人して師を迎へに此處へ圖らず來かゝりしが、此體見るより大に驚き法門護惜の其のためには、如何で生命を惜むべき、と腰なる一刀拔き連れて面も振らず斬り入つたるに、東條勢も色めきしが、此方は無勢彼方は多勢、また盛返して十重二十重と追取り込めつ前後より砍り突くほどに、金鐵の身ならぬ吉隆は敢なくも討死なしたりけり。得たりや應と景信は馬を乘り寄せ、汝日蓮二つになれと切つくるを、珠數もて拂へば母珠は二つになつて飛び散りつ、刀尖鋭く額を斜に三寸ばかり傷けたり。汝景信、大俗凡夫の身を以て、此の佛弟子の日蓮を如何とするや、と日蓮は眼を睜き、はつたと睨んで大喝一聲叱退なせば、景信少し萎みたり。折から恰も日は暮れて夕霧罩むる木下蔭、やうやく天暗くなりければ、これ幸と跡を晦まし、武藏往還の市が坂といふ方に行き掛り、山根の洞に夜を明かしけるに、老婆一人現はれて、日蓮が額の疵を見るより、嗚呼痛ましき風情かな、肌にさへも猶辛き此雪風の疵に入らば、思ふに必ず惡かるべし、と自ら被ぎし綿帽子をば脫ぎ取りて、被り玉へと布施しける。今に日蓮が像といへば多くは綿帽子を戴けるも此因緣と聞えたり。吉隆の父行光は我子を失ひ歎きしが、信心いよ〳〵堅固にして、日蓮を迎へ取り、天津の眞言寺に入れて供養なし、法門の臣忠なれば其死も却々譽ありと厚く吉隆を葬りけるに、日蓮もまた涙に咽びて、

假令身命を野末の露となし刀劍の錆となさんも毫も憾むところは無し。さりながら絶えて久しく相見ざる老母にも會ひ、舊師にも見え、其他の人々にも今一度會ひ置かんとて、文永元年十月三日安房の國へ下つて、先づ年老いし母を慰めけるが、小湊より程遠からぬ男金村に小林民部實信といへるもの、豫て日蓮が父重忠とも親しかりしを緣として、日蓮が法義を信ずるものから、其子藤十郎とて十一歳になりけるを法弟となしける、六老僧の一人に日向と呼ばれしは即ち是なり。母を看て後日蓮は彼の華房の蓮華寺に入り、清澄寺に使を馳せて報じ置き、住持の僧の淨圓がため念佛無間書を著して諭しなどし居けるに、道善坊は老軀をば杖に助けられて辿り來り、聞く耳疎くも日蓮が說を靜に聞き取りて稍心解け歸りけり。こゝに豫てより篤く法華に歸依せるところの天津の城主工藤吉隆は、師の花房に在る由を聞き、使者を以て招待しければ、程遠からぬところなり、然らば行かむ、と日朗日澄鏡忍乘觀其他の男女を從へて、天津を目的に立出でけるに、神ならぬ身の誰か知らむ、立宗最初の日よりして深き怒を發したる地頭東條左衞門景信、百餘人をば引卒して小松茂れる原中に、日蓮今や來ると待ち伏し居たり。此方は少しも心づかで、道芝の露踏みしだき、漸く進めば忽然として叫び聲起ると齊しく、手に〳〵利器を持つたる武士等露れ出で、阿彌陀の佛敵思ひ知れよ、と無二無三に日蓮目がけて斬てかゝりぬ。すは法敵の卑怯の振舞、刃に掛けて我が正法を滅却なさんずる企畫なるは、と人々齒咬をなして怒り、師に過失をあらすなと騷ぎ立つれど、武

相識りし江川太郎左衞門吉久の一家を率ひて韮山に移り住み居けるを點化し、漸く法華の宗風に四圍を靡けゝるが、鎌倉名越の庵室にてはまた不在を管れる日昭日朗等敎化に油斷あること無くして、天台の僧大乘坊といへるを日朗は弟子として從へなどし、いよ〳〵法燈の光を揚げぬ。かくて伊東に在ること三年に及び、四十二歲にて漸く鎌倉に歸るを赦されければ、法弟檀越等の悅び比ふるに物無く、まづ〳〵無事にて歸り來ませし其祝儀を申ぶるにつけても今後の上を案じわづらひて、今は宗門の徒も稍多くなりたれば、他宗對治は少時措きて自門の敎化ぞ望ましき、と云へども日蓮肯かばこそ、病に藥は癈し難し、邪宗謗敎の多き中に、何條折伏の事を止むべきやと、奮つて法輪を轉じける。爰に駿州松野の人松野六郎左衞門が一子に松千代といへる者、叡山に登りて修學し居けるが、宗風心に染まずして本國に歸り、彼の實相寺の智海より日興の事を傳へ聞き、鎌倉に來りて日蓮に見え、一見直ちに歸服して法弟となり、日持と名のりぬ。これ後年に六老僧の一と知られし能登阿闍梨日持にて當年二十一歲なりき。

第十五　負傷

大聖釋迦如來さへ猶且一世の怨嫉を受けて、大小の難に遇ひ玉ふこと少からず。况や日蓮今法華の大旆を立てゝ諸宗を退治せんとするに臨みて、恨を買ひ惡を受けんことは固より期するところなり。

と云ひ捨に舳を旋して船は歸りぬ。吼ゆるが如き聲をなして浪は脚下に立狂ひ、嘯くやうなる響をなして風は耳邊を掠むれば、流石に大膽不敵なる日蓮もまた離れ岩に取り縋りしまゝ爲ん術を無み、唯御經を讀誦し居けるに、川奈といふところの漁師彌三郎といへるもの、此體を見て船を漕ぎ寄せ救ひ取り、我が家に迎へ入れて、夫婦諸共いと懇切に介抱しける。されば其後日蓮より彌三郎に與へし書に、當時の事を記しありて曰く、態と使を以て粽、酒、干飯、山椒、紙品々給び候ひ畢んぬ。又使申され候は、御隱させ玉へと申上候へと、日蓮心得申すべく候。日蓮去る五月十二日流罪の時、その津に着きて候ひしに未だ名をも聞及びまゐらせず候處、船より上り苦み候ひき處に懇にあたらせ給候ひし事、いかなる宿習なるらん、過去に法華經の行者にて渡らせ玉へるが、今末法に船守の彌三郎と生れかはりて日蓮を愍み給ふ歟。縱ひ男は然もあるべきに、女房の身として食を與へ洗足手水其外の事、さも懇なること日蓮は知らず不思議と申すばかりなり。殊に三十日あまりありて内心に法華經を信じ、日蓮を供養し給事いかなる事の由なるや。かゝる地頭萬民日蓮を憎み嫉むこと鎌倉よりも過ぎたり。見る者は目をひき、聞く人は怨む。殊に五月の頃なれば米も乏しかるらんに、日蓮を内々にて育み玉ひし事は、日蓮が父母の伊豆の伊東川奈と云ふ所に生れかはり給ふ歟云々と。

日蓮伊東にある間に、伊東の領主莊司八郎左衞門朝高、其親族の綾部正淸等を服し、曾て和泉にて

疾く鎌倉に馳せ上りて實否を尋ね探り、我師猶在さば迎へ取り來よ、と家隷に命じて鎌倉に到らしめければ、日蓮これに迎へられて下總富木の館に下りぬ。我が師の無事の面を見て胤繼の悦び云ふばかりなく、法華堂を營みて說法の筵を開きけるに、曾谷入道敎信、秋元太郎、太田乘明等を初めとして改宗信仰するもの少からで、法筵日々に賑ひけるが、今の日蓮宗の一大山たる中山の法華經寺といふは即ち當時の此の法席の其蹟なり。かゝりしほどに名越の庵も燒亡の後、富木を初として近頃信伏なしたるところの駿州上野の南條兵衞七郎等が力に依りて復た建ちければ、法弟檀越の心を察して再び鎌倉に赴きけるが、挫折に會ふごとに勇氣倍する强盛の日蓮一度庵を焚かれしより舌鋒銳き上に銳く、四方八方の宗門を切り捲りけるにぞ、遂に政廳の惡みを受けて何といふ廉も無く唯異議を立つるの罪に問はれて伊豆の伊東へ流されける。法弟檀越歎けど甲斐無く、取分け日朗は由比が濱邊の砂礫に伏して泣き悲みしも、情を知らぬ官人に引隔てられ、日蓮は船出して伊東の浦に着きたりけり。

第十四　伊東

船の伊東に着く頃ほひ、風荒くして波高く、磯際に船を寄すること難かりければ、浪の打越す巖の上に流人待遇の慈悲無くも日蓮を置去りにして、彼所に黑く見ゆるが即ち伊東の浦なれば自ら行け、

目たり又樞機たるものなれは、要を摘んで解說せんに、先づ金光明經大集經仁王經藥師經の四經に據つて、災異の來るは、世の正に背き、人の惡に歸し、善神は去り、正法は蔽はるゝより、惡魔厲鬼の來つて爲すところなることを明し、次に法然が選擇集を破斥して、正法を蔽ふものなることを辯じ、たゞに淨土を冀ひて三部經の他の餘經をば捨閉閣抛の四字に付するの甚しく非なるを叱し、次に正法を謗るの大罪過なるを說き、次に法華經の眞實敎大乘經最勝經たるを說き、結末に法華を尊信し念佛を抛下せずんば災異は今よりも猶多く來らんことを示して終るまでを問答體に書き綴りしなり。されども訴狀餘りに過激にして、世間と相違すること太甚しかりければ、執權も驚くばかりにて採用せんとは思ひも寄らず、其まゝにして等閑に付し去りしかば、之を聞きたる諸宗の者ども悅ばざるはあらばこそ。豫てより彌陀を此土に無緣と斥け、善導法然を邪師と罵るに、憎みても猶餘りありと思へる狂僧日蓮めは、執權職の御覺えも目出度からずと聞く上は打殺しても大事無からん。阿彌陀如來の怨敵に憂き目を見せて吳れんず、と其八月の二十七日名越の庵に夜討をなし、火を放つてぞ攻め立てける。幸ひにして日蓮は逃れて後面の山深く山王堂の奥に入りしが、法弟の能登坊信徒の進士太郞等數人は居合はせければ、棍棒を取り大刀を拔きて防ぎ戰ひしも、身に幾ヶ所か創を被り、草庵は一夜に灰となりぬ。彼の下總の若宮なる富木播磨守は大に驚きて、風說若し眞實ならむには日蓮既に燒き殺されたらんが如く、由々しき大事宗門に起りたることとなるが、

第十三　立正安國論

天災地妖數々起りて人心甚だ安からざる折しも、正嘉元年八月二十三日鎌倉に大地震ありて、愈々人々恐れをなしけるが、日蓮は此の異變をば佛法眞を失ひしより起りしとして一篇の書を作り成し、時の執政北條時頼に致して天下の弊を改めさせんと、先づ的證を佛說に取らんがために、一切經を藏せるところの駿州岩本實相寺に至り、其經藏に入つて旦暮撓まず讀經する間には乞はるゝまゝに天台止觀の講義を爲して寺僧に聽聞せしめけるに、此寺より出でゝ三井寺に遊學なし居し伯耆坊といふもの母の喪に中りて此地に歸り居けるが、一度日蓮に見えしより夙緣や深かりけん歸服の念を抱くこと切にして、鎌倉へ歸らんとするに及び沼津まで追ひ來り、法弟とならむことを乞ひければ、名を日興と命じて大戒を授けゝる。是ぞ後には六老僧の第三位に坐する人とはなれるなりける。實相寺に在りし間に父重忠世を逝りしかば、日朗を將て故郷に到り、父を吊ひ母を慰めて復鎌倉に歸りけるが、天災地妖つゞきし上に、五穀豐らで民百姓の飢餓に殪るゝもの多く、世態たゞ事ならず見えければ、これ皆佛法非なるが故と信ぜる日蓮默すべきや、遂に一篇の勘文を作りて之を立正安國論と名づけ、彼の大學三郎能本が近き頃鎌倉に下り居れるを幸ひとして字句を正させ、文應元年七月十六日奉行宿屋左衞門光則が手を經て執權時頼に致しける。此の一論は日蓮が一世に最も眼

揚げて高く呼べば彼方より小艇を下して迎ひに來りけるにぞ、急ぎ飛び乘りて本船に至り、絶て久しき挨拶をなしけるに、富木胤繼は日蓮が未だ教法のことを說かざるに先だちて、眼を瞬り聲を荒らげ、汝如何なる修行をなして故郷の安房へは歸りしぞや。此頃人の語るを聞けば、舌に任せて諸宗を罵り、自己一人の我を立つる由。學問に慢じて魔に憑かれしか、道念撓みて外道に墮せしか。汝の如き痴者を養ひたてゝ佛門に仇をさするに至りしは我が罪にして此口惜しさ言葉の及ぶところにあらず。我が前に居て似而非法門など語らば細頸切て捨てん。疾く立去れ。と斥けゝるが、日蓮如何でか屈すべき、君は猶一を知つて二を知り玉はず、我諸宗をば罵るは魔に憑かれしにもあらざれば又外道に墮ちしにもあらず。まことに佛の眞實の敎を弘めんと思へばにて、諸宗こそ却つて誤謬はあれと此日蓮は堅く信ず。其理由は如是〳〵。と細に說て示しければ、理の解らざる人ならぬ播磨守は心解けて、自己が麁忽を深く謝し、此上は我從來の宗旨を捨てゝ法華に歸せんと堅く誓を立てにける。日蓮これより益々奮つて日毎十字街道に立ち、聲を嗄して諸宗を攻めけるに、降伏するも無きにはあらねど、多くは惡口雜言して瓦礫を飛ばす輩のみ。房州天津の領主にて工藤左近之亟吉隆、武州荏原千束の鄕士にて池上右衞門太夫宗仲、其緣家にて荏原左衞門義宗、甲州巨摩郡波木井の土豪南部六郎實長なんど云へるは如是中に在て信念堅固に從ひけるが、後年身延山を獻じて法華一宗の本山となせしは、此南郎六郎實長なりけり。

日蓮最初に父母を敎化し、今又學行等閑の輩ならぬ日照を得て、勇氣いよ〳〵加はりつ、名越の往還近くなるところに毎日出立ちては、西に馳せ東に走る街頭の客も緣あらば我が言を聞き心眼を開きて法華を信ぜよと、念佛乃至其他の宗旨を論破なしては眞實の法華の利益を說き聞かせけるに、豫てより異なる僧と噂仕合ひし名越の庵主が說法を始めつるぞ、如何なることを云ふやらん、と近くの者より語り初めて其評判の隱れなければ、遠くの路を特更に來て聽聞なすものも漸く出て來ぬ。されども例の世間に在りふれたる法門とは差ひて、念佛を破し、眞言を棄て、禪をも呵り、律をも罵る法門なれば、聞く者ども大抵承服すること無く、賣僧よ發狂よと嘲み罵るものゝみ多かりしが、北條の一族江馬遠江守が近臣にて四第金吾賴基といふ者歸服し、次て其友進士太郞善春といへるも信仰し、下總能手の人印東治部左衞門有國といふ者は尊仰の餘り其子吉祥とて十歲なるを乞ふて弟子となしける。後年法弟多きが中にも日朗上人とて名高きは即ち當時の吉祥なりけり。こゝに日蓮が蓮長と云ひて叡山其他に修行せし中、其學資をば與へ吳れしは、上總下總を跨ぎ領せる富木播磨守胤繼と云ひて、日蓮が母梅菊が家とは聊か繫がる緣ある者なりければ、十餘年の間衣食筆墨の費を助けしなるが、日蓮は先づ報恩に其人を化度せんものと下總若宮に赴きて尋ねしに、今朝船に乘りて鎌倉を目的に出しとの事なり。望は失ひたれど追はゞ或は船を見ることを得ん、と磯傳ひに步を疾めて鎌倉の方へ去りけるに、果して家の紋印つきたる旗を海風に吹き靡して行く船あり。聲を

ありけるに、或時訪ふ人も無き庵前に履の音して年の頃三十あまりの品よき僧、いと慇懃に禮拜なしつ入來り、貧道は成辨とて久しく叡山に學びたる者なるが、慈覺大師は傳敎大師の法を亂せしものならむとの不審を抱き初めしより、頻りに之を質せしところ、汝は蓮長が弟子にはあらずやと問はれぬ。貧道蓮長といふ名を知らねば、如何なる人かと尋ねしに、無動寺の尊海といへる人委しく語り聞かせくれしかば、我より先に我と同じき說を立てたる人ありし歟と思ふにつけて懷しく、また宗風の濁りたりと我が思ひ做す叡山に長らく在らむも心ならずど則ち三塔を後に見棄て、名のみは知れど面も知らぬ蓮長といふ師を尋ねん、と遙々此處には來りしなり。貴僧は蓮長師に御座さずや。渴仰の念に堪へざりし。と誠心を面に現して述べければ、日蓮もまた不思儀に思ひて、庵に止めて物語り試みけるに、辯才かしこく思慮明かに、凡常ならぬ才器なり。成辨は是より日々種々の疑問を持ち來つて敎を受けゝるが、遂に大戒を受けて改めて弟子とならんと云ひ出しければ、名を日照と與へて第一の弟子となし、我これよりは諸宗を對敵に大法戰を開くべければ、汝は後に能く踏み止まりて後陣の備を崩すなかれと密に命をぞ傳へける。此成辨は日蓮が六老僧の第一と後に呼ばれし僧なりけり。

第十二　說法

隱れ居る由、其路を取らば最危し。斯樣來玉へ。と先に立つて、同窓の好誼に西條郷華房蓮華寺といふ眞言の寺に導き入れける。これ日蓮が一生に受けたる苦難の初にて即ち立宗第一の說法よりして來りしものなり。

註畫讃、並に化導記には、弘通の初は三月二十八日と云ひ、上人自らの書簡には三月とも四月とも書けり、化導記に擧げたる義の如く閏月などなりしや、未だ詳かならずといへども孰を採るも妨無し。

第十一　名越

蓮長少時蓮華寺に隱れ居けるに、誰いふとも無く博學の僧蓮華寺に在れば其說法を聞かんもの、と衆庶集まり來りければ、望むところと、說き出しけるに、彼の淸澄にて說きしところと同じ意のことなれば其所にてもまた聽くもの肯んぜで、理も非も分らず責僧め狂人よと罵しく罵り騷ぎけるゆゑ、寺にても亦蓮長を匿ひ置くを欲せざりけり。今は是非なし此國を去つて鎌倉に出で、思ふところを果さんと、父母を小湊に訪ひて暇を告げ、自ら名をば日蓮と改めて、五月の中旬相模の國へ船にて渡り、鎌倉の景況を十餘年ぶりにて目擊しつゝ大町の南、名越の東の山際に、小やかなる庵を作りて其處に住し、經文讀誦の其間には紹介を求めて鶴岡の經藏に入り勉學するのみ又他事も無く

逆立て、骨ばかりなる手の拳を握り固めて牙咬み鳴らし、我とて法華經を知らぬ事かは。汝ばかりが法華經を知り顏にして誇りかに說くさへあるに、法華經を信じたりとて他の諸宗特に眞言宗までを惡口すべき所以やある。汝は狂氣したりしよな。此發狂の蓮長を山より外に拽き出し捨よ。と皺がれたる聲ふり絞つて叫び立つれば、此方には地頭の東條左衞門景信道善坊に打對ひて、無禮無法の蓮長めがまだ喙靑き分際を以つて諸宗の高僧碩德を小兒の如く云ひ做して我見を立つるさへあるに、眞言亡國なんどゝ云へるは、此山に對して濟むべきことか。彼の樣なる者は如何なる事を云ひ出さんも知るべからず、寺內を穢すを恐るゝ故刀の柄に手は掛けても其鯉口は切らざりしが、如是者をば其儘に活かし置くこと成り難ければ我申し受けて連戾り、屹度制敗致し吳れん。許し玉へ。と云ひ出たり。道善坊は大きに驚き、さはさりながら狂氣となれる者ゆゑ何と詮方無し。たゞ此坊に任せ玉へ。篤と懲らして正氣にせん。と强て生命を乞ひければ、地頭も是非無く歸りける。道善は景信の歸りし後、蓮長を招きて呆れながら、今日汝のせし說法は抑何たる事どもぞや。心を飜さんには好し、然らずは山には置き難し。何地へなりとも立退きて彼の左衞門が眼にかゝらぬやうに爲せよ。と、怒りても猶師と弟との恩愛籠れる敎訓は骨身に浸みて有り難けれども、心を枉ぐべきことにあらねば、默然として蓮長は麓を指して下りけるが、後より追ひ來る二人連あり。誰ぞと見れば淨顯義淨にて、蓮長御坊待ち玉へ、彼の東條が一類は御坊の山を下るを待つて切つて棄んと

初めとして貴賤老若集まり來り、片唾を呑んで待ちかけゝるが、頓て出堂の太鼓鳴ると齊しく、蓮長高座に現れて、さて徐に聽衆に對ひ、聽衆等耳を欹てゝ聞け。抑も成佛得脱の因となるべき大善は、妙法蓮華經に據りて信念堅固に行ずるに在り。法華經は是經中の王、開顯眞實の御經なり。如來一代の御説法多しと雖ども是に超すべき事ある無し。されば御經第二譬諭品には若人信ぜずして此經を誹謗せば則ち一切世間の佛種を斷ぜんとあるぞ。無量義經には四十餘年未顯眞實と説き玉ひて、法華經の眞實なるを明し玉へるぞ。然るに淨土の法然は念佛を勸めて選擇集を著し、眞言は大日を尊んで釋迦如來を蔑視る、禪宗は敎外別傳と稱して徒らに彼方此方へ滑りて止らぬ法門を立て、律宗等南都六宗は歸伏狀を書きて桓武天皇に奏しながら猶衆生をば濟度せんとす。凡そ此等の無得道の權敎は夢中の夢の如く有名無實にして益無きことぞ。かゝる諸宗を去らずんば成佛思ひも寄らざるぞよ。念佛無間禪天魔、眞言亡國律國賊、邪法小法賴むに足らず。是我が一己の料簡ならで皆經文にて見決めし事なり。今こそ法華經流布の時、上行菩薩の出玉ふ時なり。汝等迷を執るなかれ。と、法華經を高く提げ案を打て獅子の吼ゆる如く說きたりければ、聽衆急に騷ぎ立ちて、無法の賣僧めと罵るもあり、烏滸の痴人めと怒るもあり、阿彌陀佛を惡樣に云ひて汝其口が裂くべきぞと責むるもあり、自己が宗旨の眞言をも腮の動くに任せて罵る謀叛に等しき大罪人と叫ぶもあり。中にも此山に年經て住せる圓智坊といへる老僧、凹みたる眼に氷の如き涙を浮め、霜より白き眉を

々修行いたせしに、畢竟は佛の說き玉ふ眞實はたゞ一ッなれど、諸宗の祖師等自己一人の機緣に引かれて、我が泥める權敎方便の經論をば第一の者と誤りなどし、遂に當時の如くなりしと堅く信じて疑はず。かゝれば我は身を捨てゝも妙法蓮華經を弘めて、如來の眞意を世に諭し、方便小乘の諸經を執する盲師の所說を論じ破り、末法五濁の暗夜をば照らさんとする大願を立て、既に决定なし果たり。されば此後八宗九宗乃至一天四海の者に惡まるゝとも不退轉の覺悟は決して飜へさじ。身のある限り息の根の續かん限りは念佛、佛心、其他の諸宗と戰ひて法華の爲に死せんのみと思ひ居れば、如是父上も思し玉へ。と答へけるに、母の梅菊先驚きて、最初は彼に角遮りしが、其理に爭ふべくもあらねば父母とも遂に從ひける。蓮長如是は思ひながらも清澄に歸りては默然として口を閉ぢ、たま〳〵花洛の方の佛徒の動靜諸宗の敎理なんどを問ひ試むる者ありても、比叡の山は風荒かりし、高野の山は雪深かりし、と談話を他所に紛らして、深くは何をも語ること無く、無事閑寂の其中に勇氣を養ひ居たりけるが、其年も暮れ、春回りて、建長五年となりての夏、卯月の廿八日に、朝日は波の底より出で、微風凉しく梢を拂ふ時しも徐歩して房を出で、紅光滿る東天に向ひて高く南無妙法蓮華經と十度ばかり繰返して唱へける、是ぞ今日猶榮ゆる法華一宗の誕生の初聲と後に知られける。豫て此日は說法のあるよし觸れしめ置きければ、十年來京師に上り南都に漂泊ひ、苦學を積んで歸りたる蓮長の說法は、定めて聞くに足るものあらん、と郡の地頭東條左衞門景信を

定めし行解とも大いに進みしことならむ、面貌風采も氣高くなり英氣滿ちたる人となりぬ、我は眼の精も盡き歩行も杖籍る身となりたり、此後は此寺を出づること無く我が身の末をも看て呉れよかしと、一方には炊事の僧に無事歸山せし祝儀の饗膳を出させ、一方には人を馳せて蓮長が父次郎重忠に其悦びを告げゝれば、次郎も急ぎ登山して、道善坊に淺からぬ恩義を謝して歸りける。

第十　立宗

蓮長歸山の翌朝に下山して小湊に到り父母の機嫌を訪ひけるに、父重忠は笑を含みて、能こそ長き月日の間空し心も出さずして佛法修行いたしつれ。昨日道善御坊に見えしに、御坊の我に云はるゝやう、此の山に僧多けれども我が法脉を續がせんは蓮長の他にあるべからず。我は年さへ甚く老たれば程なく寺を彼に讓らんと思ふなり。と、いと有難き仰なり。かならず暫時は足を停めて千光山に愼み居よ。悦ばしきことと必定有らん。と子を思ふ親の情にて、今や蓮長が胸の中には天下の諸宗を摧破して法華の大旗を押立てんとの大勇猛心勃々たるをも知らで、邊土の一山一寺を領する身となることを何程か悦びつべき事の如く說き聞かせらるゝ蓮長が心の苦しさ。思へるまゝを有體に云ひ出さんには父母の驚き當座の不興は免れず。さりとて言はで終るべくも無ければ遂に勇を鼓して、父上少時聞き玉へ。我佛門に歸してより、同じ釋尊より出てし敎の八宗九宗と分れしを怪みて、漸

とは往來せしこと數々ありて互に面は知り居けるなり。蓮長圖らず能本に會ひしより我は儒を學びて佛を授け。彼は佛を受けて儒を敎へ、二人各自相益して儒佛二道を窺ひ合ひけるが、何時まで京都に在るべくもなければ蓮長其後横川の華芳谷にと立歸り、安然流の慧心流の安海流のと叡山の衆徒等が流派の異同を爭ひ箇々區々に誇り合へるを他所に見なして、唯一心に天台大師傳敎大師の所示所説をば尋ねつゝ、心を法華無上義に委ねて、愈々堅く自ら思ひ決むるところあり。佛法廣大にして際涯なく、佛説多途にして思量に及ばずといへども、其要をいへば眞實の敎勝れ、其經を擧ぐれば法華經優りたり。方便の敎は家を建つるための足場に過ぎず、餘經は了義至極の法華のための門梯なり。今末法の時に當りて法華の醍醐味ならずしては如何でか業障多く深き衆生の病を醫するに足らむ、と思ひは定めたりけれど機を見て之を發せんと、深く藏めて無きが如くする良賈を學びて輕々しくは口に出さず居たりけるが、建長四年の冬となりて蓮長爾時三十一才、立つこと疾き月日をば十年餘りも學窓に費し盡して今は腹笥も十分なりと、數年骨肉の交りをなしたる學友等にも暇を告げ、彼の尊海にも名殘を惜みて遂に比叡の山を出で、京都の淨本夫妻にも別離を告げて鷄が鳴く吾妻をさして歸る途中、伊勢路の間の山といふ地の淨明寺といふに少時止まりて、我が日の本の太廟に法樂の讀經を捧げ、それより幾千の山河を越えて記臆ある樹も老て茂れる清澄寺に歸り着けば、老師道善は手の舞ひ足の踏むを知らぬまで悦びて涙を浮め手を握り、長き間の學問に汝は

を學び盡し、猶飽けりとせて率これよりは紀伊の伊都なる高野に上り、玉川の水、御廟の橋、あらゆる密嚴淨域の靈蹟をも見、大日蘇悉地の經意の會釋をも尋ね、印契眞言觀門の三密行は故郷なる清澄寺にありても知りしが、猶よく秘蘊を探らんと紀の路にかゝりて遂に登山し、一冬を其山に路しつゝ、口唱身行油斷無く、明けての春に京都に歸りぬ。

第九　歸省

蓮長京都に一ト先歸て少時苦學勤行に疲れたる身心を彼の淨本が許に休め居けるが、こゝに淨本が年頃親しみたる儒者に大學三郎能本と名乘れるものあり。九經百家に明かに通じ、文章詞賦にも拙からず、貴紳の間に其名を知られて、地下の人にてこそあれ才學の光に稍其身を輝かし居たり。蓮長其人の噂を淨本が談話に聞きて、さらば兎に角尋ね見んとて、其寓を問ひ面會しけるに、思ひもかけず其人はこれ未見の客にあらで故郷なる安房にて知りし人なりければ、互に奇遇を感じ合ひぬ。能本と今名乘れるは比企の判官能員が季の子にて、能員北條と不和に及び一族滅せらるゝに臨み、一沙門のため助けられ房州に久しく潛み居りしが、後密に京都へ上り來り、公には僧となりし如くもてなして、儒を以て家を興し、比企の氏を韜み大學と呼べるなりければ、蓮長は當時猶幼稚く能本は稍長けたりし年齡の差こそはあれ、同じ浦曲に程近く住へる同士のことなれば、蓮長が父重忠

樂の釋跡を熟讀咀嚼なしつ、傍視もなさず天台宗の學を講じて倦まず疲れず、三塔の學衆を敵手に論辯攻究日を送りけるが、遂に東塔の圓頓坊といふ一院に住持たらしめられ、頓てまた横川華芳谷淨光院をも兼ねしめられて、年月を此山に送りける。此の叡山の始祖傳教は、全く天台の學風を傳へけるが、後慈覺といふ大才のもの出るに及びて、宗義に加ふるところありき。慈覺が加へしところのものは理同事勝の一義にして、天台の理に兼ぬるに蜜敎の事を以てせし如きものなるが、蓮長は此時早くも當山の風慈覺に至りて亂されたりとの意見を抱きて、後年には慈覺を獅子身中の蟲とまで罵るに至り、從つて天台以外に法華の一宗を建立するに及べるなりけり。

蓮長叡山に在る間、折節京都に下りては五條油小路に書肆を營める天王寺屋淨本といふものゝ方を假寓として禪宗臨濟派の高僧圓爾和尚に見え、又禪宗曹洞派の大德道源禪師にも親み、唐の禪僧道隆蘭溪禪師の會下にありては直指人心見性成佛の敎をも探りけるが、又思ひ立ては江州滋賀の三井寺とて中興智證大師以來顯蜜兩途の道場なる寺にも到りて親く其風を窺ひける。かゝりしほどに比叡京師三井寺の狀態も殆んど知盡し、胸底深く是非するところありけるが、いで是よりは靑丹よし奈良の京に赴きて世に奈良學と傳ふるなる彼の七大寺六宗派の風をも觀んと志して、知れる僧より紹介を受け、まづ元興寺に入り三論宗を學び、傍倶舍宗をも攻究し、法相宗をも問ひ質し、東大寺に移つて華嚴宗を究め、彼の獅子鎧三藏が成實論を根元とせる成實宗より、唐招提寺の律宗まで

はむには機會乏し、若かず是より復び鎌倉に出で京に上り、叡山に傳敎慈覺が學風を尋ね、奈良に六宗の所説を問ひ、あらゆる靈山道場を參拜なして到るところの高僧明師に接せんには、と心を定めて復再び師の道善坊同窓の義淨淨顯等に暇を告げ、飄然として一笠一杖鎌倉さして上りけるが、鎌倉の舍にて圖らずも叡山の座主信尊の法弟尊海といひて叡山四俊の一と稱ばれたるものに會ひ、我は法用ありて此地に來りしなるが今は既其事果てたれば歸山せんとす、貴所叡山に登らんとする望あらば我伴ひてまゐらせん、と云はるゝまゝに悅び從ひ、袂を連ねて鎌倉を出で、足柄の關、富士の裾野、矢矧の川も打越えて尾張路を經つ日數重ねて彼の坂本より、阿耨多羅三藐三菩提の佛達我が立杣に冥加あらせたまへ、と新古今集に傳敎大師が遺されし和歌に俗人も知る比叡山にぞ着きにける。此山は名に負ふ天台の本山にして、始祖傳敎波路遙けき唐土に渡りて天台智者大師の法脈を傳へ來り、我が朝に歸りて後南都の六宗を破して天台一宗の礎を定めし靈場なれば、尋常一樣僧堂佛院の列にはあらで、溪清く山秀でたるところに堂塔天を摩して聳え、花香しく風凉しき中に房舍簷を連ねて立ち、梵唄誦經の聲は鳧磬洪鐘の響と共に絕ゆること無く、出岫入谷の雲は香火護摩の烟と伴つて常に靉く、莊嚴淨寂の光景は眞に吾が邦の靈鷲天台とも云つべきに、蓮長ほとほと感に堪へて、我此山に久しく住して願はくは難解難入の甚深法門をも明らめ、平生の大望を成就して、正法正路の眼をも開かん、と悅び勇みて、こゝに法華經を我が本分とし、天台、章安、妙

大阿が命數終りて死せる時の狀を他より傳へ聞けば、尊宿老師の最期ならば紫雲たなびき音樂聞こゆる迄こそあらざれ臨終極めて安らかに正念違はず往生すべきに、泣き叫びつゝ虛空を摑みて七顚八倒の後僅に眼を瞑せしといふにぞ、あな淺間敷末期や、と大に怪み愕きける。

覇府鎌倉も泰平の日の久しきまゝ奢侈の風漸く起りて、坂東武者も馬の毛色に好みをなし、刀の裝飾に思を費すやうなりければ、庶民はもとより出家にさへも其俗移りて表面を餝り實を忘るゝものゝみ多く成りまさり、思ひの外に鎌倉に在りても得ること少ければ、假寐の夢を旅の宿に結びしも既五年となりぬ、一ト先故鄕に歸らばや、と蓮長は其裝して都を立ち、淸澄寺に立歸りぬ。

絕えて久しき對面なれば、師の坊はじめ同學の僧等との話も盡くると無き其中に、人々はたゞ只管に蓮長が才學いよ〳〵長けたるに感歎舌を卷きたりけるが、如是て淸澄に在る間に、蓮長初めて筆を執て、戒體即身成佛義と名づけし一章を著して山内衆徒に示しけり。これ宗門の書にはあらねど日蓮大士が第一着の著述にして、仁治三年、年二十一の時のことなりけり。

第八　遊學

淸澄に留まること良久しくして、蓮長つく〴〵思惟するに、かゝる邊土の浦近き山懷に住居しては、靜に觀念の想を澄まし嚴に散亂の心を攝むるにこそ便宜はあれ、未覺の理を覺り未窺の境を窺

行と云ひて忌むことぞ、唯一向に稱名せよ、と諭し玉へば我等は乃ち其說敎に從ひしが、我等ばかりか當世は、貴き人も博識も皆其敎訓に隨順して、稱名申さぬ人も無し。されば釋尊の御像をも納戸に退け藏め置きしに、兒等の見出して弄りしならむ。と良き事にても爲たり顏に語るを聞きて且は呆れ且は驚き、又憤り又慨き、此土の敎主釋迦佛を禮拜するを雜行とて忌むとは如何なる非法ぞや、同じ佛徒の中にありて如是ことをば敎ふるとは、何の聖經賢論に據りての事か知られざれど、案の外なる事どもなり、と法衣の袖に面を掩ひて少時言葉も無かりけり。

第七　觀　察

途中の一宿に圖らず大阿上人の名を聞きしより、蓮長は鎌倉に着くと頓て大阿が庵を問ひ尋ねて好見といふ地に到り、群集に交りて壇下に坐し、如何なることを說くやらむ、と其法談を默聽しけり。そもそも大阿が擴むるところの淨土宗と稱ふるものは、阿彌陀經、觀經、雙觀經と往生淨土論とを所依として宗旨を建てたるものなり。我朝の法然上人一切の經論を閣きて、他力を賴み念佛せば成佛得脫疑ひ無き由の義を撰擇集に唱へしより、淨土の宗風天下に播揚りて、華嚴眞言佛心等の諸宗を壓する勢ありけるが、蓮長は能く此宗の安心の定め修行の次第をも見諦めんと、大阿の他にも然阿上人なんどゝ呼ばるゝ僧の許にも趣きて切りに勉學なし居たりけるに、二年ほど經て彼の好見の

第六　感慨

螢雪の功やうやく積みて、蓮長今は一山に師として賴むべきものも無く、新に讀むべき書も無くなりけるが、剛邁勇猛の性として如何でかこれに滿足なすべき。いで此上は片里のかゝるところに長く居て固陋寡聞に暮さんより世上の俊傑も方外の龍虎も共に群なす鎌倉に出で、長者を尋ね碩德を訪ひ未見の書を讀み未聞の義をも聞かんずものと清澄寺を辭し、上總の國より下總を經て古歌に名高き都鳥の今も變らで遊ぶなる隅田の川を舟渡りなし、とある里にて一夜の宿を假りけるに、戶主は家廟に打向ひて念佛の聲などくど／＼とさするを見れば佛法の名をだに聞かざるものとしも覺えられぬに、家の兒と見ゆるが立ちたる釋迦の木像を土偶やら鳩車やらの玩具と共に弄り遊びて、其手の缺くるをも其の鼻の損ずるをも心無しにて顧みざるを、勿體なと止めもせざれば不審起りて、爐を中にして主人との閑話の次に質しければ、主人は少し笑を含みて、御不審あるは道理なれども、我等は阿彌陀を信ずる者にて、釋迦をば賴みは申さぬなり。當時鎌倉露が澤に大阿と呼ばるゝ智識ありて眞に尊き念佛の安心の法を說き玉ふを、我等鎌倉に上りし節數次聞きしに、一代聖敎法門多きも、末代濁世に生れし我等は、自力の修行覺束なければ阿彌陀如來の願力を賴みて往生するより他に淨土に參らむ便宜も無し、たゞ一向に念佛せよ、釋迦藥師など種々のものに心を寄するをば雜

妄語妄動妄想するを甚く憫み玉ひて説き出されしものなれば、本師は實に一人なり、本義は實に一義なり。決して異師の有るべき解由なく、決して異議の有るべき理由無し。然るに妙相金棺に隱れ、鷲嶺悲雲に包まれてより、先づは南北に分れ、終には八宗九宗に裂け、門々に法幢を飜して誇り、家々に法燈を掲げて耀ひ、華嚴宗は其高きを稱し、佛心宗は其快きを道ひ、眞言宗は大日の威靈を藉りて即身成佛を説けば、近き頃より行はるゝ念佛宗は阿彌陀の誓願を背にして往生淨土を訓へ、互に吾が佛尊し吾が宗勝れりといふに至れりといへども、抑々本師釋迦牟尼世尊は華嚴宗にて渡らせ玉ふか、佛心宗にて渡らせ玉ふか、眞言宗か、念佛宗か、必ず以て然るべからず。天に二つ日あること無く、佛法二つの義あること無し。一佛如何で矛楯水火の敎を遺し玉ふべき。こは必ずや後世の者、或は誤るところあり、或は私することとあつて、是の如くに支離分裂をなすに至れるものならむ乎。畢竟如何の道理ぞや。との疑團に他ならざりけり。蓮長かゝる疑團をば胸の中に抱きてより讀經の眼は冴えに冴え、思惟の念は鋭きが上いよ〳〵鋭くなりまさりて、法兄淨顯義淨の二人を切瑳琢磨の友として寸陰を惜み分時を爭ひつ、獅子奮進の勇氣を以て勤行苦學するほどに、遂には山内虛空藏菩薩の堂の階砌を下る機に胸膈逼りて血を吐くまでに及びけり。今尚其地に生ずる笹の色異れるを人呼びて凡血の笹と稱するは此因緣によりてなりとぞ。

山出家第二の條に同じき帝延應元年つちのとのゐ十月八日みの刻に十八歳にてかみをそり云々。然るにこゝに十六歳出家の説に從ふものは大士眞實傳に據れるにて、眞實傳は化導記註畫讃より遙に後の作なるに、化導記註畫讃等を無論閲したるべき作者の特に古傳を排して十六歳嘉禎三年の冬とするものは必す確證ありてなるべきを信じ、且つ何にしても大士の德に損增すること無きに由り、姑く眞實傳に從へるのみ。少年諸子の中に或はたまく註畫讃等を讀みて疑ひを起す人あらむことを恐れて付記す。

第五　苦學

藥王麿は剃髮して蓮長となりしより愈々佛法攻究に其身を委ねて怠らず、星の光の漸く薄れて橫雲斷るゝ早曉の空より、草木も睡る夜深まで、暑きにも扇づかひせず寒きにも爐に近づかで、念頭少時も佛を棄てず、瑜珈三蜜の奧儀を尋ね、金胎兩部の秘軌を窺ひ、敎相には眞言三部並ひに諸論、事相には求聞持の印契等を相承なし、日と無く夜と無く、肺肝を碎き心膂を揉み、死力を盡して勉めけるが、次第に學を積むに連れて胸中に疑團漸く起りぬ。疑團といふは他ならで又佛法の事なるが、元來一切佛敎は大恩敎主釋迦牟尼世尊二千年餘の其往時印度に出現し玉ひて、世に邪道のみ蔓延りて人々深く迷ひを執し、惡路に沈淪し行くをも悟らで日々營々と名利に役され、衣食に縛され、

き僧にはありしならむ。藥王麿は登山してより老師に深くいたはられて文字書く術より小學論語の類の書を讀むことまで次第々々に授けらるゝに、意を注けて學ぶが上天稟高きことなれば、一二度三度にして字は體を成し、二遍三遍にして書は誦を成すに及びければ、一山大に驚き異み、天台大師は七歳にして普門品をば暗んぜしとか、其は中華の事なれど、是は邊土の魚釣る男、かぢ布苅る蜑が間に出來し兒の、如何なれば如是穎悟なるぞと感ぜぬものも無かりけるが、道善の兄に道義とて近きあたりの二間寺といへるに住持せる僧は取り別け深く嘆服して、斯兒侮り易からず、末には我等が宗風を四海に吹き靡かせんも知れざれば能く愛しみ育て玉へと竊に道善に語りけるとぞ。かくて月日は飛ぶ鳥の影より疾く過ぎ行きて、藥王麿が修學の窓前の花幾度か開き幾度か落ち、嘉禎三年となりけるが藥王時に齡十六、丁酉の冬十月八日、剃髮の式いと嚴重に梵唄誦經の聲澄みて兜樓婆の香煙佛顔を遶るが中に、棄恩入無爲眞實報恩者の文言を唱へて道善坊を導師となし、翠滴る髮を落し、色ある袖を墨染の袂にかへて、喝食より眞の僧と姿をなし、名をも是生坊蓮長とこそに改め呼ばれけり。

弘安五年十月七日日蓮上人自ら波木井播磨に與へ玉ひし書には、天福元年癸巳十二歳にして淸澄寺に登り道善御房に居て學問す延應元年巳亥十八歳にして出家云々。行學院日朝の元祖化導記には御書を引て曰く、延應元年己亥十八歳にして出家云々。また圓妙潮師の註畫讃には登

耕す農夫とせんも惜むべし、幸ひ自己も好めることゆゑ一人出家する時は九族天に生るゝと聞く其出家に身をなさせむ。後には僧都僧正の位にさへも器量次第にて上らるゝものにしあれば、大善知識となり濟まして人天の導師とまで成るか乃至は山寺草庵の中に一生朽果る歟は、這兒の才智修行に任にて、今より然るべき師僧に委ね徒弟となして貰はむ、と父母互ひに語り合ひて一時如是云ひ聞かせけるに、固より自己の好むところ又父母の命なれば善日肯はざるべくも無く、良き師に付けて玉はるべし、必ずともに勉め學ひて御仰せをば反古にすまじ、と言葉清しく答へけり。こゝに房州清澄寺と云ふ密宗の靈山あり。小湊よりは北に當りて人里遠き蘭若なるが、道善密師といへる老僧住持をなしてある由にて、持戒堅固に道徳高しと人の噂に隱れなければ、父重忠は日を卜して善日麿を從へつ清澄寺に上り詣り、是なる吾が兒を願はくは伽藍の中に留め玉ひて甚深佛法の理を敎へ九品の因をも種ゑしめ玉へ、といと懇に囑みけるに、道善密師も夙縁ありてや快く承諾して、すなはち善日に藥王麿と名を授けゝり。これ日蓮が佛に歸せし第一最初の因緣にて、齡は當時十二歲、天福元年夏五月十二日とぞ云ひ傳へぬ。

第四　剃髮

道善密師と聞えしは學問博く義解深かりし人とは書にも見えざれど忍辱和敬の僧德は必ず具へし好

近所の家の兒童等の四五人打連れ入り來りて、同じ程なる年齢なるも一つ二つは長けたるも皆一團をなしながら、笑ひさゞめき遊びし末、昨日は磯の端に釣して河豚を得たれば皮剝ぎて河豚の水出しを作らんとせし、今朝は名主が家の後の簷の瓦を引退けて雀の雛を捕りたれば玩弄て〳〵玩弄しほどに終に殺して捨てたりなんど、手柄顏して己が樣々鄙びたる言葉遣ひに言ひ出てければ、善日麿は頭を掉つて、其は情の無き振舞なり、大凡生とし生けるものの生命を惜まぬものやはある、床下に住む蝦蟇の如き蠢くばかりの愚しきものすら蛇を見ては逃げ、有るか無きかの翼を假りて風の吹くまゝ飛ぶ蚊さへ打潰さむとする人の掌をば避けんとするにあらずや、無益の殺生は良からぬことなり、報の無きにも限らぬものを然ることとせんより捉迷藏なり競走なりとも仕て遊ばむに興無きこともあらざるべしと、舌こそ巧には廻らね道理は正しく通りたる因由を說きて聞かせけるが、曉りてか將解り得ずてか、里の子供等は大欠伸して、アヽ睡うなつたと孰も歸りける。

第三　登山

善日麿は次第に長じて既十歲を越えけるが普通の兒等とは甚く異ひて、敎ふる人のあるにはあらねど神を尊み佛を敬ひ、惡太郎等と相伍して惡戯をすること更に無く、いと大人びて見えければ、這兒は網投ち釣を垂れて活計とする漁夫ともなさんは惜むべく、又犂を執り鍬を執つて圃を耕し田を

し短しむづかしき苧を績み續けて網を綴る、其暇には里の童に文字讀むこと筆握る術など敎へて月日を送り居けるに、承久三年夏の初梅菊妊みて、其明る歲、貞應元年壬午の春、釋迦が涅槃の日と傳へたる二月十五日の恰も翌日、天晴朗に風暴びず、潮にきらめく旭の色もいと美しく見えたる朝より産の氣徐に催しそめ、午の刻ばかりに玉の如き男子出生なしぬ。憂き中にも悅ばしくて重忠抱き取り見るに、額は廣く眉は秀で容貌端正にして神采凡ならねば、梅菊の日輪を崇敬するに緣みて善日麿と名を命じ、意をつけて養ひ育てける。後來日本に唯一人の妙法蓮華經の行者と自ら任じて群議を排し、百難萬苦を受くれど屈せず、挫折に遇ふごとに愈々奮ひ立つて遂に法華の一宗を立てたる日蓮上人は、即ち此の磯の香のする伏屋に生れて觸りも粗き望陀木綿の襁褓の中に包まれながら呱々と泣いたる善日なりけり。

第二　幼時

頻伽は卵殼の中に在りて鳴く聲早くも諸鳥に勝るとかや、善日麿は日を追ふて光り輝くばかりに美しく生長ち行くに連れて心操さへ老實に、空飛ぶ蝶を喚んで戯れ地に咲く花を摘んで弄びなどしつゝ幼稚月日を過ごす中にも自然凡常ならぬ氣象を露して、心無き里の爺嫗を驚かすこと折節ありけり。四五歲ばかりの時なりけむ、夕月晴れて風凪ぎたる浦の景色の長閑さに惡戯する事も無きまゝ

日蓮上人

第一　誕生

一切の江河海に入れば皆一味の鹹に歸するが如く士農工商の四姓も佛門に入つては同じく一釋氏にして分別ある無ければ、事々しくあなぐり尋ぬるには當らねど、日蓮上人、俗姓は三國氏ともいひ、或は貫名氏ともいひ傳へたり。遠く祖先を考ふれば鎌足公より出づと云へば姓は正しく藤原なるべし。父は貫名次郎重忠と云ひて、遠江國山名郡貫名の里に領居せる貫名四郎政直の子なり。重忠は父政直が所領を襲ぎて事も無く貫名に居けるが、時の執權北條時政に疑ひ思はるゝ事ありて、建仁三年五月七日家祿を沒收せられし上、安房國長狹郡に流罪と定められければ、罪無くて見る配所の月の影物凄く浪に碎くる東條市河の鄕小湊といふ海濱の寒村に落ちつきて、昨日までの賑はひ生活したるには引替へ、沖の小船に身を委ねて釣する賤が手業を學び、漁夫の如く成下りける。されど流石に由緒ある武士の果とて人品氣高く、藻汐火煙る濱の伏屋に人となりたるもの共とは甚く異へば、里の男女にも敬はれ居けるが、緣あるに任せて下總國路野邊なる大野吉清が女の梅菊といへるを迎へて妻とし、自己は春の拂曉に霞たなびく海遠く船乘り出して櫻鯛釣れば、妻は私の夜に長

思ふところあるが如く、天の一方を望んで無言にして佇めり。

予は此の一日有益なる談話を聞くことを得て、少からぬ愉快を感じたり。

歐州に先つの美を海外に輝かせり。佐藤坦撰するところの墓銘に曰く、夏后胼胝維君似之と。今忠敬測地の勞を以て之を夏后理水の勞に比するも、蓋し溢美に非るべし。忠敬人と成り勤儉眞率、精力殊絶、能く家業を治め、好で貧民を賑はす。其職を里正に奉ずるや管民大に其澤を蒙り、今に至り之を稱して衰へず。伏て惟ふ、明治中興、志士を追賞し、學者を旌奬す、高山正之、蒲生君平、林子平、佐藤信淵の如き、皆贈位の典あり。忠敬の星學製圖に至りては其功數子の上に出づるも決して其下に在らず。願はくは其勞を賞して正四位追贈の典あらんことを。果して然らば忠敬の偉業益々天下後世に宣揚し、地下の靈も亦將に皇恩の優渥に感ぜんとす。因て墓銘及家譜行狀事績を併せて進呈す。伏して采擇を乞ふ。

明治十六年一月　　二品勳一等　能久親王

太政大臣三條實美殿

嗚呼匹夫にして二品親王の推すところとなり、裁可せられて正四位を贈らる。其榮もまた大ならずや。而も先生の虛榮を愛せずして實學を悦べるより云へば、贈位の恩典、建碑の義擧も、尺璧に寸塵を加へしに過ぎずといふべし。欽仰すべきかな伊能先生や。

四十ばかりなる男は如是語り終りて止みぬ。二青年は希望に滿てる眼の光り涼しく、仰いでは乾然として樹間に聳えたる銅標を視、俯しては品海の烟波涯無きを瞰て、慨然として感じ、毅然として

て溘然として長逝したり。

日本全圖編成の事業は幾分を餘して先生易簀したりしも、後に人あり、先生が遺稿によりて、精細なる調査を遂げ、同四年に至りて完成せりと傳へらる。

其十

先生の逸事として語るべきこと二三あり。されど、暑もやゝ移りたれば、後の日また語るべし。今は吾が此手帳に錄せられたる地學協會々頭北白川宮の上奏文を讀みて談を終へん。

謹て案ずるに、故伊能忠敬、心を星曆に潛め思を地緯に覃す、寛政中幕府の命を受け全國を測量し、沿海輿地全國大中小三幀及び度數譜行程記を選す、其間躬山川を歷渉し、祁寒暑雨、少も沮喪せず、歲を費すこと十有八年、推測精覈、細大洩さず、其他著すところ輿地實測錄、輿地便覽等の數種あり、實に空前絶後の偉業といふべし。萬延年間英國測量船將沿海を測量せんを乞ふに及び、幕府其圖を示す、彼大に其精密に服して測量を中止し、只其淺深を測りて去る。明治中興に及び、大に陸海軍を振興し、軍府の鎮する所、航路の由る所、悉く其圖に基き、地理局の內地全圖を製するも亦皆之に由らざる無し。曩に能久等地學協會を設け、大に地理の學を講ず。之を實撿するに及び、益々忠敬勤勞の深きを知れり。嗚呼忠敬の業猶內政に大功あるのみならず、本邦地學の精密

て北海岸を歩し、讃岐より阿波に到り、淡路へ渡り、播州舞子より大阪に入り、草津に出でゝ兩途に分れ、一は木曾路を中山道通り、武州板橋宿まで測量して江戸に着し、一は草津より桑名まで東海道を測量し、木曾川に從ひ、名古屋より伊保に出て、飯田に赴き、高遠より甲府に到り、八王子より江戸に着す。

といふところの順序なり。

是の如くにして先生雨に打たれ、風に曝され、山村水廓に吟行すること歳月を重ね、拮据勤苦して其實測を終へ、終に東北は蝦夷地より西南は薩摩の涯まで日本全國の測量を果し、其實測圖を製したり。文化十二年また伊豆七島及箱根湖測量の命を受け、山岳の峻、風濤の險を冒して事に從ひ功を成せり。時に先生年七十一。

十四年江戸市中細測の命下りて、先生其年八月細測圖を成し、更に又日本沿海全圖及び度數譜行程記を編成したり。こゝに於て日本國開闢以來初めて日本國の眞の形勢を知ることを得、また日本國開闢以來初めて日本國の眞の位置を知ることを得、而して自國の地圖を有せざる蠻民たることを日本國民は免るゝことを得たり。外國人は强ひて我日本國の長短廣狹を知るべきために測量せんとすといふの口實を失へり。

先生蝦夷地測量に從事せしより前後十八年、志漸く酬ひて、文政元年四月十三日、七十四歳を以

右の如き申渡は松浦壹岐守、加藤遠江守、京極能登守、稲葉伊豫守、黒田甲斐守、大村上總介、伊東鵜三郎、島津淡路守、秋月山城守、木下主計頭、相良志摩守、毛利美濃守、中川修理太夫等の諸侯に達せられたるなり。右の中に云へるところの別紙道順なるものは

江戸出立芝高輪より、東海道通り、遠州舞坂へ懸り、今切の湖を廻り、荒井へ出で、熱田より佐屋通り、大室新田に出で、海に沿ひて桑名へ出で、伊勢、志摩、紀伊熊野浦通り和歌の浦へ出で、泉州堺住吉に向ひ、大阪西川口迄、夫より天滿川によりて淀川に出で、伏見に出で、加茂川に沿ひて京都三條橋より改暦御用所跡まで測量し、大津へ出で、瀬田橋より兩途に分れ、琵琶湖を廻りて復合して一となり、越前敦賀へ出で、亦分れて、一方は若狹、越前國境立石より若狹小濱に出で、一方は本街道に從ひて小濱に出で、こゝにて相合して丹後天橋立灣を測量し、但馬因幡より伯耆米子へ出で、出雲國湖水通りを量り、夫より隠岐に渡り全島を周り、出雲に歸り、石見、長門に掛り、赤間關に到り、周防、安藝、備後、備中、備前、播磨の海岸を經る傍小島等を測量し、播州舞子に出で、淡路へ渡り、全國を測量して阿波に渡り、徳島へ向ひ、南海に沿ひ、土佐、伊豫に出で、小島嶼を測量して豊後に入り、日向、大隅の東海岸より薩摩に入り、轉じて南西の海邊に肥後まで沿ひて、天草長崎に屈折し、西海の沿岸五島を首として小島を測り、北の方海邊を通りて舟にて壹岐へ渡り、對馬へ渡り、復壹岐へ歸りて肥前に渡り、北海岸を筑前、豊前、豊後を經、伊豫に至り

するところ無し。西南二道測量の命下るや悦んで直に出發したり。當時幕府御勘定所より各地の諸侯に當てゝ發したる通牒書は幸ひ我が手帳に記し留めあれば讀み聞かすべし。

申渡

天文方高橋作左衛門手付　伊能勘解由

同作左衛門弟　高橋善助

同下役　二人

同内弟子　四人

右者此度測量爲御用東海道通中國筋四國九州壹岐對馬迄罷越候に付當二月下旬頃江戸出立別紙道順書の通國々相廻り測量可致候間其段可被相心得候

一、右に付他領並に島々へ渡海之節者其所之領主より船を出し差支無之樣可致候尤測量道具爲手入止宿致候儀も可有之候間是亦差支無之樣可被取計候

一、廻國先より江戸頒曆所へ御用狀差出候儀有之候はゝ領主便を以て被相屆且江戸表より廻國先へ御用狀差出候節心當之場所其領主役人中へ可相達候間其所へ到着以前に候はゝ着の上被屆出出立後に候はゝ先々へ相屆候樣可被致候

右之趣可相達旨戸田采女正殿被仰渡候間申達候

丑の二月

其九

先生が實測圖を在來の地圖と比較せば如何なる鈍眼の愚物も其精麤の差の甚しきに驚くべし。實測圖以前は眞に地圖と稱すべきもの一も我邦に存すること無く皆單に目擊の儘を描ける粗笨杜撰のもののみなりしなれば、初めて先生の實測圖を見たりし時の幕吏の歎稱は決して尠少ならざりしならむ。されば歎美の次に來るべき慾望は必然の勢として猶其實測の及ばざるところに實測を試みて而して其實測圖を成さんことを需めたるなるべし。享和元年には先生伊豆相模安房上總下總常陸陸奥の沿海各地實測を命せられ、乃ち到るところの嶮岨岩崖を踏破して測量を果し、直に復命しけるに翌二年又直に陸奥津輕領三廐より出羽越後、高田領今町まで實測の命を受け、同三年には駿河、遠江、三河、尾張、美濃、近江、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡を測量し、元年二年三年と引續きて各部實測の地圖を製して上りたり。

先生の實測圖は愈〻其眞價を世人に認められ、隨つて其續出を渴望せられ、文化二年先生年六十一なるにも關はらず西海南海兩道測量の命を受くるに至れり。此の前年即ち文化元年九月を以て先生小普請組に擧げられ、十人扶持を賜はりけるが、先生の功勞に對しては寧ろ酬ふところ鮮少に過ぐと云ふべきにあらずや。されど先生は其志利祿以外に存り、功の酬はるゝも酬はれざるも意に介

たる當時の狀況は、蓋し今日の吾人が想像にも幾倍か增したることとなるべし。傳ふる者いはく、先生の命を得て馳驅奔走するや、酷寒髭を凍らすばかりなる日も、烈暑金を爍かすばかりなる日も、迅雷暴風恐怖すべく忌避すべき日も、これが爲に逡巡躊躇すること無く、晝は終日長汀曲浦に測量機を取つて往來し、夜は寒村孤驛の客舍に一穗の燈火の下幾人の助手と共に頭を鳩めて運算をなし製圖をなし、矻々として深更に至つて僅に眠に就きたりと。蓋し必ずしも誇張の言にあらず、皆其實際なるべきは、後年先生が薩州の諸島を測量したる時の事として傳へらるゝ鎖談に徵しても明らかなるのみならず、交通の便甚だ惡かりし昔時に於て僅々十數年を以て全國實測の事を果すを得たるに徵しても甚だ明らかなりといふべし。況んやまた當時の器械の粗にして人力を費さしむること甚だ大なるをや、先生の勤めたるもまた察するに餘りあるなり。且又今日は對數八線表等完備せるが故に、測量に於ける運算の勞力は甚しく減ぜらるれど、先生が各地實測をなしゝ頃は、精密なる對數八線表等有るにあらざるを以て、每日晝間の觀察して得るところに因り、夜間一々運算の勞を敢てしして後其定數を得たるなれば、其煩勞實に意想の外に出でしなるべし。

先生是の如くにして山を攀ぢ川を渡り、霧を犯し露に沾ひ、數閱月にして其年冬十二月實測圖を製し、之を幕府に獻じければ、幕府にては其翌十二年の春其賞として銀十錠を賜ひ、且伊能氏永代子孫に至るまで姓氏を稱し帶刀する事を許したり。

先生と先生が師の東岡との間の此の問答は、一席談に過ぎざりしが、この一席談こそ頓て我邦をして始めて信ずべき日本圖あるに至らしむるの基礎となりたるなれ。先生は東岡の言によりて感發し、幕府に上書して各地實測をなさんことを請ひたり。幕府にて我邦の地圖を製せしは正保年間及び元祿年間の兩度にして、兩度とも村鄕里程に至るまで記せるところの、やゝ精細なる圖を製せしとは云へ、皆是眼見足踐によつて製せしものにして、眞の測量の術によりて確實に製出せしものならねば、實に信憑するに足るものにあらず。圖といへば即ち圖なるも、經緯度だに無き漠然漫然たるものにして、旅客の見覺え書、兒童の想像畫とも云はゞ云ふべきものなり。是の如くにして、歲月を經たる折柄、先生の實測を敢てせんとの言は、直に幕府の識者の採用するところとなり、寬政十一年閏四月命を得て先生蝦夷地即ち今の北海道の實測に從事するに至れり。是先生が世に其學藝を用ゐし最初にして先生一生の事業はこれより始まり、我が日本國圖の基礎圖として不朽に存すべき國圖は此時より漸く現れ來らんとす。時に先生年五十五。

五十五歲といへば人は漸く頽唐老境に入らんとす。されど先生は氣象淸新、壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色を面に溢らし、即日といへども出發せんとするの勢ありしといふ。先生が氣力餘りありて、事に當りて勇往直前、險岨に屈せず風濤に辟易せざりしは、固より然もあるべし、と吾等の想像するところなるが、實に先生が意氣壯にして困難を意とせず、努力して事に從ひ

生。佳なるかな先生の負へる諢號や。

其八

寛政九年先生金星を測量したりといふ。其測量といふは如何なることをなしたるにや今審かに知る由無けれど、金星測量は實に我邦に於ては先生を以て最初とすといふ。

先生また嘗て師の東岡に隨ひて暦局にて北極星が地を出づるの度を測り、其後深川の自宅に於ても是を測りたるに、先生の精細なる注意と周到なる觀察とは、直に兩處の間に些少にはあれど地を出づる度の差異あることを見出したり。こゝに於て先生師の東岡に質して、吾が家にて測れる北極星地を出づるの度と暦局にて測れる北極星地を出づるの度と些の差違あるは何の故ぞ。と問ひけるに

さればなり、暦局と汝が深川なる寓居との隔りを知るも、江戸と蝦夷地との隔りを知るも理は一なり、極星出地の差は甲地と乙地との差に比例して分毫も違ふこと無ければ、暦局と汝が寓居と極星出地の度の差を見たるは當然の事にして而も汝が其を見出したるは汝が觀察精密にして推算おろそかならぬに依つてなり。されば汝若し官の許しを得て蝦夷地に赴き、到るところに實測せんには、各地の里程も詳かに明らかなるを得んのみならず、我邦の地域も何度に至りて限らるゝといふこと明らかなるを得ん、と東岡は答へたり。

本來の上より云へば、老いて學ぶも適〻其志の淺からざるを見はすのみ、また何の不可なるところかあらん、況んやまた何の慚づべきところかあらん。されど人の晩學を嘲笑するは自然の勢にして、嘲笑せられて之を慚づるもまた凡人の必然の情なり。凡人の情に克つて強ひて我が爲さんと欲するところを爲すに至つては、其人既に凡情を脫す、必すや凡人に超ゆるの功あらんとす。これ老子の謂はゆる強行するものは志有るなりといふものなり。先生は實に志有るもの、即ち強行するものなり。區々たる群小の誹譏嘲笑そも〳〵先生に於て何かあるべき。且又先生は氣を下し心を練ることに於て既に十分の經驗あり、德性の涵養既に滿ち足れり、おもふに衆人の喋々を聞くこと、蚊蝱蟋蟀の鳴くを聞くが如くなりしなるべきのみ。

是の如き先生と他の弟子輩との優劣勝敗は比較するまでも無く明らかなる事なり。先生が學術は長堤決潰して水の迸流するが如き勢を以て步を進めたり、衆人は瞠若として先生が背後に遺されたり。早くも東岡門下に肩を比すべきものを見ざるまでに長足の進步をなしたる先生は、瓶より瓶に水を移すが如く東岡より其學の蘊奥を得たり。是先生が天資甚だ高くして萬人に秀でたるが爲か。蓋し先生が天資の高厚なりし故もあるべけれど、先生が熱心倦まざると、積年獨學の力大なるとの故を以て然り、といふを最も妥當なる解釋とすべきなり。如是して東岡門下にて推步測量特に精なるの故を以て、師の東岡より戯れに推步先生といへる名をさへ負はせらるゝに至れり。推步先生推步先

ことを。嗚呼先生の後人に重せらるゝこと鮮からずといふべきなり。此の銅標は、標側に記されたる文にも著けれど、明治二十二年先生に贈位の事ありし當時、地學協會會員等の協議して建てたるものにて、宮内省よりの御下賜金、海内有志の義捐金もまた之を成すを助けたりといふ。此の銅標の裏の方に小さき扉のありて鎖されたる其中にこそ先生が用ゐたまひし測量の器械の藏さるゝなれ。いざ茶を啜つて復先生が事蹟を語り續けん。

高橋東岡が大阪より江戸に來れるは曆を正すが爲にして、幕府も遂に東岡が學術の精確頼むべきを知りしかば、東岡を曆官としたるなり。東岡はこゝに於て源の秀升平の德風等と共に刻苦考定して新曆を製し、これを幕府に上りぬ。幕府は之を天下に頒てり。此間に東岡また曆說二十餘卷を著しゝといふ。先生は前に談りし如く、此の東岡に就きて學びしが、先生も東岡も互に意に介せざるに關はらず、他の東岡門下の者等は、師たる東岡の若くして弟子たる伊能氏の老いたるをば、奇に過ぎたりとして、數々笑柄となしたりといふ。實に其は當時甚だ奇にして笑ふべき事たりしならむ。今日だに猶弟子老いて師若からば人は必ず其老いたるを笑ふべし。晚學の難きは實に何の世に在りても如是事情の存するがためにして、凡庸のものゝ我老いたり、今より學ぶに堪へんや、と云ふ所以は、多くは如是事情の存するに因る。こゝを以て非凡の士にあらざるよりは自ら漸ぢ羞ぢて師に就き學を脩むることを敢てするの勇を欠き、終に空しく志を抱きて墓穴に入るに至るなり。それ

く誤らざりけり。三人は丸山に上りて、先づ劍形をなせる先生の功を表せる銅柱を打仰ぎて互に少時言無く、往事を追懷して無量の感慨をや惹き起しけむ、石の如く靜に立ちて動かず。我もまた多少の感無きにあらず、先生の身亡びて猶人を動かすこと是の如きを見て、そゞろに大人の死して亡びざるを感じたり。此處は地高くして眼の前を遮るもの無ければ、芝より高輪かけて羽田まで見え渡り、品川沖の帆舟釣舟も手に取るばかり近く見えて、眺望の極めておもしろきところなれど、彼の三人は晴れたる空の美しき色と海原遠く霞み渡れる春の趣きとに心を動かすことも無くひたすら伊能先生の上にのみ心を取られて立ち居けるが、傍の菓子なんど鬻ぐ茶店の女等の口々喧しく休み玉へ休み玉へといふに、やをら將几に腰打掛けたり。我もまた限りも無く何時まで佇みてあるべくも無ければ、傍の將几に腰を下しぬ。

彼の四十ばかりなる男は先生の功を表せる銅標を看ること良久しくして、指し示しながら二青年に語る。

見よ。此銅標を圍めるところの鐵の柵は我が日本國を中央に現せるところの地球の半面を鑄出したる門を有せり。さてまた柵の下の方には青海波の模樣を鑄出し、其上には雲の模樣を鑄其上には螭龍を鑄、其上には圓規の股に磁石を挾める模樣を鑄たり、言はでも知るべし、此等は皆先生の功業に緣故あるものを用ゐて特に此の銅標を圍むところの柵たるに適はしむべきやう造りたるものなる

剛立の學は實に剛立の志の堅きと多年との研鑽とによりて成れるものたること疑ひ無けれども、今日より之を考ふれば剛立の學は古來の舊套を襲はずして、泰西の法に據り、これに自家の攻究を施して漸く精緻を至したるが如し。されば伊能先生の測量圖のこれを今日の海軍水路局調査に比して大差無きも、其所以ありといふべきなり。

其七

四十に近き男の二青年のために語れる伊能氏の上の談は未だ盡く終らずして僅に先生の師の高橋東岡及び先生の學の淵源せしところの麻田剛立翁が上を語りたるのみなるに、馬車は既に芝汐止の本社前に達して止まれり。乘客はこゝに至りて皆それ〴〵に自己が心ざせる方を指して下車しつ立出づ。我は猶聞きかけたる譚の全部を聞かんと欲して別に用事も無きに此處まで來りたるなれば、今此處にて彼の三人に離るべきにあらぬまゝ、ことさらに人々より後れて車を下り、彼の三人連の人々を見失はざらんと、其後につきて徐に歩みぬ。三人は馬車を下りて後西南の方へと歩を移して進みければ、我もまた其後より隨ひ行くに、やがて芝公園の丸山と稱ふるところに至れり。丸山は五重の塔のあるを以て人に知られたるところにて、其處にはまた伊能忠敬先生の紀念碑あるを以て、さては彼三人は其の表功標を見もし見せもせんとて來りたるならんと猜したりしが、此の推量は全

水は流れて音無き能はず、花は開きて香無き能はず、士は學成りて名無き能はず、流石に名利に淡き剛立も其學大成するに隨つて其名の傳へらるゝを免れず。こゝに於て諸侯の學を好むもの、安車蒲輪を以て剛立を迎へ、招き致さんと欲するものも少からざるに至れり。されど剛立の志はもとより區々の利祿にあらず、況んやまた齡積みて頭やうやく白く、慾念日に淡からんとする老境に於けるをや。剛立おもへらく、我が故鄕を去りて今日に至れるものは、實に學問の爲にせるのみ、他あるにあらず、如何ぞ吾家の累代の主家を棄つるが如き意あらんや、我にして今吾が學の殆ど成り吾が名の漸く揚がれるを以て他の諸侯に事ふるあらんには、是我吾主家を棄てゝ自己の榮達を謀りたるなり、我如何で我が節を屈して晩年に斗升の祿を求めんやと。是の如くにして剛立は孰の侯伯にも仕ふること無く、ただ自己が一生攻究せしところのものを門下の數人に傳へ敎ふるを以て自己が心遣りとなし、沖淡無慾、泊然晏然として生を終りたり。時に年六十六。

剛立の一生を考ふるに其人實に學に忠に己に薄き稀世の君子なり。前に主家の命に應ぜざりしは節操の堅固なるなり、後に諸侯の聘に應ぜざりしは心術の醇正なるなり。心を天文曆數の學の如き高遠の學に寄するもの、固より應に是の如くなるべしと雖も、而も紛々たる濁世、悠々たる今古、剛立の如き人幾干か有らん。其の篤志力行まことに後人をして自ら慚ぢ自ら奮はしむるに足るものありといふべし。

るべし。されど杵築侯もまた剛立が外を務めずして内を務め、寡慾にして篤學なるを知るものから、剛立の辭するを聽すことと無かりければ、流石の剛立も大に究せしが、もとより寵辱に心を動さねば、また今更に思を飜すべきもあらず。幸にして我無くとも兄あれば吾家の祀絶ゆべくも無し、いかで意を枉げて君の命に從はん、如かず故郷を脱走して流亡の徒となるとも獨り悠々として我が好むところの學を成さんには、と決斷して、遂に故郷を出でゝ大阪に走り、町醫となりて朝夕を送り、ます〳〵好むところの星曆の學に研鑽切磋の功を積みたり。剛立の鄕を去りたる時は三十八歲なりしといふ。惑はざるの齡に近かりしといへども操持の甚だ固かりしは實に賞すべきにあらずや。人の世に立つ是の如くならずんば實に一道の祖師となつて幾年代の人に仰がるゝに至らざらん。吾輩また剛立の風を聞いて自ら勵まし奮ふところ無かるべからざるなり。

剛立は是の如くにして、故鄕を去り大阪に潛み、寒暑往來歲月重疊して二十餘年を過ごしぬ。此の長き歲月の間餘念無く天文算數の學を專攻したる剛立は、終に其長日月の苦學の報酬として、同時代の學術界には甚だ卓絕したる學說と伎倆とを有せる翁となり了れり。前後を合すれば四十年にも過ぎんとする長日月のことなれば、縱ひ樹を植うるもまた林を成せるを見んとす、如何で精神一到して事功こゝに擧らざらんや。剛立の學の大成せる固より當然の結果のみ。嗚呼吾人もまた四十年を費さんかな、篤もまた萬里を行くべきなり。

傳ふるところによれば、剛立は豐後の國杵築の人なり。醫家に生れしが、幼より天象を視ることを好みて、長ずるに及び醫を學ぶの傍星曆の學を修め、漸くにして自得するところあり、終に前人に依傍すること無くして別に一家の學を成せりといふ。其人蓋し剛邁深沈、塵界の快樂を度外にして、深く學術の趣味に耽りたるなるべし。然らずんば如何で一生榮達を希はざるのみならず、其青雲に上るべきの機あるに臨みても猶之を取らずして、葛巾野服の生涯を遂ぐるといふことあらんや。剛立は醫家に生れたれば醫學を修めしめられたれども其自己の深く好むところにあらず。自己の長子ならざるを幸として屹々として自己が好むところの學を攻め、普通の人の如く飲食歌舞の樂みを貪ること無く、月にあこがれ花に戯るゝことも無く、ひたすら實驗を本とし、思索を便として、漸く天學の門墻を覗ふを得るに至りたり。然るに剛立が漸く天學の門墻を覗ふを得たりと自ら思へる頃、恰も明和の末年なりとか、剛立が家の事ふるところの杵築侯、江戸へ上るに際して剛立を徴して侍醫とせんとしたり。常人の情としては願ふても是の如き恩命に接せんと欲するなるが、剛立は却つて之を悦ばず、之を辭すること再三に及びたり。剛立が心には我が心力を傾注して攻究せんと欲するところの星曆の學は際涯無し、身に爵祿羈絆をば受けては學びになか〳〵便惡く、如何で我が思ふまゝに學に耽ることを得ん、君には情薄きに似たれども吾兄あつて君に事ふれば、我仕を辭すとも吾家主君に負くといふべからず、我は我が志を成さんのみ、と深くも思ひ決めたればな

ら斧を加へさせて斫らせ了りつ、と云ひたり。妻の言は一々理に當りて東岡を勵ますこと一方ならねば、東岡もまた叱せざりしといふ。此の一條の談によれば、東岡と先生との半生を互に照らし合はすに、奇の甚しきを覺ゆるなり。先生の妻は先生をして五十歳に至るまで一に伊能氏の爲にせしめ、東岡の妻は東岡をして早く學を成さしめ、先生は緣無くして良師を得ること遲く、東岡は緣有つて夙く良師を得、先生は悍にして愚なりとおぼしき妻を得、東岡は賢にして貞なる妻を得たる、此の不幸、彼の幸、一方の晩學、一方の夙成、而して此の弟子となり、彼の師となれる、いづれか天の意あつて特に是の如き奇因緣を做し出せるが如しとの感を人に起さしめざらんや。嗚呼また實に奇といふべきなり。奇はこれに止まらず、師にして弟子より若き東岡の僅に四十一歳を以て卒りて、弟子にして師より長けたる先生の七十四歳にして卒れる如き、奇中の奇として傳ふべきにあらずや。

其　六

先生の學は高橋東岡より出でたること前に述べたるが如し。高橋東岡の學の麻田剛立より出でたるも既に說けり。されば先生の學系は麻田剛立より出たりといふべきなるが、剛立の學は那邊より出たるなりやといふことを知らずんば先生の學の由て來るところを知ること能はじ。麻田剛立は如何なる人ぞや而して如何にして其學を成せしや。

こと度々なるを見るごとに之を逐ひ退けつ、可惜天學の實驗に心を委ぬる半途にしては惜むべき鼠輩のために心を擾されて叱咤すること數次なりき。然るに一日公務を終へて家に歸りけるに、彼の柿の樹を根本よりして斧などもて斫りしと思しく打倒しあるを見出しければ、東岡忽ち勃然と怒りて、何者の爲し業ぞ、家の者もまた之を知らで居たりしや、心得ず。と大喝しけるに、東岡が妻徐に東岡が前に出でゝ、怒りたまふはさることながら其樹は妾が斫らせしなり。怪み玉ふなかれ、君がため宜かれと思ひて爲しことなり。君が平生公の務の暇をもて身を勞らせ心を苦めて麻田殿が許に通ひ學びたまふは、君必ず其學びの道によりて名を揚げ家を起したまはんと思したまへばなるべし。されば志ありて事の成らざることは少し。君の今の君の如くならざること必ず遠からじ。よつて思ふに、今の君のために憂ふべきは、たゞ君が學びの道に心を盡したまふことの足らざらんことのみ、其他のことは復云ふに足らざるなり。然るに此秋に當りて君の此樹のために心を勞らせたまふこと云ふばかり無きは如何にも口惜きことなり。柿盜人は柿あらん限りは絶ゆること無かるべければ、君が御心費ひも絶ゆること無からん。君が今かゝる些細なることに心を費し玉はんは、君に取りて眞に益無きことなり。此樹だに無くば柿盜人も來らず、柿盜人も來らねば君が學びの道に寄せたまひたる心を中途にて幾度か動かしたまふことも無かるべく、猶ひとしほ精神籠めて學びの道を修めたまふことを得べきならん、とばかりに思ひ決めて君がため惜しからざるにあらぬ樹なが

にだに能く屈して爭ふこと無きほどなれば、如何で眞實に敬ふべき學識ある人に對ひて拜伏するを厭ふべき。年の我より少きものに俯首するを厭ふごときは固より愚夫の感情のみ、志有るものゝ意に介すべきことにはあらざるなり。

其五

高橋作左衛門は如何なる人ぞや。先生が遺命して自ら淺草源空寺即ち東岡の墓側の地に葬らしめたるに照らし考ふれば、蓋し先生の高橋東岡に於けるの情、猜知すべきものあり。おもふに東岡の人となり大に凡に超え人に優れるものありしならむ。東岡名は至時、高橋元亮といふものゝ子なり。父大阪御城番同心たりければ、東岡もまた父に繼ぎて同心となりしが、公務の暇、麻田剛立といふものに就きて天學を受け、嶄然として頭角を同人間にあらはし、終に剛立の推すところとなつて寛政七年三月召し出され、其年十一月新に百俵を賜はる身となりたるなり。東岡が猶同心たりし頃のことなるが、一佳話の傳へらるゝあり。そは東岡が頻りに麻田が許に通へる間のことなり、東岡が家に大なる柹の樹ありて實ること大方ならず、同心の家などは俸祿も薄くして些少の金をも輕からず思ふを免れねば、其柹の實をも例年若干の金に代へしが、東岡師の許に通ひては敎を受け、歸つては我が家の屋に上りて星の躔度を測りなどする折柄、柹の實を盜まんとする若者どもの庭に入る

人の知るごとく、各處の神社佛閣に數學上の難問題等の解釋を試みたる額面などの奉納せられたるが少からぬを見ても徵知すべき程なれば、先生が五十歲にして江戶に出たる時は、縱ひ其頃までは先生家事にのみ心を用ゐて學事には耽らざりしとするも、既に先生が其自己の好むところの學に就ては相應に造詣するところありしこと疑ふべからず。されば、尋常の師にては先生の師たるに堪へざりしこと明らかなり。然るに恰も好し幕府にて曆を正すの擧ありて、これが爲に大阪より高橋作左衞門といふもの召されたり。作左衞門は即ち東岡先生にして、先生の墓碣の傍なる墓碣の主これなり。東岡先生が算數曆象に精しかるべきは、幕府が曆を掌るの家は天文方澁川氏なるものの存するに關らず特に曆を正すの擧のために大阪より召し出したるにて知るべきなれば、先生此のことを聞きて直に高橋氏を訪ひたり。蓋し或は先生佐原に在りて高橋東岡先生の新に大阪より來れる由を聞きしを以て江戶に出でたるならんとも猜せらる。いづれにもせよ先生が初めて東岡先生を訪ひたる時は、先生も其良師を得たるを悅びたるなるべけれど、東岡先生もまた其良弟子を得たるを悅びたること疑ひ無からん。先生が談論質疑を試みたる後、東岡先生の學の深きに服して師弟の契をなしたるべきは必ず有り得べき事なればなり。時に先生は五十歲、或は五十一歲にして、師の東岡は三十二歲なり。普通の人情にては、自己より年若き人に會ひては、縱ひ自己が學業等其人に及ばずとも、猶强ひて自ら高ぶりて、敢て頭を下げざるが習ひなれど、先生の德量は、おのが妻の放肆なる

また實に羨むべからざる態にあらずとせんや。されど心の壯なる人には何歳の時も前途多望の青年の春なり。爲すある人には如何なる場合も我力を試むべき處たり。先生は常人が髮を薙ぎ茶紬を衣て世の務を辭し花月の遊を事とすべき時に當つて初めて學に就き、而して後漸く世に出でんとしたまへり。實に先生は五十歲を以て初めて自己が學ばんと欲せるところの學に就けるなり。後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空く過ぎて身の將に老いんとするを歎ずること勿れ。心の壯なる人には何時も青年の春なり。爲すある人には如何なる場合も忌むべからざる場合たるなり。

其　四

先生は佐原を出で、飄然として江都に着き、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。昨日は佐原の村長なりしも今日は實に都門の一書生たるなり。尋常一樣笈を負ひて鄕關を出て、上國に遊びて師を尋ね學に就くところの書生と異るところは唯其若きと老いたるとの差のみ。是の如くにして先生は身を自己が好むところの學に委したるが、先生が滿足し信仰すべき師を得ることは易からざりし。蓋し先生が出生の地たる下總及び其南隣の上總の國等は特り先生のみならず一般に算數の學の類を好む人士の多き地方なることは兩總に遊びたることある

めて笑ふべくまた悲むべき一事實の傳へらるゝあり。そは、一日先生の妻何事にか激しけむ、甚だしく先生を罵りて、「隷僕同樣に思ひて婿に迎へし汝なり、如何で吾と共に室を同うして膳に對はしむべけん、庖厨にて婢女どもと共に飯食ふべし、」と折節餐時に差し掛りしまゝ口ぎたなくも云ひたりけるに、先生容豫として爭ふこと無く、言葉も返さで其まゝに庖厨に入りて食をなせしといふ談なり。嗚呼呂尙が妻、朱買臣が妻、古より婦人は偉丈夫を知らず、無智短見もとより罪すべくもあらぬものなるが、當面の罵詈は眞に當り難く、惡水を腦頂に潑到せらるゝは實に忍ぶべからず、縱ひ婦人の無智責むるに足らざるを知ること萬々なりといへども而もまた衝天の怒氣遽に萎へしむべからず、目を張り拳を擧げて一打撲を加へんと欲するは、常人の常情にして蓋し俊拔の士といへどもまた免るべからざるの態ならん。先生が此の一條の談を聞くもの漫に一笑し去ることを止めて、如何に先生が平素自己に克つて他と爭はず、從容として寛厚の態度を失はざりしかを推し知るべきなり。

是の如くして先生は五十歲に至り、是の如くして伊能家は中興し、是の如くして先生が伊能家に對する人情と義務とは圓滿に果され、是の如くにして景敬は伊能氏を嗣げり、是の如くして先生は初めて閑を得るに至り、先生の身は先生の自由に用うることを得る場合に至れり。然れども此時は即ち先生既に五十歲にして、常人にあつては頹唐老境に入るべき時なり。先生の當時の狀を想ふに、

孜々として家運の隆興を圖られたるは、實に先生の德量の大なるを見るべく、而して又伊能氏の一時衰頽を極めたるをば能く復盛んならしめたるは、先生の才の能くせざるところ無きを見るべきなり。

先生が林正貞といふものを師とし、又銚子の醫某を師とせしといふは、先生が何歲頃の事なりしや、且其受けたるところの業は如何なる類の學なりしや、詳しく知るべからず。されど思ふに先生が伊能氏に入りたる前後の事にして、其受けたるところの教も特に記すべきほどの事にはあらざりしなるべし。先生が五十歲までは先生の行事として語るべきもの無しとは云へ、猶語るべきことの全く無きにはあらず、天明元年八月名主役を命ぜられ、また其三年秋九月姓氏を稱し帶刀することを許され、同じく四年の八月村長を命ぜられて三人扶持を賜はりし如きは、碑文にも見えたる如く伊能氏の家元來里閭の名族なりしが故も無きにはあらねど、先生が勸勉勞働官の信用を買ふに足るものありしによらずんばあらず。此間にまた天明三年の饑饉、同じ六年の饑饉等あるに際し、饑えたる民を賑はし、米穀の價を平にしたるなど、先生が機に臨み宜きを制して、公衆のために盡したる事蹟も少からず。先生は實に先生が獨長の技以外にもまた個人としての價値を十二分に有せりといふべきなり。

其何年頃の事にかゝるやは明らかならざれど、蓋し先生が猶老に至らざりし間のことなるべし、極

すべし、折るゝ惧は免るべからず。されば才子の奇才を抱きながら成功を見ずして中途に廢する例は、我等の數々見るところにして、源內の如きも其一例なり。先生の才ありて德あるや、これを前にしては圍碁を廢したるの談に於て徵すべく、これを後にしては十八歲にして伊能氏を嗣でより五十歲にして伊能家を子景敬に讓るまで一も先生が行事として談ずべきほどの事無きに於て徵すべし。蓋し先生が偶々圍碁を嗜みしは是先生の才の溢れしなり、而して先生の之を廢せしは、これ先生が自ら德を養へるの一端ならずや。また先生が算數曆術の學を嗜み且能くすべきの資を抱きながら、枉げて自ら甘んじて市井の凡人に伍し、三十餘年其才を現すところ無かりしは、實に先生が德量の大なるを證せりといふべきならずや。世の才あるもの、やゝもすれば躁急にして功を求め放肆にして名を欲するに比して、先生が五十歲に至るまで自ら抑へて情に任せず自ら甘んじて義に就き、「伊能氏を嗣ぎたる上は伊能氏を榮えしむべし」といふを唯一の望みとなして、三十餘年勤め勵みたるは、縱ひ先生に先生の事業無からしむるも、また其心術の美を稱して之を傳ふべきにあらずや。況んや先生が五十歲にして家を其子に讓りて直ちに江戶に出でたる時の狀を考ふれば、先生が星曆算數の學を修めんと欲せしは、決して五十歲に至りて忽然として先生の胸中に湧出せしにあらずして、假令幼年の時に其萠芽を發せしにあらずとするも必ずや夙くより其念の先生が胸中に胚胎せしこと疑ふべからざるに於てをや。されば先生が敢て自ら忍びて長き歲月の間、一意たゞ伊能氏のために

得べしとするは、我が固く主張するところなり。我豈贅辯を好まんや、我が言は先生を九原に起して之を聞かしむるとも必ず笑つて首肯すべきものたるを我自ら敢て信ずるものなり。

其三

先生が寛政六年江戸に出てたる年までの間の委細は今知るに由無きこと猶先生が幼時の委細の今知るに由無きが如し。蓋し先生が伊能氏を嗣てより、五十才にして家を子景敬に譲るまでは、先生自ら抑へて敢て平々凡々の人と爲りて、一意專心たゞ伊能家の衰へたるを興し、自己が伊能氏に養はれたるだけの任務を、最も圓滿にまた、最も美はしく果さんことを期したりしこと疑ひ無し。才氣あるもの丶常として自己が欲せざるところのことには、一擧手一投足の勞をも惜み、單に自己が欲するところの事にのみ身を委ね心を竭さんとするは免れ難き習ひなり。若し夫れ自己が欲せざるところの事なりとも自己が爲さゞるべからざるところの事なる以上は、甘んじて、我が情を屈し我が氣を抑へて、而して我が爲すべきところの事を爲すは、其人たゞに才氣あるのみならず、また實に德量あるの人なりと云ふべきなり。世に才氣ある人は多し、才氣ありて德量ある人は少し。例へば先生と殆ど時を同うしたる平賀源内の如きは、才氣はまことに優れたり、されど德量はまことに乏しかりしなり。德無くして才のみ優れたるは、喩へば鋭き刀の肉薄きが如し、物を截ることは能く

に先だつこと二里となるべし。若し右の如き場合を重ねんには常人と其人との距離非常に多くなりて、遂に常人の如何にすとも及ぶべからざるに至るならん。こゝに説きたる例は、やがて常人と卓絶したる人との距離の生ずる所以なり。元來天與の資質の厚きと薄きとによりて人の勢力の差のあることは爭ひ難き事實なれども、先天の差によりて凡人と非凡の人との距離の生ずるよりは、各人の互の心掛の差によりて甲者と乙者との間の距離の生ずること、實際の世間に於て甚だ多きを見る。即ち克己の工夫を用ゐて事に勤むる人と己に克つの工夫を毫末も敢てせざる人との差は、日に日に、月に月に、年に年に、漸々增大して、畢には一方の人は非凡となり、一方の人は平凡に終るに至るなり。我は、先生が、碁を好むべく、碁を能くすべき人なるべきを認む。而して先生が、圍碁の益無くして害多きを悟るや、己に克つて、然ばかり愛好せし技を斷乎として廢したるを聞きて、先生が一生の行爲の其大半を推察し知ることは得ずとも、先生が如何なる人にして、又如何にして、所謂伊能先生たるに至りたるやの問題に就ては其大半を知ることを得たり。「[illegible]將相豈種あらんやとは古人の言なり。これ王侯將相の企て及ぶべからざるものにあらざるを喝破したるの言ならずや。名を發し功を立つるも亦然り。凡人非凡人豈天の定むるならんや。自ら克つこと先生の如くんば、我等もまた先生の如くなるを得んのみ。此論いさゝか餘事に亘りたるの嫌あれど、先生を解し、先生を知らんとせば、正に斯の如くに着眼し、斯の如くに論到し、而して先生を解し、先生を知るを

其人にして、やゝ大なる人ならば、其人は必ず克己の工夫に富みたる人なり。即ち克己の工夫をなさずして大なる人となり得し人は殆ど無しといふも可なるものなり。蓋し自己に克つ能はざるほどの人ならば、既に自己にだにも克つ能はざる微力薄弱の人なり、如何でか能く萬人に勝るゝことを得ん。これ自然の數といふべきのみ。また人若し自己に克つことを能くせば、其人は即ち成功といふことの段階に一歩を上せし人といふべきなり。蓋し自己に克つは極めて難事たるには相違無けれども、一度自己に克ち得たる時は、其克つことの難きだけ、其克ち得たることの愉快の大なるを感ずるものなり。人一度此の克己の愉快を感じて其味を知る時は、常人が見て以て非常の困苦なりとなすところの事をも悦んで處辨し、常人が見て以て其勞劬堪へ難しとなすところの事をも樂んで做すことと得べし。例へば一日に十里の路を行くは常人の能くするところなり、十一里の路を行く事は其差僅に一里にして、其一里を朝やゝ夙く出でゝ歩まんには歩み得べきなれども、曉の睡りの心地好きまゝ夙く興き出で難きは常人の情なり。今此の情に打克つて十一里歩みたりとすれば、他の人々は既に我が一里の後に在るなり。我が情に克つたる當時の凛然と心の張りし工合、また今衆人に先んじて一里進み得たる眼前の結果、いづれか愉快ならざらん。此の愉快を味ひ得たる時は、其人は翌日の同じ場合に於て、自己に克つことの昨日に比して甚だ容易なるを感ずべく、随つてまた常人に比して一里多く歩むことを敢てするに至るべし。是の如くなれば、次の日の夕には其人常人

悔ゆるも如何とも爲ん術無き如き場合は碁客の數々實驗するところにして、自らもまた此點に於ては辯護の辭無きを知るにより、時に自ら碁を圍むことの益無くして害あるを以て、碁を廢せんとすること無きにあらねど、自ら克つこと甚だ難きまゝ、碁を嗜むものは親の臨終にも會はずなど〻罵られながら猶廢しかぬるを常人の習とす。先生もまた碁を圍みては樂みとする程に、幾度か事を誤りて自ら悔いたまひけむ、其詳細なることは知る由なけれど、既に圍碁の樂みを取りたる上は隨つて圍碁の弊を受けたること先生といへども免れざりしことならむ。たゞ先生の常人と異りて、他日名を成し功を立つるに至れる人の少壯時代の適當なる心掛の證左として遺したる事實は、先生が十分の勇氣を以て、常人が敢てすることを難んずるに倣はで、剛毅の一斷、直に碁を廢して再び鴉鷺の戰を爲さゞりしこと是なり。世間碁を圍むことを知るものは多し、碁を圍むより生ずる弊を知るものは少し。碁を圍むより生ずる弊を知るものは多し、其弊を除かんとするものは少し。其弊を除かんとするものは多し、能く自ら克つて碁を廢するものは少し。先生は流石に常人ならざりけり。先生は自己の明らかなる智慧の利害の判斷に從つて、自己の情念を抑へ、常人の爲すことを敢てせざる克己の工夫に於て、少壯時代に當りて早くも一歩を進めたり。如何なる事業にせよ、やゝ大なる事業は其事業に當れる人の自己の私慾私情に打克ちたることのために成就せらるゝものなり。即ち克己の工夫無くして大なる事業の成就せられたる例は甚だ少し。また如何なる人の事蹟を見ても、

生の心の働きの精しく又密にして、算數の學を修むるに堪へたるは、正に碁の道に遊ぶにも甚だ適應したりといふべきなれば、先生の碁を學びて之に深き興味を感じたるは如何にも然もあるべき事と思はる。おもふに先生の碁に於けるもまた必ず熱心を以て之に從事し、而して其精確にして緻密なる心の働きによりて寧ろ手段高強なる碁客たるに至りしなるべし。それ碁は勝敗を以て戲れをなす。ものなれば、勝つことを好む人の情として、負くれば負けて屈するに忍びず、勝てば勝つて愈々誇らんと欲するものなり。且又一人して爲すべき遊技ならねば、我が敵の勝ちたる時は、また一局と我より強ひ、我が勝ちたる時は、彼よりまた一局と挑む。これによりて碁を圍むことを好むものゝ日を消し夜を徹するは有り勝の習ひなり。されば碁もまた博奕と同じく、假令手段高強なるに至るも畢竟日勝日敗の道にして、またこれ日勝日貧の道なり。人生二萬日、聖人猶寸陰を惜む、いかで吾輩に碁を圍むの暇あらんや。されど張つて弛めざれば弓の弦は斷るゝものなり。勤むるのみにて遊ぶこと無ければ凡人は堪ふべくもあらず、碁を圍むも象戲を弄ぶも強ひて非とすべきにはあらぬ方もあるべき歟。さりながら前にも云へる如く、碁は勿論勝負をもて戲れをなす技は、都てこれに溺れ易きものなれば、其爲に時間を費すこと一と通ならず。差し逼りたる用事をも擱きて一番一番又一番と益無く時を過ごすは碁客の習ひにて、碁局を離れて後始めて其用事の捨て置き難きを悟りたる時は、時既に逸して駟馬も追ひ難く、空しく一二子の得失を爭ひて、重要の事を誤りたるを

が伊能氏を冒せしは、寶曆十二年壬午にして、先生の齡十八の時なりしと。然もあるべき年頃なれば、蓋し疑ふべきところ無し。

先生の青年の頃に就きては、別に事蹟の傳へらるゝこと無し。たゞ其傳へらるゝは圍碁に關しての談のみなり。是は先生が生家に在りし日のことにや、或はまた伊能氏を冒して後の頃のことにや定かならず、されど其事いかにも先生の人となりに照して事實なるべく思はるれば、必ず迹無き談にはあらざるべし、事を如何にといふに是の如き一條の物語なり。先生何人の敎を受けしかは知らねど碁を圍むことを知りそめしより、其興味の言ふべからざるものあるに心を奪はれしが、不圖心づきて碁を圍むことの害あるを悟り、自ら克つて碁を廢せしといふ譚これなり。蓋し先生が後年高橋東岡の門下に在つて頭角をあらはし、推步先生の綽號を得るに至りし等の事蹟に徵するまでも無く、先生が一生のありさまを考ふれば、先生が心機の働き甚だ精確細密にして、從つて心機の働き精密なる人の之を能くし之を好むべき算數の學を先生の能せしことも好みしことも疑ひ無し。碁象戲の道は、算數の學とは、毫末の關聯も無けれど、碁象戲の道もまた心の働き精しく確にして細なる人の之を能くし之を好むべき筈のものにて、心の働き鹵莽粗笨なる人、即ち算數の學を好み且つ能くするに堪へざる際の人なんどの決して之を能くし之を好むこと無きものなり。されば算數の學なんどを能くする人の、碁象戲を好み且之を能くする例は、我等の數々之を眼にすることなり。先

るところのものにかゝるなり。此の佐原を距ること西南へ二里ほどのところに伊能といふ小村あり。伊能氏の祖先の居りしところは即ち其村にて、伊能といふ氏の起りも全く其村の名に基けること碑文の記せる如くなるべし。

先生の初聲を揚げたまひしは延享二年正月十一日と傳へらる。延享二年は徳川氏の猶盛んにして内外事無く、世の人皆太平の樂みを享けて心ゆたかに遊び暮せる頃なりしなり。先生の父神保利左衛門といへるは如何なる人なりしや、また母は如何なる人なりしや、別に其行事の傳はること無ければ、今考へ知るべき便無し。たゞ先生がいと幼かりし頃三次郎と呼ばれしことのほかは、先生のいと幼かりし頃に就いて語るべきこと無し。蓋し先生といへども其幼きに當つては、また世の常の童兒と異ること無く、遊び戯れて日を送りしこと論ずるまでも無し。

先生の伊能家へ養子として引取られしは、先生何歳の時なりしか、的證無ければ妄言することを得ず。神保氏と伊能氏とは姻を通ぜる間にして、伊能氏の三七郎長由といふ人の死して嗣無かりしにより、先生の入つて伊能氏を嗣ぐに至りしなれば、三七郎といふ人の歿年を考へ得たらんには、先生が伊能氏を冒すに至りし年の程も大凡考へ得べけれど、是は左せる益も無き考證なれば詳しく知るの要も無からん。先生は其幼名の三次郎といへるが示せる如く、神保氏の第三子として生れたれば、たま〳〵伊能氏の嗣無きにより、入つて其家を襲ぎしまでの事なりしならん。或は曰く、先生

くも苦からず、見え隱れに此人の後に跟きて先生が事蹟の物語を聞かんこと眞に我に取りて得あるべし、然なり然なり、と點頭きて、同く此寺を立出でたり。一行の人々は淺草の雷門に出でゝ鐵道馬車に打乘り、新橋までの切符を買ひたれば、我もまた同じやうに其車にて新橋まで行くべき心備へしつゝ、今や彼人の語り出づる、と片唾を呑みて控へけるに、やがて彼人は左右に坐したる年少き兩人に向ひて伊能先生が事蹟の物語を爲しはじめたり。

其一

伊能先生が家の由緒は語りて聞かすまでも無く、碑の文にて知りたるなるべければ、詳しく告ぐる要無かるべし。たゞ碑の文にも見えたる如く、先生は神保氏の人にて、神保家より伊能家に嫁きし人ありし緣故により、伊能家を嗣ぎしに過ぎず。伊能家は下總の國佐原に其當時は住みて、酒醬油など造ることを業と爲たりと覺しく、神保家即ち先生の生家は、武射郡小堤村にありしと傳へらるるが、今其地理を考ふるに小堤村といふは上總の東金より北して銚子港に至る間の一條の路の中央あたりに栗山川といふ川ありて、其川の上、其路の西北に當るところにあり。佐原は小堤より殆んど正北に當る賑はしき小市にして、醬油、酒の類の釀造を以て名高きところなれば、其位置なんどは、云はずとも汝等も知るなるべし、東京にて我等の買ひ需め得る糟漬の食品類は多く佐原より來

して、長兵衞の如きは、眞に華やかにして、而も眞に我等に用無き人といふべきなり。嗚呼我等才乏しく德薄しといへども、此身こゝに在り、此志未だ衰へず、願はくば各自其の欲するところを成して、長兵衞の如く後人に用無きものとならず、先生の如く世に功ある人とならんかな。草の生ふるや一歲なり、人の活くるや一世なり、好き日に努力して事を做さずんば、訪はれぬ墓となつて雨に打たれ雪に埋められんのみと、感慨して說けば、二人の少年も、實に道理と點頭きて、叔父上の云はるゝところは甚だ明らかなり、我等も如何で迷ひを取らん、人間の普通の規道の外に出でたるものとなつて此の長兵衞の如くならんよりは、淸明の世界太平の天地に生れし幸福には伊能先生高橋先生の如くなりて米粒ほどの益をも世に加へ後に遺らんことと我等が願ひなり、と彼一句又此一句、かたみ代りに懷ひを述ぶる其面には勇氣滿ちて其聲もいと淸しく聞えぬ。叔父と云へるは是を聞きて、歡喜の笑を溢らしつ、汝等の言まことに賴もし、さらば今より芝の方へと行く〳〵先生が一生の事蹟を我が知れる限り語り聞かさん、我が物語は世に行はれつゝある長兵衞の物語ほど汝等の胸を躍らすやうなることは無かるべけれども、而も我が物語は世に行はれつゝある長兵衞の物語よりも却て汝等を益することと多かるべし。興乏しくとも聞くが可からん。いざ伊能先生が墓前に復た、び拜別して此寺を立出でん。と云ひ終つて脚を擧げ歩み出せば、我もまた其後を慕ひつゝ、此人の口より先生が一生の事蹟を聞かんは幸福なり、那處へ行き向はん目的も無き折なれば、芝の方へ行

通の人間には全く用無き爭鬪に屬する記事のみを以て充たさるればなり。我等は確實なる價値あるものに就きて學び、普通の人間に用あるべき事件に屬する記事を以て充たされたるものに就きて學ばんことを欲ふべきなり。決して華やかなることにのみ心を奪はるべからず。眞眞目にして用あることに心を注ぐべし。眞面目に、眞面目に、と思ひても、我等は、やゝもすれば華やかなることに心移りして、稻田の草を除くことを忘れ、鎭守の祭禮に笛の一つも吹きて褒められんことを希ふ類のこと多きものなり。華無くして面白からずといふの故を以て、眞面目にして用多き事を斥くべからず。伊能先生の我が邦に遺したまひし功は萬人の知るところなり。されど心無きものは之を知らず、吾邦の地圖は誰によつて始めて信ぜらるべき形質を具して世に出でたりやといふことをも知らず。まことに慨くべきことならずや。且また伊能先生の傳記は、長兵衛の傳記の如く不確實なるものにあらず。其今を距づること遠からざると、先生が一生の行狀奇なるところも無く怪なるところも無きとは、後の者をして先生の一代記を攪亂する能はざらしめたれば、實に疑ふべきところなき眞實の傳記なり。眞實にして疑ふべきところなき傳記は、必ずや我等に何等かの學ぶべきところを示すものなり。まして其一代の事蹟甚だ眞面目にして些の奇怪の事無く、また普通の人間の、遭遇すべきやうなる事件に屬する記事のみを以て充たされたる伊能先生の一代記は、甚だ我等に取りて用あるべきならずや。されば伊能先生の如きは、眞に華やかならざるも、而も眞に世に功ある人に

ことは二先生の上に出でゝ、俗人等に尊み崇めらるゝこともまた二先生に超えたり、此方に來よかし、其人を示さん、と云ひつゝ先に立つて叔父は歩む。二人の若きは叔父に從ひて行く。我は先づ伊能先生の墓前に水を供へ、一拜して後此寺を去らんとせしが、さるにても今の男は抑も何人の墓を二少年に敎ふるならんと思ふ心に惹かされて、三人の行きしかたを見れば、叔父と呼ばれし彼の男は、我が今花を供へ香を手向け來し長兵衞が墓の前に立ち止まりたり。如何なることをか說くと只有る碑の蔭に立ちて聞くに、彼の男は聲高く、これを見よ、汝等も數々耳にせしならん、幡隨院長兵衞といへる俠客の江戸にありしことを。此碑は即ち其人のなるべし。世俗は華の色美しきを好みて實の用多きを忘るゝならひなり。此の幡隨意の如きは、おもふに華やかなる一生にさま〳〵の色を見せし人なり。また伊能先生の如きは、極めて華やかなること無く、一生を過ごしたまひし人なり。されど幡隨意が功、今いづくにか遺れる。長兵衞が遺せるところのものは、虛實相半して、まことに信ずべくもあらぬ一條の物語のみ。されば我等は長兵衞がために錙銖の益をも受けざるのみか、また其一生の傳記よりも何等の學ぶべきところを得るとを能はざるなり。若し人ありて好んで長兵衞が傳記の虛實さへ明らかならざるものに就いて學ぶところあらんには、其は却つて其人を利せざるべき甚だ危險の性質のものなるべし。何となれば、世に傳へられたる長兵衞が一代記は、我等が學ぶべきところを見出し得べきほどの確實なる價値あるものにあらぬのみならず、むしろ普

且は面貌の似かよひたるところあるより猜するに、四十ばかりなるは二人の少年の叔父なるべし、と思はれけるが、一人の若きが、やゝありて、叔父上と呼びかけしにて我が想像のあやまらざりしを知りたり。叔父上、もはや此處を去りて芝の方に參らん、と云へば、叔父と呼ばれしも頭を擡げて、如何にも最早こゝを出づべし、一齋先生の文をも讀みしなるべし、またこの伊能先生の碑の左の方なるは東岡高橋先生の碑なることと汝等が眼のあたり見て知れるなるべきが、此の碑の文は尾藤二州先生の文なり。佐藤一齋先生の伊能先生の碑の文は、さまざまのものにも載りたれば知る人多し、二州先生の東岡先生の碑の文は知る人少く、書物などにも多く載せられざれば、熟く讀みて記え置くを可とす。汝等ことごとく讀みたりや、と云ふ。すべて讀み終りたり、いざ芝の方へ參るべし、と他の一人の若きが云ふ。叔父は笑ひながら、左ばかり急ぐべきことかは、此處に來つる次に汝等に見すべき碑猶一つあり、嘗て我初めて此寺に來りて伊能先生の墓を掃はんとしける折、圖らずも先生の墓を認め得るに先だちて思ひもかけぬ人の碑の此寺に在ることを知り得たり、試みに其人の誰なるかを猜し見よ、いと名高き人なりと云ふ。若き二人は面を見合せながら、誰ならん誰ならん、君は誰とかおもへる、我は誰ならんとも思ひ得ず、と互ひに云ひ居けるが、やがて一人は叔父に對ひて、古人も多し、いかでその誰なるかを猜し得ん、其碑の主もまた伊能先生高橋先生の如くなる人なりや、と問ふ。いや伊能先生高橋先生などゝは痛く樣異りたる人なり、されど其名高き

木と共に朽ちざることと長兵衛の如きを得ば、また以て自ら慰むるに足らずやなど思ひ、歩をかへして、門のほとりに到り、樒線香の類を賣る家に就きて、聊か花を買ひ香をもとめ、再び墓前に至り、之を供へて、心ばかりの吊ひをなし、やがて歸らんと此方へ來るに、前に見し三人づれの彼の人々も一つの墓の前に香を焚き花を供して、いと肅まやかに默禱せり。おのが家の先祖などの墓ならんには尋ね迷ふべくも無き筈なれば、この人々も必ずまた我が今長兵衛が墓を掃ひし如く、おのが家には緣由も無き人の墓を、何か所以あつて其人慕はしくなど思へるあまりに、殊に來り尋ねて吊へるなるべし、そも何人の墓を吊へるならんと、其處近く過ぎがてら、眼を側めて觀るに、角柱形の碑のおもてに、東河伊能先生の墓と隸書もて記されたる文字あざやかに見えたり。伊能先生とは測量製圖をもて名高き人なり。さては此人々先生の人となりを渴仰すとおぼし。先生の事蹟は詳しく知らねど、我もまた先生の凡人ならぬあらましを耳にしたることあり。こゝに先生の墓あらんとは思ひもかけざりしが、今此處に在りと知つては、餘所に見て過ごすべきにもあらず。我もまた閼伽をなりと供へて一拜すべし。さりながら此の人々の心深くも思ひ入りて墓前にぬかづき拜し居れるを顧みずして驚かさんも心無きわざなり、少時待たんと、やゝ離れたるところの一つの石に腰打ちかけて憩ひつゝ、眼は猶彼方を打瞻る。四十ばかりなる人は黑き上着して縞の洋袴を着け、若き二人は那方かの尋常中學の制服と見ゆる上着も洋袴も共に黑きを着たり。互ひの年齡のほどより考へ、

彼處に行き、此處に行きて、並み立てる石碑卒塔婆なんぞの蔭に見え隱れする三人づれの人あり。一人は四十に近かるべく、二人は十五六にもあるべきか。共に皆洋服を着たり。我が關るべきことならねば、我は我が搜さんとおもふものを只管搜しけるが、やがて、それかと覺しきものを得たれば、眼を留めてこれを觀るに、果していと大いなる石に錫杖を持ちて立たせたまへる地藏菩薩の御姿を彫り浮めたるが、二つ並びて立てられたり。其一つに幡隨意長兵衞墓と彫りたる文字明らかに讀み取られたり。此の墓の眞僞は我が知るところにあらねど、打見たるところ流石に古びて碑のおもてに見えたる慶安三庚丑の文字の示せる如く、まこと其頃に建てられしものかともおもはる。世に傳ふる如くんば、長兵衞は市井の一匹夫に過ぎずといへども、賦性豪爽にして人に屈するに耐へず、義に仗り財を疎んじ、氣を負ひ情に任せて、巷閭に横行し、弱きを扶け、強きを挫き、事に當つて退かず、其一旦自己を忘れて人のためにするに當つてや、熱湯烈火の中に入るをだに敢てしたる好漢なり。おもふに演劇に小説に嘖々として、今猶人に稱せらるゝ其事蹟は、蓋しもとより虛實相半するを免れざるべけれど、所謂長兵衞といふもの、實に大に人に過ぐるところありしにあらずんば、如何で二百年餘りの幾月を經て、猶其名の滅びざることを得んや。また其の爲しゝところの事、眞に人のために難きを冒し紛れを解きしものありしにあらずんばまた如何で特に俠者の雄として今に傳はることを得んや。身に位官の榮を帶びず、家に萬金の富を積まざるも、男子と生れて草

伊能忠敬

其一

梅は既に散り櫻は未だ笑はねど、春も半の風ゆたかに天長閑にして、柳の芽の舒び、蘆の角ぐむなど、陸にも水にも觀るべき趣きいと多き頃の事なり。ひとり杖を曳きて、そこと指す方も無く徘徊したるに、圖らずも俗に廣德寺前といふところに行きかゝりぬ。この通りを北に折れて、古は新寺町といひ、今は北淸島町といふところに至れば、そこに源空寺といふ大寺ありて、其の境內に幡隨意長兵衞の墓ありと聞きしが、耳にのみ聞きて、未だ眼のあたり見たること無し。幸ひ今日は身に事無くして心に閑あり、かつは又其處近くも來つるものなり、一代の大俠のあと如何なるさまをやなせる、行きて見て一捻の香、一枝の花をも供へんと、尋ね〱て源空寺に到る。寺は文珠菩薩を安置せるを以て人にも知られたるところなれば、いと容易く行きつくことを得たり。いかめしき門を入り、棟高き本堂の左より其背後のかたに廻りて、或は矮き、或は高き、或は大なる、或は小なる墓碣石塔の幾個となく列び立てる間を過ぎながら、豫て地藏尊の刻まれたるが其碑なりと聞きたるを心あてに、それかこれかと搜しけるが、これもまた我と同じやうに心ざせる墓を索めかねてや、

或は殺さるゝといふを聞くも、仍ほ永曆の正朔を奉じて改めず。清帝今は殆ど天下を一統したれば、一成功の厦門に據り臺灣に據るに關せず、其遂に降らざるを見て芝龍等十一人を燕京に斬りぬ。清將黃梧はまた海戰の大敗を怒つて鄭氏の祖墳を毀ちぬ。明帝の死して明亡びたるは事實として知れぬ。堅忍不拔、盡忠報國、他日の一躍を期して恨を呑み憤を制して海島に蟄せし成功が胸中の悲痛如何ばかりなりけん。永曆十六年五月成功病を得て臺灣に卒す、年三十九。成功死して子經立つて臺灣を保ち、猶清朝に從はず。經の子に至つて終に亡ぶ。成功を議するもの曰く、成功酷薄恩少く、號令嚴明に過ぎて襟懷寬洪ならず、こゝを以て一旦成功が誠忠に感じて其麾下に集まるものも一蹉跌あれば自ら安んぜずして心を變じ成功に叛くに至り、之を前にしては施琅の如き、之に後にしては陳覇の如き、皆然らざる無し、成功の大に志を伸ぶるを得ざりしは、實に之がためのみと。議者の言或は中らん。芝莞を斬り、蘇茂を斬りしが如きは、蓋し成功の失なり。然りといへども、明人の輕佻浮薄、識者すでに恢復の擧成るべからざるを知る。故に成功の志を以て成功の事を爲さんとすれば、勢ひ、嚴毅剛明、民心を新にし、俗風を矯めんとせざるを得ず、諸葛氏仁無きにあらざるも嚴刑峻罰するもの又是此の意なり。成功の苛なるが如き諸葛氏に學ぶところある無きを得んや。假令然らざるも固忠義に急なるに出づ。疵を索めて酷議せずして可なり。悲しいかな成功の事や。

五月滿漢の兵悉く船に乘じ出づ。成功陳堯策に令を傳へて諸將をして軍船を海中に按して成功の令を待たしむ。堯策令を傳へて未だ畢らざるに清の軍船忽ち至り、鄭軍の周瑞陳輝奮戰すれども及ばずして敗る。時に日午に垂として潮湧き風起り、鄭軍に利あるに至りたれば、成功自ら旗を手にして師を起し、巨艦を引て清軍を撃ち、諸隊をして錨を拔き敵に逼らしむ。清軍終に大に敗れ、全軍覆沒して死者甚だ多し。將軍達素が福州に還りたる後、敗衂を憤りて自殺したるに徴しても清の敗れの甚しかりしを知るべし。清軍これに懲りて成功の世を終るまで廈門に逼らんとするもの無し。明の運いよ〳〵傾きて永明王は南の方緬甸に入るに及び、成功も金陵の敗後勢衰へて、軍孤に、力疲る。頼に海戰に大捷を得たるより猶一方に據つて立つとはいへども、今後を如何ともすべき無き折柄、永曆十五年の正月、何斌といふもの成功に見え、謂て曰く、福建を東に去つて臺灣島あり、周袤三千餘里、孤嶼環瀛相錯ること繡の如し、物產の利尠からず、日常の需欲くるところ無し、土蕃百萬、敎へば以て兵となすべし、十年これに據らば、退いて守るに足り、進んでは出づるに足らんと、成功これを聞きて、孔明南に出でし跡を學ばんとや思ひけん、諸將を集めて臺灣を取ることを議し、老練の將を遺して長子經を監國として廈門を守らしめ、二月出發し、四月澎湖島に着き、荷蘭人を逐ひ、赤嵌城を承天府とし、十二月に至り全く蘭人等を驅逐し、兵をして地を有し農事を治めしめ、法を立て、學を起し、產を起し、民を安んず。永明王緬甸人のために執へらると云ひ、

ものゝ擊ち敗りしより、心ゆるみて敵を輕んじ、成功の命をも顧みず甲を脫ぎて酒を縱にせしかば、敵將梁化鳳の覗ひ知るところとなつて突擊せられ、大に破れて究窘し、終に淸軍に降りける。淸軍既に前鋒營を破り、盡く騎兵を出して城下に列ね、步卒を以て觀音門より中堅を擣く。成功親軍右虎衞陳鵬、右衝鋒萬祿を率ゐて擊て之を敗りけるに、淸軍數萬山後より其背に出て、左先鋒營に薄りければ、鎭楊祖敗れ、藍衍戰死し、張英もまた死す。淸軍勢に乘じ、山背を繞り、ますます急に攻め立てしかば陳魁、萬禮等勇將皆死し、成功水軍を催し敵背より突入せんとせしも、潮退きて意の如くなる能はず、全軍覆沒して舟を爭ひ逃るゝに至れり。甘輝は勇猛を以て聞えしものなるが、戰破るゝに及んで且戰ひ且走りしが馬躓いて擒にせられ、敵將管效忠に見ゆ。效忠前の輝が同列余新をして降を輝にすゝめしむ。輝新を見て怒つて之を蹋て罵つて屈せず、遂に殺さる。成功金陵に大敗して慟哭し自ら罪し、師を廈門に班し、自ら貶して王爵たらず。永曆十四年、淸の世祖既に江南を定め、乃ち將軍達素、總督李率泰をして征討の事を執らしむ。成功これを聞き、淸軍を水上に敗らんと欲し、陳鵬を以て諸部を督し高崎を守り同安を防ぎ、鄭泰をして語州に出て廣東を遮らしめ、自ら諸部を勒して海門を扼しぬ。

木城を焚き、大船は南港に小船は北港に繫ぎ、甘輝、翁天祐、鎭楊祖等を從へ、大將の旗鼓を建て丶直に瓜州に殺入し、淸の朱衣祚左雲龍滿漢の騎兵一萬を率ゐて、戰ひ防ぐを、成功急に軍を麾いて大に進めしかば、周全懸兵を率ゐて甲を帶び水に浮ひ岸に登りて直に敵陣に突入し、身五矢を負へども氣いよ〳〵鋭く、敵將寧龍を橋下に斬つて棄て、鐵人等は大刀を揮つて馬足を砍り、大に敵を破り、朱衣祚を擒にしたり。此戰淸軍の死するもの甚だ多し。成功勝に乘じて談家洲を屠り、鎭江を衝き、淸の提督管効忠と劇戰して之を破り、鎭江の守將高謙及び知府戴可進等を降し、京峴の山に登りて大に士卒を饗し、全斌、黃昭等をして鎭江を守らしめ、張煌言楊朝棟等をして江南を招撫せしめ、袁起震、徐長春等をして江北を招撫せしむ。こゝに於て當州徽州池州太平滁和六合等の州郡の子弟奮つて成功に從はんとするもの多く、蕪湖の淸兵等皆遁る。甘輝は勢を侯ひ機を覗て、成功に謂つて曰く、瓜鎭は南北の咽喉たり、但此に坐して動く無ければ、山東の師は下るあたはず、兩浙の路は通ぜず、金陵は久しからずして手を拱して定むべしと。されど成功は功に急なれば甘輝が言を聞くべくもあらず、七月八日兵を部署して金陵を取らんとし、八月進んで觀音門に至り、儀鳳門より岸に上り、獅子山に軍し、漢西門觀音山第二大橋頭諸山に分屯し、成功は岳廟山に屯す。甘輝は成功に打對ひて、夫兵は先聲を貴む、彼は衆く我は寡ければ、彼の勢定まらざるに乘じて拔くべし、緩うせば圖り難からん、と云ひけれども、成功これを用ゐざりしは實に悲しか

率ゐ、また滿州騎兵の神速驍勇防ぎ難きを憂ひて、力士を募り、身に鐵を被り、書くに朱碧彪文を以てし、其兩目を留むるのみにて隙間無く身に甲し、手に斬馬の大刀を執つて陣前に出で馬足を視て之を砍るべしと命じ、號して之を鐵人と曰ひ、陳魁をして之を總べしめぬ。成功率ゐるところ總て甲士十七萬、水兵五萬騎士五千鐵人八千、兵八十萬と號し、船艦八千と號し、運命を一擧に决せんと長風に駕して北上しぬ。

成功が軍は北上して浙江に至り、樂清等の州縣を攻め降せしが、たま〳〵羊山の沖にて暴風にあひ、八千餘人を水に失ひ、成功は幼子三人までを失ひける。されば諸將は厦門に歸らんことを勸めけれども成功は應ぜず、瀏洲に泊まりて修繕をなし、十二月磐石衞を取りける。

永曆十三年五月成功崇明に至りければ、成功の諸將、先づ崇明を取りて糧を通ずるの計を爲さんと云ひけるに成功これを用ゐず、六月吳江港口に移り、永勝州に至り、江陰に至り、七月焦山に至り、諸將に向つて、爪州は金陵の門戸たり、須らく先づ之を破るべしとて、馬信余新等をして進んで爪州を脅さしむ。時に鄭軍を防ぐもの鎭江より爪州に至るまで巨木を用ゐて長堤を築き、砲を備へ馬を馳せしむべくし、海舟をして江に溯る能はざらしむ。鄭軍こゝを以て僞つて舟數隻をして江に上らんとするが如くせしめ、淸兵をして砲石爭ひ發せしめ、五日にして敵の砲矢やゝ盡くるを伺ひ、善く水に沒するものをして敵の長壩を潰らしめ、舟を悉くして鎭江を過ぎ、爪州に上り、滿州

永曆十一年、成功防戰機を失ふの罪を以て部將蘇茂を斬りしを見て、同じく部將たりし黃梧心安んぜず、茂の族弟蘇明を脅し、海澄城を以て淸に降りしかば、成功は廈門の門戶を失ひぬ。成功は海澄を失ひしかども志屈せず、南風に乘じ、敵の備無きに出て、閩安を取らん、たとひ取る克はずとも敵をして奔命に疲れんめん、と船艦數十隻を發して福州を襲はしめけれは、敵果して動亂し、諸將をして一面は福州を救ひ、一面は銅山を襲はしめ、成功の謀りし如く奔命に疲るゝに至りぬ。永曆十一年、成功、邊隅の戰鬪一得一失あるも終に爲す無きを以て大擧して北上し、金陵を克復して天下を聳動し、而して淸と雌雄を決せんと欲し、七月自ら師を帥ゐて北上す。八月より九月に至るまで鄭軍沿海諸州に勝つて勢甚だ盛なりしが、淸軍の急に閩安を攻むるを聞き、引返し見れば閩安は既に淸のものとなりたり。成功は勢是の如きを見て、今に於て大擧して奇捷を得るにあらずんば、我軍漸く蹙みて、明朝恢復の時無からんを知るものから、いよ〳〵大擧北上の念熾なり。成功いよ〳〵大擧に決しければ使を遣はして永曆帝に此事を奏す。帝、成功が邊海に孤立して忠義を勵み、成敗を顧みずして王事に盡すを嘉し、成功を封じて延平王に封じ、王秀奇甘輝等數人に伯爵を賜ひ、いよ〳〵報効の實を擧げしむ。
永曆十二年正月成功大擧を議し、甘輝を先鋒とし、兵一萬、船數十隻、馬信を二軍とし、兵二萬、船數十隻、萬禮を三軍とし、同じく兵二萬、船數十隻、おのれは後軍として兵四萬、船百二十隻を

永曆六年正月成功海澂に攻め入り、城守郝文興を降し、二月長泰を攻む。成功が部將甘輝は勇を以て鳴る。敵に王進なるものあり、大名の人にして老虎と號し、また勇を以て鳴る。二人相遇つて大に北溪に戰ひ、巳の刻より午の刻まで人まぜもせず横縱跌宕おもふさまに鬪ひけるが勝敗無し。清の總督陳錦、長泰の急を聞きて援を出し、江東橋北に戰ひけるが却つて我軍に敗られ、錦は泉州に奔り、我は城をば陷れぬ。五月清の馬逢知を敗り、七月陳錦が首を得、十月に至り清の金固山が大軍至るに及んで退いて海澂を保ちぬ。固山海澂を攻むれども克つ能はず。海澂の守、これより愈堅し。永曆六年、清廷、芝龍に命じて書を作り、鴻逵、成功、芝豹等を招き降さしむ。芝豹は終に降りしかども成功は如何でか降るべき、言を左右に托して、却つて福興泉漳等の郡に縱横せしかば、清大に怒つて芝龍を高沮戍に芝豹を寧固塔に置きたり。されど成功毫も顧みず、漳州に冠しては守將朴世用以下を降し、進んで泉州を略しなどしければ、清廷今は大兵を發しても鄭賊を滅すべしと、世子濟度を定遠大將軍とし、多羅貝勒巴爾楚軍等と共に成功を討たしむるに決しぬ。

成功は清の招撫を峻拒するや清軍の大に至らんことを期し、戰備を盛にし、永曆九年、所部を分つて七十二鎭とし、儲賢館、儲材館、察言司、賓客司を立て、吏、禮、戸、刑、兵、工の六官を置きて庶政を分理せしめ、凡そ便宜封拜するところに朝服して北向稽首し、永曆帝の座を遙拜し、疏して之を焚きしかば、人其至誠に感ぜさるもの無し。

はざるに至り、得功こゝに死するは是非無けれど、公等の眷屬は皆安平に在り、得功死しなば公等が家眷に利あらざらん、と云ひければ、鴻逵は得功を掌中のものとは爲しながら漁舟を與へて得功を去らしめぬ。成功は厦門襲はれしとの報を聞きて急に引返し見れば得功逃げ去つて既に兩日なり。成功が恨おもふべし。

成功乃ち義を守つて難に死せし曾櫻を祭り、一族なれども芝莞が機を失するの罪を正し、尙方劒を以て芝莞を殺し、信賞必罰親疏を分たず人情を論ぜざるを示す。諸將士これを見るもの愕然として驚き、肅然として愼み、努力して國家に盡さずんばあるべからず、とぞ思ひける。されば兵氣はこゝに振つて其勢いよ〳〵烈しくなりぬ。鴻逵は成功の擧動を見て、己れの兵船軍士を悉く成功に與へ、おのれは、白沙に塞を築きて隱者の如くになりければ、成功が兵はます〳〵多く、今は其兵六萬と號するに至りける。

成功の部下左先鋒施琅、年少く容貌魁悟にして兵を知り、鄭氏の軍の椅樓旗幟伍陣相離の法も皆琅の爲すところなり。然るに琅罪を成功に得て逃れしかば、成功琅が他日鄭家に不利をなさんを慮りて、急に之を促へんとせしも、琅遂に脫れて淸軍に入り、後果して鄭氏を臺灣に滅ぼしぬ。

五月成功南溪に寇し、淸の漳州の守將王邦俊を敗り、十一月、小營嶺に提督楊名高を敗り、十二月勝に乘じて漳浦に寇し、守將楊世德、陳堯策を降しぬ。

留各作用あり、謹んで儒服を謝す、先師昭鑒し玉へ、と高く揖して去りぬ。こゝに於て一族交友成功が志に感ずるもの皆奮興して國のために從はんと願ふ。其數九十餘人と聞ゆ。成功乃ち同志を糾合し二巨艦に乘じ、纜を解きて行く行く兵を南澳に收め數千人を得たり。成功時に年二十三。其明年成功永明王の肇慶に即位し永暦と改元ありしを遙に聞き、鄭彩等と海澄に入り九都を破り、叔父鴻逵と謀つて泉州を攻め、清の提督趙國佐を桃花山に敗り、追ふて城下に至り、清の漳州の城守王進の軍を出すに及んで引返したり。海澄の人甘輝、南安の人施琅等、成功の風を聞きて麾下に集まる。

永暦二年三月成功、甘輝等をして同安を攻めしめ、成功も自ら至り、終に守將知縣を逐ひ、我將葉翼雲を同安知縣となしぬ。されど此歳七月清の修國器、陳泰、李率泰等大軍を帥ゐて至りければ翼雲等死して同安また清のものとなりぬ。永暦三年何騰蛟、金聲桓等清のために敗死し、明いよ〳〵危きも、成功は益奮つて諸將をして羅山嶺盤陀嶺等を守らしめ、其翌四年は潮陽を降し、鄭聯を滅して其軍を併せ、鄭彩が諸將を彩より托されて、厦門に據るに及び、謀將勇士の來り投ずるもの甚だ多く、成功が軍威日に盛にして兵四萬餘と稱するに至りぬ。

永暦五年清の張學聖、馬得功等、成功が南方に向へるを偵知して、鄭氏の據るところの厦門を奪はんと欲し、急に攻む。鄭芝莞防ぐ能はず、鄭氏の珍寶を護り船に乘じて逃る。鴻逵は報を得て兵を出し得功を圍む。得功一旦厦門を得たることは得たれど退かんとして退く能はず、力究して防ぐ能

退けるを見て、降らば閩粤提督を授けんとの貝勒が書を信じ、遂に降表を進めんとしければ、成功泣いて父を諫め、金州より書を送つて、父の同行を促すに答へて、父の子に忠を敎ふるを聞く、貳を以てするを聞かず、且つ北朝何の信か之あらん、と曰ひけれども、芝龍はこれを顧みず、成功の言を幼にして人事を知らざるものとなし、終に降表を進めて福州に至り貝勒に見えたりけるが、貝勒等芝龍が傑黠にして他日異を生じたる時また制し難からんことを慮り、急に芝龍を挾みて北上す。芝龍部處を率ゐざりければ如何ともする能はず、これより長く淸の虜となりて樂からぬ月日を送る身となりぬ。芝龍の明に叛けるは固より當に惜むべけれど、淸朝の芝龍を欺き囚へたるもまた甚だ卑劣不信の擧動といふべし。

成功は今や君を淸兵が手に殺され、父を淸將が詐に奪はれ、母を淸軍の暴に亡はれ、さらぬだに亂離の世の人道天道有るか無きかの狀態を恨めしく思ひ、國家の仇の勢威日に月に盛んにして四百餘州辮髮の夷風に化せんとするを憤り居たるに、是の如きの時至り、是の如きの境に處しては、嚴正誠實の性質の如何てか晏然として日を暮し得べき。慷慨泣涕して義兵を起し恢復を圖り身を捨て國に殉せんと思ひたちぬ。されば、成功、主に遇ひ爵に列なりしといへども、實は未だ嘗て一日も兵事に與からざりしとて、意氣狀貌猶儒生の如くなりしが、師を起すを謀るに及び、着けしところの儒巾襴衫を孔子廟前に焚き棄て、先師を四拜して天を仰ぎつ、昔は孺子たり今は孤臣たり、向背去

よく南下して清の貝勒博洛等の大軍來り逼りぬ。監國魯王の清軍を破るありしも、大勢また翻すべからざるは識者ならざるも察知するに難からざる狀となれり。芝龍は朱氏の朝には立てど、出身の道も尋常ならず、自ら文臣等と心合はねば、快からず思ふ事も少からぬ上、清の内院洪承疇、御史黄熙胤等、同鄉の誼あるを以て清に歸せんことを勸むること切なりければ、芝龍は竊に心を動かし、如何にかせんと思ひ迷ひぬ。成功が此間の心苦しさ如何ばかりなりけん。成功一日帝に見えて、其鬱々として愁ひたまふを見、陛下鬱々として樂まざるは臣が父の異志あらんとするが故にもや候ふべき、臣は國の厚恩を受けたる身の、義、反顧すべき無し、臣誓つて死を以て陛下を扞がん、と白して帝を慰む。成功の志はかくの如くなるに似ず、芝龍は帝のために力を致さず、獨り安平に居つて船隻を備へ、旌旗海を蔽ふて軍威盛んなれど、少しも帝を助けねば、帝は汀州に逃れたまひしも清の將李成棟のために殺されたまひぬ。

芝龍は兩端を抱きて、七分は清に降り明を棄てんとなし居ける中、芝豹は泉州城に入り餉糧を徵發なし居けるに、清將韓固山の兵遽に來りければ、芝豹等防ぐ能はず退き遁れぬ。成功の母田川氏は城中に在りけるが清兵の群り至るを見るよりも、事こゝに至る、一死を惜みて何かせむ、と懷劍一閃自ら死しける。

芝龍は郭必昌の甘言に欺かれ、且つ清將韓固山の貝勒が命によつて安平を去ること三十里の地に

崇禎十二年芝龍また命を受けて、海賊蘭人郎必即哩哥を撃つて之を逐ひしかば、今は海賊殆ど盡き、鄭氏の手によつて遭運の安全は保たるゝに至りぬ。されば鄭氏は今や海上王の如く、芝龍の官はまた福建都督たるに及び、鴻逵は登州副總兵たるに至れり。

明は天啓崇禎に及んで大に衰へ、張獻忠、羅汝才の輩反を謀りて、李自成の如きものも出づるに至り、外は愛親覺羅氏の北より逼るあり、綱紀紊亂してまた如何ともする能はざる勢となりぬ。崇禎十七年は明帝流賊李自成のために死し、福王わづかに馬士英等のために擁立せられしが、福王もまた次て清のために囚へられしかば、鄭鴻逵、鄭彩、鄭芝龍等相謀つて唐王を立て隆武と改元す。鄭森今は年二十三、堂々たる丈夫となりぬ。父芝龍に從ひて隆武帝に謁しけるに、帝森を見て之を偉とし、惜むらくは一女の卿に配すべき無し、卿當に忠を吾家に盡すべし、相忘るゝなかれ、とて御姓を賜はり、成功といふ名をさへつけ玉ひ、御營中軍都督に封じ、尙方の劍を賜ひ、駙馬同格の儀を許させたまふ。これより中外國姓爺と稱して其名を呼ぶものなし。

隆武元年、成功の母田川氏、成功ならびに芝龍に迎へられて七左衞門を遺し、鄭氏が居城安平鎭に至る。成功暇を乞ふて安平に至り、十七年にして再び母に會ふ。往時の福松今は峨冠彩服の人、國姓を賜はれる偉丈夫なり、其母の悅び、其子の情、推するに餘りある再會なり。戰亂の世ほど悲しきは無し、成功母を省せしも長く膝下に在りて歡を盡し難く、隆武二年は清兵い

森は是の如く七歳まで日本に在りしことなれば、季父の芝豹を首として人々等に中國の風を知らぬをもて窘め侮らるゝことなど多かりしが、叔父の鴻逵は獨森をば偉器として、他日諸昆弟は森に及ばざらんとて甚だこれを愛しけるとぞ。森年十五にして弟子員に補せられしといふ。王觀光といふものもまた森を其幼時に識つて芝龍に謂つて曰く、是兒は英物、而が及ぶところに非るなりと。蓋し成功幼時よりして早く已に言語動作の凡物とは異るところありしならん。

崇禎六年、芝龍、兩廣提督熊文燦、閩州巡撫雛維璉の命により、船三十餘隻を率て舊の同輩劉香が今尙賊をなせるを撃つ。劉香大に芝龍が舊好を顧みずして朝廷の爲に我を窘むるを怒り、盛に部下を發し黨與を連ねて田尾洋に鄭軍と惡戰す。劉香が隊進退法あり、特に李虎三なるものあつて慓悍能く鬪ひ、鄭軍勝つ克はず。鄭芝虎、平生勇武、氣を負ふ。乃ち手づから籐牌を執り口に大刀を含み、劉が船に近づき、一躍して直に入り奮戰す。芝鵠は劉軍を横撃せんとして却つて擊沈せられしも、芝蟒は劉船に迫りつ火を放ち燒き立てたり。李虎三は大に戰ひしが芝豹之を溺らしめ、芝豹等また敵船を燒く。兩軍鬪爭猛惡を極むるが中に劉香が船は火いよ〳〵熾に海風焰をあげて天水皆紅ならんとすれば、劉香芝虎は互に相搏しつゝ、海に入つて、敵の勇將、味方の猛士とゝもに、敢無くなりたりけり。鄭軍は芝鵠芝虎を失ひしが、芝虎が身を捨てゝ敵の首魁を殺せしため、敵は全く敗れ亡びて、鄭軍全勝を得たりければ、これより海上安くなれり。

李魁奇はこれまた一個の梟雄なり。芝龍の舊徒陳衷紀楊天生陳勳等を澎湖島に要擊して之を殺し、臺灣に據りて雄を稱す。崇禎二年四月芝龍李魁奇を襲ふて之を殺し、其船と衆とを奪ふ。芝龍また此年六月楊六楊七を平げ、八月褚綵老を滅し、大に功を海上に建つ。
崇禎三年の五月、芝龍今は歸順して國家のために功をさへ立てたる身の心安ければ、平戶に遺せし田川氏と我子との上を想ふこと切なるまゝ、今は我明朝に仕へて聊か志を得たり、母子共に我が此の使に導かれ來よ、と芝燕を使として書を齎し、母子を招く。福松今は七歲にして其弟七左衞門は二歲なり。福松が母は芝龍去つて後日夜夫の上を思ひ暮し居たりけるが、今其無事にして貴き由を聞きたる悅び如何ばかりなりけむ、直にも船に乘じて彼土にも渡りたくも思ひしなるべし。されど我がまゝに渡海も成り難く、それ〳〵の手續をなしけるに、其間日數積りければ、芝龍は之を怪み危み、芝鶚に厚幣を齎ちて日本に至らしめたり。芝龍が家眷渡明の事幕府の許可は漸くにして下りけれど、七左衞門猶幼きに水土風氣の異りたる鄕に至らんこと心無きに似たりとて、田川氏は福松のみを芝燕芝鶚に托して父芝龍が許に至らしめぬ。順風恙無く福松石井に至り、父に見ゆるに、其儀容整秀にして聲音も亮らかに、行末の賴もしさも思ひやらるゝありさまなれば、芝龍悅ぶこと大方ならず、師を延きて學に就かしめつ、森字は大木と名づけぬ。森は日本なつかしさに東の空を打仰いでは、ひそかに悵然として母を思ふの淚にくるゝ折もありしとぞ。

るべし、芝豹等八人は各一隻の船を領し、夜潮に乘じ青水に沿ひて出で、明日午時此方にて戰酣なる頃急に東鎮より殺到すべし、芝莞等四芝船四隻は左右救護たるべし、我は芝熊芝鶯等と共に船六隻を中軍とすべし、と部署洩るゝこと無く定めたり。

明くれば六月八日、官軍勝つか、鄭氏勝つか、兩軍の運命大勢この一戰に定まるべき乾坤一擲の大海戰は開かれんとす。既に其日の天明けんとする頃、官軍の大隊海を掩ふて走り至り、砲聲天に振ひ焔烟水を籠む。勇猛の芝虎先づ戰ひ、兩軍相攻めて辰より午に至り勝敗無し。芝豹等の八隻いまだ見えぬに、芝龍等是非無く、自ら中軍を督して戰ひけるが、已にして芝豹等の大船順風に帆を張りて官軍の背後を衝かんとす。愈都督大に驚き、急に命じて之に備へしめければ官軍これに崩れ立ちて、船を壞らるゝこと計六隻、都督驚慌戰ふ能はず、大に敗れて逃げ走りぬ。

鄭氏の軍六月の戰に勝つてより官また芝龍等を如何ともする能はず。福建の太布政司熊文燦、王猷が言によりて芝龍が心歸順を欲し、洪都司を免し、盧遊擊を殺さず、愈都督を逐はざるものは其證なるを知り、盧毓英を諭し、芝龍を招撫して戰敗の罪を償はしむ。盧王と共に芝龍に說くに、李魁奇、二楊、劉香等の海賊を平げなば朝廷必ず重爵を加ふべきを以てす。芝龍遂に意を決して降る。實に崇禎元年九月のことなり。熊文燦則ち芝龍を海防遊擊とし、毓英を監督とし、海上諸盜を平げて功を立てしむ。芝龍先づ李魁奇を平げんことを誓ふ。

進退意の如くならず、毓英死戰しけれども力及ばず、身に五箭を被りて遂に芝虎に捉へられたり。芝龍は本より一旦失身して海上に盜をなせども歸順の志あるものなれば、芝虎等を制し無禮を謝して、吾輩もと朝廷の一臣民なり、將軍等に抗するは已むを得ざるに出づるのみ、一たび葉太守の招撫に就きしも、部下の輩我を危しとして強て舊に依らしむ、若し朝廷一官爵をだに我に賜ふあらば、部下も心を安んじ、我もまた誓つて朝廷のために力を効さん、と云ひけるにぞ、盧毓英も芝龍が情を察して、國家のため公等が歸順の事を圖らんと答へける。こゝに於て芝龍盧を送り還しければ、盧は都督の兪咨皐に見え、加爵招撫の事を說きぬ。されど兪都督これを容れず。毓英また泉州の太守王猷に說き朱巡撫に說きけれど、王朱また用ゐず。兪都督は却つて馬勝楊世爵などいふものに命じて芝龍を討たしむ。芝龍是非無く馬楊の軍を迎へて之を殲しぬ。兪都督はいよ〳〵安からず思ひて、陳希范といふものを遣し、擊たしめけるに、是もまた却つて擊退されしかば、今は大擧して進勦するよりほか無しとて、閩安興化永寧銅山陸鵝縣鐘鎭海金門に檄を傳へ、張挺桂、林盛等の船五隻を先鋒とし、楊國桂、李應龍、吳虎、傅圭船各五隻を後軍とし、兪自ら大熕船に座し、中軍を師ゐ、又、黃勝、胡如海、王飛熊、李夢寻等凡十人各船一隻を領し、商世祿を監督とし、各部署を定めて押出したり。厦門の細作の報によりて、芝龍は六月の初八日に兪都督の師出づるを知り、さらば此方にても之に應ずる備無くては敵ふべからず、先づ芝虎芝彪は船十隻を率ゐて先鋒た

て死するに及び、芝龍衆の推すところとなつて一黨の魁となりしが、明の朝議に、今群盗を究治せんとすれば功を費す甚だ多かるべし、盜中事理を解するものを招撫して歸順せしむるに如かず、と定まりしにより、太守葉善繼は芝龍と舊相知れるを以て書を爲つて之を招くに會ひ、芝龍感激して善繼を德とし、意を屈して之に下りたり。されど芝龍が族十八芝の徒、即ち芝豹芝虎等これを悦ばず、虎は威を失ふべからず、人は勢を失ふべからず、とて騷ぎ立ちしかば、芝龍も是非無く一旦の意を飜し、叛き去つて復海島に據り、閩廣の間に往來して掠奪を事とぞなしたりける。

天啓六年のことなり、芝龍漳浦の白鎭に船を泊しける折しも、巡撫の朱之憑といふもの都司の洪先春、把總の許心素、陳文廉等と共に芝龍を攻めしむ。芝龍之を迎へ擊ち、辰の刻より戰つて酉の刻に及びけるが、會〻潮生じ風起りて心素文廉等の船流れ、先春漂泊して道を失し、退きて鎭に入りければ、芝龍芝豹等をして先春等が背に出で、岸に登つて大に呼ばしめけるに、先春等港口には芝龍芝虎等あり陸には芝豹等あり、狼狽して戰ふ能はず、身に數創を被りながら先春は辛くも免れて遊擊盧毓英に投じたり。毓英は山東の人にして、武を以て名あるものなりしかば、朱巡撫の檄に接して舟師を整へたりける折も折とて先春の敗れ歸するに會ひ如何で躊躇ふことあらん直に先春等と共に進んで芝龍等を夷げんと舟を出しぬ。芝龍等これを知りしかば、小舟三隻を出して毓英等を欺き誘ひ、毓英等の之と戰ひ、勝に乘じて突出し進むを見、急に諸船齊く出でゝ圍み擊たしむ。盧等

しく、棍を手にして撲ちも殺すべく罵りながら逐ひしかば、芝龍是非無くも折柄家近くに泊り居りし船の中に奔り入りたり。然るに船は恰も今、潮好し風好し、いざ碇をあげ帆を張りて船出せんとしける時なりしかば、芝龍は差當り父の許に歸らんことも爲し難きまゝ船主貨主などに乞ひて、日本に伴ひ行きたまへかし、と云ひ出し、其許を得て遂にはる〴〵日本に渡りしとなり。芝龍は日本に着きて後、肥前平戸に居り、松浦侯の優待を得て、河内浦といふに宅地を賜はり、圓明流の刀法を學びなどして日を送りぬ。

芝龍が日本に來りし時は、年二十にして、明の萬曆四十年ともいひ、天啓三年なりともいふ。いづれにしても芝龍が年若かりしには疑ひ無し。芝龍が住める河内浦に同く住める田川某といへる輕き士の女、芝龍が擧動賤しからず容貌優しきを見て、これを慕ひ、遂に父の許しを得て芝龍に歸ぎ、子を擧ぐ。子は即ち成功國姓爺なり。成功幼名は福松、まことに我邦の寛永元年七月二十三日、明の天啓四年といふに、河内浦のつゝきなる千里濱に生れしといふ。

蛟龍長く池中のものたらず、芝龍は思はざる因縁より顏思齊一黨の海賊の中に入り、陳衷紀といふに隨從して、海上を横行するに至りけり。思齊は海澄の人、臺灣を本據として盜を爲して身を終りぬ。其黨陳衷紀楊六楊七等を首として劉香張弘林福の徒皆桀驁の資を抱きて海上に陸梁し、官軍我輩を奈何するものぞ、と烟波に出沒して水陸に威を奮ひける。顏思齊酒を飲むこと度に過ぎ病を得

鄭成功

鄭成功は南安縣石井巡司の人なり。父は芝龍、字は飛黄、母は田川氏日本平戸の人なり。成功明末に生れ、一生艱難し、備に苦楚を嘗めて、而も其志を改めず、人を待つ嚴に過ぎたるの謗無きにあらねども、自ら責むるもまた甚だ切、慷慨壯烈、眞に日本武士の風あり。父芝龍また尋常一樣碌々死に至るの徒ならず、驍悍桀黠、實に亂世に跳梁するに足るの材あり、母田川氏は貞操果決、義を見て敢て爲す。成功すなはち父母の粹を得て、忠義勇往、困頓屈せず、其功成らずといへども其事傳ふべし。嗚呼、人生論ずべきは一精神あるのみ、誰か成敗を以て大丈夫を累せんや。

成功の父芝龍は翔宇といふものゝ四男なり。翔宇は府の椽たり。芝龍十歳ばかりなる頃、戯れに石子を投げ、誤つて太守葉善繼の額に中てしかば、太守驚きて人をして執へしめしが、見れば幼きものなり、且は眼清しく眉秀でゝ前程も好きところあるべく思はるゝに、父翔宇が叩頭して罪を請ふも可憫なりければ、よし〳〵、小兒の爲せしことなり忘れ取らせん、とて芝龍が罪を問はざりしといふ。芝龍が活潑の性此話をもて推し知るべし。

芝龍が日本に來れる所以は、さま〳〵に云ひ傳ふれど、翁吉燦といふものゝ說によれば、一日芝龍父の妾と相戯れつる時、父の見るところとなりて、其罪を惧れ逃がれたるに、父翔宇怒ること甚

和詞なるものは此條目によりて規定せられたるもの也。今其煩を厭ひてこゝに詳說せず。

支考が企圖は成功せしや否や。そは今日普通の人士の記臆に、支考式の半漢半和躰文章の存在せざるを以て明らかなり。其失敗に終りし所以等は特に評說するを要せずして明らかなるべきを以て略す。

支考が初めて大和詞を選せしは寳永の庚寅にして、自己一家の新式の文章を大に世に示せしは享保十二年なれば、此の奇異なる野心家は前後十八年ほどの間は、支考式の文章を建立せんとて苦心せしなるべく、其死せしは享保十六年なるを以て恐らくは二十年ばかりが間も之を忘るゝと無く、終に其大望を抱いて地に入りしなるべし。生華の筆才、呵佛の膽力、三面六臂の勞、十有餘年の勤、しかも其企ては蓮の葉の舍利と零れて其身は朝寢の夢の覺めぬ始に歸りたる、それはたこれを何とか賛せん。

と同じからんのみと誇り、七顚八倒して其「日本化漢文」若くは「漢化日本文」といふべき奇怪異僻の文を行はれしめんと圖りたるは、傍觀者に取りては甚だ興味ある擧動たりしとや云はん。假名文字を用ゐずして成りたる純漢文ならぬ我朝の文章書卷、即ち古事記、萬葉集、及び神書、帝詔、院宣、文官の牒狀、公儀の制札、神社の願文、佛家の諷誦、軍書等は、蓋し支考の着目せしところにして、邦文とも漢文とも就かざる此等の文章の、邦人の手に作られ易くして而も解され易きがため、漸々變化しつゝ終に一種の或形式を具して存在するに至りたる事實は、察するに支考が企圖の胚胎せし點なりしなるべし。吾妻鏡の文章の如き一躰の文章は、元祿以後庶民文學の繁榮せしため、今日の吾人の記臆中より逸し去る日多しと雖も、中古に在つては少からざる勢力ありしものにして、日本文學を攻究せんとするときは、半漢半和の彼の一躰の文章の當時に存在せしことが決して忘るべからざる問題として吾人の前に横たはるを見ん。支考が漢學の漸く大に開けんとして未だ全くは開けず、且つ半漢半和の文章の行はれし世に遠からざる時に際し、名を好むこと強き資質を抱きつゝ芭蕉が歌に於ける成功を目擊したりし事情は、其企圖の由來を解釋せしむる至好の觀察點ならずや。

支考が和漢の詞を通ぜんとて新に出したる五箇の條目は「其一は古文の例に倣ひ、其二は文字の義に據り、其三は字訓の響を假り、其四は文句の勢に乘り、其五は故實の法に隨ふ」にて、其所謂大

と云ひ、とてと云ひ、宜の、可のといへることとは、机に向つて習はねども我朝の人は知りて用らん、是をや生知安行と言ひて云々」といひて、我邦人は我邦語を用ゐて文書を作爲すべきことを半は感情的に、半は知見的に勸めたるは其第四段の言なり。

玆に於て「和漢の通用」といふ一言を拈出し來り、漢の助語と和の助語とを合して一丸とし、一字一用の法を立てゝ、日本の言語の最要素たる助語及び幾千の邦語を寫し出すべき漢字を五箇の條目に準じて規定し、假名交りの文を變じて漢字のみの文となさんことを、不言不語の間に希望し、刻苦して五十餘の助語を通じ、二百二十の文句を訓したる書を著し、而して自己が新案の「日本化漢文」數十篇を其標本として作り出し、これを流行通用せしめんがために、孫悟空の身外身の魔術を逞くせし故智を襲ひて、自ら作者となり、自ら評者となり、自ら注釋者となり、自ら師となり、自ら弟子となり、自ら死者となり、自ら選者となり、自ら序を作れる者となり、自ら跋を作れる者となり、東花と號し、西花と號し、蓮二坊と號し、野盤子と號し、渡白狂と號し、獅子庵と號し、桃花仙と號し、瑟々庵と號し、羶乙子と號し、麥蝶子と號し、花表人と號し、博望司と號し、烏有仙と號し、三面六臂の働き、一躰分身の術爲さゞるところ無く、試みざること無くして、傲然として其著書に「我朝の規摸にして和漢に耻ぢず」といひ、「誠に和漢の文操と謂はめ」と、いふが如き讃辭を載せ、覥然として釋迦沒後一代所説結集の場たりし畢波羅窟內の秘密もまた我が爲せるところ

云ふ句あり、これを漢語に云へば作者の意は不二獨濡一、二人とも濡るゝ義なり、聞く者は獨不レ濡と思ふ故に聞惑ふなり、漢土の文字の貴ぶべき所以なり云々」と伊藤氏の說けるを擧けて、「誠に此評の釋文は倭と漢との文章に返ると返らぬ差別より一步千里のたがひあれば、これらは晴天に鏡をかけて鼻目を見るよりも明らかに、是よし唐をもて日本の用となせる一發百中の證文といふべけれど云々」と說きたるは、暗に字を配するの法によつて意義の差をあらはす漢の文章の法の利を示せるに似たりといふべし。是の如くに漢字の利を說けるは、支考が說の第二段なり。

第二段の說は、其言甚だ詳しからねども、是亦然のみ咎むべくもあらず、然る場合もあるべしとして聽くべきなり。

「さるにても眞砂の跡をもどきて風無き濱の波を起つるは仰ぎて先賢を惶る可く俯して後生に愧つべけれど、邂逅遣唐使の用あらば四五輩の漢學者を備へて和漢の贈答を捌かしめば日本に幾萬の學者ありて唐風の文を書かずとも唐様の詩を作らずとも何か事を闕くべきや誰かは人を愧づべきや、諺に云ふ隣の蓼好にして言はば嘲りを買ふ人に似てん」といひ「各々我が假名を捨置きて人の漢字を尋ね行きたらんは、目無し何地〳〵の喩に似て敷島の波の返す〳〵も我が日本の耻ならぬかは」といひて、漢文を學ぶことを感情的に斥けたるは、第三段の言なり。

「いで然は我朝の人の我朝に生れながら爭で我朝のことを學ばざるや」といひ、「歌人の詞にも、何

無きところの事たり。蘐園一派の人々が口を極め聲を嗄して和習の脱せざるべからざるを說きしに徵しても、如何ばかり漢文を作るに和習の脱し難きかは、推知するに餘りあり。また漢學の興隆に際して助字考用字格譯文筌蹄の如き書の出でしこと多きに徵しても、其字ありて其訓無く、或は其字は多種にして其訓は一種なる焉矣乎耶等の漢の助語辭を我が邦人の用ゐる能はざりしこと如何ばかりなりし歟を推知するに餘りあり。是の如くして漢文を學ぶものは海沙の多きが如くなるも、學んで成るものは蚌蛛の如く少き習ひなれば、支考が邦人の漢文を學ぶことを無益徒勞と云ひ做したるは決して理由無く事實無きことにはあらず。其言は例の一種の調を有せる虚實相半の奇異なる筆致によりて表白せらるゝがため甚だ明瞭を欠くの嫌ひあれど、しかも支考が說は大躰に於て非とすべきところ無き也。

次に支考は飜つて漢の文字の利ありて假名文字の不利ある場合を論じ、漢文の捨て難きを說けり。「よし夫れ我朝の和歌とても眞名にあらざれば通じ難き事ありて然無きに骨折る人もあらん、譬へば業平の人に知られぬ我が通ひ路とよめりけるは、不のぬにあらず、畢んぬにあらず、或人は頼政の辭世によまれし身の成る果の哀れを見違へて、武士のあつぱれと思ほゆるなど、風雅の鏽を知らねばや、武にして文無きのみにあらず、匹夫の勇を賴むらん其人の果まで想ひやらる」と云へるは假名文字のみにて文を綴るとの不利の場合をあげたるにて、「ふたり行くひとりは濡れぬ時雨かなと

て、和訓と漢語との合期すること能はざるを説き、我邦人の彼の助字に通ずる能はず、且また其助字を用ゐる能はざるを示し、「助語の意に通ぜざるほどは何か言外の餘情を盡すべきや、餘情は音韻の文なればならし」と云ひ、「唐音に通せざれば菅相も覺束無く江帥も覺束無し」と喝破し、「適々漢文を眞似れども多くは語路の拍手を失ふ、殊更音訓の通用を識らざらんには、本朝に名ある大儒とても、漢文の事は任せ難からんか、然とて論ぜしめば識るまじきにあらねども、西京の書生も東都の文人も、燈下に萬卷の青表紙をひろげて、古人の蹤を視習ひ聽き習ひ、自己の心を着けざれば、馬に迷ひ鳥に惑ひ、いざ白雲の麓に漂ひて一寸の闇を辨へずや、」と罵倒して、究竟するところ純粹の漢文を我邦人の作らんとすることの徒勞に屬すべきをば繰り返し繰り返し説き立てたり。是の如くに、我が邦人の漢文を作ることを徒勞無益なりとせるは、支考が新式の文章を世に行はれしめんとするに先だちて擧示せる第一段の宣言なりき。

支考が説の第一段は甚だ明白なる理由と事實とを有せることにして、更に非とすべき點を發見すること能はず。實に我が邦人は「漢文和讀」の捷法によりて漢學を修め、「漢文漢讀」の正法によりて學び修めざるがため、其發るべからざる結果として生じたる幾多の弊害を被り、如何に漢學に長ずるも、漢人の漢文を解するが如くに圓滿なる解を下して十分に眞趣を悟得するには猶一紙を隔つるの狀態無き能はず、從つて漢文を作るにも隔靴搔痒の憾無き能はざるは、何人と雖も認めざること

目せしところにして、「當に知るべし文煥が助語辭を序するとて、曉らめ易くして用ゐ易からずとせるは千疑一决の論にして慥に助語を知る人ならん、增してや漢音に通ぜざる人の奈何に其關を越ゆべきや」と云ひて、我が邦人の漢文を作り難きを云ひ、「讀書の字訓には顯れたる聲の文あれば隱れたる音の響きあつて、文とは暑し寒しの如く、響とは嗟の歟の丶如きか、さらば其文は筆に傳ふべけれど其響は口に言ふべきのみ、實にも和訓を付くる人は彼の象を訓み成して某の響を辨へざれば四書五經の點とても楚辭文選の訓とても註者の俗語と謂へるなどは曾て以て通ぜさらん」と云ひて漢の響きの知り難くして從つて其情の眞味の解得し難きを說き、「實に夫れ大和の習ひとて左ゝ候とも左ゝ侍ふとも左樣を略せしは然ることなれども、今の歌舞の地にはやらかす遊人の口相は髭ある儒者には通ぜざらん、唐にも隨筆の夜話のとて巧言令色の沙汰あれば、などや斯樣の國詞無からん、然ばかり通に通あつて、かくまで略を略しなば、漢語の二重反しよりも殆ど言外の文を含めて、何を以て之を傳へ何を以て之を習はん、ふつ〳〵思ひ切るべきは得知れぬ唐國の學文なり」といひて到底日本人の漢文の眞趣を得んことは言葉の異なるがために望むべからずしァ、漢文を作らんことは愈々望み無かるべき由を斷じ、「そもや漢文の學び難き所以は、諸之其所の如きは、物を指す詞なりといひ、歟乎耶夫の如きは疑ひの詞也と曰ひ、或は語助とも或は語餘とも或は句絕の詞なりなど某字の下に言ひ捨てゝ、五十餘員の助字あれども、助語には此外の字訓無きのみか云々」と云ひ

の文學を壓倒せんとするに至りたり。搢紳武士の私有たりし文學の殆と死滅して、新に民庶の手によりて建設せられたる文學の活氣盛んに萠え出でたる當時の光景は、今日之を想像するも猶甚だ愉快なるを感ずるほどの事にして、淨瑠理といひ、小說といひ、俳諧といひ、皆庶民の胸臆に其根基を有して發生したる眞生命ある文學たり、而して此の潮流に乘ぜる先頭魚となつて背後に幾多の同族魚を引率せるものは、宗因といひ、芭蕉といひ、其角といひ、西鶴といひ、巢林といひ、皆拔群の天才を有して「古代文學の奴隷」たるを肯ぜざる英靈底の漢なるを以て、新文學の其勢ひは春水の四澤に滿つるが如き狀ありしや論無き也。

是の如きの時に際して、是の如きの資を抱けるの支考は、我邦の文學の根本に加被すべき大變動を起さんとするの企圖を發し、而して其企圖のたゞに自己より出でたるにあらずして、芭蕉の遺意なる由を云はんとて、「芭蕉の翁の生前より猿簑の眞名序に此沙汰ありて和漢の通用を思ひたちながら物の未練をおそれ玉へばとそれらに其翁の白馬集をひきて獅子庵の遺稿には云ひ置けり」といひ、「祖翁より先師の遺命をつたへ」といひて、而して所謂「大和詞」なるものを世に出したり。

助字考、用字格、譯文筌蹄の如き書は、漢學の盛なるに從ひて世に出でしも、我が邦の人の到底漢文を作ることを能くし難きは、幾多の助字の其意を知るは易けれど其用を辨へんことの難きがため、畢竟言語聲音の差ある彼國の助字を我邦の用となす能はざるに因る。この點は支考の第一に着

臭の文集をば「風俗文選」と名づけたるは、文選の二字に選集の見識は示しながらも風俗の二字に謙譲の意を含めたりと云ふべし。然るを支考の靦然として「本朝」といひ「文鑑」といへるは、古人の文章をのみ集め選したらんには或は命ずべき名なれど、自己等同臭一味の文集には命ずべくもあらぬ名なるを毫も省みざりしに似たり。明治の人情としては是の如き人も無げなる命名を憚るなどいふことなきも、今を去ること殆ど二百年の享保の頃の人情としては、傲慢のものと雖も敢てすることを憚りしや疑ひ無きことに屬するなるを、何知らぬ顏して是の如き名を命ずるを敢てしたる支考の大膽さは、まことに一世を睥睨して、天下の英俊を塵芥視したりといふべき也。牛になるの合點を爲し、放尿して舍利を得るの見解を有せる支考ならでは、是の如きことをば得爲さゞるべき也。

支考の人となりは以上略說せるが如し。支考が生存せし當時の文學上の狀況は如何なりしや。これまた支考が企圖に關係するところ無くんばあらず。

元祿享保の頃は、何の道にも名人鉅匠の出でし時にして、國學も大に開け、漢學も大に開け、通俗文學も盛に興りて、我が邦の文學の歷史上前後に類例少き繁榮の時代なりしことは、何人も認め知るところなるが、特に庶民の間に發生せし文學は、却て新しき色彩を具し生氣を有して、鮮麗熾盛なる光輝を放ち、其勢ひ强大にして、遠くは奈良朝、平安朝、近くは源平氏、足利氏の有せし一切

先師々々と呼び、有りもせぬ弟子を假設して自己に好便宜を與ふることを敢てし、儒道佛道の信仰未だ衰へざる世にあつて、「たとひ聖經賢傳なりとも古風に卑下の言葉をつくろはず折々は助言をいふ合點なり」と其著はすところの書中に氣焔を吐き、邊部狂の名に托しては「惣じて釋迦孔子の文におびえて證人の名判を穿鑿せしめば檀林咄の中を折りて言葉の散らしを詰めるに似たらん」と云ひ、「儒家の七師も釋門の七佛も有名無相の證據人と知るべきなり」と云ひて誇り、蓮二の名を假ては、自己が本命の一行禪師一掌金に照せば天文星に屬して、命天文に遇へば秀氣淸し滿腹の文章錦繡成るといへる、占文に相當せるを說き、「天の生せる文質吾輩の議す可きにあらず」と自贊し、自己の祠堂を自ら作りて金澤の富田太椿に文星觀の三字を題せしめ、十論爲辯抄には、芭蕉難波の遺狀第五の一つ書に「文章の反故等、右は杉風方に有之、文章の草稿は支考可ㇾ被ㇾ爲ㇾ點撿也」とありし由を云、鑑塔銘序には、「祖翁嘗て我が師の文章を稱して彼が文章を以て我が俳諧に換へば我は文章に遊ぶべく役は俳諧に狂ふべし」と說ける等、要するに放縱不羈にして、自贊の念甚だ强く、名を好むこと甚だ烈しく、特に自己の文章の才を負めること一ト方ならざるを見る。其自家の私撰にかゝる偏僻の嗜好に任せたる文章の集を「本朝文鑑」と題し「和漢文操」といへる如きは、當時の人の所然としては實に自負も甚しき僣越の命名と云はざるを得ず。支考の人となりは大抵此の一事を以て猜知すべし。師の芭蕉の腹中に木履を穿ちて入れりと云ひしほど傲岸なる五老井すら自己等同

として芭蕉の尊崇されしが如く、自己は文章に於て新紀元を開きて百世の師とならんことを企圖せるもの丶如し。其野心もまた大ならずや。

新しき言語を作爲し、若くは新しき文字を作爲し、若くは新しき語法文法書法等を制定して之を世に用ゐしめんと欲するが如き欲望は、天下を自己掌中の物となさんと欲する欲望にも劣らざるところの大膽高心の欲望にして、其實凡常の人の懷くに堪へざる大欲望なりとす。此故に才德凡常の人にして是の如き欲望を抱くに至る場合は其實其人の精神上の狀態の良好なりや否やを憂慮せざるべからざるほどのことにして、自己が研究的態度を有しつ丶此等の欲望を間接に懷抱するは凡常の士にも不相應ならざるべきことながら、命令的態度を有しつ丶此等の欲望を直接に遂行せんとするが如きは、凡常の士の敢てする能はざるところなり。芭蕉が歌の上に新しき紀元をなせるが如きは、自ら意識して之れを爲したりしや否や不明の事に屬し、且つ果して自ら意識して之を爲したりしとするも然ばかりの欲望を才人の抱かんに何の怪むべきところは無けれど、支考が抱ける欲望の如きは餘りに大なるに過ぐる嫌ひあり。そも〳〵支考は如何なる人ぞや。

支考の事蹟として傳へられたるところに據れば、其緇衣を脫するの念起りし時は、有名なる蓮の葉にの句を吐き、肉を食つて放縱なりしを或法師の戒めて來世は牛にもなるべしと云ひし時は、牛になる合點じや朝寢夕涼みの句を吐き、死にもせぬに自ら死したるやう取りこしらへなどして自から

音を表するの文字、即ち片假名平假名等と、義を表するの文字、即ち漢字とを組み合せ、縱下左行して、日本の普通の文章の體の成れるは、何人も知るところなるが、今若し人ありて、日本の普通の文章の體を變じ、異なれる體制組織を具せる文章をして世に行なはれしむること、譬へば、日本の國民の吟哦詠歎の具は殆ど三十一文字の歌と定まれるに十七文字の歌をして三十一文字の歌に代つて世に行はるゝに至らしめたるが如くならんには、其人の功の甚た大ならんこと言を待たざるところなるべし。天武の御時の和字にして若し長く天下後世の用となりたらんには、其和字を造れるものゝ名譽はもとよりの事、御代の名譽ともなるべかりしなり。はたまた今日にても我が國民に利益を與ふる新字を製し出して其文字實際に用ゐらるゝに至ることあらんには、其人の名譽は絕大にして、其人の功績は今後の我が邦の文學全般の根本に銘せらるゝものなり、と云ふべきならずや。また文字をば新に製せざる迄も、異樣新案の體制組織を以て成れる文章を世に行はれしむる人あらんには、其人は我が邦の文學全般に亘りて新しき紀元をなすところの大名譽を荷ひ、百世の後に至る迄も尊崇渴仰せらるべきこと論無きなり。支考は所謂「假名交り文」の我が邦の文として用ゐられ居るに關はらず「假名交り文以外」「漢文以外」に一程の形式を有し組織法を有せる文章を作り出し、而して之を世に行はれしめ、自己は其新文學の創始者たる大名譽を荷ひて、不朽の名を我が邦文學全般の上に銘し、歌道に於て新紀元を開きて新しき一種の形式を有し組織法を有せる歌の祖先

る因由たらんには猶遠かるべく、支考にして若し其文章に妙なるに加ふるに、文章上の體格容貌に或一種の新しき面目形狀を附與して自己其新しき道の祖先たるの實を具するに至るを以てせんには一世の尊崇敬重を博せんは、固よりのこと、百代に師表たるの大名譽をも得べき筈なり。聰明なる支考の、こゝに心づかぬこと無かるべきや、如何に。はた又、煙草管掃除の癖ありしほど潔癖にして、路に農夫の力耕するを見れば必ず其勞を慰めしといふほどに老實なる去來のために、「小ざかしき事を云はるゝものかな師は平生名聞らしきことを好み玉はず」と衆人列坐の席にてあてつけられしことありしまで名を好める支考の、こゝに心づかぬこと無かるべきや、如何に。自己の文章を自己にて註し、自己にて評し、自己にて自己の事を先師々々と尊みしほどの支考の、こゝに心づかぬこと無かるべきや、如何に。自己は蕉門の末の弟子たるに關はらず、白狂傳といへる文を綴りて、「汝こゝに此心を傳へて蕉門に三世の正統ならば、云々」と記し、明らさまに自己を付法の大弟子たる迦葉に擬したるほど、名を好んで爲さゞるところ無き野心深き支考の、こゝに心つかざること無かるべきや、如何に。

されど予は敢て支考が芭蕉の成功を學びて、おのれもまた其途を異にして其功を齊しくせんと思ひ立ちたりとは言はざるべし。たゞ何によらず一道の創始者たる名譽の甚だ大なることは、支考の如き聰明の才子の知らざるべくもあらぬことなりと云ひて已まんのみ。

去來が芭蕉を評して、「芭蕉は正風の土臺を据えたり、古風秀句口合など流行りし中を美しく改めて詩歌の意に同じくせしは器量なり」と云ひし如く、蕉翁は實に滑稽諧謔の意義のものたりし俳諧を轉じて、新しき體格容貌を具せる所ろの一種の歌となしゝかば、所謂俳諧の包含量は其大さを加ふること甚しくして、隨つて其發達を招き致し、終に芭蕉は一道の祖となるに至りしが、支考は、眼前に看たるところの芭蕉が成功を學ばんと欲せしか然らざりしか、そは明らかに知る由無けれど、芭蕉が歌の範圍に於て大功を樹てたるが如く、おのれは文の範圍に於て大功を樹てんと欲したりしが如し。

蓋し芭蕉は世人の尊崇を博し得べき二種の價値をば有せるものにして、其一は即ち芭蕉が詞藻上の價値、他の一は新しき歌の建設者としての價値なり。一種の歌人として詞藻上に卓絶の技倆を有せる芭蕉の價値の甚だ大なるは勿論の事なれど、此點に於ては然まで芭蕉に劣らざる價値を有せるものも少きにあらず。芭蕉が世人の尊崇を得る所以は、其詞藻上の價値の大なるよりも、實に他の一點、即ち俳諧の包含量を擴めて滑稽諧謔一味のものとせず、詩歌の意に同じくしたる點、換言して云へば、一種の新しき歌の建設者となりたるがため、世人は之を尊崇敬重する也。されば、支考が文章絶妙にして一世に匹儔無しとするも、そは例へば芭蕉が十七字歌の絶妙なるが如く、世人の尊崇敬重を惹く所以の一因たるべきに、論無けれども、しかも世人の尊崇敬重を得る所以の有力な

を驚かすことは無かりしなるべし。然るに支考の爲せるところは之に反し、綺麗にして人の目を炫耀するに足るべき文を以て、捕捉し難きところの意義を說きたるなれば、當時の世人は驚きて以て玄妙甚深の書となし、隨つて其作者たる支考を待つに等閑の宗匠を以てするが如き事無きに至りたること推測して知るべきなり。大概支考が說けるところは、虛實の二字に出でずといへども而も縱說橫說して終に一字も說かざるもの丶如く、譬へば法華經八巻の巻々に法華經の功德を說かざるは無けれども終に其法華經の本旨の那邊に在るやを明示せずして畢るが如くなるを以て、今日と雖も支考を尊信する者の如きは、猶其玄旨を悟らんとして的確に悟り得ざるを苦み、支考が撮法に瞞過せらる丶を免れねば、當時の人の支考が爲に眼を奪はれて瞠若たりしは、察するに餘りあること丶云ふべし。况んや支考が俳諧の論は心と詞との二端に亘るより、時に俳諧以外にも其廣長舌を及ぼすことありて、事々しく儒佛の沙汰をさへ引き出すこと少からねば、蓋し凡庸の世人は皆博學大才と思ひしなるべく、また具眼の士は鬼面を被りて小兒を嚇すを心ひそかに嗤笑せしなるべし。是の如くして支考は漸く武の其角、洛の去來、彥根の許六等と對壘して左まで劣らざるの勢威を俳諧壇上に有するに至りたるが、かばかりの事を以て滿足すべくもあらぬ支考は、一方には其長技なる文章の道に於て大功を樹てんと欲するより、遂に文章の體製組織の上に一種の新しき面目形狀を付與して、自己は其新しき道の祖先とならんことを企圖するに至れり。

を嗣ぎて其衣鉢を傳ふるの資格には甚だ缺くる所あり、且は肩を支考に比して高きと數寸の高足弟子も少からぬことなれば、迦葉の瞿曇に於けるが如く、慧可の達磨に於けるが如く、第二代の祖師たらん望みは無し、流石の支考も空しく芭蕉の門内に俯首雌伏して一生を終るべきさまに見えたり。

されば蓮の葉の一句を吐けるほどの放縱不羈なる支考の、如何で碌々たる二三子の如く雌伏して一生を終るに忍びんや。また芭蕉未だ死せざるに既に其一代の俳諧を結集せんことを計れるが如き野心強き支考の、如何で風月花鳥にのみあくがれて吟哦をこれ事として已まんや。

こゝに於て支考は、蕉翁の滅後、俳諧に關せる論議の書及び選集の類の書を著はすこと甚だ多く、芭蕉の骨髓は我之を得たりと云はぬばかりに說き立てしかば、剛氣にして人に下らぬ許六、眞率なる越人、其他の人々とも衝突するには至りたるも、支考が名は愈世に馳せて一部の人々よりは漸く尊崇さるゝに至り、鄕國美濃は云ふに及ばず北陸地方には少からぬ勢力を得たりと覺し。今其論議の書を讀むに、大概沒巴鼻の空言に屬して、人を益すること甚だ少しと雖も、而も奇怪の文才は筆歌墨舞の妙を具して巧みに景趣を無景趣のところに生ずるを以て、覆甕の料たるを免れて今日に存するに至りたるが如し。蓋し支考以前にも俳諧に關する論議の書の世に出でたること無きにあらねど、皆興味無き文を以て、單に其言はんと欲するところを言ひしに止まりたるが故に、人の耳目

予が支考をば想ひ起すこと多き所以は別に一大因由の存するあり。そは何ぞや。曰く、支考が野心の甚だ大にして、我が邦の文學全般の根本に對つて自己の功蹟を銘せんと欲したる痕のいと明らかなることこれなり。

歌は萬葉に發達し、古今に榮え、定家に化石して、其後はたゞ形式のみは存すれど生命は既に絶えたるものとなりたりければ、芭蕉は其虚を衝きて起り、滑稽諧謔に止まりし俳諧を轉じて、一種の歌となし、遂に一道の祖師となれり。芭蕉以前の俳諧は眞の俳諧に止まりしが、芭蕉出でゝより、俳諧は俳諧たるに止まらず、俳諧と云はんよりも新しき形の歌と云はんかた好く適ふべきほど大なるものとなり、芭蕉は其新しき歌の創始者たる大名譽を荷ひたり。蓋し芭蕉は自負矜慢の人ならずして謙退遜譲の徳に富みたる人なれば、自ら其功に居るが如き痕は更に遺さゞりしも、而も其俳諧を以て滑稽諧謔の一小戯たるに止めずして「俗談平話を以て作るところの歌」となさんことを心ひそかに期したるなるべきは、眼あるものゝ猜して知るべきことに屬す。「拙きことばかり云ふを俳諧と覺えたるは淺ましきことなり。俳諧は萬葉集の心なり、されば貴となく賤となく味はふべき道なり、唐明すべて中華の豪傑にも愧づると無し、」と云へる語を味はひて、芭蕉が志の如何なる點にありしやは徴すべきなり。

是の如くにして芭蕉は終に一道の祖師となりしが、支考は芭蕉門下の俊才たりと雖も、蕉翁の正統

諸の興を一言一句にまで具備せしめんとを欲したる結果として、其弊や比喩形容の辭多きに過ぎ、綺麗浮靡にして眞を缺き、簡勁にして力有りといふが如き美處更に無く、一篇の本旨明らかならざるに至ること無しとせず。されど其文本來多くは無用の閑文字にして、特に言はんと欲するところのもの有つて而して後筆墨を驅使するにはあらず、先づ筆墨を弄せんとして而して後其まさに言ふべきところのものを求むるといふ奇異なる場合に成るところの文字なるを以て、莊重眞摯の態無きが如きは當然のことにして、一篇の本旨の明らかなると明らかならざるとよりも、一句の機轉の妙なると妙ならぬとに焦心苦慮したるなるべければ、傍觀者が看て弊となすところは即ち作者が大得意のところならんも知るべからず。兎に角に我より古を成して一種の文を創始せる其才は侮り易からずといふべし。此點もまた支考が世人をして其名を忘れざらしむる所以の一なり。

予が蕉門の北枝、杉風等を想ひ起すこと少くして支考を想ひ起すこと多き所以は、世人が北枝、杉風等を想ひ起すこと少くして、支考を想ひ起すこと多き所以と大差あること無し。支考の人となりの自ら庸常ならぬため、我が記臆を脱せぬも其一因なり。支考が著書の少からずして其名の眼に觸るゝこと多きため、我が記臆を提撕する場合多きも其一因なり。其文章の絢爛綺麗にして自ら一種の文脉の祖となり、俳諧者流に長く其文脉を傳へたるがため、今猶時に其種の文字を眼にすることある度ごとに、支考が才も侮り易からずと思ふも、また其一因なり。しかのみならず猶其以外に、

らず予と同論の士の存せんとを推知するなり。
予が眼に映ぜるところの支考の俳句の價値は甚だ高からざるに關はらず、予は北枝、杉風、凡兆等を想ひ起すことは却つて少くして、支考を想ひ起すことは少からず。こは別に自ら故あることなり。
千那、嵐蘭等の名を忘れ、正秀尙白等を確には記憶せざる人々も、支考といへば、知らずと云ふこと無し。こも自ら故あることなり。
世人の支考を知ること多きは、支考が俳句の價値を認めて之を愛好し若くは尊崇するよりも、支考が人となりの凡庸ならず見ゆるがために其注意を惹けること多きによるなるべし。實に支考の傳を讀めば、蓮の葉に小便すれば御舍利かなの一句を吐きて還俗するの一段のみにても、既に人をして忘るゝ能はざらしむるの興味あり。世人の支考を知ること多きも怪むに足らずといふべし。且また支考の著述の多きは、自ら其名をして人の眼に入ること多からしめ、從つて人をして其名を胸臆に繰り返すこと多からしむるを以て、世人の支考を忘れざるも、更に異とするに足らざるなり。
支考が文才は蕉門に匹儔少し、許六を除きては與に力を角すべきもの無きほどにして、其筆一種の風骨を具し、和文の「ぬめり」と漢文の「ざごは」との間に立ちて、西鶴巣林の外に一幟を立つるところ、流石に才子たるに負かずといふべし。但し其文花やかにして面白からんことを主とし、所謂俳

獅子庵

歌書よりも軍書に悲し芳野山の一句を以て世に知られたる支考は、俳諧には美濃派の祖先となりて今猶一部の人の尊崇するところとなれるほどの才人なり。されど其人の俳諧の上の價は、左のみ高くはあらずとおぼしく、一代に佳句は幾干もあらぬやうなり。丈草、去來、其角は論無し、北枝、嵐雪、乙由、杉風、許六の輩もなか〱支考が下に立つべきにあらず。凡兆、越人、曲翠の徒もまた〱支考を上に戴くべきにあらず。予が思ふところにては、支考は蕉門の俊才たるには疑ひ無きも、しかも恐らくは儕輩に卓越せる伎倆を有せるものにあらず、俳句の上のみにて論ずれば、上に擧げたる人々の下にもあるべきほどのものなり。蓋し支考の句は、技巧は或はこれ有らん、神韻は終に足らず。たま〱人をして感歎せしむるの句は、氣を以て勝るにあらざれば、情を以て優るの句にして、人間の葛藤を擺脱して自ら永遠の美趣を具する如き句は甚だ乏しきに似たり。こは予が一人の私言なれど、支考が俳句を左まで珍重せざるは、必ずしも予のみの僻見にはあらざるべし。既に予が知るところの先輩諸君子もまた往々予と大同小異の品隲を下せるあるを以て、予は世間必

ヤ、此の盗棒め、飛んでも無い。家鴨を撃つ鳥打が那處に在る。警察へ渡すから一處に來い。何だ三圓出したと、馬鹿を吐かせ。乃公の家に其様な男が居るものか。胡麻化させるものか、虚言吐野郎め。其様な下らない分疏を誰が聽く。誰が家鴨を打たせる。談し合の鳥銃打なんといふことがあるものか。なんだ一圓に九羽の家鴨だと。出鱈目を云ふな六羽で買つたのだ。何でも可い警察へ出ろ。歩べ、歩べ。何を考へて居て動きやがらぬ、愚圖〱すると打撲くぞ。何だと、鷺にやられたと、腑拔野郎め、五位鷺にでも化されたのか。

す。死んだは只二羽で其他のは驚いたばかりといふて、私大分得取つたが、鳥銃打も悦んで行つたでがす。其後先月の初になつて又一人此家鴨を見て打ちたさうに仕て居た人があつたで此事を話したゞ。乃公も打つべいとつて三圓呉れたが此度は四羽取られたでがす。それでも私損は仕ない。一圓で九羽を買つてから自然に大くなつた禽でがすから、アハヽヽハ。

と長々と語りたり。成程人の情は同じものなり、此處に來かゝりて此家鴨を見て野鴨なりせばと思ふものは我のみならざりしと見ゆ。可し、我もまた三圓を出して試に一發放たんかな。銃は小ならず、四號彈は帶びたり、土堤よりの距離は彀にして彈の散開の度も宜しからん、集りたるところに撃ち掛けなば少くとも七羽八羽は容易く獲ん、飼禽を持ちて歸るは如何なれど、此大物を七八羽まで一度に撃つて取つて、一日不獵の鬱憤を洩らし、幾許の益を得て歸るは惡からず、と心頻りに動きて抑ふる能はず。

乃公も三圓出す、それ渡すぞ。其通りの定めで打たせて貰ふは。

と村田は金を與へて堤に上り、四號彈を裝して禽の集りを待ちしが、心臓を鼓動させながら一切を忘れ夢中になりて、やがて轟然と打放したり。見れば嬉しや七八羽は正しく吾が彈に斃れたるに、周章て堤を馳せ下り、流れに就て一羽二羽と拾ふ折柄、一人の農夫現れ出てゝ、それと見るより憤然と驅け寄り。

と質朴に優しく云ふ。咎め立せられぬに心安堵きたる村田は、打つだら打つて談し合に仕て貰ふべい、と云へる言葉の不審かしく、

談し合て撃たせるといふのは何樣いふことかチ。

と問へば、彼方は間の拔けた顏して笑ひながら、

なあに、別に談し合で打たせるといふ理窟も何も有る譯ぢあ御座んねえがチ。此前の事でがす、矢張御前樣見たやうな鳥銃打ちがチ、一日歩つて何一つ獲れねえてがす、丁度こゝへ來ると家鴨が矢張斯樣して居ただ。すると鳥銃打ちが暫く見て居たゞが、餘り何も獲れねえで忌々しいから鴨のつもりにして此禽でも打つて歸るべい、汝に錢遣るから打たせろ、と云ふてがす。私其時此所の圃で麥蒔仕て居たてがす。そこで私考へた、どうで育てゝから賣る家鴨だ、錢貰ふなら打たせて損は無い、だけれども、打たれて死んだ禽は、買つて貰ふから可い、疵ついて半生の禽は、遣るにしても遺すにしても損得の算勘が面倒だ、うつかりと打たせると大損を仕ないにも限らぬこんだ。これは何とすべいと腕を組んだ。そこでとう〳〵案じ出して、鳥銃一發打たせる代りには何でも彼でも三圓貰ひますべい、直死んだ禽は何羽でもあげますべい、直死なゝい禽は此方へ取りますべい、打つは土堤の上からと定めますべい、と云ひ出したゞ、鳥銃打はそれでも可いと云つて三圓出したでがす。そして打放したてがす。私南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、家鴨助かれ助かれと念じて居たてが

のなるが、中にも頭の翠く光りて翼に瑠璃色の羽の有るまで宛然野鴨を見るが如くなる一羽ありて村田の眼を惹くこと一方ならず。彼禽ほどの鴨をドンと撃ちて、持ちて歸らば嬉しからむ、あゝ彼禽ほどなるを獵りたらんには家に歸るも樂しからむ、と思ふに付けて、眞に撃たんとなせるにはあらねど、折柄手になし居たりしものから鐵砲を其禽に左し向けつ、彼方に泳ぎ此方に泳ぐを狙ひ送りて撃つ眞似なしたり。たゞ是寸時の戯なれど、傍觀には眞に撃たんとするものとや見えけん、あにを爲るだい。

と野良聲烈しく、村田が背面に當つて咎めしものあり。

其九

咎めを受けしも道理なりと村田は急に銃口を上げて、

撃たうとしたのでは無かつたのです。

と云ひながら反顧れば、咎めたるは紺の手織縞の布子に茶縞の羽織を着たる態此邊の惡からぬ農家の主人と見ゆる四十前後の男なり。何とかむづかしきことを云ひ出すかと思ふに然は無くて、

ハア、左樣でがしたかヰ、そんなら構ひません。なあに、打つだら打つで談し合に仕て貰ふべいと思ひましてヰ。ハア、無錢で奪られちや成んねえからの。

うこれ夕暮だが、鷲でも飛んで呉れないかナア。鴨でも頭の上を渡れば好いがナ。嗚呼何にも飛びくさらぬ、已んぬる哉だ。足は疲勞れた、腹は耗つた、鐵砲は重くなつて來た。禽の居ない時は十二番も十二番の功能は無いが、何時でも十二番は十二番だけの重量が有る。無くつても事だ、馬鹿〳〵しい。おまけに兩方の鷄頭を揚げて、何時でも發射の出來るやうにして擔いで居ると、氣おつかひの所爲だか何だか餘計に重い。兵隊でも無いのに斯樣なものを持つて、人の知らない苦勞を仕て、水洟を垂らして疲勞足を引ずつて居るのなんぞは、禽が獲れぬと定つた日には我ながら餘り褒められない話だ。こんなところを中谷めにでも見られた日には、何樣に冷かされるか知れたものぢやあ無い。嗚呼それに付けても何か擊ちたいがナア。と涯無き空しき想をのみ徒に走らせて、身は一ト筋に歸りを急ぎしが、不圖禽の聲の耳に入りぬ。これはと忽ち立止りて、聲せし方を打ち見るに、堰を開かば直ちに河の流れに通ずべき里川の幅二間あまり三間ばかりなるが一條前途に橫はりて、それに遊べる家鴨の十五六羽ほど、或は水際に生ひたる水楊の根をせゝり、或は尻を立てゝ潛り、或はがゝと鳴きて泳ぎ去りなどなせるが、今や全く沒らんとする日の光りの弱々しく寒けき明るさの中に、畫などの如く美しく見えたり。飼ひ主の家は何處にありや知れざれど、正しく飼禽なるに興も醒めしが、あゝ此禽が若し野鴨なりせば、あゝ此禽が若し野鴨なりせば、と思ふ情の止み難きまゝ村田は我知らず停まり立ちぬ。家鴨は本より野鴨の屬なれば、色も姿も大概は相近き

く行く外にはこれといふ物も眼に入らず、左はたゞ水、右はたゞ田畠、人氣も見えぬ淋しさ云ふばかり無し。憎かりし赤薯毬栗の二人が毒口は猶耳に在る心地して、四圍の景色に心の紛るゝこと無ければ之を憶ふごとに魂魄焦立ち、危くもまた、怪しからん奴だ、糞ッ、と相手も居らぬに罵らんとす。されど獨語ちて甲斐あることならねば、强ひて氣を平らかにして路を行くに、生憎おもしろからぬことのみ胸に浮み來りて、いつか禽を捜すべき意さへ無くなり、嗚呼詰らない、厭になつて仕舞つた。日も旣そろ〳〵暮れかゝるナ。何だつて斯樣禽が居ないだらう、これぢやあ何樣も仕方が無い。また家へ歸つたらヂロリッと獲物袋を視られるだらうが、あのヂロリリッといふ横目が厭で堪らない。惡く冷淡に、其癖惡く眞面目くさつて、今日も禽が居りませんでしたか、なんぞと何日も吐し居るが、あの今日もと云ひくさる「も」の字が甚く癪に障る。だが仕方が無い、今日も癪の蟲を抑へつけて、ム、とか何とか云つて居なけりやならない。情無いことだが是非が無い。どうしても早く頁い狗を貰つて、其を仕込んでから些遠方へ出なけりや到底碌な獵は出來無いと定つた。局長の狗の兒を貰ひに行かう、英國種ぱいんたあとは有り難いナ。其を育て上げてから大に成功してそして大に誇ら無くつちやならん。然し其時までは屈するのかナア。ア、寒くなつて來た。歸路だ歸路だ。併し折角十二番を買つて、しかも彼樣に言ひ爭ひを仕て無理を通して買つて、それで此ればかりの獲物を持つて、今日も禽が居無かつたといふ云ひ譯を爲るのは、思へば業腹で殘念だ。も

と取り做し顔に云ひたり。云ふもの丶意に邪あるにはあらざるべきも、云はれしもの丶耳には獲れねえからの一語雷の如く響きて、左無きだに煩悶せるところなれば、村田は終に堪へ兼ねて、うるさい、彼方へ行け、随いて來ると撲つぞ。と虎の吼ゆる如く大喝するに、流石の惡童等も辟易して、飛び上りて驚き走りしが、七八間逃け延びて後、何を我鳴るだい、下手糞鳥銃。獲れ無えもんで機嫌が惡いや。鳥おどしやあい。歩行く案山子やあい。と惡口しながら家ある方へと去りたり。すべて近在の兒童等は人惡く、銃獵者を見馴れ侮り馴れて名ある貴紳をも愚弄すること珍しからねば、村田先生もまた自ら宥めて、忽ち憤怒をば苦笑に紛らせしが、苦笑に紛らさゝるを得ざる性質の腹立たしさほど忌々しきものは世にまた無かるべし。

其八

チヨツ、忌々しい餓鬼共だ。と我知らず村田が罵りしか、心に獨語の愚なるを自ら責めて、急に口を噤みつ只歩みに歩みぬ。天地は靜かなるが上にも靜にして、禽の聲などは少しも聞こえず、河水は音無く流れて、下り船の緩

と話し掛くれば、村田は胸の中おもしろからず、むしやくしやと心焦立てど、兒童を相手にすべくもあらぬに爲ん術無く、只彼等の長く付き纏はざらんやうにと、情無くあしらひて答だにせず、耳を潰して路を急ぎぬ。されど敎育無き兒童等は、他人の自己等を厭へるをば解悟りて自己等が擧動を改むるといふが如き優しきことを更に知らねば、猶容易くは村田が身の邊を離れず、後に跟きて歩きながら早口に何事をか語り合ひしが、例の赤薯は、持更に

をぢさん、をぢさん、

と、呼び掛けて、

をぢさんは鴨を獲るなあ嫌ひだかね。

と尋ね問ひたり。那處にか、鴨を獲ることを嫌ふ銃獵家のあるべきや。此の言葉をして丁年以上のもの丶口より出でしめたりしならば、村田は世にも比無き侮辱を與へられたる心地して、吾が獲物袋の中に一羽の鴨も無ければとて甚しき嘲弄を加へ玉ふは心得ずと、開き直つて詰め寄せずには濟まさゞりしなるべしと思はる丶まで恐ろしき不快の顏色して赤薯をぢろりと睨みぬ。彼の毬栗頭は赤薯の袖を曳きて、

そんだ事云ふな、怒られるだあよ、鴨を獲るが嫌ひな鳥銃打は有るもんか、たゞ獲れ無えから一羽も持て居ねえばかりだべい。

ま、身躰ばかり伸びて、悪戯ばかり覺えたるとおぼしきが、村田の姿を見るや否や、
やあ、鳥銃打ち、鳥銃打ち。
と呼びながら、野飼の駒のやうに跳ね上り跳ね上りして走り寄りたり。兒童に付き纒はるゝは、銃獵者に取りて迷惑此上無きことなれば、村田は近づくこと勿れと云はぬばかりに眼を嗔らせて睨みつけしが、其眼つきを見て躕躇ひしは、三人の中にて色青く面瘦したる兒のみにて、其餘の二人は憚る樣子も無く村田が身近く進みて煩くも付いて廻り、獲物袋の網の目より透きて見ゆる獲物をば仔細に檢め覗ひ居しが、棕櫚のやうなる髮の毛を被りて赤薯のやうなる面の色せる十三ばかりなるは無遠慮にも、
なんだあ、をぢさん、獲れて無えなあ、鴫がたつた一羽に鶫が三ッきしだ。なあ吉公、昨日の人なんかアもつと獲つたなあ。
と大聲に評したり。これさへ耳痛きに、吉公と呼ばれたる毬栗頭の、二つばかり老けたるらしき年頃なるは、また一トしほ大なる聲變り最中の割鐘聲にて、
うむ、これッ位なら「螻蛄はど」でも獲れべい。鳥銃打つ位なら大い禽獵らなくつちやあ詰んないだ。をぢさん、鳩を何故獲んねえだ、鷺を何だつて打たねえだ、鴨だの雁だの打つたら宜かべい、大い禽はをぢさん嫌ひだかァ、乃公に彈藥一つ呉れさつせえ、乃公が屹度鴨を打つ殺て、呉れてやるだが。

其七

「かくし」の多き枯草色の「ずつく」の「せびろ」の處々擦れて泥の汚れなどあるが上に、尚白光する程ど新しき挿彈帶を締め、同じ「ずつく」の半窄袴の下には脚絆草鞋がけといふ身輕き打扮して夕日の光に燦めき渡る美しき二連銃を肩に、中川添ひの彼方此方を徘徊するは彼の村田なり。松の內とは云ひながら此邊は流石物淋しく、まして暮近き風の薄寒きに、遺失物でも仕たやうな顏つきして、うろ〳〵と歩行く、脚取りも大分疲れた態なり。田境の榛の樹立に、稻叢、破れ案山子などの取り合はせ、下手は廣々とした圃の盡頭に藪疊の見切り、わしらひには馬頭觀音の倒れて居玉ふといふ天然の大舞臺に、此の俳優の演ずるところは、成田屋もなか〳〵及ばぬ思入れ澤山の腹藝なれば、心淺き看客には何とも更に合點ゆかぬことのみなれど、見功者の眼より見る時は、其歩を止めて考へしは、禽の呼ぶ聲か羽音かを聞きつけて之に意を注けしがため、其ちよこ〳〵と歩み出でしは、其影を認て之に近づかんとしたるが爲にて、一つも理由無き仕打は無し。されど狂言の筋の好からで、役に儲かる節の無ければ、折角の腹藝は狗死のみして、可惜俳優も單散歩する閑人より其扮裝の甲斐々々しきだけに却て愚しく見ゆるは是非無し。

折から來かゝる三人づれの兒童、いづれも此邊の賤きものゝ家に生れて、學校へも通はせられざる

それぢやあ卿は結局鐵砲は買はずとも可らうといふのだね。

まあ左樣でございます、忍耐仕て居ていたゞきたいので。

何だと。怪しからん奴だ、人を馬鹿にして居る。一躰乃公を何だと思つて居るのだ。穩和に出れば付け上つて、中谷の云つたことなんぞを正當だなんて、失敬千萬な、忌々しい奴だ。何が彼奴等の言つたことが正當なものか、え、糞、忌々しい奴だ、勝手にしろ。臺所へでも何でも勝手に引籠め。汝までが此の乃公を馬鹿にして、到底獲れまいと見くびつて居るな。忌々しい畜生だ、記えて居ろ、獲れるか獲れないか今に見せて遣る。實はもう鐵砲屋で買ふ約束を仕てあるのだ、今更何樣して止せるものか。乃公は乃公一人で勝手にする、乃公のものを、乃公が質に入れるのだ、汝等の世話にはならん。淸、淸、えゝ頓痴氣め、まだ歸つて來ないか。糞、關ふものか、乃公が持つて行く。

まあ左樣眞黑になつて怒らなくつても。

えゝ、うるさい、うるさい、退け〳〵。邪魔をするかッ。

邪魔をするのぢやあ有りませんが、其樣なに簞笥の中を無茶苦茶に搔き廻されちやあ困ります、而して郞が御自分で池田屋なんぞへ入らつしやれるものですか、外聞のわるい。

大に御世話だ、喧しいわい、下手にまごつくと擲き倒すぞ。

ます、と判然云ふが可い。へえ、左樣ですねえぢやあ乃公に卿が相談を懸けるやうで曖昧至極だ。まさか解らないのぢやあるまいな。

へえ。左樣ですねえ。解つちやあ居ますが。

また人の面を見るよ。解つちやあ居ますが何だと云ふのだ。

左樣怖しい眼つきを爲すつては困りますね。正直のところ妾の所思だけぢやあ、そりやあ遊んで居る金錢でも澤山有るたら御買ひになるも好うございますが、何も七八を置いて無理を仕てまでも鐵砲を買は無くちやならないと云ふ理由は些も無いとしか思へません。局長さんなんぞが家へ來る氣づかひは、有りやあ仕ません。中谷さんの仰やつたのは悉皆一々正當の事で、それを惡口のやうに御取りなさるのは、郎の僻みといふものです。郎の表に立てゝ居つしやる家業が獵人で、それが下手だと當ッ擦られでも仕たのなら、そりやあ意地になつて、鐵砲もお買ひなさるが可いし、獲物を見せつけて御遣りになるも可いでせうが、何も郎が獵人ぢやあ無し、娛樂になさる銃獵ですもの、下手だつて何だつて、そこが素人藝殿樣藝の貴いところで、左樣いふことを商賣にするものゝ賤さとは差異のあるところなのですもの、少しも不思議は有りやあ仕ません。縱んば下手だと云はれたところで、笑つて居ればそれで濟むことに、手も通さない衣服を他家の藏に入れてまでも鳥銃を買ひ更へやうといふのは、そりやあ餘りといふものです。

餘り饒舌つて口が酸くなつた、茶を呉れ〳〵、おいお貞、おや、何時の間にか何處かへ行つたナ、こりやあ怪しからん、おい、お貞、おい、おい、おい。

其六

はい、はい、たゞ今參ります。

はいたゞ今ぢやあ無いぜ、人が談話を仕て居るのに、聞きも仕無いで何處かへ行つて仕舞ふといふ事が有るものか、失敬千萬な。

だつてお淸が使ひに出て臺所に誰も居ませんのに種々な人が水口に來たり煮物が仕懸けて有つたりするのですから、ちよい〳〵立たなくちやあなりやあ仕ません。ですから最初八百屋が來た時に、一寸御免なさい、と云つたぢや有りませんか。それだのに郎が夢中になつて一人で饒舌つて居らつしやるのですもの、妾にあや何樣も斯樣も仕樣がありやあ仕ません。ほんとに郎は全然夢中ですね。

それなら其で咎めは仕ないが、乃公の言つたことは悉皆解つたらうな。そして卿も成程と思つたらうから、乃公の云ふ通りにするのに異存は毫もあるまいな。

へえ。然樣ですねえ。

何だ、厭に人の顏を見て、煮えきらない返辭を爲るぢや無いか。解つたのなら、はい、宜うござい

足の事ぢやらう、幸ひ乃公のところの狗が數日前兒を産んだぢや、自慢では無いが「英國種ぽいんたあ」の系統のだから、一匹君に進上仕やう。母狗は頗る教育のあるものぢやから、生長したら逸物とならぬにも限るまい。と云つて呉れたので、乃公は大に羽振りの好い態になつて、其場は終に濟んで仕舞つたところが、局長が歸つた後で、其時までは物も言はずに居た冬森といふ局長と同郷の男の談を聞くと、局長は大に銃獵家ださうで、他人に天狗を云ふやうな淺薄なところは十年も前に通り越して居のだといふのさ。して見ると何時同行を勸められるか何だか知れやし無い。連れ立つて出て下手だといふのが知れたところで其は構いやあ仕無いが、二連銃も有つて居無い屁放腰平と思はれるのが、餘り氣が利か無過ぎて有り難く無いし、また第一此の休暇中に一番遠く出てウンと獲つて來て中谷や上野や外の奴等のところへも、オホン少しばかりでござりまするが山土産の御裾分を致します、と與れて遣りたくて堪らないのだ。そこで何樣しても十二番の二連が買ひたいから、昨日實は金丸へも行つて、いろ〳〵見て來たのさ、それから川口へも廻つたり、小倉へも廻つたり、鐵砲屋といふ鐵砲屋は大躰當つて見て來たのだが、どうしても去年買つたのを下に與つて六七十圓も足さなけりやあ「だますかす銃身」なら下等のも買へないといふ理窟なのだ。「良い物品は良い」といふ眞理に勝つ理窟は無いから、そこで乃公も男子らしい判斷を下して、買ひたいものは買ふべしと定めたのだ。どうだ解つたらう、斯樣いふ理窟だから是非に及ばないぢやないか。あゝ

んだあ」は何樣なものだぐらゐ知て居らしいのだ。だから、まさかに、あゝ左樣だ、彼の黃色なのが「ぽいんたあ」さ、とも云へない譯ぢやあ無いか。しかし其場は乘りかかつた船で、急に腰を弱くして仕舞つて、實は狗も連れて行かぬ銃獵者でござる、と引退つて仕舞ふ譯にも行かなかつたからいや彼狗は「ぽいんたあ」や「せつたあ」でも無ければ、「ぐれいはうんど」や「すばにいる」では猶更無い、大く無い狗で獵の用に立つのには「すぷりんげる」だの「こつくる」だの「ぺーぐる」だのといふのが有りますが、まさか君が知つて居られまいからと云つて彼狗は「こつくる」だとも云へないので、實は彼狗は何種とも就かぬ雜種でナ、云はゞ極劣等な狗なのです。けれども其働きは實に不思議に好い奴でした。黃色な狗なぞは當世甚だ流行りませぬが、まんざら棄てたもので無い其證據には、差當り古人の語に、黃犬を牽て上蔡の東門を出て狡兎を逐ふといふのが有つたやうに記えて居ます、上野先生たしか李斯の獵犬は黃色な奴だつたと見えますな。ハ、、、しかし不幸には其犬を奪られて仕舞つたので大きに閉口して居るのです。と宜い加減な法螺を吹いて、中谷めが知りさうも無い、銃獵新書なんぞといふものに無ささうな種類の狗の名などを態と擧げて少し怯ませた傍、漢學爺の上野めまで引合にして冷かして遣つたのは實に、好い氣味だつた。流石に二人とも顎の敲きやうが無いものだから默つて仕舞つたが、局長はいよ〳〵上機嫌で、なか〳〵村田君は好きぢやと見えて、御技倆は知らんが御談話は詳いものぢやの、しかし犬を無くされては定めし不滿

其五

左樣で無くつてさへ中谷が口巧者に銃獵の惡口を云つて衆人を笑はせたところだから、やゝもすると人が乃公の顏を見るのだもの。そこへ眞正直に、小生の用つて居る銃は二十四番でござりますなぞと答へやうものなら、それこそ中谷の云つた通り、屁放腰を仕て田の畔を這つた揚句泥田の中へ轉げ込む頓痴氣な奴に違ひは無いと衆人が乃公の顏を見て哄然と笑ふに定つて居るのだ。それが見すく\〳〵知れ切つて居るのだから、何番銃を使つて居ると聞かれて、はい、二十四番です、と有躰の事を云ふのに論は無いのだが、さて業腹で業服で堪らなかつたから、はい、近頃は十二番の二連を使つて居ります、と、空嘯いて遣らかしたね。左樣すると局長が、や、そりやあ本式の事ですナ、そして狗は何種を使つておいでなさる、と續けて話しかけた。重ね〴〵憎いのは中谷めで、つい先日まで家に居た卿の可愛がつて居た彼の「わか」が「ぱいんたあ」でも「せつたあ」でも無い詰らん平凡の狗だといふ事を知つて居るものだから態と乃公に對つて、たしか君のところには黄色な小狗が居たやうだつたが彼狗が「ぱいんたあ」とでも云ふのかね、と然も心易げに尋ねるのさ。那方の國に彼樣な脚の開いた丈の矮いころ〳〵した醜貌な「ぱいんたあ」があるものか。實に人を愚弄しきつて居るのだ。あのまた中谷めは妙に記憶の好い奴だから、何處かで聞き噛つて居て「せつたあ」や「ぱい

に鐵拳を加へられるですからね。はゝは、銃獵も左樣なると厄介なものですね、はゝはゝ。と笑ふんだ。左樣すると、一座の奴等も、あはゝはと、大笑ひに笑ふ。そこへ漢學天狗の盆栽爺の上野めまでが吻を容れやがつて、成程中谷君の御說の通り一日駈け行いて何も獲れなかつたら自暴を起して狂氣じみるでもございませう。其證文には旣に老子道德經にも、馳騁田獵は人をして狂を發せしむ、とございますからナ。と面白くも無い駄洒落を云ふ。流石は上野先生だ、時に取つての引證の的確なのは敬服敬服　村田君の銃砲はいざ知らず、此の證文は圖星に當りました、いよ大當り〳〵と中谷めが囃し立てる、一座は然樣だと云ぬばかりの顏をして居る、手持無沙汰なのは乃公だらうぢや無いか。彼銃でも可らうと卿が云ふ彼の乃公の銃は丁度二十四番の單發なんだ。そして乃公は殘念だが狗を有つて居ないのだ、百舌鳥が一羽に雀が三羽の日も有つたらうぢやあ無いか。鷺を撃たうと思つて田の中へ轉げ込んだ事も有つたらうぢや無いか。何も獲れ無いで歸つた晚に酷く卿を叱つて泣かせた事も有つたらうぢや無いか。何樣したのだか知らないが、中谷の畜生め、悉皆乃公の事を知つて居やがつて、そして當つこすりを云やがつたの歟知らん、左樣いふ理由の有らう筈は無いが、はて忌々しい奴だナ、と思ふもので、仕方が無いから何も關はずに、生笑ひに笑つて居ると、其矢先へ持つて來て局長が、村田さん、君は何番を用つて居らつしやる、と尋ねるぢや無いか流石に乃公も、ウッと究つたあね。

も乃公の談話に耳を傾けて居たし、局長は極々の上機嫌で、ム、、そりやあ實に愉快ぢやの、壯快な事ぢやの、第一養生にもなるし、乃公も左樣いふ風な遊びが最も好きぢや、乃公も一つ今度君と同伴に出かけやうかナ。と鬚髯を撫でながらの挨拶だ。すると中谷めが横合から、成程それやあ村田君のやうに上手だつたら愉快でも有らうがね、なんと諸君、僕の友人に矢張村田君のやうに銃獵の好きなのが有りますが、何日出ても何日出ても失敗ばかりで、朝出る時は鶴の千羽も取つて來さうな勢だが、夕方歸る時は高々百舌が一羽に雀が二三羽位なもので、やれ今日は禽が居無かつたとか、やれ肝腎な地を他人に荒されて仕舞つたとか、道理らしいことを云ふのが定例なのです。一日駈け歩行くもので眼の下を凹くして落膽しながら歸つて來る其容態。草鞋を解きながら何も無い獲物嚢を細君に覗かれて爲うこと無しに苦笑ひする其顔つき。いやはや横から見て居ると實に滑稽の上乘なるものですナ。銃獵も十二番の二連で無煙火藥を使ふと云ふやうに爲るか、八番以上の銃にロンチルド彈でも、うんと籠めて、水上獵を爲るとか何とか云ふのなら、少しは面白いこともあるでせうが、高が意休の煙管位な二十四番か三十番の細つこい單發銃で、狗も連れずに鶫や鵯を追駈けて歩行く銃獵家ぢやあ、禽に寄らうと思つて田の畔を屁放腰で忍ぶ拍子に泥田の中に轉げ込む位が結局ださうです。僕の友人なぞも數次泥塗れになつて歸つて來ることがありますが、左樣なると自暴を起して喧嘩早くなつたり何ぞするので、迷惑なのは細君です。下手にまでつかうものなら直

談をやり居つた中谷めが、不機嫌な氣色を仕て、險い眼でもつて乃公を忌々しい奴だと云ふやうに睨み居つた。

其四

中谷なんぞに睨まれたつて怯れるやうな乃公ぢやあ無いし、蟲の好かぬ彼奴の不得意な顏を見るのも一興だから、わざと乃公は愉快げに聲を大くして、銃獵ですナア、銃獵ですナア、土曜日の夜から準備を仕まして、日曜の朝は昧い中に旣家を出ます、丁度郊外にかゝる頃、東の天が色立つて來て、やがて日が出る、霜がきらつく、刈田の廣潤とした涯には、常磐樹交りに榎や槻の大木の葉を振つたのが高く立つて居る其下に茅葺屋根が三つ四つあるといふ遠景で、眼に見るものに厭なもの一つも無いです、そこで溫暖を覺えるほどに身を遣つて、神代のやうに曉天の空氣の澄みきつた中を行く愉快さ、實にそれだけでも疲れた魂に水を與やうな氣がして、身躰中の筋が緊縮る位です。其中に鳩なり鴫なり鶫なり其他の小禽なりを見付けます。どーんと擊ちます。響きは我心に勇みをつけます。禽はばさりと落ちて來ます。いや其の面白さといふものは、小な一室に閉ぢ籠つて何事か爲るやうなものでは無いです。况や運拙からずして、獲物袋が丸くなるほど獲物を得て黃昏頃家に歸るに於てをやです。と述べ立てたのだ。自分でも巧く饒舌り得たと思つた位だつたから、座客

一昨日の前の晩でしたね。あなたが泥のやうになつて御歸んなすつた彼の晩のことですね。

ウム、その泥のやうになつたに就ても大に理由ありなのでナ。一躰其日は局長はじめ衆人が、無禮講といふもので大に酒もはづんで飲んだぢや。ところで大分誰も彼も浮れ出して來る、話し聲が高くなる、笑ひやうが大袈裟になる、と、そろ〳〵各自の自慢話し天狗話しがはじまる。まさかに目上の人の居るところだから惚けや慾張りは云出し得ぬので、廣田は書畫談を遣りかける、狹山は高井下條と一つになつて碁の法螺を吹く、上野の盆栽通を振り廻す側では、中谷が婆藝妓を捉へて小厭味な劇場通を云ふ始末さ。局長は莞爾〳〵して聽いて居たが、やがて乃公に對つて、いろ〳〵諸君の得意談がありますが、村田さん君の道樂は何ですかナ、矢張碁でも勉強なさるのかと、話しかけた。乃公は衆人がえらさうな事を云つて居るのが癪に障つて、一人でぐい〳〵飲つて居たところだつたから、いゝや小生は武骨な生れつきて諸君のやうな慧巧なことは到底出來ませんです、碁も盆栽も書畫も曉りませんし、演劇なんぞは女々しいものですから寧ろ大嫌ひです、と云つた。そりやあ少しは醉つても居たし、癪に障つても居たから、多少は語氣も荒かつたらうさ。しかし局長は小な事には關はん人だから一向無頓着で、却つて笑ひながら、ムヽ、演劇なぞは乃公も餘り好かん、大嫌ひとは君も面白い人ぢやの、そして君が好きな樂みは何ぢや、と少し乘り出して來ての問ひぢや無いか。そこで乃公も些圖に乘つて小生の娛樂は、と答へかけて不圖顏をあげると、今まで演劇

よく覗ひの注く好い鐵砲だと仰やつて、せつせと磨き立つて居らしつたぢやあ有りませんか。

其三

左樣まくし立てられちやあ堪らない。困るなあ、ほんとに止め途無しに饒舌るのは廢して呉れ、おい貞。そんなに卿が云ふことだから、ぢやあ來年の三ケ日は必ず家内に居る事とする、其代り四日からは出ても可いことゝ仕て貰はうぢや無いか、また洋服が拵へたいとか何とか云ふ我儘は誓つて云はぬと仕やう、其代り今度だけは乃公の云ふ通りに乃公が欲しいといふ二連銃を買つても好と云ふ事に仕て貰はうぢや無いか。どうしても欲しい理由があるのだから。

へえー。大さう御執心が強いと見えまして下から御出なさるのね。しかし今仰やる事は悉皆妾を承知させて置て自分の欲しいと思ふものを買ひたいと云ふ一心から出た當座らしいから餘り當にはされませんはね。そして其道理らしく理由理由と仰やる其理由が何樣なものでせうかねえ。ほゝほ、何も衣服や時計を他家の藏へ遣つてまでも新規に鐵砲を買は無くつちやならんといふ理屈は無いでしやうに、ほゝほゝほ。

いや左樣外交評判でもするやうに乃公を飜弄しちやあいけない。そりやあ何樣せ四角ばつた理屈の有らう筈は無いのだが、一躰斯樣いふわけなのだ、それ彼の二十六日の忘年會ナ。

なことは誓つて斷然爲まいから。

餘りあてにはなりませんね。一月もたつと又此の鐵砲はいけないからと仰やるか、左樣で無いにしろ洋服が調へたいとか何とか仰やるに定つて居さうな事ですねえ。ろして、まんざら理由も無い身勝手ばかりでは無い、仔細の有ることだと仰やるが、要りも仕無い鐵砲を買ふのに何も理由の仔細のといふことの有らう筈は無いぢやあ有りませんか。此の歲の暮にかゝつて無理な工面なんぞ爲ずとものことですわ。今年のお正月も鐵砲騷ぎで郞は田舍に行て居らつしやる、妾一人でほんとに淋しい厭なお三日を過しましたわ。それも澤山に雉子や山鷄でも貴郞が獲て御歸んなすつて御機嫌が好いといふ譯なら、そりやあ留守居を爲るのを何とも思ふのぢや有りませんが、一人ぼつちで淋しく松の內を暮した揚句、貴郞に不機嫌で歸つて來られて、禽の獲れない癇癪の飛沫を浴せられちやあ、何ぼ何だつて割に合は無過ぎますから、もう來年は三ケ日を家に居て頂か無くちやあならないと思つて居たところですもの。どうか鐵砲を買ひ更へるなんぞといふ事は止して仕舞つて、ちやんと御正月を家で仕て下さい。何もわざわざ旅費を遣つて禽を獲に貴郞が御出なさらなくつても、あの遠藤が御歲暮だつて持つて來た鴨もありますから、是非家內に居て御雜煮を祝つて、あの衣服を着て年始廻りもこくめいになすつて頂きますよ、たつて銃獵が爲さりたいなら、三ケ日を濟ましてから彼の鐵砲で雉子でも鴨でも獲つておいてなさいましな。彼の鐵砲だつて買ひ立てには、大變に

せん、亭主の服装が惡ければ女房の氣が廻らないからだと云はれます。仙人や獨身者は仕方が無いが、女房が付いて居て彼の醜態は何の事だと一ト口に云はれちやあ埋ら無過ぎます。それも貴郎が平常無頓着の淡泊とした方なら、黒木綿の羽織に小倉の袴でも濟みませうが、金着せ側は氣性が知れるから御止しなさいと云つたのに銀側を買は無かつたほどの見え坊な貴郎ぢやあ有りませんか。それだから妾が小面倒な思ひを仕て下着の裾廻しを直したり袖口の黒八丈を新しく仕たり、胴着を調へたり繻絆を縫つたりして、やう〳〵一ト揃こしらへたものを、一度も未だ手を貫さないのに、のつけに池田屋へ持つて行かせやうといふのは、そりやあ貴郎、あんまりといふもんぢやありませんか。

ウム、そりやあ一々道理だ、左樣云はれちやあ一言も無い。だがの、今度購はうといふのさへ手に入れゝば、もう是から先は何も要らないとまで思ひ込んで居るのだから今度だけはまあ不平を云はんで呉れ。成程卿が丹誠して調へて呉れたものを、卒然池田屋へ打込んで仕舞はうといふのだから、卿に取つては面白くもあるまいが、急に鐵砲が買ひたくなつたのも、實はまんざら理由も無いのに身勝手ばかり仕やうといふのでは無い、少し仔細のあることなのでナ、だから其樣な氣まづい顏を仕ないで此處は一トつ乃公の云ふやうにさせて呉れ。其代り是からは月々の乃公の小遣を卿の方の思ふまゝに限られても不足は云はぬし、また何が買ひたい彼が買ひたいと不時に我儘を云ひ出やう

のだが、單發銃では其働きが成らん。ところか、今度買はうといふのだと、ドーン、ドーンと續け撃をする事が出來るのだから、然樣いふ時には論は無いといふものさ。おまけにまた其銃が割合に輕くて、長さが好い加減で、小取廻して、調子が好くつて、手に取りさへすれば臺尻が肩へ吸ひつくやうにピタリと貼て、狙が自然にちやあんと付といふのだ。そして、其銃身の奇麗さといふものは鋼鐵と錬鐵とを幾度も幾度も綯ひ合せ綟り合せて造へたものだから小紋といはふか唐草と云はふか何とも云へない模樣が現れて居るので、そりやあほんとに見せたい位だ、見れば汝だつて屹度欲いといふに違ないよ。

其 二

嫌ですよ、人を馬鹿にした。小紋だつて唐草だつて何が欲しいもんですか、鐵砲が着てゐるかれる物ぢやあるまいし、ほんとに吾郎は詰らないことを仰やる。そして第一着物も羽織も袴も外套も無して仕舞つて正月早々見すぼらしい風を仕て居らつしやる御心算なのですか。そりやお男兒は男兒の見識と氣象とてすから、随分褞綿の垂下つた衣服を着て大道を威張つて歩行くのも好いか知りませんが、女の身になつて見ると、自分の家の人に襟の汚れたのを着せて人中へ出すといふのは何の位辛いことだか知れや仕ません。お正月はお正月らしく爲なければ、貴郎は好くつても妾が濟みま

あゝ、鐵砲さ。鐵砲も鐵砲も御膳上等といふ鐵砲なんだ。

だつて鐵砲なら買はなくッても自家に一挺有るぢやありませんか。しかも去年お買ひなすつたばかりで、まだ碌に御使ひもなさらないのが。

うん、そりやあ去年買つたのが有るには有るがの、ありやア汝たゞ孔の穿いて居る鐵の棒のやうなものでの、可厭に馬鹿長くつて、下らなく重たくつて、仕方が無い頓痴氣なものなのさ。そこで彼銃をしたに遣つて買ひ更へやうといふのだがの、今度買はうといふのは、そりやあ汝すばらしいものでな、ありやア二十八番だらう、ところが今度のは十二番さ、ありやア單發銃だらう、ところが今度のは二連銃さ。よしかね、二十八番と十二番とは倍ほど違ふといふものだから、先ので一時に二羽獲れるところは今度のでは四羽獲れる、先ので四羽のところは八羽獲れるといふものだ。よしかね、單發と連發との違ひはまた大したものだ。先のでは、ドーンと一發撃つ、狙つた禽は落ちたにしろ、其響に驚いて思はぬところから大きな禽などが二羽三羽ばた／＼と羽音をさせて飛び立つても、單發銃の悲しさには、急に二の彈を放つことが出來ぬから、指を啣へて、むざ／＼と好い禽を脱して仕舞はなけりやあならんし、また一連一群になつて飛ぶ禽を撃つ時になるとナ、一發ドーンと喰はせる、禽めらが驚いて、わやわやと亂れ立つ、そこがそれ一時千金といふ好機會での、そこへ今一發ドーンと撃ち込まうものなら鴈でも鴨でも小禽でも、ばらり／＼と落ちて來やうといふ

銃獵孝行

其一

おい、おい、おいお貞、呼ぶのに何故來ぬか、用があるから呼ぶのでは無いか、なんだ、お節を煮て居るから手が放せぬといふのか、まあ一寸來て呉れ一寸來て呉れ。何でございますッて然樣四角張つて出られては困るがの、汝、氣の毒だが一寸池田屋へ行つてナ、何樣も然樣むづかしい顏を仕ては困る、まあ然樣厭な眼を仕て乃公を睨まないで、乃公の羽織と袴と市樂の着物と、えゝと、此の金着側の時計と、和服の外套と、これだけ持て行つて六十圓借りて來て呉れ。

何ですつて、飛んでも無い事を仰やるぢやありませんか、お正月が來やうといふのに着物や羽織を池田屋へ持つて行くなんて、どうなさるお心算なんです、何だつてまた六十圓といふお金が要るんです。何も藪から棒に其樣なお金が要る理由は無ぢやありませんか、何樣した理由で其樣なお金が要るのです。

然樣改まつて聞かれては閉口だがナ、實はその鐵砲を買はうといふ腹なんだ。

鐵砲ですッて。

に兎に角利一を連れて來て、聽く聽かぬは先づ二段にして、一應汝からも意見を爲て貰ひたいのだが、幸ひ汝は今閑暇のある身軆、費用は妾が出しますほどに、利一が遊び先を突き留めて、相手が何樣な何處のものといふことも探つて貰ひたい、何と賴まれては貰へまいか、といと餘儀無げに云ひ出しぬ。(此稿未完)

くのが不思議でならぬ、隨分妾も氣をつけて何處で遊ぶのか何樣して遊ぶのか見つけて置かうと仕たけれど、一つも手證を抑へ得ず、それも可けれど家から多分の金錢を持出すことも無くて遊ぶのが氣にかゝつてならぬ仕誼、惡所には親や親類を見込んで遊興の金を用立てる腹の惡い金貸のあるといふことも汝の其罠に罹つたことのあるのでもつて知つて居る故、利發でも年齡が年齡なれば其樣な罠にでも罹つては居ぬかと其が何よりの心配になる、最も今度は友達と一緒に稻毛とやらへ行つて二三日遊んで參りますと妾の前は云つて出て行つたが、家へ來る鳶の淸次といふのが、一昨日新橋で若旦那のお洒落なすつたところを見かけたといふので、それからお初に吩咐けて根ほり葉ほり糺させると、十九か二十ばかりの意氣な妓と、同伴では無いやうでもあり又同伴であるやうでも有りといふ調子で、新橋の停車場の上等待合室に發車を待つて居たところを、人を送りに行つた次にちらりと見たといふ談、それで幾日經つても歸つて來ない譯が分つて、大方何處ぞに宜くない遊びを仕て居るだらうと察した譯、お染もお初が妾へ談したところを物蔭で聞きでも仕て居たと見え、また妾が利一の歸らぬを案じて居る樣子を見ても居るので、何と答へて好いかと今のやうに答へわづらつた始末、たゞこれだけでは無い、吾夫が明後日あたりは歸つて來るといふ手紙だのに、利一が一人家に居なくては、たま〳〵歸つて來る人に此樣な厭な話を聞かせねばならぬやうな機會にならうも知れずと、留守を仕て居た妾が氣が氣で無い、そこで汝に賴みたいは、吾夫が歸つて來ぬ中

ふだけだ、どうだ利一待合學校へ上げて遣らうか、なんぞと御酒に醉つた折節などは、馬鹿氣きつたことを饒舌り立て丶は彼子を調戯つたことも度々あつた位、それでも去年あたりは彼の利一は眞顏になつて怒り立つて、お父さん、そんな理屈がありますものか、待合なんぞつて汚らはしい、僕は人に媚びる婦人なぞは大嫌ひです、と云ひ爭つたものであつたが、今になつて見れば吾夫の滑稽交りの彼樣な戯談も毒になつて居るに違ひは無く、利一の御腹の底には、お母さんは喧しいことを云ふけれど、ナアニお父さんは彼樣いふ方だもの、小面倒なことを仰ある氣遣ひは無い、といふ分別があるには相違無い、兒童だ兒童だと思つて居る中に、どうして旣、お腹の中は全然一人前になつて仕舞つて居るのだもの、うつかりすると彼兒の考への方が妾等の考へよりも先へ出て居るか何だか知れたものぢやあ無い、當時の青年の怜悧なことゝいつたら古物の妾達の思ひのほかなのだからね、おまけに利一と來ては物事に氣のつくことが早くつて細くつて、そして人前が好くつて、智慧が廻るのだから、中々油斷はなりは仕ない、どうしても妾なんぞは巧く乘せられ勝で、それで又妾なんぞに其尻尾を捕へられるやうな事を仕ては置かないのだから、まことに何樣も弱ります、思慮が如何にも行き屆くので、終に一度何處で遊ぶのか何樣なことをして遊ぶのかをも妾に知られるやうな證を見せたことは無し、第一この三四日のやうに遊んで居てはなか〳〵宛行つてある小遣位で足りる筈の有らうことは無い道理なのに、何樣いふものだか妾に無心を云ふても無く濟ませて行

を換へ品を換へて、いろ〳〵と教訓も折檻も仕たなれど、何をいふても水の出端の若い勢ひ、何か云はるれば一も二も無く恐れ入つては居れど、妾の顔さへ見えねば羽を伸して直に飛び出すといふ始末、特さら父親は外出勝の留守に畏いものは誰も無ければ、初こそ自己が良心の咎めに妾を憚る樣子も見えたれ、此頃では打たれ慣れて鞭に驚かぬ馬のやうに内々では妾なんぞは怖がらぬらしい素振り、汝になればこそ云ひもするが、何樣も妾を侮り切つて居るに違ひ無い、親の身として我が子に侮られて居るとは他人に云ひ兼ぬる口惜しいことながら、情無いは女に生れた甲斐無さ、思つたゞけのことを云ひ得もせず又爲し得もせぬ故、そこを見越して勝手な振舞をする悴、それに又吾夫は汝も知つての通りの大腹中、藝妓や女郎を買はない奴は理解の惡いところがあつてならぬ、人間といふ奴は蕩樂を仕始めてから漸く世間が見えて來るのだ、學校の門を出てから待合の奥座敷へ入つて、みつちりと一ト修業したので無ければ、世の中へ出て何が出來るものか、遊興も落第の仕續けて一つ事ばかり爲て居るやうでは、それは困つたものだけれど、何時まで經つても第三リードルを擁へて居る馬鹿のやうに下らない妓の尻ばかり追ひ廻はして居るといふのでさへ無ければ、遊ばぬよりは遊んだ方が好い、大なり小なりの學校を卒業すれば先づは學問をする筋道だけは分る筈だ、また大なり小なりの遊興を卒業すれば先づは自他の痛い痒いの人情といふものが分るやうになる筈だ、何方も大抵同じやうなものだが、たゞ學校よりは一方の方の月謝が少しばかり高いのが違

の音耳に立ちて、電燈の光りも冷たきやうに見え渡りぬ。をかしからぬことを問ひ出して、可惜一座の興を敗りたり、と聊か悔みはするものゝ、續がる中のことなれば、其心配の因由を聞いて憂を分ちたき情もあり、さりながら差出がましくも人の答へ澁りたることを問はんは、親しき仲にせよ無作法過ぎたることとなれば、義夫は良々久しく默然として口を噤みて居たりけるが、耐へかねて復び問はんとする時、姉は徐に口を開きて、お染や、汝は少しの間汝の室へ行つて居て下さいな、と優しく言ひてお染を去らせつ、さて弟の方に膝押し向けて、實は妾も思案に餘つて、明日は汝のところへ行つて智慧を假りやうかとまで思つて居たところ、併し今夜にも利一が歸つて來たらば、何もわざ〳〵可厭な話を汝のところまで聞かせに行くでも無い、妾が出來るだけの意見を仕て見て妾だけの料簡で濟ませて仕舞はうと、それで今までは言ひ出したいのをも耐へて居たが、今夜も既大凡は歸りさうも無い樣子なり、問はれては隱しやうも無いことなれば、有り躰に話しますから一ト力出して貰ひたい、といふのは他でもない彼の利一が、親の口からは云ひ惡いことながら惡い遊びを初めて、此の秋頃から段々と遊び募り、此の三四日は全て歸つても來ぬといふ始末、手褒めをするは異なことながら滿更馬鹿にも生れつかぬ彼のことなれば、さう〳〵は歩行習ひの子を叱るやうにも叱りかね、自然と自分から詰らぬことをせぬやうになれかしと、それと無く釘を打つて取り締めたことも幾度、また或時は見過ごし兼ねて眼前に理詰めにして責め抜いたことも幾度、隨分手

行は面白い、家に居るのは智慧が無いなんぞと生意氣なことを申しますよ、しかし明後日は歸つて來る筈でござります、學校の先生が付いて居て下さるのですから何も心配はございません、海濱へ行つて遊ぶのだから歸りには大な鮪を獲つて來て一同に土産に仕て遣るなんぞと大威張で手を振つて出かけましたが、大方今頃は磯へ出て暴れてゞも居るでございませう、歸つて來ましたら房州が何樣なところだか能く聞いて見て、面白さうでしたら妾も來年の夏休みには遣つて戴きたいと思つて居ます、叔父さんは連れて行つて下さいません歟、と他の話から吾が願ひを心無く云ひ出づるも娘氣の、親しきに甘ゆる習ひなり。義夫はこれに笑ひを含みて、十郎さん(利を略して云ふ)は其は面白く遊んで居るでしやう、十郎さんの談話次第で、それぢやあ一同で房州の濱へ來年の夏は行きましやうかね、而して一郎さんは何處へ行きました、これも旅行です歟、と問へば、お染は一寸答へ澱みて、言葉も無く母の面を見たり。今の今までは我一句云へば彼一句、彼一語云へば我また一語、句は句と相承け、語は語と相結んで、間隙も無く睦ましう談合ひしに、お染がかゝる風情を見するは、此の中必ず樣子ある故にやあらんと、早くも猜せし義夫は直にお染が眼を追ひて姉を見るに、姉の面には何やらん濟まぬ色あるを認めたり。さては愈々事ありけりと悟りはしたれど、强ひて立入るべきことならねば、お染を追窮せん由も無く、そのまゝ少時控へけるが、今まで賑やかに笑ひ興ぜし室内に忽ち人語を絶ちたる其淋しさは一ト方ならず、俄に床脇の棚に置かれし小時計

御惣菜で結構ですとも、妾やお染と同じの方が却つて可いよ、たゞ御客さまには昨日數へたやうに彼の興津鯛を燒いて敲いて、奇麗な繪だと云つて汝が吃驚した彼の御皿へ盛つて、それから小い玻璃盞を別に葡萄酒の瓶と一所に彼の臘塗の盆に載せて持つて出るやうに、急くことは無いのだから汝一人で爲さい、お三に手傳はせてはいけませんよ、出す時はお初を遣して知らせますから、沈着いて失錯の無いやうに二人で御出し、とそれ〳〵物靜に手脫無く吩咐け終りて、やをら身を起して容儀を繕ひ、二階をさして上り行きぬ。

其二

主人が贅澤に取り置きたる壹罎十圓も仕やうといふ葡萄酒を幾盞か强ひられて心嬉しく、遠慮無き姊なり姪なりを相手にして肩の張らぬ雜談に思はずも笑ひ興ぜし義夫、今さらながら互に曇無き心を持ちて血の續がる同士の語り合ふ樂しさの、淸くも淸く、めでたくもめでたきを感じつゝ、醉も醉ひ募らぬ程度にして、待遇の心入れ深きを悅び聞こえつゝ酒盃を辭し、家族並の晚飯を馳走になりて、食後の茶菓に猶心置き無く語りけるが、不圖利一郎利十郎の何時までも歸り來らざるに不審して、それはそうとお染さん兄樣や十郎さんは何處へ行つたのです、と問へば、あの、弟は學校が休暇になつたので同級の方たちと一所に房州へ遊びに參りました、あんな小さな身を仕て居て、旅

事多く、ことさら夫は月末二十八九日か三十日ならでは歸らぬといふ不在を預かれるまゝ心を張りて、家僕の勇吉を相手に氣を遣ひながら、お染が復習ふ琴の手の一つ間違つたをも聞き逃さず、身を反らせて奥の室を覗き込みつゝ、違ひましたよ、と聲をかけて心づくるは、口も八丁手も八丁の譬の通り、四十女の侮り難きをありくと此處に現はしたり。冬至は三四日前に過ぎたばかりの、日の短い頂上とて、たつた今四時打つたかと思へば、既手許は暗くなつて物の色分り難く暮れかゝる折柄、流石に人出入も一寸途斷えて、室毎の電燈輝き初むるところへ、下谷の旦那樣が御いでになりました、と利十郎が傳として使ひし以來今に暇を呉れとも云はぬほど居馴染みたるお初といふが取り次げば、おやく、それは希らしい、他の人では無いし、直と此處へと、何の氣も無く云ひかけしが、急に思ひ出したやうに追つかけて、いや、此室は餘り取り散らしてもあるし、ごたつきもするから、二階の室へ通つて貰ひませう、叔父さんが御出なすつたから汝一寸御相手を仕て御いで、と妾が云つたとお染に云つておくれ、妾も今直そちらへ行きます、勇吉汝は其勘定を仕て仕舞つて、誤算が無いと決まつたなら小切手を書いて御置きなさい、印は明日妾が捺して遣りませう、そして汝は既それさへ濟んだら勝手に自分の事を仕て宜しいよ、お勝や、お勝や、夕御飯の支度は既可いのだらうね、アヽ左樣でしたか、御苦勞でした、それでは直に出して貰ひたいがね、御客さまが一人おいでなすつたから、其の心算で御膳を拵へておくれ、なあに内輪の方なのだから、その

出かねまするので御無沙汰致して居りまする、いづれ明けましたら緩りと御目にかゝりますつもり、と申しましたと恐れ入りますが宜う仰あつて頂きたうござります、と女房の云ふを背後に聞きて、八王子ものゝ竪縞の着物に同じ價頃の紬の羽織といふ打扮、紺綾の外套を引掛けて、下谷の我家を立出て、麹町の姉の家指して出掛けたり。姉は義夫よりは十餘りの年上、早くより大山といふに縁づきしが、幸福に夫利之助は鑛山の事業に當りを取りて、今は何萬かの財産を作りたる其さへ十分のこととなるに、子は利一郎といふ今年二十二の利發な若者と、其弟に利十郎といふ十四の才物との間に、おそめといふ繪に書いたおそめのやうな十七の娘まであつて、目上にむづかしい舅姑のあつたは十何年の往時となり、當時は立派な御母さんとなり濟ました果報人、五六年前は弟の義夫に無分別の後拭ひを時々させられて、夫への氣の毒さに胸の凍るやうな思ひを爲たことも無きにあらず、これぱかりを心配し居たりけるが、近頃は弟も料簡に實がいつて一廉の賴もしい男になり、長雨の後の天氣の能う固まつたやうに蕩樂の末の締まり工合は生からの野暮の堅造とは又一段の好い處あつて、天晴我が實家を受け繼いだゞけの器量の見ゆるに、賴み少き女の身には何より彼より此が嬉しく、遙に末の弟ながら今は姉一人弟一人の仲なれば、何ぞの折の杖にもと大切に思ひ居たりけり。今日は年暮の二十六日とて、萬般事足る身は事足るだけにそれ〱の用事忙はしく、年越し年迎への支度もあれば、取るものは取り與るものは與る金錢物品の出し入れも毎の月とは異つて

男あり。子はまだ持たねど四年越連れ添ふ女房と言ひ争ひ一つせで、下女下男の數こそ使はね、主人の好い心掛の德は溢れたる家の內小奇麗に、餘所目に見てさへ樂しげな水入らずの睦ましく、男は役所へ月給取りに、女は裏で洗濯したり張物したり、外では何局何課の簿書堆裏に頭を突込んで刀筆を捻くり廻せば、內では針箱を橫に裏地表地の遣り繰りやら接ぎ綴ぎやらに尺度を執つて計を目の子勘定に決める働きにそれと此との差こそはあれ、いづれも互に分を忘れず、夫は夫らしく妻は妻らしく勤むれば、古借の惱みは一昨年の暮に消えて、餘るといふには至らねど買ひ掛りも無く、家計もやうやく前途安き見込の立つほどに整ひ、特更今年の暮は、世間不景氣の聲々喧しくして誰も彼も碌な顏つきは仕て居らぬが中に、貴郎の御衣も大分洲が立つて見えるやうになりましたから新年に御召になるのは久しぶりで一つ御拵へなすつて、と細君から云ひ出されて、それでは卿のも次手に一つ拵へたが宜からう、と或夜の食後に談し合ひて極めた位の懷中の寬やかさに、衣食足りておのづから起る禮儀の詮索、御用納めも旣濟みて用の無い身躰に年を迎ふる支度も大概は片付きたれば、いでや日頃の無沙汰見舞に親類の誰彼が許を尋ねて歲暮の挨拶も仕て來ん、と出支度すれば、ほんにそれは宜うございませう、何家よりもまあ御姉上樣のところへ御いでゝあそばせ、大山樣は御不在なり、例年よりは御淋しう暮して御いでゝござりませうから、御尋ねあそばしたら何樣に御悅びだか知れは仕ませぬ、妾も一寸上りたいとは思つて居りますが、御互樣に女は年の內は

までも方正謹直の君子になり果せたき志願に、改過遷善懲忿窒慾と念じつけ念じつけ、人こそ知らね腹の中では隨分苦いおもひを仕ながらも、屹と癇を抑へ蟲を殺して、或時は底意地惡き昔馴染が、少壯幾時ぞ、老いるを奈何、腰が曲らぬ其先に澤山可愛がられいて何とする、交際ひ玉へ、と無理強するをも、何樣やら斯樣やら外づして逃げ、又或時は泥醉漢が、何だ、もう澤山だと、馬鹿云へ、人の與つた酒盃をたゞ返すといふ法がある歟、いやに慇懃に斷りをるな、君は何時の間にか僞君子になつたなあ、ホイ是は失敬、と嘲るをも、耳を塞いで然り氣無く聞き流し、彼奴も燒が廻つた、彼奴も箍が緩んだ、彼奴も娑婆ッ氣が弱くなつた、彼奴も貯金主義にでもなつた樣子だ、彼奴も後世氣でも出たと見える、と鍋を共にして小意氣な鳥屋に身たゝきを扯斷り合ひ、印を並べて因業な高利貸から火炎でも立ちさうな金を借り合ひし舊の仲間の蔭言の數々を、聞いて好い心持のする筈は無けれど、皆是おのが身の汚れから出た鏽と覺悟して逆はず、磨き立つる我が眞の道の光りだに曇らずば、やがては其も無くなるべし、と默々蟲の壁を徹すに倣つて、二年三年と月日を經來り、初のほどは折々踏みはづして狂態依然たる有り樣を演ずることありしも、其度毎に悔み意の強うなつて、漸く質素な平穩な生活を續くることの出來るやうになりし此頃は、意馬心猿も鎖に馴れて騷ぎ立たねば晝に妄想無く夜に惡夢無く、有徳の君子とまでは未だ達かねど、堅い御方とは出入る者共にさへ鑑定札を打たるゝやうになり、天晴太平の民たるに愧ぢず日を送る小野田義夫といふ三十

箱根草

其一

風に浮かれては雲間の月を手招きし、露と寐ては草隠れの蟲に歌ひ囃されし、それは尾花の往時のこと、今は色香も無き炭俵となり果てゝ、物置部屋に樂寐を悦ぶ身ぞとは、表面に出したる謙遜、まことは若い時の血氣に任せて、酒に梯子の勢ひは天へでも昇りかねまじき見脈、女に鼻毛の寸延びては、惚さによつてかくの如く長しと友達の惡口まで受けしほど、白痴のありたけを行つて退けしを、何樣いふ機會からか不圖後悔して、これではならぬと心の楫を取り直しゝより、其日〳〵の潮任せ風任せにふらり〳〵と遊んで過ごしゝ昨日とは打つて變つた身の持ち樣、克己の二字を磁石の針と大切に護つて、酒が飲みたい、いや、どつこいしよ、女が嫖ひたい、いや、どつこいしよ、彼の野郎を撲つて呉れうず、いや、どつこいしよ、勤務はずるけても荒岩常陸山の此の取組を見ずに居られるものか、いや、どつこいしよ、どつこいしよ、と馬鹿婿が水溜りを飛び越すといふ昔話のやうに、何でもどつこいしよで踏み耐へ、朝夕の行儀もおのづから正しく、大胡座を何時しか小じんまりと四角に坐るやうになつて、折ふしの宴會崩れにも、二次會の音頭取とはならず、何處

共、畢竟我身を深く思召し餘りての事と恨むばかりにはあらず。嬉しき方も御座候へば蔭ながら御前樣あしかれとは存じ申さず候ふ間何卒御心正しく持たれ候ふて行末ながく御榮えなされ候ふやう念じあげ申し候。たよりなき父母わたくし亡くなり申し候上は、老後定めし難澁のこと、思ひやられ、一層御前さま恨めしくは候へども、なにとぞ父母の行末相應に御扶け下されたく、さすればわたくし事一生の恨みを忘れ、却つて御前樣をありがたく存じ申すべく候。又父母ともゆめ〳〵御前樣御所行に付いて口外致すまじく、つまり御前さま御爲めにも父母の爲めにもよろしくと考へ申し候。申しあげたき事は澤なれどまづは御暇仕り候。

二月七日　くいツくりい

伯爵しやいろツく樣

愚父立合にて御開封下され度候

と讀みてわツと男泣きに泣きたるは怪しと見れば、其筈の事ぐれんどわあの指には『さふイや』ぞ耀ける。

親しき朋友知る人共を招きて床上げの祝宴、てにい料理人までも慰勞金貰ふたるよろこびのあまり、道化踊可笑く『ぴやの』の音もさゞめき渡りし其夜忽ち拘引せられて、三日たゝぬ内に死罪の宣告、さても世は無常なり。其事にたづさはりし代言人につきて仔細を問へば、料理人を初め宿屋の手代きい行者は皆探偵にて、醫師のぐれんどわあも内々依賴を受けて力をあはせ、ばあどるふくいッくりいに聲色の似たりとぼなのみとめし貧民の男女を忍ばせて、あやしき言葉をひゞかせ、油に水をまぜ置きて眞夜中に暗くならせ、精瓦の小幻燈、白壁窓掛にあやしき姿を見せ、きい行者の手品一杯食はされしも一罎の毒の返報。自筆でばあどるふを殺したとの懺悔狀には辯護人の口もひらけず。殊更くいッくりいの書きおきもきい行者の手に殘りたれば、二罪倶發。あゝ恐ろしきしやいろッくの巧み、毒を用ゐて毒で殺せば、あゝおそろしきぶらいとの智惠、法律にのらぬを法律で罰すると聞く人舌を捲くは是のみならず、忠義無雙のてにいは探偵だんきあんなりしとぞ。其後はこれにて凡ての怪しきこと、怪しくもなきに、ぐれんどわあは或時ぶらいとを訪ふてくいッくりいの書き置きをひらき。

一筆かき殘し申し候ふ。我身こと御前様の爲めに此世の望みも絶え果て候ふ所の大耻辱をうけ申し候ふに付いては、最早惜からぬ身を捨て候ふて、自ら心の潔白なるを或人に向ひてあらはし候より外に樂みも御座なく候。まことに御前樣の御ふるまひ骨身に答へて口惜くはぞんじあげ候へ

はりし如く、しやいろッくは忙然としてありがたさ身にしみ、何の譯ともなく兩眼に涙こぼれける。やがて駕籠を下り、よろ〳〵と地に跪づき首を低くして、一心にきい行者救ひたまへと念ずれば、てにいはじめ人足共は片への岩蔭に隱れ休みたり。十分も過ぎし頃しやいろッく頭をわげいと嚴なる詞に、伯爵は起んとすれど病疲れたる身の自由ならず、漸く首だけもたげて恐る〳〵見れば、白髯胸を覆ひて眼の光りすゞしく廣き袖の麻の服をゆたかに着なしたるありさま、神の使かと思はれて切りにわなゝくを行者は見給ひ、しやいろッくは此地にて生かはるべし、汚れたる今までの行ひを捨て清き身となるべし、懺悔狀いざ受取らん、天に祈りてつかはすべしとさし出し給ふ手に、懺悔狀及び一ひらの書き付を捧ぐれば、取るより早く掌に置きて高く捧げ、呪文を唱へて天火を以て燒きたまへば、炎々として焚たりけり。伯爵は感佩肝に銘じて拜み伏し拜みする間に、時々行者の祈禱の聲いと古き語にもやと覺えて、耳にほの聞ゆる尊さ。やがて仰ぎ見れば行者は早や影も形もなく、是はと驚く所へ、しやいろッは生れかはるべしと何處よりか響きたり。

其十一

生れかはるべしとの一言耳に殘りてあり難さ忘られず。是より幽靈も出ずなりければ、別に病もなき事ぐれんどわあの藥力見えて、めき〳〵と肉づき再び昔の姿に復し、都へ歸り花さく身となり、

ま、是も御前と同じ精神病にて助かり難くありし時、御駕籠にめして分けのぼられ、山の半腹まで行きて一心に憐を乞はれしかば、飄々として來り給ひ、懺悔状と恨をなすべき心あたりの人の品物と二くさを受けとりて、直に燒きほろぼし、天に向ひて祈念ありしが、侯爵の殿はそれより心すがしく、遂に平愈あそばしてめでたく御歸家なされし事あり、夫も今は賴みにならず、木こり山かつも此頃はきい行者をお見かけ申さぬとのことゝ、歎息しての物語に聞き惚れたるしやいろツくは、てにいそなた太義でも案内者雇ふて山深く分け入り、きい行者のあるなし糺して來て呉れと、伯爵の貴き方が奴僕にいひつくるさへ丁寧になりしお胸の中、いたはしやとてにいは直に出て行きけるが、其夜は殊に淋しく四五度までも魘はれ苦みし翌朝、蔦かづらよぢ登りて漸く尋ね逢ひは逢ひましたが、きい行者は以ての外の氣色にて、しやいろツくは驕慢の心まだ拔けねば、とても助くる譯にはゆかず、いよ〳〵罪を悔みて眞心に歸りなば懺悔状自身に作り、心當りの恨む人の品物何にてもひとくさ持參し、正直になりて山の半腹まで來いとの言葉とてにいが話すに、昨夜の苦を思へば我慢の角も折れ、きい法師の見透しには膽も落る計りに驚き、流石のしやいろツく力なき手に「ぺん」を取りて、ひそかに懺悔状したゝめ、てにいを從へて山駕籠に痩せし身をのせ、段々行けば松柏の梢そらにそびえてこうこうと吹く風の音すごく、漲りながるゝ溪川のけしきすさまじ。見上ぐれば岩山峨々として半は雲にかくれ、悲しげなる鳥の聲ひやゝかに襟元に落くれば此世から生か

其十

宿の手代は大に驚き馳せ來りて、けしからぬ物音是はまあどうしたこと、窓かけは藥にそまり硝子はこな〱に飛び散りましたといぶかるに、てにいは捨てゝも置かれず、前にも云ふた通り旦那は精神病、御心配には及ばず、損じ物は償ひまするど挨拶してことは濟みたれど、是より毎夜々々姿さへ眼に見えて責めらるゝしやいろッくの苦しさ。ぐれんどわあも髭をなげたる樣子と、氣は慥なれば察して知るだけ猶心細く、神の罰かと自ら責むる折さへありて、本來の善性に歸る時は、伯爵の位に高ぶりし行ひもうらはづかしく、議員となりし名譽も何のいらぬことゝさとり、忠義一圖のてにいが一生懸命我身の平安を涙聲になりて祈るを壁越に聞いては天の道に背きし昔を悔い、神にも今は見放されてかと齒をくひしばるも數々なりしが後悔は先に立たず、幽靈は常にあらはれて一夜に二度三度まで魘はるゝせつなさ、惡人ながらあはれなり。或日手代御機嫌を伺ながら、此里の山つゞき奥深く白雲常にたゞよふて仙禽の囀り耳に新らしき高嶺の洞穴に、座禪の膝を組みて五官の慾を抑へ、觀念の眼を開きて一卷の聖經を誦し、心を松風に澄まし喉を溪川に潤して、人といふもの相手にせず、唯々神樣を師とも主ともなし、大事の命を犧牲に捧げての修行者きいと申さるゝ方あり。道力いみじく御座せども、みだりに麓へは下られざりしが、十年ほど以前侯爵の何がしさ

る時分、恨めしや伯爵さま、おのれしやいろッくと、云はれてぞッと驚きながら氣を取り直し、てにいを見れば平氣な顏付、何か聞えはせなかッたかと問へばいゝへと答ふるあやしさ。偖はいよいよ幽靈にはあらず、吾が心のまよひと悟りても、是より後は一夜に三度も魘はるれば強情の男もたまらず、烈しくならぬ内靜なる所を見立てゝ鑛泉冷浴よろしからんと醫者のすゝめに、さらば貴殿も同行をと頼めば、頭かきながら、愚老はしばらく手の離せぬ病人を受合ひ居れば、ぐれんどわあといふものをお連れ下されい、愚老の友人にて醫道も巧者に、親切な男で御座ると聞いて、少し快からぬ方もあれど、それを頼むことゝ極め、騒しきはよろしからずとの差圖、遂にてにいと料理人を合せて僅かに四人、何とかいふ山中へ行き湯治したり。こゝは都と違ひよろづいぶせく物さびしさも一しほにて、しんくとふけ渡る二時頃、らんぷの光りも何となく暗くなれば、忠義のてにいは心得てねぢを動かし心を出せど、一しきりは明るくて、やがて又消ゆる如く朦朧となる、例の如くおのれしやいろッくめ恨めしや伯爵さまと聞ゆれば、むッくと起きて兩眼を活と見ひらき、はつたと睨む鼻の先にあらはれたるくいッくりいの姿の、髪は亂れて濡れごろも、しよんぼりと立つ傍に、ばあどるふ口のあたりに血も乾かず、遺恨の眦恐ろしく、飛かゝらんとする勢ひにたまらばこそ、枕元の藥罐取るより早く打付けたり。

ありしに非ざること判然として、偶然の事變に相違なき事明かなれば、各位を疑ひ申せしは却つて此方のあやまりなれば、失禮を謝し併せて各位の御潔白なるとを證明致し候ふ。と云ひ送りければ、世間のやかましき評判もやみて、へんりい、ぶらいとの輕忽なりしを笑ふ噂ばかりとなり、伯爵が藥を飲みしは正直勇猛とほめたゝへられて人氣付きければ、撰擧にも預りてかねて望みの貴族院にも入り、豊さか登る朝日の勢ひよく、温和の光りは草の如き者にまで及びて、慈善家の譽れも高く、あすこの令嬢此處の後家にも慕はれて時めきたりしが、世の法律をこそくゞるべけれ、天の道をば何の免るべき。かりそめの風邪の心地と打ちふせしが、頭あがらず次第々々に衰へ弱りて、別段の苦しみはなけれど、醫藥の効見えず、十日あまりにめつきり痩せて心細き床の上、寐られぬまゝにさま〴〵の昔の事胸先に浮ぶ眞夜中頃、しやいろッくめ。

其九

薔薇の花も萎み枯れて後は香なければ、人の形體の腐れて尚幽魂のあるべき所以なしとは知れど、現在此頃毎夜々々しやいろッくめと責むるはたしかにばおどるふの聲、伯爵さまと恨むはくいッくりいの音調、姿の見えぬはまだしもなれど、神經病となりしは我ながら残念。さりとてまざ〳〵と聞ゆるあやしさ。今日は氣に入りの僕奴てにいを吾が傍に置かんと、其手筈しての夜も十二時すぐ

員にもならんと思ふ矢先のさまたげと、法律を遁るゝ工夫をなし、醫者の與へし藥と共に飲めば、忽ち腹中にて大毒となる飲料を與へて我を殺せしなり。あらうらめしやうらめしや、正しく我は謀られて殺されたれど、伯爵の與へし物は毒ならず。よし裁判に訴へても、あの伯爵は無罪にて、却つてゐれを訴へし者は、人を誣ひるの罪に落つべし。あらうらめしや〳〵、娘も殺され我もまた全く彼に殺されても、恨を報いる道もなし。たのみにならぬ人の世の法律こそは價値なき、あら口惜しのものなれや。遺恨は深き黄泉のながれに漂ふ吾が魂のうかむせさらにあらぬぞよ。

其八

あまりの怖しさに聲も出ず、苦しみてかたへを向けば、あり〳〵と此方に坐り居る老婆のぼなが、何とてあれ程にうなされ給ひしと親切の介抱。さては思ひ寐の夢、たのみにならぬ法律を尊ふ人の世の現に歸りしかと、醒ても鈍ましく我ながら茫然たりしが、不圖身を起して衣服をあらため、忽ち下婢として養ひ置きしぼなを引き連れ、貧民院に行しぶらいとの心の内こそあやしけれ。其後は事もなくて三日計り過ぎしが、幽靈の物語眞にしても證據にはならず、ましてや當にならぬ五臟の疲れより起りし事取るに足らずと、遂には決斷やなしたりけん、ろざりんの許醫師の許伯爵の許へ各一通宛の手紙を出して、ばあどるふの頓死につきては十分探索の力を盡したれば、全く謀殺者

したれども役目がらさうもされず、こはさを忍びてうかゞへば、白銀の針をあざむく長き髪おどろにふり亂し、潮にしやれたる木佛の如くなる骨立〻猿臂を伸ばして、今や堀り出したる棺桶の蓋開かんとする意氣組はぎらつく眼にあらはれて人喰ひ婆の物語むかしにあらず、霜の如き息ほツとつき、傳聞く、毒に死したる亡骸には魂魄長くとゞまりて、恨みの晴るゝそれまでは、皮肉も破れ朽ちずとかや、我も昔はお身の妻、たとへ一度去られても子までなしたる中なれば、毒死と聞きて其まゝに、仇も報いず、仔細も分らず、よそに見過し置くべきや、愈々毒死かさもなきか、實否を見んと此始末、ゆるし給へと云ひながら、拳をあげて丁と打つ。腐りし棺はいともろく四方にばらりと摧くる拍子〻ばつともえ立つ陰火の蔭に、すツくとたちたるばあどるふ、眼は凹み肉落ちて、口の端に滴る血しほも生々しく、聲もあやしくうらがれて、よくこそ尋ねてくれたるかな、思ひまはせば七年前、あの伯爵めに吾娘くいツくりいは無理無體、遁るゝ方なく一生の耻辱を負はせられたれば、戀しと思ふ男にも添ふことならぬを恨み怒りて、遂にはかなくなりしなり。手を下さずも伯爵は可愛き娘の當の仇、おのれやれと腹立てど、やさしき娘の書置に、憎しと思ふ伯爵の罪を忘るゝ其代り、子のなき夫婦をはごくむやうと、道理をせめて兩方を丸く治めし利發さに、恨みはさらに盡せねど、百五十弗月々によこすといふ故、ふツつり娘の事は云ひ出さず、住居も換へて居たりしが、うらめしや、伯爵め、吾が身が熱に浮されてもしや大事を口走らば名譽を傷つて上院の議

涙ぐみて三十弗をめぐみ、再び此方へは來てくれるなとの頼み、思へは逢ふが別れにて、娘計りか夫までが疑はしい死にやう、と身をふるはして泣くを道理となぐさめながら、それにしてもびいたあといふ男は尋ねて來なんだかと云へは、尋ねても來ませねば『さふイや』の指環もどういふことか知らねど、紅寶石は娘の指に在りましたとの答へ。あやしきとは此老婆を得て既に大抵盡きたれど、またぞろ一つ湧き出てたり。ちやあれすが歸り來ても別段何も解らざることそ、さてもあやしけれ。

其七

一月はかりは夢の如くすぎて何のことも分らず。ばあどるふの頓死は心ありて伯爵の謀りし事か、心なくして藥の喰合せかと疑ひも晴れぬ曇り空に、月の光りもはツきりとせぬ眞夜中頃、ぶらいとは何の氣もなく何やら寺の埋葬地の傍らなる木だち生ひ茂り、唯さへ暗き所を通り掛る時じも、浮雲に吼えつくやうな犬の聲遠く聞え、陰々と薄氣味わろく、思はずもぞツと身の毛よだちて、風も腥さきかと心迷ひのせられながらそれとふりかへれば、古き石塔のさびしげに黒ずみて立てるもあれば、大理石にやあらん新らしき墓じるしの朧ながら青白きも、誰人の名ごりの俤かとすさまじく見ゆる景色、流石に心弱く物驚きするとたんに、こそり〳〵と聞ゆる響き、其まゝかけ出さんとは

先だつ不孝の罪の輕からぬ事は申すまでもなく存じ居り候へども、さりとて惜しからぬ命、甲斐もなくながら〳〵居り候ふも面伏なる事と思ひあまりて入水いたし候ふ。父上母上には御存じなく候へども、ぴいたあと申す人尋ねられ候はゞ、吾が身事紅寶石入りの指輪確かに身を離さず亡くなり申し候ふ故あはれとも御思召し「さふぃや」の指輪御覧の節は一遍の御回向たのみあげ申し候ふと御言ひ傳へ下され度候ふ。別封は父上より伯爵に渡され候はゞ、父上母上とも老後の御生活御心易かるべしと存じ候ふ。申しあげたき事山々なれど惜しき筆とめ候ふかしく。

返す〳〵も父上母上とも、かくなり候ふも神樣の御思召しと御あきらめ下され、萬々御歎きあそばされぬやう、大事の御身體のために祈り申し候。

二月七日夜　　　　　　　　　　　　　くいツくりい

とあるこそ愈々あやしき事なれと、ぷらいとは尙物靜かにそれより後を問へば、老婆はます〳〵泣きながら、其時夫婦は此書置をよめどもさらに分らばこそ、其別封を披いたらもしや仔細の知るゝ事もと、私しは云へと夫は許さず、伯爵樣へ持つてまゐれば、それより月々に大金を給はるといふあやしさ、わたしは娘が何故に死んだと夫にきいても、曖昧に知らぬと計の挨拶。うるさく聞けば果ては怒りて遂に物爭ひすることも度々の末はつれなき別れ話し。去られて今の此ありさま。何處ともなくさまよふて、數月以前に此地へ來り、ふと邂逅つた時、夫は私しの姿をば見るとひとしく

めぐりあひて、くいツくりいの所以もあらかたは分りました。これぽなよかくさず云ふがよい、と諭されて涙をこぼしながら、はづかしのありさまに落魄れたるもばあどるふの爲めなれば惡しとは思ひたれど、死なれては恨みもなし、昔は其人とふたり暮し、伯爵しやいろツく樣の御別莊の花園守り、貧くはあれど夫婦の中は深見草、いひかはす言葉に薔薇のとげもなかりしかば、くいツくりいといふ子までまうけて睦しく暮らし、掌中の玉、かざしの花さく行末をたのしみに、よき姫百合となれかしと育つれば、日にまし光りも照り添ふ計り。ぽなの子にはすぎ者と我身をわるく云はれても、娘のほめらるゝを嬉しく、種疱瘡のよくつけと氣をもみ、齒ならびが惡うはつてはと乳齒の拔けるにも苦勞し、肌があれてはとあらき石鹸もつかはせず、遂に色盛りの十八の春を迎へし時、あゝ思ひ出しても胸が痛くなる事、あの伯爵樣のお眼にとまり、度々めされては御邸へ上り『おるがん』やら『ぴやの』やら、未熟な藝を却つてほめられ、其度毎に莫大な賜ものはありがたけれど或夜の雨さへ降りたる折、遲く歸りて顏色わるく、どうしたことゝたづねても應答せず、臥床に入りたる其翌朝、夫婦が目さめて見れば空蟬の殼計り、あきれて言葉もなき所へ、此方の娘御が入水なされたと里人のかついて來たる亡骸、分別は出ねど涙が先走り、惜しや夜あらしに色も香も失せたるを抱きしめて、是も名殘の娘の蒲團に見にくきをかくすとて、手に觸りしは一とひらのかきおき、今も離さず持ツて居りまする、と懷より出すを見れはやさしき手、

二里ほど隔りて何とか云ふ山の下の村はづれに、春なほ寒き風にまかせて、枯れ木朽ち木を焼火する乞食も、暖まるにつれて僭上物語り。野の中に暖爐は伯爵の身分でも持つまいと一人が言へば、それて思ひ出したが伯爵のえゝ何とやらいふ人が、ばあどるふといふ男を毒殺した嫌疑を受けたに付いて、警察長の油を取られたと云ふ話し、きびがよいではないか、と答ふる傍にきゝ居たる老婆が、其ばあどるふといふ男は何處の者と問ふを、笑ひながら何でも東の方に大分離れた所ださうだが、其又後家がめつぱう若くて美しいさうな。それは結構、どうぞや頂戴致したいもの、と交るを打けし、それてはもしや伯爵の名はしやいろッくと云ひはせぬかと老婆の言葉、おゝそれ〳〵そのしやいろッくがもしや毒殺したのではあるまいかと警察の眼で見たさうだが、ねらひははづれておべこべに捻られたとの風聞。婆さんおまへの知り人かと云はれて、いゝへと答へ短かくしたるは、何やら隱したらしいそぶり。のみこめぬと二人の乞食の疑ふを餘談にまぎらして顔そむけたるこれもあやしや。一人の乞食のずいと立つて婆を捕へしもあやしや。

其　六

ぼなといふ者を引き連れて歸りたるうゐるりやむはぶらいとの前に出て、數月前ばあどるぶの家をおとづれて何程かの金をめぐまれたる者こそ手掛りなれと身を乞食にして旅行中、此老婆に運よく

うても一萬二千弗許りと首を傾くる所へ、小使の出す返辭。

御訊問通り甘汞と鹽酸類を合すれば昇汞となりて大毒なり。

御尋ねの如く甘汞と鹽酸類を同時に服すれば腹中にて昇汞を生ずる故に斃死す。官立醫院。

と讀み下して、さてはあの伯爵め怪しいな。

其五

行きし人は追へども歸らず、落る涙は拂へどもつきぬ恨みもあだなり〳〵。ばあどるふの葬式今日と沙汰ありて、うら若き後家のなよ〳〵としたるを助けて、隣家の誰、向ふの誰が差圖に、萬事漸く片附きて愈々何がし上人の讀經、あり難くはあれど極樂か地獄か誰人も知らぬ所に送られたるあはれさ。ましてや毒死との評判、仇も分らず譯もわからず。佛さまはさて置きあの美しいろざりんが胸には妄執の雲晴れやるまい。頰には悲歎の雨、ふつて沸たる御氣の毒なことゝ、鬼はなき世の中、會葬者もいと多きに、しやいろツく伯爵さま警察長のぶらいとさま醫師のぐれんどわあまで加はり給ひしは、せめてもの名譽といはれても何嬉しかるべき。ろざりんは眼をふさぎて口には『あゝめん』と唱へても、心にはあやしやとや喞ちけん。怪しや〳〵と人の噂も無理ならず、此事八方にひろがりて當時の語りぐさとはなりぬ。

御依頼になりし瓶の碎片に附き居り候ふ流動物を撿査致し候ふ處、稀鹽酸『れもなアど』にて更に毒物にては御座なく候ふ。化學分析所。

御依頼になりし散藥撿査致し候ふ處、甘汞十五瓦乳糖十五瓦にて、熱病者に最初用ゐたるは尤も適當にて、當時流行の新療法に相違なく、毫も不都合の物にはなく候。官立醫院。

と讀み終て、さてもふしぎや飲みたるものは二つとも毒ならぬに、ばわどるふの死せしは中毒と三人の醫師の云ひしこそ怪しけれ、吾が夫の仇取つて給はれと泣く程のろざりんが、毒を飼ひしとも思へず。七年以前の原因はさて置き、今の死亡の譯が分らずばと思案せしが、忽ち悟りて何か手紙を認め呼鐘ならして返辭をと云ひ附けて、後又昨日受取りし書付を取り出し見るに、

貴殿大切の重寶それがしの爲めに紛失致され候ふに付いては、毎月百五十弗づゝ必ずそれがしが身を終るまで其償ひとして呈上すべく候ふなり。

伯爵しやいろッく

ばわどるふ様

拙者大切の寶貴殿の爲めに紛失致し候へ共、其償ひとして毎月百五十弗づゝ給はるべき旨御契約下され候ふに付いては、決して爾後寶の事につき紛紜申すまじく候ふ。其爲め一札件の如し。

ばわどるふ

伯爵しやいろッく様

はてさて怪しき契約狀、失ひし寶とは何程は物か知らねど、七年前より毎月百五十弗づゝざッと積

ちやれす。」
一ばあどるふは無財産無職業にて、生活の模樣は困窮とも見えざりし事。
一二月七日といふ日は何か仔細あるべき日なること。
一ばあどるふは自己の故鄕に在りし時の事を少しも口外せざりしが、當地に移り住まざる前に先妻をば何故か離別致し候ふ事。
一伯爵とは主從の如き關係にて、此地に來らざりし以前より其關係はありしと思はるゝこと。
一先妻の行くへ不分明なれども、數月前年老いたる貧女一名はあどるふに逢ひて、遂に幾分かの惠み金を受け立ち去りし事。（恐らくは先妻か）。
一ばあどるふの最初召し使ひたる下婢も、ばあどるふの囈語に『くいッヽりい』とさけびしを三度ほど聞きたる事ありし由なれど『くいッくりい』と云ふ人名地名等は此邊になき事。（恐らくは先妻の名か）。
探り得候ふ所の右の件々により推測する時は、先妻及びくいッくりいといふ者について二月七日は仔細あるべき日にして、差し上げ置き候ふ書面の趣きもあれば、事の原因は七年以前より伯爵に關係して起りたる事と考へられ候ふゆゑ、先妻を尋ね候ふため何處ともなく立出で候ふ。う一ゐるりやむ。

ぶらいとは官舍に歸りて三十分計りの體操に身を疲らせ、葡萄酒三盞に心をやすめ、二皿三皿の食事了りて心地よく寐入りたるぞ素人眼にはふしきなれど、かゝる怪しく入り込みたる事柄を判斷するには空氣も澄み渡り、心氣も冱え〴〵しき夜明方こそよけれと、翌日を心かけての處置、淺からぬ注意と知られたり。鷄しば鳴きて星の影まばらになりゆく頃、冷き水に口をそゝぎ身體を拭きて一杯の珈琲に名殘の夢を洗ひ去り、役所に赴きて端然と椅子に座し、はつきりと兩眼を開けば、卓子の上に數通の文あり。取りて靜かに見るに、

伯爵は吐劑下劑等何の藥餌をも用ゐられず、醫者の出入するをも見かけ申さず。ろざりん方に行きし僕は使の口上足らざりしとて放逐され申候ふ。夜半頃臥床に入らるゝ前に手箱を開閉する音などして、遂に一語を發せられたり、其一語とは即ちぶらいとは馬鹿な奴と云はれしなり。倘伯爵のことに付いては當分歸着致さずに探索致すべき手掛りある故、悅び居り申候ふ。だんきやん。」

ろざりんの悲みは信實にて愈々怪むべき所なく、品行もかね〴〵正直にて堅固なるものに候ふ。下婢は平凡の女子にて、醫師ぐれんどわあは自己の與たる藥を疑はれ候を憤り居り候ふ樣子なれば、是等の人につきては疑ひなく候ふ。差し押へ置きたる書面の趣きもあり、かた〴〵七年以前よりばあどゐふは此地に移り住み候ふよしなれば、愈々疑はしきは遠き原因と存せられ候ふ處、ばあどゐふの故鄕を聞き出し候ふ間、該地へ立越え申し候ふて取り調べ致すべくと出發仕り候ふ。

なれど、尙明らかに伯爵の少しも曇りなき御胸中を伺はんためのみなりしが、今は全く疑ひなし、既に自ら罎中の物を目前飮み給ひて更に變りもあらざれば、疑ひ申す所もなし、いざ御自由に御歸宅あれ、差し押へたるお手箱四ッも直に當方より送りまゐらすべし、と詫ぶれば、疑念晴るればそれまでなり、さらばそれがしは歸らん、と立ち去り行く。跡には怪しむべき人もなきに、ばゐどるふの變死。あら怪しやな。

其四

ちやあれすは手箱を宰領して伯爵の邸に送り返せ。だんきやんは伯爵の邸内に忍び込んで伯爵の擧動に氣を注けろ。伯爵が下劑か吐劑を用ゐて毒を消すかも知れぬ。醫者が出入するかも知れぬ。それッとぶらいとの火急の差圖に二人は颶風の如く立去りぬる跡にて、ろざりんは拘留して置くには及ばぬから歸してやれ、ばゐどるふの死體は三人まで醫者が撿視して毒死と極つた者なら、それでよいから埋葬させるが宜いと命令すれば、畏まつたとうゐるりやむは出て行きかけて振りかへり、是は私しの手柄とさし出す一片の書付、ろくに見もせず『ぽッけッと』に入れ、寫したらうな。さやうです、眞物は油斷させるために返してやりました。それから是は又ちやあれすの手柄と出すものをも受取りて、同じく『ぽッけッと』に入るれば、日もたつぷりと暮れて火點す頃とはなりぬ。

戴きしか。否御使にて給はりぬ。此罎の中の物は何と思ふか。伯爵さまより御使の口上に熱病の人は喉の渇くもの、其渇きを止むる飲物と申されしかば左樣承知したり。そなたは伯爵を疑はぬか。と煽りて見ても變らぬ調子にて、とんでもないこと、貴き伯爵樣を何で疑ひ申すべき、と答へたり。病人は他に飲食したか。他には少しも飲食致さず、此罎の中の物は飲みました。さては醫者の藥の疑はしき丈、此罎の中の物も疑はしと云ふ語の終らぬうち、伯爵は言葉急しく、それがし與へたる此罎の中の物を怪しと云ひ給ふか。さればなり醫者の藥も怪しければ此罎の中の物も疑はしと平氣にて答へながら伯爵の顔色をじッと見れば、伯爵は動氣を抑へて靜かに、ぶらいと殿はたしかに疑はるゝか。素より疑ひます、と云ふを聞くより烈火の如く怒りをなし、飛鳥の如く身を躍らせ。ぶらいとの手に持ちたる罎を取るより早く栓を拔き、仰向けにしてどく／＼と飲み下し、罎をうしろの壁に打ちつけ、それがし此世に生れてより非道をせしことさらに無く、正理に循ひ義に進み慈善を爲せしに、はからずも容易ならぬ謀殺につきて、足下よりかゝる恥辱を受くること、憤怒まことに限りなし、疑ひ給ひし罎中のものをそれがし此の如く飲み干したれども仔細なし、是にても尙それがしを疑はるゝといふ上は、相手にとりて不足なけれど名刺を足下にたゝきつけ直に決鬪致すべしと、威權烈しく云ひ立つれば、ぶらいと壇を飛び下りて身を平蜘蛛の如くなし、伯爵殿下ゆるし給へ、それがしも亦眼あり、などて正邪を知らざらん、怒らせ申し奉りしは恐れ入りたること

ゆるがせならず、吾が夫はくれんどわあの與へたる藥の外には誰の藥も飲まざれば。さては拙者を疑ひ給ふか。如何にも仰せの通りなれど疑ふまでなり、必ずと申すにはあらず、元より女のことなれば醫藥の道は知らざれど、若しやそなたの誤りかと。それ程までに疑はれては醫者の一分立ち申さず、拙者の疑ひはさて置きて、いざまづ拙者の藥をば試驗あるやう署長に御願ひ申します、と怒りをなして云ひ立つれば、そなたの與へし藥といふは是なるやとぶらいとの出す罎を見て、忽ち急に頭を打ちふり、否々、はてさて怪しき其罎かな、拙者の與へし藥といふは紙に包みし散藥なり。さらば是か。如何にもそれなり、化學師に仰せて分析なさしめ、醫師に糺して拙者の處方の當否を篤と御合點あれ、それにしても怪しきは今の罎。だまれ其をば問ひはせぬ。そなたに用は濟みたれば勝手に歸れ。歸れとあれば歸りもしませうが、もはや拙者に疑ひは御座らぬか。疑ひは解けねど訊問は濟みたれば歸れと云はれて是非に及ばず、不平顏して立ちさるを見送りて、ぶらいとはろざりんに向ひ、此罎は見覺えあるべし。如何にもそれは伯爵より吾が夫へ病氣見舞とて給はりたるもの。そなが手箱に入れてありし此百五十弗は何とせしものぞ。それも同じく伯爵より賜はりしもの。何ゆゑ。病氣見舞に。病氣見舞とて是程の大金を貰ひ受くること世の常にはあらず。素より世の常にはあらず、伯爵さまは人も知りたる非常の慈善家、且は一隱再應辭退したれど許し給はず、強ひて與へられしゆゑ、御厚意背くこともなしと受取り置きしまでなり。此大金と此罎は伯爵より直に

あれどあだめいて猥らなるにはあらず、泣き腫らしたる瞼の重げなるにも其行ひのかる〳〵しからぬは見えたり。ぐれんどわあは容貌端正にて人を恐れず、天をも恐れず、吾は自ら信ずる所を恃むといふ風情。伯爵は貴族育ちの鷹揚なる中に深き思慮分別を養ひ得たるといふべき所の見ゆる人品なり。ぶらいとは先づ醫者に向ひ、何とてそなたは、そなたの預りし病人の病死に證明状を作るを拒みしや、必ず其仔細あるべしとは存ずれども、ばあどるふ一家の者の言葉によれば、そなたの藥を飲むとひとしくばあどるふは苦しみ出して遂にはかなくなりたりと言へば、まづこれを云ひわけすべしと問ふに、ぐれんとわあは拙者の用ゐたる藥は決してばあどるふの死を致すべきものにてはなく、又ばあどるふの病も左程急に死すべきものにもあらざるに、心得難き頓死ゆゑ、證明状を作らざりしが、拙者の與へたる藥をお疑ひあらばろざりん殿の家には尚餘りのあるべければ、それを化學師になり醫師になり試驗致させて見らるべし。さあそれにて御身は明白なれど、只今心得難き頓死と云はれしは何の意味。されば萬一中毒なりやと疑へども。疑はれしな。如何にも。さてはそなたの與へし藥の中毒。いや怪しからぬこと、恐らくは他人の與へし物の中毒ならんと疑ふまでなり。むゝ毒殺したる者あらんかと疑はれしな。誠に仰せの通りなれども、疑ふまでにて必ずと申すにはあらず、心得難き頓死とは即ち是ゆゑ申せしなり、と此問答の間伯爵は彫刻像の如く身動きもせず、ろざりんは赤くなり青くなり遂に柳眉さかだて星眼を睜きて、吾が夫を毒殺と聞いては

て來たのかといへば詮方なく、はい私しが賴んでとおろ〳〵泣き。よし〳〵そなたに罪はない、そして伯爵もそなたが喚んで來たのか、其時の模樣を委しく正直に話しさへすれば、それで其方は用濟みなのだとやさしきに勢ついて、いゝえ伯爵樣は私しの呼んだのではありませんが、はからずお出になり、ばあどるふ樣の熱病となられたを見てびつくりなすッた御樣子、しきりに奥樣とお醫者樣に御容體をお聞きなすつて居らしつたが、お醫者樣のお歸りになつた跡で、熱病の譫語は人に聞こえて外聞のよくないこともあるものなれば、よく注意なすッて外へ漏れぬやうなさいと云つてお歸りになりましたが、日暮れ方にお使にて又わざ〳〵お見舞を下されました、誠に御慈悲深いよいお方です、といへば、小首かたぶけ暫らく思案せしが、はたと手を拍ちて、どんな譫語を云つたかと問へば、りうしは笑ひながら、譫語ですから分りませんが、『くいッくりい』といふ丈けは聞きとれました。

其　三

さあ拘引狀は出來た。醫師ぐれんどわあ後家ろざりん伯爵しやいろッくを呼んで來い。容易ならぬ謀殺の嫌疑、されど伯爵は貴族院の議員にもならんとする人、鄭重に扱ふべし、疑はしき品物はみな持ち來れと署長の下知に、暫くして三人とも巡査に引出されたるを見るに、ろざりんは美しくは

おどろふは其夜に限り寢なかッたのだと問はれて、何故かは存ませねど、私しは三年許り以前から此家に使はれて居りますが、たしか去年もおとゝしも、二月七日の夜は、ばおどろふ様のよく御寢なッたことはなかつたやうです、それから段々と熱は強くなりますし、御醫者様と伯爵様の御出になつた頃は、色々の譫語をおッしやりますし、夜へかけても一層はげしくなりましたが、今朝になつて御藥をあがると直ぐにたつての苦しみ、とう〳〵情深い旦那様に御別れ申すことゝなり、奥様も狂亂なさる程のおなげきのあまり、あの醫者の藥を飲まれずば斯うはなられまいと獨り言なすッたが運わるくぐれんどわあの耳に入つて、病死の證明狀作ることはいやでご坐るとの言ひ草、ぐれんどわあの藥飲んで亡くなられたと云はれては、名譽にも拘はるなれば、藥の盛りやうの善かッたか惡かつたかは、外の醫者どもに問ひ糺してご覽なすッて、得と御合點の行つた上でならでは證明狀は作りませぬ、との言葉も尤もにはあれど、奥様とてわる氣で云ふたではなし、と云ひ譯しても首振つて頑固な同し挨拶、世智賢き女でさへ連添ふ夫の死に別れには顚倒するならひ、まして御年も若いに醫者の片意地、かなしみの中に苦勞の調合、あんまりなお醫者さまと私しらまで憎うてなりませぬ、と涙ぐんでの少女の返答。噓らしくはなけれど、ぶらいとはぬけ目なく、其憎い醫者は誰れが賴んで來たと問へば、りうしは眞青になりがた〳〵慄て言葉なき樣子を、じッと見ながら少しも怖いことはない、正直の少女は神も護れば人も憐れむ、なんでも正直に限るぞや、其方が賴ん

く瓦斯の光りも屆かぬところに落ちて居た、奇麗な『ないふ』を拾つて屆けなかつた計で御坐ります。それも唯今さしあげまする。と泣顔してのりうしが申し譯は、署長よりも尊き眞心に責められての白狀、誠に可愛きものなり。いや〳〵そちが心の正直なは其言葉でも分つて居る程に、も一ツ正直に御上の御用を勤めたら御褒美の出ることであらう、とぶらいとのすかすを聞いてのこ〳〵と頭をあげ、御用とは何で御坐りますか、お買物なら棒先は切りませぬ、御臺所の炙燒なら摘み喰ひも致しませぬ、とまじめに云ひたるは慾にひかるゝ習ひとてをかしきを忍び、そんな事ではないが、ばあどるふが病氣になつた時からの有樣を正直に話しさへすれば宜いのだといへば、そんな事で御褒美が出ますか、と問ふけゞん顏。あゝ私しが惡かツた、お前は正直に話してくれるに相違ないものを、御褒美を後にすることもなかつた、と光るものをちやら〳〵と鼻の先につきつくればもぢ〳〵しながら、一昨日の晩。これりうし二月七日だな。はいその二月七日の夜、ばあどると樣は聖書をお讀みなすツたり、淚を流して祈禱なすつたりして夜のふけるまでもお休みなさらぬを、奧樣が寒いに夜ふかしはお年寄の御身に毒、お休みあそばせとお止なさるをも構はず、貴樣もりうしも寢るが宜い、おれは今夜はまだ寢られぬからとのことで、仕方なく奧樣も私しも臥りました、其あと石炭もつき暖爐の火も絕え、石造の家のうら寒きに、夜の明くる時分とろ〳〵となすつたやら、お眼がさむるや否や御顏の色も大分わるく、一昨日の晝頃は大層熱が出ましてと饒舌り立てる中、何故ば

み込めぬは醫者のそぶり。とちやあれすの云ひ狀。いづれをいづれとも別ちがたき處へ、思案に首をかしげてもどりしだんきやんが、さてもふしぎやばあとるふといふ男、生れてから今日の先程までも遂に一度口論した事なく、冗頭たゝかれても御手は御痛みなさらぬかといふやうな結構な性質、賭博もせず酒も飲まず、恨みを受くる筈もなきたしかな品行、殊更身體も丈夫にて、かねて行く道も昨日今日とは思はざりし、と話すを聞いて署長は暫時考へしが、ろざりんは何歳ぞ、何今を盛りの二十三歳。ばあどるふは、はて僅に殘る山の端の月影は、五十八歳とや。二人の婚禮は去年の春、女の身元は伯爵しやいろツく。平生交際するものは、なにばあどるふは交際ぎらひにて、日曜毎に會堂へ行く計りか。伯爵はたゞ月に一二度往復するか、年齢は三十七歳か、容貌は莊嚴、辯舌はさはやかに、むゝさう頃日來たか、なに熱病になつた日はからず來たといふか、して使も來たか、何の用だ、むゝ其使は直接にろざりんに逢つて歸つたのか、よし〳〵それてよし、ばあとるふの家に下婢は居ないか、りうしといふのが居るとか、よし〳〵それをろざりんに知れぬやうに拘引して來い。といふ命令、探索の爲めとは云ひながら警察署の下婢とはならぬものを迷惑なことなり。

其 二

おゝ是おゆるしなされて下さりませ、惡いことはたツた一度、買物に出た道の夕暮がた、燈臺下暗

あやしやな

其一

死にました死にました。あの朴訥爺のばあどるふは死にました。あの美しい若い妻を持つて居たばあどるふは死にました。其死に方が少し怪いといふ噂、一昨日の晩から熱病をやんで早くも今日の往生、めでたくもない苦しみやう、醫者もかくまでとは思はなかツた人の命のもろさ。露ちりかゝるろざりんの花の顔も萎れて、泣く〳〵野邊の送りといふ段取りになつて、醫者のぐれんどわあが病死の證明狀を作らぬといふ騒ぎ、どうやう譯のありさうな事。と探偵だんきやんの告ぐるを聞いて、油斷のならぬ恐ろしの世の中、そなたは尙も氣を付けろ、うゐるりやむも出てゆけ、ちやあれすも聞糺して來いと、署長のへんりいぶらいとの差圖に、心得たりと走り去りしが、やがてうゐるそんは歸り來て、醫者は三里ほど隔たりし近在に住み、夫婦暮しの信實者、村中にて善い人との評判高き男なれば疑ふべき方もなし。若き妻こそ心得難し。とさゝやく横合より、いや〳〵あの美しい女、面計りにてはわらぬぞかし。亡き夫の傍に坐りて、一心に祈禱する聲も枯るゝまで惜まぬ涙、立ち聞きする身さへ悲しさにつれられて、不信神の我ながら口の中で『あゝめん』と唱へたるに、呑

蹄は地につかで虚空の中を飛ぶにひとしく、鞍上人なく鞍下馬なく兩馬たゞちに龍と化して登天するかと思ふ間に、勝負の知らせの太鼓響きて、たゞ一二歩の差よりダンカン勝と定まりぬ。先刻より樣子を見居たりし傳五は切りに跳り上りてマルスの名をば叫び居しがスチヴンソンの負けとなりしに勃然として不平に堪へず、齒を咬み鳴らし怒るところへ、濃き海老色の天鵞絨に花唐草の模樣見ゆる服に華美なる飾りの着けるを被て、羽毛見事なる帽子冠れる若き西洋婦人の來るを、スチヴンソンの妻なりと昨夜招ばれて知つたれば、いと慇懃に挨拶するに、碧く圓に大なる愛らしき眼に涙を浮めて、辛くも用ひ得る日本語に、汝、ダンカンに勝つ好しい、能く勝つ妾御禮します、とおろ〳〵聲して云ひかくるは何國も同じ人情にて、夫の負けし口惜さより仕返しをして貰ひたきなるべしと傳五大きに受け合ひ込みぬ。傳五は見事恨みを返して、彼のダンカンに打勝ちければ、スチヴンソンより千圓を受け、其妻よりは三百圓を得て、末は知らねど一日だけはまづ有福の男となりぬ。

其七

如何なる仔細を根にしてかスチヴンソンとダンカンとは同國人にてありながら互ひに好からぬ仲なりしが、或會合に馬のことより双方の高慢端無く衝突して、彼も募れば我も萎まず、遂に競馬を試みて勝負をつけむといふに及び、面白半分彌次馬の其は好からむと囃すもあり、我等も一番出馬せんと我馬自慢の男どもの好き機として乗出すもあり、我は今よりダンカン氏の方に乗つて百弗賭けむが敵手の方に乘つて百弗賭くべき人はあらざるや、いや我こそはスチヴンソン氏の方に乘らめと賭を仕初むるもありて、此事たちまち大袈裟となり、いよ〳〵其日となるまでには番數十番以上と定まり、居留地各國人はもとより横濱一躰指折りかぞへて其日の至るを待ち設けぬ。

其日朝より人往來して、其場午には客充塞なし、一番終れば喝采拍手の聲天地をも撼かすごとく、一番初まれば風なきに塵跳り火無きに烟立つて蹄の音の響くところ夜叉神將等が雲に乘じて飛ぶが如し。一番二番と次第に濟みて落馬の耻辱を取るもあり、勝つて揚々たるもありしが、第五番目は衆人の待ちに待ちたる二人勝負にて即ちダンカン、スチヴンソンの、前者はジュピターといへる馬、後者はマルスと呼べる馬もて互ひに今日こそ思ひ知らせんとの意氣込み強く、一ト鞭呉れて合圖と共に駈け出だせしが、馬はいづれも逸物なり、手當は十分屆きたり、乘者は馬に馴染たり、唯見る

となら馬にかけては自分より兄と長吉もいふた彼樣な男を欲しいと胸に浮めたれど居所までは聞き置かざりしに是非無く他のものを抱へしが、今聞くところ面白き汝とダンカン氏との爭ひ、我後押しをするほどに是非とも勝負を爭ひ見よ、勝たば汝に得たる金の半分を與へて汝をば其上我は高く傭はむ、負くるともまた汝より一文半錢出させはせじ、ダンカン氏とは我も自ら勝負をなして勝たねばならぬことゝなり居る時なれば、先方の云ふまゝ千弗にても二千弗にてもの賭を厭とは逡巡せじ、如何に傳五め面白いと汝はおもふ勇氣なきや、男兒とナイフは敵に値つて價値の定まるものにはあらぬ歟、との意を傳へて煽動すれば、話しを聞き〳〵にこり〳〵と段々笑を湛へ來し傳五は堪へず兩手を振つて、いよー唐人の親玉ア、ゑらいッ、素敵だッ、しめたぞ、もう斯樣なつては此方のものだ、遣つッけて呉れるぞ、此馬鹿ダンカン、記臆えて居やがれ其日の競馬に汝の馬の面には鞭を蛇度喰はす、蹄の砂を其高慢した口に蹴込んで呉れずには居ぬ、と狂ひ立つて悅び勇むに、通辭をなし居し彼髯男も、愉快々々〳〵と犯語きて其旨ダンカンといへるに云ひ次げば彼はよ〳〵激して、スチヴンソンを恨み深き眼に一睨し、鍛工に對つて、諾、二千弗互ひに賭けむ、其時汝が沓の惡きを悟つて泣くとも遲いぞと猶毒口を逞しくし、双方意趣ある競馬の約束、互ひに牙を嚙み〳〵定めぬ。

とをば繰り返すに過ぎねば、左らでも怒れるもの丶常とて次第に順序無くなりて亂る丶言語の後先わからず辻褄合ず傳五の饒舌るは到底悉皆曉り得まじきも事の道理は解せしと見えて、傳五が袖を無遠慮に引き、唐人言葉と人の云ふ手爾波の脫けし日本語にて、我は山手の百一番に住めるスチヴンソンといふものなるが、眞實汝が意匠に出でし其新案の鐵沓を好しと汝の云ひ張るならば我好きことを汝に勸めん、幸ひ我に用なきところの駿馬一匹あるをもつて其を汝に借さむほどに其鐵沓を蹄に貼け、やがてあるべき競馬に出て、汝の沓を惡しといふ人と勝負を試みよ、何百弗でも何千弗でも賭金は我出して得させむ、汝は我が顏知らぬならむが我は汝を能く知り居れり、我が馬丁の長吉を尋ねて我家に來りし時厩の傍の日當りよきところに敷ける藁の上に二人寢はらばひて馬の話しをなし居し汝を我は小窓の側に居て圖らず談話に耳を假せしま丶に確乎と覺えたり、其時汝は長吉に、汝は好い主を持つて樂に暮らして居るが馬にかけては汝なぞより餘計の苦勞をした我の今鍛冶をして貧乏に世を渡つて居る馬鹿々々しさは中々堪つたもので無いが、是も種々馬を窘め、欺されるだけ人を欺して惡馬悍馬を賣りつけた罰かとおもへば仕方が無い、もう關東では我の手から二歳一匹買ふものも無いほど我の酷いといふ噂が立つて仕舞ふたで伯樂では今飯が食へぬ、と大聲で話して居たを悉皆我は記臆えて居る、其夜傳五といふ名をも長吉からして聞て置いた、つる近い頃長吉めが女と逃げたで馬の世話するもの丶一人足らぬやうなりし際傳五といふ名を思ひ出して同じこ

云ひ張り、鍛工は、猶さら顔を火にして、普通式のもの作らずして精巧物つくりて遣りたるを詫ぶべき道理あることとなし、いつその事に一文貫はず工手間を全々損するにせよ此唐人めに謝罪らせんと腕を扼つて吐く氣焰、中々もつて互ひに屈せず讓ねば、間に立つたる男は定めし迷惑する歟とおもひの外、これまた笑を頰に浮めて、互ひの言葉の語氣までを其儘寫して勢ひ強く云ひ聞かすに、通辭の男は密に驚き、おど〳〵すれども何ともし難く、口を噤みて空しく心を傷め居るのみなれば、鍛工はます〳〵怒りを發し、どうでも此沓惡からずと口より沫を飛ばして論じ、西洋人は此樣な馬鹿氣たる鐵沓の役に立つかと足ぶみしながら罵り騷ぎて、摑みもかゝらむまで双方怒り哮るを、所存あやしき髯髯男は然も面白氣に取り次ぐところへ、不圖來かゝりし又一人の英國人らしきが喞みし煙管を左の手にしてつか〳〵つかと歩み寄ぬ。

其六

年まだ若く丈高くしていと快活なる風采の紳士の進み來りて近づくをば認むるや否ダンカンといへる男は不快の色を面に上ぼせながら、同伴の一人の男と共に言葉は無くて默禮しけるが、傳五は其等に頓着も無く口を極めて聲高に唐人め馬鹿め阿呆め解らずや奴と罵り呼ぶこと切なれば、日本語も稍知れると見ゆる新に來りし外國人はほく〳〵笑を含みつゝ、耳を傾け聞き居ける。おなじこ

ねば蟲が癒えぬ、べらぼうめ羈を切つた暴馬でも唯一ト打ちに打ち倒す我の腕には骨があるは、生小賢しい此唐人め、おい、旦那確り頼みますぜ、此奴等に負けて堪るものですか。

其五

一々聞いて見れば客にも主人にも道理はありながら互ひに遺失なきにあらず、通辯のもの丶有躰に取り次がざるが先づ第一に不都合なれど此とて配慮し過してのことなれば強く咎むべくも無し、注文を委細にせざりし客の粗漏より事起りしといへば客のみ悪かりしやう聞こゆるも、常躰ならぬものを作るに假令ば親切まりとはいへ一應ことわらざりしは鍛工の無念なれば、彼是ともに我を張つて他を責め合はむには文句の絶ゆること無かるべし、と早くも解したる鬚髯だらけの男は、西洋人に對ひては、此鐵沓を一概に悪きものと云ひなしたるを鍛工に詫びさせ、鍛工に對ひては自分の考案より普通式のもの作らざりしを客に詫びさせて扨其後に、客は定めの額の半分を與へ、鍛工も定めの額の半分を受取り、一方は金子半分の損一方は勞力半分の損と諦めさせむと双方に説きすゝむるに、人の情はよしや其裁判公平なりとも其には服したがらで、客は、他の勞力を偸むでも無ければ定めの金額は我が注文の粗漏なりし過失として拂ひ渡しは勿論爲すべし、されど不法の鐵沓を悪しといひしは過失ならねば詫びなどすべき道理なし、全く悪き鐵沓なり、論にもならぬ鐵沓なりと

らぬものではありはすまいし、ざらに世間で用ゐて居る蹄鐵ならば作るのに造作もなければ面倒もないを、良い物つくれと特別に頼まれたゝけ骨を折つて馬の丈まで其時尋ね、此樣な沓作りましたが、蹄にぴつたり粘くところより地に着く面の方に向つて馬の丈から割り出した割合だけにぐるりと沓の肉を殺いだが此方の親切、つまり此沓全躰の底の面をば上の面より小さくして、此方では苦勞を餘計にして居るを彼方では根が馬鹿唐人だけ不可と見て愚圖愚圖云ふ馬鹿さの程の涯が知れぬ、此方で先方の氣に入らぬもの作つたが惡ければ先方で詳しく仕樣書を此方に出さぬが第一惡い、たゞ精好品といつた故で此方の精好とおもふものを作つて遣つて、不思議はあるまい、旦那は何か知らぬ方だが英語がベラ〳〵饒舌れるなら此傳五郎の理屈だけを何樣か唐人めに云つて、グツとも云はせず謝罪らして下さいましな、頼みます、餘事なら知らず舊私は奥州一圓駈けまはつて三春の馬市福岡の牛鬪せ、何年でも顏を突出して、跳つ返りの伯樂傳五と少しは知られた亂暴者、國に居られぬ仔細あつて流れ渡つた末が此の濱に留まつて商賣も變へ、面白くも無い鐵鎚の柄を把捉へて居るものゝ、博奕は下手で壺皿を見徹す眼玉は持つて居ぬが、嘶く聲で物蔭の駒の齡なら毛色なら寸分違はず言ひ中てる位のことは慰みにする、それを小癪な唐人めらに馬のことから云ひ込められては默つて大人しくはまあできませぬ、惡いといはれる譯は無い此鐵沓は如何あつても惡いと云はせて其儘置けねば、氣に入らぬのは其方の勝手、と勝手にさせも仕樣けれど、工錢を拂はせ謝罪らせ

が過般此通辭を連れ、私に馬の蹄鐵を作つて呉れと頼みに來まして、隨分仕事に念を入れ精々味をよく製作へろ、實は大事の競馬に臨んで居ることゆゑに折入つて汝に骨を折つて貰ひたい、首尾よく勝てば工事の賃の他に褒美も屹度遣らうし、工銀の額も望み次第に品物引換へで渡さうほどに、期日を違へるな、手拔きをすな、何でも彼でも精好物をつくつて呉れ、粗惡物を作つて呉れるな、此は手付といふでは無いが前祝に快く一杯飲んで呉るゝがよいと錢まで呉れての囑託ゆゑ私も實は頼まれ甲斐のあるやうにして遣りたいと、職人だけの意地を立てゝ製作へました此蹄鐵、憚りながら難を打たれるところは少しも無いものを、見るより早く無法矢鱈に不都合千萬滅茶なものを作りをつたと頭から蔑視しつけての馬鹿怒り、餘りといへば腹の立つに一言二言云ひ返せば、馬鹿め、馬をば見たことあるか、此樣な蹄鐵役に立つ歟、と人の好意で殊さらに勾配つけて遣つたものを聞き分けも無く一途に罵り、散々毒口叩いた揚句工銀も拂はず去らうとする圖太い仕打に堪忍ならず、賣言葉には買言葉、先方が先方なら此方も此方と喧嘩面にもなりましたが、一躰私が無理かまた唐人めらが無理でせうか、文句を云はずと知れたこと、事躰最初に誂へる時仕樣書でも渡してある其に背いて製作へたとでもいふなら成程私が惡いか知らねど仕樣書の別段委しいものもなし、唯蹄面の大きさだけを圖にして持つて來たばかりで、精好物作れ精好物作れと私に任せて頼むだのゆゑ、此方も精好物作つて遣らうと自分に覺えのある式に態々作つて呉れた次第、ナニ普通躰の蹄鐵を知

定めの日限の今日來て見れば、不都合極まる勾配つきたる沓を作りて得意顔なし居るのみか其不都合を責むればこれにて不都合無しなど、無益の强情を張つて謝罪さへせず、我はスチヴンソンといへる紳士を馬のことよりして正面の敵となし居るなれば是非に彼には勝たねばならず、一千弗の賭金も些少のこととなり又此鍛冶に拂はんといひし金員も極めて些少の事なれど、彼に負くるは心外なるに餘日も少き今日となりて如是異形の沓を作りて其上これにて結構なりなんど、我に抵抗なし、我を罵詈なし嘲弄なして尙工銀を獲んとする故日本紳士の御手前も耻かしきまで取るに足らざるものを敵手に怒るに及びしが、然までに深きことにもあらねば別に貴下を煩はすにはあたらず、工銀だけを仕拂ひて沓は新に他にて作らすべし、御親切は忝なしといひつゝ衣嚢に手をさし入れて金子を出さんとするところを、少時と押へて、待ち玉へ、足下の言はるゝ如くならば、鍛冶は新に不都合無き沓を作りて其後にこそ足下より定めの金を得べき道理はあれ、今たゞ足下より工銀を受取りてよき仔細なし、と云ひつゝ首を鍛工の方に回して、鍛冶屋、汝の云ふところを一應我に聞かすがよい、取るべき錢なら此唐人を謝罪らした上必ず我が取つて遣るは。

其　四

鍛工は上眼に對手の英人を一睨み睨んで、仔細も五細もありはしませぬ、ダンカンといふ此唐人め

其　三

先づ〳〵少時怒りを鎭めて能く此鍛工の言ふところを試みに聞き玉はずや、我は別段關係のなきものなれども通りかゝりて此場の光景を見るところ、通辯の者十分に足下等の意を通ぜずして、鍛工が意をもまた足下等に通ぜざれば、互ひの思はく明瞭ならで、自然面白からざるやうに成り行くさまを見るに見かねて、餘計の事にはあるなれど我双方の間に入り聊か口をきくべく思へば、まづ待ち玉へ惡くはせじ、妄りに怒て紳士の躰面を傷つけ玉ふことなかれ、と自在に英語をもて告ぐる人品と云ひ道理ある其の言葉と云ひ、無下に斥くべきにあらねば、最初よりして温和の容貌せる一人は怒れる一人を推しなだめて、兎に角に此の紳士の言葉に從はむかた然るべしと、いふに一人も面を和らげ、さらば紳士に我が意を告げむ、もとより些々たることながら、一躰最初はかゝる譯なり、我が同國人仲間に於て各自自己が持馬の自慢よりして競馬をなさむと去る日の會合より事起り、今は其の事洽く知れて亞米利加佛蘭西獨逸等の各國紳士の此の横濱にあるものまでも馬を有てるは其の日の競馬に加はらむと云ひ込み來りて名譽ある競馬の會は殆んど成り立ち、人皆指を屈めて其日の至るを待ち受け、貴女等も噂し合ふに及びたるところ、我馬の沓意に滿たねば此鍛冶に蹄鐵作らせんとて注文をなし、且又細工を精く爲せんため普通を超えたる工料を與ふる筈にまで約束せしに、

へ様の悪くて粗忽の下圖を遣したをば棚にあげ置き、此方ばかりを鍛冶一ト通りも知らぬもののやうに云ふとは承知ができぬ、三日や四日の手間賃を貧乏したとて無理無躰に欲しがるといふことは無いが、馬を見たことありますかの、馬は駈けるものですのと漸く饒舌れる日本語で我を嘲弄しくさつた奴の錢は取らずに置かぬ、何の毛唐人め、奥州生れの乃公だは、馬は狗より易く見て、九歳十歳から翫弄物にして居るものを捉らへて馬の講釋、はゞかりながら御臍が茶だ、此鐵沓の寸法が其方の注文したよりも大きいとかまた小さいとかなら此方が悪くもあらうけれど蹄面だけに出來した上は此方に五分も過失は無い、端に勾配をつけやうが又つけまいが其れは互ひに云はなかつたが互ひの手脱け、つけたが可い歟つけぬがよい歟、其方は勾配なしがよいといへば此方は勾配ありがよいと云ふ、何方がよいかまだ兒童の汝等に何で分るもの歟、折角好いが上にも好かれと我が作つて呉れた沓が氣に入らないなら置て行け、手間賃は汝拂つて行け、此馬鹿唐人、卑怯唐人、人の手間をば潰した上に悪名つけて行かうとは圖太い奴め、冤すもの歟、まご／＼すると擲き折くぞと罵るに、通辭は中に入りし身の不祥と、彼方此方の言葉を互ひに優しく取りなして、無事に収めんとするほどに鍛冶屋が言葉をも其まゝは取りつがず西洋人が言葉をも其まゝは取りつがねば双方の意の尚通ぜず、此は彼方の怒色を見、彼方は此の怒色を見て虚空に腹立ち合ひ、末は打ち合ひなども仕兼ねぬ勢なれば、人を掻き分け掻き分けて洋服せる彼大男は彼方此方の中に入りぬ。

近づくまゝに何事かと見れば、簷低き家の前に立ち列びたる二人の英國人と其の通辯とおぼしきものとの三人を敵手に、主人と見ゆる大男が片肌ぬぎて赤銅色の胸をつき出し臂を怒らせ、圓の眼に火炎だゝせて云ひ爭ひ罵り叫ぶを、隣家の者らしきは切りに宥め制し、野次馬らしきは煽動喚き居る樣なり。外國人を見さへすれば頭を下げて利を得んとするは横濱あたりの賤しきものゝ風習なるに、何にか憤つて縮れ髮の頭を昂げ、嘴を尖らせ唾を飛ばせ、耳朶までを眞紅にして爭ひ哮る歟珍らしやと猶よく光景を伺ふに、屋の內の土間を照らせる吊洋燈の夜仕事のためと見えて貧家の割合にはいと大きく明らかなる其光りを受けて立てる一人の西洋人は同伴の一人の平穩なる顏付せるに引換へて激昂なせる氣色にて、汝約束をば忘れて此樣なもの製りしため我は千弗ばかりの損を受くるのみかは名譽をも失ふまでに至るか知れず、惡きことをばなせしが上に我を罵るとは怪しからず、汝財產あるものならば汝に對ひて償金を求め取るべき道理あれど敵手にするに足らざればこそ免して吳るゝを倘我に工銀をば求むるとは不屆千萬なる奴なり、知らずば仕樣をよく聞いて其後作るがよきものを、早合點に合點して如是物を作り出したればとて何の益にか立つことぞ、馬鹿め、白痴め、道理知らずめ、汝のために又これより急に鍛治屋に賴み込みて普通の賃より高き賃を拂ふてなりと明後日の朝七時までには新に作らせねばならず、ゑゝ、馬鹿ものめ、と地を蹴つて怒れば通辯はよき程に引繕ひて鍛治屋に云へど、此方も敵手の樣子を見て取り、中々心の角を丸めず、其方の誂

蹄鐵

其一

日の出づるところの此の御國を今日立つて、浪の彼方の雲の下なる西の邦へと行くものあるを、横濱の波止場に送りたる男あり。やがて定めの時刻に船は纜を解きて出づれば、名殘は流石に惜みあへねど、見る〱互に遠ざかりて、間も隔たり目も及ばざるやうになり、陸に殘れる人の帽を振り、水上を行く者の手巾を振りて招きあひしも、漸く一人減り二人減り、彼方は船室に入り、此方は家路に就きて、次第に散り〱になりけるが、彼男もまた歸るさの途、杖打振り〱稅關の傍より本町通り、それより彼處此處を經て、只有る寂びたる小巷に入りけるに、奧州訛りのあるやうなる聲して極めて強き語氣にべらぼうめゑ、べ、べ、べらぼうな、二本松の傳五郎だぞ、鍛冶屋にこそはなつて居れ、唐人めらに屆られる男見ぢやねえは、笑はせると、何かは知らず怒鳴る濁聲が聞こえぬ。

其二

せしとの御尋ねに顔赤くして生れ付と申しければ今まで知らざりし程の事別段醜くからず、美人も必らず何處ぞに少しは美ならざる所あり、浮世に完全の者はなしと此間聞いたが眞實にさうぢや、ナニ少しも耻る事はないと仰せありて御寵愛少しも變らざりし。其後また共寐の閨の中蘭燈幽かなる時、ア　むづ痒しと女が自ら媚めかしき眉のあたり掻き撫でたる白き指の腹に眉毛四五本拔けて付たるを殿は目早く見付給ひしより其時は何も仰せられず、後にて糺させられしに三太夫探索して色を變へて歸り來り段々素性をしらべしに三代前に怪しき筋ありと申し上ぐれば終に御暇となり、御手當を丸に儲けて女は初の男と世帶を持ちける。其譯を聞くに、黒き筆の毛少し鋏み取りて眉の間に植置き前々よりの仕掛けに癩病と疑はせ、急に退きし手管のよし。かゝる事色々工夫せば新規の妙手いくらもあるべく候。右二十七ヶ條あらましを記し申し候。

凡ての心得は初めにも書記せし通り、男の自惚一ッを種子にする事に候へば自惚の行方を御考へなされ候はゞ幾らも御自分にて御發明出來べく候、また御前樣御自分に自惚萠し候はゞ手管一つも役たゝずとおぼしめさるべく候。ゆめ／＼此傳授御他言あるまじく高が知れたる當世のにやけ才子ふやけ才子十分にかきのめし、さん／＼に馬鹿になさるべく候。めでたくかしく。

丹波太郎右衛門

蘆野花子さま

手柄して早く歸つて無事な御顏見せて下されと泣きの涙に送り別るれば、男は齒ぎしり嚙みて、アヽあり難き貞女の心ざし百年忘れ難し身を粉に碎きても一生懸命出來るだけの事して、昔時に勝る榮華を此可愛い者にさせなくては南無觀世音我男と生れし甲斐なしと誓ひを立男泣して遠國へも行ぞかし。箇樣の手管は罪極めて深けれども罪をほろぼす道理もありて却つて案外嘘より實が出て男を出世さする事あり。但金目の物は二月三月前より外へこかして藏し置くなり。第三十五は小便とて、是は昔時町家の娘など小面の剝げたるを作り立させ、御大名の目に止るやう仕掛、支度金澤山取りて御妾奉公致させ、殿樣添寐の曉寐小便したゝかすれば何ほど色好みの大名も驚きて御下となるなれど、さりとて支度金返せと云ひ玉ふ事もなく、又其惡き風評をさるゝを恥玉へば何の仔細なく其まゝ別離るゝなり。當時賣買の其まゝ流れとなるを小便といふも是より出でたる事にて、これ男に我身を罪の無き惡き者に思はせて直に退く企、一番の酷らしい手、相對密夫筒もたせと變らざる惡事に候へどもまさかに當世小便は拙し。近き頃ある美しき女然る錢なし男と深く契りけるが何某華族樣其女を見て是非に權妻にとの望み申込まるれば父母是をよろこび、御家令の三太夫もろとも頻りに娘に說すゝめければ女餘儀なく、濟まぬ心の中にも暫し清む月の雫花の露に顏を作り髮を整へ、日頃より百倍美しくなつて參上するに殿樣御悅喜淺からず、日に增し馴れ睦み玉ひしが或時冬の夜の酒宴に御流れ頂戴せし女の手の指つきの怪しく屈まりたるを見付られ、其指は如何に

には是非とも準備あるべきにて、田舍に頑固なる親父又は意地惡き繼母或は行方知れぬ放蕩の兄ありなどゝ前々より吹込置くなり。昔時より遊女など白痴の大盡の金を貪る時にも此案山子にせかせて財布を搾りし事あり。此等の案山子素より有るにあらずとも名ばかりにても調製置く時は愈々男と切れ難き時分に一茶番ありてとゞの詰り、不本意ながら親兄などの心を背き難くて辛きは山々なれど別離るといふ風に涙仕掛けて退くべし。大抵の男是非もなしとあきらめて仕舞ひ、恨みは案山子に向つて我身は夏く思はるゝ者なれば行末又其男立身したる時乘り込むは造作もなき事なり。第三十四は器量ごかしといふ手にて中々名手なり。假令ば段々と落魄はてゝ互に悲しくなり行き、地獄の靑鬼がそろ〳〵彼世から情死二ヶ月間にありとても入札しさうな時に臨み、男と添寐の囈語又は夢ばなし或は男の居ぬ所にての獨り言などに、例の幻術を用ゐて、家の人は今こそ衰へたれ行末は必らず立身出世さるゝに違ひなし、ひと器量十分に備はりし御方昨晩の夢にも昔に歸り立派になり玉ひてまさ〳〵と我前に立玉ひしを見たりといふ樣の事を男の耳に入れ置く時は、男氣丈夫になりて内心例の自惚を起し、少時の間何れへなりとも立越如何なる業なりとも爲して再度錦をかざるべしなど考へ浮むものなれば其相談などにかゝりて來るなり。其時別離の厭なる事、男心の移り易きが心配なる事など喞ちながら、思ひ切たる風にて、我頭に付し簪まで賣りて路用を作りやり、沖繩とか北海道とか成るべく遠き國へ出し遣り、御歸家までは柱を嚙つても辛棒しますほどに精々

多し。されば男を振捨て退く時の手管能々呑込まざれば御前樣も行末危く、小新聞を過去帳にして浮名を止めらるゝなるべし。是を思ふに淫婦毒婦など世の人の口に殘るは捨る手管の大の下手にてまだ色道男たらしは靑い靑い女、夫より却つて惡き噂も殘さゞる者に手管の大上手大淫婦大毒婦ある筈なるに是に心付かざる男ども淫婦毒婦と見え透たる淺墓な女をばかり責むるは映るものだけしか見えぬ硝子眼是を人間の眼とは云はず人形の眼の御客さまと云ふなり。あだし事は扨置きて、繩張りとは男の我身に食ひ込まぬ樣防ぐなり。假令ば男懷中寒く又は商賣職業を失ふて何うか仕樣はあるまいかなど食ひ込みて來るべき前に此方より同じやうの事を云ひ出すにて男が困究ると云ふ事を口より出す前に此方より困ると云ひ出し置けば其繩に閊へて三十圓ばかり工面をとも云ひ出せぬなり。此繩張り置ざる時無心云ひ掛けられては此方受太刀なり。何程云譯しても不實薄情と聞きとらるゝ故繩張は大切の手、第十條と見くらべて男金のなくなる時分はそろ〳〵と繩を張り置くべし、是等は誰も知る事なり。

第三十二は鎹を抜く事専一なり。男と此方との間を緊乎と離れぬやうする爲に使ひし色々の鎹釘即ち昔時ならば起請誓紙の類を反故にするべし。比翼紋の付きし者なぞはそれぐるみ男を捨つべし。(是等の野暮をするものは今頃なけれど)一ッ一ッ二人の中の鎹釘になり居るものを抜去りいつにても無理なく離れらるゝやうに爲すべし。第三十三は案山子を置く事にて是は最初より男を誑らかす

管一つは捨る手管にて丁度將碁をさすに下手は取る駒の詮議ばかりして捨てる駒の詮議を知らぬ故思はぬ事に出合ひて負となれど上手は捨てる駒に心を付くるより自然と敵手は働らけぬ樣なりて此方の勝となる如く、色道も其通り下手の女は仕掛けの手管のみは甘くやれども捨てる手管に拙き故恨みをも受け意趣をも含まれ無理情死又は殺害などに逢ふものなり。上手の女は男を振り捨てる段の手管を用ゐるに巧なれば此樣の憂へなし。是より以下は馬鹿な男を振り捨てる手管を記し候へばよく／＼味はゝるべく候。大躰男の金銀を取りし後は、用もなき阿保め一昨日來いといふ樣に突出す事通例なれど是大きなる初心の女にて昔時より少しにても名を殘せし程の女の此樣なるは絶えて無し。傾城にしてさへ馴染重りたる後は大盡零落ても手錬茶屋にて云々との紋切形ありし事古き洒落本にちらほら見ゆる事なり。されば男零落はてゝ緣切れし後までも良く思はるゝ女こそ手管の上手なれ、詰り一切の手管を手管と思はせず、實情と思はすると手管を手管と氣が付かすると大きなる相違は唯僅かに別れ退く時分の一寸したる所にあり。見事手管に仕てやつて家藏身代まで吸取りたりとて、彼奴め手管にかけて我をだましたる憎き術妻めと恨まるゝ樣にては下手なり。可愛い者であつたが緣がなくて此始末ァ、是非もなしと諦らめさせるが上手なり。此相違中々雲泥なれど黑人も當世の田舍出女郎待合の女將軍に腮で使はるゝ薄ツペラ藝妓などは氣がつかねば、あはれ夫相應の無法男に執念く恨まれて、掛けし手管の返禮に出刄庖丁一枚モルヒ子三匁づゝの因果の報ふ話し

ても死門に打込み、世間の義理までを死門に打込み、其義理を生かして立たれなくなり、とゞの詰り自分の生命を失ふ譯に至るなり、浮世の義理と戀に責られて情死するとは人も思ひ當人も思ふなるべけれど能く傍目で糺して見れば戀で先づ盲目となつて歸れなくなる道即ち死門に駈込むより情死などいふものは起る事に候。比翼塚鴛鴦塚など喋々しく云ふは馬鹿けたることにて實は羽拔鳥塚盲目鳥塚とも申すべきか。第二十二は鼓の糸と或人の洒落し手に候。鼓の糸は左程強く締るものにはあらず、唯末の糸にて多くの縱の糸を繰る時だけの靈機に良き音き惡き音もあり。男を取扱ふも頭より尻尾まで強く締付くる事難し。唯々後朝の時うまく締付け置くべし。古よりの戀歌を見ても如何にも男を蕩かし其後髪を引張るといふほどの力あるは後朝の歌に多し。淨瑠璃の「深うなるほど朝迎ひ待せて置いての一言が勤め離れた女房の氣」とある文句を考へて魂膽あるべしと大眼子が敎を遺せしは誠に能く穿ちたるものにて此心得是非とも無ければ男逃るものにて候。第二十三倶利加羅落し。第二十四栓子拔き。第二十五鳥粘黐。第二十六白玉の杓子。第二十七水飴の髭がらみ。第二十八人中針。第二十九蜘の掛糸。第三十腹やぐらなど申す手は大極秘の秘の秘の秘密此處には記さず右七ヶ條傳受御執心あらば倘多分の傳受金にて口傳いたすべく候が隨分御工夫なさるべく候。第三十一は縄張とて是は男の落目になりたる時それに卷込れぬ用心に候。此用心なき女は折角調製し着物を剝がれ簪を取られ男もろともに苦む樣なるなり。一躰手管に二つあり、一つは掛ける手

うぞと死門に向つて身を挺んで、有程の金つかみ、出來る程の才覺めぐらし乘切て出て來るべし。元より男とて一概に馬鹿にはあらざれば最初は生門を見認め、今夜は行くとも差支なしと思ふ時だけ女の許にも來るなれど段々深くなりて後此の如き場合となりては自ら死門に馳せ入るなり。されば此男生きて家に歸る道なく、五日なり六日なり但は半月一月なり此方の手の中の者にて金使ひの抜殻となるまでは後へも先へも行かぬべければ、其時急に剝ぎ取りて捨つべし。世間の息子達女に迷ひて身を泯すは大抵此死門に突入る故にて、行けば歸れなくなるを知りつゝ行く故敵の陣中に落入りて出所なく徃生するなり、情死とは二人連立ちて惡魔王の作れる死門に入るからの事にて戀より直に情死とはならず、戀より先づ盲目となり、盲目より生門死門の差別を知らずに歩み、終にかへりみちの無き道をあるきて八方ふさがりの地獄に到り、其地獄の中の深き井戸に飛込んで終るなり。能く新聞などに出る遊女の情死の起原を尋ぬるに男に入れ揚げて段々と無理を重ね、假令ば衣物の事にて云ふて見れば、着更の衣裳有丈を男の爲に質入れするが最初にて是はまだ歸る道ある所、次は座敷着まで質入れする所、是も苦しきながら歸るべき道あり。扨其次は質入れしたる衣物を一寸借り出して來て當座の用を濟せ然も其をまた他所へ質入れする所にて斯くなれば既早利足は二重に拂はねばならず、鎗繰は愈々むづかしくなり畢竟死門に着物を入れたるにて歸るべき道なし。衣物のみならず夜着蒲團耳盥嗽茶碗櫛笄は申すに及ばす一切の物を皆死門に打込み、自分の年期ま

ながら頼まれて男何とも言葉なく呆れて返答に及ばず歸りしが、此事氣になりて晝夜忘れ離く、不思議不思議と思ふより自分の夢にも其やうのありさまを見て愈々不思議に堪へかね、親しき友に話して段々其女の樣子を聞けば、其頃足近き田舍客此女に愛着深く、根引して遠國へ連行かんとの相談中、女は出世は嬉しけれど土くさき男に伴ふを厭ふて返答いまだに確とせざるよし。是を聞いて男急に女の心の底を知たるつもりになり、身の毛立つまで怪しく可愛くなつて早速に田舍客の鼻明せ、横より根引して簑輪あたりに圍置きしが其後女は逃亡して行方知れずになりし。此話し中々分る事にあらず、お前樣も多分御わかりにはなるまじきが若是を悟られて脚色を變へ用ゐられなば傳受も是きり無用にしんべし。第二十一は八陣と申すべき手にて隨分罪深き事なれど男を沒落さする早道是に止まりたる法なり。男此方に迷ひて父母をはじめ親類一家の異見など食ひ、浮世の義理金錢の都合其他色々の件より自然足を運び難くなる時分、飽までも戀と恨みと愚痴を強くし、慾と見榮と我身を弱くし、其ありし樣を男の耳に入るゝなり。假令ば、男の爲し枕を獨り寐の床に抱て眠り(戀)手箱の中より男の寫眞幾度か取出しては溜息つく〳〵眺めて急に仕舞ひ頓て又私に取り出しては見(恨)今日は此前方樣の來臨なすつた日から幾日めぞと一日に三度も人に尋ね(愚痴)劇場の噂など口に上さず(慾弱)寐衣のまゝ髮も亂れしまゝ午刻頃まで起るに懶く(見榮弱)食事進まず(我身弱)などの容態を例の錘によりてソッと知らする時は男堪らず、可愛い奴めどうして其儘に置かれ

説でも仕過したる後なりしか憂欝ぐ様子ありけるが、何となく奥床しき所ありて次の夜も通ひ又其次の夜も通ひしに別段變りて面白き事もなく、少しづゝは打解けて來る計りなりしに、其女は中々如才なく世馴れて仕こなしに下手な所なく十年も勤め仕たらんかと思ふほど抜目なし。さりとて男を別段厚く取扱ふといふにもあらねど云ふに云はれぬ仕こなしのコツの妙に、あばずれの男も柔和しく、又通ひたる夜の曉方、女呻されて苦しげなるを男心付いて起せば、ホツト息吐き、胸をさすりながらア、苦しかりしといふ。怖い夢でも見しやと問へば、深河の凄じく泡だちて漲り落る向岸に顔は知れぬ男立ちて妾を招く故怖々ながら心細き丸木橋渡りて中頃まで到りし時背面にも男來りて其丸木橋を頻りに推し動かすより足も縮みて聲も出でず、落るを恐るゝ中終に眞倒樣に搖り落されて夢醒めしといふ。男は笑つて、餘所の千話の心に掛りし故ならんなどゝ慰め歸りしが其夜また行きしに曉方にまた其女呻され苦しむを起して問へば、女は不思議なる面地して男を見ながら又同じ夢見たりといふに、男も少し氣味わるくなり、一日間を置きて又行き、昨夕はと問へば昨夕は然る夢見ざりしと答ふ。扨さま〲遊び戯ぶれ共寢しての其曉方又もや女の唸さるゝに流石の男愈々氣味あしく、女も眼覺めて氣味惡氣に男の顔眺めながら深く案じ入りしがやがて、おん前樣は妾と前世に良からぬ縁にても有るかお前樣と添寢せし此三夜さ同じ苦しき夢を見る事不思議なり何とも合點まゐらねど餘り恠異なれば此後も來ていたゞきたきは山々なれどお通ひ下さるまじくと涙ぐみ

を片手に、火水一度に責立つれば、男の根性鐵の如くなりとも鍛冶糞のやうにぼろ〳〵となり、腹の中にて、ウー此女は馬鹿に己に惚れて居やがると増長させる鼻毛を確かに女の手に引張られ、其夜は鐘が仲人の中直り、翌日からは又々忠勤出頭怠りなき者ゝ。第二十は幻術にてこれ老功の女にあらざれば遣ふ事に心付かざる極秘なり。元來世の中には云へぬ事あり爲せぬ事あり、道理と云ふものあり人情といふものもありて、隨分七面倒なるものなれど、馬を鹿と云ひ鷺を鴉となし、道理を破り人情を亂り、自己の思ふまゝ勝手に攪回す事の出來るは幻術の境中なり。此幻術を横より覗きて書きたるへぼ小説などは腐る程あれど幻術の本來を見たるものなし。幻術とは夢なり。此夢の中の事は他人が知る事も出來ず道理が糺す事も出來ず、縱横無敵勝手次第なり、されば夢の中には憎しと思ふ奴を殺す事も出來、千里隔つた人に逢ふことも出來、どうでも好きになるなれば、此夢を噓に作れば悟空が魔法よりもまだ自由になるべく、然も夢の噓と夢の實とは當人より他に見分ること難く、手練手管も此幻術を使ふに至つては骨頂にて深き道理ありて大自在の魔法たしかに行はるゝ大秘密、一々明らさまには說かず次の實話を能く〳〵味ひて會得致さるべし。或男は若きよりあばずれにて女を憐み和しくするなどいふ事更に無く唯金あるに任せて我意を揮ひしが或時芳原の遊びも結構だけにて面白からずと某の宿場を素見し某小店にて廿三四の美しき女あるを見付、惜い者と一夜買ふばかりの心にて遊びしに待遇さら〳〵として不甘所も甘い所もなし、唯其女情夫と口

うつて云つた譯ぢやありませんよ、ヨウ、ヨウ、マア座つて下さいよ。エ、留るな、歸る。どうしても御歸りなさるの。知れた事さ、ハイ〳〵そんなら御止め申しませんサア御歸り遊ばせ。併し御忘れ物が。何。見ませんか。冗談を云ふな、何もない。エ、ぢれつたいホントに口惜しい、貴郞の眼にはそれが見えませんかと無暗矢鱈に泣いてかゝつて引ずり倒せば男脆くも座る。其膝に此方の頭を載て鼻聲に急しく爲永流の口說方で、貴郞が此間御いでになつたきり影も形も御見せなさらないからどんなに氣を揉んだか知れやしません、新聞を讀んでも草双紙を讀んでも少しも面白い事はなく、馬鹿らしいほど唯貴郞の事ばかり氣になつて氣になつて、いつそ貴郞に最初から御眼にかゝらなかつたら斯も無からうと勿躰ないが御恨み申す氣も出て、どうせ頓間な妾達に御構ひなさらないが無理ではない、エーもう愚痴は止めやうと思つても生憎眼に立つ貴郞の御姿、それに引かれて又愚痴も湧き、何處の増花が御止め申して居る事かと口惜くもなり、至らぬ心は至らぬ心だけに苦勞する內不圖今日の御來臨、嬉しい中にも今日の嬉しさが明日から又每日〳〵物思ひの種となるかと思へば寧そ御來臨なさらずばと、ツイ口走つたに譯も聞かずの御腹立、それほど邪見になさるなら夢にも現にも見ゆる貴郞の面俤を妾の胸の中から御忘れなく取り返して、而して御歸りなさいまし、執念深い妾に見込まれたのが貴郞の御不運、それまではマア御返し申す事は出來ません、エ、口惜しい、人に是程の心配さして置いて和しい言葉も掛けて吳れぬ男め、と淚の水を片手に嫉妬の火

なり。さて適々來りたる時此方より平常に待遇へば必らず何となく物足らぬ樣の心地して男おもしろがらぬものなれば、其時思ひ切つて火を入れ、したゝかに男を燒いてやるべし。但燒きやうむづかしけれど、先は片手に火を持ち片手に水を持つ樣の心得あるべし。假令ば男の入り來るを見て髮容姿の亂れたるをも顧みる遑なく突然あさましき面相して胸倉を引捕へ、おまへはおまへは、性惡男め、何處の馬骨に引かゝつて居たと號き立て撞き廻すやうにては兩手に火を持つて頭顱から容赦なく燒つくす素人がゝりなれば男堪らず眞黑に焦されてほう〳〵の躰に敗北し二度とは寄付かぬなり。初紅葉とは此樣な無造作にあらず。男入り來るを見るより何となく顏付を莞爾つかせ、起居いそ〳〵として悅ばしき風をあらはし、手早く髮容を收め、萬端奇麗事に男の尻を坐蒲團に居させて後、待ちし夜の長かりしは貴郞のつめたい時計にては知られまじと口說き、一昨日は髮を空に結はせしと恨み、數々の心盡し手鏡を米櫃の底に伏せて愚なる咒術までを賴みにせし可笑さなどを或は眞面白に或は興じて元氣づきながら物語り、酒機嫌よく侑め、夜も更て二人切りとなりたる時拍子と呼吸を見計らひ、ヂリ〳〵燒き出すべし。今日は何して御來臨なすつたのだらう、いつそ御出がなければ好いに、と斯切り出されては男だまつては居られず。來なければ好つたなら歸りませうよ、と內心は歸り度無くつてもツンとして立つ袖を周章て捕へ、淚を潤ませながら、あらさうぢや有りませんよ。ナニ歸ります歸ります。マアどうせう、わたしがウッカリ饒舌つたは貴郞を御歸し申さ

困る事出來すべし。よく〳〵注意あるべく候。第十八は身を奪ふなり。是は男に我身を任せたる頃身を捨てる代りに確と男の身を我方に奪ひ取り置くなり。我を捨つる事が種となつて男の身を我所有とする方便、縱横に男を動かし自在にかきのめすは身を奪ふにあり。例之ば、そんなに大きなもので御飲みなすつてはいけませんよ、毒ですよ。マアいゝから酌ぎな。毒ですよ、もう御廢なさいと云へば。毒でもいゝからまあ一杯酌ぎな。何いゝ事がありますものか、貴郎ひとりの身躰ぢやあるまいし、と斯う云へば生醉の臟腑にも、あなた一人のからだぢやあるまいしの一句キリ〳〵と染み渡りて無上に嬉しく有り難く、自分の身躰を奪はれたりとは氣が付かず、そんならもうおつもりに仕やうと細い眼をすること受合、男の阿房は圖の知れぬものなり。感冒召すなよ猪牙とやらといふて背面より女房が羽織を着せたるには浮氣男も閉口したるが、是其言葉の裏には男の身の奪はるゝだけの愛情あり。又傾城が朝寒く駕籠屋の息の白う見ゆるに垢付たりとも是を下に召して土手の風に御身をいたはられよと我着たる衣を男に着させて歸すなど矢張男の身を奪ふ譯にて、最早斯くなれば男の身は男自身の持物ならで女の掌の中の丸藥同然、自由自在に捻り廻される馬鹿に候。第十九は火を入れる如き手なり。是は酒の少しく腐くなりたるに火を入るゝ如く男の少し遠退きたる時仕掛くるなり。昔は此手を初紅葉と申してあきくちに濃うなる色仕掛けと洒落申し候なり。男は素より浮氣者なれば一月か二月繁々通ひたる後は必らず又他に氣を移して少時足の遠ざかるもの

か我を捨つるやうになり行きて人の我を立つるを忌みし昔時の小さなる心おしひろめられ、互ひの心春の空のやうに和らぎ長閑に樂しくなるなり。戀は神聖とは是等をや申すべき歟、噫。されば正眞の戀ならば悠然と滿足しながら人の我を愛し自分の我は捨たり行くなるに、戀に似する裏の手の工夫にては無理に瘦我慢して我を捨つる其苦しさ中々出來難く、是非もなき天理言語に及ばず候。是に據りて考ふれば無我のやうに見ゆるお釋迦樣など申す大聖人は一切衆生禽獸にまで惚れて自分の我慾は自然捨り行きたるかも知らず、大きな戀が大きな人を作つたるにて高が知れたる人間のへぼ思想が聖人とならしめたりとは思はれぬなり。我を捨てるトヾの詰りは身を捨て命を惜まぬなれど、それまで踏込むには及ばず、先づ一切の所業男の性質に合ふやうに仕掛け、すべて男の自惚れて居る所に同意し下らぬ事にまで我意を抑へて忍耐するなり。假令は君故ならば我命何の惜かるべき、ましてや君の仰せには生血を絞り片腕を拔かるゝとも露厭はじ、世間の評判親類目上の思慮我少しも關はずといふやうなる意氣込にて、男酒嫌ひなれば今までは日に一升の大酒なりしとも酒盞を石燈籠に叩き付けて金毘羅樣に禁酒を誓ひ、男學問好まば他所にて內々伊勢竹取徒然草の二くだり三條は聞習ひ、男法華ならば門徒を廢め、男猫を厭はゞ泣の淚を揮つて鰹節添へて玉を餘所に遣る位はまだな事、今少し奮發しては、殺すとも活すともどうせ貴郞に任せた身躰、身は我物にもあらじ我父母の物にもあらじと男の懷中にわが魂魄を投込なり。然し餘り强よく我を捨てゝは、後にて別離の時

方を忌むものなり。夫故惡人に愛せられんとせば我を捨てねばならず。言葉を換へて申せば我を捨て人に近寄るものは其心極めて險惡なる奴にて昔時より奸雄と申すもの一生我を捨る工夫ばかりに心を苦め居たるに相違なく鄙しき者の頂上は我を捨つる奴なり。元來良き我ならば捨つるに及ばず、惡しき我なる故捨つるならば我を捨つるものは即ち惡き人間にて、我を捨つるも其人間の我なれば、つまり忍びて我を捨つるは恐ろしき大惡人なる事云ふまでもなし。然し猶深く考ふれば眞に能く我を捨得られなば太聖人なること疑ひなく又眞に能く我を立得られなば大聖人なること疑ひなし。表裏融通知れ切たる話しなれど、前にも申す通り凡人は我を立得ず我をも眞には捨て得ざる中間のぶら〳〵にい所が五十年の棲處にいへば、其凡人を相手にする色道の秘密は瘦我慢して我を捨つるにあり。然し爰に不思議の妙ありて天道の恐ろしき事に身の毛立つ譯あり、第八の語氣の條にも記せし通り色道裏の手のあさましきも詰り煎じ〳〵て見れば表の正しき所に歸らねばならぬごとく、我を捨て男の心を蕩かす此條もまた餘稈妙なるものにていふ。一躰色道裏の手は皆戀と見せて男を誑かすなれど愈々男を誑かさんと密に深く考れば其考へ出す惡事の手段數々の中に電光の閃きて眼を射るやうに驚かされいふ事のみ御座いふ。扨元來男にもせよ女にもせよ眞實に惚れたる時は强て我を立つるものにあらず、自然と男は女の我を能く立て、女は又自然と男の我を立てるより、自分の我を捨る譯にはあらねど我戀人の我を倘び、知らず〳〵男の我に女は從ひ女の我を男は愛し、何時の間に

して‥‥然し今宵は誓文くつされどこに行かるゝものぞ、とひつたり男に寄り添ふを取つて撞退け、我へのなさけかはしらぬが親の死目を他所に見させて我何の面白い事なし、行け、ソレ十一時の急行列車はまだ間に合はん、少けれど見舞の足しにもと大札四五枚、何にも云はず涙だけ見せて男をふし拜み、車を急がせ横濱には行かざりける。是一つには男みづからの粹ばまりなれど一つは作略に男の氣を奪ふて、身をば汚さず影を與へて實を取る仕懸け巧みなる故なり。凡て肌をゆるして男をたらすは拙く、心をゆるすと見せて迷はすべく、肌をゆるさねばならぬやうの仕儀にもならば甘く男の氣を奪つて肉慾の出所を失ふやうに仕掛らるべくㇱ。氣を奪ふには境界を瓦落離とかゆるにあり。おのれの病氣を云立て親の命日を云ひ立にする類は餘程のろき男にはよけれど平常の者には惡し、大方前より仕組置て其時に湧あがりし事の如くするがよろしくㇱ。拙き時は男に見すかされ耻をかくべくㇱ。第十七は我を捨つるなり。我を立つるものを愛するは大人君子度量の極めて廣きものにあらざれば能はざる事にて世間の男ども何によらず自分は自分の我を立てながら他人の我を立つるを憎みㇱものなり。眞に能く我を倘む者ならば他人の我を立つるを愛し見るべき譯にて、お釋迦樣などこそ眞に能く我を倘まれたる方なれ、さればこそ提婆達多が我をも露憎み玉はず海の如き御胸の中に容れ玉ひたるなれ、大抵の男は自分の我を倘みて人の我を憎み、人には人の我を捨てさせて自分の我に同ぜしめんと圖る白痴にㇱへば、此方我を立しㇱ時は中々此方を愛する事出來ず此

初めより下品に交際は沙汰に及ばずい。第十六は氣を奪ふとて是は腹中ゆたかなる大盡又は瘦我慢の牛粋なる男に用ゐて殊の外をかしき事あり。近き頃或藝妓神奈川邊のさる大盡を手に入れて馴染重なり、衣類持物まで美を盡しての賜物數々貰ひしのみか、然も引ぬきて正妻の位にそなへ、二十幾戶前の藏の鍵まで與へられんとの內談、追付同業の誰彼へ配るべき赤飯の胸算用まで出來て居るとも知らず、某銀行の支配人とかゝ半月程前より一方ならぬ贔負、それも曰くありてとは悟れど取らぬは損と是にも、例の影を與へ楔をあたふる數々の仕こなし、支配人愈々悅喜し、金銀を投うち丹誠を運べば切遂に愈々となり、或待合に啣へ込まれて三味線ぬきの小座敷、梁塵も動かねば風も入らぬしんみりとした酒盛、さゞめ言も浮氣を退けて互に腹を賣る臺詞しつくりおもしろく、天晴京傳の洒落本にも無さそうな黑人の眞實、色道第一根本ありがたい所は此處ぢやなぞと男はとろけかゝりて大滿足大恐悅がり、うと〳〵する振を見て取り、お感冒めすなとゆり起して、こちへござれと柔らかな手に引立て、燈火粋なる座敷に伴ふ此時十時の時計チン〳〵と響くを聞捨て共に臥床に入る途端あわたゞしく下女が姐さん電報がといふを受取り、女眉を寄せながら心配相に、見れば封筒に至急の朱印、どつきりして開いて見て淚おろ〳〵と落しながら推まろめて投やり、えゝどうせうと胸の間へ苦しげなるを男あきれ惑ひて兎角介抱し、仔細を問へば指さす電報、それを取つて見るに橫濱より、チ、ビヤウキムヅカシスグコイとあり。女は嘆息ながら、辛や浮世、好事に魔がさ

駒にちんとはぢきて、お〻さへお〻さへ喜悦ありや我此盃を外へはやらじとおもしろや向ふの人に思ひざし嬉し顔なると唄つてチユーと鼠鳴するなどの事なり。倘下品ならば男の飲みさしを取つて知らする樣に知らせざる樣に甘さうに飲む類にて大抵是ほどに仕掛れば男家に歸りても碌には寐られぬなり、女の影法師聢と男の懷の中にある故也。第十五は楔を呉れるなり。山人如何程力自慢なりとて大木を割るに楔なくてはか〻り得ぬものなり。男如何程自惚強くとも此方上品におとなしくして居れば無下には掛り得ぬものなれば是非きつかけをまちて取てか〻らんと野心をさし挾み居ると知るべし、其時此方より好き汐を見圖らひ、少しの楔を與ふれは男それに便りて滿身の自惚の力量を振ひ、もしや此女盤根錯節の堅い奴にもせよ我力にてコヂ破つて呉れんと意氣組すさまじく掛りて來るなり。其くせ此楔といふもののむづかしき事にあらず、ありふれたる詰らぬ手にて前の影を與ふる中の逆手に止まる〻、假設ば前のは我に就て云ふ代り是は男に就て云ふものにて、ほんとにあなたは罪作りだよと云へば、男。是はきびしい、何故々々。ホ、誰かに聞いて御覽なさい。だれに。わたしは知りませんよウと此位なるは罪の輕き楔なるべく。も少し強きはべつたりと。あなた妾しの兄さんになつて頂戴ナなどいふ時男素早き質なれば、亭主ぢやあ不得心だらうなぞと最早打込んで來るなり。是より話しは一足一足に進みて男は手に入れたりと思ふより此方の手に盛り込る〻を知らず、都て上品に仕掛くる時は是非此楔を巧みに男に與へねば男掛りかぬると思ふべし。

毛糸細工の洋燈敷縮緬の肘つきなどを餽り、男の譽むる役者藝人を共に譽め、男の嫌ふ事を共に嫌ひ顔し、男の能く知り居ることを態と尋ね問ひて誇りかに答へさせ、其答を感心し顔に聞きいなど、是等は當世乳臭き束髪の小娘供も爲る事にて其敵手となる乳臭き少年共と互に喜びあふて、男女交際とか何とか體裁よき名を付て清潔がり、矢張内實は淫心の匂ひだけを嗅がせ合ふてぐびつく喉を抑へ居る事にいふ。然し是等にては餘り拙く鈍くいふ。今少し確と影を與ふるは男の立居に一方ならず心を配り、男手水に立てば石鉢に水はありながら下女に吩咐て溫湯を進らせ、夏ならば絽の御羽織脱がせ申して人手にかけず疊み、或は其人に風を送り、又は付居る女(前に記せし錘なり)の口より慫慂させておもはゆげの振しながら一節うたふ唱歌にほのめかし、或は話しの序に昔時の人に比べて其男容貌自慢の氣味あらば、佐野次郎左衞門の容色では八橋の嫌つたが無理ではたし生命とられたとて榮橾を色にしては女と生れての本望なるべしといへば、男は早女を八橋の如く思ひて自分は美男榮之丞の氣になるなり。又其男器量よからずば何程美しきとて榮之丞に迷ひたる八橋の心愚なり、男は氣で持ち生海鼠は酢で保つ、とさへ云ふものを、氣性ある次郎左衞門を酷くしたる心あさまし、さればこそ冥理も盡きて見苦しく終りたれ、と云へば、男腹中にて、此女は人形食ではなし、面白い根性だ、なぞと譽むるなり。今少し下卑れば打解けたる振に二種三種の肴を整へ主人顔に酒盞さしつゝさゝれつ、酒に亂れて居ずまゐを崩し、言葉つき仇めかしく笑ひさゝめく内にさては忍び

起しても返辭に疎く、膝のうしろ、手の付根など折屈みの所々しつとりと汗ばみ居るは是心配のあるためと知るべし。都て妻にもあらぬ女に心通はす程の白痴男の生命は金なれば、金に乏しくなるにつけ其男の容態何處やらに影の薄い樣な所生じ、處置ふりに間拔あらはれ、追付六文の錢もなき一文なし亡者となり、六道の辻車引く身となる前兆たしかに知らるゝなり。但此時此方の眼兒明らかに早く逃支度を爲し置かざれば付纏はれて惡足となられ、共に奈落に沈む故此段は大切とおぼさるべし。然し一度男を零落させて見れば金の終り位見易きはなし。愈々次の條よりは手管の奥儀なり、十分氣を注けて讀まるべく候。

第十四は影を與ふる法にて未だ男を手に入れざるうち男を聢と引よする手管なり。前にも申したる通り素より男は自惚つよきもの故、何でもなき事に獨り悅喜する程の白痴に候へばまして此方に心ありて釣りよせんとする餌にかゝらざるは無く候。然し初よりべつたりと仕掛候は却つてなれ〳〵し過ぎて價値低く候なれば、先身を與へず影を與ふる事よろしく候。影を與ふると申すは、假令ば、甘き者の匂ひを嗅がするやうの道理にて、つまり酒好の人に酒をば飮ませず、酒の香の芬々たるを嗅がする如く、喉をぐひ〳〵致させ、涎を垂させ、堪へられぬと云はするは實に匂ひだけ嗅がするところにあり。色道も此通りにて最初はまづ前に記したる眼と振にて仕掛け、男の持物のおもしろき所を見出して譽め、男の話しに身を入れて聞き、扇面又は袱紗などに書畫を望み、其禮として我

した、お向の光ちやんにも好い石だつてほめられましたよ。御禮は門違ひだらう。アラ此間あなたに頂いたんぢやありませんか。フヽ大分粋だの。誰かにかぶれてサ。といふやうな問答で男は十分滿足し、チリ〳〵と肝の臓に堪へて嬉しがるものなり。ましてや其指環の裏面に男の名頭の羅馬字と女の名頭のローマ字とを組合して此節出版の本の裏の印のやうなもの丶彫りてあるなどに至りては、王爵のデレ助となるべし。然し是はよく〳〵男を見定めて後の事なり、迂闊にしては執篦返しを食ふ事あるべし。男の氣性呑込めぬ内は野暮に返すが無難なり。まづ此様な事をする男は女にかけては凡人より少し馬鹿にて世事にかけて平の人より少し利口にてベッとしたる遊びなど好まぬ質なり。又半可通なる男も此様の事をするものなれば御用心なさるべく候。第十一は金の初を見る事、此次は金の中を見る事。第十三は金の終りを見る事に候。何の様の男にても色を酒の肴にして遊び又は酒を糧にして色を漁る者の懐中末の末までよろしき譯なし。いづれ身體にも脾胃損腎虚財布にも脾胃損腎虚の苦しみを生ずるなれば、よく〳〵それを見透して金の終りを悟り、よき汐に吾身を迯退くやうにすること肝要にて其迯様は末に記し置候。勝氣なる男は全く無くなり際になれば心いら〳〵となり、酒量平日より進み、夜更るまで心よげに騒々しく語りさやぎ、曉天がたに僅か目どろみ、少しも屈托の模様を露はさぬものなり。かゝる容態の時は用心すべし。氣弱の男は足遠くなり、言葉つき弱くなり、酒を平日より甘がらず、酔こぢれ、早く寝ても眠ること遲く、もし〳〵と

よく知れ申し。人の性質により相違あれども大抵は急に夢へくなりし歟急に別の人の如く寛容になるかの二つにし。箇樣の時は此方も急に卷上る算段よろしくし。急に無理口舌して激まし憤らせ吐出さするか、急に待遇を好くしてねだり取るか、いつれにせよ急にすれば殘らず取れるものなり。第十二は質を見るにあり。金を出すにも人々の質あり。如才なき男は此方より云ふては出さぬものにて、此方より匂はすれば自分で悟りて天晴氣の利たるつもりに自分の金を取られながら自分の手柄のごとく、內心悅に入りて脆くも出すものなり。おとなしき男正直の男は論に及ばず。恪嗇の質はつまり金に未練を引きて思ひきれぬの故色にも未練を引て思ひきらぬものなれば隨分愛想を盡さるゝかと思ふほど五月蠅く責る時は矢張少しづゝ出し、決して女を思ひすてぬなり。一時に大金を出させんとすれば金を思ひ切らずに女を思ひきる事あり。又金を使ふに活して使ふの殺して使ふのと詮義だてを腹中にする質の男は大抵金のなき半可なり、論ずるに足らず。又身分よき人にて何でもなき時、列べて寢たる我枕の抽出しに十圓札の一枚も入れておきながら知らぬ顏して行くやうな事をするものあり、決して此質の人に金の話しなぞ夢にもすべからず。唯其あとにて、新らしき櫛搔頭の類、或は襦袢の襟、頭掛指環など何にても眼に付ものゝ其金高の割合に應じて一寸買ひ、身に付置くべし是秘事なり、其男其次來るとき必らず女の身の周圍を見るものなり。或は、ウ、と內心うなづいた限りにするあり、或は、オヤ其指環は珍らしい石入りだ。眞實にありがたうございま

がりながら、それに釣合つた衣服を注文しやうともせずして極品の絲織いやにニヤケたる柄の者を着るごとし。すべて一ツ一ツを離して見れば結構ながら全躰のつくりを見れば何か可笑しき所あるやうな氣味あり。床には啓書記の山水天下の珍品を掛けて其下に巴里製の花皿置くといふ調子もすべて人に作らるゝ故なり。此の如き金持は言葉ゆたかにのつしりとして座敷一杯に坐りて遠慮を知らず、されば少しシツヽコク甘つたれる風を見すれば實に惚きものにて是等の人を死金持と申し候。言葉うまく人を可笑がらせ、然も内端でも大風でもなく、身姿拔目なく、一風の好みありて冠りもの新らしく、然も世間の狀態を知り、呑込よく行渡りよく、さのみ奢りもせざるは金の融通よく利く男にて懷中に大金なくとも是等の男をたらし候へば相應の金を引出しやすく候。色々動く中に居る男は假令金なくとも生金持なれば、引負などさするまでには相應に取るゝなり。衣服通がりて仕掛口舌上手なる男は大抵錢なしに候。錢なき故に己の心意氣を見て呉といふ樣な調子にて、男自身にも金の他の者にて身を飾る弱みあれば、自然と音羽屋成田屋の假聲を使ひ、新内端唄或は囈語を噛む樣な河東節、又は季もなき駄發句、てには違ひの和歌などに力むと知るべし。生意氣はまづ有福ならざるより起る見榮と思ふてきつと間違ひなく候。まづ大抵金ある人の生意氣はまるで藝にも洒落にもならず、金なき奴の生意氣は藝になりかゝり洒落になりかゝりに候。能く〳〵ならぬとなりかゝりの區別を御考へなされ候はゞ見誤りあるまじく候。平常金なき人の急に金を持たるは一番

の肝要に候が、然し人を見る事の難かしさは昔より色々の論もあるほどにて、韓非の説難、鬼谷の忤合なども人を觀るといふ事を能くすれば讀むには及ばざるべきほどの大事なれば一朝一夕に御傳授いたし難く候。人を觀分るに職業を以てするはいと易き事にて如何に衣服を變じたりとも、言葉つき滑かに低きは商人、粗く大きなるは船乘り、手の中に豆などあるは大工左官の儕輩、身内奇麗に肉付柔かき者の中にて言葉叮嚀ならぬは書生、横柄に威權どるは官員、兎角半可通にて輕きは銀行員なぞと一々其職業を中るは花の時分向島の茶店に半日も腰を掛居れば譯なく發明できるなれど、是はあまり役たゝぬ見分樣とおぼしめさるべし。扨第十一は有樣の次第にて金を見る事に候。男の腹中金あるか、又は金の融通よく利く男か、躰裁ばかりの見掛倒しか、有福の家の息子株金はありながら自由にてきぬかなどを見分ず候ては、木綿布子着たる大盡を見のがし、羽二重の犢鼻褌しめた素寒貧に引かゝるやうの馬鹿を見候。まづ十分云ひたさうな所を七分に控へて口きゝ、人まかせにして我を張らず、言葉かど／＼しく鋭からず、身分をあからさまにせず、衣服持物に際だちたる好み見えず、眉の間豐かに若き男は身分よき人の息子株にて、即ち金はなくとも金の蔭を持ち居るなり。金持の人は衣服立派なりとも何處かに少し間拔けたる所氣のきかぬ所あり。是は金持といふ者は自然と人に作られたる衣服持物を有し一々自分より作らぬによりてなり。例へば、是は極澁くてよろしうござるとすゝめられて繻珍の結構なるを買つて帶には博多でもなからうと生澁がりに澁

まくならぬ中は其他の事は何ほど良く出來候とも皆無益になり申候。機轉のきく樣にならんとて是は中々宛もなき事なれど機轉のきかぬとは察しのわるきより起るもの、察しのわるきとは察せぬより起るものと御覺悟なされ。精々思ひやりといふ事に心をお用ゐ習はし候はれなば察しもよくなるべく、從つて機轉の利くやうにもならるべくと考へ申候。以上の五つは手管手錬の機械なれば此器械よく研きあげられず候ては進退むづかし、十分器械を整へられて後のあやつり樣は次にしるし候あり。

男を釣りしは魚を釣りしと少しも異りなく、甘き餌にて盡く鉤を隱して見えぬ樣なし、釣糸を丈夫にして振切り逃られぬ樣仕掛、鉤を鋭く慥に腮へ刺るやう致し置き、錘を以て沈め、水底に居る魚の鼻の頭へ見せびらかす時は直に釣れるものなり。姿形をかざり、柳清香の花の露のと申すものに好き匂ひさせて作り立るは餌なり、釣綸は神かけて離れまいなどゝ契り交す言葉なり、錘は傾城ならば新藏藝妓ならば假母か待合の女將軍の類、お前樣御身分では別に定まりて無けれどつまり介添樣のものと心得らるべし。さてそれにて支度萬端よろしければ、瘦せぎすの男もだぼ鯊づらの男も、鱵の如きひんなり男も鮪の如き無骨男も鮒も鯰も鯛のやうな色男も出世の見込ある鯔魚のやうな若佼も雜魚も泥鰌も爭ひ食ひつきて鉤にかゝるものにて候。然し釣魚も魚の向々にて道具を變へ香餌を換へねばならぬ如く男によりて此方の仕掛を變へねば甘く釣れぬ譯なり。されば男を見る事第一

すました語氣に男を思ひ迷はせ、すねくねした語氣に男をもどかしがらせ、輕き語氣に男をおもしろがらせ浮したて、力を入れて緊乎とせし語氣に男の魂魄を取て抑へて逃出さぬやう此方の巾着の中に推し込み、沈みたる語氣心配想な語氣にて後朝に別れ行く男の後髮を引とらへ置く樣臨機應變の鍛錬をつまれなば天晴すさまじき男殺しなるべく候。第九は語形にて候。美人の使ふまじき言葉を紅く小さなる脣より洩すほど愛想の盡るものはなし。おさんや玉(猫の名)に御膳をやつておくれといふ語の形は美し、おさんや玉に御膳をおやりといへば其次なり、玉にめしを食はせろと吩咐ればあさましくて女にあらず。あなた浮氣をするときゝませんよは上なり、おまへ浮氣を仕ちやあいやだよは中なり、浮氣を仕て見やがれ唯は置かねえぞと來ては下の下の甚だしきにてむかし吉原の羅生門けころ見世女郎の品格にて、すべて意はひとつにても男の心に異つたる感じあり。假令ば男浮氣をしても上の詞を思ひ出したる時は、それに自分の自惚を添へて想像して、ア、今頃はおれの寫眞に針でもさして恨み泣いて居やしないかと憫然も起り、可愛くもなり、逢ひたくもなりて遂に逢ひに行くなり。中の詞を思ひ出したる時は、あれはブツ〳〵口小言を云ひながら火鉢の灰をくる〳〵と搔廻したりなんぞして、エ、どうせうと惱つて居るだらう、行つてやらうかよさうか、と懷中に相談する所なり。下の詞を思ひ出したる時は、彼奴め大方やけ酒を煽つておれの事を散々に惡く云つてるらしい、劍呑だからまあよさうとなるものぞかし。第十は機轉に候。機轉のう

氣を美しくやさしくなされんと覺悟なさるべく、語氣をやさしく美しくなされんとならば先づ怒ること、周章る事、嫉む事、下部たる事などのはしたなき事を心の中に愼み抑へらるべく候。百の言葉を治すよりは一の語氣をなほし改むるときは千にも萬にも活用すべく、百の語氣をなほしあらたむるよりは一の心を改め直すときは千にも萬にもはたらくべく候。油屋おこんの淨瑠璃をよく聞いへば淨瑠璃語りの聲の中におこんはおこんの語氣、まんのはまんのゝ語氣ありて、其語氣によりおこんの美しき容態、まんのゝ憎らしき顏付まであり〳〵と見ゆるやうに思はれ候、それにて大概は會得なさるべし。ある好色の盲人ふしぎにも美人を鑑定致し候を如何樣の事にて分るかと尋ね候に、第一は聲色、第二は足音、第三は語氣と申し候。聲の色は金切聲銅魔聲など禀賦にて致し方なく候へども足音語氣は心を用ゐさへすれば治るべく候。(斯樣申し候へばつまり眞の美女には優にやさしき語氣の具はりある筈なれば、色道裏の手の修行も煎じ詰めて論ずれば善女となるより外の心掛なきことなり。盜賊の山寨を百年關はずに置けば其中間に必らず法律起り禮樂生じ敎法も出來て千年も經ば今日の我等のやうになるべきと同じ道理、不思議の天の定め、恐しき微妙の理にて色道裏の手の詐り多きもとゞのつまり虛言から出る誠の天道、妄想を用ゐ盡して眞趣の現ずる譯に候。然し悟つては手練手管の詐僞計畧はだめとなり候。)此語氣を能く使ひこなして自在になし、甘つたるき語氣に男をなでつけ、びんしやんしたる語氣に男をぢれさせ、泣きさうな語氣に男を深入りさせ、

れても振は大事大事。第八は語氣に候、是は中々手紙には記し難く口傳ものにはへど、あらましは、烈しき言葉遣ひ、迫りたる言葉づかひ、壓伏する言葉遣ひ、込上げたる言葉遣ひ、輕薄なる言葉つかひなどに氣を注けて、なるべく長閑に優にしなやかになされてよろしく、例へばお輕の辭、風に吹かれて居たわいなとあるにて優にやさしく聞ゆれど、風に吹れて居たんでーと烈しくては食ひ付さうなり、風に吹かれてたんだと迫りては艶なく、風にふかれて居たのサと云へば輕薄にすげなし。又、風に吹かせて居たわいなと云へばせの字とれの字だけ僅に一音の差なれども、まことに人を壓し伏する强き女の樣聞ゆるなり。風に吹れて居るといへば青々と美しき春の柳の長閑に立てるごとく、いとめでたき女の、なよ〳〵と衣にも勝へざるありさま想ひやらるゝなり。風に吹かせてといへば節くれだちたる老木の松虛空に兀然と聳えたるやうにて何となく女めかず、筋骨たくましき男の兜脫ぎすてゝ突立たるがごとく想ひやらるゝなれば、女にしても亭主を尻に敷く類かと危ぶまるゝものにて候。風に吹れて居たのがどうしたといふほど込上ては凄まじき嬶左衞門なり。皆樣に色々申しても是は言葉の違ひにて語氣と申すものにはあらず、語氣は言葉の勢ひにて手紙にあらはし申し難くはへど右等の色々の言葉を聲を出してお試しなされはゝ自然と語氣の色々ちがふことに御心付かるべくはんと存じは。さてやさしき語氣を用ゐるやう御心がけありはゝ自然とやさしき言葉をも用ゐられはやうに相なるべく、されば言葉を美しくやさしくなされんとするよりまづ語

はつきりと氣高き生れの男には和しく罪のない振を爲すがよろしく候。鼻紙を丸めて抛り、はんけちを食さきなぞするぢれたふり、搔頭で頭を搔いたり、袖袂で口を掩ふたりするおもはゆげの振は陳腐く候へば其時々に新らしく工夫なさるべく候。古くても男を手に入れたる後、身をもたせ掛け、又は前髮を男の膝に擦り付、又男の小指をつかまへて食付き腕をくすぐり、二の腕を捻り背を叩き、ぶつまねしたり打つたり、招いだり逃隱れたり、後面向たり搖ぶつたりする亂れた振は人をでれでれとさする働きあり。男の手の平を見ながら、オヤあなたの手は妾のより柔かで憎らしいよ、ピツシヤリポンと拍けば其まゝ男は打つた手を抑へて、それでも力は此位あると握りしむるより何でもなき中も忽ち亂れるものにて、これ譯もなき振にて男の心を搔きむしる口說方なり。何程女振よくとも歌舞巧者なりとも十の七まで男の迷ふ譯は夫等の故にはあらず、此振といふものゝうまさにありと覺悟致さるべし。昔時より貞女賢女などの横戀慕仕かけられ候も多分此振に知らず〳〵あだなる所ありて男の心を動かし候より、思はぬ迷惑をかけらるゝ事にもなり候と考へられ候。凡ての振堅く正しく候はゞ餘程の馬鹿の外は道ならぬ戀を仕掛まじく候。扨振の秘傳は意味のなき譯の分らぬ振をする事に候。是は男の勝手に任せて道理を付させ候にて大抵野郞は自惚つよき故、いゝ加減に意味を付けて腹の中に深く味ひ、悅喜する者に候。若し又あしく取り候とも元々譯の分らぬ振故此方の講釋次第にてさん〳〵口舌の揚句、ウンさうか、おれが惡かつたなぞと鼻毛をのばし候。忘

氷の仁王樣のやうな奴に候。睨むやうに正しく見返すは心剛き頼母しき見込ある男なれど、それには他方を向く代り自分の膝を見候へばよろしく、何にせよ見かへす男は此方の者に候。此外喜びをあらはす細眼、すねて見せる下眼、怒つて見せる怖い眼（黑眼を正しく据ゑて怒つては色氣を失ひ候、對角にして額で睨む心持ゐるべし）醉たつもりに見するちら〳〵眼、心配を粧ふ空眼、何處とも目的なくして眼に力なきやう凝視る）愈々男を手に入れるに近き時分のぢつと見る殺し眼（此方を見る男の眼にひつたりと見合はして離れぬやうにすれば男堪へずして間拔の笑顏するか、言葉を出すか、手を出すものにて此時は最早義理も慾も忘れ居るものなり、）手に入れて後は口舌の種作るための癇癪眼、後朝に未練を引せる睡さうなあどけない眼（後朝にはつきりと眼を開くは恐くわるし）など種々の眼付御自分にてよく〳〵御工夫なさるべく候。手管の極意は心の謀計口のきゝ樣にあらず、物云はぬ眼の働きに候。第七は振にて閨の中の振までを合すれば七十二振ありといへど實は際限なく候、姿とは差ひ候て大事の者に候。男は女を口說に言葉を用ゐる候が、女が男を口說に口を用ゐるやうな拙きことにては淨瑠璃の御姬樣の色事同然、黑人業には候はず。さりとて男を口說かずに候ては生捉難く候。そこで女は振をもつて口說が肝要に御座候。然し尻を持つてまゐる樣ないやらしき振は蔑視るゝ種なれば中々むづかしきものなれど、都て同年位までの男をば犬猫を愛する樣に仕こなし、自分より年上の男には十一二の女の兒が兄に物をねだるやうにあまつたれ、氣象

に一人に候。大抵の男は女には惚れず、自分の自惚に惚れて迷つて騒ぐものに候。扨第六は眼にて候。眼の使ひやうは三十六通りもござ候べけれど最初は振掛目とや申すべき。情目使ひと昔時の人の申せしも是なり。是は一寸男の頭へ輕く此方の眼の光りを振りかけてやるだけにてよろしく、然する時根性定まらぬ男は一寸女に見られたるだけなるに最早内心にて。アヽ今朝出る時髭を剃つて來れば宜かつた。などゝ下らぬ見榮を其場限りの心ながらも考へ候ものなり。三四度も振りかけてやり候へば、鈍き男も鋭き男も心付て外へ出る時白足袋の垢れを厭ひ帽子の塵を拂ひ候。此時はほんの見榮だけなれど殊更に見榮をする男の心中をかしき白痴に候。又は却つて平常の通りにてすましゆき候男もあれど其男の眼の一寸にても動き候は矢張たましひのふらつきたる證據にて、其男は見榮をせぬといふ事を内々見榮に致し居る奴に候。次はたぐり目とも云ふべきか。此方より男を見れば見られて男見返すとたん、此方は他所を向き候て男遠慮なく我を見るやうになし、男又他所を見候時は此方の眼にて追かけ、男を見候やうの事即ち眼來り眼去る間の靈機をもつて男の魂魄をたぐり寄せ候やうの譯なり。酒のまだ廻らぬうちの一坐、芝居の隣り桝、溫泉宿にての近付、遊藝の稽古所其他堅き座敷にても此眼使ひ男を動し出す力あり候。但醜男へは此眼使ひに及はず、又此方より眼を送り候時向うよりもいやな眼付いたすもの御座候。夫等の男は大の助倍か馬鹿か錢なしの半可通かなり、其中にも輕蔑樣に此方を見るは贋豪傑にて、少こしつゝこく應接は直に手もなく融ける

とも聞分ける耳の開きたるがよろし、聲のよきは黒闇にも見ゆる美人とてひとしほの名譽に候へば、鹽酸加利水にて時々の含嗽怠らず、龍眼肉を常に用ゐるなど精々大切になさるべく候。第五は癖にて是は銘々の持前故是非なきもの〻樣なれど美人にあるべき癖とあるまじき癖とあり、癖のなき女には利口の男は決して呢かぬものに候。物を欲しがる癖、大酒を飲む癖、泣言を繰り返す癖、おしやべりの癖、居眠りの癖、腹立やすき癖、大笑ひする癖、下がゝりの障りいふ癖、高慢の癖、太つ腹らしくいふ癖などは美人にあるまじき癖なり、寛容すぎる癖、物云はぬ癖、夜もすがら寐られぬ癖、泣かずに恨む癖、恨まずに愁ふる癖、小供を愛る癖、小說を好む癖、神佛を信心する癖、又は猫蝶鶯小鳥などのやさしき生物を愛する癖、男に逢ふを嫌ふ癖、俠氣あるより少し出過ぎる癖などは皆それ〴〵の深き譯ありて男をのろくする癖の類なれば美人にありて苦しからず、精々あしき癖を去りてよき癖だけを殘さるべく候。以上の五つは色道裏の手の基礎にて是より先は愈々男をたらして藁に逢ふたる海鼠のやうにぐにや〳〵となし、鹽かけられたる蛞蝓のごとくとろ〳〵とろけさする手管の魂膽、手加減眼加減秘密の大事、よく〳〵讀みてさとらるべく候。

柔術の極意は相敵の力にて敵手を倒すごとく色道裏の手の極意はつまり男の心にて男の心を誑かすばかりに候。一躰男と申すものは大馬鹿のあんぽんたんにて、自惚より外は何も知らぬもの故、其自惚を此方の種にして色々の魔法を使ひ、好自在に仕こなす事に候。眞に能く女に惚れる男は千人

足勿論悪女なり、踏張足蹶蹴足外鰐大股いぢかり股無論美人ならず、早足の女必らず男に捨てらるもの、遲足の女屹度朋輩に蔑まるゝもの、凡て座敷を歩むときは輕くしとやかに足袋半分より多くは裾の内より露はさず、往來をあるく時は下駄の鼻緒をたよらず、ゆたかに輕き音さしてあるかるべくし。第三は嗜みにて色艶よくするため鳥獸の肉を嫌はず、湯茶を多く飲まず、津唾を亂りに吐かず、塵を捻り鬢をいぢるやうの五月蠅き手癖を戒め、無暗と衣紋を直す如き事をなさず、起居に骨鳴り節鳴りさせず、萬事につけ氣をつけ心を用ゐて假令は寐ごみに踏込まるゝとも醜き姿を見せず、よしや内々葱蒜を食ふたりとも其後にて直に熱湯に酢を點したるをもて嗽して人に知らせざる樣巧者にする事にてし。一度手に入れたる男を取迯ししも器量姿の衰ふる故にはあらで此嗜のゆるみしより起る事にて、いぎたなく枕を外し、差櫛を刎ね飛し、脇の下の白なまずを現はし、然も鼻より提灯を出し、夢の中に落したる白銅貨を搜し居る囈語など云ふ所を旦那が見ては三年の戀もさめるものにてし。下女を叱る時などには殊更色氣を失ひ嗜みを忘らるべからず。女は情をもつて人を使ふべく義理をもつて廉々しく人を責むるはまことに聞苦しくし。第四は藝にて、是は左まで大切のものにもなけれど、三味線の調子を心得、假名書の走り筆に文字の角とれて丸く、花の投込やうにも無理の無きほどまで位は知らねばよろしからず。喉は開かずと耳は開け、手は利かずとも眼は利けと申しし通り、喉の開きて歌ふ一節妙なるは云ふまでもなし、せめては歌ふ事をよくせず

を髪洗ふたびにつけ候へば色美しく黒く柔軟に素直になり候事受合にて此法を覺えたる或女は始終水髪にて頭自慢致し居り候。糸瓜の水は大騒ぎして付けるには及ばず、干瓢を少しづゝ湯に浸して用ゐるがよろし。半紙へ鷄卵の蛋白を引き乾かして置て一二寸づゝも切りて糠袋へ入れらるべし、それを用ゐれば顔の色照るばかりになり候、鷄卵一つにて十度十五度ぶりはあるべく候。都て御洒落は浴後に手足の爪を取るやうな不覺な心得にては役に立たず候。素人は一日で顔身躰を奇麗に致さんとあせり候故呉絽の垢擦で鼻の頭を磨りむき、鶯の糞で額の艶を失ひ候如き大笑となり候。氣を長く持つて毎日の事に致し候へば三助に指さゝるゝほどの長湯にも及ばず一月もたてばめつきり女振のあがるものに候。是等は申さずとも却つて能く御存知もあるべければあらましにして第二は姿に候。姿と申して半分は衣物履物冠りの物帶持物に候へど流行廢りむづかしければ是と指して御敎へ申し難く、大概は御自分の御工夫にあるべし。首付足付腰付姿の三大事に候。屈み過ぎたるは雁首眞直過ぎたるは搔頭首、兩方ともによろしからず、女の首付、座りたる時は雁になるとも搔頭になるな、歩く時はかんざしになるとも雁になるなと申す此二句よく〳〵御味はひなさるべく、七分三分の間を行きてよろし。腰付は浮たるも据りたるも皆惡し、先は尻を重たさうに見せずして腰のすわりたるがよろし。足付は姿の根本大々事なり。昔時より足の指に力を入れてあるくものに美人なし、女を貰ふに足の拇指を見るといふ女衒道の云傳も候。塵埃を立つる擦り足、地ひゞきする力

の堅藏變人なりともくる〳〵と手の内にまろめ候事造作もなき業にて、玉の輿に乗らうと臘虎の蒲團に寢やうと、お前様の好自在に候。此後御運めでたく御出世あそばされ候節は何卒わたくしへ御福分お忘れなく下されたく候。

先色道裏の手の第一は、貌をつくること肝要に候は申すまでもなく候へど、白粉の付やうの濃いの薄いの、口紅のさしやうの江戸風の京都風のと、其様な詮義だてして薄墨を唇に塗り玉蟲色に光らするなどの譯にてはなく、唯顔形の汚き所に氣を注けて取り去り申すやう心掛け候へば、俗に垢抜したると申す風に相成るべく候。にきびそばかすは白附子を酒に煉りて寐際につくれば全治候。ひゞ霜やけは爪際へ垢のたまるやうの事なきまで氣を注けて平常清潔に致され候へば憂ひなし。總躰顔のつくりは時々の流行にて變り候へど眉を剃り付けたり髮際を抜き揃へたりするは極の野暮に候故、矢張り素地を其まゝにて念入れ磨きたて、自然頬の上のむく毛のなくなる程毎日〳〵糠皺ふすまか小豆の粉などにてざつと洗はるべく、廉き石鹸はよろしからず、石鹸ならば上等の物をお用ゐなさるべく候。夏向は肥りたる方あせぼには弱られ候が胡瓜の切口にて摺られ候がよろしく候。歯は油斷なく良き齒磨にて磨きさへすれば齲齒となる氣遣なく候。風邪ひき頭痛逆上の時は必らず食後毎に口中掃除忘たらぬやうなさるべし。髪の毛薄赤く又は縮れたるに染粉や野師薬はよろしからず、梧桐の葉の莖を五分位づゝに切り溫湯に浸しおけば暫くしてぬら〳〵としたる汁出て候、是

艶魔傳

人々足元あやふきおとし穽
仕掛けの機關はこんなものか

御手紙拜見致し御身の上御齢御器量等委細承知仕り、且又傳受金たしかに受取申し候。扨色道と一概には申し候へども、表裏ある事にて御座候。表とは律義一遍の色戀にて、主親にも隱しだてに及ばず、誰に聞れても苦しからざる筋の事。假令ば夫を戀ひ妻を戀ひ候やうの事なれば、きまりきつたるお話し、別段御傳受の致しやうもこれ無く候。然し御前樣御身分などより推察いたし候て、無論裏の方の御執心と考へ候につき、あらかた左に記し述べ候。都て何によらず表はやさしきものにて、琴曲も裏組を彈きなすまでには一寸面倒に候通り、別けて斯道の表はともかくも裏の手のむづかしきは中々に候。つまり表は目的一つ故女の道を眞直にたどりさへ致せばよろしく候へども、裏は目的二つ故千鳥足に色戀を縫ふてあるきながら財寶を拾ひ取るやうなむづかしき業とよく〳〵御用心なさるべく候。其代り御傳受申し候廉々、よく御つかひこなしなされ候へば、天下の男共如何樣

夜とも云はうといふ婢が出て來て、こちらへといふ、入つて見れば淨瑠璃御前が、御顏の紅葉初楓、といふ寸法になつて見れねばならぬ筈だのに、これぢやあ陰德陽報も當にならない、ア、陰德陽報も虚妄の皮だ、餘り陽報が無さ過ぎる、あれほど陰德を施したのにナア、と愚痴を溢す、親父は息子が陰德沙汰に散々困められて内々慍り居たるところ、此の愚にもつかぬ述懷を聞きて、忌々しさも忌々しく可笑さも可笑く、馬鹿め、いくら陰德陽報が眞實のことだつて只今陰德を施したばかりて左樣早く陽報があるものか、陰德々々と云ふけれどもお前が陰德を施してから何時間經つものか、と叱りつくれば、息子、ハハア、やつぱり五時間たゝなくッちやア利きませんかテ。

萬八

おらア素的滅法界に立派な釣道具をこしらへたぜと誇る男ある故、竿は何だと聞けば、竿は手元が象牙で鼈甲の十二本つなぎだ、といふ。成程恐ろしい豪氣な竿だが、綸は、と問へば、綸は續ぎ目無しで惣天蠶絲だ、といふ。よくまあ其樣な天蠶絲があつたものだが、それぢやあ鉤は。鉤は黄金無垢だ。イヤ是は驚いた、それぢやあ沈子は。沈子は銀無垢だ。へーエ、そりやあ可いが餌は何樣いふものだ。ム、餌か。オ、餌よ、餌はつかりはたゞの餌か。馬鹿ア云へ、たゞの汚い餌で詰まるもんか。そんなら何だ。ム、、餌は八百善へあつらへたがまだ出來ねえや。

龍眼寺に至りても萩は一向見ずして、無縁の墓は無いか、と尋ぬれば和尚も肝を潰して答へ澱みたり。かくてやう〳〵歸り路に就きけるが、息子は、今日は大分陰德を仕たりと思ふまゝ心いそ〳〵と勢よけれど、親父は自分のみ人力車にも乘られぬまゝ彼方此方引き廻されて老脚の大に弱り、路行く足も捗取らぬ折から、秋の天の習ひとて今まで靑かりしも急に雲立して大粒の雨降り出せば、これは難儀と人力車を求むるところへ、折能く一挺の空車來れり。親父はこれに力を得て、賃錢の押問答をする最中に、これも萩寺の戻りと見えて歌でも詠みさうなる五十ばかりの人品好き寡婦、同じく雨に小蝙蝠傘の防ぎ甲斐無く、人力車欲しげに行き過ぐるを、見るより息子は呼び止めて、こゝは柳島の不便なところ、人力車はなか〳〵ござりませぬ、召したいと御思ひなら讓つて差上ませう、と折角親父の極めかけた人力車を讓れば、寡婦は悅んで乘つて去りぬ。これも陰德には相違なければ親父も是非無く人力車に乘りはぐりて、小さき傘を賴みに行きけるが、雨はいよ〳〵烈しくなりて篠を束ねて降り來るに、骨まで濡れ徹る心地して、何とも堪へかねつ、ぶつ〳〵言ひながら步めば、息子も初の中は年の若き勢に鼻歌であしらひ居しかど、いつまでも止まぬ大降りに我を折りて少し恨み聲になり、お父さん、雨宿りするところもありませんチ、ア、ア、今日は隨分骨を折つて今の今まで陰德を施したのだから、一躰ならば此の邊に、主人ゆかしき一ト構へ、槇の生籬に柴折戶とでもいふ誂への家があつて、そこで私等が其門に立つて雨宿りを仕て居ると、冷泉十五

やうな指でピリ〳〵ッと裂く、菫香水の香が空に波立つ、妾の肩に御つかまりなさいッていふんで、襟足の好いところを惜氣も無く見せつけられて、絹手巾で鼻緒を立て丶貰ふなんて云ふのは、色男冥理、オホン、本物だ、本物だ、有り難への眞中の本寸法といふのだ、陰徳の事だ陰徳の事だ、陰徳あれば陽報ありか、アッ成程、かたじけない、陰徳陰徳、陰徳に限る、と息子は夢中になつて悦べは、何をぐど〳〵と云つて居る、と親父も大概にして其日は止みぬ。

其の翌日の朝早く、お父さん、今日は日曜ですから、陰徳蕩樂と出かけたうございますが、初日のことですからお父さんと御一緒に參りたうございます、と息子の云ひ出せば、親父苦笑ひして、何様も困る奴だ、陰徳といつて左様わざ〳〵出掛けずとも、心がけてさへ居れば出來るものを、然し折角善いことを思ひ立つた端を挫くでもあるまい、よし〳〵、それでは今日は日曜でもあり秋草の見頃の時節でもありするから、向島の百花園をかけて萩寺へでも廻つて歸るつもりで出やう、と親子連れ立ちて家を出でたり。息子は今日を陰徳蕩樂の初日と、遮に無に陰徳を心がけ、淺草の本願寺の寺内の乞食には一人につき五錢づ丶吳れて遣り、觀音の鳩には豆の大盤振舞をなし、吾妻橋の上にてもまた乞食に五錢づ丶遣り、向島の藝妓家のあるあたりにては、此處で挽き惱む車でもあれかし後押しを仕てやらんなど丶思ひながら花屋敷に入り、萩も女郎花も咲いたか咲かぬか知らずに只管陰徳を思ひつゞけ、それより龜井戸に行く路にて三度百姓車の後を押して散々に羽織を泥にし、

ら思ひ付か無かつたに不思議は無かつたが、其妓の話で思ひ出したは丁度六年ばかり前のこと、若荷谷の白鷗さんを尋ねた歸り路、不圖見ると町の角に泣いて居る女の兒がある、容貌が好いには似ず甚い衣服を着て惡い血色を仕て居るのが見るから可憫だつたから近づいて、何で其のやうに泣くのだと尋ねて遣つたところが、しく〳〵泣きながらの挨拶が、平常から恐ろしい慳貪な繼母に責められて居る中で、今日は特更二圓札一枚を持たせられて實母散を一帖貰ひに遣らされた路で、怖い人に面を撲たれて其の紙幣を奪られて仕舞つたゝめ、家へ歸れば何のやうに叱られやうか折檻されやうかと、それが恐ろしく悲くて泣いて居たとの一部始終、そこで私が二圓遣つて、他所の老夫さんに貰つたなぞと云はずに、奪られ無かつたつもりにして濟ますが宜い、と敎へて遣つたとがあつた、其時の十二三の女の兒が、今の立派な藝妓とは、云はれて氣がついて吃驚した、まア此樣なことも有つたものサ。へ、ーエ、して其の藝妓は下谷ですか、何屋の何といふのでござります。馬鹿め、それを聞いてお前は何にする氣だ、たゞ陰德の報のことをいふから話して聞かせれば、もう女好の地金を出し居る、大方忠兵衞にならうといふ料簡だらうが、左樣いふ氣になるだらうと思ふから態と名を聞かせぬのだ、さあ女の事は兎に角に陰德の方は何樣したのだ、兎てもお前には出來まいがの。イエ〳〵何樣しまして、陰德々々、陰德道樂と決めました、ア、有り難い、好い娛樂ですな、成程陰德陽報といふことは小耳に挾んで居りましたが、白い齒でもつてチヨイと咬む、白魚の

には何事もありませんかネ。左様さ、此春の事だつた、夜の間にしつとり降つた雨が上つて、朝櫻の眺も嘸かしといふ曉天、私一人で不忍の辨天樣の御境内へ差しかゝつた時、何樣したものか駒下駄の前壺がフッと斷れた、雨の後だから泥濘路ではあり、生憎フラリと出かけたのだつたから、足袋も穿いては居ず、これは困つたと袂を探つたが鼻紙も無し、何十年にも跣足になつたことは無いから、それも成り兼ねて當惑して居た、すると其處へ朝詣りを濟ませて來かゝつたのが、お召の粋な平常衣に同し平常羽織を引掛けた色の眞白な眼のパッチリとした十八か九の藝妓だネ、それが私の風を見るや否や近寄つて來て、御困りでござりませう、と云ひながら自分の帶の間を探つたが、これも生憎丈夫さうな紙を持た無かつた、ところが私の挨拶も何も爲る間の無い中に袂から綺麗な絹手巾を出して、チョイと美しい前齒に手傳はせる、寶石入りの黄金の指輪の幾個も嵌つて居る白魚のやうな指に力を入れてピリ〳〵ッと扯き裂く、途端に菫香水の香がパッと立つた、オヤッと驚く間も無く、お年寄のおいとしやお足もすゝぎ鼻緒もすげてあげませう少しも御遠慮なさるゝな、と遣らかした新口村の梅川といふ格でもつて其辨天樣のやうなのが、私が手をば其柔かな肩に掛けさせて置いて身を屈めて手早く鼻緒をすげて呉れたぢやア無いか、私も實に其時は嬉しかつたよ、しかし知らぬ人に其樣な介抱を受ける譯は無し、餘り勿躰無いやうな氣持が仕たから切りに辭退を仕たところ、それには因由のあつたことで、私はすつかり忘れて居たし、先方が大層變つて居たか

留めたり、又は用足しに出た途中で、雨上りの坂路に老人や小兒の力に餘る車を挽きかねて困つて居るのを後押しを爲て遣つて助けたり、又或時は些少な金のために悲い愁歎場に立つて居る人を、假令見ず知らずでも財布を拂いて助けて遣つたり、すべて他人のためになることに力を假して、そして其の事を誰にも知らさず、右の手で施して左の手では知らぬといふやうに慈善のことを爲るのを旨とするのだ。成程々々、解りました、しかし左樣いふことを爲て遣りますと、何か好いことでも湧いて來ますか。イヤ元より返報を得やうといつて爲ることでは無いから、別に何事も湧いて來ない、たゞ其の德を施す時に何とも云へぬ樂しい快い心持がするので、それは實地に陰德を積んだものでなければ知らない味だ、そして別に何事も湧いては來ないが、古くから陰德陽報とさへ云つてある位だから、少しは陰德の報かと思ふやうな目に會つたこともあるナ。へーエ、何樣いふ事がありましたナ。去年の冬のことだつた、山城屋の息子さんの外國へ行くのを送るので、大勢と一所に新橋の停車場へ行つた彼の時、大眉一同が時計だの財囊だのを奪られました、大和屋さん伊勢屋さんは黃金時計を奪られるし、河內屋さん近江屋さん駿河屋さんは財囊を奪られた、其時私も相應な金の入つて居た財囊を掏摸取られたが、何樣いふ譯だか私のだけ現金の入つたまゝで警察署へ投げ込んだものがあつたとやらで手に復つた、現金の戻るといふことは決して無いものだと云つて警察でも不審した、心當りは何も無いが、これらも陰德の所爲かと私は思つて居る。成程、そのほか

業して終つて、たゞの老夫になつたといふものだ、お前などは女にかゝるより他には何の蕩樂にも未だ箸を着けたことの無い二才だもの、蕩樂と名のつくほどの事なら俳諧だらうが茶だらうが何を仕て見たつて面白くない筈は無い、おれの仕て居ないことだから面白くなからうといふのは、そりやあ些とお前なんぞの口からは言ひ過ぎたことだ、又此のおれだつても生きた人間だもの、蕩樂の無い氣づかひは無い、それは矢張娯樂に仕て居ることがある、しかも大娯樂に仕て居ることがある、談して聞かせたことが無いからお前が知らぬばかりなのだ、然し乃公が秘密に仕て居る今の娯樂は、お前なんぞには未だ中々面白いと思ひ得ることとては無いから、わざ〳〵お前にも勸めぬので、それに又お前達に知らせるのも些香ばしくないと思ふからさ、と云へば、息子は秘さるゝものゝ見たき習にて、へー、お父さんにも内々の御蕩樂があるのですか、どうか其の御蕩樂を御聞かせなすつて下さい、面白いと思ひ得るか得ないかは知れませぬが、同じことならお父さんと一ツ蕩樂を仕た方が始終談話が合つて宜からうと思ひます、といふ。ハヽハヽ、それではお前は親父を蕩樂友達に仕やうといふのだナ、ムヽ、併し親子で蕩樂友達になり合たところで、それが悪い娯樂でさへ無ければ差支は無い、それぢや今まで秘して居た私の蕩樂を云つて聞かすが、それがお前に出來れば好いがサ、私の今の蕩樂は、陰徳を施すといふことなのだ。へーエ、して陰徳と申しますと。さればサ、例へば私がお寺詣りをする、其次に無緣墓の取り壞されかゝつてゐるのを方丈樣に申し入れて取り

どれもこれも爲て見る氣が無いと、左樣食はず嫌ひでは仕方が無い。これ汝の品行の宜く無いのも畢竟は好い遊びを知らぬからだと思つて優しく言ひ聞かせて遣るのに、何も彼も一概に食はずぎらひで厭だ厭だと云つて居ては仕方が無い、撃劍や白打や大弓や馬術などは猶のこと汝は爲はすまい、して見れば汝は一も二も無く此のおれの折角の心添を無にするといふものだ、孝行氣の無いにも程度のあつたものだ、憎い奴め。と初は穩やかに勸め居たりし親父も、餘りのことに腹立ちて、終には些強く叱りつくれば、息子も少し屈しけるが、猶何を娯樂にせんとも云ひ出さず。いろ〳〵仰つて下さいましたが、どれも是も餘り面白さうにも思ひませぬ、一躰お父さんも何を娯樂になすつて居らつしやると云ふことも無いやうに見えますが、そこを考へて見ますと、つまり今仰つたいろ〳〵の遊びも、實は大しておもしろいことでも無いかと思ひます、だつて若し眞實におもしろい遊びなら御父さんが先づ第一に娯樂に仕て居らつしやる筈ではありませんか、御父さんはまあ當時では別に御蕩樂も無いやうですが、何を御娯樂に仕て居らつしやいます、と口賢く云ふ。親父はこれを聞いて笑ひながら、イヤおれが娯樂に仕て居ぬことだから大して面白いことでもあるまいと思ふのは道理らしい云ひぶんだが、おれは既實はいろ〳〵の娯樂を仕て來たものだ、唄も歌へば俳諧も行つた、芝居にも凝れば茶湯にも凝つた、で、その擧句にお前の見る通りな朴然人になつて平々凡々に今日を送つて居るのだ、だから自分から云つては些をかしいが、云はゞいろ〳〵の蕩樂を卒

ところへ呼びつけ、これ忰、これだけの財産のおれの家のことだから、遊ぶなといふても無い、金を遣ふなといふても無いが、併し惡所へ入つたり女を嫐つたりして遊ぶばかりなは、餘り下品で智慧が無さ過ぎる、といふものだ。同じ金を遣ふて遊ぶなら成るべく上品で面白い遊びを仕たが宜いでは無いか。遊びにもいろ〳〵ある、香花茶湯蹴鞠詩歌管絃は昔時から身分のあるもの丶遊びだが、その中でも茶湯などは行つて見ると面白いと見えて今でも流行るナ、どうだお前も茶でも行つて見ないか、究屈らしいから厭だといふのか、ム、左樣無風雅ては仕方が無い。詩歌は學問の無いものには急に出來ぬが、發句や雜俳なら誰でも出來る、どうだ行つて見る氣は無いか、中々おもしろい慰みだが、ム、思案するのが苦勞くさくて厭だといふのかい。それぢやアおれは仕たことが無いが銃獵や釣魚は何樣だい、あれも隨分長閑氣でおもしろさうだぜ、ナニ殺生は嫌ひだと。そんなら寫眞は何樣だ、寫眞も厭かい。盆栽は何樣だ、矢張り嫌かい。それでは少し古風だが、實はおれも若い中はいろ〳〵な蕩樂を仕て覺えがあるけれど、長唄なんぞが些ばかり出來て來ると强氣に嬉しくて面白いもんだから、お前も長唄でも習つては何樣だ、長唄が厭なら、澁がつたところでは、河東や一中、行はれては居無いが富本も好いぜ、ぐつと俗なところでは義太夫だが義太夫なら連中も多からうし、隨分どれでも慰みになる、横に外れて淸樂や尺八や謠曲なども大分行る人の多いのを見れば、其の道に入つて見ると何もおもしろいに違無い、何樣だ、何か一つ娛樂を爲たが好い。何だと、

から、わたくしの過失とは云ふものゝ、左様〳〵御叱責を被る理もございますまい、といふ。巡査は其言葉を聞いて冷笑しながら、如何にも夜道の暗さより過失が出來たには相違あるまいが、其の暗さを照らすためにアセチリンとか何とかの明るい燈を點じて居らるゝでは無いか、本職の携帶して居る燈などより數倍明るいものを持ちながら、闇夜だつたから衝突したと、罪を暗さにばかり歸せんとするは甚だ卑劣な云分では無いか、アーン、コラ、たゞし斯樣に明るい此の洋燈でも、五尺餘りの人間一人が全く見え無かつたといふ理屈があるか、と手強く理の當然をもて責むれば、洋服男はグツと詰りしが、忌々しさのムシヤクシヤ腹にて、默つて引退る譯には行かず、然し此の自轉車の速力が強いので、燈光の方が後になりましたものですから、彼男の姿の見えない中に既衝突して居りました、ハイ、車の方が燈光より前へ出たのですから、仕方がありません。

陰徳

たゞ一人の子息、特のほかの女好きにて、女郎をも買へば藝妓をも買ひ、女義太夫をも買へば女俳優をも買ひ、月極の妾をも置けばお轉婆の女學生にも手を出し、待合の女將の大年增より堅氣の家のお半のやうな小娘に至るまで、少し奇麗な女とさへあれば何でも關はずに關係を付くる故、紛紜も度々起りて嫁も居着かず、年中面倒なる事のみ絶えざれば、甘き親父も耐へかねて、一日人無き

度は首尾よく年數ものを釣りおげゝれば、何とも云へぬ嬉しさを面に現して悠々と啣へ煙管にて脂下り居けるが、其中に秋風颯と吹きて、舟ゆら〳〵と動く途端、魚室の中の鱸魚水に搖るゝ勢に乘つて、ポンと一ト跳ね跳ねて川へ飛び込めば煙管をパタリと落して水の面を見ながら、アッ、情無え、自由廢業かい。

速力

自轉車に乘りたる洋服男、得意になりて向島の堤の夜道を我が物顏に恐ろしく疾く走り居けるが、やがて過つて職工躰の男に衝突りければ、其男大に怒りて、罪を詫びるをも肯かす散々に罵り騷ぐ。洋服男も終には堪忍袋の緒を斷りて、一ッ二ッ言ひ爭へば、紛紜はいよ〳〵長くなりて涯無きところへ、巡査來かゝりて其の仔細を問ふ。双方の男一應言ひたきだけの理屈を言ふを、つく〳〵と聞き果てゝ、巡査は洋服男に打向ひ、兎に角其方が宜しく無い、紳士ともあるべきものが他人に衝突するといふ無作法なことがありますか、無禮とも不法とも言ひやうの無い振舞ではありませんか、と此の巡査平民好きと見えて十分に職工の肩を持ち洋服男の頭を抑ふれば、自轉車乘り大に不平にて、貴官は其の樣に仰ありますが、何も故意に爲たことゝては無し、夜道のことゝて彼方でも注意が足らなかつたゝめ終に衝突するに立到つたのです、全く暗くて見えなかつたから起つたことです

も分別くさき顏の老夫、もし〳〵こゝにある此の身躰半分寫つて居るがは若干でがす、と問へば、寫眞屋の男、それは手札形でございまして、三枚七十五錢でございます、といふ。そんだらこの首ばかり寫つたのは。へー、それも矢張り手札ですから同價でございます。ハア左樣でござるかの、そんだら此の身躰全部寫つて居るのは、と又聞く。へー、それも同價でございます、と云へば、コレ寫眞屋殿、七十五錢は屹度拂ひ申すから、身躰全部寫してくんさろ、馬鹿にして首ばかり寫したりなんど仕たら承知するもんでござんねえぞ、年は老り申したが端折村の甚次郎兵衛といつては經濟學ぐらゐ覗いたことのあるものでがす、ナント皆の衆も聞かしつたか、首ばかりでも身躰半分でも、身躰すつかりでも、どれでも同じ價だと云ふでがすよ、田舍漢だとおもはれて馬鹿にされて首ばかり寫されないやうに用心さつせい。

本音

女郎屋の主人鱸魚釣りを心掛け、中川に至りてベカ舟を中流に浮べ、餘所目には太公望もよろしくといふ風雅な顏つきして釣り居けるが、やがて大なるを鉤にかけて、悅びながら手繰り寄せ、今少しにて手に入れんとせしに、例の鱸魚の十八番にて烈しく頭を振つて鰓を洗ふや否や鉤を脫してフイと逃げゝれば、畜生ッ、忌々しい、格子まで來て歸りやがつた、と罵りたり。さて又少時して此

へて唐見共に持つて行かせ、六人の福神達の店で賣り弘めて呉れと頼み玉へば、ほかならぬ布袋殿の御頼み、委細心得ました、と六軒で受合ひ込みて賣りしが、買つて行きしものども頓て皆大怒りに怒つて、ひどいものを賣りつけたナ、どこに此樣な酒があるものか、と云つて來る故、六人の福神達、これは迷惑の事と打揃つて布袋の許に至り、一躰全躰どういふ釀造法でこしらへた何樣いふものを仕込んだのぢや、と問ひ糺せば、布袋樣は濟ました顔にて、イヤ釀造も何も爲るものか、ハテわしがことぢやもの、中身はたゞの水ばかり。

復讎

口の惡き男、お三の大きな臀をポンと敲きて、どうもおめえの臀は强氣な臀だよ、昨日もおめえが買物に行くとつて橫丁を曲つたッけが、おめえが橫丁に這入つて仕舞つても時計で云へば五分ばかりが間は臀が遺つて見えて居たぜ、ほんとに素晴しい大な臀だ、と云へば、お三あざ笑つて、して見りやお前の一ト月の挊ぎは、たか〳〵わたしの湯文字代だね。

用心

田舍漢の頂上といふ男五六人寫眞屋へ入り、故郷へのみやげに撮影して貰はんと犇めきあふ。中に

福神

如何に福神なればとて遊んでばかり居るも勿躰無し、といふところより、辨天さま先づ一番に酒屋の店を出して、いろ娘といふ名の酒を賣り弘め玉ひしに、大流行りに流行りければ、福祿壽も其眞似をして福娘といふ酒を賣り出し玉ひ、これも大當りに當り、それに續いて壽老人も負けぬ氣になり、白鹿といふを賣り出し玉ひけるが、是また大に世に行はれ、とう〳〵いづれも皆立派な株に仕て仕舞ひたまへり。ほかの福神達は、さう〳〵同じ商買を始めるも面白くなし、第一自然商買上の競爭でも爲るやうなハメになりでも仕た日には詰らぬ談なり、さりとて福神ともあらうものが葉茶屋や生藥屋の店も出せまい、と皆遠慮して何もせずに歳月を過ごし居玉ひけるが、其中御維新となりて時世の態こと〴〵く變りければ、こゝで一ッ新規な思ひつきも有らう、と惠比壽樣は麥酒を製して賣り出したまへるに、惠比壽麥酒惠比壽麥酒との大評判なり。それではおれもと大黑樣は甲斐產葡萄酒を賣り出したまひけるに、これも中々の上景氣なれば、左樣いふ譯なら乃公も何か仕て見やうと、毘沙門樣までがカブト麥酒といふのを製して賣りたまひしが、是も劣らず賣れる樣子にて、贔負の評判もちらほら聞ゆ。おとへ殘りしは布袋樣ばかりとなりたまひしが、皆が左樣いふことをするなら、どれ〳〵、おれも、と遲まきながら商買を始める氣になり玉ひ、急に瓶詰をこしら

うなる顔を可笑く隈取りてチョン髷の假髮を着け、黄色の手拭を頸へ巻きつけ、誰彼の見さかひも無く、君、一杯獻上、先生あげませう、などゝ呼びかけて、大機嫌にて浮かるゝさま何とも云へずをかしければ、今日の獲物は、此の滑稽漢と、狙ひ澄ましてパチリと撮影し込み、家に歸りて暗室に入り、大樂みにて現像するに、眼について居る彼の吹火面は些とも現れて來ず、顔らしいところは何だか變な樣子なれば、ハテ不思議なと思ひながら現像を濟ませて、さてよく〳〵見れば、生醉の姿はチャンと寫つて居れど、顔は無くつて瓢簞ばつかり。

漢學

漢學者洋學者打交りて雜談する折ふし、一人の洋學者巻煙草の灰を拂ひながら、イヤ先日あるところで此頃流行るラム酒といふのを勸められて、わたしは酒客では無いが一杯飮んで見たところ、餘り美味でも無かつたのみならず、非常に醉つて仕舞つて大苦みを仕ました、實にラムには懲り〳〵しました、と云へば、漢學者はそれ見たことかといふやうな顔をして、デござるから漢籍もチト御讀みなされと申すのです、日本酒は兎に角、ラムは飮らぬが先づ宜しいテ、旣に、酒は量無しラムに及ばずといふ本文がござる。

云へば親父笑ひながら、ドッコイ、おらにも洒落がある、そら能く聞きなよ、高點ものだぞ、よしか、あんまり釣れない、もう行くな。

膝栗毛

物事を自分の思ふやうにのみ押し曲げて合點したがる癖の男、ある學者に向ひて、先生、あの膝栗毛といふことを能く申しますが、一躰膝栗毛とは何のことを云つたものでございます、と問へば、さればさ、別に何といふことは無いのぢやが、人々の持つて生れた兩脚を馬に擬へて云ふたのぢや、と云ふを皆まで聞かずして、ハヽア、こりやア好い哩、成程ちと短いが鞭も添ふてあります。

寫眞

寫眞に凝りたる男、段々と上達して、景色ばかり寫して居ても面白からず思ひ、これからは四季さま〴〵の都鄙の風俗を撮影さんとて、レンスはギョルツ、暗箱はモノポール、これなら何のやうに早く動くものでも寫るといふのを買ひ込み、花の中から鐘が鳴る上野の春の長閑さに遊び狂ふ人々の風躰をパチリ〳〵と早業に撮影し取りて悦び居けるが、其中向ふの方より大な瓢箪を差し上げたり振り舞はしたりして、ぐにや〳〵よろ〳〵と、あぶなげに躍り來る男あり。さなきだに吹火面のや

出來ないか、と次郎が責むれば、三郎はグッ〳〵と詰まつて面を赤くし、ナニ出來ねえことがあるものか、と力みしが、やがて笭箵を振りまはして、おいらは二尾や三尾釣つたつて仕方が無いから、全然釣らねえところが、エヘンエヘン、空で强勢一本も鷄魚無き、と遣らかす心算さ、といふ。太郎と次郎とは顏を見合せしが、頓と解らず、一躰それは何の洒落だと尋ぬれば、弟は冷笑つて、不器用な耳の孔だなあ、唐で孔明日本で楠木と云ふ本文さ、といふ。これはまた恐ろしいこじつけかたゝと皆々大笑ひを仕て、これなら大概御父さんも笑はずには居られまいから、定めし野暮も仰あるまい、と安心し、打連れて家へ歸りけるが、兄はまづ、御父さん、たゞ今歸りました、惡い風が出ましたので御家苞が一向ございません、といふ。それ見たことか、それだから止せと云つたのだ、一躰何尾ほど獲つた、といふところへ、次郎が早くも、わたしは三尾釣りました、きすつり〳〵三鷄魚釣りは御父さん好うございませう、といふ。其尾について太郎も、わたくしは兄甲斐も無くたつた一尾でございます、そこで鷄魚は一尾の耻は點になりませぬか、といふ。親父もこれに少し笑ひかけて、三郎は、といへば、三郎空笭箵を振り舞はして、二尾や三尾釣らねえところが、ヘン、空で强勢一本も鷄魚無きといふのだ、と甘つたれて威張るに、流石の親父も一寸聞きかねしが、やがてそれと悟つて、餘りのこじつけに可笑さ堪らず、大笑ひに笑ひ出して上機嫌となりたり。しめたと三人は口を揃へて、御父さん明日は屹度釣つて來るから今日の入り合せに行かせて下さい、と

兄弟三人鶏魚釣に行きしが、風なみ悪くしてさつぱり釣れず、竿をかたげて力無く歸る途中、こればかりの家苞では御父さんも定めし不機嫌であらうが、どうしたら宜からう、今日出るのにさへ、屹度澤山おみやげを取つてまゐりますからの、なんのかのと云つてやう〳〵許して貰つた位だから、こんなに釣れないところを見せた日には、馬鹿々々しいから釣なんぞよせ、と云はれるか何だか分らない、いつそ魚屋へ寄つて何匹か買ひ足して行かうか、と季の弟が云へば、仲のが、魚屋で買ひ足すといふのは、目刺や蒲鉾を持つて歸つたといふ古い落語にも似臭くておもしろくない、何か他に御父さんの機嫌を好くする智慧はあるまいか、と云ふ。兄は兄だけに少時思案したりしが忽ち笑つて、イヤ好いことを考へ出した、吾家の御父さんは口合がゝつたことが大好だから、釣れ無いのは仕方が無いとして、その釣れないにつけて一つづゝ駄洒落をこぢつけたらば、それで機嫌が直るだらう、そしたら其處へ付け込んで明日も釣に行かせて下さいと云はうでは無いか、と云へば、なるほど、なるほど、それは好い案じだと、各自口合を考へけるが、仲のが先づ、おいらはたつた三尾釣つたのだから、鶏魚釣り鶏魚釣り三鶏魚釣り、と遣らかさう、といふ。ハ、ア、菊桐菊桐三菊桐といふ饒舌歌の口合か、いやこじつけた、こじつけた、おれは兄のくせに、たつた一尾しか釣らぬのだから、ほんとにこれが、きすは一尾の耻といふのだ、と惣領が云ふ。兄さんは兄さんだけに巧い巧い、さあこれで兄さんとおいらとは出來たが、三郎おまへは鶏魚も全然釣らないが洒落もまだ

て大に面白がり居けるが、そんなら小父さんは戰爭も知つて居るか、と問へば、問はれて知らぬとは云ひにくきまゝ、知らないでサ、旭日の旗を押立てゝ列國の眞先に立ち、義和團を打破つて北京公使館の圍を解いた時なぞの火花を散らした戰爭の光景は、そりやア大したものだつた、と勢込んて話すを先刻より傍に默つて聞き居し男承知せず、虛言をおつきなさい、おまへさんは支那へ渡つたことも無いのに、と一本突込む。兵隊あがりはグッと詰まりしが、イヤそれでも戰爭を見たことは見た、と剛情を張る。そんなら何處で何日御覽になつた、と責むれば、昨日上野のパノラマで。

自慢

高慢くさき田舍漢娘を連れて東京見物に來り、知り合ひのかたをおとづれけるに、主人は都人のことゝて大の世辭上手なれば、時にまあ御娘御は大さう御美う御成人になりましたナ、どうして東京にも中々無い御器量好し、今に額て繪にかいた小野の小町のやうにおなりでしやうと云ふと、親父眞面目くさつて、これはこれは、御眼の高いには恐れ入りました、實はその往昔の小町も手前ども村の出身で、即われの母は小町が姉の家の系統に當つて居りまするで、オホン、オホン。

口合

夫、小ざつぱりした衣服を着、鬚月代も仕濟して、取りかたづけたる顏つき仔細らしく、折角繪姿を取つて遣らうとの御話でしたから、小羞しいが二十三の年に婿入り仕た以來三十七年ぶりで些少べい男ぶりを磨いて參りやした、ハヽヽハヽヽ。

禁酒

酒好きの男、何に感じてか金毘羅樣へ禁酒の誓文を立てけるが、一週間ばかりして、或寄り合の席上にて朋友四五人の美味さうに飮みあふを見るより、飮みたしとおもふ心、矢も楯もたまらずなり、オイ自分達ばかりで飮まずと、おれにも一盃くれねえか、と云へば、皆々肝を潰して、飛んでも無い事だ、おめへは金毘羅樣へ誓文して禁酒をしたといふでは無いか、飮むのは可いが罰が當らうぜ、と意見すれども一向聽かず、ナアニそこは神樣のことだから、彼の禁酒は末遂げめえと初手から御見通しになつていらしつたに相違無え、禁酒したには違ひ無いが實はありやアほんの出來心さ。

戰爭見物

夏の夜風の心よければ、人々凉み臺にてさま〴〵の浮世談を仕合ふところへ、去年の暮滿期除隊になりし兵隊あがりの男も來りていろ〳〵軍人の朝夕の行儀など話す。十三四の學校生徒これを聞き

やうなる獵好の朋友の尋ね來りしかば、取りあへず此事を話し出したり。客の獵天狗は一心になりて主の獵天狗の談を聞き居りしが、やがて殘念千萬といふ顏つきを仕て、それだから君はまだ青いといふのだ、六號彈でも可いから、先づ脚の尖を狙つて擊てば好かつたのに、その智慧が無いものだから仕留め得無かつたのだ、ア丶惜いことを仕た、業腹な。

もてる

若き畫師ある日四ッ谷街道を步きけるに、向ふの方より糞桶を擔いて、おわい〳〵と云つて來る老夫の顏つき如何にも古雅にて、鼻は龍の如く、眼は猿の如く、大きなへの字口、逆さ眉、頤鬚、ほほ髭のもぢや〳〵として、髮の蓬々としたところから、顏の色の妙に日に燒け黑みて煤けたやうなる工合まで何とも云へず面白く覺えければ、此奴を『もてる』にして仙人を描いて、一ッ今度の共進會にやんやと云はれやうといふ氣になり、急に襤褸の袖を扯き止めて、おれは畫師ぢやが、おまへの顏を書に取りたいから明日わしのところへ來て吳れぬか、日當は屹度あげるから、と云へば、老夫は飛んだ理解の好い男にて、大呑み込みに呑み込みて、畫師の名刺を受け取つて別れたり。さて其翌日になりて畫師は畫の道具を取り揃へて待つところへ、御免下さいといふ聲は彼の老夫なり。待ちかねたるところなれば、さあ〳〵こちらへと自ら立つて迎ふるに、これは如何なこと、彼の老

もせねば藝事もせずに居つたと申すが、一躰何をして日を暮らし居つた、善人とも見えねば惡人とも見えぬ、不審な奴ぢや、と睨みつけ玉ひしまゝ閻王しばらく御思案ありしが、やがて横手を拍ち玉ひて、ム、知れた知れた、コリヤ獄卒ども、此奴を丸藥地獄へ差送れ、と差圖仕玉ふ。鬼共は心得ました、と領承して、サア罪人め、きり〳〵歩め、因果應報ぢち、是非は無い哩、と逐ひ立てる。男は身に罪を犯せし覺も無きに、と寃枉を怨みながら、是非なくも其地獄に逐ひ入れられしが、さて其地獄に入りて見れば、思ひの外にこれといふ苦みも無くて、たゞ何か知れぬ小なものが飛で來てはポツリ〳〵と頭にあたるばかりなり。別に痛とも痒いとも云ふでは無けれど、何が何處から飛んで來て頭にあたるのであらうと、男合點ゆかず思ひて、よく〳〵四方を見廻すと、閑暇さうな鬼共が四五人て、退屈らしい顔をしながら、鼻糞を丸めて掌上へ載せては此方へ向けて、フツ、フ、ツ。

獵天狗

銃獵に凝り詰めたる男、雉子を擊たんと溪間をあさり行く折しも、思ひもかけぬ巖陰に大鹿の悠々と水を飮み居たるを見つけ、胸騷ぎのするほど悦びながら急き立つ心を押鎭め、生憎小な六號彈の詰まつた藥筴を仕込みて居たりけるを拔きて、大彈の藥筴を籠めかへんと焦慮る中、一陣の風に眼覺むれば果敢無き曉天の夢なりけるにぞ、がつかりして憮然たること久しかりしが、たま〳〵同じ

因果應報

ある男死して地獄へ行き、閻魔王の御前に引据ゑられけるが、犯せし罪無き由を恐る〳〵申せば、閻王つく〴〵と御覧ありて、さらばおのれは娑婆に居りて何をして日を暮らし居たるや、との御尋ねなり。男、別にこれといふことも致しませんで居りました、と申す。いや〳〵其立派な身躰で何もせぬといふことはあるまい、商賈職業は何を爲て居つた、と問ひ玉ふ。恐れながら親より譲られました少々の財産がござりましたので、それで今日は過して居りました、それ故商賈職業はござりませんでした、と云へば、それでは定めて遊び事に身を入れて居たであらう、芝居好きか、相撲好きか、但しは魚釣り鳥撃ちでも仕たてあらう、どうぢや、と詰り玉ふ。どう致しまして、芝居見、相撲見などの榮耀なことはなか〳〵以て致しませず、魚釣り、鳥撃ちなどやうな殺生なことは猶以て仕りませぬ、と男はまた申上ぐれば、閻王打うなづき給ひて、さては學問藝事にでも凝つて居つた歟、身におぼえある技あらば、そこにて何なりと爲て見せよ、との仰なり。こゝは虚言にも左様でござります、と云ひたきところなれど、見る目嗅ぐ鼻に見現はさるゝが恐ろしければ、別に學問藝事にも凝りませんでした、御覧に入れるほどの技も殘念ながらござりませぬ、と有ていに申す。さて〳〵おのれは怪しい奴ぢや、其立派な身躰を持ちながら、商賈もせねば職業もせず、遊びごと

莞爾と現はれ玉ひ、道理なる其方の願ひながら地躰學問をする者は皆貧乏神の預り子にて、此方の關はぬところだ、併し昔時も楚の荀卿の弟子の李斯といふ男めが、二タ股根性の奴でナ、學問を仕ながら富貴も欲いと乃公に願ふた、頼まれて見れば仕方が無いから眷屬の鼠共を以て喩して遣つて一代の富貴を得させて呉れた。今汝も學問をする身で乃公を祈るとは白痴な奴だ、しかも汝は李斯だけの器重が無いから、とても大した福は得られぬが、是非が無いから喩して遣らうと思ふ。併しいくら乃公が作者でも役者が居ないては狂言を見せられぬ譯で、註助註十郎註五郎など皆それ例の一件で殺られて仕舞ふたから、芝居の見たいところを鸚鵡石で堪忍して置く格で、汝も史記の李斯傳を讀んで乃公の喩しは其通りと心得ろ。との事ゆゑ悦んで史記を讀むと、李斯は楚の上蔡の人也、年少き時郡の小吏たり、吏舍の厠中鼠不潔を食つて人犬に近づき數之を驚恐するを見る、斯倉に入り、倉中の鼠の積粟を食ひ大廡の下に居り人犬の憂を見ざるを觀る、是に於て李斯乃ち歎じて曰く人の賢不賢は譬へば鼠の如し、自處る所に在るのみ、とあり。成程こゝだ、自ら處る所に在るのみ、田舍に居ては仕方が無い、と横手を打て何も彼も錢にして仕舞ふて都へ出て、それより臺灣の景氣好き談を聞き込み、押渡つて樟腦の製造にかゝりしところ見事に耗つて終つて茫然と故郷へ歸り、大黑天を恨み奉ると、大黑天現れ玉ひ、コレ處る所に在るのみと敎へたては無いか、ナンだ臺灣へ行つて樟腦にかゝつたと、飛んでも無いこの頓痴奇め、汝は何故一生本箱の隅に處らぬ。

る痕得も云れぬ色をなせり。成程氣象勝れし人の無造作に書筆を拭ひし樣見えて面白し、と孰も欲げなる樣子なりしが、やがて入札と云ともに定まりて、互に人の顏を覗ひあひつゝ、各々小さき紙に思はくを書き、一と捻りして有合せたる短冊箱に入る。さて開札となりて一番に伊川といふ男のを開けば七圓五十錢とあり。是は辛いと云ながら二番のを見れば八圓呂山とあり、三番波堂は九圓、四番仁阿彌は八圓五十錢、五番は十圓保庵と注されたり。殘れる皿齋登園いづれ劣らぬ好事癖なれば、人々も大方はまづ此の二人の相撲なるべきが勝負如何あらんと見る中一つの札を開けば、十二圓一錢皿齋とあり。十二圓と値を指して、さて一錢と加へたるは素人の考への及ばぬ沙汰なり、黑い事〳〵と皆々手を拍ちしが、猶登園の札こそ見たけれと開きて見れば、此品望み無し、たゞなら貰はう。

大黑天

去る片田舍の痩せ學者、若いものに訓詁など敎へやる謝禮のほかには祖先傳來の二頃の山田の收入を生命と賴みて日月を送り居けるが、つら〳〵世の態を考ふるまでも無く物價は年々に昇り、生活は次第に苦くなる上、出來ずとも可いと思ふ子供が殖えなどして、末は何樣なる歟知れぬありさまになりければ、これは何とか工夫だてを爲ねばならずと、或夜女房とも相談したる上、女房が勸めに任せて村の大黑天を祈り、何卒好い思案をお授け下されと願ひける、滿願の日の夢に大黑天莞爾

出し、當世をくさす。オイお蝶、なんと世の中は段々わからなくなつて來るぢやあねえか、藝妓なんてへものも此節のめそつこと來ちやあ悲しいね、此間もよそで笑つたが、何とかいふ當時の流行妓が、上流へといふ寸法になつて屋根舟へ入るといふ段取に、棧橋まで來たところは强氣に好かつたが、それから怖かなさうに這ひ込んださうだぜ、田合の婆さんが杖と草履を片手に持つて一錢蒸汽へでも入りは仕めえし、藝妓ともあらうものが這ひ込むたあ情無えぢやあ無えか、その這ひ込んだ背後つきを見たらまるで伊呂波がるたの頭かくして尻かくさずと云ふもんだつたらう、と高笑ひすれば、大姐も少し笑ひ出して、ほんとにねえ、と挨拶する。若いのは不思議さうに聞き居たりしが、ろつと袖を引いて微さな聲して、だつて姐々お尻から入られや仕ますまい。

するりやう

いづれも世に名ある數寄者ども集まりて、互に鼻をうごめかしながらさまぐの物語りをなし居るところへ、これもたゞものならぬ道具屋尋ね來りて、異つたものを掘り出してまゐりました、皆樣御覽下されませ、これは光琳が着ましたものぢやさうで、しかも傳來の筋道がたしかでござりまするだけ宜からうかと存しまする、と云ひながら風呂敷包みを出せば、皆々打寄りて披き見るに、いかにも結構なる白羝の小袖にて、其左の袖は、墨綠靑金泥銀泥など何といふこと無くなすりつけた

らへて、器物萬端大澁の底いたりを極め、そして客でもする時は、新橋柳橋の一拉撰を下女にして使つて、風呂の火までも焚かせるといふやうなことをする、と云ふ。猶際限なくさま〴〵の太平樂を互に云ひ含ひ居たりしが、不圖座敷の隅に小くなり居たる親父を見つけ、兄弟右左より、父様が金持になつたらば、と問へば、親父、おれかえ、左様さ、懐爐灰を二分がとこも買ふて置かう。

りづめ

聞き噛に法律を少しおぼえたる理髪店の主人、客の鬚を剃りながら、お前さんは寄席で手品をつかつて御見せなさる奇天齋さんだね、一躰手品と云者は、有者を無いと見せたり、無者を有ると見せたりして金錢を取るもの故、お前さんの爲るとは詐僞取財だと云れても仕方はありますまい、なんと理詰でござりやせう、といふ。客大きに怒て、なんだと、乃公の爲る術が詐僞取財ならば、汝が職は持兇器強盜だ、と遣り返す。途端に顎をちよいと切られて、あいたゝゝ、此畜生、殺人罪、殺罪人。

うたがひ

客は五十を越した通人と三十代の紳士と、妓は四十恰好の大姐とまだ二十にならぬ美しいのとの一座にて、ぺんとも云はせずにおもしろく飲む中、通人少し醉がまはりて、例のむかしびゐきを云ひ

春の山

はやり

世にはやるといふことゝもを見聞くに、道々しきにも、藝能にも、よき事のみ行はるゝにはあらで、おほかた爲し易く學びやすき事のまづはやるなり、と上田餘齋が云ふたはおもしろい。妻帶を免したので眞宗ははやり、俗言を嫌はぬので俳諧ははやつたのだ。ほんに、良き事のみ行はるゝにはあらで、おほかた爲し易く學びやすき事のまづはやるなりぢや。と先生仔細らしく語り玉へば、熟生横手を拍つて感心し。道理で油揚のつけ燒がはやりまする。

のぞみ

のら息子の太郎次郎むだ話の末、おれが金持になつたら、先づ西洋館を建てゝ暖爐を備へ込み、三度三度西洋料理を喰べて、マニラの太巻烟草を喫し、天氣の好い時は、佛蘭西出來ダマスカスバーレルの無鷄頭二連銃を肩にして、純粹スパニールを牽きつれて從者を隨へて遊獵に出掛ける。と太郎が云へば、次郎も負けぬ氣になつて、わたしが金持になれば逗子か國府津へ物數奇な別莊をこし

の陶器が親になるか。此壺が親になるか、此鉢が歟。ゑゝゑゝ眞赤な贋せものぢや。踏み破せ。あれ鉢が飛ぶ、皿が舞ふ。天にも地にも親一人子一人と云ふたな。盗みするとな。窯から燒き出せ誠の人を。時節を松の並木さへ越ゆれば馬が跳る〳〵。ほれやれ男は惡性者。客ほど酷い傾城は無い。はゝゝ、おもしろい〳〵人殺し。椀久は心から惡うは無いわい。天神様が御存じぢや。蝶々簪した小女がおらが大事の草花摘む、酒は雲から流れ出す、黄金は窯から湧いて、湧いて、あゝりやあ太夫様が金襴手。と忽ち笑ひ忽ち泣き、壺皿鉢も踏み破壞し、正躰も無くなつたりけり。

お葉は父を失ひし上、夫には狂氣者となられたれど、身の薄命を悲むのみ、更に心を外らせもせず、只管夫を介抱せしが、其眞心天に通じてや、程經て椀久正氣になり、睦じく遂に添ひ遂げしとぞ。

其七

久兵衞が聞き出したる端緒を追ふて淸兵衞が工夫やうやく熟し、明けて一月、二月の中旬、今日燒窯の蓋開きとて、金森宗和を始とし、宮家、靑侍藤本勘解由、久兵衞が兄彌兵衞、母の妙順、今は茶碗屋の女房なれど何處やらにまだ媚めける色の見ゆるも憎からぬお葉、忠義三昧の手代の六藏、淸兵衞が弟子の庄左衞門助左衞門まで三年坂の淸兵衞が住居の庭に充ち滿ちたるが、やがて淸兵衞蓋を破り、庄左衞門助左衞門一つ一つ、取り出して見れば壺あり皿あり。或は五色美しく、或は金光燦爛き渡りて、花なき庭も七寶の罩め盡じたる極樂の園かと見えて麗しく、淸兵衞久兵衞お葉はもとより人皆悅びの眉を舒ぶる折から肥前の幸右衞門の常に隨へて上りたる源助といふ僕隷より、川原町へ屆きたる早飛脚の書狀なりとて店の者の持ち來りて久兵衞に渡す一封、父様も此處のさまを見られたら悅ばるゝことでござりませう、書狀など遣さずと旣上京られたら可さゝうなものをと云ひながらお葉は覗く。久兵衞は封切りて讀み行く一行〳〵、何者の知らせ越せしか知れず候へども京にて錦襴手の秘法洩されしとの事組合に聞えて、幸右衞門殿には情無き御處刑受けられ候、と見るより呀と大地に倒れて、はあアッと悲鳴を一ト聲あげ、お葉ゆるして呉れ勘忍して呉れ。謀つたは〳〵まんまと謀つたは。男の御傾城樣ぢや、二重底ぢや。椀久は智慧者かな智慧者かな。金襴手

ゝ京都の窯で初て燒上るなり、宗和樣は申すに及ばず宮樣も御悦び下さるは知れた事なり、勘當も金森樣の御口入れを願へば宥されるは疑ひ無し。汝の父樣には肥前から出て來て貰ふて京都に住ふて、世を老樂に渡つて行かるゝやうに仕向くるに難くもあらず、二人が上を淺からず思ふて下さる父樣に、とてもの事に此の事を汝から願ふて無理になりと肯れて貰ふて呉れよかし。三方四方の都合の好いばかりかは、世のためにもなることなり。と說き勸む。「松山少時打案じて答もなさず居たりしが、たゞ氣がゝりなは父樣が其法とやらを敎へたことが肥前の土地の領主とやらに知れたら酷い目に逢ひは爲さるまいかとの心配なり、其樣なことは無いことか、それさへ無くば。と躊躇ふは流石女子の心細かし。大事無い、大事無い、誓文大事無い。よしまた汝の父樣が法を傳へたが咎になるとも、此地で傳授する、肥前へ歸る、直に引返して京都に來らるれば天子樣御膝下の此地の事、肥前の者などが何として指も指される事では無い。と堅く受合ひたる折柄ごそ〳〵がた〳〵と何やら知らぬ物音す。椀久ぎよつと驚くを松山打見て笑ひながら、鼠が何ぞであらうものを、はて仰山な驚きやう、それでは父樣に明日なりと、其事を詳しう賴みませう、妾が父樣さへ承知なされば、必ず芽出度う郞と妾と、と云ひかけて莞爾と初めて笑ふ、面は雨の後の月、今さらながら一トしほに輝くばかり美しゝ。

代にあるまじき話し、京都で美しい色繪の陶器が出來れば京都の利益御代の利益。されば點茶の道に名高い金森宗和樣も、一ト方ならず二人のために力を添へられ、如何ほど仕損ひ出來損ひの數を積めばとて怯るゝな、蜾蠃でさへ似我／＼と念ずれば子を祈り出す例あり。人の一念といふものは出來さうといふ物を出來さで終るほど孱弱いものならず、何でも彼でも遣り遂げよと力をつけて下さるのみか、こゝで云ふさへ憚りあれど、極々內々は青蓮院の宮樣の御耳へも二人の噂を宗和樣の入れられた由で宮樣からも時々は、清兵衞久兵衞が彩色書陶器は未だ出來ぬやらと御言葉を金森樣まで下さるとやら。かほどの事なれば我等二人は是非に錦襴手成就させでは、男も立たず意地も立たず。宗和樣は有福な方な上、至つて此久兵衞を愛んで下さるとなれば、いよ／＼甚が汝をば受出すに決らば馳つけて、此久兵衞に少時がほど金子貸して下されと願はうには、縱ば勘當されたりとて、嫌と仰ある方では無き故、既に左樣思はぬでは無かりしが、陶器の爲とてもあらばこそ自己が馴染の女のため金子貸して頂きたいとは此久兵衞腐つても男兒なれば云はう樣無く、よしや死んでもと思ひ決めて居たが、さあ此處ぢや、斯樣いふ仔細のあるなれば、久兵衞宗和樣の處へ出て、肥前の人幸右衞門といふものより錦襴手の法を聞出すにつけ、差當金子拜借と願へば譯は無い談、密々に汝の父樣より大概の法を傳へて貰へば、汝の父樣も一日なりと組合の金子使ふに及ばず、世を狹うするにも當らぬなり汝は身まゝに成らるゝなり、我等二人の工夫は出來て頓て美しい色繪の物

まなかつた、濟まなかつた。特更幸右衞門殿老躰の身に、切ない思ひを爲せたのは、やがて汝と一つにならば舅にすべき人に對ふて、氣の毒にもあり罪にもあつた。いよ〳〵事の逼るならば、身を暗うしてまでも我等二人の中を繋いで遣らんとは、何とも彼とも仁慈過ぎて涙こぼるゝ、胸が痛い。さりながら汝の父樣の眞實二人を可憐いと思ふて下さるなら其に及ばず、身を暗うさるゝにも及ばいで、濟む分別の無いては無し。さ、汝の怪むは道理なれど、汝の父樣は肥前の人、一寸した事を汝になり又此の久兵衞になりと內々にて敎へて貰へば其で濟むこと、仔細を云はねば解すまいなれど、此の久兵衞が數年前より肝膽を碎き頭腦を破つて工夫にかゝつて居ることがある。それは外でもない、肥前より他處の國では更に出來ぬ錦襴手の陶器燒き出さうとの事。技術にかけては敵も無い陶器師の淸兵衞といふ男、左樣ぢや今我が居る家の主人の其淸兵衞と協同になつて、さま〳〵に工夫して、此の京でも美しいものを造り出さうと思へど容易に叶へばこそ、二人が精も魂も竭きたれど、手がゝりをさへまだ得ねば、淸兵衞も男泣きに泣き出す、此の久兵衞も長の年月此度は此度はと思ふては此度も此度もの出來損じに、氣が暗うなる折もあるほど。少しの端緒をさへ聞き出さば、淸兵衞は其道に鋭い男、一を聞いて十を知る智慧あれば、必ず工夫し出すには定まつたこと。併し肥前では今日本にたゞ獨占の業なれば、世のためは思はで自國のためを思ふばかりの我に強うて他所へ其法を漏らすことを領主が嚴う禁むるとやら。良いことを他人に知らさぬとは、太平の御

しても返す間、少時生命を繫がせて、と云ふて遣つて汝と那處にも、身を潛ますに思案を決めた。畢竟のところは斯樣と決めて、日を經るに怖いことはあるまい。氣强う暮せ、思ひ弱るな。久兵衞殿は老父も知つたが、なか〳〵心に奥のある人、人品も氣高うて優しうて、賴もしいところも有るげに見ゆる。添ひたいと汝の思ふも道理、あれほどの男が身を打つて勘當さるゝ迄通ふたかと聞く老夫も過分に思ふほどぢや。たゞ目前の憂ひを去つて河內の男には歸かぬにしても、久兵衞殿の身の結局がつかでは畢竟思ふ男の利益にもならぬことなれば、如意ならぬにぞ戀の增す習ひではあれど、踏み耐へて、五度逢ふところは三度會ひ、二度會ふところは一度にして、始終のためを謀るがよい。また此の老父が汝の父といふことを知らすは時機があらう。隱せては無けれど今知らすも益無い事。と何から何まで殘る隈無い御仁慈深い御話し。忝ないやら濟まぬやら。肩一つ揉んであげた事も終に無いのに此妾を、御自分の身を少時なりと暗うしてまでも助けうと思ふて下さる勿躰無さ。斯樣いふ色々な入り組んだ事のある故に郞に對ふて、甚が事も知らさずに濟まば濟ませ、少しも郞の心安う日を經るやうにと祈つたに、逆に取られてさま〳〵の怨言ひぞりは餘りな。御傾城樣の、女軍師の、胸に二重底仕掛くるのと、聞き辛い毒口の數々は邪見に過ぐる。と怨みたり。椀久女が物語る一部終始を聞き居たるが、大息つきて聲曇らせ、あゝ皆此男が足ら無かつた。一匹の駒が狂へば千匹が狂ふ。此久兵衞が拙さから汝にも苦を掛ける、幸右衞門殿にも心遣ひさする。濟

汝は思ふか知らぬが、地躰世の中といふものは、血の氣の多い若盛りの、思ふほどな急なもので無い。雲が凍つてからで無うては雪も降つては來ぬ例。急くまい〳〵。河内の男は何程の身代を控へてぢや歟知らぬなれど、御大名の金藏なら知らぬこと、町人百姓の身分では、千兩箱積んであつても百兩以上の金を遊ばせて置かうやうは無い、いよ〳〵身受をするにしても、金子の取引になるまでには、間のあること〻見越すがよい。談話の樣子では甚といふが身受は虛妄の誇言かも知らず。それを同じことなら久兵衞殿に張合つた頃にこそ其談を急に仕出して、一ト夜の中に引拔かう筈。それを久兵衞殿零落の今になつて云ひ出すは合點ゆかず。と云ふて明日が日にも金子持つて來まいでも無ければ油斷はならず。京大阪の掛の金の、集りの惡い分にして此老父は旅宿取つて少時潜んで居やう。自然引き詰まつた事にならば、橫合から出て汝が身は老父が受け出して仕舞はうなれば、必ずともに案じるな。ハテ云ふまでも無い此の老父に、其金の有らうやうは無けれども、娘の汝が生死の岐に臨む場になつて、此身を惜む暇は無い。身を捨てれば金子は何樣にもなる。六十に近い身になつて汝を見殺しに能う爲やうや。身も捨てる。義理も捨てる。名も捨てる。生れて五十七の今日まで他人さまのものは絲一ト線取らうと思うたおぼえも無いが、是非も無い、あきらめる、これお葉、高い聲では云はれぬが、老父は思ひきつて盜賊に墮ちる。蒐めた掛賣の金子は五百兩餘り、其の中で汝の身受けして、餘分と共に有り樣の仔細を記した文を送り、二三年の其の中には身を粉に

ことなり、分別貸してと甘へやうものを、右も左も他人ばかり、交情の好いものは同じ勤めの身の役立たず、何樣爲うこともならずと氣も滅入つた矢先にひよつこりと出て來られたが、貴郞がむづかしげに云ひ廻さるゝ一昨日の其夜のこと。さあ、左樣した時に絶えて久しい親に會ふたぢやもの、眼も紅うなつて居ましたらう、素振りも變つて居さうなもの。何の不思議の事の有らう歟。しかも其夜は父樣に、貴郞との譯は云ふに及ばず、甚がことまで打明けて、たま〳〵京に上られしに氣の冴えぬことと御耳に入るゝは厭はしけれども厭ひきれず、斯樣〳〵斯樣した機會になつて、心を粘う持てばこそ死にもやらずに居るものゝ、いよ〳〵河内の男めが、云ひ募つて身受の正金を其處に積むことになるならば、妾は絶躰絶命なり、父樣を置いては死にやうも無し、情郞に別れては生きやうも無し、死にたい事は露無けれど、生きる瀬の無い身の詰り、生きたい生きたいとは思へども、吾郞の心一つにて生き兼ぬるやうならうも知れず、と有り躰に御談し仕たところ、親身は泣き寄りとて勿躰なや御年寄の胸を御痛めなされ、何一つ御叱りなされうでもなく、皆道理と聞いて下されて、成程左樣いふ機會になつては、世に見る相對死などゝいふ忌はしい沙汰も出來ぬに限らぬ。さりながら能う此の老父に知らせて呉れた。これといふも、あゝ有り難い、太宰府天滿天神の御守護なされて下さるしるし、安心して神樣に御縋り申せ、見殺しには必ず爲されまい。氣が弱うてはならぬぞよ。仇に思ふてむざと我が身を、捨てやうなどゝ思やるな。年寄のまだるい分別と、若い

理屈も捏ねくさる、と意地の悪い世の口の端に掛つた時は組合の名の汚れ、それから引いて老父が役目も、滿足には果しにくいやう成らうも知れねば、今宵會ふたも會はぬ分、來年また會ふても會はぬ分、汝が足の洗はるゝまでは、汝も知らず老父も知らぬ分にして置くことゝせう。何彼につけて面倒なも、免れきぬ浮世の煩累なれば、心任せの身となるまでは、是亦是非も無いことぞ。と詳しい詳しい御物語。涙で御語しなさるれば、涙で聞いて受け答へ、妾も過ぎし概略の身の上を御話し申した上、母様の日頃父樣の御噂なされし事までを云ひ出して、涯無く互に泣きましたが、何時まで居玉ふべき場所でも無ければ、名殘は惜けれど其曉天、霜降る中を御歸りなされ、やがて肥前へと御立ちなされ、それより今年の過ぎし夜までの其間、便宜につけて二度の御文。此の事の始終は外ならぬ貴郎の事なり、語りて惡しきわけは無いと、妾の心に思はぬでは無かつたなれど、また語らいでも妾が氣の濟まぬといふことでも無いなれば、父樣のあれ程に組合の名を厭ひ玉ふものを、要も無いこと云ひ出して、萬一にも思ひのほかの響を組合の名に掛くるやうな事もありてはと分別して、貴郎にも話しはせなかつた理由。貴郎の家へ毎歳〳〵勘定取りに上京るのが妾が親といふも怪しい因縁、今年父樣が出て來られたら貴郎のことも打明けて告げうと内々思ふて居たに、丁度父樣が京に着いて、一日か二日といふ頃合、郎は母樣の機嫌を損ふ、河内い甚めが身受沙汰は起る、有りやうは妾も途方に暮れて、嗚呼かういふ時父樣が間近に居られたなら何時ぞやの御言葉もある

海雪の山はる〱超えて馳せつけて、老の力の有るほどは汝のために盡したい。役立たぬ老爺とも思はうなれど、年寄はまた年寄だけの、分別も思案もあるものなれば、猫には優ることもあらう。必ず〱何ぞの折には、談し敵に爲て呉れよ。好いことは聞かされずとて腹も立たぬが、惡いことを隱し立されたなら、後で其事を知つた時、何故それほどの苦みを仕ながら知らぬ顏をして、隔てがましう此父には些も知らせて呉んなんだかと、却つて悲しう恨めしう世に情無う思はうぞ。親と云はるゝ甲斐も無ければ、汝に親とは賴まれずとも、子とよりほかには云ひ難き汝を我子ならずとは片時の間も思ひ得やうや。身の用ならぬ組合の用事を抱へしことなれば、今宵會ふても明日は早や浪華へ下りて便船し、肥前へ歸らねばならぬ都合、また來年の霜月ならでは會ふことならぬ待遠しさ。いづれ我身も工夫して二年三年の其中に、京に住むやう爲すべきが、また會ふまでは汝も能う身を大切にして罹病はず、無理な强酒さるゝとも躰面好う逃げて飮まぬがよい。少しは氣に張りの無い女と云はるゝ迄も温順しう仕て人に打たるゝ杭とならず、日を安穩に送り越して無事な顏をば見せて呉れよ。汝が年期は殘るとも遲くて三年經つまでには必ず何とか爲るなれば、たゞ其時までは此の老父が汝の親といふことは人に包んで置くが可い。老父が名を厭ふでは更になけれど、われ見よ肥前の陶器の、組合の代となつて毎年上京る青山幸右衞門といふ男は、何樣した筋の金に詰つて爲たことかやら知らぬなれど、娘を遊女傾城にして、耻辱とも思はず人がましう物も言へば

其身では、綺羅も張らねばなるまいし、虛飾も爲ねでは叶ふまい、苦しい瀨戸もあらうなれど、能う注意して身の末の埒も無いことにならぬやう、此の老人が賴みまする。汝に言ふは異なものなれど、もと傾城は浮萍の、水に任せて西に寄り東に靡く花なれば、自然と人に言ふことの、實情も虛誕にならう筈、思はで造る其罪の果報が熟る因果同士、愚かな人の恨みを受けて、非業な死をするもある例、何樣ぞ夢にも其樣な悲しいことの無いやうに、迂道なれど歸途には豫て尊む太宰府の天滿宮の御前に老父は祈願を奉げる必算。此の老父を可愍と思はゞ、無理なことゝては有らうなれど、思はぬ恨みなど受けぬやう、世辭も愛想もほど〳〵に、好いた客にも深入りせず、憎い男も惡くせで、身を大切に勤めて吳れ。それぢやとて若い汝に對ひ、岩木になれと言ふては無し、男女の緣ばかりは、主親の汰沙にもならぬもの、合緣奇緣のことなれば、此人をと思ふ男ありて、男も汝を一ト時の花と見棄てぬと決定らば、隨分心を粘らして、中折れせずに會ひ徹し、芽出たい末を見せて吳れよ。心に粘り氣が強う無うては何事も遂げるといふは難い。流れのものが人を思ふては身の詰るに定まつたことなり、また思はるゝものも貧富に關らず苦しい機會にも落ち勝ちなり、此彼共に兎もすれば危い淵に近よることゆゑ、吳れ〳〵も粘い心を持つて吳れ。思ひ切りが快うて氣が淡泊うては、必ずともに好うないぞや。突き詰めた案じなど出すまいぞ。自然難儀は逼るとも、老父が云ふた此言葉を何とぞ思ひ浮めて吳れ。百里二百里隔たるとも汝の大事と聞くならば、濤の立つ

たは、誰が爲た業か、我が仕た業、皆此の父が愚さより洗はうやう無き汚れの中に、大切の汝を落したは、知らざりしとは云ひながら、あゝ濟まなかつた濟まなかつた、沒くなつた人にも濟まなかつた。免して呉れお葉。酷い父ぢやと思やつたらうが、我がまことの子のことなれば、酷うせう心のあればこそ。案ぜぬことは無かりしが思ひはありて手は屆かず、京と筑紫の隔りに汝が上の薄命を救ひ遏むる術無かりしは、返す〲も恨みなり。されど親子の緣盡きず如斯巡り合ふ上からは、親一人なり子一人なり我は汝のためとあらば如何なことでも仕て退けう思ひは胸に沸り立つて、我が金の若も有るならば、縱ひ千兩萬兩なりとも、直に汝の身を引拔いて、自由にして遣りたけれど其も叶はず、なまじひ預かる陶磁器の勘定の大金を見るも悲しく、及ばぬことは思ふて甲斐無し。たゞ此上は汝が意に思ふ人もあらば、其人と汝の芽出度う添ふて樂しく日を送るを老の眼に見たい。互ひの居處は隔たりて、たま〱會ひは會ひながら間近にありて何ぞの時力になりもなられもする事さへならぬ腑甲斐なさ。親がましう世話にならうといふては無けれど、汝が京に住むならば、肥前を出て來て嵯峨御室の場末になりと我は住み、月に一度か二度にせよ問ひつ問はれつ往來して、互の無事の顏が見たい。わづか澁茶に枝柹の愛想ぐらゐなことなりとも親子揃ふて語らはゞ樣の日ざしも一トしほに身に暖かな心地して、何程嬉しからうやら。汝は京に育ちたれば、西國へ行く氣にはなるまい、所詮二三年の其内に、何樣でも我は京へまた出て生活すやうに仕覺せう。汝が今の

り、手道具に唐花の紋も見えまするといふ。老の身の面伏なれど、親と名のつて出づべくもなければ客になつて、漸く會つた今月今宵。あゝ免して呉れ、これお葉、親甲斐も無かつた、濟まなかつた。貧の病に身の病、意地にも我慢にも及ばいで、別れた事とは言ひながら、まだ頑是ない五歳から幾干の苦勞を積ませたは皆此の父の拙さから。定めし憂い辛い數々を見盡して來たことであらうが、あゝ親は無くとも子は育つ、能う健やかに生長つて、立派な女になつて呉れた。さりながら此親は親らしいことを何一つ仕も爲ねば、親と名乘るも氣咎めして、今日樣の眼も羞しく、汝の思ふところも羞し。今の今まで幾度か悲しいことに會ふた時、世間の親の優しさを見るにつけても我親を嘸や非道な愛情無い親と恨んで居たであらう、恨まれて言ひ解く言葉も無い。特には五躰に不足したところでもあるといふことか、普通勝れて美しう生れついたる女ぶり、如何なる貴人高位の妻女といふとも羞かしからぬやう慾目かは知らねど見ゆる汝を、勤めの身にまで落ちさせたは、何より悲い口惜い。縱ひ襤褸を身に纏ひ、味噌漉笊提げて物買ふほど、貧しき家に歸けばとて、身の行ひさへ淸う持たば、貧は女の耻辱ならず、陰にて聞くとも如何ばかりか親は流石に身びゐきの、我子を褒めて、自慢して、初孫見るを樂まんに、一旦流れの身となつては、女は一生まづ廢り物、詩歌連俳の道に長け、音曲香茶の技を會りて、萬人に優るといふにしても、自己も生涯垢を含み、繫がる者も憂を懷いて、物蔭に潛まねばならぬ仕誼。天にも地にも唯一人の血を分けた汝を其身にし

此の二軒へ毎歳輸り着くる莫大の肥前產の陶磁器の、其年の精算の突合はせ、次の年の注文の聞き合はせする、組合に取りての大役を、實躰なを見込まれて吩咐かり、年々霜月には上京るに決まつて、一昨々年より去年今年と續けて來しが其度ごと、汝の行衞を探らぬは無く、逗留の日數は短し用事は多し、されば心には任せぬものゝ、及ぶたけは問ひ尋ねもせしなれど、十何年經つての事にはあり、名を知つた人も多くは見えねば、初年は何も聞き出さず。二年めは漸く汝の母の亡くなりしといふことゝ、其墓の、嵯峨の淸涼寺の末院に在るといふことを聞き出したばかり。本意無う歸りしが今年になつて、やう〳〵暇を得て汝の母の墓に詣で、心ばかりの阿伽なりと供へやらんと不圖見れば、我より先に一人の男の、身のまはり華やかなるが墓を淸めて香華も新に供へたる躰、仔細く知らぬ人なれば、我名は包みたれど進み寄つて、此の小さなる墓の主を御身樣は知つて歟と尋ねたるに、いや私は存じませぬが、賴まれて代參致しましたといふ。賴みし人はと問へば、御墓參も自由ならぬ御身の上と、云ひ捨てゝ面倒とや脫して行く。さては可愛や浮世の波浪に漂蕩かされて流れの身に落ちしかと慄然と驚きたれど、生きて此世に在りと思ふに、心を春の風渡りて、死しても冥界から引合はすかと、苔の下なる人の情の身に染み〳〵と嬉し悲く、それより花廓に明るき人を賴みて丸に唐花の紋か若くは蔓蔦の紋つけて女の年齡は寅年、氣を留めて見れば左の小鬢に一寸した疵のあるものは、と段々尋ねしに嬉しくも、松山といふ太夫あつて成程面に極々微な創痕あ

別れをなし、故郷肥前に歸りしが、猶暫時は病苦に惱み、舊知れる人々の介抱に漸く生命を繼ぎしのみ果敢〳〵しいことも仕出さず、其中年を經るに連れ苦痛は次第に薄らぎて遂に全く無くなりたれど、筋攣りて細かき畫など描くこと叶はぬ身となりたれば、世に立交らふ望みも失せてたゞ薄命を嘆じたるに、天道は人を殺し給はず、土地の人々に幸右衞門は律義なものと思ひ込まれ、陶磁器の組合の手代役に擧げられて、公邊向きのこと、他所取引の事、何や彼や世話やく身とせられしより、其日に追はるゝ憂も無く、結句京住みの往時より安樂にはなりしが、身の苦みの拔くるにつけ、雨の夜風の日雪の朝、あゝあのお葉は何とせし、お葉の母も何とせしと、思ひ出さぬ折も無く、後妻持てと云はれしは一度二度ならざりしも、持たう氣も出ず持ちもせず、子は一人あり、不自由は慣れたり、不足も覺えずと斷りて、年月過ごす中不幸にも、あゝもう丁度四年前、汝の弟は勞咳に取られて仕舞ふて唯ひとり、老の坂越す杖も無き世に賴み無の身となりしかば、此上は何とかして娘に會ひ、何のやうに世を經て居るかを、見るよりほかに望みも無しと、いよ〳〵京路戀しうて、夢路は通ふ上京の、往時の住居小柴垣、小庭に植えし草花を摘まんとしてちよろ〳〵と蝶々簪した汝の馳せ寄るを見てこれお葉、其花は父が大切なと、云ふかとすればさら〳〵と小篠音する風の夜の、霜や冴ゆらん足の冷え、それより遂に睡られで老の寐覺の涙勝ち、身の宿業を拙さを我から怨む折もありし。其後組合の都合にて、大坂は高麗橋の壺屋市左衞門、京は河原町の茶碗屋久兵衞、

らるゝ。其冬祖母さまも亡くならるゝ。是非無く酒飲むばかりが能の大叔父に引取られて夫よりは憂きめの數々見たる末、苦界に沈む身となりしが、其大叔父も酒に中つて一昨々年の春死んでより、天にも地にも身は一人。親兄弟のある人が羨ましうて堪へがたく、神に佛に願掛けて、父樣になり弟になり會はせ玉へと祈つては、これは汝が初の節句に、父樣が書いて下されし雛の軸ぞや大切にせよ、御筆の跡は此書ばかりと、母樣が能う言ふて聞かされし、郎も知つての彼の軸を、掛けて眺めて懷かしさの思ひに沈んで茫然と仕て居たことも幾度か。神樣も憐れと見て下されたか、去年の霜月の末の事、西國の旅の衆、年寄つた人、太夫樣に是非一ト目逢ひたいと思ひ入つて申されまする、御仁慈に會ふて遣つて下されませ、と島屋のものが力入れて取り做す客のあるに、旅の人と聞いて嬉しからねど、斷りもならで逢ふて見れば、妾の顏を見るより早う涙に潤む老の眼を數瞬くばかりて言葉も無し。面妖な人とは思ふたなれど、血の通ふといふものにや、何となく妾も悲うなつて異な心地。蟲が知らすか自然若しやと思ふ氣になつて、身は情無い傾城の、親子の名乘りも包ましい悲しい口惜しい淺麻しい勤めの身ぞと心づき、あたりの人を遠ざければ、思ふに違はず誠の父樣。お葉と妾が名を呼ばせたまへるほかには物も言ひ得たまはず、咽びに咽んで泣きたまふ。妾も御手を取りしまゝ何から言はうすべも知らず、悲しい嬉しい打交ぜて泣くばかりなりしが、頓て父樣は涙の隙より、汝が五歳の事なりし、病に生活の道を失ひ、京の住所のなり兼ねて、心にも無き

汝云出す、初手は郎への義理をかねて、流石忘八でも妾をば甚が手に渡さうとは云はいでありしが、次第に急き込うて是非にといふ甚が所望に何とやら風も變つて末は金づく、いよいよ談も煮え詰まつて來る樣子。勘當の身とあれば、見積り過きたやうなれど、貴郎に云ふたとて、氣を熬らすばかりで好い工夫のあらう筈は無し。はて何とせう分別も盡き、ほと〳〵此世の味氣無くなり、死神にも誘はれかねぬ氣になつた、折も折とて父樣の京上。さ、妾の口から今はじめて親のあることを云ふのゆゑ、驚かるゝも怪まるゝも道理ながら斯樣いふ譯。もと妾の父樣は肥前の人、畫の好きなより京に出て、沸つて流行るほどには行かねど、知る人には何やら斯樣やら用ゐられ、其儘京に居着いて家も構へ配偶も持ち、やがて儲けたは最初に妾、次に男の子、一女二太郎と世話にいふ通りと悦ぶ間も無く、父樣は痛風といふ病にとりつかれて大切の右の手叶はず、故郷へ引籠るよりほかはなくて、いよ〳〵肥前に行くに決つた時、海山離れた遠くの國へ娘を遣るは不承知と、妾の御祖母さまの聞譯無い強情のために悲しくも、父樣と母樣とは厭かぬ中の別れ、妾は五歳で母樣の手に殘り、弟は三歳で父樣に負はれて西國下り。國隔たれば音信も疎くて、母樣は日頃父樣の事ばかり案じて居られしが、表向き緣は切れたるに問ひたづねすら心に任せず。妾が十二の秋の暮、こま〳〵と始終の仔細を語りて、汝にはまだ弟もあり生の父樣もあるなれば、女の身にて尋ね行くことは叶はずとも氣に掛けて、斷れぬ血筋のあることを能く記臆えてよと御話ありて、病に此世を終

に手間取らぬ。賢い人や。傾城樣や。名譽の女楠木樣や。天晴分別立での利益不利益で、貧な男に來るなとは、好う出來ました出來ました。心に裏も無いやうな世に優しげの情ぶり、眞實明かすと見せかけて底に底ある二重底、人には見せぬ機關を胸に裝置た御傾城樣。人を謀らう泣き落し、涙を使ふ軍師の御手際、ハ丶、御見上げ申しました。我等風情は沒落しても、相手になつたが甚い面目、今月今宵斯樣御禮を申す。あゝ、是で胸もすつきりと透いたやうな。痞が下つたれば、どりや歸つて、霜の降る夜の凍り飯、出し売茶なと注けて食はうよ。さらば、とばかり立ち上る。裾を促へて引戻す。女の力弱けれど一念の張り強ければ、出てんとするを押し入れて男を内に、身は外を、背にして塞ぐ通ひの口、ぴつたり坐つてほつと息。差し込む癪に氣で勝つて癇に震へる聲細く、ても まあ何といふ氣の焦れかた。邪見にも程のある、鎭まらんせ。一昨日會ふた其人を汝は何と思はれてか、若し其人を眼のあたり見もなされたら此樣な由無い疑ひは受けまいもの。誰が知らせしか知らざれど、たゞ人傳に聞かれし故、妾の深間でもあるやうに、思ひ取られし厭はしさ。年の頃といひ、平生には見えぬことゝいひ、大概積つても知れたこと。客にならでは會はうやうなき妾の身なれば、表面は客で會ひしものゝ、まことの客ならぬは、島屋の人も悟らぬ筈無し。疑はしく思はゞ糺しても下され。成程心の底の底まで打明けずに居たは惡かつたなれど、今皆話しまする、氣を沈けて能う聞いて下され。つい此月になつてから、郎は勘當とやふことになる、河内の彼は身受沙

隱し立するは聞えぬ道理、胸に二重底のあるでは無いか。極々底の心には何を思ふて居やうも知れず、人に知らすは上面だけのことゝ思はれても是非あるまい。まだ其樣にしら〳〵しく何隱し立も仕居らぬやうな狀態をするが氣の强い。それならば現在此の我に隱して居ることを云ふて退けう。これ、一昨日の宵の口の島屋の客、年齡は五十五六、霜降り頭、つひに見かけぬ顏な人、遊びも至つて質素にして、酒さへはづんでは飮まぬ程なが、汝に會ふて長談して、更けて歸りつらうが、なんと〳〵。いや驚くまい驚くまい。今から其樣に驚くまい。まだ驚かせて呉れやうぞ。淸水に居ても手に取るやうに此地のありさまは知る久兵衞。しかも其客と汝との間に、豫て合圖でも仕てあつたやら、待ち兼ねて居たやうな汝の樣子。また其客の歸る時送つて出たる汝の素振り、泣いたと見えて眼を紅め、他人に知らさぬ低聲して語るも何樣やら息忙しく、しみ〳〵ものを言やつたは、深い思に堪へ兼ねて胸に動悸の波さへも高う立つたる名殘の態。さあ〳〵隱して居たことを、これまで詳しう知られては、些肝が潰れやうが。これほどまでに何彼と無く人には隱し立をしながら、水晶の壺に淸水を滿たしたやうに純潔さつぱり、裏表も無い心を持つて居るといふとも眞に受けやうや。落ぶれた男には來るなといふ、餘所の男へ身を受けらるゝ相談は近々に逼りながら知らぬ顏して居るといふ、何やら胡亂な男とは泣いてしみ〳〵潛やかに物語るといふ、これと云ひ彼と云ひ照らし合はせて考へて見れば阿房でも、汝が純潔に透き徹るやうな胸のものか其で無いものかは大概悟る

は無けれども、郎も記えて居られやうが、妾は世間にある習ひの心中沙汰を聞くごとに、身につまされて泣きながらも、あゝ心至りの足らぬことゝ、日頃言ふても居たものなれば、辛い悲いことは皆一人で背負ふて去ぬつもり。郎は男子の貴い身、上には母樣も持つて居らるゝ。假令妾が何とならうと、それに狼狽へて身を卑うするやうな踏耐への無いことではならぬ。自然妾が無うなつても、立派に身を立てゝ行かれいでは、男子らしうも無いといふもの。女一人に惜氣無う身を果すやうな郎でもあるまい。また此の妾は、男を遺して死ねぬほどの未練な女でも無し。いよ〳〵叶はぬ其時は、何とする位の覺悟が無うてや。たゞ幾重にも叶ふだけは火の中水の中なりと、堪へ〳〵て生て目出度う、生遂げたいが妾の願ひ。死ぬは何時でも何處でも成ること。淵川の無い土地も無く、此身の廻りの細い帶、鏡臺近くの光るものでも、生命を絶つに手間はいらず、豫て想ふにも及ばぬを、此樣なこと云出させて、何の益にも立つことか、あゝ厭な厭な。と面を皺む。椀久これを聞きも敢ず、勃然として怒をなし、いや、賢げに云ふた、云ふた。いよ〳〵とならば一人死ぬとか。能うも其樣にまざ〳〵と心にも無いことの言へたの。何で汝が一人死なうや、一人死ぬ積りとは強い虚言。はて近い例が逼り迫つた河内の甚の身受のことさへ、此の久兵衞が問ふまでは默つて居つたほど、胸に二重底の有る汝、何を言ふやら知れたことでは無し、と斯樣云ふたばかりでは不承知らしい顏つきぢやが、三月半年の馴染でも無く既一年も馴染み越したと先刻に汝が云ふた通りの間で居ながら、

何、むゝ。むゝ。はゝはゝはゝ。飽まで甚に愛想つかして、先方からも愛想つかさるゝやう、仕掛くるといふが其手段か、鈍いこと、鈍いこと、役にはたゝぬは。其様な甘口な分疏を、合點して聞く椀久で無い。悪くされゝばされるだけ募るも戀の意地の習ひ、甚も男見なりや云ひ出してからは、縦へば情無うされたとて、指を噛へて引込みもなるまい。乗出した船、行き着くところ迄と無理押に押さば何として免るゝ。嫌でも應でも根曳されては、狗猫のやうに逃げもなるまい。さあ其期になつて何とする。何の身で此の男と添ひ遂げやうや。二人が末の末好かれと、情厚げな分別立てして、意見して呉れたは道理らしいが、其時になつて久兵衛一人淋しう殘つて何になる。何様じや一句もあるまいがや。傾城も虚言のみは言ふまいなれど、信實ばかりも言はぬらしい。これ聞け。虚言のつもりで言ふ虚言と、虚言で無うても末終に信實にならず虚言になるまことらしさの其虚言と、罪はどちらが深いと思ふ。傾城と思へば腹も立たぬ、女と思へば怨言ひぞりも言ひたくなるが無理はあるまい。いよ〳〵身受の事定らば、さあ何とする、と強く糺す。さあ何處までも情無くしてといふ。いや、情無うしても其に懲りずばと問ふ。氣の狂ふたと云はるゝまでも邪見に振舞ふて厭かるゝ心算、と逃ぐる。それでも厭かずば、と長驅する。さあ其時は。さあ其時は。さあ、さあ。さあと問ひ詰められて、松山答へも切なげに、とても角ても逃るゝ術無く、いよ〳〵河内の彼人に受出さるゝに決まらば、其時こそは潔う身を終らうに仔細は無し。郎を遺いて唯一人死にたいこと

てはならぬ。生きる死ぬるの追分とは、此邊を云ふたことぢややら。成程河内の彼人のこと、郎に默つて置いたれば、左樣思ひ取らるゝも無理ならねど、大概つもつても知れた事。玉の輿かは知らねども、彼人に歸く心も無ければ、氣にも留めいで居る位。わざ〱郎の耳に入れて、無益しう面白う無い思ひを爲せますことも要らぬゆゑ、何とも申さで居りました。骨が舍利になる末までも何で彼の好かぬ男の方へ夢にも歸きませうや愚のこと。こればかりの些細なことを根に持つて、怨言ひぞりの數々は、日頃にも似ぬなされ方、と云ふ時久兵衞遮つて、いや。紛らすまい、紛らすまい、無益な思ひをさせまいとて、身受の談のある事を知らせずに居つたといふ廉は、條理が立つやうで扨立たぬ。彼男のところへは何樣あつても行かぬと云ふたばつかりで、歸かぬに定る譯は無し。甚といふ男が假令汝に好かれぬが眞實にしてからが、金を積んで身受せうと云ふ段には、好くも好かぬもあらうものか。歸く心の無いが虛僞ならずとも、其身が引拔いて連れて行かれて心ばかりが殘らうても無し。賢いにも似ぬ暗い言葉。今宵も此廓に居ればこそなれ明日にも此地を出るならば、何の身を置いて此の久兵衞に逢ふて談話をする積りか。半歲一年辛防したら、成程勘當も免されうか知らず、但し勘當赦されて、汝を尋ねて來る頃には、汝は餘所の花となつて、春や昔時の春ならぬと、此の阿房をば悔まするは、さりとは罪が深過ぎずや。さ、何樣して甚が身受を免れて、必ず半歲一年の後まで此地に今のさまで押通して居る事の成る歟。それ〱答へ澱むであらうが。何、

てはら〳〵と涙を墮すのみなりしが、やがて男に取りつきて、雨に濡れたる芍藥の花の姿のなよ〳〵と、身をも弛げに起き直り、情無い怨言を聞くものかな。三月半歳の馴染の程なら然樣した疑念も受けやうなれど、既一年も馴染み越し、互ひの胸の底の底、心の奧の奧までも知り合ふた中でありながら、まだ女とは思はれいで、投げの情の流れの身、傾城といふものと今日が日までも、思はれて居たかや、あゝ情無い。傾城ぢやとて世の常の女子に異ることとは無し、可愛と思ふはたゞ一人、一つ心で人二人思はうやうはなけれども、宿世の業の拙くて苦界に墮ちし身とあれば、虚言よりほかは言はぬものゝやう世に思はれて、死なねば戀も眞實ならず、生命のありて言ふことは、皆虛僞ぞ手管ぞと定めらるゝが恨めしい。妾が普通の女なら、言ふことも素直に受け取られて、假令少時は別れ〳〵に面白からず暮らすとも、末は樂しう添ひ遂ぐるやうにもならうものを口惜や、胸の丹誠を取り出して視する仕方もあらざれば、疑はれては釋くも慵く、眞實郎の爲になる事とは更に思はねど底の憂ひを押隱す酒に浮かれて三絃に笑み、無理にも粹のありたけの首尾を重ねて快う、ホヽ、ホヽ、ホヽヽ、ホヽ、と笑ふて、死んで、退けて仕舞ふて、生命を懸くると云ふことを伊達には云はてあつたよなと此世の間の人々に云はせたいやうな氣にもなる、……、なれども何の、何の、何の、……、あゝ頭が痛む、氣が狂ひさうな、……、何の其樣な脆い氣になつて、大切の郎にみす〳〵死神憑かすやうな愚なことと仕てなるものの歟。鶴龜鶴龜、嫌やの、嫌やの。血迷ふてはならぬ、弱う

態口、膝も特さら横向けて持ちし煙管も慵げに疊へついと抛り出す。松山少し急き心、はて何言はるゝ、合點の行かぬ。半分は戯れかと聞て居れば、女にまでも侮られてとは、妾が郎を何としたと思ふて云はるゝ事ぢややら。身に其樣な覺えは無けれど、さ、其譯を聞きませう。妾の過失でもあるならば、何樣なりと改めて此方の氣の濟むやうにも爲うし謝罪もせう。其譯を是非聞かせて。と眞顏になつて問ひ詰むれば、其顏つく〴〵目守りながら、や。まざ〳〵と氣の強い。然ほど聞きたくば云ふて聞かさう。久兵衞は知るまいと思ふてか。河内の大盡の甚といふに近々汝は請出さるゝと、相談決つてあるぢやげな。それ見い。其の驚いた顏つきに虛妄では無いといふことが、歷然と書いてあるが乃公には讀める。利益ぢやから來るな不利益ぢやから來るなと、人の足を此廓に遠うさせて置いて、自己はするりと玉の輿、好いところへ一人行かうでがな。美しい禽も餌に寄る習ひ、傾城が襟元の光る人に就くは今始まつたことにあらず。鬢の白んだ塵埃頭、末社が慈心に疇昔與つた我が紋つきを借着して耻辱を忍んで來るやうな、貧な男に用は無い理。吸ふだけ吸はれて吸売になれば烟草もはたかるゝ。少時なりとも君が手さきに觸れつ揉まれつせしだけを、身の本望に灰となつて、終ればそれで宜い筈なこと。何恨むところも無い云ふところも無い。たゞ何ぢややら彼ぢややらと、首斬る前に因果含める諭のやうな細々語を、聞かされたのが恕な投げの情で胸が悪い。辛からば唯辛からで空親切が癇に障る。と聲も高めて罵つたり。松山これを聞くよりも言葉は無く

めばそれ〴〵、それ中音のあれがそれぢや『いづれとも、生きる死ぬるの追分に、かゝる戀路の末の末、うそには死ねぬものながら、死にたいほどのつらい目を、堪へて活きる其道が、まことの戀の大路ぞや、時節をまつの並木さへ、越ゆれば馬も通ふやら、あれ鈴の音が春風に。』さあ彼の歌の意の通り、死にたいほどの目も堪へて活きるが眞實ぞと思へばこそ、憂さ悲しさの幾瀬をも越すと覺悟を定めたれ。死ぬるが好いに決まつた時に臨んで死に兼ねるやうな女と思ふて歟。生命惜さに落ちぶれた男に遠のく心構へをするかのやうに云はるゝは、正氣でゝはあるまいが腹が立つ。妾が先刻に話したは、艶も無ければ聞く耳には面白う無くもあらうなれど、なか〳〵浮いたことでは無し。それを茶にして能うも聞かで、味に捩れた物の言ひやう、郭公なりと夏ならば聞かうものとは強すぎる。そのやうに酷い言語を、他人が聞いたら彼人も家を出されたさうで氣が焦れて癇ばつかりが亢るやうなと惡く云はうに、嗜まさんせ、と云ひも果てぬに久兵衞は、ふゝんと鼻のさきに笑ふて、氣が焦れた。癇が亢ぶつた。智慧も疎くなつた。勘辨も薄うなつた。家を失ふて產の親に見放されて女にまでも侮られて氣が焦れるのに不思議は無い。癇も亢らうし智慧勘辨も疎うならう。他人が笑はゞ笑ふが道理、笑はれて腹を立ち得るほどの身の狀態でも無い。踏んだり蹴たりの目に會ふても路の傍の小石と成り下つては一言一句も言ふところは無い。何とでも嬲るがよい誹すがよい。澤山阿房にされたなら些少は早う業も滅さう。あゝ業晒しな。我ながら笑止。と益〳〵ひぞる憎

い。戀の情の愛憐いのと、其樣な入口なことといふて、口舌するやうな情交でもないに、今更何を珍しさうに氣の若いこと云ひ出して、妾が眞面目に仕た話を空吹く風に爲さるぞや。思ひ思ふたは疾の往時、戀で逢ふたる時の事、今はそれとも思はずに居ながら唯の片時も互の上を思はずに居る折も無い夫婦合ひ。言葉の花の痴話に飽き、心の眞情に實が入つて、粹も無粹も通り拔け、花街に居ながら奥山の婦衆のやうな野暮になり、郎大切と思ふほか心も無くて居るものを、傾城あつかひは餘りな。其方は賢いの、身は愚のと、郎にも似ぬひぞり言。智慧者智慧者と意地惡な憎まれ口は聞辛い。初はほんの戯れと思ふて居たが何處やらに針を含んだ言ひ廻し、雲が動くとのみ思ふたに月も動いて山の端に入る、世の傾城に眞情は無いとばかり覺えて居た愚さ、とは誰に云ふ當てこすり、戯れにしてからが毒過ぎる。日頃は虚言にも其樣な氣不味いことを終に言はぬ郎が、今宵に限つて皮肉な物言ひ振舞ひは何ぞ仔細のある事か。心に濟まぬことのあらば何故打出して斯樣〱と直接に云ふては下さらぬ。よもやとは思へども夫ともまた、妾の言ふた一ト通りが、眞實氣に入らで一ト筋に、身は何となつて果つるとも、生命を花の露にして、よしや脆くも美しう、候べく候に世を經るが、郎の望みと決まらば、それに從はぬ妾でなし。たゞ虚僞を彩色つて互ひに競ふ世の榮えに心の何で惹かされう。あれ〱幽に聞ゆるは小太夫樣の深間な馴染、友蛾さんといふ數寄人の、何時も好んで一人で彈き、一人で唱ふ一ト闋、聞いて居て下されや、聞きはづすまい。あの前彈が濟

ひを活かして身の死ぬるに、何程增した事であらう。我身で我身を狹うして那處を向いても縋らうところの無くなつた擧句、譬はゞ丸い鐵の桶の中に籠つたやうになればとて、二人で居れば悔無し。世界の人は多くとも一人と一人に戀は足る。千萬人に謗られても一人の笑顏見て死ねば本望とこそ我は思へ。何に心の惹かされて世に榮えたう人は願ふぞ。此の愚物の久兵衞は、世をも寶をも今の今まで其方が笑ひの一ト聲の響にすらも易へて退けうと、思ひ染みて居たに情無や。汝は浮世戀しいか。今になつて爲の不爲の呼はり。さりとは日頃のなつかしい心入れに似ぬ鬼々しさ。水は一つの水なれど、春には暖み冬には凍る。同じ汝が過ぎし日は世に優しうも此の我の念ひを憐れと手に取りて其懷中に收め吳れしに、今日は愚ぢや無分別ぢやと我が念ひをば擯けて地に棄てうとするといふも、時の移れば物の變る世の例とや曲も無し。さりながら我が一ト向の心は汝に棄てられて、塵に息つく轍の鮒の復び水に躍る望みの無きが如くになりたればとて、恨まうでも無く喞たうでも無く、其儘我世を終るつもり。たゞ過ぎし日の嬉しかりし人の情の變らぬ中斯樣と思を定めずして、面白からぬ賢立を、見て今日になりて一人死ぬ戀の奴となり濟ますが、我ながら些あはれげな。あゝ何云ふも未練未練、云ふて甲斐あることならず。夏ならば郭公なと聞かうものを、冬の夜ながら千鳥の啼くところでもなし、あゝ、あゝ、あゝと又欠伸す。松山興の醒めた顏して、默つて聞き居しが末は愁ひの眉打顰めて膝すり寄せ、好い加減に人を御弄びなされ。よもや正氣では仰あるま

置きかけた算盤の玉は亂れて、二一天作の八やら九やら。ゑゝ役代も無い、何となるものぞ、ほたらかして仕舞ふて一寸會て來、といふ調子で今日の此身の醜態に成たぢや。それを何ぢやぞや今になつて、爲ぢや不利益ぢや損ぢやの德ぢやのと、其樣なこと敎へられたとて何の足にならうぞ、はて積つても知れた事。那處の國に損得や爲不爲で戀の潮が差し引するものか。酷いことといふ人嬲りな。爲や不爲に諦めの付くは眞實の戀ならず、我が思にも任せぬが眞の戀の習ひと聞く。あゝ情無い情無い、雲が動くとのみ思ふたに月も動いて山の端に入る。世の傾城に眞情は無とばかり覺えて居た愚さ、松山、そなたも……あゝ情無い、口惜い。左樣いふ其方では無かつたが我落ぶれたばつかりに、過し日迄は美しう優しう情ある人なりしを今日はをかしうも面白うも無い智慧者として見る味氣なさ。而も來るなら來なと云ふでもなく勘當赦されたら復會はんとは、成程智慧者は左樣したものでもあらうが餘り勝手が宜過ぎるやうで阿房には更に嬉しう無い。默て聞けば其方の言葉は皆道理で隙も無い故、腑に落ちぬ廉も無ければ解らぬ猥も無いなれど、腑に落ちたところで解つたところで、此の久兵衞は愚物、賢い人の眞似はならず、なるにしてからが望みて無し。狼狽へた心か狼狽へぬ心か、それは何となりと人の云はうまゝ、たゞ僞り無い心から一筋に強う思ひ慕りて、よしや兇なことにならうまでも、後へ退らで思ふ同士が會ひ遂げたなら如何ばかり嬉しからうと我は思ふ。兇なことが左まで厭はしいものと定まつてもあればこそ。思ひを殺して身の活きるが、思

しい。成程立派な太夫樣ぢやわい、賢い賢い太夫樣ぢやわい。來るなとならば來もすまい、どうで此身は羽拔け鳥、伸さう翼も無うなつた貧の男に定まつたれば、太夫樣ともあらうものが、此樣な男に係り合ふて、由無い名を謳はれては金箔が剝げる。來るなとは聞えた御言葉ぢやが、なぜ正直にこれ〳〵故と馴染甲斐に明瞭と言ふては吳れぬ。好いたればこそ身を打つまで通ひつめた此阿房の身。貧な男が貧緣ふては迷惑ぢやと打明けて云はれたなら、何が扨、好いた女の不爲になることを爲やうぞえ、百日千日一萬日、一生來ずにも居らうものを、來ては互の爲にならぬ、それ故來るなとは言ひ廻しが巧過ぎて此方には面白う無い。成程藤左が言ふたことは理屈でもあらうが、これ賢い人、此の阿房の云ふことも能く聞かしやれ。地躰色戀といふものが、爲になる爲にならぬの詮議から世に湧いて出たものでも無し。此の戀の山上りつめては吾身の破滅に及ぶぞと、遊君傾城に戀するものが、心づかぬといふはあるまいなれど、昔の人も今の者も、分別はありながら扨分別に任せ難い心の機にかゝり、拍子に乘つて深陷りするも、後より戀の責め來れば、我から身を責めて果すぢやまで。此の阿房にしたところで、まだ珊瑚珠の緒〆を下げて着皺の無い衣服被て居つた遣ひ盛りの其頃から、此の樣な遊びを仕て行たら末は何となる位の事に、有り樣は心づかぬでは無かつたなれど、何か無しに其方に會ひたうて會ひたうて、たま〳〵氣を斂めて家に居ても、帳場格子の中に身を置きながら、打睡まで見る夢心地、聲が聞える、姿が見える、はツと心づいて我に返れば

是非ないことゝ。一日會はねば千日の思ひも抑へ〳〵ませう故、郎も堪へて下されませ。石の上にも三年と世の譬喩にいふ辛防を少時の間爲さるれば、何母樣が三年まで其儘棄て置き玉ふべきや、一年立たぬ其中に舊の如くになさるゝは誰が眼にも見ゆることとなれば、土地の名さへ三年坂とや、其陶器師の清兵衞さまとやらが方に、面白うも無く辛うもあろが、目を瞑いて耐へて居て下されませ。蝶々は心に味のある人、花廓に起臥するものには珍しい氣性を底に包んで、表面は滑稽の頓興聲、少しは馬鹿に我から爲つて氣安う日を暮らし、世を遊び塲と心得た異つた男でござんすが、實意は飽まで在るもの故、書狀言傳は彼人に一から十まで頼む筈、別れて居ての心遣りは文章言傳のほかは無し。妾も欠かさず問ひ尋ねを仕ませうほどに此方もまた、音信を聞かせて下さりませ。幾月互に辛くとも郎が舊の椀久樣になられて頓て妾も年の明く其時に會はゞどれほどか嬉しからうと唯其を希望の綱に、のう、郎、と言ひかけて情郎の面を覗けば、面白からぬ顏つきして、頭を垂れて手を組みつ、返辭せんともせぬ樣なり。松山案のほかなる心地、これ俯首いて返辭の無いは、妾の言葉が氣に入らいでか。それとも郎の腑に落ちいでか。傍聞する人も無い二人の間の話ゆゑ、妾は妾の思ふことを樸で其儘言ふたつもり、正ないと思ふところがあらば郎も言ふて聞かせて下され。たゞ默然なは張合ひ無い、と恨みがましく答を促れば、久兵衞やう〳〵面をあげて、太夫には眼を遣りもせず特更らしき生欠伸、あゝ智慧者かな智慧者かな。人情は濃いか薄いか知らず、智慧分別が恐ろ

う、御身を持つて下されませ。呉々も逸つた氣を出さずに、假令久様が少しは焦れ氣になり玉ふとも、とつくりと心をおちつけて、行きづまりにならぬやうな途を擇んで月日を送つて行かるゝやう、と憂いも辛いも汲み分けて同情なり訓戒なり共に籠れる長話し。浮世の風に曝されて幾瀨の鹽を履んで來た人ほどはある心づけ。それと云はねど二人へ意見。思ひある身の胸に當る節々も流石無いでは無し。思へば藤左の言葉の通り、互の末の末好かれと思案をせねばならぬ時。妾が招んで、郎が見ゆるといふやうでは、次第〳〵に、身の詰るばかりで立つ瀨はあらず。御母様も聞かれたなら、あゝまだ彼兒も身が締まらぬ歟、何時になつて悪縁を思ひ斷るぞや、情無い親の心知らずめ、些の間身を謹まば、何となりと彌兵衛にも取り做し六藏にも呑み込ませて、家に入れやうと思へばこそ、此母は心配して居るものを、と御歎きなさるは知れたこと。又此處彼處の人の顔も悪うなつて來るは眼に見えたこと。せかれて會へぬやうになつた其曉に文の通路も、斷たれて仕舞ふて離れ〳〵に慕つては、をかしな事になろうも知れず、今が大切のところぞと妾は思ひつきました。郎もこゝに憂い目を見るも詮の無い仕誼。成程狼狽へた心から、何としても會ひたい顔見たい、と唯一ト條を能う分別して、一日も早う御詫の叶ふて舊の椀久様にならるゝやう何様ぞ身を持つて下されませ。勤めの憂さの數々も郎に會ふを樂みにも力にもして堪へたに、少時にせよ會へぬぞと我から限る妾の辛さ。心の張りも無くなりて弓に弦無きやうなれど、こゝをばじつと堪へねば、ならぬといふも

んす。能く氣を鎭めて後先を考へ、互の末の末好かれと思案をせねばなりませぬ。狠狽へた心からは取り上せて、物を一圖に思ひつめ、たゞ一ト條の考へにのみ任すより、世上に例の多い兒事も出來るものでござりまする。男は何樣な物の解つた優しい人でも、地体が氣強のものなれば、癇癪もあれば蟲もあるもの、零落になつては腹の立つことも多いまゝ、つい氣が焦れて智惠も疎く勘辨も自然と薄うなる。また女は、根が氣の弱うて涙脆いものなれば、つながる男の薄命には、身の皮も剝いで遣りたうなるほど、ひとしほ愛憐さも骨に沁みて、他人が悪い噂をすればするほど、我が情郎を庇護ひたい思に募り、眞實ある朋輩の云ふて吳れる意見も耳の外にして、自然諸方への義理も欠き、無理の有りたけ仕盡して、一日會はねば文で招ぶ、二日會はねば恨み合ふ、といふばかりに上りつめては、我身で我身を狹うした末、何樣することも出來無くなる、其處を魔にさゝれては、ひよんな事になるまいものでも無い筈、皆一ト條の考へに任せて後先を思はぬから出來る事。太夫樣は申さずとも是程の事を御存じ無い御方では無けれど、猶能く御分別遊ばさないではなりませぬ。強ち眼前ばかりを好うするが情の深いではござりませぬ。結局のところへ行て、情郎の爲にも好いやう仕て退けるが眞の情郎思ひ、互の身の詰りになる種子播いては、假令男を愛惜がる心に虛僞の無いにせよ、始終は男の仇敵となる譯、此末何としたら久樣の御身も立ち、我身の望みも遂げられう歟、といふところに眼を着けて、義理も立て、また、人情も立て、太夫の龜鑑と云はるゝや

はるゝ其度毎に妾が上をも思ひだして腹立つて居らるゝでござんしやう。此身の思ふまゝならば軈て妾にも母様と呼ばせて戴かねばならぬ方に、今から斯様惡う思はれては妾の立つ瀬も無いといふもの。今の苦患は苦にならず末に苦患の無かれかし。譬へば右と左とに引分けられし書籍の井筒の傍の二人の兒が軈て一つに寄り合ふて、しやんと坐敷にならぶやうに、我等が末もなれかしと、今朝も今朝とてつく／＼と、心の內に神々さま別けて戌亥の守り神、八幡さまは妾にも一つまさりの此方にも他ならぬ神様の事なれぱと、深う祈念も掛けたなれど、差當つても道理から、考へて見れば賴みが無い。妾は年もまだある身なり、郞は勘當といふ機會なり。此儘月日を經るばかりでは、一期添ひ遂ぐることも難し。過般雨の靜かな日の事、妾一人を人知れず招んで、此家の主人の物語りにも、聞けば椀久様も御母様の首尾が惡うて川原町を退かれたとの事。太夫様も小生も久様には淺からぬ御馴染のこと故、小生は身に染みて御氣の毒に覺えまする、太夫様も定めし御心細う思はるゝでござりませう。他人は兎もあれ、揚屋こそ致して居るものゝ此の藤左、御身分が變つたからとて急に久様を袖にするやうな卑劣しい心は持ちませぬ。假令へば破れ紙衣破れ草履の御姿で御來臨なされうとて、快う坐敷へ御通し申して、御氣のまゝに遊んで頂きたいと思ひまする。太夫様とてよもや急に久様を好かぬとは仰せられますまい。いや、それどころか太夫様のことなれば意地にかゝつても久様を、呼び遂げうとなさるゝであらうなれど、さ、こゝが分別の要りどころでござ

何樣なものに取つてあげまするか、陶器師の弟子でござりまするか、定めし穢い汚れ猫のやうな男が爲るでござりませう。お丶此頃の朝の風の肌寒いに、御自身で井の端に水汲んで顔も洗はる丶とや。風邪ひかぬやうになさりませ。萬般が其樣では食物其他、御氣に濟まぬことも一つ二つではござりますまい。それもこれも皆誰が爲せた事、此の妾が分別無しから起つたこと。歸すが道と知りながらも、時雨持つ雲が天に凍つて曉寒い其時は、つい引留めて半時が、一時となり一時が、二時三時一日となる。また薄墨に日の暮る丶秋の夕の悲しさには、招ばぬが可とは思はぬならねど、文してまでも來て欲しうて、つい筆取りて御出を待つ。斯樣いふこととの積り〱て、今の御身の上にさせましたは、畢竟皆此の妾が罪、其上產の母樣の勘當とまで思ひ切らしやつたとて何の我子を憎う思さう、成程なさぬ中の彌兵衞さまに立てねばならぬ義理も御有りなさらうなれど極々の心は憂い目見せて、我子について蟲のやうな松山を離れさせうとの御意、妾さへ遠ざかれば何時まで御勘當ある事で無し。直に舊の通り家へ御入れになるは知れた事。それだけにてすら、可愛い子に苦勞さするも皆彼の虫か狐のやうな傾城面が憑いたからと何程妾へ御憎しみが掛つて居るか知れぬところを、御勘當の後も猶斯樣して、逢ふて一所に酒飲んで談話して居ると聞かしやつたら、あの狐めが執念深い、まだ離れぬ歟と御憎しみも、一倍二倍强う掛らう。それもなか〱罪深い、定めし御母樣の御心には、扯裂いても飽足らぬ憎い憎い女めと、あ丶最愛久兵衞は何樣したと一日に幾度か思

伴は蝶々の長八なり、一騎當千の强者なれば一分も退を取るところ無し。いざ出立たせ玉へ。と付け元氣の滑稽交りにそやし立つ。椀久笑つて背後より打掛け呉るゝを被ながらに、成程一人住も面白い。押入に物入るゝまでも無く、立派な藏に何も彼も預けて置く歟、と戯るれば、飛んだ内兜を見透されましたが、そんな事は先づ何樣でもよし。それ御帶よ、それ御足袋。しやん〳〵、それで揃ひました。此の荒屋を斯樣見すてゝ、いざ〳〵御出馬。と蝶々の、身も輕くまた口も輕く、椀久をせり立て立出てたり。

其六

酒の騷ぎは他房にも已んで、茶にしめやかなる此方の閨、蘭燈光り和らぎて、一炷の柴舟の名殘の香の緩く留まるが其中に、しみ〳〵と物語る松山椀久、傍の眼にこそ睦ましさの羨ましくも思はれ、其身になりてはなかなかに、戀も情も物思ふ憂さや辛さの種子となるに堪へ難くてや自然花も露けき風情して松山男に打對ひ、滿つる缺くるはお月さんでもある習ひ、時の不祥は是非も無いと、男心の我の强う、思ひ切り濟まして居らるゝは、成程道理でもあらうなれど、上には產の母樣を持ち、下には小間づかひ下女下男の數を使ふて居られた身が、淸水あたりの陶器師の食客とあつては朝夕に定めし御不足勝で何ぞにつけては厭な心持もなされませう。含漱の水、洗面の御湯、誰が

人の口も煩さく、太夫様も好かぬ名を謡はるゝことになりませうほどに、枉げて御來臨を願ひました。何の要らぬ世話やくな、遊びの末はいづれ蒔繪の組印籠提げて止むもの無し、羽織も無しの編笠姿が然のみ羞かしいこともあるまい、と物に屈せぬ御氣性からは左樣思すかも存じませぬが、まづ〱蝶々が申すことを御用ゐあつて、きり〱しやんとして太夫樣にも御會ひなされませ。何時ぞや頂戴いた御羽織御衣服、其後むざとも用ゐませず大切に取つて置いてござりますれば、たゞ今直一寸持てまゐりませうほどに、それを御厭でも上になりと引纏ふて御召なされませ。御差料も、好いとまではまゐりませずとも見苦しくないを持てまゐりませう。髮月代も御好みならば何となりと致して進ぜませう少時の間御待ち下され、といふ。いや、志は過分ぢやが、それほどまでにも及ぶまい。折角云ふて呉れるもの故、そんなら衣服だけは何分宜いやうに仕て貰はうかい。併し見たところ簞笥も見えず長持櫃も見えぬが、と不審する眼つきを見て笑む長八、それでは少時の間御淋しくも御待ち下され、直に戻つて參じまする、と云ふかと思へば戸外へ早く出て、其儘駈け去りたり。をかしや、思ひのほかの奴、忠義顔に働くも憎からず、那處へ行きつると思ふ間も無く、風呂敷包を提げて身を忙しげに立歸り、さあ、是を召しませ。それ無下に汚してもござりますまい。もとはと云へば下され物の、御紋も矢車、めぐり〱て、御召になるとも怪しうはあらず。細い脇指、これでも是は、金拵て野暮ならず。誰も疎まう廉の無いやう身づくろひして御來臨になれ。御隨

取り寄せまする。と云ひつゝぽん〳〵と手を鳴らせば、那處からか五十ばかりの婆の臺所口をごとつかせて、お歸りじやつたか珍らしい時刻に、と云ひながら入り來りつ、携へ來し深草燒の小さき土風呂に、火種と消炭と入れたるを其處に置きて其儘引返す。はゝあ面白い。他家の婆を使ふて用を足すのじやな。何樣やら仙人が猿でも使ふ氣味がある。と笑へば蝶々も打笑ひ、仰わる通り、菓實でも持つて來さすれば、それこそ浮世仙人の圖に僞り無し。ハヽヽ、慾には彼の婆を唐見にするか、然なくば寧猿にでも仕度うござる。いや其はさて置き、煙草の火だけはまづ出來ました。一服わがつて下さりませ。ハヽ、不淨火ではござりませぬと無益なことも申さねばならぬやうな斯樣な詫しい住居へ御來駕下されたは、此方に取つては面目ながら、其方樣に取つては云はゞ時の御不祥と何事も御堪忍なされませ。河原町の御宅を御出になつたといふ御噂の傳はつてから、那處に何として御居出なさるかと太夫樣も甚い御案じ。襟元につかず落魄を棄てぬ御氣性は、失禮ながら前方の奴と渾名取られた三笠樣にも正座はさせぬ位の彼樣の事なれば、日頃御贔負の二三人に、御落着のところ聞き出して呉れたなら絹一ト卷與る、御伴隨申して呉れたなら此松山が手を突いて禮云はうと、つい一昨日も仰わつた程。慮外ながら賴母しう思はるればこそ此の蝶々にも御賴みなさるれと、心に懸けて居りましたに、今宵御眼にかゝつたは、太夫樣の御念も屆いたといふもの。然し其御服裝では、藤左は眼玉に涙のある奴なれば一度二度御來駕になつたとて何とも申しますまいなれど、傍

平生には似ざる眞面目の顔つき、熟と此方の頭上より足の爪先まで見居たりしが、ま、何樣なされたてござりまする。伺ひたいことも萬とござる、御聞きに入れたいことも萬とござるが、こゝでは何ともなり兼ねまする。何處へ御供を致さうにも其御服裝では御物好が些過ぎまする。いづれ此廓へ御來臨の上は、彼樣にも御會ひなされうとの思召もござりませうながら、そのまゝのそれでは御惡い。ま、ま、無躾ではござりまするが手前方へ一寸御來臨になりませぬか。はゝ、一合桝ほどな住居を御覽になるも一興、御惡いやうには致しませぬ、と手を引かぬばかりにして誘ふ。人さま〴〵の心々、此奴出過ぎ者の我賢顔に、何を知つて指揮がましい衣服の詮議なぞする事ぞ、とは思ひながら、落魄を棄てぬ志の嬉しさに、返辭はなさねど隨ひ行けば、廓も盡頭の人家裏、茶道を好く人も惱むべき細き〳〵路次を入りての突當りに如何にも矮く小さなる家あり。方丈の室一トつ、あとは臺所のみと覺しく、空々寂々何も無くして四方に壁の立てるほかには古机一脚盞の損ぜし硯箱一つ、坐中に淋しく見えたるのみ。住めば住まるゝ世の習ひ、かくても濟むものかとそゞろに可笑く、それにしても朝夕は何とするぞ、と不審を立つれば、長八机の塵を拂ひて、まづ此上に腰なと御掛けなされ。氣の異つた住居でござりませう。はゝゝ。不思議に思すは御道理ながら、御存知の蝶々、大抵は花ある遊君がたの坐に連なつて、飯は何時喰ふものぢややら、能うも身が保つと我ながら思ふほどの酒浸りに日を經れば、我宿て飯食ふは月に幾度もあらばこそ。その時は斯樣して

辭宜して行く。童心にも世の轉變のさまを悲しとや思ひつらん、氣の毒なおもひをさせつる事よ、それにしても宇市には優して人を袖にせぬしほらしき心入れ、行末も頼もしと、少時見送れば、我振り捨てゝ一と聲ばかり、いづくへ行くぞ、ゑい、山ほとゝぎす、と淸らな聲して唱ひしも今のやうに覺えらる。それよりまた步む些許の路のほどに、喜兵衛、半助、かや、かね、よねなど男女の知つたもの十人餘りに出合ひしが、横向いて行く、俯視して行く、いづれ知らぬさまして過ぎぬは無く、何樣なされたと一ト聲かくるものも無ければ、豫て斯樣あらんとは知りながらも忌々しく、揚屋の藤左は情有るものとおぼえたれど、此の樣子ではそれも當にならず、此儘の我を請じ入れて太夫に會はすべきや覺束無し、されど會はせじと云へばとて、無理にも會ふべきものを何の憚ることかあらん、と我に問ひ又我に答へて胸の思ひに心を奪られ、迂濶り步む出合頭、右方の小路より足も忙しく走り出でたる一人の男に衝突つたり。麁忽、御免、と此彼齊しく挨拶する途端に見交す面躰風俗。や、これは仕たり、飛んだ過失、御足を踏みは致しませなんだか、小生めでござりまする、と彼方は顔をあぐる。おゝ長八か、久しく見なんだ、と此方は云ふ。諢名を蝶々と人も云ひ我も呼ぶ滑稽漢、俳諧だけは成る奴なれど、身を自墮落に持つて退けて頭巾十德の淋しみを嫌ひ、酒に浮かれて日を過ごす男、左のみ强く贔屓にせしにもあらねば、衝突りあひしに逃げもならで、一應挨拶はなせしものゝ、言葉を構へて此場を此儘直ちに分れ去るならんと思ひのほかに然は無くて

に、向ふより來る細髷の赤禿頭、黄昏時の眼にも著きは鵜呑の宇市といふ剽輕者なり。自慢の早口歌、八百の燈明の油には白胡麻がらやら黒胡麻がらやら眞胡麻がらやら犬胡麻がらやら胡麻がら眞胡麻がら絆胡麻がらの油を堪へられたりといふを歪み口して歌ふては我を笑はせし奴、日頃何ぞの機會には身分に不似合な男がつたとを云ふて、自然何事かあらば火水の中にも入りかねまじき面つきせしが、今此の容態の我を見て何とするかと特さら打仰ぎて通れば、それと見るより周章狼狽、横顏見せて小股走りに言葉もかけず走り去つたり。何の是程の根性ならば平生無益な義者張つた事云はいでものことなるにと腹立しきが中にも可笑くおぼえて、思はず首を回しつ其背影を見れば、丁度彼方も此方を向きしが、面合せんは苦しくてや急に復び身を反して鼠の如く逃げ去りぬ。次に來かゝれるは法師の淨勢が手引きの小坊主、まだ三味も鼓弓も人の前で彈くほどのものにはならねど、生れついて愛嬌あつて聲美しく、片眼さへ盲ひずば如何なる人の子といふとも羞かしからぬ顏つきに自から太夫衆の愛を得て、未練の手つきも一興と座敷に召ばれて出る事もあり、殊に弄齋の一ト節は、自然と何處やらに妙を得て、酒に更けたる夜の擧句彼童が澄んだ聲で唱ふを聞いては身に浸みて涙さへこぼるゝと松山の語りし事のあり、幾度か我前にも出で馴染み戯れもせしものなるが、小童に此の容態見するも由無し、心付かで通れかし、と横向になつて行くに、賢うも此方を眼に留めて、ハッと驚きしさまなるが、ものこそ言はね軈て心深げにしみ〳〵と頭を垂れて

と一座のものを這ふ蟲とも思はぬ仕方鷹揚に、差當つての理を楯にして、急かず騷かず徐々と席を去り行けば河内大盡、口惜くはあれど女相手に脇差ひねくることもならず、なまじひなること云ひ出して却つて矢筈に云ひ詰められ、醉に紛らす顏の照り、火のやうになつて居たりけり。

其五

花は梢にあるほどの眺め、地に落ちては見る人無し、大盡も零落れては、名書の紙表具、有難がるもの先は少し。椀久勘當の身となつて、榮花の春の花々しかりしは昨日の夢、醒めて悲しき北風を厭ふも難き肌薄な服裝寒げに島原の廓の夕を彷徨けば、親しかりしも面を反け、知らぬさまして過ぐるもあり、此方は彼方を知らねども、彼方は此方の一ト盛り世に謠はれて時めきしを羨みごゝろに見て記憶えて歟、あれ見よあれは椀久とて、太夫の松山に上りつめ、賢さうに遊びを遣り居つたが、可惑や勘當されたさうで、金遣ひの拔殼殿、智惠も財嚢も無い顏して行く、あれでは末の松山に、普通超えた愛情が有ればとて、好う來たとも云ふまいもの、笑止笑止、と後指さして潛々話、鼻に笑つて行くもあり。實に貧賤には親戚離れ、富貴には他人も集る習ひ、椀久今に至つて斯ばかりのことを始めて知るほどの痴愚ならねど、差當つて覺ゆる世の態人の情の冷さに、流石胸の中おもしろからず、右左の家々に燈の光り輝き初めて艶なる絲の音など漸く起る間を心淋しく獨り歩む

いて、粹の手本と云はれさんせ。と文を取つたる云ひ廻しは、うづ高くして人に壓されぬ太夫だけある賢さなり。かう云はれては河内大盡我慢にも暇遣るべきところなれど、脂光りの赤顔に圓なる眼をぎらつかせて、ゑゝ粹ごかしは置いて呉れ。無粹ぢや、無粹ぢや、乃公は無粹ぢや。生の母にさへ愛想をつかされ勘當されてのら〳〵と乞食同樣になり下つた椀久づれに會はせては、太夫の名が廢る、御爲にならぬ。そこで此無粹は太夫を放さぬ、野暮の手本になつて退ける。但し女の情立てして乞食坊主に是非會ひたくば、此處を離れて去なうとは云はぬと云ふた言葉の意地も立てゝ、太夫が身體の上半分は、此處へ置いて行け、與ることとならぬ。胴から下は発して呉れる。自己が勝手に何處へなりと行きたいところへ行くがよい。と皮肉なる云ひ方、通らぬ心。これまでなりとや松山片頰にいと冷やかなる笑を浮かめて、ほゝ。能う譯のわかつたことを云はるゝ。成程、胴から下は発して與る行きたいところへ勝手に行けと云はしやつたの。男の口から虛言はこざんすまい。行きたいところへ妾が勝手に行きまするぞえ。おゝ嬉しや。人さんが眼には風吹烏、乞食坊主に見ゆるか知らねど、妾が眼にはたつた一人の好い男に見ゆる彼の樣に會ふて、積もる談を仕ませう。と云ひつゝずいと立つて振り顧り、さあ上半分の妾が身躰を與ることとならぬといふた御人、二つにさんせ二つにさんせ。此の松山を見事二つに切つて放いて取らしやんせ。ほゝほゝ此脚は発されたを悦んでか、勝手に動き出いて、それ〳〵それ、それ斯樣歩いて、行きたいところへ行きまする。

方それと知れて居る。但し今日此頃は風吹烏のやうな醜態して東山の三年坂あたりに羽ばたきもならず、潜み返つて居ると聞いたが、黄金が言ふ此の花街へ未練らしう恥辱かきに來居つたと見える。何と太夫は其男に、逢ふて遣りたいか會ひたいか。定めし紙衣編笠の鹽たれた狀で來居つたらうが、滅多に會ふたら名の汚れ、太夫の身の恥辱にならうぞえ。はゝ、返せ、返せ、逐ひ返せ。貰ひに來た奴逐ひ返せ、太夫も會ひたいことはあるまい。身が傍を立つて行きたいとも云ふまい。それとも其奴に會ひたいか。會つて思はぬ恥辱かきたいか。と四邊に遠慮も無き銅鑼聲、おもふさま張り上げて我鳴り立つ。松山これに眉さへ皺めず、治め切つたる面色して、ほゝゝ。能う大い聲を出す方樣ぢや。粋な郎ゆゑ有りやうを申しませうならば、成程郎の御傍を離れて、他所へ行きたいとは此松山、傾城冥理、申しますまい。なれども今會ひに見えた男が、仰ある通り風吹烏の樣な醜態して來たとならば、それに會ふ名の汚れを厭ふて、知らぬ顏せうとも申しますまい。落魄れて袖に涙のかゝる時と汲んで知らるゝ心の奥も羞かしい。女冥理、妾は會ふて遣りたいと思ひまする。とずつかりと云ふ。太夫それでは言ふことが二途に亘る。一ツの身體を上下二ツに、切つてゞも離さいでは何とも仕樣の無い理に當らうが、と冷笑ふ。さあ、其處は甚樣の御意次第、かうしてこゝに買はれた身體、自儘に去うとも申しませねど、落魄れた人、會はで歸さうとも思ひませぬ。勤めの意氣地、女の情、那方も欠きたいことは無けれど、妾は慾も願ひも云はぬ、何樣なと好いたやうに捌

痕無く、ばつたり其姿の見えずなりて、薄々聞けば義理固き母の意地強くも勘當したるより懐中輕うなつては身の金箔の剝げたるに我から慚ぢてや花街の門には入らぬとの噂なり。久兵衛が在りし頃は、月の前の螢と侮られて、始終横坐に下げられしに、無念の涙を呑み居たる河内の甚といふ大盡、戀の山路上り盡して巓を見るは此時ぞ、と久兵衛が見えぬ間を幸機とし、黄金の力に口の力、成るほどの贅を遣り、出るまゝの熱を吐いて、思ふ存分幅を爲んと、今日も揚屋の四郎左が方に松山を引き付けて少時も放さず、白檀の床柱に凭りかゝりて酒宴も半の欣々たる顏つき、白狐の平六、烏の勘左なんどいふ聞えたる暴れ末社相手にして好きなことといふ折柄、一人の婢入り來りて太夫の蔭に居蹲りつ、聲忍びやかに何事か打語らふこと亙久し。河内大盡始めより面白からぬ顏つきして打護り居りしが終に堪へて、見馴れぬ女、何處から來て、何をひそ〱と太夫に語る、此方が前を憚らぬか、退り居れ、氣に入らぬ、と喊き出す。爾時松山莞爾と笑を含んで向き直れば、銀燭の光り鮮やかに面を照らして冴えたる容貌にまた一段の生氣加はりたるかと見ゆる目の中眉のかゝりいと晴れやかなり。はて疎ましい人さんぢや。叱らいでも濟みさうなものを。慳貪な人を好く女子は、此嶋原には無いさうぢやぞえ。ほゝゝ、此人が見えたは此の松山に、逢ひたいといふ人のあつて、貰ひに來たものが有るさうな。それで其談を妾に爲て聞かせて居たのでござんする、と優しき中にも何處やらに堪へのある聲して云ひ解けば、河内大盡猶免さず、むゝ。その逢ひたいといふ奴も大

無しでは無かつたなれど、亂れては斯樣もなるものか、畜生にも劣つた心の持ち方身の持ち方、斯樣は躾けなんだに情無い。あゝ甚い厭なことばかり御耳に入れました、いや。止めて下されますな、斷念ました、妾が子にもう久兵衞といふはござりませぬ、妙順が子は彌兵衞といふものばかり。こなものは如何ならうと關ひませぬ。拋し出すとも如何とも御勝手になされて下さりませ、些も御恨みには存じませぬ。左樣なれば勝手ながら今日はこれで御告暇いたしまする、改めて御謝罪には上ります、左樣ならば。と云ひ捨てゝ久兵衞が方に眼も遣らず面を背けて、老の一徹、主人が言葉を耳にも入れず、戰ふ足さきに履物をおぼつか無くも歪み穿きに、穿きてとぼ〱立出でつ、危く躓かんとして辛く自ら踏み止まり、思はず後を見返りしが、清兵衞と顏見合はせて刻み步、顏見合せじとやまた面を背けて、急に門外の方に出て去つたり。餘りのことに清兵衞は茫然として腕拱き思に沈みしが、妙順の一町ばかりも行きたらんと思ふ時久兵衞勃然と起き上り、母の去りたる外の方を打伏し拜みて瞬る眼に淚を溢らし泣き出したり。

其四

花に百日の香無し、千日つゞく大盡は稀なり、と遣手の萬が憎らしき蔭口きゝしが惡い前表となつて、矢車の定紋は椀久大盡、と眼の見えぬ德の市までが聞き知つたほどの全盛も、風に崩れし虹の

と思ひ遣りつゝ、おのれも傍聽の片腹痛さに嚴かなる調子になつて久兵衛が面を屹と見詰めし淸兵衛、これ久兵衛殿、何となされた、汝は氣でも狂ふてか。と云ひかくるを後云はせて嘲弄氣味に、へゝへゝへゝと冷笑ひ、おゝ氣が狂ふた、氣が狂ふた。氣が狂ふたから意見云はしやるな。兎角伽羅の香が身に浸みぬ人等には戀の遣瀬無さの思ひ遣りがつかぬと見える。ハヽヽ、氣の通らぬ金佛輩、關り合ふては涯が無い。あゝ、あゝ、あゝ。と大欠伸す。妙順は思ひ定めし顔つき、淸兵衛殿有り難うござりまするが既御構ひ下されまするな。思ひ切りました不孝者、町中へ御斷り申して此奴めを逐ひ出し、御帳から久兵衛が名を拔きまする。親とも思はぬ樣子、子とも思ひますまい。壺屋が身代はもと〳〵此兒の兄の彌兵衛がもの、惡うして返すは口惜けれど彌兵衛を喚び上して渡しまする。なさぬ間ながら羞かしいほど美しいは彌兵衛が心立、生の子と睦じう暮したからうと察して自己が骨折つて礎突き堅めた店を久兵衛に讓つて呉れましたのなれば、妾はまた彌兵衛に義理がござりまする。我が生の子なれば馬鹿でも阿呆でも氣が狂ふても可愛いは山々なれど、扨我が生の子なれば此儘には置けませぬ。今日勘當する、明日からは宿無しとなり居つて、憂い辛い目の數々を見、金銀の氣の無いところには酷う冷う吹き荒ぶ浮世の風に晒されて、幾日醉の續く筈も無い揚屋酒の醒めた時、淋しう後悔仕居らうぞと思へば憫然には思ひまするが、義理には代へられませぬ、思ひ切りました。今まで騷いで居たかとおもへば俯伏して正體も無う既寝た樣子。これほどの性根

した美しいのが、一寸の間も離したう無いといふゆゑ此方も離れたいと思はう理は無く、呼べば呼ばる〻、留めれば留めらる〻、それを世上の馬鹿どもが、椀久は迷ふた上りつめたと云ふばかり。成程迷ふたかも知らぬが、澁苦い顏して悟らうよりは、面白い思ひして迷ふたが増し。人間一生夢と短いに、口開いて快う笑ふ日は幾日あらう。母樣も野暮を云はれいで、琴など笛など三絃など、好きなもの〻音でもさせて遊ばしやらぬか、前途も短いに苦勞性な、幸右衞門などの〻氣に掛けられたとて、店の金錢は十分に此の鼻が攫み出いて、くわつかと撒いて仕舞ふたれば、いろ〳〵の奴等が俯首になつて濟んだものを今になつて何となるものぞ。濟ませば濟む世は、まがりなりに埒が明くものでござる。氣にせいでも何樣にかならうが、愈々いけぬと云ふたところで兄の彌兵衞が手にか〻れば別に仔細は無い。粹ほどにも無い母樣の氣の小い。そんなこと關はずと此の鼻と一所に今から花街へでも行かしやらぬか。頓ては子にして貰はねばならぬもの、顏馴染になつて置て貰ひませう。屹と母樣にも氣に入らうとおもふ、色が白うて、髮が美うて、目に何とも云へぬ愛があつて、口つきが尋常で、鼻筋が通つて、身幹がすらりとして、しとやかで、立派で、藝が何でも出來て、氣が利いた、眞に見せたいやうな好い女、此樣いふては些可笑いが母樣が生んだ此の久兵衞が女房には過ぎるほどなものぢや。あ〻饒舌つたて口が酷うなつた。といふ。血の氣乏しき面をさへ火の如くにして我子の不法を怒ると慚づるとの思ひに得堪へず身を慄はせ居たる妙順の胸の中を左こそ

を見つめ居しが、氣を沈着しが聲を靜めて、汝は何事か此の母の仕業に氣障りなことでもあつて、それで其樣に横を云ふか。此方には何も覺えが無けれど、若や母の爲たことに深く汝の氣を惡くしたことでもあつて、其を其とは直接に云ひ難いより所以も無い無茶なことなど云ふては無いか。若左樣ならば何事なりとも遠慮は要らぬ打明けて、如是〳〵斯樣と云ふて呉れたが好い。妾に惡いことでもあらば何樣なりと汝の氣の濟むやうに、妾が頭も下げう手も突かう、打たれもせう踏まれもせう。何の〳〵身は何樣なつても汝さへ舊の久兵衞に立戻つて營業の道を勵んで呉れたら、假令へば一時に齒が皆脫けて急に三つ四つ年寄らうとて厭はぬ。さ、打明けて、つい如是々々と、胸のもしやくしやを云ひ出しやれ。屹度汝の氣の濟むやうにせうほどに、所以も無いやんちやな云ひ草、あのゝものゝと正氣の沙汰でも無い人の云ふやうなこと云はいで。これ久兵衞、この母が賴みぞや、其樣に何時までも、ひぞらいで、有體に話仕て呉りやれ。と何處まで優しき親の慈悲、世に不作法にも惡たれ寐に寐轉けたる面を覗き込んで賴むやうに云ふを見向きもせず、眉を皺めて煩しと云はぬばかりの面つき。あゝあゝ、母樣根の強い。耳元でぶん〳〵と左樣云はれては睡ることも何もなるものではない。年寄のくせに己惚の強い、我が仕たとの惡かつたて腹立つたかなぞとは餘り可笑い。母樣のやうな老い枯びた婆殿が何樣しやうと彼樣しやうと、其を取り上げて誰が腹なぞ立つものぞ、自惚づよい、あはは、は、は。理も非も要つたものでは無い、此の久兵衞が遊廓通ひは惟言ひ交

て、騒がせて、笑つて、悦ばせて、長い夜を短う過ごしたものを。ハヽヽ、今日にせよ、明日にせよ、何が面白うてわざ〳〵家へ歸つて算盤ぢや帳面ぢや彼が此がと親父臭い顔して我が面に皺を多うせう。と傍若無人に管を卷けば、清兵衞は驚いて幾度か袖を牽き背を衝けど毫末も關はず、まじまじとして好きなことを云ひ果てつ、其儘横になつて正體無げに睡らんとす。母の妙順此態を見て、清兵衞が見る眼を憚らぬにはあらねど、はら〳〵と涙を墮して聲慄はせ、汝それはまあ何といふこと。情無い理に昧いことを云ふの。町人の身として算盤帳面を厭ふて今日の身が立つと思ふか。清兵衞殿への義理も辨へず、云ひたいことといふ大白痴。特さら寐惚れた耳にも幸右衞門殿が肥前から上つたといふことの入つたら、何は兎もあれ商買に取つて拔きさしのならぬ關合ある客のと、馳せ戻つて挨拶せうと心づきさうなものを、何處を風が吹くかと云ふやうに、能くも濟まして居らるゝものぢやの。さ、此家で兎角云ふて居ては清兵衞殿の御迷惑妾と一しよに家へ歸りや。と云へども久兵衞動かばこそ。はて母樣の物の分らぬ。算盤帳面は厭ぢやといふに。身が立たいでも大事無い、打捨つて置て下されませ。幸右衞門が何とあらうと肥前から何が來やうと、松山が手飼ひの猫が嚔したほどにも思はぬ久兵衞に、青山呼ばゝり置て下され。歸りたくば母樣ひとり先へ歸らしやれ。私は此處で一ト寢入睡させて貰ひます。睡うてならぬ、可愛がられ過ぎたか、あゝ睡い睡い。と云ひながら轉りと横になる。妙順餘りのことに腹も立たれず、呆れたる眼に涙も無くして、熟と我子

る。老の習ひの口諄うはござりまするが、何分宜しく願ひまする。と眼に涙さへ少し持つて、老人のいぢらしくも述べ終るを默つて聞き居たる清兵衛は、あゝ有り難い親の慈悲、蔭で聞いて久兵衛も身の行ひを悔んで悛めうとするなるべし、と思ひつゝ受け答へせんとする時、隱れ居る筈にせし久兵衛の、遠慮も會釋もあら〳〵しく、ぐはらりと襖引き退けて、何時より殘れる酒の醉にや、ふらつく足元よろ〳〵と母が膝頭に跟蹌け出で、ぐにやりと坐つて寢ぼれ聲。いや母者人、能くやかましう饒舌られたものな。次の間で寢ながら、うと〳〵と聞いて居ましたが、何ぢや幸右衛門が上り居つたとやら、幸右衛門に此の鼻を好う思はせたいとやら。あはゝ無益しい。五十男のもぢやもぢやした爺樣に好う思はれたとて何になる。色なら露の曉の櫻、齡なら月の三五といふ頃を遠くも過ぎぬほどの、うつゝい、うつゝい、うつくしい女にでも此の久兵衛を好う思はせうと母ならば母甲斐に鬢つき眉つきの世話を燒いてでも下されば好いに。いらざる意見だて、ごつ〳〵、ぎく〳〵。はて彼の里のぬめり節の、ゆるりとした節の易らかなに比べては耳が聞きづらいと申す。清兵衛といふ此家の野暮めが我等を擁護ふて昨日一昨日此家へ泊つたとは、はゝゝ人聞の惡い、八幡若いものが、此樣な三年坂あたりの窯場なんどに聞くも淋しい獨り寢の枕して冷い夜着を被て明かしたとあつては、男が下る、忌々しい。實は島原に誰あらう秦の始皇も袖袂の下に坐らすべき勢ある松山といふに肩腰ひねらせて、撿校の淨勢に手事の三味彈かせ、宇市長八なんどの滑稽漢相手に酒飲ん

取りに上るは毎年の十一月か十二月、毎々窯元の賴みを受けて幸右衞門といふ人の出て來る例。餘の事と違つて勘定渡すことなれば、主人の居らねば痛うない腹探られて、若や支拂ひの惱ましいため不在にしたりと思はれても仕方なく、此方の不利益になつて何處ぞでは響きの來る道理、幸に幸右衞門といふ人は數年の馴染なり、性質も極々結構なり、一日二日久兵衞が見えねばとて、何と云ひ出しもすまいなれど、今日にも久兵衞が歸宅つて來て挨拶だけでも仕て吳れいでは、幸右衞門殿の思はくもあることゝ、店の束ねもする身だけに御存知の六藏が甚い心配。あゝ妾さへ女の賢ら立せなんだなら、見榮の場所で嬲られた當時こそは兎も角も、久兵衞が戀の海に泳ぎ出して歸るを忘るゝやうなことにはなるまいで有つたらうものをと、眞に口惜うござります。まあ妾としたことが長々と面白うも無いことと御耳に入れましたが、これも此方さまを賴もしう思ふあまり、久兵衞が若し見えましたら、充分御意見を云ふて戴きたいからのこと。眞に淸兵衞殿、老人の勝手ばかり云ふと思さいで、久兵衞めが骨に徹へるやう、御朋友甲斐に意見云ふて遣つて下されませ。年寄つた親にこれほどの心配かける憎い不孝な奴ながら一點憎いと思はねばこそ、誰にも彼にも好く思はれよ、褒られよ、と思ふより心遣ひも餘計仕ます。幸右衞門殿といふは實體なで伊万里の衆の信用が好く、それで伊万里から京大阪へ出す多くの貨物の年々の勘定、諸方合せては大分な金子の受取方を委ねらるゝほどな人。それ故其人に少しでも久兵衞を惡う思はせまいと一ト入妾が氣も焦れます

もはぬ自分の都合からでもあらうが生の子久兵衛を出世させたく思ふであらうと妾の心を察し抜いて、よく〳〵義理を立て人情を立てた仕打。それ故此方でも一倍奇麗に義理人情を立てゝ、譲られた身代を倍にはするとも一寸でも縮めぬやうにせねばならぬ道理。それを久兵衛の此頃の行狀、まさか家を傷むるといふことも無からうなれど、底の無い泥水に打込んでは何樣な長者の家も傾く、捨てゝ置かるゝ段では無ければ、隨分割つ口說きつ意見しても毫も用ゐて吳れぬ情無さ。甘やかして育てたが毒になつて、母の云ふことを取り上げぬとあつては、第一亡くなられた所天に濟まず、また彌兵衛へも妾の面の向けやうが無くて此の妙順生きるにも生きられず死ぬるにも死に得ず、此世に居ても彼世へ往ても申し譯の無いことゝ、此齡になるまで荒い聲も立てたこと無く過ごして來たものが、他に聞かれても耻かしい尖り聲出して腹立てたり、泣き聲出して叫いたりして、一生懸命に意見しても、何處を風が吹くかといふ風に待遇はるゝ辛さ、推量して下されませ。此頃はまた取りわけて遊び募り、昨日も一昨日も影さへ見せず。每年勘定取りに來る肥前の青山幸右衛門といふが上る筈なを承知して居ながら遂に歸らず。昨日其の幸右衛門といふが上りついても主人の居らねばかりか其行く先さへ知れぬ始末。有り體にも云へねば、河内の緣者まで去り難い用事があつて參りましたと、有りもせぬ緣者を急拵へして、まづ〳〵と虛言云ふた苦しさ。御承知もござりませうが、店で賣る陶器類、特更奇麗なものゝ類は、大概肥前の方から來るもの、それの一年の勘定を

て腹立つたら何のやうなことと爲うも知れずと、それが氣がゝりさに、止せば宜かつたことを此妾が、當時島原の遊君等の中、情有つて位あるは松山といふ遊君と聞き知つて其遊君に、かう〳〵いふ譯あつて妾が伜を人々の嬲らうとせう間、宜きやうに擁護ふて下されと頼んだが惡縁の初まり、壺屋の久兵衞と聞て一も二も無う引受けて呉れ、美事に人々の企の裏をかいて久兵衞の男を立てゝ呉れたは好かつたものゝ、それより久兵衞の尻は据わらず。あゝ益も無いことと仕て退けた、母が我子を蕩子に育てたも同じことと、鈍いことと仕た、行き過ぎたと仕た、と悔んでも取り返しは今さら付かず。禽を籠から放して仕舞ふて手に戻らぬを何ともならぬと同じありさま、我が仕出したことなれば人一倍妾の胸は苦うて、世間の浮れ息子の親の苦勞の、苦勞には相違なけれど妾に比ては、一層薄いところのあるが羨ましいと思ふ位。それのみならず恥辱を云はねば聞こえませぬ故申したうも無いことも申しまするが、實は、妾は其往時、生家の不幸に極々の少時の間ながら、難かしい酒の獻酬、品のある言葉の詰開きをせねばならぬ里の水も飲んだものでござりますが、縁あつて久兵衞が父の情により、幸福な身の落着を得て彼の久兵衞を設け、今はかう御隱居樣〳〵と、まあ何處へ往ても人がましう待遇はるゝものゝ、元を云へば左樣ゆゑ壺屋の家をば一ト通りならず大切にせねばならぬ身の上、特さら彌兵衞は義理ある子、其の彌兵衞が大阪の大商人市左衞門殿の助によつて仕出した肆をば、妾への義理立に强ひて久兵衞へ讓つて自己は大阪に別に竈を持つたは、妾の傍に居たうお

へ見えませうほどに、見えたら早速御歸りなさるやうに申しませうなれば御心配無く御緩りと御歸りなされませ。必ず〳〵今日は御歸宅なさるやうに申しませう。と虛言も方便、擁護ふて云へば、妙順つく〴〵と考へながら淸兵衞の言葉を聞き居しが、あゝ左樣いふことでござりましたか。老人の思ひ過ごして、若や壯いものゝ常ある習ひ、惡所へでも入り込んで膓を腐らす色酒でも飮んで居はせぬかと心配したが、御言葉で安心して、あゝ此の胸の痞が下りました。併し淸兵衞さま、まあ聞て下され。此頃は久兵衞めが島原へ通ふ路をおぼえて、町人に取つては武士の腰のものより大切な懷中のものを、たゞてゝも湧くもののやうに費ひ散らすといふ噂。久兵衞の兄の彌兵衞が代から付け渡りの手代六藏が澁い顏して妾への訴訟。五度六度は、柔しくしたり强うしたりして意見も云ふて見ましたが糠に釘、些も用ゐて呉るゝ樣子の無いに、胸が痛んで夜も寐られず、ほと〳〵弱りきりました、元來久兵衞は實直漢、遊廓の門が北向いたか西向いたかも知らいで商賣ばかり一圖に勵む、其他にはたゞ風雅なことを嗜き好んで土人形の可笑なを捻り出して窯に入れて其成績を獨り樂んで居たのみなは汝も定めし知つてござろう。云はゞ普通の息子とは些異つて居た偏屈者、それが此頃のやうな蕩子になつて仕舞ふたは此春のこと、三條に店持つた富家輩の寄合に、生意氣盛りの若いもの等が、久兵衞の偏屈なを見知るものから遊廓へ連れ出して嬲りものにして大勢集つて笑つて遣らうと牒じ合はせたを此妾が聞き、倅は平素温順くはあれど持つて生れた强い癇癖、嬲られ

胡摩竹の杖ついて肥り肉の婢を連れ、此方へ徐々と歩いて御坐つたは、たしか久兵衞樣の御母樣、屹度此家へ見ゆるのでござりませう、と云ひ捨てゝ立迎へんとや又出て行く。清兵衞は久兵衞に眼くばせして、昨日も一昨日も歸らなんだといふのでは母御がむづかしからう、奧へ往て休んで居らるゝが可い、と云へば久兵衞も言葉に就きて、成程母樣に無益な思ひを沸やさゝうでも無い、それでは免して貰ふて奧へ往て些横にでもなつて居らう、と身を起して彼方に入るを、見送つて忙しく久兵衞が履物を片隅に蹴寄せ、有り合はせし莚打被せて匿し果する間も無く入り來るは助左衞門の云ひしに違はず、壺屋が隱居の妙順なり。おゝ御隱居樣能うこそ御入來、めつきり寒うなりまして、と清兵衞慇懃に挨拶すれば、左樣でござりまする、年寄は日増に弱つて行く時候になりました。御內儀はいづれへ。おゝ左樣でござりまするか。時に私共の久兵衞は此宅へ見えは致しませなんだか。會はいではならぬことの出來たに何處をうろついて居ることとやら此二三日は影も見せず、心當りを尋ねうにも平生からして友達無しの男、此方へでも見えねば行つて居るところも大概は知れて居りまするが、と術無さうに問ふ。問はれて清兵衞外らさぬ顏つき、少しも心配させまじと、いや御心痛なさることはござりませぬ。一昨日も昨日も、例の我等と二人組み合ひの工夫事に夜を更かして其儘此家へ泊られましたが、他家では無し此方の事ゆゑ一々御斷りするまでも無い、御母樣に御目にかゝつた、次手に我等から申して置かうと、御心易立に御通知も致しませなんだ。また追付此家

他人樣の、業も沸かうし腹も立たうし、待遠しいから起る癇癪に氣が逸れて、胸の開くるほどな酒の飲みたうなつて揚屋に遊ぶやうな事をせられうとも、それは聊か無理の無いことながら、さりとては心苦しい限り、惡い噂さるゝやうなことを他人にさするも畢竟は我が拙いからと、人の噂を聞くたびつく〴〵情無う思ふ。と其とは云はねど久兵衞が花街通ひを制めんと我身の上に罪を被て且は眞實の述懷がてらに云ひ出せば久兵衞流石に少し厭な顏せしが清兵衞の言葉を終らせて、それは清兵衞殿何を云はるゝ。他所〳〵しく廻り遠に云ふて吳れいでも、乃公の色里通ひ止めいとならば打付に云ふて吳れたがよいでは無いか。厭らしい當擦りは置いて貰ひませう。ハヽ、汝の工夫が出來ぬからとて自棄になつて揚屋遊びするなどゝいふほど氣の錬れぬ椀久でも無い。無益な心配を爲つしやるな。少し仔細あつて凝つて通ふのぢやほどに、意見云ふて下さる心いきは忝いが、はて、止まらぬが戀の意地ぢや堪忍して下されく、昨日も一昨日も家には寢なんだ。と萎まぬ顏して云ふ。左樣云はれるば云はねばならぬが、餘り人の口に謠はれ過ぎる。母御も案じられやう、此の清兵衞も心配する。如何ほど賢い人でも揚屋酒に浸つては分別の鈍らぬは無いかして、始末の好い中遊興を止めるものは無いと云ふ例、何樣いふ仔細があるか知らぬが、と生眞面目に諫むるを笑ひに受けて、譯はあれども云ふたところで云ひ消さるゝは知れたこと、今こゝでは些云ひ憎いが、といふ時助左衞門こゝへ來て、私が今門口に立つて居て往來の人を見て居ましたに、焦茶の着物に鼠の頭巾、

て聞くことも無いではござらぬか。御内儀は見えぬが、お丶御佛參にか、それでは無躾ぢやが些ばかり御預けして行きませう。と懷中を探るを清兵衞押し止め、いや、それには及ばぬ、無うなれば嬶が貰ひに行く。二人相談して企て出した事とは云へ、一から十まで世話になつて氣の毒な。それも企てた錦手の出來さうにでもすることか、いつも出來さうで出來居らず。ま、まあ此の茶盌の釉色を見て下され、こんな物が何にならうかい、我が見ても愛想の竭きるものを、弟子共が左右云ふも無理は無い。あ丶情無い此の茶盌の摸樣に書いた春の草花を喩に取つて物の出來るは時節ぢやと慰めて呉れられたは嬉しけれど、草も一ト冬過ぐれば咲くに、何日まで我は空にのみ苦むのか。今度は今度はと受合ふては、今度も今度もと分疏する味氣無さ。いやもう智慧も竭し、分別も竭し、此の清兵衞が精も根も有るほどは竭したが、何樣も今だに工夫の緒がつかぬて、ほと〳〵泣きたくなる位、談話に聞いた唐山の景德鎭の風火仙は龍缸の成らぬに身を捨て丶生きながら窯の中に躍り入り、烈火に焚かれて灰となりしが、其爲龍缸は成就して神に祀られたりといふ。それと此とは事異れど、若し身を捨て丶我が望みの成るべきものならば身も捨てんと思ふばかりに氣は持てど、成らぬといふは情無い。手掛りさへあれば工夫思案も必ず付けやうに紙一重先の物を見る心地して、手に取るは易いと思ひながら少しのことで手に取れぬ。自分でさへ長々成功の無いに愛想が盡きて氣も焦れ丶ば癇も亢る。況して我がやうな腑甲斐無いものをも人がましう思ふて肩入れて賜はつた

二人は思はぬ金貰ふて嬉しくもあり又今更に師匠に對つて云ひ過ごしの面伏にもあり、こそ〳〵と退つて立つて聲も小く、それでは壺屋さま御言葉に就きます、師匠の思はくを宜しく、と云ひ〳〵其場を去つたりけり。

其　三

馬鹿ものどもめが馬鹿吐いたで無忌々しかつたてあつたらう清兵衞殿、と云ひながら椀久ずつと入れば、清兵衞疊を一ト掃しで請じ入れつゝ眉を皺めて、いや當世の人情では、弟子共の云ふが皆道理、さればとて仕かけた工夫は止されず、何としたものかと思ひ迷ふて居たところを御蔭で助かりました。併し思はぬ物入りさせて、と皆まで云はせず手つきで制めて、其樣な些細の事は兎に角、今朝知れた筈の試みの結果は、と問ふ。問はれて清兵衞立ち上る力も無げに身を起し、茶碗、壺、皿、幾個と無く持ち來りて久兵衞が前に置けば、久兵衞一々手に取つて見しが笑つて下に置き、氣にかけらるゝな清兵衞殿、まだ成就には早いと見ゆる。ハヽヽ、春咲く花は秋蒔かれてぢや、時が來ねば何事も成るもので無い。急かるゝことは要らぬ、氣長に工夫さつしやれ。成るそれ迄遠慮は無いこと、勝手の都合は何とても仕て進ぜうに、何故御内儀なり弟子衆なりを一寸我等宅まで遣さしやらぬ。男見らしうも無い斟酌して詰りは勝手向の事から起る厭ないざこざの今のやうなを默つ

醉つた。いや、むづかしい顏して返辭の無いは不承知と見える。助よ、分らね人では無いか、もう無益だ、緣切りだ。と云ふ時忽然人あつて庄左衞門が背後より其横頰を撲り曲め、ゑゝ喧しい雀めら。汝等何が分つた積りぢや、駄文句吐すな。汝等ほどには人の眼も見る哩人の分別も有るぢや哩。雀の分際で人の篭を立退かうとは出來過ぎた云ひ草、それ餌を吳れる、啄ふて默れ。と驚きながら立對はんと熱り立つたる庄左衞門を眼下に睨めて懷中より、光るもの二片投げ出したる男は水際立つたる美男、金拵への小脇差、眞黑扮裝の上品なる拵へながら何處やらに物好見えて野暮ならず、癇癖知るゝ眼尻のきれ、色白にして柔和なれど侮り難き風情あるは、今噂せし三條の河原町にて間口も廣き茶碗屋の肆を開き居れる久兵衞なれば二人とも豫て癇強き氣性は知つたり、爭はんともせず眼のみ瞬きてまご〳〵しながら、折角吳れたもの、取らぬも損、と庄左衞門先づ拾ひにかかれば、慾には弱からぬ助左衞門も遣ふやうにして拾ひ取り、これは壺屋さま好う御入來なされました。御察しのよい做され方、いや、有り難うございまする。師匠から貰ひました分にして、もう文句は申し出しますまい。と云へば椀久賤み笑ひを面に浮めて、おゝ何でも好い、汝等二人小癪を云はずと師匠に就て働いて居よ。其中惡うばかりもあるまい。湯錢烟草錢の些細なことは師匠に望まずと、乃公が吳れて遣るほどに案ずるな。乃等には過分な師匠の淸兵衞殿を空に思ふたら罰が當らうぞ、辛防せい辛防せい、さあ好い、何處ぞへ往つて遊んで來い、と粹な捌きに口數きかせず。

と悄態口たゝく。ゑ・煩さいは、勝手にせい、と言ひ棄てゝ清兵衞奥の方へ入らんとする時、此時ぞと庄左衞門聲を高め、勝手にせいと云はれいでも、勝手にせいでは身が立ちませぬ、弟子と思はつしやらぬがよい、師匠とももう頼みますまい、左樣思ふて下され、只今から御暇致します。と云ひ放つ。清兵衞向き直つて騷げるさま無く、靜かに坐りながら二人の態を熟と視て其儘物も云はず。此方はこれに勢を得て、我等が申すことに非はござるまい、分らずば理由を云ひませうほどに一ト通り聞いて置るゝがよい。地躰師弟といふものは、立寄らば大樹の蔭と、身を寄する頼みにして、弟子は寄る、師匠はまた其弟子を擁護ふて、守り立てゝ吳るゝが當り前。それに引換へて、頼む木蔭に雨の漏る同樣、頼みとする師匠が、弟子は何樣あらうと構はぬといふ風では、弟子も師匠もあつたものでは無い。今日此頃の我等が服裝容態、眼に入らぬことも有るまいに、綿が下つても肉が落ちても知らぬ顏してござつて、小遣錢一つ吳れぬとは師匠甲斐も無い、愛想が竭きた。ゑれもこれも要らぬ工夫沙汰に凝つて、我等が言葉に構はず、少しは我等に暖まりの來る筈の、金錢になる仕事をされぬからの事。何と出來難い工夫沙汰廢止にして眞面目の清兵衞に立戻つて下さるか。むかしの師匠にさへなつて下されば、何にも、いざこざの有ることは無い、何樣でも際限無しに金燒せられうとならば、井の無いところに咽喉乾かして坐つて居るやうに、馬鹿らしい顏して此所にばかりは居られぬ、助左衞門も同じ意、御暇と仕まするが。ゑゝい、あゝ酒が理に入つて可笑しう無う

紗綾の帶、金拵への中脇差、金遣ひの支度だけでもあるならば、かうして東山下の陶器師清兵衛が家の土間の莚に馬顔の助左衛門相手にして智惠の無い酒は飲むまいものを、あつたら天道の運り合せで當世の色男を窯の前の火焚に終らせて其松山に會はせぬが無念な。は、は、は、、と機嫌上戸の圖に乘つて饒舌れば、平日は內氣の助左衛門も我知らず聲を高くして、寐もせいで庄左、夢を語るな。おのれが太夫を買はうならば、橋の擬寶珠に毛が生へて、それ髱無しの大島田、男の心をときめかす油の匂をさせう哩、あは、、は、と打笑ふ。庄左もこれに噴飯して同じく四圍憚らぬ笑ひの聲の止め度無く騷がしきまでどよめけば、奧の方より此方へ來る跫音響きて土間を界へる一ト室の襖引き開けたる主人の清兵衛物優しく、これ二人とも騷々しい、ちと靜にせい、と制し止む。齡は四十を超えたるなるべく、鬢には霜や、侵したるが、精氣は未だ衰へざる徵か眼の色猶若く、清らに瘦せたる面つき、精悍さを示せる如し。庄左衛門は我おもしろの酒興の腰を折られたるを面白からずおもふ途端、日頃の胸のもやくやの一時に込み上げ來る心地し、むら〳〵と怒つて尖り聲に、騷々しいと仰あつても、馬が跳ねたほどにもござるまい、踊らず謠はず神妙に談話致したばかり、多寡が擬寶珠に毛の生へた始末、御心配には及びませぬ、と師匠の言葉を蔑にして、助左衛門と顏見合せ、あは、、、と又笑へば、清兵衛もふ、、と笑ひながら、何ぢや擬寶珠に毛が生へたと、汝等大分酒飲んで醉ふたと見えるの此の午時に、と云ふ。いや御馳走になつたおぼえはござりませぬ、

果は、ぐづ〳〵と其なりにして退けて、いつか談話は横道に入り、若衆の評判、女の噂、四條某町の油屋の娘は美しけれど、てら〳〵と顔の光るが氣に入らぬ、三條某町の桶屋の嬶めが入子鉢のやうに四人まで子を持つたは笑止な、なんど〻自己が人の家のばらけ飯食ふ身なるをも忘れて、さまざまに好きなこと云ひ罵る內、庄左衞門不圖島原の噂云ひ出し、助よ聞いたか彼の河原町が、名からして太夫の位はある松山に上りつめて魂魄拔け、うぼ〳〵になつて通ふさうな。京に一番の茶碗屋ぢやとて、色里に打込んでは身代に、頓て大きな罅裂が入つて、末は瓦落離と碎けて分散、久兵衞が兄の彌兵衞の代に、後のためを思ふて欅柱のがつしりとした普請して置たも、大抵粉になつて飛んで仕舞はう。と云へば、助左衞門は打笑ひ、粉にならうと灰にならうと荼毘場へ我身が行かぬ中の事ぢや。人間百まで活きても詮ない、足腰が達者で身躰に粘り氣のある中、仕たいこと仕て退けたが勝、碗久殿を惡く云ふは法界悋氣で、內々は汝も、松山ほどには行かずと、雜木山ほどな女になりと可愛がられて見たいのであらうが、あは、、は、と輕く嘲る。胸のたゞ中を云ひ中てられて庄左衞門堪らず高笑ひし、は、は、見透された、仰ある通りぢや。羨ましがらいで何とせう、其松山といふ太夫は、見てさへ溜飲が下るやうなすつきりとした身のとりなし、面ざしは極々美しいといふては無けれど情ありげに、心の行きかた味ひあるとの人の沙汰ぢやものを。汝まだ見ずか、いや見ぬことはあるまい、椀久が迷ふたも無理は無い好い女ぢや。ハ、、此の鼻‼黑羽二重の小袖、

て私も同くと乃公も言はうが、と云ひにくさうに云ひ出づる面は強ひて作りたる苦笑もて飾られたり。苦しき思ひの一つなればや、これも同く苦笑ひ以て受けたる庄左衛門是非無げに、いや氣が弱い強いては無い、假にも師匠と一旦頼んだものを、云はゞ此方から勘當せうといふ逆さ事ゆゑ、云ひ兼ぬるは道理不思議は無い。乃公も師匠の前へ出て今云ふたやうな理窟は云へぬ。併し默つて逃げたのでは、何の道今更他の職に身を寄せやうも無い我々故、必ず師匠に逢はずにも居られぬに決まつて居る、其時一々逃げ隱れもなるまいなれば、後日の都合の惡いは知れたこと。仕方が無い、素面では敵はぬ、二人で充分酒を飲んで、酒の力を頼りに師匠に愛想を盡かして盡かされて此家を退かう。此の清水の三町目、三年坂下の西側の、此所ばかりに窯が在るでも無い。と正午近き日を右の手に眉廂なして打見ながら、酒買はんとにや立上りぬ。

其二

一盃飮んで神暢び、二盃仰いで興生じ、三盃四盃と重ねては氣も強くなり荒くなる酒といふものぞ不思議なる。庄左衛門、助左衛門、二人ながら、正午の酒の利のよさに仕事場の土間に敷いたる筵の上、互に劣らぬ大胡坐して、おのづと聲も高調子に笑ひさゞめきしが、流石に醉ふても本性違はで、師匠に向ひ師弟の縁を斷たんとは云ひ難きまゝ、汝先づ云へ、汝先づ云ひ出せとの讓り合ひの

になつたを見ては、もう〳〵辛防が仕きれない。着物の一つも着せて呉れて、たまには色町の麝香臭い夜被に樂寢の出來るほど重寶なものを心付けて呉れてこそ、此方のやうな職方の弟子師匠の誼はあれ。此頃のやうに使ふばかり使ふて、借金の分疏までさせて、そして元結がはじけたを見ても髮結へと錢呉るゝこともせいで、弟子は何樣ともならばなれと云はぬばかりに接はれては、師匠も師匠甲斐は無い。弟子も何も有つたものでは無い。助、汝は何と思ふ、おれは思ひ切つて師匠を棄てやうと思ふが。と云へば、懷中の兩手に下腭を支へて首を垂れつゝ聞き居し青面、おゝ庄左衞門、如何にも汝の云ふ通りにするよりほかに思案は無い、實は此のおれも内々は考へ定めてこつそりと、獨り逃げて行かうと思ふて居た。師匠は土佐では朝鮮人の佛阿彌に就き、此地へ來ては源十郎に就き、人より深く此の道を窮め、立派に陶工で世に通るに、自分から好んで無益な苦心、見す〳〵金錢の取れる仕事を毫も爲ないでぶらり〳〵と効能も見えぬ考へごと、異見云ふて聽く人で無ければ、是非も無い、我が身を退くばかりと分別は仕たが、さて恩もある義理もある、主衰へても狗は去らずと誰やらに聞いた言が身に當つて、默々の夜逃も仕兼ねて居た。しかし汝の云ふ通り、今年も歲晩近いに此儘で、空に燻つて終るといふのは、如何に燒物師で候でも、あまり賞められることでは無い。夫故汝の分別に就きたいことは就きたいが、知つての通り氣が弱うて、おれには師匠に暇を呉れと云ひ出すことが能う出來ぬ。汝師匠の前へ出て、一々理由云ふて呉れるならば、其後につい

自己が身の一刻も速く免されんことを祈りしが、これより一同は悉く拘留尋問さるゝに至りたり。

さて長髓彦等は左まで日數も立たずに免されかへりけるが、彌九郎のみは云ふところ明かならずとて免されず、彼の一條の怪談とゝもに鬱月彌九郎なるものは長く警察官に與へられたる問題として横たへられたり。

對しても君が濟まぬといふものだ。と頻に逼られたれど、僕だとて面倒な事件に關係して種々と尋問などされるのは甚はだ以て弱りかへる。特に亡魂があらはれたなどゝ云つたら警察官なども眞實にすることは到底あるまい。死躰だといふことを何か譯あつて僕が先に知つて居て、言を亡靈に托したのであらうなどゝ思はれた日には何のやうな難澁を見るか知れたものでは無い。僕は眞平だ。此事を誰も口外せねば幸ひに他に見て居たものもないから知れる氣遣は無い譯だ。だから一同堅く約して何も云はず語らずで居るのが一番好いとおもふ。と一生懸命抗辯なせば、一同これを道理に思ひて然らば此事は一同も口外せずに濟まさんと堅く誓約なし終りぬ。

彌九郎が外のものは亡靈は有るものといふことを堅く信じて大に驚き、二六時中何と無く畏怖に心を駈られ、長髓彥の如きすら急に後生氣を起し初めて說敎を聞きに行くやうなりしが、彌九郎は餘のものより一入我から苦み患ふること甚だしく、若し連中の口よりして事洩れなんには我は如何に警察官に答へをなして放免さるゝ事を得んと恰も自己が罪を犯せる如くに心を痛めたり。

彼の夜の翌々日の新聞紙には例の嬰兒の屍躰のこと掲載されしが、鸎月等は其新聞紙の記事を見て後互に眼と眼と相見るのみ。

兇殺しの犯人は捕へられざりしが、耳目聰明なる警察官は如何なる點にてか馬面男の擧動に怪むべき點ありと認めて拘留尋問したり。尋問されて馬面男は信すべからざる怪談を疾くも饒舌り出して

見る人あらば怪み咎むべきなれど、幸ひに夜深く人稀なれば咎めらるゝ事無く下宿に歸りぬ。歸り着きて後一同は額を鳩て他聞を憚るひそひそ聲、どうも實に意外の事で驚いた、と一人が云へば、餘り長髓彦が强情を張つたから惡い、と一人が口說く。僕だつてまさか眞實に彼樣なものが出やうとは思はなかつたから開けて見たので、事の起りは鶯月が怪談を仕たからだ、と長髓彦は分疏すれば、何も僕は話を仕たゞけの事で包を明けろとは指揮は爲なかつた、と彌九郞は云ふ。イヤ誰が惡い、彼が惡い、と云ひ爭ひにはなつても平生のやうに大聲あげて論ずることは得せず。たゞ只管暗雲に彼の屍體を見しごとを他に知られんとを怖るゝのみ順序立ちたることをいふものすらあらぬほどなりけり。今となりては平生最も臆病なりとて侮らるる馬面男の云ふことのみ稍道理立つて聞えたり。馬面の男は必死となりし如き態にて思案せし後、極めて謹みて、今更諸君、誰が惡いのかが良くないのと云ふたところで益が無い。たゞ今相談すべきことは苟且ながら人の死躰を見たことだから一條の顚末を訴へるか乃至訴へずに知らぬ顏で濟ませて仕舞ふか。又訴へるなら誰が主になつて訴へるか。是等の事を決めて置かぬと一同の口が區々になつて飛んだところから詰らぬ嫌疑など受けぬに限らぬ。さあ何樣したものだらう。と云ひ出せしが、甲も讓れば乙も讓りて誰訴へ出んといふものも無し。彌九郞は最初亡靈を見たりと云ひしをもて皆々より、畢竟亡靈が君の前に現れたのも、枉死を遂げた寃を雪いで吳れといふやうな譯で出たのだから、君が勿論訴へねば亡靈に

臆病者の揃ひなれば誰しも後へ退り勝なる中にも彌九郎は拔き見るを猶止めんと、それ見玉へ、何樣しても怪しい此包みを明けて見るのは不祥の事だ。既廢止にして歸らう。と云ふに、長髓彦は猶我を張りて、水に浸つて居たから何物にしろ臭の出るのは當然だ。形を氣遣ふなぞは氣の所爲だ。今見ろ鷽月の化の皮を剝ぐから。と云ひながら繩を解き初めたり。

長髓彦の他は皆何となく氣味惡ければ、あらずもがなと思へども、怖々見居たるに長髓彦は遂に叮嚀に繩を解きぬ。卷かれたる莚の一端を兩手に持ちて彌九郎を冷笑しながら、それ噓の皮を引剝ぐぞ、と云ひつゝ急に引立つれば、一塊物は轉び出でたり。何ぞと見るに是は抑如何に、正しく全く裡躰の死兒なりとは冷かなる月の光に知れぬ。此態を見て、わつと云ひさま彌九郎、馬面漢は云ふに及ばず、流石强かりし長髓彦まで前後の分別無くなりて、臆病神に追ひ立てられ、一目散に逃げ出したり。

其四十

空を飛んで逃げ出したる衆人いづれも生きたる心地は無く、遮に無に走り駈けたりしが、漸く田圃を出拔け家續きのところに來りし頃、息の切れたる苦しさを覺え、胸を撫りて立止まりぬ。誰が顏も土氣色になりて生きたる躰とも見えぬ程なるに、加之呼吸さへ死なんばかりにはづませたれば、

は云ふべき辭の無いのであらう。さあ何樣だ、何樣だ〳〵、諸君も答はあるまいと。差當つての理詰に長髓彦の答へ兼ねたるを見て圖に乘て攻めたてたり。

稍案じわづらひたる長髓彦は屈服せず、いや何といつても僕の今云つた通りの次第に相違無い。それは明けて見ない包の中を何だと僕が云ふことは出來ないけれども、何も必しも嬰兒の屍骸と限つた事でもあるまいでは無いか。不淨の物かなんぞを捨てたかも知れぬ。何國に鶯月の云ふやうな怪異の事實があるものか。そんなら好いは、此包を明けて見ない中は論が干ない、水掛論といふものだ、僕が明けて見るから衆人見たまへ。其上で鶯月の云つた通りなら僕は云ふに及ばず皆が謝罪る。若亦左樣で無かつたら鶯月め免さぬから左樣思ひ玉へ。何構ふものか人の棄てたものだ、開けたところで咎め人は無い。衆人が厭がるなら僕一人で開けるから其處で見物し居玉へ。と强硬に我を立つれば、彌九郎は明けられて萬一あらぬもの丶現れ出でたる時は妙ならずと頻に遮りて、それは餘り穩で無い。若し開けて僕の云つた通り屍骸でも出た時は、僕の談の眞實だといふ證據の立つのは好いけれど、飛んだ係り合になるといふものだ。と云ひ張れど、云へば云ふだけ長髓彦は、それ噓の皮を引剝がれるのを怖れて豫防線を張り初めた、と冷笑して已まず。既一人田の畔に下り立ち、さま〴〵にして彼包を搔き寄せ、水の滴るを徑中に持ち出したり。

何だか少し異な臭がするぜといふものあり。異に無氣味な恰形だといふものあり。表面は强がれど

げかゝりたり。

其二十九

成程彌九郎が云ひしに違はず、怪しき包のありたるに、さらでも四圍の薄淋しきに怖氣つき居たる衆人は慄然として、一も二も無く歩を反しつ去らんとなしたり。されども痩我慢の長髄彦は急に衆くを押留めて、諸君、其樣なに怖れることはあるまい。正躰の知れない薦包が有つたばかりで鶯月の云つた事が眞實とは限れない、僕は悉皆悟つたよ。此薦包を鶯月が偶然見出して、それから怪談を揑造して僕等を一杯食はせたのだ。何と鶯月恐れ入つたらう。明察の通り何をか包まんと白狀して仕舞つたが旣可からうぜ、と云ひ出せば衆人も成程と合點して、應、大抵そんな事らしい。詰らなく一寸嚇された。さあ鶯月白狀して仕舞へ。と勇氣を回復して口々に喚きぬ。

圖星といふところを長髄彦に說破はされたれども、此處になつて其通とも云ひ兼ねたる鶯月は猶も強情を張り、ゑゝ君等も疑念の深い、現在此樣いふ包さへある上は僕の云つた事が虛言で無いとは解りさうなものだのに、まだ僕の談を揑造だなどゝ云ふのか。それならそれでよいが、それにしては此包が何であるといふことの解釋がつかんでは僕の談を揑造だと決することは出來ぬ筈だ。それ見たまへ、考へて居るばかりて、何だといふことは答へられまい。何樣だ、長髄彦、默つて居るの

もう大抵其場に來さうなものだが未だ着かぬか、と長髓彥の問ふに答へて、ム、もう直だ、此の小流を傳ふて一町ばかり行けば現場だ。あれ彼處に見える案山子から遠く無いところだ。と指さして鶯月が敎へ知らすれば、此時は既全く言葉無くなりて居たる餘のものども徐に恐怖の心を生じて愈々一團となり、互に押し合はぬばかり身と身とを寄せ合ひけるが、中に彼の馬面男は鶯月の袖を引いて、鶯月々々、眞實に出たのかえ。何だか無氣味な樣子なところだ。と云へば、彈九郎も勢無き聲して、眞實に出たから左樣云つたのでは無いか。それに君等が僕を窘めて、何も二度見るにも及ばない厭なところへ逼つて連れて來たのだから仕方がない。實に彼の這つて居た躶躰の嬰兒の姿を想ひ出しても慄然とするよ。と眞實らしく告ぐ。此の返答をきゝて衆人內心は愈々若やとの疑ひを增しけるが、そんな馬鹿なことがあるものか、ハヽヽ、と打消して强がる長髓彥さへ其笑ひの尻聲何と無く臆して聞えぬ。

やゝ少時して鶯月は忽然歩をとゞめて、此處だと急に叫びだしたり。彼の薦包を披きて見たる譯にはあらねど想像にて一旦我から怖れたる彈九郎は今も猶彼の包を疾くもまた眼にしては快き心地せねば、多勢を賴みには仕ながらも其聲は妙に顫ひたり。ヱッと云ひながら衆人は一歩退きしが、流石に長髓彥は踏み止まりて何處にと眼を睜りたるに、成程鶯月が指さす方に怪しき包は繩からげにされて橫たはれり。怖る〳〵衆人も之を目にしぬ。馬面漢は見ると其儘あつと云ひて逸足出して逃

下宿をば立出でたり。

夜は既深けたれど月は高く冴えたれば路行くに少しの累もなし。揃ひに揃ひたる烏滸のものども途すがらも猶虚實眞僞の言葉戰ひを止めざりしが、同伴多きに近からぬ路程も苦にならず、兎角する間に既市中を出はづれて例の田圃にかゝりたり。長髄彦等の黨の中にも、鷽月が堅く云ひ張りて毫も迂論げなる態無く、勞を厭はずして此地まで來りたるに、また思ひ返して、若し鷽月の云ふところの全く虚妄なるならんには、大抵のところにて兜を脱ぎて謝罪る歟、左らずば事を左右に托して行き澁るべきに其樣子の些も見えざるのみならず、現塲に近づくにつけて勢よくなるは、若くは先刻に云ひし通りの事のありしにはあらずや、と今更疑ふ心をば口にこそ出さね起すもあれば、自然口數もきかずなりて、土地の景色の淋しくなるに連れ、一行の淋しさも一しほ增しぬ。雲は濃からざれど時々月の面を掠めて過ぐる間は光を蔽ひ薄むれば、暗しといふにはあらざれど間隔りたる物なんどを見誤らしむるほどには朦朧ならしめ、風は寒からざれど秋の涼しさに音の冴ゆれば、稻葉の戰ぎも耳に立つほどにて、鳴子の自然から〳〵と響くも臆病の魂を縮ましむ。夜は陰々と更け渡りたり、遙遠くにて犬の悲しげに吠ゆるも物凄く聞ゆれば、口はいづれも達者なれ心は强からぬ衆人、蛙兒の人音に驚きて跳つて用水に入る水の音にも膽をひやし、此中に唯一人稍强く見ゆる長髄彦が後に添ひて徐々と細路を辿りぬ。

虚言では無い。論より證據は僕の通つたところに今でも其の薦包があるから仕方が無い。強て虚言だといふならば其處へ一人で行つて見たまへ。若亦其處に僕のいふ通りの物が無かつたならば、明日國から來る筈の爲替を殘らず義捐させられて御馳走に供させられても苦く無い。と云ひ張れば、皆々も意地になつて、これは面白い。其樣な馬鹿な事を云ひ出して鷽月後で泣を入れるな。其時になつて用捨は無いぞ。吾等が其處へ出かけぬだらうと高を括つても行て見ぬとも限らないぞ。何樣だ皆でもつて明日行つて見やうでは無いか、と相談するを、明日では時が立つ、他の人が見たら其包を何樣しやうも知れねば、僕は明日なら承知せぬ。と鷽月は遮る。それそろ〳〵と弱い音を吹き出したぞ、今夜行つて見るのなら同道するか。と衆人は云ふ。ム、如何にも今直ぐ行つて其包が無かつたら謝罪る、其代り有つたら皆から罰金を取るが合點か。オヽ出さうとも〳〵、と戯談高じて實となり鷽月を先に立てゝ其の現場へ御苦勞にも赴くことゝ一決したり。

其三十八

長髄彦等も且は興に乘じ且は後へ退り難きより現場に行きて彌九郎が嘘の皮を披剝いて呉れんといへば、鷽月も如是なつては長髄彦等に謝罪らせ、自己が平生より空砲の山伏のと云はれて侮らるゝを取り復さんと思ふより外無く、我案內して吾が言葉の嘘言か眞實かを見せんものをと先に立ちて

はれることも無ければ、女の幽靈が虎の皮の犢鼻褌をしても現れはせぬ。汝が今話した嬰兒の亡靈は嬰兒にしては口こそきかね、釣り合はぬほど分別がある。吾が亡骸のありどころを知らせて後消るなどゝいふは、形は嬰兒にあらはれても、何樣しても十歳以上のものゝ智慧で無くては無い圖である、全く嬰兒の狀態でない。在來語り傳へた亡魂の談と照し合はせて見ると、亡魂といふものが實際あるにしても汝の談は少し格外で、全く汝の揑造したのだといふことを證據立てゝ居る。これが第二の理由である。月夜に篝火がぱつと燃えるなどゝいふことのある譯は無い、手近いところで是も馬脚を露して居るといふものだ。第三がこれで、第四には、人は最期の一念では成程幽靈にもなりさうなものだが、何も思はずに死んだものが悉く幽靈になるならば、世界は幽靈で埋まつて仕舞ふ。無念無想に近い嬰兒が縱ひ殺されたにせよ幽靈になるほど口惜しがりもすまい、だから昔時から親に抱かれつ連れられつして現れる嬰兒の幽靈はあつても、嬰兒ばかり出て來たといふ事は無い。して見ればこれも今の話が揑造だといふ一つの證據だ。さあ鶯月め閉口したらう。撲りつけるから左樣おもへ、云譯は一つもあるまいが。と怒鳴出せば、皆雷同して、左樣だ〳〵皆で撲るから左樣おもへ、但し謝罪として饗應でもするかと。尾について罵りわめきぬ。

幽靈の一條は全く吾が揑造なれども、鶯包は眞に有るなれば、鶯月は屈すること無く、何でも彼でも事實が左樣なら仕方が無い。長體彥の理屈ぐらゐなもので事實は打消せぬ。いくら何と云つても

其三十七

昔時ならば兎に角、開けたる今の世にさる事あるべしとは誰もおもはねど、さも〳〵眞實らしく彌九郎が語り出でたるに、一時は誰しも其を虚誕ならんと一概に云ひ消しは仕難かりしが、頓ては怪み疑ふ心つのりて胸の中には肯はず。例の彌九郎が法螺なるべしと七分通りは思ひ居れる中にも彼の長髓彦は承知せず、馬鹿なことを云つたものだぞ、鶯月め、其手は食はないは、さあ撲るぞ。諸君、何と今此鶯月の云つたことが信用出來るものか出來ないものか、誰だとつて信用するものはあるまいではないか。第一田の中に薦包などが有つたとして聞けばこそ前の怪談じみた談も少しは根がある事のやうなものゝ、田の中に何で其樣なものがあるものか。これ鶯月、僕が説破して遣るから聞き玉へ、田と云へば人も油斷無く見巡るところだよ。其處に其樣なものがあれば何で怪しまずに濟ますものか、せめて川の中にでもあつたといふなら流れて來るといふこともあり、人の目の遠いといふところもあるから道理にも聞えるが、田といへば人の持物でもあり、他所から流れ物が來るべき由縁も無いところだ。其處に何で其樣な包があるものか。これ第一に、鶯月、汝の揑造した妄誕だといふ的確の理だ。また鶯月め、汝は幽靈といふものゝ普通の性質を知らぬ奴だ。幽魂といふものは都べて皆生前の狀態と違ふことの無い狀態であらはれるものだ。盲人の幽靈が眼を睜つて現

いゝ馬鹿臭い、と長髓彦は立たんとす。其袖を執へて、君も分らないナ、まあ聞き玉へ、と云へば、ゑゝ五月蠅ナ鬱月め、また瞞さうと思つて居るナ、よしそれならば聞て遣らうが若しまた虚誕に決つて居る事だつたら撲るから左樣おもへ、と云ふ。好いとも、虚言だつたら撲られやう、と言ひ張る樣子の虚妄ばかりとも見えざるに、長髓彦より他のものは兎に角聞かんとまた座につきたり。彌九郎此度は長髓彦に打對ひて、まあ聞き玉へ、それから僕は怖々ながら段々と道を辿つて幼兒の這つて居たところを通りかゝつたが、此處を頻に指した歟とおもへば、思はず眼を轉じて先刻に幼兒の指した田の中を見ると異なものがある。月明りだからよくは見えぬが、丁度赤子でも入つて居やうといふ大さの薦包に繩をかけたのが捨てゝあるのだから新に又僕は慄然とした。前に話した〻けならば僕が狐に誑かされたばかりだと云へも仕やうけれど、實際其薦包は消えも仕ない、無くなりも仕無い、今でも必ず存在して居る。して見れば孩兒が寃を訴へたと解釋しても至當だらうでは無いか。不思議といふことは無いに限らぬ。幽魂も無いとは云ひ限れぬ。現に證據の有ることだ。何程僕が臆病でも證據も無いことに悸き怖れる事は無い。此樣いふ事であつたればこそ君等に怪まれるまで面色さへ惡く仕て居たのだ。と云ひ終つて彌九郎は虚誕を全く成し遂げたり。聞く者共は流石にかく云ひ廻されては半信半疑、眞僞の判に迷ひたり。

あつたが、其時それを聞た僕は鼓膜を透して腹の底まで氷かなんどて剜られるやうな心持がした。すると一ト聲二タ聲といふもの叫び啼いたが、一聲は一聲より凄絶悲絶であつて殆んと僕をして堪へざらしめた後、最期の悲鳴を終ると同時に、陰火がぱつと燃えて其姿は霧か雲のやうに消えて仕舞つて後には唯薄曇りした月が一輪天に遺つて居るばかりであつた。と語りかくれば、これにて既談は終りたりと早合點せる男ども、長髓彥は云ふに及ばず口を揃へて不平氣に、何だ面白くも可笑くもない。大概こんな事だらうとおもつて居たが、とう〳〵擔がれた。ゑゝ馬鹿々々しい、既寢て仕舞はう。何だか例に無い怪な面つきをして居るから眞實に何事かあつたのかと辛抱して聞て居て遣れば途方も無い怪談で人を愚に仕居る。飛んだ左龍の屁鋒弟子だ。覺えて居ろ鷽月め。何時かは復讎をせずには置かぬから。忌々しい山伏め。千三め。大砲め。何處の國で月夜に妖怪が出るものか。虚誕をつくなら次手に最少し面白く信受らるゝやうな事を云へ。と愚痴たら〳〵座を退かんとす。

彌九郎も如是罵られては大砲、山伏、千三など云はるゝことの快くもあらぬより歟、或は虚言を云ひ遂げんとする虚言家の意地よりして歟、眞面目になりて長髓彥に對ひ、いやまあ聞き玉へ、これからが談だ。半分しか聞かないでは虚言といふのも道理だが、平生は兎に角に今夜の話は決して虚言で無い。僕も男子だ。眞面目に虚誕で無いと誓ふことに虚誕は云はぬ。と云ひ爭へど、聞かな

して殆んど其時は呼吸を自ら絕つて居つたと後では思ふ位であつたと。說き出せば、長隨彥は、それ、始り〳〵、諸君氣をつけ玉へ、大砲だ〳〵と笑ひながら云ひくだせど、此時語り出づるにつけて彼の場所の光景を復び我が胸に浮ぶれば再びまた忌はしき感じの起ると見えて彌九郎が面の色は變り、如何にも眞實らしく見えければ、一人として長隨彥に同ずるもの無く、ム、ム、してそれからは何樣したと問ひかくるもあれば、兎に角殘らず聞てから評は仕たが好いと云ふもあり、皆熱心に後を聞かんと膝をすゝめぬばかりなり。

其三十六

彌九郎はまた語を繼ぎて、君等或は虛誕だとおもふかも知らないが、實に虛誕のやうな眞の事實に出逢つたのだから堪らない。僕の當時の愕きは話にも何にもなるものでは無かつた。併し後へも前へも行かれなくなつたから是非無く立ずくみとなつて仕舞つて、見るとも無く茫然としながら見て居ると、其嬰兒が僕の方を向て自分の軀を指し示しては自分の右手にあたる田の中を指し示し、自分を指しては田の中を指し、幾度も同じ事を繰り返した。僕は譯が分らないから其儘に見て居るとやがてまた同じ事を仕た後、何とも云へぬ非常に悲しい聲を出して啼いたが、其聲の恨めしげな氣味の惡い響を仕たことは例へるに物も無い。月にまで逼るやうに高く淸んで而して長く緩い調子で

く語らんかと密に夙くも巧みたり。
馬面の男は待遠なりと云はぬばかりの氣色して、何でも好いから早く話し玉へと、催促すれば長髓彦の他は皆これに同感を表したり。こゝに至つて十分得意の彌九郎は特に聲を細め、いや思ひ出しても慄然とする。中途で遮らずに聞き玉へ。今云つた通り田の中の細道を獨り歩いて行くと、何程冴えても月の光の事だから能くは見えない前途の方に、生れて間も無いと思はれる嬰兒が唯一人で這つて居るのさ。何樣も確に左樣だとは見えなかつたけれども月の光で其のやうに朧氣ながら認られたから一時は非常に驚いたが、初はいや／＼此樣なところに此樣な事の有らう筈は無い、全く眼の所爲で左樣でも無いものを左樣見るに違ひは無いと思ひ直して、構はず前へ進んで行くと、遂に其間四五間になつた。折から月は薄雲を被いで、ぼんやりとはなつたけれど、何しろ四五間の事だから眼の誤る氣遣は全く無いのさ。段々進みながら怪み／＼見ると、最初に見た通り生れたての嬰兒位しか無い嬰兒で、加之赤條々で這つて居るのだ。秋風の冷かな此時候、露の零ちる最中の月の夜中、人家離れた淋しい田の中、何樣して嬰兒の居る譯は無いのに、身躰の小い割合には這つて居るのも實に奇怪なことでは無いか。僕はそれだから滿身水を浴びたやうになつて、平生幽靈妖怪なんぞといふことは無いやうに思つて居たが、理外の理とかいふものがあつて、此が即ち幽靈妖怪でゝもあること歟と思ふと同時に手足も縮んで逃げやうにも逃げられず、夢に魘はれたやうな氣持が

何事のありしか、何とせしかと、口々に問はるゝに、彌九郎は此上無く滿足して、疲れも惱みも打忘れつ、いやもう恐しい凄いめに逢つた、と漸く口を開きて云ひ出しけるが、此の一言に衆人の愈〻其の始末を聞かんものとの色をなすを見ては面白さ堪らずなりて、先づ聞て呉れ玉へ、一生に初て此樣な恐しい思をしたよ。實に虛誕のやうで而も實際に凄い話だ。君等に別れてから僕は一人猶素見して居たが、段々廓中も淋しくなるし、別に奇なことも無いからして、歸らうと思つて大門を出てそれから田圃の中をぬけにかゝつたのさ。特に此路を擇んだのは仔細も何も無いのだけれど、餘り月は良し、俗な路を歩くでも無いと考へたばかりさ。すると田圃中の淋しいところで途方も無い異な事に出逢つたが、君等はこれを何樣なことだとおもふ。と云ひさして衆人の顏を見渡したり。

此時は既彌九郎が面は全く常に復りて、加之得意げなる態さへ示し居れば、長隨彥は例の彌九郎が妄談に乘せられんことを危みて、何樣な事に出會つたか君の事だから知るものか。而してまた實際が蛙を一匹踏み殺したのでも鰐鮫を退治したやうに話す君の談だもの。其談に合ふやうに想像を居かせることが僕等に出來るものか。其樣なことを云ふて居ずとも早く要領をあげて語り玉へ。と云へば彌九郎は眞顏になりて、いや、今日のは實際ばかりの談だ。決して一厘一毫も想像なんぞを加へるところでは無い。眞にたゞ事實として而も不思議な事實なのだ。とは云ひながらも如何に面白

はずして深く自ら驚ける態なるに、嬲りつ笑ひつせし者等も各自の心の底には少しく疑ふところ無きにあらず、まさかに狗に咬まれしにもあらざるべしと思ふものから氣の毒にもなりて語無く、彌九郎が口を開きなば其樣子につきて慰め遣らんと誰しも内々思ひ居たり。

されども彌九郎は今日に限りて我から物を云はんともせず、猶推默りて萎れ居れば、愈々仔細あるべしと思はざるものは一人も無く、隨つて其の仔細をば尋ね聞きて知らんとの好奇心に驅られざるもの一人も無し。就中今長髓彥が言葉について笑はざりし唯一人の馬面せる男は、分けて彌九郎とは平生親めるものから、摯實の語氣にて、鶯月、ほんとに君は何樣ぞ仕たか、と親切氣に問ひを發したり。されど彌九郎は答ふるをも猶懶く思ひてか挨拶せず。此樣子に惡意はもとより持たざる皆々は愈々不審して、何樣したのだ鶯月、話し玉へ、喧嘩でもして負けたのなら一同で復讎も仕やうといふものでは無いか、默つて居ずと語り玉へ、と口々に慰め尋ねたり。

かく衆人に仔細を問はれし鶯月は、衆人が我が遭遇せし事を知らんとするに熱せる態を見るにつけ漸く元氣を得しが、元氣を得ると同時に我が空想を事實として語らんかと思ひたり。眞に妄話は彌九郎が生命といふべく、また彌九郎は妄語によつて活くるものと云ひても可なるべし。

其三十五

怯弱なる想像家は漸く人家續きたる町中に出でゝ初めて蘇りたる思を做しゝが、猶我からは好まざる想像の切りに起り立つに心地快くはあらず、無二無三に路を急ぎたり。常には好んで樣々の想像を描けるも、此時のみは、我が欲せざる想像の紛々と起りて、其の想像の厭はしく忌はしく物凄くもまた慘らしき狀態の、いと明かに我が胸に映るに、流石の彌九郎も大に究して我から非常に窘みぬ。彌九郎が彼の場所にて聞きし鐘は實は十一時の鐘なりしなれば、宿に歸りたる時は猶十二時にはならずして、先刻に別れて歸りたりし長髓彥馬面男等は猶睡らず、車座になりて何等の事をか雜談仕居たり。菓子にても集錢して買ひしか、物を包みしと見ゆる竹の皮は既用濟みしに押退けられて、室の隅の方に捨てられ在り。

今しも歸り來りし彌九郎は、長途を急ぎ足に走りしと我が想像に我から惱みしとに、顏の色も常ならず、息づかひも平穩ならず、傍觀にも知るゝまでに心動轉し居れば、長髓彥と云はるゝ男は、疾くも見て取つて、鴬月、君は何樣か仕たね、喧嘩でも仕たのか、ム、左樣では無いと、其なら狗にでも咬まれたのか氣の利かない男だぜハ、ハ、、、と嘲弄する尾について皆々も、必定そんな事だらう、怯い男だぜ、何だか虛空にとつちて居るやうだ。と笑ひたり。

彌九郎は答をなさんともせず、其座にありし土瓶の茶を殘り無く飲み乾して後、漸く心を安んじたる樣なり。平生は針ほどの事に遇ひても其を棒程の事に語りて人を驚かす彌九郎の、今夜は物も云

の一つ二つもあれば、乃公が忽ち探偵通を試みて芳魂を弔ふだけの事はするがナ。縦ひまた美人の首で無くても嬰兒の死躰でゞもあるならば同じく一の大事件だから隨分大した騒ぎになる。貰ひ兒殺し、繼子殺し、墮胎、産んで直に殺す俗に間びくとも日返にするともいふ事、なかく多く左樣いふことは世間にあるやうだから何とも知れない、丁度此の包の形といひ大さといひ嬰兒の死骸が入つて居るならきつちり相應といふものだが。

是如想像し到りし時、眼を擧げて彼の包を見れば、筵包の彼の一端は頭にして此の一端は脚なるやう正しくも想はれて、瘠せたる兒の肋の骨立ちて物凄じき態さへ眼に映りて見ゆる心地し、折ふし突然響き來る夜半の鐘の唸るやうなるも膽にこたへて、彌九郎おもはずぶるくとなれば風さへ襟に水を打つごとくに急に冷くなりぬ。

其三十四

自己が描きし想像なれど其の想像の種子となりし一塊物の眼前に在りて、四圍の景色も想ひ做しにて何樣やら淋しく見ゆる中に横たはれるなれば彌九郎今更氣味惡くなり、繩解きほどきて筵の中を檢めんなどゝは夢にも思はず、魘はるゝ如き心地して、後をも見ざる疾歩に、其場を早く遠ざからんと、追はるゝ如く逃げ出したり。

てゝもあつて呉れゝば實に有り難い譯だがナ。左樣して開けて見ると桃ほどな璧が七八顆、珊瑚犀角黄金なんぞがぎつちりと詰つてあるといふのだと何とも云へず有り難いがナ。左樣すれば差詰洋行をして、それから種々の慈善的の事業を起して見せるがナ。左樣で無くとも此物が桐の木の箱かなんぞで、披いて見ると中から張良が黄石公から貰つたといふ秘密の一卷でも入つて居る始末で有つて見れば、乃公も今日から心を潜めて三五年研究した後偉いものになつて外交政畧でも巧く遣つて侯爵位にはなるのだがナ。と先づ例の想像的の注文を途轍も無く起し初めたり。

如何に注文を爲せばとて莚包みが瓶にも桐の箱にもなるべきにはあらねば流石の痴漢も自ら紛々として起り立ち來る注文だけは抑へ斥けしが、迸り出づる想像は、水の噴く如く止まる樣無し。何樣考へても此樣な場所に此樣なものゝ有る譯は無いが、まあ此物を折角解いて見ても、出るものは多分碌なものではあるまい。然し碌なもので無いにしても、齢は二十前後の女の首で、眉が奇麗で口鼻が尋常で、髮が長くて美しい、死貌ながら天晴な美人と見えるものでゝも有れば隨分面白いがナ。而して能く檢めて見ると口に啣んで居るものがある、何だと思つて其を引出して見ると女文字で長々と書いた文章である、其文章を讀んで見ると何樣いふ譯で此女が首になるやうになつたといふ譯が一切解るといふやうな事だと面白いがナ。ヤ文章なぞは古風に啣んで居ないでも好いが右か左の領脚近くに小な黒痣があるとか乃至はまた俗にいふ篋子の痕があるとか何か頭部面部に特徴

將棋に下手なる人の、敵が如是來らば如是して勝たんと思ひ設くれど、もとより有るべからざる筋に思ひを設くるなれば敵は吾が望むところには來らずして、心樂みにしたる事の常に外るゝと同じく、彌九郎が起せし空想は一つも事實となり來らずして世界は平穩無事なれば、恰も下手の將棋さしたる如く初は獨り興がりしが、後には少し憮然たる氣味になりて、歩も自然疾目に行く折しも不圖往く路の右の方の田の末に物あるを認めたり。中は何やらん知れぬども繩からげにせる莚包にて此の田の水を隣れる田へ少しづゝ流るべきやう僅に切りある畔の傍に横たはり居り、これがため水は行き惱みて其處近くに聊か湛り居るまゝ無私の月の影は此にも浮べり。

其三十三

左なきだに忘想を虛空に躍らして我と樣々の事を作り設くる彌九郎の、今目前に此の怪しげなる莚包みを見て如何で其儘眼を過ごすべき、歩みを忽ち此處に止めつ、意を緊しく其物に注けたり。一躰此はまあ何だろう。繩のかゝつた莚包と云つて仕舞へば夫までだが、莚の中には何があろう。ハテ面白い物を見たナ。桐の箱でゝもあるならば中に系圖の一卷とか左なくば兵法の大切の卷物でも入つて居やうといふものだし又壺瓶の類ならば開いて見ると其中から不死の仙丹乃至金銀珠玉のやうなものが出やうといふ段取だが、莚包みでは左樣は行くまい。同じ事なら此が見なれぬ壺か瓶

狐に魅されたといふ話を聞た事は隨分澤山あるがまだ魅された事は無い。此處等で乃公の面前に魅された奴が出て來れば好い。素肌になつて稻の中を拔手を切つて泳ぐ眞似をして居る男があつたら可笑からう、そこで呼び留めて乃公が糺すと夢が醒めたやうになつて吃驚して、實は洪水の中に漂つて居た氣で泳いで居りましたと自分も呆れながら白狀したらば、いやはや絕倒するほど可笑からう。狐に魅されるといふ事は一時の精神失調だろうが、左樣いふ奴が何のやうな眞似でも好いから變な事をしながら此處へ出て來れば實に珍妙だが出て來ないかナ。美女を負ふた氣で石地藏を負つて出て來ても可笑からうし、戰爭に出た氣で案山子をとらへて切つたり、突いたり仕て居ても妙だが、さて魅された奴も居ないかナ。

これ彌九郎がまた〳〵起せし空想なり。此の空想を做し終へし時は彌九郎は殆んと噴飯さんとまでに笑を面に浮め居しが、遺憾にも魅されたる男なんどのもとより有るべき譯なければ、彌九郎をして噴飯さするには至らざりけり。

如是取るにも足らざる空想を際限無く起せしものゝ、如何に想像を巧妙にして、興味ある事實を作り出したりとはいへ、實の力は無き空想の事實となりて現れ來るべき由無ければ、天地は元の如く靜にして、雲緩く行き月とこしなへに澄みて、風の微しく稻葉に戰ぐと蟲の聲々鳴き立るとあるのみ、造化は此の空想家を欵待すべきものを一箇も半箇も終に餽らず。

彌九郎は自己が空想の事實とならぬをは毫も憂へず、猶また新に空想を起して獨り自ら樂めり。されど流石の空想家も自己が空想を事實たらしめんとの望みをば全く有せざるにはあらずして、十分自己が空想の事實となれかしと祈る心を有する證には、事實として稍有り得べきやうなる事情をのみ想像し出せり。されば彌九郎は逃亡し來たる美人を想像し出せし後は次の如き想像を描き成したり。

今乃公を追ひ越して行つた職人めが乃公の足をば強く踏付けて行つたとする。そこで乃公が一言咎めるといふと先方は二人連といふを頼みに謝罪もせず惡口を吐かすとする。乃公も耐忍がならないで罵り懲らすとする。先方から打つてかゝる。此方でも應じて格鬪ふ。先方が案外弱い奴で、一人は乃公に田の中に投げ込まれる、一人は指の二本も折られて逃げる。弱い奴めと冷笑つて乃公が聲ほがらかに其時義經少も騒がずと謠ひながら悠然と此の田圃路を行く。泥田の中から這上つた奴が迚も敵はぬと獨語して去る。

此樣なる想像を意のまに／＼描き始めたる後描き終りし時は莞爾と打笑つて、恰も實に其事の今現に在りて濟みたるかのやうに、自ら愉快を覺えつる如き面色をあらはし、兒童らしくも悦び樂めり。されど空想ばかりなれば若果して前の職人に足を踏まれしならんには彌九郎は恐らくは格鬪を試みんまでには咎め立をば得爲さゞりしなるべし。

見んには汚きものもあるべき地は其の優美なる柔かき光線に塗られたれば見渡す彼方はもとより塵埃も無く、脚下の田の水さへ清きものに見えて心地よき事いふばかり無し。彌九郎は此の光景の中に佇みて少時は無念なりしが偶然四圍の此の模樣の演劇の書割に恰も似たる中に立つたることとなれば例の鶯月家獨得の空想を描き起したり。

彌九郎は徐々と歩みながら、時刻は丁度好し騷ぎは強し、逃ぐるならば今といふので思ひ定めて、二世かけた男の病氣かなんぞで入谷あたりに逼塞して居るのを尋ねたいと厭な客の無理身請を逃れたいとて女ながら覺悟を決めて、彼廓を拔け出し、寢衣姿のしだらの無い姿ながら手拭かなんぞで面を隱して、跣足になつてすた〳〵と乃公の後から出て來る女でも無いかナ、ア、無いかナ左樣いふ奴は、左樣いふ奴でも出て來れば丁度此景色に釣り合ふがナ、其處で此乃公が憐れと見て俠氣を出して連れて退いておもふ男に合はせて遣る、といふやうな事になると長髄彥や馬顏めに恐れ入らせて吳れるのだがと、先づ第一に逃亡し來たる美人あれかしに想像し出しけるが、生憎彌九郎が想像に符ふべきものは來らずして、職人と見ゆる二人連の此も素見の歸りと見えたるが急ぎ足に後より來りて彌九郎を越し行きたるあるのみ。毫も想像は事實とはならず、女の影もさらに無し。

其三十二

は秋の夜の空を我がものにして清光隈無く照し渡れば、何と無く勇み浮れて、歩行き慣れたる途は行かず、田圃中を行き抜けて入谷にかゝり上野の山下に出でゝ歸らんと平生得意なる壯士節など唄ひつゝ田圃路に一人さしかゝりぬ。

熟く知りたるものならでは夜分など特に行き通ひはせざる細路なれば、時々農夫の若者の遊廓に通ふと覺しきに逢ふほかには人にも逢はず、されど全くの田舍の田の中を行くとは違ひて、如何に途を誤るとも東に向ひて行く事少時ならんには淺草より遊廓への賑かなる通路へ出で、西に向ひて突切らんには阪本路に出で、南せば下谷、北せば龍泉寺町へ出づべく、四方家續きの町にて圍まれたる中を行くなれば、氣遣ふことも無く彌九郎は醉に夜風の快さを味ひつゝ徐に歩めば、畦の蟲の聲々我を送り迎へて、常の路を取りしより淋しさも一入却つて興あり風情あるやうに思ひたり。燐寸擦りて卷煙草に火を點じ、ぱふり〱と輿しながらぶら〱と行きて不圖背後をふり向き見れば、遊廓の家々の三層樓四層樓、或は尖りて聳えたる、或は平めに大きなるが、稻の穗波の風に織らるゝ廣々としたる田の末に浮べる如く見えて、幾點となき燈の光の賑かにつきたるは龍宮城を遠望にするにも似たるべく思はるれば彌九郎大きに興に入りて、ムヽこれは妙だ、好い眺めだと獨語しつゝ立停りけるが、風の模樣によりて途切れ〱に三絃太鼓の音色の近く遠く聞こえ、騷ぎ歌の解るか解らざるほどに耳に入るも面白く、仰げば薄雲の緩く往き交ふ瑠璃色の空美しく月澄みて、晝

だけは、大當り〳〵と云ひて皆々哄と打笑ひ、其處を去りぬ。無邪氣なる鶯月一連は是の如き事を其上無き興にして浮れ歩行きけるが、長髓彥と綽名を呼ばれたる彼の手足の間延びの仕たる男、例の馬面男等は、もはや歸るべしと云ひ出し、これに同ずるもの多くして、猶ぞめき歩行かんといふものは彌九郎一人となりぬ。時刻も既九時を過ぎぬ。彌九郎も實は衆と共に歸りて可かりしなれど、最初に自己が最少し遊び居て歸らんと云ひ出だせし言葉を事實にせんと思ふ念の少は有るに加へて、衆には知らさず我一人些少の物食ひ些少の酒飮むほどの錢を懷中にしつゝありけるより、それなら諸君は一步先に歸り玉へ、僕は今少しぶらついて奇談を提げて歸るからと云へば、左樣か、其樣なら先へ歸るぞ法螺の貝でも拾つて來玉へ、と馬面男のからかひの挨拶に彼此ひとしく笑ひ興じ立別れ、彌九郎一人は猶細き路次などにさまよひ歩行きぬ。

其三十一

同件ありてこそ興も深けれ、一人となりては彌九郎も左まで素見の面白かるべき筈なければ少時して大門を出で、如何はしき家に入りて、酒少し飮み物少し食ひ、既歸らんと志したり。酒量淺ければ少し飮みたるにも醉は湧きて心は新に冴え返りたり、腹に些少の物入りたるにも疲勞は補はれて、氣はまた充ちたり、常に往來する路を歸らんは興無く物足らぬ心地するに、折ふし月

りぬ。賛成々々出掛けやう出掛けやうといふ聲は同じ室内よりも襖一つ隔てたる室よりも續きて起りぬ。發議者は即ち例の大砲、千三、百一、山伏等の綽名を負へる鶯月彌九郎にて、賛成者は惰弱なる其朋友一輩なり。

御苦勞千萬にも習慣法に隨へる彌九郎は、遊廓さして進行し、古の通人の云ひし如き上キの二字を連ねし通りに町割されたる廓内を往つ復りつして、甲家の格子先に立ち乙家の店つきを覗ひ、薄命なる婦人等の列座せるを、彼は如何に是は如何になど思ふまゝに品定めし、嘲り譏り、笑ひ罵り、騒ぎ廻りて各々自ら興ありと思へり。

何樣だ鶯月、彼の女はと指さして同作の一人が鶯月の評を問へば、問はれたる鶯月仔細らしく一寸考へて、左樣さ彼は先づ愚鈍な男なら亭主でも捨て兼ねは仕無いが其代り料簡に俠なところがあつて肌合に面白いところのある奴に違ひ無い。見玉へ吾人の饒舌るのに耳を潰して自分の鼻の端でも見て居るやうに下眼を遣つて居る高慢さうな面付を。何と僕の鑑定が外れは仕まいがねと云ふ。問ひたる男は感心して成程といふ。鶯月は大得意になりて、今度は足下一つ判定して見玉へ。今の奴の次に坐つて居る年食の奴を、と云へば問はれし男、ム、彼の顱顬へ梅干を邪見に貼つた奴か。彼奴は何でも疳癪持の不貞腐れの大きに始末のつかぬ荒氣な奴で優美なんぞといふ事は些も無いものに違ひ無い、と答ふる途端評されし女尖り聲して、好かない素寒貧等だよ、と叫び出す。それ評の通り

お高は慾にて此雨の中を行けど、此恐ろしき雨の中を行くものはお高のみならず、或は掛聲鋭き人力車に打乘り、或は酒の力に降る雨の面に飛沫かゝるも却つて興ありとして高聲に歌唄ひつゝ歩き行くもあり、こは色のため遊廓さして坂本よりかゝり行く人等なり。此の人々等にはお高の心遣ひは無けれど、此の人々等の中には惡きものもあることあれば常に上の人々の此の人々等に眼を放たで、或は戯れたるもの或は左も無きものゝ風して此邊には巡り行き居ることをお高知りたれば、龍泉寺の通りを長くは行かず、右手に折れたり。一つは交番所の路の傍に在るを恐れしゆゑにもあるなるべし。

此邊の路は知りぬきたるお高、怪しき小路より折れて田中の細徑に出で、よき程を見計ひて稻穗うなだれて靡きわひたる田の中に彼の筵包を打込みけるが賢くも風呂敷は手に殘しぬ、時は既秋なり、稻は能く生ひ重なりたり、彼の筵包は見ゆべくもなし。

其三十

さあ〳〵何樣だ何樣だ出掛け無いか。一昨日は彼の通りの雨で閉籠り、昨日は途が惡からうと云つて燻ぶり込んで仕舞つたが、斯樣每日蟄居ばかり仕て居ては仕樣が無い、馬鹿にもなれば病氣にもなるぞ。月は好し、途は固まつたらう。北方旅行を仕樣てはあるまいか。といふ聲は室の一隅より起

よく〳〵の事情ありて左ることとも得做さず、また養ひ育てゝも得做さゞる事は明かなり。何にせよ斯程の見なりしならば助け置き育てゝもまた好かりしにといふやうにお高は思はざるにもあらぬ歟、一寸舌打して我を悔むごとき躰をなしぬ。

されど其は唯瞬間なりし。忽に元の相好になりて情も容赦も無く衣を剝ぎ取りて、くる〳〵と其を押丸め、唯一つ今に猶持殘したりし古葛籠の中に押入れたり。

お高は臺所へ出てたりしが古き疊の表やうのものゝ有り合はせたるを持來りて嬰兒をそれに推包み炭俵を括れる繩三筋四筋を持來りて堅く縛げければ、一見には何かは知れず、此上端より青きものにても見えなば田舍の者が植物の苗かなんどを稍遠きところに持ち行かんとて根土ぐるみに苞にせるかのやうに見えぬ。

如何はしき破れ風呂敷の大きなるにこれを包み果てゝ小脇に抱へ立つたれば、お高の年齢恰好に照し合はせて云ふ時は、何人も此度は、賃仕事する女の布子の仕立など賴まれて其料となるべき品々を持ちて歸るならんといふべき態になりぬ。

かくて小褄端折り、半開かしたる古傘に身の上半部を匿して、雨小止無く降りしきる中を、よき機會と立出しが、まことに此雨は心ありて神のお高が非道を祐け玉ふが如くお高のためには都合好き雨なりしなり。

り戸を引寄せて後、懐中より急に一塊物を取出して靜に下に置き、闇をさぐりて燈を點しぬ。燈光は死したる嬰兒をばお高が膝下に照し出しぬ。

其二十九

唯さへ淋しき秋の雨の夜に影を伴なる荒屋の一人住の如何に心細く悲かるべきとおもふにも似ず、慣るれば慣れたりとて、此景物の中に在るすら世の常列の女ならば稍堪へ難きことなるべきに、死して今嬰兒なりとはいへ死したるものを身近く置きては容易心安くはわらるまじきを、胸も騷がせざる顏付のお高、苟且にも人間の屍骸を冬瓜か南瓜にても見るごとく見てか、悠然とし煙草を拈り、燈火より火を點して煙を長閑に吹き居たり。

頓てお高は嬰兒の被たる衣の端を取りて吾が方に引き寄せしが、其被たる衣は嬰兒の着るべき一ツ身といふものにはあらで、大人の着るべきものなりし。

物好なる若き女の下着にもあるべきかと覺しくて好き友禪縮緬を胴にして端々にはお高風情が名を何といふべきかも知らざる結構なるものゝ付たるより見れば、此兒の親の賤しきものならずして岩瀨等ごとき男と馬の合ふべきものならぬことは明かなり。されど此衣纏はするほどの者の、及ばぬものも見には新しく美しきもの着せんとつとむるが習なるに、自己が着古しを着せたるを見れば、

して遂に酒になりたり。

飲む口のもの丶寄りたるなれば、金が女房は愼み居れども下戸の交りたるやうにはあらずして、座も面白く續きて夜に入りぬ。お高は岩瀬が事の胸にあれば歸るべき時機を忘るゝまでには醉はねど、晝よりの酒なれば全く醉はざるといふにもあらず、暮れてより一時間ほど立つて、既好き頃と見限り歸ちんとするに、雨の音の耳に喧しきほど烈しく降る最中なれば、左らでも敵手を逸したがらぬ酒客の常とて金は切に引留むれど、お高は肯かで無理に歸るを粧ひて遂に神田を辭し去りたり。風は無けれど傘も堪らぬ大雨を冒して岩瀬を訪ひしお高は約束の如く受取るべきものを受取りぬ。成程其兒は美しくして岩瀬が誇りし如くなり。乳兒に吸はしむべきやう裝置たる牛乳の罎を片手にして、左も〳〵啼き出しやせんと懼るゝ如く其兒を抱き居りし岩瀬はお高が手に渡して後初めて口を開き、此雨の最中に約の如く來り吳れしをば讁く悅び滿足せる旨の挨拶をなしたり。お高は今日は口數少く受取るものを受取りし後、お氣の毒ですが此雨ゆゑ淺草まで車を一挺お頼みなされてといふに、他に人なしと見えて岩瀬みづから外に出でゝ雇ひ來れば、お高はこれに打乘りて我家へと歸りぬ。

幸にして車に乘る時兒は啼かざりければ我懷中に直接に入れ置きたることゝて、お高は全く車夫の眼には兒を抱きたりとは見せざりしが、淺草の某の辻にて車を下り、それよりは歩みて吾家に歸

好い工合だ。いやもうお蔭で重荷を下した心持がする。それでは明日の夜嬰見と金とを汝に乃公が渡しさへすれば何も彼も面倒無しで濟むといふのか、貰ひ人の奴に乃公が顏なんぞを合はせずとも屹度好いか、左樣ならば此方は猶ほ十分だが。と嬉しさうなる顏付を見するにも罪の淺さは知られぬ。

お高は岩瀨が此躰を見ていよ〳〵心中に冷笑ひつゝ、ナニもう御心配はありませぬ、仰ある通りでござります、左樣なら今日は御暇致しまして明日の夜御眼にかゝりませう。といへば岩瀨もそれなら明日、と堅く語をつがへたり。

其翌日は晝より降雨強く、時ならぬ冷氣に人々驚きて布子よ襦袢よと慌て迷ふ程の惡き日なりしがお高は例の如く神田に行きぬ。かゝる日なれば坊主の金も家に在りて外へ出でず、營業にかけての何事の用事も達しがたければ、今日は先休業同樣にて、金が女房を合はせて三人、茶と煙草とにて冗談に時を移すのみなり。外國の富籤に當りたる人の噂、七八に面白き辻占を取りて運に叶ひし談、不正品賣買の利益ある事、上の人なりとて盜賊に同じやうなる行爲ありといふこと、如是如是の事を爲したるしたゝか者が今は某の警察署の探偵なりといふこと、誰某の見て來りし牢の內の事情、など〻談話はそれよりそれと傳はりて際限無く或は笑ひ興じ或は誹り或は嘲り饒舌り居りたりしが、晝過ぎてよりは、お高さん毎日の骨折やすめに今日は此樣な日だから驕ても好らうと亭主が云ひ出

たとのとでございます故、二言三言話しまするど先方で大層乗地になつて段々尋ねるのでございますから大概談は先づ決つたやうなものでございます。然し其の男は田舎者の律義一遍で迚も分りの悪いものと見ました故おさめを蔭へ呼んでおさめにばかり例の事を申しました。此女は酸も甘も知つて居りますから解りが早くて、好よ、左様いふ譯なら妾一存で捌いて仕舞ふ、生野暮の所天に餘計な思ひをさせるまでも無い、妾も左様いふ器量の好い兒を腹を痛めずに生の兒にして仕舞ふのは行末のため嬉しいことに思ふから、と談はすら〳〵と運びました。併し男は田舎氣質で何か律義くさく御挨拶に出るのなんのと申しまするを却つて此方でも御面倒とおもひました故何も彼も妾が背負つて立つことにして、おさめと二人でくるめて仕舞ひましたが、旦那え、何と巧いものでございませう。といへば岩瀬は笑壺に入り、是は好い都合に行つたものだ、併し其通り纏まらうか、と今になりて懸念するを心に笑つて、纏まるも纏まらぬも既ありやあしませぬ、明日の夜妾がまゐりまする其時御約束のお金と其兒を妾に御渡しになりさへすれば旦那は明後日から何も彼も御存知無いで濟みまするのでございますはね。と打消したり。

其二十八

萬般の心勞一時に解けたりと思へばや岩瀬が面は曇色晴れて言葉つきも勢よくなり、其は何も彼も

の男と二十七八の女とが汝を尋ねて見えたなれど汝が不在ゆゑ、越して行つた事かと妾に聽きなすつた。それから妾が否移轉しては行きなさらぬが毎日お高さんは晝間は神田に用があつて行きなさるし夜にならねば歸つては來なさらぬが、一躰汝樣達は何處の衆だゑと問ひ返すと、元妾はお高さんには心安くしたものですが三年ばかり以來逢はずに居て今では田舍に居りますが東京へ今度出ついでに尋ねた譯でござります。それでは恐れ入りますが折角尋ねましたものを逢はずに歸るも殘念でございますれば、お高さんが御歸りになりましたら此樣いふものがまゐりましたと仰あり傳へて下さいませぬか、宿は淺草廣小路會津屋といふのでございます。妾はお鮫と申しますもので此は所天でございますがと男から名刺を取つて渡して叮嚀に挨拶して行きなすつた。何でも男は田舍で大盡とでも云はれさうな人だが女は此方の人らしく慥に見えました。お高さん汝知つてか。と細に話を仕てくれまして、受取つて置いたといふ名刺を渡して吳れました。其名は妾の知らないものでございますが成程おさめといふ女は知つて居りますし、奧州の方へ行つて醬油造を仕て居るものゝ女房になつたとか云ふことも聞て居りましたから、逢つて見度もなりまして其宿を尋ねて逢ひました。何がさて三年も逢はずに居りましたことでございますから談はそれからそれと盡きませんでしたが、其中に不圖思ひつきまして彼の御談をそれとなく仕て見ますると、丁度此のおさめといふは今年の春の末に生んだ兒をなくしまして、氣落して居りまする故東京へ出たも其等の紛らしかた〳〵で來

きかは測られざるところなれど、夫すら必定にはあらざるのみならず、甚だお高の悦ばざるところなれば、今に至りてもお高は然為さんとはせず、お高が心は唯我が一存にて濟ますべき好き分別もあらばと、吾が智慧に對つて無理なる注文をなし居れり。
お高は遂に決定し得ず、また好きことをも發見し得ず、歸りて後に案ずべしと思ひて談は其儘好き程に繼ぎ置き岩瀬が許を辭して吾が家に歸りぬ。其夜はお高常の日よりは頁久しく酒を獨り酌みしが、其は勿論胸に蟠まることとあるために快く醉ひ得ざるよりなりしなり。さて飲み〳〵て夜深に至りしが、淺草寺の鐘の聲闇を破りて告げ渡る時、忽然としてお高は遂に極めて怪しき笑ひを面に上せしが頓て醉發して其儘其處に眠りこけたり。

其二十七

次の日の夜に入りてお高岩瀬をまた訪へば、馴染むにつけて用心も薄らぎしか、面を見るより、何樣だえ、有つたか、と疾其事の尋問なり。今宵は別に用事ありてか湯にでも行きしか、初よりして妻は在らず、お高は急がず徐に岩瀬が膝近く坐りて聲をひそめ、今日は好い話しをもつてまゐりました。事の纏まるは不思議のもので昨夜且那にお分れ申してから家へ歸りまして唯一人せうこともござりませんから寢やうと思ひましたところ、隣家の者が、今日晝間の事、汝の不在に三十七八

めぬ。他の拙きことを見ては特に自己が巧なることを示さんとする念の長ずるが如く、岩瀬が良からぬことには猶心遣ひの淺くて拙きを見るより、我ならば左はせじ如是こそすべけれと、良からぬことに我が長けたるを誇り心になりて、早くも一つの手段を思ひつきぬ。されど流石に其は吾が心の一時の傾きより如是事も爲し得んには爲すべきにと不圖おもひたるばかりにて、直ちに自ら其の手段を取りて此の事を處置せんと思へるにはあらねば、沈默りて唯良からぬことには弱く拙き岩瀬が面を小兒の如くに見做し居たり。

岩瀬は困じ果てしといふ態にて、貰ひ人の無いといふことは有りさうも無いやうに思はれるが、全く容易有るまいかね。一日々々と經て行くだけ此方は非常に困ることが有るのだが、何樣だ汝、是非骨を折つて貰いたいが、と同じことを繰り返して泣くやうに賴むに、お高も今更答ふべきところ無ければ、困りましたね。然し精々捜しましたら無いことは有りますまいから二三日の中に又何とか御話を持て上りませう。と的無しで其座限りの氣休めを云ふのみ。

かくは答へたれど此答へを爲したればとて此事成らずば岩瀬の困ずるのみならず、自己も終に何の得るところ無くして手に入りし禽を逃がすと同じきこととなるべきは承知し居れば、毫も心安くおもひは得せず、されど全くお高が眼に見得る世、耳に聽き得る世の中には適當なる貰ひ人たるべきもの無し。此上坊主金夫婦か、左らずば他のもの等の眼耳を借て捜さんには、或は好き貰ひ人を得べ

と云へば、イヤ其奴はいけない、左様する位なら乳母を置て育てゝも好い譯だから金をつけて態々遣るにも當らないのさ。其がいけないなればこそ大金を添へて遣らうといふ譯ぢやあ無いか、と愈々弱き内兜を見せぬ。こゝぞと此方は猶透かさず、左様すると旦那此話しは談が纏まつた其揚句には畢竟旦那の方で嬰兒の出來たといふ事も、又た妾が授受の間に立つたといふことも、何の誰といふものが貰ひ見したといふことも悉皆伏せて仕舞つて無い事にして仕舞はうと仰あるのですね、と逼り詰めて問へば、問はれて是非無く、まあ其樣なものさ、と苦笑ひす。猶逃がさず復一歩すゝめて、それぢやあ旦那其兒をば假令ば貰ひ受たものが行末どんな境界になつて娼妓に仕やうが藝妓に仕やうが乃至何樣な酷い目に會はせたところで口惜くとも旦那の方では一言も口をきくことは出來ない譯ですが、それでも口をおきゝなさらずに辛防しておいでなさる御積りですか、隨分損ではございませんか。と手元まで責むれば、進退究して、何樣も仕方は無い、遣つて仕舞へば、まあ其樣なともあるまいが、有つたにせよ此方では齒を咬んでも默つて居なければならない譯さ。と遂に正體をあらはしたり。此は人の親の出し得べき言葉にあらぬ言葉なること火を観るよりも明かなり。

其二十六

岩瀨が泥を吐きたるを見てお高は心に冷笑ひしが、冷笑ふと同時に自己は悪き方に自己が心を猶進

は、他人の招牌で自己が營業する不埒のものめと怒られんとの惧あるよりの事なりしなるべし。されば謀計の密なるを尙びしだけ眼の及ぶところ耳のきくところも廣からねば、お高が思ふ壺に嵌る貰ひ人は更に見當らず、一日過ぎ二日過ぎ三日四日と空に過ぎ行けり。

五日となれば貰ひ人の有無に關らず一應尋ぬべき由云ひ置きたるまゝ、お高は主人夫婦に悟られぬやう自己が家に歸る態に仕做して常よりは少し早めに神田を去りて、暮るゝ頃岩瀨が家を訪ひぬ。岩瀨はお高が來るをば待ち設けたりといふ風にて快く會へり。岩瀨が妻は豫て夫の命令にても蒙り居るにや前の如く消ゆるやうに何時か家の外へ去りぬ。

お高は直ちに口を開きて好き貰ひ手の無きよしを語り出したり。されど膠無く單に無しとは語らで、無籍の兒をも貰ひさうなる譯の解りの好きものゝ見當り難きよしを語りて、岩瀨が何といふべきか、其の樣子により猶ほ岩瀨が虛實表裏を伺はんとせり。岩瀨は當惑のむづかし顏して語も急には出さざりしが、程經て口を動かすに、何といふかと耳を立つれば、其れは困つた、此方では一日も早く貰れたいのだが、と云ひさして唯歎息するのみ。

こゝに至つてお高は付け込み、出來ぬ相談とは知りながら、何樣です旦那、矢張其兒を此方で正式御屆なすつて其から御遣りなさることにしては。え、何樣ですえ、左樣なさらないとお上を怖がるやうなものでは、貰ひたくてもまあ止にしやうといふ結局になつて仕舞つて話の埒が明きませぬが、

れば今日の様子にては第一其兒の親の名の出るを厭ふこと甚だしく、其爲嬰兒をも捨つるやうに吳れんといふまでになりたる譯らしゝとお高は思ひたり。左すれば此兒は妾なんぞの生みたる兒にて、本妻の嫉妬が面倒の厭はしさに緣切つて他人に吳るゝといふやうなる譯にて捨てらるゝ兒にはあらぬこと確實にて、金滿家の寡婦が情夫持つて生んだる兒ならずは、夫の不在に大家の女房が密夫の子を生したるか、乃至嫁入前の娘が惡漢を相手にして拵へし兒といふやうな筋なるべし、とお高は思ひきはめたり。さて又其後、葉山とかいふ金滿家に岩瀨は使はれ居ると聞きしが、葉山といふはム、彼の大した美い女を持つて居るとか噂のある大金滿家の事であらうが、偖は、ム、、左樣だらう〳〵、たしかに其に極まつて居る、これは金の蔓にありついた、と遂に案じつけて心ひそかに悅びたり。

其二十五

其翌日よりお高は密に岩瀨より兒を貰ふべき相應の者を心掛けて尋ね廻りしが、一つも事情を洩しはせざりしのみならず、我が貰兒すべきものを切りに需め居るといふことすらも成るべく他人に悟られざるやう細密に意を配り居たり。此はかゝる事に一人にても間に入る者の增せば增す丈自己が利益は減殺さるゝなれば、其を厭ひて然はなせしなるべく、且は又坊主金夫婦のものに勘づかれて

辛氣くさき獨酌の酒を飲みながらも猶案じつゞけぬ。
律義正直のものならば別に考へも爲すまじく、考へたりとて考へ得もすまじきなれど、惡き巧をするものをも多く知合に有ちて、良からぬ事は眼にも耳にも視聽したるお高なれば、案じつゞけし末は終に全く猜し得たり、と自ら堅く信じてか、怪しく凄き笑をば面に微しくあらはしたり。
先づ第一に岩瀨は自分の口よりして自分の兒のやう云ひたるなれど決して岩瀨が見にはあらず、地を打つ槌は外るゝとも此の猜量の外るゝことは無かるべしとお高は思ひたり。從つて此事に要る金も岩瀨が懷中より出づるものゝやうに岩瀨は云ひたれど其金が岩瀨の懷中より決して出づるものにはあらず、彼の生活の程度をなせるものが如何に拔差のならぬことのあればとて左程の大金を惜氣も無く出すことはならぬ筈なり、特に我への報酬の金を十圓增せと云ひたる時、露惜む色無く肯ひしも自分の身より出す金なれば彼男に彼樣は出來さうも無く、我が懷中の痛からぬ故好漢ぶつて氣前を見せしことゝならんとお高は思ひたり。左すれば其兒は岩瀨よりも遙に身分好き人の女の生みし見か、左らずば身分好き人が隱し妻に生ませし見といふやうなるものなるべく、岩瀨は畢竟其本尊の化身になりて働きて、報酬を貰ふに過ぎぬ奴なるべし、とお高は思ひたり。岩瀨は堅氣の事なら知らず、かゝる事にかけては餘り怜悧なる男とも見えねば、岩瀨が言葉の響き工合、顏色の變り工合は決して態としたるものにはあらざるべく、心の底を匿し得ぬ符牒として見て間違ひ無し。左す

屆けや何んぞも妾の方でさせますとすれば、餘計な世話も燒かなくてはなりませんから、十圓ぢやあ酷いぢやあ有りませんか。せめて二倍にして下さいまし、慾張るのぢやあございませんが其位下すつても好いのです。長い短いは仰あらずに思ひ切つて一ト言に。ハイ。成程。ハイ、ハイ有難うございます。左樣てきぱきと出て下さるのは、流石旦那は御黑うございます。好うございます、妾は旦那の御氣性に惚れました。屹度そんなら二三日中に話を持つて上ります。それから貰ひ人に御遣んなさる筈の百圓の其中で妾の働きを仕ましたら云ふまでも無いことてございますが其は妾の役徳に御貰ひ申しますよ、ね。と飽まで拔目の無い熊鷹、好い錢攫むは今の中ぞと勢ひよくお高はこゝに此話しを遂に受合ひ込みたりける。

其二十四

岩瀨が囑を引受けて歸りしお高が差詰途中にて考へしは、其用向の何なりしかを何と語りて坊主金夫婦の前を取りつくろはんかといふ事のみなりしが、此樣な事はお高に取りては蚤を潰すより易きことゝて、造作も無く巧く夫婦を欺きて、左したる事も無かりしやうに云ひ做し罷りぬ。

岩瀨と對談せし中に、大概は岩瀨が囑みたる事の裏面に潛みたる情實を猜しはせしものゝ、其日は他の諸般の事を取り捌く間にも其事に心を懸けて案じたりしのみならず、夜に入りて我家へ歸りて

產屆も變なものでございますから仕憎うございませう。畢竟旦那の仰あるのは旦那の御名前の出るのをば御厭ひなさるのでございませうが、ナーニ私生の屆にさせて御仕舞ひなされば那處にも旦那の御名前の出ることは無いのですもの、左樣いふ餘計な御心配はなさらないで好いのでございます。而して百圓と仰あるのも半分位で濟みませうから何も其樣に御張込みなさることも入らないのでございます。と忠義顏に說けば、說かれて却つて困つた色をあらはし、イヤ、今汝の云ふほどの事を此方でも知らぬでは無いが、些譯があつて私生の屆も此方ではさせたく無い故に、貰ひ人の方でさせたいのだ。其邊の含みで金も普通より多く添へやうといひ汝にも定めの外に禮謝を仕やうといふのだから此點を呑込で巧く働いて吳れるが好い。それとも汝が何樣あつても乃公の云ふやうにはならぬといふなら仕方が無い。乃公も考を仕直さねばならぬが何樣だえ野暮つたい四角なことばかり云ふ汝でも無さゝうだが、と怪しく笑つて云ひかけしが、考へを仕直さねばならぬといふ辭の裏には、汝が不承知なら汝には賴まぬばかりだといふ意を含み居る事明かなり。

餘り責めつけて逃げられては却つて損と、お高も旣皮肉に敵を窘めはせず、笑を受けて此方も笑ひ、旦那が左樣いふ思召なら此方で兎角をいふのぢやあございませんが、實はたゞ一寸御爲筋を申したばかりでございますのさ。左樣して先へ伺つて置きますが、一躰話しが纏まつたら妾には幾干駈ずり賃を下さる御積りでございます。ヘイ十圓でございますとえ、厭ですねえ旦那、彼の其の何の、

すれば其兒が貰つた人の子になるばかりで無く眞實の生の子になる譯だから、生長しても養親を養親とは知らないで眞の親と思ふに極まつて居る。貰ふ人の身になつて見ても養女で置かうより實の女に仕て仕舞つた方が後日に取つて好い譯だし、其兒も育つて呉れた親を眞の親とおもへば水臭い料簡も出さないで好い譯だが、この事を承知で貰つて呉れるので無ければ、此方も亦考へを仕直さねばならぬのだが、何樣だらう譯は無いことだけれど。と岩瀬は輕く話したれど、輕からぬ事態はあらはれたり。即ち無籍者の嬰兒をば黄金添へて遣らんといふ事なり。捨兒をせんといふ事なり。墮胎と恰も同じ結果を出産後に得んといふことなり。兒を呉るゝといふ名義の下にて兒を棄つるといふ實事を遂げんとなり。

其二十三

さてこそ仔細はありけれとお高は密に冷笑ひしが猶も手繰りて知らるゝだけは樣子を知らんと空とぼけて、それは旦那些むづかしうございますね。往時なら何樣ともなりますが今ぢやあ戸籍がヘチやかましいので左樣いふ譯にはまゐりません。造作も無いことでござりますから矢張此所で御屆けなすつて、それから何樣ともなすつた方が好いではございませんか。ねえ旦那、貰ふものはいづれ乳呑兒を亡くした後かなんぞで乳のあるもので無くちやあ成りませんが、乳のあるほどのものが出

れんとは是も不思議なり。中より下のもの〻常にては、好き女の兒の生る〻をば出世早しと悦ぶに、特更兒ありとも見えぬ此男が、我手で育て養ひて老ての後の樂みとせんとせざるも不思議なりと、十分不審の廉を立て〻、必定今の談話の裏面には何か仔細の無くては叶はじ、且はこれだけの談ならば左程に餘所へ洩れて惡きとい ふにも當らぬことなるに幾度か念に念を入れて一大事でも語るやうに聲さへ低めて告ぐるといふは愈仔細無くてはならぬ證據と見ても間違無し、と温順からぬ女だけに惡猜鋭く看破つたり。

・ハイ左樣でございますか。左樣いふ譯でございますれば今日御受合ひ申して明日明後日にも貰ひ人を搜し出しまするのは造作も無いことでございまする。御話の通りに御容貌さへ好い御兒樣ならば氣長にさへ尋ねやうならば無錢でも頂きたがるもの〻無いには限らぬのでございまする。それに百圓といふ大金を御付けなさるといふのですから申せば十分と云はうより割が好すぎる位でございまするもの、幾干でも貰ひ人はございまする。併し遣りどころに御望みでもござりまするのではございませんか。と腹の中の所思は毫も口に出さずにお高尋ぬれば、さあ其處に少し話がある。勿論事が纏まれば汝にも定まつた口錢の外に寸志の禮謝も仕樣といふのだが、折入つて聽いて貰はねばならぬことだ。何も遣りどころに望みのあるの何のといふ面倒な事は無いが、實は其の兒の出生届を此方では仕無いで濟ましたいのだ。畢竟は其兒を貰つた方で出生届をして貰ひたいのだ。左樣

たところが千兩で、眉つきの優しいのが千兩で。へーイ、そりやあまあ大した美い御兒樣ですが、何だつて親御樣は其樣な美い御兒を親知らすにして遣つて仕舞はうと、仰あるのでせう。一躰旦那の御隱し兒でゝもございますか、餘所樣の御兒でございますか、那位樣の御兒でござりまする。へーイ旦那の內々の御兒で。へーイ、貴下の御隱し兒で、そして、其樣に御美しくつて。へーイ貴下が百圓御出しなさるので。へーイ、あの貴下が百圓御出しなさるので。

其二十二

お高は岩瀨が答ふる辭の一句一句に怪み疑ふ念を增して、面にこそは勤めて現さゞれ、胸の中にては、此岩瀨といふ男が醜き面貌しながら他所の女に兒を生ませしとは緣は異なものにて案の外なる事なきにあらぬ世とは云へ、先づ第一に不思議なり。女房でさへ夫にして居て餘り嬉しからざるべき此樣な男の自由になりし女は如何なる女なるべき歟。生まれし兒の左まで美しくば生みし女も恐く醜怪な女では無かりさうなことなるが、素性賤しきものにもせよ些皮のむけた容貌を持つたものならば當世此樣な男の慰みになるものあるべきや、不思議の二つと云はゞ云ふべし。又此の岩瀨といふ男何程の財產あり何程の所得ある身か知らねど此樣な家に住みて下女も使はず女房に飯炊かせ水汲ませ居る此生活の躰より見れば餘り富有でも無さゝうなるに、百圓といふ金をつけて女兒を呉

苦情なんぞは持出さない筈だが、又其代り貰つた方で生計が困るから助力して呉れのなんのと云ふ面倒の無やうにして仕舞ひたいのだ。勿論それだから最初に相應な金は添へるといふのさ。何樣だ何と親知らずにして藁の上から貰はうといふ口が急には有るまいか。と親しげに相談かけたり。

男一人女一人の此家の主人より兒を呉れたしとの注文はお高には案の外なりしが、一體男は惡性にて古女房を相手の吾家では鹿爪らしく儉約しく仕て居ながら内々他所に皺延ばしの娯樂の一ト構へをこしらへ置くも世間に見勝の習ひなれば、此の醜狀な男がとは思ひながら、お高打笑ひて、それは左樣した口の無いでもござりませぬ。同じ事でも男の兒といふと兒も幸福を見るのがある位なものでございますが、女といふと是で幾干かつきませんでは貰ふものが遠うございます。ハイ、ハイ、それは旦那のことですから御如仕も無くて張込んで若干金か添へてやらうと仰あるのですから御話も早うございますが、一體どの位つけて御遣りなさる御心算でございます。左樣して顏立は何樣でございませう。女の兒と來ると面の美醜も大分貰ひ人に差ひのある考へを持たせますからね。へーイ百圓の眞實に百圓つけて御遣りなさる。眞實でございますか。ハイハイ、成程。其代り遣りつ貰ひつした後は全く關係無しに極めると仰るのですか。いやもうそれは百圓もつけて御遣りなさるのですから左樣無くちやあ濟まないことでござります。へーイ、容貌は何とも云へないほど美しい。へーイ、氣高くつて、愛らしくつて。へーイ、目付が千兩で。へーイ口元が千兩で。鼻の端然とし

第て那方とも致しませう。とはや此事を我が事にして報酬を我一人して取り主人は袖にして仕舞はんとの鋭早き考へ、世に恐ろしき女なり。岩瀬は是を聞くと等しく、詐りならぬ笑を浮めて吾が意に能く叶ひたりとおもへる色を包みあへず、ウ、それがいゝ〳〵、金の女房には氣の毒だが、それぢやあ汝一人限りの細工で捌いて仕舞つて貰はう。と云ひさして又一寸何か思案し、時に汝の亭主はあるか。と何氣なき體にて尋ねたり。

其二十一

意外の問にお高は少し答へ煩ひしが有體に云ふよりほか無しと思ひ定めて、唯、所天は無いでござりませぬが今では遠いところへ參つて居つて音信も無ければ生死も分りませんので、それで仕方無しに此樣な事を致して居りまする仕誼でござゐます。と云へば、此答ぞ岩瀬が思ふ壺に嵌りしか愈々色解けたり。

左樣かえ、それは御氣の毒の事だが、稼いだら一人で居ても隨分面白い事も出て來やう。さて賴みといふのは他でも無いが乳呑兒を一人貰つて吳る人を世話して貰ひたいのだ。と云ひかけて四圍を見廻すに女房は出て行きて居らず、別に人影も無ければまた語を續で、見は女だし、生れたばかりだ。金は可成に添へて遣るが遣り切にして仕舞ひたいのだ。遣つた後では何樣ならうと決して此方から

岩瀬も合點したりと見え、それぢやあ是非が無い。汝の云ふが道理だし、また汝のところの何に直接に話しに行くことも知つては居るが汝が萬端遣つて居る日には畢竟用は汝が達して呉れる譯であれば乃公から汝に直接に話さぬといふだけで今此處で直接に汝に話すも同じことになるのだから、此方の注文を云つて仕舞はう。然し此の事は談が纏まると纏まらないとに限らず決して口外して呉れては困る。又乃公が汝に此樣々々いふことを賴んだといふことも口外して呉れては乃公が大きに難澁するのだ。其代り其處を能く呑込んで呉れゝば人情をたゞは偸まない、相應な事は此方でもする。と云ひ出しは云ひ出せしが後は云はずに此方の樣子と挨拶とを靜かに待つさまなるは疑懼の未だ去らぬと見えたり。

岩瀬が言葉の端々に合點行かざる節多ければ、吾猜せしは過つたり、此は妾などの事にはあらず、猶夫よりも大なる事件ならんとは思ひ飜せしが、さるにても何の事件ならんとの推量は急に立たず、されど事の洩るを恐るゝからはいづれ眞直眞平のとにはあらぬに極つたり、其代又素直なとより報酬は取るゝに極つたりと思ふものから錢には敏く心の廻るお高の事とて、宜う厶ります、何の事か解りませんが善惡ともに餘所他へは決して夢にも知らせますまい。左樣して此樣申せば妾の主人には濟まないことですが、旦那の爲を思へば是非はござりません、仔細によつては旦那から伺ふことを妾限りで捌けるならば捌いて仕舞つて主人の耳にも入れまいと思ひまするが是は旦那の御料簡次

ひ放ちたる言葉は効ありしや、岩瀨は思ひ直せし如く再び何か云はんとせしが、云はんとするは憚るべき筋の事なるにや猶躊躇ひて容易は口を開かずお高の面を倦きもせず少時眺め居たり。お高は先刻よりの始終の樣子に、此は必ず何か口に出して明ち樣には云ひ難きやうなる事のあるなるべし、異な好みのある妾の周旋かなんどの賴みのことなるも其の好みの餘りに異樣にして可笑きか亦猥かはしきより馴染あるものに對ひてならでは云ひ出しかぬるといふやうな仔細ならん、と心に判じて、口さへ切らせて仕舞へば譯も無い事と合點するものから、旦那何にも妾を初めて御覽になつたものと御思ひなさらないで唯今も申した通り金の女房だと御おもひになれば好いではございませんか、御用が無いて御喚びなさる譯も無いのですから何樣せ其御用は假令へば妾に御云付けなさらないにしろ那處ぞへ御云付けにならないでは濟まないのでせう。左樣して見ますれば御馴染甲斐に此方へ仰わりつけて下されました方が能ではございませんか。何ゝ妾の面が御氣に召さぬから御用を仰わつて下さらないといふ事もございますまい。ハヽヽ、永年御贔負になります此方樣の事でございますもの、妾の方でも決して粗略に致して振の御客に御世話致すやうな事は致しませぬ。同營業ゝ幾許もございまするが餘所へ御云ひつけなさりまするより妾の方へ御云ひつけ下されました方が憚り樣な申し樣では厶りまするが此方樣にも却つて御利益かと存じまする。ねえ旦那、何と思しめしますか知りませんが、まあ左樣した道理ぢやあございませんか。と爽に舌を使つて演べ立つれば、遂に

見の使のやうで、これでは妾も歸りづらうございますが如樣でございませう旦那樣、口入と醫師に御遠慮はございませんやね。何樣な御話しでも伺は無くちやあ仕方がございません。饒舌るのが營業でも決して餘計な事や無益なことを饒舌つて餘所樣へ洩らすやうなことは致しませんから、一應御注文を御話しなすつて下さりませんか。とお高は膝を進めて說けば主人は少時お高の容態につくづく眼をつけて何事か深く考ふる態なりしが猶打解けては口を解さず、たゞ少し頰に作り笑を湛へて、左樣云れては何か乃公が汝を見くびつたやうで氣の毒だが決して左樣いふ譯では無い。少し仔細のある事だから金の女房に直接で無くては何樣も云ひ惛い話なのだ。と何樣しても今日の用事の譯は云ひ出したがらぬ素振なり。されど隱さるゝだけ聞きたくなる念のするると、且は又少し仔細ありといふに仔細ある事ほど仕果すれば利あるものなるとに、今一度當つて碎けんと、だつて旦那樣、妾を金の女房と同じものだと思つて下さつたら宜ぢやあありませんか。御承知の通り彼女だつて迂闊り他を自分の代りにするやうなものでもないぢやありませんか。つもりにしても御覽なさい、妾だつてまさか木偶の坊ぢやあ濟みませんよ。ホヽヽヽ。と切り込んだり。

其二十

自己が普通の女ならで善惡ともに心得たる者たゝかものなりと云はぬばかりにお高が自ら誇りて云

此方へ御入りとの言葉について勝手口より上れば茶の間へ呼び入れ置て、主人は烟草すぱ〳〵喫しながら挨拶するお高をじろ〳〵と見て居つ、頓てお高の言葉絶ゆるを待ち、左様かえ。金の女房は寝て居るのかえ。惘然に、随分勝氣で心確かな女だつたが病氣では仕方が無い。今日態々喚んだのも彼女に直接にで無ければ話しても仕方の無いことだ。ハテ困つたな。何様だ車でも外へは出られまいかえ。ム、其様に悪くては仕様が無い。それぢやあ商買の方も上がつたりだらうが何様して居るえ。ナニ汝が頼まれて萬事遣つて居るのか。フ、ム相變らず忙がしく遣つて行くといふのか、それは感心だ。併し何だナ、折角來て呉れたけれど汝には馴染も無いし。たゞの奉公人を口入れして貰はうといふのでも無く、少し仔細のあることだから汝では話せない、仕方が無い、御足勞だつたが斯様いふ譯だからといつて歸つて彼女に話してお呉れ。と云ふは如何な仔細あつてか知らねど我を小兒かなんぞのやうに見做したる言草とお高少しは快からず、主人の岩瀬といふ男を心をつけて見れば、額凸く張り出て眼小く、唇の厚さ特に眼につきて陋し氣に見ゆる面構へ、正しさうにも優しさうにも決して人の認めざるべき相好なり。

初て上りましたものでもござりますし氣心も御存知ござりませんのですから、左様仰あるも御道理てはござりまするが、確實な者と見こみませんでは手前の方でも妾に唯今何も彼も任せては置きません譯でござりまするから、御安心なすつて何様な御用か一應御聞かせ下されませんか、何だか小

やあ惡い。面倒だらうが妾が病氣で寢て居るからと云つて汝何だか聞て來てお呉れ。詰らない事かも知れないが此樣いふ人なのだから愛想好く挨拶して來て呉れなくちや妾が困るから頼むよ。と氣の毒げに云ひ出づる女房の辭、聞く身のお高は腹の中にて、話の樣子では大方詰らぬとらしいが、此樣云はれて見れば、大概步行甲斐も無いらしいが仕方が無い、と面白からず思へども、表面は氣さくに、解りました、そんなら一寸行つてまゐりましやう。と返辭も輕く身を起しぬ。

其十九

御茶の水の岩瀨が住居といふを漸く尋ね當てゝ、お高先づ家の樣子を伺ふに、左まで莊嚴にも矮陋にもあらず、三十圓位取る男の丁度住むべき一軒立の構へなり。此の樣子では葉山樣よりの用事では無くて大方此家の女房が臨月近くなつたかなんぞで今までは無くて濟まして居た下女を爲事無しに置かうといふ位のことだらう面白くも無い、と近頃殊に邪猜に慣れたるお高は疾くも腹で算つて、御免なさいましと音なひぬ。

猜せし通り下女は無しと見えて、那位と云ひながら立出でしは、三十四五と見ゆる女にて、色白きだけがまだしもなれど眞丸の顏に申譯ばかりの鼻、馬鈴薯に手足をつけたといふ風躰なるが、丸髷だけにて流石に其と知らるゝ妻君なり。

たり。

古河の某とかいふ茶屋へ口入れして遣りたりし女の、陰に糸を引くものにてもありしや幾干かの前借を取りながら住み込みてより三日めの夜逃亡して行衛知れずなりしとかにて茶屋よりむづかしく掛合ひ來りしかば、お高腹立ち烈しく、其女の身許に出かけて、金を返すか其方の手で女を捜し出して屹度返すか、と嚴しく談じたる末、思ふ存分の答を得たるに稍心和らぎて歸れば、坊主金の女房は何用ありてか吾が歸りをば待ち設けたる顔つきなり。

お高さん〳〵、汝の歸るのを待つて居た。此の郵便が今來たのだが、出し人の岩瀬といふ男は汝も知つて居やう彼の金滿家の葉山さんのところの奥の番頭で、此方から隨分小間使ひだの女中だの僕だの妾だのを澤山入れたが何時でも此の岩瀬さんといふのと妾の方では引合つて事を濟ますのさ。だから岩瀬さんの用といふのは取も直さず葉山さんの邸の御用だから岩瀬さんの機嫌も取らないでは濟まないばかりか損になる位大事の人だよ。ところが何だか知らないが、用事があるから此郵便を持て來て呉れ御茶の水の自分の宅に待つて居るから、との郵便なのさ。平日は用事を先へ知らせて左樣して妾を喚びつけるにも葉山樣のお屋敷へ喚ぶのに、今日に限つて用事も知らせず、ついぞ無い自宅へ喚びつけるといふのは、葉山樣の御屋敷の御用では無くて全く岩瀬さんだけの詰らぬ用かも知れないが、併し云ふ通り岩瀬さんの機嫌は隨分大切なのだから、來いといふのに行かなくち

の男の五月蠅からぬは無きに定まりたるを今此時にて其を厭ひ逃げ歸りては汝の所得も此方の所得も有るか無きかになり萬般の勞も空になるべし、吾が脚を幾度が空にして往來し吾が口を酸くなるほど動かして纒めたることを何とおもふや、辛くも苦しくも一月ばかりにて死にはせじ、堪へよかし、さて其後は必ず我が方より說きて彼方より暇出さするやう爲すべし、されば汝も所得あり此方も無きにあらず、其中汝に相應はしき能き殿を見出して得さすべし、などなだめ賺して追ひ返しなんどするほどになりぬ。

其十八

固より飽まで下情に通じて、大概の者が欲しがるものはこれ、厭がるものはあれ、道理は何の位までしか行はれぬもの、禮儀は此程のところまでしか用ゐられぬものと知つて知つて知り拔いたるお高、日々に其道に馴れて三周と立たぬ中に、隨分むつかしき事件、すぢりもぢりの入譯の間に入つても合點早く、取捌き銳く遣つて退くるやうになり、二分の步合に吾が懷中へ取る錢少なからざるに至りしが、女だてらに酒好き骨牌好きの勢として、悖つて入れば悖つて出るを免かれず、面白い笑聲を時々發することあるだけが從前より好き位の事にて相變らずぴい〳〵風車、廻る月日の脚早くも野分吹くべき時候に向つて來て、例の着たきり雀、饒舌るばかりは元氣好く其日々々を送り居

ひなさらないで、好けないところは何處までも御叱りなすつて追ひ廻して頂かなくちやわほんに却つて困ります。と笑をつくりながら答ふるを、時々眼珠だけ動かしてお高の何處から何處までをじろじろと見つゝ默つて聞き居し女房け、此奴此のお高といふ奴も中々したゝかものだなと思ふ色をばやゝ現はしたり。

これよりお高は日每に通ひて此家の女房の指圖するまゝ或時は肥胖い女を連れて炊婢の目見えに連れ行き、或時は三十近き女の赤い手柄かけたるを伴ひて六十ばかりの爺樣い妾にと押付に行き、又或時は惘れなる小娘を親父と共に强ひ勸めて田舍の小料理屋の亭主の手に渡すなどさまざまの事を仕たりしが、其道に食ふ日の重なるに從ひ其道の習ひに染みて一週間二週間立ちては既少しにても利を多くせんの心より、行儀見習ひのためにとて奉公所望の女にも、其女を顏少し白く、心少し貞からずと見れば、那處其處に年若く優しく淸らにて豐に暮せる殿ありて、丁度卿のやうなる女あらば表は小間使の分にして世話してとらせたきものなり、定まりては月に幾干遣はさんと云ひ込み玉へるなるが、內君は無し、心をさへ取り得ば羨ましき其家い奥方ともなり得べく、左らでも定めの外に賜はりものは多く得べきに卿は如何に、其家へ勤むべき心はせずやなど說き慫慂めて、可惜乙女を好色者の慰みとなし、或は妾奉公の目見えにとて出たる女の、一と通りならば堪へもすべきが夜晝を分かず窘まるゝことの堪へ難しとて逃げ戻れるを、愚なる事云ふものかな妾置かんといふほど

ふ言葉に、虚言も無さゝうなれば二つ返辭で承知して、其日は坊主金の女房宛の紹介の手紙を善七より貰ひ受け、終に其翌日神田に出向きぬ。

下話しは十分行き屆きたる事とて坊主金の女房は善七の手紙を終までも讀まで下に置き、お初に御目にかゝります。汝さんが善さんの御話のお高さんと仰あるのですね。それぢやあ善さんとの御話合通の御つもりで何分お互に爲になつたりなられたりするやう水臭いことなしに御賴み申します。妾は堪忍の出來ない方ですから氣に濟まないとおもふ事は隨分慳貪にも申します其代り腹に毒は無いのですから、其積で汝さんも遠慮仕ちやあいけませんよ。お互にざつくばらんで無くちやあ物事の埓は明きませんからねえ。とこれはまた口で世を渡つて來た女とて話し方と云ひ話の趣意といひ中々巧くて緩みの無い初の辭誼なり。されど此方もさる者なれば滿更呑まれてばかりも居ず、はい、はい〳〵と虛返辭で受けて置て、先方の辭の途切れを待ち、いえもう、どういたしまして、がさつな上に不馴のものでございますから、てきばき叱責つて廻して下さらないぢやあ仕樣がございません。眞實に何樣か御氣の濟むやうに御使ひなすつて下さいまし。此樣して善さんの御世話になつて此家へまゐりました上は此家の御氣に入りになつて役に立つと御云ひなさるやうにならなけりやあ妾が善さんにも濟まないやうな譯ですから出來るだけ働いて見るつもりですが、何をいふにも覺えの無いことですから手心も知れません。最初の中は御面倒でもございませうが、自烈たいと御思

其十七

お高は中一日過ぎて再度善七が許を尋ねしに、影を見るより早く善七は聲をかけて、今日汝のところへ使を遣らうと思つて居たところだ。丁度好いところへ來なすつた。さア彼方へ通つて話しなせえ。と言ひさしながら奥の方へ顔を向け、オイオイ、お高さんが來なすつた、と女房を呼べば、立出でゝは來ざれど、さア關はずと此方へ御出と及び腰に挨拶する女房の聲す。それぢやア親方御免なさい、と主人に一寸會釋して種々の風躰せる男共六七人居たる中を通り拔けて奥に到り、一昨日はアりがたう、又來たよ、早速だが何樣か決つたかねえ、と問へば口より輕く點頭く素振で先づ答へて、アヽ、汝には不承か知らないが彼家で取る口錢の四分一だけが汝の收納になる筈だとさ。吾夫でも汝のたしかな者だといふ事を話し最少し出せといつたさうだけれど彼方もそれよりは出せないといふから仕方がないのさ。四分一といふと少いやうだが、三十錢か四十錢にしかならない日もある代り少し骨の折れるやうな事のあつた日には五兩も六兩も取れる事があるのだよ。嘘ぢやア無い、遣つて見れば分るが、隨分魂膽を仕たり法を書たりする日には美味い汁の吸へることは吾家見たやうな忙がしいばかりで味の無いヤッサモッサでやつて行くのと違ふから、またそれだけの面白味があるのさ。强て勸めるのでは無いが遊んで居るよりは割だらうからまア兎も角もやつて御覽な。と云

が其割には德の行くことだ。一番遣つて見る氣は無いかえ髮結よりは割だらうと思ふ。他でも無いが外神田で此方に似たやうな商賣をして居る坊主金といふ受宿があるのさ。ところで其金といふ奴は賭博は可なり遣れたさうだが荒つぽいばかりの男の果が今の商賣をして居るのだから本職の方は性に合はずで、女房が今まで追張つて遣つて來たのさ。隨分顧客も澤山あり田舍廻りの藝妓娼妓酌女絲場の女なんぞまでを扱ふのだからなんかかんものや食はせものに引掛つて面倒を見る日もあるが其代り金の融通も大きい中々拵ぎ甲斐のある家よ。こゝが汝の考へどこだが、其家の女房が脚氣になつて此間から外廻りの出來ない身になつたが、亭主は役に立たず困りぬいて居るものだから二三日前も善七が途の次に尋ねて遣つたら其女房が、實に親分困りますよ、せめて大抵に理解が疾くつて他の强辯にかゝらないで一寸理窟の云へる位な人でもあれば相當な步合を遣つても此商賣を遣りつゞけて行かれますが此儘ぢやあ先づ今までの半分は拵げないことに決つて居ますと愚痴をこぼしたといふ事さ。馴れない事はむづかしいやうに思ふが汝なら造作無く出來る事だから金のところへ行つて見て遣つて御覽な。氣は無いかえ、氣があるならば步合のところや何かは吾夫に左樣云つて汝に少しでも利のあるやう話を極めさせやうから。と何樣やら好さゝうに聞ゆる話し、そんなら妾は其話に乘つて見る氣だから何分とも親方に宜く申して吳んな。と云ひ置いて其日は歸りけり。

あへる交情なれば、今しもお高が此處を尋ねたるは問はでも自己の身を過ごすべき好き方便をば得んとてなり。

折しも善七は外に出てゝ在らず、お勘のみ家の奥の方の北に向へる掃出し窓の傍に身を横たへて涼風の吹き貫く快さを貪りつゝ爲すこと無くて居たり。店には人なくて唯一人の手代の何事を調ぶるか萬般の控への帳面を繰りかへしつゝ筆もて其を點じ居るのみ。臺所の方に物の音するは炊婢の夕飯の支度を徐ろに仕はじむると見えたり。

好き時に來合せたりと悦べるお高の入り來るを見てお勘も起直り、應、お高さんか、惡かつたと聞たが忙しいので尋ねも仕無かつたけれど、まあ能くお出だ。痩せたねえ。さあ此處が涼しいから此方へ來な。主人は不在だし、出られもせず、所在が無いから横になつて居たところさ。久しぶりだから緩りと話しな。もう飲つたつて好いのだらう。といふを發端にして談は喋々二人の間に續きぬ。お高は好き機會を見はからひて今の身の樣の大概を語り、何か妾に相應の好い事はあるまいか何樣だらう、髮結も餘り嬉しくないから得手勝手な注文にぶつかるやう巧いことの無いものとは承知しながら聞くが、と云ひ出せばお勘は點頭き、銀さんが彼地へ渡つたといふ事は亭主も此間聞て來たから實は妾と二人で內々、お高さんも遊んでばかりも居られまいが何樣する氣だらうと噂をして居たのさ。といつて別に巧い口のあるでは無いが、此樣いふのは何樣だらう。汝には些荷が輕過ぎる

の霜とならぬ筈無く、阿高は忽ち草枯るゝ野の蟋蟀の如く、今更明日を氣遣はねばならぬ身と復爲りぬ。

猪口持つ手つきは巧者なれど針持つ術は知らず、萬般の手内職は面倒なりとて云ひ下す位なれば試みやうとせず、いよ〳〵困りぬいた時は覺えた髮結さへ仕て退ければ食ふには不足無けれど、剪刀て元結をブツリ〳〵と遣つて髱を後方へバクリと退け解す時中剃の邊から立上る厭な臭は成るべくば嗅がずに濟ませたしと度胸を決めて猶不貞腐れに日を送る中、今日といふ今日は既其の厭な臭を嗅ぎでもせねばならぬ仕誼に逼りつめたり。

されど容易には屈せざるお高、厭な臭は猶嗅がじと、曾て一度爲せしことある遊廓の髮結には肯てならず。取らるゝもの無き貧家の心やすさに戸締りもせで飄然と吾が家を立出で、土手の善七といへるものゝ許を訪ひぬ。

芳原土堤の下に善七といへば其邊のものに名を知られたる男にて、凡そ遊廓に依つて衣食するもの、妓夫、新造の類の奉公出入の間に立つて受人となり、親分となり、紹介者となりて、其輩並に遊廓の各娼樓の主人等に徳とせられ、陰然と一種の名譽並に一種の權利と且は利益とを收め居れるものなるが、お高の夫の銀造は此の善七を兄として疎からず交際へるのみならず、お高も善七の世話になり或はまた善七の手助けを仕たる事ありたる上、善七の妻のお勘とは同氣相求めて親しく思ひ

も、やつたのなら妾にだけは話して置て飛ぶなら飛ぶと行く先の大概位知らせて置ても好いのに。と、さま〳〵の疑慮の末は妻の身として有るまじくも、吾が夫の若や正しからぬ事をせしにはあらずやと怪しからぬ想像をさへ浮るに至りぬ。

されど銀造はお高の思ひしほどには未だ堕落せず、遂に某組の人夫となりていよ〳〵此地を出發しけるが、豫て認め置きたりし書狀を出發の間際に臨みて出し置きしかば、日を經てお高は其を受け取り、初めて模樣を知るを得たり。夫婦の恩愛別離の苦しみ、普通のものならば少時の別れにも泣き悲むべきなれど、もとより意丈夫のお高、加之、此時身躰はいよ〳〵舊の如くに回り來りたれば別に歎きも悲しみもせざれど唯さし當つて此金亡きに至らばとこれのみに當惑しける。

其十六

銀造去りてより一日二日は明くる暮るゝにさすがこゝろ強きお高ももの淋しく思はざるにはあらざりしが、去るものは日に疎き世の例に洩れず、程經るまゝに左のみにも思はずなりて、身躰の舊に復りしまゝ、錢あるに任する飲食三昧、女らしくも無く放埓に日を送りけり。

隨分儉約しくして其上賃裁縫に針だこの痛みを堪へ夜の眼の痒さを忍ぶほどにしてさへ女一人は生活し難きものなるに、況してやこれは坐して飲み寢て食ふなれば十兩ばかりは風の前の塵埃日の下

など云ひ聞かすれば、阿高も心安く思ひて、近頃に無く夢平かに夜を好く睡りぬ。
翌る日の事なり、銀造は那處へとも云はず立出でしが、小遣錢も持たで出しことなれば頓て歸るべしとお高は思ひて、心にも止めざりしが歸り來らず、其の翌日も猶歸らず、三日となりても歸らねば怪しみ訝る念のみ募りて、仔細なくては叶はじと女だけに神經を遣ふこと烈しく、さま／＼に思ひ亂れたり。
考へて見れば何樣も怪しい。膨らんだ蝦蟇口でも持つて出たらば二日も三日も歸らないからと云つて何とも思ひは仕ないけれど、何にも持たずに出て行つたのに左樣々々歸らないといふ譯が無い。何か間違でもあつたか知らん。それにしても左樣なら既知れる筈だし。何樣も何だか合點が行かぬ。生活は面白く無し妾は此樣だし、自棄を起して上方へでも突走つたか。若し左樣とすれば幾干か持つて居なければ出來ない筈だが過日の夜權次から借りて來たのは悉皆こゝに置いて行つたし。去て見れば妾には秘して置いて内々手づまをして居たか。いや／＼左樣多くは權次が貸しさうも無いとだ。左樣云へば此前は碌な顏も仕無かつたといふ權次が快く貸して呉れたといつて夜深けてから十兩の金を持て歸つたも何樣やら變だが、若や、いよ／＼、若し、ナニまさか其樣なこともあるまいが、然し、若や萬一、ム、、餘り甘いことも無い忌々しさから、やつたかも知れない。左樣さ、調度愚漢が御奪んなさいといふやうに仕て居るところへでも撞突れば隨分やるのも當然だ。だけれど

して云ひ出せば、權次は笑つて、兄貴ほどでも無え、白いことを云つたもんだ。過日兄貴が談を仕出した其時傍に遊んで居た六といふ奴は仕様模様も無へ蛸のやうな厭な奴さ。そこで兄貴には氣の毒だつたが奴に付込まれちやあ五月蠅ので、奴の手前をかねて無いといふ一點張で押通したのさ。實は其時太い奴だと兄貴に食はせられたら直逃げ出して其足で姉御に逢ひに行かうと思つて居た位だから堪忍して呉れ。屹度兄貴は腹を立つて今度は乃公を半殺しにする覺悟で來るに相違ないと外へも出ずに待つて居たのさ。と打解け云ふに此方も打解け、左樣か。そいつは乃公が頓間だつた、今夜もう一度下手に出て肯かずば彼地へ行きがけの駄賃に汝を踏のめしてと思つて來たのだが、ハハヽヽ乃公が鈍だつた。と高笑ひしぬ。

其十五

銀造は實は自己が生活の立て行き難きより、少時は辛苦を嘗むるとも此處に屈みて後に伸びんとの考へをもて權次とも相談したる後軍夫の募りに應じ某の地に行くべきに心を決めしが、流石に吾が女房なれど貧の上に病み疲れたるものに對ひて、我は今より汝を遺して海の外の國へ行くとは云ひ得かね、終に出發したる後に初めて知らさんと思ひ定め居たりしなり。

其夜銀造家に歸りて權次が情無からぬ始末を語り、猶又折節は遊びがてら汝の見舞にも來る筈なり

此類の人々の間に定まりたる式のことゝて案内も乞はず戸を曳き開けてつか／＼と内に入れば、主人も立つて迎へんともせず、やあ兄貴かと坐つたまゝて無躾な言語、何樣だ今日は馬鹿に暑かつたなと異なる挨拶、それより直に本題に入つて談話は手も無く初まりたり。權次、彼時から乃公は家へ歸つて女房とも相談した上てとは思つたが途中でよく／＼考へて見れば女の料簡からは止め立ては必定だし、止め立てされたつて思ひ止まるのぢやあ無し、口數をきいて泣面させるだけを無駄だと思つてとう／＼出しぬけに行くことにした。ところで汝に賴むのは後の事だが、此樣いふ機會であつて見れば是非とも過日云つたゞけ貸して呉れなくちやあ後が困る。まさかに女房を捨て殺しにしたと云はれては此の銀造が面にもかゝるのだから彼地で若し死ぬにしてからが可笑く無い。澤山でも無い十兩ばかりだから、成らうことならば乃公に今渡して呉れめえか。今夜これから歸つて其金を置いて行きさえすれば吾妻も身體が直るまでには十分だし、治療れば彼奴も何とか働いて一人口だけは過ごして行かう。と云ひかゝるを押へて、オツト兄貴、澤山は饒舌らせ無い、好いよ好いよ、汝の世話になつたことを忘れは仕ねえから安心して呉れ。金は今でもあげやうだが、それぢやあ姉御を出し拔くのだな。何時もの兄貴の氣象だから無理でも無いが可愛想だな。との情ありて義理を立つる返答は、先刻に吾家に在りて銀造が妻に語れるとは趣き異れり。銀造は數次打點頭きつゝ聞き居しが再び權次に對つて、一昨日の汝の口振とは違つて、其ぢやあ快く貸して呉れるか、と解せぬ顏

しみつたれるない。太閤様だつて橋の上にも寝たは。何時まで此様なものか、これでも木鼠の銀造だ。また絹衣で奢をする時もあらあ。と云ひながらずいと立上る。妻は今更留めんともせず、何だよ。馬鹿にして居る。妾の簪まで飲んで仕舞つた今日此頃、こればかりな酒で太平樂かへ。火鉢も釜も既有りや仕ないやね。だが留めたつて仕方がないから往くならお出だが其代りに些でも好かつたら直に歸つて來てお呉れ。と未練氣なき言は流石に此男の女房なり。かく云はれては吾が妻ながら氣の毒になりてか、帶占直し居たる銀造おだやかなる語氣に返りて、眞實に火鉢も釜も無いかと小聲で尋ね、汝の留守に何も彼も悉皆賣つて仕舞つたとの答をきゝて、チョッ、左様か、仕方が無いなあ、權の出やうに依つちやあ手間が取れるも知れねえ、これで辛防して居て呉れろ、と云ひさして、紐もて頸よりかけたる蝦蟇口を取つて抛出しつ、がちんといふ響を後に遺して風の如くに此處を去りぬ。

其十四

神田の某の小路に、是も同じく詫しき住居を構へたる權次といへるを尋ねんとて家を出でたる銀造は、月の色のさやけきを愛づる心も無くて、たゞ廣袖の衣を吹き貫く夜風の涼しきに勢よく只管道を急ぎけるが、軈て志せるところに着きぬ。

ほとすると云つて此頃の樣に他所にばかり泊りたがる事はない。左樣して達て出て行くのなら一昨日のやうに今夜も明日も汝は歸らないものと極めて置くから、其間だけの小遣錢を置いていつてお呉れな。と恨むやうに答へたり。

馬鹿をいへ。置いて行く錢があれば此儘寢て仕舞はあ。無い切なさで足を摺小木にして歩行廻るのを乙にひぞられちやあ胸糞が惡い。と一言に云ひ消す夫の詞を鼻で笑つて、だつて此間のやうに二日も三日も歸らないのは可笑いぢや無いか。口は重寶だよ、當にやならない。行けば行くで小遣も要らうに能く手ぶらでもつて幾日も過ごせるね。今だつて滿更無いこともあるまい、妾の身躰は此樣だし、仕樣が無いから云ふのだよ、幾許か置て行つて呉れなくちやあ明日は差詰困つて仕舞ふ。留守を困らないやうにして置てさへ呉れゝば、此方は病人だし、燒くのぢやあ無し、那處へ情婦をこしらへやうと、幾日餘所へ宿泊りしやうと汝の働きだから構ふことは無いが、置去り同樣にされちやあ妾は厭だよ。と云募るは女の僻性といふものより出でたるところもあるべけれど、また聊は道理立てるところもあり。

主人は妻が云ひ出でしことに全く耳を假すこと無く、何でも好いから乃公は往かうと思つた時往く分だ。小遣が無きやあ火鉢でも釜でも賣りやな。病人々々と緣起でも無い、不景氣なことは置て呉れ。料簡を大くして凌いで行きなよ。汝をまさか置去りにして餓死させることも仕ない。ゑゝくそ。

けろか、いけ業腹な。と尖り聲して銀造は叫びぬ。
怒つたつて仕様が無いはね。巫女の御用になる狗ぢやあるまいし、見て居るまへで何時までも遣て居られては妾が堪らない。此方の念だけでも雲位出やうはさ、好い加減に廢してお仕舞な。とはお高が挨拶なり。
銀造は一杯傾けて、フ、笑はせあがる。飛んだ劒突を食はせるな。それはさうと彼の權次の野郎め、隨分持つて金州から歸つて來たのだから、昨日幾干か貸せと云つたら惡く濟まして碌に挨拶も仕ない。酷い野郎ぢやあ無いか。も一度云つても切れ離れやがら無きや打擲いて呉れないでは腹が癒ないと云ひ出せば、左樣かい、太い野郎ぢやあないか、梅瘡で草津へ行つたとき一切合切あれほど此方の世話になりながら、恩知らずにも程のあつたものだ、とは成程鬼の女房に鬼神の挨拶なり。

其十三

銀造はまたもや杯を仰ぎて少時無言なりしが驀て思ひ出したるやうに、斯樣苦しくつちや仕方が無い。何樣しても權の野郎の頸根を抑へて幾干か取て來なくては動きが取れない。かうと、丁度月も面を出して來た。乃公はこれから神田迄行つて來る。と云へば、お高は少し面白からぬ顔して、また出るのかへ、今夜は廢止にして明日朝涼に行つたが好いぢやあないか。病人の傍に居るのがほと

入の袖戸に凭りしまゝ夫の美味氣に酒飲むを語も無く眺め居れり。病氣に長く惱みし後なれば快き方にかゝりしとはいへ髮は汚れて蓬々と亂れかゝれり。反古紙を添へて『つッこみ』といふに束ねたるも今や潰れんと緩み傾けるに、頰の肉の落ちたる、眼の色の濁りたる、眼の下の邊の黑み渡りたる、立派なる一の字口の唇の稍白みたるなど、外の人の一目見んにはなか〳〵其傍にて酒飲み物食ふことなんど得爲すべくもあらぬ厭はしき樣なり。加之天井は低く壁は疵多く疊は垢光りせざるところは磨れそゝけたる、萬般不快ならぬは無き室の中は取亂されたり、庭といふものは少しも無し、強て眼を放てば蝸牛の干死たるが幾日か前より物靜かに止まり居れる隣の家の不淨處の裏面蔀の鼻のさきに見ゆるのみなる此裏に有りて、そぼろになりたる庇廂の盡頭に辛くして出でたる月を眼痛きまで燻ぶる蚊遣の煙の中より眺めながら主人は盛んに酒盞を擧げ居れり。此の場此の光景の中にての此の酒事、恐らくは銀造も心樂しくにてはあらざるべし。

風を避けて置かれたる燈は火屋なきまゝ臭き油の臭を添へて明らかならず妻を照らせど銀造が居る邊までは屆かず。男は先刻より月を賴りに時節とて茹てある豆を下物に飲み居けるが、折しも夏の夜の癖の黑雲天を走りて月を蔽へば、ゑゝ忌々しい、貧乏すると馬鹿にされる、雲の畜生までが人を白痴にして、舐り粕の豆を再舐らせくさる、洋燈は惡く臭いし、仕方が無い、黑闇て矢張やッつ

やうになりぬ。されど良からぬヿをなす程の者の常とて、咽を攫まるゝ様なる時に臨みても少の緩みさへあらば酒を飲まんことを思ひ、明日死ぬべき身にも今日初鰹を味はんと欲ふ如くに慾の意地の強く張れるものなれば、苦しくも亦苦しきが中にて今宵も銀造は例の如く蚊遣の煙りいぶせかるべき汚き室の端に出てゝ唯一人酒を飲み居たり。

其十二

銀造が妻のお高と呼べるは此夏の初つかた男の子を産みしが産後の肥立悪かりしためか其子の育ちも極めて良からず遂に生れて十日といふに元の闇路に帰り果てたり。普通のものならば女の性として天に悲み地に悲みて恨み哭くべきなれど、連添ふ男のあさましき氣心に同化りてか、さらずは自己もまた固より情厚からぬ質なりしにてか、左までは悲しとも口惜しとも思ふ様子無くて、却つて昨日今日の生活の苦しき中に足手纏ひの孩児の亡くなりしはせめてもの幸福なりなど、恐ろしくも口に出して我から語り、白銅の貨幣一つ遺失せしほどにも傷み思はず、たゞ自己が身の患の猶はかばかしくは除けで、起居ものうく飲食味無きを悒々しと喞つのみ。

今日は稍快けれども、此六七日ばかり前のこととなりしが同じく病苦の薄らぎしまゝ好める食を自ら調へて嗜める酒を少ばかり飲みし其翌日病の後戻りせしに懲りて、聊自ら懼を抱き居れば、押

なり。第三は社會の實相を觀る傍、たゞに美感の快を取るのみなれば、是即ち樂んで淫せずといふに當りて咎むべきにあらずといふを理由として、遊廓を素見することとなり。彌九郎等七人は揃ひも揃ひて烏滸のものどもなれば此の三條を神聖なる理由を具へたる法三章と遵奉して孰も缺かすことなく勤め從ひ居けるが、頃日は誰しもの懷中淋しきまゝ寄席へは少しも行くことなく、月の明きを好き便となし、打續きて遊廓の素見にのみ耽り居たり。

其十一

彌九郎等一派のものどもは善かれ惡かれ父、母、兄、叔父なんどいふものを各自が故鄕に有ちて、學問修業のためにとて其等より月々送りくるゝ金子あれば、露しげき野邊に時を得て蟲などのすだく如く快げに笑ひつ歌ひつして日を過し居れど、それには引替へ自己みづから自己の働きによりて日を過ごし行く貧しきものどもは、多き少きこそあれ苦まずして濟むべきもの無きは世の習ひなるが、取り分け幾歲か惡き癖に染み來て今更正しき業取らんにも邪ならぬ世渡りの術知らぬものゝ苦しさはひとしほなるべし。龍泉寺町に住める銀造といふ賤しきものあり。先頃まではチーハーの運送を淺草吉原山谷あたりまでに爲し居りて、妻のお高と共に奢り生活し居たりけるが、其事嚴しく禁められてよりは全く衣食を得べき道絕えて、多くもあらぬ物を昨日は質入れし今日は屑買に賣る

を長く吐き出して自己が顔の崩れ潰えんばかりに笑み傾きぬ。

其十

彌九郎が平生朋友として交はるものゝ數は少からねど言行の謹嚴にして學事に勉勵するは極めて鮮く、いづれも放蕩無賴といふまでには至らざるも細瑾を省みずといふ質の青年共にて、似而非磊落を惡しとも思はず、自己等が本分の學問のことは二の次にして、或は新聞紙を讀みて政治を論じ、或は新刊の小說若くは雜書など讀みて淺薄なる評論を仕たり顏に喋々し、或は女義太夫に現を拔かしなどするを自等等が爲すべきことのやう思ひ做し仕做し居る連中なるが、特に彌九郎と下宿を同うせる六人は別けて檢束無く日を費すのみならず夜をかけてまで要無きことに身を任せ遊び暮すを常となし、知らず〳〵の間に遊惰の習慣を成すに至りし末は、習慣より終に法律を成して、彌九郎を合せて七人の者每夜缺かすこと無く三つの事の中の一つを擇みて爲すべきことに定まり居り、其を厭ひ戻くものは罪の償として些少なりとも食ふ物若くは飮む物を餘の人々に供ふべしといふ怪くも可笑しき制は酷くも嚴かに執行はれつゝあり。三つの事の第一は晩食後の散步に、是は身躰の健康を保つためといふことを理由にして、二人三人と別れ〳〵に相携へて喪家狗の餌をあさるが如く市街を彷徨ふことなり。第二は人情の微を觀るためといふを理由として連れ立ちて寄席に行くこと

き綴らしむれば、畢竟其新聞紙は直接に世を欺き人を侮り、あらぬことを書き載せたるといふには當らず、從つて左まで世の人にも賤まれず過ぎ行くといへり。彌九郎が朋友に對ひて葉山家の秘密を我知れり顏に語りし後三日ばかりを經て、世の人は皆彌九郎が語りしほどのことを知り、これこそ眞實の事情なるべけれと云ひ囃して、或は子爵が自負を罵り或は美代子が薄命を憫み、喧しきが上にも取沙汰はひとしほ喧くなれり。こは某探訪者が、那處にてか彌九郎が云ひ出せし說を聞き傳へて、固より其を調べ糺すことも考へ較ぶることもせで、こは面白しと書き載せたるよりにて、即ち彼の賢き新聞紙の一が爲し業の結果なり。

小學校の生徒が敎師の言葉に隨從ひて同じ言葉をば敎師よりは大きなる聲して叫び出すごとく賢き新聞紙は鶯月、空砲、千三、百一、山伏等の名譽ある綽名を負へる彌九郎先生が弟子となりて大きなる聲もて叫びし翌日、諸方より詰責の調子をもて正誤取消を申し込まれぬ。賢き新聞紙は一も二もなく條例に依りて取消しぬ。されど世の人は既新聞紙の記事を眞實と思ひ込みて各自が記憶の中よりは既に見たりし記事を取消すこと無し。即ち或人等の名譽は傷つけられ畢りぬ。

彌九郎は自己が言ひ出だしたる事の堂々たる新聞紙の記事となり、世の噂の種子となりたるを見て愈々深き喜悦の中に入り、幾度となく例の賢き新聞紙を他人無きところにて展べては、花の如き才筆の記者によつてものされたる其記事を讀み、讀み終りては眼を丸くし首を縮め、いと大きなる舌

實に彌九郎が演べ立てたる葉山家の件は、談話若くは小說として聞く時は面白き筋合なるには違ひなし。さはあれど唯談話若くは小說として面白きのみ、事實としての眞なりや否やは別のことなるべし。彌九郎が傍に在りしといふ二人の男の云ひしことは皆眞として受くべきや、將また彌九郎が語れる如き二人の男は僞りなく彌九郎と同車してありしや否や、抑また彌九郎が語りしごとき年齡風躰の如き男二人が彌九郎の傍に在りしのみは眞實にて、其他は彌九郎が想像し出せしとなるべきや、これらの消息を知るものは、唯語り人の彌九郎のみにて事實は固より不明の中にあるなりけり。

新聞紙といふものは世のさま〴〵を映し出だす鏡なりとて我他ともに尊みおもふものなれど、鏡にも精き精からぬのあるが如く、新聞紙にも志な〴〵あり。たゞに紙面の記事の興味ありて世の人々に愛で悅ばれんことをのみ務むる新聞紙は、實に世の賞讃を得んとするには賢こき方針を取れりとも云ふべけれど、折節はさる新聞紙の弊として、あらぬことゝもを事實として世に傳ふることを自己が社の耻辱とはかへりみで、只管に我が社の記事の世の談柄或は笑ひ種となるを自己が社の名譽とするやうなる傾きあるは數々我他ともに認むるところなり。さる新聞紙の賢きことには常に自己が身を責任無きところに置きて吾が紙面より起るべき萬般の責を豫め防ぎ置き、さて筆のみは饒舌家の舌のごとく爽に動けど思慮は幼き編輯の人々をして、他の德を傷つくるをも他の名を傷つくるをも他の利益を奪ふをも他に意外なる不幸を與ふるをも憚るといふこと無く忌むといふこと無く書

して居る、美代子は如何に諭されても一念を飜へさず、繁は前言は食むことはならず、いづれも多少はあれ悶え惱んで居る中にも可憐な美代子は愁思の極一室にのみ入つて、醫師の片瀬のほかは男子には顏を見せるも厭だと云つて居るさうだ。そこで僕の傍に居た二人は共に繁の命を受けて美代子を説諭に行き、美代子の執拗を解きほぐしに行くのだ。二人の談話の樣子では年老つた方は古くから葉山に使はれて美代子を負ふたり抱たりした男、また若い方は美代子が乳母の子で、美代子とは兄弟のやうに育つたのでこれも葉山に使はれて居る男らしい。そこで繁の命により二人共に大磯に行つて一人はわざと親父方になり、若い方の一人は表面は美代子の味方になつて、陰では互に絲を引きあひ彼の秘書官殿を美代子に思ひきらせやうといふ筋らしいと僕は鑒定したのさ。恐らく此鑒定は外れる氣遣が無い。と云ひさして饒舌り勞れたるにや少時息をやすめたり。

其九

道理ありげなる一部始終の物語りを爲し果てゝ、彌九郎は煙草二三服喫しながら一座の樣子を徐に看るに、執も成程と云はぬばかりの顏色をあらはし居れるが、中にも彼の歌膝せし男は、いと滿足したる體を示して、面白い面白い、と重ねかけて獨語てば、彌九郎は云ふに云はれざる美味のものにても嘗めし如く、莞爾と笑を含みて深く自ら樂むところあるやうなる面色なせり。

するときにも勢力ある味方を得る道理と賢しくも考へたと見え、單純無邪氣に子爵へ對して憐れなる處女は出來るだけの尊敬と、許し得るだけの愛情とをもつて交際した。これは美代子に無理は無い。吾がおもふ人は子爵の下について居る人なり、吾が父は一も二も子爵の命に從ふものであるから、子爵の一言をさへ得れば自分が一生の幸運を摑むことが出來るのだから、内々此邊の含みを以て子爵に優しくしたのは實に可憐な乙女心さ。斯樣いふ譯で二人は段々接近して來たが、子爵は美代子が心中を斯樣とは悟る由がないから、日頃自負する乃公が交際術の巧妙なるより美代子が歡心を得た事と信じ、當人は是の如くなり其父は彼の如くなり、申し込みさへすれば無論承諾する事と信じて世間に流布した事實の通り申し込をした。果して繁は直に承諾した。此時は實は繁も女が年齡の相違にもかゝはらず子爵と相愛して居ると思ひ謬つて女に質しもせず承知と答へたのださうだから、左迄繁に罪ありといふ譯でも無い。一方の子爵は此答へを得て滿足したが一方の美代子は此事を聞て非常に驚愕狼狽し、直に病氣といふ一時逃れの塞の中に立籠つて、飲食もせず閉ぎ込んだ。此の病氣だもの、片瀬博士が如何に骨を折つたとて効の見えぬも當然では無いか。さて左樣なつて見ると親父も心配仕出して先づ大磯へ女を遣つて置き、女が氣に入りの乳女や侍婢をつけて段々探らせると、實際の情は繁の意外に出たから、流石金儲けには智慧のある繁も一時は顚倒して策の出所も無くなつて仕舞ふたといふのだ。子爵は今以て妄信をつゞけて居た病氣さへ治れば安心

一座の面々いづれも彌九郎が談話の順序立ちて眞實らしきにフムく\と聞き居るが中に、彼の馬顏の色白男のみは猶信に受けざる色を現はして例の卑む如き笑を引續けて浮べ居れど、其さへ吻を容れて打消すことなどはせざれば、彌九郎いよく\得手に帆をあげて、さあ聞き玉へ、これからが話の本題に入るのだ。併し微細に僕が見た通り聞た通りを話して居ては手間ばかり取れて煩はしいから、要領を摘んで話して聞かさう。畢竟が世間でも想像する通り美代子は甚しく子爵を嫌つて居るのだ。して其には其の原因が無くてはならぬが、勿論子爵の年老いて居るのも其一つに相違無い。然しそれよりは猶強い力ある原因がある。君等はそれを何とおもふ。左樣さ。實に君等の云ふ通り美代子には意中の人があるのだ。ところで美代子の其戀人といふのが不思議だ。世間の噂とは全で違つて居て、誰あらう即ち彼の子爵の秘書官を勤めて居る才子の何某さ。どうだ、是には驚いたらう。斯樣いふ始末であつて見れば子爵の申し込みの無い前に疾くから美代子が打明けて父母に吾が望みを云ひ出したなら相手は將來有望の才子で加之目今羽きゝの大臣の御覺え目出度人の事だから父母も恐らくは悅んで承諾したらうさ。けれども深窓に育つた處女が斯樣な事を打ち明けて、殊更父母に打明けて云ふといふことは決して出來るものでは無いから云ひそびれて居る中、彼の子爵は意有つてか無くてか漸々美代子に接近して來た。まさかに半白の老子爵が自己に向ふて如何な感情を有たうとは豫想しなかつたから美代子は子爵の愛を得て居たならば、他日吾が望みを遂げやうと

是やの才取でも仕て居やうといふ柄さ。又一人は四十五六で極實直らしく、傘も毛繻子張のぶく〳〵した奴を持ち、古足袋、後減り下駄て、暑いのに惡く大きな懷中物を手拭に包んで懷中に入れ込んだから恰も蝦蟇のやうな體をして、帽子も被らず、五年も使つたやうな骨の多い汚れ扇子で無性に風を取つて居る。此は疑ひも無く愚直誠實を取りどころにして、役に立たないがと云れながら飼殺し的に使はれて居る男と僕は鑑定した。ところで此二人が頻りに何か話を仕て居る。汽車が品川大森邊を過ぐる時分は僕も何の注意も仕無かつたが、談話に身が入つては時々若い方の男の聲が大きくなると、年老つた方の男が妙に手を振つたり扇子で抑へる擬したりして制し止めるのが不圖眼に觸れたから、何の談話を仕て居て人の聞くのを恐れるのか知らんと思ふと同時に僕の耳は何でも川崎鶴見の間邊りから自然と二人の談話に傾き出したが、遂に意外なことを聞き出したので。其事は即ち美代子一件だ。初はなか〳〵何の話か分らんであつたが、何にせよ日頃錬錬して居る探偵氣質の僕の耳だから遂にそれと疾くも悟つて毫も逃さず聞き出した。注意といふものは實に偶然の中から利益を引き出すものと聞いて居たが、眞に注意といふ奴は偉いもので、一切葉山家の秘密を僕は知り得た哩。

其八

來れと端近く坐れるもあり、破れたる團扇を忙しく使ひて歌膝せるものあり、或は身を横へて涅槃像を學び、或は卷煙草薫らしながら肘懸窓に腰打ち掛け、無作法の有る限りを此處にあらはし居たり。

剝げかゝりたる一閑張の机を脇にして團扇使ひの手をとゞめたる彌九郎は仔細らしき顏して、君等は其樣に葉山家の事件を聞きたいといふのかね、イヤ其に就ては君等が聞かうと云はいでも僕が話さうと思ふて居た事があると云ひ出せば、端近に居たる四肢の細く長くして色白の馬面せる男、頭は動かさず眼のみを動かして座中を見ながら、それ大砲の火蓋を切るぞ、と云ひさして微しく卑しむるやうな笑を浮べぬ。歌膝せし男は熱心なる彌九郎崇拜家と見えて、默つて居よ、妨ぐるな、して鴬月、君は何か聞き込んだかと水を向くるに、此挨拶を得て乘地になりたる彌九郎は、樫の實のやうなる圓き眼の下の邊を皺めて笑を含みつゝ、聞き込んだ。實に聞き込んだ。聞き込んだことが事實か何樣かは知れんが僕が聞き込んだといふとは眞の事實である。此樣いふ譯だ聞き玉へ。僕が歸鄕する時は滊車賃の足らなかつた分を君に貸して貰ふた位の事だから無論下等に乘つたと思ひ玉へ。すると僕の直ぐ傍に座を占めた二人連の乘客があつた、一人は左樣さ二十五六でもあらうかといふ才子肌の男で、小形の麥藁帽子に絹紬の蝙蝠傘、縞の單衣に心無し博多の帶をしめて居るといふ扮裝だから、何でも商店で幅が利いて少は融通も出來やうといふ身か、左も無くば京濱間で彼や

源論をなせしより遂に鶯月をもて彌九郎を呼ばぬものも無くなり、本性は全く捲はれ果てゝ、今は古くより交はらぬ人には、或は鶯月を眞の性と心得られ、郵書の面などにも鶯月彌九郎殿と書かれ、隨つて自分も鶯月彌九郎殿と認めたる郵便物を、拙者宛の信書に相違無しと云ひて受取ることあるに至り、昵近の朋友なども其事を聞きてより嘲弄半分に本姓は知りながらも特更鶯月彌九郎殿と宛名を認むるものさへあるに至りぬ。

此度世上に評判喧しき紳士葉山繁が女の美代子の事につきて、彌九郎が在京せしならば必ず不思議のことを云ひ出づべきに、口惜くも都より程遠からぬ彼の鄕里に少しく用事ありとて此の評判の起り初めしと同時に東京を立出てゝ今に歸らねば、笑ふべき例の大砲話を聞くことを得ぬことよ、と評判のいよ〳〵高まるに連れて其朋友は云ひ居りしが、葉山家についての風說は蜂の如く起り雲の如く湧きて人々の新奇の事實を知り得んと思へる心々の最も切にして頂上に達せりと覺しき時、毫も邪徑には落ちざる神聖純潔なる第一流の風說家は歸り來れり。

其七

其夕のことなり、彌九郎が下宿と定めたる家の一室には彌九郎が朋友六七名彌九郎を取り卷きて、例の罪無くして興ある談を聞かんと、丈矮き室の蒸暑きを喞ちながら、二階建なるを幸として涼風

砲、千三、百一、山伏等の綽名をつけて名を呼ばるゝこと常なり。空砲の彌九郎と云はるゝは音ばかりして人を驚かすといふ意にてなり。千三の彌九郎或は百一の彌九郎と云はるゝは千に三、百に一よりほか眞實の談はせざるといふ意にてなり。山伏とは法螺を吹くといふの義にてなり。さほど無頓着なる彌九郎は此等の綽號を與へられしを左まで恥辱とも考へず、嘗て初めて衆人稠座の中にて虚言家と罵り嘲られし時、平然として少も騒がず、君等は虚言家々々と云ふが、虚言家を何でうそつきといふか恐くは其語の由來を知るまい、憫然や知らぬか、知らずば敎へて遣はさう、うそとは即ち鳥の名である、つきとは即ち天の月である、其の鷽といふ鳥は頭が黒くて頬の邊の紅い鳥であるが、飼鳥にするから恐らく諸君の中で知つた人もあらう、飼鳥の鷽は姑く措いて、野山に居る此の鷽といふものは至て雨を悦んで隨分强雨の中でも雌雄呼び交して鳴くものである、また鷽が鳴く聲を聞けば、やれ鷽が鳴いたから雨が降らう哩と僕等の地方では爺媼などが得て云ふものだ、そこで鷽が鳴けば雨が降らうとして居る時か又は既に降つて居る時ゆゑ月は無いのに極まつて居る、それをば鷽が鳴いて月が出て居るといふたものが往時あつたので其男を人々がうそつきと云つて笑つた、これがうそつきの濫觴でうそつきは即ち虚言家といふの義となつたのである、如何だ、道理であらう、皆恐れ入り玉へ、物事は因由のあるものさ、と眞顔になりて云ひ出でし時には其座に在りし人々も少時は呆れて言葉も無かりしよしなるが、彌九郎がうそつきといへる語につきて此の語

をして長く忘るゝ能はざらしむるほど巧に風説をなし、自己も何日しか巧みなる風説家として自ら誇るに至れるまでの男なり。

其六

彌九郎は實に優れたる風説家なれども、爲にするところあつて風説を作り設け、其風説に依て他を傷つけ若くは自ら利するやうなる卑劣の行爲は且て爲せしこと無し。此故に彌九郎を知れるものは其交はる日の淺きと深きとに關らず、孰も皆彌九郎が妄誕虚說をなすの故に之を憎み或は斥くると いふこと無く、寧彌九郎を興ある男として『世上に起れる實事に關聯して直に小說を作り出だす小說家』の如くに見做し、却つて悦んで彌九郎が奇異なる腦中より製し出だす虚僞の事實を聞かんことを需むるは、眞の事實を描き出だせる新聞紙を見んことを欲するより切なる程なり。是は彌九郎が神聖純粹なる眞の風說家たるに止まりて、決して卑劣の心事を有せざる一種の德のために然ることと勿論なるべけれど、一つは世人が常に正きものよりは面白きものを好む情の勝てるが爲なるべし。

彌九郎が人々に愛せらるゝことは是の如くなれど、無邪氣なるにもせよ妄誕虚說をなすことの報としては一方ならず人々の輕侮を受け、吾が姓は有りながら嘘月といへる姓を負はせられ、其上に空

ふべからざることと勿論なり。
事實より事實の生ずることは實在の世界にての恒の事實なるが如く、風評より風評の生ずるも饒舌家の所有にかゝる世界にての恒の事實にて、日を經るに從ひ美代子は愈々小説の中の美人となりぬ。
或男は、美代子には既に自己が一身を托せんと望めるの人定まりあり、才子として世に評高き年若の紳士何某は即ち其人なり。美代子と何某との間は膠漆も啻ならずして互ひに多幸なる未來の同一の生活を夢みつゝありしに、突然子爵の申込と父の壓制とのため佳き夢を攪破られて惡き現實の中に陷入れられたりと說き、又他の或男は、美代子は我望にあらぬ夫を持たんことを悲みて、意中の人に飽までも情を立て徹さんと欲し、侍女等の目を忍んで滿潮の夜大磯の海中に身を投ぜんとしたるより流石に猶太人氣質の父も省るところあつて、今は如何にして子爵との約を變じ破らんかと苦惱せる最中なりと云ひ、又一派の人は、左にはあらず、美代子は實は既に東京の宅の自己が室內にて一夜自盡を企てたりしなり、幸にして侍女の其を認めて急に押へ制せんとせしため頸部に微傷をなしたるに止まりしが、其時遺書として美代子が認め置きしものありしを父の繁が疾くも押匿し終りたれば秘密は知るに由無し、惜きことをしたり、其書をさへ他人の見たらんには事情を悉皆知り得べきに、と然も自己が眼もて睹しごとくに云ふもあり。右の種類の人々、即ち風說を好む人々の中にて最も優れたる男あり。其は某塾にある學生にて、鷽月彌九郎といへば一度語を交へたる人

湧き起れり。

餘りに美代子と子爵との年齡の相應しからざるより、自然美代子は自己が子爵夫人となりて世に輝き生活さんよりも猶獨身にて今の儘に在らんことの望ましくて、頑固に父の命に背くまゝ、流石に利にのみ汲々したる繁も當惑しつ、吾女を病めりとこしらへて大磯に閉ぢ籠め置き、頻りに其念を飜へさしめんと百方苦慮し居るなり、と云ふ風評は多くの人に信ぜられて最も行はれぬ。

此度の婚姻に就きて、才貌双美の年若き美代子が、能くも年老いて而も美しからぬ子爵に歸くことぞやと疑ひたりし人々は、一も二もなく、右の說を聞くと齊しく、憫れなるは美代子なり然もこそあるべけれ、と思ひて事實と認めたり。老に近き子爵が花の如き美人と結婚せんといふ事を聞きて、緣を結ぶことを司る神々もしたゝかの白痴なりなんどゝ云ひ罵りて猜み羨み居たりし人々は、手を拍ちて悅び笑ひ、蝦蟇の口の中に天の鳥の肉の入らぬは當然なり、まさかに神も老耄は仕玉はざりしよと蓮葉口きゝて嘲りつゝ事實と認めたり。吾身に關らぬ他の上のことを聞くを嗜みて且つ其を傳ふることを嗜む人々は、大抵無益なる思惟を好む人ならねば他の吉凶憂き可笑しき樣々の事を我が『嘲り笑ふことの愉快』を發するの具となす人なれば、此等の人々の中にては全く美代子は子爵のために苦め居らるゝものとして認められぬ。即ち『風評』にては美代子は實に小說の中に常に見はるゝ薄命の美人の如きものとして認めらるゝに至りぬ。されど此はたゞ風說なり。未だ事實とは云

イヤ實に御苦勞でござりました、片瀨は君も御承知ありませうが左樣いふのが彼の氣質なのです、それだけ御質しになつて來て下されたので當方では十分滿足いたします、片瀨の云ふ通り心配は要らぬのでせうな、と問へば、齋田も稍沈靜りて、如何にも博士の申されたところに依つて見ますれば、今日明日回復するといふ譯にもまゐりますまいが決して御心配は要らぬのですと答へぬ。後は要無き談話に移りけるが子爵は不圖齋田に對つて、大磯に面白い事でもござりましたかと問ひぬ。問は極めて輕き問なれど子爵の聰明なるは此問にてあらはれたりと齋田は感じぬ。其は我が鷗莊を訪ひしは昨日にて大磯より歸りたるばかりの今は既燈火を先の談話中に侍女の點じたりし程の刻なれば、少からぬ時間を我は子爵の囑托の事の他に費したること明かなれば、子爵は我を大磯の海濱にて遊び居たりと推して斯く問へるなるべしと思ひたるためなり。

齋田は全く少からぬ時間を大磯に費しはせしが、無用の遊戲には費さゞりしなり。されど今其仔細を云はんは鳴呼なるべしと思ひてか、別にこれといふ事もござりませんでしたが海濱珍らしいため愉快に感じました、と是も亦何氣無く答へ置きて本業の事果てたれば頓て暇乞ふて歸りぬ。

其五

美代子が婚姻の延びたるは病氣の爲とは知れ渡りながら、世上には例の風評といふもの紛々として

て然も正當で恰も大成した病理學の書と處方學の書との萎黄病に關する點を盡く抽き出して齊整く羅列した如くなるには、今更ながら敬服するより他はござりませんでした。固より後學の小生等の一語を挿むところもござりませぬゆゑ、博士が態と謙退して、如何でござりませう、御異論もござりまするならば御腹藏無く御聞せ下されと申出でられた時には、いや中々以て毛頭異見などはござりませぬと申しました。すると博士は復嚴肅の態に還つて、然らば御自身御診察になつたも同じことゆゑ、又處方に就ても御異論無しとの事ゆゑ、特に萎黄病の患者が他人に接することを餘り好まざるを御承知あるべきに、强て御自身御覽に相成るにも及びますまい、子爵は足下を信用さるゝと同じく小生をも信用あることとなれば、萬一御疑惑もあらば御安心あるため小生が唯今申した委細を御理解に成るやう足下から御話し下されとの事でござりまする。小生は其場合にも猶强て閣下より荷ひたる任務を遂げんと云ひ爭へば爭へぬではござりませぬでしたが、閣下が御信用相成り居る片瀬博士に對して後進の小生が博士の言を疑ふやうに當りましては甚だ閣下にも葉山家にも博士にも不敬と存じましたゆゑ遂に其儘博士の言に從ふて退出致しました。

斯く云ひ終りたる時は齢若き正直氣なる齋田の面は火の燃ゆる如く紅くなりて、其舌は確に乾き居たり。

齋田が述べたる始終を聞いて子爵は別に心にも留めず例の眞卒なる調子もて、ハア左樣でしたか、

りました、即ち脈搏は頻促にして充實せず、身神の動作に由つて心機亢進を來し、疲勞し易く、顏面蒼白にして結膜淚阜は色を失し皮下脂肪膜は發育し、聲音は斷嗄し、冷感の往來するを訴へ、精神は放縱にして悲哀の狀を呈し云云といふの類を事細に御說きになつた後、猶問ひたく思はるゝ點は何程にても御尋ねなされとの事ゆゑ小生も是非無く十分に問ひ了りました。其時博士は小生に對つて、足下は先刻から小生が陳べた症狀に依つて何と考へられまするヽと實に犯すべからざる威嚴を以て小生に尋ねられました、子爵閣下、小生は恰も片瀨博士に試驗をさるゝやうな位置に立たせられました。

其　四

然し博士が症狀を述べられる間十分の注意を以て聞いて居りました故小生は答を發するに躊躇しませんで、御話しの如くならば萎黃病と考へまするヽと申しましたに博士は稍面を和らげて、勿論御說の通り、其に相違はござりませぬ、と左も汝は及第したりと宣告さるゝやうな語勢で斷然と云ひ切られた後、扨此次には治療法に就て申さば小生は患者に如是々々の處分を用ひ、如是々々の境界に在らしめ、如是々々の注意を以て如是々々の運びに至らしめ、又今後斯樣ならば斯樣致し斯樣の事の生ぜんとせば斯樣致さんと考へ居ると委細を說き明かされました。いや實に何樣も其用意の周密

小生を病室へは案内せずして片瀬博士の居らるゝ一室へ通しました。博士の講演は一二度小生も承はつたこともござりますれば此方では能く存じて居りまするが、博士は小生を御承知無いと見え、小生は美代子嬢の治療を囑托致され居る片瀬何某と事改まつて嚴格の御挨拶でござりまして折角の御慰問ではござれど別に判然致さぬ病症でもござりませねば態々患者を煩はして御診察にも及びますまい、御歸りになりましたらば子爵閣下に、御心配なさるには及びませぬ、今少時も經ますれば必ず治癒の見込でござりまする片瀬が申したと御傳へ下さいとの事でござりまする。小生も何病に限らず無益の診察を頻繁に致して患者を煩はすことの宜く無いのは承知して居りまするが、特に子爵閣下の御見出によつて出向いたことでござれば、自己の本分だけは盡して、出來得るだけ精確の復命を致したいと存じました故推返して自ら診察致したい由を申しますると博士は少し御不機嫌の態で、子爵閣下は醫學を修められた譯では無ければ醫學者的の報道を得られたところで何の得らるゝところも無い筈、足下が御歸りになつて美代子嬢の容態を申さるゝにしてからが畢竟良いとか惡いとか云はるゝよりほかは無いのでござれば、片瀬が御心配には及びませぬと申したと御傳へあればそれで宜しいではござらぬか、併し足下は醫師の本分として患者に對して御自分だけの診察斷案をなさつた後御報道なされたいとは御道理でござれば患者を煩はすまでも無く小生が詳悉し居る美代子嬢の容態を一々御話し申しませうとて、夫から一時間ばかり美代子嬢の容體を御述べにな

し玉ふに、忙がはしく立ちて敬禮する齋田の面は、昨日此の室を立出てんとせし時のやうなる元氣は無く見えぬ。敏き子爵は早くも悟りて、御苦勞でしたといふ一語を冒頭に置き、何樣です、甚うござりませぬかと、極めて眞率なる調子にて、未だ世馴れぬ若き人の口の固く緘ぢ勝なるを疾く解かせんと、疊みかけて問ひたり。

子爵は思ひ誤てり。齋田が元氣無く冴えぬ面して居たるは、美代子の容態の惡き方にて其を打明けて云はんことの胸苦しきがためにはあらで、全く自己が囑まれたる任務を果すことの成らざりしがためなりしなれば、今斯く飾り氣無く子爵に問ひかけられては愈々行き詰りて、少時は推默り居たりけるが、遂には涙を墜さんばかりの色をなしぬ。されど默して止むべきことならねば、齋田は思ひきりて、御免し下さいまし、小生は小生の任務を盡すことを得ませんでしたと義者張りたる言葉にて叫び出せしが、廣く靜なる室にて暫時人語無かりし後のことなりければ、我が思ひしよりは大きなる聲を我知らず發したるが愈々大きく耳に響き返りて我からハット驚きたり。

齋田は今や必死となりしやうにて忙しく言葉をつゞけ、姑く何卒御聞下さい、此樣な次第でござりまする。昨日大磯へ參りまして直ちに來意を申し通じますると子爵閣下よりの慰問といふ廉を以ましてか特の外の厚待を蒙りましたは宜しうござりまするが、扨肝心の小生の任務を遂げやうと存じまして、一應美代子孃の御容體を拜見して歸つて委細を子爵閣下に御話したいと申し出てまする

聞きて心安からず思ひしが、主治醫は片瀬博士なりと聞きて、彼ならば過失あらじと、安からぬ胸をもやゝ自ら安めて徐に回春の功の擧がる日を待ちたり。

然るほどに思ふが如くならざるは人の身の不調にて、二竪は大臣の力にも及ばず、今日は明日はと待ち暮せど好しといふことを聞かず、葉山の許へ人を遣り或は自も行きて尋ね訪へば好からぬ方の答をのみ聞き、昨日も今日もと空にのみ月日立てば、流石に片瀬を甲斐無しと疎み思ふにてはあらねど少しは心焦ちて、他の良醫を召し出し、大磯に行きて病を問ひ來れと命じ玉ふに、主治醫を片瀬博士なりと聞きては誰とて心待たりといふもの無し。子爵もこれには困り玉ひしが固より賢き人なれば屹と思ひつきて、今年大學を出でしばかりなる齢若き醫師を召して此事を命じ玉ふに、召されたる醫師の齋田某といふもの果して子爵の思ひし如く、我が手腕をあらはすべき時は來れりと思ふ心の勇みを既面にあらはして快く諾ひ、大磯さして直に馳せ行きぬ。

其三

明る日の夕暮、子爵は日頃こと無き折には如是し玉ふが習慣とて、廣き居室の中を彼方へ行きつ此方へ戻りつ高き天井を時々は打仰ぎて獨り嘯き居玉ひけるが、齋田醫學士の今歸りて伺候致したりと家從の云ふに、然らば直會ふべしと答へ玉ひぬ。齋田を待たせたる別室に入りて子爵は輕く會釋

なりゆきて、近き中に其式行はるべしといふものありて、當日は何月何日なりなどゝさへ眞しやかに説くものもあるに至れり。

美代子の緣づくべきことは世の噂の如く内談も既定まりありて媒妁の仁は某伯爵、何の役は誰男爵、場所は那處、結納の日は何日、式日は何日とまで盡く決まりあり、兩家の人々は其準備にのみ手をも足をも働かせ居りぬ。

好事魔多しと云ふは眞實か、婚嫁の內談定まりしより幾日もあらぬに美代子は俄然病を得て、容態甚だ好からぬ由に聞えしが頓てまた大磯の別莊に移りて靜に療養し居る由聞え、それがため萬般の事は延び〳〵になり、繁が面には憂の雲深くかゝりて常に見えたる溢るゝばかりの愛嬌も漸く蝕まれゆくやう見ゆるに至りぬと世には傳へられぬ。まこと葉山繁の面には云ふに云へざる苦惱の色あらはれて、如何にも女の病を氣遣ふ樣見え、大磯へ數次行き通ひする妻のお琴が凉しさうなる容態の中にも何處となく煩はしげなる氣色見えぬ。

お美代が主治醫は片瀨何某とて譽れ高き醫博士なるが、此人癇癖甚だ強く、我が手にかくる患者については臧否に關はらず他の醫師の容喙を毫も許さぬより、折節他の醫師等と爭ひを做出すことあれど、其度每に却つて片瀨の說の正しく方の確なること著れて名譽の高まるばかりなれば、癇癖強きも歎賞の一つとなりて世に行はるゝこと大方ならぬ人なり。されば子爵も自己が未來の妻の病と

の勢力者として世の人々の羨み噂する男なるが好きところには好きことばかり寄るものとて、彼の上にもまた幸福のあることかと人々の愈々羨み噂するは繁が女美代子が某省の大臣某子爵閣下が許に歸くといふことなり。

其二

某子爵と申すは誰しも知りたる四十三四歳の人にして大臣としては齡若にこそ渡らせ玉ふべけれ美代子が夫としては餘りに年老いて居たまへば、成ることにせよ此縁相應しからず、泥細工の鬼の傍に象牙の女雛を置きたらんやうに見ゆべし、と云ひ罵るもあり。それにしても美代子ほど憐れなるものはあるまじ、大方は胡國に歸ぎし王昭君と同じ心地して愁ひ惑ひ居るなるべしと猜するもあり。某子爵の北の方を失ひ玉ひてより久しく御傍に侍るものも無くて淋しく過し居玉ふことは眞實なれど、左らでも口の五月蠅き世に富商の女を娶りて誹謗を來さんことは智慮勝れ玉ふ子爵の爲し玉ふべしとも思はれねば此事恐らくは有るまじきなりと自己が思惟の優り顏に說くもあり。葉山繁こそ鄙しき男なれ、如何に勢利を圖るには便となるべしといへ榮え久しかるべき春の花のやうなる一人の女を能くも思ひ切りて、前途も短かるべき霜降る野邊の薄のやうな鬚髯生いたる彼の子爵には婚することぞと嘲み云ふもあり。されど美代子が某子爵に歸くといふことは日に〳〵眞實に

といへるも發明に生れて、身のこなし活潑に言語明晰と、年齢の所爲とはいへ萬般の擧動勇ましく英氣充滿たる行末多望の俊才なり。

繁が一家は主人を合せてたゞ四人のみ。其他に伴當あり、手代あり、敎育ある侍女あり、裁縫する媼ありて、小僧炊婢の末までを數ふれば人數は二十に餘るべけれど、いづれも皆奴婢にして、眞實は繁等四人が榮華の生活を飾るまでの道具に過ぎぬ男女ともいふべく、繁が一家は主人を合せてたゞ四人のみ。

住居は麹町にあり、商店は銀座にありて人も知る葉山組とは即ちそれなり。別莊は大磯にありて、某伯爵の名けられしよしなるが鷗莊といへば數寄贅澤もて聞えしものなり。

繁が家のもとより富豪ならんには緣に聯るものも多くて一家たゞ四人などいふことのあるべき譯はなけれど、人少なるも其筈にて、今から云へば噓のやうな貧しき身なりし男の如何なる事をしてか一代に身上を盛り上げ、名さへ繁と今樣に改めて鄙しかりし昔を隱し、運の向き口に馴染となりし京都の藝子を妻にしてお美代音之助二人を得たるが繁一生の大概なり。

黑闇には何のやうな事のありしか人の眼には分らず、兎に角罪なはれしことも聞かねば惡き業もせざりしなるべし。葉山繁といへば堂々たる商人にして諸官省の御用達を勤むる葉山組の長たるのみならず、某會社の重役某鐵道の發起人、彼の事にも此の企にも名の見えぬこと無しどいふほど

自縄自縛

其一

夏冬の衣服に不足無く、三度の食に好みを云ひて、思ひし女を女房にして、一女二太郎と調子よく子寶を持ちて、地面、家作、公債、會社株を數多く控へ、當世に聞えたる羽きゝの御官人様やら位高き方々やらとも戯談云ひあふほどの交際をして、別に汗かくほどの勞働も額に皺寄するほどの氣骨折せずも世を渡つて行くといへば、萬人が萬人ながら、さても〳〵羨しい身の上と珍重すべきが、こゝに葉山繁とて、誰も〳〵が望む通りにあらゆる幸福を具へたる福人ありけり。

繁は今年五十一二歳にて下豊の顔に何時も莞爾とした氣色を湛へたる丈低き肥胖男なるが、妻のお琴といへるは夫には反對に、身幹高く、すらりとして清癯に、色白く、何時も涼しさうに澄ました四十女なり。娘のお美代、これはまた兩親の佳い處を蒐めて中肉中丈の申し分無き美女、殊更歳は十九なり、身の廻りは綺羅をつくせり、花ならば今を見頃の朝櫻の露を含みて日に匂へるが如き風情、阿彌陀様よりほかには眼も觸れじと思ひ込める後生願ひの婆も振顧りて見惚るゝまでなれば、他の褒めもの、親の秘藏子、これあるばかりにても繁の幸福は莫大なるに、搗て加へて、男子の音之助

時の幻鉤にはあらざりけり。やがて悠然と立つて經机に打向ひ、經論もまた心門を敲くの鐵槌と取り出だして讀む何やらの書。嗚呼我自己を責めて天を樂しまんと、初めて獨言しつ、心を靜めて默讀に耽れど、又々夜叉に提げられ、山に逼壓せらるゝ時あるなるべし。

思ふてから抱き付くでもなく、撲り殺さんとおもふてから撲り殺さんとするでもなし。喧嘩爭論素より好し。愛着煩惱素より關はず。決鬪組打ちなに憚かるべき。一人十人百人乃至千萬億人を敵とするも味方とするも、我が勝手にて、我が勝手ならねば鬪ふべきことはあらず。四海に鴆羽を浸して五洲の人を毒害するなど、面白しとせば爲てもよし。偸盜、邪淫、兩舌、綺語、飮酒、博奕、詐欺、萬引、謀反、慈善、忠義、情死、逃亡、牢破り、なにをやつても差支へなし。嫌ひでせねば無理に爲すには及ばず、好きなことなら親孝行をなすものは斬罪に處すといふやうな法律を作つても可しと大悟徹底なし、夫より漸々に惡事を働き、傲然と戒を破り律をあなどり、少時の間は暮せしが、饑ゑの身に來る如く、悲痛の心に來ることありて、偶然らしく又自然らしき其悲痛の本を考ふれば、人は元來大法中の一物。さては誤りしと驚きて四圍を見れば、違法の因緣我が手を縛し、我足を縛し、我をして正法中の人たらしめざる無念さ悲しさ。思ひ切つて求法の犧牲に酷けれど、彼等をなして、妻も捨てたり子も捨てたり。此深山の中に惜しからぬ身をながらへ、たゞ〳〵生死の根本をたづぬれば、過去の惡業身をせめて、妻子を捨てし其時の勇猛心さへ、今は恨めしき誤りなりしと悲しむも及ばず。頃日ひとしほ心憂きことの增し來て、初めて道に進めるを知るは嬉しけれど、苦惱漸く烈しく、贖罪の功ならぬ間に我死すべき乎とおもふほどなる悲しさ。嗚呼懺悔々々。一佛庵中にありと端座合掌して寂然たること少時すれば、淸涼の風吹きて香氣室に洽く、苦惱せる

ひて、我之を呑む、我之を好むと威張つては居れど、畢竟饑餓等の爲めに食はせられ呑まされ好まされたるを知らず。料簡あつて後に饑えて來るものならば知らねど、饑が自然に腔中に火を燃せば、自然に何かゝ食ひたくなり、扨其上では芋とか蒟蒻とか米とか麥とか料簡つけて食ふなれど、根本推せば譯が分らず。自分の料簡からして饑ゑを感ずるでもなく、自分の料簡から淫慾が起るでもなし。自分の勝手で生れたでもなし。自分の勝手で死ぬでもなし。自分の勝手で齒が生え爪が伸びるでもなし。脉は誰に頼まれて動く。呼吸は誰に頼まれて出入する。父母が勝手で我を作つたか。我が勝手で父母に作られたか。怪しいぞ〳〵。日本が好きで爰處に生きて居るか。何故我は淋しいところが好きか。何故我は戀をするか。何故我は人を殺したいか。何故我は焚火が好きか。何故我は小兒が好きか。女が好きか。何故我は名譽を憎むか。何故我は奸譎な奴が嫌ひて、梟惡のものが好きか。なんて我が身を愛するか。なんで此樣な事を考ふる乎。笑ふに堪へたり、一應は理屈があつて、畢竟は無理屈。所思所行の所以は皆我之を知るを得て、所思所行の所以の因つて出づるところには我あづからず。鳥飛び魚躍り、獸走り蟲這ひ人語る、皆相同じからんに、扨は雲行き水流れ、花開落し草萠枯するも皆同じ。芭蕉耳無し、雷を聞いて開くと、諸蟲穴に蟄し、雷をまつて出づると、人間耳あり、雷を聞いて驚くと、單復の相違ばかり。動機は彼の公の手にありて我等知らず。怒らんと思ふてから怒るでもなければ、泣かんとおもふてから泣くでもないなれば、抱きつかんと

は其時生じけん。我嘗て夜天を仰ぎ、啞然として大笑して走つて青樓に投ぜしが、星辰は我に酒池肉林紅燈翠帳の美を說きしか。我嘗て夜絃歌の聲を聞き、戚然として暗涙を絞り、身を海底の貝殼となさんとせしが、絃歌は厭世の敎へを說きしか。笑ふに堪へたり、星辰の燦爛たるを見て、天の廣大を讃歎する輩。笑ふに堪へたり、絃歌の賑はしきを喜んで欣々たる輩。皆是甘きを追ふの蟻、鹹ゆきを愛するの牛と罵つて、伯夷の潔をば、何の〳〵、草を食ふを知つて血を喫するを知らざる鹿に等しと嘲り、韓信の智をも、何の〳〵、樹に跳るを解して水に浮ぶを能くせざる猿の如しと侮り、自身番の老夫は老子、俳諧好きの若旦那は莊子、あはゝ天下古今ぞよ〳〵として動めく蛆蟲、上つても下つても、糞壺の中を脫せず。笑止〳〵善惡の二すぢ繩ていけぬ奴は我なり。氣の毒ながら釋迦の說法螺、浪花節ほど妙ならず存ずるとけなし付けて、あさましき考を抱きし。人の食ふや、人は見て以て慾ありとなせど、人の饑うるや、人は見て以て無慾ともなさず。食はんと欲して後食ふか。食はざらんと欲しても食ふか。食ふに此を採り彼を捨つるも、取捨せんと欲して後取捨するか。取捨せざらんと欲するも取捨するか。笑ふに堪へたり、人間の所行は意識ある顏なれど、人の渴に逼られて水を呑むと、鳥の渴に逼られて水を呑むと、樹根の何故か水を吸ふと、いづれか異ならん。或人の酒を愛すると、或人の芋を愛すると、糺せば道理らしくて、更に理屈も糸瓜もなきと、馬の笹を愛し鯰魚の蛙を愛すると、何か異ならん。笑ふに堪へたり、誰しも料簡あり顏なるあり樣を粧

出だして灰に澆げば、不思議や松露沙中に生じ、靈芝岩頭に生ずる如く、骨成り肉成り皮成り髮成りて、白光之に加はる時、玄鈎よみがへりて恍惚たる間もなく、又四圍の山々逼り來て、火を噴き焔を吐き、玄鈎を燒き殺し、又退きて水をしたゝらし、蘇生せしむること幾度なるか分らず、玄鈎を除きては、世にまた是程の苦惱を知るべき人あるべからず。

又もや四圍の山々に押し窄められて、玄鈎悶え苦しむ折しも、天上に殷雷とゞろき渡り、轟然一聲火箭飛び下りて、玄鈎を粉碎すれば、有りし景色は夢かまぼろし、惡鬼窟舊の如く靜かにして、庵外唯竹折るゝ響きあるのみ。

嗚呼、何事ぞや玄鈎ともいはるゝものが、虛妄の現象に驚き恐れ、悶え苦しむとは。何を恐れ何に苦しむ。思へば虛妄の現象に歡び樂しみ、貪ぼり耽りし昔時の裏面を今見ること情なし。嗚呼日出づる時は西山の巓まづ明らかに、人若き時は未來の鄕に希望多し。日西山に沈むときは、東山の巓却つて明らかに、人老ゆる時は過去の鄕を能く憶起す。悲夫未來を認めし時は、脚根尙暗かりしに、過去を憶ふ今も脚下尙暗し。誤り、罪、敢て爲せし罪、罪を匿せし罪、僥倖、是非なく爲せし善、善を誇りし善、叱、皆是虛妄なり罪なり。噫昔時は惡露凝つて成りし玄鈎が身、由來を糺さば萬劫つきじ。乳房ふくみて即ち慾あり。根本を觀ば誰が慾を生ぜし。人の眼の初めて見るや、明るきものを見て之を追ふ。戀や此時起りけん。人の眼の漸く衰ふるや、明るきものを見て之を怖る。悔い

ツと驚くばかり茫然として見てあれば、夏の空の雲の峯の崩れかゝる如く、此庵を圍みて山々段々逼りきたれば、逃るに叶はず、唯怖れに怖るゝ間に、庵を去ること十間ばかりのところに山は來りぬ。巉巖絶壁突兀嵯峨たるありさま、驅登るべき便りさへなく、是は如何にと玄鉤あきれて庵の背を伺へば、背面にも同じやうなる山々逼り來りて、既七八間ほどしか隔たらず。右も左も皆同じく、四方屛風をたてまはしたるごとくなつて窄まりくれば、今は牢中の獸より頼みなく、飛天の翅なくば逃るべくもあらぬ中に、既連山は庵を去る五間ばかりになりぬ。音もせずに逼り來て、四間許りになりぬ。三間ばかりになりぬ。二間ばかりになりぬ。唯一間ばかりになりぬ。犬牙の如く差し出でたる岩角は、既軒端に觸れぬ。家は四方より押し詰められて檐庇は壞れぬ。柱は倒れぬ。みしみしと音して、有程の敷居鴨居は折れ碎けぬ。玄鉤が身は四方の岩の間にはさまりぬ。手を動かすことは難くなりぬ。足を運ぶことは到底及ばずなりぬ。首は横にむけしまゝ遂に動かし得ずなりぬ。背と腹とは、漸く苦しきほどに押付けらるゝやうなりぬ。呼吸は難くなりぬ。全く小しも身動き出來ずなりぬ。あら無慙、前後左右の岩は急に熱くなりぬ。愈々熱くなりぬ。火炎も出づべきほどあつくなりぬ。猛然として紅焔紫焔黑煙青煙四方より迸しり出だして玄鉤を燒きぬ。皮爛れ髮焦げ肉潰え骨燒えぬ。暫時に灰となりぬ。

岩は四方へ少しづゝ退りて、中間に少しの空虛をなし、又四方の岩より紅水紫水黑水青水を瀝らし

て、然も徐〱と引裂かるゝ苦しさ。喰はれては又喰はれ、割かれては又割かれ、責められては又責められ、身を逆しまに提げられては又提げられ、何時まで經てど限りなく、息つく暇さへあらばこそ。流石の玄鉤泣くに涙は早く枯れ、叫ぶに舌は既に強り、唯心のみ丁々と苦患を受くるばかりなりしが、終には心も暗くなり、次第に魂魄散り飛ぶか、朝日に細る氷柱の如く、頓ては渾身むなしくなつて、暗濛々黒漫々、天地一つに合して、雪も白からず風も吹かず、這裏の消息さらに知るものなし。

瀧の如き大雨沛然と降り來て、怪鳥の聲黒雲の中に凄く、稻妻は銀刀を虚空にひらめかして鼻頭を掠め、大地しば〱直動して、何處にか責め鼓の音しきりに烈しく、冷風蓬々と吹いて、稜角鋭き細沙舞ひ躍り、面を打ち肌を撃つとき、玄鉤忽然として何時か瞑ぎ居し眼を開けば、小庵舊のまゝにして、娘も居らず夜叉も居らず、爐火未だ全く絶えずして、窓外雪靜かに、雨も降らず稻妻もなく細沙も舞はず、天地皎潔にして怪異さらに無し。我は舊の我にて、髯一莖も損ぜず增さず、室は舊の室にして塵一片も飛ばず躍らず、結伽せしまゝ夢見しか、先刻が夢ならずして今が夢か、其を尋ぬるも要らぬことなりと、尙そのまゝ座し居つゝ、遙かに前山を見わたせば、此時雪少しやみて、玉もて削り成せるが如き峯々あざやかに見え渡り、おもはずも好い景色と感じながら、何心なしに眺むる時しも、わら奇怪や山々動き出だして、前山一躰に惡鬼窟の方に向つて押寄せ來るにぞ、あ

世界に居り申すべく、御前樣百年の後、彼の世にて再び此妾が顏を御眼にかけ、御前さまの御顏をも妾が眼の中に食ひ込ますべくと樂しみにいたして往生いたし候間、この手紙よく〱ご覽の上一遍の御廻向たのみたてまつり候なり。かしこ。

讀み了りて夜叉は幻鉤が双つの脚を左右の手に持ちめり〱と扯き裂きて血一滴殘さず食ひにけり。三苦八苦、踠いて叶はず、玄鉤は夜叉に喰ひつくされしに、不思議や其夜叉は忽ち玄鉤がありし姿となつて、尚恐ろしき藍面金睛の夜叉が手に引提られ、耳に鑽する聲烈しく、五百生髮なき女に生るゝとも、舊惡の記錄を愛するわたはざるもの、恥辱の歷史を塗抹せんとするものどもを捉り殺さんと、慥に申しのこし候云々と讀み聞かされ、ひたすら怖れ顫ふ內、めり〱と又引裂かれて、骨も臟腑も酷き牙にかゝり食ひ盡さるゝかと思へば、何日か其夜叉は又我が身にて、宙に提げられ、來世はさだめし恐ろしき極樂世界に居り申すべくと、膽にこたふる毒言を落雷の如く打掛けられ、めり〱と股より裂かれて、熱鐵より熱き舌に嘗められ、劍より鋭き齒にかけられ、食ひ終はらるゝかとおもへば、食ふたる其は夜叉ならで、我が身に違ひなく、尚十五丈の藍面夜叉に逆さまに引提げられ居れば、總身の血は逆流して、頭骨今割れ、腦漿今迸しり飛ばんとするに、彼の世にて再び此妾が顏を御眼にかけ、御前樣の御顏をも妾が眼の中に食ひ込ますべくと、樂しみにいたして往生いたし候、と髓中の熱をも奪ふべき恐しの怨恨の言葉を、獅子の吠ゆるごとく繰り返され

も、御前様を戀ひそめてより、是程までに狹き女の胸の中のいろ〳〵に揉めたるかといふことのみは、慥に御わかりに相なるべきかと滿足して、筆を收め申すべく候。あらましをつまんで申せば、唯矢張妾は戀を抱きしまゝ死に候といふばかりにござ候。娘はまことに涙の種とて、舊惡の記錄の生きて働らく恐ろしきものに候へども、舊惡の記錄ほど嬉しきものはなしと、妾是まで、唯ひとり住みの寡婦の育て方十分にはまゐらねど心だけを盡して手しほにかけ、背丈だけはのばしやり候。舊惡の記錄と申せば、妾は即ち御前樣舊惡の記錄、御前さまはまた妾の舊惡の活記錄に候。さりながら舊惡の記錄ほど嬉しきものは斷じて世に之なかるべくと存じ候譯は、前にも申せし涙を喜ばねばならぬが舊惡ある人間の至當なる落所にて今さら逃げんなどゝ卑怯なる考は妾一點も持たず候。若し舊惡の記錄を見るたびに自ら愧ぢに愧ぢ、悔みに悔みて泣かばまことに愉快なり面白しと云はねばならず候。妾は涙をよろこび自ら愧ぢ怒るところを、面白し嬉しよろこばしと感じ居り候。若し萬一にも舊惡の記錄を忌み惡むやうなるものあらば、無論妾と御前さま兩人は生死の怨敵にござ候へば、今死せんとする此間際に妾は誓つて、魔賊となるとも、五百生髮なき女に生るゝとも舊惡の記錄を愛するあたはざるもの、耻辱の歷史を塗抹せんとするものどもを捉り殺さんとたしかに申しのこし候。御前樣は素より御心高く御情深く、此愛らしき二人が中のこの娘を此後は妾に代りて能く撫育し給はんには違ひなくと信じ、安らに永く眠りにつき候。來世はさだめし恐ろしき極樂

戀ひ慕ひ候て、一念一刻も忘れ難く候。さりながら御前さまを思ふごとに、御前さまと妾との最初の體裁を思ひて涙に沈むより他はなく候。然し此涙はあだに御前樣を戀ふての涙などにはなく候。昔時下らぬ戀の故無くも成就したるところを喜び笑ひ樂しみしあさましさを口惜しく思ふての涙に候。まつたく御前さまの妾を捨て給ひし譯の分りて後は勿論の事、戀ひ慕ふ御前樣の御料簡に就き從ひ候て、自らむかしの妾を捨て候。されば今日の妾は既如何樣に御前さまの厭はれ候とも、お前さまの最愛の人なりとはみづから堅く信じ候とも間違ひにはあらざるべくと存じ候。さりとて御前樣をおたづねまをし、竹の柱の御閑居を訪ひたてまつらんとも存ぜず。どこよりどこまでも御前樣と同じ心を持ち申すべきつもりにて、御前さまは山間に獨り居玉ひ、妾は市井の間にあるとも戸を閉ぢて人に交はらず、たゞ娘相手に獨り泣きて喜び居り候。此喜びこの涙おそらくは世にて最も弱く又もつとも冷たきものに候べく、さりながら邪淫のとゞのつまり是より外に暖かきところも強きところも無かるべくと考へ候。是まで想ひ到り候へば、胸の中酸くなり、掻きむしつて五體を捨てたきやうの心地いたし、何とも申されぬ厭な氣分に相成候。されど厭な氣分になり候だけを幸福かと存じ候ほどの不幸福を作りし昔時ばかりが無念に候。若しも今猶昔時を嬉しく思ひ、又昔時のやうにあらぬ今を厭に思ひて居り候はんには、假令今猶むかしの如くあるとも、實に恐ろしき不幸福のものにて、また淺々しき戀なるべく候。はや氣力も漸々弱りて長く仔細を書きつけ難く候へど

しに。よしなき戀を仕掛け、なまじひに柔しき御言葉をいたゞきしためます〳〵心高ぶりて、御前樣と怪しき緣を結び、遂に御前樣を苦惱を知りて泣きて喜ぶ境界に落しまゐらせしは、深く戀の極髓にも背きたることゝ愧ぢ入り申候。素より苦惱を知らぬものはなく候へども、先普通の人の苦惱とは、妾が最初にいやしき戀を遂げんとしたるやうの時に遂げられぬ場合に候べく、それ等はもとより論ずるに足らざることに御座候。幸にして御前さま俗に遠き御心を持ち給ひたればこそ、一朝妾を捨て給ひて妾が魂魄を驚かしたまひたれ、若しも御前樣あのまゝに妾と共に月よ花よそれ春衣よ帷子よと、時候より出來るものに騷ぎ、娘の髮かたちなんどに彼好し是醜しなど云ふて暮されたらんには、今も猶苦惱を知つて悅ぶほどの境界にも到り得ざるべきかと考へ候。御前さま家出なされて一時は怒り狂ひ申し候。一時は世を味氣なく何のつまらぬものにも考へ候。一時は唯我が身つたなき故にきらはれしかとも考へ候。然し御遺書によりて、邪惡卑劣の戀の成就したるを厭になり給ひて、再び人には面を合はさじと隱れたまひしこと、半年ほど後にさとり申候て、大きに實は又深き戀に沈み申候。戀といふものゝ、形は變ぜぬものか變ずるものか、多分は芋虫の飛ぶ蟲となるごとく、戀は募りて必ず人の身を愛せざる樣になるかと自分ながらあきれ候。此四五年はまつたく御前樣の何になり給ふとも鬭はず、御前樣は一本の卒塔婆となり給ふとも驚かざるほどの戀に進み候。全く正直に申し候へば、今猶お前さまを戀ひ候のみならず、舊より一層深く強く御前さまを

分らねども、學問せずば苦惱を知らず、詰り學問をなすは苦惱を知るの初めにて、苦惱をさとるときは最早抜きとれぬ苦惱の種を作り居るが人間界の常なれば、畢竟は苦惱は學問の中より來るにて、抜苦與樂と人の說き給ひ、天國は近づけりと人の子の說き給ひしも、皆いつはりなり、彼の人たちの說き給へるは、皆人間に苦惱を悟らするよりほかの價値はなく、或男が我は道理の正しきことを敎ふる書を讀むとは厭なり、其書を讀むとも、其功德によりて我がせし罪の消え、我が有てる苦しみの薄らぐといふことは極めておぼつかなく、却て罪とはおもはざりしことまでを罪と悟り、苦しみとはおもはざりしことの苦しくおもはるゝやうなり行くばかりにて、將來に善を積むことは、書を讀みて善を知りたる曉にも覺束なく、過去の中に苦惱と罪とを見いだすばかりなれば、敎への書を讀むは厭なり、また讀書は人間第一の馬鹿なことなりと云ひしも、一理あるやうの非理にて、苦惱を知りて泣くよりほかには、人間の上品なる愉快はすくなく、尚一等ぬけいでゝ後に善に進むの大愉快はあるべきかと記されたるより、大きに考へをすゝめ申し候。何事ぞや十餘年前の御前さまと妾との間のことは。實は妾の罪深く、お前さまを墮落させ申したるを最初は嬉しとおもひ候ひし。まことに戀の成就ほど嬉しきとはなしとおぼえ居り候ひしも、皆虛僞にて候ひし。御前さまと共棲して暫時くらしたる月日は、すべて笑ふことを愉快と心得たる間の果敢なき戯れにて候ひし。寺院に人となり給ひて、妾さへ無くば天晴御前さまは御修行のおかつき直ちに善に進み得給ふべきなり

まゝ持ちて冥土へまゐらんこと、一つは恐しく一つは口惜しく候まゝ、見榮も飾りも一切すてゝ、此世になしたる事のこらず書きしるすは力及ばねど、今ほとんど奈落に沈まんとする時にも忘れがたきことは、殘さず書き殘しまをし候。恐らくは此手紙お前樣の眼中に眞珠を生ぜしめず、お前樣の眼中に礫を納るゝやうなものに候かも計られず候へども、御前樣を殊更に惱ましたてまつらんとて、臨終に近き床の中にて顫ふ筆をとり、苦しき耻をしるすには候はず。わが生の子にさへかくしてこの文を綴る妾が苦心のほど御さつしくだされ、御心しづめられて能々御らんになりたく候。扨申すまでもなくすべて良きことには候はず、皆たゞ無慚のことに候。何も古きことと云ひいだして涙をこぼすを賢しとは誰もせぬことに候へども、涙はまことに賢からぬ所行よりいづるばかりのものにあらず候。つまりはお前樣とわたくしの間に湧き候涙は、賢からぬ所行より出たる涙にはあらで、賢き所行より出たる涙に候べく、泣くことを今さら面白しと申すには候はねど泣くことよりほか最後の今まで御前樣御隱居の後は樂しみなく候。最初は實に御怨みもいたし、御跡をも慕ひまゐらんかとも存じ候ひしが、泣くことの樂しきを知り候てよりは、却て御前さまの居られぬも妙と存じ申候。是は幸福といふものか不幸福といふものか、自分ながらわからず候へども、まづはどちらにても無きことは、丁度樂しき時笑ふ人の笑ふときは何も知らぬとおなじき歟と考へ候。むかし山に隱れ給はんとて御書きおきなされ候うちにも、學問をするは心の苦しみをまぬかれんためか何か確と

様は不作法な事不行儀の事は毛蟲より御嫌ひとは、常々母様から聞いて存じて居りますれば、妾の願ひさへ許して下されば、かならず行儀よくおとなしくします、そして母様に教はつて大きな人形の衣物縫ふことをおぼえて居りますれば、此召して居らつしやる御衣物の綻びぐらゐ縫ひませうに、どうか母様に悪い事のあつたにしろ許して、妾に好う大きうなつたと位な御言葉はかけてくだされ、よう父様、父様、答へし給はぬは妾を無作法ぢやとて御怒りになつて居りまするのか、これほど申すに何とも返辭したまはぬは如何なる御心か、わたくしの聲が御耳に入りませぬかと、口説きたては身を投げかけつゝ、必死の勢にて、有らん限りの力をつくし、大風凛々雪漫々たる中にて、涙まじりに説けども説けども、默。娘は心づきて懐中深くより母の手紙をひきいだし、父様これを御覧ぜよと、眼前につきつくれども取らんともせず。默。ひらいて讀んで下されと、手に載すれども指も動かさず。默。いよ〳〵娘は堪へかねて、其手紙の封押切り、讀みて父にきかせんとする途端に、大地浪の如くうねり動きて、さしも金輪際より生抜きたる大樹のやうなりし幻鉤、娘もろとも八九間外に投いだされて、悪鬼窟と名づけたる一庵粉になつて飛び散り、地下より忽然と藍面金眼の夜叉身の丈十五丈ばかりなるがあらはれ、幻鉤を片手に攫みて宙に提げ、娘が持ちたる手紙を奪ひとつて、六千の獅子一時に叫ぶか如き大音聲にて讀み上げける。

最期に臨みて一筆しめし申し候。最早此世も今日か明日かとおぼえ候に、此妾が腹中の毒物をこの

こそ居給へ、紛れもない妾の父上、妾の顔ごらんになつても紛れない子と御わかりになる筈、妾の二歳の時母様をも妾をも御すてになつて、此様な恐ろしい山の中に隠れ給ひ、何をなさるゝつもりか、母様にも妾にも音信さへゆるし給はず、母様は妾がおぼえてからも折にふれては泣き出し給ふて御噂ばかり、今年の秋はかなくこの世を去り給ふときの御遺言に、父様を尋ねて是をあげよと渡し給ひし一通の御手紙は、今も内ぶところに緊乎もつて居りまするに、それを見給はゞ父上もかならず汝をばいとしがりて下さるならんと言はれし母様のことばを的にし、さま〴〵の憂き辛き眼をして、地圖でのみ見た遠江國に足を踏み込み、犬間と尋ね〳〵、金谷の宿からは恐ろしいところばかり、地藏峠の横を過ぎ、石風呂、久能脇、上長尾、大井川邊の岨道づたひに高根宇山の山間恐く、馬の背、風不入、朝日岳、人に一日逢はぬほどの奥山道をたどり〳〵て漸く大無間山、犬間の里の人の親切に敎へはして呉れしものゝ、蔦蔓力にして唯一人路なき山に惱みあるきし妾の心の内を、父様、父様少しは汲み分けて下され、母さまには此秋おわかれ申して、誰便りにするものもない、妾は世界に唯一人、影を相手に一生心細く送るのか、どのやうな惡い事が母様にありましたか知らねど、父様どうか堪忍してあげて下され、まことに和しい、能く妾を可愛がつて下された好い母様でございましたに、然も今は彼の世に往つて居らるゝものを、どうか許してあげて下され、そして妾を父様の子にして御傍に居らるゝやうして下され、穩和しくもします行儀も好くします、父

つて、居士の勤行終るを待たんと雪中に突立てば、襟とも云はず袖とも云はず、灰の如き粉雪飛び入りて、終に五躰も稍冷わたり、堪へず地上に伏し倒るれば、あはれ大地に委する黒髪、簪の花の飾りなきどころか、無情の六つの花に埋られ、無慚々々、淡紅の頬の色あせて、瑠璃の眼兒は雪中に葬むられ、丹花の唇は冥土の使者に吸はるゝか、いたづらに青くなり行くばかり、胸に吹込み腋に吹きこみし雪、半は水となりて温柔の肌を用捨なく冷す酷さ。あはや死なんとして一念尚死し得ず。あゝ今死ぬる身か、正しく逢ひは逢ふて居ながら、唯一言我が兒かと父上に云はれもせずに．又彼の世へ行ッて又母さまとわだに父樣の御噂ばかりすることか、と一聲烈しく歎ずる時ふたたび暴風いづれのところよりか起り、天地ゆら／＼と震動なし、惡鬼窟の屋根は空にあがりて木葉の如く、風にとられて形もなく、紛々たる雪卍字に舞ひ巴に狂つて、幻鉤が耳を撲ち面を擲れど身動もせず。此ありさまに唯驚きに驚きたる娘は、思はず知らず立寄つて我が手に持ちし小さき笠をさしかざして、父が頭上をわづかに掩ふも辛し、風の纔に休みし間だけ、また奔騰して吹き來る風に脆くも倒されて、父が身躰によりかゝれど、幻鉤さらに眉も動かさず。娘はいよ／＼堪へられず、父が頸に我が手からみて、我が顏父が顏に推つけつ、何事ぞ父上、何の悟りをひらかれんとて人にはわらぬやうの心を持ち給ふぞ、我が惡かりし故と母樣は常に喞ち給ひしが妾に其譯はわからず、日比から母樣が、父樣見たくばせめては鏡に向つて見よと妾に云ひ給ひしが、御目にかゝれば痩せて

答へのなきは如何に酷き人の心ぞや。是非に逢ひたき要ありて心も弱き女の身の、唯ひとり此處まで尋ね來しものを門より歸れといふ御心か、あまりにそれは御情なしと打ち喞つ折しもあれ、猛風一陣鯨鯢の吼ゆるがごとく鳴りわたり、天外より吹き下しきたりて、素より脆き片折戸を一扇り扇つて、物の見事に心よく吹き倒す途端に、娘も小庵の構への內に吹き入れられ、よろ〳〵として二足三足あゆみつゝ、漸々其處に踏みとゞまり、顏をもたげて、と見れば、寂寞として巖のごとく結跏せる幻鉤居士、髮は蓬の野分に逢へるより亂れ、肉瘦せて顴骨高くあらはれ、眼は什麽を見るか半ひらきて睛子うごかず、髯ばう〳〵と恐ろしく伸びたり。小娘は庭前に立ち、しとやかに禮して、御許もなく門內に入りしは風の爲せたることゝは言へ、わたくしの所業禮儀知らぬ奴と御叱りあつてどうか御ゆるし下され、と言へど、默。御答へなきは御怒りなされしか、どうか是非に許して下されて、そして汝は何物と一言かけて下されと言へど、猶默然として眼さへ吳れず。是はあまりに御情なし、無言の行とやらなさるゝか知らねど、一言ぐらゐ言葉をかけ給ふても罪にはなるまじ。私を誰とかおぼしめす、と近よりて椽に上らんとしてまた止まり、禮儀知らぬ兒と思はれんを流石女氣に厭ひてや、恐る〳〵端坐せる幻鉤の顏さしのぞきて、何かは知らず落淚してまた雪深き庭前に立つ。天はもとより情あらんや、風いよ〳〵荒れ雪ます〳〵渦まき降つて、咫尺も辨ぜぬほどの大吹雪となれば、屢々寒に堪へずして娘は家の內に入らんとせしが、今は是非なければ齒をくひしば

猶此方は默。御留守にはあらずと里人より詳しく聞きて此方までまゐりしもの、どうか一寸此門をお明けなされて、と又敲く。猶默。はる〲まゐりしもの、どうか鳥渡此處あけて下され。默。戸外に立てるは何者か。あら無慙、年は僅に十三四の女の子、從者もなければ同伴もなし、衣服いやしからず器量上びて、かゝる田舍には相應しからぬ物ごし恰好、どうしても都の風に軟かく吹かれて育ちし纖弱なもの。それに情なくも如何なる仔細ありてか、羽二重の足袋穿かしてやりたき小さな足に草鞋をはきしめて、小褄しどけなく取り、唐人髷にかけし角絞りを荒き風にとられかゝるも厭ふ間なく、今脱ぎし笠片手に持ちて形ばかりにしつらひある扉によりつゝ、雪より白く早蕨よりやはらかゝるべき片手をあげて、此門をお明けなされてと敲く。此片手の音聲きかぬか聞えぬか、相もかはらず庵中に音なし答へなし。折から風はます〲狂ひ吹きて萬木の梢を鳴らし、吹きたつる雪、吹き下ろす雪、天地朦朧と只白みに白む景色おそろしく、衣裳吹きひるがへされて、痛ましや小娘は寒さに堪へず其處に倒れんとしつ、又起上りて氣を勵まし、敲けど更に答へなし。はるばる尋ねて幾千の辛苦を漸くしのぎ、此處まで參りし私に酷う歸れとて門は明け給はぬか、答へは仕給はぬか、此門あけて、と又たゝく。風はます〲狂ひ荒れ、寒さはいよ〲骨に浸みて、心は焦躁つ小娘は、風と意に身をもまれて絶入るばかり、自然暴風につれ狂ひ降りの雪につれ、心も漸く狂ふに近く、今は聲も枯々になりて冬の鈴むし音をふりたてかね、明けてとばかり音なへど、更に

興ぜし無念さ心外さ、覺めて後默〳〵の裡に徹骨の寒さをおぼえて、殘燈の光りは燐火のごとく見え、壁洩る風は氷の劍のやうにつめたかりし。嗚呼、おもふまじおもふまじ、既に思量にわたらば是れ散亂心、このやうな事を胸臆よりさぐり出してそもなにかせんと、自己念頭を自ら叱りしりぞけて、姿は其まゝの枯木、兀然と端坐せしまゝ一寸も動かねど、流石に眉尻は動いてぎり〳〵とあがりつ、寸蛇吞牛の氣込恐ろしく、磐石頭上に落つるとも鼻孔の一氣だも亂さじといふありさま、坐か、行か、死か、生か、幻鉤天地の中に坐せるか、天地幻鉤の肚裏に眠れるか、戸外に雪ふるか雪ふらぬか、風吹くか風吹かぬか、日も月も年も今ありや無しや、自他彼我今存するか存せざるか、三魂七魄雲外に碎け去りしか、三百の骨曠野に散じ了りしか、心肝の血は氷りしか湧きしか、未生以前の幻鉤此處に坐せるか、それとも幻鉤居士と里人に尊みうやまはれし人は此室中に居るか居らぬか、石か、枯木か、銅像か、燃燈以前の塊物か、妖物か、魔物か、魔佛同被の眠りか、何が何やら少しも分らぬ境界、黑きや白きや、明るきか暗きか、唯庵前は雪、庵後も雪、爐中の火は漸く瘦せ行くのみ。

庵室の扉ほと〳〵と打たゝいて聲やさしく、音問ふものあり。此方は默。少時して又ほと〳〵と敲く音。此方は默。少時して又ほと〳〵とたゝく音。猶此方は默。惡鬼窟とたづねてまゐりしもの、此處あけて、と復敲く。猶默。幻鉤さまと尋ねて漸く是まてまゐりしもの、此處あけて、と又敲く。

封じ文

雪ふれば都會大路にも人の往來すくなくなりて、下駄の音馬車の響など例日の如くはつゞかず、夕暮つぐる鐘の音あはれに油賣りの呼び聲さへ悲しく聞き做さるれば、まして片里のさびしさはひとしほ。玉屑紛々と下りて枯樹に花をつくる景色はさることながら、吹きすさぶ風は空林に號びて餘威おそろしく、杉の板戸につらくあたり軒端の垂氷をもぐなど、山家の心細きありさまは友こそなけれとむかしの歌によまれし通り、一條の樵徑むごく埋もれて平素より遠き世間に縁まつたく絶え、寂々又寞々、たゞ採り置きし柴折り燒きて僅に寒をしのぐ果敢なさ。馴れたればとて、十餘年前は櫻炭かをる一室に酒甘く飲みながら、水晶をあざむく玻璃の障子越しに見わたす川面、霏々と降り漾々と舞ふ風情を、誰がむしッて飛ばす鷺の簑毛ぞなんど見たてゝ評しつ眺めしものが、今は雪を賞するに、微温湯一杯、底黑みたる鑵子一つ、足のよろけし机一脚の此佗住居、古人こゝろざしを抱いて牛頭に坐せし時の眞似の能くも成るものよ。此大無間の山陰にかすかなる草葺きの此小菴引きむすびしより早四五千日、欲すべく泥みやすきものを見ざれば、自然と心は六塵の巷に走せず意は四慾の辻に迷はねども、口惜しや昨夜の夢は猶墮落の過去にかへりて、あり〳〵と穢らはしき歡樂をむさぼり、まさしく我が罪の活記錄に見えて語り睦み、疎ましくも淺ましくも欣々として笑ひ

血を潮して髪の毛逆立ち、足元定まらず、昨日より食斷え心疲れたる身の命かけての男哮び、流石に小供ながら丈夫なりけり。

谷中の閑靜を愛して住へる學者あり。齡は五十の上に出で、利慾の念薄く道德高く、當世に仰がれ玉ひし御方なるが、折ふし往來に向きたる二階の窓より何心も無く外面を眺め居られけるが、乞食にはあらぬぞ我を使へと呼ぶものあるを不思議に感じて呼び込ませ玉ひければ鐵造跳り込んで、爲すべき事は何でござる、といふ。其顏付をつく／＼見玉ひ、其譯話せとありければ、鐵造隱すことなく正直に仔細を申しけるに、學者これを聞きて大きに褒め玉ひ、今の齡にて汝の勞働くべき事は學問なり、これを能く讀みて行末大きに働くべしと自助論といへるを賜はり、勞働の報ひは汝自ら天の無盡藏より受くべし、是は僅に今の急を救へ、と金幾何を添へて下されける。

鐵造涙に咽びて家に歸りけるが、其年快よく暮れて、初日の出麗はしく、今年十三、天晴一匹の男の列に入りけるとぞ。めでたし／＼。

り大聲にて、馬鹿野郎、意氣地なし、働かずに錢取る氣か、と罵る事雷の如く聞こえけり。二三町夢路を駈けてホット息つき、思へば〳〵遺恨骨に透る仕誼、されど村井の云ふ所道理に背きしにあらず、働かずに錢取る氣かと辱しめられては一言の云譯あらず、我とて如何にもして働かんとは思へど働くべき業の無きに苦しみ居るなり、宜しッ、我錢を得んとせしは鈍ましかりし、初より順を正して見れば親を餓ゑさせじと思ふより錢を得んと思ひ、錢を得んと思ふより惠投を得んと思ひしなり、これが恥辱を受けし基なり、錢を得んと思ふより働かんと思ひさへすれば、誰かは我を罵り得べき、我男の兒として乞食せんとせしは殘念至極、一生の誤り、宜しッ、錢の事は姑く置き、働かんとのみ勤むべし、働けば錢其中にあり、錢を得れば親を養ふ事其中にあり、勞働、勞働、と思ひ返せば猛然として勇氣手足に滿ち、乞食せんとせし時とは雲泥の違ひ、此心早く富人の如く強まりて、大道を會釋なく大歩にあるきて、天を憚からぬ聲高く、働かうよ、働かうよ、我を使へ、我を使へ、天道我を殺さずば我を使へ、我を働かせよ、乞食ではあらぬぞ、錢貰ひにはあらぬぞ、我を使ふ人はあらぬか、と半狂亂に呼び立つれば、往來の者呆れ果てゝ、あの襤褸着たる小僧は發狂なるべしと評するにぞ、鐵造聞て大に怒り、要らざる事を云ふ奴め、我が乞食せんとしたる時には狂者と呼ばず、働かんと云ふ時は發狂と呼ぶ、おのれ等が行末貧乏の冷水に漂ふ所を見て吳れん、と罵りつゝ再び聲を高めて、我を使ふ人はあらぬか、とぞ哮りける。眼は何時しか

合力受るは耻の頂上、男の兒に出來た業ならず、然し外に一文なりと得る道を知らず、けれども乞食は飽まで厭なり、厭でも病人の口乾すは尙更耐忍し難し、と其夜は樣々迷ひに迷ひて、其曉る頃思ひ切つて遂に、一日の耻を忍び、行末恩を報ずる時もあらん決して貰ひきりとはせじ、今の所だけの乞食となるべし、と思ひ定めける。

素より乞食の樣に汚穢き衣なれば、其儘天王寺には來りたれど、流石に心を極めても心臆し、大きなる碑の後に隱れ居て面を出し得ず。往來の人に心をつけて竊に伺へば、黑き縮緬の羽織着て供の男に花持せ通る女あり。やさしさうなる樣子なるに、駈出して仁慈をと思ひしが、乞ふといふ勢なく躊躇ふ間に行過ぎたり。珠數を片手に持ち、火を付けたる線香一把を片手に持ち、杖もつかず通る婆あり。此に泣き付かんと氣を注れば、何か口の內にてブツ〳〵云ひながら行く其顏付、小言でも云ひさうなれば其儘止まりぬ。次に來りしは洋服の官員風、山高帽子立派に髯うるはしかりしが、此には恐れて近寄り難く、唐棧の羽織二子の着物着たる男の來たるに、今度こそはと飛び出して傍まで行きしが、我顏ヂロリと見られて、思はず逃出し冷汗かきける。少時して木綿無地の道行着たる老人の通るに、愈々と心定めて、淚ながら御惠み下されと慄え聲に云ひ切る途端、鐵造ヤイと背面より呼ばれ、ギヨツトしてふり向けば、此春まで共に机ならべし學校友達の村井といふ子供、蔑視やうに笑をふくみて、鐵造おのれは乞食をするのか、と問ふ。滿面火となつて逃げ走れば背後よ

粥に代へ今朝の藥劑に代へて、綿の下りし舊布子着たるだけとなり、愈々明日よりは病人の喉潤ほす方便も絶ゆべき始末、憫みて物呉るゝ人もなく、考えて錢取らん手段も付かず、他家の子は幾日寢て後は歌がるた福引面白き遊興ある日ぞと樂しみながら夢に入るに、鐵造は唯一人荒壁を洩る風冷かなる破屋に眞夜中過るまで物思ひして、幼稚心に浮世の悲しさを知り初め、ひだるき腹かゝへて犬の遠吠を寢られぬ耳に佗しく聞きぬ。

明日は如何して父の口を濡さん、米屋味噌醤油屋には借われば、無慈悲の商人、譯を話しても先の勘定濟さぬ内は一合も渡さずと此間も云ひしが、さりとて今は紙屑屋に賣るべき物さへ無ければ一文の錢得るに法なし。よしや我は齒を切りて饑を忍ぶとも親人に、然も病衰へ玉ひし親人に、饑を忍ばせ申す事忍び難し。噫五厘銅貨一つなりとも有れかし、食麵包の屑買て御不足か知らぬが參らすべきに、唯僅の願ひの叶はぬ口惜さ、殘念なれど其程の事も出來ぬか、エ、五厘欲しや、五厘欲しや、學校の朋友の中には二錢三錢空に費ふ者もありしが、我は今五厘に泣くとは知るまじ、五厘呉れなば明日の命を續ぐ者を、と唯五厘の無きを恨む憫然さ。谷中は一躰貧き者多けれど我程不幸な者もあらじ、唯の五厘呉れる人あらば、命の親、大地に手をつきても拜むべきに、と歎ぜし鐵藏不圖思ひ付きしは、天王寺墓地の邊に袖乞する者ども墓參りする人達の仁慈に露の命續ぎ止むる事なり。我も是非なし、明日は乞食せんか、イヤ〱如何に差逼ればとて見ず知らずの緣もなき人に

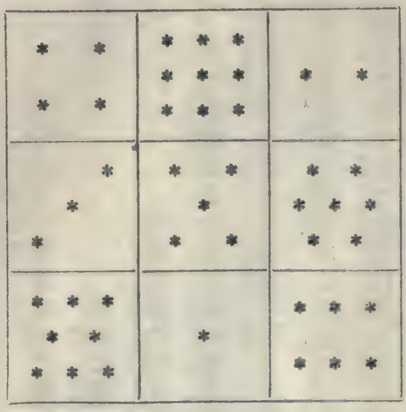
鐵三鍛

男の兒は赤裸百貫の生金
浮世の火に錬られ槌に打たれ
礪砥に磨かれて其後は
天晴の業物鋩光天を衝く寶劒一口

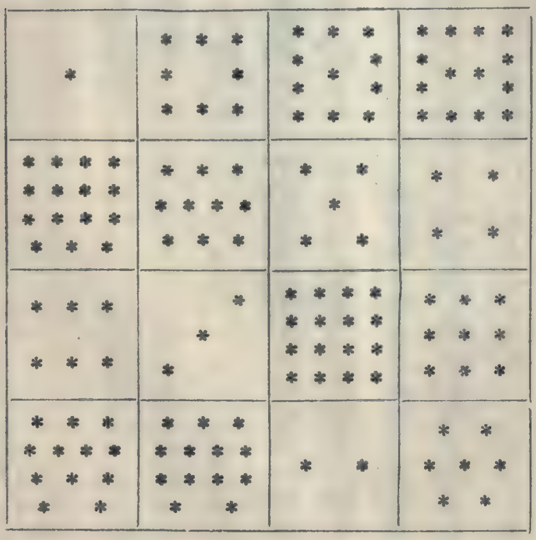
歳の市賑やかに賣聲勇ましく、人々正月を迎ふる支度とて、手桶俎板庖丁なんどのまだ用ゐらるゝをも關はず故を捨て新しき品々の清きを好み買ふて行くさへあるに、貧家のしがなさは見るも悲しき椽の破れたる火鉢に消炭わづか起し、眞黒になりし欠口の土瓶に藥を煎じながら、近所の餅搗く音を空に聞きける少年の心の内傷まし。父は日雇人足、此間まで毎日毎日肩に拐棒を放さず土擔ぎして、足らぬながら暮し居けるが、或日の湯上りに、勞働疲れの餘り心よく寐て、我知らず夜具踏み退け、風邪引きしより枕上らず、一日休めば一日の食に支ゆる苦しさに逐はれ、忰の鐵藏、十二の此春までは學校にも通ひ居しが、今は小供仲間の譏りをも忘れて、親に代つて勞働かんと云ひ出てしが、腰骨まだ定まらず膂力足らねば三日かゝつて大人の一日だけの仕事も出來じと親方に頭から呵られ、それも叶はず。然も師走の空寒く親子餓死を待ばかりのあり樣、數少なき雜具も昨夕の

り。宜しく前後を揣摩して其心中を探るも一興なるべし。兎にも角にも取るに足らざる一小冊子のいとも果敢なき物語なれども色をも香をも知る人ぞ知る、と云ふも嗚滸なり、と云ふも烏滸なり。

天盤



地盤



如き大宴會一週間許り打續きて後、ぶんせいむは又ぞろ自れの離別の宴を開きて、自己は僅に一千萬圓をとりて其餘は殘らずるびなに與へ、自己は既に人世の幸福の極點に達したれば足れり、人世の不幸の極點に達したる人々を訪ひ尋ねて其不幸を愈やし救はんとて吟蜩子を隨へ世界漫遊に出るむねを演説して終に二人は發しぬ。是より後の珍談は冊を改めて說かん。ゑんじあとるびなは互に思ひ思ふ中めでたく婚姻了りければ、ろッしぶりゅんの言の如く、男女婚禮したる時は彼等の歷史は始まり、小說は止む。

噫人の世は誠こそ尊けれ。亢龍は吟蜩子を强ひて却つて吟蜩子の圖る所となり、唐狛は亢龍に諛ひて終には亢龍に捨てらる。ぶんせいむの豪氣なるは天下を弄べども殆んど亢龍に欺かれぬ。唯しんじあは守る所ありてぶんせいむの餌にかゝりて笑はれず、獅子死肉を啖はずして獸の王たるをあらはす如し。るびなも見る所高ければぶんせいむの暴にこらへて屈せず、薔薇虐風に揉まれて香の勝りたるを示したりとや云はん。ぶんせいむはもとより黃金のしんじあ、白銀のるびなを試みるに猛火を以てしたるにすぎずといへども子を愛する心深かりけんよりかくはしたらんか。しんぶる夫婦じやくそん夫婦彭知縣等も嬉しき人々なり。たゞらッくは雲の如く烟の如く、またこれ一畸人なりと評する時、或人曰くぶんせいむは如何と、答へて曰く全篇毫もぶんせいむの心中を直寫せず。予も實は伺ふとあたはず。唯だ其後しんぶるが獨り言にしんぶるはなる程怜悧だとつぶやきしよしな

目覺しき限りなり。よき時分を圖りてぶんせいむは來賓一同に打向ひ、滿堂の貴女紳士にぶんせいむ一家の長として其光臨の榮を惜ませられざりしを丁寧に謝したる後ち、

ぶん「儲予が茲に一寸大滑稽のお話と大眞面目の御話をしませう。滑稽とは即ち余が奇異なる廣告を世間になしたりし事にて大眞面目といふも矢張其件で御座ります。滑稽とは予が老後の好朋友を得んと欲するので、眞面目とは予が少女の良配偶を得んと欲したのです。然るにぶんせいむの幸福なるは一方に於ては身を重じて道に徇へ、情を制して矩を踰えざる紳士を眞の試驗外に試驗に認め得て、少女の貞配偶を得たるのみならず、他の一方に於ては才に任せて樂みを取り、氣を抑へて巧に趣きをなすの奇人を實に計畫なきの計畫に知り得たるなり。然のみならず余は是を推しひろめて從來尊んずるにたらずとせし宗敎の價値を知り、また解する事なかりし風流の趣意を知るの幸福を得たり。滿堂の紳士淑女よ。願はくば此老人の滑稽の點に於て十分笑ひ、眞面目の點に於て充分悅ばれんことを望む。」

と傍若無人に云ひ放てば人々始めて廣告の眞意を悟りて拍手の音笑ひさゞめく聲流石は大量無雙の主人哉と嘆ずる聲々鳴りもやまず。じやくそん夫婦しんぶる夫婦吟蜩子（法庭の一件をしんぶるより電報せしかばぶんせいむは大笑して直に夫婦と共に吟蜩子をも歸らしめしなり）はしんじあ夫婦をたすけて頻りと客をもてなし、山珍海腊の數を盡して饗應の盛んなること言語に斷えたり。是の

千兩の金と方陣秘說を懷にさし入れて飄然として去りければ已むことを得ず金を得たるをせめても
の思ひやりにして怏々と家に歸りしが其後方陣秘說をつく〴〵讀みて、全く已れの學識淺薄にして
無名翁の地盤の奇に眩せられしを愧ぢ悟りて溫順の人となり、父の官を繼ぎて榮えしとなり。一念の
あやまりさても恐ろしき哉。それにしても此知縣能く情を察し、理を辨じけるぞ流石に中華の人な
りける。

第二十一回　あら尊青若葉葉の日の光り

さき草の新殿に宜も富けり德も寶も。

年も改まりて陽氣づきし頃、大統領始め朝野の名士數人を證人として道德高き大僧正何某其式を司
り、しんじあとるびなとの婚禮はすみぬ。悅びには日の立つこと早く、「二人新婚の通知書」を洽く諸
方へ送りし跡に引續きて祝賀の大饗宴はぜねらす村に開かれたり。來客のいと多く、接待のいと濃
なるは云ふもさらなり、にうよるくの母家より此家に續く鐵道の汽車止む間なく往來して汽笛の聲
の絕えざるは數萬の職工等がぶんせいむ家萬歲と叫ぶ聲に和し、雄壯の音樂天に響きて起り、美くし
き花火は星を凌ぎて眩ゆし。電信脚夫郵便脚夫は諸方の紳士支店等よりの祝詞をもち來り、洋々と
して瑞氣祥雲屋上に立ちしは、誠にこれ世界に鳴り渡りたる米國の大長者ぶんせいむ家の賀宴と

と唐狛を指させば、唐狛は顔をそむくるを窺き込み、
新「唐狛と呼べる從者なり。結婚の申込をせしは事實なり。而して吟蜩は事既に成らんとするに當りて逃亡せしよしは昨日主人よりの電報にて知れり。小生はぶんせいむ家の家宰にして一切の事都て知りたれば小生の云ふ所少しも過誤なし。」
と證據立つれば知縣は此時案を拍つて唐狛亢龍を叱り退け、吟蜩しんぷるをも引下らせしが、暫時して復び一同を呼び出し、屬官判文を讀みあぐ。

文世武女を愛して夫を擇ぶは乃ち其常理にして、田亢龍人を借りて己を飾るは實に異聞に出づ。彼は曠達にして博く佳婿を求むるに何ぞ知らん羊を以て牛にかふるを。此は愚慢にして強て論訟をなすも終に鹿を指して馬と欺き難し。吟蜩は風流溫藉、金を返して恩を報じ書を述べて迷を醒さんとす。能く進退兩難の間に居りて此に誠にして彼に欺かず。問ふべきの罪なく、賞すべきの心あり。亢龍既に騙局を前に設くべきの道なければ、決して暴害を後に加ふべきの故なし。眞に笑ふ可く、鄙むべけれども、事都べて成らざるをもつて姑らく罪を宥して費やす所の聘儀旅用を吟蜩に與へたる者とせしめ、以て街頭亂擊の寃を贖ふべし。唐狛は利を啗ひ勢ひに諛ひ、往來煽誘して殆んど釁端を啓くを以て三十棒を喫せしめて放つ。示儆。

と是に於て亢龍はいふべき詞もなく、憤然と怒り、忙然と呆れて立出る跡より吟蜩子は駈け來り三

吟「貴官の仰せ其理あれども元來小生孤身にして憑るところなく亢龍は顯門の子にして當時是に背かば實に小生の危險測るべからざる者あり、且小生も數月寄食の恩もあれば意を枉げて是に從ひし者にして、小生に彼の暗愚剛慢なるを憫むの心あれども少も是を恨むの意なし。故に今回歸りしも全く彼を諭して自ら分外の慾を斷たしめ、又た小生との恩讐を都べて一掃せん爲なり。」

彭「然らば其の方法はありや。」

吟「某し豫め旅中に草せし處の一書を賣りて三千兩餘を得たる故に之れを彼に遞して寄食の恩と一切の費用に酬ひ、また彼れの妄信せし無名翁の地盤なる者を工夫理解したる故に方陣秘說といへる一篇の書を與へて過去の事を一笑に付せしめんと考へしなり。」

といへば彭令倫もうなづく所へしんぷるを呼び來りて屬吏は平伏すれば、知縣は會釋して打向ひ、

彭「足下此者を知れりや。」

と云へばしんぷるは顏見合せて、

しん「亢龍君。」

吟「あゝしんぷる君、余は亢龍と名乘りたれども實は吟蜩と云ふ者なり。」

彭「亢龍と名乘りし此者は全く足下の主人ぶんせいむ氏の息女と婚せんと申込みしや。また彼を知り給はずや。」

亢「無いであらう。」
彭「唐狛は汝と共に米國に在りたるに彼は却つて亢龍の爲に證し、而して汝は證する所なくんば汝の云ふ所甚だ怪むべし。」
吟「上官怪み給ふなかれ。上官願はくは小生の爲に米國にゆうよるく府ぶんせいむに電報を發して問給はゞ自から明了ならん。」
と云ふ折しも今朝市中を巡査に出たる一人の警吏は歸り來りて禮をなし、知縣に向つて云へるやう。
警「朝來市中の人多き所々に一箇の廣告あり。即ち米國にゆうよるく府ぶんせいむなる者の電報の命によりて當港同家の支店長ゑんぶるなる者が賞を懸けて亢龍を索るの文なり。因て一枚を剝がし持來り御覽に入れます。」と差し出すを見るより、
吟「願はくは上官其ゑんぶるを招き給はゞ小生の言自ら僞りなきを證せん。」
唐「上官彼を喚び給ふに及ばず。彼の亢龍を索むるは自から是れ別事なれば吟蜩と少しも關するとなし。」
といふ間に二三人の屬官は一人の譯官を從へて立去りぬ。
彭「吟蜩汝の需めにより今ゑんぶるを呼ぶべきが、まづ汝に質すは汝は一箇の男子なるに假令禍福をもつて脅かさるゝとも人の狗馬となつて千里に使するは人情わるまじき事にあらずや。」

て米國の富豪ぶんせいむなる者其婿を天下に求むるに當り、彼亢龍猥りに分外の望を抱きて其慾を逞うし、姻事を僥倖せんと欲すれども自ら當る能はざるを知り、且無名卜翁の胡言を妄信して小生をして其の代りとなし、ぶんせいむを詐り、亢龍の名をもつて契約を作さしめんと圖り、禍福をもつて小生を脅迫したる故、當時小生は之に從はざらんとするも、勢ひ敵し難く、且つ胸中考る所あつて假に之れに從ふの狀を示し、米國に赴けり。然るところ小生もまたぶんせいむの意に中らざるをもつて遂に空しく歸りしに、彼自ら其の非を曉らずして小生の事を誤りしを怒り、却つて誣妄の言を吐き、上官の聰明を掩はんとす。願はくば上官小生の情實を察して亢龍に喩されんことを。」

亢「上官欺かれ給ふなかれ。亢龍も一箇の男子なり。何ぞ敢て姻を求るに人を雇はん。彼免るゝ所なきまゝに無有の誣言を構へて人を陷いれんとするのみ。」

唐「眞に亢龍子の云はるゝ如く小生彼と共に米國にあり。全く此等の事に關からざるを證す。上官彼に向つて彼の云ふ所に證を求め給はゞ彼れ必らず證する所なからん。」

と口を揃へてまくり立れば、

彭「吟蜩汝の云ふ所ろ理あるに似て疑ふべき事多し、先つ其證をなし得るや。」

吟「證據と云つても……今直には。」

彭「昨日埠頭に爭ひ騷ぎしは何故なるか。往來の安寧を害するのみならず、警吏の制止を蔑しろにせしは甚だ以て奇怪なり。各其本貫姓氏を名乘りし上僞はることなく申立つるとあらば申立てよ。互に粗暴を悔て爭ふとなく、罪を謝さば別に深く咎むる所なし。唯後來を譴戒せしめて免すが如何に。」

と述べ了るをまちて亢龍急に頭をわげて

「小生は南京田仲蛆の子にして即ち田亢龍なり。元來昨日埠頭に於て毆打せしは唯だ家僮を懲らせしに過ぎざれども實は小生に代りて事を處せしむる爲に是なる唐狛を添へて彼れ吟蜩を米國に使はせし所、小生の命を果さずして中途に逃歸り、爲めに小生をして莫大の金銀を損亡せしめしにより之を懲らせしなり。願くは上官理非を見て彼を罰し給へ。」

唐「小生は即ち唐狛と申す者にて亢龍の命により吟蜩と共に米國に赴きしに吟蜩は小生の油斷を覗ひ、遁逃して終に小生をして罪を亢龍に負はしむるに至れり。願はくは小生の愚誠を察して彼の奸猾を懲し給へ。」

二人ともに僞辯を飾りて云ひ立つれば吟蜩子も今は已むことを得ず、

吟「上官小人等に欺かれ給ふなかれ。小生元より亢龍の家僕にあらず。唯一時彼の家に食客たりといへども其實彼の抑留する所となりて數月を送りしが、上官も知らるゝ如く本年夏季にわたり

へて引ずッて行け。」
吟「まア待給へ逃げはしない……逃げる位なら歸つては來ない。」
亢「何をぬかす口巧者な。」
吟「そんなに首を締めては息がつまる。あゝたまらない。」
亢「たまらないも何もあるものか。」
とわめき騷げば往來の人は忽ち黑山の如く簇がるを、押し分けかき分てあらはれし唐狛（是は一つ船にて來りしなれども、上等と下等にて船中にては知れざりしなり。）
唐「官人々々…唐狛でござります。」
亢「おゝよく來た。然し貴樣も罪があるぞ。間拔な怜悧虫め…何にしろもう此の奴をにがさぬやうにしろ。」
と云はれて唐狛もいま〳〵しきに二ッ三ッ蹴飛したり。此時丁度七八人の屬官、五六人の警吏を從へて來かゝりし新任の知縣彭令倫は喧嘩と見て取り靜めさすれど、中々に靜まらねば、忽ち下知して亢龍唐狛もろともに吟蜩子をも捕へて公廳に引かせたりける。其日は其儘に過ぎて次の朝となり、知縣公廳の廣間に着坐すれば屬官數多左右にならびて、警吏は亢龍唐狛を下手の左に、吟蜩子を右に引きすゑて皆一同に額づき終りて、

じや「偖も汝は妖物かな……豚尾の紳士ば。」
ぶん「一昨日逃亡した。」
じや「其從者は。」
ぶん「昨日跡を追て立つた。」

第二十回　つくり木の庭をいさめる時雨哉

無理では行けぬ天地の道に則る裁判の法。

鷲の翼と梟の眼をもてる無法者の亢龍は吟蜩を逐ひやりて後は頸を長くして音信を待ちける所へ心腹の唐狛より試驗首尾よきよし電報にて云ひ來りければ、最早占めたり、何日かるびなを連れ來るらんと天にも登る心地して指折り數へ喜びし所へ又もや來りし電報を見るや否や、取るものも取りあへず二人計りの家僕を從へ、香港に走り付て、何某といへる蒸汽船宿に居るとも知らず、吟蜩子はぶんせいむの家に移り三四日饗應を受けし内に胸中の計畫大分整ひしかば飄然として立出て汽車に道を急ぎ、船に搭じて香港に上陸せし所を埠頭にきよろ〳〵待構へし亢龍は見るより早く遺恨の眦つるしあげ、吟蜩まてと叫びつゝ颶のごとく駈來り、領上むづと引つかみ、

亢「恩を忘れし犬畜生め。もはや許さぬ、覺えて居ろ……それ家來ども此奴をにがすな。兩手を押

とは正當ではありませんか。人の非理の行ひを爲すを諌むるといふとは正當ではありませんか。我戀慕を成就させる爲に道理の許す所の働きをなすといふ事は正當ではありませんか。男子が女子を扶くるといふ事は正當ではありませんか。父をして不慈とならしめ、子をして不孝とならしめざるまへに之を防ぎ之を誤らしめざるは警醒會の欲せざる所でせうか……智者の過ちは常に慮りの足らざるにあらずして、慮りの過ぐるにありといふは君の事でせう……ろびな孃は自ら不孝の名を負ふとも、猶其戀を果さんとするの勇氣あるに君は人の過誤を救ふて、しかも自己の戀の誠をあらはすに足るの美事をも爲すの勇氣がありませんか。」

と年丈に論ずればつく〳〵聞居ししんじあも一つには義理にせまられ、二つには戀にせまられ、三つにはぶんせいむの非理を憎む心にせまられて終に、

しん「あゝ君のいふ所は尤だ。決心した。」

と忽ち立ち、じやくそんもろとも馬車に乘り、頻りと鞭を加へたり。早くもぜねらす村に到りて音信ふ。此方へといふ案内に付てずつと通れば、是は如何にぶんせいむにはあらずして泣くづをれたるるびななり。此方も呆れて言葉なく、彼方も驚き言葉なく、先立ものは涙にて互ひにひしと抱き付き、恍然として夢現を分たぬ處へいり來るぶんせいむ、

ぶん「二人の戀は永久なるべし。」

「るびな孃が他人と婚姻するだらうかと疑ふ念があれば既に戀慕は絶ゆる筈です。戀慕を破るものは金銀威權ではなく、唯疑ひですが、僕は少しも疑ひを持つて居ません。決してるびな孃を疑ひません。戀は信用の地にさく花です。」

「失禮をゆるし給へ。遠慮なく君の爲に忠告しますから…君は自惚半分に頻りと戀の講釋をなさるが僕が一つ反對の説を云ひませう…婦人の美しきは琥珀の如く美くしくして、麥藁の如き男子を引つけると云ふ諺があるが、丁度君の戀は其通りで、元來麥藁には琥珀を引く力はなく、君にはるびな孃を取る勇氣はないのです。婦人の戀は硝子越しの花の如く男子の戀は鐵板を貫ぬく電氣の如くなるべしと云ふ言さへあるに、るびな孃の戀は姿の見えて詞の通ぜざるやうなれども、飽までやさしく尊く…されど君の戀は物を透して働く力のある男性の者とも思へない…止め給へ〳〵。麥藁の戀はやめ給へ。」

と冷風心火を煽り立つれば、

「麥藁のやうな輕薄…鄙むべき輕薄の戀はしんじあは決してしません。」

「よろしい。其處までは君の考が正當に違ひない…君が申込まなかつたも正當です。ぶんせいむの欲望も畢竟徒勞に屬するだらうといふ君の考も正當です。人の家事に嘴を容るゝにも及ぶまいといふ君の考へも正當です。世人の嫌疑を厭ふといふ君の情も正當です。が人の困難を救ふといふ

「えゝそれから君は何と返辭をした。」

「流石の令孃も婦人だけに、せまつての考へはすこし不穩當ですから、逃げるのはおやめなさいと返辭したのです。」

「あゝそれでよろしい。」

「然し其まゝにして過しては令孃の困難も思ひやられますから昨日警醒會員の資格で僕がぶんせいむを諫めて思ひ立をやめさせやうと圖りましたが、夫れは無益で、遂にしんじあを連れて來いといふぶんせいむの一語を終りとして別れたのですが……君の言ならば耳にも入れるが僕の言葉はまるで聞かないと云ふのですから、是から君と同伴にぶんせいむの處へ行つて其壓制を拉り挫ぎ、其誤謬を悔い改めさせてやらうといふのです。」

「夫れは無益だ……行かない。」

「そんなら君は全く戀慕の念を斷絶しましたか。」

とじやくそんもおちついて問ひ反せば流石のしんじあ礑と行つまりて答にたゆたひしが、正直には憂慮なしと昔の金言今もたがはず。

「否・・戀慕の念は酒精にも解けずといふのは僕の事でせう。」

「るびな孃が他人と婚姻しても。」

「まゝまた君は何か刺擊を受けたと見える。そんなに急ぎ込まずと靜にし給へ。留守中は色々。」
「そんな禮は後にして僕と同行し給へ。」
「どこへ行くのですか。」
「そんな事を云つて居る間はない。直ぐ馬車の仕度をさせ給へ。」
「何だか少しも分らない。一體どうしたのです。」
「それだから君はいけない。君はどうも遲鈍で困る。大變です。」
「大變とは。」
「るびな令孃が婚姻する。」
「あッ、だゞだれと。」
「ぶんせいむと……えゝ間違つたぶんせいむの壓制で支那人と。」
「ほんとですか。」
「元より虛言は吐きません。」
「あッはゝ君は虛言を本たうにして居るのでせう。」
「慥に眞實です。一昨日令孃からの手簡があつたのです。……そこで令孃は二つの考へを起したので……一つは抵抗しやうと云ふのです、一つは逃亡しやうと云ふのです。」

見れば愛想のつきる汚い螢‥‥螢と命の主とはかへられない‥何某樣の令孃とか、貴女とかいふ名は尊いやうでも高が人間から貰つた名‥‥人間とは兎角誤り計りする動物‥‥そんな動物から貰つた人爵はつまり石碑の摸樣になる計り‥‥石碑の摸樣と命の主とどうしてまアかへられようか。噫名利は詰らない者だと決斷をして見れば恐ろしい者はない‥‥お父さんが何日ぞや實力のない議論はたゝぬ、貨物の空な革嚢は潰れやすいと仰やつたが、今日は女の命の主といふ尊い者が主人の革嚢に一杯はいつて居る。神聖の戀といふ者がつまつて居る。お父さんの猛勇な力でも無法の壓制でも、潰される氣遣はない、と心の中に獨り問ひ獨り答へて定めたる氣は張弓のいと強く一念征矢の一筋に枉らで直き女竹、何の巖も通さんと引きは絞れど放ち得ぬ親の爲るなる押付に、身は姫反の反ッかねて、とにも角にも關柀のせき來る者は涙にてそゞろにぬるゝ袖すりや、篋中の節のふし柴の凝るばかりなる憂き歎き、思ひやり羽もなかりけり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

じやくそんはぶんせいむに言ひ負かされて勝つべき道理ありながらすご〳〵歸りし口惜しさ。如何にもしてしんじあを伴ひ行き、剛愎なるぶんせいむを屈伏させんと其翌日しんじあの家を訪へば既に昨夜歸りて居ければ、

「しんじあ君〳〵さア僕と一所に行き給へ。」

して霜いや白く冴えて見ゆるも、やがて消えなん可憐さ身にしみて、例ながらのくだかけの聲すさまじく鳴立つるも耳を貫く樣にいとゆゝしく、何に付けても驚かるゝは世を喞つ人の習ひぞかし。ましてや冷たき智慧の腦を持つ男にもあらず、溫く柔かき情愛の胸に充ちし女子の事なれば、果敢なく苦しむ心根もおしはかられていたいけなり。髮の毛の一ふさ二ふさくねりたるをも繕ろはぬは千筋に思ひの亂るゝならんか。頰の色青きまで白く、眼の光り稍薄きは一點の嬌愁猶眉に存して百味の飮食喉に通らざる故なるべし。

るび「あゝじやくそんの返辭を考へればしんじお樣はお不在に違ひなし……折角心を盡して屆けた文も何の益にも立たず。じやくそんは逃げるなと鳩によそへて云ふし　逃げやうとしても獨ではとても此家を逃げおほす事は出來ないし、とう〳〵今日になつたがもう智慧も何もない。たゞ强情を張るより外に仕方がない。どんな事があつても此室より外へは出まい。思へば〳〵慈悲ない父上賴なき吾身……證人もなく僧官も立合はぬ婚禮をする者が何の國にあらうか。世間の人にも笑はれ草となつて後指をさゝれながらこつそりとして謀反人が盟約をするやうな婚禮をする者が何處の風俗にあらうぞ……もはや絕體絕命……生育の恩は深くつても、愛護の情は厚くつても、親の威光は强くつても、もう背かずには居られない。かよわい女子も戀の意地……戀なればこそ生もせめ、戀なればこそ死もせん。戀は女の命の主……二億計りの金銀は假令光つても戀を買ふ價はない……よく

そんな事を云はずと歸へり給へ。」
「否々決して歸りません。君が、人の自由を矯むる事は惡しき事なり、と悟るまでは決して歸りません。人の自由は廣大なれども他の人の自由を妨げるの自由は許さるべき者にあらず。聞く所によれば君は。」
「あゝやかましい君なんぞはどうせ理屈の分る人間ではないくせに。」
「是はけしからぬ。」
「けしからぬもないものだ。君が一言でも二言でも曉舌るのは皆しんじあから學んだのだ……おれの行爲を誤謬だなどと喩すなら本家本元のしんじあを連れて來い。諺にも神は拜むとも和尙は拜むなとある、しんじあの話なら少しは聞てもやらうが貴樣なんぞは相手にするに足らぬ。明日の朝ぜねらす村へしんじあと二人で來い。理屈を云ひたければしんじあに云はせろ。」

第十九回　春もやゝ氣しきとゝのふ月と梅

さりながら寡婦眉を畫くに懶く、寒威未だ去らずして菱鏡に殘る。長かれと思ふ日影のみじかくて淚にひちし袖もひぬ間に日は暮れ、夜は明けて、うたてやるびなは明後日ぞ明日ぞといひし今日の悲しみにさしかゝりぬ。宵は闇の頃なりけん、有明の月影かすかに

にする樣に一議論を仕掛けてやらう。」

「ろんなにやすくごらんなすつてもぶんせいむ樣だつて一と通りの人ではありませんよ。あの白髯を捻つて金剛石のやうな眼で睨み付けられると中々おそろしう御座んすよ。」

「馬鹿を云へ白い髯は羊でも持て居る。金剛石がこはければ玉屋の小僧は眼をまはすは‥‥何でも明日は一生懸命でやらう。」

「それもようございませうが、あの支那人に撞着せないやうになさいまし。何でも大變に口が達者な妖物ださうですから‥‥そして愉快とかいふ書を著して本屋に渡したさうで、まだ出版にならぬ内から大層な評判ですから大かた腐れ哲學者でせう。」

と種々樣々の評論相談に其夜は共に遲く寢ねて翌日東が白むや否服をあらためて家を出て、ぶんせいむを訪ひ面會せしが、素より短氣の性質なり、殊に心もせはしければ、僅に一禮終るを待ち、

「今日は警醒會員として一言君の誤りを諫さめんと欲して參りましたが、元來人間には、」

「言ふな〳〵、しんじあの囈語の取次は聞きたくない。風は空囊を揚げ、說は愚人を動かすだ。貴樣達の口頭の風に煽られるぶんせいむではない。」

「少し待ち給へ。君は誤謬をなす事を甘んぜらるかは知らざれども、」

「何を云ふのだ。愈々貴樣は寢惚れて居る。人が甘んじて事をなす時は即ち誤謬と考へざる時だ‥‥

「おほゝ、ゆるして頂戴よ。」

「それはよいが、しんじお樣は明日の夕方でなくてはお歸りにならないのだから、實に弱るて、明後日は婚禮だといふし、始末の付けやうがない。」

「いまいましい支那人があるものですね。」

「支那人もいまいましいがぶんせいむも分らない爺だ。今日の新聞なぞにも大そう嘲弄してあつたではないか。」

「あの亢龍といふ奴をせねらす村の別邸に移らせてから毎日々々色々の惡口批評がうるさい程ありますが、どうして御主人も此樣に老耄なすつたかと思へばくやしう御坐りますよ……それにまた婚禮が明後日なぞと知れたらお孃樣までが世間に馬鹿だとか氣違だとか云はれるてせうと思へばしみじみ口惜うござりますよ。」

「此あめりかに住んで居ながらぶんせいむ程人の自由を尊ばない妖物は有やしない。どうしてくれやう。けちな藥種屋はして居るが、おれだつて人間だから自由の尊い者だといふ位は知つて居るのに、ぶんせいむといふ奴はよくよくの妖物だ。おれは人間だ、道理の分る人間だ。理否を見分ける智慧のある人間だ。そして手前の大事の殿御だからあんな妖物に負ける者か。むゝよしよし、明日は藥種屋ではない、警醒會員の資格でぶんせいむを諭して閉口させて支那人を追出させてしんじお樣を娟

せん。」
ちえ「そんな意地の悪るい事を云はないでお願ひですから。」
婢「どうもいけません。」
ちえ「あなた何がよし〳〵ッですよ。甘い智慧ではいけませんよ。」
ドや「だまれ‥‥どうしてもお届け下さりませんか。」
婢「はい。」
ドや「そんなら鳩の送り状をあげますから、勿論あなたの御面前でかきますから。」
婢「それは承知致しました。」
と漸くうけあへばじやくそん筆をとり紙を展ぶる。ちえりいは首さしのべて見るに「鳩は不幸にも不在の處へ到着しましたのを家僕が捕へておきました故其儘お歸へし申します。兎も角も逃げぬやうになされまし。るびな樣へじやくそん」と書終りて鳩と共に渡せば下婢は受取り、一禮なして急ぎ行を見送くりてちえりいは滿面に笑を含み。
ちえ「流石にあなたは男一匹‥‥それでこそよし〳〵ッです。頼もしい御方だ。智慧のある御方だ。さうして妾の大事の殿御です。」
「何だ馬一匹にも及ばないと云ッた癖に。」

智慧をお出しなさいよ。」
「まてよ。」
「まてよてはいけませんよ。あれあんなに戸を敲くやうてすよ。」
「よし〳〵ッ。大方鳩を取りに來たのだらう。此方へとほせ。」
「大丈夫てすかえ。」
と念をおしながら立出で戸を開らき伴ひ入れば下婢は念比に會釋して、
婢「今日お孃樣の御秘藏の珠數掛鳩が一羽逃去りましたが多分此方へ參りましたらうから受取て來いと御孃樣の御命令で御座りますから急に馬車て取にまゐりましたのです、もし鳩が此方にをりますならばどうかお渡しを願ひます。」
じや「鳩は此方に居りますから唯今あげます。」
ちえ「お孃樣はお變りもありませんか。」
婢「何となくおすぐれなさいませんが、別に御病氣でもありません。」
トや「御無沙汰見舞の手紙を一本鳩に添へて上げますからどうかお孃樣におあげなすつて下さいまし。」
婢「折角の御賴みですが手紙はぶんせいむ樣のお眼にかけた上でなければお届け申すことは出來ま

樣の氣もしらないで貴君もあなたゞ。あなたゞつて男一疋の癖にぶんせいむ樣の剛氣なのに呑まれてしまつて、御孃樣の爲にもしんじお樣の爲にも少しも男らしい親切をした事はありやしませんからこんな事になつたのです。男一疋の癖に。」

トや「やかましい……考へて居る耳の傍で曉舌られてはこまる。」

「困るもない者だ。男一疋の癖に今になつて考へても何が出るものですか。ほんとに男一疋の癖に。」

「男一疋々々々〳〵とのべつに責めても仕方がない。女一匹だつて此分別は付きはしない。」

「分別なんぞ生意氣に付ける事はいりませんよ。早く駈けていつてしんじお樣にお聞きなさいよ。早く駈てさ男一匹でさ……おや、なんだつて馬一匹でないのだらう、四本の足なら早くつてよいのに。」

「馬鹿をいふな　しんじお樣は昨日から留守だから弱つているのだ。」

「あッさうでしたつけ。留守〳〵。なんだつて不在なのだらう。人の氣も知らないで。」

「ぢれたくつて仕方がない。明日でなくつてはお歸りにならないのだもの。ぼすとんへ說敎に。」

「何だつて說敎なんぞに行くのだらう。」

とちェりいは周章騷ぎ、じやくそんは當惑の額へ皺を寄する中に五時の鐘ぼん〳〵。

「それ今五時の鐘がなりましたよ。……あゝ誰か來たやうだ、周章てはいけませんよ。早く立派な

幸にも妾は愈々吾父の命に從ふ事能はざる旨を父に向つて斷言し、また斷行すべき時に至れり。婚禮は明後日と定められたればなり。されど妾は妾の名譽を汚すよりは父上の名譽を傷くる事を深く悲む故に父上の命令に抵抗して妾の正當なることを鳴らすより寧ろ父上の壓制を逃れて妾の望を貫く方の手段を取らんとす。即ち吾家否父上の家を逃れ去りて後ち正當の順序をふみて吾家を成さんとす。これ彼人を深く信ずればなり。但だ愁る所は彼人が妾の應變の處置をもつて正當と認めざる時は妾は終に彼人に納れらるゝ時なかるべき一點なり。幸にして彼人が家を逃るゝ妾の處置を是認せしならば鳩の左りの足を細糸にて縛り給はるべし。さすれば今夜十二時頃潛に出んと欲する故何卒花園の西の隅の槐の樹の邊に忍びて御扶け下さるべし。五時頃には下婢を鳩受取りの爲め遣はすに付き、夫れ迄に彼人の考へをもお聞きの上おぬかりなきやうに御答へ下されたく、彼人若し妾の處置を却てよろしからずといはゞ、右の足を御縛り置かれたく、然らば妾は父に向て飽迄抵抗して其非理を鳴らすの外なし。」

ちえ「大變ですねえ、御孃樣があまり溫順しい者だからとう〳〵こんな事になつてしまつたのですよ。ぶんせいむ樣だつて物好にも程がある。今朝讀だ新聞の風說が眞實なら豚尾の支那人を婿にしやうと云ふのだよ。ばからしい。しんじあ樣も意氣地のない。自分の戀を瘦我慢して支那人に嬢るのが道德でもあるまいし……えゝくやしい。御孃樣がどんなに苦勞なさるか知れやしないのに御孃

「おれの店にもある。」
「小僧とでもいふ希臘語ですか。」
「はゝゝ同じ女でも貴様とお孃樣とは大きな違ひだ。貴様が。」
「宵の明星なら。」
「お孃樣は月だわ。」
「おほゝなんでも好う御座んすよ。こばるととは何ですえ。」
「鑛物さ。」
「へえゝ。」
「それ見ろ。知るまいが。」
「はい〳〵どうも無學でござります。」
「はゝ可哀いさうだから敎へてやらう。其をとかした水で書くと唯は見えないが熱に逢ふと青く出るのだ。」
「知てますよ。『しんばせちッくいんき』(有感顏料)でせう。」
「下司の智慧、後からだ。」
と笑ふも睦しく手紙をとりて暖爐にかざせばわり〳〵と見ゆる文字「賴母しきじやくそん夫婦よ不

「此頃は出入をとめられて居るから譯が分りませんが、どうしてお孃さまが御手離しなさる事はありませんよ、多分此手紙はお孃樣が慰みに妾の所へおよこしなすつたのでしやう。開けて見ましやう。」

「まてよ……さうかもしれないがそんならちえりいとかじやくそんとか書てありさうなものだ。」

それでもJの字はじやくそんの頭字ですから。」

「なぜ封を切つたのだ。惡るい事をする。」

「ようご座んすよ。慥にお孃樣の洒落でせう。」

「おや〳〵是は奇體ですよ。」

「それ見よ間違ひだらう。」

「いゝえ、『この鳩を捕へてこの狀袋の封を切りし人は、ふたゝび封をなして同じ名宛になし放ち給はんことを願ふ』と書いてあるばかりですよ。馬鹿々々しい。」

「どれ御見せ。」

と手にとり暫くして膝をとんと打ち、

「分つた分つた。こばるとが分つた。」

「何ですえ。」

温順なおまへだからきッと頼まれてくれるだらうね、頼み甲斐のない人間の下婢ではなくつて温順誠實な鳥だもの‥神聖な鳩だもの。あら可愛らしい點頭くやうだ。」

と籠の戸を開け、頼む、と云ひつゝ足に手紙を結び付けて今や放たんとなしけるが、折から一聲屋の棟に鴉の鳴くを聞や否急に手紙をとり放ち、ずた〳〵に引裂きける。

第十八回　ものいへば脣寒し秋の風

赤く熟せし柹も淋しく、眞個も虚言に見え勝のもの。

「ちえりいや二階で何か物音がするやうだ。」

「おやさうですね、往て見ませう。」

と駈上りしが暫くして下り來り、

「あの此鳩がまた歸つて來たのですよ。そして御覽なさい、此樣物を足に付けてをります。」

「取ッておやりな‥手紙のやうだね。」

「はいおや〳〵、みすとると、じェい、こばるとと書いてありますよ。」

「はてな‥こばるとといふ名は聞た事がないが、」

「此鳩はるびな樣の所へあげたのだが、それから外の人の物にでもなつたらうか。」

「どうも。」
「そんな事をいはずに一生懸命になつて是非働らいてなくれな。其かはりあの水晶と紅寶石の腕輪をあげるから。」
「どうも顯はれないとよう御座りますが、內々の事は直に顯はれますから恐くつて。」
「えゝ意氣地のない事をいはずと金時計もあげるから。」
「どうも。」
『だいやもんど』と『とばす』で出來て居る……そして電氣燈が中にある……そらいつぞやおまへが眼をまはした簪もやるから。」
「どうも。」
「えゝ仕方がないね。あの大事の鳩もやるよ。いゝよ。そんなら用はない。あのうつくしい鳩までもやるといふのに。」
といへばきまりわるげに立兼ねたる下婢も仕方なく去りし跡にるびなは身を起して軒端に吊せし鳩の籠にむかひ、
「あゝ可愛鳩、溫順な鳩、誠實な鳩、神聖な鳩…おゝ誠實て溫順な鳩や、おまへに一つお願がある よ…多分先の主人の家はよく覺えて居るだらうから此手紙をもつていつてお吳れよ、…誠實て

一通りならぬ果斷剛氣、諫めても用ゐらるべきにあらず、なげきても取り上げまじ。死するも愚なり。尼にならんも流石なり。しんぶる夫婦も居らず、ちゑりいも遠ざけられたり。戀しき人には逢ふ事難し。えゝ儘ならぬ世の中に親のあしき事をあらはさば、よしや戀路はとぐるとも子として何の樂しかるべき、田宂龍に身を委ねばたとひ孝には欠けずとも妻としていかで嬉しからんと刹那時間に想生想死千萬無量に迷ひけれど、るぴなも鬼子にあらざれば其親に似て忽ちに考へ得たる事やありけん、つと身を起して一封の書を認め呼鐘せはしく引鳴らせば、とつかは入り來る下婢に渡して、「返事を直に戴いて來るのだよ」と急き込で言付くるを悠々として落付顏に表面を見ながら、

「是は一旦御父上に御覽に入れた上でなくては此御使ひは出來ません。」

「なにえ。」

「旦那樣の堅い御言付ですから。」

「使に行かないといふのかえ。」

「はい。」

「御まへの働きて內々にして屆けておくれな。」

「どうも。」

「此の金の指環をあげるから一つ骨折ておくれな。」

しん「亢龍子の事に付ても及ばずながら夫婦が居りますれば御相談相手になるべきところ今夜中に夫婦が立ねばならぬ心苦しさ‥‥今直に是といふ分別も申し上る事は出來ませんが、唯どうか氣を大きく胸をひろくお持なすつてさしせまつた事をなさらぬやうに。」

妻「願ひます。」

しん「夫婦の申上げるとも是れぎりで御座ります。名殘の恨はつきぬ事。さあ女房めろ〳〵泣かずとお暇乞を申し上げろ。」

と手強くいへどしんぶるも離苦の涙は忠實の瞼にさゝへあへざりき。

妻「あのお孃樣、お身躰をお大事に‥‥御運動をよくなさつて‥‥あまり多く悲劇の類をお讀みなさいますな。」

といふもくもり聲。左樣ならばと手を分ち默禮なして立出る夫婦は幾回見返りて行くを見送るるびなの心細さ、其まゝ臥床にかけ入りて岸破と計り倒れたり。馬蹄今去つて誰が家にいらん。(張籍)

水遠山長人を愁殺す(李遠)

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

法廷に人情なければ我が思ひ通りにならぬこともなけれど、女子の裁判沙汰、殊さら父を相手にするもあさまし。さればとて親とはいへ我が好かぬ支那人と夫婦になれとはとても忍べぬ命令なり。

またお諫め申さなくても不愉快の感覺のない人なぞは到底ある筈も有りませんからつまりあの廣告も無功にたつてお父上御自身に斷然とお考へ直しになつて自然貴孃のお思ひ通りになるであらうと存じまして御諫めも仕なかつたのですが、かうなつて見ますると飽迄もお諫め申さなければなりませんから夫婦が必死になりまして種々と言を盡し志を盡して烈しく御諫言申しましたら遂には父上も烈しくお怒りでしたが、尚ほお怒を犯してお孃樣の同意を得ない婚姻は到底成りたちませんと申しましたら非常のお憤りにて、兩親もなく財産もなく緣もない汝を十一の時から育てゝやつた恩を忘れ、主人の言に抵抗するやつはにうようくにもぜねらす村にも置く事はならない、香港の支店長と交代させるから今日中に出立しろと仰やつたぎりで。」

ゐび「え、まあそれからどうしたえ。」

妻「色々とお詫を申ましたれどお聞入れはありませんから。」

しん「今晩出立致します事に決心致しました。」

妻「お名殘惜しくも。」

しん「御座りますし、夫婦の心配も一通りではありませんが是も畢竟夫婦のたらぬから起りましたので御座ります。實に貴孃のおん身の上にはさしかゝつて色々の困難が御座りますし、御父上。」

妻「しんじあ樣。」

妻「いゝえどうも致しませんが。」
るび「せんがどうかしたのかえ。何だか氣にかゝる口のきゝやうだね…わら涙がうるんで居るよ。」
しん「お尋ねなくとも一度は是非申上げねばなりませんが遂心後れが致しまして。」
るび「何かお父さんが妾の身の上に付てお話してもあつたのかえ。」
妻「はい其事で御座ります。」
しん「お孃樣、私から只今委細申し上ますからどうぞ話の終りまでとつくりとお聞きなすつて。」
るび「あい。」
しん「お存知の通りおとゝひの試驗で亢龍子といふ支那人が大層お父さんのお氣に入つたのであれあの向ふの別館にお客分にしてお置きなさる位ですが今朝私夫婦をお呼なすつて仰やるには、るびなの夫もまづ定まつたが、今年も直にくりすますが後に逼つて居るから婚姻はなるべく早くしやうと思ふから二人に吩咐るが十二月九日までに一切の準備をしろ。十日には婚禮をさせる積りだと。」
るび「えツ。」
しん「まアお聞き下さいまし…といふ事ですから夫婦も實に膽を冷しましたので…一躰私の最初考へましたには何事にも果斷のぶんせいむ樣ですから廣告をなすッた處へお諫申しても無益だし、

居るのだらうが今日から此方へ引移り給へ。遠慮はいらぬ事だ。しんぷる、貴樣は庭の西の方の別院へ紳士を案内しろ。氣のきいた僕を二人計り紳士の從者に添へて引移りの手傳をさせろ。それからぼにいは怜悧の小僮だから今日から彼は紳士の小間使になるやう云ひ渡せ。今夜は御一處に夜食をしませう、娘も御相伴させませう。そしてしんぷる、貴樣は三日間紳士の靴の塵を拂へ。是は紳士の頭をうつた罰だ。」

第十七回　棧や命をからむ蔦かつら

危い哉々々、古人のたまはく御用心々々。

山鳥の尾の長き契りを遂ぐべき夫婦さへも難波江のよしあしに中たがひして二世の恩愛を短かき一節の夢となすあさましの世の人心と見限りて深山の奥に住み給ひし何某が今時の法師せめて鵜鵡丈も正直ならば佛法の功德もあるまじきにあらずと云はれしは僻言ぞかし。我が狂言綺語なんどこそは鶯の鳴く程ゆかしからず、鷄の謠ふ程おもしろからざれど、憎き鴉のみだれ鳴きあながまやと捨て給はず、せめては鶴の一聲の評を賜へと思ふのみは信天翁の誠にも似たれば、鳥よりも劣れるに似たることとなり。

ろび「夫婦揃つて來たのは何だえ。そして愁を含んで居るのはどうかしたかえ。」

吟「不愉快だ。」
しん「とう〳〵閉口したらう。ぶんせいむ家の良宰相しんぶる樣とは予が事だぞ。」
吟「だいおぜにすぜしにッく（古代の奇人）だぞと威張りたい所だが。」
ぶん「どうした。」
吟「天窓がいたい。」
ぶん「わッはッは可愛さうに……歸れ〳〵。」
輕蔑の語氣にて憎氣に云はるゝも我身の錆と獨をかしく握手もそこ〳〵庭に出て、「唐狛々々〳〵」と呼べば應と答へて馬車を近付くるに乘らんとする時後より、
ぶん「紳士々々〳〵、賤奴は亂拳を紳士の頭に加へたるにあらずや。」
吟「然り、猫兒は泥足にて女王の膝に上る。」
ぶん「わッはッは、うまい〳〵、君は面白い男だ。歸らずともよいから此方へ來給へ。」
しん「御主人彼は落第したのではありませんか、不愉快と自白したではありませんか。」
ぶん「だまれ。」
しん「然し。」
ぶん「だまれ……廣告を忘れたか諾否の權はおれに在る、……さア亢龍子此方へ來給へ、君は旅館に

しん「ます〳〵變だ。氣が狂つても居ないやうだが、何にしろ法外だ。」
吟「左樣々々。亢龍の思ひ付きが法外だ……ぶんせいむ君の思ひ付きも法外さ。」
しん「しめたぞ……御主人お聞きなすつたか、及第しないのを憤りてあなたを法外と申します。」
ふん「よいではないか、成程おれも法外の仲間だ。」
しん「御主人卷込まれてはいけません。彼は支那人です。放逐案のある支那人です。」
吟「支那人ですが大笑ひだ……然し此男は無暗と惡口をきくが、少し扣へろ、生意氣な奴だ。」
しん「しめたぞ貴樣は腹が立つか。」
吟「はゝゝ怒る　君に教へて上げやう　世間に果して我を怒らするの價値あるものありやといふのは西洋の賢人の言葉ださうだが、東洋の吟いや亢龍先生の名言を聞かせよう……予は果して怒り能ふ程の價値ある男なりや……はゝゝどうです、誰が怒る者か。」
と煎豆が塗箸を逃るやうな挨拶にしんぷる殆んど困り果て、是非とも是を怒らすか恨ますかして落第させねばならねど、とても口先にては埓明かず、今は是までと突然拳をふり上て三ッ四ッ五つゝ打擲けば、帽子は落て後に飛び身體はどうと倒れ伏し、
吟「いたい〳〵。」
しん「不愉快か。」

さればるびな孃の歎きぶんせいむ家の不爲め……まさか此樣な變物もあるまいと高を括つて最初から諫めずに居たがかうなつては非常の失錯……るびな孃の胸も大概は分つて居ればぶんせいむ樣の思ひ付をどうか止めるやうに諫めてと妻がいふたを用ひなかつたがおれの一生の失敗……妻にむかつてもるびな孃に向つても、おれの親切の薄いやうな事だ……失敗だ……いや誤つたでは仕方がない。どうでも此の變物を落第させるより外に失敗の贖罪をする所はない、と流石に分別も早き敏捷の男ぶんせいむの後より、

しん「元來鼠の肉を食ふ人種は無論及第する筈はないのです。」

吟「田亢龍が惡く云はれるのはいくら烈しくても構はない。はゝゝ。」

しん「はてな…御主人々々々々、然し折角遠路をきた紳士をたゞ歸すも失禮ですからあの豚の尾を三だいむ計りで買つて鞭の先にしたら如何でしやう。」

吟「はゝ亢龍を氣死せしむるに足る名言だ。」

しん「はてな餘程變な男だ。御主人此人は多分精神異常でせう。」

吟「異常の筈だ、今日は久しぶりで氣が清々としたのだもの。」

しん「是は變だ、とても人なみではない。」

吟「人並でこんな婿の候補者に成れる者か。はゝゝ。」

ぶん「さあ行かう。」

と連れ立て入る此方の部屋には田亢龍の吟蜩子、儘よ浮世の七轉び、八起も人の手にまかす不倒翁の達摩をば學ぶもつらき面壁の修行者じみて郭然無しやうに座したる所へ。

ぶん「支那の紳士歸り給へ。るびなは既に或る詩人に許せり。」

と無禮にも云ひ放てば。

吟「妙々、はゝさうですか……そんなら私が試驗を受けぬ前に定まつたのですな。」

ぶん「左樣。」

吟「妙々、そんなら私は試驗に落第したのではないのですな……して見れば矢張常に愉快な人と見えるな……はゝ妙々落第もしないが、及第もしないので……是なら田亢龍も文句の付けどころがないな。はゝゝ素敵にうまい結果になつた。」

と吟蜩子の我に歸りて初めは對話、末は獨り言に、さも嬉しげに打笑へば、按に相違のぶんせいむ、しんぷる暫く言葉もなかりしが、しんぷるは腹の中に、さて〳〵變人もあればあるもの哉。何千里の道を遙々嫁取りの爲に來ながら戀も叶はず望みも成らず腹の立つべき無禮を受けたるに眞から嬉しさうな顏付き。此の調子では主人のぶんせいむも負けぬ變物なれば目白は目白と親しむ道理。殊さら落第さすべき言草もなければ變物の支那人を變物の主人が愈々婿に取らうといふかもしれず。

變つて‥‥髪は逆立ち、眼は上り、唇の端に泡を吹いて‥‥いやはや愈々落第だ。」
哲「失敬極まる　えゝよろしいそんなら歸る。」
と嫉妬と慚愧の一瞥の眼の光りを殘して去るを見送り、
ぶん「哲學者は餓鬼のやうな者だ。」
しん「はゝ試驗が意外ですから、三人が三人とも見事に落第して歸りましたが、一人殘つた支那人もどうせ落第でせう。」
ぶん「さうだらう　あの詩人なら決して落第する筈はないが、惜しい男が逃げてしまつた。」
しん「それはともあれ支那人が落第してしまへば悉皆書餅になりますが、もしさうなりましたら不愉快の感覺なき者を婿にするなぞと云ふ事を斷然おやめなすつて、世間體の通り御孃樣の自由に御まかせなすつたらどうで御座ります。」
ぶん「貴樣は矢張り腸もない小新聞の記者めらがおれの求婚事件を評して痴人の妄想だのなんのといつたのを信じて居ると見える。そして到底おれの思付は無功と考へて居るものだからそんな諫言くさい事をいふのだらうが此ぶんせいむは善かれ惡しかれ人の意見に從つた事は今まで一度もないぞ。悉皆書餅になつたら又新に廣告して人を求める計りだ。」
しん「へえ。」

哲「予は既に悟れり。足下が予をして歸らしめんとするは是即ち試驗なるべし。足下の命に從ひて直に歸らば足下は乃ち、是自ら試驗を受くるの權を放擲して歸りたるといはん。又足下の命に背きて歸らずんば、足下は予を不愉快の感を抱けるが故に歸らずといはん。然れども予は、」

しん「お饒舌りなさるな無益です。」

哲「然り。然れども予は無益の辯を揮ふ事を厭はず。却つて愉快とせり。是れ予の答案なればなり。夫れ、」

ぶん「えゝやかましい先生だ。るびなは既にある支那人の妻たるべき旨の契約をしたから先生なんぞを試驗する要用はないのだ。」

哲「えッ何と仰やる。」

ぶん「婿はきまつたから貴樣は歸れと云ふのだ。」

と聞くや面色忽ち變りて元より早口のいとゞせはしく。

哲「是はけしからぬ事‥‥受驗者を悉く試驗せずして偏頗極まる決斷するとは。」

ぶん「何をのろまな愚痴を繇すのだ。」

哲「なんと。」

ぶん「怒り給ふな、足下は只今落第だ。其怒つた有樣を鏡で御覧なさい。沈着拂つた初とはまるで

ら詠じ、鸚鵡石の響を發して人と語る。たいらッく再拜」とあるわ。」
しん「實に驚いた人ですね‥それならまたなんだつて此申込をしたのでせう。」
ぶん「此奴の事だから大方洒落だらう。あツはゝ。然しをかしな奴さ。」
ろび「何の國の人でせう。」
しん「どうも何の國の人だか分りません。」
ぶん「どれ試驗をしてやらう。」
といひながらしんぶるを從へて衝と立去りぬ。今日を最後の試驗と聞けば受驗者は皆片唾を呑みて如何なる難問も起らば起れと云はぬ計りの顏付して待構へ居たるが、僅の間に二人は終りて歸りける。今や三番目の室に來かゝりて、
ぶん「哲學者か。」
てつ「左樣で御座ります。」
と答へしかば戶を推し開けてずつと入り、
しん「先生。」
てつ「はい。」
ぶん「失禮を発し給へ、試驗は旣に結果せり。御歸りなされ。」

ろ「いやだよ。」
ぶん「よし〳〵。そんならしんぶる、四人を別々の部屋にいれて置け。」
といへばかしこまりましたと出行きけるが、暫くして復入り來り、
「仰の通りに致して置きました。それに郵便が一ツまゐりました。」
と差出すを手にとりて讀めば、
「可憐の少女は麗はしき天上の三日月をとりて髪を飾るの櫛となさんと欲すれども、風流の韵士は誰れか園中の薔薇を折て瓶に挿むの花となすを願はんや。白薔薇。曉天の空にきらめく星の影の落て凍しか、冷風に香を吐く、さては白薔薇一輪咲きしな。……さもあらばあれ、色は眼に香は袖に、深くも染みてあるものを、何とて人の心なく折らんとするぞ、心なや。」
ろび「あゝまことに悠々として限りなき恨み。」
ぶん「恨みではない面白味だ。」
しん「あの詩人の手紙ですか。」
しん「さうだ終の方に何か小さく書てある……「造化の美妙を人間の脳髄に移植せんと圖る詩人にもあらず、俗塵の紛紜を名山の飛瀑に洗濯せんとする隱士にもあらず、唯陰暗たる幽谷に三寸の日光を樂む羽抜鳥を師とし、嶙峋たる高岳に一條の風路を弄ぶ老鷲を友とし、蚯蚓の吟をなして自

「人を嘲弄するやうな答へてはありませんか。」

「だから古今未曾有だ。皆がわれ勝に多少の思を凝らして答へる中に知らずと即座に答へたのは妙だよ。」

と頻りに話す處へ腰を屈めて入り來るしんぶるはぶんせいむに向ひて、

「丁度時刻で御座りますが、まだ皆さんお揃ひになりません。」

「さうか誰がまだ來ない。」

「あのたいらッくといふ詩人がまだまゐりません。」

「はてな……むゝよし〳〵。構はない。直に試驗をはじめやう……ゐびな貴樣もおれと同伴に來い。今日はたゞ浮世話しを四人の客にさせて見る計りだ。」

ゐ「あのしんぶるや、詩人は來ないのかえ。」

ぶん「詩人が來ても來なくてもよいからさあ同伴に客間へおいで。」

ゐ「はいどうも。」

ぶん「何をぐづ〳〵して居るか否なのか。」

ゐ「はい。」

しん「御孃樣お出なさいましな。」

「これは無論及第さ。其次に殘つた一人が實に奇々妙々、古今未曾有といふ答へだ。」
「今の詩人よりまだ勝れたのがあるのですか。」
「あゝ。」
「何といふのですか。」
「當てゝ見ろ。」
「とても考へが付きません……何といふ答へです。」
「知らない。」
「おほゝ御存知なくて奇々妙々と云ふ事もありますまい。」
「なあにほんとうに知らずさ。」
「分りませんね。」
「知らずといふのが答へさ。」
「それから。」
「是つきりさ。」
「え。」
「奇々妙々だらう。わッはッは。」

かに流るゝ物凄さ……勇者は亡び、智者は去り、旗は破れて樹にかゝり、刀はをれて地にまみれ、戰ひ果てし荒野には恨ばかりや殘るらん殘るらん……あゝら、つはものどもが夢の跡『吾夫はや』。

「あゝお父さん最うやめて下さい、そんなに節をつけておうたひなさると悲しくつて胸がいたくなります。」

「それでも詩だもの……然し是は大層長い詩だからおれもまだ覺えきれない。いづれ今度見せやうが此詩の終りに書いたには『眞に人の不愉快を感ずるは尤も美しき徳あるが故なり。深く愧づるは尤も美しく廉なる故なり。深く憤るは尤も美しく義あるが故なり。深く憂ふるは尤美しく仁あるが故なり。都べて不快を感ずるは尤も美しき徳あるによれり。見給へ、若し雪中に黑き兎を見ば著るしく眼に付くべし。これ淸き雪の眞白なる上に黑き者あるが爲なり。不愉快は兎の如く、美德は雪の如し。故に愈々徳の雪の白きに從ひ愈々不愉快の兎は著るしかるべし。されども神は美妙の裝置を爲し給へり。即ち黑き兎の白き雪の深くなるに從ひて遂には白く化せらるゝことなり。噫不愉快の兎は雪見竿なり。此の雪見竿によりて自己の徳の厚薄を考へて成るべく厚からんとせば終に黑き者なきに到るべし。若し此雪見竿なきならばあだむいぶより吾々まで猶ほ野生の芋に滿足して愉快顏する豚なるべきに』と筆を止めたがどうだ。」

「なる程これが一番で御座りますね。」

「あッはッは、詩と聞くと直に顔色を直すからいゝ……一躰の脚色は小人讒者が跋扈して人民が非常に苦しむ中に世を憂ふる君子淑女が種々の辛酸を嘗め盡し漸く國も太平になり婚姻の式を擧ぐるとたんに夷狄が國境に攻めて來たので、夫は直に兵を率ゐて戰爭に出たが、運わるく戰死したので妻は遂に焦れ悲しんで盲目になつて迷ひ歩行き、何とかいふ高山の雪中で凍え死ぬるといふ實に凄い話だ。」

「どこでもよろしいから覺えて居らッしやる所を一節お聞せ下さいな。」

「夫の軍さに出立したあとの處だよ。」

夫は關山遙なる胡地の軍にありと聞く。妻は山家のひとりずみ、うれたき庭もあれはてゝ、八重に鬼蔦這添ひし槇の柱に身をもたせ、力もなげに打見やるあなたの空の浮雲は、うき雲は、修羅のちまたに飛びちがふ駒の蹄にたつ塵か。……あゝら英雄畢竟馬前の塵『吾夫はや』。あゝら鐵壁空しく倒ふれて殘灰冷やかなり『吾夫はや』。折からさつと山下風、窓打つ音のさら〳〵〳〵、落葉か雨か……兜の鍣垂眉庇や、鎧の小袖上袖に、霰の如く落かゝる矢玉もかくこそ……あゝら矢石無情にして人を擇ばず『吾夫はや』。楓、櫨の木、漆の木、からくれなゐに染めなせる野山の紅葉は敵味方、斬つ斬れつ入亂れ、火炎の如き熱血の草を染めたるありさまもかくぞや如斯ぞ……あゝら腥血模糊として紅千里『吾夫はや』。日の光さへ薄白く、蓬はかれて色あせぬ、小川の水の音もなく、かす

あつたが是は及第さ。」
「へゝえ。」
「次に「習慣にさからふ時起る感情を不愉快といふ。即ち既往の習慣の餘力と新來の勢力と戰ふ間の事なれば既往の習慣に執着せずして速に新來の事に從へば不愉快なし。予は此修行を積みし故今は不愉快なし」といふ答があつたが此の哲學者が實行出來るかどうか怪しいがまづ及第さ。」
「へーえ。」
「世間に一つも不愉快なし唯るびな令孃の歡心を得ざる時は大不愉快なれども其時は我自殺すべければ更に一の不愉快もなし」と一句に續け書きにした男があつた。」
「まゝゝあおそろしい。いやな。」
「あッはッは、かういふ男はおれが大好だ。無論及第さ。」
「あゝ恐ろしい……何といふ人でしやう。」
「驚くなよ．．夫から四十枚計り書た人かあるが。」
「それはなんと云ひました。」
「これは貴樣にも面白いよ。全篇殘らず古代の話しにして作つた詩だよ。」
「それは定めし面白う御座りませう。少し御話しなすつて下さいませんか。」

い」と答へた男があつた。」

「あらあさましい……それでまア及第ですか。」

「なアに此奴は火事にあつて發狂する性質だから無論落第さ……それから「不愈快とは學問を食ひたりぬ人の胃にある所の飢の傷だ」と答へた者があつた。」

「へえ。」

「此奴の愉快は腦病になれば直に碎けるのだから無論是も落第さ。夫から「不愈快とは神の法律を犯したる時神より嵌めらるゝ無形の首枷なり」といふのと「不愉快とは神の作り給へる天地は善美なりといふ事を信ぜざる腐敗の腦髓に生ぜる黴なり」といふのがあつた。」

「是は及第でせう。」

「あツはツは、それだから貴樣は子供だ……二ツとも道理には違ひないが、一つは神の法律を犯した經驗のあるものでなくてはいへぬ言葉だ……そしてかういふ男は其首枷の重きを知て居るのだから今度また惡事をする時は先より平氣でするよ。丁度一度川を渉つた子供が、なアに腿位までしか濡れぬといふ鹽梅で實に行末の危いものさ。其次のは妙に悟つたやうな云ひ草だが是はおまへの通りのろりと育つて世間の鹽風の辛いのも寒いのも知らぬ男に極つてゐるから二人とも落第さ。それから「不愉快とは不愉快を打破る勇氣のない時の有樣故に勇氣あれば即ち不愉快なし」と答へたのが

「けちな返辭をするな。そして此間もけゞんな顏付をして口も碌にきかず、眼もよくは動かさず、むつゝりとして居たが……下らない奴等のより合ひに世辭を賣つたり愛敬を鬻すにも當らないが、女の哲學者顏はよくない者だから娘らしくしろ。」

「はい。」

「えゝ齒の痒いやうな挨拶をするな。そんなに不機嫌で居るが、今日の五人なぞは何百人の中から拔擢した人達だから今にちと話でもして見るとよい。中々おもしろい事だらう。」

「ありがたうござりますが御免を蒙ります。不快で御座りますから。」

「馬鹿な奴だな。不快ならば愉快な人達と話しをして見ろと云ふのに。」

「はいどうも。」

「いやか。」

「はい。」

「あッはッは分らない子だ。此間の試驗に答へた色々の文章でも聞かして少し驚かしてやらう。」

「一躰まアどんな答をしてお氣に入つたのです。」

「何となく貴樣はさげすむやうな調子だが、どうして貴樣なぞには想像もできない答へだ。先づ『眞の不愈快とは麵包と羅紗と煉瓦との欠乏より起る者なれば衣食住に足るを得れば即ち不愈快は

の道を歩まう。

と云ひつゝ立つて机に對ひ、手にまかせて取りたる書を開けば、「われ汝を敎へ、汝を歩むべき道に導き、吾が目を汝にとめて喩さん。汝等辨へなき馬の如く、驢馬の如くなるなかれ。彼等は轡手綱の如き具をもて引止めずば近づき來ることなし。」

第十六回　白露をこぼさぬ萩のうねりかな

柔能く剛を制す道理か、荒らき猪の子の臥すもをかしや。

ぶんせいむはるびなを睨みて例の如く室内を歩めるに、るびなは椅子に坐りながら少しくうつむきて聲もうるみ、

「喜べと仰るのは。」

「おまへの幸福の日が近づいて來たからさ。」

「どうも妾には譯が分りません。」

「分らぬ事があるものか。試驗が大層捗取つて今日はもう終りの試驗だ。此間の試驗に五人だけはよかつたが、跡は氣に喰はぬから皆抛り出してやつたから今日は僅に五人を試驗するのだ。」

「へえ〻。」

ひしはまことや、行方も定まらず、越し方も跡なく、たてにも横にも限りなく怪しく續けるものなりけり。さしも悶えにもだえたるゑんじぇの顔いつとなく和ぎて、

「妾は尤も深く妾を愛する人を愛すると尤も深く、尤も堅く妾を信ずる人を信ずると尤も堅し。恐くは人もまた然らん。されば一人深き愛と堅き信をなせる時は既に二人は一躰となりしものなりといふ事を疑はず。ごりやすとだびッとを共に置くには曠野も猶足らざれど、せんせりにゐとぺるしやのぶりんすを相納るゝには小塔も猶餘ありといへば、愛と信とは離れたるものを合し遠き者を近くするとは愈々疑ふべからざるとなり。故に妾は彼人と遠ざかりたるを眞に悲む。されど憂へず。彼人と會ひ難きをいたむ。されど恐れず。たゞ自己の愛と信の深く堅からざるを憂ひ恐る。噫何とて彼人を強るが如き事と擾すが如き事をなさんや。ちェりいよ汝の深切なる助言は嬉しけれども、妾はただ妾の愛と信とを深からしめ堅からしむべきのみ。花能く香ばしからば蝶自ら來らん。露まとに清くんば月盡ぞ宿らざらんや。」……

あゝいゝ流石にるびなの答へだ。此の返書にはちぇりいも怜悧の女だが閉口したのだ……噫どうもいゝ、花能く香しからば……どうも實にありがたい言葉だ。噫かへす〳〵も無益の想像を繰り返すのをやめて正當に働かう。考へ直して見れば平和で、安樂で、愉快で、莊嚴な望のあるゑんじぇの身だ。ぶんせいむを恨むにも愚痴を繰り返すにも及ばない。勤めやう働かう。ゑんじぇはゑんじぇ

此の眼鏡をかけてからは山も水も花も鳥も一層美しく尊く、美妙の天地だとつくづく感ずる。花を見ても今まではたゞうつくしい、芳しいと計りであつたが、今は何となく譯も分らず、雲が岫から出るやうに油然とおもしろい趣味といふ者が胸に湧いて來るが、眞に花を愛する人は此の趣味を會得して居るだらう。るびななぞは早くから此趣味を知つて居たに違ひない。噫尊いものだ。いつぞやの朝二人して薔薇園の中を携へてあるいた時るびなが戯に「るびなの園の中に薔薇を育てゝ居るのではありません。薔薇の花の露の中にるなびが住んで居るのですよ」と云ふた故「夫なら貴孃を封じて露中の女王としませう」と云ふたらば笑ひながら「女王の位を與へる者は王でなければなりません」と答へた。……どうしてあゝ機敏だらう……露の中に住んで居る…妙だ實に無量の味がある言葉だ……るびな……鳩……花……露、あゝ此平和のさあきゅいッと(園)の中に住ひたいものだ……露……併し風には脆い者……花……併し雨には惱むもの……鳩……併し鷹にによわき者……るびな……然しぶんせいむには勝てぬもの……あはれにも情なくもぶんせいむには勝てぬもの……ちッ恨めしき風め、雨め、無慈悲の鷹め、奇怪なぶんせいむめ。自由の天地の合衆國の人民の癖に憎い程强情な頑固の親父め、どうしてくれやう。るびなのあの顔を見ることも出來ないし、あの聲をきくことも出來ないし、黄泉の人を戀ふよりつらき…世は。

と大息吐きて涙ぐみ、再び椅子に埋もれしが、想像は虚空を翔ける鳥の道の如しと智慧ある人のい

「ゐびな、ゐびな、あゝどうしたらう…矢張例の通り鳩計りかあいがつて居るだらうか。餘念もなく埒もなく世界には人といふものがあるといふ事も知らぬやうな顔付をして（其癖其顔の笑窪は鐵のやうな人をとらかす坩堝でありながら）唯鳩計り可愛がつて居る罪のないもの好き…蝶を可愛がつて飼つた處女が哲學者を迷はせたといふ話があるが、愛度氣なさは丁度一つ。だが最負目で見れば菜園麥隴の間を飛びありく蝶を金網の中に押籠めたのは溫順閑雅で主を慕ひ家を戀ふ鳩を飼ふに比べては思ひ劣りのする業だ。云はゞ蝶を愛して蝶の天賦を枉げると鳩を愛して鳩の天賦に從ふとの大きな差だ。あの樣な處女に愛されたら彼の哲學者もあちらこちらを飛ゐるかぬやうに鐵網の中に入れられさうな話しだ。ほゝ餘計な事だが何にしろ鳩はよい…やさしき鳩、閑なる鳩、喜びの案内せし鳩、聖靈は汝の如く下りし鳩…えゝ自分ながら譯が分らない。鳩まで可愛くなつて來た。併し鳩を愛するにさへあゝ親切なるゐびなに愛される人間だもの…其親切の火に其坩堝の内で蕩されて感化されて鳩好きになるも當然だかも知れん。なんだか此頃は、ゐびなの好きな者は皆好きになつて來たが、自分ながら不思議だ。草花なぞは元より好きであつたが、また一層好きになつた…そして鳥にむかつても花にむかつても一種の妙味のおもしろみを感ずるのも不思議だ。戀慕の眼鏡をかけると其人の銀の腕輪は白金に見え、其人の寒冷紗の衣服は練絹に見え、其人の涙は眞珠に見え、其人の聲は音樂に聞え、そして其人は天使に見えると詩人がいふてゐるが虛言ではない。

つらければ、おだ事はさておかん。過ぎし頃ゑんじおはちゑりいよりるびなの有樣を聞かずばまだしも聞くに付けては忘られず。いとゞくるしき煩惱に身を焚く計り焦れつゝ、淸き心の白糸も戀にそまりてなさけにもつれ、眞紅に沈む憂きなげき、萌葱に燃る若草の妻てふ名さへ羨ましく、妄執强き愛染の火炎の緋色いとも濃く、濃き紫の一本のゆかりといふをなつかしみ、薄き緣しの薄墨の消えもやすると悲みつ、王母の桃の桃色や、慈童の菊の黃金色、よしや命は延ばすとも、よしや齡はたもつとも、世を空色のそら賴み、賴み甲斐なくおくりなば、何とてうれしかるべきと、迷ひの闇の道黑く、結ぼゝれたる物思ひ、忘れてもはかなき事を思はじと思ふにつけて忘られぬこそ僞りのなき人情なるべけれど、甘味計りて料理はならず、直線のみで畫はかけず。義理といふ鹹物、場合といふ曲折のある習ひ。はて天地の序にしても、花のさいた跡に毛虫のうるさき夏が來り、實の成た秋の末が落葉の冬になりし此頃、庭木も瘦せて骨立ち芝草も枯れて色衰へ、烟突計りは我が世顏に萬丈の氣燄を吐くが、それすら高くはあがらぬ陰々たる時節。往來の人影も何處となく淋しき夕暮、一室の内にゑんじおは暖爐の前の低き肘懸椅子に腰をおとし入れて、眠るが如く首をうなだれ、長き息を吐きながら細く眼を開き、るびなとかすかによびしまゝ音もせざりしが、暫くしてまたるびなと此度は眼もあかず口の内にて僅に云ひしまゝ、眉を少し皺めて首はます〳〵低れたりけるが、不圖ふり上げて眼は其まゝ

しに、心得ぬ志んじあの戀しらずめ、直線の外に出でたりや、あらおぞまし。蛛網に荒れたる駒はつなぐとも二道かけし人は頼めじ。實に頼まれぬ哉。小人の戀は一日なり、才子の戀は一春なり、勇士の戀は身の互に存する間にして、仁者の戀は斷ゆる時なしとならば、志んじあは仁者にもあらず、勇士にもあらず、才子か小人か、扨は之を戀ふるるびなも眼に光なき痴女子なりけりと一概にあしく云ふはまだ戀の譯しらず、生噛にした野暮かたぎ、杓子定規の議論ぞかし。志んじあは戀ひする人なり、戀につかはるゝ人にはあらず。小町業平は戀につかはれし人なり。戀の糸にあやつられ、足を擧げてうつのやに歩み、唇を動かしてうきくさのと唧ちし傀儡坊、魂もなき肉團のみ。業平のせし戀は井筒姫にやありし、齋宮に向つてやありし、立田山のあなたにやありし。小町の事は云ふにもたらず。是等は皆あの戀、此の戀の奴となりしまでにて、眞に業平が戀ひをせしにはあらず、小町が戀をせしにもあらず。たゞあの戀、此の戀が小町平業を使ひしとやいはん。戀は鋭き鷹の如し。善く是を放たば鶴を得ん、君子を得ん、淑女を得ん、道を得ん、德を得ん。空しく徒らに之を放たば、唯雀を追ひ、鴉を追ひ、痴男を追ひ、淫婦を追ひ、慾を追ひ、邪を追ひて竟に惡魔の手に歸せん。放ちし人は其跡に付きて東に走り、西に走り、曠原を走り、幽谷を走り、竹藪に走り石坂に走りて得る所もなく、猶己まずんば五十年の命を險路の草の露と化して惡魔の犧となるべし　世の人々よ、心し給へ。吾も心せんといふ作者めも雀でも攫みしやいと嗚呼なりと笑はるゝも

第十五回　あら海や佐渡に横ふあまの川

と渡る舟の櫂の雫か、雨ふりかゝる袖のなみだは。

力山を抜く項羽も虞氏の別れには血眼こすり、悟りて庵りを鎖せし瀧口の法師も横笛の最後には靑い面せられしよし、さもありけん、さもあるべきに、さりとては志んじあといふ人、ばいぶるの蘇言機にもあらざるべきによく〳〵警醒三昧、明けても暮ても祈禱説敎とたゞ一筋に働かるゝ事よ。戀をしらすば神を知らじ、神をしらずば戀をも知らざらん。そもや戀のはじめは、是を大にすれば神と人にと起り是を小さく説けば親と子とより起る。兄を戀ひ、弟を戀ひ、此心長じて女を戀ひ、男を戀ひ、國を戀ひ、天下を戀ひ、後世を戀ふまでも伸ばさば伸ぶべき者ならん。見ぬ世の吾儕をまで戀ひに焦れて荊棘の冠を頂き、十字架上に果て給ひしくりすと、萬乘の位を捨てばだがやに終られし釋迦なんど、正偏西東の差はあれ、眞にありがたき戀しり、情しりにておはしける。さるを其流れ汲みながら心得ぬ志んじあの戀しらず、るびなを戀ふ心なくんば天下の女を戀ひ、男を戀ふ心いづれよりか湧來らん。天下の女を戀ひ、男を戀ふ心あらば何とてるびなを戀はざるべき。夫とは女の戀の焦點に當る男の事なり。妻とは男の戀の焦點にあたる女の事なり。此の焦點彼の焦點と一直線内にあるぞまことの美しき配偶とやいはん。るびなと志んじあとは好き配偶といふべかり

りし三人も、無殘や鶴に鴕鳥、鴛鴦に家鴨、孔雀に七面鳥との比例は、しんじあと此人々の間に立つべき程の者計り。あらなさけなや……おもかげの影だに今は見せじとや、さこそつれなく思ひ捨つとも、……あッ賴みし事は空だのめ。賴みし事は甲斐ありてこそ嬉けれ神も、……見たりし夢は兆なるとは惡魔め。……憎き魔は赤繩を扯き破るに爪銳く戀しき人は雎鳩の和を求むるに力を出さゝりしかと、胸には失望といへる海を湛へたりとも、しらぬ顏のぶんせいむはゑんぷるに向つて、

「是てみんな御揃ひになつたか。」

「まだ一人殘つておいでゝす。其紳士は筆を執ると其儘御考へなさる樣子もなく、電光の走るやうにお書きなすつて、少しもやむ間なく、殆んど一卷の書をなす程ですが、まだ終らないのです。」

「もう何枚かいた。」

「三十四五枚です。」

「何にしろもう時間もきれるから、其紳士をつれて來い。」

との問答を聞居たるるびなは、なにまだ一人殘りしか、僅の時間に三十何枚の文章を綴りしとか、はて其人は、もしやゑんじあ樣にはあらぬか、と疑ふ折から靴の音させてゑんぷるが連れて來りたり。私に見れば、いかに〳〵腹たゝしや、身の丈僅に四尺五寸計り、額大きく口小さく、人形の如きひね男なり。今やるびなは、絕望の大洋に浮びし木の葉の上の蟻にも似たり。

くすりと洩せし一笑は、吟蜩子の本音とも、白髯のぶんせいむは愈々あきれて言葉なく、嵐のあとの夕凪に平沙一望人跡なく、長海千里鳥聲を絕つとぞ云ふべかりける有樣にて、顏のみ見詰めて茫然たり。折からしんぶるは四五人を案內して入來れば、ぶんせいむ立つて一々挨拶握手する內、追々續いて來る人々、漸くに十時三十分頃までには二十七人となるを、さらばとぶんせいむのいふにまかせ、しんぶるは此方の食堂へと案內しける。閾を超れば天井高く電燈明るく、敷物の美麗なる裝飾の優美なるは辭にも演がたき結構、贅澤の極點と、猜忌から起る惡評も逃れにくき豪奢なれど、死んだ先の天國願ふまでもなし、生ける中の仙鄕、是でこそと羨む人も多かるべきが、うたてや太陽に暗穴、えてんにも蛇の住みし人の世ぞかし、あはれ戀てふもの丶なかりせば乙女心の長閑かるべきを、藻にすむ虫のわれからと泣くのみにはあらで、父の無理に押籠められつ、おのが思ひに垂れ籠りたるるびなは、しんぶるの妻に引出されて、よりどころなき花瓜の蔓おきまどふ風情にて、一列におきならべなる大なる食卓の左の端に、右の端の父と對つて坐りける心の中こそ悲しけれ。つれなくば世に生けらじと思ふ身の命定めに其人のあるかなきかを見極めんと、晴を注いで坐を見れば、いまはしや鼠食ふ支那人、おそろしや決鬪好きの佛蘭西人は尤とも近く、饂飩のぬらりとした伊太利人、麥酒のさらりとした獨逸人、髭をかしくすり附けし今樣才子、まなこ怪しく光るゑせ豪傑、我れ勝としたり顏するは罪もなけれど、いと憎くして其人に似る者もあらざりし。後れて來

と睫毛を燒く如き雷光に、案山子の云ひさうな挨拶、

「なる程さうでござります。お蔭で一ッよい事を覺えました。」

「ふん、支那の紳士は温順なものだ。何をいふても四十五度の側面で鐵砲玉を受けるやうな答をするのは實に温順、……卑屈、……いや決して卑屈ではない。數千里の山海を超えて、豚尾を侮る米國人の所へ、お婿さまには如何で御坐ると乘込で來る甲鐵艦、……其面皮の厚さといひ、其龍骨の硬さと云ひ、もう〳〵感心の膽勇だ。」

と小聲でもなき獨り言して、急に首を正面に向け下眼にてにらむごとくさげすむごとき、憎げなる光線を眼より閃めかし、調の低き太き聲にて、

「そして廣告の末條には、適當して居ると自信して居るのか、……自惚強くも。」

と頭上に墜ちかゝりたる一撃の雷には、非常の芭蕉も耳ある道理、亢龍いかで淵底にかくれん。

「然り〳〵、……然り。日月のてらす所、天地の包むところ、ぶんせいむの撰んで取るべき人はわれならずして誰あらん、田亢龍は確かに信ずこれ天命なり、天命々々なりとたしかに信ず。」

と疾風暴雨を尾端にまき、電光雷火を角上に弄んで渦巻立ちたる黒雲の中に、七十二鱗の黄金を閃めかし、おぼろに煙る小霧の間に、十有二爪の水晶をかけ、泰山を蹴つて北斗を握まんとする、黒龍王の叫ぶもかくやと思ふ計りの勢にて、反身になつて云ひ放てど、流石俳優にもあらざれば、

んぶるに向ひ、予は既に答をなせり、いざ御案内下さるべしといへば、あまりの事に言葉も出ず、顔打守りて茫然たる横合より、流石に老人は老人だけ、受取りたる紙打かへし見ながら、

僕「ゑんぶる殿、答はたしかに出來て居ます。」

と穩やかに告るに、驚は漸々をさまりけれど、胸には名殘の涙打つにや、渚に嘯く小魚の如くうろ〳〵とこそ導きけれ。ぶんせいむもかくと聞き、あまり早きに驚きけれども、其まゝあるべきにもあらざれば、立迎へて握手の禮を畢り、相對して坐しながら、此奴をかしき支那人、一捻り拈りて呉れんやと思ひけん、音調も何となく角立て、

「はあ、支那の紳士田亢龍といふ者はおまへか。」

とからかふ風に柳のあしらひ、

「左樣で御座ります。」

「さうかえ、今までかりふるォにやの鑛坑にでも居たか。」

と澆ぎかける冷水に蛙のたゆまず。

「いゝえ、本國から今度まゐりました。」

「やれ〳〵遠方御苦勞な、……然し廣告の七箇條位は都べて合格して居るのだから、隨分望を保つて、そしてよい夢でもたくさん見れば損にもなるまいなア先生。」

に、主人が適當と考ふる所の一問題の答を諸君に求むるにあり。勿論廣告第三條の件もあれば、決して文章の巧麗、議論の整頓等を望むにはあらずして、單に其意を見るにあり。用語は英語、佛語、獨逸語、伊太利亞語、露西亞語、羅甸語、希臘語の中は何れを用ゐらるゝも隨意なり。時間は十一時までとす。其答を書了られし時は、紙末に明かに署名ありて此老人に渡さるべし。さすれば、主人親子に於て晩餐を供したき心構へもあれば、私共御案内致すべきに付き、別室にお通り下されたし。偖其問題は、問題は」

といへば、皆々急に顏をあらため、眉をあぐるもあり、唇をしむるもあり、圓に眼を睜る者、額に皺をよする者もあり、あはれ人の心の中見拔く鏡もあらば、此時のあり樣は眞に心理學の尊き材料たるべしと思はれける。

しん「其問題は即ち不愉快といへる題にして、其起因性質及び之を匡濟する方法等、何にても隨意に十分に答へられんとを望む」

といへば、滿堂水を打たる如く靜まりかへりたる其中より、活潑に壯快に敏捷に、……金鯉魚が淵に躍る如く拔て走り出たる者あり。何ぞと人皆驚きて、頭をあげて見る間遲しと眼を注げば、身には紫綸子の袖廣き服を着し、光澤々たる黒油々たる帽子を頂き、辮髮長く後に垂れたる支那人なり。呆れてあッとあいたる口ふさぎもやらず、扨は答の出來ぬならんと思ふには似ず舌滑らかにま

ゝりしなれど、即ち此の無試驗といふ事を取て、自ら問題とし、自ら落第せる人々と見做して無論謝絶す。又次に予が園中を去れと云ひし時、これに從はずして執拗にも園中に止まりし人々は遜讓の美德なることを知らずして、不快の念に自ら克つことなく、些少の無禮の風に憤りて、自己の心中に激沸の涙を起したる者ならんと信ずれば、こは癰を護りて刀を嫌ふごとき人々として謝絶す、」とぞありける。偖も〳〵案の外の試驗に、或口善惡なき滑稽家が、女郎蜘と蝦蟇のぽんち繪をかきて、「眞の足は實地の上を離れて拙き手を空望にかけたる蝦蟇は、美しき女郎蜘の婿にならんと、あるかなきかの試驗の巢に、かゝりて落ちたり」と嘲りしにぞ、天晴れ浮世の綱渡り、踏外したる物笑ひとはなりぬ。あはれや定めしあじきなしと喞ちて、身を知らねば人の咎と恨み顏にも袖ぬらす者の多からんと、此方で噂さすれば、それにしてもるびな孃のあり樣ぞ聞きたきと、兎耳聳やかす探訪者も口を箝みて鍵をなくした箱の中、分らぬと計りに歎息する内十日程たちて、第二回の試驗となれば、三十一人の候補者は、午後七時迄といふ招狀に應じて、續々と入り來るを、先とは違ひてしんぶる夫婦は、一々叮嚀に挨拶し、淸くして廣き堂の內にならべたる卓子の前に坐せしめぬ。椅子も柔かく暖爐も炭を惜まず、かくて殘らず打揃ふたる時、一人の老僕を從へてしんぶるは出來り、各に筆墨及び紙一帖計りづゝを遞與し、敬んで陳ぶるやう、

「扨今日は第二回の試驗にして、即ち何人が尤も能く第八條の資格を有せらるゝやを知らんが爲め

ふ「諸君、今日の試驗は既に終れり。」

第十四回　葱白く洗ひ上げたる寒さ哉

醜事千里に流れ渡りて慙をかいたる顏の赤ッ葉。

羽の音長閑なる春の日の蜂も花を尋ねていそがしく、鳴く聲わはれな秋の夜の虫も露を求めてやせはしかるらん。玉の甍に内日さす大宮人、草の屋に風をかなしむ賤の女、いづれ生とし生ける者尋ね求むる所あらざるはなかるべし。此の搜さるゝ所の者を樂と假に定めてほの暗き慾の街道を覺束なくもたどりたりし六千年の旅日記の外に世界の歴史もなく小說もなしと哲學者の口眞似もをかしけれど、彼の求婚事件を見ても知りぬべしとの小新聞の批評を強ち無理とは人も聞かざるべき十一月六日の廣告欄內に、「予が予の愛女の爲に求婚の廣告をなしたる以來申込の候補者非常に多く、終に昨日果して何人か能く廣告末項の資格を有するやを試驗せしに、予が一言をも發せざる間に、早くも少しの時間の空費と、禮節の欠亡とに堪ふる能はずして、不快の念を抱き、立去りし人百九十七人ありき。これ無試驗といへる平和の洋上にありながら、自己の妄想をもつて狂瀾激浪を水天髣髴の間に認めて、惶忙退回したる如く、自ら其の船の脆弱、其人の怯懦を表露して、到底人生の航海を安全愉快に了る能はざるを示せる者なれば、右の人々に對して、予は何等の試驗をも爲さ

ぜ「僕等を豆と比較するは餘り烈しい。失敬ではないか。早天から呼付けておいて今になつて歸れとは失敬だ。一つ決鬪狀でも付けてやらうか〳〵」

〇「そんな紳士もありますまい。」

ぜ「でもあまりといへば。」

△「然し諸君の幾分は園中を去れといふのだから、僕等は去らない計りだ。」

ぜ「是はおもしろい。そんなら僕も化石するまでも此處を離れまい。」

と激昂したる人のあり樣、あはれ平日の名望なくんば、美麗の園も風雅の家も微塵にさるべき勢なれど、此中三十人計りは詮方なしとや思ひけん、今や歸りて門を出んとする時、むくつけき田舍爺の門番が、歸るなら名刺をおいて行けと云ふに引返す者二三人、其餘は皆々歸りしが後に殘りし人々は一時には怒り二時には苦しみ、三時には稍疑ひて談話も途切れて腹の中に、あゝ矢張ぶんせいむの惡戲かしらん。……つまり玩弄物にされたかしらん。……それにしても、もう少し氣の利いた事がありそうな者と、口にこそいはね思ふなるべし。

△「ときにもう三時ですが、舊敎の僧侶ではあるまいし、斷食は恐れますね。」

ぜ「口に溢るゝ豆でも食ひたくなつた。」

と云ふ折しも此家私有の滊車の今や紐育へ發せんとするに乘りて

と言ふまゝ引込みたりければ、

よ「實にぶんせいむといふ奴は奇怪極る奴だ。是は矢張り豫て世人の猜した通り我々を釣り寄せて笑ひ草にしたに相違ない。」

ら「そうでもありますまいが眞に失敬千萬だ。」

○「然し一向譯が分らないから迂濶には歸れない。」

ぜ「左樣々々、黑暗の夜は馳せるなだ。」

よ「無氣力者は勝手にしろ。」

と、人さま〳〵の考へ、二百人計りは、「まづ今日は。」と小言ぶつ〳〵歸りける其後に間もなくしんぶる出來りて、

「只今主人ぶんせいむが、此家の南に面したる樓上にて諸君に一言するよしなれば、御注意あれ。」

と云ふを聞き、ろれと皆々步を移し、首仰向けて見上ぐるに、樓上の廊下らしき所に突つ立たる老翁は白き髯を拈りながら雷の如き聲銳く、

ぶ「諸君よ。今日の予の不敬を咎むるなかれ。諸君はあまり多數にして實は當惑せり。口に溢るゝの豆は嚙むこと難く、堂に溢るゝ客は接せん事難し。讓れ諸君相讓れ。諸君の幾分は園中を去れ。」

ら「おやもう引込んでしまつた。」

ば即ち開かれん。（はゝわや〳〵）予はぶんせいむ氏若はしんぶる夫婦に會つて問はん、吾輩は何時まで此所に居るべきかを、‥‥‥來れ。同意の諸君は予と共に來れ。」

と山を下りて進み行けば、人々も皆待ちくたびれたり腹は餓ゑたり、實に此男の云ふ如く、便々と立ち明かすとも詮なしと、多くは付從ひて先にしんぶるの入りし戸口に來り、推す者あり叩く者あり、罵り騒ぐ事大方ならず、誰ぞ應ずる者なくんば打も破らん計りなり。此時中より戸を開きて立出でしを誰ぞと見れば、白き絹の伊達衣服を着けて笑を含みし容貌憎からぬ女ぶり、是しんぶるの妻なれば流石に騒ぎし人々も少しく靜るをまちて、

妻「諸君の頻と騒ぎ給ふは何か當家主人に求むる所あつてゞせうが氏は實は諸君に面會するとを嫌へり。（がや〳〵として聞き取れず）妾は諸君にかはりてぶんせいむ氏に諸君の言ふ所を傳へますから。」

と云ひ終るもまたず、

ト「試驗は何時にはじまるのです、貴孃には分りませんか。」

妻「妾には分りませんが聞いて見ませう。」

と奥に入りて忽ち復來り、

妻「主人の言葉には園中の人々は承知して居る筈だと申します。」

「いま〳〵しい事をいふ奴だ。」と云ひながら何思ひけんづか〳〵と、先にしんぶるの上りし築山に登りて諸君と呼べば、弱り果てゝ樹の下に憩ひし者も、草の上に坐せし者も皆耳を欹つ。此方は勢付きて兩手を振り、

「諸君と予とは箇々皆當選を爭ふの競爭者なれば、其意見は各々異なれども、蓋し其ぶんせいむ家に對する意見は各々相似たる者なるべし。即ち試驗に應ずるに付ての方案は各自相異なれども、試驗を望むの感情は各自相同じき者と申すべし。さて今日ぶんせいむ氏が吾人に對して爲せし事を、諸君は何と考へらるゝや。彼は五時を限りて呼寄せしにあらずや、彼は吾輩をして、寒風を凌ぐべき者もなき廣園の中に佇立せしめたるに非ずや、疲勞を休むべき一個の椅子をも與へざるにあらずや。今や既に十二時なり、多數の人は餓にせまれり、然るに彼は一杯の珈琲をも與へずして吾輩を園中に禁錮するにあらずや、一の試驗をも爲さゞるにあらずや。噫居るに家なく食ふに水もなく、而して其冀望は何の日に成るを知らず、若し冷眼の人ありて吾輩を評さば、無氣力のろびんそんとなさん。（ひや〳〵）然りと雖も余は無氣力に安んずるとわたはず、諸君も亦無氣力に甘んずると能はざるべし。蓋し諸君と余とは同一の地位に立ち同一の待遇を受けたれば之。然り諸君は試驗に中りて及第せんことを欲して來し者にして事もなき廣園に飢ゑんが爲に來し者にはあらざるべし。噫無氣力の人類は勞働せる蟻に及ばずとは名言なり。起て諸君、歩め諸君、行け叩け門を叩け。叩か

り。故に朝食を終るまでの時間を算入すれば、早くも九時三十分にあらざれば諸君と相見る事なかるべしと信ず。諸君願はくは悠々と御待ちあらんことを。…然しながら本日は自ら平日と異なれば、或は只今起出でて來るやも測り難し。」

と云ひ終りて堂の中にぞ入りたりける。

ぜ「何だ人を馬鹿にした、…其位なら十時までと廣告すればよいに。一生に今日計りだ四時に飯を食つたのは。」

ト「僕なぞは朝食はまだゞ。大かた饗應でもあるのだらうと思つて來た。」

ぜ「饗應、はゝゝ自惚の强い。」

△「どふでもよいわ、だまつて居ろ。」

○「兎も角もぶんせいむといふ人はあまり失禮です。」

と十人が七人までは、怒りしが、其中には出て來るならんと待居たるに、七時となれど音もなく、八時となれど音もなく、九時十時となり十一時十二時となりても音もなければ、

じ「あゝたまらない。此廣い園中に禁錮されて寒さは寒し腹はへるし、試驗は始まらないし、實によわる。」

ぜ「腹の餓は腦の鈍い動物を働かせる鞭だ。」

低く、是に從ひし小僮が鐘をならせしかば皆々ふり向て何事やらんと目を注げば、體に似合はぬ大なる聲にて諸君と呼びたり。

今「あれは何者だらう。」

○「さやうさ、ぶんせいむといふ人ではありますまい。」

よ「なにあれは此家の宮內長官のえんぶるといふ男さ。」

ぜ「やい、じよん。貴樣も來たな。」

よ「貴樣もか。」

ぜ「よせばよいに、貴樣なんぞどうせ落第だ。」

よ「失敬な事をいふな‥‥然しぶんせいむといふ奴は失敬な奴ではないか、馬鹿に早く呼寄せて置いて此寒さに室外にまたせておくなんぞは。」

ぜ「さうさ大きに閉口だ。」

○「何かえんぶるといふ人がいふのでせうから靜にし給へ。」

と宥むるもあり、罵るもあり。がや〳〵と騷がしきを、えんぶるは大喝して、

し「予は一言諸君に忠告す。今日五時までに來らるべしと廣告せしは全く主人ぶんせいむの命令なりしなれども、主人は每朝八時三十分にあらざれば覺むる事なき習慣にて、今は尙ほ寐牀の內にあ

……今日の貴樣のありさまでは、とても仕方がないから、壓制をうけて居ろ。受けぬと云つても、貨物の入れてない革嚢は押しつぶされる者だ。實力のない詞は立たぬ者だ。何を考へて居る、……兎も角も、父の愛情の壓制は子が愛情の忍耐て受けるがよい。是も一つの美しい現象だ。さあ〳〵、えゝ、また何か考へて居るか、……何だ泣くのか、……あはは〻〻、馬鹿な奴だ。おれの泣いたのは、十二の時、父の顏を見た時と、五十六の時、貴樣の母に死なれた時ばかりだ、……いくら涙は婦人の武器でも、そんな武器は、此頑固の親父の胸を痛める事は出來ぬぞ。」

第十三回　景清も花見の座には七兵衛
日頃は兎に角、人前つくる慇懃面、

鏡に向ては去どけなき姿を愧ぢ、鶯の前には紙衣の起居を忍ぶ。誰しも境には轉ぜらるゝ習ひなり。

十一月の五日午前五時までとの廣告に應じて來しもの、馬に車に徒歩に吾劣らじと各々肩を聳かし鼻を動めかして、寒さも強き空の薄暗きをも凌ぎてぜねらす村にあつまりけるに、寂然として人もなく、案内を乞へども答へもせず。人々是はと怪めども如何ともせんかたなければ、皆心中に不平を抱きて園内を散歩せり。頓て六時頃庭の中央の小高き築山に登りし男あり。顏丸く赤くして丈

「何故といふ問に答へる事は出來ぬ。どんな博士でも、人の自由を束縛してもよいといふ理屈を、説く事は出來ない。」

「そんなら又なぜいけないのです。」

「其何故といふのをやめてくれ、……やかましい人權論なぞで壓制の辭柄を作るやうな間の抜けた事をするおれでもない、……唯人情、……或時は道理の墻をも超える人情といふ者で、……其愛情といふ者で、無遠慮に壓制する、……胃病の小兒の手から、氷砂糖をとりあげる壓制は、善でも、惡でも、不法でも、苛酷でも、親の愛情として止める事の出來ない者だ。」

「お詞は御道理ですが、小兒は一個人の資格のないもの。」

「貴樣は自分で、天晴れ一個の女子と思ふて居るのか。あはゝゝ、自惚が強いぞ。理屈はさうかも知れないが、世間見ずの卓論だ、哲學者の愚論だ。今日の世界は、理のある所に權のあるのではなくて、力のある所が權のある所だ。つまり貴樣に力がない中は、予の壓制をうけて居ろ。」

「と仰やつても。」

「えゝうるさい、だまれ〳〵、財産を讓りうけなくつてもよい、保護を受けなくつてもよい、ぶんせいむを敵にしてもよいといふ決心と準備があるなら、何日でも予に十分の反對をしろ。其反對は力のある者だから、貴樣の思ふ通りになるでもあらうが、己の壓制を逃れる手段は、外にはないぞ、

「かしこまりました、……今度申込まれた人々は、當國の人が一番多く、次で佛蘭西英吉利獨乙伊太利などで、國の總計は十七個國です。財産を相應にもつて居る人學位を持つて居る人勳章を持つて居る人官爵をもつて居る人も、御座りますが、是等は必要もござりませんから、別段記しても置きませんでした。」

と話す中に、小僮走り來りて、電報がまゐりましたと、渡すを取りてひらき見れば、

「世界の中に尤も愉快の生活を爲すものは予なる故に、予は貴下の令嬢の配耦たらざるべからず、と考へて來れり、貴下も喜んで待たるべし、來月五日までには十分到着すべし、さるとれきしていの停車場にて、でんこうりようよりぶんせいむ君」とありければ、笑ひながら、

「この人の名も、其名簿の中に記しておけ。」

「はい」と答へて、名簿を抱へ出行きぬ。るぴなは如何にもしてちェりいかゑんじあに逢ひたければ、

「もしお父さん。」

「なんだ。」

「あのお願ひですから、交際の自由だけ、お許し下さいませんか。」

「いけない。」

「何故でございます。」

「それではあの、妾に面會を求めたり、書狀を投じた人もあつたのですか。」

「あゝちよいだの、じやくそんだの、しんじあだの、色々の人が來たり、知事の夜會だのなぞと樣々の事をおまへの處へいふて來たのを、皆おまへに知らさずに、謝絶しておいた。」

「それはあまんにお情なうござりました、……矢張夢は正夢かしらん。」

「なに。」

「いゝえ。」

「あはゝ、多少不愉快に思つて居るに相違ないが。いくら不平でもかまはない、……不平、……不平とは智慧と力とのない者の肩に付いて居る重荷だ、……詰らぬ考を捨てゝ靜によい婿の定まるをまつて居がよい。」

と獨り承知の父の詞、背くもつらし、從ふもくるし、唯萬一の望をかけしは、若しやしんじあが、申込みはせぬかとのみなり。思ひ沈みて卓の古き錐の穴に眼をそゝいで、返答もなく默然たる折から入來るは、此家の良宰相と世間に評判せらるゝしんぶるの妻、手に一冊の書を持ちながら、るバなに一寸會釋して、主人に向ひ、申込み人の名簿を作りましたから御覽下さいといへば、

「大きに御苦勞だつた。然し先づ申込みの期限も今日限りだから、おまへの役も明いたが、又來月の五日には賴むよ。」

寶石にて、二等星は金屬なり。裏面には鏡のありと見えて、燦然として光を放つ樣、さてもおそろしき驕と見ゆれど、二億に近き財産家にしては、左にあらず、是は主のぶんせいむが、若き時の船の上の生活、或時は嚴氷の中に波を切り、或時は熱風の間に帆を張りて苦みし昔を、忘れぬ爲の異常の裝飾なれど、一つはまた放曠豁達の氣象ゆゑ、微々たる一軀の彫像、碌々たる幾枚の繪畫の類などは、眼の中にも入らざる故なるべし。美しくはあらねど、確なるべき時計寒暖計風雨針と、かたき椅子、古き卓の外は何もなく、卓の上に五六冊の書あれど、何れも板本とは見えず。是にうようくのぶんせいむ家の奧まりたる主人の常の閑室なり。るびなは今此の硬き椅子に、迷惑さうに腰掛け居れり。ぶんせいむはことことあるきながら、例の白髯を撫で、

「るびなよ、定めし今まで父がおまへの交際の自由を妨げて、友人と面會もさせず、通信もさせず、各所から招待して來る宴會にも出席させず、ぜねらす村に、押籠めて置いたのを、不愉快に思ひ壓制とおもふたであらうが、よく温順しくして居た。然しそれもみなお前の爲めだ。畢竟は澤山の應募者の中に、おまへの好惡愛憎が付いては、試驗が仕憎くなつて、切角世界一の婿をとつてやらうと思つても、どんな奴を思ひ違へて、極めぬでもないからだ、…だが、もう今日は十一月三十日、申込みは今日限り。來月五日には、ぜねらす村で試驗をしてやらうと思ふが、決定の付くも僅の間だから、それまでは不自由でも、温順くして居ろ。」

えに、云はぬ螢のこがれたる、心の夫はひとり虫、切なき戀とや喞つらん、露けき羽の飛び惱み、風を厭ひし蝶々の、木の葉にかくれし如くなる。折から虫の音みだれ立ち、靴音せはしく來る者を、だれぞと見かへる間もなく、大喝一聲雷の如く、墻を覗ふ曲者は、犬か、狐か、乞食か、木の葉を偸む悪童かと、言葉も烈しきぶんせいむに、るびなははッと驚けば、身は是れ常の閨の中、枕時計の五時の鐘、ちんと一ッぞ鳴りたりける。漸く胸をなでながら、首をかしげて窓を覗けば、有明の月光りなく、影白うしてあはれなる事云ふ計なし。

るび「あゝ夢であつたか、……あゝ。」

幻の如き香をのみ、人の胸に殘して、其色は、白雲の上に吹入れられしならんか、其俤は、青海の底にや吹沈められしならん。

第十二回　木枯に岩吹きとがる杉間かな

こう〳〵と啼く狐の聲は、怖氣付いたる耳におそろし。

四方の壁は各地の地理の模形にして、山川港市或は青く或は赤く、或は凸く或は凹みて、細工も眞に巧妙なる陶製なり。高くして廣き天井は、天の星辰を寫して、七星十二宮云へばさらなり、素人が名を知らぬ星まで鏤めたるが、火星は紅寶石、水晶は水星、金星は眞珠なるべく、一等星は大概

も御歸りになると直に、ぶんせいむ樣に先づ御目にかゝり、御無事の御悦を申してから、御孃樣に御目にかゝらうと存じましたらば、娘の緣の定まるまでは娘に逢ふな。手簡も直接にはだれにも遣らせない位だとの仰せ。餘り不思議ですから、何故ですと御言葉を返しましたら、何故でもよいと、御怒りの摸樣ですから、到底當分の中は、妾も御目にかゝる事は出來ません。」との返答で、實に私も困りましたが、幸ひ今宵は明月、…月花のあはれを知り給ふ貴孃の事、若しも庭などにも出給はゞなどゝの、果敢なき事を賴みにて。」

ろび「それでは忍んで御出になりしか。」

しん「如何にも。」

ろび「それ程までに此の妾を。」

しん「思はないで何としませう。」

ろび「えゝもう嬉し。」

も口の内、二人は互にすり寄りて、握手も無情の垣根越、此方は父を彼方は世を恨むか泣くか松虫の、まつとも甘露の日もあらじ、親の言葉に從はゞ、二人が中もきり／＼す、情あらしに鈴虫の、鈴ふりなくす歎きより、いとゞ苦しき轡むし、言はんとすれど得も云はず、むせぶ涙の玉虫や、仇しむこがねとるならば、假令父にはこうろぎと、ほめらるゝとも嬉しからず、いなごの否と云へば

縁をお定めになる中へ、いくら貴孃と私の間に思ひ思ふても無益の事、……また私があの廣告に應ずるとは、どう考へても、名譽と目的とを腰に付けて黒暗の水の中に沒入して眞珠を取らうとするやうな者で、……と申したら、情に薄いものは勇に乏しいと、仰やるでせうが、私もえんじあと申す男一匹、正當の戀を正當の方法で成就しやうと勤むるには、勇氣を決して惜みませんが、無法の想像の慾に使はれて、萬一の僥倖を求め、貴孃を釣らうとは、まア仕憎い事、……然し眞實貴孃を戀ひそめてから身代の懸隔も打忘れて、見給へ、あの月の雲に掩るゝ時はあれど光は常にある如く、色々の故障の雲により、假令表面は暗くなり、朧にも見ゆるとも、心の内には戀の光は充ち溢れて、盡きる時はありません。唯是丈の心を御知らせ申さうと、實は先日伺ひましたれば。」

ろひ「え。」

しん「不幸にも其雲は益々厚くて、貴孃の眼に、其光を入れる事は出來ませんでした。」

ろび「えッ、え、まア如何いふ譯で。」

しん「何いふ譯か存じませんが案内を頼みますと、令孃の姻縁の決定する迄は失禮ですが、『御面會の御延引を願ひます、……是は主人の命令です。』との挨拶。」

ろび「是はどうも眞に失禮、……妾は少しも」……

しん「多分御存知ないのでせう。それからちェりいに傳言を頼まうと存じましたら、ちェりいが『私

しん「およびなすつたのは何様です。」
るび「何様とはよそ／＼しく、情ないおことば、るびなを忘れ給ひし乎。」
しん「懸しいるびな嬢でしたか。久しくお眼にかゝりませんでしたが、お達者で。」
るび「あれよそ／＼しい他人行義、そんなにお疎みなさらないでもよいではありませんか。」
しん「疎むの忘れるのと御仰るけれど、まんじあの脳には、貴嬢を忘れたり疎んずる力がなくて困る位です。」
るび「其の困ると仰やるが、疎んじて居らつしやる兆ですよ。」
しん「其様な事を仰やるが、私が此夜深に此邊を彷徨のは、なんの爲だと思つて居らつしやる。」
るび「何の爲ですか、妾は妾を疎む人の胸の中を知る事は出來ません。」
しん「ほゝ、人の胸の中を知るとが出來ません……ならば、疎んじて居るか居ないか知れない道理ですよ。私こそ却てあなたが私をお疑ひなさるのをお恨みにぞんじます。」
るび「それでは是程思ひ詰めて居る私の胸も分らぬと仰やるのですか、……そしてまあ、ちぇりいにはお逢ひなさりませんでしたか。」
しん「さア其事で、……ちぇりいから段々貴嬢の御心入をも承り、飛立つ程うれしくは思ひましたが、どうも思ふにまかせぬならひ、……貴嬢が貴嬢の姻縁を定めるのではなくて、父上が貴嬢の姻

ゐるから、夢路をたどるやうな有樣、……夢ではないかしらん、夢と現の境界かしらん。ヒュー
ヒュウッ。あゝ夢ではない、此方に聞えた。」

と、やをら身を起し、力なげに椅子を離れて、窓の外をさし覗けば、月の光り廣庭に充ちて隈なく、眼に障る人もなし。されど可惜しき良き夜と扃を開きて廊下に出で、石の階子除に下りて、音のする方に歩み行けば、あき風冷かにおとづれて、千草に亂るゝ白露の、玉ちり〳〵に泣く虫の、聲もすがれてあはれなり。近づく人のありぞとも知らでや尙も吹弄む笛は小さき者なれど、聲嚠々といと高く、韵嫋々といと妙に、腸を斷つ巴峽の猿子を失ふて叫び、寐覺悲しき片野の鶉妻を呼ふてなくが如し。さては心憎きゑれもの、顏見たしと、身を屈めて籬より覗けば、此時全く浮雲掩ひて、あたり忽ち薄暗く、實に恨ある世ともどかしきに、彼方は笛を吹きやめ、二足三足あるきしけはひして、「眺むれば、いとゞだに、昔の事の忍ばるゝ。陰らばくもれ、秋の夜の、月に恨はあらじな、」打見れば、いやましに、浮世の事の悟らるゝ。かくさば隱せ、秋の夜の、雲に恨もあらじな。」風の前には、花おもしろく、雲の間には月の尊とさ、雲風しげき人の世に、戀の道こそ微妙けれ。」と朗らかに吟じたる歌の心に通ひてや、雲行き過ぎて空明るく、疏るゝ光りにすかし見れば、紛ふ方なき其人なり。

ろび「ゑんじお樣。」

ろび「ちェりいの所へ返辭をしてから。もう二月計りになるに、どうしたであらう。歸つたと聞いたら、一番に來さうな者だのに、　しんじあ樣もどうなすつたらう。…愈々秋風が立つて音信給はぬのかしらん。妾の話をちェりいから御聞になつたら、秋の虫の細き音も、少しは可憐とし給べきに。」

と喞つ折から、窓掛そよ〳〵と動く風につれて、ヒューと、淸み渡る音に、はてと首を傾くれば、寂然として夜は靜に人は定まりて、吾より外に起居る者ありとも思へず。

ろび「うろ木を吹く風にしては響が少し弱かつたやうだが、草葉にすだく虫の聲よりは强かつたやうだが。」

獨り言つ時、又もやヒュー〳〵ッと跡はとぎれたり。

ろび「又聞えた樣だ、…調子があつたやうだが、…あゝあまり色々想ひ屈するので、氣の所爲て聞えたのだらう。晝間讀んだ詩集の中にも、(夢よ、夢よ、あはれの夢よ、汝は何處より來りしや。汝は感覺といへる鋭き風の力弱き時、思想といへる柔らかき土の潤ひ多き所より、幽に咲出し花なりや。あら美し、あらいたいけなり。さもあらばあれ、情なき風また吹かば、果敢なかるべき幻の如き香をのみ、人の胸にのこして、其色は、白雲の上に吹入れらるゝならんか、其俤は、靑海の底にや吹沈めらるゝならし。)とある通り、妾は今感覺の力が弱くなつて、心計り頻りに働いて

第十一回　馬ほく〳〵吾を繪に見る枯野哉

心の猿の狂ひ出て、啼くも淋しきあり明の空。

齒の拔けた夢が寒蛩の聲に覺めてから以來、急に風が肌にしみてまゐりました、と遠國者の年寄がかこつ秋にはなりぬ。心なき身にも哀れなるを、まして物思ふ人は何とや見るらん、水晶の簾に玉を嵌めし如き硝子越しの月を詠めては、別れし吾妹子の面影寫す鏡ともなれかしと悲むもあるべく、美人の髮を惡魔のつかむごとき薔薇園の野分に驚きては、故鄕の女兒の寫眞取出して無事かと氣遣ふもあるべし。豐に育ちしるびなは浮世の味も、今年初て身にしみて知りたる旅路恙なく、父と共に九月の頃家に歸りぬ。僅に二三ヶ月の他行にも、勢利に媚びる世の習ひ、「水の變に御あたりもなかりしは結構、……よい御慰で御座りました。御歌も定めて澤山御よみになりましたらう、……お留守の中はさみしくてなりませんでした。」なぞと、輕薄の追從うくるもうるさし。身體も少しく窶れたりと、父には離れてぜねらす村に復び安居たり。一日過ぎ二日過ぎて、五日六日は旅中の談話と感情を繰り返して暮せしが、胸の骨に刻まれたる戀人の肖像の消ゆべき時もなく、何時の握手の折よりか、動脈の血の中に、なつかしき移り香去らず、よしや玉の緒はたゆるとも絕る間なき憂おもひ、

何なる寃枉に逢はむもしれず。文明國でないから尙たまらない。人世に道理といふ者は、半分より多け通らないといふのも今おもひ當つた、‥‥然し詐僞をして亢龍の名を被るも快くない。謝絕されゝば一生の履歷に大愚の證據を殘し、成就すれば讐めない婦人に氣の毒。何にしろ迂濶から起つた身の罪と悔み惱むなるべしとは、傍目の判斷當つた事なく、忽ち低れたる頭をふり仰むけて、半面に怪しき笑をふくみながら、

吟「承諾致しました。」

といへば、亢龍はいやみの眼にて、睨みながら、

亢「よし、‥‥然し途中で逃げる事なぞは出來ぬぞ。唐狛、‥‥貴樣も知つて居るあの伶悧蟲を付けてやるぞ。」

と云ふ折しも、坐に來る唐狛、吟蜩子を尻目にかけて、

唐「あはゝゝ。へい〳〵。いやもう何でも世の中は、官人の思ひ通りに行くのが不思議です。」

といへば、

亢「不思議といへば無名翁の占だ。えゝ欲下溯二銀河一訪中織女上順レ僦風流閑窩人か。あゝ妙だ。」

と云ひかけて此方をむき、

亢「吟蜩子、是でも天命で御座るまいか。」

吟「むう。」

亢「えゝ止むるな。」

とふり拂ふをまた引止むれば、

亢「承諾したか。」

吟「むゝ。」

と袖はとめても止め難き、胸の動氣のはげしき風に、倒れんとする根無しの樹の、また如何ともせん方なく、

吟「暫く待給へ、眞に暫く待給へ。」

亢「またぬ、否か應かの返答に何の手間のいるものか。」

吟「が、……事を斷ずるには片時の間も尙ほ遲けれど、事を謀るには三年の日も或は早からんですから、暫時」……

亢「そんなら、爰にある半瓶の酒を呑む間丈け待つてやらう。」

と云ひながら早一杯を呑みたりける。噫吟蜩子の切なき腹の中にては、偖も馬鹿々々しき話かな。人の代理で及第する位なら、自分でするに、……といつて斷れば亢龍めが唯はおくまい。又もや牢獄の苦を受けるのは、……殊さら支那人の服裝言語をした丈が、此方のあやまり。惡く疑はれて如

六「無名翁が慥に說いた。どうしてあの地盤は人爲ではとても出來ぬ。全く天作だから天命だ。」
吟「地盤でも、天命でも、天理に違つて居ます、婚姻に代理人を用ゐるなぞといふ事は。何樣か御免を蒙りたいものです。」
六「いよ〳〵貴樣は承諾しないか。」
吟「どうも是計りは。」
六「よし〳〵、汝、恩を忘れる犬め、畜生め。王侯にも屈せぬ亢龍が、膝を折り禮を厚くして賴むに、……牢獄の苦を助けて吳れたも忘れ、……暖衣飽食の恩も忘れ、旅費をやらう、通劵をやらう、自由を與へやうといふ情もかへり見ず、些細の事を承諾せぬ瘟猪め、烏龜め、覺悟しろ。關帝廟に放火せしと、自ら醉後に語りしと、吾公人に訴へん。それのみならず、汝はこれ姿風俗を詐りて入込み來りし日本の細作なりと、吾父に上書せしめて、辛き目見せん。泣くな、吠へるな、瘟猪め、犬め。」
と飽まで傲慢偏執に云ひ放ちて、靴の音もあら〳〵しく、立去らんとすれば、吟蜩子はあわてゝ袖をとり、
吟「まづ、まづ待ち待ち給へ。」
六「まてとは承知か。」

六「おつてもなくつてもよい。おれの眼をもつて及第すると鑑定したのは外れる氣遣がないから、是非頼む。」
六「是非と仰つても、其樣な馬鹿な事が。」
吟「馬鹿でもよろしい。」
六「壓制ですね。」
六「壓制でもよい。」
吟「實に閉口します。」
吟「閉口なら承諾しろ。」
吟「驚きますね。」
六「驚いても構はぬ。」
吟「是は無法。」
六「無法でもよい。」
吟「あゝ叶はない。」
六「叶はぬ筈だ、天命だから承諾しろ、」
吟「何で天命。」

異の廣告をして婿を求めるのを、…ところで予が其るびなといふのを得たい、…親父なんぞはどうでも構はぬ、事成つてから告ぐれば俗物共は眼を瞬て口をあく計りだ、…ところで、君を煩はしたいのは、各國から何百人集まるか知れないから、果して誰が不愉快の感情を抱かない愉快の男子だかと、試みるに相違ないから、其試驗に僕の名を被つて出てもらひ度のだ、…君なら必らず及第する、…そこで結婚の約束だけとりきめて、何樣にかごまかして婚後の旅行に、るびなを此處まで引張て來てくれゝばよいのだ。勿論是は十分に君を信用するからの事だ。さすれば君に自由を與へ旅費を呈し、各省の旅行通劵を與へて、其後は君の勝手にまかすのだ。」

吟「や、いけませんよ。どうも婿の代理人て…そんな馬鹿氣た事があるものですか。」

亢「君はぶんせいむの廣告を虚誕と思ふか。」

吟「世の中に苦のない者もないに、あんな笑しな廣告、…然し虚誕とも思ひません。秦皇漢武が方藥仙人を求めたのも同じ事で、人欲は限りのない馬鹿者ですから、衣食住や財產爵位名譽等が十分になると、尙進んで長生を願つたり、神通を得たがる者で、…兎角何不自由もない人が、浮世を觀じたとか、無常を悟つたとかいふ向の多いのも、矢張つまる所は躰を變じて來た計りの、同じ慾に使はれるので…ぶんせいむも其通りで、天女も五衰の世の中に、此樣な愚な考を起したのですから、これに應じて及第する人はありはしません。」

ならべさせて、

亢「聊か君の鬱陶を慰め、且つ共に快く談笑しようと思つて。」

吟「いやもう眞に有難い。」と輕き調子の挨拶は、二十五の壯者には中々枯れた口前なり。傲慢の亢龍も流石に云ひ出し悄ぐや、酒漸く酣なる比、僅に醉ひの力をかりて、

亢「君に一つ頼みたい事があるが、一盡力して呉れるか。」

吟「是はあらたまつて、……古詩でも作りますのか、……先日御話の新西廂記でも作らうと云ふのですか。」

亢「いや。」

吟「飜譯の御好みでもあるのですか。」

亢「いやそんな容易の事ではない。……然し成否によらず是をやつて呉れるなら、君の豫ての頼みも聞き屆けやうから、承諾し給へ。」

吟「それは有難い。……兎も角も僕に自由を與へやうと仰しやるなら、無論盡力致します。」

亢「早速の承諾滿足なり。外でもないが今度妻を迎へるに」

吟「賀詞でも作りますか。」

亢「まだ其處までにはならない、……君も知つて居るだらうが、米國のぶんせいむといふ男が、奇

りし偏人、自から、風流の細水になくや瘦蛙、と吟じ捨てたる四大假合のうき身を扮して、いでや庾嶺の月梅、洞庭の風水に遊ばんと、或日の興に乘じて故郷を出しが、猜忌の強き支那人の中に、日本風も便り惡しと、髪も組み衣もかへて、其處此處となく經歷せしが、去年の暮、ある所の關帝廟に一夜の露霜を凌ぎしに、運わろく其曉の失火にて燒けゝり。これは元より廟もりの過失なれど、廟もりは自己が罪を逃れんとて、吟蜩子の仕業なりと云ひければ、知る人もなき孤獨の客の爭ひ難く、牢獄の内に籠められ、寃枉の罪に苦みしを、亢龍如何にしてか聞出しけん、人物風雅に談論輕妙なるを知りて、尋ね來りて相語りしに、思ひしよりは尙まさり、傲慢の耳にも面白くめづらしがりつ、遂に自己の家の子にせんと、かゝる矯子の癖として、父にせがみて免されん事を願へば、素より賄賂行はれ私謁盛んなる官員仲間、早速に埓明きて恙なく引取得たり。是れより亢龍傍をはなさず、樣々の事を問ひ尋ねて其答を自己の說として、朋友の間に說誇れば、皆其見識學問の進みたりとて驚嘆すれば、ます／＼竊に喜びて、昔の人の帳中に秘し置きたりし論衡よりも尊しと、深くも小室に潛ませて、少しも外出を許す事なければ、吟蜩子より考ふれば、牢獄を出て牢獄に入りしに異ならず、有り難迷惑のゑせ恩義の足かせかけられて、走らんとするにも拔目なき番人に自由ならず、物に頓着せぬ氣輕男も、或時はよわりて溜息つく折もありけり。今しも亢龍は戸を拔きて、のさ／＼と入り、吟蜩子徒然だらうと云ひつゝ、後に從へし童子に種々の珍肴美酒を卓の狹きまで推

唐「ところが爰に一つの妙智慧があるので、其不利を盡く除く妙智慧があるのに、忠誠の私がどうして默つて歸れますものか、御情ない事を被仰ます。」

六「智慧があるなら早く云へ。」

といふを待つて坐を立ち、小鬢に鼻をつかへさせながら何か囁けば、滿面に笑ひを含み、

六「然らば彼奴を。」

唐「御使ひなされ。」

六「四の五のいはゞ。」

唐「恩と威權の板ばさみ。」

六「妙々、汝は怜悧虫、當座の褒美」

と紙包渡すを受けて、唐狛は豚尾ふり〳〵出て行く。跡に亢龍唯ひとり、欲下遡二銀河一訪中織女上須レ獻

風流閑篙人と。吟じて、哈然とする高笑の響くも底氣味惡き此家に、食客となり居る日本人に吟蜩子といふ者あり。帚の眉糸の眼にて、容貌眞に可笑けれど、聲靜にして話に巧みに、睛はしまりて光り濁らず、風采或は取るべきあり。其行を察すれば、飄々として雲水の如く、富貴も名譽も好まざるにはあらざれど、敢て求めず、酒を喜び白湯に甘んじ、錦もきれど葛もいとはず、花を愛すれども首の骨の痛きまでも眺めず月をめづれど我身の老を喞つにもあらず、唯何となく世を送り來

六「云へ。」

唐「先づ貴君が自ら御出になりますのに七つの不利がござります。高尚の御見識が御胸にみち溢れても之れを吐く英語に御不熟の事が一つ。」

六「なに。」

唐「御見識が高尚にすぎて夷狄に膝を屈して相和する事の御出來なさらぬが一つ。夷狄の凡眼で貴君を識別する事の出來ぬが一つ。」

六「むゝ。」

唐「事若し畵餅に屬せば御清高の名譽を汚すことが一つ。御歎息の懊恨を生ずることが一つ。多額の費用と少なからざる御心勞を空耗し給ふ事が一つ。合せて」

六「だまれ。」

唐「まゝ、まあ、御まち下さい。實に私の申し上げるのは、貴君の御爲を思ふので。へい〳〵、決して御諫申すのではありませんが、此の七つの不利」……

六「だまれ〳〵。」

唐「然し、不利では御座りませんか。」

六「むゝ、なに不利でも構はん、やつて見る計りだ。良い智慧もない癖にだまつて居ろ。」

六「むゝ、して見れば天下皆盲でもないが、夷狄の奴には分るまい、……それにあの卜翁の云ひ草。」

唐「無名翁めが何か申しましたか。」

六「だまつて居ろ、むゝ少しむづかしいところがあるが、事一度成れば、米國第一の美人に箕帚を執らしめ、二億の財産を得て、碧眼胡輩に鼻を明かさせ、天下の俗物に其の高きを仰がせる、……はゝ妙だな。」

唐「へいへい、妙で御座ります、……あの滬報に出て居りました、求婚の事で御坐りませう。」

六「や此奴は怜悧虫だ、……隨分よからう。」

唐「えへゝゝ、然し」……

六「何だ、此奴無禮な奴だ、何が然しだ。」

唐「へいへい、然し」……

六「又いふか。」

唐「然し私は諂諛をする小人でもありませんし、貴君も阿諛を喜ぶやうな御方でも御坐りますまいし、諸々は侃々に如かずと申しますから、一生の勇氣をふるつて申上げますが、どうか小人一片の丹心と御覽下さいまし。」

るとも、其中は腸も骨もなく、恰も髓朽ち心滅びたる枯木の如き人は、鳥にもあらず獸にもあらぬ蝙蝠の如き佞人の好き棲居なるべし。亢龍といふ虚木の洞には、唐狛といふ蝙蝠すめり。其眼は鷲、其口は鴉とも見立べき怜悧の男、鼠のやうなあるきぶりにて、ちよろ〳〵と入來り、御辭義は名物の國柄だけ丁寧を盡して、揉手しながら、

唐「旦那さま何を考へて居らつしやります。」

亢「斥鷃何ぞ大鵬の志を知らんだ。」

唐「へい〳〵、えへゝゝ、……然し頃日は私も大分人物があがつたと友達が申ます、是も矢張あなたの、

亢「ふゝ餘光だ。」

唐「へい〳〵、どうも有難い事で、……君子の德は風の草を靡かすで。」

亢「うんそれなら貴樣のやうな奴にも、乃公は俗物と違つて見えるか、……君子と見えるか高士と見えるか、賢人と見えるか。」

唐「どう致しまして、……先日もさる所で、貴君から頂戴しました前漢の古器を見せましたら、或老人が實に亢龍樣と申す仁は物に役せられざる聖人だ、是のやうな尊き物をも惜み給はざるは、恬淡無欲の當世の太上老君、大聖人、大神仙だと評を致しました。」

るも同じく三十四なり。噫玄の又玄なる、奇異幽渺なる神作とやいはん、鬼工とやいはん。天下の奇登洛書に止まらんや。と席をうつて説捲れば、亢龍呆然として酔へるがごとく死せるがごとく、地盤を見つめて息もせず。稍々ありて低れたる頭を漸く上げ、

「眞に先生説得て妙なり。殊に地盤の玄々不思議は、彼の楊雄の太玄も及ばず。吾三台通書遁甲神書靑嚢全書等方家の秘書を讀盡したれども、未だ是の如き神異を見ず、吾學の博からざるにあらず、噫生先は天授なり。……願ふは我が爲に一條の烟事を卜し給へと、傲慢の角はまだ殘せど、心は全く歸伏して頼めば、卜翁ます〳〵笑を含んで、先づ其生年月日を問ひ指をかゞめて何やら數へつ、地盤をながめ麈尾を揮つて、白銀一錠出せしを受取り、一喝して、

紈袴公子齡青春。　歌彼關雎枉苦辛。
欲遡銀河訪織女。　須戲風流閑篙人。

と偈を唱ふると三返して、飄然と立去りける。

第十回　道ばたの木槿は馬に喰れけり

心すべきは足のつけ所、巖の下に居ぬぞ賢人。

蝙蝠はうろ木に棲み、佞人は驕君に媚びるならひとや。實に表は威勢尊嚴あつて、老松の輪菌螺砢た

雷を聞きて陽氣の復するを悟るにすぎず。今夫れ憚りなく言を放たば、聖人は河洛の奇に眩せられて、俗人は聖人の德に眩せらるゝのみ。天地の廣大なると、豈河洛の二書、十數の聖人、之れを悉すとを得んや。予幼にして道を天下に求め、幸にして泰山に斷碣を得たり。文皆な科斗にして讀む能はずといへども、數を刻すると洛書の如くして、奇正錯雜紛亂意あるがごとし。即ち退て山陰に廬を結び、沈思三年終に之を悟れり。蓋し洛書は、三の陽を三たび重ねて、純陽の數を極む、これ天盤なり。吾が得たる神碑は、四の陰を四度重ねて、純陰の數を極む、これ地盤なり。吾天地の二盤をとつて、人事の成敗を見るに、誠に兩端を叩て其の中を知るがごとし。これぞ即ち天地の二盤なる、と扇を襟より拔とりて示すを、亢龍手にうけて、表を見れば人も知りたる洛書なり。裏を見れば數のみありて其の意を會せず、思を疲らし茫然たるを、翁は見て打笑ひ、「見給へ、是も洛書に等しく、是を縱に數ふれば、何れも三十四の數を得、之を横に數ふるも同じく三十四なり。之を斜に角より數れば、また三十四なり。然れども是の如きは洛書も然り、敢て奇とするに足らず。されども今官人をして一驚を喫せしめん。官人試に隨意の一數をとつて、これに連り接する三數を合せ給へ。假令ば三と定めて其鄰る所の十三と十六と二とを合すも三十四にして、六と十二と十三を合すも三十四なり。何れの所にても皆然り。之を洛書に較ぶれば、幾んど天機を洩らす事一倍深しといふべし。加ふるに尙一奇とすべきは、四方の隅の數をとつて、是を合す

尊まるゝ無名翁といへる卜者なり。よき折なりと亢龍は、急しく小童に呼こませて、睛を定め案を隔てゝよく見るに、頭は禿げて眼は緑に、西來の祖師を欺き、肉は瘦せ爪は伸びて、摩訶句絺羅のごとく、亢龍早く氣を呑まれて、三分はひるめど、流石に豪慢の脣鋭く一盞の茶の了るや否、己れも負けじと例の如意鉤を取りて言葉も異樣に、

「如何に卜翁、龜を灼き象を見るは先王の爲す所、蓍を數へ卦をおくは古聖の用ゐし法也。然るに汝の爲す所、何れを擇ぶとも見えず。擲錢の占はもとより小智の猾技にして、梅花の易は康節の眞作にあらず。先づ試に之を辯じ得るや。」

「官人眞に云得てよし。惜らくは未だ一紙を透り得ず。然れども官人學博く見高し。自ら凡俗に異れば秘蘊を盡して告げん。夫れ古へより易をいふ者、三皇五帝周公孔子の數聖より京房焦貢邵子朱子に至るまで、數ふるに遑あらずして然も皆同じからず。荀子に非相あれば、觀相の術は必ずしも麻衣の仙傳に始まらず干支の占は夙く呉越春秋に見えたり。二十八宿の占も古くして、中國印度共に之あり。八門遁甲の法は洛書より出で、後世九宮の占之れに近し。或は干支の生剋を以てし、或は墨色の死活を以てす。灯華の形象を以てし、鳥聲の清濁を以てす。皆是れ多少の理ありて多少の効あり。故に天地の現象を見て天地の氣運を知る、何ぞ必しも彼の蠢たる龜と茸たる蓍とによらんや。況んや又何ぞ周孔邵朱を賴まんや。之を平易にいへば、霜を履んで堅氷の至るを知り、

の珍說なれば世界の新聞に載せざるものなく、此の傲慢の亢龍は机によりて獨り言、亢ーむゝ此のぶんせいむといふ奴は可なり話せる奴だ。るびなといふも米國第一等なら少はよからう。才學もあらば司馬先生を眞似て是もよし〳〵だ。財產もどうでもよいが、二億なら惡くはない。世界中から此を娶らむと俗物等が集まる事だらう。なんの俗物等が八分で庚帖を書かれたら讀める奴はあるまい、……おや夷狄には八分も庚帖もないかしらむ、……然し兎も角も中華の人物と肩をならぶる事は出來るものか。明月出て螢光細しだ。一番此奴を侍妾として箕帚を奉ぜさせてやらうか。定めて俗物共が驚嘆するだらう。然し此の廣告の終りの處が少し變だな、……嗚呼大聲里耳にいらず、其調愈々高くして和する者愈々少しとは韓娥が雍門に嘆じた所以だ、……噫、見識の高すぎるにも弱るて、……吾が道大にして吾が調高しだから、容れられないかもしれない。天道果して是歟非歟だ。……然し林間に桂あれば野客も其香を知り、礫中に玉あれば村童も其美を見ざらむやだ。彼の俗物中吾あるに、吾を知らずむば是れ盲のみ、盲のみ矣、……盲乎盲か、天下皆な盲だ。已むなん乎と、喟然として天を仰ぎ、嗒焉として氣を吹く時、不圖窓の下を見れば、往來何となくざわ付き、老幼頻りに馳せありく。眼をとむれば、群りたる人の中に、一人の老翁あり。蛋黃の道袍豐に身を掩ひ、微阜の方巾を頭に戴き、襟には光澤々たる絹扇をさし、手に竹柄の麈尾を揮ひ、肩より幅濶く長き輪袈裟様の物をかけ、右には觀天觀地、左には曉運曉機と書せり。これは當時に

鉤を飲んだ荊公も水の骨は喉につかへしなるべく、餘所目から見ては、高慢ほどおろかなる者はなけれど、當人は天晴れ遼東の豕の尾をふりて、中華とほこる支那の大都、南京に羽ぶりよき熊鷹官員の田仲蛆の子に、田亢龍といへる男あり。眉上り鼻高く、唇の兩端の、上にはねたるさま、神相全篇に實例として引出されさうな處なり。財位に汲々たる父には引きかへて、富貴何する者ぞ鄧通錢を鑄りて餓を免れず、梁武極に登りて渇にくるしむ、豈麻衣葛巾竹外に一榻の茶客と談り、蓴羹鱸膾爐邊に半日を酒徒と樂しむに如んやとの大見識。四書五經に眼はさらさねど莊列荀韓に指を染め、公孫の詭辯に誇りて白馬馬に非ずと論じ、惠子の痴說を喜んで飛鳥動かずと古銅の如意鉤を捻りたがる云ひ草。されば素より天下を睥睨して一粒粟中乾坤を藏すと悟り、宇內を玩弄して、半升の鐺裏に山江を煮ると戲れる意氣組。壁間には誰も讀めぬ科斗の文字の一軸を掛け、何某が重さを問ふたといふ破れ鼎に、雪山の牛の糞を燒き、文君去りぬ塵世また誰と共に琴瑟の和を望まんやと、獨身者の唯ひとり、瓦缶を敲き楚辭を唸つて澁がるかと思へば、時々は調の亂れたぢアいおりんを彈いて、鬪鷄の最後のやうなさび聲を發するは、眞にふしぎと糺せば、食客の吟蜩子といふ日本人より、話をきいて、頃日急に香港から百弗餘りで買寄せたとの事。あれては仲蛆が死んだらば、代々の溜金十萬兩、忽ち滅びて德のない伯夷となるべしと、他人の評も氣の付かぬ親馬鹿の金言に漏れず、吾子を當時の阮籍李白と、信じ居る仲蛆もをかし。彼のぶんせいむの求婚の事件は、あまり

し。されば是は父上が應募者に對して發し給ひし言にて、貴孃に對ひても猶專裁政府の如く、壓制し給はんとにはあらざるべく候。故に貴孃もし勇氣を起して、胸中に決し給ふならば、此の廣告はしんじお樣には賴み難き者にはあらずして、有り難き招待狀なるべく、圖らざる失敗はなくして、あしからざる成功を得るとなれば、しんじお樣も決して申込には躊躇し給ふ事なく候べし。如何思食候や。何れにも御決心の御勇氣を必要と考へ申候、以上。

とあり。讀過ぐる中、顏の色或は青く或は赤く恨むが如く悅ぶごときは、深くも感動したるなるべし。頓て手紙をたゝみおさめて、さてもやさしいちゑりい夫婦、戀知り情知り、あはれ知りと、呟やきながら、腕を伸して取り上ぐる、鐵筆の運も遲からず、何やら紙に書き終りて、封じ袋に手早く入れしは、必らずこれの返しなるべく、呼鐘ならして下婢を呼び、

「これを郵便に出させておくれ。」

「はいかしこまりました……それからあの旦那樣が、此地も最早倦きたから、明日は立つて、とろんとの方へ行くと御云ひてしたよ。」

第九回　蛸つぼや果敢なき夢を夏の月

潮に乘地になる自惚の、利口ぶるは毎も馬鹿なり。

ふ迄もなき事と被存候。吾夫はしんじお様より一方ならぬ庇蔭を蒙りたること、妾が貴孃より蒙りたると恰も同じ事に候故に、吾夫がしんじお様に對ひて爲すべき分量の忠實は妾が貴孃に向つて盡すべき忠實の分量と同じく候。然るに吾夫はしんじお様が貴孃を、深く敬愛して戀慕（貴孃も悟り給はずとは云ひ難かるべき）に沈み給へる事を知り居り候故早晩此の事に付て、しんじお様の發言し給ふ時あらば、十分力を盡して奔走せんと覺悟し居り候間に、圖らずも御父上が、非常の廣告を新聞紙上に掲げ給ふに及び、即ち其の申込をなし給へと、二三回のみならず勸告したれども、これに應じ給ふの勇氣なきは、頼まれぬ廣告に應じて計らざる失敗を買はゞ淸淨なる名を墜し、畢に醒世の大目的に累をなさん事を恐れ給ふ故なるべし。然し敎化に屬する事と、戀慕に付ての事とは全く大小の差別之あり候事なれば、彼を取らば之を危くし此を取らば彼を危くするといふごとき場合には、高明の信日亞様が悲切の感情を忍びて、小を捨て大を取り給ふは、當然の事に付き、貴孃も是を滿足し感服し給はねばならずと、吾夫は申居り候へ共、扨て妾が貴孃に對する忠實は未だ足らずと存じ候。過日はしんじお君を御連れ申べくと申居候處、突然今日の如く遠隔仕り候。然し貴孃がしんじお様に對つての感情希望は、明かに相見え候に付、種々相考申候處、廣告の面に諾否の全權は予にありと候へ共、實際よりも道理よりも出來難き事なるべし、假令ば黒奴を父上が撰び定め給ふとも、貴孃は到底父上の命には從ひ給はざるべ

うすもの豊かに着なしたる樣、蠟石の神の像の如く、魂もあるかなきかに、吾を忘れて恍然と机によりかゝりし折しも、不圖見れば、部屋のこなたには相思花（ふォわあゲッとみいなッと）あり。

「おゝ相思花よ、想思花よ、……忘れ給ふなといふ花よ、……吾は忘れぬが人は、……忘れ給ふなも忘らるゝ憂き兆か、……今ぞしる思ひ出てよと契しは、……吾が胸の中にひとりせし契は、……忘らるゝ身をは思はず誓ひしは、……吾胸の中に獨せし誓は、……凋める花の果敢なきやうに、甲斐もないか。人にも流水の情はありと思ひしは、吾がまよひなりしか、……お父樣のなされた不思議の廣告に默從したゝめに疎まれしか、……慈愛深かりしに、おしつけ業のいぶかしきは父上、……愛情濃かりしによそ〳〵しくつれなきはしんじあ樣。」とかすかに喞つ折から、跫然と足音して御孃樣へちえりい樣から手紙がと、下婢の云ふもおそしと戸を開きて受取り、封じめとく〳〵讀下すに

妾の最も愛し最も敬する令孃よ、妾が貴孃に對する敬愛の熱情は、多少の嫌忌を貫きて其道を爲さざるを得ず。昨今は如何御消光被爲候や、妾が多年熟知せる貴孃の御氣質と、當時の御境界とを照らし考へて、失禮ながら御快活には御消光なくと御察し申候。併し求むる者は能く得べしとは、僞りなき神の法と承り候へば、貴孃の自から棄る如き微弱の御考なくして定まりたる御決心あらば、遠からずして貴孃の御求めになる所の者を神の恩惠によりて得らるべきは疑

にあの廣告をしたが、大分評判もやかましいから、世界中にひろまるに違ひない。さうすれば乃公の見込通り、世界中から出て來る婿の候補者を試驗して、一番愉快な奴を取るのさ、‥‥何の金もいらず、爵もいらず、學問も糸瓜もいらないのさ。人の一生は皆愉快の生活をしたいといふ計りだから、おまへとおれとを面白く生活させる男を見付けさへすればよいではないか。マアそれは考へなずともだが、此の長の日には退屈するから思ひ付いた旅行、‥‥また此處に居れば直接におまへなぞを訪問して、甘く誤魔かして、贔負目の試驗をたのまうと、思ふやうな奴もないとはいへないし、それもうるさいから、さあ同伴に出かけやうと、毛を燒く如き短兵急を、のがるる智慧も出ぬまに、急きにせき立てられ終に翌日男女六七人を伴として旅立ちぬ。憂は晴の上の星とかや、るびなの眼には、山また山、何の匠か削り出せる青玉の巖も、水また水、誰が女の染なせる碧絹の川もおもしろからず、英領かなだのおんたりお州、こうぼるぐにぞ着きたりける。此の處は世に名高きおんたりお湖を北に受けて森林多く、湖のほとりには景色よきところも少からず。されど別にこれといふ事もなきに、ぶんせいむは足を止めて逗留するを、家來等はおッたわに趣き給へ、とろんとに行給へと、いへども從はんともせざるは、其の主意旅行にあらざればなるべし。るびなは一ト間の外にだも出でず、讀さしのうォるづうおすの詩集かたへにかいやり、窓越に蝶の翼の如く見ゆる白帆眞帆行かふ小舟を思ひ入りて眺め、いづくよりか吹來る風に、金絲の髮を梳らせて、黒き紗の

「ちェりイか……明朝おれとるびなと一所に、避暑旅行に立つから、是れから、婢共を差圖して、るびなの旅裝の手傳ひをしてくれろ」といふは誰ぞ、頂上つや〳〵かに禿げて、白髯胸にかゝり、兩眼の光り美しく、滿顏童子のごとき此家の主人ぶんせいむなり。

第八回　藻にすだく白魚や問はゞ消えぬべし

あはれ深くも沈みし思を、餘所に見なしてもゆる不知火。

昔時〳〵の王昭君は、計らぬ匈奴に連添ふて、寫眞のなき未開の世を恨みつらむ。今が今のるびなは慕ふ君子に隔りて、新聞紙のある文明の時を悲しむべし。何事も火の如きぶんせいむは、携へたる新聞を卓子にのせて廣告の處を見するを、ちゑりは差出て讀下せば、「明朝早天に北方諸州遊覽の爲め出發す、但し結婚申込人は差支なく、ぶんせいむ家宰ゑんぶるに宛て申込むべし、ぶんせいむ」、とあれば、るびなと共に呆るゝ外に言葉もなし。主人は例の髯を撫でながら、

ぶ「るびなや、物を思ふは底のない黒き洞穴に入るといふ者だから實につまらない、……物を見るは限りのない青い大空の下を歩くやうで、はれ〳〵と快い者だ、……どんな婿が來るだらう、壓制の老爺が、人の心も知らないでなど、考へ込んで居るかもしれないが、それはおまへの愚だ、……可愛い娘の一生の夫を、なんて迂濶に極めてよい者か、……だから、にうようくにある丈ケの新聞

さる事は無益になるだらうと、思つて居るよ。」

「あなたは平氣で居らつしやるが、貴孃の思ふやうな御人は申込みさうもありませんよ。なに、妾が貴孃の思ふ御人を知て居る筈はありませんが、……いゝえ、知て居る筈ですよ。御幼少時から去年までも、貴孃の御傍にをりながら、貴孃の御心を知らぬ筈はありませんよ。それだのに御隱しだてては恨ですよ。𛀁んじお樣は御申込みにはなりますまい。あれ程貴孃を尊んでは居らつしやるけれども。」

「えゝ。」

「𛀁んじお樣の御仰やるには、『貧究は獸を人となし、富貴は人を妖と化するといふ古言があるが、不死不老の金丹などゝいふ事も多くは富貴の人の描き出して想像て、不愉快の感をもたずに愉快の生活計りする者を得たいなんぞといふも、人生の欲にあき足りるより起つた迷ひだ』とて、實は良人がゑんじお樣に、申込をなさいと御勸め申しましたら、御話があつたさうですよ。何にしろ二三日の中妾が御連れ申しませうが、よう御座いますか。」

「あゝいゝとも。」

「左樣なら御暇。」

氣輕者の立ちかゝる外より、

理ですと答へたのさ。」

「なる程。」

「それから御父さんは笑ひながら、『七十年來世路の辛酸を嘗め盡して一文無しから二億に餘る財產を拵へた此のおれと、生れるや否や、絹布に包まり、乳酪に飽き、雨にも風にも當らず、苦も樂も無しにたゞ深窓に生長した娘と、何れが見識もあり、眼力も强いだらう』と御問ひになつたから、『申すまでもなく、とても御父さんには及びません』と答へたらね。」

「して。」

「それならおれの考をもつて、最もよい婿を取つてやる、と仰やつて、急に立ておしまひなすつたので、此方は三人とも、譯が分らないで、どうなさるかと思つて居る中、翌日の新聞を讀んで實に驚いたよ。」

「まア呆れましたね、どうも亂暴ではありませんか。それにあのやうな廣告では何人申込むか知れませんよ。それに取捨の全權は余にありと、ありますが、御父さんが夫を御定めになるのではなく、貴孃の夫を定るのですから、權利は貴孃にある筈ですのに、」

「理屈はさうだが、御父さんに背くも面白くないし、また万一妾の思ふやうな人が申込まないともいへないし、……さうでなければ、多分廣告の末の條に相當する人がなくて、つまり御父さんのな

やうですわ。」
「妾にも御父さんの御心は分らないよ。」
「それでは定めし御心配でせうが、……古木はよく焚え、古葡萄酒はよく飲めるとやらですから、一寸其廣告を出さぬ前の樣子を御話しなすつて御覽なすつたら、あなたに御分りのない事も妾には年の功で分るかもしれませんから、御隱しなさらずに。」
「なる程、おまへに聞いたら宜い分別もあるかも知れないね。あの廣告を新聞に出した前の日の夜、御父さんが、妾としんぷる夫婦を御呼びなすつてね、……まづしんぷる夫婦に向て、『おれも七十の餘娘は十九の若盛り。よい婿取て老樂としたいが、宜からうか、まだ早過るか』との御尋さ。夫婦は、誠に御尤ですと答へたので妾に、『おまへはどうか』と仰やるから、はいと云つたのさ。」
「へえ。」
「すると、御父さんが、『世の中の夫婦の姻緣を定る者を見るに、多は容貌とか、氣質とか、財産才學とかの有無美醜を標準として、互に擇ぶが、是は唯われの嗜欲好尚を滿足させるのを目的としてするのだから、やゝもすれば、嗜欲好尚に滿足を得ざるのみならず、他の點で大に不滿足の事を見出して、進に不幸の生活に五十年を終る、……また一ツは人を看破する眼力のない者が、漫に目前の事に眩んで忽ち撰定するからだと思ふがどうだ』と仰わるから、しんぷる夫婦も、妾も、御道

が出來るだらうと被仰ますよ。」

「うそ〳〵、然し世間の紳士が皆あんじあ樣のやうであつたら平和で清淨な世界が成るだらうよ。」

「おや〳〵、同じ樣な事を仰やる。似た者夫婦ですかネ。」

と云れてはつと茜さす、二ツの頰は隱し得ぬ赤き心の兆しなるべし。ちェりィはぽんと膝をたゝき、

「まア妾とした事が、とんだ麁相を申しました。……然しあの廣告一件、……あれはまアどうした事でござりますえ。一昨日にうよるくの御宅へ出ましたら、あなたは御不在でしたから、一寸しんぷる樣に伺ひましたら、笑ひながら多分世界第一の御婿さまが來るだらうと仰やりましたが、……隨分世間に廣告で緣を定める者もありますが、それは大抵中以下の人ですよ。それにまた、あの廣告のふしぎな文面、猶太人でも支那人でも構はぬとは、あまりの事、ぶんせいむ樣の御心も豪氣過るやうですし、夫れを何とも云はぬしんぷる樣の氣もしれないではありませんか。」

「しんぷるの心なんぞは、妾なんぞに知れるものかね。」

「ほんとに人の心は知れないものですよ。蛇は蜈蚣の足しらず、蜈蚣は蛇の腹しらずと申しまして、……ですから、御父さんだつて、貴孃の胸の中に何と思て入らッしやるか、しれません。あまりといへば壓制な爲され方、なんだかさつぱり妾には譯が分りません。丁度熱に遇はない有感顏料の

の日除を單の白い紗でもおもしろくないから、何か描いて見ろと、御父さんが仰やつたから、是を明日かけておくと、急度御意に入るのよ。」

「はてね。」

「其處は西だから夕日がきら〳〵すると、其熱に感じて、葉が青く顯れて、光を丁度よくさへぎり、日が沒ればまた白くなつてしまふのだよ。」

「おや妙ですね、それだからしんじあさまのまねをして、吾夫までが妙慧だの、優美だのと貴孃を讃めてゐますわ。」

「からかつてはいやよ。」

「おほゝ、じやくそんにほめられて喜ぶのは妾計りでせうが、しんじあさまに賞られては、御孃さんだつて嬉しくない事はありますまい。」

滑稽まじりに輕く云ひ捨て、言はぬ人の意に釣をかけるも、浮世の智慧に肥え膏つきたる年增の功かや。

「うそを云つてはいやだよ。」

「いゝえ、眞實ですよ。あんじあ樣は何日でも、貴孃の御噂を妾どもが致しますと、實に得難い貴女だ、世間の婦人が、皆此の令孃の樣であつたら、あんじあが口を敲かずとも、平和と清淨の世界

見る眼も涼しく青木よき程に茂りて、築山を巡る小川に淀みなく、暑も水泡と共に、流れ去るべき景色、其の源は軒近く踞りたる伊太利製の寒水石の大鰐の口よりひやゝかに迸る五條の噴水、夏といふ者知らぬ顔の廣庭の中に翠色濃き蔓草をからませて屋根としたる東屋めきしもの四ッ五ッあり。支那の磁甃に塵もとゞめず、心にくき住居ぶり也。主人は誰ぞと問ふ迄もなく、梢高き木のあちこちに、羽ゆたかなる鳩の飛びかふは、ぶんせいむ長者のぜねらす村の下屋敷、花園をかねて十萬坪許りとはさても廣大なり。にうよるくの母屋よりは鐵道に縮地の術までもなく、宏麗の家、離れ〳〵に四ッ聳えしは、蜃氣樓にまさりて眞の仙郷なり。此方の高殿の一室の戸の外にて、なれなれしげなる年増の聲、

「御孃樣此の蒸しますのに御書見ですか。」

「おや、じやくそん夫人かえ。さアおはいり。」

「おほゝ、夫人かえが否ですよ、矢張り御奉公致してをつた時の樣に、ちェりィやがよう御座いますよ。……何をして居らつしやつたのです。」

「游戲に書をかいて居たのさ。」

「此の紗の窓掛てすか。まア墨繪の枯木に鳥ですか。大そう寂しいではありませんか。」

「枯木てはないよ。それはあの有感顔料といふので、葉がかいてあるのだよ。おまへの傍の高窓

といふ時ぼん〳〵〳〵、

「え〻驚いた。時計の音か。噫古い詩に、秒針の響に驚かず、時鐘の音にも驚かず、日の傾くにも驚かず、月の移るにも年の流る〻にも驚かず、唯一生の夢の終りに、驚く人の愚なるよ。草の露よりもろき身の限りを何日と誰か定めん。とあるのに、噫愧かしき妄想、…尊き人の身を受ながら、鳩になりたいとはあさましくも迷つた。」

眼を閉づる事暫くして音のするまで太息を吹出し、

「あ〻情ない、……曠達のぶんせいむ君のした廣告は、氏が消閑の一笑柄かも知れない。るびな孃の默從して居るのも、仔細なくては叶はぬ筈だ。假令じやくそんの云ふ通りにしろ、數百人の申込の中へ雜はつて、やり損ずれば世の物笑ひ。甘く成つても、しんじあは道德の名を借りて、美人と巨富とを釣つたと云はるれば、一生の目的に非常の障碍となるし、どちらにしても申込のはよくない、……申込事は出來ない。申込事はすまい。……が、可憐の令孃はえ〻忘られぬ。お〻忘れまい、いや忘るべき人ではない。

第七回　簑虫の音を聞きに來よ草の庵

鬼の子とは淸女のさがな口、泣く聲をあはれとし給はぬにや。

天上の音樂の凍つた者のやうに思はれるではありませんか。』と答へた美しさ。……丁度其の時、心よい風が吹撓めて、薔薇の花もうなづく樣に見えたが、其のゆかしい香は花から出たのではなくて、あの……あの令孃の唇からこぼれたやうであつた。あゝ慕はしい。戀しいるびな孃、……『何故戀しいのだらう。』『何故といふ事もないが、唯だ戀しい。』あゝ此の答は、自分ながら妙ではないが、たゞ戀しいのが戀の本體には相違ない。あの可愛らしい顏付は玉とも瑠璃とも譬へやうがない。瑠璃の手箱の中に入つて居るものは大抵眞珠か金剛石だが、あの令孃の胸の中には何があるだらう。平和親切優美慈愛溫順妙慧などいふ貴い寶があるに相違ない。妙慧だから此方の心も察しては居やう。親切で、溫順で、平和優美で、そして慈愛が深ければ、こなたの思ひもあはれとは見るに相違ない、鳩さへあの樣に愛されるのだもの、……然しどうしてあの樣に鳩が可愛いのであらう。ぶんせいむ君が、鳩を二十も三十も畜つては汚くていけぬから、せめて四五羽にせよと叱つたときはまだ十三の乙女だつたからでもあらうけれども、『鳩は妾の親友ですからいや〳〵』と泣出したさうだが、どうもやさしい、情の深い、趣のある貴女だ。此間も、じやくそんの妻が餘所から珠數掛鳩をもらつたと自慢話しを仕たら、直にねだり取られてしまつたさうだが、其鳩が逃てじやくそんの方に歸つたのをまた取り返した其時は、大層悅んでじやくそんの妻に眞珠の腕輪をやつたさうだがどうしてあんなに可愛いだらうか、……いつそ此のしんじあの身體が鳩になればよい。』

桑の葉を絲と吐かねばならぬなるべし。似非見識の目鏡から覗けば、悉皆、凡夫の生活は、己が臑を試して己が刀のきれ味誇る樣な者ながら、片手捨てずば左文字も名匠とは言はれまじ。何に付けてもこれぢや者、堪忍こそ大事なれ。志んじあは、神の園の羊ほどおとなしき男、たはけき獺の戀は爲さねど、淺からで思ひは深き山の井の、汲めども知れぬ仇人の心の奥を計りかね、眞如の月も煩惱の迷ひの雲に掩はれて、胸のうやむや關止るよすがもなくや小男鹿の、聲を不違背實相と聞きしはむかし今はまた、物のあはれのしみ〴〵と、身にしみ渡る秋の風、吹きひるがへす葛の葉の、うらみはせねど生憎に、招くが如き女郎花、折り度くもあり、折りたくもなき名流れて駒の背を、我落ちにきと、語られなば、小田の案山子の身の果の、口惜と後に悔ゆるとも引てかへらぬ手束弓、弦の斷れたる如くなりて甲斐無く獨世をや經ん。思ひくるしき綱手繩、千尋の海の蜑小舟、こがれよるぞといふも憂し、云はぬもつらし、思ふとも、君はしらじな沸きかへり、岩もる水の、色し見えねば、などと喞ち顏。

「あゝあのるびな令孃……あの美しい氣高い愛らしき令孃、……あのやさしく正しく趣のある令孃、……美人も貞女も珍らしくはないが、あゝ趣のあるものは少い。あゝそれ四年許り以前であつた、……あのひろい庭の薔薇園の花に水を濺いで居た折に『貴孃は何故花をお愛しなさる。』と問ふた時はあの涼しい空色の眼をまろくして驚きながら、『何故といふ事もないのですが、何だか花は

げるとは、孤立の弱く相助の強いのをいふのです。此の故に希世の傑士びいこんすふるゝど、拔群の碩學どくとるじよんそん等は、年長の婦人をさへ辭みませんでしたらう。否僕がぢすれりいとじよんそんを以て譬をなすは暫くいはず、神はあだむといゞを作つて君に示したといふとをもつて言葉の終りとしましやう。これ全く僕の老婆心です。けれども不當の理でもありますまい、然し僕は僕の智慧の水が少くて、感情の火が強いといふとを、君の平生の敎へで知つて居ますから、決して君を強ひません。噫僕の本來の性質のまゝならば、君の手を把り君の背を推し、強迫しても此の好姻緣を結ばするものを、……噫、々、今は君の不安不定の料簡に任すのか。けれども到底不安不定ではいけません。よく御決斷なさい。失敬左樣ならば。」

と言捨てゝ其儘ずつと立歸るは、我家に商買用でもあるなるべし。

第六回　芳野にて櫻見せうぞ檜笠

麻を衣て韜をとらねば淵明も俗、袈裟を切り刀を捨てゝ文覺の悟り。眞珠取りは海に苦しみ、金掘は山に疲るゝ、とすました無欲氣の老人も、孫を歡ばせんには、雷おこし一袋、觀音詣の歸るさにはづまずばならず。政事家もうるさし、軍人も危し、とひねッた無膽力の詞客も、文を賣らんとせば、東西萬卷の書を嚙みて碎きて呑込みて、自己が趣向の調合に、

頻りに説けども、しんじあは椅子の中に身を沈めて、語もなし。じやくそんは、性急なれば、禮義も漸く忘れて、左の拳にて卓子を叩き、
「君の知る所の婦人の中に尤も靜淑で端麗なのはるびな令孃で、余の知る所の紳士の中に尤も方正で秀英なのは君です。予の眼で見れば、天上の戸籍帳には既に一對の夫婦と注文になッてるやうです。」
「君は人を強ひるのをやめ給へ。」
「否々強ひるのではありませんが、君が千歳一遇の好機會に逢ひながら之を失ふのを恐れるのです。機會は前額に毛ありて後頂は禿なり、迎へて取れば兒童も捉ふべく、失ひて追はゞじゅぴたアも及ばずと云ふこともあるのに、何故君は躊躇して後から之を追はうと爲さる。他の過は眼の下に在りて、己の過は背後にあります。何ゆゑ君は僕の眼をかりて君の背を御らんなさらぬのですか。僕は強ひるのではありませんが、君の爲に計るに、宜しく決斷してぶんせいむ家へ申込をなさい。」
「君の親切は謝する處ですが。」
「ですが、……ですがといふ語は、怯懦の老人と細巧の辯者の常に用ゐるもので、猛將潔士の唇から出る事はありません、其樣な卑氣怯氣の分子から成ッた言葉は云ひ給ふな。あッ、僕はまだ云はねばなりません、……一柱の大理石は美しくても穹門には成らず、二股絲の繩は細くても舟が繋

「左様です。」
「然らば時の古今をとはず、地の東西を論ぜず、男子と女子とは相扶けて神に仕ふべき者に相違ありませんか。」
「必らず左様です。」
と答ふるを聞きて忽ち滿面に笑を含み、蹴合に勝し鷄の如く聲高く、
「しんじあ君は男子です、故に君も同じく女子を相扶けて神に仕ふべしといふ事は、君が曾て敎へて下すつた三段推理式に照らして誤りない決斷でしやう。君、妻を迎へ給へ。君、娶らなくてはなりません。」
といへば、しんじあはあきれ果てゝ默然たり。
「いくらお考へなすつても、是を論破するとは出來ますまい。僕が今、君にすゝめていふ所の女子は、君も豫て屢々其の溫厚の婦德と、優美の性質とを賞賛した所のるびな令孃。」
「偖は新聞の廣告は。」
「全く事實です。最初は僕も疑びましたが、人の判定を聞きしのみならず、ご存知の通り僕の妻は元はぶんせいむ家に居たものですから、これに問ひ探らせましたに、全く事實ですから、今日態々君に勸めにまゐつたのです。」

「何です。」
「君の忠告……いや忠告ではなかつた勸告、む﹅勸告でない、はて何といふてよからう。」
「君はどうも神經が敏捷で率直に過ぎる……靜にお談しなさい。」
「はい〳〵、……え﹅と困つたな、む﹅よい事を考へた、御質問を致したくて。」
「何の御質問です。」
「聖書の事に就て一つ。」
「そんなら其樣に周章てずともよろしいに。」
「はい〳〵、あだむを御作りなさつたは神でしやう、いゞを御つくりなさつたも神でしやう。」
「左樣です。」
「いゞは惡魔が作ッたのではありますまい。」
「元より。」
「それならば、いゞとあだむとは相敬し相愛して、互に道の友となり、互に扶けて神の良僕良婢たるべきは當然ですか。」
「確に其通りです。」
「あだむといふは男女の初まりですから、其の子孫の今日の男女も同じ道理ですか。」

すれど、流石世の常の男にもあらざれば、己を愼み名ををしみ、我は僅に三四萬計りの財產にて、當世無比の當家の娘と緣など組まば、世の人のさがな口に、慾の爲なんど云はれんもくるしく、或は不幸にして自ら耻と誹を招く道理也、と諦めても且つあやにくに諦めきれず、切なき月日をおくり來ぬ。今しも演說會より歸るさに、後より呼び止められて、靜にふり向き、

「じやくそん君でしたか。」

「少しお話を仕たうございます。」

「それなら宅へお出なさいまし。此の馬車で御同道しませう。」

と二人共に馬車にのれば、じやくそん頻りに鞭をあげて連々打にしながら、

「遲い馬です、あゝ遲い馬です。」

「人の思ふ程に馳せる馬はありますまい。」

など、二ッ三ッ話すうちに家に來り着きければ、直に客室に伴ひ入りぬ。室廣からず、狹からず、別に飾りはなけれど白壁清く明り取る窓の硝子の曇りなきに主の胸も知られたり。眞中に据ゑたる卓子の向ふの椅子に、しんじあの坐るを待ちて、

「甚だ唐突の事ですが。」

と云ひ掛けて口を閉ぢたるあやしさ。

寫りし影のいと美くしきも、落ちなば惜しき名こそ流れめ。

盲目の天女とはよくも譬へし戀のまん中、外れぬ所の穿ちなり。實に此情の趣きの美しくしてあはれ深く尊くして面白きは、靈香薰じ蓮華降る霞の内に、乙女の遊ぶが如くなれど、此道の迷の昏くして危く嶮しくおそろしきは、霧立ち籠めて苔なめらなる棧を盲者の辿るが如し。悲んで汐干に見えぬ沖の石とのやさしき思はうれしけれど、怒つて岩に碎くる浪なれやとのはげしき恨はうとまし。夜半にや君がひとり行くらんと實體の女房の啣も戀なれば、大幣の引手數多と嘲られし浮氣の亭主のそゝりも戀なり。いづれ戀とはいつはりの無き心の白絹に描く摸樣の色々なれば、巧にして然もいやしからずは、麗はしさも一しほにて錦の上に花を添ふるごとくなるべけれど、拙くあしからんには玉の盃の底なきにも劣らん。とはいふものゝ、粂仙川岸に落ちて汚名を流し、阿難淫肆に入て、流連になん〳〵としたさうな、とても理屈で推せぬが人情ならん。道德堅固のしんじあとても十字架に魂の入りたる者にもあらず。柔かく溫かき春風吹かば、萌出ん戀草の芽の胸になき事やあるべき。四年程前の頃ぶんせいむに招かれて、其製鐵場の職工の爲に演說せし折、始てるびなに逢ひて、さても美しき乙女やと見しを根にして、其後屢々往來しつ、馴るゝに付け、共々に昔今を語る話の端々には、志さへ正しく、多く得難き貴女と知るからにゆかしさ愈々忍ばれて、竊に獨り惱みしが、此方に心ありそ海の深き思を貯れば、彼方も岸の姫松の枝の靡かんそぶりさへ見

眞に燕の巣は、太古も今日も泥と塵とで作るのですが、人類の家は穴居より藁葺に進み、それより木造煉瓦作りと段々進んで水晶宮の如き美しき者になりました。が、誠に心の上の進歩を見ますれば、禁菓を食ひし太古のアダムイブと、今日の男女と、大なる差がありませうか。今日もなほ人類の靈魂の巣は、泥と塵とではありますまいか。諸君は肉に就いても心に就いても野蠻世界に住居するを甘んじ給ふか。否また諸君の心の利害の觀念は、果して情慾なる野蠻の暴君の壓制を受けて、寃屈に甘んずるでせうか。嗚呼予は說き至りて諸君を誣ひました。諸君は必ず是の如き誤謬をば爲さるまい。然れども惡魔の蠱惑を叱退して、古來の汚辱を洗ひ、淸淨の新天地を作り出すべき少年諸君、眞神の慈愛を服膺して、平和の温世界を釀し成すべき婦人各位に向つて、其の敢爲の氣象を皷舞し其優美の思想を發達せしめんと欲する予の熱心誠意は、是の如き言語を流出せり。諸君願はくは予の爲に、否諸君自らの爲に、否天下古今人類の爲に否獨一神聖なる眞神の榮光を顯はさんが爲に、余の所說を再考し給ふて、自ら愛し自ら敬せられんことを。と拍手喝采の中に演壇を下れば、數千の聽衆は、己が樣々に評し合つゝ家路に歸りけり。しんじあも徐に支度して立歸り行く後よりしんじあ君。

第五回　玉河の水に溺れなをみなへし

に就いて、二つながらの利害を知る故です。智識の範圍が廣い故です。夫れ故に平和にして繁榮なる社會が、漸々と世界に成り立つて來るのです。さりながら今日までの人類の歴史を取て一覽しますれば、殘念ながら慘憺たる者といはねばなりません。果して心の利害の觀念に從ひて、愛を厚くし不仁を憎むごと、肉の利害の觀念に從ひて、乳を飲み毒を捨つる如くしたりし人民は何程ありましたらうか。放佚荒侈詐僞淫靡の行をにくむ事、蚊虻を憎むごとくしたりし人民は何程ありましたらうか。偸盜暴虐妬忌殺傷の業を避くること、虎狼を避くるごとくしました人民は何程ありましたらうか。噫世界の歴史は罪惡の記錄だと嘆ぜし人のありしは、聞くも忌むべき悲しむべき不祥の言てはありませんか。滿堂の諸君よ、先にも申せしごとく肉に就いての利害の觀念に逆へば、必らず肉に痛苦を受くるごとく、心に就いての利害の觀念に逆らひましたらば、又同じ比例に心に痛苦を受けますまいか。其肉を失ふごとく其心を失ひますまいか。」否合せて其肉をも失はぬでせうか。靜夜に獨り坐して恐るゝ所ありませんでせうか。青天に人と對して慚づる所ありませんでせうか。また此の觀念を殊に人類に附與したる神に對して恐れ愧づる所ありませんでせうか。然るに世界に此の恥を忍び、此の恐れを掩ふて罪惡をなすもの、絶ゑざるは、蓋し肉の利害にのみ注意して、心の利害に注意せぬからです。誠にこれは古來より平常の人間の大なる誤謬でした。私が幼い時、彼のうをるたアすこッとが、人類の進歩を童子に諭すに、燕巣を例に引いたのを讀んだ事がありました。

は、一は肉の利害、一は心の利害です。饑を苦んで食をなし渇を病んで水を吞むなど、云ふことは、即ち肉に就いての利害を知ッて鳥獸等も爲る所です。寒を防ぐ衣を作り、雨を忍ぶ家を立つる等の事は、人間が肉に就いて利害の觀念を有したる結果です。心の利害の觀念は、鳥獸に果して有るかなきかは知りませんが、唯人間には十分具はりたるものにて、即ち善をよみし惡を憎むは、此作用です。この二つの觀念は、神より人間に與へられたる者にて、到底人力をもつては是を放下することも、瞞着することも出來ぬ者で御座ります。若し虎狼踪を追へば足を飛ばして逃げ、蚊虻眼に迫りますれば直に手を以て拂ひます。これ即ち肉に就いての利害の觀念が非常に敏捷に且つ正直に働く時で御座ります。今强ひて是の觀念を瞞着し、若しくは放下して、木偶石像のごとく虎狼の近づくをも危ぶまず、蚊虻の螫すに任かせて居らうとしても、決して出來ることではありません。一歩を假して能くする者とすれば、吾人は暫時にしてまた人間に止まらざる者となるに相違ありません。然し肉に就いての利害の觀念は鳥獸にもある者ですから、若し人類の目的が、單に肉の上にのみ屬する者なりとすれば人類は他の動物より却つて不幸と云はなければなりません。鳥獸は常に搏噬侵伐して、各々其の肉慾を逞しうしますが、人類は是のやうな事をする事が出來ませんのみならず、假令それを能くするとしても、心の利害の觀念に牽制されまして非常なる無形の痛苦を負はなければなりません。されども人類が他の動物より不幸でなくて、幸福なる所以は、肉と心と

五歳の曉より、警醒演説會なる者を起し、ぼすとん、にうよるくは云ふも更なり、りッちもんど、もんとごめり、おうすちん等の南部諸府、ふらんくふをると、りんころん、さくらめんと、されむの西方までも、歩みめぐりて、椅子の暖まる間もなく、舌の先のきれぬ許りに演舌せしが、其の説く所高尚に馳せず、鄙近におちず、重に女子と少年に向ひて、熱心の涙と滿腔の愛をもて、正しき道を教へしかば、感動されぬ者無く、心ある學者は文筆を以て氏を助け、富者は金銀を寄せて費を助くる程なれば、誰いふとなく、有名の高士むうでい氏の名よりして、第二のむうでいと呼びける。かゝる人なれば之れを敬せざる者もなく、又愛せざる者もなく、殊更年若き婦人なんどは、戀慕の心を抱くも多かり。さるにても未だ妻を迎へざるは、ゆかりの藤のさめやすき色香をめでずして、常盤の松の變らぬ操を保つ、情深く心やさしき、天晴れ自己の妻たるべき女を得んと、胸中におもひ定めしよしありや、將又昔の僧の如く、生涯獨身にて終らんとや、是のみはいといぶかしと、夜會の宴には何時も／＼、貴女令孃の噂なりけり。今日も演説の日なれば、某町の公堂内に男女の少年いと多く皆耳を欹て聞居たり。最早半過と見えて、こッぷに水もやゝ少きを取りて喉を潤しつゝ、「以上申した通り、動物には凡て利害の觀念といふ者があつて、各々其の生活を保つ者です。よしまた、此の觀念のなき動物がありとするも、利害と云ふ事を知らざる上は、其動物は已に衰亡したるか、若くは衰亡に傾て居るに相違ありません。さて此の利害の觀念を二に別けて見れ

かれずして、正に野蠻とや賤まれん。卑劣の心に傲慢の鎧着て、遺教經は半七の書置程面白からず、默示錄はあらびやんないとにも劣れりと、頭からこなす世の中。なる程聞けば聞く程學問は進みたれど、見れば見る程人情はあさまし。親の墓の手向花もまだ萎まぬに、遺產分を裁判所で爭ふ男、己が罪の懺悔しながら指環の玉を敎會堂で誇る女の心が見たいといふ者までが、抑々善惡なき口ぞかし。凄じき東亞西歐の空合ひ、狼は牙をならし、鷹は爪をとぎ、妖雲月を隱して電信羽檄より迅く、白虹日を貫いて舌鋒利劍より銳く、なさけなや、ビスマーク有りてルウテル無く、李鴻章ありて魯仲連なき今日に、さりとては殊勝の志、法の花ふる亞米利加の紐育府に一人の男ありて、其名をもるん、ゑんじあと呼べり。額ひろく鼻とほり、慈愛の眼淸くして小兒の啼を止むべく、能辯の脣うるはしく丹花の瓣にも紛ふ許り。齡も漸く三十を越えて二とまだならぬなるべし。一人生活の相手には、貧人の小僮のよるべなき者常に五六人、多き時は十人餘も入かはり又立かはり、食客となりて働くなり。是此の人の德を慕ひて就き來れるならん。家は元より猗頓の富あるにはあらねど、又原憲の貧しくもあらず。父母共に世を去りしが、ぼすとん大學に入りて神學を脩め、志想の漸く長ずるに從ひて、風俗の澆季をいたみ、人情の輕薄を悲みて、道德の衰頽を匡正せんと、第一に貧民を救濟するは社會の腐敗を防ぐ最急策たること、第二に貧少年を敎育して德性の涵養を爲すべき等の數十策を立しが、少しも世間の協力を得ざれば、功の急にし難きを知り、二十

、買はんと強ひしや、と云ひて去りしが、猶林間に佇みしとも知らず、少年は再び吹出しぬ。曲の終りし時氏は突然出來りて、面白かりし、余はフリュートの音を盗む者にあらず、とて五千の銀行券を投じて去りしと云ふ。其他是の如き行ひ甚だ多くして、端倪し易からざる人なり。蓋し一言を以て評すれば、剛毅曠達と云ふべし。當年七十一歳にして尚壯健なり。

右の如き人なるにより、今回の事件も、同氏自らは毫も奇怪と認るとなく、又或は心中に十分精細の思考をなせるやも知るべからず。兎にも角にも、同氏の言には、佳婿を得る覺悟なりといふ。付て申す、本日はるびな孃の寫眞を寫眞石版として、附錄となし呈す。とありていと美しく端雅なる貴女の寫眞あり。まことに眼凉しく鼻正く、風采豐に品格高く、曉天の白薔薇とは偖もよく評したりとぞ思はれける。嗚呼ぶんせいむの小傳と此度の事とを照らし考るに、既に命を輕じ法を侮り、今又慾を賤み財を抛つ者の如し、さま〴〵の世や。

第四回　海暮れて鴨の聲ほのかに白し

逆捲く浪のおそろしき世の人を救ひの法の船長。

そめいろの山は那處にあると、地球儀左において嘲る少年には三十三天の説法さらに甲斐なく、却て荒唐と笑はれ、唐虞の世は何がよきと、進化論懷にいれた書生には、三尺土堦の講釋必らず聽

新に亞濠貿易隊なる者を起し、日本、支那、ぼるねを、すもたら、濠太利等、當時未だ交通少かりし地に至りて交易を爲し、常に非常の利益を得たりしが、氏の三十三歳の時、其父死し、其翌年妻を娶り、膠漆の契り淺からず、氏の爲に內助を爲せしも少なからざりしといふ。氏は愈資金の增殖するに從ひ、鐵道を敷設し、造船所、製鐵場を起し、鑛山を開掘し、綿毛を紡績する等、其の爲す所機に投じ宜に處したるをもつて、益々富を重ね、五十一歳にして愛女を得たり。五十六歳にして夫人に永訣したれども、隆盛の運は更に衰へず、今日にては、二億以上の有名なる財產家となれり。氏の人となりは剛毅果斷にして、人未だ氏が額上に手を按じて沈思するを見ず、事を爲し業を起すに、會社組織を用ゐたるとなく又他人の忠告を聽きし事なし。故に屢々莫大の損失をなせども知らざるもの丶ごとし。然れども畢竟成功の多く擧るを見れば、亦氏の心中必ず十分精細の思考を有するを知るに足れり。又尤も奇なるは、學校、病院、養育院等に對して、驚くべき金員を義捐すれども、宗教に關しては實に冷淡にして、其改宗して、ゆにてりあんとなりしも、蓋し他の宗派の儀式の煩重なるを避けたるに外ならざるべし。氏は平素勤儉にして奢侈ならざれども、一時の逸興に乘じて千金を抛つは、他の富紳の爲す能はざる所なり。嘗て月夜公園を散歩せしに、一少年の綠陰に坐し、フリュートを弄せる其聲瀏喨として妙なりしが、暫時にして曲を終へしかば、氏は進で願はくは又一曲をと請ひしに、少年は微笑して、余はフリュートの音を賣る者にあらず、と答へたり。

られける。其翌日、父は寐臺より起きたるに、枕邊に一片の書あり。取上げて見るに、鉛筆の運びも怪しきにぢり書に、「愛する父よ。父は眞に寂しかるべし、予は此家を去ればなり。然れども父よ。然れども、三艘の大船を將ゐて、歸り來るの日に於て、予は愛する父の寂しきを破り、復び寂しき時あらしめざるべし。父よ、暫く待ち給へ」とありたれば、父は驚き悲しみて、如何せしやと按じ煩ひ、穿鑿したるに、遂にピーエー會社の、ばあじん號といへるに乘り組みて、前夜出帆したることを知り得たり。其後七年を經て印度のしんがぽうるより、二百磅の金を添へたる一書を得たるに其の中に「愛する父よ。予は今がんじす號といへる東印度會社の船の機關士となりて、月に四十磅を得るなり。未だ前年の大言を遂ぐるあたはざるを恨めども、決して尙其志を失はず、願くは尙數年をまち給へ。」とありけり。かくてある時、がんじす號、香港に碇泊中、捕鯨船の暴風雨にて痛く破損せし者の入札拂となりしを、百五十磅許にてぶんせいむは買取り、無賴の支那人を募て自ら船長となり、大膽にも破船に乘じて、べえりんぐ海峽に向ひ、危險を冒して遂に非常の好結果を得てより、又船を買ひ增し人を傭ひ、捕鯨船隊なるものを作り、四年程經て、七艘の所有船を從へ、己は美麗なる大船に乘じて、ぽるつまうすに歸りて其父を訪ひ、相離るゝ十年を越えて父子復び分袖を合しぬ。其喜び知るべし。其出づる時は空拳赤脚の童子なりしが、今は堂堂たる大丈夫となれり。爾後氏は益々其業を勉めしが、思ふ所ありて四十五萬弗を以て其船舶器具一切を賣却し、

ぐらんど、ぶんせいむ君小傳

一千八百十七年の冬、北米國東海岸のぱるつまうす港の町外れの荒屋に於て、勇猛の聲を擧げつゝ、始て世界に來りし人あり。即ぶんせいむ君なり。其母は出產の惱に果敢なくも交替して世界を去れり。其父は貧しき波止場人足なりければ、如何ともすること難く、僅に些少の金を以て隣家の老嫗に托し、辛くも牛乳のみを以て養育したりしが、不幸にも其老嫗も、氏の五歲の時に沒したりければ、其後は父の每朝出るごとに、少許の褐色のばんと、ばた及び冷水を晝食として與ふるを受け取りて、常に之を蜘蛛の巢多き室中に唯獨り喫して、終に六歲に至れるに及び、漸く小學校に入りけるが、算術と躰操遊戲とを喜び學ぶのみにして、其他を顧みず、教師も其執拗に苦みしよしなり。十二歲の春父と共に海岸を歩みて、大船の碇泊せるを見て、偶然これ誰の所有ぞと問ひけるに、父はピーエー會社の物なりと答へたり。又左の方の船を問ふに、同じくと答へたり。又右の方の船を問ふに、同じくと答へたりしが、此時この十二歲の貧童子は、大船三艘共に、其所有主を一つにするを聞き、茫然として顧みるに、其父は蓬頭垢面、眼の光は濁むがごとく、肩は綻び、膝は拔けたる服を着し、嚢中にも手中にも、一物の所有なきを見て、如何なる感情をや起したりけむ、熱き涙さしぐみたる兩眼を睜りて、檣頭に翩飜たるピーエー會社の徽旗を睨み、左右の拳を握り固め下唇を嚙み締めて、低くして太き呻り聲を發したり。嗚呼此一つの呻りこそ、二億に餘る金銀貨の母とは後にぞ知

のといふをも待たず、君は申込まれたかと問返す程の事、新聞紙の賣れ高は、大統領撰擧爭ひの摸樣書いた時より、二倍三倍のよしなれば、此の事しるさぬ新聞もなく、雜誌もなく、中には僞か誠かと社說で論ぜし小新聞もありけり。さて廣告のありし翌日の雜報欄內に、婚姻と題せし一項ありて、昨日ぶんせいむ君の求婚の廣告を載せしより忽世間の注意を惹き、或は間接に、或は直接に當社へ宛、其の事の果して眞なるや否を問合はさるゝ向き非常に多くして、門前には來客の山をなし、室內には來狀の山をなせり。然るに當社員は、昨夜十時頃ぶんせいむ君の邸を訪ひて申込の人員を尋ねしに、僅か百名に過ぎざりし由、同氏も不滿氣に答られたり。蓋し世人が其中込に躕躕するは、果して眞に同氏が此の廣告を爲せし乎、小人の誣毀に出でたる乎、又同氏は眞に此の方法の選擇によりて、其の佳婿を得る覺悟なる乎、又令孃は果して無敎育、無財產、無宗敎、醜貌部性の支那人、若しくは猶太人をも、其の配偶とするを恐れずして、眞に其の家嚴の主意に同意したるや否の數點を疑ひ思ふの故なるべし。余輩は此の奇廣告は、氏の誠意に出でしか、又滑稽に出でしかを斷言することあたはずといへども、氏が此の廣告を爲せしは、眞の事實にして誣言にあらず、令孃の意中は伺ひ難けれど、默從の姿なりとは斷言するなり。故に果して誠實なるか、滑稽なるかは、世人の判定に放任して、今同氏の小傳を載せて、氏の性質行爲を報じ、世人の判定を下すの材料たらしめんとす。

れ「何處へ。」

ドや「事が眞實ときまれば、しんじあ君の處へ行かねばなりません。」

と聲のみ響を殘して姿は早くも木隱れぬ。鐘鳴り雲收まりて日は全く暮れ、碧玉の天井に白銀のらんぷはや丶光りを放てり。

第三回　疑ふな潮の花も浦のはな。

宮も藁屋も千里同風、天地の中は一ツ人情。

雪を碎き玉を飛して白波立さわぐ大西洋を、池の中の木の葉にもたとへ足らぬ僅かに三間計りの小舟にて渡らむと、青筋額に出して、りきむ人もあれば、驛を重ね關を複ねて霞はるかなる全地球を、盆の上の煎豆にもくらべ難き、唯だ二輪の自轉車で廻つたと、赤き毛を足に無くして、誇る男もあるならはし、此方で八百萬の神道を捨て丶ア、メンと唱ふれば彼方で三界無安の佛法を尊んでブダ〱と敬ふありさま、何が何やら分らぬとは、何某樣の尤な仰せと思ふに、さりとては身を輕じ、法を侮るものはいと〱多きに、慾を賤しみ財を捨つるもの丶さら〱なきは、どうでも人間萬事財多がうまいに極りたり、と浮世三分五厘の生悟した老爺も、ひるんで頭掻いた廣告の不思議さに、評判忽ち電報でひろまり、郵便で走り、三人遇へば、お早うの次の詞は、ぶんせいむ君

じや「君は何と判定さるゝか。ぶんせいむ君といへば、誰知らぬ者もなき財産家で、其令嬢は即ちるびな嬢より外にないのですが、此のやうな廣告をして其令嬢の配偶を得むとするはぶんせいむ君が發狂しての所爲でしやうか。又は小人が其の殷富を猜むのあまりにぶんせいむ君を疵付けむと此やうな事をしたのでしやうか。何れ此の二點より外はあるまいと考へますが、僕は昨日ぶんせいむ君及び令嬢にも面會しましたが、更に何等の樣子もなく、今日になッて突然此の廣告を見るといふは實に不思議で少しも解する事が出來ませんが君は何と思ひます。」

ト「實に御返答も出來ぬ位不思議の廣告で……併しぶんせいむ君の發狂したと云事はまだ聞かぬ事ですし、よしまた發狂したとするも同氏の家には、國家の良宰相ともいふべきしんぷる君といふ人が居る……又るびな嬢もあることとなれば發狂者の意に從つて此樣な廣告をなさしむる事もございますまい。また鄙劣の小人の所爲とするも當時世界に名高きぶんせいむ君に係る事ですから新聞社でも隨分疎漏の事もあるまいと考へます。」

じや「なる程……それなら眞實の沙汰でしやうか。」

れ「まアさうで御坐いましやう。」

トや「夫て漸く考が定りました。ありがたう。」

と云ひつゝ立出づるを、

意だ。

ト「やかましい、だまり給へ。君がいくら結構と思ッても相手が君を結構と思はねば何にもならない。爰に被求者の資格とある此の中に、一つも君なぞは合格はなからう。」

れ「失敬な事を云はずと早く後をよみ給へ。なに、教育はなくともよろし。むゝ合格だ。なに、性質、むゝ僕は人の尊敬は受ないが、隨分愛は受ける。是も合格だ。なに、容貌。むゝ僕は莊麗ではないが醜陋でもないて。是も合格だ。なに財産か。むゝ財産は別にないが借財が少しある。是もよいのか。嗚呼妙々又合格だ。系統もよし、宗教もよろし。家族は僕ひとりだ。なに、年齢は僕が二十六歳て、先が十九歳。丁度よろし。是も合格だ。嗚呼妙々あり難いかな。あゝ結構だ。昨夜の夢に白金で作つた僕の立像がひまらや山の絶頂に据ゑてあつたのを見たが即ち此の前兆だッた。」

と獨りよろこび騷ぎまはれば、

ト「默り給へ。やかましい。君は發狂したのか……其の後にまだ望む所が書いてある。」

れ「なに讀まずともよい。合格に極ッて居る。むゝなに、不愉快の感覺を抱かずして常に愉快の生活を爲し得ることを要す。むゝ。」

ト「それ見給へ、君はどうせだめだ。雨が降てさへ愚痴を云ふ人だもの。」

とやり込めたるも笑し。じやくそんは椅子を離れ來り、

ト「さてはしんじお先生の身に就て不吉の事でも起ッたのですか。」
トや「えゝ、君は僕に問ふてはこまる。さうではありません。」
ト「何だか更に分りません。一躰其事件の原因は。」
トや「原因も結果も分らないのです。」
れ「呆れた、愈々發狂だ。」
と又もや呟きながらじよんの袖を引けども、じよんは氣も付かず、
ト「其事件の起ッた場所は何處です。」
トや「あゝ君周章たまふな、……君も神經の鈍い。それ、其の君の手の中の新聞紙で。」
ト「是れが如何しましたか。」
トや「其の廣告欄内を讀み給へ。」
と云はれてじよんは讀まんとすれど、最早日も半ば藏れたるに木の下なれば薄暗く、れおなアどと共に十間許り立出て辛くも讀みたり。
れ「なんだ婚姻を求むるといふのか。有意の諸彥、むゝ僕も有意だ。えゝ敎育は完全だ。結構々々。えゝ性質は温順、あり難い。えゝ容貌は秀美、まことに結構だ。財產は一億九千萬圓だと、非常にあり難い。系統宗敎家族、こんな者はどうでもよい。年齡は十九だと、愈々結構だ。有意々々、大有

「糊の未だ脱ちない手拭だらう。」

「否々。」

と云ひながら駈け抜けて見るに新聞紙なりければ手に取り上げて振りながらじよんにむかひ、「僕の眼は尖からうと」誇りつゝ坐したる人の肩を叩くに答なし。「二度又叩くに同じく答もなし。じよんは堪へず、じやくそん君と喚べば、じやくそん此時忽ち蘇生せし人の如く面をあげたり。年の頃は三十四五、瘠肉にして面長し。二人は一ト通の挨拶を終りて、

ト「何か御沈考の最中御邪魔を致しました。」

トや「時に君等は此の事件を何と考へらるゝか。少し御助言を願ひ度い。」

と突然に云ひ出せば、れおなアどは、何だ譯も話さずに卒然助言を頼むとはさても性急な男と呀けり。

ト「して其事件とは?。」

トや「即ち其事件で。」

れおなアどは面を背向ながら小聲にて「をかしな返答の仕様だ。一躰恐ろしい神經家だから發狂したのではないかしらむ」と獨り喞つをじやくそんは耳早くも聞付て、

トや「然樣。其發狂したるのか否やの點です。」

「左樣々々、實にえんじあ氏の演說を聞て刺戟感動を受けぬ者はない……之を聞て一回なりとも之を聞ては鄙吝の心を悛めて高尙の考に進むが當然の事で是れ人間の先天の智のあらはるゝ所だ。」

「はゝ妙な調子に曉舌るね。」

などと何處も同じやくざものゝ雜談。忽ち肩を聳やかして政治を語り、忽ち眼を冷にして哲學を評し、或は日蝕皆既の時のコロナの形狀を得たり顏に說き、或は北極氷海の邊の抹香鯨の巢窟を知り氣に述べる。眞に言の葉に葉をかさね、話の枝に枝を生じていつ果つべくも無し。かくて此の舌を有ちしにあらで舌にもたれたる二人は且つ戲れ且つ步みて公園の後の方いと靜なる所に趣きぬ。一むら茂りし檜楓なんど生ひ重なりて、小暗き根方に腰掛三つ許り据付けある其中の腰掛に一人の男あり。何事に魂をや奪れけむ、孫を失ひたる老人の如くうな垂れて坐せるが、其の足下に白き者の落ちたるは手拭か、また新聞紙か、遠目にはちと見分難かり。

「あすこに居る者は何だらう、先程から少しも身動きもしないぜ。」

「さればさ。」

「あの警醒演說會の世話人の藥種屋ではないか。」

「むゝ、じやくそんだ……それに違ひない。白い者は新聞紙だ。」

「おゝ、れおなアど、君は印度に居た事があッたか。又はエデンに居たことがあるか。」

「裁判所で代言人の辯論するやうに攻撃せずともよいさ。予は原告でも何でもない。」

「たゞ怠惰者なるのみか。」

「失敬な、君も同類は免れない。」

「悪かッたワ。人をそしる聲は其の譏らるゝ人の耳より其のそしる人の耳へ先づ早く聞ゆるであッた。」

「恐れ入ッた、金言を覺えて居たね。君には珍らしい、感心だ。」

「どうだ、僕も一箇の君子だらう。」

「はゝ其一言でやはり一箇の凡人たるとをあらはすのだ。」

「なぜ。」

「自ら賛する者は自ら止ッて進まざるものなりといふ金言がある。」

「やれ〳〵金言で復讐をされた。併し吾々の談話も大分高尚になッて來た。」

「高尚だと？　はゝ五六回もえんじお君の演説を聞くや否直に高尚ぶるがをかしい。」

「然り、僕はえんじお君の演説を聞いてから大に高尚になッて來た。多分君が今云ッた談もえんじお君から聞いたのだらう。僕の云ッたのもさうだ。仝氏の演説でおぼえたのだ。」

合格と自認せらるゝ有意の諸彥は早速當家の求婚事務員まで申込まるべし。

にうよろく府ぶんせェむ。

第二回　長き日を囀り足らぬ雲雀かな

其舌動き易き痴人の妄評と野夫の雜談。

西の空に傾く太陽の色漸く濃くして、あはれ天帝の指環の紅寶石と、小兒の車推す保母の見立もおもしろく、南の方に横はる浮雲の形は妙に疊まりて、あれはアポロの衣裳のれェすならむと希臘の書抱へし少年の洒落もをかしき夏の夕暮、若葉の林間より音づるゝ油蟬の聲高く、噴水の池邊を渡り來る微風僅に涼し。裙をひるがへし傘をならべて歩むは仲よき女同士か、友呼びつれて塒に歸る小鳥を指さして何やら語るは眼の付く物もさすがにやさしく、杖を把り、犬を曳きて過ぐるは、世をすねた詩人にや、靴に踏まれて地に伏せし下草を見て低く呟やきしは感を起す情もいと細かし。皆是れ日中のあつさを晚景の淸きにあらひ、大通りの車馬の塵を中央公園の樹の下にまぬかれんと徘徊する中にさりとては心なき二人連れ、足は羊の如く靜なるこそよきに、家鴨の如くよどろに走り、話は鳩の如くおとなしきが爭きを、雲雀の如せわしく囀り、誰憚りもなき高調子

「じよん、〳〵、晝の苦さは印度の樣であッたが、今の快さはエデン園も思はれるではないか。」

第五。系統は清潔にして、各種の遺傳病等決して無し。
第六、宗敎はゆにてりあんなり。
第七。家族は予と唯二人なり。
第八。年齡は十九歲なり。

被求者の資格

第一。敎育職業等は全く無きもよろし。
第二。性質は人の敬愛を受くるに足らざるもよろし。
第三。容貌は畸形者にあらざれば、非常の醜陋なるもよし。
第四。財產は皆無にてもよろし、多少の負債あるも妨げず。
第五。系統は清潔ならざるべからず。人種は猶太人にても、支那人にてもよろし。
第六。宗敎は何にてもよろし。無宗敎にても宜し。
第七。年齡は二十才以上三十五才までの間たるべし。
第八。家族の多少に關せず。
第九。特に望む所あり。即ち決して不愉快の感覺を抱かずして、常に愉快なる生活をなし得る者なることを要す。

露團々

第一回　古池や蛙とび込む水の音

此心知り難し、仙家の秘籙か、將た禪宗の公案か。

「余に最愛の女子あり。これが爲に幸福なる婚姻を結ばんと欲す。有意の諸彥は左記の件々御承知にて御申込ありたし。但し之を謝絶すると、承諾するとの全權は全く余にありて、諸彥は少しもこれを强ふること能はざるべし。

求婚者の資格

第一。敎育は高等の普通敎育を受け、且つ音樂繪畫縫箔等の美術は皆其專門家に就きて充分に學得せり。

第二。性質は溫順貞貞にして、敏捷活潑には非ざれども、常に其の朋友の間に敬愛を受く。

第三。容貌は文章を以てあらはし難けれども、衆人の云ふ所によれば、現今米國第一なり。某詩人は嘗て曉天の白薔薇と評せしことあり。

第四。財產は結婚の時に臨み、一億九千萬圓を予より讓與して、必らず其の所有たらしむべし。

んといふ。若きは、さらば聊か心當りあるところに案内せんといふ。紳士よろこびて連れ立ち行くに、既苅りたる田の遙彼方に白鷺立ちたり。我に撃たせよといひ、我撃たんといふ爭ひの末は、紳士取り上せたるとおぼしく、金一圓まゐらせむほどに我に撃たせよといへど男肯かず。二圓といひ、三圓といひ、終に五圓まで與へんと云ひければ、左まではとて男心弱くなり、五圓を受け收め、さらば思ふまゝに撃ちたまへ、小生は別の方に行かんと去る。紳士彼方へ向へる田の畔の蔭に身を伏せて泥にまみるゝをも厭はず這ひありきて寄り近づき、したゝかなる音させて撃つ。鷺は立ずくみとやなりけん中りたりとはおぼしけれど動かず。立ち寄りて手に取れば、剝製なりけり。若き男が囮になして効もあるべきやとて試みに田中に立たせ置きたるなりし。

面白げに見ゆるところを飛ばし〳〵讀みけるが、日も既暮れんとしければ。これまでなりとて家に歸る。途にて册子をば我もまた失ひたり。

ば、紳士は特に、足下は何をか獲たる、と問ふ。若きは鼻白みながら、未だ何も獲ずといふ。紳士はわざ笑ひて、獵に拙き人の眼は人の面の上にあらずといふことを足下は知らじ。聞きたまへ、拙き人は、鳥には疾くも認められて逃げらるれど、鳥をば認むることとなし。たま〳〵其人の眼の中に鳥の影入る時は既鳥の眼の中に其人の眼の働きの入り居れること常なり。されば獵に拙き人の眼は其人の面の中ほどにはつき居らで鳥の眼の底にありといふなり。足下の眼も足下の面の上には見えず。定めて鳥の眼の底に置き忘れたるなるべし。寄撃の叶はぬは道理なり。と嘲る。若き男は面を赤くして怒りけるが、紳士の獲物袋を背後へ廻し勝なるを怪しとおもひて、ひそかに心をつけつ、小生は兎まれ角まれ、君は何をか獲玉ひたる、鳩とも見えず雉子とも見えず、何なりや其鳥はと問ふ。紳士は答へ澱みて、いや誇るべき禽にはあらねど、たゞ其大さは大なるものなりといふ。何なりや見せ玉へと若きは强ひて見んとす。見せじと爭ひけれど言葉窮りて爭ひ兼ね、終に熟く視らるゝことゝなりぬ。獲物袋の中の鳥は大なる梟なりけり。若き男はこれを見て打笑ひ、成程獵に拙き間は鳥の眼の底に誰しも我が眼を預け置くなるべし。されど君ほどに獵に巧みになり玉へば禽の方にて自己が眼の底に預かり置きたる人の眼を人に返すとおぼし。梟はいと正直なる禽と見えて先づ第一に君に君の眼を退しまゐらせたるのみならず自己が眼をさへ利息として添へつ君に贈りたるならん。扨こそ梟の晝は見えぬなるべし。と嘲る。紳士も頭かき〳〵、今は互に罵ることをやめて共に行か

才あれば姫必ず我に靡かんと日頃ひそかに悦び居けるが、このために面目を失ひ、靴の踵をかき抱きて、頼みなき戀の行末やとさめ〴〵と泣く。老いたる人は、我子爵ともある貴き身ながら靴の踵を拾ひたるほど嬉しきめを見たる事は無しといふやうなる面して誇りかに身を反らして立つ。男は口惜さの餘り、此脚だになくばかゝる耻も受くまじく戀も遂ぐべきをと怒りて我脚を掻きむしるに甚た痛みをおぼえて眼さむ。

第三十二枚。一日。　四十ばかりの男、戸外より家に歸り見れば我妻密夫を引き入れて樂を縱にせるに怒をなし、疾く去れよ腐りたる女めといきまき罵る。女是非無く身づくろひして家を出でんとす。髪をとゝのへ、口紅さし、衣服更めたるさま美し。男ほれ〴〵として見送り居けるが、女一町ほど行きたる頃堪へかねて追ひすがり、間男するほどの働ある女の汝に離れては心も消ゆべく悲しければ我を伴ひ行けかしと掻口説きて女に從ひ行く。女の入りしまゝ某の家に隨ひて男も入り、そのむかしの初契のをかしかりしことなど語り出でゝ懐中に手などさし入れんとする折しも、前の男出刄庖丁を持ちてあらはれ出で、奸夫思ひ知れといふ。男是非無く七圓五十錢を出し、犬の如く這ひて逃ぐるに猶尻を蹴られて大に驚く。

第三十五枚。二十一日。　十二番銃の美しきを持ちたる三十八ばかりの紳士、同じく十二番銃を携へて遺失物にてもしたらん如き顔しつゝ歩める若き男に行き會ふ。若き男の獲物袋は空と見えけれ

の云ふに可笑しくなつて笑ひ出せば、撃たれし男は兩腋に羽生ひ出でゝ天狗となり飛びさりぬ。

第二十五枚。十日。　三十五ばかりの男、某伯爵の園遊會に招かれて行く途中靴屋に立寄りて、昨日頼み置きし靴の踵の繕ひは出來しやといふに、靴師大なる眼鏡の上より眼を光らせて未だ出來居らずといふ。困りたることかな、踵甚だしく歪みて耗りたれば繕ひを頼みたるに、約束の今日出來ずとは不都合なり、されど今は是非無ければ曲りたるまゝ穿きて行かん、洋服に足駄穿きにては餘り見苦しければ、といふ。靴師は靴を持ち來りて、破談は御隨意なれど、歪みたる踵は既に取り去りたり、といひつゝ踵無き靴を持ち出し示す。踵無き靴を穿きては行きがたく、さればとて足駄も穿きて行きがたければ、如何にもして踵を取りつけ呉れよ、と男は涙ぐみて云へば、靴師傲りたる面して、革を裁ち、糊づけして重ね合せ、釘うちて取りつく。男これを穿きて出づ。頓て美しき園の中に貴女紳士等の花と麗しく星と輝きたまふに打交りて樂しく遊ぶ間、糊の乾かぬに釘の弱ければ片足の例の踵いつの間にか離れたり。男大きに困じけるが、人に知られじと踵ある靴を穿きたらん如くに足を浮かせて歩む。其苦心一ト方ならず。然るに男の戀の競爭者の某老子爵は此態を見て大きによろこび、園中を索ねあるきて彼の落ちたる踵を見出して絹の手巾取り出してこれを被ひながら摘み收め、男が生命かけておもへる姫の前にて特に、君は靴の踵を落したまへり我拾ひたれば渡しまゐらするなり受け收め玉へとてこれを取り出し強て渡す。男は、我姿好く年猶若く

ざ笑ひて、脅迫すとも驚くべきや、撃てるものならば撃つて見たまへといふ。憎さも憎し撃たでやと轟然一發放てば、よも撃ちはせじと思ひたる北條喫驚して革嚢をも捨て置き一目散に逃ぐ。三十五男革嚢より證書を取り出し、口に含みて悠然と立つ。北條取つて返すを男狙撃姿勢をなしてまた撃つ。皆空砲なり。舞臺變つて上野發の中等汽車に葉巻を啣へたる男、束髮にさせたる婀娜たる女と鹽原の勝を語り合ふ中汽車人を轢殺したりとて止まる。男驚く。

第二十枚。九日。　三十七ばかりの男、霧暗き山間の草の茂みに雉子笛を吹き鳴らしながら獵銃を握りつめて、御座んなれ獲物と未明の空わたる風うす寒きをも厭はず控へたり。やがて草叢の中ごそ〳〵と音して雉子の聲とおぼしき聲するに、暗さは暗し、姿もそれとは見えねど、心を躍らせ胸をどき〳〵とさせて、男遂に堪へきれずなり、大概に狙ひを定めてどうと撃てば、雉子と思ひのほか同じく笛を吹きて雉子取りにと出で立ちたる我友悲鳴をあげて苦しみ叫び、如何に初心なればとて人の吹きたる雉子笛を眞の雉子と思ひ、姿をも見定めで彈を發つといふ法やあると罵る。罵られても屈せず、我方へ近より來たまひしは我が笛を眞の雉子の鳴くと汝にも思ひたればなるべく、汝を撃ちたるも汝が笛の吹きかた甚だ巧なりければなり、と云へば痛さを忍びて血を拭ひながら撃たれたる男は、實に雉子笛吹くことに於ては眞に逼る技倆ある我がことなれば成程君の撃ちたまひたるも道理なり、そを恨みたるは我が誤りなりし、と散彈の三粒四粒を向臑などに受けながら彼の男

付かれじと爭ひて煽ぎ立つ。池のどんがめなりやこそ酒の相手に、やれこれずぼんぼや、といふに歌終つて、あら憎らしいずぼん坊だよ、と恨めど取り付かれて是非無く、最初は豆子といふが納豆屋の眞似する。次は才ある金絲が苗賣の眞似する。其次は頓子が頓興もの〻勢よく、蜊からあさり蛤やと叫べば、頓子さんは蜊を賣る子に情夫を持つて居るのよと憎まれ口が出づる。豆腐屋が出る。稗蒔屋が出る。辻占屋が出る。龜子といふが泣き顏になつて屑屋の眞似すれば、いよ〳〵、龜ちやんだけに万年町さまアと囃す。飴や紅梅飴と云ひ出して、それは遠くの昔より絕えたるに扨は、と隱したりし年齡を知らる〻ものもあり。だるまといふが號外々々といひて駈け出す。出子助といふが鍋燒饂飩を賣る。松子といふが鍋釜の鑄掛錠前直しになる。惜いことには八重齒の茶貝子といふ美しきが、足駄お齒入れと呼んで、拔いたがよいにと蔭口せらる〻など際限無く皆々笑ひかへり、大騷ぎに騷ぎし末は、紙づくりのでは面白う無し、乃公が正眞のずぼん坊になつて見せる、と罪も色氣も忘れ果て、圖に乘つてひよろ〳〵と踊り狂ひ、雛妓等をきやつ〳〵と云はする中、足元定かならぬ機にか〻つて二階から轉げ出で大川に落ちぬ。

第十九枚。十二日。　高利貸北條猿松と三十五ばかりの男對談す。北條の毒舌尖くして三十五男閉口せしが、いよ〳〵北條の待たぬといふに、三十五男屹となり、これほど事を分けて賴み入るを聞き入れず左樣强慾なる事を申す汝をたゞ置くべきや、と云ひさま懷中より短銃を取り出す。北條あ

る。危きに驚いて逃げながら、其怒つた顏つきの眼のかゝり眉のあたりに可愛くて堪らぬところあり、流石は乃公が惚れた女だけある、などゝ鼻の下を長くし、左樣嘆つて呉れるな、これには仔細ありなんどゝ男欺きすかす。舞臺廻つて右の娘と男と塔の澤の浴樓に茶を煮て情を語る。漬物賣室に入り來るに二人飛び退いて男春水名作集を蹴飛ばす。障子にあたりて夥しき音す。

第十六枚。四日。　三十ばかりの男女房に打對ひて、乃公の器量には恐れ入つたらうなどゝ誇りながら權利株で利を見たること算盤の珠にも著く莫大なるを悦ぶところへ、顋の尖つたる、鼻の瘠せて高き男入り來り、青き顏して商況面白からずといふ。男むら／＼と癇癪を起し、手に持つたりし團扇を邪見につかひて我と我身を激しく煽ぐ。舞臺は變つて柳橋の某の樓の廣間に雛妓三十人ばかりと打交つて三十男のたゞ一人無邪氣らしく「ずぼんぼ」を踊らせて遊び騷ぐ。三絃彈き歌唱ふは面つきに茶氣ある中年增の妓三人に過ぎず。男をはじめ雛妓等皆手に手に團扇を持ち、大奉書の紙に鬼めきたる可笑しき顏をいつぱいに畫き、それの四角にまた裾に錢を貼り入れて重りとしたる短冊ほどの紙を貼り付け、獸などの脚らしくこれをも彩りたるをずぼんぼと號けて座の中央に置く。やがて、すぼん坊やずぼん坊や、ずぼんぼ腹立ちや面憎やと唱ひ出すに連れ、一同四方より煽ぎ立つれば、風の勢によりて所謂ずぼんぼ顏を抗げ脚を動かして宙に漂ひ、何人かの裾にまつはり腰に取り付かんとす。取り付かれたるものは必ず何によらず物眞似をせざるべからざる定めなれば寄り

もして失望せしめざらんとしたり。然るに燒香果てゝ退く時、不慣の姿勢をなせしため袴の裾を踏みて倒れ、香爐を傾へし、灰を眞白に被むり、いさゝかたぢろぎしが取り敢へず香爐灰の雪は椽へ駈け出で逃ぐと云ひて頓才の妙をあらはさんとせるを半までも聽かずして男の季父軍人某、男の耳を強く捉へて引き退かしむ。男の耳の根よりこれがために出血す。

第十五枚。一日。二十七ばかりの男、紋服の姿もの〳〵しく坐り込み、床には蓬萊の一軸、鶴の巢籠付きたる鰹節、大根長薯蕷を鶴龜に刻みなして庖丁の腕を見せたる生盛の一鉢など、何か座敷中にごた〳〵して、媒人夫婦しきりに勿躰つくりながら周旋す。堅めの盃は既に濟みて今は一家一堂に居列びたるところなり。嫁の、美女ならねど色白くして花やかなる燈の光をまばゆげに物羞して坐れるを、我物とは知りながら偸み視て男内々悦びつゝ、これも夜店の茄子の色の美しく見ゆる格にはあるまじきかなど自ら興を薄くす。威張つて坐つたる叔父の五十男の赭顏が悦ばしげに喋々しく芽出度しとてさま〳〵物語りす。それほど我上を心に掛けて呉るゝならば、何時ぞや無記名公債を持ち出して賣り飛ばしたる尻の割れかゝりたる時、何とか力を貸して呉れても宜かるべきに其時は、汝は不埒者とばかり頭ごなしに叱りつけたる面の憎かりしことよ、忌々しき胡麻摺り面かなと妙な席にて男慷慨する。折しも、遽に人の騷ぐ聲して頓て十六ばかりの小娘涙片手に古風にも懷劍を揮ひちらして躍り入り、見捨てられたる上は我も死なん代りに人も殺さんと男に食てかゝ

笑ひ、馬鹿めが、と大に溢がり、自ら團洲以外別に一頭地をぬくとなす。舞臺たちまち變つて古物商が家の奥の間一酌の席となり、品物賣買直段の論を鬪はすに、古物商の顎張りたる男、松助を凌ぐ技倆ありて、二十五男力及ばず、涙を呑んで少額の金を受け、冬の夜の寒きに獨り歸る途、路上の瞽女を見て無常を感じ、陰徳のために一圓を與ふ。瞽女恩を謝して擡げ起したる面を見れば、其昔の我が乳母なりしに驚いて寤む。

第十一枚。二日。　野州宇都宮に女と共に落つきて、世帶道具の揃はぬも面白しと誇りつゝ、女の臺所業に慣れぬ不器用さを叱りて味噌を磨るは乃公の方が上手なりと自ら味噌を磨るに、擂鉢躍り出でゝ止め度なく、二人大に笑ふ。女は、まだしも妾のはうが鶯の餌を擂りましたことのでざりますれば、といふ。いや鶯の餌とはありがたい、實に當世で無いが價値だと鼻の下を伸ばし悦ぶ時、女の家の舊臣といふもの踏み込み來て女を奪ひ歸らんとす。やらじと爭ひて急所のあてみを食ひ、あつと云つて我に歸る。夢の名殘に胸痛し。

第十二枚。三日。　父の葬式にて一家親戚ならびに常は餘り見知らぬ人〻大に集まる。手助けにとて來し娘等同志の語らふことは定かに聞き取れねど、二十六ばかりの男を目しては何事か云ふを、男よく〳〵聞けば、福助に肖たりと云ひ、榮三郎に肖たりと云ひ、染五郎に肖たりと云ひて相爭ふ如し。燒香の時に臨んで、男大に心を苦め、三俳優の癖と姿勢とを折衷して用ゐ、いづれの娘を

さては我金乏しくなりし故けんのみを食はさん下心よなと大にひがみを云ふ時、他の女さしをれ飲まむとの古き謎を知らせたまはずやといふに男の顔より火出づ。

第七枚。三十一日。　十七ばかりの男、年増の朋友四人の中に挾まれ、酒席にて嬲らる。二十歳ほどの美しき女、少きを掩蔽ひて却つてまた一坐の嬲りものとなる。十七と二十と小坐敷の暗きに隱れ物語らんとして、暗きが中より鬼のやうなる毛漢の出づるに逢ひ、男胸をさわがす。

第九枚。二十九日。　十三ばかりの男、李の樹の高きに上りて李を取り食らふ時、垣の彼方に十二ばかりの美しき女と侍婢らしき頰赤きとが遊び居るを見、頰赤が聲掛けて、李賜へかしと云へるには青くして猶硬きを擲げつけ、美しきが言葉も無くて擧動ばかりに欲しげなるさまを見せしには色美しくよく熟したるを潰えぬやう心して彼方に與へつ。やがて枝折れて足のふみどころを失ひ、眼覺む。

第十枚。一日。　二十五ばかりの男、土藏より父の秘藏せる軸物、法帖、古渡の珍しき唐本類を擔ぎ出しては闇を幸に庭の籬の外に遞與す。外なるは古物商の某と友人の某にて、此の友人某は三十ばかり、古物商は五十餘り、二人して小き車を持ち來り居れり。四五度行き通ひする中、物音に眼覺めしとおぼしく、誰ぞと咎むる皺枯聲す。寄席にて聞きし如く鼠の聲を學びて、ちうと云へば、皺枯聲の主は心を安んぜしと見えてまた睡る。男危きところを免れ出でて、闇の中ににつたりと

若き男こち明けんと骨折る。着つけも粋にて擧動などどこやら音羽屋に似たるところあり。母立ち出でゝ此躰を見、遊びに行きたく思ふこと切なるとも其樣のふるまひすべからずと諭す。男ぐづぐづと分らぬ呪文を唱ふ。母の巾着おのづとあらはれて其中より二十圓溢れ出で、男の手に自然と入る。男十圓足らずとて怒る。母泣く。男母を撲つて外に出で、紙幣を空に鄭ぐると齊しく、雲に乘る。鼻の先に提灯の電光のやうに動き光るあり、がら〳〵といふ雷の音、えいといふ人の聲など す。雲やがて破れ、男地に落つ。

第五枚。九日。　老人齒を嚙みて怒り、刀を左の手にして右の手を戟にし、若き男を罵る。恐れ入りて坐れる男、兩手を突きて謝罪りながら、おや乃公の指甲はいつの間にか長くなつて垢が溜つて居る、湯に行つたら鋏を借りやう、あゝ彼の鋏は無意氣に大きいなどゝ思ひ居る。老人次第に怒りて刀を拔き、若きを嚇す。若きが母と叔父と駈け入りて老人を支へ、若き男放逐せらるゝに定まる。若きは母より私に物を貰ふ。舞臺忽ち變じて酒宴の席となる。前の男のほかに花やかに出で立てる女ども居並ぶ。女の顏つき愛想なし。蔭の席にて騷がしく歌唄ふ。骨が無けりやあ一つにもなろが金が無けりやあべゝべのべえといふ歌を聞いて男内々そつと懷中へ手を入れ、金を數へながら女の顏をさしのぞく。女何氣なく大盃を男にすゝむ。男紙幣の數をよみて、一二三四五六七八九まではあれど十の數の缺けたるに妙な顏しながら盃を受け見れば、中の摸樣に蛇と蜂との描かれたり。

物の音も無し。

夢日記第一枚。

今日より夢を日〻に記さんと思ふ。夢ならでは今はた何をか記さん。記すべきほどの事を今は仕出しもせず仕出さんともせず、食ふて、寐て、黄金もて買はぬ遊びのみして、餘れる命を惜とも思はぬ代りには捨てうとも思はで、友無し兄弟無し妻子無しに生活す身なれば、泣くも笑ふもむかしになりぬ、戀も恨みも現世には無し。たゞ夢の中には猶よい事あり悪いことあり、生命ある上は免れぬ義務として人の納むる稅とも云ふべき物思ひをも得知れぬものに捧ぐ。されば、菅の根の長き春の日、あるは寐覺勝なる秋の夜を、煙草ばかり喫みても居られぬまゝ、今日よりは夜の夢を曉の風すゞしう通ふ窓の下に記し、晝睡の夢は燈火のちらつくに老の眼の花に迷ふとも其夜記して、夢の中にて我が爲る演劇を覺めての我が身が看客になりて一年三百六十五日動かず去らずに見物せんとす。俳優がをさまるのをさまらぬのゝ面倒も無く、場代が高いの廉いのゝ論も無く、大のひいきは一人あれど、それに幕遣らうの心配もいらぬさて〳〵世話の無い好い演劇かな。狂言は夢日記一つ胡蝶。おぎやあ〳〵の產婆から始まつて、草鞋で出る打出しのどゞんどんが、どん底のよし。夢若しるす。

第二枚。五日。　桐の用簞笥の中にある三十圓を父に知らさず引き出さんと、似つかはしき鍵にて

夢日記

若葉のいきほひ盛んにして、蒸し立てらるゝやうなる心地する夏のはじめ、花に明らかなりしは昨日のこと、緑に暗き墨田の堤の長々しきを、讀書に倦んでの睡氣ざましばかりに何心も無くぶらぶらと歩きけるに、脚下に小さき冊子の革表紙付きたる其狀いさゝか雅なるところある手扣帳めきしもの遺ち居たり。何人の遺せしものか、名など記されたるところ無からずやと、一トわたり檢めみるに、それと知るべき便宜は露も無くて、たゞ其冊子の七八分までを何事かは知らず細やかに書きたる筆の跡の美しきが眼につくのみ。猶よく心をとめて視んには主知ることも有るべしと、まづ第一枚のところを見るに、其首なる夢日記といふ三字は躍り込むやうにして我が眼に入りぬ。奇を好む心は忽ち燃え立ちて、こは如何なる人の如何なることをば記したるものぞや、そも果敢無きものゝ喩にすらいふ夢を日ごと日ごと記すといふ人のまた世にあるべきや、可笑しき人のものしたる可笑しき冊子かな、と思ひつゝ、路の傍なる櫻の老木が下に歩み寄り、身を其幹に憑せて途行く人を背面になし、早くも行を追ふて讀み初めんとす。折から日の光やはらかに梢に射して嫩綠の色は手に持つ冊子の紙の上に落ち、そよ〳〵風の猶暑からず吹きわたるに薄着の肌心よくして、あたりの景色も睡氣に靜けく、堤下なる鯉釣る人の餌檢めて復投ぐる鉤、錘の水に入る音微に今聞えし後は

は悦びしも觸りて見て石となり居れるに吃驚したる勇菊呆れて、仔細を同須に問へど少しも答へはせず、再三再四問ひかくれば、我等は卿に答ふべき義務を持たずと云ひし限り、撓みも見せず口も開かず、詮方なく〳〵三日ばかりは泣き居たりしが勇菊は終に那方へか立去りぬ。勇菊九世渡を去りてより次郎が家は同須が魔力もて復世の人の眼には映らずなり果てたり。同須は謹んで守り居り、次郎は今に化石せしまゝ靜に生死の外に在りとぞ。

ましてしまへば情鎖慾枷は自然と解けて仕舞ひまする。但しこれでも小奴めの忠義が過つて居りまするならば如何様とも致しませう。と段々心易くなりしにつけ思ふ存分を遠慮無く述ぶれば、次郎成程と感心せしが、さるにても他の意思を奪ひ知覺を奪ひてわらんことゝ三年はさて置き三日にても我が真心のゆるさぬことゝ思へば矢も楯も堪らばこそ、同須汝が爲せることは極めて可けれど他の意思知智を奪ひてわらんことは我が快しとせざることとなり、さりとて外に手段も無けれど兎に角女めを舊の如くして與へよ。と命じたり。さらば仰の如くせんと煙の如く同須は去りしが少時して忽ち歸り來しを見れば左の掌に一團の火を載せ持ちて、南方紫雲山の火を取り來りましたれば、これにて勇菊殿を舊の如くに致さん。と石となりたる女の脚下に火を投げ着くると見えたるが、忽ち勇菊は動き出して、今までは苔も軈て附くべく見え渡りたる石の身の眼よりはら〳〵と涙を流して次郎に必死と抱きつきぬ。生死の外の化石境より喚び返しはせしものゝ、又今更女の處置には困じ切つたる次郎忽然として思ひつき、好し我は我が自業の惡果を自ら受けて苦むべきのみ、同須よ我を紅蓮澗とやらに誘ひ行きて澗水に浸して此家へ持歸り、汝は三年の其間怠らず我を守り呉れよ。と叫べば、何事に寄らず御仰を背かぬ同須でござりまする、さらば仰に從はん。と云ふかと思へば主從二人は忽ち見えずなつたりける。あれ〳〵と驚く勇菊の半狂亂になつて家の外へ出つ入りつする間に、化石せし次郎を負ひ歸りて同須は室の中央に安置して自己は謹んで之を守り居れば、一應

ましたれば、定まりし例として、三年の間は生死の外の境に勇菊殿は在らるゝ筈。全く殺せしの何のと申すことでは聊か御坐りませぬ。此儘三年御置きになれば、三年後には蘇へりし如くに復び活動さるゝことと露疑ひも無い次第。云はば睡りしやうなる態にてあらるゝなれば強ちに女性の命を奪ひたるにても無き程に酷いばかりの處置とも自分は考へませぬ。但し三年過ぎぬ間に閻王の使の勇菊殿を召さるればそれまでの事となつて其儘黄泉へ行かるゝ分。これは我等にも見越しのつかぬことでござりますれば致し方はござりませぬ。また若し三年の其中に、水火刀兵獸畜の害にて身躰を損害はるゝことのあれば、蘇へり覺られたる節それだけの不祥の纏ふは是非無き譯。たゞ此まゝに一毫も傷らず動かさず在らるれば三年の後は今宵と同じく一毫異らぬ容態にて動き出さるゝは毫頭虚僞ござらぬこと。其時になりて復困り玉はば復び紅蓮潤に小奴めが引擔いでまゐる分。三年三年また三年と月日を過ごす中には失禮ながら御主人の鬢に霜が侵して色戀の無い冷い世界に入つて行るゝは知れし事ゆゑ、勇菊殿の執念も弓狀の腰した御主人にかゝらうやうもござりませぬ。御承知の如く男女の情は高が血の氣と水の氣との多い少いに隨つて長じも消えもするもので、白骨と白骨とがしたとて、抱懷へ合ふてカチ〳〵と音が致すやうては、アハヽヽ、隨分洒落過ぎて居ります。『燃ゆるが如き脣が額に觸るゝ』と詩人どもの申したがる情熱の光景も『冷く硬い顎骨が前部腦蓋骨にコツンと撞突る』と變つて何の妙がござらう。御安心なされませ。齒さへ切つて六十年も濟

何とせしに云ひつゝ立寄つて見れば如何なこと髪一筋損じはせざれど女は全く死して凍れりや生色無し。同須よ是は何事と忙しく問へば落着顏の同須は冷然たる例の調子で、化石いたさせましたるばかり。千萬年も此通り靜で居りますれば何事の御煩ひも既ござりませぬ。と澱み無く明らかに答へたり。

其二十二

同須が又もや酷らしき處置を仕果てゝ何とも思はず濟し返りたるに次郎は堪へず、赫と怒りて睨みつけ、ゑゝ又しても人の生命を蚤蚊のやうに扱ふて其誇り氣な面構へは何たることぞ汝同須。殺さんとせば汝は頼まず。先刻に女めが身を投げし時我が助けざらばそれまでなりしを態々活かして汝に處置を頼みしも何とか女めを殺さで濟ませんと思ひたればこそなれ。それを知りつゝ事もあらうに化石させて我が前に持來り、特更我に白晝黑夜絶ゆる間なく胸安からぬ思ひをさせんとは奇怪至極。云ひ譯あらば云へ聞かん。と容すまじき眼の色して叱り責むれど、泰然として騷がぬ同須、又しても御叱りを蒙らんとは存じも寄らぬ御情無いこと。御任せありし故に考慮を煉りたる末の此處置は我ながら出來したと存じまする。勿論御意は承知いたし居りますれば女が生命は未だ全く奪ひは致しませず、仰を蒙りますると共に引擔いで北方の紅蓮澗と申すに到りて彼の女性を澗水に浸し

も山へなりとも氣儘に行け。と言ひ放す。それなら貴郎は何樣あつても妾を捨て切る御心か。と秋波に無限の恨を籠めて震ふ聲音のいと細くも云ふを五月蠅と云はぬばかりの冷かな顏付で受けて、もとよりと云ひ切れば半分聞かず、おさらばの一句を殘して走り出て、身を跳らせしと見る間無く、水音を此の世に遺して、姿は浪間に隱れ去りぬ。

人面獸心のあさましき奴、死ねば死ねかし消えなば消えよと酷くも思ひ捨てはしたれど、眼前浪の底深く入られては袖に手も置き難く、はつと驚きて我知らず走り出でし次郎續いて飛び入り、苦み踠く勇菊を引抱へて磯藻の疊積れる岸に泳ぎ上り、家に連れ來て介抱すれば漸くに力無き星眼を薄く開きて、云はねど恩を謝する態なり。次郎勇菊が處置には困りて、自己が罪業に自己が苦むなれば今さら恨みどころも無けれど、此の惡緣を如何にせんと身を揉んで智慧を絞りけるが何とも分別に及ばざれば苦しき時の神頼みにはあらずして同須を賴まんと同須を喚び出し、今までの仔細殘らず打明け、何としたものと相談するに、御任せとあれば御煩ひ無く埒明けて進じまゐらすべしと例の判然したる挨拶なり。然らば萬般汝を賴む、京都へ魔風もて追ひ還すなり唐天竺へ吹飛ばすなり宜きに計ひ吳れと命ずれば、心得ましたと勇菊を引擔いて忽ち失せたりと思ふ間も無く歸り來りて、斯樣致しましたれば御覽下されませ永久御煩ひ無き筈でござりまするると勇菊の姿をそのまゝのものを座隅に置いて、濟まし切つた顏に賞美の言葉を貰はんといふ色を見せぬ。次郎は不審晴れやらず、

分別も思慮も驚きに掩はれて出る間無く、たゞ厭はしと思ふばかりの念のむら〳〵と燃え立てば、兎角の論無く取つて突き退け、無情も酷いも聞く耳持たず。緣は既斷てりと思ふて終へ。汝が他に酷い情無い擧動をした報酬を乃公から受取ると諦むればそれで濟むこと。歸れ。立去れ。消えて失せい。と容赦なく罵れば、岩にも爪を立てやうといふ意氣込み凄じく、それは餘りに御無躰な。厭と今更仰あつても妾は退かぬ退きませぬ。妾に惡いことがあらば改めぬとは云はぬものを何故叱つては下されませぬ。昨日や今日の交情では無し。一ト通りならず二通りも三通りも入組んだ瀨を越して漸く添はれうといふ段に詳しい仔細も御聞かせなさらず寢返りをなさるとは妾をば死ねがし失せよがしのなされ方、死に兼ねませうか私とて、生き甲斐の無い世に生き居るほど未練なものではござりませぬ。隨分見事に死にませう故、御手にかけて殺して下さりませ。それもならぬと仰あらば御家の後に波の音が妾を呼んで居りまする。淨瑠璃や草双紙に恐ろしいものと覺えた丹波越して、幾干の辛い悲しい目を見、一心ばかりに辿りついたを少しは不便と思つて遣つて下されても好かりさうなものを妾の面が疫癘の神にでも見えまするか、郎の御胸に鬼でも入れ替つてか。無理にも程のあるものではござりませぬか。と縋りつく鬢の毛亂れてしどろもどろ、千々に纏るゝ思ひの綾の解き分け難く縺れかゝるを、言葉は無益。愛想が盡きた。死ぬとも生くるとも勝手にせい。能う死に得るか賢い汝が。一年二年生き延びて甘い男でも其中には持て暮すが見え透いた事。海になりと

に亡せたるやら、我家は舊の如くになりて、海邊に沿ひたる背戸さへも月の薄明りに仄見えて、昔時ながらの浪のじよぼつく音、片貝の鹹に光る態、那處に變つた風情も無し。次郎つく〴〵と魔力の廣大なるを感しながら漸く睡氣萌してとろ〳〵となる時、ほと〳〵と門敲くものあり。水鷄にしては時節違ひなり、且は今頃我が家を訪ふものあるべくも無し。全く心の思ひ做しと自ら打消して猶起上らず、また睡りかくるに、敲く音頻に聞えて淸き聲つきの我が名を呼ぶさへ耳に入りぬ。千鳥も次郎樣〳〵とは鳴かじ、不思議のことゝ呟きながら是非無く立つて戸の外を見るに月は落ちたりや眞黑なれば、紙燭に火を點じて草履つゝかけ、誰人と云ひながら柴の扉を開くに、轉けるやうにして入り來る女の、雪白の面は火の光にぱつと映りて明らかに、眼つき眉つき紛れなき勇菊なり。思ひもかけねばこれはと驚き、兎角の思案無く家の內へ駈け上る後より袖に縋つて女も急に駈け上り、御なつかしうござりまする次郎樣。はるばる苦勞をして來たものを好う來たとも仰らず御逃げなされうとは何處までも酷い爲され方と膝に取り付き泣き口說く。外面には闇に捨てられたる紙燭の今や消え〳〵に微風に搖いて目瞬せり。

其二十一

思ひも寄らぬ往時の馴染の勇菊に突然出て來られて、醒めながら夢の鄕に飛び入りしやうなる心地、

し我も快く一睡せん。と云ひつゝ勝手知りたる事とて自己が衾出して轉りと寢る書生風を見すれば同須は驚き、餘りに勿躰なく存ぜらるれど御好みとあらば是非もなく覺えまする。我等風情は臣下として一つ家の棟の睡りも恐ろしく存ずれば、本地に歸りて居り申すべし。何時なりとも我が名を三度呼び玉はば直に現れ出でて御用を辨じ申すべし。と云ふかと思へば姿は消えて全く見えずなりたりけり。

雪洞の火を我が家在來の貝の油皿のそれに移したれば闇にこそあらね、好きより惡きへは都て移り難きものなり、鼈甲の天井と駄板の天井の煤びたるとは比べものにならず、黄金張付の襖と玉河唐紙に鶯より外に鳥類の無き文人畫の描かれたる襖とは雲泥の差あり、煤ぼれたる紙に雪花形乃至櫻花形或は無茶苦茶形の三角五角の紙を貼りつけて孔を塞ぎたる障子と水晶の障子とは月鼈の相違あり、咳をすれば唾壺を持つてまゐり噴嚏をすれば鼻紙をもつて參るものありし彼の宮殿の住居とは事異りたる一室の中、如何に次郎とて何面白い事のあるではなし。自然無聊の、趣き無きに堪へかねて急に睡られもせず、同須が晝間云ひし言葉の數々或は軍茶利王の御威德の恐ろしき事、毘奈耶伽天王の御說示の意深き事など思ひめぐらし、且は人の子の弱くして魔の誘惑に勝ち難きことなど思へば寐つかれもせず、さま〳〵の事を胸に浮めて世は何か月天心に到る時雲おのづから生じ花滿開に及ぶとき醉漢折つて歸るに極つたもの歟と獨り嘲ける時、宮殿乃至我家を掩ひし庫は何時の間

を吐かせば、次郎堪忍なり難く、同須此奴等を魔風をもて疾く吹き飛ばせと息巻き命ず。心得ましたと同須口をすぼめて徐に嘯き出せば、頓て狂風滾々として渦巻き起り天地を黒めて、美女美男をば忽ちに那處へとも知れず捲き去りたり。

其二十

八百屋の娘のお七、白木屋が娘のお駒乃至三勝、此糸、などいへる美女、吉三、才三、乃至半七蘭蝶などいへる美男等皆魔風に吹き去られたれば落着は知らず、此宮殿は主人の次郎と臣下の同須と二人限りになりぬ。銀燭蠟流れて薄暗くなれども心を截るものも無く、酒の醒め際に薄茶一服持て來るものもなければ、流石魔界の歡樂は我得取らじと思ひきつたる次郎も淋しく物悲しく、ゐゝ眠るまでは彼男女等をば迚もの事に置けば宜かりしものをと少しは悔る氣味ありしが、此處ぞと齒を咬着つて弱いところを見せず、同須よ乃公は寢る、舊の住居へ案內せよといへば、畏まりましたと雪洞片手に同須は先へ立つて導き、庫を開きていと眞黑に物臭き有りし昨日を其儘の次郎が家に誘ひ入れぬ。今までの絹緞通とは違ひて板敷の上に七島莚ばかりなる爐の緣の何と無くあはれに覺えられ、赤螺の油皿同須が見る前も嬉からず覺えたり。さはあれど次郎も浦島家の第百代に生れしだけはありて尋常ならぬ男、同須よ是も風流ならずや。汝も夜具を好むまゝ出して引被ぎて寢るがよ

仰せではござりますれど、それは餘り菅無い御捌き。妾は八百屋の娘のお七、育ちが育ちでござりますれば女學生の皮は被りましても言葉の蓮葉なは御免なされませ。成程親父は本郷に商買を致して居りますれど、盲祿頭巾を首にまいて千草の股引草鞋穿きの稼ぐ一方な穢汚づくりの人、千生酸漿のやうな大きさの水涕を鼻の端から下げて居て、山の芋胡蘿蔔の世話を焼かるゝばかりなら宜けれど、卸し山葵の乾枯びたやうな眼眵だらけの怖くも無い眼を光らせて、學問も好いほどに切り上げ、早う釜武殿と祝言せいと餘計な世話を燒かるゝ其貉のやうな顔に免じて如何して吉三様の御美しいのが思ひ切られませうか、積つても知れた事でござりまする。それを四の五の云はるゝゆゑ吉三様と逃げて大磯の海水浴に少時の逗留。初めて夫婦と宿帳へつけた時の其嬉しさも懐中の御金の無くなるにつけ、辛さが増して何様しやうかと思ひに屈して居たところを家からの追手に引戻され、別れとも無い吉三様に別れて是非無く歸る途中からまた逃げて吉三様に遇ひ、退くに退かれぬ互の中、一所に身を捨てやうとしたところを同須様に助けられて二人とも此方へ御奉公。好いた同士の顔見合ひながら結構な御殿に宮仕へする此様な嬉しいとは無いと喜んだ甲斐も曲も無い御暇とは酷い御情無いと存じまする。と饒舌立つる後より、一黒に光琳梅の裾模様、おとなしやかなる島田髷の娘を首として三十何人頭を下げ、妾どもゝいづれ似たり寄つたりの事で我家へは歸りともない。此方を極樂の様に存じて居るもの、何卒長く御召使ひ下されませ。と云ふ。男どもゝ同じく同様な狂語

々心得ました。今宵御寢なりまする其間に仰の通り致しませう。と誓つて退出したりけるが、少時してまた入り來り、拐帶蠱惑いたしまゐりし美女美少年等を放還いたして各自の本土に歸らしめんと、諭しましたるに如何にしても此儘此處に長く仕へて居たりき旨を口々申し、なかなか威力を加へまぜいては御仰せの通りになりませぬ樣子。通力の颶風旋風をもて力づくめに逐ひ還しませうや。如何いたしてよろしうござりませう歟。御思召のほどを伺ひまして仰通りに仕りませう。と云ふ。本土を離れて此處に來居るもの等の放還を悅ばざるとは合點行がずと、皆こゝへ呼べ我自ら質さん。と云へば同須は次室に出てゝ我君の御召ぞと呼ぶ。聲の下より十八ばかりなる美女を頭、二十ばかりなる美男を頭に、迷ひたる人の子男女合せて八十人餘り、しとしとと歩み出てゝ女は右男は左にずらりと坐り平伏す。次郎聲おのづから銳く強く、如何に汝等親もあらん兄弟もあらんに一念の迷ひより我が住居に連れられ來り故鄉本國を離れ居ること憫然の儀なりと察し遣りて各自に自由を與へ與れ、本土に歸らしめんといふに、却つて我が慈悲の言葉を空とし此處に止まり居たき願ひを同須に逼りたてたる由。不埒不屆不覺悟千万、言語同斷とはおもへども聞かねば仔細更に分らず。無禮は免す遠慮は入らぬ、思ふ通りを包まず云ふて我に聞かせよ。と命ずれば、ばつとした八丈に藤色の異り裏少し油の氣のある束髮、見るからが淫奔臭い濡のきく眼つき、寄席で知らぬ男に尻をつめられても、默つて色目て見かへりそうな質、と惡口を申せば申さるべき女進み出て、我が君樣の

持つて、同須。汝が言は活けり。皆我が不徳の致せし咎なり、我は汝を既責めじ。唯今我は酒を欲せず。此玉樓は氷をもて作れる如く我には辛し。疾く此を皆本地に還せ。美女美少年の其の中にて元來汝等が族にあらぬ人間の子は皆それ〳〵放つて本土に還らしめよ。我は笹葺の舊の家に一人淋しく茶を煮て足れり。魚鳥蟲獸は感覺のみありて魂魄なしと人間のため利益ある敎を聞き居たりしが思へば非なり。神と人との其間に人より強くして神より弱きものあらば人間を見ることは我等が蟲魚を見る如くならんも未だ知るべからず。我今よりは穀を植ゑ樹果を採りて我が額の汗に食はん汗に衣ん。同須汝も我を助けて共に働け。と命ずれば、此時同須は慄ひ出して土色になり、當惑の眼に涙を浮め、憐愍を乞ふ如き態して泣き〳〵次郎に近づきぬ。

其十九

鬼神は横道無しとかや、これを思へば人間ほど不埒なるものは無し。同須は次郎に打向ひて、仰では御座れど御耕作の御手助けだけは何卒御免し下されませ。餘の事ならば何に寄らず仰せの儘に働きませうなれども、勤儉と申す事は我等が界に無きなれば全く我儘なんどより爲ぬといふては無く眞以て出來ねば詮方ござりませぬ。其代りには他の事は如何なる御難題を御出しなされても屹度仕遂げて御覽に入れまする。美女美少年を放還の件、此宮殿を打崩して舊の如くに致しまする件は一

前に理綱無し慾はこれ猛火團、聖賢も斫つて捨つべく人倫も焚て滅ぼすべし。彌陀の赤子も拐帶しエホバの羊も腹の肥しとなすべきに、高の知れたる蘭陵の美酒松江の鱸、千里湖畔の寡婦が臺所の尊榮、香積菩薩が鉢中の秘藏飯、乃至魯般が作の高塔、飛驒の内匠が彫刻せし門、龍宮の珠、極樂の樂器諸道具、羅馬の建築、巴里の贅澤品など竊盜强奪騙取するに何の文句の有るべきや。又我が部下のものどもの美少年と現ずれば美女これに隨はんことを欲し美女と現ずれば少年これが跡を追ふまゝ連れ歸つて君に奉侍せしむる此等は全く彼等が自業果、氣の毒の義も露あるべからす、家宅財寶を我等がために奪はるゝものも其の如し。御聞下し置かれて御合點ありたし、假令我等に通力ありとも緣無きところには威及ばず、たゞ緣あれば即ち入り、因あれば即ち助けて彼等に憂き目を見するのみ。因緣彼等の能生なれば彼等の受くる辛酸悲苦は實に我が與ふるものとしも無し。此理を疑ひて我が言を遁辭なんどゝ思し玉ふな。申し開きは斯の通り。忠義の他には他念も無く滿腹丹心ばかりなるを御奉公初めより御叱り下されずともあはれ何卒御賞美下され。と濟し切て述べられて次郎いよ〳〵惱苦し、此非道なる魔族の論を一言に云ひ破らんと心は踠けど、段々思へば我みづから快く一盃飮まんと云ひしを大袈裟に極點まで臣下の忠義に推し廣められたることなれば我が過ちを我と責むるより他は無く投首して心中深く悔ゆるのみ、我がため幾千の人の惱みて如何に悲み悶ゆらんと思ふにつけての懺悔涙と一念の差より斯ることを仕出したるか殘念やとの口惜涙を眼に

に謝したる其上に通力をもて皆それ〴〵存るものを舊の地に還し無きものは辨償なすべし。と眼から火焔の出るまで、顏に火の色燃ゆるまで、忿怒の勢ひ凄まじく、杯を捨て拳を握りて威丈高になり罵れば、同須は猶も冷かに、これは思ひも寄らぬ御言葉。御賞美にこそ預かるべけれと思ひしものを異な御叱責、それがしの所爲を殘忍とて惡ませ玉ふや心得ず。もとより一獻快く酌まんと仰ありたるゆゑに、申すは畏けれど笹葺茅葺藁葺の類の御住居にては相應しからずと此宮殿を設へ申し如是萬般をば取り賄ひたり。御本意を擴張しばかり毫も私意は加へ申さず。但し快飮望ま欲しと仰せありたる御本意に同須の所爲の背きしや。黑木の綴緣丸竹の柱、桴の燻ぼり返る圍爐裏の灰に白丁德利を埋め、舌にざらり〳〵といたす茶醭六をまゐらせて、快飮望ま欲しと仰せありし御本意を奉戴せる臣下の所爲と申さるべきや。酒は醇を嫌はず魚は鮮けきを厭はず、高樓一望の眺め、美人侍宴の興、いづれか好ましからざるべき。酒はもとより口腹の慾には過ぎねど口腹の慾は畢竟意の慾、此の慾を果さしめ申さんために取り計ひたる我が誠意を、斥け玉ふぞ御恨なる。不仁不德と仰せらるれど意慾の前に何の仁か之あるべき將何の德かこれあるべき。燕の巢を食ひ蜂の蜜を奪ひ熊の掌を掠め牛の腋を殺ぐことの聊意に介むに足らぬと同じく人の家を燒き肉を醢とし血を羹とし魂魄を我が玩具とするに何の悼ましきことやあるべき。殷紂夏桀隋の煬帝、皆是淫酒の三昧に入りて至極に至られたり。他の財奪ふべし他の妻犯すべし。慾前に敵者無し慾は是大利刀、慾

玉はんには舊の光景は相應しからずと斯く建て設けましたるなり。されども舊の御住居は其儘にして塵一つ動かしませず其上を大いなる庫もて掩ひました。あれ御覧になれ後方に見ゆる庫は即ち元の御住居、又我が通力は何として無より有を成し得申すべき。此廣大なる御住居は千里二千里乃至は東勝神州西牛賀州等より奪ひ來りまして此地に安置せしばかりの事。召し上られたる美酒は蘭陵の青旗立てたる家より部下の者に奪はせ、下物は極樂の飲食乃至は北鬱單越の香厨より掠め來らせましたるもの、美女美少年は通力をもて欺き釣り寄せ我が同族となしたるものにござりまする、舊の御住居近に在りし漁師等が家は火を放つて灰燼となし地を淸め、七千の部下を使役して斯く迅速に御一献御心よく酌まれんため御住居をばしつらひたり。と誇顔に答へ澱みなし。かくと聞くより次郎は面色忽ち變つて土の如く、何此榮華は皆偸み物より成れるとか。又漁師等が家は火を以て燒きしかと。急込んで質すに冷然として、左樣でござる、と眉も動かさず同須は云ひぬ。

其十八

流石の次郎も同須が答に勃然として怒を發し、不屆至極の汝同須、誰か汝に刼掠蠱惑を事とせよとは命じたる、誰か汝に火を放つて家を燒けとは命じたる。我が命じもせぬことをなして罪なきものに苦を與へたる、不仁とや云はん不德とや云はん。殘忍無慈無至極の振舞、早々罪を我に謝し天地

運びて、紫水晶の一枚板なる大卓子、黄金の瓶子、麒麟の角の盃、蓬萊三島の飾りもの、それ〳〵持出れば頓て一人の美少年は徐ろに盃を取つてまゐらせ、今一人は瓶子を手にして進み出でぬ。次郎寛々と大盃取り上げて飲み乾しつ、同須に與ふれば、袴つけたる同須は、低頭平身して恐れ畏み頂戴なし、淺からぬ因緣、有り難き御厚情、長く忠勤を勵むべし。と誠を籠めて誓ひたり。次郎猶一の大盃を飲み乾して之を同須に與へ、其方より初め皆の者に一巡廻らして取らすべしと命ずれば同須かしこみて自ら一口つけて次に廻すに、皆々恭しく頂戴て、我が君萬歲と唱へ終りぬ。これより主從打寬いで頓て銀燭座に出づる頃ともなれば、紫檀棹に花櫚胴、いづれ裏には文杉のあるべしと思はるゝ好き音色の三味線取り出して、御興添へんと一と節聲淸く歌ふもあり、金扇取り出して一とさし志とやかに舞ふもあり。願はくは我が君の御感に預からんと詩を賦して悅びを述ぶるもあり、歌を詠じて志をあらはすもあり。さま〳〵にして慰められ、次郎も大きに悅に入りしが、酒半酣に及んで陶然として、心大きく肚濶くなれば、思ふ事少しも忍び難く。皆々退れ同須は遺れ、汝に問ふべき事あり。と大盃を手にしつゝ命じたり。心得ましたと酌の少年たゞ一人と同須との外は退けば次郎は席を乘り出して。同須よ正しく答をなせ。我が舊の家は何とせし。又此の家は何として建てしぞ。汝の通力は無より有を生ずる事の成るか。我が舊の家の近くにありし漁師等が家は何とせし。と折重ねて問へば同須は騷がず、一獻快く酌まんとの仰によりて、御快く酌み

て例の車にゆらりと乘れば、利佗横羅等の七八十人其他の美女等は見送りの禮儀正しく默禮し、車は雲に碾り上らんとするをお妙お瑞は輪に縋りて叫び悲む其有樣紅涙紛々面に亂れて、髮の飾りの玉鳳凰は金釵と共に脫けて地に落ち、戞と響いて碎くるをも厭ふ間なきばかり也。されど心のこゝにあらざる次郎は同須に命を下して彼の甲冑せるものどもに兩女を酷くも引退けさせ、悲聲を背後に車を早めて九世渡を指して急がしたてぬ。疾風飛雲矢よりも駛く、瞬きする間に九世渡に歸れば有りし家居は影も無く形もあらず失せ果てゝ立列びたる漁村の光景全く消え失せ、今はたゞ、成相、天橋、宮津の町も合せて一つの大庭となり、金殿玉樓高塔朱欄、王者の後園も是には過ぎじと思ふばかりに莊嚴美麗を極めたる廣大絕倫の一と構あり。我が家は那處ぞこれは如何に、と呆れて車の上より聲かけ、同須に問へば笑を含みて、彼處に見ゆる宮殿こそ御住居の爲我等が御奉公の手初めに建てし者にてござりますれ、いざ御案內仕らん。と云ふ時車は恰も地に下りれば次郎は夢の如く、我が家とは云へ勝手も解らず、例の女の童に導かれて奧殿深く打通るに、善盡し美を盡したる其態膽の潰るゝ事のみ。樓に上れば琅玕の柱珊瑚の釘隱し、鼈甲の天井水晶の障子、敷き詰めたる絹緞通の厚さは膝を沒すべく、眺望は日本第一の天の橋立我が物なり、世にこれより好き家あるべしとも思へず。捩れものゝ次郎もこれが厭では無ければ笑つて上座につくに、女にしても見ま欲しき美少年の大振袖の色あるを着て、若衆髷に伽羅の香させたるが何人となく恭しく酒肴を

は寐たまゝ穿かせて、傍去らずに眞實しく働き呉れ、餘の女等は溪茶岕茶の一滴千金なるをまゐらせくるゝもあり、龍眼肉、荔枝、芭蕉實と菓子すゝめくるゝもあり。次郎遠慮を知らぬ性とて思ひきつて用をつけ我儘もする中、同須殿のお迎ひにまゐられてござりまするとの童の云ふに、次郎立上れば、既御歸りになられまするか妾等二人は那處までも御連れなされてと妙相瑞相二人は左右より取りすがりぬ。

其十七

我此魔道を修せしこと如是美女にかしづかれて歡樂を極めんがためにとてゞは無しと思へば、次郎再三再四とゞめしも二女は聞き入れず。妾がまゐらせし衣着玉ひ、妾がまゐらせし羽織着玉ひて妾等が心を納れ玉ひたるに今さら左のみ情無く仕玉ふ事やある。此界にては此儘にて女の一分はたゝぬことなり、枉げて妾等を連行き玉へ。唐くさき名に媚めかぬ此の風俗を嫌ひ玉はば妾が名は妙と改むべし妾が名は瑞と呼ばれ申さん。衣裝も和樣の當世を眞似て何とも換へ果てゝ、言葉も輕き洒落とやらを申し習ひて御機嫌取らん。假令連れ行き玉はずともお後を慕ひて一念の雲に身を委ね、涙路を凌ぎ山を越えて御住居まで參るべければ言葉とばかり聞き玉ふな。と涙を流し懷を述ぶれば、可憐とは思へど狎れ過ぎたる言分なりと次郎は肯かず。推參千萬鄙陋なり、思ひとゞまれと大喝し

ぞつくり黒揃へ、往時の通人めく好みなるを取つて捨て、八番めの好らしい女が、卵黄絖の下着に野々宮の書巻か袋法師の書巻か知らねど異な物好したる、其上着は態と行儀霰、其羽織も同じ小紋と生野暮にしたるを、したゝるい眼しながら持つて出るを、おのれ此ぶんやめが不埒千萬、袂に業平相傳の丸薬でも入れては置かぬか慮外な奴と笑ひながら叱りつけ、狐の腋を綴ぎし裘、綸子無垢、縮緬揃ひ、これも厭あれも厭と九番十番十一番めのを皆用ゐず。最後に萬般控へめな様子して居たる優しげな女の齎したるを見れば一向品の素性知れず、これはと驚いて問へば、これこそは比奈耶伽天王に人間の租税として納むるなる人の皮の衣、又これなるは蟲衣と申して天蠶なんどの類より作りし物でござりまする。天王四臂天の御相を現じ玉ふ時は蟲衣を召し、四臂三面の御相を現じたまふ時は人皮の衣を召し玉ふこと慣例なれば、誰しも憚かりて参らせねど、御前様は利佗横羅殿、同須殿、金剛奮迅殿、勤勇者頂殿、金剛栓殿なんどの列にもおちぬ御方と見ましたる故、若し罪の有らば妾が身に引受けませうつもりて持つて出ましたと云ふに、人皮の衣と聞いて愕然驚き、身ぶるひ出てしが我に優しき心入れの憎き事無ければ、人皮の衣だけは御免蒙り、蟲衣をとりて我が衣と定め、六番めの女の唐織の羽織を上に着るに決め、矢張我等は日本の俗が慣れとて一番身に樂な。と此二品に札を落ぜば、六番目の女妙相女十二番目の女瑞相女の二人は自己の身の面目、と美しき面に喜色の輝きを添へて一段美はしくなり、百年も添つた女房のやうに、羽織は前面から着せ足袋

亂さず、傲然として四人の女に垢を掻かせ終ひ、また一ト浴して出浴りかゝれば白布の湯取りを童の衣する後より美しき女ども十二人、各自廣蓋に衣載せて持ち出て、頭だちたる一人が冴えたる聲して、妾等十二人が持ちまゐりたる衣の中にて御心に叶ひたるをば取りて召せ。御着古しは此地の者等に下し置かれなば有り難き御恩に存じ申すべし。と利佗横羅殿の申されまする。何卒妾等が持ち參りし中にて御心に染みたるを御召し下さらば如何ばかりか御嬉しう存じ申しませう。と媚をつくりつゝ云ひ出でゝ皆一齊に頭を下げぬ。見れば頭立ちし女めの捧げし衣は綠地の錦に睡虎亂竹の織り模樣。途拍子も無い、此樣なものが着られるものかと無遠慮に突き退くれば、恨み顏して退きぬ。二番めのがは紺地の錦に五本爪の龍あらはれて火焔には珊瑚を綴つたり。これは見事なれど海賊めくと云はれて默つて引込めば、妾こそはといふ顏して三番めの女の居ざり出るを皆まで見ず、白地に鳳凰の丸の金絲刺繡は高等なれど御寺の襖見たやうなと一口に云ひ下せば勃然顏して横を向く。四番めの二段鼻の女の持ち出しは黑天鵞絨の毛の長きに眞珠の笹緣つきたる上衣、猩々緋の半洋袴、毛飾り麗しき藥研帽子、黄金づくりの佩劍、金剛石の飾り鈕つきたる靴まで一々別の箱に取り添へたり。古代洋服もをかしけれどチヤリ子臭くて嫌ひなりと云へば失望の眼を空さまにして退る。五番めの生意氣なる女は鶴氅綸巾に天狗の羽團扇添へたれど賣卜者の棟梁にはならぬわいと叱りて逐ひ、六番めの女の唐織の羽織緞子の三枚着と和樣に出て來たを默つて投げ、七番めの、

煙草ならカメオ一本喫まぬ間に既山水の美はしきところ見ゆれば、同須は一人駈け拔けて委知れずなりしが、車の穩かに地に下りる頃、峩冠錦袍せる利佗横羅其餘のものども七八十人ほど同須を先に出で來りて言葉も出し得ず慇懃に入拜し、彼の女の童に導かせて浴殿に伴ひ奉つれば、こゝに同須は一禮して、後刻御迎ひに參すべしと復雲に乘つて一ト度歸りぬ。次郎浴殿の中に到れば女の童衣服を御脫せ申して瑪瑙に黃金の沃懸したる大きな亂匣に納め奉るにぞ流石の次郎も汚れたる越中の遣り塲には少し困りけるが、まゝよと赤裸になつて浴槽に入るに、槽の大きさは大計疊八枚も敷くべし、悉皆臘石をもて疊み成したる淸らかさ云ふばかり無し。熱からず微溫からぬ靈泉なみ〳〵と常に湛へて斷えず四方へ溢れ行く氣味の快さ。此處で楊貴妃と痴話つたなぞとは玄宗めも中々味を遣つたものかなと思ひながら次郎悠々寛々と煖まりて、槽より出づる途端、此密室の闥を排いて、御垢搔きいたしまゐらすべしと鶯の鳴くやうな可愛らしい聲して、歲は十六か十七ばかりの眉にほやかに色白き處女四人、白紗綾の薄袷に瑠璃の玉襷、甲斐々々しく裝ひたるが入來りて、右手にとりつき左手にとりつき、背に取りつき脚にとりつきぬ。

其十六

書にしては何樣もならぬ景色なれど利佗横羅めが我を積るでは無き歟とおもへば次郎なか〳〵心を

を傾けて汝と語らんと思へど汝の通力にて此事叶ふべきか如何。と云ふ。同須は滿面笑を含みて、いと易き御望み。かゝる事は仕馴れて居りまする。其樣な御注文ならばまだ〳〵強く烈しき御望みにても仰らるべし。然らば有馬箱根道後伊香保も珍らしからず熱海城の崎も古めかしければ唐土驪山の溫泉に御來臨あるべし。彼地は我等同族の往時隨分働きたる名所にも之あり且は又當時も利佗横羅殿と申す我等が朋友の管り居らるれば萬事間の拔けた事もござるまじ。早速御供仕りて我等は此地に罷り歸り御保養の一獻過さるゝだけの準備して御迎に伺候致すべければ左樣思さるべし。と段々馴染になれば畏ろしくも無い親切者。次郎悅んで、驪山と云は成程楊貴妃が玉の肌を洗つた古蹟、これも頓て日本領となつて矍鑠大賢どもの別莊が立列ぶことであらうが、大分道程も有り、何として行く。と半分云はせず、同須は叫んで、我に助力あれ方々と虛空に言へば、忽ち戶外に十人ばかりの足音して、さあ召しませと喚ぶ聲聞え、見れば七寶を鏤めたる五色の車、錦帳絹蓋の裝ひ美々しきが門口に在りて甲冑したる屈強の郞黨蹲踞平伏なし、二人の女の童の切り禿せる姣きが、此方の殿樣早や召さんせ、とあどなき笑顏して遠慮なく入り來り、次郎が木綿着物の袖を引いて誘ふ態、如何なる尊き人に我がなりしかの如くなるにぞ次郎はまた驚きけるが、不敵のしれもの、車に上りて環龍の繡せる菌の上にゆたかに坐れば、同須は後に童は前に郞黨等は四圍を包みて擁護なし、忽ち地を離れて雲の上を飛ぶが如くに駛り行きぬ。

に仕へて二心なきやと問ひ試むれば、如何にも二心はござらぬと云ふ。通力ありやと尋ぬれば、分相應の通力は具へてござると云ふ。知解ありやと尋ぬれば、知解も具へて居りまするといふ。よし然らば先づ汝の生地汝の住所汝の經歷の其の概略を語りて聞かせよと命ずれば、同須首を下げて、生地は確と知り申さず。猶御主人が那處より生じ玉ひしかを知られぬ如く、此は我等が知解には及ばず。住所はこれまで雞羅山にて、常に天王に隨從し、或時は獻駄哩縛城にあり又或時は三千世界に遊行いたして閻浮の衆生が道念を亂し邪欲を誘ひ、ひとへに五欲の滿足を心がけしめんがために種々の所行をいたしたり。經歷と申して別にこれと際立ちたることも御坐らねど、申し難き事ながら近き頃御主人が右の腕に宿りて、或は白き舍利或は赤き舍利を我思ふまゝ取らせたるが隨分の手柄ぞと覺えました。と云はれて次郎愕然となし、なに。我が腕に宿り居て白き赤きを汝の思ふ通りに我に取らせしとか。扨は此の次郎汝のために疾くより計られ居たりしか。と呆れ返れば同須は進みて、御主人憤り玉ふまじ。其折は其折、今は今。今より後は御主人の命のまゝに働くが我が天王への奉公なれば聊か負き申すまじ。さて此の同須は何をなすべき、命を下し玉へかし。と彼の天王とは遙に差ひて言葉遣ひも怖らしからず、打和いて我を主と仰ぐ樣子に心安く、さらば主從の盃せんに汝通力もて酒肴の用意を瞬く間に爲し果すべし。また我は此幾日の間身心いたく疲れたれば但馬の城の崎乃至はまた伊豆の熱海といふやうなる温泉に一ト浴して元氣を復し、其後快く一杯

役に少時供し得させんず。前め。愚者。と寳劍を揚げて招き玉へば御言葉は解せねど勇んで進み出づるに、魔王は牙を咬み鳴らしていよ〳〵忿怒の大怖畏相を現し玉ひつ、寳劍を一ト揮り揮つて仰ぎ見る次郎を脳天天門より斬つて二片となし玉ふに、逃るゝ間無く斬られてはッと膽散る思の我にもあらず驚きけるが、痛みもせずして我が身は二つになりしか不思議や、こは〳〵如何に、我と同じく寸分違はぬものは右にあり我は左にありて五躰に些の疵もつかず、此身が我か彼が我か、夢にもかゝる奇異は無く一人が二人と全くなりぬ。尊天は右の次郎をば劍もて指しつゝ嚴かに、其處に名あれよ。名に力あれ。力に質あれ。質に性あれ。毘奈耶伽天王隨侍同須。と呼はり玉へば唯と答へぬ。同須汝は浦島次郎が侍者たれ少時。と復宣ひて、卒や鷄羅の山宮に歸るべきぞ。と次郎にはたゞ一言を殘し玉ひ、ありし御姿は搔き消すごとく唯千條の光明となりて失せ玉へば護摩の火は全く灰となりて居たり。醉へるがごとくなりし次郎、傍を見れば同須が既我が家從の如く謹みて、頭も上げず伏侍し居るは不思議といふも餘りある前代未聞の事なりけり。

其十五

次郎は我が身より出でし一體分身の同須を見て、これが魔族の通力あるものとも思へねば疑惑晴れず、少しは怖畏も胸にあれど、我が侍者たれと命じ置かれし天王が言葉を力と頼みて、同須汝は我

摩訶毘盧舍那は即ち我なり自在天王も即ち我なり摩訶怯羅天も即ち我なり六臂天もまた我なるぞ。四面八臂と現はれ四臂三目と現はれ十二臂四足と現じ八臂三目四足と現じ、或は必隷多に乘つて大惡相を現じ或は寶蓮華に坐して金色身を現す。雞と汝の眼に見る時あり烏と汝の見る時あり。淵に躍るの鯉魚となり天に冲るの鷲となり、猫兒となつて花下に睡り雀となつて屋角に巣ふを汝等いまだ知らずや。説け我はこれ佛か魔か天か畜生か鬼か仙かと。よもや一句も下し得じ。魔道もあらず正道も無し。戯論空語の滿足を求めて自ら足れりとせんとする愚者よ我汝に示す道も無し。非魔非佛なる我に對つて魔法を求むる昧きものよ。金銀財寶美女官位なんども求めば魔王に命じて直ちに汝に取らせもせん、魔法の指示は我れ爲さじ。と全然肯ひ玉はぬ樣子に次郎望みを失ひ茫然として答ふべき言葉も急には出せざりしが、こゝぞといよ〳〵勇氣を起して、仰せ一々至高の妙理なか〳〵何とも會せざれど、魔法無しとの御事ならば是非に及ばず念を棄てん。さはさりながら緣ありて幸ひに如是御值遇申すことを得たれば、あはれ願くは御眷屬の中になり御加へ下され御召使ひ下されたしと。日頃は高慢至極の男の我を折り果てゝ切に願へば、小さきものよ。煩はしきことを云ふものかな。汝は既に我に取りては魔となれり。我が眷屬は四天王並びに諸仙、左には倶摩羅將軍、右邊には阿吒薄元卒大將、四大夜叉、九千八百の大鬼王十萬七千の諸毘奈那迦あれば汝を用ゐる要なし。されど左までに云ふ上は汝を我が族になし與へて同須と呼ぶ名を假に命じ、汝浦島次郎の使

かもの、勇をふるつて毘奈耶伽王に一禮なしつゝ、少しも怯まで、能くこそ御入來下されたれ。それがしことは浦島次郎と申して魔道執心のもの。御尋ね申しあげたき事、御教を受け申したき事山々ありて御招き申せり。まづ〳〵御樂に御坐なされ。と馴々しく云へば尊天は眼瞤ろぎ一せて威儀を崩さず。寛怠なり愚者。魔道執心とは虚言にて、魔力を偷んで仙とならんと小き智惠を動かして我を誑る心算とは飽まで見破り果てたるぞ。賤しきものめ、弱きものめ。愚や軍荼利明王を頼みて我を招けるか、愧ちよ小さきもの、退れ卑きもの。魔道呼はり、嗚呼なり、愧ちよ。甘露軍荼利夜叉明王とは即ち異現同實の我が事なりとは知らざるや。魔とは什麼。佛とは什麼。汝が求むる仙とは何。云へ。云へじ。あはれ、人の子、鬼の餌。毘藍の風の吹く日より鐵圍の山の灰となるまで佛の背人の胸に住める我を如何でか魔といふぞ。娑羅樹の花の凋まぬ前鶴林の露殞ちぬ間に少時現ぜしものが佛か。思へ愚者。什麼善。なに惡。十善を修せざる魔王なく、天地を私せざる神佛無し。佛と云ひ又魔といふも戯論空語に過ぎざるぞ。聞け一切法は唯言語名句あつて眞實無し。忘れよ世間の言語名句を、捨てよ汝の思慮分別を。智ありと思ふやあはれ人の子。汝が智の國の涯に立つて前面を見よ悔ゆるべし。明ありとおもふやあはれ鬼の餌。汝は一眼足らずして色と形とを見るのみぞ。汝等始と終とを知つて始の始と終の終との相連なるところを知らず、佛と魔とを知つて佛の魔と魔の佛との同じく遊ぶを知らず、仙法修行及ばずして魔道を修せんとは味物め。我を何ぞと思へるや。

就と極れば、一ト際聲も張り上げて何やら娑婆訶と念じ切る時、忽ち大地震動して雷鳴脚下に轟き起り、戸障子は皆劈き破られ、家は恰も船の如く上下左右に搖り蕩され、墨より黑き雲湧き出でて咫尺を辨ぜず四方を籠むる中より紫色の電光走りて瞳を燒くかと思ふばかり銳く閃く怖ろしさ。預て期したる浦島次郎も、一水磨の獨鈷の水の滴るほど鐵色澄めるを右の掌に、忘るゝばかり緊乎と握りて、左手に護摩壇の界繩を賴みの綱と執りしまゝ呼吸さへ得なさで一生懸命屹と眼を据ゑて見るに、又一段の激雷の音、銀山碎くる百萬の巨濤一時に寄するが如く、砉然として鳴る途端、思ひもかけぬ我が胸元より一團の烈火躍り出して赤光を放ちつゝ烏雲に乘るよと見る間もあらせず、「內に在りては外に聞き、外に在りては內に聞き、暗きに居ては明らかなるに見、明らかなるに居ては又暗きに能く見る毘奈耶伽王とは我なるぞ」と潮音松籟比へ難き壯大無上の朗々たる聲先づ頭上におりて、仰げば、頭には寶冠を頂きて髑髏を莊嚴の具と飾り玉ひ、齒をもて唇を咬み玉へる忿怒の相形怖しく、左の手には印を結び右には寶劍を提げて三目を睜開き、はつたと睨んで大魔王は次郎が前に突立ち玉へり。

其十四

尊天が相形の畏ろしきに次郎一度は驚きしが、固より魔道を修せんなどゝ思ひ立ちしほどのしたゝ

舍利をもて占つて魔道成就と大吉を得しも道理、かゝる好き手段を思ひ得たり。と龍の腮の珠を尋ねて採り得たるほど次郎は悦び、それより急に生絹を買ひ來て、少しは習ひたる事あるを幸ひ、本文を力に明王の尊像を描き、護摩壇をしつらひ、水瓶水盤金剛盤獨鈷三鈷五鈷の諸法器を或は借り或は買ひ或は手作りに作り出して遂に殘らず具備しければ、さらばこれより明王を祈らんと、淨衣を引纏ひ齋戒沐浴して祈り初めぬ。供水供花の次第嚴に、蓋燈の光り晃めき渡りて、護摩の火焔物凄きまで烈々と熾え、室内に黑煙り渦まき舞ふ有樣何と比ふべき語も無く、恐ろしなんど云ふばかりなけれど、必死を期したる上の事とて次郎は些も怯まばこそ、明王が呪文高らかに唱へて心腎脾胃を揉み立て〳〵切りに祈りかけけるが、末には眼も血走りて聲はしやり〳〵と涸れ果てつ、咽喉に砂ある如くになり、脚はひよろ〳〵と力無き病上りの人に等しきまで弱りかへりて、顴骨高く露れ鼻梁尖り出て、眼ぎろりと輝ける其態夜叉を欺くばかり、鏡に對はば自分ながら驚き倒れんとおもはるるほどの惡相となりしが、日數重なりて今日はいよ〳〵滿願の日となりければ、ひとしほ丹誠を擢んで丶血を吐くばかりに呪文を叫びつ、九萬八千遍の數漸く滿足せんとするに及んでは、一遍唱ふる度ごとに勇氣加はり法悅增して、疲れも忘れ苦も忘れ、總身湯氣立つ熱汗に浸りて祈り詰めたりける。呪文は長くて彈舌の音むづかしけれど一心凝らして持するに埒明き、既殘餘僅に九遍になりぬ。八遍になり七遍になり六遍五遍四遍三遍二遍となりて、これ一遍にて、嬉しや修法成

其十三

眼に觸るゝに隨つて蝦蟇口錢で買ひ集めし缺本零册に佳きものあらう筈無く、特に佛書は深く見ぬ次郎、調べんとしても手がゝりの書物乏しく、また口傳事を受けたること無く、修法次第をも手に持たざれば、これには殆ど弱りしが、屈する心は更に無く、五里ほど彼方の眞言寺より秘密儀軌の缺本を借り出し、但馬境の古き學者の家より阿娑縛抄の三十卷ばかり蠹ひ餘せるを尋ね出し、これに縋りて苦學の眼ざし恐しく、湯浴る間なく爪きる事せず髮も梳らず寢食を忘れて、晝も戸を閉ぢしまゝ、油燈の光を氣の散らずして好しと小机にかゝりし限り身動きもなさで魔法を調べけるか、日を經て漸く軍荼利明王の修法秘密を會得なし、此明王の法に據りて聖天を召し出さんと決心しぬ。そも〳〵聖天毗奈耶伽王は神通廣大靈威無双にして、那羅延天の大多力なるも之に敵し難く、天龍八部も爪を立て得ず、梵王憍尸迦も力制伏すること能はず、荒れに荒れ立ち玉ふ時は天地をも傾覆し山岳をも微塵に碎き玉ふこと我等が鷄の卵子を扱ふよりも自在の御身なれば、到底尋常に毗奈耶伽王を本尊として恭敬禮拜するとも一ト通りの事にては出現示敎あるべからず。されども軍荼利夜叉明王の憤怒勇猛の大剛の相を現じて叱咤逼迫し玉ふ時は流石の毗那耶伽天も力及ばて折伏され玉ふ習なれば、軍荼利明王の威力を借り奉りて毗奈耶伽天を茅屋に請し、其後何とか仕樣あるべし。

聞くとひとしく世間師匠顔するものを無用の長物、口錢取り、千金丹の賣子同然と見限つて、内々彼等の賣藥を檢めしに、人參は大抵髭ばかり、麝香は一種の黴菌を培養せる人造物、ヘルスと見せかけたるは泥鰌の變化、精錡水の代りに淋病の洗ひ藥、寶丹と僞造へた寒晒粉の色付け、いやはや昔時の書物が炒豌豆の袋となつて、昨日の南京豆の袋が今朝新版ものと變つて來るよりまだ恐ろしい魂膽、これにほと〳〵愛想つきて師匠を取らざりしが、さし當つて今の困却、魔道を修せんに那の魔王に歸依して何の法を修して可やら少しも分らず。我折つて眞言坊主を師と賴まんか、次第一つ傳授するにも錢取りたがるは口錢取りの常なれば容しもすべきが、東京の紳士等財が儲けたいばかりに聖天の浴油一つ賴めば大法七十五圓畧法七圓五十錢とせしめる由にて而も名だゝる人々の密に賴むに七十五圓惜まざるもの多しと聞けば中々貧の身の魔法傳授は思ひも寄らぬことなり。ゑゝ何としたら好からうぞ。おゝ思ひついたり聖天こそは威力廣大のものと聞け。まづ聖天と近付きになつたる後に次第〳〵魔力を具へて魔道の奥義を極めて見ん、これは我ながら手近きところに思ひのつきしは事の成る相、然しながら曾て何とやらいふ男の聖天樣といふ小説を書きて尊天の怒りに觸れ、それより女難艶禍にのみ逢ふて頻に厄鬼に祟られ、今は家を解き退轉して泣顏になりて居るとか聞けば、迂濶に魔王いぢりも出來ず。先づ聖天の身元洗ひより初めて御氣性御履歴も調べねばならず。と京都より持歸りし行李を解きて詮議にかゝりぬ。

へ催ほさるゝことなれど、親となり妻となり兄弟となりしものゝ恨み歎き當惑如何ばかりぞや。云はば當人の業因緣果のやうなものなれど、畢竟は眞面目で買ひに來る者に滅法な藥を賣るからにて、大袈裟な廣告の法螺の音嚴敷吹き立て鉦鼓の響き耳をつんざくやうなところから、誘はれ出した若駒の後先見ずに狂ひ勇み、駈けて／＼溝川の中へ落ちて終るなり。昔時は學問の口錢取りも今のやうに競つて金看板を懸けず、克己丸、謙讓丸、句讀丸、雌黄錠、明德丹、遷善丹など平淡無毒の藥のみ賣りて、たま／＼捻つた店にても風流三昧膏、良知良能散、經濟圓、本草末等を鬻ぐに過ぎざりしが、今は眞理丸などゝ其効も强かるべけれど其毒も苛いものを賣れば、青年の此を舌に載せ齒に咬み出したら最期、大抵眞理々々と叫び出して家の親父が田の草取る苦みも知らずに異な詮議に日を暮らし、超悟丸などいふ大毒巴豆入りのものを賣れば、購ふもの十に八九までは無用の坐禪に蚤の咬むのを堪忍してセコント鍼のかちかちと忙しく進み行く世にあけらかんと日を消し、果は治禪病方心得ぬ身の狂氣となつて親を泣かせぬ。惣じて師匠宗匠皆本來が受賣營業なれば一貼一服でも多く賣る事ばかり心がけて花客への適不適相應不相應も考へぬ冷い料簡より藥を賣つて毒を流し勝なる上、第一碌な賣り樣はせず、彼の世に居らるゝ問屋達額を聚めて談合の末、我等子分の受賣ども我等が商標濫用に及び、松脂の熊膽、牛角の烏犀角等を鬻ぐ由何とか成敗致さては叶ふまじ、火の車に乘せて秦の始皇殿を賴み遣はさんかと內評定定まりし旨聞えたり。されば我此噂を

世間に師匠顔してえらがる奴ほど憎きは無し。一派の學説の開山一流の技術の水源をもつて他も許し自らも任ずるものならば兎も角も、左なきは高が賣藥の受賣同前、自己が店藏に釋迦や迦毘羅や龍樹や天親や孔孟や荀墨や耶蘇やポウルや希臘人や羅馬人や進化論客や厭世宗徒を列べ置きて取次ぎして口錢を取るに過ぎざる分際にて、頭を聳して平常の人を見れば蟻か螻のやうに見下し、自己一人が昨夕達摩と一處に牛鍋啄いて、今朝アリストートルと球突遊びして來たやうな面付、門前に豆腐イと叫ぶ男も受賣り、自己も受賣り、同じ口錢取り仲間と氣がついて愧づるとも得知らいで、矢鱈に骨の固まらぬ若い子息達に大熱性の藥大冷性の藥をも構はず呑ませかけ浴びせかけるほどに、さるほどに此處にあはれをとゞめしは、心がらとはいへ見當分らず其を無茶買ひに買ふて嬉しがりし若いものども、一服二服遣るかと見るまに心氣亢張りて眼が眩みながら恐ろしい譫語を發して兩親の膽を潰させ、或は陰性氣鬱となりて勞瘵がゝりの獨り言、味き無の世やなんぞと臍の緒がまだじくついて居る身で世の鹽も甞めきらぬ癖に無性に悲しがるもありて、いづれ其末は氣が變になり、夢中主義でふら〳〵と魂魄玩弄具の豕の睾丸の如くなるもあれば、猿聲主義で巴峽の月に悲鳴をあぐる白痴もあり、鐵道往生に經卷車で挽き殺さるゝ妄信佛徒を學ぶもあり、入水往生に屈原氣取り、汨羅を江戸近の海で間に合はすもあり、咽喉突くもあり首縊るもありて、可惜花を實も成らせずに散らしぬ。此等當人は皆心に岐路無く正直の質と見ゆれば、其腹の中を思ふに他所ながら涙さ

を得たらんにはまた面白く此世界を見透すこともあるべきなり。魔が好い〳〵洒落氣があつて、一つ目小僧三ツ目入道いづれ風雅な儕輩ならぬは無ければ一番魔道を修せん。昔時より兎角仙を修し佛を學びし者はあれど冀ふものは牛毛の如く成るものは麟角の如しと云へり。釋迦以來好んで魔道を修したといふ例なければ定めし魔王も嫖はれぬ女のやうな氣になつて淋がつてがなあるべければ、魔道執心のものこゝにありと聞かば、いとしい方樣やいの〳〵と早速魔界に招待すべし。いで試みに舍利を取つて魔道成就するかせぬかを問はん。成就ならば白、不成就ならば赤と誠を籠めて舍利を拾ふに果せるかな先白を得たり。追ひ駈け〳〵眼を瞑いでは取り明きては見るに七度共に白のみなれば念のため三十三度取りしに皆白ばかり拾ひ得たり。次郎はこれに狂するばかり打悦びて手箱と共に舍利を藏ひて、さらば先づ何魔王より我手につけん、魔醯首羅の法を修せんか孔雀明王を祈らんか、金翅鳥王をか、三寶荒神をか、摩訶佉羅天をか烏樞娑摩王をか、洒落て人の知らぬ冰揭羅天を祈らんか、穰虞梨童女をか、韋駄天殿にせんか辯財天女殿にせんか毘沙門將軍を賴まんか蜜迹金剛丈を仰がんかと本地が菩薩であらうと佛であらうと此方が素人なれば皆魔と思ひて那君を賴まんかと案じける。

其十二

も蚊一つ除けられず、水を渉る術何の術彼の術と物理小識の虚言ばかり載せ、白石を煮る法何の法彼の法と神隱には出來ても詰らぬ事ばかりあり。畢竟金丹は寶丹の廉くて利くに敵はず、丹鼎は手とり鍋の雜炊たくに及ばぬやうな譯になつては詰らぬ話。何としたが順道か更らに分らず、はれやれ困つたと。次郎頭を掻きしが、「神仙のあるといふも舍利を取つて初めて驚き知りしことなれば、我は神仙道に於て成道昇天の時あるべきや否やもまた手箱の中の舍利に問ふて明むべしと先例通り祈念を凝らし一心籠めて、仙骨仙縁仙機仙師悉皆我が天分に具備なして必ず仙と成り得るものに極まらば、一生如何なる辛苦も厭はず修行すべき間白き方を得させ玉へと心に誓ひて舍利一つ取り、眼を開き見れば南無三悲しや赤き方なり。二度三度四度五度、六度七度と七度とも今度は赤き方のみ得て青息ほつと吐きながら、これは叶はぬ、敗亡した、と少時は頭を俛れたるまゝ力も無くなり筋も萎へしが、然りとてはまた心外な、「神仙無くば仙道の成らずもあるべきが、神仙は有るに定まつて我は成れぬに定まるとは無念とや云はん腹立しとや云はん。されど一旦心中に誓を立てゝ取りし玉の七度まで同じきを得たる上は爭はんにも甲斐無かるべし。よし〳〵屹度覺悟したり。神仙既にあるからは惡魔も必ず有る理なり。人生魔に逢ふもまた風流。我魔道に墮ちん心は無けれど魔にも通力ありと聞けば願くは先づ魔道を修して魔王と朋友交際をなす身にも至らば其上にて心易く仙となり佛とならん。佛魔は一紙、提婆達多は天王如來、魔より仙に入るは手間暇入らじ。第一魔通

其十一

願力あつても所作無ければ寢ながら棚の餅食はうに同じく、其甲斐なきは知れた事なり。仙道に志は立てたれど鍾呂は遠し東王公西王母も蒸汽船蒸汽車で行ける國には住み玉はず、道經も曾て少しは伺ひたれど玄關牢藏の深根固蔕のと生ぬるい詮索ばかり多く、抽坎塡離の秘法順人逆仙の密理も眞傳を得では房中煞戰の鄙術めいて淫書覺後禪に載せたやうな愚極痴極の醜事に過ざらんとすれば、これは如何にして可い事やら。本草を見れば藥劑は大抵久服すれば仙に成るやうなものばかりなれど、草木金石はたゞ小補あるのみと眞人達も戒められ、玉皇眞經には以人補人と強く說かれて大に地黃丸金精丸者流を斥けられたる氣味見ゆ。丹とは何ぞや何者ぞや。鉛汞昇降の理も覺束なく龍虎調和の談も謎がゝりて明瞭とせず。尾閭より上つて泥丸に朝すといふもの是什麽。聖嬰長養の術如何。黃婆姹女の說如何。鼎はそも〳〵どんなもの火侯は攝氏の何度たるべき。外丹は眞に磠砂水銀など用ゐて化學臭い眞似して作るか內丹は實に綿密の工夫より打成するか。何が二轉丹三轉丹、ほうちん丹歟あんぽん丹か。先は首尾よく遣り損ねてすか丹の丹となりさうな。房中の術何百法とあるよしなれど孫眞人の一術より他に出來さうな例も聞かず。氣息の術も埒明くまじ。導引の術よりは躰操術が增しらしく、九字の呪を持するも事古りたり。三尸九蟲も一向煙の如し、靈符

ぬほど回轉したる後盲搜りに搜り得たる方に定むべし。但し靈智靈力あるものありての冥示ならんには其證として七度撈りても七度同じものなるべく、又譯も無き事ならば或は白き方を得或は赤き方を得て自然定まり無かるべし。是、是、是に決着すべしと、假定めたる靈智靈力あるものを敬ひ畏み、嗽口淨手して身を清め、彼の玉手箱を取り出して二粒の舍利を中に置き、蓋打掩ひて兩手に捧げ、幾度か搖り動かせし後、主一無適の一念凝らし、眼を閉ぎつゝ蓋を取りて、世に神仙といふものあらば白き方をば取らせ玉へ、若亦無くば赤き方を取らせ玉へと祈りつゝ、一粒を撈り得て眼を開けば白き方を取り居たり。繰り返して復撈り取るに二度めも白き方を得たり。今度は若しや赤きを得るかと拾へばまたもや同じく白なり。四度めも白、其次も白、又其次も白にして七度めまで遂に全く白き方をのみ得通しければ、次郎我折つてムーツとばかり稀有稀代なる唸り聲を洩らし、さては不思議も有ることとなり、先祖太郎殿の事も我が父上母上の奇瑞も爭ひ難き事なり、神仙此世に御座す上は定めし通力の見透し眼にて我が仙道を疑がひしを可笑く御覽なされしなるべし、御先祖御兩親の思し玉はんほども耻かし。いよ〳〵仙人あるに極らば卒や九轉の大丹を煉つて霞を喫ひ石を煮るの自在地に到らん。碌々として何が世は好き。凡界の慾は旣捨てなん。修行なさでは叶ふまじ。と那處を的にして好いやらも知れぬ大願を起しぬ。

如く奇異の御卒去のなされ方なるのみならず赤白の舍利こゝに在り。困つた事かな。迷つたり。思へば神仙無し。見れば手箱あり、舍利あり、眼前奇瑞あり。はてさて愍じ學問の片端伺つたゞけに迷ひが決せぬ。何と思ひ定めたものであらうぞ。眞實神仙のあるものならば此忘々しく詰らぬ世に居るとも神仙となつた後馬鹿な顏をして居て怜悧な人の爲ることを見て居たら少しは可笑からう。若し神仙の無いものならば石を煮て食はうの痴望み。有るが眞實か無いが眞實か。と心二つになりし浦島次郎七日七晩考へけるが如何に考へても認めつかねば、ほうつと困じ果てゝ溜息ばかり、無益しく頭を痛めたりしに、不圖氣がついて見れば、これは分別智に及ばぬこと、若し神仙が眞實在るにしてからが世間普通の道理から考へれば無いとより外は云へず、さすれば無い方なら考へ當てもすべけれど、有る方は智慮にも思案にも及ばざる譯、所詮分別智では一方しか見えぬに、兩方へかゝつた疑問の明らめられう筈は無しと悟つて、ぱつたり詮索の手蔓を失ひぬ。到底これは人智の及ぶところで無ければ、人間より上に靈智靈力を具へたもののありと假に定めて其に依るよりほかは無しと思ひつきしが、然るにても靈智靈力あるもの〻有りといふ證を見れば、其者の示しにしてからが受けられぬ話と次郎さま〳〵に思ひ疲れし末、我ながらよき事を思ひ出し、彼の赤白二つの同じやうなる舍利のあることそ幸ひ、眼を瞑ぎて、若し仙人のあるものならば白き方を取らせ玉へ、無きものならば赤き方を攫ませ玉へと、盆か何ぞの上に二つの球を置て在り所知れ

張本獨りでよがるだけの白痴漢なり。風に御した列子めは日和ぼつこの妙を語る李衞門が家の隱居と同じことなり。黄石公は張良が智慧袋の中の居候に過ぎず。見來れば仙人皆風繪の武者となつて紙の上だけでえらいに止まり、白玉蟾が集を讀めば丹成らずの泣言歌あり、後人の雜記に據れば葛洪めが井戸には明礬入りの大箱を沈めて水を淸ます下らぬ裝置をなしたることとあらはれぬ。參同契必すしも金丹の調練を說かず、陰符經また長生不老の秘傳でも無し。道藏七部の莫大な卷數まだ覗かねどいづれ變痴奇なもの多からん。悟眞篇、指玄編、中和集、修眞義、文帝全書、呂祖全書大抵どつとしたものとも見えず。秦皇漢武は腮指揮に滋强丸買ふやうな氣で金丹欲しがつたなれば落第も無理ならずとして、馬鹿でもまんざら無さゝうな劉向も失敗り、才子らしう人に思はれる蘇東坡も全集を讀まれて内々腎藥調合なされたかと其愚を末代に笑はれたり。我が朝にては白幽子といふもの坊主の舌の先にあらはれ、常陸妨海尊物識の講談師が扇から叩き出されしなるが是も落の無い惡洒落と覺ゆ。勿躰無くも神功皇后を御名前から思ひついて、槃特が開悟の法の調息、道家の修行の胎息を綯交にした仙術と唱ふるものゝ、始祖と仰ぎ奉るものあれど是等は取るにも足らぬ事なり。然るに吾が家の系統に往時を尋ぬれば浦島が子あり。これも水の江といへるあり住の江といへるありて本說あやしく、情婦に緣切りの印のもの送られて、悲しさの餘りに作り設けて男の歌よみし由にも思はるれど、得しれぬ玉手箱現前こゝにありて我れを驚かし、加之父上母上とも彼の

福の式執り行ひ、遺骸なき棺ばかりをぞ葬りける。長生不老の道を得て、死して死せざる浦島家九十九代目夫婦の芽出度さ、天より音信も更に無ければ何となりしか其後は絶えて知れねど、妙果を得て天上の樂み盡きる瀬無く、玉殿常住の月の下、瑤池不斷の花の蔭、瓊露の酒を酌んで蟠桃の實を下物に、春風長へに吹く世界の清福を享けて居たまふなるべし、と人も羨めば次郎は猶さら父母戀しく仙道得たく、茫然として漁にも出でず、厭はしき世界に揉まれ和へらるゝ身の忌々しきを思ふにつけ天宮好もしく、鍾公呂公の快活な胸襟ゆかしと思ふにつけ目に觸るゝ人間に嘔吐氣を催し癇癪玉を跳らし、門設くといへど常に鎖して人にも逢はず垂れ籠ぬ。

其十

有りや有りや神仙ありや。浦島家第一百代目に生れて眼前父母の奇瑞を見ながら疑ふは愚瞭に似たれども、抱朴子論僊の篇も曾て讀みたれど今に肯へず。列仙傳、神仙通鑑、仙佛奇踪は禪宗坊主の傳燈錄を眞實しがると等しく高が皆手づまのわざくれ小說の下手なのなり。武陵桃源はすぼけ宗の開山どぶろく飮みの淵明が寢語にして韓湘子が譚は退之を嘲つた後人のいたづらなり。老子は佛法の小乘を聞き嚙つて求法のため西方へ行きし途中行倒れになりしに決まつたり。莊子は手淫主義の

こそ不思議と申せ、論より證據御自身靈柩を舁いて御覽なされば知るゝと、と眞顔になつて義者張れば其尾について殘る三人も承服せぬ言葉の數を重ぬるに、次郎は不思議を信にせぬ性質、さらばと本堂に到りて自ら棺を動かし見るに、これは〳〵如何なることぞや、其輕き事空ならではと思はるゝばかり。流石道理押一片の次郎も愕然として顏の色を失ひ、霎時腕を組んで考へしが如何にしても此儘に過ごし難く、和尚に此譯ことわり申して立會の上棺を檢むるに、あゝらと叫んで二度吃驚、自ら筆を執つて有り難き偈の數々を書せし經帷子、六道錢なんどは遺りたれ主は脫殼の蟬となつて那邊の雲に入られしやら姿はかいくれ見えざりけり。後生の善果も推測られて末世の奇瑞尊しやと和尚は念珠つま繰りつゝ佛名だぶ〳〵と唱ふれば、さては仙緣ある我が家の證は今に猶著くて我が凡眼の淺ましくも、たゞに塵界の一漁夫と見奉りし父上はじめ無學無解得の老媼と見奉りし母上まで、疾に輕擧の仙道を得て昇天の時を待つ間の戯れに魚漁り苧績みの業をされしか、斯と知らんには志を誠になして御在世の中御敎をも受くべかりしに、今となりては是こそ眞に魚逸して後網を結ぶ痴人の憾となり果てぬ、と殘り惜しさに次郎はよく〳〵眼も放さで遺物を見るに、衣の底より閃り閃りと微に光を放つものあり。こは何ならんと帷子引出し檢め見れば色白くていと美しき一つの舍利なり。母上が方にも若やあると搜せば果してまた一顆の舍利とゞまり居て此は紅の色鮮なり。和尚いよ〳〵横手を拍つて感歎已まず殊勝がり、即ち二顆の舍利を靈位と定めて供養追

はあるまいと答ふるに、其聲聞つけて婆の方を舁き居たる後の輿の男、其方も左樣おもふか、此方の輿も全然空のやうに輕うなつて肩にあるも無いも知れぬ位、此方の相棒左樣では無いかと話を移せば、ほんに〳〵稀代な珍事、根から分らぬが狐にでも魅まれたでは無からうか、何やら底氣味が惡うなつたと、いぢかり股になつて顫へながら云ふ。兩の輿の後に添ふて禮服の折目正しく涙片手に從ひ行ける次郎これを聞いて何とも心穩かならず、途中は如何ともする事叶はねば咎め糺しもせず胸に納めて過ぎしが、心ざせし澄月院といへるに到り著きて本堂に舁き据ゑさすると頓て人無き一室へ彼の四人を招び入れ、先づ其勞を犒ふて仔細を尋ぬれば、是非無く四人口を揃へて、異な事ではござりまするが全く輿が輕うなつて何か白雲をでも舁くやうに覺えましたで不審を立てましたと云ふ。いよ〳〵其通り相違ないかと念を推せば何で斯樣な事に無益な虛言を申しませうやとの挨拶。其昔達磨が棺には沓ばかり遺り在りしと云へど其は後人の揑造なるべく、既に釋尊金棺より片足を踏み出されしことさへあるに、吾が父母は、申しては勿體無けれど素凡夫なり凡庸の女人なりにて居させられしものを、尸解の仙人權者の化現のやうなる奇瑞あるべき筈無し、よしなき戲言を云ひ過ごして後へ退かれぬまゝ實事にして退けうとは不埒者の集合め、早速虛言と懺悔して汝等が罪を深くすな。と嚴敷云へば負けぬ氣の忠次と云若者、これは怪しからぬと、佛に難癖つけて我等の樂みにでもなる事か、よしなき戲言の云ひ過ごしとは御口が潤過ぎませうず、不思議なれば

人の惡い噂は信じて美い談は表面な事と信に受けず、神佛聖賢の尊いことは無いものにして退けて、自己が小才覺を正宗村正と振り舞はし、蠅の羽たゝき蚤の高飛び、よい氣になつて誇る醜態、見る眼も痒いやうな心地して厭で〳〵叶はず、また京都へ戻りて此處も五月蠅く、味淋の入つた煮物食ふて滑りのよい疊の上に居やうとおもへばこそ骨も折れ肩も張れ、家に歸つて働いたゞけを食ふて行く分には物も入らず氣も忙しからず清貧に甘んずるが一と思ふて、せめてはこれから年老られた兩親に孝行と歸宅つて見れば、忽然として此の御往生、これは何たる天の配劑、わからぬ〳〵不思議々々々。魔王の所爲か神の意か、この我をまあ何となれとて、斯樣は酷いめに逢はするぞ、と天を仰げば雲ゆるく行き、海を望めば水なだらかに流るゝばかり、問ふて答ふるものも無し。

其九

爲さで濟むべき事ならねば次郎は泣く〳〵も親夫婦の佛事營まんと家近き浦人男女の手を借りて檀那寺の和尙を請ずるやら自分も看經するやら、萬事殘り無く仕果せていよ〳〵野送りの段となりしに、家を出でゝ山寄の方へ四五町行きし頃、輿舁に賴みし男稀有なる顏つきして、何と此輿の輕うなつたやうな、不思議な事ぢやと振向いて相棒に云へば、さればさ乃公も先刻から左樣おもふたが、斯樣ある道理の無い筈ぢやと默つて居つた、云へば眞に空輿舁ぐと同じ肩のこたへ方、只事で

一ト足後へ退つておもへば、如何に噓も方便とは云へ、眞情ある男を誑らして身の自由を得たる後好いた男に添はんとは淺猿き心のもち方と、首筋がぞんぞとしてふつ〳〵心から厭になり、かゝる事をも此里ではあり難き志のやうに云ふ事か、次郎生れて以來此樣なさもしい女に假初ながら此樣な惡緣を結びし事かと一念發起しては矢も楯もたまらず、夢窓國師が其往時美女に執念く纏はれし苦みも如是やと弱りきつて、愛想づかしの烈しき置手紙を遺したるまゝまだ見ぬ東京へと心ざし上りしが、何處も齡長けた眼で見ては汚穢いことばかり、ほと〳〵世間一般の人が餓鬼か畜生とよりほかは見えず、學者が世間の鼻息を伺ひ、紳士が落語家幇間の眞似をして悅び、寺を建立した人を奇特なとおもふて見れば幾千人を泣かせた惡名消さうとて高利貸のする業、皇國のためとえらさうに集まつた人が此の公債の利子が四分と定つても六分と定つても大分濡手粟の仕事があつたものを惜しいことに五分と平に定つたで動搖が足りぬと腹では呟き、經濟が紊亂せねばどかまうけが無くて詰らぬと喞ち、去年の旱がもう一層强かつたら好かつたものと溢し、坊主が訴訟事ばかりして、王法を擁護すべき筈の佛法をもつて王法の孫庇借りて餘命を繼ぎながら高慢顏ばかり昔時の如く、嫉妬偏執俗人より烈しく、口頭法論腹貯金、保險の無盡のと現世の世話燒には能く手がまはり、華士族平民、吏農工商どれからどれまで陰險諂猾奢侈惰弱の風に染むもの多く、花台はせ知らぬものは馬鹿と相場が定り、藝者買ひせぬものは野暮天と謗られ、地道行くものは鈍いと蔑視まれ、都て

成程瓢六の云ひし如く其里のおもしろ味はまた別にて萬般に氣の腐るやうな事無く、表面は陽氣に裏はしめやかに、義理の詰開き情の取捌き見事にして、此方で思ふ事三分云はぬ先に先方で承知し、何に寄らず圖星を持つて來らるゝ快さ堪つたものにあらず。特さら可愛がれば可愛られて昵んで來られて昵まずには居られぬ交情の他にも羨まれて少しは妬さからの憎まれ口さへ云はるゝやうになれば、何がさてたゞの世界は水つぼうて可笑からず、傍目も振らで通ひけるが、酔ふて浄水に立つにも戸迷ひせぬほど馴れては茶屋の内證も眼に暎り女の魂膽もやう〳〵朧氣ながら見え透いて來て次第々々に興の醒める事多くなり、笑靨の底には勤めといふ字が讀めて取れ涙の裏には金のためといふ文が波立ちて見え、世辭で丸めて坐なりで轉ばす追縱輕口も聞割つて見れば愛想の盡きる詮議、其中不圖したることより中違ひして、此方でも先方でも互に面白からずなり、自然と隔り勝になりし矢先へ黄金で幅をする去る男の其女に上りつめて我れをせくに、せかれては退き難きところなれど、高が流れの浮萍の花なつかしとて筋張つて力を出すにも當るまじと見切り能く身を退きしは我ながら出來したりと思ひしが、其女我に未練ありて、自己が利益になる男に難題云ひかけて酷くも別れ、思ひのかず〳〵仔細のいろ〳〵明かして一生を我に任せんと百日程たちての後眞實底を我に見せぬ。もとより憎からぬものなり、至り深くも計りて我と添はんとはせしなり、一も二も無く納れて、同じく濁世に住み同じく浄果を願ふの友と、何十年を共にすべき契をなすべきなれど、

へ三絃を命の女とは云へ黒いものに斯樣した氣まづいことは無し。あつたところで嫌なら退くばかり、男の肩は張らぬ遊び、戀なら其道のが優るべし。往時ある女は飲まば額の古疵の痕あらはれて男に興を醒まさせんことの悲しきとて飲める身ながら如何に强ひられても久しく年月一水も飲まざりしといへる話しあれど今時の人の女房に此心入れだけの情合あるもの有りとも見えず、大抵自己が不覺から乾度男に愛想つかされて、古女房は足の裏の飯粒と思はれ、不時の金でも入れば女房に卵甲の櫛一枚買ふて遣るよりは藝子に丸帶一筋呉れやう氣になるが男の心の行き方、畢竟は章臺の柳の絲のしなのあるのが好いからなり。女房は足枷子は首枷、無い中が男の花。惡いことは申さず其道のそれしやの手玉に取られて救ひ取られて見玉へ。憂き事きかず氣まづい目見ず、紅圍翠繞の安樂國、女天女菩薩のきれいづくめ好い事づくめ、噓と眞實と意氣張と底には底の綾機關、孔明が八陣を巻いて終つて菓子折もつてまゐりさうな世界、深陷りせずと行つて見て成程粹は斯樣したものかと合點なされたが好うござる。何の素人が女とは洒落くさい沙汰、捨てたく。彼郷に御歸依なされませ。と面白をかしく囃し立てられ、戯れ半分瓢六の誘ふに任せしが忽ちに待ち設けたる蜘蛛の絲に罹つて勇菊といへる可愛らしき女に生命を御粗末ながらと初對面から投げて呉れたり。

其八

れなされません。陽春三月の蟄居三昧は蟲の出やうも知れぬもの。色は生娘ではつまりませぬ。惚れたを女房に持つたところで地女の厭さを云ば、先第一に床の中で味噌鹽の話を仕出し、と昔時の通人が穿つた通り、いやはや興もさめる詮議、朝も顔洗はぬ中の見とも無い姿を見せ、頭髪に塵を被いて鬢は亂れ次第、髪結に結はせるまでも一寸の間に撫でつけられるものを兎角平生は嗜み悪く、其癖外へ出る時は他所の男に見せやうとてか化粧にも衣裳つけにも黒人の三倍も騒ぎちらすといふ間違ひきつた白痴を盡し、内にばかり居れば襟足にむく毛をぼう〳〵と生やし、眉の飛び毛をつひに剃らず、頤のあたりを薄黒ませ、指の爪を汚くして氣がつかず、土焼の姉様が行燈袴穿いたやうな形して、高が家の中のきりもりだけを一天下治めるほどに忙しがり、亭主が酒を飲めば廢せば好いにと腹で呟くかはりには、燗の加減をあらためるといふ事もせねば、天狗も舌を焼きさうな熱燗、日向水のやうな微温燗、たまには杉のきがの躍り出る奴を呑ませ、酌をさすれば乞食が顫へる歯の音のやうにかち〳〵と徳利を猪口に觸れ、叱れば茶屋者はしませんなんどと僻み、自分が嫌ひなら盃だけ受けるといふ愛敬も無く、他の煙草の煙を睨み、芝居の噂なら知つた振りにのさり出て、高尚な話なら居睡りて頭だけ點頭せ、嫉妬をすれば直燒眞黒焦にするより他も知らぬくせに、他所の女の着物の褄先が揃はぬの履ものゝ鼻緒の好みがおしなだのと悪口を云ひて、自分の何處が男に嫌がらるゝといふとも氣がつかねば其を直さうとも隱さうとも氣がつかず、一夜流れの遊君とは云

人も見よかし、彼女に與へし我が眞情は末世の浮きたるものに見せたし、世にある甲斐は全く無き男となりしこれのみならば猶生くべきが悲しきはこれのみならで猶一つ。

其七

叶はぬ戀の戀人は節操なくして他所に生きつゝ可惜姿の花に吹く風のそよとも香を送らず、八分までは叶ひし戀の其人は眞情ありたるもこゝに失せて眸星眉月今や冥途の黑雲に掩はれたれば、取り殘されてまた夕々の御寺の鐘を何樂しみも無く聞かう心無く、苔まだつかぬ新墳の樒枯れぬも却つて眼につく、淋しさの風情、堪りかねて幾度か跡を慕ひ樂しからぬ此世を捨てんとしたれど、惜しからぬ身も雨親坐すに抛ちかねて、一日二日と送る中何時となく大酒飮み習ひけるが、瓢六といふ狂歌師の浮世三分と相場を極めて豪傑の樂屋を笑ひ君子の間の拔けたを誹り、何はあれ一生おもしろく暮すが德と惡悟りせしものと酒より親くなりて、我等今年六十何歳それゆゑ瓢六と名乘りもすれど未に廢められぬは揚屋の氣まゝ酒。金つかふやうに出來たところとて喜見城も他ならず思ふに御若い身そらで足踏もまだなされぬとは左りとは御奇特な御品行。戀もなされた御齡栄と見た眼に違ひはござるまいに地の女ばかりに御眼が留まつて彼の廓の艶なものを御覽にならぬからの事か。物が御解りになつた御身で御迷ひなさらう憂もなければ書寫の上人が室見物といふ格でさらりと御浮

れ義士と云はれ秀でた學者と云はれ恐ろしい豪傑と云はれた人さん達もいづれ戀では血の涙を流すやうな峠を越されたてあるなるべし。さあ其戀で泣いてからが漸く人情といふものゝ解つて、考へも思ひ遣りも又僻見も惡意もそれから湧いて來るもの。隨分世には一處に寢る事ばかり知つて戀も恨みも知らいで終る女も男も例のあらぬ事では無く、思ひの淺い一ト通りの人は子を持ても戀に涙を流した事の無いのが澤山あつて、人間らしうも無く食ふて、寢て、子ばかりこしらへて、叱言ばかり云ふて、金錢よりほかに尊いもの知らず、山葵食ふと章門灸すゆる時とのほか涙こぼさず濟まして居る憎らしいのが見えまするに、おいとしや一年立つても二年立つても思ひ出し涙に暮れられるとはさりとは有難い御情深い御天禀、御優しい御心根に涙がこぼれまする。と、ほろりと一ト雫溢されて憎からう筈無く、これも初戀の花物云はでおもふ人に別れかなんどしたる覺えある女とは猜しながら、それより互に打解けて憂さを語り辛を分つに連れ、何時となく意中の人持たぬ女、胸に女持たぬ我と知らず〳〵の戀に落ちて、覺えある同士の深くも思ひ合ひしが、兩眼眩みし初めての戀ほどは上りつめねば、此方も二の足、彼方も控へたる分別、何事も無理の無きやう、次第を超えぬやうと萬般を愼みて、頓ては晴れてとおもふ中、天の憎みか其女は秋風さみしき頃病を得て我へ一ト筆の思ひ籠めたる文を名殘に脆く散る柳と失せて俤のみを我が夢に折々見するばかりの人となりて果てたる世の恨めしさ、人には見せぬ一篇の詩に、弔へど芳魂銷えて痕無し。我亡くならば

と世の中の風を澤山食ふた人の心強く、頭から先を見越しての壓制詮索、一應聞けば憎けれど二度考へて見れば畢竟は親の子を思へばこその事と横に出やう所存も立てず自然の成行に任せて置きしに、姫は四位殿許輿入れ濟みて波風も無く納まり、今は其若君代をとり玉へば彼姫も四位殿夫人と仰がれて子まで此頃持ちたるよし、眼には見ざれど耳に聞きぬ。疎ましいは世の中と恨まば我心の淺きなるべしと半分死んだやうになつた身ながら、じつと堪へて一年過ぎ二年過ぎしに、其中思ひも寄らぬ町家の娘の彼姫に似たとは愚瓜二つの俤せるものに遇ひて、ありし往昔の影がさせば思はず不覺の涙を墜したるに、其涙に不審立てられて問はるゝまゝに隱し難く、名をこそ云はざりつれ一々あらましを語れば、我をあはれと見てか、しめやかに慰めくれて、不幸福は御前樣ばかりにはあるまじ。戀といふ事の瀬を踏みたるもの丶涙に濕れぬ人はあるまいものを心を左のみ滅入らせ玉ふな。遇はれぬつらさにひとり泣く人もあるべし。別れの悲しさに此方の涙は他の袖に他の涙は我か袖にと手を取り交して泣くもあるべし。これらはまだ〱思ひ淺き戀の山路の麓なれど、思ふても思はれぬ悲しさの一人泣き、中違して互に心背きあふて解けかぬるむづかしの恨の涙、他の人に見かへられたる口惜涙、義理で斷つ緣の深い中の退き際の泣くに泣かれぬ場の涙、添へば添へる中てありながら男は身を委ぬる事業の上の意氣地立て女は男の意氣地立てさせたいばかりに片時離れられぬ情合の濃い同士が千里も二千里も十年も二十年も隔り居る切なさの涙、昔時から忠臣と云は

煙細く立上りて、中には何も留まり居らず。これを不思議と思ひ寢に寢けるに、次の日起き出でゝ見れば猶も不思議なるは老夫婦の互に添ひて臥したるまゝ生けるが如き面して既其魂は天に昇りしや呼べど還らず去つて跡なくなり居たり。

其六

云へば愚痴なり憶へば涙なりと、岩下水の外へは洩らさず獨り人知れず咽返るほどの悲みを呑み居しが、恨まるゝ世が無理か天が無理か、恨む我が愚か我が非道か、此方は荒磯の海人が子に生れ彼方は笏を執り玉ふ官人の姫とかしづかるれば身分の尊卑こそ違へ、吾が八斗の才五歩の才をまた無きものと彼地には思ひなづみ、彼の花顏の美柳腰の美を比ぶるべからずと此方には心泥みて、戀の鄕には雲上地下の隔て無く情の道には錦袍布衣の別無く思ひ思はれたるに、七條三位とも云はるゝものゝ女を如何に四民同權の世なればとて、詩つくり歌詠む德ばかりにて位ある人々の中に立交らふ浦島次郎如きに與へて成るべきや、特に我が姫は浮橋四位殿の若君に娶はすべき由幼き時より契約しあれば、假令姫の次郎風情に心を寄せて四位殿の若君を他にすればとて、それは齡行かぬものゝ我儘勝手、戀は三年で褪めるものなり、無理に嫁入らせても一ト月も一つ寢すれば自然と厭なりし男も可愛うなるが女の弱きところと往時より定めてあるに何條姫の我儘を親の許すべき事やある、

〳〵『青天。あをぞら。青天を白く染め拔く鷺一羽。一羽はどこさへ飛んで行た。海原越えて雲越えて、蓬萊山の山松の枝に宿つて此方向いて、妾が情郎はまだかやと頸長うして待つて居る、影のさすのを待つて居る。あの御日樣を背に摩つて、此の潮風に扇られて、一ト伸し伸して蓬萊へ飛んで行かうか待ちやらうに。海原千里遠くとも、碧雲八重に隔つとも、好いはな好いはな世は情ぢやに。』と可笑く歌はれて可笑く踊られたのが、今でも眼に遺つておもしろい。先代殿が乃公に讓られた時は婆殿無しの男一人、乃公は夫婦揃つて世を讓る、また一段とめでたい〳〵。飲め婆殿や此の大きいので、ハヽヽ半分は助けて遣るべい。立て。踊れ。息子殿や盆でも叩いて呉れ。やれ、ゑいとこな、足のよろけるのもおもしろい。ハヽヽナニ踊りも舞ひもあるものか。無茶九茶に跳ればそれで踊りよ。ぐる〳〵舞へばこれで舞ひよ。『おもしろや舞ひ舞ふに習はいで舞ふ鶴の舞ひ。三絃は無けれど霞引く、鼓は無いが濤の打つ、天水濶き此の鄕を、我が物にして舞ひ遊び、幾春秋を樂しめり。いざや行かうよ青空に、羽打交し舞ひ舞ふて、聲呼び交し舞ひ舞ふて、番離れず蓬萊の島山陰に行きて暮さん。』ハヽヽ芽出度い〳〵。酒も旣足りた、乃公はもう寢る、と機嫌よく先づ醉倒るれば、婆も其邊を片づけて爺殿の傍に添ひ寢しけるが寢られぬは悴の次郎、初めて聞きし我家の由緖、初めて見たる玉手箱の不思議さの少時も胸を去らぬに、心これに騷げば身は橫になりても氣は立つて夢に入り難く、わかにしの貝を油皿にしたる燈の下にて彼の玉手箱を私に拔き見れば、白

掌に載せて見るに、其指觸り軟かに滑かにして温氣あり。いよ〳〵奇異の想をなして蓋取り開き見んとするに、婆は急しく横合より、次郎よ蓋は取るまいぞ。先祖代々其蓋は皆まで取らぬに極めてある。仔細は知らぬが取るな〳〵と制しとゞむるを爺はまた笑ひながらに却つて制して、婆殿や伜に任して置け、讓りものゆゑあらためて受取るのもまた惡くはあるまい。さて息子殿今語つて聞かせた通りの此家をたしかに汝に渡しましたぞ。どれ〳〵一ト筆讓り狀に書し加へて置きませうぞ。と禿筆取りて覺束無くも名を署し終り、莞爾として、まづ〳〵此世の用は濟んだ。よいか慥に渡しましたぞ。第百代殿、御受取りなされて、また百一代殿に御渡しなされませ。と嚴めしく云へば伜次郎は三拜して、御先祖代々の稀有な寶、たしかに御讓り下されまして有り難く御受取り申しました。と丁寧に正しく挨拶して讓り渡しと受取りと首尾よく玆に濟み果つれば、爺も滿足喜悅の躰、婆も夫につれあひの連悅びしてほく〳〵と、是より酒に和らいで昨日にも增した一家三人の氣のはづみ方、死んでもだんない大事無い。好い一生の夢を見たは。婆殿立つせい、二人で舞はうよ。永年二人仲好く添つて此樣な好い子に跡を取らせて、追付極樂へ樂隱居、心にかゝる借貸も遺さいで行く蓮華の上、火燵があつたら二人でのう、潛り込んで寢そべつて無益でも語らうよ。ハヽヽ、斯樣嬉しい芽出度思ひはまたと無い、九十八代殿も乃公夫婦に家を讓られた時大く醉はれて、鷺の眞似して踊られたがの、婆殿あの時親父殿の出まかせ文作の歌の最初は何と云つたかの。むゝ違ひない

さてはいよ〳〵仙縁ありし家に我が身は生れしかと思ふ間に父は猶一つの匣を披けば中なるは玉手筥とは問はでも著く霞光萬道奕々と閃めき出てゝ屋の内は明るくなりし如くなれは恍然として言葉も無く後方に思はず身を反らせて夢かとばかり驚きける。

其五

初めて聞きたる我が家の由緒に、親の次郎が言葉ばかりの中は半信半疑なりしが、今此の瑞光迸り出てたる手匣を見るより子の次郎は全く扨はと驚きて、眩さに眼を細めつゝ、熟々視るに匣といへるは金にもあらず銀にもあらず、瑠璃玻瓈瑪瑙硨磲なんどゝ名の俗界に知れ渡りたる物とも見えぬ稀代の珍寶、水晶に似て五色の雲の亂れあふたる如き文あり、玳瑁のやうにして眞珠に過ぎたる輝き含み、琥珀も其美を比べ難く璧も其澤に及ぶべからず、玲瓏として透徹るかと思へば、ぼいやりとして裏見えず、まことに唐土石崇が庫我邦淀屋が塗籠にもありとは思へぬ不思議の神物、仙家の寶藏より出てずば如何で凡間に遺り得べきと、從來奇怪を肯諾はざりし身も忽然と我を折りて、世に火浣の布藏玉の刀あらんやと論を立てゝ其後二物を眼前に見つ悔み玉ひし往昔の天子の如く呆れに呆れ、これは何樣ぢやと膽を潰しぬ。

牡丹の傍には惡女の立てぬ道理にて、世にも稀なる玉手箱を持つ手の汚さ羞かしながら、怖る〳〵

人間の富貴も融けぬ間の氷柱を彩り雪丸に刺繍するばかりと觀じて靜に岩窟の主人となり濟まし、饑ゑては樹菓草菌に、渇いては石の罅隙の眞清水に、惜しからぬ身を委ねて居られたさうなが、其中にとう〳〵仙人に成り上つて日の出る國から日の入る國まで雲の上の世界から地の下の世界まで一眼に見るやうになり、岩の中にも透り霞の上を遊ぶやうにもなられて、通力自在の身の心安く世を送られたが、仙人になつても緣には牽かれるものと見えて復龍宮へ渡ると定つた時、杖にした釣竿の截端に手紙を封じ込んで彼の玉手箱に添へ、召使ひの仙童に持たせて、吾が肉身の弟の九世渡に居るといふことを天眼通で見られたにより、此方の先祖殿に置土産として、而して龍宮へ行かれた限り其後は知れやう筈も無いが、これだけは手紙にあつたとて先祖代々紀念の玉手筥と與に傳へた話、惜しいことには五十代目の次郎殿が何か分別を起して其手紙を持つたまゝ行方知れずになられたので手紙は今は無くなつたが、其代りに又五十代目の其次郎殿が讓り狀といふものを書き初めたが今では之を釣竿の其筒に入れて仕舞ふてある。次郎よく見よ、これが其讓狀。これの初に何とか五十代目殿が書てある。これに乃公も九十九代目として一ト筆記して汝に讓す。これが即ち玉手筥だ。と塵埃積れる外箱の蓋を取り除け、二つ割の彼の釣竿の片端の入りたる小箱を取り出せば次郎は眼も放さず見るに、中の一卷の卷物の初には成程上りたる時代の筆意文體にて今しも父の語りたる通りの仔細を記しあり、第五十代より一代々々代々の署名華押明かに露疑はしきところ無し。

血統の斷えぬやうに頓て氣に入つた女があつたら何でも好いから女房に持つて乃公が汝に身代を讓る通りに汝もまた惣領の倅に讓つて呉れ。今までは些も話さなかつたが讓るものも無い此身代でも家は由緒のある古い家だ。乃公が讓られた時の通り一應話すから能く聞て記臆えて居てまた汝の兒に乃公が話す通り話して遣れ。汝は種々の書も讀んだことだから定めて知つても居やうが往昔浦島が子と云つて水の江に居た漁師があつた。乃公が先祖は其弟。ところが世間に名を知られた兄の浦島は世に傳へた話の通り龜の命を助けて遣つた仁德の報で龜宮に案內され、龍王の娘に惚れられて今日も明日もと歡樂の鄉に引止められた。然し故鄉の忘じ難い理屈で一旦歸らうと強て云ひ出して玉手箱を貰つて來たが其時は既何十年も經た後ゆゑ水の江の樣子も變つて知つた人も全て無い位になつて居た。勿論浦島の惣領では有つたが嬶もまだ無い中に龍宮へ行つて久しい間音信も無かつたので乃公等が先祖の乙子どのが家を預かつて女房も持ち、漁の都合で此の九世渡に早くから移つて住んで居たゞ。それ故龍宮歸りの浦島殿も左樣とは知れなかつたもので迷ひ出して玉手箱を明けたが、雲のやうなものが出る途端に齒もぶら〳〵髮も白々と三四十年立つたゞけの本相になつて仕舞ふたさうな。世間では其後を語らぬが、さて其老耄れた浦島殿は其時忽ち心に悟つて、其から曲つた腰を伸し〳〵磯に居た漁師に老釣竿を貰つて杖とつきながら近江路美濃路と段々に名山を捜して信濃にかゝり、信濃の寢覺の床といふところに止まり、龍宮の榮華も覺むれば一夢の痕無く香無く、

忘れしこともある程なれば、舟の上の身のこなし方も先づ一ト通りは覺えたり、歸家し翌日は疾く起き出で丶父を恤る波の上、みづから艪柄を把つて働き、閑に香餌を投げて水中の天に對し、半日の默坐に世外の趣きを味ひて、暮烟斜陽のころほひ幾尾の魚を釣り得つ丶、棹歌知らぬ新漁師の『太公遠し矣吾將に隱れんとす赤鯉何の書か腹中に在らん』と漢詩吟ずるも可笑しく家に歸りけるが、老夫婦は豫て心構へやなしけん此夜も酒を整へて次郎と三人巴繪座に昨日の如く坐りたり。見るに家の内も取りかたづけて父母ともに服をあらため、仔細ありげに構へたる風情、何事かあるべしと次郎の早くも猜するに違はず頓て父次郎は恭しげに一つの箱を取り出して傍に置きつ丶言葉靜かに、息子殿や先づ聞て吳れ。汝も首尾よく大きう成つて旋毛曲りの根性にも育たず、今年二十五で立派な男、加之親勝りに學問も出來て、而して先祖以來の營業も捨てずに漁師になつて吳れるとは乃公も汝のやうな兒を持つたで先祖に鼻も高い譯、そこで婆殿とも相談して今日は吉日ゆゑ身代を汝に讓つて乃公夫婦は隱居になつて仕舞ふつもり、乃公一代の役目を今日濟ませて仕舞ふ乃公が悅び、まづ／＼乃公も家に疵をつけるやうな事も仕て退けいで九十九代目を滿足に勤め終せたから大安心だ。汝にはまだ女房が無いが、去年乃公夫婦が世話を燒いて好い緣だとおもふて組ませやうとしたのも受けつけ無かつた位に汝の考へと老人の乃公なんぞの考へとは違つて居る。これは汝が物識で乃公等が文盲だから相違もあらうと今では世話を燒く氣は無いが、第百代めの役目として家の

ひな、なんでも遣つて見ないことは畫にかいた女だ話にならない、なか〳〵漁師も好いばかりでは無いに定つて居るものだが又洒落氣のあるもので、結構これで足りるものよ。先祖の浦島太郎殿から乃公まで丁度九十九代、此方の家は漁師宗だ、第百代の汝も矢張り漁師になりたいと乃公が教へた譯でも無いに思ひつくとは、どうでも乃公の身から出た種子に違ひ無い、ハヽヽヽ漁師が好いよ〳〵。乃公は王樣にされたとつて冠を拋き投げて逃げて來て、簑笠かぶつて蘆の中に舟を隱す料簡だは。ハヽヽヽ婆どんや笑ひなさんな、乃公は醉つたか。醉ひもするべい五郎八で十と何杯だつたかあゝ忘れた。ハヽヽヽと高笑ひの機嫌上戸の大元氣、默つて聞き居し息子の次郎も吟々として笑ひ居たり。

其四

日に曬す網罟の影鮮に印せる細沙の上に匍匐ひ、浪に寄る貝殼の色麗はしきを玩弄具にして育つたる次郎、久しく都會の風塵に涴れたれば、心は巧乖に身は懶惰の風俗に慣れて、掌に肉刺も無く爪も薄く軟かになり果てしが、根が生るゝと直に潮風に吹かれて人となりし身の、艪を推すことも心得、篙さすことも心得たり、親の次郎に伴はれては舟を繫ぐ灣頭青柳の芽ぐめる枝に魚を貫いて縮ねて先に歸りしこと、汗しとゝ出る夏の最中衣を岩頭に脫きすてゝ鵜の鳥學ぶ水潛りに暑さを

る、此方は始終舟に乘る、陸で金滿家が遊びをする、此方は始終遊んで居る。木の葉の飛ぶ時分しまき烈しく海鳴りがして怖ろしくなつたところで山陰へなり岩蔭へなり逃げて仕舞へば其限りの事、陸の奴等が慾徳づくの嶮しい山に踏みかゝつて動きも得せず泣いて居るやうな厭なことはありはせぬ。乃公は學問が滑つたか孔子樣が轉んだか達磨が寢たか釋迦殿が起きたか知らないが、四角な字だつていろはに甲羅が生へた分の事、えれい奴だつて蜜は甘く御嶽山の御百草は苦からう、それなら違つた事はねえ働くだけを働いて寐るだけ寐こけて夫婦中好く親子庇護ひ合つて壽命がつきたら死ぬるばかり、學問したつて別段外に奇特も不思議もありはしまい。誰でも知つてる二一天作三一三十の一、其他道理があつたらば惡魔の支配する國の話しに屹度違ひない。斯樣定つて見れば蜈蚣の脚の多いも蛭の脚無しも同じことだに御苦勞だはな、門の柱を高くしたがり楣の截端に彫刻をしたがり指に金箍を嵌めたがつたり苗字の上へ無益な符牒を長たらしく着けたがつたりするのは餘計な洒落だ。鬼瓦が日輪樣を咬着きさうに聳え立つた家へ住んでも身幹が高くなつて膂力が出るでもあるまい。妾の盆栽のと置ならべたところが無益に鷄卵でも餘計食ふくらゐなものだらう。アハヽヽ、漁師で澤山だ乃公の一生は。飴賣りで澤山だ彼の與平次は。お桑婆さんは鵞見さへいぢつて居ればよい。婆殿や、乃公が老婆は乃公が女房で澤山だつぺえ、隨分若い時から可愛がつて遣つたものなあ。ハヽヽヽ、どうだ伜、これ次郎やい、汝も漁師になりたいと云ふなら漁師になつて仕舞

成る口の爺どのも婆どのも桃の花のやうな顔になつて聲も浪の音絶えぬ濱育ちの勢よく、のう婆どん左樣では無いか。我等が世渡りほど好いものは無いなあ。思つても見なさい春は霞が棚曳いて蓬萊の山も彼の中に在らうかと見えるぼいやりとした海面に出て、芳野は知らないが櫻鯛釣る好い時候の風に吹かれる心持、船の中では一人天下、陸では狗が嚙み合ふか人が喧嘩するか泣くか喊くか其樣な事は知らん關はんの極樂に居るも同じこと、憚りながら陸上での王樣も違ひは無い小舟の中の王樣だ。夏は吹きはらしの大座敷に笠の下の鬢の毛まで涼風に扇らせて懷中にも袂にも從何位何の守樣とぎしついて居る方に進ぜたいほどの好いものを持つて居るはさ。秋か、秋なら猶さら此方の世界だ。魚は肥える、酒は美味くなる。漁を終つて歸る頃、鷗めが家を籠め隔てゝ浦の屑屋の屋根だけ見えて、白雲の中を漕ぐやうな時、碧空にによつぽりと月が面を出す、雁公が鳴いて那處ぞへ下りくさる、何となく氣がすつきりして骨が緊乎と硬くなるやうな、云へたものでは無い胸持、歸つて畚を抛り出して露の凝る中で五六杯引かけた勢に乘り、窓から射す月の光りに顏なら腹なら脚なら照らされて大の字で寢る夜中までも。乃公が爲る半分の事をしても、歌かぬたか讀みくさる奴なら大い法螺つぺゑ吐すだらう。ハヽハヽヽ、雪が散る冬に簑着て釣るのは衾に能く描くほどに好くは無いが是だとつて獲物が取れさかれば寒いも何もありはしない。のう婆殿身體さへ元氣で居れば何時も幸福、乃公が生活ほど羨ましいものはありはしまい。好しか、陸で出世した人が馬に乘

此方へ來て長閑に一生米の飯さへ食へたら、それで宜からう、それでよいはさ、それは左樣と既大概に着きさうなものだがまだかの、と龜朶の垣の外に出て眼眩き夕日に小手翳しつゝ道の彼方を打見遣り居しが、忽ち躍りあがつて、來たぞ〳〵、婆殿、息子殿が歸つて來たぞ、あれ〳〵彼處に影が見ゆる、これ婆殿や出て見なさいと內へ入つたり外へ出たり、兒童のやうにまご〳〵して切りに嬉し悅びぬ。

其三

久しく會はざりし吾が兒の無事に戾り來しを見たる老夫婦の悅びは比ふべくもあらず、右より左より取りついて、おゝまあ達者で居て呉れたか、よう戾つて來てくれましたぞ、と相好にわだかまりを無くしてほく〳〵悅び、あゝ有り難い、嗚呼めでたいと立つたり居たりして舞ひ〳〵膳を出す酒を出す、下物出す順が前後するやら燒物が眞黑に焦げるやら、それでも水入らずの內輪同士は、おや〳〵と輕く歎ずる傍から、婆殿これは何樣した事だアハヽヽヽと笑ひ聲が起れば、不首尾しても叱られず、不出來しを遣つたも責むるもの無く、何も笑ひで濟んで仕舞ふて、其夜は更くるまで親子三人のにぎやかな物語り盡きず、特に今年は去年と違ひて倅の次郎が心和らかに、むづかしい顏つきせず言葉づかひせず、悉皆碎けて圭角の取れたる應對、親の氣に入るやうに話せば、遂には

獨住居へまた出て行きし限り歸宅ざりしが、一年經つて不時の文通、何かと披き見れば、優れたる人の先を爭ひあひてむづかしげに騷ぐ世の中に交りて生活すも心憂くなりたれば御膝下にまゐりて魚釣り岩海苔採りに一生を送りたく頓て近日伺ふべき間まづ差送り候荷物御受取り下され度とありて、漁師風情が家には入れかぬるほどの苞包を送り來りぬ。

今日こそは歸るべけれ今宵こそは此郷へ着けと、壽命の縮まるにつけて氣の短くなりたる老夫婦が待つに一日も長き思ひしけるが愈々今夜はと思ふ日、媼は汚き家をも掃き清め、七島筵の新しきを敷き、大根午蒡芋蒟蒻の準備に、土竈と膳棚との間を曲つた腰たゝき〳〵幾度か往來して、其傍白馬の上澄を濾過るやら鷄の塒から卵を採り出すやら、心勇みに身の勞も厭はで働けば、爺は未明より小舟ゆら〳〵沖遙に出て、目覺しく美しき獲物をと寒風も厭はず涕ゐ拭ひあへず餘念なく漁に耽り、漸く申の刻ばかりに、婆どんや、仕合にの、見なさい此通り大鯛一枚、とりまぜていろいろの小魚二三十尾、此大きへ奴は濱燒にするとして置て餘の奴を煮るもよからう酢もよからう、お〳〵汝の方も出來たの、何にせ此樣な嬉しい事は無い、學問も既底が脱けたと見えて歸つて呉れるとは有難い、たつた最初に二貫遣つた其切りで一人で生ひ立つて何の荷物だか知れないが彼程の物を持つて歸り、自力で修業して呉れたとは眞實に嬉しいはのう婆、漁師になると云つたとつて、まさか漁師も出來めへが、喧ましい都會なんぞに居て何か厭な思をしながら生活すにも當るまい、

倅失せて、口數も少く起居も靜なる大人となり濟まし、身の周圍も賤しからず粧ひ、京土產の數々、親の口に叶ひさうな美味ものさへ買整へて持歸り、老人夫婦を悅ばせける。それより二度京に出でゝ、東京へも上りし由、去年歸つた折仄に語りしにて知れけるが、去年はまた以前とはずつと變りて、眼の中に自然威を生じ、言葉のはし／＼能く行屆き、悉皆浮世の酸いも甘いも呑み込んで來たらしい樣子に、親の次郎は悅んで、學問三昧も程度のあらうほどに、もう此土地に落着いて村の子供の先生にでもなつて氣樂に遣つて見ては何樣だ、幸ひ隣村一番の分限者彥左衞門殿が二番女二百苞入りの田と濱の縮緬の織場一つとを添へて是非とも汝に呉れたいと去年から村長樣の手で話を持つて來てある、乃公がの家は雄畧天皇樣の頃から續いて居る舊家だと平生此乃公が空威張はするものゝ此通 板敷半分 疊半分の破家で、商賣ものゝ網と舟より他何も無い中へ彥左衞門殿が娘を呉れやうとは眞に今の世で乙姬殿が舞ひ込んでござるといふもの、容貌はよし讀み書きも滿足に出來る、まんざら汝の話し相手にならぬといふほどでもあるまい、先方でよく／＼汝に惚れたればこそ身分違ひの緣談も云ひ込んで來た譯、二度とはあるまい、承知して遣つてはと。云ひ出す傍より母も口を添へて勸めけるに、少時默つて居たる末、御兩親には不孝に當りましても恐れ入りますれど一生妻といふものは考へあつて持たぬつもり、此緣談は子息めが偏屈な氣性で身分違ひは不緣の基と達て申せばと村長殿へ御ことわり下されまし、と云ひ切つて何と云ふても動かず、其まゝ嵯峨の

何處ぞで若い同士で夫婦にならうよのう、婆殿若い中だの。左樣ともさねへ、もうお互に御納め時だらうよ、これで次郎に世さへ讓つて仕舞へば何時年が明かうと芽出たい嬉い一生さねへ。ハヽヽ、ほんとに左樣だと老夫婦の顏見合はせて罪も無く欲氣もあらず打笑みぬ。

其二

蜜柑は寒地に實らず靈芝は穢土に生ぜずとは云へ奇化仙草は邊土僻陬に生ずる例もあり。九世渡の老夫婦が間に出來たる浦島次郎といへるは人品氣高く才智逞しく生れつきて、いろはより消息往來商賣往來ぐらゐまでを貧寺の耄碌和尚に習ひたる外は誰に學ばねど誰に勸められねど、自然なる學問好き、傍訓つきの草紙より讀み覺えて年ゆかぬ中は孫引學問に首を突込みつ徒に氣を焦ちしが、何時しか顚倒かへつて讀むものも讀み得るやうになつて、知ると知らぬとに關はず村中の家々が書の好きと好からぬとに論なく片端から借りて讀みつくせしかば既此片田舍の物足らぬ心地して、學問も無い嚴子陵、悟道もせざる蜆子和尙の中にばかり交つて、鯊を釣るの手並をあらはす時も無く、磯の寄り藻、濱の潮木の間に朽ち果てんことの悲しく、親々に相談して異議無く許されたるを幸ひ、二貫の錢を途中の糧に、丹波越して京に上りけるが、それよりは如何にして生活せしか何として衣食を取りしか當人も云はねば他人も知らず、十六に鄕を出で、十九に一度歸りたる其時は既先年の

婆々殿眞に能く生んだよ、先祖の兄には太郎殿のやうなものもあつたが乃公の種子は餘り好くもないやうだに、何でも彼兒をこしらへる時、汝の尻の振りやうが別段好くでも有つたかして眞實に果報な兒を持つたハヽヽ。と齒の無い口を開いて笑へば、婆は腰をたゝきつゝ身を伸しながら此方を見て、爺さん馬鹿を云ふもんでない、何でも天道樣文珠樣の御惠みで出來たに違ひない、それは左樣として明日にも次郎が歸つて來たら既身代を讓つて遣つても好いでは無いか、爺さん汝は何樣思ふへ。左樣よ次郎めを此家の第百代めに直してとは過般から乃公も思つた、讓るといつても此身代では何にも無いが、先祖の兄の太郎殿が龍宮から持つて來られたといふ彼の玉手筥と釣竿の一尺ばかりの切片の中に封じ込んだ代々の讓り狀と此二品だけを讓る分だ、然し婆殿彼の玉手筥と外の一品を讓ると直に讓つたものは死んで終ふと定まつて居るが婆殿や汝は死んでももう好いかの。爺さんや汝は欲張つて、まだ生きて居たいかへ齒もない癖に、妾は今年六十四で汝は七ッ上で七十一、妾は十八で此家へ來たから、ゑ、何年になるとへ、左樣かへ四十六年かへ、四十六年も汝と一所に暮したゞもの死んで好いサ。左樣さの、乃公が二十五の時だつたの、汝を貰つたのは、其時分は乃公も血氣盛りで、汝の頬邊も林檎のやうに紅かつたが、今では乃公も梅干爺、汝も古澤庵の婆殿だハヽヽ、一所に寢ても肌と肌との間が風が通すほど兩方干枯びては初まらない、成程これは家の重寶を次郎に讓つて乃公夫婦は人間の御年貢を天道樣に上て仕舞ふと仕樣かの、生れ替つたらまた

獨り寐るにて滄浪の水の上、夜伽に雁鷗の傍近く來るも可笑しく、かくて潮の滿る干る、風の立つ凪るに三十年四十年早く過ぎて、えらく無い太公望はおれだつぺゑと自ら潮水鏡に鬢の雪を見て笑ひながら云ふほどになりけるが、破鍋に綴蓋、老舟に曝晒棚、これでも磯曲の末の一ッ家の主人なれば襤褸袢纏の鐵砲穴をつゞくつて呉れる女房も有つて、濱風荒れ立ち千鳥啼く夜、船板蔀の隙間から寒さが入るを厭ふて首玉に緊々と腕を捲いて呉れる情合、成相の山續きに日輪隱れ玉ひて天一ぱい眞紅に夕燒したる頃、小浪じよばつく汀に佇んで漕戻る我舟を待受けて瞻りゐる親切に、蓮根截つたやうな鼻つき、芋蟲の臥たやうな眉つきの醜くさも見る眼に何とも思はずして、恩愛の鎹、情の塊りの子さへ生ませ、惣領なれど先祖代々次郎と呼び來し例に任かせ我名の通り次郎と名づけて鰒の貝の中の玉と大切に育てけるが、今年は次郎も二十五歲、立派に一人前の男となつて、親の目からばかりで無く、近鄕近在は云ふに及ばず宮津の城下の人々からまで、次郎殿は天晴大當りに當つた息子どのと評判さるれば親の次郎は大悅び、立てた櫂に網を懸け乾しながら、土竈で木綿帆を木澁もて糞染居る女房を顧眄て、婆々殿や、明日明後日は子息めも歸つて來やうが去年よりまた大い學者になつて來るであらうがの、村長殿や醫者坊殿も今度はいよ〳〵魂消やう、何樣して彼んな偉いものを汝等夫婦で生し出したと過般も皆が羨むのだは、文珠さまのお膝元で生れた故だか錢を出して習はせも仕無い奴が、一人て修行をして一人て偉くなるとは此樣なありがたい事はない、

新浦島

其一

天遠く海濶くして白沙青松の眺めうるはしき丹後の國水の江の里といへる處より、往時一葉の小船に乘りて龍宮城にいたりつき、其邦の君の愛娘と契りを結びし後復び故郷に歸りたりし浦島が子の事は、歌人の口にまめやかに歌はれしかば誰も知るところなれど、其後の事は世に傳はらず、あはれ浦島が末路の雲と散り霧と消えしかのやうに思はれて、木下錦里が補なひし浦島が子の傳といふものにも、忽然として天山の雪を頂き合浦の霜を垂れ、驚悔氣絕し、幾ならずして死す、と見えたれど浦島が血統は綿々として絕ゆると無く、天の橋立近くなる九世戸といへるところに年月久く住みつづきて、其家の始祖と仰ぐ人より數ふれば今の主人は九十九代に當り、猶鰹魚釣り鯛釣りを世渡る業となして生活しつ、富みもせず足らぬにもあらず、半篙春水花を排いて入り、一縷釣絲月に牽きて過ぎ、笭箵の魚見蝦見、濁酒の二碗三碗『足りて足らなか足らぬで足りよ何を憂き世の泣き文句』といへる今より三代前の人の或時興に乘じて歌へる歌を今も猶歌ひつぎて、心さもしからず日を送り、夢あさましからず夜を眠り、覺むれば艪柄取つて蘆の間から船をゆるく行り、醉へば梶枕ころりと

人間社會は蟻の社會の隣り番地にして猿の會社と地尻を合せたるものなることは誰も承認する所ならずや。動物園を見る人は傲然として鐵柵中の鹿やら牛やら豕やらを見ることなれども、彼等もまた傲然として我家の前を通る動物の高丈きあり矮きあり、顏丸きあり角ばりたるあるを見るにはあらずや。人間社會の價値は何程なりや。恐らくは此俊才とか英才とか機智とか奸智とかいふものゝ尊ばるゝ社會の價値は、牙とか翼とか嘴とか角とかいふものゝ尊ばるゝ社會の價値と大なる差あること無からん。何ぞ一人の俊才子を尤めん。

如何にして自ら慰めしや。

第二十五　歸朝の御悦び、御めで度し〳〵。

民井敦は歸國せり。許多の邦土山水を經歷して何かの家苞を携へつゝ歸朝せり。此家苞は名譽とか云へるものなり。其名譽とは如何なる價値あるものなりや、揚々と敦は歸り來れり。その名譽を取りて歸り來りし敦は、庵原一家の者に歡迎されしは勿論の事、朋友の間にも、世間の新聞紙上にも亦めでたき事として喜ばれき。人の能を猜み人の譽を嫉む一種の偏人物のみには悦ばれざりけるが、然る人物に悦ばれざるに至りけるは、眞に敦が成功の小さからぬを證すべきなりけり。されば敦は間もなく何とかいふよき役になりける。かくて敦はます〳〵榮えたり、何事にも不足はなきほど榮えたり。衣食は素より足れり、名譽もあり、すべて世間の人に羨まるゝに足るほど榮えたり。今は敦は外出するにも亦皆時の如く深夜に外套の頭巾を深々とかぶりて天地に足音を盜みながら歩行くには及ばず。出づるに馬車あり、馭者に鞭あげさせて、おのれは悠々と煙草くゆらしながら往來を馳すべし。噫、此男の胸中實に伺ひ易からざる神機妙算ありて如是なるに至りしや疑ふべからず、又實に恐るべき俊才子なりけり。俊才子〳〵、世にはかゝる俊才子いと多きなり。いつの世にてもかゝる俊才子とか英才とかいふものゝ人間の社會に勢力を占むるは言はずと知れし事ながら、

顔付壯んになり、妻が出來て又變つて、ます〳〵俗塵に染まり、子が出來て愈々屈托多き顔付、そろ〳〵叱言を云ふ面になるなり。次第に法令ふかくなり、天庭に皺をまぬかれず、魚尾奸門にも小皺寄り、或は印堂に見ぐるしき坎欠を生じ、四十になれば男振りもだめの皮、身の皮がかさ〳〵して來て色白なりし人も襟首殊の外黑くなり、其昔しは神童とほめられ才子とよばれし奴も此頃になりては滿面の俗氣、「世帶銹」といふ錆が生じて見ッともない親火顔となり、往來あるいても別嬪より秋波頂戴の榮譽なき所か、誰にも彼にも悦ばれぬ顔となるなり。五十六十、色々に變ッて遂に灰となるはおもしろい哉。されど其中に病氣で變り、苦勞で變り、貧乏で變り、金持でかはり、酒で肥り、房事で痩せ、椋鳥食つて髪が拔けたり、飴食ッて歯が拔けたり種々の事でさま〳〵に變るものなり。然しひとつも譯なくて顔の變る事なし。まづ人間平均美しいのは男十五六女は十三四、それより段々と惡くなり行くは、必らず惡事増長の天罰なる事疑ひなし。されば血色鮮やかに可愛らしい所のあるは必らず根性にも可愛らしい所失せず、天罰受ること少なく、「世帶鏽」の出ずして俗氣に勝たれざる好人なりといふべし。あながちに美醜には限らず、如何なる人も人の一生の中に其顔の最も美しき時あり最も醜なる時あり。美人とても又然り、其美人一生中に最も美なる時あり、又醜なる時もあるなるべし。お妙は變り〳〵て遂に清秀愛すべき容子の女となれり。蓋し其心中一條の活路ありて自ら慰さむる所ありしや明かなり。かゝる人の胸の中こそ聞かまほしけれ、知らず

もの日々に疎くなれば、狂ひし心も自然をさまりて、胸の中は清き水と澄みて浮世の甘ッたるき味を忘れ、淋しくもまた幽に生命ながらへて殊勝に身をば保ちければ、近隣のものこれを知りて希しき人かなと歎ぜざるはなし。爰に不思議なるは此の一年餘の中にお妙の容貌の變り行きし事なり。敦に別れてより二月ばかりは段々と痩せ行き、血色常にあしく、眼の動きやう鈍く、其後愈々痩せ極まりて顳顬の所凹み、眼は益々大きう見えて凄く、眉の毛少し竪ちたるごとくなりしが、其後はまた少し艶を回復して肉もやゝ付き、又其後は遂に愈々回復して、眉もうるはしきむかしにかへり、髮の毛もつやゝかになれり。扨一年餘の今日となりては眼の動きやうも往時より早くなりたるかと思はるゝ程敏捷になり、顏一躰に光澤ありて櫻色に美しく、全躰むかしより肥えて額明らかに暗矇の氣拔け、活々としたる風采人を動かすに足り、却ッて冴えたる美人とはなりける。

第二十四　外道の面の由來は、外道根性なるより。

人間の運といふもの七轉び八起とは能く云へり。顏も七面鳥のやうには變らねど、七變り八もどりなり。まづ赤子の時の顏は、飯をひとりで食初むる頃に變り、手習學問はじむる頃に又變り、十か十一で又變り、十六頃色氣付き聲をかくしなる頃又變り、酒など飲む頃より可愛らしき尊き風采といふもの脫け去り、燃立つ慾に顏付憎らしくなり、二十六七の頃浮世に立働かんとりきみ廻る人の

第二十三　男とはなれて後、大きに女ぶり上り候

戀なんどいふものは一躰仝躰小癪な男と女との贅澤がこうじた沙汰なり。人間腹が減ッては色氣の沙汰にあらず。世間多少の助倍客、試みに三日の斷食をせよや。根性いつしかするどくなりて、眼尻もだらりと下ッては居ず、丸ぽちゃの女を見てもあたゝかさうだと評せずして、鹽つけてかぢッたら甘からうと思ふべし、とは飢饉歳に生れし詭辯家が說なり。お妙も男を恨んだり世をはかなんだり愚痴をこぼしたりして下らぬ三昧に日を送りて居たりしが、南無三寳食ふに困るやうになりにけるこそをかしけれ。勿論敦に養はれたるうちは、琴も習ひ花もならひ、暇の身の課業に乙な事をも仕て居たりしが、それも贅澤な話し、錢といふものゝ中にある風流なりけり。今や民井は庵原が家の錢を引出して歐羅巴へ宙乘りし、後に棄てられし身の一錢も收入なければ、悲しいかな、昨夕は博山一炷の香きゝながら琴かきならして花前に蝶舞ふ紛々たる雪と歌ひ出る妙音、往來の者にチヨッ畜生めと舌打をさせしが、今日此頃は柳上の鶯沙汰にあらで片々たる金子ほしやとのさもしき內心もあるなるべし。如何にして世を渡らんか、日を送らんかは、差し當りての問題なり。お妙は遂に決心するところありて、世を渡るためにはたしなみ深き女の身をもなげしまだ、髮形さへ闕ふ事なく、素より得たる針の道もて細き烟りを賃裁縫に立てける。斯て一年餘も經るほどに、去る

りには心に粘氣の強きところありて考へ深き質なれば、一月二月は唯々空に民井を恨み居たりしが、ドッコイと思ひ返して、人をも身をも恨みざらましと云ふほど淡泊には行かざれど、チチ〱と考へ込みて到底は先非後悔の一點にのみ心を湊めぬ。ヱヽ馬鹿々々しい忌々しい、民井敦といふ薄情奴に誑らかされて撞木を捨てたが惡かッた。物思ひといふ事をする位なら、物をも思はず寐ざめ好かりしむかしの方がはるかにましであッた。佛樣を捨てたから又民井に捨られた。我身が何も彼も惡かッた。なんでも横道見ずに世を送ッて、一旦歸佛したものなら何處までも駿州の尼寺にくらして居ればよかッたものを、浮世の風にさそひ出されて、あのやうな薄ッぺらな人間とは知らず、だまされたのは此方の不覺、未來永々〱男の心のあてにならぬものといふ事を知たれば最早何事も思ふまい。と晝は健氣に思ひさだめても、夜はひとり寐の夢の中、まざ〱と其人に遇ッて、恨んで、すねて、ぶッて、つねッて、喰付いてやッて、くすぐられて、騒いで後はしんみりと、涙まじりにむづかしい詰め開きしけるに、思はぬ膝の傍に、鰐鮫が出て來て吃驚すれば、其鰐鮫が黒船になッて其上に我戀人は乘ッて大浪を截ッて行く、向ふには龍宮城があッて、其扉が開くと中には御神燈がぶらさがッて居て仇な女が出て來て招く手の指には寶石がチラ〱と光る、おのれ憎い女め、と思はず聲を出さんとして聲の出ぬに敢無く夢の破るゝなど、人には云へぬ惡き心地することもありけり。

口惜しきものゝ第一は何ぞ、我自ら我を過りたるなり。人に過られたるは其恨み人に歸す、我自から我を過りたるは恨み誰にか歸せん。人を恨まば人を斬るべし。我を恨まむには我々を斬るべきか。我と我と相背きて一身二主に使はれ、右手は左手と撲ち合ひ、右足は左足と相協はず、此身はどうと横に臥して其まゝ無底の井中に落ち行くあるのみ。我の我を過りたる時は、實に我口は我背を嚙まんと欲し、我足は我頭髮を踏み躙らんとするに至り、狂とならずんば止むあたはざる危地に陷るなり。お妙は彼の情夫に捨てられたり、然も最もすべッこく捨てられたり。敦を恨まんに敦は旣に千里以外にあり。客船人を載せて去り、片帆の影も見るよしあらねば、埠頭に足ずりなすとも何の功かあらん。さらぬだに心細き女の身として、殊に陰氣なる性質なれば、東台の鐘の聲の耳に入るに付いても恨みまさり、忍ぶが岡に落つる月の白きを見るにも恨みまさり、數行の雁不忍の池に落つるを聞くに付けても恨みまさり、見るにつけ聞くにつけ癇癪を起さで止む時も無し。心平らかなれば磯の浪音峯の松風、皆是れ仙宮の音樂に均しく、心不平なれば精養軒の料理も甘からでビフテキ木片に均しく、オムレツ雜巾を嚙むに同じく思ふ道理。破戒の罪の恐ろしきを知らぬにもあらぬに我から落ちて、人に語るなとの言葉を眞に受け、日蔭ものとなりて身を過ごすをも厭はぬまでに打ち込みたる其男に棄てられては、人といふ人を都て疑ふやうになりて、狹き心はいよ〳〵狹く、たゞ明暮に我と我が身を搔き裂きたきやうの思ひをのみ募らせける。されどお妙は陰氣なる代

賢くはあらざりき。實に此慘酷なる所行は自ら苦しむ外には其關係者を苦むるのみにして是等の苦惱者は何によッても慰められべきものにあらざればなり。お妙が敦の情婦なりしは過去の劇場の舞臺にして、現在の幕にはお妙といふものは單に敦が罪惡の證據物件の一たるに過ぎず。此の證據物なるものは實に牢獄が人間に與ふる苦惱よりも更に大なる苦惱を裁判所の腰掛に於て罪人に與ふるものなり。然り、實に罪あるものは、他日我身を打つべき押丁の大力ならんを恐るゝよりも、小なる證據物の大力なるを恐れつゝあるものなり。何となれば人間世界に於て最も良き裁判所は兀坐せる一室なればなり、他人を交へざる寂寞たる一室なればなり。罪あるもの兀然として獨り坐せる時は蓋し胸中に敏明なる檢事より尙敏くも都ての秘密を洞知する檢事の存するを覺ゆべく、嚴格なる判事よりも尙嚴格なる判事の理否を一刀截斷するものあるを覺ゆべし。而して其時は實に被告の我は最早一言もなく伏罪せざるを得ざるべし。是より外に良き裁判所また世にあらんや。此裁判所は一年三百六十五日中罪ある者に召喚狀を發せざることなし。民井敦は船中の一室に於て蓋し數々此裁判所に呼出されたるなるべく、其時は即ち其裁判所中に於てお妙が證人となッて現るゝを最も恐れ厭ひしなるべし。

第二十二　癇癪〳〵、是非もなし自業自得。

ぜしためか、否。お妙が惡しき事にてもなしたるがためか、否。眼馴れて珍らしからざるがために捨て、又さらに他の婦人を得んとせしか、否。すべて夫等のためにはあらず、富子と結婚せし後も敦は數々お妙を訪ひ慰めたりしが、如何なる言語を用ゐて此の偏屈なる女を敦は慰め得たりしや讀者も推察し得玉はざるべし。然れども實にお妙と敦とは前々の如く互に相愛しつゝありけるなり。然るに俄然として敦は遂にお妙を捨てたり。其日は併せて日本の地をも見捨てたりき、即ち敦が外國に行くの日なりき。敦とお妙との間は固より此時までも秘密にして少しも世間に知られざりけるが、是皆敦が爲したる作略にして、而して是等の作略を捨てし時は即ちお妙を捨てしなりけり。民井敦は全く或る事情よりしてお妙を捨てしにはあらず、唯胸中に焚立つ功名心のために愛の水枯れて戀慕も何も無くなりけるより棄てしなり。肉の慾の永遠に存せざるは肉の永遠に存せざると均しく、例へば敦がお妙に對したるも是れ肉よりしたるものならば、必らず早晩其感情の冷え去りて氷點以下となるべきは、免るべからざることなれば、決して怪しむに足らずといふべし。俄然として二人が中の鎖の斷じたるは其鐵鎖なるもの、本來冷氣に遇へば極めて脆くなるべきものなりければなり。

元來功名心を包藏せる民井がお妙を捨つる日あるべきは、自己とお妙との間を秘密として深く秘せし日より定まりたることとなりしなり。さればお妙はもとより愚なりしなり、されど敦もまた決して

な民井敦といふ者と共に手を携へて墮落したりき。墮落して民井が手中の物となりしか、又は對坐の賓となりしかは知らざれども、兎にも角にも池の端に圍はれ居たりき。然るに夢の間に嬉しかりし日は盡きて、民井は庵原富子といふもの丶夫となりければ、お妙の口惜しく思ひたること如何ばかりなりしなるべきぞや。腹中沸ゆるごとく、例の如く眼をすゑて天の一方を睨みたるべし。例の如く夜は眠り難くありしなるべし。例の如く益々言葉少なりしなるべし。例の如く吐息ながくゑたりしなるべし。然れども敦は素よりお妙を見捨てはせざりければ厚顏にも、富子と敦とが婚禮せし噂を聞て恨み憤ほり泣けるお妙を訪ひたりき。其時の二人の會話は一進一退攻守の妙を盡して手のこむことならんと思ひのほか、極めて容易に濟みたりけり。蓋しお妙には棄てられじと思ふ心のみいと強くして、其他をおもふに暇少きをもてなるべし。思へば心細きは女の身なり。

第二十一　惡事は影のごとし、影は形を欺かず。

痴話も悋氣もひとり寐の心に殘るおもひ草、といへる歌は假りて以てお妙が當時の胸中を寫し得べし。敦は遂にお妙を捨てたり。お妙は正に敦に捨てられたり。何事ぞや、後世の道をとりはづさせて、罪深き還俗をさせながら、一朝忽然として幾春の恩愛を捨て、空閨長恨の女とならしめしは如何ばかり酷き心ぞや。噫、敦は何故にお妙を捨てしぞ、お妙の姿色衰へしためか、否。性質漸く變

るものなるべし。大きなる秘密を百萬年に存するものは奸雄にして、薄弱なる秘密の箱を出入する南京鼠は凡人なり。民井敦は奸雄か、そも〳〵南京鼠なるか。

第二十　お妙が顛末、あらましがたり。

頼母しからぬは出來合の男女の中なり。はじめは互におもしろく、それからは痴話口說、恨みられてはまた恨み、すねて見せたり、ぢれて見せたり、散々にとち狂ひたる揚句、宿に引き入れて妻とするが最期、男は女にあき風立ち、女は男に愛想つき、よく見れば見るほど薄痘のあるあんな女をどうして良いと思ふたかと悔み、添へば添ふほどぼろの出てくる酒癖わるき男をなんでいとしう思ひしぞと口惜しがるやうになり、おたがひにまづい中となりて話しも絕え、物見遊山も一緒にはせぬほどゝなれば頓て別れ沙汰は、普通ありがちの事なりけり。むづかしう云へば道德上の罪、やさしく云ひても不人情のこと、まことに忌々しき事の限りといふべし。されば井の中より銀の瓶を引くに銀瓶上らんとして繩忽ち斷へ、石の上に玉の簪を磨く、玉簪成らんとしてポッキリ中ばより折るゝ、と昔時の人も歎じたり。お妙といへる女元來極めて潔白な質にて偏りたる癖こそあれ、まづは婦人たるに於いて斬づべき程の欠點を有したるものにはあらず。殊に一種の勇氣を胸に蓄へて、「果す」といふ事を常に尊び、何事も果す所あるを善と思へるやうな風ありしが、あはれなるか

る母は、驚きて、親子が密語せる樓上の一室に飛び上らんとせり。されど悲聲は忽ち休みて破れかかりし秘密は尚秘密とし保たれ、其室中より富子が父は突と立ち出でたり。

第十九　秘密の大議論、
きけば小議論ぞかし。

秘密は永續されて俄然民井敦は富子の夫と成りける。庵原と天下に鳴り響ける大財産家の婿とはなりける。彼の病氣は既に早くも本復して有りしなりけり。民井と富子の會話、富子と父との會話、庵原夫婦の談合、多分は故障を入れしならんと思はるゝ富子の母と父との悶着、是等は總て秘密にして、今も尚絶えて知るもの無し。但し秘密が如何なる者なるかは世の誰しもの知る通りなり。秘密は何故に秘密なるや。艶書の隱れ家なるが故に其の文庫は秘密なり。下らぬもの故に其眞言は秘密なり。魔法の卷物の世にあらばそれぞ秘密のものならん。民井敦、庵原富子、其母、其父の間に成り立てる最初の秘密は敦より出でたり。然り。敦はまたお妙といへる美人との間に長く繼續せる秘密を有せしなり。讀者も定めし古來幾多のものがたりに付いて知り玉ふべし、秘密といふものは何に對して秘密なるものなるかを知り玉ふなるべし。アヽ、秘密とは法律、人情、道理に對して秘密なるものにして、却ッて財布及び功名を遺す塚の上の石に對しては極めて親密なるものなり。されば又秘密は賞勳局の役人の案の上にあるべき性質の者ならて、警察署の探偵の取扱ふべき性質

く沈鬱せり。此沈鬱せる容躰の人の胸中に深く存するものは必ず膚を刺し指を落す寒威を伴なへる雪ならざるなし。又沈鬱は人の自ら養ひたる悪木の蔭暗きまで生ひ茂りたるものなり。而して人自らこれを伐る斧を有せざるなり。古來僞英雄が常に呻吟せしは此森の中にてありしなり。此森は強風に振蕩かされて枝折れ葉落ちし後にあらざれば天日の光りを見るあたはざる暗き所なり。自殺には此森の外に好き場所なく、逃亡をするものは其第一の草鞋を此樹蔭にて買ふて走り、其後其樹は自火を出して灰となるとぞ。此樹蔭に入りしものは容易に出路に會はず、學問ある者は懷疑の井中に落ちて此樹を去る遠からざる所に死し、經驗あるものは此樹の下に働きながら化石し、美人は此樹の下に立ッて直に枯瘦すといふ。富子は其日より寡言となり、母に逢ふことを益々深く嫌ふやうになり、夜は時々眠らずして長く夜具の中にある事あり、都ての家内のものを擯斥し、父を見ることは庭前の老樹を見る如く、母を見ることは往來の瓦斯燈を見るが如く、日月を見るをも忌むやうになりき。かくて二ヶ月は過ぎ、富子が父は歸れり。其時富子は父と一室に坐し、膝を交へて長話せり。其座に母はあらざりき。泣く聲は室外に洩れ父が憤怒の叱聲、痛張りたる但しひそめける疾急の聲は相交り、遂には毆打の音、簪飛び衣裂くる音、頓ては大歎息の太き息、又々起る憤怒の叱聲、畜生と叫べる鋭き聲、毆打の音、金石相觸るゝ如き悲叫の聲など、傍觀には幸福のみ多かるべく見えたる庵原家の一室に起りて、爰に秘密は將に暴露せんとしつ、來るべからずと命ぜられた

前に車をば到らせける。今日は前の日とは異りて楫棒の地につくや否直ちに下りたちて、案内を乞ひたり。民井の僕も二度目なれば少しは顏もやはらかく、能くこそお尋ね下されましたといふやうな容態して、いとやさしげに、主人の病ます〳〵わるきよしを云ふ。流石に富子も女の普通性あれば、氣の毒とおもふ感は噴井の水のごとく湧きて、言語つきもたど〳〵しくなり行きける。今日は僕みづから親切に導びきて病室に通せば、富子は隨ひて入りて見るに敦の身體は此間見し時に競べていよ〳〵瘦せ細り、頤の骨銳う見え、憐れさもひとしほ增して、靑白き顏の色艷なく、生氣乏しきありさま、他所に見るも心細し。話の口の切り所もなくて富子はヤ、躊躇しけるが此躊躇の中にこそ民井が富子を一轉して掌上に躍るの小木偶とならしめし機は存したりけむ。其日は敦が富子に對し如何なる物語りをせしや、如何なる處置をせしや、富子は敦に向ッて何等の感情を發せしや。一切其日の談話の摸樣については長く世間に傳はることなき故に知る事あたはず。但し富子と敦とは長き時間を會話に費したる後(勿論二人ぎりにて)相わかれたりし。其歸路の富子が車上の摸樣は實に平生とは異り居たり。泣きやしけん其眼は一種別なる光りを有し、喜びにや心を躍らせけん、兩耳は稍紅かりし、然して其容躰の逆上せたるが如きには似ず沈鬱したりき。都て沈鬱の下にはよき者のある事少し。素より平和の微笑は晴天の如し、怒るは風の鳴るが如く雷の轟くがごとし、悲しみは露の下りる夜の如く、慘酷は霜夜の如し。さて沈鬱は雪雲の如し。富子は全

て行く、」が如き事をわづかな事と思へるより出でたるにて、わづかな事と思ふ所よりおそろしき事の生ずる習ひなるを知らず、俗に云ふ「線香の火から城が燒ける、」といふ譬喩をも忘れたるはいと愚なることとなりけり。若し嚴格なる人の眼より見れば富子が此擧動は、早くも鄙しき境界に墮落すべき徴を現せりとも云ふべし。

何故に富子は民井の家に到りしや、讀む人よろしく富子の輕き心、高慢なる情、其他の擧動を參照して、前方より色々積み來たれる事情の後先を考へ、別段に仕事もなき閑暇の身躰なるを察し、民井と富子との間には一條の逆因緣の在るを知りて揣摩せば、ア、かゝる女はかゝる行ひに出るものなりと悟りて其未來の現象をも豫知し、定めなき水の行衞も低地を索めて流るゝに過ぎず、知り難き人の行末も情理によりて定まる所あるものなることを知りぬべし。

第十八　愈々わからぬものと、
人情は分ッたやうなり。

人の病を訪ふほど我心の勇ましく勢よきものはなし。人間の通性、善を爲す最も樂し、とは能く言ひたることなり。お富が母親に口もきかず民井を訪ひに赴けるは單に病を訪ふといふにはあらず、又聊にても看護の勞を取らんなど、勇猛心を起せるにもあらず、多分は當人も何故と問はれたらば直に其理由を答ふる事は能ふまじきなれど、唯何心あるか何心無きかの間に於て早くも其人の門

うの狭き心の母に何事をか相談せん、と親を親とも思はざりし。さても不思議や庵原夫人は、實は富子と敦との間を隔てんとして故に企みたる事はなきに、我子には充分隔てられ、却ッて富子と民井の間には一條の細鎖生じて離れんともせずなりにけり。勿論此男女の間に或る目的ある交際の成立ちしといふにはあらざれど「此儘には終らざるべき行懸り」の出來たることをかしけれ。又其反對の側を見れば富子と其母との中は正に離間されて、親子の間淋しく、互に齒に衣着せて話しするやうの事となりたるも亦をかし。離間されたるか、自然と離れたるか、自然と離れたるには相違なけれど又離間されたるにあらずとも云ひ難し。民井の不思議なる情態を富子に見せたるは、民井の自然に出てたるならば兎も角も、民井が特に意を矯め行を飾りてせしならば、此親子を離間せしは敦ならで誰ぞや。扨は敦といふ男何の爲に此親子を離間せしにや、いと怪し。然れど素より母子の間に親々熱々の情なく、つまり母の胸中には「小癪なあまッちょめ、」と娘を思ひ、娘の胸中には「無學の賤婦め、」と母を蔑視やうなるあさましき想のありたればこそ少しばかりの事にも動きて、「親は壁に對ひ、子は天井を視る、」といふ如き冷淡の世界と一家をなしける。富子は遂に母には關はず又五日ほど間を置きて昔の我師なりし男を訪ひける。此度は何氣なく家を出て僕も連れず、唯手車に打のりて走りたるが、噫是れ何の因縁ぞや、親に告げずして走ること既に淫女の行狀に似たり。されど富子は夢にもさる惡き心を持ちたるにはあらず、唯我儘三昧の振舞は「親に告げずし

するにも及ばず、とおもひて其まゝにやみぬ。父は此頃又々外出して家におらず、家内は母より外に尊きもののなきに、かくては此母此娘の間何となるべきぞ。世間に氣まづき親子は隨分多し、あながち是ばかりにはあらぬなれども。

第十七　我儘は墮落の初まり、
人の行末は心より放つ矢の道。

彼日より富子は日頃の性質に輪をかけて、すぢりもぢり、母親をうとみ嫌ふの念絶ゆることなく、今迄は外出するにも一應は母に知らせて後に仕たりしが、今は「是からはもう母親には關はじ、」と思ひける。素より高慢の強き上に、民井との關係より母を疎んずる心愈々烈しくなりまさりたることなれば、家にありても物云ひ交す事少なく、「今日は好いお天氣だね、」と母が云へば「ハイ、」と答へたぎり、「もう病氣も全治ッてから日も經てば學校へ行たがよかろう、」といッても「いやですよ」とすげなく答ふるばかり、唯々内心には「民井は自が病氣中は親切に幾度も見舞ひくれたるを母親が我に秘せしは何故なりけん、又民井が幾度となく問ひくれたるは何故なりけん、」と思ひ惑ふ時のみいと多かりけり。何にせよ此間は民井を尋ねしも何となく面白からざりしが近きうちに又々尋ねて見むとのみ思ひけるが、此事母に語らば又もや餘計な事を云ふなるべし、餘計な事を云はるゝも面倒なり、どうせ譯の分ッた人ではなし、何か邪推でもして民井と我との間を離間せんとしたるや

にはわらねど眼疲れて燈に彩環を見るといふやうなる趣あり。「彼人はホントにどうしたのだらう、」とおもふ心は斷えず胸の中にありて動きて已まず、かゝる中に車の輪の幾度か想像と共にめぐりて早くも家に歸りけるが、常なればまづ母の前に出でゝ挨拶すべきなれど、何となく此日は母に逢ひたくもなく、母と口きくも厭にて、母の顏見るもおもしろからず、と思へり。母は又富子に對しては、富子が民井の家に到りし留守中幾多の思考を積みしなり。「民井はどんな樣子であらう、」富はわたしを例の通り馬鹿にしたな、忌々しい、」「どうも家の富は我儘もので厄介な奴だ、中々わたしの手に乘らない、」「行くなといへば行きたがり、爭へば常に橫へ出るし、なんでも人の云ふアベコベに出て剛情なのは彼の娘の性質か知らん、然しわたしを見くびッてア、だゝをこねるのかしらん、」など種々に考へたりしが、「とても當世の女兒は學校といふ所で理屈の稽古をして居るから叶はない、殘念だが一足さがッてあしらッて置けばいゝ、おまけに富の氣性の天の邪鬼は癒る事でもあるまいから、何でも此方から逆に出れば向ふは其逆に又逆らッてつまりは順になるのだから、天の邪鬼は到底正直溫順いのとおなじ事に我命令に隨はする事の出來る筈のものだ、今日歸つて來たら何でも少し機嫌を取るやうにして御不興をなほして置かなければならない、」と考へ定めけるが、歸つて來ても顏も見せず、唯今歸りましたとも云はず、富子はずッと自が書齋に入りたりける。是を見ては子に甘き母親もおもしろからず、親の方から態々出て行て話をするにもわたらず、又わざ〳〵呼寄

か、」との一語を忽ち取ッて抑へて「私しなぞは遠慮の二字は大嫌ひてす、アッハヽヽ、貴孃の所へは三日にあげず參ッた男てすもの、」と對手の皮肉に一ト針突掛けぬ。富子は一寸答へ兼ねしが、然し流石は女の口上手なり、牛に逆らッて角を抑へず、牛に順ッて角を控ゆる如く、民井の語にベッタリと身を付けて「それぢやァわたしも遠慮を禁物にしませうよ、」と笑ッて遂に別れける。

第十六　親と子の間むづかし、
兩方に角あり角あり。

庵原の娘富子は歸るさの車の上にも不思議なる民井の樣子を、如何なる故にあの如くにはなりけむ、と種々樣々當推量に縱橫に考へける。人間といふものゝ天より授けられたる心の働きの中には、誰も彼も分らぬものを其儘には捨て置き難くおもふ心あり。ましてや自分の身に接近したる疑問のあるに當りては人間の智慧の働きは全力を盡して是に向ひ、其疑問の說明を得るまでは休まらぬが常なれば、富子の腦髓は民井敦なる男に占領されたるにはあらざるも、頭腦全部は民井敦なる男に向ッて、其に付て起りし疑問を飽まで推及せんと働きけり。實に敦が其日の擧動の異樣なりし事は、十分富子の注意を惹くに足りしのみならず、其事の多少富子自身に關係あるやうに思はるゝは、富子の頭腦全躰を引寄せて其一點の方向に進ましむるだけの價値ありしには相違なかりし。お俠には相違なけれどもまだ世馴れざる富子の小さき胸には、浮雲長く漂ひて日光薄く、心海波立つといふ程

覗きて見る時、敦は面を稍上げゝれば互に顏を見合せしが、不思議にも、男の眼はうるみ居て、然も慌てたるやうに恨みがましくも「もうお歸り、どうも今日はまことに失禮。また來て下さいますか。また來て下さるなら今日の御埋合はせに、失禮の取り返しに御馳走の仕樣もありますが。ハ、ヽ、これきッり來て下さらないのだと、民井は實に交際が下手と云はれるも殘念ですから、失禮の取り返しの出來なくならないうちに是非今日はお止め申て、何時ものやうに面白く冴た話しの出るまでお留め申さなきやアなりませんが。ハヽヽ、大そうむづかしい論理でせう。戲談は戲談ですが、戲談は實意の妹で、オヤ是も馬鹿な譬喩で。」ハヽヽ、兎に角又來て下さるか、來てやらないと云ッてごらんなさい、民井敦は二の詞の出しやうがないのですよ、ハヽヽ、又御出なすッて下さいよ、何もわたし風情の病を態々御見舞ひては恐入ります。ナアニ遊びに御出なさいと申すのですよ、ハヽ、ヽ、どうです、病氣になッたッて卒といへば此位饒舌れる所は剛氣なものでせう。」とのべつに饒舌りは饒舌りながら息弱く、聲の尻に力なくまことに憫れ氣に云ひ退けたり。富子は素より我儘に育ちて、自惚充分自重過分の娘、諛言大好の者なれば、「是は民井が精一杯に我へ向ッて爲し世辭」と心得、少しは變な言葉のまはしやうと心付かざるにはあらねど、先づ滿足して、「エヽ、上りますとも、是から又度々參上りますが、却ッて此方で御遠慮申さうかと思ッて居ましたよ、ホヽヽ」と笑ッて「ホントにあなたの御病氣はふしぎなのね、」と語を足しぬ。民井は何ぞすかすべき「御遠慮申さう

處もおわるい所は眞箇に無いの」「マア無いのです、」「マア無いの？、それぢやア矢張り、」「ナアニ、ちッとも無いのですよ、」「オホ、そんなに御痩せなすッても、」「イヽエ、今はちッとも何とも無いのですよ、大方病氣があなたを見て逃げたのでせう、ハヽヽ、」と彼一句此一句語り合ひつ、「ホヽ、御病氣だか御病氣でないかちッとも知れないのねー、不思議の御病氣ですね、そうしてあなたの御病氣が妾を見て逃げ出したといふのぢや、わたしの顏が鬼にでも見えると見えますね、ホヽヽ」と富子は打笑ひぬ。

第十五　用事は歸り際にあり、
　　　　話しの餘音は話しの終の所。

富子と民井との對話は、互に何か奥齒の間に物の引かゝりし様な趣きありて、打解け難く時刻を移せり。かゝるが中に富子は唯、民井の病氣には何か譯あるらしきと思はるゝ事、己が母は民井に對して何かの考へを懷けると思はるゝ事、民井は我が病氣なりし中親切に屢々見舞呉れたる事、民井は自己に向ッて惡き感情を持つにはあらざる事、己が母は我に對して或る事情を陰蔽せるならんと思はるゝ事、民井の病氣は病氣の原因別に存するなれど、何でも我が母と敦との間に成立ちし或事は民井の強き感じを引きしなるべき事、などの種々の疑點を認めたるのみにて、終に「御大切」にの一語を終りとして歸らんとしけるに、俯伏したるまゝ民井は返辭もせて居たり。如何にせしかと差

母から聞たのですよ、」といふ。「そんならわたくしの病氣にかゝッたのは誰から御聞きなすッたの、おッかさんからぢやアありますまい、」と云ひて「ハイ」といふ答を得、「あなたが今日わたくしの所へお來臨にならうとなすッたらお母さんは定めし御不興でしたらう、」と言ひ當てたり。言當てられて不思議におもひつゝ、「ハイ」と云ひながら民井の顏を覗けば、愈々不思議なるかな、民井は俯伏て泣きたるやうなり。民井は鼻聲にて「ア、、どうせ、」といつたぎり暫く無言なりしが、又「ア、」と歎じて富子の面を一寸見て、「却て……苦しい、」と歎息したり。其態何とも解しがたければ、「どうなすッたの、」と富子は問ふに「イ、エなんでもないのです、」と紛らして、ふたゝび富子の顏を見て新に涙ぐめるありさまなり。平常にはかゝること無き事なれば、富子は心中にて、「精神病」だとは聞いたが、はたして此人は精神病になつたのか知らん、などゝ思ひけるが、何となく自分の今の話しが種となッて敦を欝がせたるやうなれば、聊か氣の毒なるやうなる心地も仕て、「先生どうかなすッたの。お心持でも御わるくなりましたか、心無しにお起し申しまして眞に濟みませんでした、サアお休みあそばして……、わたくしはもうおいとましますから、」と云ひかくるに、言はせも果てず又民井は「大そう歸りをお急ぎなさるのね、おッかさんに叱られるの、」と急に引留めたり。「イ、エそういふ譯ではありませんが、」と立ち兼ぬるを「そんならまアいゝぢやアありませんか、病氣だッて此通り、別段どこが苦しいといふのでもありませんから話して居らッしやいな、」と又引き留む。「何

口を開けば、敦は急に推とゞめて、「ナアニ病氣といふ程の事ではありません、態々御見舞では實に恐れ入りました、」といふ。されど脣の色、眼のやうす、顔の艶など、どうしても病氣なれば、「先生。然し起きて居らしッては御氣の毒でなりません。どうか御大切になすッて、わたくしはもうお暇いたしますから、」と例の能く饒舌るには似ず言葉もトッチてまづい言草なり。「もう歸ると仰しやるの。來るが早いかの御歸りでは、まるで壁に當ッた護謨玉のやうですね、あなたを尊稱してゴムダマレディと人が惡口申しますよハヽヽ、」と笑ひたる是は是日頃敦が富子に向ッて話しする調子なり。日頃此樣な話しを富子は好くなり。今此戯言が敦の口より出たるを聞きて富子も例の調子になり、「ホヽヽ、それなら先生もゴム玉ジエントルマンよ。わたしの病中御見舞ひ下すッたさうですが、いつもサッサとおかへりなすッたさうぢやァありませんか、」と言へば、此言葉を聞く途端敦は急に「わたくしが御見舞に上ッたのをごぞんじ、」と問ふ。「エヽ、知ッてますよ、」と何心も無く答ふれば、「わたくしが御見舞にあがッた其當時ごぞんじだッたのですか、又は御全快なすッてから御承知になッたのですか、」と何やら少し角立ッて問ふ。富子は譯分らねど有躰に、昨日初めて母から聞いて知りました、」と云へば「ア、ッ、さうでせう、」力無げに歎息した後、「昨日・・・、おッかさんからぢやアありますまい、」といふ。「イエ全く母から」と云へば「お母さんから?、へーエ、」と眉を皺めながら又「ほんとに、」と念を推し、妙に冷笑ッて、「嘘でせう」といふ。富子は不審に思ひたれど、「ほんとに

事をしたるなり。此室の窓に掛りたるは緑色の窓掛けなれば、丁度寝たる民井の顔は愈々青白く痩せてあはれげに見えたりしが、敦は見苦しからざる寝衣着て薄きものを身に掩ひ、すや〳〵と寝入り居たり。今しも富子は其痩せたる顔をのぞきこみて、其窶れたる様子を少しは可憫と思ひたる時、ウヽーと唸さるゝ敦の聲をきゝて吃驚しつ、逃退きたるが、敦の唸り聲は尚引續き、何やらん囈語いふ故、氣味わろさに逃出して室外に行かんとしたるとき、敦が囈語の中に、アラ怪しや「富子孃」といふ聲おぼろ氣に聞こえたり。富子は身の毛よだちて益々氣味わるくおもひけるが、折よく僕は入り來りて敦の傍に行き、苦しげなるを見て搖り醒せば、敦は眼覺て茫然たり。頓て富子を見出し驚きたる様子なりしが、眸を凝てまた富子を視詰めたり。富子は出すべき言葉も知らねばたゞ胸の塞きやうの心持なしたり。奇異の空氣は一室内に充てり。

第十四　才子は案外痴人にて、
饒舌娘は無口となりぬ。

敦はよろ〳〵と立ちあがりて、急に富子に挨拶すれば、案外の勢ひに驚きながら富子も慌てゝ挨拶す。「此處は餘り汚穢しければまづ此方へ、」と富子の手を取らぬばかりにして病人が先に立ち別室へ通しぬ。富子はたゞうろ〳〵となりて平日の元氣も何處へやら、云ふがまに〳〵座敷へ通りて對坐するのみ。病人の敦は茶を呼び菓子をすゝめ、淋しき笑ひを粧ひたり。富子は病を訪ひ慰さめんと

先生の所へは一寸顔を出したるだけにて、横濱に用のある商人が神奈川の景色を見るより淡泊に濟ませ、さて敦の家に行き付けば車よりおづ〳〵と下り、万事能役者の身動きより重々しくする事片腹いたし。面會を申し入るゝに主人の命故、民井の僕はそッけなく、面會は叶はず、と挨拶す。富子は直ちに不平の念を起すと同時に例の「勝氣」「氣嵩」「剛情」「大風」等の氣性を一時に起し立てゝ、是非面會せん、假令ば病人が垢臭くても關はぬ、そんな弱い女ではないぞ、なんでも逢はふ、といふ調子にイキリ立つて云へば、民井の僕はあまり立派な御姫様なれば病室へは如何と思ひたれど、素より一應は面會を謝絶して、それでも尚逢はふといふものは通せとある主人の命令なれば、遂に富子を案內して敦が寢臺に寢たる一小室につれゆきたるが、敦は疲れたる風にて今熟睡し居れり。これには富子も少し間がぬけたれど、起すも氣の毒なりと默ッて西洋風の小室內に佇み居るを、敦の僕は見たるのみにて、主人を起さんともせず、內心にて「ザマを見ろ、此威張女め、」と思ひ居るかの如く室の戶を閉めて外に行けり。外に出て庵原の僕と玄關にて何か頻りに應答なせり。富子は今は大きにてれて、男を呼醒さんも流石なり、此儘歸るも流石なり、あの老僕めは意地の惡い奴、主人を起こしてから案內すればよいものを、とおもひ居ながら、敦の枕元に段々立寄りたるが、東洋風にても西洋風にても若き女が若き男の寢床に近づくとはあまりなる輕はづみの亂暴な事なり。されど富子はなんともおもはでかゝる擧動に出たるなり。民井の僕はまた實際少しは意地の惡き

ふのだもの、」といへば、「人、不見識な、サッサと歸さなくッても可いぢやありませんか、」と不服氣なり。「フヽン、御不興だね、逢ひたかつたのかへ、」と母らしくも無く冷かせば、「アラいやなおッかさんだよ、民井さんは先生だッたぢやァありませんか、」と、言ふことは理の當然なり。「忘れてらァね、」と遣り返せば、「だから尊敬するのは至當でせう、」と平押しに押す。「ひとを馬鹿にして居る、和歌の先生の所へは御大病でも御見舞に行かない癖に、」と灸所を衝けば、「行きます行きます、行きます行きます、明日直に行きます、過ちは改めます、負惜は申しません、」と口を吃の烏天狗ほど尖らせて云ふも、まことは矢張負惜なるべし。

第十三　猫に鰹節より危ふきは、才子の側に浮氣娘。

庵原富子は母親とつまらぬ口論の圖にのッて、驕慢の心にまかせたる其翌日、「ふて寢」といふ質の吾儘なる朝寢して、十時頃起出で、髮を取り上げ薔薇香水とか糸瓜の水とか瓢簞の水とか、やかましいお洒落を仕たる後、いや〳〵に飯を食ひ、手車に乘りて供の男に何か持せ、民井の家を音信たり。實に富子が外出は今日が病氣後初めてなり。和歌の先生といへるは老人にて白き髯のフサ〳〵とはへたるなるが、「其の髯だけ」を富子は時々ほめ、時々罵り、何かの時にあの髯を使ッたらよからう、と噂しけるが、それは多分役者の用にたてたらよからうといふ意味なりしとなり。されば其

る癖あり。朋友の家などにまねかれて行く時は活潑敏捷におもしろく騒ぎて、且つ人の騒ぐを「活潑な事ねー」とほむる事あり。されば男の朋友には都て珍重され、女の朋友の半分には賞讃され、他の半分には賤まれける。

富子は母に向ひ、「おッかさん、あのあなたもごぞんじの民井さんが病氣になりましたとサ、」と云へば、何心なき一言なれど、母は一切富子に隱せし富子が病中の事を誰か娘に告知らせしものかとおもひて、一寸驚いたれど年の功だけに氣振も見せず、「さうかえ、氣の毒な、」と云ッたぎりにて、腹の中にては此間からの事を富子に話さうか、それとも推かくして置うか、隱して置てもあらはれる時はある、然し正直に談さば又例の不見識と一本我子に食ふも口惜と思ひけるが、半分だけ談さんと思ひさだめ、「おまへ見舞に行くつもりかえ、わたしはもう行ッたよ、」と前の語には釣合はぬ語を放てば、娘は「オヤ」と云ひし限り、少し不審に思ひしなるべし。母はまた語を足して、「おまへの病中にも時々來てくれたから行かなくッては義理が惡いとおもッて、わたしが行ッたのサ、まだ快ッてから間もないおまへが行うといふだらうとおもッて默ッて居たんだよ、」と云へば、「人、馬鹿、餘計なごしんぱいだわ、明日わたしは見舞に行きますよ、立派なおみやげを工夫して置て下さい、ホントにおッかさんは厭な人ッちやアない、わたしの病氣見舞に來て呉れたッて一度も逢ひはしませんぢアないか、虚言でせう、」と云ふも無理ならず。「虚言ぢやアないが、いつでもサッサと歸ッてしま

に誇り、髪の束ねやうなぞは務めて新らしき流行を追ひ、たまたまおのが友達わが眞似をすれば急に其人をひいきにして他の者を疎み罵り、都ておのれに同ずる儕輩を親み近付けて其群の音頭取りとなりすまし、得意に饒舌りたつる時は朋輩を塵ほどにも思はず、或時は又半日位ッンとすまして女雛ほど容體を賣り、我は愛敬をこぼさずとも我に愛敬を呈せざるものあるべきやといふ顏付をなし、殊に若き男の中などに交る時は一段と此顏付を粧ふなり。されど若し男が頭を低くして諛言數々の末は亂れて、あなたの御樣子は福助の早百合其まゝと云へば、妾手掛に比せられしをも怒らで、「オヤ憎らしい、タントおなぶりなさいよ、」と肩をゆすッて笑ふ質なるが、さりとて母親をば疎みきらひ、内々は自分の着物の相談をして智惠を假りる事もありながら、母と一所に物語るを厭ひ、「おッかさんの不見識にはこまる、」とさゝやく事も數々なるは、なべて當世の女氣質、まことに大した見識なり。此娘のよろこぶ話しは、どこそこの舞踏會の後に「靴の踵」が落て居たりし」とか、何某令孃が蝙蝠傘の柄に一圓八十錢といふ黄色い直段紙を付たまゝ氣がつかずに學校へ來りしとかいふ樣な事なり。尤も好む擧動は中よき朋友二三名を(貌は自分よりすぐれず、衣裳は左のみいやしからず、氣象の柔弱もしくは卑劣なる)引きつれて自分の召使大勢にとりまかれ、ゾメキ立ッて遊覽などに出づる事にて、往來の男ふり返りて、「イヨ素敵、」とほめる途端、「なにをいふのだ、」といふ顏付をあらはし、又往來の女達が「美くしいね、」と小聲で評する時には此方からもやさしげに見送

何にもなるべし、病にまでなるほど苦心せらるゝにも及ばじ、ハテ不思議なりとぞおもひける。打節案内を乞ふものあり。見るに二三度は來りたる事ある女生徒の某とて、今は餘所の官員様の細君となりて居らるゝ御方、其御舍弟をつれて來玉ひたり。僕は主人より命令をうけ居たれば、主人病蓐に居りますれば御用の筋あらばわたくし御とりつぎ致すべし、といふに、思ひがけねば女は驚き、別に用事ありてといふにはあらねど、久しく御無沙汰したる故御見舞にあがりしと云ひ、して〳〵御容體は、と氣遣はしげに問ひぬ。（此女生徒たりし時民井に罔惚したる事あるなりけり。）見苦しきを御容赦ならば御通り下され、といへば、女は通りて、青白く痩せたる敎を見つ、いろ〳〵慰めて歸りしが、其序に向ふ島へまはりて、元は朋輩なりし富子を尋ね、病氣全快の喜びを述ぶるやら民井が病に臥せし事を語るやらすれば、爰にはじめて富子は民井の病を知りぬ。されどもおのが病中數々訪はれたる事は少しも知らざりし。

第十二　當世むすめぎの我儘、
昔のダヽに理屈を被せた者。

庵原のむすめ富子といふは人並すぐれたる器量好しなり。されどお妙には及ぶべくもあらず。一は櫻のやうなれば一は桃の花ぐらゐの比例なり。年は二八の美しざかり、母親の薰陶によるものか、衣服は常に燃立つ樣の色合のもの、眼のさむるやうな華美なものを纏ひ、誰も知らぬ新形の染摸樣

急に快りし昨夜、急に惡き今朝。

お妙と敦とは、譯も無く其夜仲直りして、又の夜を契りつ歸りけるが、其翌日民井が家の書生は少しの事いたく主人の癇にさはりて放逐されけり。敦は心地惡しとて藥を服し、唯書見のみして、晝は寐臺に横たはり、大抵の來客にも接せず引籠り居たり。僕は心配して醫師に問へば、醫師は、左程の病氣にはあらねど一種の精神病にて欝々となし居り、且つ少し胃病の氣あるばかりなり、仔細なし、と答ふ。如何にも是といふ苦惱も見えねど顔瘦せ色衰へ氣力弱りて見ゆる樣、全く病氣には相違なし。庵原夫人が來りし日の夜外出して遲く歸り來りしが僕は全く公園を散歩せりとおもひ居り、ひそかに病のため危ぶみしが幸に何の變りたる樣子も見えず、其翌日は癇癪強く書生を放逐せしが是も精神の故なるべしとて怪まず。たゞし其日は殊に呻吟してくらし、其の夜は少しも眠らざる樣子に見えければ、僕は、是は必らず身より出たる病氣にはあらで心より出たる病氣なるべし、はて何が根にてかくは病になるまで心を傷め玉ひしや、當世に戀の病はないといふことなればまさか御若いとて戀の病でもあるまじ、然し御若いには似ず、お愼しみ深く、浮きたる心など露もち玉はぬ方なれば、自然世馴れ給はず、深窓の姫同然、さては或人を戀ひ初め玉ひて、口には出さず心にのみ秘めらるゝより、遂にかく欝症にはなられし乎、何處如何なる所にて誰人を見染られたらん、此家に來らるゝ女生徒どのたちのうちには相應に美しきもあれど、彼等を戀ひ玉はゞ直に如

で伏勢を出して敵を生捕にせん計略ともしらず、果してお妙は此處に舌鋒を轉じ、「なぜそんな虚言をおつきなさるの、又なんだッて一月計り病氣でもないのに顔も御見せなさらなかッたの、大方わたしが厭になッてか、他にお樂しみでも出來たのぢやありますまいかと思ひまさあ子、心配するのを無理ぢやアございますまい、手紙ぐらゐあげたッてい丶ぢやアありませんか、手紙もあげずに居たらいつまで御來臨なさらないか知れやしません、」と、まくしかけるを少しも恐れず、「外におたのしみの出來たのでもなく、手紙をよこさなければ最少し來ずに居るつもりだッたのサ、」と敵の下す太刀の下に首をさし出すやうな返答なり。お妙は倘勢ひよく、「ソレごらんなさい、手紙をあげなければ來ないなんておッしやるのだもの、平氣で、エ、憎らしい、是から毎日手紙をあげますよ、」といへば、「御勝手になさいまし、」と輕く受けられ、「くやしい、人のいふ言を茶にして居らッしやるね、どうしてそんなに惡性におなんなすッたのだらう、もう此處から一寸も動かしやアしませんよ、歸すと又おいでなさらないのだからもう歸しませんよ、」といへば「御存分に遊ばしまし、」と抛り出したり、「マダ人を馬鹿にして居ッしやるね、エ、口惜しい、」と我額を男の膝にぶつけるやうに押付けて喰ひ付きさうにして口惜しがれば、敦は平氣にて女のえりあしを二本指で輕く撫でながら「えりあしの頁いものは實があるッてチー、」と飽までも女をはぐらかしぬ。

第十一　不思議なるは病氣、

を揮ッて切り込むとも到底云ひくるめられて仕舞ふものとは氣が付かず、「ソレごらんなさい、あなたは御病氣ではなくッてピン〱して居らッしやッたではありませんか、」と言ふ言葉の落付いて來るを察し、敦は一盃飲みて扱ころげるほど笑ひ出し、「ハヽヽハヽ、ひどくむづかしく出て來るな、如何にも病氣は此五六日以來だ、其前はピン〱して居た、餘所の娘の病氣見舞にも行ッた、然し此見舞に行ッたのは何も心あッてゞはない、おまへの居た庵室へ老尼の見舞に行ッたとはちがふ、」と早口に饒舌りしが、其中「庵室」の二字は殊に低き聲にてお妙の耳にも能くは聞取れざるべきほど微に語りしが、女の耳には庵室といへる語は雷霆の如く聞えしや、此庵室といへる語に滿身の神經を痲痺せしめられたるやうにて最早お妙は何も言ふべき勢なく、顏をあかめて餘所をむきたり。敦は其處に付込んで女の顏の横へ態と我顏をもッて行き、聲きはめて低く、「おまへの顏を見に行ッた時のやうな嬉しい譯ぢやァないのだよ、」と又一段強く痲痺させにかゝれば、最早かなはず「知りませんよ」と女は逃足の語を出したり。かく敵をはぐらかして置いて後、「だから富子の床上の祝にも行きはしないやね、富子にどうかして居るのなら病氣が快ッた顏を見に行く筈だわね、それはなんでもないが一月程前から病氣だといッたのは虛言、あらはれたから仕方がない、みんな言ッて仕舞が實は少しも病氣ではなかッたに違ひないよ、病氣はほんの四五日だ、」と一の事實には解釋を與へ、なんでもないと打消して捨て、一の事實には解釋も與へず打消しもせず、是れ此所へ話しを引込ん

し御心配でしたらう、」と切て放せし早矢、「エッ」と驚いて「何だい」と敦は空とぼけて躰をかはす所へ、また「向ふ島の奥樣の御病氣でねー、定し御心配でしたらうよ、」と乙矢鋭く胸板を貫きぬ。

第十　鄙しい奴は即ちゑらし、

才子とは小人の積極的の名のみ。

世間の人に高尚な人物といはれ謹直な男と評され眞率なりと愛され、人情のあつい義理の正しい面白い所のある人と思はれたる民井敦は、おのれが妾のお妙の言葉に恐れをなし、高の知れたる女の一句に肝を冷して、答辯を工夫するか遁辭をさがすか、少時默り居しが流石は才子、直に唇を開いて答ふる代りに先づイヤに笑ッて餘裕の十分にあるやうな顏をなし、「ム、アノ庵原の娘の病氣見舞に行たのを何うかして聞いたのだな、何の詰らないそれだけの話しだ、」と明かに人の姓名をあらはし事實をあらはし、人に知られかゝッた秘密を打明けて仕まへば人の知ッて居りし「秘密の價値を奪ふ」道理を應用したるは、流石ずるいこと言語同斷なり。秘せし事のあらはれかゝりしを強ひて塗り秘さんとすれば、それだけにて最早受太刀の地にたつものなれど、秘せし事を明けひろげて野原のやうにして終ひ、其野原の中でサア來い戰はうといふやうにすれば、當人は地理に明るく敵は能く知らねば、此方の勝となりて對手の負くる事極りきッたる話しなり。庵原の娘富子の病氣見舞に行たのだ、何の詰らない話し、それだけの事だ、と云ひ切たるは實に感心にて、お妙は倘利刀

よ、屹度、」と無理を云ふのも「かけ口舌、」女が自然と得たる對話法なり。「そりやァ毎日おいでなすッて、かうやッて居たいが出來ない相談だ、」と敦が云へば、「ダッテ、手紙もよこすな、家へ來ちやァ伺いけないナンテ、それで一月も御來臨なさらないぢやァ心配で仕方がありやァしません、あなたは浮氣で居らッしやらなくッても、世間の女が許して置きやしません、何故もう少し愛想ッ氣無く生れておいでなさらないんです、ホントに憎らしくッてなりやしない、」と云ひ返したり。恐らくこれ等は民井に仕込まれての應對なるべし。「是は恐れ入ッた、シッペイ返しは堪らない、」と敵の口を閉いて置いて、「世間の女と浮氣に騒ぐ位なら「民井は堅い」といふ噂はとッくの昔しに消えて今頃は定めし役所の白壁に、民井お妙として相合傘を樂書されて居るだらうが、おまへとさへ浮名を立てるのを厭ッて、こんな窮屈な逢ひ樣をして居る我だもの、よしや一月二月一年二年逢はなくッたッて安心して居てくれなくッちやァ割合が惡過ぎるよ、ホントに民井は堅い人だよ、仲間に誘引れたッて遊びにも行かず、宴會の夜も早く歸るのはおまへも知ッてるぢやないか、一月ばかり來なかッたのをあんなに長々しく恨まなくッたッていゝではないか、病氣で來られなかつたのだもの仕方がない、」と天晴甘く女の角を撫つけかくるを、ピンとはね返して「御病氣で、」と問ふ。「アヽ、顔の痩を見ても知れさうなものだ、」といへば、「イヽエ一月程前から御病氣で、」と念を押す。眞實は病氣は昨日からなれば民井も少し言葉弱く「ムー」と挨拶するをお妙は冷笑して、「奥樣の御病氣で定め

入れても良いのだが、先から幾度も云ッた通り、おれだッて最少し出世したいやね、おれが出世すればおまへだッて良い譯だもの、おれが出世しやうと云ふのもつまりはおまへと行末長く嬉しく暮さうと思ふからだ、だから出世の爲には暫時我慢も仕なくちやアならないよ、朝晩おまへの傍に居たいは居たいが、さう仕ないのも堪忍だよ、良いかへ能くおきゝよ、おまへを家へ引取れば何とかかんとか朋友なんぞも云ふだらうし、此處でかうして時々逢ふのも、知れた日にやア好くは噂をされやしないやね、だから極内々にして家の書生にさへ知れないやうにして居るのだのに、少しばかり尋ねなかッたッて、手紙なんぞよこされるやうな事で自然知れちやア困るはね、折角今まで堪忍して「民井は堅い」と云はれて居るのが「だめ」になッて仕舞はうといふものぢやないか、だからもう今度から手紙なぞ出して呉れちやアいけないよ、おれだッて一月も逢はないで居りやア心配で仕方がないや、おまへが呼ばなくつたつて來たくつて〳〵なりやしない、おまへを一人離して置くのだもの、氣が揉めるはね、」と言ひかけたり。言葉の中途なれどお妙は堪へず、「氣が揉めるッて、何時わたしが浮氣らしいことでもしましたか、」と口惜さうにチレて打込むを、笑ひながら敦は「おまへは浮氣ぢやアあるまいが他の男が許しやアしないや、そんなら何故もう少し不器量に生れて來ないんだ、チョッ、こんなに美しいのだもの、」と人さし指で頰をつゝけば、「およしなさい、」と慳貪に云ひて額越しの「愛敬にらみ」に睨みつゝ、「それぢやアもう手紙はあげませんから毎日お來臨なさい

敦はエヘンと咳拂ひしたり。

第九　靜な女の心靜ならず、

男は惚くて惚からぬもの。

お妙若し酒を嗜まぬ女なりしならんには、敦はお妙を愛する事能はざりしかも知れず、敦若しお妙を挑みしにあらずば、お妙は敦に身を任する程には至らざりしなるべし。但し敦は殆どお妙の全躰を知ッて之を愛したれど、お妙は敦の全躰は知らず、唯「お妙に對せる敦」を知りて、敦に滿身の熱を捧げたるなりけり。敦は今咳ばらひして何をか云ひ出さんとしたりしが、お妙の顔を見て「でれり」となッて其まゝに言葉を呑みて止みぬ。却ッてお妙は醉眼チラリと男を見て「今日は却てあなたがわたしより陰氣ぢやアありませんか、」といへば、「陰氣にもなるよ、今日の樣な手紙をよこされちややア、」との挨拶なり。「ハイ」と答へたぎり、まじめに男の顔を見るを、「オット、さうなられちやア話しができない、マア飮みなよ、ソレ、」と酌でやり、默ッてます／＼男の傍により、居ずまゐを少し直して低い聲に、「今日手紙をあげたのは惡かッたの」と眞底から心配氣に問ふを、「ナアニ惡い事はちッともないが、豫て言ひ付けて置た通り、おまへと我との中は微塵も世間や家の者にも知れないやうにして呉れなくつちやア困るぢやアないか、」と女の顔をのぞき／＼、ビク／＼しながら云つてお妙の樣子を見、「良いかへ、能くお聞ゝよ、ナニもそんなに世間に隱さずと良い、おまへを家へ

ともまた爲しがたくて、終に其まゝ貰ひ受けしが、其夜は男歸りてのちも老尼の傍に看病しながら、うつらうつらと男の事のみを考へける。

其時の男は即ち敦にて若き尼はお妙なりしなり。靜岡地方に避暑の爲遊び居りし民井、不思議の事よりお妙の色を愛でしが、老尼死して後は自然とお妙も民井にたより、寄りどころ無き心細さに頼もしき人を得て寄らんとすると、世に類無き色を愛でゝ之を弄ばんとすると相應じて、或夜の事此の若き尼に敦が酒をすゝめしより、終には戒も破れ衣、珠數の緒斷つてお妙は敦に身を任せぬ。かくて敦はお妙を伴なッて東京に來り、還俗させてひそかに池の端に圍ひ置き、堅く此事を人には知らさず、民井が家へはお妙より郵便ひとつ出させもせず、又民井もお妙が家に曉天まで宿りたる事無く、飽まで此事を祕し居けり。されば天知るか地知るか人は知らず、膠と漆との二人が中、佛罰のあたる末は知らねど、互に樂しく日を經しが、先頃より一月ばかり敦がまるで音信せざりしより、今日は敦が少し女の機嫌取るなり。お妙は氣質の陰氣なるにも似ず、生來酒を好むまゝ、今しも酒盃をすゝめられて辭するを得ず、一二陶傾けて少しは笑ひさゞめきたちぬ。元氣づいたる顏の色、朝日に匂ふ薄花櫻美しいとも何とも云べき言葉なく、敦は自分の妾ながら見とれてうッとりと眺むる心、是は色にぞ醉ひたるなるべき。お妙が嚴格なりし身躰つきは崩れて、何時となく男の傍におまッたれて寄添ひ、悋氣も今は忘れたる樣となりしが、何か思ひ出して物言はんとするにや、

て言葉も急には出ず、双方手持無沙汰なりしが、男は終に話しの口を切つて段々自己が粗忽を詫びたり。なんのそれほどに仰せられずともの事、と云ひて歸らんとする袂をとらへ、茶菓のもてなし、膳まで出して夕飯の馳走、もじ〳〵しながら仕方なく馳走になりて、庵には老尼が無待かねて空に氣遣ふて居るべしと、いふを言譯にやうやく逃ぐるやうにして立ち歸りし翌朝、宿屋から使の者來りて餽り物をば持ち込みたり。あまり立派すぎたれば、受取らぬといふを、無理に置いて歸りければ、餘義なく病氣の老尼にも話したるが、此事思ひの種となりて男の顏忘られず。又の日藥取りに行く時は、態と其家の前を通らず、他の道をまはりて、さて内々は男の樣子を餘所ながら見たい心持も仕たり。かくて次第に老尼の病は重り行き、賴み少くなりしかば、此の後何となるべき身ぞ、と味氣無き思ひの深かりしに、或夜ふけて庵の扉をほと〳〵とたゝく音あり。立出て見れば、丁度其夜は十三日の月あか〳〵と、夕顏棚の影大地に水打たるやうな涼しき晩なりしが、彼若い男立ち居て、突然ズット這入り、先の日の詫言を又繰り返して、是も何かの御縁なるべしなど言ひつゝ、此處らあたりを通りしまゝ御老尼の御病をも訪ひがてら立寄りし、とのやさしき言葉なり。若き尼はこれを嬉しく思ひて、喫き麥湯など侑めける。男は老尼のありさまを見て少し暗涙を催ほしたるごとく、失禮ながら御老尼のため、何か滋養になるものでも調らるべし、と紙につゝみて何程かの紙幣を渡したり。尼は受け難くも思ひしが、まづしき庵の樣子を見かねての人の慈悲を戻かんこ

とも無かりしが、是非なく藥取りに往復するに、恥かしい頭を人の見るを女氣の物憂く思ひ、笠深く〱とかぶりてあるきし夕暮、或宿屋の前にてザブリと突然水をあびせられ、衣の袖ヅブ濡れとなりたるに驚きて見上ぐれば、失禮、と淸き聲して顏は能く見えねど若い男の詫入る躰なり。何の麻衣、忍辱は此處ぞ、と其まゝ我慢して何とも言はず行過ぎける跡より、もし〱、と呼ぶ聲して宿屋の下婢の駈け來り、二階におとまりなされた客人が、醉のあまりに水飮まんとて水さしよりコップへ水を注ぎ玉ひたるが、如何した事やら蟲一匹其中に居たり、其事一寸癇に障りて、折柄勾欄に凭つて居玉ひしまゝ水を外へと捨て玉ひしに、生憎下をあるいて通られしあなたにかゝッて殊の外氣の毒がり玉ひ、實に惡い事した、是非御呼び返し申してお謝罪ばかりに御衣も新に寄進いたしたし、御出家とは見受けたが御出家にせよ御心ひろく、だまッて過行かれし御胸の中のすゞしさ氣高さ、つく〲恐れ入る事なり、それほどの御方に、麁相とは申しながら、汚き水あびせたる罪いよ〱深し、勿躰なし、と若いに似合はぬ夏い御方、サア御出家樣どうか御來臨なされて、と夕暮なればどんな老尼かとも思ふての出家呼はりなり。御出家樣〱と云はるゝ度少しは厭な心もして、イヱナニよろしうござんす、水に濡れしばかり、乾さば元の通り、決して御かまひなさるな、と若比丘尼は切にことわりても承知せず、遂に引ばりこまれたり。厭々二階へあがれば、面淸らかな立派な然かも若き人なるに、此方は見るに眩ゆくなつて俯向けば、男も案の外の色ある比丘尼なるに呆れ

に敵はず、眞面目を洒落てゐしらはれ、口惜いやうな嬉しいやうな目にあつて、殊更正直な持前なれば少し狼狽し、手を振はらつて居ずまゐを直す所へ下女は燗酒を持ち來りたり。敦は手早く猪口をとつてお妙に擬し、「御臺さま召しあがれ、」と戯れつゝ思はず二人目を見合せて「ハヽヽ」「ホヽヽ」とばかり笑ひたり。

第八　元を糺せばお比丘尼樣、戀ゆゑの還俗姿

三年ほど以前の事駿州靜岡の近在に六十ばかりの尼ありしが、此尼の俗縁ある士族何がし、次第に落魄て鎗立てさせし昔の姿なく、馴れぬ賣買に損し、茶畑に又損して公債證書も人手に渡し、夫婦引續いて貧を根に持つた病氣、十六になる娘を殘し母も父も冥土に行きければ、其娘を此尼養ひ取りて、可惜器量を慨然なものながら、出世の芽は何時吹くか知れぬものと諦めさせて、髮ゴッソリと剃り捨させたり。三味線も持つべき手に伏鉦敲く撞木を持たする悲しさ、尼も生れた時から頭に毛のないものにもあらねば、自分の若い時に競べて此娘の嘸悲しからんとは察したれど、「見榮は腹が張ッた時、」の話、詮方ない運命、これも前世の因果ぢやと思ふて後世の安樂だけを願ふがよいぞと教へけるが、娘は少しも不運を恨む景色もなく、念佛を唱へ經を讀みならひ、靜かなる氣質に相應せしにや佛をいぢりまはして餘念なかりしに、或夏の事、老尼病にかゝり、今迄は町に出づるこ

とするを、敦は「よし〳〵、立ゝずといゝから其處に、」と云へば、「はい」と答へて男の顏を見、「あなたほんとに御燗酒はお厭、」と問ふ。「アヽたッた一ッ葡萄酒を飮んだばかりでもクラ〳〵するのだもの、日本酒はとても飮めない、おまへは少し醉はなくッちやア堅くッて困る、爺や燗をしな、」と敦が云へは「アラ、わたしは飮まなくッてもようござんすよ、爺や、旦那樣はめしあがらないのだからいゝよ、お燗をしなくッても、」とお妙がいふ。「ハヽヽ、それぢやア爺が板ばさみて困るだらう、マア飮むがいゝ、酒氣がなくッてはおまへはおとなし過ぎて人間よりも畫見たやうだもの、」と戯るれば、「どうも困ッた人間でございますよ、」と眞面目なり。其通り堅くむづかしく出て來るのだもの、閉口するよ、」と云へば、「それで一月ばかりもお逃なすッたの、」と云ひながら例の美くしい眼でじッかりと睨む。敦は急にそれと氣が注いて笑顏を作り、「おれが逃げたッて。可愛想に、どうして逃げられるものか、此儘で、」といふ。「此儘でなければおにげなさるつもりだッたのでせう、今日手紙をあげなかッたら、逃げてお仕舞なさるつもりだッたのでせう、」といふ内段々とお妙の眼の光り鋭くなッて來るを、敦は平氣にて「そりやア逃げるやうな事もあるかも知れないが、逃げる時は逃げるやうにして逃げらアね、」と云へば、此言葉の終るか終らぬに彼美人は眦をキリ〳〵とあげて男の傍にすり寄り、「どういふ樣にして御逃げなさるの、」と逼りたる調子で問ひ詰めたり。敦は言葉は無くて片手で女の手を取り片手を女の首にかけて、「かうして逃げるのサ、」と一杯かつぐ。流石女は男

の若い者も適々見かけて噂にする計り、何處となしに沈默の德より威嚴を得て、自然と心やすだてに人から呼掛らるゝ樣なる事もなし。眼をしッかりとすゆる癖ありて、涙もろく情ふかきに引かへ、廐廂裏に蜘蛛の巢くふをゆるさず、犬猫を飼はず、下女を諭す言葉無く、責むる言葉するどく、二度責められたる下女は直においとまを願ふといふ。唯此お妙が、雨風のありたる後、二日目三日目頃、天氣麗はしく雲うつくしくたなびき、小鳥も元氣ある時、朝より眉を皺むる樣の事もなくて、珍らしく湯浴の後薄化粧して、髮を洗ひたるまゝ自分で束ね、（平常は決して髮を亂し居る事なし）ゆッたりとして居る時なぞ、下女の愚直なる話などを聞いて、聲は出さぬながら眼を少しばかり細め、脣をわづかに開きて笑ふ時は、十方世界春風の滿つるが如く、美しさに人を醉はせて、下女などは女どしながら此君の爲には生命を取られても惜しからずとめでたく思ふほどなれば、まして男は項羽でも蝦蟇仙人でも髭むしやづらに剃刀を加ふべしといふ。然るに此女は民井が圍ひ置きし妾なり。何處よりかゝる女を引出し來たりけん、流石に才子は恐しきものなり。お妙は小さき盃子を敎の手に持たせて葡萄酒を侑むれば、病人の敎は辭退もせず取り上げて一盃飮乾し、「おまへも飮まないか、」とやさしい言葉をかけて、却ッて病人が病人ならぬ女をいたはりたり。眼付で「嬉しい、」と挨拶を仕て、口で「マアあなた、」と又酌ぎ、立て取り出す生玉子、罎詰の味付海苔、下女が燒て來る與津鯛の干物、それをむしッて夜中なれど手早く肴を調へたり。尙何か吸物にても作らん

が興もあるまじきと思ふに此男鶯溪の坂を横に見て其へ登らんともせず。上野は忘れたるやうに金杉の通に出て、辻車に乘り、山下に出て三橋で下り、池の端を又ひとりあるきて寒さを厭はず、或る家の前に立止り、又あとさきを見まはし、誰も居らぬに安堵したるごとく、其家の戶を指先にてトン〳〵と輕く敲けば、內より入口をソッと開きたり。ツト這入れば、直にサルを下し、其後小さきらんぷを持來りて「よくまあ來て下すつた事ね、」と妙に莞爾つきながら、らんぷを其處に置き、しめあげ靴の紐を細き指にて解くは何物ぞ。色あくまで白く光りありて、髮つや〳〵しく、面の四ツ道具誰も惡口はきけぬ美くしき女にて、頓て狎々しく敦の手をとッて小座敷に引き入れぬ。

第七　燈火くらき小室の談し、膝と膝との親密な間柄。

民井が夜深に訪ひたる池の端の小家のあるじは、お妙とよばるゝ絕世の美人にて、之に從ふ小女の外には人もなし。家は二間か三間か、左までに廣からねど、茶がゝりの四疊半の織巧なる座敷に洋服脫ぎ捨て、シャツの上に其まゝべんべらものゝ袷を着なし、花天鵞絨の坐蒲團に豊に坐したる敦の對面に坐れるお妙は頷を襟にさして眉頭を蹙め、時々吐息をつけり。此の女の出所如何なるものにや、詞つき左ほどいやしからず、常に沈み勝にて出行くをきらひ、着飾るを物憂く思ふか、湯に行ッても片隅に小さくなりて居る質なり。されば近所の人も能く此女と親しめるものなく、町内

ります、強ひてとあらば明日御車で、」と親切に云ふを、「親切によく云ッて呉れた、おまへの云ふ事は殘らず分ッて居るよ、然したゞ公園を少しあるいて例の通り氣ばらしを仕て來るばかりだ、」と拒めば「ハイ左樣でござりますか、左樣ならば今夜はおよしあそばしては如何です、夜風は御病氣のおからだにお毒でございますから、」といふ。「外套を用意して着て居るよ、心配して呉れずとも良い、」と云へば、「それまでにおぼしめすなら提灯を點けましてお供いたしませう、」と何處までも親切なり。「ハヽ、提灯を點て供を連れ散歩する者があるか、心配せずと貝い、平日の通りの癖だから、」といふに、老僕は猶も、「どうも平日とはお違ひなさりますから、」と云へば、「馬鹿、余計な、默れ、」と例の烈しき短かき命令なり。これには抵抗ひがたくして流石の爺も危ぶみながら口を噤みぬ。敦は外に出て三町ばかり靜にあゆみ、後前見廻して人なきを見すまし、外套の帽子をかつぎ、金杉の通りへと心ざしぬ。さりとては不思議なる哉、四五日前より食事もろくにせず、奉職せる省へも出頭せず、醫師にも胃病と見とめられ、昨日庵原の娘富子が病氣全快の祝宴にまねかれて、行きし時は人力車に乘りて中途まで出たるにさへ、心地惱ましく堪へ難しとて引返したるに、今夜風冷やかに、世間靜まり、往來暗く、犬の聲のみ冴ゆる時しも、上野の公園を散歩したりとて何のおもしろかるべき。勿論深夜に公園あゆむ癖のありとは豫てより知れたる事なるが、松の葉越しの月をかしき宵にもあらねば、塵埃たゝず梅が香迸るといふ趣味もない頃、樅杉の大木にざわ〳〵といふ風の音きいた所

して居りました、」と饒舌過ごし、是は仕たりと思ふたれど仕方なく、娘の分の見舞の口上まで良い加減に作り設けてならべたて、「御大切になさいまし、左様なら、」と云ッて歸らんとする際に、「お孃樣に何分よろしく、何れ近日快復次第參上いたし、お眼にかゝッて、例の罪のない話をしてお笑はせ申しませう、ハ、ヽ、ヽ、」と重い舌を輕く動かし、可笑くもないに妙に笑はれて、富子の母はギヨットなし、何分よろしくといふ敦の言葉を深く胸中に感じながら歸りける。其跡へ來る郵便を書生の取次で出すを敦は受取り、見れば芝の朋友なにがしよりの手紙なり。そのまゝ懷中して臥床に入り、羽織脱ぎすて、夜具引かぶり、長々しき手紙を少しづゝ幾回かに讀み終り、起上りて手文匣の内に藏め、また床に入りて手を胸にあて、眼をふさぎ、つく〴〵と何事をか考へける。

第六　温和しき男の極意、おとなしからぬ所あり。

其夜更けて、敦は何時の間にか例の洋服を着て外套を穿ち、洋杖持つて靴を穿きて立出でんとすれば、書生も老僕も周章て驚きとゞめ、「何處へお出になりますか、御車の支度を、」と書生が云へば「御病中でございますから御わんじ申します、殊更夜分ではございますし、お使で濟みます事ならばわたくしが參りませう、」と老僕も云ふを、「ナニよい、」と淡泊な返答なり。書生は口を噤みたれど老僕は尚押返して、「御大切のお身躰、御膳もよくは召しあがらぬに外出はおよしなされては如何でござ

もりにて押して罷り出で申し候へども、途中より引かへし申候。實は過日より少々不快にて役所へも出仕致さず、自宅にのみ引籠り居り候儀なれば、何分わしからずおぼしめし下されたし、との事なり。お富の母は、氣の毒にもあり義理にもあり、自分見舞ひに行かねばならずと思ひながらも、尚富子には其病中度々民井が訪ひたりしをば知らせざりし事を恨まれんことを厭ひて、是をも知らさず、立派なる土産物をとゝのへ、手車に乗りて、一僕を従へて音信ける。まことに女心の淺墓なる業のやうなれど、是れ人情の不思議なるところとや云ふべき。いくらエラクッても六十圓や八十圓ばかり取る男の病氣を、輕々しくも庵原夫人がみづから訪ひたりけることそをかしけれ。取次の書生挨拶叮嚀に、客間に通して少時待たせしが、軈て立出たる民井敦、平常の洋服姿とは變りて琉球紬の綿入れ、白縮緬の帯しだらなく巻きつけ、黒の羽織引かけしまゝ紐をゆるくむすびて、平日のはき〳〵としたる擧動に引替へ、力なげに坐りて挨拶の言葉も弱し。富子の母は吾來たる爲めに此の病人を臥床より出させ、衣服あらためさせたるかと半分は氣の毒、半分は自分を鄭重に取り扱はるゝを満足して、見れば敦は下顎の髯何時の間にか二分ほどのびて、つや〳〵したりし面影も今は衣服と照り合ひて一際青白く、髪の毛あさましく寝ぐせつきて唇の色薄く、眼も物を見詰めて動く事遅きやうなれば、何となくあはれに覺え、娘を度々見舞ひくれたる禮をあつくのべて、敦の様子を問ひ、流石女の口賢しく慰めなどしたる話の圖に乗りて「娘もいづれ是非御見舞に上ると申

ら、」と直に歸ッて仕舞ふからオツダよ。ハーテナ、富に惚れて來るのなら、日にまし少しづゝ快くなッて行く顏でも見て歸りさうなものだのに、「左樣なら、」があまり早過ぎるやうだ。どうも變だ。わからない。此處がエライ人のオツな所か知らん。何にしろ、病氣に親切平常はお金、ゐもりよりかも惚れ藥、といふ歌もあるから、民井の親切を富に知らせることは良くない、いくらエラクつても六十圓や八十圓ばかり取る男にれられたり、れたりされては困る。親切といふ惚れ藥を病氣の娘に嗅がせては蟲の毒だ。畜生ッ、民井め、家の娘に心を掛けるなぞとは生意氣だ。娘に惚れるなら賓めて二三百萬圓の身上か、侯爵以上正三位以上になッて來い。ダが娘に顏を合はせずに歸るのは丁度幸だから、家のものにも口止めして、娘に知らせない樣にしやう。然し曰くなしの唯の親切で尋ねて吳れるのならそれこそほんとにエライ人だが、ハテナ。」とは思ひながら下女下男に口止めして、あはれ民井の親切は少しも富子に通ぜず、心邪見の母親は人の誠實の言葉をば冷たき耳にて聞きたりける。

第五　我子が病氣を見て後、
人の病氣いぢらしい者。

庵原富子の母は、民井の使者が置いて歸りし手紙を見るに、わなゝきたる筆の跡にて、其趣きは、昨日はわざ〳〵御まねき下され、有り難く、是非とも富子樣御全快の御よろこび申しに參上いたすつ

の話し、罪のない桃太郎話しのやうな可笑な事を話して聞かせては、罪もなく容躰も賣らずに笑ッて歸ッた計り。ハテナ、眼づかひ一つでも家の婢や男の心中は知る事が出來ると内々威張ッて居た妾だが、どうもあの人は分らない。アヽいふ調子のさばけた人で居てそれで大さう堅いといふ風評、獨身もので通人がゝつた者は大抵堅くない筈だが、あの人は細君もなして、それでさばけた所があッて、堅いといふのは妙だが、娘の病氣見舞に頻繁に來て呉れるのも矢張あの人の異な癖かもしらん。あの人は異な癖で夜深に公園を獨り散歩することが好だとかいふ風評、エライ人は一風變ッた所があるものだといふが、あの人が富子の見舞に度々來るのもその一風變ッた所か知らん。イヤイヤ富の所へ最初來た時、富の容躰を無言で枕元に坐りながら見て少し涙ぐんだやうな所は、どうしてオッナ癖なんぞで出來る摸樣ではない、信實から出た所置らしい。ダガ富にどうかして居たら病氣にならぬ前にも繁々來そうなものだつたに。ハテナ、さうで無かつた所を見れば、エライ人の變つた所か知らん。エライ人といふのはどんなものだか知らないが、エライ人も唯の人に違ひない。たゞの人なら曰くでも無ければ娘の所へ、然も病氣の所へ斯う度々は來ない筈だ、屹度民井も若いから曰くあつて來るのだろう。然し一度娘の病室へ通つたばかりで其後はいつもわたしに容躰を聞いて、其聞く時は沈んだ樣子で、わたしが「あり難うござります、よろしい方で、」と答へると、急に胸のひらいた樣な風で、「それはまことに結構で、御嬉しうぞんじます、尚精々御大切に、左樣な

の御心配は御さつし申します、御醫者樣は、ナニ三人まで、それは結構、然しどういふ御容躰で、なるべくは一寸御病室へ、イエ傳染の懼れはわたくし覺悟がござりますから御氣づかひなされますな、」と無理に病室へ這入り、熱に浮されて正躰なく居る富子の枕邊に坐り、兩眼をうるませて立かねるやうに見つめ居たるが頓て首を垂れ、しほ〳〵と立ちて母親に注意しみ〳〵と、色々爲になる事を云ひきかせ歸りける。唯わづかに敎師なりしだけの好で、尤も三四度は家へ來た事もあるが、態々娘の病氣見舞を早速に仕て呉れしは親切な男、と母親は思ひ居たり。

第三　人の心の底、汲みても知り難し。

民井敦は其翌日も病床には入らざりしがまた富子の病を訪ひ、翌々日もまた訪ひ、それより一日づゝ間を置きては必らず來り尋ねければ、母親は心中にて「オヤあの民井は家の富子に少し如何か仕て居たのか知らん、」と悟りながらも、「然し實のありそうな否味のない人、娘の朋友の中には郵便端書で見舞などをする失敬なのもあるのに、舊先生であッただけのよしみばかりで、其よしみばかりで度々尋ねて呉れるなら賴母しい人。イヤ〳〵唯そればかりでは斯う親切に出來るものではない。ハテナ、餘程エライ人だとは人の噂で聞いて居たが、學校を退いてから彼の人と娘とは三四度逢ふた計りの筈、家で會話して居るのを蔭で聞いて居たこともあるが、何時でもおもしろい西洋の小説

く眺めて天晴の美人ぢやと悦喜しける。されば此の財産家に取り入りて何か一つ目論まんと思ふ者どもは、先第一に富子を悦ばせんと工夫を凝らし、色々の進物目を驚かし心を慰さむる様に仕掛け、富子さへよろこばゞ親父は此方の手の中と圖りけるが、親父はまた富子にかゝりては餘念なけれど、金儲けにかゝりては犢鼻褌を堅く締め居る事非常なれば、人に謀られて損毛などする事中々に無し。左程に此夫婦が大事にしたる美人を如何にしてか病の冒したりけん、秋の中の頃、向ふじまの別荘に二日三日富子は遊び居りしが、不圖心なやましくなりぬと訴ふるまゝ、醫師を呼べば腸窒扶斯との見たてなり。腸チフスと聞いて母親は驚き周章、本家より此處に來りて介抱する事等閑ならず、素より有りあまりたる財産家、金の手を盡し人の手を盡し萬不足なく看護りけり。さてまた活達大氣の父も、奥州地方に炭山見に行つて居たりしが、富子の病氣を電報にて知りて、歸りたき思ひは山々なり。されど此思ひを堪へて油斷なく起業の目論見をせしは、さても慾の深き男なり。留守はひとりの母親、尚の事狼狽すれば、一家の者も御秘藏の御孃樣どうぞ早く快く御なりなさるやうにと祈り、知り合の者は此處ぞと見舞物に張り込み、誠實をあらはし忠義を御覽に入れける中へ、是も何心ありや、民井は訪ひて、富子の母に向ひ親切に「今日御令孃の御朋友より承はつて早速御見舞にあがりましたが、御樣子は如何です、腸室室斯と申すものは無事に幾日か經過さへ致せば御心配には及ばぬものですが、わたくしまでも餘所ながら甚だ心痛いたします、あなた

富子は百萬圓以上の財產家の娘にて、其父は活達大氣の商人として天下に知られたるものなり。然し素より學問薄く識見も低く、唯黃金を儲くる事ばかりには鋭き眼と强き神經とを有せる男なり。富子の母は昔如何なるものなりしや、少しく蓮葉かと思はるゝ女にて、一寸來客へ世辭をいふにも色がゝりたる言葉を用ゐる癖ありて、「オヤマア貴方の御帽子は大層御衣服と移りがよくツていゝ事ね、」と是丈にて澤山なるを、其あとに「そんなにおめかしなさると罪が殖えませう、オホヽ、」といふ質なれば、自分も四十に近き年なるに艶を含みし言葉にてほめらるゝを喜び、出入の小間物屋が華美な品物を賣り付けんとするに向ひ、「コンナに若々しい物は挿せやしないやね、」といひても「ヘイどういたしまして、あなたはじみがお好で居らしッても、一躰がまだお若くゐらッしやりますから、へゝゝ、」と空々しき輕薄を云はれては內々大に喜び、其簪で痒くもなき頭を搔きながら「戲談ぢやないよ、人を馬鹿にして、」と馬鹿にされるに氣が注きたるかどうか知らねど、矢張り其のまゝ終に買ふといふ調子なり。此母此父ともに一人娘の富子を寵愛する事大方ならず、何にても望むがまに〳〵にして、今年十八の娘を舐めるやうに可愛がり、ダヾは捏ねさせ方第なり。學校には父が料簡にて通はせたれども、芝居に行くため休む事を何とも思はず、母が第一に娘に同意して遊びに出づれど、父は此樣な事に關はず、唯錢を儲くる事ばかりに氣を使ひて、其氣を休むる時に娘の機嫌よき顏を見るばかりなれば、時々方外なる贅澤物を需め來りて娘に與へ、其のよろこぶ樣を餘念な

にて讃むるものは皆獨身ものなり。配偶あるものにても老人は讃むる方なれば、嘲る者の方却ッて理の無いやうに聞きなされ、自然遮ッて嘲るものもなし。又此教は、自が家の祖先を追慕する一癖あれど、是をわざけるものは大抵婦人に好かれぬ質にて、却ッて時々此男が夜深に上野公園を散歩して歸ることなどあるを奇骨ある男の所業ぞとほめける。此男の父は遠州濱松在の山里に隱居して世には出ざる覺悟のよし、是もまた幾分か敎を高尚の人物と思はする種なりけり。

敎は或る頃、二ヶ月計り某女學校の教授をしたる事ありけるが、謹嚴親切なりければ、生徒のうけもよく、今の職に轉ずるについて學校を去りたる時及び其後け、尚さら生徒より慕はれて、時々美人より縮緬の肘つき、毛糸細工のインキ壺の蒲團など貰ふ事あり。其時は嬉しよろこびて無頓着なる物語りをおもしろげに爲し、樣々馳走して歸宅を送る車まで、等閑ならず待遇事常なれば、小さき事にも動きやすき女の癖とて敎を良き人頁き人とほめけるが、或時一人の舊生徒來りて、雀の如く、ベチヤクチヤと何か饒舌りて歸りし後、敎は急に下男を呼びて車を命じ、自己は服を改めて鏡に向ひ、塵を拂ひ襟を正しくし、外出の支度をなしたりけり。

第二　子にあまい夫婦、結構な御心入れ。

人力車の至りし先は向島にて、舊民井が生徒なりし庵原富子といへる女の病に惱めるを問ひしなり。

通形の極よきものをかぶり、靴は高鳴りのせぬを用ゐ、徹頭徹尾錢けかけながら華美と否味とを脱き、フックリとした躰裁をつくり、まづ婦人には「良い人ねー」と蔭で噂されて、現前ではそッと秋波を送られる方なり。其癖此男堅いといふ評判あッて朋友の間の約束を違へたる事なく、婦人には倘更、不義理不約束したる事なし。目上の人には眞率なりと愛され、人情のあつい義理の正しいおもしろい所のある人と朋友の妻君にまでなづまれ、適々訪問して來る書生などには愉快活潑に話しすれば夫等にも喜ばれける。此人また政治上の新聞雜誌は、日本の物は云ふに及ばず外國の物まで數多く取りて讀むやうなれど、さらに政治上の意見を吐きたる事なく、問ふものあッても「私の樣な學問經驗少き者が、假令意見を有しても誤謬を免かれぬは必然の事、學識を充分養ふた後に、初めて實際問題に就いて可否を申したいつもりです」と立派に答へて切りと自が職務に勉むる計りなり。されば甲の政黨員にも乙の政黨員にも良く思はれ、長官にも愼密な男と賴もしく許さるゝに至りぬ。又女子に關する雜誌へは時々短篇の崖異ざる小説を寄贈する事などあり。住居は金杉の騷がしからぬ所にありて、家内は書生と下婢と誠實なる下男と活潑なる犬とのみ。まだ定まれる妻なくして、平生宴會などの折ふし人に向ッて、「自惚と笑ひ玉ふか知らぬが内々は僕の一生を共にしようと思ふほどの女を不幸にもまだ見出し得ないが、若し見出したら必死になッて其女を僕の守護神と戴くつもりだ」と公言すれば、是丈は嘲られ又は讃めらるゝなり。嘲る人は皆配偶ある人

冷于氷

紙より薄き人情、氷より冷たき世のさま、むかしも今もかはらぬ事ぞかし。昨日の嫁入り、今日の離縁、區役所の知らぬ賀禮と悲しみの數々多かれど、いづれも當時の人間利口にして、圓滑といふ良き事を心得、双方理を枉げ耻を匿して、むづかしき縺れを厭ひ、うまく埒をあくれば、お孃様の簞笥に襟垢の付たる白の衣裳あり、若旦那の御小袖は美濃屋近江屋の娘が半分づゝ縫ふたりといふ。さても都合のよき話しなり。その當流のあり難き其の頂上に立つ男を才物とほめ、浮氣の潮に漂ふ女を交際家と尊む天下の風こそ怪しけれ。いてや我が聞きし當世男の身の上ばなしを語らんとて或人の物語りしを聞きて、其儘寫せば次の如きものとなりぬ。

第一　誰も彼も惡くいはぬ紳士、
靴にまで塵のない御容躰。

名に高き何がし學校を卒業して月給六七十圓を或省より取る民井敦といふ男あり。毎朝顏を洗ふに念入るゝものから皮膚の色うつくしく、殊更醜からぬ生れ質、着物は常に洋服、内々膝の所の究屈なるには苦しみながらヅボンの細きを穿き、肩のカッキリとした所には餘程裁縫屋の手品あるモーニングコートを着、黒地に映り榮する時計の金鎖は態と少し計見せかけて奥床しく見せ、帽子は普

らせて飛て入り、店の者の拳を抑へ、慮外致すな控へろ、高の知れた勘定のイサクサ、白日人を罵るさへ過ぎたるに打たんとは何事ぞ、僅ばかりの錢金に男の頭上に手を下さんとは片腹痛し、若い人早く行れよ、町人の卑しき者を相手にさるゝな、此場は我預りたり、といへば若い男は默禮して雲を霞と出行きたり。店の者はこれを見て大に怒り、喰逃を逃がしたからは汝が拂へ、とせまる。往來の見物は面白半分、袴の大將確りとやれと云ふ。先生ますます圖に乘ッて、默れ素町人め、と一喝して、先祖傳來の祐定が變身武內の宿禰を出して、言ひ分はあるまいがな、と大威張に威張りたり。こゝまでは先生大に良けれど、家に歸りて後妻君に此事知られ、妾には綿銘仙一ッ春着とて作ッて呉れず、緣もなき若い者に何の要りもせぬ俠氣、と叱られ、閉口頓首、あゝおそれ入つた。

の子一二枚あれば、是を種にして一粒萬倍の手品もあるべし。兎に角年禮は肝心、浮世を渡るに第一は御機嫌取りと妻が云ふた。年始に來ぬとて怒る者は自惚の强い大馬鹿ものながら、其樣の馬鹿を賢人あしらひに仕てやるのが社會流とか人の云ふ流行者なるべし。と、怪しき感慨あやしき理屈を捻つたる四十を越えし男あり。むかしの好みとて彼此にて飲されし御馳走酒にホロリと醉ひて、一歩踏出す百千鳥足、あなたさへづり此方さへづり囀けてドッコイショと霜どけ道にギシ／＼鳴る朴木下駄をふみしめ、嘉平次平の袴を吹く風にびらつかせ、ボク／＼とあるきながら花咲かば告げんと云ひし、と流石上品にも小謠ひ唄ふ折柄、風に狂へる達磨凧の突然頭へ落ち掛りたり。これはと驚く間もあらせず、小兒は無遠慮に絲をたぐれば、帽子は糸目にからめられてコロリと傍の溝に落ちたり。その時此男是を見て、アハヽ時節因緣到來したな、ハヽハ面白い、と惡く洒した禪宗坊主が飼猫の往生を見た程も悲しまず、悠然と步き行きけり。さてまた步むこと二町あまり、ト見れば黑山をなす人立あり。何事ぞと見れば、酒めしと大きく書せし障子の內、一人の若者を捕へし店の男共口々に、正月早々喰逃げせんとは太い奴、然も蛸の足が堅いの柔らかいの、ヌタの味噌が良いの惡いのと散々贅澤を吐きし上に、錢は無い、又の日拂はう、とはづう／＼しい言分、憎い野郞め、と聞くさへ氣の毒に罵り居れり。若い者は一言の申し譯なく、全く來る道にて紙入を落したるに氣が注かでありしといふをも聞かず、拳ふりあげて打たんとす。これを見るより士族先生身を躍

食ひ耗すばかり。扨も悲しや祐定にまで離れて僅に口をぬらす心外さ。去暮の事、其むかし同藩の某氏にたのみたる博物館の小使の口、話しが出來たるか出來ぬか、未だに何とも報知の無きは、よく〳〵運命つきたりと覺えたり。今懷中に秘め殘して、薪屋米屋など生命の親方分の商人に無い顏しながら借り拂らはず持ち居る一二圓の金は、是れ先祖が柄糸に血をあやし鋒先に火を出して數々の功名せし一刀の名殘のおもかげ、武内の宿禰となッて意久地なき我を睨み玉ふ御顏尊し。運命是非に及ばずと云ひながら爲す事もなく今日を送るは羞かしき頂上、何か宜き事あらば滿身の力を盡して働かんとは思へど、一切不景氣の世の中、尋常の業では仕事の仕榮もなし、又仕事も尋常の心得では遣り得ず。いで今年からは人を頼むやうの弱き心をもたで、男兒は犢鼻褌ひとつ腕一本、磨いて縒をかけて我技量だけに世を渉らん。ア、そうぢや〳〵。エ、今までは何を考へて浮々と暮した事やら、我ながら愛想つきたり。何の人間万事骰子の目の起き轉び、丁と張て丁と出る時もあり、半と出る時もあり、あまり氣にした物ではなし、と向ふの熊公が云ッたのは眞實さうらしい。同藩の某氏、彼などは學問の有るではなし、辯舌が達者ではなし、唯少しばかりの猪口才で、今はある省の判任一等とやら、彼は唯半と注て半と出た運命。おれだとて運命惡ければこそ何をしてもトン〳〵拍子に間が抜けてかくの通りになッたれ、一ッ運が向けば瞬く隙に長者鏡に載るべし。祐定の一刀賣ッたとて質に入れたとて苦にせまいもの、懷中に隱し殘して妻より他の者の知らぬ虎

……屋ヤーと掛聲受けて無上に嬉しがれど何屋だか分らず、褒た女も分らず。多分は親父樣の假聲なるべければ是れ親父屋ヤーと褒めて然るべし、と隅の方で惡口言ふ男もあり。ニタリ笑ひの御方は唯々四方を見て一々感心し、西川の拳の上手には感服だ、東山のナンコも不思議に強い、淺野の踊りは躰操に似て居る所に趣味がある、深井の歌うたふは下手だが聲の續くは感心々々、彼男の肺臟は何インチあるだらう、なぞと詰らぬ事を一々内心で感服し、アノ婆藝者は能く饒舌る、ア、能く饒舌る、洒落を云ふは、實にエライ、妙々、チヤカ／＼チヤンのチヤンと彼女が彈く三味の音はア、エライ、是は妙だ、ア、加藤が涎を垂らして居る、あれ佐藤が反吐をついた、ヤ倒れた、ヤレ／＼反吐が顏中だ、白粉の代りに反吐をつけたのは實に面白い新奇の化粧法だ、ア、感心な發明をする男だ、と頻りに感心して居る内、自分は俯伏になりてトロ／＼と睡るなり。隣りの人は叱ッて曰く、不景氣な野郎だ。

第二人　男兒がり

去年の大晦日に、先祖重代の業物一振り、生命から二番めと大切にして火事の半鐘聞けば直と腰にさすほど珍重がりしを、質屋の庫に納め奉りし無念さ。若水くむとて人の軋らする井戸の車の音も聞くに面白からず、今年は零落はてゝ尾羽打枯せし究士族の我、ちぎれたれども鎧一領と力む勢もなければ、鏽たれども鎗一筋は最早疾に無し、痩せたれども妻一人、是のみは息災に生きて共に

醉郷のありさまを覺束なくも寫し出す

第一人　意氣地無し。

新年の宴會、各々着下しの衣裳に自己の美術心かくの通りでござると嗜好をあらはして、ズラリと列んだる大一座見事なりしが、頓て杯盤の周旋とて出來る藝者等の何のつまらぬ御座付すめば、忽ち誰も彼も捌けた應答。一人が笑ひ、二人が笑ひ、三人笑ひ、四人笑ひ、笑ひ聲座中に傳染する時、アハヽヽヽと齒齦を出す樣な下卑を爲し玉はずニタ〳〵と笑ひ玉ひし御方あり。取り上げし猪口飮乾して下に置く途端隣席の髭多き男より一つ獻じ天皇と古い洒落を慰斗にしてさヽれ、ハテおもしろい事をいふな、と感心しながら又ニタリと笑ッて、自分の猪口を叮嚀に盃洗で行水使はせ、默ッて一禮を添へ差出せば、生憎女は心付かず向ふをむき居るに、其に聲掛けて酌さするだけの事もせず、自ら德利取ッてソッとつぐ可笑さ。是れ場馴れぬよりなれど一ッは此人の心意氣おとなしきよりて千年立つても場馴れ玉はざる、笑止といへば笑止の事なり。隣りの男は、此先生面白くない酒だな、と見て取り、余り話しも仕掛けず。折から他の人たちはそろ〳〵騷ぎ初め、自ら出張して人の膳の前に酌取りの雌動物と肩を擦れ合はして坐るを內々恐悅がり居るもあれば、柱によりかヽりて雷神が風邪氣といふ聲で怒鳴り出すもあり。靑二才は昨日芝居見て來たと話し出して女に假聲を所望され、是りや日記に付くべき名譽の委賴と逐一承知し、油汗を流し〳〵、首ふりたてヽ饒舌り、

醉鄕記

やかましき浮世の騷ぎ、一文の錢をあらそふて舌の先に劍を舞はすあれば半生の名に驅られて胸の裏に要愼の楯油斷なく備ふる奴等が、是は惡い是は善いあれではいけぬ斯うするに限ると面倒なる詮索。我は其やうな事を一猪口の酒の泡と消して德利の中の別乾坤に入れば、王樣もなく敵國もなく戸長さまに叱らるゝ事もなく、聞苦しき向ふの婆が嫁いぢめる聲も聞こえず、よしや叔父上三郎兵衞どの借金取りに御來臨なさるとも鶯と心得てうけたまはれば、御異見もまたをもしろし。長閑なりや長閑なりや、春風とこしなへに鼻の頭を吹き、彩雲常に脚下に起る。身は此儘に眞人と化して、胸髭ありながら心は總角の昔時に歸る嬉しさ。欲もなければ罪もなし、名もほしからねば德も忘れつ。仙臺平の袴さや〳〵と音させて嚴めしく四角に坐り、足に痲痺をきらす究屈な禮義なんぞは、三千里外に吹飛ばした後、半跏ゆたかに、天眞全く、片肌ぬぎの愉快、月白く、花霞んで、悠然たる境界、人間の休戚にあづからぬ氣樂さ。極樂は十萬億里の其さき隣りにあらず、蓬萊も水烟茫々たる彼方の果ならず、唯此醉鄕こそ極樂なれ、仙島なれ。とは是昔時の人の管ぞかし。我今其管の孔より覗き見るに、醉鄕も矢張り浮世と同じき人さま〴〵の躰たらく、可笑しい哉可笑い哉と、我も其一人で有りながら、トロリとしたる眼を光らせて、酒盞の中に面影蘸す色々の人を見て

騙らず。

（をはり）

ずらりとならべ、いざ御勘定まちがひなきやう御あらためなされ。品物早速お返しあれといへば此方は青くなり、ふるへてへい〳〵と云ふ許り。通辯は少しせき込みて、さア品物を御返しあれ。如何なされた。如何なされた。元利御渡し申せば故障はなき筈。品物に何かまちがひでもありましたか。決して左樣では御座りませぬ。さらば早速御渡しあれ。只今はちと何で御座ると眼の色をかへればろばアとも怒りし樣子。番頭ます〳〵顚倒して額に疊の目の跡つくまで頭をさぐる其圖に乘り通辯は、おいふざけるな番頭め。頭を下げて品物を返さず事が濟むならば米舂ばッたが質屋を出すは。可笑くもねエ。戯談は措ても呉んな。貨物をとつと〻返して貰ひ度エ。それとも大事の貨物をどうにかしたか。さアどうだ。出やうによつちやア許さねエ。契約違反の表沙汰、損害要償訴へて此屋臺骨打破し、ぺん〳〵草の生ひ茂り、ばッたの住ひい〻やうにとりはからつてやらうかい。と音羽屋もどきに凄じく罵りたける所へぬつと出て來る佐野平理學士。これ〳〵番頭何して居やる。早く七千圓頂戴しろ。それ御受取をさしあげろ。質物はたしかに御返申しますと出すを見れば小箱の封じも損ぜず。貴婦人と通辯と顏見合せて是は〳〵と計り。佐野平のうしろには巡査も居る樣子。詮方なくすご〳〵と七千圓殘り惜氣に見返り、出て行きける。噫感心なる亭主の處置、騙局と氣がつきて理學士との相談、巧く新聞紙を種に使ふて二度のかけをさせ、却つて一千圓の利を得れば、噫似て非なる騙局の智慧、慾に釣られて腮に鉤、のつぴきならず。是は損して損せず。彼は騙りて

ど」にはあらず、光線の屈曲、光軸の數も能くは似て居れど贋物なり。昔しもぼるとがる王家に秘藏の「だいあもんど」鷄卵の大きさなる者が學術の進むにつれて眞物ならずと知れたる話あり。元より人造てはなけれど鋼玉と云ふ者、硬さも「だいあもんど」の次で素人眼にはとても見分らぬ物なり。殘念〳〵叔父樣一杯食はされし、と憂を分つは親族の情なり。亭主呆れて言葉なき所へ小僧歸りて鹿鳴館には最早居ぬとの話し。段々聞て見ますれば投宿して居たといふにもあらざるよしと注進すれば佐野平二度びつくり、是は〳〵と開きたる口ふさがらず。學士氣の毒に思ひ、鋼玉とても價なき物にはあらず、責めて腹愈せに相應の價で賣り給へ、我等御周旋申さん。とて歸りしが三日四日たてど貴婦人より何等の報知もなく、亭主口惜くはあれど詮方なく、六百圓にて是を賣りしよしにて毎日唐人うらめし唐人うらめしと喞ち居るとぞ、と新聞に長々しく書きたれば、かまびすしき世間の評判油斷のならぬ例となれり。

其 三

丁度一週間今日にて終らんとする夕暮時店前に馬車横づけして貴婦人と通辯ろばァとずつと通り、先日は大きに御世話忝し。約束の期日なれば唯今元利揃へて持參致しました。品物引かへに御渡し下されといはれて番頭ぎよつとし、是は〳〵と口をつぐみてもぢ〳〵するを、委細構はず七千圓

其夜急に盜賊怖ろしくなり、火事險呑と考へ、久助久助、かねて買て置いた消火水は何罎あつたかと途轍もなき事まで問ふも神經亢奮の爲とて是非なし。かくて夜明方に少しまどろみ、起出て昔堅氣の冷水に顏洗ひ茜さす朝日拜んで孟子の謂はれた朝茶一杯に氣を休めて淸き心になりたる時、ふと思ひ出せば昨日の始末少しく腑に落ちぬ所あり。どうやら煙に卷かれた趣もありて安心ならずと眉の間に一本の皺より、二本の皺より、何時か兩腕を組み合はして考へれば考へる程愈々すだれの中見えぬ如く疑はしさやまず。居ても立ても苦勞義經が身を置く所なき樣な始末、兎に角小僧遣りて鹿鳴館に貴婦人のゐるなし糺させんと云ひ含めて使者にたてたる後へ、暫く御無沙汰しましたと尋ね來るは甥の理學士也。あゝよい所へ、學問の用に立つは此樣の時、當世才子に判斷を賴まん、と仔細を話せば「かめを」の卷煙草輪に烟りを吹きながら、はゝアはゝアと高慢臭い挨拶。平常なら若い者の癖に贅澤なと劍吐を唾と共に頭からあびせかけてやりたけれど、虫を殺して返答を待てば「ぼけつと」より絹の「はんけち」出してちんと鼻かみ、さればこそかねてより商人でも普通學ぐらゐ心得て居ねばならぬと申し上たては御座らぬか。叔父さまも金石篇の一冊も讀で御座ればそんなに御胸を痛むる事も御座るまい、と前置してまづ品物を拜見せんと云へば佐野平どき〳〵して箱を取り出し遠慮もなく封じを押切り、金剛石を見れば疑に曇りても見ゆるか昨日ほどは光らず。理學士掌に載せてためつすかしつ見たりしが、膽を消して驚き、叔父さま是は大變、「だいあもん

七千圓にて御不足なきや、兎も角も品物十分御吟味あるべし、と云ふ。佐野平は扨もすさまじき貴婦人、半分にしても十萬以上の者を預けむと云はるゝ大量、千圓の利足と共に結構すぎた話し、とおのが小膽を慚入る時ろばアとは持出したる小箱を開けば中にまた小さき箱ありて其蓋を取れば中よりきらくと光る美しさ、手に取り見るに成程疑もなき金剛石なれど此頃は佛國に「だいあもんど」人造研究會と云ふさへありて段々似よりたる者を作り出すとの事新聞紙上に承知したれば思ひ惑ひて居りしが眞物ならば何よりも堅き筈、贋物なれば我指輪の「とばす」よりも脆からんと內々擦りあはするに、あら無慙や、我「とばす」には痕付きたり。さては愈々眞物、福德の三年目、一周間の中僅に六千圓計りの金動かして千圓の利得。古今無類の質とよろこび、小僧に吩附て金取り寄せ、證文互に確と印紙張りて取り交し、「だいあもんど」は佐野平箱に入れてろばアと封印嚴重になし、是にて一切用濟みたれば貴婦人と同室に洋食の相伴結構づくめなり。

其　二

佐野平家に歸れば相應なりと今までは誇りし店藏遽に汚なく思はれ、色の白き丈けは取り所と昔は悅んで迎へし吾妻の顏見ともなき程黄色にて鳴鹿館の立派なる貴婦人のあてやかさ目に殘りてあり難く、まづは土藏の奥深く大丈夫の弗箱の中に寳物を收めても何となく心いそくとして寢られぬ

も金圓はまだ御落手にならず、頻りに焦ち給ふ所、佛國人何がしも右の品々見て先約のあるを殘念がり一萬圓までは即時に出すと付け上げたれば、駿河屋も慾に傾き、どうか此方の相談ばれゝばよいと期日を指折りて數ふる樣子。此方は女性の心せまく急なれば寧の事公使館に譯を話して暫時たてかへ貰はんと仰あれど、さうしてはあまり、同國人中に聞えもよくなき事とまづ〳〵御とめ申し、從者のろばァと工夫に及びそなたを御招き申せしが、なんとそなたは東京に名高き質屋、内々にて六千圓御貸し下さるまいか、勿論馴染もなき事なればきつとした質物はいれまする。と云へば佐野平思案なし、六千圓といへばまづ容易ならぬ大金なり、油斷はならずと氣をしめて、それは御尤なり、買ひ掛りし品物の人手に落んとするほど業腹なる事なきは我等もたび〳〵身に覺えのある事。されど商賣の義なればまづ御品物拜見の上にて左も右も。と挨拶す。通辭とろばァと何やら話して、なる程御道理なり此方に一萬二萬の價する者幾箇にてもあれど爲替も明日明後日には着く筈。僅に一兩日の間なり。殊更實體と評判あるそなたの事。大切の者を預けても仔細あるまじければ汝安心の爲に分外の者ながら「だいあもんど」の胸かざり一つ抵當としてまゐらすべし。是は直徑五分ありて英國女皇の持ち給へる者より四番目の大玉とて世界に知られたる者なれば十萬二十萬の價にてはきかざれどほんの一二日の間故御預け申すなり。併し嚴重に用心して明日にも金圓御返却致す節はゆめ〳〵まちがひなきやう戻さるべし。元利とも今日より一週間内に御渡し申す積りとして合せて

る洋服着て悠然と椅子に掛り給ひたる貴婦人櫻色の御顔美しく、御胸のあたりにきらめく飾り、御腕にはめ給へる輪には何を鏤めたると一々云ふまでもなし、瑠璃硨磲瑪瑙琥珀珊瑚眞珠黄玉碧玉紅寶石猫睛石鷹睛石譯も分らずめちや〳〵に輝き渡り、釦鈕にさへ拇程な薄色の柘榴石巧みに細工したるを付け給ひたる御ありさま人間の奢りとは見えず、日本の畫工がものしたる天女よりも遙にまさりて、是は是はと佐野平は下げたる頭あがらず、己がはめたる金無垢に豆計りの「とばす」の指輪今さらはづかしく、却てかくす氣になるも尤ぞかし。御つきの男もいやしからぬ風體にて靜にぺろ〳〵と何か談せば通辯の者佐野平に申すやう、「是なる御方は外國の尊き御身分。此度世界中の公園と仇名ある日本に御漫遊、まづ神戸より上陸られて京都の名勝、奈良の美術に御物數寄の心をとゞめさせ給ひて暫く御逗留ありしが、十日前此地へ御出にて、あちらこちらの御見物も大概果てゝ是からは日光にでも行かれんとなすつたところ御好の事とて丁度一週間前の事本町の駿河屋にあり し巨勢の金岡の密書の大幅を初めとし古土佐の描きし屛風探幽應擧の筆の跡なんどより近くは容齋北齋まで合せて廿五點の稀有の畫幅ども痛く御意に入り、是非にほしきとの御意なれど京都にては織り物陶器奈良にては古彫刻物など既に最早一萬圓程の御買物、今又七千圓といふ直に萬事足る御身にても旅の空に事たらず、一千圓を手附けにして跡金今日までに間に合はす約束を定め、電報飛して御國許へ電報爲替するやう云ひやられしが、數千里を隔てゝの事、昨日差し立たと返辭は來て

是は〳〵

其一

二頭曳の蠟塗馬車掛聲勇ましく天下の大道を我物顔に馳せ來りて佐野平の店前にとまりぬ。洋服きりゝとして氣のきゝたる樣子の小男手紙を出して御主人にといふを伴頭受け取りて見れども蜘蛛の巣の嵐によれたる如き西洋文字分らばこそ。主人も當惑のあたま搔き〳〵裏口より小僧走らせて近所の下宿屋に居給ふ何がし學校の敎師さまに讀んで貰へば、此馬車に乘りて即刻來らるべし鹿鳴館にて何〳〵國の伯爵夫人從者ろばアと、とあるよし聞て何の用やら知らねど、人間の極樂喜見城かと思ふて居た鹿鳴館より馬車で御迎へとは質屋開闢以來まだあるまい、同業へ對しても名譽な事と急に着物着かへて足袋まで新らしきを穿き、時計も金の方を帶びて小僧一人めしつれ、馬車に乘れば、一と鞭あてゝ駈け出たる心よさ、顔にそよぐ風も今までとはちがひて、仙人となつて靑雲の上をあるかばかうもあらうと嬉しげに見下す往來の向ふより知人の來りてけゞん顔しながら挨拶するも面白く、鼻の先に高慢ぶらさげ、さま〳〵の事思ひつゞくる内に山下町へ着き、案内に從ひ綺麗びやかなる所幾間か打すぎておづ〳〵しながら一と際見事なる部屋に入り見れば、眼も眩むばかり立派な

枕時計は三時を指し、洋燈暗くして夜は沈々たり。夢覺めてより眞也はまた睡り得ず、そのこと彼のことを思ひしが、墓參の人のわりしをもて、其日はおそらくは忌日ならん、來月の其日思ひ出さば、我も一炷の香をなりと供せんと、おもひ寐に終に睡りたり。其の翌月來間は鹿山の墓を訪ひしが、例の男にまた逢ひたり。其翌月もまた逢ひたり。終に來間は彼の男と語を交ゆるに至りて、鹿山の上彼男の上、さま〴〵のことを聞くを得つ、眞情ある一人の友を得るの幸福にあひぬ。

（をはり）

は今の勝に心勇めば、彼方は今の敗れに氣を激して、さあ今度こそ勝負〱、おゝ左樣とも左樣とも勝負を付けやう、と彼方も此方も乘り地になつて、また少時譯も無く引組む中、彼方が差手を拔きて組みかへさんとする途端、我が袖彼が手に卷きつきやしけん、勢にかゝつて我が袖付はびりびりといと大く破れければ、此音に我も驚き、此事に彼も萎みて、互に面を見合せ、無言となりて、今更汗をかき居たりしをおぼゆるばかり、我は家に歸りて叱られんことの恐ろしさに、由無き遊びを爲たりしを悔ひ、彼は他人の衣を裂きし氣の毒さに、紅き面を一ト層紅くして何をか默して考へ居しが、其日學校果てゝの歸るさ、彼は我に隨きて吾が家まで來り、吾が母上に對ひて一部始終を語り、來間さんに少しも惡いことは無いのですが、全く私が不注意から飛んでも無い過失を仕ました、どうか何處までもわたくしを御折檻なすつて、來間君を御叱りなさらないで下さいまし、と罪を被て云ひ出づれば、眞也の母は點頭て、吾子を叱らざるべき由を言きかせ、菓子など與へて歸せしのち、あゝ賢い兒ぢや、確乎とした兒ぢや、眞也汝は好い友達を持つて居やる、と頻りに褒めたり。吾が朋を褒められて心嬉しく、御母樣、それなら彼の兒を復呼び返して最少し遊んでもようござりませう、と草履つゝかけ走り出てしが、四五間駈くるか駈けぬに物に躓きてよろ〱と倒れかかりてはツと驚き、身を扇骨木籬に支ふる途端、其籬の內を不圖見れば、角形なる碑の表に鹿山弦之助の名あるに慄然として眼覺むれば其昔時に在りし事實と今日の事とを合はせて見たる夢にして

昨日の母との談話などさへ取り合はせて其夜は心の中に思ひつゞけつゝ、眞也は終に睡りにつきぬ。

其　六

さあ來い、鹿山、一番負かしてやらう、と仁王立ちになつて張肘して挑めば、何だ、乃公に投げられてまた泣かうと思つて、と云ひながら、のそりのそりと、眞の力士めかして進み來る其眼は涼しく笑を含みて、紅色の顏、黑き髮、畫がける金太郎を見るが如し。誰が汝に負けるものか、汝こそ泣くな、と罵れば、其聲いまだ終らざるに、突然むんづと組んでかゝる、どつこい左樣は、と突き放して、此方の好くやうに組まんとすれば、彼方も自己が好くやうに組まんとす。此方が狂へば彼方も狂ひ、彼方が暴るれば此方も暴れて、組んづ解れつ爭ふ中、如何なる機會にか脚を搦められて、ばたりと仰向に倒されしが、早くも彼は手を取つて扶け起して塵を拂ひ、何處も痛くは無かつたかと、言葉優しく問ひくるゝに、實は腰のあたりの痛からぬにあらねど、痛さも別に心に留まらず、なあに痛いところなぞは有りはせぬ、さあ今の讐、もう一番と、再び武者ぶりつけば直ス應じて、彼方もゑいやと捩ぢ返す。小狗の狂ひ廻るが如くに少時互に揉み合ひしが、此度は彼の頸に工合よく我が腕のかゝりしに、力をふるつて一と振り振つて放せば彼は敢無く地上に轉び倒れたり。此方

と書籍とより智識と思想とを得たるとは差ひて、其の實踐躬行より堅實の智識と思想とを積み、自己の勞苦を以て自己を支へ且つ長ぜしめたる經歷及び病死か否か知らねど其死に至りしまでの事情は、尋ね問ひたきことにぞある、幼かりし時の彼が才は、我に比べて優れりといふにあらず、却て我こそ彼がために折々は數學の難問をも解きて遣りなどせしこともありつれ、其の心の剛にして小からず、屈辱を事ともせずして爲さんと欲することを爲し遂げ、しかも飽まで我に親切なりしは、或時我を憎みて某甲等三四人の心を合はせて學校よりの歸るさに我を撲ち仆しけるに、身ひとつにして我がために彼等と鬪ひたることのありしを思ふにつけても今に忘れ得ず、彼は家貧にして豆の如き短き鉛筆、さゝらの如き禿たる筆をも猶棄てゐへぬこと常なれば、我は數々彼がために一對買ひたる筆の一枝を贈り、一本買ひたる鉛筆の半分を與へけるに、其度每に嚴然として禮をいひたる彼が態度の眞面目なりしさまは今も眼に在り、嗚呼三四年前までは、如何なる人も皆友とすべしと、我が年若かりしまゝに思ひ居たれば、朋友とすべき朋友をも重くは視ず、朋友とし難き朋友をも吾が朋友として視、可惜幾個の佳き友を等閑にして、喩へば後園に名花と雜草とを一列に看做したる果は牡丹芍藥の種を失ひて馬蓼商陸の類のみの茂れるにあひたるが如き狀況を今は眼のあたり見るに至りたり、鹿山の如きは幼き時の友なれば、年長けたる今の眼にて見ば、如何なる男なるや知るべからずとはいへ、思ふに比類少き好き友なるべきを、生死さへ知らで過ぎ來しは愚なりけりと、

認めしより、そゞろに昔時の懷かしく、彼今在らば如何なる男にかなりて居るらん、彼の小學に在りしほどは其家極めて貧しくして、老いたる父一人彼一人のほかには人も無き生活なりしが、如何にして谷中の墓地に屍を埋むるまでには志を得たりけん、彼の父は力無き態に老い枯びたる痩せ男にて、鋸の眼立てを業とするより、晝間は太抵某所の普請場彼所の普請場と某の大棟梁に從ひて盛んなる工作場に至りては多勢の鋸を磨る由にて、彼が學校より歸る時は、家に火も無く人氣も無く、貧究の心易さには奪らるゝものも無しとのことにて戶締りさへも無かりしなるが、別れての後十餘年、二十年にも近ければ、三日見ぬ間にも變る人の身の如何ほどのことを成し得たればとて怪み訝るべくはあらねど、能〻も彼の如き墓地をさへ占め得るまでに發跡しことよ、世には同名異人もある習なれば、若くは異りたる人にやあらん、墓參の人のありしまゝ詳くも見て歸りたるは、おもへば聊か拙かりし、人の見えしこそ幸なりつれ、就いて問ひ糺しゝすべかりしを、物怯れする女めきて急ぎ戾りしは不覺なりけり、我が彼に別れてより二年ほど後のことなりしが、車にて偶然彼が住みし町を過ぎしに、其時は既彼が家の在りし姿は面影も無くて、其處には新しく大なる長家の立ちたるを眼にしたりき、彼の父は多分死せしなるべし、彼の墓の主にしてまことに彼ならば彼は自助論の中の人々の經歷の如き酸苦を甞めて貧困の中より崛起せしなるべく、我が平々凡々として變化無く奇處無き一條の坦路を步むが如くに、母の手より學費と衣食の世話とを受け、學校の敎師

十一二歳の頃、交情好き學校友達手を取り連れて、運動場の中の小丘の上にて小な將門純友の氣ばかり強く、君は陸軍大將になる積りか、乃公は總理大臣になつて見せるなど〻、當も無き大言を吐き散らし、手をたゝいて愉快と叫びしも、其後は離れ〳〵の渡り鳥、一つ枝に止まること無くなりて、互の間は雲隔たり霞鎖しつ、何處に何をして居るやら知らず知られずに居たりしに、不圖あるところにて幾年ぶりに出會つて見れば、一人は徵兵に取られし由にて、むかしは色白なりしが眞黒な日向臭い男となり、一人は學校を順に渡つて大學を出拔けるまでをもどかしがり、いろ〳〵に踠き廻つた末は辨當壯士に落魄れて、醉ふては枕す古雜誌、醒めては握る空拳骨の身の上、是は〳〵と互に眼を見合はすが當世有り勝の實地小說なり。眞也と鹿山とは、九歲十歲のいたづら盛り、筒袖の着物に瀧縞の袴穿きし頃より睦まじく、同じ先生に小學の教を机ならべて授かり、算術に答を得るの速きを爭ひ、讀書に字を識るの多きを競ひて、學問にも離れ難き思ひをなせば、遊戲には猶更相撲取りにも走り競にも、彼無ければ我おもしろからず、我無ければ彼樂まずして、一時は喧嘩して怒り合ひても、忽ち笑顏になりて近づかずには居られざりし仲なりしが、小學校の業を終へし後は、たゞ一度彼の家を我より訪ひ、又たゞ一度我が家に彼の來りしのみにて、それより、何時と無く遠ざかり、彼方は何事を爲しか知らず、此方は尋常中學高等中學と次第〳〵の學事の忙しさに紛れて、忘るゝとも無く忘れて過ぎしに、今日圖らずも其名をば、問へど答へぬ一塊の頑石の上に

ろと躓きて路の傍の例の扇骨木籬に倒れかゝりぬ。幸にして自ら支へければ、倒るゝまでには至らざりしが、首を突込まぬばかり籬に近づきし時、圖らず中を覗き込みて、鹿山の文字眼につきしかば、世に少き此の氏を名乘るものゝ其昔の我が幼き折の友にありしを思ひ寄せて何の氣も無くよく見れば、こは思ひもかけず此の小なる角形の碑の表に彫られたる鹿山弦之助の名こそ即ち眞也が幼き時の友の名なりけれ。眞也はこれにハッと驚き、ヤ、鹿山君、君は此所にか、とばかり胸の中に思ひ起す其の紅き顏、肥えたる身躰、美しかりし眼の光り、小學校卒業以來交情絕えて終に便を聞かざりしが、今日こゝに娑婆と彼世と相隅てゝ會はんとは思はざりしと、茫然として自失する折、黑の洋服を着けたる男の年は二十七八と見えたるが、線香と花とを持ちながら、花屋の男を從へて悠然としてこゝに來り、眞也の立てるには氣も留めず、男を差圖していと懇に鹿山の墓を掃ひて香花を供しぬ。眞也は猶も籬の外に立ちて、鹿山と自己との其昔時互に幼かりし折のことなど思ひつゞけしが、いつまで斯くてあるべくもあらず、且はまた人の怪み思はん手前もありと、見返り勝に其處を去り、上野の公園に一ト遊びして、盡日の運動にいと滿足し、やゝ疲れをさへ覺えて家に歸りぬ。

其　五

息茶屋のたゞ一軒客を待てるに少時憩ひ、文明の利器のいと忙しく幾度か往來する汽車の煙の空に消ゆるを故も無く迂濶見やりなどして、やがて訪諏神社、花見寺と過ぎ、咲き後れたる躑躅花の色の憎からぬを愛て、植木屋の植溜に花柚の匂の早くも迸るを驚き、横に折れて谷中の墓地を上野へと出でんと歩みぬ。

其四

谷中は一躰に陰氣のところなれど、天王寺の墓地はことのほか陽氣のところなり。古き新しき墓の數々、いづれ哀れならぬは無けれど、打見たるところ立派ならぬも少ければ、死して玉籬のいかめしきが中に、群鶴が彫の一六の書の誰やらが文章と贅澤ぞろひの碑の立ちたる、亡者が本望左こそと可笑しく、こゝを通るたびに、張店の女郎が金絲銀絲の繡せし縮緬天鵞絨の裲襠に誇るさまを見るやうな心地すると、然る人の云ひしは些酷けれど、いづれの奥城も、まづは貧者のならざれば、榮耀の仕納めと氣張りこんだる扇骨木籬、鐵柵、石圍ひ、煉瓦圍ひなどの中、見る眼も清らにして、雲突くやうなる仙臺石御影石なんぞの碑の立ちたる、哀れ氣よりは自慢氣勝ちたれば、陰氣よりはまづ陽氣なりといふべし。されば眞也もこゝにさしかゝりしが、別に無常を觀じやうでも無く、名ある人の碑など彼方此方を見廻はしながら、上野の方へと抜けゝるが、何にか足を取られてよろよ

取らせて立上り、伊井には關はず其處を去りたり。

其　二

あゝ面白くも無い今の風かな、伊井のあの態は何事ぞ、彼一人を兎角云ふべきては無いが、滔々として皆あの通り、定めて彼めも此の我を後では偏人の金兜のと彼女と共に嘲つて居るであらう、片眼のものが多ければ眼の揃ふたものが妖怪と云はるゝ道理、酒を飮んで、賤しいものに狎れるのが、世間一般の風になれば、物堅く律義に日を送るものは、偏人の、わからずやのと云はれるのも少しも不思議は無い道理、何たるあさましい此頃の風であらう、眞面目な話をすれば人が究窟がつて寄りつかぬとは、思へば情無い友達ばかり、孤立の姿になつて仕舞ふて、朋友さへ尋ねて來るものが全く無いので、母樣が心配まで仕て下さるほど、然し今會ふた伊井のやうに學校にゐた時は何も出來ずに、他人ばかりを力にして一時を糊塗し、どうにかかうにか卒業を仕た揚句、もはや一切の書籍を棄てゝ机の前に坐ることなどは夢にも無いほどに增長して仕舞ふ彼樣な輕薄な修業氣の無い人間は朋友に持たいでも憾は無い、下らぬ人間に遭遇して折角の興を敗つて仕舞ふた、これから道灌山日暮里と段々に歸路を辿らうと、まだ酷しからぬ日の光を浴びつゝ徐に道灌山にさしかゝり、田圃つゞきの廣き眺めを脚下に見ながら東へ進みて、大鷲神社あたりに晝餉を濟ませ、崖に臨みし休

かゝるところを擇みて遊びに來れるほどならば、今少し打治めて物靜にもなすべきを、花の木陰に醉ひしれて賤しき際の男女のするやうなる振舞をなすこと片腹痛しと、眞也は少からず興を取りければ、面を背けて其方を見ず、食ひたしとも思はざる干菓子など摘みてありけるが、程經て何心無く振り向けば、恰も我が前を過ぎんとする彼の人々の一行に間近く面をあはせたり。これはと驚く此方より彼方は早くも聲をかけて、や、來間君でしたか、これは、これは、珍しいところで御目にかゝりました、御散歩と見えますが、どうですこれから我輩と一所に御いで下さらんか、實に奇遇といふものです、こゝで御目にかゝらうとは思ひませんでした、是非一盃を酌まずんばあるべからずです、と言葉も書生風の、オイ君一盃やらうぢやないか、といふ調子は全く無く、妙に落付いて氣取つたる物の言ひやう、身のこなし、頭から人を呑んでかゝる男の然も紳士らしき取り廻しは、つい過ぐる日まで級中第一の不成績者の名を負ひたる糊塗專門の伊井某とは、知らぬものゝ眼よりは見えぬなり。もとより此の男を好かぬ眞也の、今日はことさら紳士めかして、いづれ父兄の金の光りを身に添えて誇る一時の榮華に、見れば媚を賣つて世を渡る女を自己が妻めかして、かゝるところに戲れあるくを見て、何とて惡み疎まであるべきや、手持無沙汰に立てる女等を尻眼にかけて、此方は飾らぬ書生氣質、大した遊びを君は爲るね、僕は酒を酌むのは御免かうむる、君は君の自由に遊びたまへ、僕は僕だけの遊びやうがある、今日は失敬する、と云ひ切るや否や茶代を媼に

て來り遊ぶも多かれど、今は間の時節とて杖を曳く雅客さへ乏しければ、衣香扇影の煩さからぬも却つて好ましく、翠の絹蓋を張りたる如き楓の若葉の、清き流れに臨める風情など、錦の紅を織る秋の眺めとは、又異つたる趣きありて、塵立たぬほどの風の、淙々と鳴りて響く水面より吹き起る心よさ、初夏ならではと思はるゝ妙處も無きにあらず。さらぬだに菖蒲見の俗を厭ふて、花無き里を撰み來しほどの眞也なれば、此の清新幽閑の狀を眼にして、ひそかに自己が遊びどころを擇みしことの拙からざりしを誇りて我から滿足すること一ト方ならずとある綠陰の掛茶屋の牀几に腰を下して、詩をも歌をも作りこそせざれ、詩にも歌にもなるべき想を、獨り胸の中に描きつゝ、莞爾として微笑むこと亘久しく、媼が汲みて出す澁茶を受けて、しばらく時を移したり。かゝる折しも不圖眞也の眼に入り來れる男女の四人ばかりの一ト群あり。距離近からねば詳しくは知るべくもあらねど、いづれも當世の粹を拔きたる衣服など着飾りたるならめ、男の黑き羽織、薄色の着物、其妻にやあらん若き女の立派に强ばりたる帶、しなやかなる衣服、形の好きさし傘、其女の妹ともあるべき娘の紅き色など見えたる華美なる衣裳、美しく大なる簪、艶やかなる塗下駄、下婢とおぼしきやゝ老いたる婦のそれさへ見にくからぬ樣したる、いづれ富み榮ゆる人の遊行とは見えわたりたれど、其衣服形態の上びたるには似ず其擧動ははしたなくて、何事をか高聲に笑ひさゞめきながら、彼の娘は迯げ走り、彼の男は追ひ縋りて、狂ひ騷ぎつゝ此方へ來れり。ことさらに心有り顏に

といふやうな議論をする人もあらうから、汝は華美な交際が厭ひなら厭ひて可けれども、他人のことを悪ういふには當らぬこと、強ち書籍ばかり讀んでゐるのが修行とは定まらぬ、學校に居る時は何時も何時も上席を占めて居たものが、世間へ出てからは一向役に立たいで、つまらぬもの丶後へついて居るのも、よく有る例で、汝も定めし知つて居やう、何事も實地を煉らないでは強いことは云へぬもの、同じことならわたしは又、汝が最少し踏み出して、朋友交際も人並に仕て、家へもいろ〳〵の氣風の人が往來するやうにあつて欲しい、しかし其も此も汝の氣性の好かぬことならば仕方は無い、固いのはどこまでも結構なれど、胸を濶く持つやうにあつて欲しい、明日は兎に角、汝の好きに、一日を快く遊ぶが好い、と云ひさしてそれよりは餘談に移り、心の置けぬ水入らず、母子は睦まじく今昔を語りて折々打笑ひぬ。

其二

其翌日空美しく晴れて鳥雀爽やかに鳴き、朝風そよ〳〵と吹渡るが中を、薄羅紗の洋服扮裝輕々と、棕櫚竹の細杖をつきながら、御母樣行つてまゐります、を云ひ捨てに、我が家を出でたる來間眞也、堀切四ッ木にも向はずして、紅葉の秋こそ人は問へ、今は立寄るものも無き王子瀧の川を心ざして本郷通りを進みたり。眞夏はまた木立の深くして流れ河の水の音するを悦ぶ人々の、納涼にと

わたくしはこれを不足には思つて居りませぬ、畢竟わたくしが馬鹿になれぬので馬鹿な朋友が離れ、わたくしが墮落をせぬので墮落した人々と遠ざかるまでだと思つて居ります、御母樣の前で面白半分に片意地な理屈をいふやうですが、なあに當世の朋友を得やうとおもへば、少し無益な酒を飲みさへされば、招かずして朝夕に家の前へ人力車を寄せさせることが出來るのです、それゆゑ其樣な朋友を敢て欲しいとも思ひません、それはたまくの散策に一盃を水の邊や花の傍の酒樓で酌む位のことは可いですが、此節ではわたくしの朋友等に二三年前のやうに淡泊な書生風の氣を持つてゐるものがありませんから、皆増長して紳士氣取を遣つて居ますので、それからろれと何樣せ碌なことにはなりは仕ません、落つるところは下劣な娯樂を取るに至る段階子の其第一階に其無邪氣な一盃も用ゐられて仕舞ふのです、かういふ態ですからわたくしは一人で澤山です、別に誘ひ合はさうといふ朋友もありませんから、明日は一人で出掛けませう、と未だ世に揉まれぬ若々しき心の圭角を有りのまゝに掩ふ氣も無く打出して母に聞かせつ我賢しげに、澁茶を啜りて息をつきたり。母は我が子のいふところを笑ひ片頰に聞き居たりしが、汝のいふのも無理は無けれど、汝が墮落くと一ト口にいふ其の交際の間にも、人々の智慧分別は又おのづから磨かれも礪がれもする場合がある、學校を出ても其儘に書齋にばかり籠つて居ては、何時までも何も解らない御坊ちやんで、世間に顏の出せぬものになつて居なくてはならぬ、第一書籍ばかり讀んで居たとて何が眞實に解るものか、

谷あたりの料理屋を肥やしたり、池の端の小待合を潤したりするのに過ぎぬ痴態を盡すのです。ですから學校に居る中はまだ可いですが、學校を出てからといふものは、心よく交際ふて居やうならば、飲食といふもの丶ほかには交際も無いもの丶やうに思ふて居るものばかりの間の事なれば、わたくしも既大分に無益な水を飲んだり無益な音を聞いたりするために、自分の働きでこしらへたても無い金錢を費して終ふて、今頃は御母樣の御叱りを頂戴して居る時分かも知れませぬ、かういふありさまでござりますれば、學校を出る頃からといふものは、わたくしは成るべく心を用ゐて、人人一統の墮落の習慣に仲間入りすることを避けて、眞面目な主意のある會合の席のほかには出ないやうにして居りますと、どうです御母樣淺間しいではございませぬか、大勢がわたくしのことを偏人だの畸人だの僞君子だのと申しまして、自然に往來するものも無いやうになりました、わたくしは全く仲間外れの仙人のやうにされて仕舞ひました、たゞ今御母樣の御言葉にも、若や偏人のやうに扱はれては居らぬかと御心配の氣味合もあるやうに聞こえましたから此樣な要も無いことを申し上げるのですが、かういふ風でござりますれば、わたくしは却つて當世風の交際は爲ずとも宜いと思つて居ります、孤立と獨立とは違ひますから、わたくしだつて孤立になつて朋友も無く日を送るのは決して好みは致しませんが、周圍が周圍ですし、習慣が習慣ですから、とう〳〵今では孤立になつて終ひました、仰ある通り偏人あつかひにされるやうになつても居りまする、しかし御母樣、

か近頃は家へ朋友を連れて來たことも無いほどなれど、まさかに性の合ふた朋友が一人も無いといふでもあるまい、誰ぞ氣に入つた朋友と連れ立つて遊んだら好からうでは無いか、と何處までも氣の捌けた言葉なり。それでは御母樣の仰やる通りに、晝餉はそこらの酒樓で爲ることゝして、誰某を誘ひ合はせて同伴に仕ませう、と大抵の息子ならば悅んで應ずべきに、これはまた何處までも氣の伸びぬ眞也は律氣に遮り止めて、御母樣が御出にならぬのは餘勝手ですが、それでは、わたくし一人で酒樓小屋に入るのも却つて厭ですし、一躰わたくしは左樣いふところへ立入るのが大厭ひですから、辨當をこしらへて持つて行きたいですが、それも却つて手數です、お桂を遣つて横町の西洋料理屋でサンドウィッチをこしらへさせることゝ仕ませう、なまじひな朋友があるよりは、一人の方がようござります、御母樣は御存じ無いでせうが當時なか〳〵益になるやうな朋友は有りは致しません、まづ學校を出るや否や、大概のものは何とか彼とか口實を設けて父兄から出來るだけの金錢を徴發して、やれ卒業の祝宴だの、慰勞會だの、懇親會だの、誰某を送るにつけての集會だのと、名はさま〳〵に異つてこそ居りますれ、其實は酒食を事とする會合ばかりを仕て、わい〳〵と騷ぎ廻るのが例になつて居て、其仲間にならぬものは交際をせぬといふ風です、ですから學校を出て一年ばかりの間に共墮落に墮落をせぬものも無い位で、互に連印を仕合ふて利の高い金を借りるやら、出るだけの智慧を絞つて父兄や親戚の懷中を傷める工夫をするやうにして詰まるところは下

して壽命の延びるやうな心持がする位、汝もまた外へ出て見たら内に居てはおぼえぬ樂さを味ふこともあらう、明日は日曜なり天氣も好さゝうなり、朝からいづれへなりと氣の向いたかたへ遊びに出ては、と有り難きは親の諄いほどの慈悲なり。世の風に揉まれぬ心の、ひがみといふもの更に無く、若竹の節目だゝずに、すらりと育つたる眞也は、いや、田圃道野道の景色は、わたくしとても好かぬではござりませぬが、つい眼の前のことにばかり氣を取られて居て、今の時節のあたら心よい眺めを餘所にして居りました、實は今日あたりは温氣のせゐてか何となう退屈も仕ました位、明日はそれては仰ある通りの氣の藥を少々用ゐて見ませう、ハヽヽ、ハヽヽ、併し御母樣も御出かけなさつては何樣てござりませう、お桂ひとりの留守番でも、さして不要愼のこともござりますまいから、どこぞ御氣に入りましたところを御撰み定めなさいませ、さうすればわたくしも其處へ御ともを致しませう、と親が親なれば子も子にて、今時の若いものには珍らしく、いと美しう答ふれば、母はひとしほ機嫌よく、それでは明日は一日遊ぶがよい、割籠の準備も仕てあげやう、いや併しこれは些むかし風で氣に入らぬことであつたか知らぬ、當節は世間が便利になつて、どこにもそこにも、一寸したところにも仕度をさせる家位は有る、わざ〳〵辨當にも及ぶまい、わたしも一所にと言ふてお呉れのは嬉しいが、なまじ汝の足手纏ひにならうより、妾はわたしで別の日に自分の好きに仕て遊ぶと仕ませう、若い人は兎角若い人同士が、談話も合へば氣も揃はう、一躰汝は何樣いふもの

ぞは年寄の意氣地無く、ともすれば睡うなる此頃を、若いとは云へ能う汝は書見ばかり仕て居て根氣のつゞくことぞ、好きてすることゆゑ止めだてはせぬが、餘り凝り過ぎては好いことも兎角惡いになりたがるためし、勉強もほど〳〵に仕たが好うはあるまいか、たゞさへ逆上せる青葉時、引籠つてばかり居て腦でも惡うなつては取り返しのつかぬこと、遊びあるきも氣の藥、少しはそなたも世の人なみに、時々の娯みをするがよい、醉ひ狂へでは無けれども心の合ふた朋友同士、たまには酒を酌み交して、亂れぬほどに笑ひ興じ、心を開くといふことも、若い人の間には無くてならぬ筈、汝のやうにおとなしいは、わたしに取つては此上も無う安心なことは安心なれど、おとなし過ぎてまた心配、第一それでは身躰にも惡からうし、世の人たちにも偏人あつかひにされるやうな目にも遇ひはすまいかと取り起し苦勞も仕ます、何が咲いた、彼が咲いた、何處が好い、彼處が好いと、何の新聞でも書きまで入れて書き立てゝ居るのが、汝の眼に入らぬこともあるまい、劇場角力は汝が嫌ひのことなれば强ひては勸めぬが、野遊びそゞろあるきは厭でたまらぬといふほどのこともあるまいなれば、心はすゝまずとも、わたしへの孝行とおもふてなりと、ちと家の外へ出て見るがよい、わたしは年のゆかぬ中田舎で育つたせゐでもあらうか知らぬけれど、頭の上に物の無い大空の下に獨り立つて、黄金色の日の光りを浴びながら、青々とした苗代田に白鷺の靜かに求食るを遠く見たり、麥の穗波の風に寄る中から飛んで出る雲雀の高く揚がる聲を聞いたりすれば、氣がせい〳〵と

夢がたり

其一

花は既昨日となりて美はしかりし春の眺も短夜の夢と痕無く消えしが、咲きつゞく花の數々、躑躅花、きり島、藤、芍藥の噂、いづれも人の心を浮き立たせぬは無きに、しかも眼の醒むるやうな若葉の梢吹く風、ほやりほやりと薄着の肌に快く渡りて、檐端近う燕子の勢ひよく飛び來り飛び去るなど、市中も流石夏の初はよろづの景色いき〲として、日頃は出嫌ひのものにもおのづから籠り居の厭はしさを覺えしむる習ひなるに、生れついての內氣は、明けても暮れても讀書三昧の癖をなしたる來間眞也、年は二十五の面白盛り、學校は去年卒業して、定まる務はまだ持たぬ、遊ぶには持つて來いといふ身分、石佛にも陽炎の此時節、世の常のものならば坐蒲團を蹴つて立つて、屋外のそゞろあるきに羽を伸して遊ばんことを思ふべきに、花飛び蝶驚けども知らぬ顏して、長の日を机の前に坐り込み居れば、親一人子一人の特更いつくしみ深きより善きにつけ惡しきにつけて案じ過す母のお梶は、小婢に茶道具菓子鉢など運ばせて眞也が書齋と定まりたる四疊半の小坐敷に到り、手づから茶を入れて自己も喫しつ眞也にも取らせつ、やゝ笑を含んで言葉も優しく、わたしな

んと欲するところのものを彼の知ること無きの物に托して以て意を叙べ人を動かさんことを冀ふのみ。緣外緣一篇亦復然り。然らば則予の髑髏に於ける蓋しまた一累を加ふるものなり。然りと雖も、其上に君無く其下に臣無く、朋無く仇無きは、これ髑髏の樂にあらずや、纖微の域に洞して恍惚の庭に通じ、寥落たり溟漠たるは、是豈髑髏の德にあらずや。乃ち知る吾が言の喋々たり娓々たること數千言なるも其實一毫一絲もまた終に我が髑髏公を累するに足るあらざることを。それ造物の不仁なるや、人を勞するに形を以てし、人を苦むるに生を以てす。こゝを以て人の造物に對するや賢も不肖も不平怨嗟の聲を發せざる無し。身に疾あるものゝ如きに至つて特に然りとなす。唯髑髏に至つては即ち然らず。既に超然として造物の樊籠を脫して、其の勞苦するところとならざるのみならず、却てまた莞爾として、造物の不智にして自ら勞し自ら苦み、營々汲々として人をして怨嗟せしむるを笑ふに似たり。噫それ既に造物を笑ふ、莊の馬棰を以て擊てる、列の蓬を攓げて指させる、予の加ふるに綺語を以てせる、いづれか敢て我が髑髏公を累するに足るものありとせんや。

お蔭様で昨夜は面白うござりました。と禮をのべ、段々川邊を小川村に出て、温泉宿に入りて、此山奥に入りしまゝ出て來ざりし人なかりしや。と問へば亭主けゞん顔して暫く考へ、不思議の事を問はるゝものかな。オ、去年の事なりしが乞食の女あさましく狂ひ〳〵て山深くの方へ入りし事ありしが日光の方へは行かざりしよし。何所へ行きしかと今に其噂あり。其女の事にや。と云ふ。それ〳〵。其女の樣子知るだけ詳しく語れ。と逼れば老父苦い顔して我をヂロヂロ見ながら、年は大凡二十七八、何處の者とも分らず、色目も見えぬほど汚れたる襤褸を纏ひ、破れ笠を負ひ掛け、足には履物もなく、竹の杖によわ〳〵とすがり、話すさへ忌はしきありさまして狂ひ居たりしが、世に癩病といふものなるべし、其あさましさ何とも彼とも云はれねば、誰も彼も握り飯與ふるだけの慈悲をもせず其女の爲すまゝに任せしに、彼呂律たしかならぬ歌のやうなる者をあはれに唸るを聞けば、世に捨てられて世を捨てゝ。叱々と、覺束なく細々と繰り返しては息だはしく、ハツタと空を睨みて竹杖ふりあげ道傍の石とも云はず樹とも云はず打たゝきては狂ひまはり、狂ひ躍ては打たゝき、瞋恚の炎に心を燒き、狂ひ狂ひて行衞しれずなりたるばかり、其他の事は詳しく知らず。と答へぬ。

○

上は莊子列子の髑髏を假りて言をなせしより、下は俗書の韓湘子嘆骷髏詞一休骸骨草紙の類に至るまで、思を構へ辭を屬するものゝ、枯骨を累するもまた甚多しといふべし。是皆强ひて我の言は

ばならず、浮世を捨てねば安心の道おぼつかなし。さればこそ初は神をも佛をも恨みし也。扨も分らぬ話。イエ〳〵能く分つた話、深山の中にのたれ死せねばならぬ妾等の身の上、浮世の人は眼くらく種々のあはれを悟りながら、情なき妾等の身の上には月日も全く暗く花鳥も全くおもしろからぬを知らず、されば彼若殿に我身を早く任せざりしも若殿の子孫をして我が如くあ淺しからしめざらんとの眞實の心其時の苦しさ推量したまへ。と沈みし調子に答へしが、急に語氣を變へて、ホヽホヽおもしろからぬ長話し最早やめに致しませう。言ふも煩く語るも盡きじ。戀と恨みは隣り同志、これまで〳〵、これまでなりや繰言も。と云ひさして又帽を添ゆる其美麗さ。水晶屈原の醒めたる色ならで瑪瑙淵明の醉へるが如きありさまなり。頓て又かすかに我を見て、あら本意なき夜の短うて可惜明放れなば假初ながらの縁も是まで。君は片科川に浮く花、香に急流に伴つて十里を飛ぶ燕やかに、我は其川の岸に立つ柳、影は水底に沈むで一歩を動ぎ難し。逢ふての喜び別離の辛さ戯けし戀の後朝ばかりにはあらず。といふ時しもあれ朝日紅々とさし登りて家も人も雲霧と消え、枯れ殘りたる去歳の萱薄の中に雪沓の紐續ぎかけしまゝ我たゞ一人にして足下に白髑髏一つ。

さても昨夜は法外の想像を野宿の伽として面白かりし。假令言葉は無きも吾伽を爲せし髑髏、是故にこそ淋しからざりし。是も亦有縁の亡者、形狀の小きは必らず女なるべし。女の身にて此處にのたれ死、弔ふ人さへ無きは悲哀深し、と其髑髏を埋め納め、合掌して南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

玉ひし御姿の跡を慕ひて脱出て、何處ともしらず迷ひあるく眼には幻影をのみ見て實在の物を見ず。あさましく狂ふて此山中に我しらず來りしが圖らず道德高き法師に遇ひ奉り、一念發起して、坐禪の庵を此處に引むすびしより、溪の水嵩增して春を知り、峰の木の葉の飜つて冬を悟る住居。閑寂の中に群妙を觀じて頭を廻らし浮世を見れば皆おもしろき人さま〴〵。慘酷りし昔時の胸の氷碎けて東風吹く空に糸遊のあるかなきかの身もおもしろく、佛も可愛く凡夫も可愛くお前樣も眞に可愛し。天地に一つも憎きものなく樹の間に巣くふ鳥も可愛く土に穴する狐も可愛し。心華開發して十方世界薰ばしくおもしろき唯識の妙理味ひ更に濃く、泥水相分れて淸淨に澄めば天上の月宿る瓔珞經のおもむきもまた愈々面白し。我をあはれと人が云ふもおもしろく我を厭よといふもをかし。お前樣を可愛と思ひたればこそ抱て寢てといひしに厭がられしは愈々をかし。昔時は我死ぬほど人に戀はれてもつらくあたり、今は我死ぬほど人に厭がられても可愛し。一心の變化同じ天地を恨みもし樂みもすることこそをかしけれ。と長々しく語り盡せど我更に其故を悟らず。もし〳〵お妙さま其話しの中の骨となりし行水に散り浮く花の靑貝摺せし黑塗の小箱の中の書置は何事なりしか、其を聞かでは話し分らず。ハテ野暮らしい其を聞くやうでは貴君もまだ人情しらず。其書置讀で後慘くなりしといへば云はずと知れし事、世を捨てよといふ敎訓、浮世を捨てねばならぬ譯をかき記せしに極つた事。是は異な事浮世を捨てねばならぬ譯なし。イヤ〳〵妾等一類の者是非とも浮世を捨てね

と後の一句を殘して血を吐かれし御ありさま。肺病もつまりは戀故、よしや女は鬼なりと箇程まで思はれて猶つらく當るべきや。と半分は恨み半分は怒りて我を引立て行かんとす。我は又身を切らるるより切なけれど愈々剛情に行かじといふ折しも、復車の音して御付の人を後になし、容儀繕ひ玉ふこともなく馳せ入られし上品の夫人。氣も半亂に、お妙さまとはあなたか。我子が今臨終の際、一目おまへ樣を見たしと利かぬ舌を無理に動かしての望み、此通り手を合はせて願ひます是非に來て。と侯爵夫人ともいはるゝ尊き人に拜まれて、心は洪水に漂はされたるごとく、うろ〳〵するを無理に引立てられ、車の上も夢路を辿るやうにて立派なる御邸の中に入れば、人々聲を限りに呼ぶ響、早や切々と悲み泣く女の聲も聞ゆ。夫人は慌てゝ幾間か通り過玉へば、我も煙にまかれて其跡に隨て病室に入りける。見るに瘦枯れ玉ひたる御狀態、今とりつめて危かりしを呼び生けられて母君の顏を見玉ひ、さめ〴〵と泣かるゝ痛はしさ。是も誰故我故と思へば勿體なく消えも入りたきを夫人に押出されて若殿の御側近く參り、我を忘れて涙つゝみ切れず御手を取りしまゝ何の理由とは知らず泣伏せば若殿も涙ながら我を見玉ひて御言葉はなく、握られし手に微弱き力を籠めて我身に幽玄なる働きを與へられたり。其儘我は絕え入りて夢の如くなりしが、覺めて見れば若殿は遂に蘇生らせ玉はず。我は身も世にあられず立歸りてより後其人をのみ思ひてなまじひに生殘りしを口惜く、ます〳〵天地を恨み憤りて狂亂となり、七日の夜、獨り吾家の持佛の前に看經したる時、朦朧と現れ

少しはあはれを汲まるゝたよりともなれかしに持ちて參りしゝ。又是は若殿まだ御病氣になり玉はざりし前の寫眞なるが是も併せてまゐらすべし。御返事は明日また伺ひに上るべし、且は又其折御返事は如何にもあれ。若殿が生命かけてまで焦れし方の寫眞一枚玉はりたし。と云殘して歸りければ老僕又我に色々說諭し、是非に此緣結ばれよ、淺からぬ因緣なるべし。と泣て勸むれど我剛情に承知せねば少しは怒りて立去しあとに殘せし寫眞。見るに氣高く美しき御顏ばせ。いとしさも生じたるばかりか短冊に筆も步み健ならずして

燈火も暗うなりゆく夜半の床に
　こゝろきえ〳〵君をしぞ思ふ

と調も覺束なく記し玉ひしを見て吾魂魄もゆら〳〵となりしが、母君の遺書思ひ出してかゝる貴人に近づくべきにあらず、と翌日も酷く返事させ寫眞も送らず。さて十日程過ぎて吾夜の門に慌たゝしく車を寄せて彼官員轉ぶが如くに走せ入り、眼付さへ常とは變りて淚ぐみながら、つれなき此所の戀れ人め。今日は是非々々兎角の返事に及ばず邸第まで來られよ。若殿御生命今宵を過ごさずとの醫師の鑑定。父君母君我等までの歎き察しても玉はれ。殊に今朝若殿の口ずさまれし一首

厭はれし身はうきものと知りながら
　尚捨てがき…………

ひて、過し日の話纏まらぬ以來、流石活潑聰明に渡らせ玉ひし若殿御動靜ガラリと變り玉ひ、外出も仕玉はず書見も仕玉はて、花にも月にも嗟嘆の御聲ばかり。望み絶えし此世に絶えぬ玉の緒のあるは悲しき事の限りぞ、あるに甲斐なき生命誰が爲にか長らへん、などゝ嘟ち玉ひて次第々々に三度の御食すゝまず。晝はうと〳〵眠り玉ひて夜は寐難に輾轉玉ふ。あはれとは是なりと思ひて御付の者慰さめまゐらせ、愚とはそれなりとさとして父君叱り玉へど、唯々消えなば消えぬべき露の身の散りなば人のあはれとや見ん、つれなき人はつれなからで、疎まれし我こそうとましけれ、捨てばや生命、と朝夕の獨り言。聞きて母君の堪へ玉はず、再度拙者を召して此御使ひ。何卒宜しく御推量ありて、御不足の廉は御遠慮なく申さるべし、一々御指揮に隨ひ申すべければ此戀成就する樣。と情を盡し道理を責めての話し。其時我襖越しに聞いて思はず泣きしが、老僕我に向ひて返事相談する時には又彼母上が殘し玉ひし書置の事思ひ出して唯々つれなくも、緣を結ぶは厭なり、と云ひ切つて數多の人に憎まるゝを關はざりし。此度は最早思ひ切つて來るまじと思ひしに又一月ほどたち、彼人來りて若殿終に浮世をあぢきなく思はれし餘りうつら〳〵と病の床に打臥されて其後御枕上らず。療治の詮方もなく父君母君今は共に最愛の御嫡子に引かされて心弱く、共に御心配のありさま餘所に見るさへ痛まし。願はくは思ひ返してよき返事きかせ玉ふやうとりなし玉はれ。是は若殿御病床の中にて書捨て玉ひし反故ながら戀の切なる事現はれて隱れず。せめては是をだに見せまゐらせて

て誘はれし涙が一滴。是ぞ戀の水上思ひの泉ゆめ〳〵浮きたる御心ならで戀が爲せし探索、其後御名前御住所まで何時の間にか聞き知り玉ひ、ます〳〵焦れて遂に父上の許しを得玉ふ。これによりて兎も角も拙者中にたち周旋の勞を取るべくと今日態々參上したり。内々承はればまだ何方とも御緣談きまりたるにもあらぬよし。何と此話、能々御考へ下さるまいか。媒人口たゝくではなけれど拙者舊藩主の御嫡子。爵位財産は世間の沙汰でも御存じなるべし。殊に先年獨乙國に留學せられて學位も有たせられ、華族間にて行末望みある方。全く浮きたる戲言、大名氣質の我儘なる緣談申し入るゝにあらず。四民同等の今日實以て後々は侯爵夫人と我等もあがめ申すべき所存。戀のはじまりの次第を考へ玉ひても成べくは色よきお返事を玉はりたし。とて歸りたる後老僕は躍り上りて喜び、平常皺びたる顏の其時は光りをなして、我に向ひて緣組承知せよと說き立つ。我一度はやんごとなき人に戀はれたりと聞きてカッと上氣し、又一度は是も男の一時の熱、軈ては褪める色好みの心鄙しと蔑視み、又一度は母の遺書思ひ出して忽ちに身ぶるひ生じ、厭、々、〳〵、々、〳〵、緣談など聞く耳持たずと強く云へば老僕は驚き、是ほど結構な緣談いやといはるゝは片腹痛しと理をせめ言葉を盡して我を諫むれど少しも動かねば是非なく謝絕申して、情知らぬ者とも蔭言さるゝを厭はざりし。されども我其時より何となく二心になりて然程むごくは男を厭はず。むごかりし心いつしか和らぎて髮かたちをも治むるやうになりしが、三月ほど經て又彼何某局長見えられ、我後見に向

憤り佛を憤り、今世に若し正體存さば針の先て衝てやりたきまでに心逼り來りて、道理を見れば何の燈心の繩張り、道理も更に恐ろしからず、人情を察れば高が氷柱に彩色の一時、人情も夢うれしからず、胸中に霜雪寒く殘りて慘らしき觀念絶ゆる間もなくありしが、或日の事、立派なる蠟塗人車我家の門に付いて髯鬚うるはしき官員風の男案内を請ふ。名刺を見れば何某局長奏任一等の御方當世の利物と評判ある人なれば、我後見ともなりて家事萬端取り賄ひし老僕出てゝ御用の筋を何ぞと承まはるに、唐突の參上甚だ失禮なれど傳手の無きまゝ是非なく直に申し入れます。付かぬ事を御聞き申すが當家の御主人御年頃なるに未何方とも緣談の御約束なきや。實は拙者舊藩主の若殿見ぬ戀にあくがれ玉ひて是非にと所望なされ居る譯。と申した計りにては御分りあるまじきが今年の春若殿郊外を散歩せられし折或る墓地を通りかゝり、不圖乞食共の話しを聞かるれば、今歸つたあの娘、器量の美しい計りか孝心のいぢらしさ見えて母親の墓の前に蹲踞りたる儘動き得ず、涙は雨の絶えぬ程泣て〳〵、若い身にも似ず、生命惜からねば早く母樣の御傍に行きたしとの述懷。何と今時珍しい氣立の女ではないか。と一人が云ふを又一人がひつとつて、貴樣今日初て彼娘に氣が付いたか、あれは毎月の事、去年の何月なりしか彼娘の母の此處に葬られてから毎月の命日怠る事なく此處に來てあの通りの悲歎、餘所で見ても可愛想なありさま、殊更今日などは顏も大分痩せて血色も惡し大方家に居ても始終泣てばかり居る事であらうかとの噂。耳に入るより若殿ゾツとし玉ひ

くゆら〳〵とゆらぐ玉緒絶え果てん計りなりしが、夫より愈々浮世を厭ひて。イヤ御話の中途ですが其黑塗の小箱の中の文に記しありし事如何なれば夫ほどまでにお前樣を驚かせしか。マア御聞きなされ。其文に記しありし事をわたくしの口から申すはつらし。扨も我年は十九の春を迎へて空に更け行けば親類の樣に親達と交際し誰彼。我を嫁にせんと我婿を世話せんといひ來るを早くも淺ましき人情の詐僞、盛りは十年の色、用は一時の財貨にひかれての申し込と猜して、一々きびしく家の僕に斷らせ、ひたすら母を慕ひまゐらせ、可哀此身の朽ちよかし靈魂のみとなりて母樣の御傍近く行かんものとわせり、つくづく生命も惜からず、世間に何の樂みなく、讀耽りし數々の草紙も打すてゝ又見ず、男と面を合すさへ忌み嫌ふ樣になりて、蓮葉なる下女共が年若く美しき俳優なぞの噂まで苦々しく覺えければ、自然と自分は髮に油の香も止めず櫛の齒を入れて鬢の恰好氣にするまでもなく、まして前差の鼈甲の斑の詮議根掛に鹿の子の色のよしあしなんどは問ひもせず買しもせず、紅脂白粉はまるで忘れつ、帶に苦勞をせしはむかし下駄に鼻緒を苦勞せしもむかし、羽織の色がどうであらうと着物の取合がどうであろうと一切女のたしなみを捨て、おもしろからぬ心中常に涙を湛へて天地も薄黑く見え花は咲ても萎れたる我、鳥は歌ふても默然たる我、皎々と澄む月に對つても濁り水の我には影淸く宿らず、陰々濛々と寐て起て食ふて少しも何の業なさず、身をじだらくの吾儘にまかせ、神を恨み佛を恨み人を恨み天地を恨みて悶え苦しむ一念增長する計り、遂には神を

き鳴さんともせず。琴の師匠にも忌中に休課たるまゝ遠ざかりて、母様が持玉ひし草紙くさ〳〵に馴れ泥み、有る事無き事かき連ねたる冊子の中に幽なる樂みをなせしが、終に癖となりて彼是見盡せし後は薄雪住吉伊勢竹取或は求め或は借りて三年の中に解らぬながら源氏狹衣にまで讀み至り、其間つく〳〵人情の濃き薄きを考へ世の態の眞實虛妄を記え、むかしより男といふ者のあさましく、意一時なさけ一時、思ひ込は強けれど辛防は弱く、逢ふを悦べど別れを悲まず。媚めかしく佞るへをかしき女を好み、戀を榮華のわざくれ三昧、犬猫の色美しきを愛る樣に女の髮容よきを愛る者なることを悟り、我緣もなき男なれど源氏業平の如き戲け者を憎く思ふ事深く、嫉妬するにもあらねど其戲け者に迷ひ焦れし色々の女どもを齒痒き馬鹿と心の中に思ひけるが、十八の年母樣もまた老の病危くなり玉ひ、兄弟もなき身の氣弱く朝に晩に腹中に泣きながら神佛を賴み御介抱申せし甲斐なく、我亡き後は是を見て一生の身の程を知れと行水に散り浮く花を青貝摺りせし黑漆の小箱を與へられしまゝの御往生。悲しともつらしとも言ふ言葉を知らぬ歎き、漸く御葬式濟して後、彼小箱を開き見れば何時の間に認め置れしやら一通の御書置。是ほどまでに我を可愛う思しめされしありがたさと先づ淚こぼれながら讀み見れば、噫其時の心持今思ひ出しても慄然とする程、恐しさ口惜さ悲しさ情無さ味氣無さ胸惡さあさましさ心細さ。厭といふ厭な心持一時に込上て氷水全身に打かけられたる如く又猛火に眉毛燒かるゝ如く冷汗脇の下に湧きて身ぶるひ止め得ず、氣も暗く眼も暗

聞けば聞く程筋のわからぬ
戀路のはじめと悟りの終り、
其實は皆我が勝手の想

其時お妙は長江を渡る風輕く雲を吹ておぼろにかすむ春の夜の月大空に漂よふ樣に滿面の神采生々と然も柔しく、藍田を罩むる霞あたゝかに草を蒸してほやりほやりと光り和らぐ玉に陽炎立つ如く兩眼の流光ちらちらと且つ嬉し氣に、聞て玉はれ貴下樣。妾幼少より東京に生長て父母まづしからず、家計ゆたかなるにまかせて、露を銀薄の頭簪に何ぞと問ひし頃は蝶と愛られ、風を空色縮緬の振袖に厭ひし頃は花といつくしまれ、浮世に樂み長閑なりし年立ち年暮れて冬を送り春を迎ふる度毎。買つて貰ふ羽子板と共に背丈歲々に大きうなりしが十四の秋父樣圖らず逝れ玉ひしより悲しさ遣る方なく、芝居見る外には泣きたるためし少き身もひたすらに涙もろくなり、果敢なき野邊に一條の烟りを觀じて後は三度の御膳に向ふたびに、父上の平常坐り玉ひし所むなしく明きて揃ひたる前齒の一本拔けたる如く、しよんぼりと母樣ばかり心淋しく、箸持つ力も衰へ玉ひたるやうに召上りながら、我が母樣を見て悲しむと同じく母樣も我を顧み玉ひて、御胸痞へたるや御飯の量少なく白湯のみいたづらに飲して私かに瞼の潤ひさし玉ふに我口中の者の味いつしか消えて奥齒咬みしめしなりに開く事難かりし。われそれより自然と垂籠り勝に日を費やし、平素好きなる三味の色糸彈

神らしき方に近づきたる方外の女なり。然し我凡夫の眼より見れば此女の斯く尊と氣ならんより、耳き配偶を得て市井の間に美しき一家を爲したらんこそ望ましけれと思ふまに〳〵又矚れば、端然とせし御有樣愈々凡界の女の、戀に病み衣服に苦勞し珊瑚の根掛の玳瑁の櫛のと慾にざわつく儔にあらず。御眼の中の清しきは紛紜たる世事を御胸の中に留め玉はざるをあらはし御顏色のあざやかに艶々しきは十分今の境界に滿足して何の苦しく覺さるゝ事なきを示して、且は御口元の締りたるにぞ理非を判き玉ふ智惠敏く居玉ふことも知られける。不思議不思議。

餘りの不思議に堪へかねて我いと叮嚀に眞實を籠て言葉緩く、先程も伺ひたれど歲若きおまへ樣の尼にもあらでの山籠り、如何にも不思議に存ぜらるゝも、一ツは美しき御容貌和じき御心根持玉ひながら、無慙や猪猨の跡多き地所に潛み玉ふを慨かはしく存ずるよりなり。斯く山住し玉ふ其譯苦しからずば一通り御聞せ下されたし。と問へば女ホヽと笑ひながら、此頃うるさく世間に流行とか聞し小說にでも書玉はん御料簡か。よし小說には書かざるにもせよ話しの土產と都の人に齎らし歸らん御料簡なるべし。羞かしき身の上明けて云ふ迄もなけれど、若し人ありて妾の身の上話を聞き一點あはれと思ふ人あらば嬉しき事の限りなり。いて恥を忘れて羞かしき身の上語り申すべし。緣外の緣に引かされて或は泣き或は笑ひし夫も昔の夢の跡。懺悔は戀の終りと悟りて今は何をか匿し申すべき。と云ひつゝ桕を添へたりけり。

すつもり。妾も爐の前あなたの向ふ坐に一夜明して苦しからず却つて心安し。と斯に一切談しの埒明けば我大きに安堵して穴のあく程女の頭上より全體を觀るに一點の疵なき玉のやうにて折から燃ゆる火炎の閃めく陰に隱現する女神。とても其氣高さ美しさ人間の繪師まだ是に似た者も書きたる例はあらざるべし。荊棘の中に鹿は置きたく無く、鶴は老松の梢にあらせたし。目ざましき者尊きもの可愛きもの美くしき者皆其所を得させたきは我人の情ならんと思ふ我、あはれ駿馬は勇士に伴なはせたく、名花の園に蝴蝶は眠らせたし。或歳我旅せし時旅宿の下司拭掃除の時懷中より日本政記一冊落せしを見て心掛ありながら空しく人に使はれ居る其の口惜さ如何ならんと涙ぐみたる事ありし。夫にもまして今此女天晴の容貌むざ〳〵と深山の谷間にある埋れ木の花も咲かせず朽果るは扨も氣の毒。美人所を得ずして榾火に燻ぼり草の屋に終るとはなさけなき天道の爲されかた。男見時を得ねば滄海に入ると同じく、既に見識ありて俗情に遠く風流を解して仙境に近づき居る此女、浮世の塵を厭ひて山中に終らん所存か。さりとては又女の癖に男めきたる憎さよ。女の女らしからざる男の男らしからざる、共に天然の道に背きて醜き事の頂上なり。さりながら女の女らしからずして神らしき、男の男らしからずして神らしきは共に尊き頂上ぞかし。今此女の言ふ所最早女らしからず。女の口より初めて逢ひし我を抱て寐んなど中々以て言へた事ならざるに、然も乳母が幼稚りし我を抱て寐し如く我を抱て寐んと云ひし事若し虚誕ならずば此女は女の男めきたるならで

せし通りおまへ様おやすみなされ。ヲホヽ、ホヽ。又剛情を張らるゝか。夫ならば御一所にか。夫は御免蒙りたし大俗凡夫の我等おまへ様のやうな美しい方と一所に寐るは、小人罪なし玉を抱て罪ありの金言まのあたり。ヲホヽ、ホヽ。おなぶりなさるゝな。何の私が厭なればこそ其様に御逃なさるゝなれ。嫌はれては今更是非もなけれど眞實私の料簡では夜風寒き山中何の御馳走申す風情もなければ、其むかし乳母があなたを抱て寐かして進た時の樣にあなたを緊平と抱て妾の懐中で暖めて進やうばかりの親切。妾も佛菩薩の見玉ふ前に決して淫りがましき念は露もつにあらず。あなたとて一箇の大丈夫初めて逢て抱て寐た女位に心を動かす樣な弱いお方ではあるまいと存じたに御卑怯千萬未練の御性根、今の御一言御戲談ならずば、玉を抱かざる前も小人は小人、妾と同衾し玉はずとも旣に罪ある助倍の御方。ホヽ、是は失禮。兎も角もあなたの御自由になされ妾は亭主の身で獨り寐る事致し難しといふ。我呆れて明きし口塞ぎ得ず。茫然と此女の言葉を聞き、つく〴〵考ふるに人の世の毀譽褒貶を心に留めざるのみか。眼前の我をさへ、見て三才の小兒の如く取り扱ひ、然も悠々として胸中別に春ある悟り開けし大智識のやうなるに益々不審晴れず。ハテ何物の子ならん何物の變化ならん。尋常の婦女とは思へず。抑々如何なる履歴ありて斯く可惜しき容貌和しき心持ちながら山中には引籠りけん。當世の小督か佛か祇王か祇女か。それとも全く妖魔かとそゞろ恐ろしく、さらばおまへ様はおまへ様の御自由我等は我らの自由として我は此爐前に一夜明

ひつ引立つ。大事々々。此妖魔めに一歩を轉ぜられては一歩地獄に近づくと歯を噛み切り身を堅くするに、倘悠然と女は引く。引れじと張る力弱くよろ〳〵と引立られて最早叶はず。ワッと叫びて手を振はらひ逃出せば女追ひ縋りて我袂をとらへ、ホヽと笑ひながら、扨は妾を妖怪變化の者かと思はれて夫程までに厭がらるゝなるべし。ホヽホヽ今少し膽太く心強きお方ならんと存じての親切仇となり却つてお胸を騒がせたる罪深し。眞誠妾は妖怪變化にもあらず。浮世を捨し身のあさましき慾に迷ふにもあらず。兎にも角にも同衾せんと强ては申さじ。今より夜道あるかせ申さば亭主振り餘りに拙く憾み限りなし。先づ〳〵坐り玉へ。と止むるを我又無下に振り切るも恐ろしく、爐の向ふに坐れば女は鉈取り出して立上るに我又々ビクリとするを見てホヽと笑ひ草履つゝ掛て戸の外に出て、丁々と響かする木を切る音。

生木なりと焼かんとて薪取りに外へ出しぞと悟れば漸く安堵して我つゞいて外に出て、燃し木を取り玉ふならば男の事我助力致さんと鉈借り受け、そこらの雑木切り倒して一ト抱へだけ家の入に投込み、戸口確りと風を遮ぎりて對ひ坐れば、女は火を掻起して僅に焚し初め、頓て焚え立ちて暖氣満るを見て、此通り爐に火もあり。妾は愈々獨り起居る事つらからねばサア貴下樣ゆつくりと御やすみなされ。決して再び不束な妾御一所にとは申さじ。ホヽホヽ。膽の小さい御客樣に可惜御氣をもませ申しましたは妾があやまりでした。御心配なしに獨りでおやすみなされませ。イヤ先刻も申

喝。生死一機に迫る一大事。素より道力堅固ならず、戒行常に破れ居る凡夫の我、あさましき心は起さゞるにもせよ長閑なる夢は結び難からん。且は此々眞實に人間か狐狸か。先程よりの處置一々合點ゆかず。よしや狐狸にもせよ妖怪にもせよ。人間の形をなして人間の言葉を交ふる上は人間と見るは至當。其人間と共に眠らん事人間の道理にあるまじき事なり。人間普通の道理にあるまじき事を羞らふ樣子もなく我に逼る女め、妖怪と見るも又至當ならん。妖怪に向つて我何をか言はん。小人は謹愼の禮を以て來り惡魔は親切の情を以て誘ふ。扨こそ〳〵こざんなれ惡魔め。鐵拳は模糊たる人情を存せず眞向より打て下して乃公が力量の恐ろしさを知らせ呉れんか。噫それも賴み薄し。我不動明王ほどの强き者にもあらねど、魔は却て梵天を攻めし摩醯修羅の力あるかも知れず。水を拍ちて飛沫を浴び草を打て蛇に會ふは拙き上の拙き事なり。如何に答へん何と爲ん、ア、思ひ付たり昔は芭蕉も女に袖を捉へられし事あるに彼默然として動かず、女終に去らんとする時芭蕉却つて女の袂を捉へ、こちら向け我も淋しき秋の暮と一句の引導渡せし由、小耳に挾んで聞覺えたり。我又好し〳〵芭蕉をまなんで默然たらん計りと漸く一心を決し、胸中には九想の觀を凝らしながら乾坤を坐斷する勢ひ逞しく兀然と坐着すれば女はもどかしがりて握りし手を尙强く握しめ、サア貴下樣何考へて居らるゝ此方へ〳〵と引立つ。引れじ〳〵南無三引れてはと滿身力を籠れば此方へ〳〵サア此方へござんせ、さりとては頑固な御方、山に浮れ水に浮れたまふ氣輕には似ぬ尻の重さ。と戯言云

重かを隔てゝ身の內の温暖みの互に通ふまで密接合ひて我眠らるべきにあらず。共に寢よとの言葉かけられし丈にてさへ身內顫き慄へ、我舌忽ち乾き、我心かきむしらるゝ如く、幾年の修行少しの役にたゝず、胸の浪の騷ぎ狂ひて今遏慾の文一通り口の中に唱へ了りしまでは思慮分別の湧く間もなく、正直の所に腹の中に一點の主意なくなり、婆子燒庵の公案ひねくりし昔時のやうにはあらざりし。況や此美しき婦人と咎め手の無きかゝる山奥の庵中に眠らば中々以て、枯木寒岩に憑る三冬暖氣なしといふ工合に意を收めて寂然と濟まし居らるべしとは思へず。美人今夜若し我に約さば枯楊春老て更に稊を生ぜんとは紫野の大德一休樣さへ白狀されし眞實の所。大俗の我等賢人顏したりとて危い哉〳〵。婦女の居ぬ山蔭ならば羅漢と均しく悟り切ても居らるべし。白い臑見ては通を得し仙人も雲の臺を蹈外して落ちたる話あり。若も久米殿其女と同衾したら多分は底の無い地獄の奧深く墮落せん事必定なり。我今此美しくて心和しげな女と一つ抱卷掛けて枕を並べ、仔細なく一夜を明さんとするとも、背中合せては肩寒し、山里の夜風透間洩りて寒ければ、と我肩に夜着品よく着せ掛けて、此方お向なされいでは兩人の間に風が入りて、と云はれなば愈々むづかしく、萎やかなる鬢の毛我頰を摩でゝ、花のやうな顏我鼻の先にありては倘々むづかしからん。玉の腕何處に置かるべきか猜すべし。扨は愈々大事なり。女猫抱て寢しと同じ心にて我眠らるべきか。叱。若しや夜着の內人の見ぬ所身動きに衣引まくれて肉置程頁き女の足先腿後など我毛臑に觸らば其こそ。

を受く。從前の恩愛此に至つて空と成り、昔日の風流而も今安にか在る。其後悔以て從ふなからんよりは蚤く思うて犯す勿きに胡ぞ。謹で青年の佳士、黃卷の名流に勸む、覺悟の心を發し色魔の障を破らん事を。芙蓉の白面は帶肉の髑髏に過ぎず美艶紅妝乃ち是れ殺人の利刀なり。縱ひ花の如く玉の如きの貌に對するも常に姉の如く妹の如くする心を存して未行者は失足を防ぐべき已行者は務めて早く回頭せよ。更に望む。展轉流通し迭に相化導し必らず在々齊しく覺路に歸し人々共に迷津を出でんことを。首惡既に除き萬邪自ら消し靈報滯りなく世榮遠きに垂れん矣。」どころ覺えの文帝遏慾文を唱へたり。

色仕掛生命危ふき鬼一口と
逃げてまはりし臆病もの
仔細うけたまはれば仔細なき事

年は今色の盛り、春の花咲き亂れたる樣に美しき婦人と一ッ屋の中に居るさへ、我柳下惠に及ぶべくもあらぬ身の氣味惡し。然しながら何千萬人浮世男の口喧しく我を罵り責むるとも、鐵牛角上の蚊ほどにも思はぬ痩我慢の強ければこそ此家に止まりて此女とさしむかひに飯もたべたれ談話も仕たれ。素より人間の批判取沙汰何とも思はざる我も天道の見る前に山中なればとて見ず知らずの女と同衾する事羞かし。否々同衾する事少しも羞かしからぬにせよ。其柔らかき肌近く、僅に衣服幾

に承知させて妾の眞實には露かゝらぬと酷らしうおつしやるか。知らん。知らんとは御卑怯な。サア此方へござれ御一所に臥みませう。妾もあなたの御言葉を立てますればあなたとて妾の一言を立てゝ下さつたとて御身躰の解くるでもあるまい汚るゝでもあるまいに何故さう堅うなつて四角ばつてばかり居らるゝか。エ、野暮らしい。と柔らかな手に我手を取りて瞳も動かさず平氣に引立んとする其美しさ恐ろしさ。我膽も凍るばかり慄然として眼を瞑ぎ唇を咬み切め心の中にて「孽海茫々たり首惡色慾に如くは無く、塵寰擾々たり犯し易きは惟邪淫なり。抜山蓋世の雄此に坐して身を亡ぼし國を喪ひ、繡口錦心の士玆に因りて節を敗り名を隳す。始は一念の差たり遂に畢世贖ふ莫きを致す。何ぞ乃ち淫風日に熾んに天理淪亡するや。當に悲むべく當に憾むべきの行を以て反て計を得たりとなし而して衆怒衆賤の事恬として羞るを知らず。淫詞を刋し麗色を談じ、目は道左の嬌姿に注ぎ、腸は簾中の窈窕に斷ゆ。或は貞節、或は淑德、嘉すべく敬すべきを遂に計誘して完行なからしめ、若くは婢女、若くは僕妾、憫むべく憐むべきを竟に勢逼して終身を玷すを致し、既に親族をして羞を含ましめ、猶子孫をして垢を蒙らしむ。總て心昏く氣濁り、賢遠ざかり佞親しむに由る。豈知らんや天地容し難く神人震怒し、或は妻女酬償し、或は子孫受報す。絶嗣の墳墓は好色の狂徒にあらざるなく、妓女の祖宗は盡く是れ貪花の浪子なり。富むべき者は玉樓に籍を削られ貴かるべき者も金榜に名を除かる。笞杖徒流大辟、生きて五等の刑に遭ひ、地獄餓鬼畜生、沒して三途の苦

持たざれどおとめ申したる時より妾は斯うして夜を明して大事ないと思ひ定めましたれば御構ひなく。それてはどうも。さう仰しやらずと。我らが困ります。妾が困ります。マアお前様御臥みなされ。マア〳〵あなた御寝なされ。其ては際限なし。拙者男でござる。瘦我慢致して是より御暇申す。女性に難儀させて我心よく眠らば一生の瑕瑾母の手前朋友の手前耻かし、夜道まだ〳〵樂な事なり。それ程までに仰せらるゝを背き難し。あなたに夜道行かせましては妾しの心遣ひ皆空となる事なれば御言葉には從ひませうが、それてはあなたに寐床暖めて頂いた樣な者。のめ〳〵と其にくるまつて貴下を火もなき爐の傍に丸寐させては假令ば妾夢に戀人に逢はふとも面白からず。妾も女でござんす。妾一生の瑕瑾持佛の手前はづかしゝ。どうしてもあなたを能うお臥ませ申さては。其樣に言葉を廻はされてはどうして頁いやら譯が分らで無骨者の我等閉口しますに。ホヽ閉口なされたら溫順く妾の云ふ事を聞てお臥みあれ。イヤ〳〵拙者の申す通りになされ。マア頑固に剛情を張られずとも。頑固でも何でも拙者の申す事聞かるゝがよい。ハイハイ到底貴下の頑固には叶ひませぬからあなたの申さるゝ通りに致しましやう。ホヽホヽ。まあ怖い顔をして。怖い顔は生れ付てす。怒られたの。イヱ御厚意に向つて何の怒りましよ。唯少し眞面目になつた計り。ホヽ可愛らしい。眞面目に。ハイ眞面目に。妾も眞面目に申しませう。サア貴下樣。何。殿御の仰しやる事さへ通れば女子の云ふ事は通らずともよいと思はるゝか。何。御自分の御言葉だけを無理やりに心の弱い妾

サア御寢なれと我を押やりて小屏風立て廻すに是非なく話しを中途にして、然らばお先へ御免蒙ると横になれば、蓬萊の夢見さうな雲鶴の錦の丸枕に茶を詰めゐるやゆかしき香す。さま〴〵の不審に眠られゝばこそ。ソッと屏風の外を覗けば、爐の傍に女は端然と坐して何やらを讀み居る美しさ人形の樣なり。一時間も經てど我は尙寐られねば又覗くに矢張動かず。二時間も過ぎて又伺ふに女は元の通りなり。眞夜中頃にも心愈々冴えて後先揃はぬ此家の始末を考へながら又覗けば、女は頻りに火箸もて灰掻き起し居れど柴木最早盡て爐の暖ならず。木叢峠の麓なれば流石に寒氣を覺えてや、獨り言に溫泉にでも入らんと云ひ捨てゝ湯殿の方へ行きしが少時して歸れば爐の火は全く細々となりしに尙其傍に端然と坐りたる樣子何の用ありとも見えず、全く寐るべき夜具なき故と知られたり。我男の身として自分ばかり暖まり居るをさもしき事なりと思ひ、今眼さめたる振して突と起出れば、御手水かと案內するに連れ、用たして戾りがけ心付たる顏して、お妙さま未だおよらずか。ハイ。誰人を待るゝ戀か知らねど大分夜も更けましたらうに。ホヽ御調戯なされずと能うおやすみなされ。イヤ違ひましたら幾重にもお詫をしますが、お獨り住の御樣子其處へ推て一泊を願ひましたれば御臥床を奪ひましたかとも危みます。若し萬一左樣ならば我等こそ男の身の、野宿の覺えもござれば柱に憑れて眠る一夜位苦にもならざれ、お前樣さうして居られては心苦しゝ。寢溫もりの殘りしは氣味あしくも思しめさんがどうかお休みなされ。と云へば顏少し赤め、御言葉の通り實に夜具一揃より

ふより切り掛けられ、イヤイヤ我等凡夫の癖に山歩行は好なれど歌の一つも讀み得ねば面白き所あつてもお話し申す言葉拙し。お前様こそ見受くる所御風流の御生活。由緒あるお方とは先程より思ひましたがさりとては盛りの御身を無慙の山住み、如何なる仔細か御話しなされてよき事ならば。ホヽ中々の事賤の女に何の由緒のありませう。唯妾は妙と申す氣輕者、去歳より此處に移りしばかり、おまへ様は。露伴と名乘る氣輕者。扨は氣輕と云はるゝか。如何にも。何の上の氣輕。我は何とも知らず山に浮れ水に浮るゝだけの氣輕、おまへ様は。浮世を厭ふだけの氣輕。ハテ怪しからぬ浮世を眞誠に厭ひ玉ひなば御頭をもゴツソリと剃り丸め玉ひ、墨染の衣に御身をやつされ、朝は山路に花を採り夕は溪川に閼伽を汲て供せられ、看經念佛の勤めあるべきに珠數さへ持ち玉はざる計りか。昔しの人は美しき面に熱鐵當てしさへあるに、お前様は誰に見よとての黒髪油こそ無けれしなやかに、友仙の御下着紅こそなけれ仇めかしく色作らせらるゝ事疑はし。世を疎み玉ふとは詐り、深く云交せし殿御を恨むる筋の有るかなどにて口舌の餘り强玉ふての山籠り、思はせぶりの初紅葉あさくちから濃うなるといふ色手管、是は失禮圖に乘て饒舌りました。アラ此人の口の憎さや、其樣な浮たる事にはあらず全く世をば避け厭ひて。マザ〳〵とした御戲談、さらば世を厭ふとは如何なる譯と押返して問へば、要らぬ事尋ねて可惜夜の更るに御休みなされ、と身を起して戸棚より出すは綿まづしき痩せ蒲團かと思ひの外、緋緞子の蒲團淺黄綸子の抱卷紅羽二重の裏付て獵虎の襟、驚かるゝ贅澤。

すれば可笑とも此を、と笑ひながら出すは緋縮緬のしごき。ハイ〳〵と帯にして是も大方藤蔓か知れぬと觀念し、座敷へ來て居爐裏の傍に坐れば肩へ羽折り呉るゝは八反の鼠辨慶のねんねこ。湯覺をなされて若しお風邪でも召ては何處ぞのお方に濟みませぬ。と味な口きゝ、どん〳〵柴折くべ自在にかけし鍋の沸き立つを取り下して、定めし御空腹でござんしたらう。サア御膳も出來ましたがお氣の毒なは麥飯、暖い丈を取り柄に山家の不自由をお許しなされ、と取り出す八寸膳。盛て呉るゝ山獨活の味噌汁香氣椀に溢る。禮云ひながら我は甘く食へば女も、妾も御一所に片付て仕まひましよか。と無造作に喰ふに膳なく、椀を爐緣に置かんとして流石に馴れずやたゆたふを、此膳お用るなされ。と突やれば。そんならおとり膳とやらに。オホヽ。御免なされと顏も赤めず。宵よりの所業一々合點の行ぬ事どものみなり。

さて飯も了りたれば女は我に關はず、手ばしこく膳椀とり片付て火影ゆらぐ行燈の下に坐り、我衣物の綻びを綴くる樣、十年も連添ひたる女房の樣に見榮も色氣もなく仕こなす不思議さ。さりとては何物ならん。世を捨てし女かと見れは黒髮匂やかにして尼にもあらず。世を捨てぬ女かと見れば此容色を問ふ人もなき深山の獨り住訝かしく、何にせよ口不調法なる我口惜く問ひ出る詞を知らで樣々考ふる中女は綻びを繕ひ了りて其まゝ疊み置き、爐の傍に來て我とさしむかひ笑まし氣に、若き御方の何故御旅行か知らねど定めし面白い事もござりましたらうにチトお聞かせなされ。と却て向

らせらるゝに成程是より小川まで僅の道なれど行き悩み玉ふべし。留め難き所なれども世捨人にもあらぬ御方に假の宿りに心止むなとも申し難ければ枉て一夜を明させ申すべし。強くお斷絶申すもつらし。いざ爰に御腰かけられよ。御洗足の湯持て參らん。と云はれて氣味の悪さ。今さら逃出さんも流石なれば持前のづう〳〵しく腰打掛て、有難しと禮いふ中小桶に熱き湯汲み來りて甲斐々々しく洗ひくれんとす。是は恐れ入り升、ナニ自分で濯ぎます。イヱ〳〵御遠慮なしに、サア御足をお伸しあそばせ。と問答する暇に指の股の泥まで奇麗になりぬ。上にあがり丁寧に挨拶すれば、女莞爾と笑ひながら、山中なれば御馳走も出來ねど幸ひ小川村と同じ脉の温泉の背戸の方に湧き居れば一風呂御這入りあつて一日の疲勞をお休めなされ。サア此方へござれ御背中を流しませうか。とハテ狐にでも誑さるるではないか、と内々危み居る我手を取る樣にして、湯殿へと申しても片庇㢘雨露を凌ぐばかり、いぶせけれど湯は天然の靈泉まことに能く暖まります。といふ口上嘘らしくなく底まで見え透く淸き湯槽、大事なからうと這入れば其心持は湯元よりも結構なり。晝間の辛かりしも忘れ悠々と上つて來るを待ち付け、御召憎うござりませうが御着物の綻びを縫ふてあげます間此を。と後より引かけて呉れるはぼてつかぬフラ子ルの浴衣に重ねし黒出八丈の綿入れ、女物なれば丈ありてユキ無く兩手のぬつと出るは可笑けれど親切かたじけなし。餘程ふしぎな取り扱ひ、どうした運命だらうと怪みながら少し煙にまかれて、ハイハイ是はどうも恐縮し御帶にも岩角の苔が付て居りま

渡らるゝ者と有り難く、尚近く寄て火の洩る戸の際に立ち、中禪寺の湯元より峠越して道に迷ひし者、盡く疲れ果てゝ夜道に難義いたしまするが、小川村まではまだどれ程の道程でござりますか。且は雪沓を切らして歩み難く困りますに草鞋一足御讓り下さるまいか。と云へば、それは〱お氣の毒な事、小川までは既二十町ばかり、川に添ふて行かれさへすれば間違なし。お履物をお切らしなされては眞に御難義ならんが生憎草鞋一足もない事羞かしや。然し私しのはき捨の草履にても宜しくば參らせませう。と云ふは不思議や媚かしき女の聲、かゝる山中に似合はしからず。されど是も獵師か何ぞの娘ならん。唯弱りたるは足の裏痛み惱みて右の小指左りの拇指は生爪まで剝したれば是よりニ十町到底あるけず。出來る事なら一夜の宿を賴まんと、眞に申し兼たれど小川まで二十町と承はりては疲れたる身の中々に歩み難く、痛み所さへあれば憫然と思し召て一夜の宿りを許したまへ。それは思ひも寄らぬ事。女子許りなれば。と云ひ乍ら板戸引き開け身體を半分出す女年は二十四五なるべし。後面に燈を負ひて後光さす天女の如く、其色の皎さ、其眼のぱつちりとしたる、其眉つきの長く柔和なる、其口元の小さく締りたる、其髮の今日洗ひたる乎と覺えて結ひもせず後に投掛て末の方を引裂きたる白紙にて一寸纒めたる毛のふさ〱としてくねらざる、美しさ人にあらず。汝妖怪かと三足ほど退つて覗へば女も我をつく〲と見て、傷ましやお前樣の風情御足のあちこち怪我なされしか紅き者も見ゆるに、御袖も草木に障へられてか綻び切れ、御顏色もいたく衰へ苦し氣に居

を傳ひ下らるれば一つの沼あり。其沼の左をまたまた下らるれは片科川の水源是ぞ坂東太郎と後に呼ばるゝそれに傍て行れなば温泉湧き出る小川村といふに着くべし。此處より其村までまだ四里餘少しも人家なし。能々氣を注けて迷はぬ樣致されよ。さらば。と案內者の云ふに又一段に淋しさを增し今朝の似非勇氣挫け果て茫然と見下すに曇り空の日の光り力なく、常は見ゆると聞し會津の方の山々も雲がくれて見えず。流石に足の爪先佇む間に冷を覺えける。

案內者に別かれて獨り下る覺束なさ。雪沓なれば滑り〳〵薄氷に向脛疵つき岩角に頰を擦り雪頽に埋められし木の枝に衣を裂き、行けども行けども迷ふたりや沼の邊りに出ず。樺の木折りて火を燒き、あたりながら燒飯を取り出して食ふに木屑を嚙む樣にて甘からねど饑を凌ぎたれば色々方角を考へ正して進む。元より時計も持たぬ男なれば時刻分らず頻りと氣をあせる中ほの暗くなつて來れば、是は大變なり又々曾て荒山に行き暮したる時の樣になりては叶はじと急ぐ程に沼のほとりに來たり。嬉しやと思へば日は冬の沒り易く、雪は最早無けれど沓の底は切れて足は痛し。折ふしブツリと沓の紐きれて悲しやと道の邊に坐りて夫を繕ひ繫がんとするに、燈の光り幽に動ぐを見付け、嬉しや嬉しやとたどり行けば、丸木の掘立柱笹葺屋根したる小家、尙蕾の堅き山櫻の大木の根方に立てり。所がらとて時候のかくも變る者ぞと驚かれぬ。萩の垣結ふ丈の事もせずして枝折戸の面倒も嫌へるにや。家の横手に幅一間計りの小河流るれば筧して水呼ぶ世話も要らぬと見えたり。此樣にしても世は

ける。
四五町ばかり來て見れば成程人は嘘つかぬ者、一面の雪表面は凍りて下は柔なり。段々と登り行勾配急になり屢々滑るに少し萎みて、見れば案内者は猪の皮毛の沓はきて鐵雪橇に踏答へ、悠々と歩む憎さ。負じと我も息張りて追付けば其大男ふりかへりて、此通りの雪なれば道も何もある譯では無ければ谷を傳はりて行くだけの分。あなた樣若し堪忍強く少時の難澁を忍ばれるなら一層勾配の烈しき代り頂上へ達する近道を行きませうかと尋ぬ。エーまゝの皮さう仕やうと決斷し、又登る一里あまり樅の木栂の木タモの木ドロの木唐松など生ひ茂りて陰暗く、此山の本名木叢峠の名は體をあらはして森々と物凄く、梢を渡る風に露はら〳〵と襟首に落ち、顏を撲つ空翠は引く息に伴なつて胸惡し。雪に印せる兎鹿の足痕漸く減りて、耳に音信し鳥の聲も次第々々に絶え、身に攀ぢ登るの苦しさに汗ばみながら心を掩ひし五慾の塵衣は一枚一枚剝るゝ如く昨日の榮華縱橫無盡に神通を逞しくせし第六識魔王は眷屬味方を失ひて薄ら淋しく、何といふ事はなけれど世界よりの落武者となつたる樣に心臆せられて人間老衰の曉五官半死して最期に近よりたらん時此境界に似通ふ者あらば何程なさけなく如何程力弱く如何程賴み少なき者ならん乎とそゞろ悲しく思ふ時岩を透すまで鋭き鳥の聲眞黑の梢より射出され、ギヨッとして頸を縮むる途端眼にはくら〳〵と湧き亂るゝ唐草樣の者見えしが、是にてお別れ申します此處兩國の境界即ち頂上なり。是より左り手左り手と谷

たりしに有難き溫泉の功能、忽ち平癒するや否、丈夫素より存す衝天の氣などいきり出して元來し道を歸るを嫌ひ、御亭主是から先へ行く道は無いかと問へば、どうも此處は行留りの山の中、見らるゝ通り前は前白根奥白根雲の上に頭を出して居る始末、登山は夏さへ六かし、其續き横手の方は魂精峠と俗に呼ぶ木叢峠、此頂上は上野下野兩國の境界山々折り累なりて當方より越る六里の間に暖湯飲むべき家もなし。殊更時候大分違ひて大澤德次郎あたりは、野州の名花八汐の眞盛りなれど此近邊はそれもまだ咲かず。況して峠は一面の雪五尺六尺谷間には積り居りて道も碌には知れず。今年になつてから越した人は指の數に足らぬ位。とても遊び半分なぞに行かるべき地にあらず。御客樣是非もなし中禪寺までお戻りあつて足尾とか庚申山とか里近き孫山でも見物致されよとの言葉。おのれ我を都會育ちの柔弱者と侮つたりや。其義ならば旋毛曲りの根性天の邪鬼の意氣地見せつけ呉れんと詰らぬ事に僞勢張り、股引もなき細脛踏みはだけて、其峠何程の事あらん燒飯作れ草鞋買て來よ。少しばかり難義でも同じ道を歸るより面白からんに鼻歌を山の神に聞せて越えん。さて〳〵途方もない事。雪沓ならでは中々凍ゆべし。强てとならば國境まで案內者傭はるべし。然し名產の肉蓯蓉取つて腎藥にでもせんとの御思召ならば時節惡し。醉興は要らぬ者と昔時よりの敎もあるものを。面倒な。愚圖々々せずと我云ふ通りにせよ。案內者は傭ふべし雪沓も買ふべし。と罵りて裾其儘にグイと端折り、沓しつかりと穿き結め、身の丈六尺計りの樵夫を案內として心いさましく登り

縁外縁

旅に道連の味は知らねど
世は情ある女の事〱
但しどこやらに怖い所あり難い所

我元來洒落といふ事を知らず數奇と唱ふる者にもあらで唯ふら〱と五尺の殼を負ふ蝸牛の浮れ心止み難く東西南北に這ひまはりて覺束なき角頭の眼に力の及ぶだけの世を見たく、いざゝらば當世江口の君の宿假さず宇治の華族樣香煎湯一杯を惜み玉ふとも關はじよ、里遠しいざ露と寐ん草まくらとは一歲陸奥の獨り旅夜更て野末に疲れたる時の吟、それより露伴と自號して頓て脆くも下枝を落なば、摺附木となりて成佛する大木の蔭小暗き近邊に、何の功をも爲さざる苔の碧みを添へん丈の願ひにて、囈語にばかり滴水とく〱試みに浮世そゝがばやと果敢なき僭上是れ無分別なる妄想の置所、我から呆るる程定まらぬ魂魄宇宙に彷徨し三十年來、自ら笑ふ一生定力なく行藏多くは業風に吹ると古人の遺されし金句に、歲の市立つ冬の半夜蝙蝠騷ぐ夏の夕暮などは膽を冷し骨を焚く感じを起す事もありしが、三日坊主の一時精進、後はゆつたりのつたりにて、丁度明治二十二年四月の頃は、中禪寺の奥、白根が嶽の下湯の湖のほとりの客舍に五目並べの修業を兼て病痾を養ひ居

ンと地獄へ落ちるとおもへば、眼鏡橋の傍の柳の樹の下にヒヨコリと出でたり。ハテナ是は異だ、と能く見れば、まだ生命ありて、ヤッパリもとの乞食なりけり。常人これに大欠伸して、思へば〳〵下らねえ、おれの望んだ世界といふのもあんまり可笑しいものちやなかつた。あんなものぢやアはじまらねえ、ハックショー。と噴嚏をしたりける。

慕へるにもあらねど何となく所望のよし云ひ送り、彼例の槌にて其貴人の面を猿八に撲らせければ、流石の貴人も有難涙にむせびて、常人に其妻を與へけり。常人其女を小間使として辱めけるに、貴人は恨める色もなくて濟みぬ。万事世界が斯樣では張合がなくて少し面白味が薄いとおもふ內、常人も年には叶はず照手もろとも小皺の面に寄る頃となり、急に不老不死の藥欲しく、家來どもを八方に走らせ求めけるに、何條得ざることとあるべき、忽ちに生きたる人魚を得たりければ、其血を啜るに、夫婦とも又若がへり、オヤ〳〵貴郎はまた二十四五の盛りにおなりなすつた、と照手無性に嬉しがれば、オヤお前も二十一二になつたか、可愛や、と常人も無性に悦びて、又寢たり起きたりして居る中に又五十ばかりになつたり。斯うなッてはつまらない、齒が脫けちやア水貝もなさけない、澤庵を親孝行でたゝいて食ふやうぢやだめだ、と又人魚の血を吸へば、又廿四五になりけるが、しばらくして又忽ち五十ばかりになる。又若ぐなる。又年を取る。又若くなる。又、又、又、又、又、又、八億四千万度若くなつたり、爺になつたり、若くなつたり婆になつたりして、見た末は、コイツハ初まらない。チット氣をかへて死んで見やうか知らん。いつそ其の方が面白うござりませうよ。青いきれいな山や、美しい溪河も詰りませんから、今度は二人づれで針の生へた山や血の池が見たいよ。そんなら死なうか。アイ死にませう。と爰に相談一決して、古今未曾有の情死を企て、戀男戀女房、婚禮の酒盛よりもめてたく毒酒を飲みかはしけるが、段々苦しくなつてズド

大分限となり榮えに榮えて常人は大したものとなりけるより、位を望む心出て、何萬圓出せば從幾位になるといふ算盤にかけて、遂に從一位と云ふ位にまで陞りける。名譽を望む心も飽き足りて、天下第一の智者勇者仁者と稱贊さるゝの聲往來にかまびすしく、色にも飽き足りて千八百万人の女にべた〳〵と惚れられ、流石常人も斯くなりては生命が續かぬ位なり。家も都合三百六十五出來て、一年中引こしをせねばならぬやうになりけり。衣類も一時毎に古きを脱いで新らしきを着る事なれば、晝間は大抵帶をしめたりほどいたりにて費すやうになりけり。食物も朝食は六百三十七色の菜をつけ、晝飯は七百八色の肴、晩飯は一千三百通りの色々のものを持ち出さする極りなれば、大抵食時は小皿、大皿、長皿、中皿、平椀、汁椀、椀盛椀、壺やら、猪口やら、小蓋物やら、さま〴〵の物の間をまご〳〵歩行いて居るやうになりけり。眠る時は臘虎の腹ごもりの兒の皮を綴ち合せて綿の代りに海獺の毛を詰めたる蒲團の上にて、一生の戀女房照手と寢て、象牙細工の六枚屛風の中に夢を結べども、情ない哉夢だけには時々乞食の時の景色を見ける。

其二十三

常人は爲したきことを何にても爲し得る身となり、望みも足りしが、或時嘗つて乞食の節見たる黑塗馬車の中の女を見たり。是は何某と云へる立派なる貴人の妻となり居るなるが、其女を常人戀ひ

々に歩ませければ、御前等是非なく其縄と髪の毛の魔法に駆られて歩み玉へり。かくて遂に常人は歳入歳出一切受け負といふ大役を授かりければ、計略成就ありがたしと喜び、天に踊りつ地に舞ひて悦喜しける。然るに爰に又政鹿といふ一種の鹿ありて頻りに常人が家の廻りをうろつき、出入し給ふ御前等の足などに角を向くると屢々なれど、常人方にて悩みけるが、猿八策をたてゝ云ふやう、鹿といふ者は羊に似たるものなり、羊は紙を愛して食ひ、紙なきときは角をもて人に近づく。一ッ試して見む。鹿どもゝ大方紙の食ひ足らで腹の減る故に色々の所業をするならむ。と或時やぶり難き香氣のある重寶なる紙を澤山に食はせければ、果して鹿どもはおとなしくなりぬ。然るに又礎牛といふ者モウ／＼と鳴いて來りければ、是にも紙を食はせて牛部屋に蓄ひつなぎける。これにて常人に楯突くものも無くなりければ、愈々妙なり万端意の如し、是よりが本商賣と奇妙な法をぞ行ひける。其仔細を問ふに、迚も經濟學士などの考へ出すべきとにあらず、餘程奇妙の謀計にて、師直と熊坂とが合躰して考へ出したといふ變法なり。其法先づ尺度を護謨にて造り、一尺五寸のものをも二尺にはかり、又秤棹の中を空にして兩端に溜りを作り置き、買ふ物を計るときは其中に籠め置ける水銀を竿のもとの方の溜りに入れ、此方のものを賣る時は竿の末の方の溜りに入れて重くすると云ふやうなる怪しき手づまにて、歳入歳出を受合ひければ、浮世の金銀どし／＼と餘篦家が金藏に遣りしは恐ろしかりける事どもなり。最早其他にも色々商法をなして儲かりければ三億餘の

我が前に立舞ふ女に連れられて立ち上り、和洋折衷のダンスが良からう、と手を取つて舞ひ出し給へば、折衷論賛成々々と總起立なし、モヤ〳〵と成りて舞狂ふ。此圖を外すな、心得たり、と三味線の響一トしほ烈しく、兎角浮世は此事よ此事よ、生命惜むな我郎よ、生命惜しけりや戀するな、と女ども各々魔音をふりたてゝ益〻騷ぎもつれあひ、肩を駢べ袖をつらねて舞ふ時、女等日傘をサットひらきて兩人の頭を包み隱せば、お互ひに誰が誰やら分らずなりて、無法亂痴奇の大狂ひ、見し御日傘の内ぞをかしき、と小町が居らば詠むべきありさま、客も主人も皆日傘にかくれて、互ひの顏の見えぬ內、舞ひて舞ひて各々遠く離れしが、傘を投出し、アヽ眼が廻うたと女はベタリ倒れたり。これは氣の毒と男は介抱にかゝる折しも、此座敷何時の間に變りしぞ四疊半にて物靜なる淸らかなる圍ひとなりけり。折しも風前の燈の古き喩を役たゝずと平常は力み顏なりしに電氣燈魔風に消へて、アレ御前といふ聲ばかり幽かに洩れぬ。

其二十二

女どもの髮の毛を御前等の鼻毛髮の毛等に縛りつなぎ、又別に鳥の子紙のやうにて佳き香する紙をもて造りたる紙捻を御前等が帶にくゝりつけ、此二つの繩を持つて御辭義をなしつゝ、何卒西の方へあるき給へ、と常人願ひて繩をもて西へと引きまゐらせ、又左りへと願ひて左へ歩ましめ、南北色

貴孃は有がたい御こゝろざし、むかしを忘れずに尋ねて下さるばかりか此樣な結構な物迄いたゞいては濟みません。いづれ其中に御禮にあがりませうが、マア緩くり遊んで御いで下さいまし。と頻りにちやほやなしたりけり。此日は事なく照手立歸りけるが、二日ばかり過ぎて、何某侯爵の園遊會においてなさい、と態々やつて來て照手を誘引ひしむかしの巴吉、今の巴子さまは、照手を雲上人の中へと紹介したりける。

其二十一

扨段々と常人は世間の信用を得て來りければ、そろ〳〵よしと計略を定め、相識になつたる貴人たちを例の常盤橋の奇怪亭に大勢まねぎよせ、それ御酒、それお肴、と馳走毎日なり。或時客の皆へべたるを見計らひ、躍りを一番御覽に入れむ、と云へば、コハおもしろかんべいと喜び給ふ途端、蔭にてチヤンチヤンチヤンと三味線起り、間の襖をサッと開けば、眞白な雪の肌の透いて見ゆるばかりか、胸のあたりの黒子まですき透りて見ゆる水色絹レースの衣服を着たる女ども二十人ばかり、手に手に眞紅の日傘を持て、大廣間に翩々と舞出でたる樣、魔神の懷中より飛んで來りしにあらざらむには如何でかく美しかるべきと思ふ程なり。是は常人かねて諸國に家來どもを遣はし、撰りに撰りたる美人どもなれば、貴人等醉眼とろんこで是を見て何堪るべき。氣早のハゲテン老貴人突然

り。然し夫人は威嚴を取らねば下々のおもはむところもあれば急に心を取り直しわざと窮窟に氣取つて、話しを仕ながらも、ア、むかしならば向島へでも行かうぢやないかと一寸可笑しい勘平遊び、互ひに睦まじく飲んで飲ませて禮義もなく、だゞの捏合ひをして惚氣を聞せ合つて、長閑氣にふざけて遊ぶところなれど、今は髯ムシヤ棕櫚の樹を亭主に持ッての夫人役、あゝ小面倒だとおもひながら、絶えて久しくお眼にかゝりませんでしたが、此頃は何れに御住ひです、と問ふに、答へも矢張り變に珈琲砂糖のやうに角張り、今は餘篦常人を夫と頼みまして向ふ島に暮して居りますといふ。扨は名高い大分限者大色男の常人樣の奥方とは貴孃でしたか、オヤもう〳〵御嬉しうございませう、それはまことに結構、と羨ましきにか少しだど〳〵した物云ひなり。照手は内心鼻高く、夫より吩附られて持來りし金剛石の頸環から腕環と眼がくらみさうな數々の寶物を、是はホンの昔のお馴染の妾の心ばかり、どうか野暮なものではございませうが御用ゐ下さらば嬉しうございます、又此後とても昔時のやうに何卒末長く御交際下さいますやうに、御見捨下さらぬやうに願ひ升。どうか御暇の折は宅へも御遊びに御出下さいまし、かねて宿へも御噂さを申して居りますれば、宿もどうか是非チト御出なさるやうに、と申して居りますヨ。子、ほんとにちつと遊びにおいでなさいよ。と上樣やら下樣やらの言詞を五目に使つて云へば、夫人は亭主が一年の俸給でも買へさうもない飾り物をもらつて、眼の中が急に痒くなつたる所に此樣云う甘い話をされて笑みかたまげ、ほんとに

愈々計略を廻らしける。彼大工左官ども二十何人には十分馳走したる上、かねて別に送り置きし朦朧丸と云ふ蒸瀛船にわざむき誘ひ載せてツーッと出帆し小笠原島より尚百六十里餘先の無人島に着し、大工左官等を上陸させて、又ツーッと歸りけるが、後に殘りし二十何人、男の佐用姫をやつても追つかず、多分アホウ島の肉にても食つて今に生きて居るなるべし。人こそ知らね此船の船長は豪傑雉子六とよべる餘篦家無類精忠の人なりけり。

其二十

何々次官何某殿の奧方は例の照手姫が昔時住み玉ひし町に居玉ひて、矢張同じ御身分なりしと知れば、常人女房に云ひ含めて立派に出立たせ、蒔繪の箱馬車に乘つて數々の寶物を手土産にし、其御屋敷におもむかせける。女房照手は何事とも知らねど、一ッ座敷に出で同じ歌を唱つた事のある中よしの朋輩を久しぶりにて訪ふかたぐ自分の今の身分も知らせて誇らむ料簡にて、馬車を門内に馳け込ませ、夫人に御目にかゝりたしと云ひ入るれば、取次のもの吃驚仰天して、何れよりか立派な美人參られて奧樣に御意得たしとの段申入るれば、夫人も少し驚き玉ひけれど、やがて是非なく通して見れば、オヤぐお照さんかえ、巴吉さん、アラマア久し振りだとねー、と危くも兩人とも云ひ出さんとしけるも無理ならず、嘗つて一本の燒芋を半分づゝにして食ひ合つた中なればなりけ

けろ、と許しければ犬ン兵衞大に喜び、箇程大仕掛の目論見成就するまでには非常の大金の要ると
なれども二年半の後には大した儲けをして見せる、此位に妙な事はあるまじ、と獨り威張りて急ぎ
立歸り、常磐橋近邊の家を買ひ取り金に飽かせて慾張つたる大工共を語らひ其家在來の廣庭を掘り
初めたり。嗚呼人も知らじ、天も知らじ、此珍妙なる大穴を掘りてドシコと儲ける犬ン兵衞の奇策、
如何なることか中々に分らねど、何にせよ大工をも左官をも此仕事にかゝりしもの一人も外出さ
せず、丁度宇都宮騷動、釣り天井を作りし時も斯くやもおもはるゝ大業にて、事の漏るゝを恐れて
には違ひなし。扨其穴を堀りたるも敢て昔話の犬の敎で黃金掘り出したる樣の當にならざるとに
けあらずと見えて、三丈ばかり深く掘下げ、セメントで湧き水を防ぎ、カラリとしたる空穴になし、
其中に立派も立派も言語同斷結構宏大なる家を作り、間每に電氣燈を仕かけたり。扨又其家の上に
橋の如く板をわたし、鐵柱を橫たへ其上に土を置き芝を生やし、唯の庭と同樣になしければ少しも
分るとなく、あれほど結構の家を何で斯く異樣に作り斯く土の下に埋めたるかと大工も怪しむ計り
なりしが、元より庭中にありし古井戶へ橫道を下にて付け、其井戶の下には電氣仕掛の呼風器を仕
かけ、下の座敷へはどん〴〵風の通ふやうになし置き又在來の主家の茶室の椽の下よりも一道下座
敷に通ふやうになして、話に殘りし延命院が座敷も之には及ばざるべく作りぬ。僅か一ヶ月程にて
悉皆成就せしかば、主人常人歸りがけに箱根の葦江が家に二た晩程泊りてぶら〳〵と小梅に歸り、

や否や新聞屋どもは自分が廣告に使はれるとは知らず、大袈裟な頁き種でざんなれ、と書き立て、ヤレ審査官がヘロ〳〵した、某伯爵が料理屋で今度の審査取るに足らずと云つた、と尾に尾を生やして掲載すれば、世間忽ち餘筵家支店の麥酒をよきものと感心し、ワアーイ〳〵と囃し立て、猿八の計略圖に當り、法律上の議論は兎も角も實際空德利の値さへ二割方騰りたるにぞ、妙だ〳〵と喜び誇りけるが、感心すべき智略の段、三千圓を廣告に使ふなぞは流石に頼もしい、と常人も悦びけり。是を傍觀で知りたる犬ン兵衞、我も忠義を竭さにやならぬと智慧袋を絞り、愈々妙なる事を考へ出しけり。

其十九

お政の亭主犬ン兵衞或時新聞紙を持て雪隱に行き、何か此中に金儲けの種はなきかと讀みながら素敵の計略をいきみ出しけるが、主人常人此頃は戀女房照手を連れて京都嵯峨の別莊に氣樂な暮しを仕て、繁太夫節を京土産に稽古して居るなどゝいふ悠長な境界に遊び居れば、早速京都へ出かけ行き、耳につきてヒソ〳〵話しをすれば、流石の常人も一時は驚き懼れたれども、まゝよ、やッつけろ、高の知れたる當世の奴原、ぱかんとさせるは譯もなし、ぐず〳〵云ッても打れば論なし、又々例の鐵餡金かぶせの才槌を餘計に作り置きさへすれば大事なし、やれ〳〵、隨分圖太く遣つて退

房と侍き奉り、心腎を揉み脾胃を枯らして可愛がりけるが、中にも猿八至躰心立よろしきものなれば深く主人の恩義に感じ、是はなんでも一層忠義を盡して主人に尚一ト儲けさせんと一策を案じ出し、自ら乞ふて麥酒醤油等の釀造場を起し盛大に開業しけるが、常人の運の良き故にや、愈々盛大になりて利得も中々多かりける。折しも第四十回内國勸業博覽會ありて日本中の商賣人ども此機失ふ可らずと色々の品物を出し列べける其中へ自慢の麥酒醤油等を出しけるが、巧い哉巧い哉、運よく賞牌は受けざりけるに、元より大膽不敵の猿八、腦味噌の奥の方より乙な智恵を搾り出し考ふるやう、當世素人も新聞の廣告の利益を知つたり、實に新聞の廣告ほど商賣に德な事はないと極まつて居るが新聞よりも尚よき廣告の仕方をこそ思ひ付きたれ、幸に我店より出品せし麥酒に賞牌のつかざるなれば此處が一つ山をやるところ、審査官は素より犯すべからざるものなるとは知れきッたことなれど、此處を一番引くり返して審査不當を云ひ立てゝ、オホン憚りながらそんなに安く見られたものぢやござらぬ、拙者店の品物を其樣安くされて堪るものか、と威張り出し三千か二千かの目くされ金を遣つて世間を驚かし、麥酒の名さへ高くすれば評判ずんと出て世人の肝にしみること新聞の廣告より何十倍か知らず、一躰商法はかういふところを踏み込んでやつてのけるのが秘傳なり、とおもひつき、急に名うての代言人に千五六百圓づゝ喰はせ、低頭平身して、眞實に審査が癪癪にさはりやす、と賴み込めば、代言人は心得たりと訴訟を起しかけたりける。此事を聞く

漢が云ひけるとぞ。何にせよ照子は死物狂となつて男のためを計り、常人も又死物狂となつて照子を可愛がりける程に、某女學雜誌記者は素敵に敬服して兩人を寫眞石版にして美しく刷り上げ、夫婦は斯くあるべしといふ標本の積りにて其雜誌の初めに載せければ、其結果は聰明なる女生徒にあらはれ、何卒乞食の中より妾を愛する男を見出さんなど、思ひ立ち、三十人四十人位づゝ隊を組みて、眼鏡橋近邊をぶらつき歩行き、乞食に眼をつくる事流行するに至れりとぞ。

其十八

葦江は戀ひに焦れし男に其男の妻なる照子の周旋親切にて逢ひたる事なれば、能くおとなしく仕へて微塵我儘なる振舞なく、身をへり下りて是も只管主人好かれとのみ思ひければ、常人いとしさ日に增して、箱根山の半腹の景色途方もなく好きところに大きなる上等ホテルを建立して葦江を此處の女主人とし、時々滊車にて本宅より遊びに行き、寵愛餘念なかりけるとぞ。扨又松島の別莊、博多の別莊、嵯峨の別莊、皆盡く成就して家來ども歸り來りければ、各其功を賞して、殊に別に犬ン兵衞に命じて撰み來らせし京都美人を所々の別莊に割り振りつ、其中よりまたお愛と云ふ別嬪を雉子六へ、お政といふを犬ン兵衞に、お花と云ふを猿八へ、お龜と云ふをコン吉へ、お久と云ふを猫次郎へ、お春と云ふを鼠吉へ女房にせよと玉はりければ、各々嬉し悅び、是主人より拜領の女

眞似をなす。オホヽ、知りませんよ。とツンとすれば、ツーラすねだした、怪しからむ。と云ひは云つたれど、餘り口をきいて安くなつては、と默り込むに、其顔を見つめて照子は摺り寄り、貴郎はほんとに一生わたしを捨てないで、そして伊香保の昔時を忘れないで居て下さりますか、と野暮に心細さうに問ひかくれば、昔時を忘れる位ならばお前を迎へ取りは仕ないよ。と常人も地金を云ひ出したり。ほんとにそんなら嬉しいけれど、あんまりあてにはなりませんネ。と莞爾笑つて悦べる其美しさ無類なり。イヤ當になることと受合ひだ。鼠になつても慕つた程の戀女房を忘れていゝものか。とウッカリ云へば、何ですとえ、鼠になつたと仰やるの。と咎められ。ウ、ヽいえ、ナニ此方だけの洒落だよ。ほんとにお前を一生忘れは仕ない、血判でも、誓詞でも、見認印でゝも實印でゝも證據を立てるよ。と云ひ切りたり。まア嬉しい、そんなら斯うなさいましな。あの葦江さんも餘り可哀想だし、又焦れ死をして妾の處へ化けて出られても困るから、ナアーニ貴郎の今の身分で御妾の十人や二十人置いたとて不思議はないのですから、彼の兒を引取つておやりなさいましな。と中々の賢女だか變女だか、乙に妙に味に粋とやらの申條なり。內心は常人嬉しけれど、表面は馬鹿な事云ふと兩三度打消して後、それではと狐吉を使者となし、葦江を根引したりける。これほど美しくて心立のよい女房を得たる事なれば常人夢中になつて嬉し喜び、朝も晩も晝も夜も其傍にねばりついて離れゝばこそ、斯ういふ者が死んだ墓から生へた木が漆となつて物をクッ付ける、と嫉妬

常人は餘り騷ぎが大きくなりて二人一緒に久しぶりでポチ〳〵と話を仕たしと思へども、一時になつても客が歸らず、二時になつてもまだ客が來る、三時になつてもまだ賑々しく、四時、五時、六時、七時、八時、九時、十時、十一時、十二時、ドーンと正午が鳴つてもまだ客來り客去りて引きもきらぬに持餘して堪らなくなり、あゝめでたいのもかう大過ぎては困る、などと獨り言して、二人密かに手を携へ離れ座敷の茶室へ逃げ込みて、ヤレ〳〵喧しかつたが、然しどうだえおれの運も馬鹿に盛んだらう。是も皆御前の御蔭だ。有難い嬶大明神。と拜む眞似をすれば、其の手を拂つて、オヤ馬鹿らしいよ、おふざけなさるな。唯行く末わたしを捨てゝ下さらなければ、眞實に死んでも恨みはないのですが、然しアノ葦江さんチ。と云ひかくるを、ドッコイ久しぶりで逢ふと直ぐに厭味はごめんだ。痴話の種盡きて夫婦がまづくなり、と云ふ狂句もあるから、モ少し痴話の種に葦江はおあづかりとして置かうよ。夫婦喧嘩も是から段々と稽古にかゝらうが、まあ今日は仕舞つて置くがよかろう。と茶にしたり。イヽヱ燒くのぢやありませんよ。唯あんまり可愛さうに貴郎に岡惚て病氣になつて寢て居ます。それごらんなさい氣が無いのぢやアないもんだから、ビックリした顏をなすつた癖に。いやですよ人に上手を云つては。と照子が言へば、上手を使ッて怒られちや埋ちない。一躰全躰男が自分の感情を曲げて女に上手を云ふのは、少し位の愛情で出來るとか出來ぬとか知つてるか。嘘をつくのも眞情から、といふとを如何心得て居るか、此阿魔め。と男兒がつて打つ

る間に、何處となく餘所家に今日奧樣がござつたさうなとの話し東京中に廣まりて、色々樣々の奴原おめでたうござると門前市を爲す程入り込み來り、遂に大々大變の騷ぎとなりけるにぞ、警視總監は電話機にて令を傳へ、間違ひなきやう保護致せ、と巡査を差しむけらるゝに及べり。誰が注文したものか何時の間にか陸海軍の音樂隊ノコ〳〵と來り、誰が云ひ付けたるものにや鍵屋玉屋の花火ポンポンシユッと起り、赤提灯天を焦がし、色々の旗に鬼子母神が總赤ン坊のおめしを干したるよりちろさくかゝり、狂言師を連れて來て賀儀をのべさするもあり、能役者を引張つて來るもあり、團十一郎といふ團十郎よりえらいもの、同じく菊六郎、山城屋、高胡麻屋、などいふ古今に卓絶せる役者を初め、落語家やら、幇間やら、樣々のものども群りきたり、矢鱈にめでたい〳〵と騷ぎける。

其十七

今晩今宵の御祝儀を端唄づくしで祝ひましよと粹がる奴もあれば、羅甸語で祝辭よむ若者もあり、老松を謳ひ、高砂論をたて、無性に皆々めでたがりて、結構な酒肴を飲み食ひ、君が世は千代に八千代にさゝれ石の巖となりて苔の息子までと怒鳴るもあり。此夜狐吉主人に代りて御辭義の頭を下ぐる人々に應接せしに、頭の下りし度數は五十三万度なりしよし、是にて其盛大は知られけり。照子と

梅に來りぬ。ト見れば一ト構への大きなる庭園ありて、樹茂り草芳しき其奥に風流を極めたる家ありて、伽羅の三枚橋は小流れにかゝり、赤栴檀の枝折戸は斑竹の四ッ目垣とつらなる、結構贅澤驚くばかりなるに、然も花櫚の椽側は面を鑑むべく光り、瑪瑙の欄干瑠璃の擬寶珠、如何なる人の住家かと思はるゝ立派なる家の上に忽然とあらはれ出てたるは、アヽラ嬉しやよろこばしや、我が戀人の常人なれば、ようまァ無事で居て下さッた。お前と分れた其後は。と後云はぬ間に涙と云ふ氣早者、とく〳〵の清水と湧上がれば、常人もおもひは同じ戀衣半分づゝ着た中なれば、何堪まるべきや泣き出して、急き込む言葉のワク〳〵と、テ、テ、テ、テ、テ、テ、照子、逢ひたかつたぞよ、あひたかつたぞよ。貴樣と分れてから千辛万苦、漸く今日の身となつた。サァ是からは千年万年、死んでも離れぬ二人が中、聖天樣を刻む雛形が欲しいなら此處へ來いと彫工會へ云ッてやるほどに睦しく浮世の歡樂を取らうぞや。此方へおいで。と手を取つて帳臺深く引張り込み、頻りにペチャクチャと話しをなせしが、やがて家來一同を呼出し、是こそおいらが戀女房。何と良い女だらう。心立なら器量なら何處に點打つところもあるまい。今日はめでたい。皆の者も喜べ〳〵。ソレ狐吉酒宴の用意致せ、皆の者にも主從の盞させくれむ。忐て其後は無禮を許す間、茶番でも薩摩踊りでも勝手に致せ。と命令すれば、心得ましたを一秒の七分の一ほどの間に早くも云つて退けて、早速尻輕に立働き、下女下男三十六人に號令勇ましく、火を起せの、水を汲めのと、何か大騷ぎをす

と一目見るより、マア貴郎、是は飛んだ失禮いたしました。兎も角もまア御坐り下さい。照や何をうろ〳〵して居る。ソレ敷物をあげないか。御茶をあげないか。ラムネがよかろう、お鍋氷屋へ早く駈けて行つておいで。何を愚圖〳〵して居るのだ。イエ旦那樣若いものばかりだもんですから、貴郎を見るとモウ腹の中で新駒に似て居るよなぞとおもつて居るので、ウッかり致して居りますので困ります。サアマア、汚いところですが御坐り下さいまし。と掌の裏かへして世辭追從す。此處等を氣の弱い善人が見て山ごもりも爲度なるとは、まだ青い〳〵の稗蒔人形、まとに小さい了簡なむめり。めり〳〵と引きむしつてやりたいやうな婆を睨み付けて猫次郎は談判に及び、金に飽かせて遂に手を切ッて照子を彼鼈甲の人力車に打乘せ出て行きけり。これを見送る婆は獨り言、どこの間拔の何ういふ了簡か知らねえが千三百兩もあれば、二人や三人また照の代りに抱へてイチメて油を吸つて遣らう。とべロりと舌を出したるが、其舌に何時まで濕り氣の有るものか、今に末期の時、水一滴欲しいところへ照子の恨みが火になつて其舌を焦がすべし、と天井裏の鼠が呟やくを、オヤ晝間鼠が鳴くのは福が來るといふ大黑樣のお告か知らむ、と喜びたることそあはれなれ。色氣なき婆は扨置き、慾氣の薄いかはりに色氣が身躰にはびこりたる肥り肉の美人照子は人力車に乘せられ、ハテ玉の輿は話して聞いた事もあり、飴やおこしは幼少時食べた事もあるが、鼈甲の車は少し變なり、大方龍宮へでも連れて行かるゝのか、と下らぬ考へをたてゝ居る内に段々と町々を打過ぎ、小

ともするのぢやない。此婆め、照子姫にあやまればよし。さもなければ打撲るぞ。と嘲れば、打てるなら打つて見ろ。此阿呆め。御氣の毒だが其樣な餓鬼に打たれる樣な婆が欲しけりや樺太へでもおいてなさい。早く御歸りッてば。と嘲り返す。此糞婆め。と隱し持ッたる例の才槌にて一つコキンとやれば、やられて婆はムシヤムシヤに怒り、打ちやがつたな。どうするか見ろ。と喰付きにかゝるを、此馬鹿盲目め。黃金無垢の才槌をしらねえか。と眼前につきつけゝる。是を見る途端其槌より金色ヒラホラと輝きて婆の眼を射れば、ハヽアッ有難い御才槌樣、と感涙にむせびて平伏す。猫次郎は腹の中にて、ざまを見ろ、此婆め、と思ひながら、面白さの圖にのりて又一つコッツリ、又一つコッツリ、又一つコキンと無暗になぐれば、婆は其度每に拜泣して居たりしが、猫次郎可笑さ堪らずなりて、笑ひ出せば、扨は贋物かと疑念鋭く、腹立まぎれに才槌にアングリと婆の喰ひ付きたるは、恐ろしかりける次第なり。

其十六

婆は一生懸命に喰ひ付きたれど、素より中は眞鍮故に前齒二三枚ポロリと碎けて、却ッて大にタヂログところへ、懷中より七八百圓一と纏めにしたる奴を猫次郎取出して婆の橫面へ擲きつけたり。擲きつけられて痛みに堪へず、勃然として又起き上り、シガミ付かむとしたりけるが紙幣の束なり

分らねえのぢやないから大目に見て置かうが、今までの様にチボコのボンヤリで手の中の阿波忠まで美の吉めに取られて仕舞ふやふな間抜で居ながら、誰だか白状しないから分らないが何でも何處かの乳臭い久松らしい奴なんぞを情夫にして貞女だての其口状が癪にさはる。小生意氣だ。なんぼ年はとつてもお前達に甘くされちやア私は蟲がいゝから堪忍してやるけれど、わたしの年が堪忍しないよ。ヘン中洲あたりで安賣が當世の極意。ムツかしい事もなんにもねえのだ。氣が利かなきや利かないでよし、又器用に人の者まで引きズリ込むで取るといふやうな事も出來なけりや出來ないで宜いから、其代りにチツと御茶屋のお神たちに甘く取入ッて其領の指圖をおとなしくうけたまはるが好いのさ。なんの洒落くさい女學論や女今川で渡れるやうなウスノロイ世界ぢや無いといふことも知らないで、娼法だけはごめんなさいましも無いもんだ。オヽ口が酸つぱくなつたのに耳は痒ゆくもならねえのか。と變にも乙にも有難い堪らない說法を聞かせ居たり。女は不服の樣子なれど爭ひも得せで默り居るを、此處なりと猫次郎は格子戸瓦落り引明け跳り込むで突立ち、コンチキ生め。此婆め。手前は一躰何をぬかして居やがる。怪しからぬ事を云ふな。何の敎に其樣なことがある。と罵れば、婆は大に怒りて、ナニ此野郎め。人の家に無斷で飛込みながら、餘計なお世話だ。お釋迦樣が出て來たつてピクともするもんぢやない。マゴ〱すると御巡查さんに引渡すぞ、サッサと足元の明るい中にお歸り。薄氣味の悪い。と罵り返せり。オホン巡查が出て來たつてピク

んで〻考ふるに、其婆を打ち玉ふはよし、其女を奥方となされんとはよろしかるまじ。我君は今從二位の人の姫君を娶り玉ふとも素より萬事御自由の世界なれば、其樣な牛蟲婆が食ひ付き居る女を奥方となされむこと然るべからずと存じ奉る。と忠臣顏して猫次郎申し上ぐれば、常人忽ち赫と怒り、人の戀路に邪魔する奴は狗に食はれて死ぬがよいと云ふ敎を何と心得たか大馬鹿め。ナニを理屈をいふのだ白痴め。理屈に感心して居るなら手前は理屈の家來になれ。但しレコに感服して居るなら己の家來になれ。諫言じみた事聞く耳持たぬ。と罵れば、猫次郎又一言も無く、ハヽアッ驚き恐れ入り鳥は甘い玉子燒もよろしい。理屈はなる程まづいものでござる。仰せの通り諫言は願ひ下げにして一切取り計ひ奉らむ。と早速に黄金の才槌を作りけり。

其十五

主人常人公の命を受け、鼈甲張の人力車を持たせて猫次郎芳町へおもむき、照子の家をまづそッと覗ふに、首うなだれて坐り居る年頃の美人は照手姫なるべし、それを憎氣に睨みつけ、長煙草管を斜めにして疊をはたきながら、むづかしい顏して責むる婆、サア根性を入れ代へて明日からでも今夜からでも〻早速わたしの云ふ通りにして、ナンでも運てれの奴等を片ばしから啣へ込み、ウンと云ふ程儲けるならば、たまには藥の後の口直しといふ格で男狂ひの二つや三つは此わたしだつて譯の

イと閉口の閉づくめでピヨコと御じぎをなし、旦那樣の御宅へ上ると歸つてから三日ばかりは極樂の夢をつゞけて見ます、といふ追從。功言令色有矣謀叛と子豪子が鈍語にある通りなるありさまなり。妙々、おもしろい。猫次郎、黄金無垢のサイ槌を造れ。來る奴を片ッぱしから打ッて有難涙をこぼさしてやるから、との常人の命令を、ハイ〳〵とは云ひたれど常人よりも最少しむごい猫次郎が、旦那樣ホントの黄金無垢のサイ槌で打つて御遣はしになるなぞはまだチト御慈悲が足りませぬ。ナアニあんな奴等を嬉しがらせるは鐵餡の金皮といふサイ槌が宜しうござります。シテまた誰れかを差詰めおなぐりなさりたいのでござりますか。と伺ひ奉れば左樣さ、實はまだ貴樣には隱して居たが、太公望漁夫で居た時は是非もない道理、貴樣も元は其樣に洒落たなりも仕て居なかつたと同じ事で、乃公も中々初めから長者の子でもない。布袋の袋を胞衣にかぶつて出て來たといふものでもないから、貧賤の頃契り交した女房があつたのだ。所で其女房をば、察するところ雷婆と仇名を取つた婆めが今頃は定めし打ち苛責して居るだらうとおもふから、其恩と仇とを兩方一時に返したいのだ。あん糠の妻は鍵より下さずといふ事もある。女の巾着錢を貰つて繩暖簾で一盃やつたことを思ふと、早く其恩を報じたくおもふ。必ず今頃は貧乏人のおれに契つた女は、可愛やあの婆めに引窓の紐かなんぞで縛られてブラ下げられて居るに相違ない。之を思へば二の膳三の膳甘からず。だ。と餘程女には惚い御仁心なり。ハ、アッ有難い仰せ哉、さりながらつく〳〵と愚臣精忠を抽

にて、特に利目ありて早速に家來を得たるところを見れば、此家來等も多分雉子や犬の仲間なるべしと、常人一々名をつけゝるが、其名は即ち雉子六犬ン兵衞猿八コン吉猫次郎鼠吉等なり。家來どもは大に悦び嬉しがること、白痴が洗禮受けて天堂へ行かれる積りで居る如く、又舊幕時代松平氏を賜はりたるが如くにて、いづれも拜領の名ぞと威張り廻はし、我こそは餘毘常人さまの御家來、野末の雉子六、字はケンと呼び申すんだ、と羽ばたきの通りに兩手を振ふなんど、其勢まことに當りがたし。雉子六等各々才覺のあるものなれば早くも常人の命を受け、雉子六は東京御本宅普請奉行を拜命し、犬ン兵衞は京都嵯峨のあたりに御別莊普請を取りまかなひ、猿八は奧州松島に夏向きの御殿を作らむと出張し、鼠吉は帯に名高き博多へわたりて景色よきところを見立てゝ柳町へ冬向きの御住居の暖さうな家を作りに出張し、狐吉は鰈の役、猫次郎は鱵の役を仰せつけられ、始終怠慢なく相つとめけるが、殊に東京御本宅の普請奉行雉子六は、我が心利きたるところを御覽に入れんと三度の飯を七度半にして必死と勉强し、早速立派に仕上げゝれば、常人大きに御苦勞だつたと金盃を下賜して、猫次郎狐吉を引き從へ、悠々と小梅へ移轉りたり。衣服調度一切奇麗づくめ酒落づくめにして、金を使ふ事大名人の兩忠臣が万端取り賄ひたるとなれば、常人はとう〳〵田舍源氏の光氏然と成りにけり。常人既にかくの如くになれば、世界はまことに重寶なものにて、乞食の時は常人に傍へ來られて逃出したことのある男が、菓子折をもつて來て、ヘイヘイヘ、イのヘ

つめて馬に十三駄ありければ、之を見たる或る和尚随喜の涙を流して一切經よりもあり難いと悲鳴をあげて泣きけりとなり。其ほか銀貨大小取りまぜ六百六十俵、金貨取りまぜて色々にて馬盥に七十七杯、それを先づ少し手許に殘し置かんとチヨビリ一万圓ほど取り置き、他を日本中千五百の銀行に割りふつて預け置き、先づ立派なる着物を作らんと思ひけるが、何をするにも家來無くては不都合なり、是は家來をさがすがよしと思ひ、昔時自分が寢て居たりし眼鏡橋近邊をあるき、貯金所の前の廣場に立ち、袂よりざく〳〵銀貨を攫み出しバラリと撒くにぞ往來の人々仰天して我勝に集まり來りけり。其時常人大きなる聲を出して、我が家來になるものはなきや、と怒鳴りけるに、響の聲に應ずる如くに、御家來に相成らん、相成らん。一身を犧牲にいたすべし。粉骨碎身仕らん。デングリカヘシも仕らん。鯱立ちて行列の供奉もいたし申すべし。と異口同音に呼ばゝるもの大凡三千七百万人、ガアーツとばかり答へけるにぞ天に居たる帝釋も寢耳を驚かされたりける。

其十四

家來にならんといへる其大勢の中にて隨分利口らしき奴原三百人あり。其中の幾人を常人は頷にて指圖し撰み取りにして我が家來と定めけるが、むかし桃太郎が團子をもつて獸類鳥類を味方につけたる古法の今日に尙行はるゝこそをかしけれ。銀貨は團子より風雅無けれど、共に同じく丸きもの

骨でも牛肉でも構はない。暫時の間に大儲けして其憎まれ口をきいて可愛い女をいためつける糞婆の横面を打なぐつてやらう。黄金無垢のサイヅチで打ッたらア、いふ質の奴は、うれし涙でございまする、痛くて泣いたのでは御坐いません、どういたしまして、黄金無垢のサイヅチなら禿頭を十や二十打たれましても差し支へはありませんよ、打たれた痕を吉野紙でツッと拭きまして、其紙を焼きまして其灰を水の中へ入れますと少しは黄金が取れますよ、と嬉しがるだらう。あんな人情のわからない慾張つた奴等はコレラで死んだ人の衣服の襟を解いて、此中に札の一枚でもクケ込んでありはしまいかなどゝ云ふ奴だらう。ナーニ高が知れて居る大抵の奴は彼婆の弟子分だ。たゞ彼婆ほどえらくないばかりなのだ。今に見ろ金無垢の大才槌を作へて往來の奴をなぐつては有難うと御じぎをさせて遣るぞ。と大した威勢にて米相場にかゝりけり。

頃しも天氣は亂チキな天氣なれば、場内一同の大騒ぎにて、地理局の玉より早く睾玉が上つたり下つたり、自動鐵道の様にシユーと下るモカと上る、駈けるやうに相場が昇つだり降つたり、やれほらゑんさかほいと一夜大盡明日乞食の相場師ども爰を先途とイガムでイガムで大いがみ合ひを爲し居たるが、運の向いたのか、但しは運が他の人に脊中を向けたのか知らねども、常人先生買へば忽ち上り賣れば忽ち下り、また買へば上り賣れば下り、折返し蒸返し、ドカ〱のドカン〱と、滅茶苦茶に儲かるは儲かるは、算盤にも何にも乗らず儲かりけるにぞ、其歸る時は一圓紙幣を葛籠に

りたけ持出し、衣服をもありたけ持出し、末には指にはめて居たりし黄金にダイヤモンド入りの指環も取りて殘らず男に與へたり。常人大にこれを悦び今夜は誰があやつり師で誰が人形となりしや明らかならねど、何にせよ男は勇氣を振起し、女に分れて數々のものを脊負ひ、エツサ〳〵と歸りける。途中にて巡査に怪まれしが、其處は又忍びの術にてヒヨイと突立ち、しばらく電柱に化けて居れば、巡査は見失ひて其邊をたづねまはりしが、尋ね兼ねてや、獨りごととして曰ふやう、先づ見て居たものは此電信柱ばかりだ。關ふものか〳〵。若し此電信柱が口をきくやうなとて此間の晩の事でも言ひ出された日には免職だが、今夜のはマア大したへまでも無い、兎角世間に事無かれだ。

其十三

阿波忠に暇を貰ひて其家を飛び出し、照子より貰つたるものをこと〳〵く賣り飛ばして二百餘圓懷中なしたる常人、しめたり、此所を一番甘くやらずば男子にあらず。是非ともドカ儲けして立派にならむ。それにつけても今朝になつて照子は定めし義母にキメつけられて泣いて居るだらう。出の着物迄取ツて來たのだから定めし坐敷へも出られまい。義母は蓴菜のやうな筋を出して、オヤマア呆れた、此兒は堅いとおもつて居たが何時の間にか人を馬鹿にして盲目にして、何處の馬骨に入れあげたのだえ。其ざまを見るがよい。なんぞと此の我を馬の骨なんぞと云ツて居るだらう。よし馬

江は常人と照子とが睦まじげなるを見るや否や額に如龜〳〵と角を生し、モウと鳴いて牛になつて突きかゝつて來るに、アレト驚いて眼を覺ませば何の馬鹿らしき夢なりけり。照子は茫然と床の上に眼をふさぎ腕をだらりと膝の上に置いて溜息一つして不圖眼を開けば、常人は、我が前に坐り居たり。オヤ又夢になつたのか、今醒めたとおもふて眼をふさいで居たのが夢か、眼を開いたのが夢か、今度のが醒めたのか、常人の居るべき筈はなし、此家は我家なり、ハテ不思議なことゝゴマゴするを、常人は怪みて、どうかして居るか、と問ふ。今これ〳〵の夢を見ましたが貴郎が爰に居るのも夢ではありませぬか、何だか譯が少しも分らないので。と云ふ。常人から〳〵と打笑つて、夫は夢を見て醒めてそれから眼をふさいだ間に己が來たから又夢になつたかと迷ふのだ。ナニ大抵の人の毎日〳〵仕て居ることは何時でもそんなものだ。不思議でも何でもない。と云ひ紛らし、扨どうも今日は、と挨拶すれば、照子は急に思ひ出して、突然常人の胸倉を取り、今日の晝葦江に心ありげの振舞せしを燒きたてたくは思ひしが、まだ夢心の醒めきらねば、今の夢中の葦江のやうに角が生へては大變、又牛になつても大變なり、第一愛想もつかされるだらうし、明日から商賣にも障るし、と分別すれば悋氣はなくなり、悋氣なくなればやさしくなつて、論もヘチマもないが戀なり。女が既に是の如くなれは、男に論も絲瓜も有らう筈無く、兩人ともでれりと水飴のやうになり、いと睦じく語らひ居しが何事を工めるにや、やがて照子は有りたけの金を持ち出し、簪笄をもお

け、咬み付いて來りたり。コハ理不盡なり、何とせらるゝ、と振りほどきて逃げむとすれば、彼鼠チウと一聲高く鳴くや否や忽ち四方より伏鼠起り立ち、曲者ござんなれ、と追取り卷きたり。是は叶はじ、然らば猫にならむ、と思ふ途端、素より自在の忍びの術なれば忽ち猫と現はれける。彼鼠共は吃驚敗走し、扨こそ〳〵。姿をやつして猫めが我等を喰ひに來しぞ。と逃げて行くを追ひもせずして人家の屋根に登り、段々と進み行き、是ならば忍び込むにも賴りありと喜び行くに、又向ふより灰色の猫の汚くよごれたるが來りたり。今度は詰らぬかゝり合ひを恐れて足早に通り過ぎんとするに彼猫は近〳〵と進み來り、お前は〳〵。何處の牡猫に引かゝつて今までのそ〳〵して居たか、此浮氣亭主猫め。と猫の悋氣なればこそ引爬きけれ。是は迷惑猫違ひ、と振り捨てゝ一生懸命に逃げ出し、漸く思ふ人の家の棟に來りければ臺所の戶の上の櫺子より跳り込み、姿を舊に復して見れば、嬉しや照子は未だ寢ずして有明の燈の下に居たり。

其十二

戀ひこがれし常人と漸の思ひにて照子夫婦となり、今日は嬉しくも二人手を取り交して神戶の諏訪山あたりをぶらつくに、向ふから來たは派手作りの美人にて島田髷品よく結び、スマシかへつて錬り來りしが、行き違ふ途端に見かはせば彼の芳町の葦江なりけり。オヤと互に驚く間も無く、葦

したら定めし子が出來るだらう。ア、嬉しい。子が出來たら定めし美しい子だらう。其の子が少し大きくなつた時分、其子に可愛らしい洋服を着せて夫婦で跡から付いて行つて、上野の公園を歩きたい。妙、妙。あゝあゝそれにつけても金の欲しさよだ。ア、無やみに彼奴に逢ひたくなつた。今日は定めし照子も色々心中に物を思つた事だつたらうな。アノ家は婆めが居るから、どうもならねえ。夫にまた二人が辛棒くらべといふ約束だから、東京へ歸つてから唯一返も浸々話しを仕たことも無いが、ア、堪らない、イッソ逢ひに行かうか知らん。辛棒がないといふだらうな。又婆めが眼でも覺ませば大變だが。チン／＼／＼。ア、今は三時だナ。例の忍びの術で忍び込むには譯なしだが。と常人戀に夢中になつて逢ひたさ見たさの心募りけるが奇なる哉妙なる哉、忽然として鼠となりけり。是れ忍びの術の中の一なれども、鼠となりて走り出すも戀には厭ふ間無しと見えたり。常人今は鼠となりたれば形躰は小さく四足達者にしてコッ／＼チョロ／＼と尾を振つて戸外へ出で、段々と女の家を心ざし行きけるが途中にて向ふより來る鼠に逢ひぬ。イヨ今晩は、と向ふより聲を掛くる故、此方でもよいお天氣です、と云ひて去らんとするに、向ふの鼠はつく／＼と此方を眺めながら、扨々見なれぬ上鼠。何れの公家鼠の御忍びあるきにてましますや。と變に氣取つて云ふ。無下に振捨て行かんも流石なれば、我はさる尊き鼠にはあらず、といふ。さらば何鼠にてましますか、と又問へば、われは溝鼠なり、溝鼠の卑しきものなり、と謙遜して答ふる途端、彼鼠は御用と聲をか

や〳〵と四五人の男ども入り來り、ヤア始まつて居るか、新手の軍勢をもつて一ト揉みに揉み潰してあげやう、と坐に加はれば、初めはケチな三文花なりしも意外の大合戰とぞなりにける。然るに不思議や、來りし客どもは自業自得の果か、但しは才子の賄賂手段で情を機に寓しての所業なるか、又は全く天罰か、自ら惡しき事を云ひ出して運命大に惡しくなり、閉口して其坐を立去りけり。思はぬ幸福を得たるは常人と照子にて、可愛想なるは葦江、何の罪もなく手を負ひけり。

其十一

其日は遂に嬉しく打解けて積もりし話しをなす事もならず、面のあたりに戀人を見ながら、假面の上から痒きを搔く思ひして、終に主家に立歸りけるが、中々に見ずば物をも思はじ、逢ひて逢はぬに募る戀かな、とは誰やらが名言。夢を見かけてまた醒めて、醒めて思ふて夢に入るといふ騷ぎに、心火逆上して常人眠られゝばこそ。何でも早く金さへ儲ければ、好いのなるが、扨金の儲け難きは智者にも免れぬところにて、なんでも金を儲けたし、金を儲けて世帶を持つて、照子と夫婦差向ひで喰はねば、と思ふにつけても金欲しく、二人住むなら何處らが宜からう。濱町か深川か、柳嶋や小梅は工場が多くなつて厭だし。根岸に仕やうか、向島に仕やうか。洒落れた家をチンと構へたいものだが、あゝ〳〵それにつけても金の欲しさよだ。是はたまらぬ、〳〵。二人中よく暮ら

まで飛出して我へ煩く世辭をなすをば面白からず思ひたり。さりとて葦江の憎きにもあらねば、たゞ照子の思はくを兼ぬるばかりに、宜き程に挨拶して居るを、照子は早くも却つて嫉妬の眼ざし恐ろしく二人を頻りに睨みたり。此眼ざし決して他人には知れず、常人にのみ能く悟らるゝなるが、かゝる時智慧者になり居て他人の心の中の能く知るゝも却つて中々不都合のものなり。常人は是非なく罪もない葦江を蔑視んだ眼付にて見下して、我心を悟れよかし、少しも浮氣の心なしと照子に示せど、照子は中々承知せず、葦江が親切に汲んで出す茶を挨拶無しには取られねば、ありがたうと戴いて飲めば、照子の眼よりはキラ〳〵と嫉妬の電光を閃めかしたり。坐に他の女も多く居れば照子と話しすることは反つて少く、自然ちやほやする他のものと多く應答すれば、照子の眼はます〳〵光りぬ。常人大きに詰らぬ目に逢ひ、立ち歸らむとはすれど又何となく照子の傍に最少し長く居たき心もあり、女は元より歸さんとて嫉妬するにはあらず、他の女共も美しい男を歸さう料簡など微塵も無ければ、何か話しの糸を伸ばさんとはすれど、常人の話しはいつも照子の電光りに斷ち切られ、常人の遠慮に他の女どもの話しも斷れて、何となく一坐をかしからず打濕りたるやうなるを、利發なる葦江あどけないところで勝を取りて、皆さん花牌でも仕やうぢやありませんかと云ひ出せば、傍に居たる女どもも皆好からう〳〵、と賛成したり。照子は愈々胸わるけれども厭とも云ひ難く、是非なく花牌を取り出して一二番何の興もなく濟ますところへ、表より騷ぎちらしながらど

其十

常人は阿波忠といふ相場師の群とゝもにヌッペリとしたる顏にて東京へ引返し、其日より店の若者同樣に立働きけるが、何にせよ常人の男振滅法に好ければ、出入る女どもゝ阿波忠が家に居る下婢共も、餘計な御世話に無暗やたらと常人を譽むるまゝ蔭に日なたに利益を受くる事多く、且又奇術の御蔭にて智者になり居れば、物の道理を早く呑込みて、相場の呼吸も少しわかるやうになり、是こそ我運だめしにはござんなれ、何樣か少し錢を得たらむにはあはれ濡手に粟のつかみ取りをしてやらむとおもひけるが、或時主人の用にて照子の家に行かせられけり。表面は主人の用にて内心は顏見る事を樂みに嬉しよろこんで程遠からぬ芳町に行きける心の中おもひやられて可愛らし。主人の用は至つて詰らぬ事にて一寸柄のよき新發明だとか云ふ反物を送るだけのとなり。折ふし仕合好く照子宅に居たりけれど、義母の手前もあれば常人を使者あつかいにして、オヤ常さんかい、御苦勞さま、サア此方へ御あがゝ、と云ふさへ眼の內の無言の話には、却つて邪魔な言語なり。殊に朋輩も二三人來て居たりしが、其中に年は十六七の新妓の葦江とて此頃出たる素敵の美人ありて、丹花の脣、白玉の面、女にしても見まほしき常人の姿を見るより、頻りに世辭を撤りかけたり。常人の料簡にては、義母も居ず照子一人で居よかしと思ひ居たるに、色々の邪魔もの多きが上、餘計の女

浮氣もの、貴郎のやうに左樣そわ〳〵した事ぢやありませんよ。チヤンと先の先迄考へてあるのですよ。アノ忠さんといふ人は蠣売町の仲買ですがね、イヤにわたしにこだわつて來る好かない奴だけれど、それだけに又わたしの云ふ事をなんでも聽く操人形ですから、彼奴へ知らぬ顏であなたを紹介はせて、わたしの遠縁の者ですが、どうか御願ひですから御店で使つて商賣を覺えさして下さいな。と甘ッたれゝば、ナーニ操人形の糸を引つ張つて動かす樣な物ですから、ガテン〳〵をするに極ッて居ますよ。と人形遣ひの大見識なり。是は有りがたい、實に妙々、然しおれも少しあやつり人形ぢやないかしらむ。と思はず常人の云ふもをかし。オヤ濟まないことを申しました。わたくしは又あやつり人形になつたり、なつて貰つたりするのが、眞情のある中かと思ひました。と勃然として云はれて、常人慌て、一々其樣ひぞられちやア困るよ。お前の爲なら一生あやつられ通しても關はないのだが、只餘り働きがないとおもはれたくないから、ツイ口走ッたのさ。と云ひ譯をすれば、働きがありますかと聞いてから亭主にしやうと誰が云ひました。と、照手姫はなか〳〵痴話上手なり。折から他の座敷にて、引く三味線の音につれて唄ふ聲仇つぽく、義理にや立てずに居る腹も、戀に忍耐のなるものか、ついした事につんとして、投げた煙管の背面向き、中の好いほどエ、痴話喧嘩。

らないのです。と云へば、常人は惚い顏して、それ、それが水くさい料簡だ。なんの己がお前の云ふ事に就ないでどうするものか。一躰どうしやうといふのだえ。おれだつてお前に離れて生きて居るといふ樣な氣が毛頭無いのは、お前も知つて居さうなものだのに。とアベコベに女らしき言草を男が云ふも戀の癖なり。男に斯くまで柔しく出られて、照子は嬉しさうに氣の毒さうに、他でも無いのですがあなたも獨身、親御樣も無いと仰あるし、わたしも今のおふくろには、大した恩を負ツてるのでもなし、大八車と浮世の中は辛棒一つでわたられる、と云ふ歌もありますから、切なうござんせうが暫時の中、東京で奉公をなさツてはどうでしやう。あなたが奉公をして居らつしやる間には、わたしも少しなりとこしらへて、ナニ間拔の男ばかりを相手にする商賣ですし、魂魄のぬけがらになつて居る人達を誤魔化すのですもの、むづかしいとはありやしません。口先ばかりでも二百三百はきつとこしらへますから、それから二人神戸へでも飛んで、世帶を持つたら嬉しいぢやありませむか。と實意の見えたる話の半に、オツト皆迄聞くやうぢや聰明の才子にあらずといふもんだ。合點合點、大合點だ。だがマア、どういふところに奉公するのだ。お前と丸つきり緣の切れるやうな奉公ではチト心配でならないよ。と云へば、フン御自分の御心におひきくらべちやア成程御心配で御ざんせうよ。と忙しい中で痴話をするのは、斯樣した間の習ひなり。さうスネられちやアあやまるが、マア何樣いふ所へ奉公するのだ、何か好い智慧があるのか。と問へば、女の物を考へるのは

けに、人は本來鄙しいものなりといふことを心得たるがためなるべし。斯くて其晩は事もなく臥しけるが、翌朝年增また來りて、貴郎はほんとに罪作りですよ。昨晩の事があつたせいか、照手姬が今朝は御惱氣ですよ。との知らせなり。常人これに少し心配を生じたるが、晝過ぐる頃彼一群の人たちは運動にとて外出し、照子獨り止まりぬる樣子なるに、イヨ運が向ッた來たか知らん、と心中に悅びながら、所在無きまゝ常人障子を明けて廊下へ出で、山の景色を眺めけるが、不圖心づけば其廊下續きの加之同じ欄干へ寄つて同じ山を眺めて居る美しき女あり。是ぞ正しく照手姬なるべし。

其九

ふいと見合はす顏と顏、間にどんな風が居て、互の胸に吹き渡り、斯うした緣にはなつたるぞと、いふのは照子と常人との事歟。人目を偸みて兩人は、怪しからぬ不屆な有難い結構な仲となりぬ。或日離れの小座敷でひそ〳〵語らへる男女、女は男を淚に見て、わたしはどうしても明日歸らないちあならないのですが、どうしても貴郎に別れて彼のアベ忠づらと一所に歸るはいやでいやで堪らないのですよ。昨夜はほんとに夜一夜寢ないで良い工夫はあるまいかと考へて、漸く考へ出したことがあるのですが、貴郎が迚もわたしの云ふ通りになつては下さるまいと、それが苦になつてな

の間一ッ隔つたところあたりで見た若い御方は何時から御出でゝす、と聞いたので子。アノ餓鬼どもが其藝者を大變に嬲ッて子。其妓はまだ若いものですから顏を赤くして今しがたの騷ぎでしたが、わたしの背面へ隱れたりなんだりしたのですよ。眞實に貴郎は罪作りですよ。だから罪ほろぼしに御驕んなさいと云ふ事ですよ。と酒盞をもどしたり。常人今までは眇目の癩病の蝦蟇の如くなりし上に乞食なりし事なれば、無論女にやさしい眼づかひ一ッされたる覺えも無きまゝ此話しを聞くや否や、ポーッと頭上から湯氣の立つほど面くらひ、言葉もしどろもどろになりて、叔母さん〳〵、其藝者は何と云ふ妓か子。と忙しく糺せば、貴郎も東京の方だし、御存じなんぢあ有りませんか、照子といつて芳町ださうですが、照手といふのが仇名になつて居るのださうですよ。との返事なれど一向サッパリ知らぬ女なり。それもその筈、乞食なりければ、藝妓に近づきの有らう理も無し。然し常人今は酒氣に蒸されて魂魄ぼやけ太りに太り居れば、どうだ叔母さん其子を此方へ貰ッて呉れないか。と大膽にも云ひ出せば、浮氣もんですねー貴郎も。然し其娘は屹度ホントに貴郎を見て風を引いたんですよ。逢つたら柔しくしておやんなさい。ですけれどお氣の毒なのは此地のものなら隨分貰ッても上げますが子、何にしても彼方の御客さま達が連れて御出なさッたのですからいけませんよ。まだ一週間や二週間、彼方も御逗留なさるのですから、幾程でも何樣か出來る機があらうぢや有りませんか。といふにぞ、常人奮發して幾許かを此年增に呉れぬ。此處等は乞食を爲しだ

此方は少しチレテ居たりし事なれば、常人は急に口を尖らせ、大人しくして居るのが坊ちやんなら、馬鹿聲して居るのがお爺さんかね。と云ふに、オホ、勘忍して頂戴よ。あんまり貴郎が可愛らしいからツイ婆が坊ちやまと申したのですよ。あんなに馬鹿騒ぎをして居るのは、彼やいたづらッ子の餓鬼でさーね。と年増は騒がず答へたり。此一言に餘篦も笑つて仕舞つて、どうも阿母さんの辯舌にや敵はない。あやまり〱、御挨拶伊丹の酒だ。と指す盃を手に取らず、イヤですよ。お母さんなんて。と今度は一寸彼方がスネたり。是は惡かつた、そんならお婆さん一ツめしあがッて下さい。と云へば、尚イヤですよ。人を馬鹿になすッて。せめて叔母さん位で勘忍して置いてもいゝぢやありませんか。と云ふ。アイ〱、と戯れて無理に擬して一盃呑ますれば、女は一口飲んで下に置き、ほんとに憎らしい口の利きやうをなさるね。貴郎のやうな口のきゝやうが憎らしい人は今に烏に灸を据ゑられますよ。あんまり人をおからかひなさりますからね。ようござんすよ、好い事を知らせてあげませんよ。といふ。此の好い事の一語、常人の耳朶に觸るゝや否や、ソラ來た、占めたぞ、運が、と獨り言して急に乘りだし、閉口〱、恐れ入りました、好い事とは何ですね。と眞面目になつて問へば、あやまりましたか、といふ。あやまりましたともホントに閉口、ホントに閉口、といへば、それぢやア話しますからね、屹度お驕んなさいましよ。いゝへ虚言ぢやあ無いのですよ。アノ子、實はね、アノ騒ぐ座敷に出て居る一番美いのが子。アノ坐敷でわたしに子、此坐敷の隣

せう。なぜ奥様を連れてお出なさらないのですよ。と云ふ。可笑しや此方は昨夜まで非人乞食、奥様があつて堪るものか。だが、ムー、おれの男振りは何時の間にか能くなつて、人品も上つて居たのだつけ。此女めがかく云ふも無理ならず。と腹の中で笑ひながら、ハヽと頬笑んで、有れば中々連れずには來ないのだがね。ナニ又一人も妙さ、お甘い御言葉を頂戴するから、ハヽヽと云ふのも獨身ものゝ負惜しみかナ。と答ふれば、どうも御如才無いことを仰有ります、其れでは奥様がおもてなさらないのが無理ぢやありませんよ。と猪口をかへして注いで呉れる。ハヽ、御しやべりでは女房は持てませんかナ。と云へばイヽエ、程がよくつてと申すことですよ。と笑つて行く。ナンダ人を馬鹿にしやがる。乙にはぐらかす古兵め。と舌打ならして、獨酌の樂しみを取る折しも、忌々しき奴もあればあるものにて、隣り一つの明間を隔てゝ客四五人に藝妓も五六人、何か無性に騷ぎちらし、ガア〳〵と歌ふかと思へば、キイ〳〵と言はせて、洒落くさるものあり。人の氣も知らねえで憎い奴、と少怒りに怒りけるが、其中常人酒が廻つて來たれば益々堪へられず、何とかしてやらんと詰らぬ工夫を凝らすところへ、また先刻の年増入り來りて、滴るく笑ひながら、坊ちやん能く大人しくして居らつしやりますね。と嘲哢ひける。

其八

はかりでなく、チット眼の玉を動かして、一番やッといふほどやりたいぢやないか。と向ふの男へ猪口をさして又語りつぎ、時に銀公相變らず汽車雀かね。久しぶりで逢つたから今夜は一ッとりまきッこのだゝくさ遊びでもやらうか。と云へば、若い男は苦笑ひして、例のところは金神になつて仕舞つたから、對へねえ。と何か分らぬ事のみなり。常人他の事は分らねど、箱根伊香保は矢張相應に賑やかなることを知つて、其處こそ不自由なき人の寄合どころなれ、一番其處へ行つて見たら運も出るべし、と上野より夜汽車に乘つて高崎の驛に着き、一ト晩蒲團の味のよきに悅喜の夢を結び、明くる日伊香保へとこゝろざし、或る立派なる旅宿に這入りこめば、いらつしやいまし、ようこそ、御疲れさま、と東京ぶりの挨拶するは、それしやの果か色白の意氣な年増なり。是こそ總女中の取締りをする大將分の奴か。とおもへば、少し愛相のある會釋をして部屋に通り、茶を吞んで湯に入り、用もなく、宛もなく、ポカーンと坐り込んで煙草取りよせばく〱輿し、もう運がぶらさがつて來さうなもの、とおもへど、待てど、欠伸をすれど、寢て待てど、別に運の來る樣子も無し。こいつは少し詰らない、と又湯に飛込み、往來を散歩などしたれどこれも一向妙ならず。此の邊の地の下には何があると、睨んで見ても甘い事もなく、宿へ歸れば晩方となりたり。仕方がない酒でも吞んで寢やう、と酒肴をあつらへれば、先に見たりし年增來りて、チヤホヤと世辭を振り撒きくれぬ。一つあげませうと盃をさせば、それを受取ッて此方を見ながら、お一人で御淋しうございま

が因業湯屋で一厘呉れなかつたのも無理でない。と又感服して良い心持になつて外へ出れば、夕風涼しく我身を吹きて、無類無敵に愉快なり。乞食の中は此夕風も砂を煽つて面へ吹きつける憎いやつなりしが、今日は、風さん〳〵、おまへは良い子だ、と褒めてやりたいやうな風なり。

其七

彼の常人はぶらりと湯屋を飛び出し、又近邊の古着屋へ立寄り、一寸したる羽織、餘り見ともなくあらぬ單衣、帶迄買ひ整へ、下駄を駒下駄になし、帽子を買ひて、終に並の人ほどの姿になりぬ。是は乞食の姿にて突然良きもの買はゞ人の怪まむことを恐れて、段々と衣服を改めしなり。流石に智慧丸を呑みたるだけの事はありしとおもはれたり。扨其邊にて鳥屋に飛込み飯を食ふ次手に一本つけさせ、今日は傲然大名面をなし、十分に飲み、十分に食ひ居る中、運の向く樣に奇術師に賴みたる功驗か知らねど、隣席に圓坐して三四人飲み居たる男たちの話しを聞けば、近頃はどこもこゝも不景氣でおたまりこぶしはないが、これでも流石はまだ樂な國なのださうだよ。松前で豆を莢ぐるみ鹽漬にして食ふ内は蝦夷地も甘味があると江州商人が云ふさうだが、實はね、箱根大磯江の島伊香保なんぞに東京の人が居る内はまだそれだけ東京の甘味があるのだから、六升五合の世界だつて驚くにや足らないのさ。お互に腕ッこきの己等だ。いたゞきだの、かみそりだのなんと云ふことと

すが、然し事は成るまで秘するのが、事を成すの法でござりまする。即ち御存知の通り障害を避くるのには是非必用なは秘密です。どうかしばらく世間へは御洩らしなき樣君を天下の俊士と見込んで御願ひ申します、とこゝまでひそ〳〵曉舌り、急に大きな聲を出し、またチト御あそびに御出なされまし、と云ふ顔付は嘘をつかず、來ねば好いと云ふ面なるを、流石常人は早くも察して、何にせよ左樣ならとて十圓受け取り、突と戶外へ立出でたり。先づ兎も角も頭鬚髮を奇麗にせんと理髮處へ飛びこまんとせしが自分の衣服の汚きに困り、通り道のブラサガリにて三十七錢と云ふ出來たての浴衣を買ひ、二十錢で帶を買ひ、又十六錢にて日和下駄を買ひ、是で先づよしと、古衣を紙屑屋へ六錢に賣つて、髮結所へ飛び込めば、亭主の驚かぬ事かは、其髮の毛は塵埃のこびりついて恰も冑を被りたるごとくなれば鋏の齒が一度でぼり〳〵とかけて鋸の如くになりたりけり。然し商賣は是非なし、鬚髯まで剃つてやッて、香水まで吹きかけて、耳の垢まで取つてやつて、安いものかな、五錢なり。嗚呼なるほど五錢取るには是ほど骨が折れるのだもの、此の家で一文も我に呉れなかつたのも無理ならずと感心し、五錢拂つた上に禮まで云ふて飛出し、湯屋に這入つて見れば湯錢一錢三厘ながし八厘、此八厘のえらい事、まことに言語に絕えたものなり。湯を汲んで呉れ、背中を流し、大の男の拳骨が幾度動くか知れやせず、手まで洗つて、おまけに肩を揉んで呉れて、たたいて呉れて、淨行さまをあつかうやうに湯まで浴びせて呉れて、是で八厘か。なるほど此湯屋

ると野暮の中から蛇を出すぜ。オイ驚くめえ、あたりめえだよ。オチヽンのブイ。と強談に及べば、主人は大に驚きながら一躰貴君は何處からお出でゝす。無斷に人の室内に入り給ふは、家宅侵入罪。と云ひかくるを、フン、ナニを云ふんだ。シンニウのかゝつた好い馬鹿とは大方お前さんの事だらう。長い短いは八百屋の椽の下だ。早いが當世さ、丸を出しなといふことよ。コケオドシの鎧の法律言葉、そんな手を食ふ樣な半間半道ぢやごッせんだ。と例の三尺見透しの眼でぎろりと睨めば主人の腹の中の臟腑まで見え透いて、胃袋の中に玉子と牛肉とおにをんが相撲取りをして居るとが分りたるにぞ、占めたりと勢に乘じて常人は、憚りながら御前が玉子と葱と牛肉を今朝喰ッたといふ事まで知りぬいて居る、我こそは葦原の太閤が末孫耆婆扁鵲がヤシヤゴとは知らずや、ぐず〳〵すると罸を當てるぞ。と斯ふ云つたら三味線で受けるといふだらうがそう甘く行くやうな弱いのぢや無いぞ。とぺろりと舌を吐いて威張りちらせば、主人膽を潰して打驚き、そんなら今の密談も、と云ひかゝるを云はせも果てず、殘らず聞いて百尋へチヤンと筆記仕てあるぞ、と云ふ。主人は蒼然と面の色かはり、是は實に天下の俊傑とも存せず、尋常一樣の人とおもひあやまり、失禮いたしました。と丁寧に挨拶を仕直し、十圓持出して渡しながら、實に君は天下の俊士といふもの、願はくは先刻の話しを暫らくの間、長くとは申しません十日間ほど、お漏し無き樣願ひます。あれは實は天下のための大計畫で、決して世間に發露いたしても僕の名譽にこそなれ不名譽にはならぬ件で

、それ〳〵此間出世をした人だナ。ハヽア何か弱身のある奴と見えて、今の書生がイタブッタのだナ。よし〳〵五圓も取れゝば結構だ、おれも一ッいたぶッて遣らう。今までは己一人が乞食かとおもつて居たが、乞食もいろ〳〵だ。中々甲羅のはへた眼のつけどころがあるナ。たしか和色の家は東京ではなかつたナ。腹が耗ッて居るが一番出かけやう。とおもひ立ち、途中で腐れた飯を貰つて腹をこしらへ、のこ〳〵さい〳〵と手振りで出掛けて行けば、立派なる門構への中に妙に氣取つた家あり。これを和色の家と見るよりも、取次を頼んでも埒明くまじと、例の忍びの術にてそろ〳〵這入り込み、書生の二人ばかり居る間を過ぎて、應接室らしき處を覗けば、主人と客一人と、なにか話しの最中なり。話しは何やらむづかしくて流石の智慧でもまだ世なれぬ故わからずにありしが、何にせよ大した立派な話しでは無いと見えて小さき聲もて話し居たり。頓て客の歸るを待ちて、ヒヨクリと現れ、忽ち主人を捕へたり。

其六

此處は文覺の勸進帳でもなければ辨慶の勸進帳でもなく、乞食一流の古流のところへ、妙に理屈の柄をすげて、柄杓を出せば順禮なれど、憐れつぽくは出掛けずに、イヤ御主人、文句は云はねえ、手短に驚かし奉ります。十圓ばかり返して下せえ。どうぞや十圓ばかり下さんせ。クズ〳〵なさ

硝子の箱の中の物を唐物屋の店頭で見るより明らかに見ゆるにぞ、嬉しや此所らに銀貨のかたまりでも馬鹿野郎のとゞのつまりが骨壺に入つて居る樣に世に捨てられてありはせぬか、と能く〳〵見れども、情ないかな、貝殼の碎けたのと蘆の根の腐つたのと蚯蚓ばかり見えて他に何にもなし。何かありさうなものと尙能く見るに、黑くて丸く小さきものあり。占めたと喜びて頻りに土を掘りて見れば、悲しや金は金なれど黑く塗りたる眞鍮の扣鈕なり。是は叶はぬ、又外に分別を仕かへねばならず、と思ふ中に、二人つれだちて書生躰の逞ましき男の話し行く聲す。これを思はずも耳に入るれば、君彼野郎も隨分吝いではないか、然し吝いかはりには臆病だから僕は五圓ぶんどつた。と一人が言へば、さうかい、それは妙だつた、是からしやもでも驕り玉へ、とまた一人が云ふ。驕るよ。我が黨は天下の豪傑だもの。不義の奴の財を奪つて朋友と飮んで仕まふ。是もまた一段の快事サ。行かう、然り、行かざるべからずサ。あんな和色い樣な奴が議員で候だからをかしくてたまらない。僕等にさへヒョコ〳〵するやうな奴が何だとか彼だとか乙に嘴をとんがらして唐辛子屋の口上の樣な事を云つてたとて、陳皮もとんびもあるものか。あれでも外交事件がどうのかうのといふからをかしい、實に笑ふに堪へた話しだ。と一人は誇りかに言へば、一人は、君は又實にえらい、君の母は多分夢に灸を据ゑられると見て君を孕んだのだらう、實に君はあゝいふ奴に灸を据ゑる名人だ、と冗談を云ひながら行き過ぎたり。はて何とやら和色とは聞いたやうな名だ。ム

刻の馬車の中の人のやうになるが好いんだ。ナーニ此方は大智慧者、大好男子、運のよくなる呪術も受けて來たのだから勝負事をしても負ける氣づかひないのだ。一番此處は運發とやらをやらかして、途方もないえらいものにならなくちやならの木山椒の木だ。楢なら薪になつてしまふのを紫檀黒檀伽羅栴檀となつて、佛師につかまつて成佛しちやあ、ドッコイ堪らないぞ。ア、なんでもよいが出世がしたいぞ。出世しやうか、働こか、何を目當に働こか。何でも爰が智慧袋、絞つて油を鼻へ出し、一ト分別のあるべきところだ。だが待てよ、往來中では眞事に困る。と京橋より横に折れ、新富町を通つて築地の海岸へ飛び出し、海を見やりて岸邊に腰かけ、眼を八方へ配りつゝ何樣して出世をなすべき歟と、暫く思案を凝らせしが、元來乞食の事なれば三文の貯蓄があるでもなし。日本銀行には我の金が預けてあるやうなもので、イツデも掌さへポンと叩けばヘイヘイと五十万圓朽百万圓、沸いて來るべきにきまつてるのだが、一文なしの、元手なしの、御衣裳きたなの、虱ッたかりでは、人が承知をしないだらう。ハテなんとかして少しばかり錢を欲しい。それで衣服をこしらへての上、又色々の分別があらう。さしづめ十圓ばかりないかなア。困つたな。智者でも種なしぢや叶はないか知らん。天一の手品も種がなくつちや出來めえからナ。ア、十圓ばかり欲しいなア。妙々地の下三尺見透しの眼だから一ト睨み睨んで見やう。と市川團十郎が發狂したと云ふ見えて刮と目を開き、自分が腰をかけて居たる近所の地を睨んで見れば、扨も奇術は争そはれぬものかな、

其五

立派なる車の中の女を何者かとおもへば、畜生ッ、エークソ、千代亭といふ待合に、いつぞやの朝、寝ぼけづらで居た藝妓なり。乞食の付込み所で、朝は大抵料理屋待合なんといふ弱身を持つてる所へ行きて文久一つか五厘銅貨一つを是非ふんだくる習ひなるが、ふんだくる事が出來るからふんだくるのに不思議は無いので。おれは或朝彼所に行つた時寝惚面して居た其藝妓メに違ひなし。エート、慥あれは丁次とかいつて柳橋の尤物だ。さう〳〵彼奴の名の提燈のぶらさがッた家へも押しかけて十文一ッもらッた事があつたつけ。畜生メ甘く遣ッたな。多分彼の奴メも我の通りに奇術師の世話にでもなつて、そして襟元の痣でも取つて貰つたことがあつたかも知れねえ。何しろ結構な御運で、運でれを生擒の、従二位夫人ぢやあるめえかナ。イヨゑらいと申します。と戯れて、又歩き行く向ふより二輪の自轉車に乗りて此方へ來る若い男、チーンと鈴を鳴らして通り過ぐるを、客待ちをして居る車夫が、忌々しい野郎ぢやァ無えか、車曳きかと思やあ素人で、素人かと思やあ車曳きで、片身づゝて雪と墨の事を仕て居やがる。何のことあ無え人間の鰈見たやうな野郎だ。あのチーンが一躰氣に喰はねえ。ノーお乞食。と八つあたりに話しかくるに、オヤまだ我は乞食だつたか、此奴は情ない。智慧者でもあり、色男でもあるに、御乞食ぢや始まらない、同じ人間だから己も先

氣て亂れたれ、面の色は白玉の如く、唇の色は朱の如く、鼻はチヤンとして、眼つきは蓮の巻葉とも云ふ可く美しく、眉も濃からず薄からず、どこにまづいところのない大々々々好男子、自分ながら驚くほどの色男、福助なんかの及ぶところにあらず。時代違ひだから是非もないが、田舎源氏の光氏や伊勢物語の業平殿と中原に鹿の牝を爭つても負けさうもない男振り、ヤイ業平等、口惜しければ我と一所に博覽會へ出て、どつちが金牌を取るか較べッコで來いと云ひたき程なれば、獨莞爾しながら、ア、鏡は好男子にやあ樂みなものだナア、と口中で獨り言して、不圖店前を見れば、忘れもしない先月の末頃、おれが此家の裏に立つて、どうか一厘やつて下さい、と然も其時は半日餘何にも喰はなくつて腹の蟲が氣絶しさうな時だつたから、眞實に涙ぐんで柔和さうな女だと思つて泣き付いて頼んだのに、ツンとした顏をして酷くも、出ないよ、きたない、早く其處をお退き、と云つた其娘めが、味な眼付をして我を見て居たり。フーン、男が好くなッたッて素の我とは知らねえか。馬鹿め。と罵りて、段々と日本橋の方へ進み行くに、向ふよりエーィと掛聲すばらしく仕て、往來の人を犬ころでも追ひ散らかすやうに威張廻し、二頭引の黒塗馬車勇ましく馳けて來るがありたり。出合ひがしらに中を覗けば、髯のふさ〳〵と奇麗に生へた立派の人の巻烟草をふかしながら悠々然として居る其傍に、奥様づくりで高尚な御人柄な華美で無いシミでない御誂へ向きと云ふ裝の二十二三の美人が居るを、ハテ見たやうな、と小首を傾くる間に車は早くも馳け去りぬ。

歸りける。

其四

餘篦常人は己が思ふ通りに我が身のなりければ大よろこびにて獨りニコツキながら、平日は身を屈めて通りし大道を、今日は傲然と頸をのばしながら通り、眼鏡橋にさしかゝりて、平常は彼樹の下に蹲踞んて居たのか。あゝ見苦しい奴だッたナ。然し今は最早千万人に勝れたる我なれば、なんぞ再び彼樹の下に居ることをせむやだ。とイヤに威張りて、昨日までは恩を受けたる其樹を今日は輕蔑して睨みつけ、又其邊に佇める巡査を見て、ざまを見ろ此馬鹿め。手前は矢張り相變らず妙に小ムヅカシい顏をして、閻魔の申し子見たやうな面を往來の人に晒して居るが、相變らず智慧者にもなりはすまい。忍びの術も覺えやしまい。地の下三尺見透すことも出來はすめえ。大力にもなるめえ。我は氣の毒だが最早乞食ではないぞ。と昨日は恐れし人を今日は輕蔑して見ながら通り過ぎ、須田町を通りて、フト或る鏡屋の前に來りぬ。鏡屋にては客を引くため店の正面に一間四方ほどの大きなる鏡を据ゑ置けり。常に常人は此鏡屋の前を通るたびに自分の容貌の癩病の蝦蟇の如くなるを愧ぢて、サッサと通り拔けしなるが、今日はわざと其大鏡に立ち向ひて、よく〳〵見るに、昨日一昨日とは大きにちがひ、衣服こそ垢付き破れたるを着て居れ、髮こそ垢埃のころもを着て白ッ茶

文を唱へて、それもう大力になつた、といへば、眞實かな先生、一番相撲を取りませう、と云ふより早くエイと組付き、ずでんどうと投付くれば、奇術者顏をしかめ腰を摩りて起上りながら、ひどい事をなさるなア、と泣きさうなり。ヤ、これは大きに失禮致しました、最一つ願ひたいのは運を能くするのですが、是は奇術でもいけませぬか、どうです、カステラで頰ぺたをたゝかれて、齒の間からラムチが沸くと云ふやうな運にはなれませぬかナ、と問へば、それも譯ないことだ、と又呪文を唱へて、フッと息を吹かけたまへり。アッ、あり難い、〳〵、ありがた次手に願ひませう、身躰を不死身にして、記憶をよくして、心の働きを怜利にして、音聲を成田屋音羽屋高島屋淸元新內義太夫長唄なんでも出來る樣な重寶な聲にして、眼を地の下三尺見透すやうな眼にして、金剛石でも珊瑚樹でもヒヨイと搜し出せるやうに、それから又水の中に十日程は居られる樣にして、夏なぞは龍宮の乙姬に團扇で扇がれながら晝寢をするといふ寸法にして、そして又忍の術が出來て、鼠になつて、猫になつて、蜻蛉になつて、犬になるとも出來る樣に、どうか是だけ御安い御用ですから御願ひ申します。何れ其內又他日入用の事がありましたならば伺ひますから。と云ひ出せばイヤハヤ途方もなく慾ばりの御方だな、ともかくも施術券を持つて居らつしやるから皆御求めに應じませう、と頻りに呪文を唱へたり。此方は占めたり、と打よろこび、どうだ此先生、施術券を斯うもつて來られては堪るまい、ざまを見ろ、と笑ひて悉皆望む通りに自らの身をなし濟まし、揚々として

單語篇の化けた樣な男だ、と笑ひながら又呪文を唱へて全身を手の腹にてさすり給へば忽ち治りぬ。コイツは愈々妙々、眇を治して下され。ムヽ、妙ですナ、もう治りました、有難い。片眼を治して下され、アヽもう治つたな。色の黑いのを治して下され。ホツ、もう治つた。どうか眉毛を治して下され。益々妙ですな、もう治りました。あんまり慾張る樣ですが智慧丸を一粒下されといへば、是も直ちに吳れたるを慌てゝ呑み下し、然し先生智慧は付いたか付ぬか鏡を見ても知れませぬが、是も確に智慧が付いたには相違ありますまいナ、と問ふに、左樣さ、試みに二ツ三ツ難問をかけて見やう、おれの出す難問が解ける位なら貴樣は智者になつたに違ひない、よしかテ、一日に百里步行く法如何、と尋ねたり。常人は何の造作も無く、滊車に乘りますと答へたり。ウマイ〳〵、然らば、錢なくして酒を呑む方如何、と問へばエート紙幣で買ひますと答へたり。中々えらい、河童を釣る術ありや、と問へば、下帶へ鉤をつけて泳ぎますと答ふ。アヽ智者だ、そんなら大難問をかけますぞ、人を內々で殺す法如何、と問へば、流石の常人も是はむづかしい、ちとお待ちなさい、と云ひけるが、眼を瞑いて居て鳥銃で撃ちます、と意氣揚々と答へたり。妙々、急に君は智者になつたに違ひない、中々及ばぬ。敬服々々。書物の敎ふるところも大抵そんなものでげすテ。左樣さ六韜三略もマアそんなものでござります。時にもう用がなければ歸り給へ、と先生少し煩くなつて歸さんとすれば、ドツコイ、まだある〳〵、どうか大力にして下され、といふ。やれ〳〵うるさい、と呪

今さら何となく氣味惡く、常人のおづ〳〵して居るを見て、奇術師笑ひながら、此方へ〳〵と近く招き寄せ、椅子へ腰を掛けさせ置きて、彼大なる箱より竹の篦と鐵槌とを取り出し、何やら呪文を唱へ了りて、扨彼鐵槌を手にして、一躰お前の鼻は骨からして曲つて居るからチト面倒だ。お前は多分南部の鮭の生れがはりだらう、と云ひながら、コチ〳〵と叩き初めたり。常人ヒヤッと飛び退きて、先生たゝき直すのですか、是は驚いた施術ですな。と逃げ腰になれば、ナニ少しも驚くに足らずさ。呪文の功で少しも痛くないから、と無理に捕へてまたコチ〳〵と叩きたり。成程少しも痛くはない故、コイツハ妙だ、と其儘にまかせ置くに、遂に叩き直して眞直になりける其槌の痕を竹の篦にて摩り、槌痕をも留めざるに至りて已みけり。鏡にうつして見れば我すら驚くほど好き鼻になりたり。是は嬉しや、ありがたや、扨先生右の眼尻の鯱の尾の如くにあがつたのも治りますか、と問へば、勿論直るとのことなり。どうか御次手にそれも願ひます、と云へば、イヤ治してやるは譯なけれど施術劵は持つて居るか、と糺す。ハイ〳〵、こゝに、とさし出すを見て、先生又呪文を唱へ、眼の上に手を掩ひ、少時たちて掌を取り去り、そら直つた、鏡で見ろ、との言葉なり。常人鏡に對へば此は如何に、既に好き眼付になり居たり。次手に左の眼も願ひます、といふ。まだ施術劵もゝつて居ます、といへば、先生又先の如くにして鷲の嘴の如き下り眼をも治したり。どうか最一つ全身のなまづを治して、と云へば、ヤレ〳〵面倒な奴だ、貴樣は鮭で鯱で鷲で鯰で、どうやら

腐屋が店を明ける、鍛冶屋がカン〳〵たゝき出したり。此時なりやと駈け出して神田八丁堀とちめんやの故跡を圍ひ込みて大門いかめしく建てたる奇術師の玄關に威張り聲で、頼まう、とこそは怒鳴りけれ。どうれ、と先方も勿躰聲して、書生らしきが立ち出づれば、それがしは辱なくも天下の浪人片岡が餓人の流れを汲める大君子、と申すは負惜みの洒落で、本名は餘篦常人、むかしは極樂の身分なりしが近頃は乞食をいたし居るものなり。先生が奇術によつて我が望を達せんとて推參致したり、早速御とりつぎ下され。と四角張つて云ひ込みたり。書生はこれを聞き終りて、委細明瞭に相分りました。然し施術券は御持參でござるか。して又番號は如何に。と問ふ。施術券は確に持參せり、と一枚を取りて差出せば、其番號を改めて、此方へと通す。立派なる座敷に入りて見れば、悠〳〵として先生座し居給ふ。一禮して座に着けば、此方へ〳〵。さて何を御所望か、其望次第、我大奇術にて利益を與へまゐらすべし。との先生の言なり。ハツあり難き仰せかな、ごらんの通りの鼻の先のまがりたるも治り候べきか。と云へば、いと安き事なり、然らば此方へ來られよ。と次の密室に入りたまふ。其後に付いて其室に入れば、こゝには大きなる鏡あり、何かの大なる箱あり、藥の罎五ツ六ツあり、何となく物凄きありさまなり。

其　三

待つ。おもへばこれは平内様の眞物か將僞物か、正躰のほどは分らねども、何にしろ常人大喜びにて、これは〳〵能くこそ御いで下されました。早速ながら彼の施術の劵を御持ち下さいましたか。と伺ひ奉れば、ファ、ファ、ファ、ファーと笑ひ玉ひて、惡哉々々。汝能くこそ蟲のいゝ大願を立てたるよな。如何にも望の志ほらしからぬが感心なれば施術の劵を呉れむとしたれど、元來それは我が物ならねば比丘尼に根掛の借用願ひ、考へて見さつし、御生憎さまちやアねへか。ダガナ、そこは又泣く乞食と巡査にやア叶はねえといふ法律だから、我も實は工夫をめぐらし、例の通力といふ奴でチヨロマカし、三十枚ばかり持つて來たよ。サア御手々を出しな。と案外あり難き御意は畏こし下地は慾張なり早速片手をさし出せば、直には呉れもせで、チン〳〵〳〵〳〵との御意なり。オヤまアコリヤア何樣したのだらう。とマゴ〳〵するを、馬鹿メ、人間の癖にチン〳〵が分らぬか、と叱り給ふ故、ハッと心づき、犬のまねをしてチン〳〵をすれば、今度はお廻り〳〵、とぢやらし玉ふ。お廻りも濟ませて漸く三十枚の劵を貰へば、忽ち何處かへ御姿は消えてなくなり給ひけり。チン〳〵を仕たりしは餘りなれど、物に役さるゝものは身の屈するをまぬかれずといふ事なりけむ。常人は元來が乞食なれば一向これらには頓着なく、獨り莞爾とよろこびて、是さへありや大願成就、ヤレ有難やと伏拜み、其處を立ち去りて、早く夜の明けよかし、一番に跳りこむで奇術師に奇術を受けむ、とうろ〳〵そこらを歩行く内、朝日の光りヒラ〳〵と輝き出して、鳥が鳴く、雀が鳴く、豆

を打棄らかしになさる氣づかひは無い。あの神様あの神様。と一心愚にも決着なし、淺草に行きて矢鱈に拜みかき口説き、なんでも平内様を頼んで大願をつらぬかんと、ドゥゾヤ平内様、奇術師が施術劵を百枚ばかり下されや。乞食が助かります、命の親分でござゐます、どうか百枚下さい。とて平内様も出ないよと酷くも言ひ給はず、タヾ默つてのみ居給ふに少し頼もしきところもありて二十五六枚と云ふべきところを輪をかけて必死に祈り奉りけるが、半日祈つても利目なし。さり又半日祈りけるに驗更になし。又一日祈りけるに應驗なし。又一日、又一日、又々一日、又一日、死物狂となつて、かうなりや意地だぞ、生きて居る我が死んで物言はぬやうになるか、石の汝の口が物言ふやうになるか、二つに一つの大詰を見ん、サ、何と〳〵と詰めよせて睨んで見ても矢張驗なし。さりとは聞こえぬ平内さん、是程切ない我が願ひ、愈きゝとゞけて下さらねば、お前の家の軒下で首を縊つて死にます。と恨みつ泣きつ一心不亂に口説き立つれば、其夜も更けて丑滿頃、ゴーンと空腹に浸み込む鐘を相圖に石の御本尊動き出して、素敵滅法無暗矢鱈の靈香薰じ、乞食常人の前に突立給へり。

其二

待ちまうけたる御神の動ぎ出て給ひしなれば餘篦常人は大きに喜び、平蜘のやうに平伏して仰せを

走して後、辛くも一枚を得給ひし由。左すれば迚も我等は得難きことならむ。ア、施術券が一枚ほしいなア。と、やゝしばらくは嘆じ居けるが、マテヨ、一枚貰つたところで、一枚では一術しか行つて呉れぬそうだが、一枚貰つたら何の術を施して貰はうか知らむ。力を授けて貰つたつて土方になるのも可笑しくない。大力の見世物に出て腹の上に大道臼を載せ、餅を其で舂かせたところで初まらない。そんな事より此鼻まがりを治して貰はうか知らむ。鼻のまがつたのを治して貰つた所で何にもならない。甘いものが食へる譯にもならないのだ。そんなら眼尻を治して貰はうか。ドッコイ一枚では一術だから右の眼尻を治して貰つても左の眼尻がいけないぞ。あゝ困つたどうでも是は二十五六枚貰はなけりや追付かない。ア、仕方がない、一枚さへ貰へぬのに二十五六枚欲しいのだから出來ない相談といふものだ。ほんとに是が乞食の夢話しといふものかなア。然しどうでも其施術券を貰ひさへすれば占めたものなのだから一番慾ばる時の神だのみと出かけて、御夢想に二十五六枚頂戴と立願しやう。こいつは妙だ。神樣は何がよからう。是は大慾の願立だから成るべく魔神が頁さそうだ。鬼子母神樣に仕樣か、然しあれは柘榴をかぢつて滿足したやうな顔をして居らつしやるからいけない。毘沙門樣にしやうか、然しあれは鎗持奴も連れて居ない大將だからいけないな。稲荷さま、ム、是はよかろう、イヤ是もいけまい。神田明神是も御承知下さるまい。ハテナ、ヤ思ひ付いたぞ、久米の平内さまに限る。石でこしらへた堅人らしい神さまだから、屹度おれの願

大珍話

其一

或時は眼鏡橋の袂、又或時は和泉橋の裾あたりに、ごろ〳〵して、狗のやうに豚のやうに生活し居たる乞食ありけり。素性は中々尊きものにや、苗字は餘篦名は常人とて乙に由緒のありさうな二十五六の男なり。此男はスガメにてメッカチにて、眉毛は妙に刷毛のやうに濃く、鼻高けれども横の方に歪み、右の目尻は鯱魚の尻尾の如く上り、左の眼尻は鷲の嘴のやうに下り、總身にナマヅ出來て、然も顏は黑樂燒ほど黑く光りあり。隨分慾は人間なみに有れども智慧は乞食になつたるにても知らる。力量でもあれば土方日傭人足にでもならるゝなれど、力は僅に飯桶を持つに足ると云ふ位故、平常杖にすがりてひよろ〳〵と仕て居たりしが、此頃大評判なる奇術師の風評を聞き嚙り、或時眼鏡橋の傍の柳の樹の根方に匍匐ひつゝ、つく〳〵と嘆じて、我も同じ人間に生れながら天命とは云へ是の如く乞食非人と賤まれて生涯を送ること殘念なり。どうかして奇術師の施術劵を貰ひ受け、少しは人間らしくなりたきものなり。然し此分では迚も貰ふ事難かる可し。聞けば從二位の人の令孃が色を白くせんとしたるにさへ其劵を得ること容易ならで、御家の三太夫身命をなげうち奔

との我が緣の果敢無きも過ぎし世よりの定まりなるべく、まだ〳〵一度にもせよ見えまゐらせ、しみ〴〵とにはあらぬも御聲音をも耳にせしは、我には過ぎたる幸ひとおぼえまゐらせ候、無常迅速後れ先だつ世の例し、ゆめまぼろしの世にありての悲みも將歡びも深くは申すに足るまじく、我が上に逼りたる事あればとて世を安く送り居玉ふ御許樣を何煩はし奉ることのあるべき。願ふはたゞ御許樣末長く榮えさせ玉ひて後聖衆來迎の時にも至りたまひなば、彼の世界にて一片の御言葉を賜はり度のみに候。かびらゐの歌もしるしありし昔語り、一念朽ちせずば手を拍て今を笑ひ候事もありぬべし、と果敢なきことを賴みにて殘り惜しき筆をとゞめまゐらせ候。あら〳〵かしく。

雪雄はこれにも返書せず、たゞ打鬱ぎ勝となりしが、其日悶を散ぜんとてか白雲十里の堤ならで青葉つらなる向島に散策しつ、何に感じてか風收まりて江水なめらかなるが上を靜に下る舟の行衞を見て、泫然として獨り淚を墮しける。

此男と此女との此思ひ此情、知らず其後如何なる象をなして終りしかを。

玉ふ、此のしめやかなる日を淋しくや送り玉ふ、此の麗かなる日にも去歳のかゝる日我とゝもに麥の青く菜の花の黄金色美き間をゆる〳〵と歩みて藥師おはし玉ふ田舍の御寺にまゐりしよなど思ひ出し玉はば御心地惡くや思し玉ふらんなど徐に胸痛く覺え申候。御許樣は花岡樣より伺ひ候には、御兩親樣も御揃ひあそばし、何一つ御不足無く、世の憂きといふ憂き事も書物よりほかには御存知無く御暮しにて、他心無く御學問のみに耽り居たまふよし。身の不幸をおもひ候につけひとしほ御羨ましく、おろかなれど我が上も父こそ無けれ去歳までは御許樣と同じくてありつるものを、習ひ學びし花を挿し琴を彈ずる猿ほどの聊かの藝の、今年は仇し戯れ男の喜悦を受けんために學びしやう成り果てしかと、世の事の測られぬを歎き候ばかりに候。花岡樣福岡樣は思ひきつて申しあげ候へば好からぬ御方かと覺え申候間御心づけあそばさるべく候。さりながら花岡樣御言葉の中より御許樣の御上を推しあげまゐらせ、つく〴〵考へ候につれ、如何にしても御許樣をおろかなる心に忘れまゐらせかね候が、今日といふ今日は、如何にしても賤しき身賤しからぬ心のそれはさて置き、よしなき文ども滋くさしあげまゐらせて、學問のほか餘念も無く日を送り居玉ふ御許樣の御眼に觸れ候は、譬へば清める水の中に得知れぬものを投げ入れ候にひとしく、可惜御許樣の御心を、落つる花の力ほどにもせよ動かしまゐらするにて、まことに御許樣を慕ひまゐらせなば成るまじき事と心付き候まゝ、最早ふたゝびとは文もさしあげまゐらすまじく思ひ定め候。おもへば如是御許樣

も、御返しは無けれど定めし相屆き候事と存じまゐらせ候が、御返し無きは思しめしありての事にて、全く其方樣に御異りなどありてにはあらずと昨日餘所ながら花岡樣に此頃の御樣子御尋ね申上候て承はり及び、且は御恨めしく且は安心いたしまゐらせ候。花も末となり候て樹々の梢青み渡り、朝未明の景色などひとしほ心よく、殘りし月の光り薄く、斷れし雲のたゞよふ中を杜鵑の鳴きて過ぐる一ト聲二聲、おろかなる身にもおもしろく聞こえて、憂無くて聞かばと覺え候此陽氣の時候に猶よく書齋につゝしみ居玉ふて、紙上の聖賢と對し居たまふよし。冷しき御心入れ、淸き御樂趣、申すは烏滸なれど御慕はしくもまた御羨ましく存じまゐらせ候。それには引替へ家居こそ宏く綺羅こそ飾れ、忌はしき此廓の中に起臥しいたす身の利欲の暑くるしき風に取り卷かれ、拂へども去らぬ蒼蠅のやうなるあさましき男どもに纒ひつかれ候て、旦より暮まで暮より旦まで、一たび心融けて笑ふことも無く、一たび心進みて語らふことも無く暮し候が上に、賴むべき母兄は雲の彼方に在りて、文も四五度よりほかは今だに得ず候心淋しさ、御推もじ下され度候。月日立つに連れて物の移り眺の變り行くにつけ、想に浮ぶ故鄕の彼處は今やかくやあらむ此處は如是ぞあるべきなど心往き候も却つて慰む便宜にはならで悲しさを增すばかりとなり、昨日の雨、一昨日の夜の風、今朝の晴れたる空に雲絕えて世を自己がもの顏に翅輕く蝶ひら〳〵と此樓の窓近く飛び去り飛び來り候にも、皆弱き心の何につけ彼につけ打迷ひ候のみにて、母上の此の騷がしき夜を寢難にや過ごし

しきゆゑ申しも上げず候へど、海士獵師が子にも生れ申さず、又此廓の風に吹き靡され候ほど脆くも心を持ち候はねば、一概に御取上げ無きならば身の不仕合の是非無しとは申せ、餘りなる御心の御情無さ、御許樣には御似合はしからぬ御事と身も消え心も絶え候ほど悲しく恨めしく存じまゐらせ候。然のみ御心強きばかりが正しきにてもあるまじく、濡るほどにも無き露ばかりの御情ありとて御汚れとなるにてもあるまじきを、御返しさへ無きはうるさしと厭ひ玉ひてにや、但は御示しをもどきて繁く此方より文まゐらせしを惡み玉ひてにや、然もあらば重ねて御心に障るやも知らず候へど恐る〳〵此文さしあげまゐらせ候は此方に申すに申し難き迫まりたる思ひのあればぞと何卒〳〵御汲み取りありて何とか御返し玉はりたく願ひあげまゐらせ候。あら〳〵かしく。

雪雄は之を繰り返して幾度と無く讀みたりけるが、何とか思ひ定めたりけん返書はなさず其儘過ごしぬ。

其三十六

申しあげまゐらすべき言葉は既絶え申候が、御汲取り願ひまゐらせたき心は天遠く雲靜に遣り居り、岩にせかれ風に扇らるゝ流れの身の今の急なるをも忘るゝまで打烟る思ひに堪へかね候まゝ、又しても御目障りなるべき文して申しあげまゐらせ候。先の日さし出し候文も、又其前にさし出し候文

は我が愚なる罪の咎ゆゑ露御恨み申すところも無く、如何にしても御心を取り直し玉はるやう僞り無き眞心を勵まして此方の眞心のあはれと御許樣に思はれまゐらするまで切なる思を運ばせ候より ほかも無く候。實は御許樣御來臨の後花岡樣福岡樣は御足近く御運びありて其度ごとに彼の肥胖婦に御許樣のみの御入らせ無きは妾が御待遇の粗畧なりしゆゑと口ぎたなく罵られ申候に、加へて花岡樣福岡樣の御嬲り半分、さま〴〵御許樣の御噂致され候が、中には聞くに忍びぬことも聞わりて悲しさ口惜さ遣る瀨無く覺え申候が、さりとてこれがために御許樣の御入らせを願ひ度といふやうなる想念は露浮め申さず、たゞ〳〵好かれ惡かれ御許樣の御噂出で御名前の耳に入り候ごとに御懷かしさの增り行くばかりにて候。定めし實事虛事打交り候はんとは存じ申候へど餘所ながら花岡樣より伺ひ候御話しの中よりして、御許樣の御氣性御品行も略推しあげまゐらせ、此廓の好みとは西と東との差異こそ候へ、兎ても角ても女らしき道に死ぬるものとはなるとも此廓の全盛には活きざらんと思ひ定め居り候此文は、生命懸けて御許樣の如き御方樣のたゞ一言の御憐みの御詞を得たく候。千言万語申しあげまゐらせ候とも虛妄多きところにあるもの丶言葉とて、御察しも玉はるまじきかなれど、御入らせを願ふにても無ければ妾が身を何となし玉はれと願ふにても無き此情此願ひ、虛妄なるべきか戲れなるべきか試みに猜し玉はるべく候。未だに御許樣の如何に思すやも測り難く候へば、賤しき身にありて母の名を申し兄の名を出し候も口惜く、且は不孝がましく耻知らずがま

若旦那樣へです。と云ひながら裏返して見て、ア、また此人でござります。御來臨になつた事も無い方ですが、能く手紙を御遣しなさる方でござりまするね。と少し怪む氣味に云ひながら、ハイと差し出したり。一目見て彼處よりの文と知るまゝ源三郎が居る前にて封切つて中の女文字を見られんも如何と其儘に机の抽斗に仕舞ひ込めば、源三郎は不審みて眼を丸くしつゝ主人の面を護り居たり。雪雄は疑ひ怪まれじと、左樣云つても伍子胥は徳が無い故と、前の話を續けんとするを皆まで聞かず、旣伍子胥はどうせ私が好なのですから何と仰あつても仕方がありませぬ。それより今來た郵便を御覽になりませ。私は御玄關で今敎へて頂いたところを演習まする。と云ひて退きしは繼子育ちの齡ゆかねども萬般に氣のつくところなり。

其三十五

一筆志めしあげまゐらせ候。過し日の文御許樣に屆き候には違無かるべきも今だにそよとの御音信さへ戴かず、日毎に待ち焦れ居りまゐらせ候も、餘りの御遠々しさに堪へかねて、若や御心に障り候事のありなんどして御腹立より御返しさへ玉はらざる歟と心も心ならず案じ暮らし候ひし末、此文認め御尋ね申上まゐらせ候。狎々しきに過ぎたりとの御思召ならば何のやうにも御叱りありて御免し下されたく、其儘に御見捨は何より悲しく覺えまゐらせ候。假令は御見捨を被り候へばとて其

のやうに不運でも心濁く胸逼らぬ方もあり、田單樂毅のやうに面白い人もあり、伍子胥のやうに心持のよい人もありと知るにつけ思ふにつけ、既大望の萠しかゝる年齢とて、乃公も往時の偉人のやうにならうとの底意湧きてか、毎夜のやうに雪雄の書齋に入り來ては、若且那樣御話しを仕て下さいましとせがむにぞ、雪雄も流石憎からで、思ひつくまゝ何くれとなく語り聞かすを常となしける。今宵も定規通り小學の素讀を一枚ぶり終へて後、其講釋も大概聞きて、御用が無ければ御譚をといふに、それなら今日は天文祥といふ人の話を仕て遣らんと、一時間ばかりに其一代の概略を語り、汝此人を何と思ふ、と問ひ試むれば源三郎は不滿の色をあらはしながら、此樣な口ばかり達者で居て詰らぬ人はありませぬ。私は此樣な人は嫌です。此樣な人を丞相に仕て居たので宋といふ國も亡びましたらう。弱い人は忠義でも役に立ちませぬ。伍子胥なら元に負けはしませぬ。伍子胥に比べては詰らぬ人です。私は伍子胥が一番好ですといふ。何故そんなに伍子胥が好いと問へば、男見らしくて好いではありませぬかといふ。王の屍に鞭つたのが男見らしくて好いのかと糺せば、それが心持の好い事ですといふ。雪雄はじつと源三郎の顏を見ながら、其は汝が間違つて居る、復讎をするといふことは胸の小いので餘り褒めたとては無いのだ、と云へども聽かず。恩も報せば怨みも返して加之十層倍百層倍にするのが好いではありませぬか、何でも私は伍子胥が好きで文天祥のやうな迂濶な人は大嫌です。と猶云ひ爭ふ時郵便といふ聲聞ゆれば、源三郎立つて受取り來り、

るべけれど、心遁りたる際のしるしと御容赦ありて、書き改めまゐらせぬを深くも御咎めあそばされぬやう念じあげまゐらせ候。

と書き終ひて梅澤文と本名を署したり。

其三十四

お文が長々しき書狀を見て、雪雄は面の熱くなりて身躰の寒くなりしを覺え、少時は戰慄を生じけるが、頓て文をば卷き收め、几に凭りて長歎なし、憮然たること良久しく、程經て再び讀み返しては復憮然として歎息しぬ。されど何とか思ひたりけむ、返書をなさんと筆も取らず。ただ其儘に手匣の中に深く藏めて終りける。

其日事無く、其翌日も、翌々日も事無く、四五日は友も訪ひ來ぬに、靜坐讀書を愛せる雪雄は外出もせず、例の如く籠り居て、花岡が與へ呉れたる擊壤集を餘念も無く玩味なし居れば、源三郎の常の通り忠實に働きて主の用の間隙々々には、雪雄より貰ひたる小學と太平記とを綯ひ交に讀みて、忘れたる字を問ひ解らぬ條を尋ぬるに、雪雄は五月蠅ともせて一々訓へ、夜は折に觸れて古昔の人の嘉き行ひせし例など語り聞かすれば、今まで何も彼も知らで、世の常の男女のほかには男も女も無きやうに思ひ居たるに、正成のやうに勝れた正い人、正行の母のやうに偉い女もあり、孔子樣

果敢無くも汚れ無き魂ばかりとなりて逝りぬ、と折節は御思し出でられてあはれと思し玉はりたく、此事ばかり深く願ひあげまゐらせ候。如何なる故にてか御許樣より外に頼みまゐらすべき方も無く覺え申し候まゝ、たゞ御許樣のあはれとの御一言を得候はゞ悲しきが中にも悦ばしく終り申すべく候。好き人も世には多かるべけれど、御許樣のほか文の頼みまゐらすべき方は無く、好き運もさま〴〵あるべけれど、御許樣にあはれと思され申候て、御許樣にあはれと思され候に負かず終り候より女には好き運も無しと覺えまゐらせ候。此のところ此の身、御許樣の其の御氣質其の御行ひ、とても再び御目にかゝり得る望みも無く候へば、ひたすらに御文の來るを待ち申候のみにて、牢獄に在るも同じ身の思へば果敢無き限りに候を、文の往來をまで憚れかしに仰せ越され候のみならず、妾を此邊あたりの色に誇る女並に思してか獸のやうなる痴漢と浮める雲の榮華の運とよりほかは得られぬものに、好き人に遇ひて好き運に會ふこともあるべければ心豊かに日を經よ、と諭し玉はりたる御恨めしさ、骨身に染みて口惜しく存じまゐらせ候。何卒々々汚れたる地にあるなれば苦しくもあるべけれど女は飽迄女の道失はで、利に活きやうよりは道に死ねかしとにても御隱しなく御示しありたく、今こそ猶死かね居り申せ、御返しによりては死にかねうものか死に得るものか、かく愚なる女もありと御思召させまゐらすべく候。流れに萍ばかりは咲かず、齡ゆかずとて侮り玉はゞ甚く御恨みまゐらすべし。物狂はしくなりたる筆の運びもしどろもどろにて、過ぎたる言も多か

と消え行かんことのみに候。後生の事はまだ知らず候へど後の世に頼みをかけてには無く、唯疾く此世終へたくおもひてに候。味氣無くのみ日を送るまじとの御示しは、御親切のほどいと嬉しく存し申候へど、好き人にも會ひ好き運にも會はんほどにとの御仰せは、御恨めしく存じまゐらせ候。斯樣なる事申しあげ候はゞ御さげすみも恐ろしく候へど、一度の御見兩度の御文にて、御許樣よりほか文一つまゐらすべく覺え候方も無く覺え申候に、誰をか好き人と見、何をか好き運と覺え申候べき。西も東も悲しく厭はしき中にありて、御許樣の御情深き御文を見まゐらするよりほかには毫ほどの樂みも無く、死ねぬ身を死ねよがしに歎きくらし居り候我が上あはれと思しめし、何卒々々御思し棄て下さるまじく候やうと此事ばかりを神にも佛にも願ひ居り候。かゝるところに居る身ならで母兄とも暮し居り候身ならば、縱へば葎生ふ宿に住めばとて、破れたる疊の塵を拂ひてなりと御入らせをも強に願ひ、愚しき心の聲をも御聞取り願ふべきなれど、今は御許樣の圓位の聖のやうにあらせ玉ふにせよ、御爲惡からざれとおもへば訪ひ玉はるをも逐ひまゐらせでは濟ぬ身の上の悲しさ。おもへば何の罪ありてかゝる口惜き身には成り下りたると明くる暮るゝの折毎の食さへ欲しからず胸逼り申し候。打つけに申さば端無しとも鄙しとも思し玉はんなれど、今は兎ても角ても堪へ難き身の、言すに文をかざり品を粧ふ暇も無く、思ふばかりを申しのべ候が、此身此儘終り候はゞ、文といふものありて淺麻しき地には墜ちしが、あさましき心も持たず、身の行ひもせず、

惡き、さらずば面の色の黒き白き、ざれ言いふことの巧なる拙きなんどを論ひ噂するのみにて、身持あしきものを意氣とか申し、正き行するものを野暮とか笑ひ、日に〳〵私などのあらましとおもひ望むことをば、律義過ぎたりの、阿呆氣たりのと嘲み笑ひ中候。外より來られ候方々は例へば花岡様福岡様のやうなる方方のみにて、福岡様などは猶好き方に御坐すべけれ、其よりは沖を越えて慧狡しく、或は手荒く、或は愚味しき人も見え申し候。大抵他を窘めて樂みとし、又は他を瞞きて悦び、すこしも誠實といふもの無く、醉の上の心冴ぎに油紙の燃ゆるやう舌疾く物語り、猥褻なる歌うたひ、俳優の口眞似して獨り悦ぶ類の人ばかりに候へば、何として仰せられ候とほりに心を持ち身を行ひ候て、仰せられ候とほりの好き運にならど遇ひ申し候べきや。

其三十三

所詮運の如何などは既望み候ても甲斐無き事と諦め候て、頃者は神にも佛にも身の上よかれなど祈り候ことは無くなり、たゞ青空のみ眺め遣りては太息吐き居り候ばかりに候。枉げても身の自由を望み候て痴れたる人の云ふがままに土人形のやう成らば、此地を出でゝ明るきところにも參らるべけれど、一生を心にもあらず送りて思はしからぬ人と共に表面のみ連れて過し候はんこと、生命に代へても厭はしく候へば、今の望みは今一目母兄に會ふことを得候て後、遠からぬ中に此身の霜雪

に觸れ候へばとて、文書きぶりの拙く文字の幼きほかには、露羞かしきところも無しと自は愚なる眼より見候文を、思ひに堪へかねてまゐらせ候なれば、左のみ憚り玉ふことも無かるべき歟と我にはたより好く考へ申し候。成程口惜き地にも墮ち、情無きものにもなり居り候が、さりとて人らしき心も失はず、狗猫らしき行ひもせず、苦しきが中に生命をかけて忍び居り候身に候へば、申すは烏滸なれど猶羞かしからぬ心を抱きて居り申候に、此心をもて御許樣に打對ひまゐらすること、過ぎたる言には候へど羞かしからず覺え候。此度の御文を受けまゐらせてより、いよ／＼御許樣には猶さま／＼申しあげたく、又御示し聞せも玉はりたく、思ひまゐらせ候へば、奥底無く御遠慮無く思ふまゝを申し上げ候が、苦しき中にありて他に對ひても羞ぢぬやう身を保たんと悶え居り候我が上あはれと思しめして、此願ひ御許し下され候やう偏に願ひあげまゐらせ候。

御文の中に心だに美しく持ち、身だに非理ならず行はゞ、助くる人にも會ひて不幸の中より脱けらるゝやうになるべし、強に味氣無くのみ日を送るなとの御慰めは、まことに有り難く忝く存じまゐらせ候が、如何でかゝる地に在るもの如是ところにまゐるものゝ、心を美しく持ち身を非理ならず行はんとするものを憫然ともいとほしと見申し候べき。たま／＼御許樣の此地に見え玉ひて、假初ながら一時二時見えまゐらせしほかには、情あるべしと覺え申候人に會ひ申さず、常に前後左右に居り候ものは皆彼の肥胖婦のやうなるものにて、他の懷中の黄金の多き少き、纒ひたる衣の好き

はさて置きても、多くの人々の中、誰か御前様をいとほしみて、御前様に丹心もて打對ひ、御前様を不幸の中より拯ひ出し、直に安樂の境界に請じ申すべきものゝあらはれてあるべきや。必ず頓て好き人に會ひ玉ひて好き運に會ひ玉ふ事あるべく候へば、あながちに憂しとばかり月日の照らし玉はる世界を心細く見玉はて、天道は我等が測るべきものならずと思し暮らさるべく候。知ること淺きに言ふこと深きは好からぬものとも打忘れて、御懇に仰せ越され候にかまけ由無き出過ぎたることまで申しあげ候が、たゞ〳〵今日を歎きてのみ送り玉はぬやう、御行末めで度榮え玉ふやうと念じ申候ほかには心も露無く候て、斯く長々しくは筆を走らせ申候。

其三十二

今や御文を賜はる、何時か御文の來る、それとも若くは狎々しさに過ぎたりとて御腹立のまゝ御返しさへ玉はらざるべきか、と待ちつ迷ひつせし折柄、嬉き御音信を得て、繰り返し繰り返し、心細に讀みまゐらせ候。既御文も賜りたる事なれば申さでもの事なれど、此度の御文にも頻繁の文の往來を憚り玉ふやう御記しあそばされ候が、此方よりの文を五月蠅と思ひたまはらず候はゞ、何卒々々せめて文ばかりは御許様へまゐらせ候を御許し下され度候。いやしきところより賤きものゝ賤しき意もて御招き申す文なんどこそ頻繁まゐらせなば忌はしくも思ひ玉はめ、御父上様御母上様の御眼

らるゝにもせよ、御育ちは賤しからずわらせらるゝにせよ、既其土地の風に染み玉ひしなれば、我等如き浮世の間の情態にもまだ馴れぬものゝ、御聞かせ申すべきことも御話し申すべきことも有るべきならぬゆゑ、二度とは文なども參らするも用無きことゝ存じ居り候ひしに、いと素直に露の御ひぞり言なども無く、やさしく仰せ越され候を見申候ては、却つて此方にて誤りたる心算などいたせし我心の品の下りたるを覺え候て、裏耻しく存じ申候。御筆の餘りかは存ぜず候へと、我が前の文の末の方に書し申し候ひしことをば仰せられ候は、まことに御筆のはづみかは存ぜず候へど口惜しく覺え申し候。何とて筆の餘りなどに心にもあらぬことなど申し候べきや、御察しありたく候。御前樣御自身にも疾く其地をば脱け玉はんと神に佛に御祈りある由、何如なる仔細にて其處には落入り玉ひしやら存ぜず候へども、いづれ叶はぬむづかしき御不幸のゆゑと察し申し候が、思ふことのおもふに任せざる勝の世とて、望みも無く頼みも無くと一概に味氣無くおぼされ候は些差ひ申すべく、捨つる神、助くる神、七轉び八起きと下世話にも申し候はずや。心だに美しく、身だに非理ならず行ひ居たまはば、小草隱れの菫の花、それと知らるゝ香氣あれば、何時まで御不幸にのみあり玉ふべき。申すはぶしつけながら御筆もうるはしく御文のつゞきも普通の女性には成らぬほどなだらかにものし玉へば、あらましながら御物學びも匱しからず爲され候ひしは推せられ、隨つて女の爲なる事どもゝ必ず能くし玉ふべきかと推せられ候へば、御みめかたちの他に越えて美しく御坐す

重ねては假令ば文を受くるとも返しはせざらんと一度は思ひしものゝ、情濃かなる文を遣されて讀んで見ては聾ならぬものゝ話を仕懸けられて挨拶せずには居られぬごとく、殊更夢にも忘れかぬるものより懇に我を賴りて厭ふべき節無く柔しく云ひ越せしに、腹の立たうやうも無く五月蠅と思はうやうも無ければ、其夜更けて人々睡りにつきし後、いと靜かに墨磨り流して返書を認めにかかりけるが、先の日には似ず如何にしてか四五行書きては意に滿たで捨て、五六行書きては書き損じて捨て、幾度か無益書に仕て仕舞ふて漸く五六度めに書き終へつ、上封までも認めしが、猶何とやら心安堵かず、復び改めん歟ともおもふものから床には入りても眠り得で曉天近くまでうつら〱と寐も覺もせず居たりけり。

御返しせざらんとは思ひ居りしが左樣おもへばとて御前樣を厭ひ憎みてにはあらず、たゞ頻繁の文の往來を憚り候てのみなれば、御文を見候ては木佛の如く推默り候事も成らず、自然と筆の我が手に執られ候まゝ、申して甲斐なく、御讀取りになりても力無きことながら、一紙我が意を申し述べ候。先の日御招きありしを此方より御謝絶申せしを、惡くも御取りなされず、却つて深く御自身の過失のやう御仰せ越しありし御心入のやさしさ、淺からず感じ申し候。實は此方より申し上げしを非を飾るやう思しめして御文も絶え候べきか、又は御腹立の御言葉もあるか、然なくば御ひぞり言にてもありは爲まじきかと大概ながら考へ居り候て、若し左樣にもあらば、御心操は美しくあらせ

て面白からず思へば、女は猶更面を紅めて、潤みたる眼の恨めしげに二人を打看てありけるが遂に堪へずや突と立つて去る。那處へ行くぞと後を追ふて雪雄も共に立上り、後影見ながら此室彼室を經廻るに、女は背後を顧みて雪雄を涙の眼にじつと無限の情を含めて見しが其儘するりと床の間に上ると見えし間も無く床に懸けたる幅の中に身を躍らせて入りし如く、ありし姿は雲と消え烟と失せて影も無く、たゞ幅上には畫美人の活けるが如く笑を湛へて此方を見つゝあるのみなれば、呀と驚きて自失する時、周圍を見れば花岡もあらず福岡も居ず、家内も常の通りにて我身の服も改め居らず、我はたゞ机に凭れるのみにて、源三郎の不思議さうなる顏して背後に坐し居れるほかには人も全く居らず、今見し幅も我が室にはあるべきならねば有りもせず。こはこれ全く夢なりし歟。さては少時前に上野にて彼の女を見しと思ひしは事實なりしか、其も夢か、夢中の夢の先づ覺めて、夢ぞと悟りしも猶夢にて、眞實は未だ覺めざりしか。後に見し夢が先に見し夢の中の夢か、先に見しが後に見し夢の中の夢か。先に覺めしが夢ならば今の覺めたるも夢ならずや。今の覺めたるが夢ならずば先の覺めたるも夢ならぬか。前覺後覺先夢後夢、いづれがいづれ、何が何、眞妄睡醒那處を捉へて夢ならずとなし夢となさん。と我から呆れ迷ひける。

其　三十一

内へ誘ひ入れて床盃さする折しも、猩々のやうに眞紅になりて醉ひに醉つたる福岡は、同じく沈醉して眞蒼になりし花岡と共に聲高く何事をか呼び喚きつゝ闖入し來り、無禮にも一人は女の袖を捉らへ、花岡は我が袖を捉らへて、雪雄君。君は甚しい。人を瞞くにも程がある。英雄人を瞞くといふことは聞たが、君は平生君子ぶつて道德の節操のと云ひながら、何だ娼婦を妻にするか。君子人を瞞くとは初めて聞た。僕等に品行を愼めなんどゝ四角なことを云ふて置て、陰では密と此女に馴染を重ねて父母を說きつけ、斯樣して妻に仕て仕舞ふとは實に感心な素早い手際、隅へは置けない御腕前だ。と嘲弄すれば、福岡も、雪雄君も雪雄君だが此女も女だ。まだ世馴れないおぼこ處女の風を粧つて、生馬の眼も拔かうといふ遊廓の者を始め我等までを一杯食はせ、僕の朋友の吉岡などを巧く涙で振りつけながら釣り寄せて置て、而して雪雄君と美いことを仕くさつて、身拔をした上突然に斯樣いふ手筈に遣つて行かうとは恐ろ感心凄いものだ。一躰今夜の筵席には、何故我等をば招んでは呉れぬ。僕等は君等新夫婦を祝ひに來たのだが、墨染には氣の毒ながら些と文句がある。僕は僕の友人の代りになつて糺さねばならぬことがある。然し今夜は預けて置けなら預けて置ても遣るまいものでも無いが、何にせよ少し厭な思ひを仕て貰はねばならぬのだ。と厭味を揑ね返すに滿懷の不快さ堪り得て、雪雄はたゞ面を背けて言葉も出さず。卑むべき此の烏滸の二人の、何をか喋々と罵るや、一々答へて云ひ解かんもかゝる痴徒に要無きことゝ忍びはすれど心中には深く憤り

怨みと怒りとを含みながら、眼をあげて我が前に坐せる女を見れば是は抑も如何に、他にもあらで先の日より忘れんとして忘れ得ず常に心に纒ひ居る絳仙樓にて一度見し例の女に疑ひ無し。餘りの奇怪さに胸潰れて言葉も出でざる雪雄はたゞ心中深く父母の測り知られぬ意配りを怪みつ又驚きつ、終に其儘盃を手にすれば、それより森山が指揮に頓て三々九度も濟みぬ。女は退きて休息の席へと入る程無く席は改められ此度は我と彼の女とは席の正面に推直され、我が父母は云ふに及ばず彼の女の母と覺しき老女、兄と覺しき鋭げなる容貌せる男より、我が妹、我が家の親戚の誰彼まで皆々席に連りて、芽出度數々の言葉を盡し、歡聲湧くが如き中に何かは知らず引包まれしは奇といふもまた餘りあり。

其三十

嬉しとも嬉しからずとも厭はしとも厭はしからずとも何とも思ひ分けかぬる心地して雪雄は彼女と盃事させられ、今しも夢の如く多勢の人々に取り卷かれて、新婿よ新婦よと女と共に囃し立てらるゝに、茫然となり果てゝ心も昏くなりしやう覺え、我が身は借物かなんぞのやうに其處へ端然と坐らせしまゝ神魂は遠く他へ脫け出て、一躰これは理の分らぬ合點の行かぬ始末なり、と我から我が上を評する中、よき程と見計らひて森山夫婦の我等二人に飯食はせ、寢所と設へ成したる一室の

りしお福といへるが、暑中と新年とよりほかには來らざるに、今日は何日か來り居て嬉しげなる顔つきして挨拶し、幼き時のやうに我が帶を解き衣を替へさせ、袴をつけさせ羽織を被す。一圓合點行かざれど爲るゝまゝになり居れば身は黒の服黒の羽織、立派に禮服に着せかへられぬ。こは何とすると不審る中、何事のありてか勝手の方に人の出入り滋き樣子の物音聞え、座敷々々の燈の光りも平時よりは多く輝きて、家内何となく春めき渡れるを覺えけるが、さあ彼方へとお福の云ひ、此方へ御出なされませ、と源三郎の云ふに任せ座敷に到れば、仔細あり氣に金屏風折廻して室內塵も無く片付きたり。父の友にて親類の如く日頃より交際へる森山某と呼べる老人羽織袴の禮服出立、四角張つたる平生の上にひとしほ四角張つて、雪雄を席に就かしむると頓て森山の妻は黒の紋服の裾長く曳きて同じく禮服着けたる女を引き來り對坐せしむ。經驗は無けれど其態婚姻の式にても爲さしむる如く見ゆるに驚きて問はんとする間無く、森山が妻は既新婦と覺しきに盃を取らしめたり。女はこれを飲み乾しぬ。森山は其盃を我に取らしめぬ。酌の童女は銚子を手にして盃執らば酌がんと控へたり。こは何事ぞ、奇怪なり、今まで父よりも母よりも媒妁人顔せる森山夫妻よりも一言我に告ぐること無く、突然一生の大禮を强ひて行はしめんとは、常より慈愛深き母上、愼重なる父上にも似合はざること、如何に齢ゆかぬものなればとて我が娶るものを我が意さへ定めぬ中に壓制三昧、否應云はせず娶らせんとは餘りなる爲され方、如何にしても屈服すること成り難し、と

て打任せたる風情をあらはし、たゞ何の氣無く何とせんの意もあらぬかの如く恍惚として、目前の花月の天地を樂しげに打看るのみの樣子なるに、雪雄も連込まれて茫然となり、取出でゝ云ふべき事もなけれどたゞ何となく限り無き樂みを覺えて、言葉も無く二人は笑を含みつ、行くとも〳〵此花盡きず此月落ちずにあれよかしとばかり念じつゝ、やゝ少時立並びて遊び居けるに、此の畜生めと恐しき大男の醉ひしれたるが此方二人を叱して無法の鐵拳を加へんとするに、はつと驚きて女を擁護はんとする途端、俄然として我に返れば小室の內にて机にもたれながら我知らず目眈みし一夢なりけり。

其二十九

覺めし中に想の浮ぶのみにはあらで、夢にさへ俤を見るに至りしとは我ながら迷ひたり、と自己を叱りて、言は妄にすべからず、行は隳すべからず、と昨日記えたる康節が四不可の吟を口ずさみながら、我が妄想を斥くる折柄、母上の聲やさしく我が名を呼び玉ふ。唯と答へて何心無く聲し玉ひし室に行けば、黑の紋つき、白の襟、常ならず禮服を召し居玉ひて、雪雄汝は其衣服して居て何となると思ふ、疾く着換へよ、大切の席に其衣では埒無し。源三郎〳〵。若旦那に彼の御衣服を上げよ。と忙しく母上の命じ玉ふ。心得難しとは思ひながら源三郎の導くまゝ納戸に至れば我が乳母な

れつしつゝ醉漢の駈け出して過ぐるものもあり。遊ぶには今、風も寒きほどにはあらず、若くものぞなき朧月夜の天ぼんやりと明るくして、靜心なくひら〳〵と花の落つる風情、無風流のものも一句吐きたくなるべき有樣に、雪雄は獨り興を起し、古歌など吟じて逍遙しけるが、不圖耳に入りし人の聲の、誰ぞとは知れねど覺えある聲音とおもふまゝ首を回らして見れば、履聲かすかに落英の雪を徐に踏みながら此方に來かゝる二八の美人、白玉の如き面の色に漆のやうなる黑髮の艶、梢の花に映り合ひて其美しさ比へん方無し。これはと驚きて我知らず路を避けつゝ老木の櫻の蔭に身を寄せ覗へば、美人は人を尋ぬるごとく少時彼方此方に眸を移せしが、金蓮歩み輕く此方に來りて、乳の凝りたるばかりなる美しき手して雪雄の手を執り、花猶密なる方を指して伴ひ行かんとする如くなるに、いよ〳〵呆れし雪雄は身を返して誰ぞと咎めんとして間近く面を見合はすれば、折から淡き月の光り和かに美人の少しく打仰げる面を照らして隈無く見せぬ。徐と我が手を握りしめながら默して語らず打笑める其愛度氣無さ、何とも彼とも比へ難く、骨もこれが爲に萎へ筋もこれがためにに弛むかと疑はるゝほど美しきに、汝は過ぎし日惡所にて假初ながら見しものならずや、如何にして彼處を出づるを得、如何にして此處には遊び居たる、同伴ありや將同伴者なしや、我をば那處に伴はんとする、今日の今まで猶彼處に在りしとおもへるに、と問はんとは思ひながら遂に得問はず、引かるゝまゝに引かれ、手を取られしまゝ手を取られて連立ち歩めば、女は我に身を寄せかけ

く存じまゐらせ候。申すも無禮な氣なれど如何にしてか御許樣を舊くよりの御馴染のやう思ひまゐらせて端無きことまで打明け御話し申したきやうなる心地いたし、我ながら幾度か我を叱りて止め申候。御文には文をも遣はすなとありしを存じながら、おもふことの十が一つ、御叱り受くべきとは豫てまづ心にして如斯をさなき筆もて申しあげまゐらせ候。おもひあまりしばかりのわざ、御眼わづらはしとてまげて〳〵御讀み取り下さらば如何ばかりか御嬉しく存じまゐらすべく候。

其二十八

重ねての文は謝絶りしもの〻、雪雄此度は初めての時のやうに遲疑すること無く郵書を得ると其儘直に封を切りて讀み下せしが、一通り讀み去つても猶手を放たず、復讀み返し〳〵して終に卷き收め、我が手箱の底に一旦は藏めたるも、また頓て取り出して首より尾に至るまで幾度か讀み、後には机に凭りしま〻面杖ついて瞑目なし、何事をか深く考へける。雪雄は忽然立ち上りて、源三郎、若し人の來動く情を靜めんとてか、胸中の塊物を捨てんとてか、雪雄は忽然立ち上りて、源三郎、若し人の來たらば上野あたりへ散歩に出たと云へ、と命令置きて唯一人其儘ふらりと立出でて御成道を眞直に上野へか〻り、入相の鐘に花散りか〻る公園の中を徘徊するに、流石時節なれば暮か〻りても淋しき景色ならず、花を隔て〻女まじりに人の打笑ふ聲なども聞え、突然我が前に横合より追ひつ追は

はかりを、今のありさまの中にては、父母への聊かの孝行とおもひ居り候へば、御ことわりを承はり候ては、御虚言を仰せられしとて御許様の御愧ぢなされ候より幾倍か増して苟且の御言葉を手繰りて御入らせを願ひし我がふるまひを愧ぢ入り申さではと、御文の半讀みさして身も世もあられず羞かしさ堪へ難く相成り申候。何卒先もじのおろかなる文まゐらせたる罪は御許し玉はり度、幾重にも願ひあげまゐらせ候。御筆の餘りかは存ぜず候へども御文の末の方に我が上につきての御示し、つく〴〵あり難く、御心入れ深き御言葉、おもはず涙に咽び申し候て、世は兎まれ角まれ我が傍近く來つ往きつする人々だけにても少しなりと御許様の御氣立に肖たる節あらんには如何ばかりか今の不幸福も薄らぎ、朝夕も心ゆるく物語りして憂さを遣る時あるべきにと由無き望みをさへ湧かせ申し候。臭きに馴れて厭ふべきを忘るゝやうならぬ間に疾く此の世界を脱せよかしとの仰せは、まことに然る事に候へば、明け暮れ神に佛に祈りて一日も早く汚れたる此の地を脱け出でんとは妾みづからも願ひ居らぬにあらねど、思ふことの思ふに任せざる勝の世とて今は望みも無く頼みも無く、たゞ〳〵宿世の行ひつたなきゆゑと諦め候て、我が身に同じやうなる人々と語り合ひて、憂きには長き月日を送り申し候。餘りに柔しく仰せ越され候へば、何時か御許様とは何の關係さへあらぬ身に候事をも打忘れ候て身の上の事どもまで申し上げ、御助言をも賜りたくおもふやう相成り申し候が、定めし狎〳〵しきものと此だけ申し上げたるにてさへ御思しめしあるべきかと心に怖ろし

ひは烟をもつて石を動かさんとするに異ならず、たゞ御前樣が成べくは鮑魚の市に馴れて臭きを忘るゝやうになり玉はぬ間に、其世界を脱し玉はんことを祈るのみにて候。御筆のあと美しく書かれたる御文のよく整ひたるを見るにつけ、御前樣を愛しみ育てられたる御父樣御母樣の、かゝれとてしも讀み書くすべを習はせは仕玉はざりつらんを、今はたゞ一見のものにまで天晴なる御手もて長文かゝせ玉ふやとおもへば定めて口惜しくやおぼし玉ふらんと御前樣の御胸の中推しはかりまゐらせ申候。先は御返しまで是の如く候。

其二十七

御心濃やかなる御文あり難く拜見いたしまゐらせ候。御返しさへ若や賜はらざるべきかと安からず思ひ居り候ひしに、案のほかなる柔しき御示しを受け、此上無く嬉しく存じまゐらせ候。御來臨なきにつけての御ことわり、一々御道理にて何とも申しあげやうは無く、此上御入り下されたくなどゝは、假令ば私に思ひまゐすらるにせよ、なか〳〵言葉には得こそ申し出すまじく候。仰の通り御足踏み入れ玉ふさへ御憚り無きにあらぬところへ御入りを願ひしはくれ〳〵も此方のあやまり、御積りのほども耻かしく候。今は如是あさましく成り下りたれば人がましく何を云ふやとなみ〳〵の人には一言に云ひ消さるべきなれど、身こそあさましくも沈み果てたれ心までは落すまじとおもふ

るものあるべき。されど雪雄は世間知らずの人の好さより答をなせしが、それぞ惡緣の絆み初め、思はぬ淵に身も心も臨むに至る初とは後にて思ひ知られける。

御文一々讀み取り申し候。過ぎし日の我が言葉を御心にかけられ御待受けありし由。我が言を我と果さぬ身の左樣仰せ越され候を承はり候ては何共御返しの致しやうも無く、赤面の次第に御座候が、わらためてこゝに御謝罪いたし候間、此方の心中あはれと思しめし、一旦の虚言御赦し下され度候。まこと御前樣をおとしめ候には之無けれど、御前樣御いて之ある地は申すも悲しきところにて我が足踏み入れ候事も憚り無きにあらず。既に過ぎし日泥醉の中の知らぬ間に誘ひ入れられ、初めて御前樣に相見え候折も、歸りて後一方ならず自ら咎め、父上や猜し玉ふ、母上やいぶかり玉ふと、安き心も今に無きほどなれば、我ながら吾が言を遂げぬに、いと心苦しく候へど、如何にしても再び其地にまゐりて復び父上母上に知らぬ顔をいたし居る人の惡さを繰り返すには忍び難く候。四圍の人は皆引留め候中に御前樣ばかりの御情にて夜も甚だしく深けぬ中歸ることを得て、幸ひに父母の咎めにも遇はず候ひし御心入のやさしさには、僞りならず嬉しく覺え候まゝ、此御返しにも及び候が、我を憎き虚言ものと思して御腹立しくも思さずば、他の眼に觸れ候も憚りある事ゆゑ重ねての御文は御容赦なされ度候。御不仕合の今の御身の上餘所ながら無念に存じ申し、力の及ぶことならばと愚にも思ひ申し候へど、彼の肥胖婦の如きもの、威のみ強き魔界に御座すなれば、我等が思

其二十六

花岡が心を憎みたる雪雄は今や應答さへ捗々しくはせぬやうなりて推し默り勝なれば、世馴れたる花岡は早くも、話機に投ぜずと見て、好き程に歸りしが、常ならば今少時話し玉へと引留むべきなれど今日は留めず、我が思ふところを包み得ていと冷淡に待遇ける。されど花岡は雪雄が胸に毒を投げ入れて立去りたり。花岡が有意無意の話しの中より、雪雄は我が一度見えし女の名をも、また其住所をも聞き覺えたり。今までは夢の如くにありしものを、明かにいと確實にされたり。これがため返書を折角書きしものなれば郵送せんかとの意は微に動き初めたり。然し相手は淫肆の女なり、如何に憐れむべく氣の毒に思ひ做せばとて、頁からぬところの頁からぬ身分の女に對ひて書を與へんことは、何と無く心よからねば、幾度か送るまじきかと躊躇なしけるが、我に疚しきところ無ければ、書を與へたりとて何かあらん。ことさら此儘捨置かんには、我はたゞ先の日虛言を云ひしばかりの男となり、答ふべき辭の無きまゝに返辭さへせざるかと思ひ做されんもいと口惜し。憐れ彼の女の胸を痛めて如是云ひ越せしに露ばかりの答へも與へて抛遣らんは我が忍びざるところなり。と眞面目に考へて上封じをなし、認めたる文を遂に送りぬ。

彼の遊廓の燈火に幾度か面を照らされしものならば誰か女よりの文なんぞに眞面目くさく返しをす

から聞たが、中々左樣いふ人では僕のやうな齢も足らず經驗も無いものが何か云ふても服される所以も無からうと僕はおもふ。それゆゑ若し君が福岡君に其後まだ會はぬなら、先日僕が云ふたやうなことを云はぬ方が閑是非を惹かぬだけ好いかと考へて、君が來たらば此事を云はう〱と思ふて居つた。と云へば花岡點頭きて、實に君の其の推察通りだが、然しもう僕は福岡に逢つて一應遊興の不可を君の說いた通り取次いて云ふて仕舞たが、果して中々服する樣子は更に無く、それは一を知つて二を知らぬ不通の論といふものだ。憫然のものなればこそ可愛がつて遊んで遣るが好いては無いか。彼等賤業婦が彼の位地に落ちぬ前について論ずれば、其論は情理に叶はうが、墮落後をまで左樣論ずるはそれは杓子定規といふものだ。彼等は論より實際上遊興をするものゝ一人でも多く來るのを望んで居る。現在僕なぞも彼の後は招ばれるから是非なく毎夜のやうに彼の絳仙樓に出掛けて行くが、君も今日あたりは交際ひ玉へ。君が顏を見せたら何樣なにか君の敵が悅ぶか知れはしない。嘘だとおもふなら行つて見玉へ。雪雄君も左樣だ。彼の男の敵の墨染の新造から、連れて來て吳れ連れて來て吳れと、どれほど僕が賴まれたか知れはせない。と反對に自惚やら誘引の說敎やらを聞かせられて、驚いて僕は逃げて來た位さ。と眞實しやかに告ぐるにぞ雪雄はいよ〱確實に花岡が心中を察して、怪しからぬ男め、事を福岡が上にかづけて我が心を動かさんとする奸物めと深く胸底に憎みける。

先方にては自己が住めるところも名も我に記えられたらんと思ひて此方の家のものゝ眼の包ましさに態と名所をも記さゞりつれ、當時は半夢中にて心轉倒なし居たれば、家の名も知らず人の名は尋ねず、今さら何とすべくも無ければ雲の中より音信を得て返信を仕難きに異ならず。雪雄は獨り苦笑ひして、其儘少時あるところへ、氣に入りの源三郎顏を出して花岡樣の御來駕といふ。憎き奴めとは思ひながらも、此方へと云ひて、忙がしく何も彼も机の抽斗に仕舞ひ込みて知らぬ顏つくるところへ、花岡は例の如く蟲も殺さぬ顏して入り來り、君のところへ來やう〳〵と思ふては居たが障礙があつて、つい違約をするやうになつた。これは過般約束した君へ餽らうと云ふたもので、僕には詰らぬけれど君が見たらば或は面白いものかも知らぬ。君に進ぜるから緩々と愛讀して遣つて吳れ玉へ。時に其後詩か文章の新作は無いか、些見せ玉へな。と莞爾つきながら云ふ。汝其奇麗な口をきゝながら我が見ぬところでは鄙しき行ひを逞くして、附け込むべき隙あらば我をも同臭の徒黨に入れんと狐狸の心を懷き居るか、憎さも憎し。とは思ひながら打出して左樣も面責は爲し得ず。これは有り難い。擊壤集は豫て一覽を心掛て居たもの、貰つても濟まぬから拜借と致して置かう。あの後君は福岡君に顏を合はせたことがあつたか。僕の言葉を君は先日の話の通りに君の言葉にして福岡君に一應話して見たか何樣かへ。福岡君は何と云ふて居つたか、君から其が聞きたいと僕は思ふて居つたところだ。成程福岡君は有名の磊落家で、遊興も忌憚無く遣つて退けられると某朋友

る、筆の巧といひ意の賢さといひ、察すれば千趣萬態は文の裏面に橫はりて、あさましき人のみ多く來りて妾を逼迫めば、然る心抱かぬ我に來て吳れよがしの意もほの見えたる憐さ、何とも云ふべき樣無し。先の日の殊なる擧動も此文にて大凡解したり。彼の肥胖婦のぐど〳〵云ひ居しことの樣もあらまし悟りたり。普通の女には出來ざるべき此の文の書きぶり、此筆の步みぶりをもて猜すれば、全く尋常一樣の下賤の生れにはあらしずて、由緒あるものゝ家の不幸かなんどに是非無く身を沈めしか、左無くば他に計られて、不承諾ながら脫れ難く、籠の中の禽となりて心中に悲み憤り居るなるべし。苦さの餘りに文才あるより文は書きしものゝ、末の方の文句の樣子もて推測るに、猶良家の女の氣位ありて、一見の客に語を寄するをも自ら屑しとせざる調子あり。名を記さゞるはいよ〳〵もつて自ら重んぜるを見るに足れり。まことに汚れたる彼の如くのところに長く置きて婦德を失はせ、回復し難き玷を得させせんは人情忍び難き事なるが、我之を何とすべくも無し。たゞ此文に思ふばかりの意を答へて、聊かなりとも彼の女が我に寄せたる意の報酬とすべきのみ。と雪雄は筆を執りて澱みなく何かさら〳〵と認めしが、末に至りて心付けば、那處の誰にか此文を送らん、我は記臆無き彼女がところ、彼女は記さぬ自己が姓名、絕えて手掛りは無かりけり。

其 二十五

雪雄は虚僞か眞實かを其書について考ふる暇もあらず直に信じて、筆者に忽ち同感を起し、我を苦めたる彼の肥肉婦めの過ぎし日も物蔭にて彼の女をば責め居たりしやうに覺えしが、憎むべくまた窘め居るか。此の文面にて察すれば女は未だ彼の里の習慣に染まで深く身の淫肆に墜ちしを悲み慚ぢ苦悶なし居る如く見えたり。若し左もあらばいと憐むべけれど、我には其を救ふべき力も無ければ因縁も無し。老婆の一念を動かしたりとて今はた之を何とかせん。惡むべきは花岡福岡なり。福岡は猶如何にもあるべし。花岡は吾が前にて復び彼の里になんどは到るまじと言葉を放ちながら、何とて福岡と共に遊べるぞや。欺かれたるは不覺悟ならねば、これまでは是非無けれど、此後彼を朋友と見て交際はんことは甚だ面白からず。捨てたる友に諫爭は無益しければ爲しも得せず。また吾が家のものは此仔細を知らねば、彼を好き人のやうに思ひ做し居りもする故、全然絶交と打出して我のみ異を立て獨り潔よくするにも當らじ。此上は來れば拒まず、去れば追はず、といふやうにして自然々々に遠退くべきのみ。吾が名を知らせ吾が家を知らせしも恐らくは花岡か福岡のせし事に違ひ無からん。賤しきところのものに姓名住家を知らるゝも何と無くうたてきに、由無き口をきゝて花岡等の或は我が許へ文を與へよなんどゝ云ひしやも測るべからず。思へば〳〵厭はしき人々なり。それはそれとして此文の筆者は憎むべきものとも覺えず。飽まで自己が身を恥ぢたる心の床しさ。いやしき慾を擲けながら、我に自己が目下の悲み苦みを少しなりと救ひ與れよと云ひ廻した

き身の淺麻しきところより申しあげまゐらせかね候事に候へど、吹く風のそよとの御便りだけにても賜はりたく願ひあげまゐらせ候。花岡樣福岡樣は、昨日も一昨日も御揃ひにて御いで遊ばされ候に、御許樣ばかり御入りも無く候へば、心むづかしき彼の肥えふとり居り候御存知のものに言葉の針するどく痛きめに逢はされ候て胸のみ傷み申候。我が身の不束にて御意を迎へまゐらする術さへ知らず御不愛想に御返し申せしを、御心に叶はず思され候て御入り無しとならば何とも申しあげまゐらすべき樣無く、たゞ〳〵身の不仕合せを歎き候て今の困みに堪へ候よりほかは無く、露御恨みなどはいたし申さず、何時々々までも御入り無くて口惜しからず思ひまいらすべく候。あまりに心のくま〳〵申しあげまゐらせ候て狎々しくおぼされんも厭はしく候へば一方ならず苦み居り候身のありさまをも申しあげず、たゞ〳〵御氣高き御慈悲に縋りて萬に一つも御憐愍を賜はらば御運ばせのほどを、罪ある理無き願ひなれどひそかに願ひあげまゐらせ候。かしこ。

と書きも書きたり、捉へどころも無く締りも無く、戀の文にもあらず愛情無き文にもあらぬやう心も寛く筆も寛やかにばつと書き流したる其のみならず自己の名を署す代りに「わが名しるせぬもの」と書きたり。

其二十四

さりとて他に心當りも無し、そも那處より如何なることを云ひ越しけむ。それとも矢張り彼の女の我が行かむと云ひて欺きしを恨みて書を送りしか。思へば虛誕と知りながら由無き約を遺せしより、自ら咎めて精神が騷がすことを免れず。と我を責めしが、遂に如何にしても見ずには心の濟まざるより、一旦藏せし机の抽斗引き出して推丸めし文を展し、人や覗ふと氣遣ひながら密に首より讀み出しぬ。

文面の醜きには戀も褪めるもの、文章とゝのひ筆跡麗はしきには、見ぬ人もゆかしく思はれて徐に情も惹かるゝものなり。雪雄見ざらば已みしならん、今來し文を見るよりも忽ち心猿意馬は狂ひ出しぬ。

御眼の汚れと搔い遣り捨て玉はんをも憂ひ思はざるにはあらず候へども一筆しめしまゐらせ候。過し日はゆくりなく御入り遊ばされ候て初めて御見え申しあげ候も愧づかしきところにて羞かしき身の、御まなじりにかゝらんさへ耻かゝやかしく覺え候まゝ、たゞ〳〵うろ〳〵いたし候のみにて終に何の風情も無く御歸し申し上げ、何と無く心ならず存じまゐらせ、御歸りの後も御慮外ながら御上をのみ思ひつゞけまゐらせ居り候ひし。其折の御仰には御閑暇さへ御座さばまた御出もあるべきやう有りしゆゑ、心樂しみに御入らせをのみ御待ち申し居り候ところ今に御入らせ無く悲しく存じまゐらせ候。何事も御異り無く御いで遊ばされ候はゞ、何卒御入りあそばされ候やうとは、淺庣し

取りければ、不審しながら差出人を見るに、桃溪富美と記してはあれど知らぬ人なり。我まだ面識も無き人より書信を受くべきほど世に名も知られ居らざるに、と怪みながら封を切りて披き見れば中は女の筆の假名文字美しく媚き立つたり。躍る心を推靜めて、こは那處よりか、心得難し、女より文など受くべき所以持たぬ身に何としてかゝる事のあるぞや合點行かず。第一視るべきものにもあらじ、此儘封じて返さんか、いや封を切つたればそれも甲斐無く、見て返したりとおはもれむ。加之封書に出し人の所書のあらねば詮方無し、燒き捨てんかまた推丸めて屑籠に投げ入れむか。燒き捨てなば人や怪まん、屑籠に入れなば洋燈掃除の折などに源三郎に見られん怖れもあり。如何はせんとためらひしが、何にせよ人に見られなば惡かりなんと揉みまろめて机の抽斗に其儘入れぬ。

其二十三

推丸めて仕舞ひは仕たれども、見ぬだけ猶も心にかゝりて、抑も誰人より遣せしか、如何なることをば云ひ越せしかと疑ふ中、不圖彼の女のことに思ひ到りて、若しや彼處より我が住所氏名をば知りしまゝ遣せしにはあらずや。いや〳〵名乘りも告げもせざりしなれば、我を此處に在る此人と知るべき所以も無きに、如何にして我が許に書を致し得ん。縱令ば知りたるにもせよ唯一度苟且に見えたるばかりの我に何として馴々しく書など送るべきや。是は全く彼處よりの文にはあらざるべし、

定めかねまするなれど、此方の人では御坐りますまい。明末清初あたりの人でゝもござりませうとおもひまする。書題は別段これといふことでも無くてたゞ七夕前日あたりの趣きを寫したやうに思はれまするは、人形といひ衣服の色合ひ周圍の景物で大方左樣かと察せられます。といへば横手を柏つて、如何にも左樣であらうと父は悦ばしげに猶眼も離さず瞻居たりけり。

好き頃に雪雄座を立つて自己が書齋に引退きしが、彼の女今の畫眼につきていよ／＼妄想に攻められぬ。思へば全く偶然なるべし、圖らず父の得たる書に圖らず彼の女に肖たる女の描かれしのみ別に奇も無し、圖らず遇ひし彼の女の圖らず此繪の美人に肖たるのみにて別に怪しきこと無し、皆これ全く偶然なるべし。我が彼の女に會ひたるも、自ら求めてせしにもあらず、原を尋ぬれば偶然なり。偶然とは解釋の屆かぬ地なり。偶然の事に心を繫けて思ふとて何の益あるべき。たゞ思ひ捨てゝ仕舞はんのみ。と幾度か思ひあきらむれど、生憎に思ひ捨てかねて、畫の事心に浮かめば女の事隨つて心に浮み、女の事胸に湧けば畫の事隨つて胸に湧き、影の形につき響の聲に應ずるごとく相纏はりて我に逼れば、果は偶然の事をさへ何かの因緣のあるやうに迷ひ思て、我と彼の女との間に淺からぬ前定の關聯でもありはせぬかと疑ふ如き馬鹿々々しき想像も生じて、我からはつと密に慚づることもあり、無益しき考へに疲れける。

其日事無く、其翌日も事無く濟みて、其翌々日午後に雪雄は見馴れぬ手跡もて上書したる郵便を受

思議なり。畫は異様なるものにもあらず、人を畏懼せしむるものにもあらで、侍女を從へたる一美人の、卓上に安置せる小さき偶像に眼を止めたるばかりの圖なれども、其美人の面を見ずば已みなん、見れば吾が秘密は幅上に暴露し出されてあり。密に相見て今も猶我が眼の底を去りきらぬ彼の女はこゝに描かれあり。額つき眉つき彼女を寫したりとより他は思へぬ美人をゆくりなく今日父上の購ひ歸り玉ひたる古書に見んとは思ひがけねば雪雄の驚きしも無理ならざりけり。

其二十二

似るとて似させもせで斯様も似るものかと雪雄は心中に呆るゝほど圖中の女は我が眼に殘れる女に肖も肖たり。眉密ならぬに氣品高きを表はして額の窄からぬに心の舒やかなるを示せる其のみならず、星眼清く頰豐かなる一分一厘差ふこと無し。雪雄はこれに茫然として醉へるが如く幅上に心を奪はれて見とれ居れば、父は理由知らぬまゝ一筋に畫の妙に吾見の感ぜしことゝ思ふものから鼻高く、と、何様だえ雪雄、隨分好からう。中々の名作に違ひ無からう。して此畫題を何と見た。たゞたゞ美人が人形を玩弄んで居るといふだけか。と云ふに、雪雄は我に復りて、初めて畫を視る心になり、仔細に見るに成程父の褒むるも無理ならず、位置といひ運筆と云ひ着色といひ、何處に厭なるところも無し。如何にも御父様の仰る通り中々凡筆ではござりませぬ。筆者は成程誰人とも猜し

いと認めたので價を尋ねて見たに凡書の格ゆゑ、其書のために不平で堪らず、直に其儘購めて來た。ところで途中車の上で其書題を頻りに考へたがどうも一寸思ひ當らぬ題目だ。たゞの圖であらうか何かまた詩の句でも基にして作意したか、それとも故事でゝも有らうか、兎に角汝に評もさせたい。と云ひかけて娘の方に向ひ、今持つて歸つた軸を床に掛けて、といひつくれば妹は立つて、今まで掛り居し抱一の軸を取下して掛け替へぬ。表装は埒も無く傷んで居るし、一躰に汚れもついて居るが、能く見たらば汝にも凡書で無いとは受取れるであらう。さあ能く見て。と父の云ふがまゝに雪雄は座敷に至れば皆々も從ふて席を移し、衆眼一齊に書に注ぎぬ。

書畫を嗜むは煙草と酒とを痴人の嗜むごとく生意氣と僭上の驕り沙汰とより起るが世には多けれど、雪雄は齢猶若きに似ず父讓りの風雅か、乃至はまた打沈みたる性分の然らしむるか、早くよりかゝる事をば僞りならず嗜みければ、今の父の話しに興を動かして、如何なる書かと胸中に既限り無き樂みを覺えつゝ徐に床に向ひ、熟と眼を止めて打着るに、筆の巧拙書の題目は暫く措いて云はずとして、思はず深くも驚かされたり。心の迷ひか氣の咎めか、天のせしむる廻り合せか、不思議にもまたいと怪しくも、看るより早く吾が心は此書のために衝き動されぬ。書の善悪も見極めぬ間に心の動かさるゝといふは極めて道理無きことなれど、其道理無きより猶道理無きは、此書の自己を驚かしめし所以にて、若し我が心の迷ひのするならずは、實に不思議といふも餘りあるほどの不

何時か眠の前に現はれぬ。されど靜坐に馴れたる雪雄は机邊を去らで餘所眼には常の如く殊勝なる書見に日を暮らしけるが、夜に近くして父は外より歸り來りて何日に無く、雪雄此方に來よ、汝に見するものゝあるほどに讀みかけし書も無くば來よ、と平生何も關はざるには似ずして今日は殊に雪雄を自己が居間へと呼び入れたり。

其二十一

父に呼ばれて何事かと雪雄は心に疑ひながら其居間に到りて席に着けば、母は今しも茶を入れつゝある其傍に妹は坐し居て、何の異れる樣子も無く、誰しも事無き面の色をなせるに、さては我が上の事ならずと私に心を安んじたり。湯加減程よく茶も出來たれば、母は父へと、妹は我へと茶盞を送りて自己等も靜に陪飲しつゝ主人の言葉を待つが如くに控へ居るに、父は常より機嫌よく、喜色を湛へて雪雄の方に面を向けながら、汝に見せやうと思ふのは他でも無いが、今日圖らず路上で眼に留まつたゆゑ畵を一幅購めて來たが我が意では希代の名筆のやうに思ふ。筆者は誰とも見定められぬが無論此邦の人では無いやうでもあれど、或はまた非常に巧に明人あたりの原圖を摸したものか、其處までは殘念ながら眼が屆かぬ。若し摸したものであるならば、必ず百年百五十年以前に、紙まで渡り紙を吟味した上で大分の丹青家が刻苦して作つたものであらねばならぬ。何にせよ面白

ない。これらは皆人界を蠧毒するものだ。虚偽の平和だ。人間の進軍の最中に苟くも安んずるの平和だ。常に十二分の自由を望んで、常に他と衝突して、勇猛に戰つて、他を殺すか我を亡すか爲るのが社會のためにも個人のためにも一番祝すべき光景だ。と青筋張つて暴論を吐いて居るが、其癖彼の男は何樣かといへば猫のやうに柔和で、何事も人の後についてばかり仕て行く質で、問題を出されなければ議論も出來ぬといふほど臆した性分ゆゑ、母親の干渉を離れては差詰大に困つて仕舞ふ。何事にても彼の男に幹事樣の役でも授けて見玉へ。五月蠅ほど他の差圖ばかり受けたがる。君も定めし知つて居やうが彼ほど甚しいものは少いにしても、隨分自分に相應せぬことをも關はず持說にして居るものは朋友を見渡して見玉へ澤山ある。福岡も必ずしも自分の云ふほど豪傑であるまいと僕は思ふが、多分僕の想像は中つて居やう。彼みづから自分の云ふ通りに自分が出來るものか出來まいものかも悟らいで威張つて居るに相違ない。罪の無いことに極まつて居るさ。君のやうに一概に論じては堪らない。失敬だがまだ君は若い。言を聽て人を論ずれば口吃するものに二妻ありとするやうな痴に陥るさ。ハヽ、福岡も大分噴嚏したことであらう。いや餘談にばかり餘計入つた。また明日來ると仕て其時は君に珍書を一部餽らう。と話を横へ外らせて末、よき程を見て花岡歸りぬ。

話しの敵の無くなりて、またもや胸に湧き來るは怪しからぬ閑忘想にて、例の女の品格ある容貌は

ら道德上彼自身少し愼むやう忠告しやう。と一應は雪雄が意をば素直に受け置き、然しと一轉句を挿さんで、まあ君も餘り狷介過ぎるよ。たゞ一席の僕の話で福岡の人となりを斷定して交際すまいの何のといふは些敏捉過ぎて過慮に失しはすまいか。一方から云ふたら又輕卒ではあるまいか。隨分人は自分の抱いて居る説と自分の性質とが相應して居らぬも知らないで揚々として居る無邪氣の人もある。近い譬喩が彼の奥原を見玉へ。極端な自由説を萬般の事に振り舞はして、一寸した討論會にも演説會にも何を云ふかと思へば何時も、自由は人爲の錯誤と虚僞とを脱して自然の順序と理法とを暴露し、而して吾人に宇宙の大光明を認めしむるものである。と僕等の耳にはまた例のだナと記臆させ切つたほど叫ぶでは無いか。何も彼も其主義から割り出して敎育も放任がよい、宗敎も干渉せぬがよい、交際も一個一個がよい、政治も一人一人自立がよい、虚文虚禮で僅に結ばつて居る社交的の團体、主義綱領で拘束して行く政治的の團体ほど愚なものは無い。死したる過去と瞬間の現在との思想のために他日の多くの思想言論の自由を自ら犧牲に仕て仕舞ふて或る約束に從ふことを肯ずるなどゝいふほど愚なことがあるものか。學術研究會で大著述の出來た例も無ければ新學説の成就した例も無い。某倶樂部といふものは、怠惰漢が互に相許して互の自由の網の壽命を酒と笑話と第三者に對する高慢とに費し合ふところに過ぎない。某會社といふものは同じ業務に於ける二人以上のものが相爭ひ戰ふことを忌む時、相互の自由を殺ぎ合ひつゝ和睦した結合に過ぎ

ふ。それ故あゝいふ中のものと、良家の子弟、假令ば君なり僕なりとの間に愛情の燃えなどした時には、彼樣いふところの成立の要素となつて居る陰險酷毒無慚無道理等の一切の惡德と愛情とは勢ひ衝突するから、甲者が乙者を壓伏し盡すか、乙者が甲者を破壞するか、乃至事情の關鎖の頓滅、即ち死といふやうなことになつて不幸に終るが定數で、世間に其例は少くないと思ふ。僕は決して彼のやうな惡空氣の地に出入することはせぬ。花岡君足下も足踏み仕玉ふな。僕は君をば良心も愛情も缺損して居ぬと信ずるから敢て忠告する。君は必ず僕の言葉を納れて呉れるに違無からう。君と福岡君とは舊くからの交際ならば、君願はくは僕の言葉を君の言葉に直して忠告して遣り玉へ。と事情にはまだ疎けれど、云ふところは中々筋立つて飽迄頑固なる定規論を通さんとするは齡行かぬものにしては見上げた覺悟なり。孔子くさい顏で說きつけられ、困つた花岡は胸の中にて、こいつ食はず嫌ひで何か云ふ哩。

其二十

雪雄よりかは幾分か世故に通じたるものゝ、耳で受取れば童蒙の言葉とよりほかは聞かれぬなれど、理屈は理屈なれば、花岡も敢て反抗せんとはせて、成程それは君の說が至當であるに相違無い。假令福岡が此席に居ても駁論を立てる地はあるまい。如何にも心せねばならぬことだ。福岡へも僕か

あるのか、乃至供給者があつて隨つて需用者があるのか其は論ぜずとしたところで、およそ人間界で一等の殘忍酷薄な業躰は彼の遊廓の娼家ではあるまいか。賤業婦なりとて元は良家の女であるに一度墮落すれば助かる瀨なく、肉も血も節操道徳も畢竟は皆彼の娼家の餌食となつて仕舞ふ。憫むべきの極では無いか。正當に評すれば賤業婦は人間には全く捨てられたもので、神とか佛とか云へば云ふべき人間以上のものに救はるゝより他に救はるべき道は絶え果てゝ居るのだ。形骸の上の苦患こそ痴漢にも救はれ助けらるれ、眞の救ひは實に神佛か神佛ほど大量な人の熱情のために救はるるより他には無い。左程の不幸は何によつて與へられたかといへば、畢竟は世間の組織の幼稚な罪とはいふものゝ、將又當人が人生の禍福の壓力に堪へぬ弱さの罪とはいふものゝ、遊廓といふものが成立つて居て娼家といふものに租税を納むるほどの名譽を與へて置かれるからである。人がましい顏して娼家といふものが商業家らしく過ごして行くから、弱いものは其店の商品となり、其俎上の肉となつて仕舞ふのであらうでは無いか。それを賣物買物なればとて自由にして自己の慾感を滿足させうがために福岡君の如き說を抱いて遊びに行くとは、不幸な女を貨物と見れば知らず人間と見たらば些苛酷過ぎる論では無いか。娼家は客によつて利するところあらうも知らぬが、不幸なものは何の利するところが畢竟有らうか。僕が思ふには不幸なもの等は客の來る度に怒りに堪へず悲みに堪へぬに定まつて居る。左なくば良心が痲痺して居て常人と違つたものになつて居やうとおも

は花岡が遊興を勸むるならんとも思ひ到らねど、唯其說を憫むべくもまた甚しく過れりと思ふものから、昨日今日の實際の事に關聯せるをも忘れて一ト通りの學說でも攻究する如き調子になり、他の聞くも構はぬ忍ばぬ聲して、君はそれをば何と聞き玉ふ。餘り過つた說では無からうか。自己に傷害さへ來さねば何をしても可といふやうな前提が無ければ其樣なとは云へぬ筈に定つてゐる。してみれば其は利己主義の最も狹隘で最も卑賤な然も蠻氣を帶びて居る甚だしい陋說と云はねばなるまい。兎角氣を負ひ才を恃む人には、左樣いふ恐るべき謬說を公言して慚ぢぬものがあるのを僕も見て知つて居る。僕は斷言するが、其樣なことを云ふて居る人で、果して若し婦人に對して決して愛に墮ちぬならば、其人は恐るべく忌むべく人だ。又若し愛情の具備せぬでも無く麻痺しても居らぬ人ならば、若し其人の愛に墮ちた時には其人は自家の說を取り消すと共に危險極まる愛慾の奴となつて自ら自己を破壞し盡して仕舞ふであらうと思はれる。福岡君は磊落の人のやうに思ふて居たが戲談で無くて眞に其樣なことを云ふて居るのなら僕は以後交際せぬ。君は例によつて僕の事を狷介でいけぬといふか知らぬが、狹量でも孤立主義でも僕は關はぬ。其樣なことを云ふて居る人が僕の舊友なら必死になつて諫爭もするが、德力の無いもので居ながら交際の淺い他人に是非を云ふことは出來ぬから、仕方が無い交際はぬが一番自己を欺かぬ道だとおもふ。實に福岡君は恐しい人だ。僕は到底交際して行くには堪へぬと自覺する。君聞き玉へ。先づ第一需用者があつて供給者が

て呉れ玉へ。福岡君は何樣な人か能くは僕も知らぬけれど、彼樣なところへ出入するは餘り好く無からう、と僕は思ふ。と他を疑ひ邪推なんどをすること知らぬ雪雄は既一點隔意なく語らへば、左樣君に云はれゝば實に僕も安心した。何彼の福岡も惡氣は微塵も無い男だが、一躰性質傲慢か又は大量なのか毫も些事には頓着せず。公然彼の樣なところへも面をわげて出入するのみならず、却つて外聞を憚つて忍んで通ふといふやうなものを輕蔑する位。其說をまづ聞玉へ。非を飾るといへば非を飾る論には過ぎぬが、彼みづからも、乃公の說を非を飾るといふ奴があらば云はせて置て差支へは毫も無い筈だ、と飽迄毀譽に關せぬ剛情一點張。其說を何樣いふ說かと云へば、君子と僞君子と節儉家と守錢奴との共に賤み厭ふところへ通ふたゝめに自己の品格名譽信用に關するとおもふほど自己を薄弱に認むるものならば彼の鄕に行かぬがよい。何程亂行狼藉を逞しくしても自己の其爲に亡滅するやうにならねば關はぬこと。畢竟弱蟲で無い以上は何んなことを仕ても關はぬといふ理屈を根にして立てた論だが、君は其說を何樣おもふ。と果して福岡が其樣な說を立てしや否やは怪きことながら眞實らしく語り出でゝ花岡は雪雄が意を窺はんとす。

其十九

雪雄は花岡が道理らしく告ぐる福岡が一流の僻說を聞きて微々と笑ひ、福岡が言葉によそへて其實

常にも似ず、只管沈默を守り居る其樣子を、遂に見て取りしや花岡頓て眞面目くさく、いや實に昨日は一ト方ならぬ失敬なことを仕て仕舞ふて、何とも君に申し譯が無い。勿論大醉の上の事とて福岡が例の磊落論の勢に呑まれて彼の男の云ふなり次第になつて仕舞ふたのではあるが、今朝醉が醒めて實に僕はもう二度と君のところへ來る事が出來ぬかとまで弱り返つた。福岡は福岡で平生から自己一流の妙な見識を立て通して亂暴に過ごして行く男だから彼は彼で好いが、彼が半分脅迫的に君と僕とを彼樣いふところへ連れて行つたといふもの丶、君より年長の僕が一處に居ながら君をして彼樣いふところへ臨ませたのは其罪免る丶ところ無しだ。僕は決して福岡に罪を塗りつけて自らだけを潔くするやうなことはせぬから何處までも君に對しては罪を負ふ覺悟だ。如何に君に叱責されても甘んじて叩頭百拜するのみだ。何樣か君許して呉れ玉へ。全く僕が惡かつたから。と座に居ぬ福岡を惡者にして自己は其楯の蔭に隱る丶狡猾なる云ひ廻しも、表面では潔く罪を背負ふて出たるに、裏面までは見透せぬ雪雄の心忽ち解けて、正直にも福岡を惡く取りて花岡を惡樣に今は思はず。いやなに左樣いふ譯ならば何しに君を僕が責めやう。畢竟は僕も前後を忘れて四肢の倦怠するほど酒を過ごした罪からして、自分の意志さへ定かならぬ中に彼のやうなところに擔ぎ込まれたのであると思へば、敢て他人を兎や角と云ふことは無い譯だ。たゞ此後はもう無法に酒を飲むことを相互に謹みさへすれば自然と過失も生ずる憂ひが無からうとおもふから、其積りで君も心し

囘家の女の墮落せしならんには、汚らはしき金といふものゝため嬲りものとなつて憂き目を見る慇然さ。人情世態昔時ながらかゝる事も敢て怪しまざる習ひなれど、思へばつく〲憫然にて、世は彼の如き營業をなし、不幸の女子を囮にして自己が私をなすものをしも、猶人として交際ふほど制裁の弱きものなるか、と徐に歎息までするところへ、源三郎の聲として襖の外より、若旦那樣、花岡樣が御來臨になりました。

其十八

我を瞞きて卑むべき地に誘ひ入れし花岡を惡まじとしても惡まずには居られず思ひ居し折柄、面皮厚くも慚づると無く彼より特に尋ね來しと聞きていよ〱厭はしく、見下げ果てたる痴漢、と雪雄心中には甚だしく愛想を盡かせしが、まだ齡若の氣の弱くて、面會を謝絶するとまで強くは出得ず。澁々と此方へ御通し申せと例の如くに挨拶すれば、源三郎は立つて玄關に出てしが、頓て鄙むべき花岡は態と作りしやうなる温顏に少しく笑を浮めて入り來り、此方の調子によりて口を開かんとする如く、毒にも藥にもならぬ雜談の面白くもあらぬことばかりを二言三言語りて、昨日の事は知らぬ歟の如く粧ひ居たり。惡友とは此樣な人の事なるべし、と思へる雪雄は、疾く歸れかしと念ぜるものから、色には流石現さねど言葉も自然と少くして、むづかしき論を仕出しては敵手を困らする

の如く、正當に働く意の力は極めて弱く、餘事にのみ兎角氣の馳せんとする勢あり。心を引締めて無理に自ら勵ませば、譯無く疲れて睡氣ざし、睡氣を覺さんと茶に煙草に休息すれば、何時か妄想にまた氣を取られて、殘念にも胸を蠹蝕まれ、指頭の話、眼中の涙、奇異なりし彼女の素振の光景なんど一々明かに現前して、虛言と知りつゝ我が虛言吐きて他の日來ることあるべしなど云ひし罪まで想ひ起し、千緒萬端に考へ惱みけるが、畢竟は女の上にのみ心惹かされて他へは去らず。眞實不幸にして良家の女の急に魔鄕に落ちしものか。然云ひたるも人を欺くことを習ひとする由の花街のものゝ口より出でしことゆゑ若くは虛僞なるべきか。いや／＼彼の憎き肥肉婦こそ世磨れたる忌々しきものであれ、彼女の初々しさ、物羞したる樣子と云ひ、深く肥肉婦を怖れたる樣子と云ひ、花街のものゝならぬ普通の人の感情をもて、歸宅んとする我に同情を表し吳れたる樣子と云ひ、全く淸淨無垢の處女の悲しき故ありて惡所に墮ち、日々樓上に故鄕を望んで泣くといふやうなるものなるべきか。然は云へ我を重ねてまた通はせんとて歟、二度三度、明日は來玉はるべきや明後日は來玉はるべきやと問ひ尋ねて、我が應諾せざるに涙をさへ墮せしは更に合點行かず。我を招きて何とかする。惡所に齡を重ねて功の積みたる者は空涙も溢すと聞く。眞實昨日此頃彼の魔所に落ちしものならば彼のやうなる光景を做し出すべくもなし。前後を照らし考ふれば必定憎むべき惡物にはあらざるべく却つて憐れむべく覺ゆる節々多けれど、其にしても合點の行かざるところもあり。眞實

心其處にあらざれば見て見えず聞て聞えざるものとて、雪雄は茶屋が名も記臆に留めず、青樓が屋號はもとより吾が相手となりし女の名さへ耳にも眼にも聞きつけ視つけざりしかば、翌日晝過ぎて獨り書齋に例の如く籠り居て、徐に昨日の一部始終を胸に浮ぶるにも、一切夢の郷に遊びしやう思はれて、取り留めたることは一つも無し。されど路傍の花と見て心にも留めず過ぎたりしに、宿世に緣でも續がれるか、假初に相見し女に心を動かしたりしとは自己から露思はざるにも關らず怪しくも其潤き額淡き眉、品格高くして然る筋のものには似合はしからぬ顏付、我が眼に染みつきたりと覺しく、芸窓讀書に疲れし眼を、庭前の松柏の青きに注ぎて、机に凭りながら心を少時休むれば、青天に白雲の漂ひ來る如くに那處よりか彼女の俤の現るゝとも無く現はれ來て、言はず笑はず、いと靜に我が方を見て急にまた我が視る眼をば避くる風情などあり〳〵と昨夜見しに異ならず。こは怪しからずと心づけば直に姿は消え果つれど、復何事も無くて居れば何時の間にか復耳の底にて、唯一ト言々ひし彼の女の清き聲音の聞ゆる心地す。これはと我から驚きて、我まんざら不學文盲の田夫野人にもあらぬに是は何たる事ぞ忌々し、無益の妄想は心術に害あり、よしなき不埒の遊興、其時にてさへ唾棄すべく思ひしものを、今更賊過ぎて猶怖畏を懷くがごとく、繰返しても毫も甲斐無き追懷三昧は愚の極なり、と齡は若けれど學問もせし身の思慮には老いて、苦茶に惰氣を拂ひ、讀書に精を入れけるが、昨日まで一昨日までの我とは異りて、全く精氣の足らぬ人か熱病上りの人

熱き手にて吾が手を執りにかゝりたり。觸らるゝとゝもに身もよもあられぬ思ひして、兎のやうに跳ね出し、息せはしく逃げて此兩三日以來少しばかり心易くなりし同じ大阪生れの清川といへる女がもとに駈け込みける。其次の夜は流石に其男も來らざりしが、初めて雪雄に見え、露いやらしき譯は無けれど引付で密と覗し時より何かは知らず、かつと上氣して、吾が室にては猶更の事心さわ立つて穩かならず、雪雄が傍に近づきたきやうにもあれば怖ろしきやうにも覺えて心は立居に迷ひ居ける其中雪雄は歸り去りぬ。

雪雄が歸り去りてより、お文は心恍惚として醉へるが如く、自己が臥床の夜具に凭れていと懶げに幺微なる溜息つく〴〵打案ぜしが、何とかしけむ末には終に眼をうるませて愁に沈みぬ。

其十七

其夜は疲勞に其儘睡りしものゝ明けて昨日の事をおもへば雪雄何と無く心の安からで、誰か耳の底にあつて呼くものあるが如き心地し、平日のやうに父母の前に出でゝ機嫌を尋ぬるにも何と無く臆して、若も昨夜遲く歸りしことを問はれなば何と答へむとの氣迷ひより動悸も私に起り、たゞの話にも自然頓間の挨拶しては、つと驚きて、氣付かれ疑はれはせざりしかと危み怖るゝこともありしが、我が思ふほどに他は心に掛けずして、何の怪み糺さるゝことも無く濟みける。

毎に代る源平藤橘、穢多やら南京の化けたのやら知れぬ男に掛くるに定まりたる勤めの辛さ。身の内に血のあり血の内に熱みある女の、何として出來得べき。墨染と呼ばれて初めての夜は本町邊の大店の若隱居との事なれど、齡は四十越したる油ぎつたる顏の異しく光れる男に見えて、親の滿足に生みつけて下された身躰を、今日此男のため平常ならぬものに壞り捨てられて仕舞ふかと思へば何樣あつても堪へ難く、無理遣に押し入れられし閨の中、思ひつきて男に後を向け、鳶を怖るゝ鷄の子の小柴の籬に潜むごとく小くなつて目睡みもせず居たりしに、何とか彼とか言葉こそは掛けたれ身にも觸らで其男の夜を明かし呉れたれば、ほつと一ト息ついて曉方立ち出でけるに、不圖ふりかへりて男の恐しき眼して吾背影を睨めるを見し時薄氣味惡く覺えたり。二日目の夜も其男にて、さては吾身をたゞ置かぬつもりの今朝の眼つきなりしかと、どつきりとせしが、猶逃るゝだけは逃れんと昨日の如くせしに、彼に角と言葉こそ多く費したれ、矢張男自ら忍びてか手だも出さず夜を明しぬ。三日目の晝前例の肥胖婦の新造に捉へられて聞くに堪へざる說法をされ、文を男に是非遣らねば今夜だけは義理にも來て呉るゝべけれど其後は必ず途斷ゆべしとの命令に詮方無く、云はるまゝの大凡を文言にして書き送りけるに、文面きはめて美しとて、我からは左程にも思はざる筆遣ひを賞めそやされぬ。其夜果してまた執念くも彼男は來りて數々の土產物を與へ呉れ、吾への親切を表しけるが、二人差向ひとなつては例の如く酷くせしに、此度は許さゞるつもりにや火の如く

足も動かす間無く宗太郎が今まで苦辛して儲けためしものは颶風に逢ひたる木の葉と失せぬ。千日の萱一時の火、流石疾より思ひ定め居ても今更落膽して筋も力も脱けしが、宗太郎自ら我を冷笑つて、美味からぬ酒を強飮し、大醉に醉ふて其日を過しぬ。それより宗太郎が如何にして猶賭博的商業を仕つゞけしやは知る由なけれど、母は京都の知る人の許に託せられ、妹は下女代りになつて兄と共に谷町あたりの借家住み、琴爪はめた指先も、たわし、さゝら持つ臺所事に荒れて、紅さした爪も糠味噌の移り香止むる悲しき境界に落ちけるが、斯樣なつては猶更止められぬ道に、意地強くも宗太郎猶其事を續けて牙を咬みつゝ口惜き日を送り迎ふる其中、或夜深けて兄妹の悲しみ泣く忍び聲聞えてより三日め、お文は忽然として近所の人も心付かぬ間に影を隱しぬ。

其十六

昨日は襤褸着てもお文〳〵と親のつけて玉はりし名を呼ばれしに、今日は悲しくも亡くなられし父樣の御存知あるまじき墨染といふ名負はせられて、視る目には美しけれど心には口惜しき色を賣るための風帶に過ぎぬ金絲銀絲の刺繡せし衣を引纏ひ、金さへ持て來るものには田夫野人でも厭といふことならず、耻かしくも面をさらし、むさくろしき猪口のつけざし、胸のむかつくばかりなれど眼を睡つても受けねばならず。それさへあるに今川狀にも無い敎訓を受けさせられて、投の情を夜

へ廻れる者ども此態を見て、今に見よかし破竹の宗も、今度こそは自分の身代をから竹破り、亂離粉灰になつて仕舞ふべし、と點頭合ふて語り傳ふるを聞く度宗太郎笑を含んで、言はず語らずの心の中、群雀の輩頓て口を開いた限り、天に冲る大鳥の後影を見て呆れ羨む時あるべきぞ、と確と自分を信ずる餘り却つて獨り樂しく思ひけるが、果して其日近くなりて天の雲の足取早く怪しき風そろ〳〵と吹き出しけるも正午になりては、何時か曇り無き青空となつて吹く風女の鬢も亂さゞるほど靜なれば、買ひに廻りしものども思ひ設けしとは違ひて急に腰砕け足浮きて、しどろもどろに落武者の醜態をあらはしぬ。時來りぬと十分に賣煽つて底と見る時手仕舞ひせし宗太郎、懷中ゆたかに家に歸りけるが、嬉しさも高じては人の睡眠を奪ふものとて夜中過ぐる頃まで寐つかれぬ床の中、さま〴〵の事おもひ廻らす際、不圖心の占を得て此二百二十日もまた賣り方と考へ定め、此處一度うまく行かば長くは爲まじき危き業をばつたりと廢て地道に入るべしと自己が勝手を圖りける。

宗太郎猶賣り方に出んと機會を見計らひて高直より賣りにかゝりけるが、利運いよ〳〵我に在る如く見えて昻下波瀾は無きにあらぬも大勢はまたの勝利に定まつたるやうなりしが、天道左樣は好い眼ばかりを見せず、人間風情の注文通りになつて堪るものかと云はぬばかりに、それ行け風の神、雨も隨て行けと邪見な命令でもありしか、目ざせる日の前の日より樹の拔けるほどの大風、銀河の底のぬけたやうな大雨、散々の大暴風雨に各所家藏の損害も少からず、相場は忽ち激昻して、手も

れば一ト伸しに天へも上るといふやうなることを爲いては到底おもしろいこと無し。生活は小人數の贅澤ながをかしく、身躰は閑暇あるが妙。今の商賣はさらりと捨てゝ新規播き直し、乘るか反るかの運試しを仕て見ん。遣り損ふたところで裸躰になるばかり、借錢負ふて首取られた例なし、怖いもの無い世界に一ト跳跳ねぬは男兒を自分で捨てるといふもの。胸くそ惡くくよ〳〵暮さうよりは、遣るところまで遣つて退けん。と扨こそ家を疊み商賣を止めて危きことには手を出しける。

一月二月の間は小損小得のみにて左したることも無かりしが、畢竟は幾千かの益を見たるに、漸く駈引も覺え度胸も太くなりたる宗太郎、圖に乘りていよ〳〵腰を入れ力を出し、張り込んで賣りつ買ひつするほどに、利運強くして拍子面白くも買へば昻り賣れば下り二倍二倍と折返し〳〵忽ち數十倍の大勝利を得て、他にもあやかりたがらるゝほど勢ひ鋭く堂島を蹂躙し、何時となく破竹といふ綽號を負はさるゝやうになりぬ。

其十五

相場は天候ばかりで跳る其年秋の季節、素人も氣遣ふ二百十日を宗太郎如何にして感じ知りしか頭から無事平穩と見定めて此處一擧と賣るは賣るは、今まで勝ち蓄へしは云ふも更なり、今住める家地所、今用ゐ居る家財道具のほかは何も彼も皆打込んで海嘯の如く賣り出しぬ。日頃宗太郎が向ふ

槓杆でも絞車でも動かぬ其我の馬鹿強いところから途方も無い奇利を博することも無きにはあらねど、大抵は初め好し後惡し、自惚から失敗つて元も子も無い手振編笠か古帽子か、いづれ客引になつて終り、或は一二年の間、東京ものならば高崎甲府あたり大阪者ならば桑名金澤あたりに影を埋むる身となるが何程も人の眼に咲ることとなり。宗太郎惡所へでも通ふ如く母に隱し妹に忍びて日々心腎脾胃を揉み、人知らぬ冷汗を幾度か腋に流し、人には云へぬ熱汗を兩の掌に握つて、血を吐くほどの氣苦勞烈しく月日を送りけるが、かゝる事に身を委ぬるに至りしも、心中をたづぬれば間違つた事ながら一ト筋の道理無きにもあらず。世は何か金づくのほかあるべき。つく〲思へば義理も人情も口ばかりでは嘘なり心ばかりでは嘘なり、金が働かぬ中は何も彼も役立たず。伊勢流小笠原流の整々たる儀式も金が化けたのなり。一利休紹鷗の跡を追ふ風流も錢無くて眞實の手とり鍋の生活何嬉しかるべき。所詮憎い奴の面を擲き可愛い奴の背撫でるも、黄金の篦で仕て退けねば功能のあらうとも思へず。娑婆で溜飲を下げるほどの事仕て死にたいとおもへば血の雨降らすか金の涙打たすかよりほかに仕樣は無し。堺屋なんどに見くびられて無念の思ひするも畢竟は金ゆゑ。されば一生に一度は是非とも吾が家の棟に黄金の花咲かせいではと工夫するに、半文一文の口錢取りは仕合よく十年十二年つゞいたりとて眼の覺めるやうなことにはならず。海の底に潜らねば珊瑚は取り難き道理とて、遣り損へば缺椀に匙朶箸もつて生くる身となるを覺悟で危い瀨を踏む代り、遣り當

強ひて出て行くにも當るまじきを、男少にては何ぞの時困れば今日だけは家に居てと遏むる暴雨風の日も出て行くが不審と疑ひの立つも道理、たゞの遊行とは大きに違ひて、實は毎日〳〵危きところに臨み死生を決しに行くなりけり。

世間に商買の品多しといへど、歸するところは口錢取りと賭博との二つに過ぎず。商買の本意は口錢取りばかりにせよ、見込を立てゝ買ひに掛り、又は進んで賣に廻り、見込違はゞ痛手を負ふは覺悟の前として、我が思はく通りに時價の動くを見て巨利を博する、是より男兒らしき商買の仕方やある、と疾より考へ定めたる宗太郎は、氣の小き母に知らすは無用と忍び〳〵に堂島の期米にかゝりて身を粉と碎き心を車と忙しく運らし居ける。

其十四

初めは誰しも小心翼々として危き瀬は踏まぬやうにと心掛け、大事の上にも大事を取りて賣りつ買ひつするものゝ、其中何時と無く本筋の相場師肌になりて、多くの人にも逆ひ自然の趨勢にも刄向ひて、我が度胸で場面が何樣でもなるやうに思ひ、世界一ト呑の鼻息荒く、先祖が釋迦を口利に頼んで來ても取合はぬほど自分から豪氣になりて、飽迄我を立て通したがるが其道に入りしものゝ常態なり。もとより一六勝負同然の商法にかゝるものゝ強き我意無くては叶はぬことにて、たまには

月と經ぬ中、或日突然に轉居と云ひ出して、手傳のもの共を狩りあつめ、眼ぼしき道具、日用の雜器のほかは捨物にして引移りたる先は市中を離れて桃谷の景色少しあるところに建ちたる風流洒落の清楚なる小家なり。氣の利きたる小間使ひと炊婢と子僧一人と親子三人との他には人も無き小軆の暮しとなりて、賣るものは賣り、暇遣るものには暇取らせ、土藏つきたる江の子島の家も望むものに讓りて埓明け、浮世を既仕舞ふた屋暮しに、爲す用事も無く日を送りぬ。

家藏地所を賣りて何程手に入りしや、新に家を買ひ地所を買ひて何程手を出でしや、今の有金何程なるや、店を終ひし損益の決算は如何など母も知らねばお文は猶知らず、心にかゝらぬにはあらねど幾度問ふても無益なるに問ひもせざるやうなりて、何が何やらは少しも分らぬながら、馴れてはこれも苦にならず、宗太郎が母の無聊を慰めんとお文のために活花挿花の師を招き、茶の宗匠、琴の師匠を喚んでは其道を習はするに、好の道とて母はこれに氣を取られて、何時と無く氣散じの今の身を却つて面白く思ふやうなりぬ。

桃谷に移りてより一ト月二タ月立ちて後、宗太郎は日毎に外へ出でゝ夕暮前に歸るやうなりければ、初めは母妹も氣にせざりしが、定まつて毎日のことゝなれば心づきて、那處へと、問ふに、市中の樣子を見、世間の噂を聞かんため、彼方此方の朋友知己を尋ねまして、其中に確としたところを見決める好い事もあらば一ト旗上げるつもりでござります、との答へ。それにしては大風大雨の日は

手にして暴れ飲みに飲み出せば、妓女等は彈くわり跳るわり。思慮無き若者等は後は兎に角、目前の美酒佳肴歌聲舞態に魂魄狂ひて、御主人御許しの無禮講、かういふ日に騷がぬは却つて不興、と勝手に理をつけて騷ぎ出すにぞ、後には好い年した番頭までが、これでも往時はと講釋を小付にして算盤置かせるやうな調子で江戸唄うたふやうになりぬ。

其十三

其日は埒無く酒に終りて何事もまゝよ〳〵で濟みしが、明る朝宗太郎は小僧の忠實なる二人を殘して、店のもの悉皆に相應の手宛を取らせ、留りて仕へんと強ひて云ふものをも諭して放ち、店の戸を引かせ商賣を閉ぢさせければ、今まで家内の人數多く出入滋く賑かなりしに引替へて、がんからがんとなりし物淋しさ、大寺に捕虜となりし如くなれば母のお伊喜も妹のお文も悲しさ遣る瀬無くて安き心も無く、さま〴〵に宗太郎が所存を尋ね、後來を氣遣ふての異見をすれど、弗りとも意を語らず、異見も聞かず、たゞ御眼長く見て居て下されませ、誰しも惡くならうとて分別も思案もするものではござりませねば、私の智慧で及ぶだけを考へ、私の度胸で出來るだけを遣つて退けるも、今の苦さより行末の安樂を望んでのことゝ思しめして御安心なされて下されまし、と云ふばかり。後は何を問ふても云ふても默つてのみ居れば手のつけやうも無く、一日々々と過ぎけるが、半

も忘れて腕組みせしまゝ歩みし末、東の空紫立ちて朝烏の勢好く聲朗かに鳴き連れて飛ぶ頃、狂人のやうに怪くも後聲無き高笑ひして、ハヽヽヽヽといふ途端掌を拍て踏石の上に踊り舞ひぬ。其月其日より宗太郎は忽ち打て變つて母に對しても妹に對しても全く笑顏の無き男となりぬ。獨り自ら帳場格子の中に閻魔くさく坐りて手代を廻し小僧を追ひ使ひ、手代等の怪み訝るをも關はず買掛賣掛の結びをつくることと大晦日の如く、遂に八日ばかりにして無理やりに一切の埒を明けゝる。其翌日は所以知れず名ある仕出屋より山珍海錯を運び入れ、色ある女共來り周旋して、驚く手代出入の者、小僧等までを客にして大饗應あり。酒一巡せし時主人の宗太郎いと嚴格に、汝等長年勤めくれし忠實の段は嬉しく思ふ。我此度思ひ立つことあつて此店を閉ぢ、轉業するにつけ惜しくは思へど汝等一同に暇を遣はす。但し年季中主人方にかゝる異動ありて差詰迷惑にも思ふべく、又何年かの奉公を無にしたる悔もあるべけれど、必ず汝等に迷惑はさせぬつもりなれば心安く思ふべし。今日は汝等のため慰勞の宴を張りたるなれば、牛飲馬食して無禮講の坐興盡きせず勝手に騒ぎ呉れなば滿足に思ふなり。と挨拶し終れば、此時まで主人の所爲を合點行かず思ひ居たる母は云ふに及ばず番頭手代等呆れたる口開いたまゝ塞がらず。されど母のお伊喜涙ぐみたる眼を遣ひて番頭に眼くばせすれば、其心を得て膝行出てたる番頭、何事か云ひ出さんとするを、早くも見て取りし宗太郎、餘談は後にて爲る日あるべし、今日は慰勞の饗應の席、何はあれ先づ飲めや飲め、と既盃を

其十二

人を愚にするにも程のあるもの、蜜柑に比ふれば尻の腐れたやうなものを、處女てゐで推出して、樣子を知つてか知らずしてかの敦賀屋の口から吾が手に取らせんと圖つたる堺屋の老夫めの憎さ。持參の金の光りに他の眼を眩ませて六十年の不作を見させんとは腹ぎたなき奴等の企圖。第一此の宗太郎が金に眼を呉れて左樣なものも貰はうかと見られた忌々しさ。油墨に身を汚されしやうな氣持が仕て、胸の惡さは大抵一生思ひ出すごとに今更の心地すべし。これも畢竟は吾が內證の手薄きところを推せられて、彼の困つた中へ話を持込まば飛びついても貰ひ受くべく、且は娘の古疵あらはれても恩に免じて忍耐すべしと、見くびられたより起ること。ゑゝ貧すれば鈍する世の中、意はぬところでまで飛んだ耻辱を受くる、思へば〳〵人の世は錢の世、金の家從で居ながら萬物の靈も嗚呼がましい。嗚呼もうほと〳〵算盤といふものに乘る此世界に居るのが五月蠅なつて來た。と其夜深けて一人寢覺めし時つく〴〵と歎ぜし宗太郎、復び夢も結び難くて一番鷄二番鷄の聲を聞きしが、曉天近くなりて戶の罅隙欄間ほの白くなるにつれ、いよ〳〵癇癪亢盛りて、勃然と跳ね起き、平日に無く自ら雨戶繰り明け、廣からぬ奥庭を彼方へ行き此方へ戾りして何事か深く考へけるが、此時袖に朝風寒く、殘月ひよろ松の梢にかゝりて、誰もまだ起出でぬ閑寂の中に、風邪引かう心配

かして習はせたいけに出來ぬもの無しとは、身のものが誇る位。どうだ其娘に四五千兩添へて遣らうとの親の云ひ出し。先方の望は家柄さへ惡からぬ上怠惰ぬものなら誰にでも呉れやうといふので、むづかしい所望は他に一つも無し。誰か此座で貰はうといふ氣は無いか。オ、宗太郎樣が話しに乘りさうな顏付。宗さん私が橋渡しせうか。然し媒酌口で押付けて後で何とか云はれては好く無いほどに念のため云ふて置くが、實は其娘十六の時に堺屋の店のものと乳繰り合ふたとやらで大きに内揉があつたさうな、今の主人は其娘に配はせられる筈の定めてあつたが其故他から嫁を入れて結局は堺屋の眞の血筋は絕ゆることになつて居る。娘は寮に推込められて居たがまた寮番の老爺と昵懇したとか、植木屋と何とやらしたとか、他の噂では淫亂であらうとの事。何と瑕疵はたゞこれだけぢやが其代り持參金がまんとあるのだ。宗さん何樣だ貰つては。と又あらためて顏をさし覗きつゝ云へば、皆々哄然と噴飯して、たゞ一つの瑕疵だが隨分とあり難い瑕疵だ。我慢のなるものは貰つたり貰つたり。と囃し立てゝ笑ひ、何の氣も無き大笑ひに笑ひ頽れて其日は散じけるが、これだけにてさへ我が一杯擔がれしを癇强き宗太郎非常に忌々しくおもひ居けるに、昨日の贅な茶話し思はずも今日は眞面目な話しになつて來たりしなれば、頂上まで怒りしも眞實癇癪持の免れ難きところなるべし。

なことには宗太郎昨日其噂を異な機會にて聞きたり。商賣用にて西横堀の或家に行きて用談果てたる後、店頭にて日頃顔知つた若いものに老人も交りて、世間の段々詰り行くことと面白い商賣の出來ぬことなど語り合ひて、末はいづれも何ぞ好い儲け口はあるまいかと慾にかゝつて各自鼻を先へ出す時、老年の男仔細らしく、何で世間に好い儲け口といふやうなことが有らう。よし有つたにしろ人がたゞ置くもので無ければ、賑かな町筋で五百兩札拾はうよりむづかしいこと。或は鑛山、或は新田、石炭山の外國貿易のと怜悧らしく跳ね廻る和郎達も世間に多く見ゆれど馴れぬこととして手を燒かぬものは無い。銀相場米相場、甘くばかり行けば好いが、一夜大名は餘り見かけず一夜乞食は澤山あるを思へば是も妙で無し。それよりこゝに一番たしかで屹度四五千兩は握めるといふことがあるが、何と見渡したところで那位も相應な家を持たれた若い衆だによつて、望みさへすれば屹度大金の手に入ること。と云ひ出せば、誰しも耳を長くする中に取り分け宗太郎は、好い事ならば一寸も逃さじとおもふ氣の張るまゝ乘り出して、夫は一躰何樣いふこと。何か新規の會社でも出來るのでございまするか。と意氣込強く尋ぬるに、いや會社なんどゝいふ譯では無いが、西長堀に堺屋といへば誰も御承知の大家だが、四五千兩手に入れさせて呉れやうといふは彼家の事。と云ひながらぢろりと宗太郎を賤むごとく横に視て、他でも無いが彼家の娘、容貌も美いといふほどでは無けれど七難隱す色白で、琴は生田流、茶は石州、歌なら、筆道なら、三絃なら、藝は何でも金に飽

の話しとは何樣いふことでござりまする。と云へば、母は莞爾やかに膝を進めて、他でも無いが汝も既似合はしいものを家に入れねばならぬ齡頃。幸ひ今日他から打てつけの好い縁談を持つて來たが、それは西長堀の堺屋のと半分云はせず飮みかけたる酒をがぶりと急に飮んで、平時になき高調子の笑ひ聲。母樣、それはいけませぬ。此混雜やら左り前やらの最中に、嫁沙汰は要らぬ話し。どうせ碌なものは來ぬ道理。當人が不美貌で無ければ當人の家が此家より曲つて居ると大抵相場は定つて居まする。待て居て下され今一二年立てば從何位の勳何等といふやうな人の娘でも貰つて御眼にかけまする。と頭から話を打消したり。

其十一

母のお伊喜も妹のお文も宗太郎が猛威に畏怖をなして話は其儘途斷えけるが、母は母とて老功の機轉賢しく話頭を他所へ紛らせて關係無き世間の噂に移せど宗太郎は口も開かず、たゞぐびり〳〵と飮みに飮みて、遂に其儘動けぬほどになりし心の中如何なる不快をや感じけむ、よく〳〵の事あればならんと母の眼にも見えてお伊喜は深く氣遣ひぬ。

宗太郎が憤怒せしも無理ならぬことなり。堺屋の娘といへば唯聞く耳に何事も無けれど今時の娘十人が十人は必ず碌なものにあらず、此娘も知つた人には知られた曰くのあるものにて、加之不思議

づゝくものでは無い。妾が二條樣を下つて此家へ來てからでさへ汝のお父樣も隨分浮沈みをなされたは妾が知つて居る。惡い後には好いことも來る。既に今一つ湧て來た耳寄りの話さへ妾が有つて居る位。左樣家の爲を思つて呉れるは妾もお文も何の位か嬉しいけれど餘り氣を揉んで病氣でも出られてはと案じ過しも却つて仕ます。今の汝の若さでは下世話にもいふ人一生七度の福もこれから受ける譯ゆゑ、くさ〳〵することは無い。お文、ぽんとして兄樣の顏ばかり見て居ることは無い。よく氣をつけて御酌をなさい。そして琴でも持つて來さして兄樣のお好な賑やかな手物でも彈いたが好いでは無いか。と春の曉天の空の星のやうな光りの薄い眼に溢るるばかりの慈愛を浮めて世話燒く老の誠實心、言葉に艶はわらねども汲まば底意に花香はわるべし。愚魯ならぬ宗太郞、母の氣をかねて笑顏を無理に作り、何の母樣御案じなされまするな。なか〳〵此宗太郞。一ト通りや二通りの事に氣を腐らすやうな男ではござりませぬから其邊は御氣遣ひには及びませぬ。仰わる通り七度の福もこれから受ける身の樂み多い行末を抱へて、くよつくやうな狹小なことではなりませぬ。ハヽヽ、何。なに。今に此腕一本から何百萬の身代も生み出して母樣にもお文にも眼を圓くして呆れられるほどの果報を招かねば此宗太郞男兒でござらぬ。商賣にかけては日本の眼玉同樣の此の大阪で產湯を浴びて育つたからは、邊土で生れたものとは違つて七轉八起はまだなこと、百度轉んで仆れるまでも商賣で是非に一ト釜は起して見せる氣でござりまする。して母樣の今仰わつた耳寄り

親切に仰せきけられまして何とも御禮の申しやうもござりませぬ。先方樣の御娘子の御樣子も承まはりました通りならば厭を申さうところは無し、願ふても無い結構な御話しと妾は存じまする。然し猶よく今晩倅の所思も糺しましたる上何れ御挨拶を致しませう。と流石は分別に老いたる五十女の思慮淺からで、攫みついても決めたいほどには思ひながら獨斷無謀の挨拶はせず、よき程にあしらへば、敦賀屋も道理の應對と滿足して歸りけるが、お伊喜胸の中には此縁談既成就したるも同樣に思ひ做して心勇みしつゝ宗太郎の歸宅を待ちしに、其日は宗太郎商買用に終日奔走して、たつぷりと日の暮れし頃、空腹をかゝへ疲れを帶びて歸り來りぬ。母の眼にも妹の眼にも宗太郎一人となりてより此一年足らずの間宗太郎が心配氣苦勞一ト通りならず見ゆれば、せめては一日の勞を、好める下物、過ぎぬほどの酒にも愈せかしと、夜食の膳には一銚子つくるが常なり。今日も何かは知らず晝過より屈託顏して外に出で、暮過にまた屈託顏して歸り來れる其樣子を察すれば、何か深き心掛りのある事と、口へ出しては問はざれど、人の親の心はいづれ子に繋がるゝ習とて、お伊喜も胸安からず、話しも控へてたゞ吾が子の憂を解きほどいて遣んとばかりにかゝり、これ宗太郎、今日は汝の血色も餘り冴えては居らぬ。何樣ぞしたか、人と爭闘でも仕て來たか。左樣でも無いとならば氣を腐らせずにわつさりと持て快く睡らねば惡い夢を見まする。御父樣がお亡くなりになり、又半次が彼のやうなことを仕てからは、汝の氣苦勞も多かろうが、人の運會は惡いとばかり

たず、今まで通り遣らずば荷主船主取引先の信用も落ちんと、食ひ込むを知りつゝ一日一日を送る辛さ。肉を一片づゝ剝がれ骨を一分づつ削らるゝやうに、日の出月の出を見れば、花は咲かうがそれは世の花、吾が家の花を看て樂むべき時來ぬとも覺えず物悲しく、芝居が開かうがそれも世のもの、吾が家で噂するは一昨年一昨々年の古い話し、何彼につけ屈託の顏の眉の間に王の字のやうな皺を寄せて、若いに似ず必死となりし宗太郎、世間に智慧かしこき眼を配り、好い儲け口もがな吾が家の衰微を盛り返さんと殊勝に肝膽を碎きけるが、梅は咲かんとして香の先づ迸るごとく、一念の置きどころは早くも他に知られて、宗太郎が此頃一年ばかりの行狀氣配りを近所づから見て感ぜし歟、西長堀に人も知つたる富家の堺屋の隱居某、達て宗太郎に娘を呉れたし、勿論容貌も惡いといふでは無けれど少々額の出過ぎて鼻の控へ目に坐どつて居るだけ、銀行株四五十枚は持參にして遣るべき間、何卒此緣談整ふやうに、と宗太郎同業の敦賀屋に賴めば、敦賀屋此事を合點して、何と此嫁貰ふては何樣でござりませうか、堺屋と親類におなりなされて惡いことはなか〳〵ござりますまい、と宗太郎が母に言ひ込みぬ。

其十

敦賀屋の云ひ入れたる一伍一什を聞て、お伊喜は奧齒の脫けて淋しく凹みたる頰に悅びを湛へ、御

あつかひにも骨は折れど人の用ゐは其割には行かず。惜い老爺を亡くしたと蔭言さるゝは子の身として嬉しけれど、倅が若いによつて後が美う行けば好いが、と噂さるゝが耳に入つては、腋の下に冷汗流れて心苦しく、氣は張弓の張りに張つて一絲の隙無く一毫の油斷無く遣つて退くるつもりなれど、店に中年より使ひ居たる半次といへるチク上りの渡り者、家の不幸のどさくさに乘じて、帳面に着けかけの魂膽をめぐらし、無法の手形を振り出して相幇の惡漢に取らせ、家の名で掛買ひしたものを自己が手ではパッタに賣り、種々の惡行仕盡したる後好き機會を見計らひ、故郷の兄が死にまして跡取りがござりませねばと贋手紙の巧計に手當の金までせしめたる上身を退きしが、少時して其不埒一々現れたる頃は那處の榮華の浮雲に駕つて居るやら影も無く、これはと宗太郎も母のお伊喜も仰天せしかど悔んで及ぶことならず。此尻拭ひに流石の北宗も、手廣くする割には根の深からぬが常例の廻船問屋營業とて、身代大きにがたついて半分は傾きかゝりしほどに、眼の明いたものには隱せど知るゝ不如意を見られて、馬脚を出すところを時々は取つて押へられ、宗太郎しばしば熱湯を飲み烙鐵をあてらるゝ思ひをなしぬ。

病は相想の病、苦みは貧の苦みを昔時より頂上のものに云ひなせり。宗太郎今頼みたる父に逝かれて相談相手にもならぬ母と妹とを帶び、半次が詐謀にかけられたる後のむづかしき遣繰を一人で脊負つて、下り坂の車を踏止め、逆ひ潮に舟を行らんと心を勞らす其苦しさ。表面を張れば算盤立

を書いて置て遣らう、と云つて眞に書いたよ。新造も初心な女に從いて心配して居るのだから、萬一すると女を勸めて好い種を逃さぬやうに茶屋までを出しぬいて初會文もつけさせるか知れない。若し左樣なれば里見も急度家には尻のおちつかなくなるに極つて居る。何樣だありがたうと云ひ玉へ。あゝ大分醉つた。飯にしてもう歸宅つて晝寢としやう。實は君甚だ失敬だが僕は些可愛がられ過ぎたからして睡くてならぬ。

其九

大阪江の子島の北宗といへば六十餘州の津々浦々船の入るところで知らぬは無き廻船問屋なるが、主人宗兵衛六十の坂を越すか越さぬに平日大酒の報ひの卒中に倒れて先年黃泉の人となりしより、後は伜の宗太郎、其時わづかに二十三、親さへ居て吳れたらば大船の船頭衆の相手して、北濱あたりの酒の席或は南地の絃歌の鄕と其邊中遊び廻るより他に何事も知らざるべき年恰好にて、上品でこそあれ商賣柄に似合ず世事には疎き母のお伊喜を助け、和歌筆道香花茶の湯と母の秘藏のまゝ高等にのみ育てし妹のお文を抱へて、財産と營業とを兩の肩にゑいやらやつと擔ぎ初め、昨日の息子今日の親父顏、隨分一生懸命になつて挊ぎしが、何樣しても斯樣しても齡の功といふさびがつかぬ悲しさには無益なところに念が入つて大切なところに手脫のあるやうなことも無きにあらず。人の

だが君は悪いことをする人だ。僕の敵が昨夜評して曰くさ。あゝ温和しい、むつくりとした好い息子さんを、此樣なところへ連れて來て惡い風に當てるのが愍然な。今に御覽なさい。彼の柔和顏が、ひすこく〵て狡猾いやうな顏になりませう。ほんに惚れ〴〵とするやうな穩かな圭角の無い好い息子樣。わたしのところへでも來たのなら、汝等二人は惡い友だから餘り御交際なさりますな、學問の成就なさるまでは成るべく此樣なところへ御來臨なさるなと云つてあげますものを。と苛く里見めを贔負にして飛んだ惡漢に僕等を仕居つた。ところで僕が何と挨拶したと思ふと問ふ。多分乃公は知らぬ花岡が仕たことだとても云つたろう、と花岡が笑ひながら云へば、ハヽヽ、御察しの通りだ。散々に君を罵つたよ。然し恨まれる譯は無い。また君に信義を盡して居るところもあるよ。眞實の事だ。里見の敵の新造めが今朝來て僕にいろ〳〵と里見のことを聞いたから。こゝぞ新造めに慾を出させて里見を引寄せさせるやうするところだと思つて、里見の家の富貴なところから父の可愛がつて大切に仕て居ること、眞の生子息でまた世間の鹽を踏んで居ない室育ちだといふこと、學問好きの堅藏でまだ色戀の覺えの無い初々しいものだといふこと、女さへ氣に入つたら何樣なことでも仕て出來ぬといふ事はあるまいといふことなどを一々話して、成るべく里見を好い鳥のやうに思はせやうとしたが、何とこれは信義ではあるまいか。左樣すると君聞き玉へ、新造が里見の家を聞いたり名を聞いたりするから、透かさずに僕が斯樣云つた、初會文でもあるまいが、二三枚乃公が狀袋

土手の人通りを他所にして、車の響き下駄の音も左までには感ぜぬ平松の小さき離座敷に無益な贅澤をやる若き男二人、空腹の湯上りに酒の廻り早しと見えて、昨夜の疲れの腫れ瞼を猿猴ほど紅うしつゝ、何樣だい乃公の成功といふものは。と崩れさうな笑ひ顏して一人が云へば、やい〳〵花岡。宜い加減にして呉れ。朝惚け脚氣の藥が聞いて呆れる。今朝見せつけられたゞけで澤山だ。ヘン足下も隨分初心なものだ。彼樣したゝるいことをされて好い氣になつて居るやうでは、まだ〳〵鯛の正味を悅んで食ふ方だ。失敬だが味を知るものとは云はれない。蘭の花の吸物ほど異に濟ましたのも嬉しくは無いが、べたりとしたのは身ぶるひがする。君の成功は譬へば鮪のぬたを江戶味噌の甘いので仕立たやうなものだ。美味からうとも不美からうとも第一貴人の箸にはかゝる名譽を持たぬから氣の毒だ。田印の賞翫する位の事だ。あれで滿足するなら君は即ち田印だ。田印一杯獻じやう。と舌鋒鋭く云ひ退けて擬す。受けて一ト口飮んで下に置いて冷笑ひ、苛く逆鱗で攻擊するねじ何とでも云ひ玉へ。どうせ惡まれるさ。他にや惡まれ誹られる、といふところが此方の本來だから毫も驚くことは無いさ。然し閑話はさて置いて、里見はとう〳〵歸宅つたが、何樣だい僕の云ふた通りになるだらうと思ふよ。これには君も鑑定違ひを謝さねばなるまい、閉口だらう。と云へば、左樣さ。まだ何とも確實には分らないが里見だとて年頃だし。女の嫌ひなことはあるまい。羞かしさに表面は包んでも、不具で無い以上は慾の燃えて來る筈だもの。君の說が或に勝つかも知れない。

しにはあらねど身に闇みを持つたる雪雄は憚るところ無きにあらねば、忍びやかに叱するに、それでも狗は忠義者なり、急に鳴き止んで慕ひ寄りしと思しく、搖る尾を門に觸るゝ音す。雪雄はこれに微笑みて、扉を推すに門の爲されしと見えて毫も動かず。是非無く輕く打敲けば、誰君ですと云ひながら玄關に寢たる兒童の源三郎の立出で來たる樣子なり。乃公だ〳〵と小聲に云ふを聞付けて、若旦那樣ですかと遠慮の無い大聲をあげられ、父母の眼や覺まし玉ふと雪雄愕然とせしが、幸ひに誰も起きぬ態、嬉しやと胸を靜めて門の開くや否や内に入り、後は關はず狐鼠々々と自己が書齋の四疊半に到れば、床は例の如く既展べられて、艶消洋燈は机の上に、朦朧として光を放てり。今日半日の心遣ひ初めて休まりてのび〳〵と足を踏み伸ばし横になるに、門を鎖して來し源三郎が、冷めましたらうが御茶でも持つて參りませうか、と自分の寒いのも關はず親切を盡し呉るゝ、いと嬉し。いや茶も要らぬ湯も要らぬ。寒からうから既休め。御父樣も母樣も歸宅の遲い乃公を何とか仰あつてか。と問ひ質すに、いゝゑ。多方歸らぬことはあるまい。門は鎖して源三郎汝心をつけて居よ。と仰あつたばかりで例の十時に御休みになりましたと答へ終り、それなら御蒙免りまする、と淡泊に一禮して玄關へ去りぬ。

其八

無遠慮に耳近く口を寄せ、あの通りの孩見でござりますから何樣か慫慂がつて來て遣つて下さいまし。御待ち申して居りまする。」屹度でございますよ。御來臨が無いと肯ませんよ、と小五月蠅して厭はしさの堪へ難きまで呶々云へば、此度は雪雄も面倒さに、肯て自ら欺きて、必ず來るぞと云ひ退けつゝ、茶屋の女と共に去るに、二三歩して背後に聲するまゝ不圖顧みれば、肥肉婦の袖を引くをば餘所しにて心無きものゝ如く佇みつゝ我が方を茫然見送り居たる女の美しさ。正に是水を抽きたる蓮花とも云はゞ云ひつべき風情なり。

花岡福岡は如何にと問ふに、よく御寐みになつて御起し申しても御醒めなさりませねばとの答。それを眞實か虛妄かと糺すまでも無く車を賴みて一ト飛ばせに吾が家へ飛ばせ、練塀町に來かゝりしが、吾が家の一町ほども前より車を下りて靜かに歩みぬ。門に玻璃燈の出てたるは、吾が家なりと思ふと同時に、惡きところへ足を踏み入れし身の其光りに近づくにつれて何と無く怖れを生じ、父上はまだ起き居玉へるか、母上妹は如何になど、要らぬ物案じも自然湧きて、下女の福めは口が五月蠅し、誰も彼も皆睡り居て源三郎ばかりが起きて呉れゝば都合好きものをと詰らぬ注文を心に仕ながら、足の運びも常ほどは活潑ならず、徐々と歩みて門に近づき、引寄せてあるばかりなるか但しは締りも爲しあるかと徐と推し試むる途端に、忽ち咬みつく如く狂ひ吠えて內部にて怒るは日頃我に狎れ昵みたる「くま」の聲なり。吾が家の狗に吠えられても大聲を出しては叱りかね、好んで爲

だと答ふ。憂ひの色をいよ〳〵ます〳〵深くなしつゝ其次の日はとまた問ふに、烈しく頭を振つて見も返らねば、こゝに女は慮の色を忽ち悲みの色に變じて、雪雄を瞑拜つゝ泣き伏しぬ。

其七

彼の肥り肉の女とは違ひて我が意に逆らひ無理に引止めんと仕もせざりつる罪も無き美しき此女に、唯無邪氣に泣いて頼まれては、流石に雪雄も少し折れて、思はずも、暇があらば何時ぞは來やう、と口を滑べらせしが、南無三心にも無きことを云ひ出せり、と我が言葉の終るか終らぬに自ら愧ぢて、目前を慰むるためとはいへ、先の知れたる虚言を吐きしことよと我を責めしが、些細の言葉を頼りにして漸く一線の望を繼ぎ、氣色を快くしたる女の面に對ひては云ひ直すまでの勇氣は無くて、其儘少時默りけるに、此時初めて櫻桃の蕾の脣を輕く動かし、夏の夜の雨過ぎての月の、一點曇り氣無き面を仰向け、羞づる色無く雪雄に對ひて、聲も冴かに、きつと、どうぞ、と少き言葉に多き誠を強く籠めつゝ溢るゝばかりの熱情をもて、あはれ鶯の初音を漏らしぬ。

閨の中を氣遣ひ居たりしと思はるゝ例の肥肉婦は、二人がかゝるさまして時を經しとは更に思ひもかけぬなるべし、安堵の胸を撫で下して、頓て茶屋を呼び雪雄をば障へもせずに歸しけるが、いよ〳〵雪雄の去るに臨みて、二人は送りて店前に出るまでの間、肥肉婦は雪雄にひたりと寄り添ひて

ませぬのゆゑ御許しなされて下さりませ。此樣な事を申すのが彼女に知れますれば妾は澤山悲い目を見まする。啞でも無いに御耻かしい此樣な眞似して御話しするのも、彼女が怖くてなりませぬ上まだ怖い人がありまするので、怖くて〳〵なりませぬゆゑ、何樣か堪忍して下されませ。と口は一句も半句も語らで、折々涙を湛へたる點漆の眼を氣遣し氣に雪雄が面に注ぎつゝ、指もて緩やかに蒲團の上に假名書に書きて意中を語る其態虛僞ならず見ゆれど、事の不思議さと合點の行かぬ節々あるとに、雪雄は猶冷かに視遣りつゝ、承知した、と唯一句をば同く指もて語りたり。かくて無言の談話も途斷えぬ。雪雄が眼はたゞ屏風の腰の交貼の地紙の書の上に見るとも無しに留まりたり。女が眼はたゞ自己が膝の上の一點を譯無く見居たり。次の間は人の居る樣子も無きまで靜まり返りたり。遠き廊下に人の行く跫音は明かに傳へられぬ。屋外に火を警むる物の音の嶮しく聞こゆるも却つて淋しく、夜の更けたるを感ぜしめぬ。如是て二人は坐禪の床に僧の枯坐せるよりも猶嚴かに身を持して一寸も動かず、一時を百年の心地にて少時時刻を移しけるが、雪雄は先づ早く動ぎ出して、もう歸つても好さゝうな、と例の無言に語りたり。女は微々と點頭きぬ。さらばと雪雄は立たんとするに、怯る〳〵女は玉腕を差し伸べて徐ろに袖引止めつ、若し御暇にて御不都合無くば明日の夜も御來臨なされて下さりませぬか。何のやうな御遊びの御相手も仕ますほどに。と書く。雪雄は怫然として頭を振る。云ふに云はれぬ憂の色を眉には現しながら慌てもせず、明後日はと問へば、厭

りしと思へる肥肉の彼の年増女は突と入り來り、雪雄と女とを兩の手に引立てながら、滿臉に強て作りし笑を湛へて、何ですねえ今歸るなんぞと、そんな酷いことを仰あつて此樣な處女な華魁を弱らせては困るではありませんか。それ御覽なさい泣かせてさ。眞實に罪になりますよ。罰が當ります。日本中捜しても無い華魁を振つて濟むものでございますか。達て御用があるのなら今御茶屋を喚びますからそれまでまあ〳〵御休みなさつて居らつしやいまし。華魁もまた何ですねえ。そんな弱い事ではなりませぬ。此儘御返し申しては女が立ちませぬ、妾まで人に聞かれゝば笑はれますよ。ゑゝもう自烈たい、世話の燒ける、それでは御茶屋を喚びますから其まで斯樣して居らつしやい。と二人を夜具の上に突き倒して、屛風引廻し、外面に去りぬ。

寢衣の肌寒さに雪雄は是非無く身を縮めて堅くなりながら横になれば、女は左右無く近づきもせず。此方を怯るゝか我と羞づるか、猶俯首きて居たりしが、身動ぎなして我が方に近寄らんとしてはまた躊躇ひ、幾度か口を啓かんとしてはまた噤み、遂に指もて次の間を指さしながら、雪雄が枕近く寄りて、はした無い今の彼の女が猶耳を立てゝ居りますれば、一度は御寢みなされた風をなさらねば容易御歸し申すことではございませぬほどに少時左樣して御窮屈でも居て下されませ。妾は貴郞の御歸家を無理强ひして御泊め申さうの意は微塵もございませぬ。御用事の御ありなさるものを此樣なところに御引止め申すことの惡いといふことは知つて居ります。けれども妾の自由にもなり

き手をつきしまゝ今は身動きもせず推黙れり。流石に雪雄も焦躁に焦躁て、雙手を疊に突きしまゝ雙手を伸ばして女の手を取り、引起して我が虚僞ならぬ態を見せんと手は伸ばせしが、殆ど觸るゝに垂として、忽ち自ら身に顫ひを覺えて、指は徒に空に戰ぎ、故無き恐ろしさに躊躇したり。されど如是ては果てざらんと遂に畢世の勇を鼓して、胸をときつかせながら玉温かなる手をそつと握りて引起し、見られじとする顔を覗きて端無く眼と眼を見合はせしが、雪雄は愕然として驚きぬ。如何なる仔細の有るかは知らず、見れば女は蓮臉に眞珠の涙を傳へ居たり。これはと此方は不審むに、彼方は雙手を把れながら掌をば合せて例の無言に、雪雄を拜む樣をなしつゝ、はら〳〵と猶涙を墮すは、停まりて居て玉はれとの意なるべしと猜せられぬ。

其六

心急なれば他の上に考へを費す間も無く、二度三度言葉忙しく、我を歸家らせて、と雪雄は云へど、女は肯かで、たゞ掌を合はせて泣く涙に物を言はせつ引止むるに、世馴れたるものならば何とでも仕樣はあるべけれど、此里に今日初めて足を入れしばかりなる雪雄ははと〳〵困じ果てたる此時時計の鳴る音して、既十一時か左なくとも十時と思はるゝに歸心いよ〳〵矢の如く、楯ても幕ても堪らばこそ、聲を荒くして一喝すれば、其聲外に洩れしと思しく、襖をさらりと明くる音して、居ざ

此度は障子の開け閉の音して慥に次の間より外に出去りたる人一人あり。後は復び寂としてたゞ次の室の鐵瓶の少しく沸る音を聞くのみ。

室内いよ〳〵人なきに定まつたりと雪雄は眼を開きて見るに、此時恰も燈火の薄明りを浴びて屏風の蔭の小暗き方に半身を寄せ隱しつゝ此方を覗ひ立てるものあり。名畫の幅より脫出でしか、神女の雲より下りしかと思はるゝばかり氣高くして、一點鄙しき妖冶の態無き女、齡は三五か二八の月の丸額、烏雲一朶の髮艶やかに、遠山の眉いと淡きが、星眸を凝らして今や此方を視つめ居たるに、雪雄ははつと驚けば、また彼方にも睡り居たりと思へるものゝ眼をばつちりと開きたるに驚きてや急に身を轉じて、仙禽人の見るを怯れて花底に沒し去るがごとくに屏風の陰に隱れたり。此方は兎角の分別無く、急に岸破と跳ね起きて精神失調の人の如く、つか〳〵と臥床を歩み出て、情願だ。乃公を歸宅らせて呉れ。何樣か衣服を還して呉れ。と云ひつゝ屏風を引退くれば、風に遇ひたる一枝の牡丹の地に貼きたるまゝ起き得ぬ風情の女は首を俛れたるまゝ言葉は無くて唯僅に頭を振るに諾はざる心ばかりを示したり。此方は是に少し焦躁て、賴むと云ふに賴まれて呉れぬといふは餘り酷い。歸宅らねばならぬことがある。何樣か歸らせて。と再び言へど、猶推默りしまゝ一句も吐かで、雲鬟を搖がせ頭を振るのみ。ゑゝ分らない。これ此通り賴むといふに、と云ひながら女の前に兩手を突きて頭を下ぐれど、彼方は此方を生憎見ねば一向甲斐無く、猶々首を低くして雪はづかし

座敷の三味線の睡氣な響を聞きて苦悶せる雪雄は、不圖次の間のひそ〴〵話し耳にとまりて、何の氣も無く心を着くれば、先刻に見たる肥り肉の女なるべし、身躰には似合はず皺枯たる聲にて、云ふまでも無いことですが、昨日や一昨日のやうなことをなさつては爲になりませぬよ。彼客は御老年ゆゑ御分別強くて來ても下さりますが、若い方には其事が無くては後を來て下さりませぬ。決して強情ではなりませぬ。今夜の御客は何でも多分良い御家の立派な御息子樣。まだ此樣なところへ御來臨になつた事の無いほどの磨れ無い方。花魁次第で夢中にもなつて來て下さらうといふのです。花魁が瀟湘さんのやうなら舌打ちをして悅んで、屹度末永く繫ぎとめて、隨分何でも仕て御貰ひなさることも出來るのでござりまする。さあ、うぢついて居ることはありませぬ。なんです其樣な顏をして、御腹が痛いては濟みませぬよ。と末には少し叱るやうに聲も稍確に聞こゆるほどになりしが、初の中は處々聞こえざりしかば雪雄は何とも解する由無く、我が上の噂かと思へば又左にもあらぬ樣子なるに強ひて解せんとも勤めて其儘止みけるが、頓て襖の明く音すれば誰か此方に來ると思ふと同時に、何か知らずきまり惡く覺えて眼を閉ぢ寂然と睡れる態を粧ひたり。襖は閉ぢらるゝ音したり。されども慥に人は入り來りしと思ひしに復足音せず。少時は室內音も無し。さてはたゞ此の室內の樣子を見しのみにて去りしかと思へば、また何と無く人の在るやうに覺えらるゝ物の動きの音いと微に心の迷ひか知らざれど耳には達する如く感じぬ。人ありやまた人無しやと思ふ間に

荒らぐるまで辭み通し、これが勝手ぢや構はずに置け、と逐ひ退るばかりに二人を叱れど、高が喧嘩にも成らぬことと先を見越して遠慮も無く二人は遂に雪雄の衣を換へて御休みと云ひ捨てに次の間に去れば、泣き出しさうになりながら今更仕方無く、氣味惡くは思へど夜具にくるまり、何として此處を脱せんと思ふ中、次室にて我を送り來りし女の聲として、それなら宜敷御頼み申しまする。花魁が御孃樣と同じことな上、此樣いふ初心な御客樣を御伴れ申してはおまへさまの御氣骨の折れることは大抵ではござりませぬが何分よろしく願ひまする。いゑ、なに左樣でござりますとも。此樣いふのが却つて後では意見もきかぬやうな中になつて他を困らせるほどの深間な緣に隨分なるものでござりまする。ホヽ、左樣ですとも〳〵。今夜の御客なんぞは妾等でさへ今少し奇麗に生れついて居たら何樣かしてと思ふやうな奇麗な方ですもの。何程御孃樣でもぽつとなさるは知れた事です。あら妾を調戯つては厭ですよ。それでは彼方へまゐりますから、おや、入しやいましたね。さあ〳〵もう妾の役目は濟みました、左樣ならば。と饒舌つゞけつ頓て去るに、引違へて一人入り來りしもののある樣子は、心の澄みきつたる雪雄が胸に映りぬ。

其五

脫げられもせず寐られもせぬに心は煎れて神經は不思議に鋭くなりたる身の、唯一人遙隔りたる

いよ〳〵堪へずなりぬ。愉快氣に笑ふ花岡が聲も氣に食はず、不思議なる大法螺を吹き滑稽話しを仕ては一座を哄然と笑ひ傾かしむる福岡が劇談も癪に障り、年老いたる女等の我に親切顏して萬般振舞ひくるゝも胸惡く、何から何まで見るも厭、聞くも厭、羽翼があらば此室を飛び出して一ト息に我家へ歸り、昨日一昨日の夜の如く物靜かに我が書齋にて我が好める書を燈下に繙き心豐かに讀み味ひたき念のみ熾えぬ。されど云ひ出したりとて通るまじき樣子に、蟲を殺して口も開かず居る辛さ、かゝるところに居ることを良からずと思ふ良心の刺激を強て忍び居る辛さ、堪へても堪へても堪へきれず。百計盡きて此席の疾く散ぜよと思ふばかりに、此度は詐りて酒に堪へで睡りし風を粧へば、果して思ふごとく福岡は、何樣だ花岡、もう里見は酒に弱つて仕舞ふた樣子だ。好い加減に切り上げて仕舞はうでは無いか。と云い出せば花岡も同意して、それが好からうと肯諾ひぬ。最早僅の間で此惡所を出る事も叶はんと私に悦べる里見雪雄、年増の女と茶屋より跟て來りし女とに助けられて長々しき廊下を經たる後、靜なる一室に送り込まれぬ。六曲の屏風綾羅の被襖を護して、燈火緩く燃ゆる室内明るきにも過ぎず暗きにもあらず、床の間の裝飾も取るべきところは無けれど厭ふべくも無し。雪雄導かれて此室に到り、詮方なければ洋服のまゝ蒲團に凭れて身を休むれば、初心者と見下して小兒あしらひに、一人は洋服を脱がせにかゝり、一人は寐衣を着せにかゝりぬ。いよ〳〵左樣されては歸る事もなか〳〵成るまじと、一生懸命に辭みて辭みて、遂には言葉を

其四

雪雄の眼からは何とも解せぬ男女の二度三度出つ入りつして挨拶せしが、頓て美人は現れ出でたり。されど雪雄は羞かしさに胸騒ぎして面を擡ぐる勇氣も無ければ、何のやうなる女の幾人來しやらも詳かには知るよし無く、初に衣の音をきゝて、我知らず頭を低くなし、首をあげし時は去り果てんとする後影をちらりと見しばかり。生れて以來まだ覺えざる異な心持に胴慄ひさへ少しは出づるほど憶しに憶して殆んど席にも堪へざらんとせしが、少時して福岡が小さき聲にて、何樣だ花岡。里見君のは實に尤物だ。妬ましい位の美貌で齡も若し、まだ泥水には些も染まらぬ處女同然の其好もしさ。僕のゝ奴に手を取られぬばかりにして漸くと出て來たが、押出しが利かぬと云はゞ云へ其初々しさに云ふても云へぬ價値があるといふものだ。肩をすぼめて小くなつて顏も擡げ得ず嬌羞を含んで居たが、可憐に世馴れぬもので慄へて居た敷頭髮の飾りが震ふて居たは。と云ふを默つて聞き居て腹の中では、還斷いよ〳〵我に對つて無禮にも嬲りかくると覺えたりと、當こすられし如く雪雄は思ひけるが、實は花岡福岡二人は、雪雄の樣子を見る間も無く、滴溜々たる眼を瞬つて鼻を怒らせつゝ、女の方をばかり必死と見つゝ居たりしなりけり。

花岡一人は馴染たる女を有てりと覺しくて、其女が座敷に三人とも移りて新に酒を初めぬ。雪雄は

のか。それが好からう。名からして勇氣があるやうに聞える。ハヽヽ、何里見君歸るといふのか。好いさ歸るのは僕も花岡も歸らなければならんのだから何せ一緒に歸ります。だが此儘歸つては此家へも氣の毒、それなら十二時頃歸るとして其時まで遊んで行きませう。と何様しても歸さず脱さぬ云ひ廻しなり。ゑヽ此の福岡とか云ふ男め、人を愚弄するやうなる怪しからぬことばかり云ふものかな、浩然の氣を妓樓で養ふとは何たる白痴の云ひ草ぞ。見るも汚らはしき妓女なんどを我に嫖はせんとは不埒至極、失禮にも大抵度のあるもの、無論此のやうな卑きし男に交際も仕度くは無ければ、花岡も若し此男に左袒するやうならば二人とも我が友ならず。一應云ふて肯かざらば絶交するばかり、と雪雄は胸に思ひ浮めしが、思ひ切つて此席にて説破し盡すことは能くせず。何とかして圭角無く脱れ出てんと空しく苦み案ずる中、雪雄が眼には見馴れざる大きなる提燈を、無用にも明きが中に態と點火して、婢の先に立ち外面に出づれば、二人は雪雄をいざとばかりに急き立てゝ同じく立出でたり。若知る人に逢ひもやすると安き心も無ければ、自然首を低くして二人の間に狹まれながら、心弱くも遂に逃げ難くて何樓と云へるか初めての雪雄には氣さへ着かざれど極めて廣大華麗とだけは感ぜらるゝ家に伴はれ、千里も遠くの國へ旅して居るやうなる薄淋しき心地にて廣き室内に此前途は何様なる事かと氣遣ひながら物も云はずに律義らしく眞四角に坐つて死せるごとく靜かに端然構へ居たり。

見たるばかりの福岡といへるが何時の間にか同伴となり居て、馴れ〳〵しげにいや里見君、今日は偶然先刻の温泉で花岡君と君とに邂逅したが、君は睡眠して居られたので御挨拶もまだ仕ませんでした。僕と花岡とは大分以前から底意無く交際つて居りまするが近來打絶えて居りましたので、何日かは緩りと會はう〳〵と思つて居た矢先に奇遇といふもので、談話も絶えず興も盡ず、遂に二次會といふことに決して今夜は夜と共に語り明かす筈にいたしました。御迷惑とは存じましたが君にも御交際を願ひたいので、盛徳の君子をかゝる地に屈下しました罪は幾重にも謝しまする。然し決して惡氣の無い男ですから此後とも何分宜しく願ひまする。我等は何も好色のために遊里へ參るでは無し、たゞ紅燈緑酒の此間に平生の鬱を洩らして浩然の氣を養ふに過ぎませねば強ひては君も御咎め立をなされもすまいと考へまする。なお花岡君。遊びも過ぎぬほどに遣れば惡いといふ人もあるまいと僕は思ふが君も大概同感だらう。時に何樣した里見君の敵は。足下が選定して月下翁の役をするが好いでは無いか。何、フム、フム。それは妙だ。これは奇妙だ。天縁だらう。どうです里見君。突出しほや〳〵の美人があるとは何と妙ではありませぬか。いやさ突出しといふやうな俗惡の言葉は御解りにはなりますまいが、此地へ來て未だ多くの客に接せぬ至つて無垢に近い美人があるので、フム、フム、十七だとか。それは愈よ里見君艶福ありといふべしだ。それなら其美人と定めたが好い。直もう送つて貰はうでは無いか。フム僕の敵か。僕のは活達磊落のが好い。箙といふ

夢とも現とも分かで茫然となり居し里見雪雄、不圖心づきて車の上に力無く眼を開けば、此處は那里ぞ、見たことも無き別世界。兩側の紅樓に絃歌の聲聒しきほど湧きて、掛聲勇ましき車の馳る響は百雷の轟く如く、放歌高吟の醉漢三々五々と行き違ひて、晝かとばかり明るき中に、今や自己も車を飛ばせて馳せ入り居れり。此はこれ不思議、何時の間にか我は車に乘りて此處には來し、一體此處は何といふところ、花岡は何とせし、と胸をどきつかせて氣を揉む間も無く雪洞の燈に艶かさは一トしほ增したる夜の櫻の花ちらほらと散りかゝる清げなる店に、我が前の車の着きしと彼此同時に我が車もまた停まりて、媚めかしき聲々馴れぬ耳には聞き分け難きまで賑はしく、掌に取らぬばかりに迎へられぬ。

其　三

何程世間見ずの懷中育ちなればとて周圍の樣子にそれと悟りて困りきつたる雪雄、心の中には花岡を恨めど打出して爭ふこともならず、歸らんと云ふても歸しはすまじき勢ひに、內心はたゞ弱りに弱りて、面白氣な顏して花岡が茶屋の婢と何か語りつ戯れつ笑ひさゞめくを、醉猶の殘れる力無き眼もて冷かに瞻るばかり、一句も吐かず身動きもせず、私に吾が家の事氣遣ふと、花岡の所行を鄙しみ疎むと、何として此里を脫れんとの工夫とに胸を痛めけるが、某學術上の會合の席にて一度

て仕舞つたと見えるな。何樣だ閉口したらう、オイ花岡。君も近々代言人と名乘らうといふ男にしては眼先が餘り見えな過ぎる。雪雄の歡心を得やうとならば古ぼけた書物でも搜し出して贈つて遣るが好いでは無いか。粹な世界なんぞへ誘き出しても到底染まつて遊ぶやうな開けた男には此變物が何として成るものか心算つても見玉へ。却つて怒られて仕舞ふだらう。それより今日は先づ僕に交際ひ玉へ、失敬ながら僕の妻が僕を取り扱ふ實意の態を後學のため君に見せたい。エヘン、オホン、廉くない世界だ。是非君に見せたい。而して批評させたい。何程批評家を以て誇る君でも恐らく缺點は見出し得まい。親切づく實意づくの「しつとりとした濃い中といふものは成程此樣なものかと君も我折つて感服するぜ、なに涎が垂れると。交つ返してはいけないよ。色で逢つたは旣徃時、今は眞實の女夫合ひと歌ふ通りの凄い寸法だ、是非まあ僕に交際ひ玉へ。此樣な孩兒は歸して仕舞つて、と反對に交際はせんとするは、何れ劣らぬ我儘者なり。されど此方もさるもの丶花岡少しも屈することと無く、冗談では無い、君の惚氣は他日拜聽することゝして、今日だけは枉げて僕の云ふ通りにして吳れ。此の變物が瓦落離と變つて我黨のものになるといふのは僕の見透して居るところだが、萬一君の說のやうに相變らず頑固で居たならば其時こそは閉口する。何でも彼でも僕の說を通して吳れ玉へ。と半ば眞面目に平賴みに賴めば、福岡も遂に承知して點燈頃、死人のやうになりし雪雄を車に乘するが早きか北を指して、醉心よき春の夕の風に面を撲たせて去りぬ。

烈しくなりては、中冓の惡話も醉を後楯に誰憚からぬ高調子で遣つて退くるが常の態とて、醉倒れて仕舞ひたる雪雄には關はず、花岡といふ男一盃擬しながら、時に福岡、今日は好いところで遇つた。何樣だ一ト晩乃公につきあつては吳れぬか。餘り君の嫌ひなことでも無い話しだが、君の思はくとは些違ふのだ。此處に往生して居る此堅藏は定めし君も知つて居やうが里見謙齋といふの丶息子で、齡は若いが馬鹿々々しく學問は出來くさる變哲學者だ。ところで此奴を少し僕に考へがあつて北廓へ擔ぎ込んで開けた男に仕度いのだが、何と助力しては吳れまいか。ゑ、何を奢るといふのかえ。それは苛いは、今夜の兵糧方さへ勤めたらそれで好からうでは無いか。負けて置いて吳れ玉へ、君にも隨分面白い奴を周旋しやうぜ、と鼻の頭に油を出して頼めば、フンと笑つて福岡といふ男は、いや〳〵今夜の兵糧方位では些濟まされぬことがある。何も彼も乃公は知つて居るぜ。里見の妹にお京といふ素敵の別嬪があつて其女に君が戀着して居るといふのは何樣だ虛言ではあるまい。此樣な孩兒を相手にして平凡議論など鬪はして面白くも無い交際を君が仕て居るのも、畢竟は雪雄の歡心を得て、從つて其別嬪の氣に入つて其後徐ろに何とか仕やうといふ野心だらうが其は無益だよ。此樣な變人を遊里なんぞへ連れて行つても悅びはすまい。一切僕に打任せて、軍師と仰ぐなら君の戀の成就するやう計畫して遣るまいでも無いが、それにしては隨分奢らせねば濟まぬことだ。ハヽヽ、何樣だ、默つて仕舞つたところを見ると僕の慧眼に照らされて正躰を見られたので弱つ

男女の嬉しげに笑ひさゞめく是も自然ではあるまいか。今から仙人じみた嗜好を持つて居るやうでは、迚も人の世て立身發達はせぬてわらうと、君の父君が心配して僕に話されたも中々一度や二度では無い。いや是は話しに浮かれて大分靜かな方へ來た。あゝこゝはもう根岸へ下りる鶯坂だ。どうだえ。一ト憩して行かう。何苦勞仕玉ふな僕が奢る。大した事では無い案じ玉ふな。湯にても入つて心豐かに今日は終日論談しやう。と多辯と見えたる一人の男は無理に雪雄といへるを何がし温泉と知られたる割烹もする家に誘ひ入れ、まだ世馴れねば婢の前では物も得食はぬ若者に、嫌ひと謝絶る酒を強ひて一盃々々と勸めたり。

生れてからまだ朋友なんどゝ酒樓に上りたること無く、我が家にても酒なんどを飮みたる覺え無き雪雄は、早くも盛り潰されて俯伏したる儘睡りに入れば、相手無くては面白からずや多辯家の彼の男も手持無くなりたる折しも、やわ花岡め、眞面目に一人て奢つて居るの。醉ひ倒れたのはそれは誰だ。何だ美少年だな。不思議な事だ。何だ、奇遇だ。ウ、一緒に呑まう。とまた一人の多辯家の、これは鯆魚の脊のやうに光る和服を着けたるが、偶然相會ひしより入り來りぬ。

其　二

浮いたもの同士の寄り合ひに酒は早くも亂れて、無遠慮の素破抜き、駄洒落交りの嘲弄合ひ、段々

樂し氣に遊んで居る中に交つたが好いでは無いか。柳の絲の風に舞ふ位よりほかに風情も無い池の向ひ側を歩いたとて何の面白いことが有らう。まあ僕に免じて上野で騒ぐもの等の樣子を看て遣り玉へ。隨分君が輕蔑する浮世の歡樂を面白がつて居る罪の無い光景もまた美しいもので、或は君の平生の説が間違つて居るかも知れぬほどだ。其代り今日は僕が君に御馳走をするから、まあ〳〵君の例の僻説を枉げ玉へ。いや僻説とは云ひ過ごしたが無遠慮は持前だと免して吳れ玉へ。ハヽヽと口輕く打消して默從する若き男の手を取りつゝ、衣香扇影の中に入り、黑門口より雲雪と今を盛に咲ける花下を次第に奥へと辿り行きぬ。

同じ景色も視る目の取り樣にて異ふものとて、一人は欣々として、醉漢の狂ふ態、赤いものちらつかせて娘子供の駈走る態、老夫老媼の孫やら子やらに取りまかれて笑まし氣に樹の下で何かは知らず重詰開いて物食へる態なんどを一々指さして愉快ではあるまいかと評すれば、一人は强ひて異説も立てねど、腹には全く肯はぬ躰なり。雪雄君、あれ、彼を見玉へ、目鬘かけて蹌踉と行く彼の男の笑ひ聲が、虛僞なんぞから出やうものか。彼になつて見たら無我無慾の眞の愉快を得て此上無く悅んで居るに違ひ無い。君は兎角に妙な方から世間を觀て面白くないなんぞと云ひながら、露に濡た花の梢から飛で出る禽や、乃至は菜の圃の黄金世界に翔けり遊ぶ蝶などは愛すべきものと思ふて居られるが、蝶鳥が自然で愛すべきなら此紛々と亂れ飛ぶ暮春の空の落花の雨に浴して春に浮れ立つて

川舟

其一

六十老爺も花には浮かれて春風に千鳥足踏む習ひなれば、況して若いものゝ、陽炎立つ頃は家の中に沈靜としては居られぬが道理なり。これも時候の陽氣に蒸されて何の意も無く用も無しに散歩すると誰が目にも見ゆる洋服打扮の二人連れ、一人は十八か九なるべし、色白の上品なる生れつき、額濶くして曇りなく、鼻筋通りて、口元に女にも無き愛嬌あり。一人は其兄とも見るべき齢格好にて、是も醜きといふでは無く、苦味走りたる淺黑き質の好い男なれど、品格は何處と無く下がりて、其鋭げなる眼つき、薄き唇、愛嬌溢るゝやうな笑ひ顏、いづれも難の打ちどころと云ふに足らぬには關らず、立列んでは前の男に遙劣りて鄙しく見ゆるは、大概育ちの違へばなるべし。

都の士女の雲の如く上野さして集ひ寄る中を悠々と歩む彼の二人の、若きは齡上なるに對ひて、廣小路から黑門かけて初めて東京へ來たものゝやうに歩くにも當りますまいほどに、三橋を左へ折れて仲町茅町と不忍の池の對ひを歩いて、東照宮から谷中の方へ拔けたが好ではござりませぬか。と云へば、それまた始まつた。兎角に君は淋しい方を好くから困る。男も女も着飾つて如是賑かに

夫れオホンと四角張ッて說き出す程の事はなけれど、賢人も馬鹿となッてマゴツクは大晦日、凡人も聖人となッて長閑なるは元日、されば無位の眞人面門に出入す、大俗の我等も一日の中、一月の中、一年の中に煙草一服吸ふ間ぐらゐは大聖大智大慈悲釋迦牟尼世尊と同じ事あり、大聖人孔子殿と同じ心になる事あり。元旦の心は長松も鈍七も大抵本來の面目に近し。此心此心がめでたさの骨髓、決して曆の改まる爲に目出度なるではなし。其證據は御覽なされ、元日の太陽六角にあらず、とさる老人の申されし。

の學者が云ッたそうだぞ。と無法の口車を横に押す勢ひ凄まじく、禁酒しろなぞとは馬鹿な言ひ分、淫亂な奴は酒を禁じて居られるか知らぬが、馬鹿〳〵しい酒が廢られる者か、おれは淫亂ではあるまい。と途方途徹もなき反對論、細君驚きて扨々あさましき男と思ひける。

然れど今日御亭主例に替りて雀の聲を耳早く聞付け、勃然と飛び起き、頻りに元氣よくおはしませば、細君も快よく働らきて、扨一家寄り集り、誰も彼も何となく喜ばし氣に屠蘇祝ふありさま。亭主の散髮の奇麗に、小僧の天窓も奇麗に、着物サッパリとして家の内の疊も新らしく、障子も張り替へたり、御風呂のどん〳〵沸たのに昨夕這入て、皆の首御公家樣のごとし。家の宿祿と申すは勿躰なく流石に一家の旦那樣、是は奇代だ少し男振りが上ッたと女房が思へば、亭主も見る女房の衣服平着のドンック布子に代りて、腰付冝く見ゆる衣裳スッペりと、髮も艶々しく取りあげ、ゲジ〳〵眉もどうやら片付け、にほやかなりとは云ひ難きも先づ見られる顏、殊更白粉少しありて口紅美しぐ、オヤ〳〵山の神もマンザラでないぞ、と少デレにでれりとなれば、論も何もないて笑ッて恨んで騷いて喧嘩したは昨日の事、年の關所でシキリを付けて今日は亭主が女房に惚れ、女房が亭主に惚れて、それで家內安全家運長久。うるさい餓鬼だと思ッた子息が新調の洋服着た可愛らしい形姿、是れ夫婦の間を堅乎と續ぐ鐵のカスがヒ鐵の錠、堅いは〳〵堅岩に常盤に目出度し目出度し。まことに目出度候ひける。

第四に書き出すは、

夫婦和合

人の妻も男の手前たしなむ中こそまだしもなれ、後には髪もそこ〳〵にして、諸肌をぬぎて脇腹にある瘤を見出され、或時は様子なしにありきて、右の足の少し長いを知られ、一ッ〳〵宜しき事はなきに、子といふ者生れて尚又愛想をつかしぬ。と昔時の粋の言ひ置きしは虚誕にあらず。然も嫉妬喧嘩などして、女は髪をそこ〳〵にする所にあらず鬢髪空に逆立てゝ、いきなり男の向ふ臑に食ひ付き、歯の浮く様な聲出して泣き叫くは、まことにはや論も色氣もなき事。男が厭氣になりて、女房と疊、新らしいが良いといふ様な情無き言葉を出すも少し道理あり。女の男を見るも亦其如く、始めは亭主鷹揚にして少しの事は咎め立せず、萬事大名風に暮し、然も女の機嫌取る傾きありて、御召縮緬の小袖、ム、良し〳〵、それも買ッて遣らう。歌舞伎座の見物、それも連れて行ッてやらう。大酒は止せといふか、ム、仕方がない、恐れ入ッた、節酒しやう。と一切女房に甘く親切なりしが、日數ふるまゝ互ひに勝手を出し、何だそんな面に縮緬の頭巾が要るものか。ポマドンヌール付けたとて痘痕はどうなる者ぞ。芝居なぞ見やうとは贅澤千萬、無理に見たくば奥山へ行て猿芝居を見ろ、團十郎も福助も四國の尾長猿手長猿と左程違ふものか。一躰俳優は眞似をして、お染になッたり久松になッたりするが、眞似は元來猿の方が本家本元だ。俳優が進化して猿になッたと西洋

はまる固陋な詮議には實に答辯に困ずる、可愛さうに老先生も時節後れの學問、腹中に十三經二十二史があるにせよ、高の知れた紙屑籠、やれ〱貫目賣買の學者では初まらぬ。なぞと人を見下すを見識の高いと心得、罵り嘲けるを意見の強いと思ふて居る者も、流石に年始の禮は欠けず出掛けて行けば、老先生ホク〱喜び玉ひて、先々目出度し〱、聞けば去年は其方卒業して學士の稱を得られたとやら、結構々々、今年の正月は定めし一生今までの中で一番良い正月であらう。そなたが卒業試驗の成績も好ッたとの話し。聞いて老爺も喜ばしく、どれ程嬉しかッたか知れぬ。舊門生も多かッた中で常々から傲慢だけに見所あるそなたの手柄、尚ほ此後も確と遣てのけて貰ひませう。わたしが云ふ迄もなけれど少しでも撓むで貰ふまいぞ。此頃は舊門生が尋ねて來る度にそなたの噂をして、外の者を勵ます手本にして居る。寄ると觸るとそなたの事を話し出しては私しが内心深く喜んで居る其樂しさ。どうか今年も相變らず勉強して呉れ。扨舊例の白鹿洞掲示講義是非聞いてから行くが可し、舊門生も追々來る筈、少時待て居て。と眞白になり玉ひし頭ふりたてゝ喜色滿面の御挨拶。つく〱吾心入れと相違して飽迄我を愛さるゝ有難さに感じ、長長しき白鹿洞掲示の講義を元日に聞いてそゞろ悲しく、幼年の頃御恩になりし數々思ひ出し、今の身に朝夕使ふ言葉の中文字の中に、幾個か先生の口より暖かに出でし親切の活動し居るに氣が付き、御壽命万歳を祈りて歸りける。

耐つた者ではなく、大方人間の滓で出來た者でゝもあろうが、マサカそうでも無いから可笑い。八郎爲朝名を成して六郎七郎知ッた者なし。殊更兄貴め、女房を持てから急に親父ぶつて、イヤに片付けて居るが安座をかいてゐる鼻が座り直しもすめえに。

といふ風に兄貴を茶にして居た男も、骨肉の間柄、切ッても切れぬ緣に引かされ、明けまして御めでたうと出て行けば、マア此方へ上がれ、と引きあげられて流石に辭み難く、屠蘇頂戴の後の燗酒、水ッぽくはあらぬ兄弟の中。畢竟平日は禮義なきより起る互ひの心やすだて過ぎて勝手の言ひ草、今朝は一年の初、起居しほらしく、言葉つき共に叮嚀なれば、其うち自から油然と存する愛情、何處か他人とは悉く違ふところありて、兄弟手を携へ年始の禮に廻る睦まじさ。孤獨の男が羨ましがりし。

第三に書きだすは、

師弟和合

洋學噛りて眼鏡ごしに人を睥睨付け、天晴ダーウィンと兄弟分の樣な顏して、ハックスレーを朋友と吹聽せぬばかりは殊勝な男、昔時蒙求を習ッた老先生の恩を忘れ、漢學老爺が井蛙の見解、笑ふに堪へた者ぢや、フヽン、と鼻の先に笑ひ、四書五經尊重して居る奴の氣が知れぬと罵り、何だ當世豚尾國の文學にかぢり付いて何事が出來るか、易の理は天地を包含して居るといふ樣な迂遠き

衣裳、是も母親の仁情より出來しを着て、兩親の前に新年の御壽きを申せば、親父殿も恐悦淺から
ず、兀頭例より一段と光りて寶珠の玉の如く、良い機嫌にて、目出度そなたも一ッ年を重ねて大
分世間にも明るうなッた様子、身代も殘らず追付讓りませう程に、尚此上心を確に一ッ年を重ねた
だけの分別を添へて今年はシッカリ儲けようぞ、皆そなたの物になる店、空心持ずと元氣よく繁昌
をはかれ、と云ひ玉へば、母親も目出度〳〵と喜びたまひて今歳の中には又一つ目出度事があるだ
ろうとの御話し。扨は室町の例の事愈々極りしかとドッキリ嬉しく、つく〴〵親のあり難さ胸に答
へ、此新年のめでたさ、一心清々しく、然らば浮氣は最早切り捨つべしと、彼奴に約束せし二日の仕
舞、賑やかにせんと云ひしが、其胸算をサラリと消しぬ。めでたし〳〵。

書き出す第二は、

兄弟和合

兄貴が申の年の生れておれが戌の年の生れ、何もそれで交情が惡い譯でもないが、元來兄貴といふ
が癪に障る名だ。たぬきが聞て呆れる顏をして居ながら、おれを奴僕のやうに心得て居るとは怪し
からぬ話し。幼稚時から一つ學校に行くにも、一處に歩行ば辨當箱を必らず壓制で持せられたが、
今に其風義殘りて兄面し居るが忌々しい。生れる時に早いと遲いとの違ひがあつただけの事、早く
生れたのが良いなら、六條判官源の爲義の息子ずらりとならべて三十何人、其末子の割の惡さ、

とわたしが内務大臣になッたら命令を下してやらうと思ふ位の事だ。何も清元の稽古を仕たとて、西川の弟子入り仕たとて、掛硯の抽斗に、細見と、娘評判記とを入れて置たとて、着物の袂から若旦那樣宛の文殼が出たとて、帳場の金を二十圓攫ひ出したとて、親父の金時計を持出して淺草の市でスリ取られたとて、ソンナに愚圖々々小言なぞ食ふ譯は無い。アノ小言を一々眞面目に受取ッたら大變。小言の食傷で胃加答兒起しの、療治叶はずの、極樂行き鐵道馬車乘りの、イヤハヤ天女を色にして仕送りて暮さるゝか知らぬが、魚なし鳥なしの百味の飲食は、鰹節拔きの精進料理で、チト恐それる次第だ。さうしたら又後に殘ッた彼奴も第一可愛さうだし、親父もおふくろも可愛さうだし、と未然を察して大慈悲心を起し、チヤンと此世に足も達者、手も達者、口も達者の器械の龜の子、万年万年万々年、長生不老で生殘る樣に、アノ小言が眞向から來る所を、ヒラリと躰をかはし、ベタリと疊にクッ付いて甘く逃げて退けるのだが、これが中々一ト通りの事ではない。平蜘蛛の樣になッて居て、小言が頭の上を通り越すべきやう取り計らふ苦心といふ者は、恐らく虎に向ッた唐の獸兒、氷に寢た昔の男より勝ッて居る。夫程の孝子のわたしに、愚痴と恨みと水ッ鼻洟と三色調合した異見を頭からあびせ掛けるおふくろなんどは實にハヤ言語同斷の雌だ。女は罪が深いとは此處の道理だらう。

といふ樣な無法な熱を吹きし息子も、初日の出を拜み、井華水に無明の夢を洗ひ、サッパリとせし

和合樂

いくら正月一日の事とて、めでたし〳〵と書き出しては、流石に作り物語りなればとて二の句の出所なく、矢張りめでたしめでたし、めでたしや〳〵とばかり。これでは濟まねば、それめでたしとは和合の事なりと定義を下して書き出す第一は

親子和合

親父とおふくろが夜の間に御苦勞な內職、心腎を揉み脾胃を疲らし、醉興に作り出せし支店一ツ、乙に理屈を捻ッて見れば、何もわたしを世界に出して吳れと願書を差出した覺えも無いに、出來た私を子と名付て餘計な世話を燒く五月蠅さ。親風吹せるが一躰氣に喰はぬ。ナンダ、實語敎にも鼻高きが故に尊からず子あるをもッて尊しとなすとあるを見れば、私といふ者が出來たればこそ親父も行末能く尊とまれるのだ。鼻が大くてもわたしが生れなかッたら定めし親父もおふくろも泣ッ面をするであろう。夫を思へば憫然さにヒョックリ生れて來て遣つたのだ。それだのに今新たに、何だの彼だのと我儘千萬、大切な子に向つて勝手な熱を吹きやがる事、片腹痛くて片腹痒く、お臍が茶壺に追はれてトッピンシャンサ時雨か萱屋の雨か、音もせで來てシク〳〵と此間も泣きながらおふくろが異見なぞ仕やがッた。失敬千万、不埒千万。息子を珍重致さゝる段不都合に付き譴責す、

しむるものにて春雄其後病治して、病後の人は病前の人に異なり、打つて變りし孝行者、母は素より子を愛せしに今は子もまた母に孝なれば不足の食にも滿足の想を生じ、寒苦の中にも溫和の光りやはらかに、假令軒洩る風つめたきも惡夢長く絕えて樂は長閑なり。かゝれば世間の人もまた春雄を愛して、春雄が世に出るの道ひらけ、猶心を細かにし氣を平かにして能く處し能く勤めければ終に青山家も天晴むかしに歸りてめで度榮えしといふ。

る途端、オ、眼さめてか心持は如何に、粥湯作りて置きしに少し喫べ試みずや、とまめ〳〵しく柔和い御言葉、何となく肝に浸みて自然に恐れ入り、御顔を見れば病人かとおもふほど痩せ衰へ玉へり。是も皆我不所存よりと痛ましく、おもはず此時無數の過已罪眼前に浮びて大鐵圍山四方より逼り來て我身を壓むる如きを覺え、目をふさぎて春雄一言もなかりし。

夜も明くるに近くなりて、櫺子の破れに風白く、やがて日の光り難有も平等の大慈を施して此貧家の裡にもさし込むやうになれば、母は藥取りにとて出行き、たゞ一人病蓐に横はりて過し方を思へばおもふほど罪深くそゞろに落涙とゞめかねつ、流石の男も我慢の角少し折れかゝりたるところに母は歸り來り玉ひて、大分其方の顏色もよい、今朝又一度粥湯をたべて早く力づけよかし、と殘なき慈悲。見れば少しばかりの米を土鍋に入れ玉ひて煎じ玉ふ。それも直ちに出來て、さあ是をと茶碗持ち添へて啜らしめ玉ふに、冷汗腋の下より流るゝ心地しつ、腸の中にてよくぞ今までに罰のあたりて此口の裂け破れざりしぞとおもひつゝ感泣してそれを食ひぬ。其事すみて母は自ら朝食したゝめ玉ふに何となく人に隱し氣なり。あやしやと寐ながら横眼に椀中をうかゞへは、無慙、米にもあらず麥にもあらず、芋など入れたる糧食にもあらず、むごらしや豆腐の滓。嗚呼ッ、かくまでに御自分の身を責め玉ふても此不孝のわれを愛し玉ひしかと魂魄ゆらぐほどに驚けば春雄が心中に無限の春風わたりて迷霧忽然と晴れ清淨心にぞ歸ける。實に慈愛の念の徹する時は人に不思議の靈力を生ぜ

に叫び、それより野分吹き立つて、やがては嵐木枯し、蜘蛛の巣はらはれて簑蟲かくるゝやうになれば、寂滅爲樂と觀じ玉ふ佛は知らず、凡夫が手は火鉢にわたらむを願ひ、賤女が足は炬燵に潛らむことを欲するが常、何も仕ないでづく〳〵と冬籠り、惟寐て居たいが好みなるに、此時什麼生貧者の苦み。一日はたらかねば一日の口も共にやすませねばならず、寒風寒威いとふて居る間はなし。手はひゞに足はあかぎれに、それのみか惱むは、日短ければ拵で得る錢も少く年つまれば勤めて爲すべき業も多からず、要るもの多くて取るもの足らぬに、無慘や夜は蒲團の綿かすかなるを引張り合ふて夢も半夜に幾度か破れなむ。心がらとは云へ春雄次第〳〵に落魄して見る影も薄いと母の眼からさへ思はるゝほどになりし揚句の果は天罰か、自業果か、忽然として病を得たり。酒の祟りか、色の報か、心まづ病でから身病みしか、身の病に心の病もさそはれ出しか。左程にもあらず見えたる病氣の下り坂に石の走るほど早く惡い方に赴きて枕あがらず呻き悶ゆれば、情あつき母のかゝる者にも慈悲深く、足らぬ中の物を殺でそれ藥りそれ針治と手の屆くだけ身の及ぶ限り夜も碌に寐はせでの看病、ア、恐ろしい熱ぞ、頭冷してやらむ、と覺束なき足どりに冷水汲んで來て手拭浸し、引き換へ〳〵ては此の熱さめよと額をひやしてやるなさけ。春雄漸く苦み薄らぎて何時か知らず睡りに入り、しばらくして眼さめてそつと眼を開き、あたりを見まはせば世間靜りて夜は三時頃かとおぼゆるにホヤも無き手らんぷの下にて內職の縫物まだやめ玉はず、嗚呼、と我知らず歎聲を發す

しく忌はしき眼ざし、聲には元より毒刺を含むにぞ、誰か如是ものを能く憐まむや。殊に貧乏の苦患もみづから招きたるにはあらで孝行して貰ふべき筈の悴より逆に報はれたる母親、註時のまゝならむには絹物に踵を蔽して豊かに晩年を樂しみ送らるべき身が、足袋を縫ひ刺子を作る内職など手の届くだけして齷齪辛勞夜を日につぎながら少しも女の癖の怨みも云はで居るを勿躰なくもいためつけ、酒買ふ錢が無いかとあばれちらす春雄の極惡。どうすればあゝも無茶が出來るものか、と近所の人達さへ惡みに惡みて人間の面よごしと罵るまでになれば、誰一人春雄のためになることを敎へくれるものもなし。嗚呼人の性は善か將惡乎、天の道は仁歟また不仁かとは此噂きいたる老人の歎息なりしとか。あんな奴はのたれ死せずには終るまいとは子を持たことの無いさる山の神の評なりけり。

下

春は發生の機をつかさどり夏は長育の恩を與ふる時節、三度の食につかゆるものも此二季にはまづ幾分かのゆるやかなるところありて凌ぎよくもあれど、秋風白露、蟲の聲々天地のさびしさを鳴き立つる頃となりては、衣服も一枚では濟みかぬるに冷きは身ばかりならず心にも浸みて、富貴の御公家樣さへ悲しい歌よみ出らるゝにまして貧人のつらさは猶々、霜は万木をいためて林間の鳥寒げ

ケチの縫縫ひを疾からはじめて内職に肩の凝り針だこの傷みを厭ふ間なきまでに至りて暮せり。大抵の者なら此處等が悔悟時、女には早くも見限られて口惜涙の愚に煮ゆる擧句、煮え切れて發起もしさうなもの、朋友も漸く遠ざかりて往來でまざ〳〵逢ひながら向ふは帽子の庇を楯に知らぬ顔で行く憎さ、癇癪の火のむら〳〵と燃ゆる擧句燃えたちて今までの惰弱を自ら責むべき筈なるに、斯くなればまたいよ〳〵根性煮えこぢけて怪しくなり、魂魄半ば燒けて鐵滓の如く爲りてもするものか、僻みばかり强くなり行き怒り易くなり行き、輕薄より粗暴に流れ、惰弱より姤婬に一足飛びし、何ぞと云へば人を罵り物にあたり、自然言葉も妙でげす乙でげす粹通などゝ云ひしを廢め、若き男女の相乘車景氣よく走るを見ても、畜生と評し、立派な紳士の悠々とあゆむにすれちがつても何だ此野郎とつぶやく心の中のむごさ。畢竟は自分が畜生に落ち野郎とそしらるゝ身となり居る證據なるべし。かゝる境界に沈みては餘所目よりはひとしほあはれ深き自繩自縛自肉自食の魔となりて自ら悟らず、衣を賣りて酒をあふり、醉ては昏々としてしばらく眠り、醒めては欝々として長く苦しむありさま恰も己の腿を割て己の口に奉ずるに等しきを心づかず。ます〳〵邪見の大外道恣懲の阿修羅となり、我を責めて正に歸することは露知らずに、我を執して空しく人を惡み他を嫉み、一日幾度の瞋恚の惡火を發して骨髓を焦がし殘忍の寒風を吹き出して肚腸を凍らする惱みに、智水枯竭きて清凉の妙相失せ心華零落して脉々たる佳香亡べば、可愛らしきところは凡て無く、見るからが鄙

どのやうなことを致さうともわたくしも是限で終りはしませぬ。ます〳〵氣長に先の先を樂しみにして居らるゝが宜しうござります。決して一個の男子間抜なことはしませぬ。と縦板に水を流す如く辯舌を揮つて、理を使つて非を飾る口前恐ろしければ、少しも母に口は明かせず。何とやら呼ぶ藝妓に引かゝりしか引かけられしか丹樣ぶりの好男子となりすまして家を外の無法、遂には云ひ譯も前ほど叮嚀ならず、二言と母の言葉をきかずに、おだまりなされ、英雄色を好み酒を愛す、燕雀何んぞ知らむ鴻鵠の志、と講釋師から習つて來た糞威張りをふりまはせば母もあきれてたゞ泣くのみなり。かゝる男に持たれては如何ほどの大金なりとも財產なりとも何條長く其まゝにあるべき。青山家の運も次第に衰へて地面も一ヶ所二ヶ所と賣渡たすやうになれば、公債は既の事飛んで踪なし。是はならぬと母親氣を丟めて春雄に渡さねば、春雄は忽に智惠を出し、突然金を借り置きて何日の間にか持地を質草にするなど愈々ます〳〵白痴を盡し、世を懷中手で渡らるゝやう見くびり、三文の捽ぎもならぬくせに武內殿を安く使ひ、蛭子の命を小僧叱るより烈しく追ひ廻せば、終には貧の水に永華の寐耳を驚かされて歡樂の夢長くはつゞかず、段々と着物の襟垢のみ增して襦袢の袖の縮緬にあさましい瘦見ゆる身となり、一寸外あるくにも黑塗りのつやよく藍天鵞絨の內張りした人力車を擇みて乘りしものが、赤枯れたる疊のつきて鐵ほど堅うなりし革緒のむかし恨めしき下駄引ずりて鐵道馬車にも乘れぬ仕誼、まして母親は老眼のさだかならぬを眼鏡の力に助けられながらハン

ては天晴才子の所業と心得て得意顔なる鼠輩の伍に入り、やれ花、やれ月、能に演劇に浮れあるき、遂には長じて枯野までを面白がれど、畢竟は酒色を夫等に事寄せてさもしい腸に虚妄の歡樂を與ふる手段に過ぎず。明ても暮ても飲むこと三昧騒ぐ事三昧。是で行末がよくは天道も人道もなし。

中

あまりの亂行、若いものゝ一時の不料簡はあるならひとて、打捨てゝは置けず、たまには諫め諭せど中々養母のいふ事など耳にも入れず。お母さん餘計なことは云ひ玉ふな。ぶらりとして日を送ればとて瓢簞でさへ胸のあたりに締めくゝりはありますに、春雄の腹の中には悍りながらお母さまなぞには知れずとも確なところがござります。たゞし瓢簞にも劣つたものとおぼしめしての御教訓ならば失禮ながら御眼がちがつて居りませう。左程御辛配あそばして小さな御胸にくよ〳〵と物案じは御身の毒でござります。なんの靜に果報をおまちなされ。古語にも大器は晩成とござります。今の若さにあはてゝ立身出世など望むで騒ぎちらすほど私は馬鹿でござりませぬ。また少しばかり行狀が普通はづれたればとて是は天性の磊落おゆるしなされ。大功をなすものは細瑾をかへり見ず。中々もつて詰らぬ事にびく〳〵して居るやうではどうせ碌なものにはなれませぬ。世間俗物どもに是彼云はれる位は何でもない事、容れられずして其大を見るとはそこの事でござります。唯今

て仁と云ふものをもたず、心の靈德の缺けた男かと疑はるゝ若者あり。齡は今を盛りの二十三四、五とはなるまじ。普通ならば最早幾干かの働きをして、取つた金を神棚へのせて、おふくろでも悦ばすべき頃なるに春雄〳〵と甘く育てられし故かそれとも養家故に我まゝ三昧せぬが損とあばれちらすか、と苦々しい評判せらるゝも無理ならぬ亂暴狼籍、聞くさへ忌はし。よろづ五月蠅商買は仕舞ふたやの小躰ぐらし、表面に賑々しいところは見えねど地面公債しつかりある青山家へ養子に貰はれて何不足なく學問勉强出來る仕合せの地位に居ながら飽までやさしい養母の人のよさに付込み、怠惰るどころかまるで書など一冊も手に取らずに遊蕩ばかり。最初はそれも朋友のつきあひと名だけをせめてしほらしいものにして無益金を費せしが、後には遠慮なく打ち出しての不品行。素より行く末に立派なる目的を持つて居るといふにもあらねば、見るところ思ふところは眼前一寸、たゞ虛しく驕りいたづらに高ぶり、帽子の詮義、駒下駄の穿鑿、下らぬ事に屈澤して何にする氣か、つまりは見識もなく操行もなき無知の婦女ばらによろこばれんため、義理ある母の仁慈を度外にして野犬のやうに其處等中うろつきあるき、類をもつてあつまる惡友同志、互ひに通とか粋とか乙とか妙とかいふやうな怪しき意味を持てる言葉を放ち合ひて輕薄きはまる盃酒の交りを結び、どうも是は恐れ入りやした、凝つたもので、珍てげす、面黒い、たまらねえ、澁うがす、捻つた奴、などいへる文句を吐きては間々にオホンと拍子を取り、反身になつて厭味の臭氣を空中に射り出すを自分

ならで船に乘らぬ前とて互ひになさけのかけ合ひをすべきはず、ましてや親となり子となり兄となり弟となり夫となり婦となりて住む家の棟を共にするは勿論淺からぬ因緣あつての事。紅花綠葉素同根、どうしてなんの、なんの恨み、惡み、嫉妬、偏執我慢、貪、瞋、癡、打つ、つねる、喰ひ付く、詈る、欺く、惱ますなどいふあさましき所思所業の成り立つべき地のあるべきや。雀王經中の靈雀と猛虎、九色鹿經の神鹿と溺人、波羅奈國の大龜と賈客の話しなど皆一方は得手勝手の爲し放題、恩しらず義理かまはずの大我武者なれど、遂に其がむしやが此世を一統して盡未來際支配したとは聞かず。矢張り却後無量劫を過ぎて天王如來となり、むかしの其無法者妙法を說くとあれば、無法も畢竟皆歸妙法、煎じつめて云へば惡は善に勝たず暴は慈に克たず無明は金剛不壞のものにあらず、短く譬はば好色の男も若盛りの無分別からあのゝものゝと衣類持物を吟味するうちこそ淫女に迷溺もすれ、經帷子を是から着むといふ夕暮にも猶能く微音にお前百までわしや九十九までを吟じ得て若い時のまゝの心を持ちて居らるゝか、高の知れたる色慾の火の手なんど打捨て置ても三四十年ばかり經たる後は兩鬢に積る雪霜のために埋められ消されて仕舞ふところを見ればどうしてかうしての迷ひもつまり眞如大海の一浮漚、決定して惡人自滅の時あるべし、惡事は出來ぬと覺悟する時あるべし、とは誰も彼も知つて信じて居るか知らずに信じて居るか、何にせよ人間の腹の底に持て居る事はれぬ天の命じたところならむに、さても又彼奴のふるまひは何事ぞ。彼奴は多分生れつい

迷霧

上

よしや草の莖を矢にして百錬の鐵を貫くことはありとも毒惡の言は遂に清淨の人を傷つけんこと難く、たとひ蜘蛛の巣のいと細きをもつて九種の龍を縛し得ることはあるとも暴戻の業は何ぞ慈悲の德を凌ぐを得むと、むづかしう四角ばつて云ふ迄もなく、旅は道づれ世はなさけといろはがるたの金句は說き當てゝ動ぎのないところ、身延參詣の途中にて互ひに助けつ助けられつ、八王子行きの汽車の內で自分は腰掛より離れて、あなた樣立つてばかり居られては御老躰の定めしおつらい事でござりませうにちと此處へ御坐りなされと席を讓り、又は甲州路の岨道で、御履物の緒が切れましたか、やれ御氣の毒な、さあ是でおたてなされ、と有合せの短い細紐を與るなどいふ仲間のみが同行かは、日々夜々人も我も實は伊勢暦の中を一格づゝ常に旅して歩行て居るやうなもの、隣りの男も向ふの婆も皆同行には相違なし。されば行き着く先々は各々ちがつて日本橋の人道がはじまり、夫より色無色の天に登るか修羅餓鬼畜生の惡趣に入るかは知らねど、坦々たる大道を正當に行かば盲目も差支へはなく京のぼりが出來るとむかしより云ふたものなれば畢竟は權兵衞八兵衞も一佛乘の道づれ、彼岸に到るの同行、こゝを考へて見れば吳越の客でも船を同じうしてから情をよくするのみ

叫びつゝけし末、醉の餘りに自ら云ひ出せしか涙奴に說きつけられしか乃至二人とも圖に乘つて戲れしか居候に風通織の御小袖黑の御羽織着せて主人たる身が赤つぽい双子の羽織小名木川出來の布子着て、今まで足踏せぬ柳橋へ泳ぎ出し、五日間といふもの待つ人無き家は歸るも忘れやすく官衙も絲瓜も何ちも入らねえ、てんと面白くそれからそれと遊びちらし、漸く財嚢に催促されて家へ歸れば、不在は盜賊に置時計から書物から衣服から買ひ立の道具も目ぼしいものは皆攫はれて遺るものは疊に大きな泥足の踪ばかり、仕方無く國元へは電報、官衙へは申し譯、涙奴は頭を搔きながら、こいつは閑靜になりましたなあ。

めながら快飲なし、前後も知らず寢ての翌朝起き出で見れば浪奴は旣、昨夜は御酒が些過ぎましたやうに見えましたから湯に行つて御いでなさりませと自分はちやんと顏を洗ひ其邊取り片付居て手拭楊枝を主人にさしつく。それならばと湯に行きて歸り來れば薄仕立の味噌汁、たき立の飯、香の物たけは殘念ながら昨日氣のつか無つたので今朝旦那樣の寢て居らつしやる中隣家の圃を生籬越しに覗いて不圖目についた小蕪をうろぬいて來て醬油漬にしました。ハヽヽ手が長いと仰有りますな、内々〱と笑ひ崩れながら云ふに、傳も呆れ驚きながら生漬は食へまいと危がるを、何の生漬なことがあるものですか、客を見てから漬けるとさへ云ふものでこさります、食つて御覽じ。といふ。食つて見れは食へぬものならず。飯も濟みし後浪奴はまた今日は食品を買ひに行きますから晝少し遲くまで御待ちなされて下さりませと云ひて戶外へ立出でしが、果して一時頃丹後の海鼠腸、加賀のすぢ、庄内の鱈の子、瀨戶内の木の葉鰈、土佐の酒盜と酒客を淋しがらせぬ數々のものを調へ歸り、魚屋八百屋へ寄り道して來しと覺しく種々のもの臺所に來るを受取つて手早く菜ごしらへ、晝は酒の無いが好うござると飯ばかり喰はせて其代り其夜は傳が驚く珍味を下物に本鄕神田下谷あたりで飮んだより甘く酒を飮ませぬ。傳は昨日よりの浪奴が働き、才かしこくして心誠あるにつく〱感心して有金殘らす渡して仕舞ひ、何分萬事賴む、と云へば、宜しい心得ましたと受合ひ込みしが其より一週間ばかり經て或日曜の夜の事なり浪奴が小手の利たる下物ごしらへに傳は奇絶妙絶を

好い加減に取つて置て、ナニ德利が無いつて、お勝殿も人が好い酒家のを年中其儘遣つて御遣りなさい。源公大きに御苦勞だつた。移轉蕎麥は後で藪へ云つて呉れ、此方も無論御相伴たぜ。其次手に千駄木から駒込の通りへ出たら其邊に桂庵があろうから須賀町のへは先刻賴んで置たが猶年齡は十八九から三十五六までのところで給金は月一兩二歩まで出すといつて置てくれ。器量は成らうなら美しいのを。次第によつたら乃公が這ひ込むのだから。ハヽヽヽ。イヤサこれは冗談だよ。若い男ばかりだと聞くと兎角桂庵めが夜具を持つて來ぬ代り紅白粉を持つて來るやうな女を連れて來るから能く云ふて置かぬと先方で勘違ひをして困る。オヽ神田川が來たやうだ。汝達は臺所でぱくつくがよい。さあ旦那樣も召上りましだ。僕も頂戴して出馬しますから。と手ばしこく茶を入れて、先つ第一にむしやり〳〵。

涙奴は食を終ると出て行きしが日暮るゝ頃歸り來りて火鉢烟草盆より花臺花活まで殘るところ無く買ひ調へ、自己が用ふる分の出來の安夜具も購ひ來ぬ。萬般は一日にて埓明きたり。拭き掃きの業は源公夫婦が一日かゝりたれば椽側も先はごそつかぬやうなりたり。今日初めての釣洋燈明るく點く頃には塵埃も靜まりて住み馴れし家の如くしつとりとなりたり。近所への挨拶は涙奴が仕て廻つて、源公夫婦に骨折賃取らせ歸し遣りぬ。其夜は塵埃靜めの酒、下物も今日だけは仕出屋ので堪忍してと涙奴の云ふがまに〳〵なし、おもしろ味ある德利、呑み心地あしからぬ猪口で涙奴の勞を慰

れたのと、これだけが注文だ。忘れまいぞ。お勝殿炭が來たらば炭斗へ一ばいにして差配へ返して下せい。此炭斗は貼つてから使ひたいがまあ好いは。此の方が土竈、此の方へは佐倉を入れるのだよ。何樣です旦那樣此火鉢は、五圓には些高いが新でも大丈夫狂ひは出ませぬ。此鐵瓶は下りだから有り難くも無い代り廉くて小器用に出來て居ます。土瓶は今お勝が洗つて持つて來ませうが陶保園だから中位には見えます。下谷近所も田舍漢に跋扈られたので南部の鐵瓶や些雅致の有ろうといふ茶器なんどは置ても賣れないさうで何處にもありませぬ。水差もサハリで堪忍して置て頂きます、眞鍮藥罐よりは躰裁がよいが花魁の部屋に得て有る奴だと仰ありますな。廣德寺前に骨董屋が減つて西の窪に殖えた時勢だから下谷では何も自由に任せませぬ。然し御客づかひのものは勸工場仕込も殘念ゆゑ是から客火鉢煙草盆膳椀皿小鉢猪口德利と一ト通り仲通りで見繕つて來ます。次に飯櫃も、イヤこれは怪しからん新しいのを買へと仰あるのか、飯櫃は淸潔にさへ使ひ込んだのなら古い方が高いものとも御氣がつかれませんか。新しいのは飯が腐ります。そんな事を云はれる方が揃つて居らつしやるから西片町や森川町では鼠鮫もよしきり鮫も同じ價で賣れると云ひますは。ヅミで染めた石斑魚の鮎を食らぬように用心なされ。酒屋が來たのか御勝殿。オット利酒心得たり。これ〳〵、此が好い櫻正宗だろう。醬油は今と仕て置から。人少だから半樽持つて來いと云へ。旦那樣御存知か知りませぬか居候今の烟管拜領し、といふのをきゝました。をかしうござりますは。酢味淋類は

勝にて退出の刻限來るを待ちつけ直に車を馳せて根津に到り見れば車夫らしき知らぬ男の控へ居て、旦那樣でござりまするか、さあ御上りなさいまし、私は此家の差配の手から御頼まれ申しまして夫婦とも御掃除の御手傳に上がりましたもの、源と申しまする、と挨拶す。上がりて見れば既長火鉢に火もありて鐵瓶も沸り居れり。臺所には水瓶あり手桶あり小桶あり、塵取り、俎板、さるぼう、柄杓、よろづさし、庖丁さし、杓子の數々、竈に釜茶釜、棚に鐵鍋青銅鍋の大中小、庖丁鐵灸餅網鐵串、灰篩、火箸、小刀、悉皆揃へり。瀨戸物類の一つも見えぬと不審する時、二人乘の車の音ごろごろとして、これは皆水口へ廻はしてといふ聲は浪奴に疑ひ無し。浪奴戻つたのと云へば、旦那樣御歸りになりましたの、と云ひながら青繪の手水鉢の品よきを手にして坐敷を通り拔け、椽側より竿石の上にそつと置き、手水鉢には惜しいなれど何と好ではござりませぬか。源公これに水をなみなみ願ひたい。お勝殿臺所づかひの瀨戸物の受取り方が濟んだらば一寸手水鉢の柄杓を持つて來て下さい。手拭掛は乃公が釣る。おッと源公其足で神泉亭の傍の神田川だ。土曜日だから旦那樣も御晝飯前、丼、四ッ云ふがよい。汝等と乃公とが口果報と云ふ譯だ。戻りに近所の酒屋に味噌醬油鹽酢味淋、酒、何でも汝の家で賣るものは買つて遣るから用をきゝに來い。肴屋と八百屋にも明日から付木をもつて來いと云へ。油は薪屋か酒屋で兼ねて居やうから如才無く罐は細口のを貸して置け、引火奴は燧木とゝもに澤山持つて來いと云つて吳れ。佐倉の切つた奴と土竈の爆らないのと薪は枯

れ。假に百圓渡して置くから明日より早速引移つて兎に角働いて何樣にか仕て呉れ、明後日は乃公も休み日なり不自由でも關はず引移る、と云ふに浪奴は心得ましたと先づ第一に云ひ切つて、道具諸式は躰裁よくて成るべく經濟的に仕ませうか乃至飽まで贅澤にして勝手向き日用向きは中として置きませうか。竈一つでも一圓以下のから銅壺がつけば二十圓を超えるのもありますれば、萬般上下に際限無く、五圓で足りもするし百圓二百圓で不足も仕まする。大抵の御心算を伺ふて置きませねば。と云ふ。乃公には譯が譯らぬ、だが餘り下等でも餘り贅澤でも厭だ。何でも趣きの全く無いものづくめで無ければ成るべくは經濟的に上げる代り周到齊整不足ないやうに行き渡つて欲しい、と命ずれば、宜しうござりまする、それなら明日は御退きになると直に彼方へ御歸りになるが好うござります。何食物ですか。ハ、、臺所に俎板一つ無いにしても旦那樣に飢え渴きもさせは仕ませぬ。此家の勘定は今夜から精算するやう云ひつけまして御出勤後直に御荷物は彼方へ僕が持つて行きます。明日は車に乘り通しますから晝食も些奢ります。と答へて烟草ぱくり〳〵。跡は朝鮮の藝者の噂支那西洋の孌童の話しなど仕出して明日忙しい目をすべき人とも見えぬ優長な詮議。傳は少し明日の事を心元無がつて氣にするに引替へ冗談に身を入れて、傳が食物の好み、酒の飲み方を根ほり葉ほりに問ひなど仕ける。

傳は官衙に出ては仕たれど心に懸る家の事を如何に浪奴がせしやらんと思ふに事務も上の空となり

辨ずるとしてこれだけ渡し置く、と一圓札を預けて其夜は睡りに就き、明けて官衙へ出勤なし、歸りて見れば既奴浪は室内を取り片づけ茶を入るゝばかりにして煙草ふかし待ち居たり。家は何樣した見付つたかと問へば、見付けました、池の端に一軒、根岸に三軒、小石川に一軒、丸山に一軒、森川に一軒、根津の裏手に一軒、駿河臺に一軒、家は皆相應でござりまするが駿河臺森川丸山池の端のは飲水に遠く根岸の二軒は濕氣強く一軒は立派な代りに住人が腹を切つた後三年ほど明いて居る家、根津の裏手のが一番清潔で間取りもよく井戸も邸内に在つて車夫部屋物置もついて居る代りに堪へられぬほどでは無けれど些不便でござります。所書きを仕て置きましたから一ト走り御車で廻つて御いでなされませ。晝飯は六錢五厘、引て九十三錢五厘御返し申します、と水の流るゝ應對。傳は其能く尋ね來しに驚き、六錢五厘で晝飯は蕎麥でも食ふて濟ませたか或は立食でも仕たかと云へば浪奴は笑つて、脚があり眼口がありますれば廣い市中で十軒や十五軒搜し出して來るに不思議もなく、また立食も蕎麥屋入りもせず、しやんと坐蒲團に乘つて飯も濟ませました。と答へぬ。我には爲よと云はれても成らぬことゝ傳は思ひながら車の用意させて浪奴を引連れ、段々と見て廻るに成程根津の裏手の家一番好ければ、それに定めて立歸り、さあまづ家も出來たとして火鉢から洋燈から膳椀から何も彼も無いの故一切を買ひ調へねばならぬ。ところで何が多少錢して彼が多少錢するかも知らず又何々を買へば好いのやらも乃公には解たず汝を信用して賴むほどに宜しく取計らつて與

一も二も無く承知した。浪奴さへ異存無ければ此方は宜しい。何時でも當人を連れてゆき玉へ。然し家でも見當らぬ中は下宿へも連れて行かれまい、と主人の云ふを、いや、それは左樣だが浪奴はそれなら僕のところのものと定つた譯ゆゑ今日から直と下宿へでも構はぬとして連れて行くと打消す傳が性急の言葉。これは面白い新規の旦那樣の氣の持たれ樣が氣に入つた。下宿屋住居の方のところに居候も洒落て居りまするな。色々なことも仕て來ましたがこれは初物、此呼吸はどんなものか是非遣つて見無ければ。と既圖に乘つて浪奴は面白氣に口をたゝきぬ。

浪奴が荷物は何も無けれど左樣とは知らぬ傳は主人が出したる酒も醉はぬほどに飲みて、既乃公は今日は御暇とする、汝も乃公がところに移る支度をするがよい、と云へば、今までの主人と共に笑ひ出して、荷物は五尺の身躰一つ、ほかには御茶椀と此箸ばかりと浪奴が云ふを引取つて、木末、うつかり仕玉ふな。居候の癖に其箸は理の美しい結構な象牙、茶椀は清風與平の古南京摸し。それだけを離さず持つて居る仔細を尋ねたら浪奴めに戀愛譚を一夜聞かされる。と浪人が云ふに、扨は何か云くのある紀念の二品だなと傳も笑つて其儘になし、遂に浪奴を連れ歸りける。其夜傳は改めて浪奴と底意無き酒酌み代し、いよ〳〵主從となりなられたる約束を堅め、さて明日よりは汝我が住むべき家を尋ね吳れよ、官衙より退出して後我も一應見て定むべけれど家賃は大抵十圓どまり神田本郷下谷小石川の中が望ましく、見苦しからで直に住めるを見つけ吳れゝば其上なし。晝食は出先で

汝のうめて呉れた水の親切が湯にならぬ中乃公は一ト風呂入つて來る。木末君が何か汝に話しがあるとのことだから茶でも入れて例の如く御馳走の催促でも仕たが好からう。と浪人は外に立ち去りぬ。

傳と浪奴の相談は傳が熱心のためか浪奴が好奇心のためか早くも纒まりて、浪人が歸るを待受け浪奴先づ口輕く、御湯の加減は如何でした。大方御意に入りましたらう。時に只今木末君から御厚情の御話しを受けましたが、此方でも僕を少時の間木末君の許に遣はされうかとの思召の由。此樣なぶら〳〵の剽輕者を捉へて頼むと木末君の云はるゝに實は士は己を知るものゝために死すといふ本文を引くでも無いなれど木末君のため盡せるたけは盡して見たい料簡でござります。餘り當にもなりませぬが木末君の今日を愉快に送らせる位は御茶の子のこと、權助もいたしませう待者奏者も勤めませう內膳頭內藏頭も一切かく申す太郎冠者が引受けませうが薩摩流の夜の御勤だけは御免蒙りませうと既に御約束申したところでござりまする。報酬は要せぬ代り萬事僕に任したとあれば其御心意氣を頂戴して酢にも蒟蒻にも使はれませうと此太郎冠者がぐつと呑込だのでござりますが、此方の御許しを僕が直接に頂かぬ內は確とした御挨拶は成りませずと御歸りを待つて居りました。と云ふ尾について傳も橫より、浪奴君も酷く僕の言葉を買つて呉れて、盡力して呉れうと、愉快に自身だけは肯合て居らるゝのゆゑ君には少し御氣の毒だが何樣ぞ僕の頼みを聞て、と眞面目に云へば、

げやう。然し官員で下宿屋住居も固より褒められぬが、君が家を構へるのも考へものだよ。母も無し姉も無し妻も無しで家を有つて行くは僕の身に覺えがあるが五月蠅もので、五月蠅仕無ければ面白い代りに家は梁山泊か佐次郎和次郎の住居のやうになつて仕舞ふて、だゝらだゝくさ、勉强の勉の字も出來無いやうになるが結果だ。浪奴とても酒は好なり遊ぶのは好なり、餘程君が心を締めて使はぬ時には先へ立つてだゝくさを遣り出すから其積りで居玉へ。然し僕に差支は少しも無いが浪奴が何といふか當人に直接に君から話し玉へ。今に湯から戻つて來るから左様したら聞くが好い。入替つて僕は湯に入つて磨いて來る。といふ時眞赤になつて手拭を肩にしながらふらりッと歸り來れる浪奴は傳に一寸會釋して主人に打向ひ、さあ御湯に行つておいでなさいまし。ぬるいがおすきだから私が出際に留桶で散々水をたゝき込んで置きましたは强勢忠義ですが其代り三介に叱言を食ふて石鹼を流しへ忘れて來ました。木末君聞て呉れ玉へ。僕は熱いのが好だから蚤の食ふた孔に錐もみするやうなのに先づ入つて、それから主人のため水をうめて溫くさせて置かうとすると三介が曰く、湯へ入る前にうめろなら解つて居るが槽から出た後でうめろとはとぼけた御客様だ。違てうめろなら汝の腹へ水槽の水でもうめてあげやうか、と理の當然で攻められたには僕も閉口したが、其處は僕の事だから、箆棒め蕩樂した覺えのある老人だつて若い者に遊びをするなと云ふ理屈だはい、と負惜みを云つて自分でどしどしうめて遣りました。と話せば客も主人も笑つて、浪奴、それなら

思ひしまゝ酒壹升肉三斤を浪奴に餽りて懇意を結び、それより目下の朋友位の格に交際ふて數々客らせられけるが、今度家を構へんとするに臨みて最初より此男を當分浪人より借り受けて食客なり執事なり家族なりに使はんとは傳が目算にありしなれば、一寸した手土産とたゞの人なら出掛けるところなれど書生上りだけに赤手ですまして下谷なる浪人が住居を問ひ、雜談二つ三つして後、時に僕も今度家を持たうとおもふが、就ては君に無心がある。些迷惑だらうが聞て呉れ玉へ。他でもない君の細君のあの浪奴をば二三ヶ月借りたいと思ふので。それといふのは君も知つての通り親戚なんども東京には持たぬ僕の事故、差詰下女を置くにしても些の間は留守居も無し甚だ以て困るのさ。親父が世話をして遣つたことのあるものが此間まで築地に居たが其も今は横濱へ移つて仕舞ふたし、當分のところ何とも一ト通り落着くまで浪奴に居て萬事取賄つて貰ひたい。勿論用が濟めば直と逐ひ拂ふといふ譯では無い。君の方さへ不都合なくば永く居て貰ふても差支無く、左も無ければ、一月か一月半の内には僕も精々浪奴のやうに面白い、輕い氣の、働く身躰の、何か彼か能く知つて居る書生を見出して置かうと思ふから、其時は浪奴に相應の報酬を仕て君の許に歸すとするから何樣か君僕を助けると思つて少時の間君も不自由だらうが君の方は居馴染んだ下女も居れば萬事も整頓して居ることゆゑ浪奴を貸して呉れ玉へ、と云ひ出せば、浪人少し考へて滿面に笑ひを浮め、はゝあ、君細君を迎へる準備だな。よろしい、僕の材料となつて呉れるのだ。隨分浪奴も貸してあ

と自ら名乘り、氣散じな其日〳〵を送るたつきに好きから書き綴れるやうになりし小說を世間に投げ出して、一寸先は知らず今日はまづ魚食ふて念佛申して居たが好いと洒落た男あり。傳これと同窓の誼は校の內外と隔りてからも絕えず、折ふしは行き通ひして居たりけるが、浪人が許に自ら浪奴と名乘れるこれもいづれ素直ならぬ變物の食客ありて、齡はまだ二十三四ながら三四千の財產を十代にはたいて仕舞ふて、出來ぬより惡所の足蹈みも今はせねど堅氣になつて稼がう料簡も無く、蕩樂の功能には書物にも無い雜事ばかり澤山記臆え居て小器用な智慧に富み、一寸した穿ちを云ふ其代り面倒な事に遇へば風雅の二字に逃げ込み、悲しい時は閑靜と胡魔化し、意外な目を見れば天意測るべからずと茶を濁して、憤發するとも無く心配することも無く、褒めて云へば富貴に汲々たらず貧賤に戚々たらずなれど、惡く云へば姓は平氣、名は平左衞門、綽號はのんこのしやあつく坊、戒名は蛙面潑水居士とでも云はるべき男、其癖惡氣は毫も無く卑しき行ひも露爲さゞる隨分可笑しき善人あり。主人の浪人とは兄弟でも親類でも無く知り合つた中でも無けれど不圖尋ね來て、それよりずる〳〵べつたりに置たでも無く賴んだでも無く食客となりて一つ鍋のもの啄き合ふ中となりし由なるが、主人無妻なれば浪奴いつしか山の神の職務をも取りて會計萬端取賄ふ代り山の神の威權も自ら取りて、今夜は鰻を奢りましたと吾が身代をこなすやうに澄ましきつて我儘をする時もあるには宿六一驚を叱することと度々なりと主人が自ら打明けて話せしを傳は嘗て聞きて面白く

る も道理なり。

傳再び東京に出で此度は少しく躰裁よき下宿住居せしが、頓て果して某省試補に任ぜられければ、早速此事を故郷なる父母の許に云ひ送りけるに引返して任官祝着に思ふ由の父の書面と共に三百圓の銀行爲替到達なし、豫ての話しの如く家を構ふる料にせよ。大低これにて足るべけれど不足にもならば猶云ひ越せとの那處までも厚き慈愛の賜、意外にも疾く手に入りぬ。傳が小さき目前だけの理想は成就すべき運びに至りぬ。今はたゞ其の理想をば事實となして現はすべき手續きを考へて行ひ遂くべきばかりの一段と詮じつめぬ。

人に表面あり裏面あるは戀より初まるものなるが、傳が家を構ふる表面は父に云ひたる如くなれど、世馴れぬものも人に忍ぶことは打出さで伏せ置く習ひ。裏面には家を構へて後、晴れて吾が妻に乞ひ受けたしと望まんとおもふ意中の人の何處かに在るよりの準備。さてこそ急に爲さでも濟むべき事を爲さんとせしなりとは程經て他に知られけるが、當時は誰れも心づかず。たゞ傳と親しくせる小説家一人のほかは孰も皆學校卒業して一人前の男となりし嬉しさに威張りたさから下宿住居を厭ひて生家の貧しからず自由の成るまゝ一戸を張りしとのみ許し合ひて看過しける。

大學卒業したところで官員にならう所存も無く地方の學校の敎員に採用されやう望も無ければ肩書貰はうためばかりに菱餅帽子金色釦鈕の生活も褒めたことならずと中途より退學して、天下の浪人

思ふ通りに遣つて見て早く官員になつて吳れ。茂助も無論異論は無いは。然しまだまあ出京の話しは早からう、一月二月遊んで行つても遲くは無い。むゝ、左樣か。成程、成程、汝の望むやうな官には同じ卒業したものも爲りたがるか。成程それでは先廻りして口を取られて仕舞ても成らぬ譯だ。よし乃公が承知した。呑み込んだ、金のことなら何樣でも仕て遣るから思ふ存分に遣つて退けて早くえらい官員になつて吳れ。其中乃公も東京見物に出て汝の家へ尋ねて行かう。たゞ汝が藝妓だの娼妓だのといふ馬鹿なものにかゝつて不品行になつて吳れさへせねば乃公は何樣にか悅んで居る。何でも東京には、麝香くさい、ぴらしやらとした碌で無いものが多いと聞て居るが成るべく左樣いふものと見たら近寄らずに居て吳れ。乃公の案じるのはそればかりだ。といふ時何時の間にか入り來り居し母は其尾に忽ち付いて、東京で竈を持つと云ふが下女は悧發なのが有るにしても女房が無くては錠の無い土藏。茂助何日ぞやの柳村の彼の話しを仕て見ては、と云ひ出づるを父は打消して、默らつしやい。今一二年して傳が立派な官員になつたら此樣な田舍の不束の娘を嫁に貰はうより百倍もまさつた東京の別嬪で學問のしやんと出來た身分ある人の女を貰へやう。慌てゝ女房を持つたり持たせたりするは津輕地方の惡い風だと去年の夏吾家で宿をして遣つた演說遣ひが云つたでは無いか。第一柳村の彼の話しのは色は白いが鼻がちよぼ〳〵で乃公の氣に入らぬから傳の女房なんどに何樣して仕て遣るもの歟、と吾が見自慢の老の氣質。これでは若いのが上見ぬ鷲の高く止まりたか

出世の道も無く、折角の學問も役立てる時無く終りませうなれば、甚た本意にござりませぬ。成るか成らぬは運として再び東京に出て官途に就き、未來に大きなる幸運をも摑みましたい願ひなれば、内々手蔓も求め置きましたに、大凡何樣にかなる筈でござりまする、然し最初からは當節の事ゆゑ十分なる官等を得る譯にはどうでなりませぬが一年一年半立てば屹度參事官には漕ぎつけられる一躰の定めでござりまする。それから先は器量次第　何の樣にもなりませうなれど其時までの間は地位ばかり低く無くて俸給なんどは車錢にも足りぬ位。隨分交際にも體面にも學生とは違つてそれ相應の事も仕ませねばなりませず、下宿屋住居も見苦し過ぎるやうな譯でもござりますれば、何樣か少時の内御扶助を願ひまする。追つては東京に自力をもつて好い家屋敷を構へまして見物に御上りなさる時の御住居にも致す覺悟でござりまするが少時は書生一人車夫一人下女一人といふ生活を仕て居やう考へでござりまする。然しそれもこれも任官と定まつた上で入用の事。左樣なるまでは下宿に居つて、運動の結果のあらはれました其時御知らせ申しませうなれば何卒其節は一戸を構へられまするやう宜敷御計らひ下さりませ。と、おとなしく云ひ出づれば父は異議なく、應、それはもう先度の手紙で一切呑み込んで居るほどに改めて云ふことも無い。何の汝ほど學問して田舍に燻ぶつてなるものか。朝夕傍に居て貰ひたいは山々だが此地には茂助も居ることなり汝は東京で立派な官員になつて木末の家を一軒殖して呉れゝば此上も無い。乃公の悦びは誰にも悦びだ。よいとも〳〵

今日は其甲斐あつて斯樣な有り難いとは無い。と父は目下に言ふやら目上に言ふやら分らぬほど言葉づかひもしどろもどろ、膝を乘り出したり手をついたり頭を下げたりして悅べば、母は傍から嘗めぬばかりに、ろして、立派な男になつて、おゝ、おゝ、口髭も薄いながら郡長樣のやうに生へやつたの、傳や一寸立つて見せて呉れ、向ふむいて見せて呉れ。坐つて見せて呉れ。立派な、立派な。丈も高くなりやつた、肩の幅もつきやつた。東京へ出て行つた時の後影が今だに眼について殘つて居るので今も其通りのやうに思ふて居たが、其時はまだ撫で肩で、丈も漸く妾ほどであつたに引替へてもう悉皆大人になつて仕舞ふたの。これでは何處へ出ても負けはすまい。やれ〳〵有り難い。明日は早速一所に御寺參りして御先祖樣へ妾が手柄を御吹聽申しませう。と悅びぬ。

其日は水入らず內輪だけの悅びの宴。其次の日は村內の知つたもの招いての大酒宴。其又次の日は二里三里離れたところの親類より郡長殿戶長殿まで招待して大々酒宴と芽出度き席のみ續きけるが人々の眼を驚かし耳を聳えしめしは、日比尊大の郡長殿が其日は常のやうにのさばらで何事も控へ目に傳との話しも一目置いて叮嚀にせしことにて、郡長殿さへ彼樣にあしらはれたところを見れば傳殿は大したものになられたに相違あるまい、と其宴過ぎての後の噂近鄕近村に響き渡りぬ。

十日ばかりの間は彼處に招かれ此處に呼ばれて傳は目まぐるしきほど筵席に臨みしが、或夜父と兄とに打向ひ、東京に居りまする中も手紙をもつて申上げし通り、此まゝ此地に止まりましては詰り

增して數多くなりしが、愈々卒業の式濟まば其日の宴會果てゝの翌朝一番の滊車で父母兄親類竹馬の友等が悅ぶ顏見に一旦歸省せんとの手筈通り、飾る錦の衣は着ねど昔時なら御墨付同樣の免狀を行李にして、意氣揚々と山の隧道溪の鐵橋幾百里の霞の中を衝き拔け、青森に着きて其處よりは馬車、馬車より今度は人力車と次第〳〵に吾が家に近づく嬉しさ溢るゝ獨り笑、芽出度き無事の面をば幾年ぶりにて幼馴染の山に見すれば山も笑ひ水に對くれば水和やかに流るゝ如く思ひ做さるゝ心よさ、記憶ある稻荷のむかしながらに赤きもゆかしく、鎭守の森の鳩の聲もなつかしさを呼ぶかと聞けば聞かれて、昨日の夢の中の鄉に今日現ながら入る思ひ、恍然をして自己から自己が悠々たる感に醉ふ間に槻交りに樅松の常磐木一むら欝々と聳えて見ゆるは吾が家を圍めるものぞと心も躍り立つ時路傍に居たる農男の今しも桑圃の中より出で來しと見ゆるが、木末の若旦那が歸つて御座つたと野良聲高く叫びながらに鍬を投げ出し、車より先へ駈け拔けて、既白壁の隱見する吾が家さして飛び行くは我が歸りたるを知らせんと親切氣ですることとなるべきが、思へば聲に記憶あり、あゝ、あれはたしか治助と云つた男であつた。左樣〳〵、治助だ、あれは治助だ。

父母の悅びは云ふまでも無し。絕えて久しき對面の嬉しさの上に大學校卒業といふ名譽を荷ふて歸り來りしことなれば淚も溢さぬばかり。鬼が島から桃太郞の戻つて來たを昔噺の爺と媼とが見し如く、やれ〳〵長年勉强を能く仕遂げて戻つて吳れた。長い間御苦勞でござりましたが今日といふ

の三棟四棟ある家に生れて、次男とは云へ冷飯食ひとばかり罵られても育たず、學問よりほかに屈詫無く身幹伸ひて、出京後は私立公立の寄宿舍の玻璃窓の中からのみ世間といふものを見て居たりしなれば、有躰を云へば餘り人情とかいふものも世態とか云ふものも知らず。勿論少からぬ同窓の友の中には種々の男もあれば幾何か揉まれたり和られたり、また休暇には外出して胸合ふ友と下谷あたりの疊の酒臭き小料理屋で、二十錢の貰ひを生命にして行く女を相手にむだ口のやり合ひをしながら飲んだり、或は大勢の宴會に藝妓といふものゝ如才無き口のきゝぶり身のこなしぶりを耳に眼にしたりは仕たれど、まだ無益錢も我から捨てず、痛い目を他から見せられもせぬだけ、思ひ遣りも屆かねば先繰りもするに至らず。落語家の說敎と小說の行く立と新聞の雜報とで何時と無く大づもりに世間は斯樣したものと內々覺束なくも悟つて居る位のところなれば、それでも當人は一廉解つたものゝつもりにて、誰が小說の何の人物は彼の性質から推すときは彼樣した行爲は無い筈ぢやの、彼の戀愛の成り立たぬは畢竟あの主人公が不發性の傲慢を包藏して居るからぢやのと、耆婆が病人ても視たやうに判釋批評を逞くして好い氣にはなり居るも、同じ仲間ながら落第の一二度も仕たことある男には、フン御坊樣がと頭から馬鹿にされける。
禽の籠を出でたる狗の鎖を解かれたる學生の學校を跳り脫けたる、いづれ同し思ひの悅びに手も自ら舞ひ心もおやしく勇み騷立つべし。傳卒業近くなりては故鄕への文通故鄕よりの文通も日比に

如何なるものにも仕込次第でなりぬべし、良い師匠取りさせて學問させて見てはと出入の醫者にて人相も少し心得た由の孝庵といへるが追從口かは知らず切りに說きしより、子を褒められて嬉しからず思はんやうは無き親心、繁藏大きに其氣になつて不足なき身代の入費を厭はず、小學校に傳の通ふ中より漢學英學の敎師を家に客分として招き置き、朝暮學問三昧で育てけるに、性來の好きより物の進みも早く、十六七には師をも甘がるやうになりて一村に肩を比べんとするものも無くなりぬ。こゝまで漕ぎつけたれば江戸へ出しても其甲斐無くは有るまじと、旦那寺の和尚が上京するに托して東京へ出し、十數年前投機商法にかゝりて失敗の末仕馴れしところに居たゝまれず草深き田舍に流浪して來りたるものゝ病に惱みしを吾が家で暫時食客に置き遣りしが今は堅氣になりて商館の番頭となり築地に住めるに萬事の監督を賴み、學校を擇み方向を定むることなどは惣じ指揮もよかるまじければ當人の勝手に任かせ置きけるに、傳は生意氣の料簡も出さず、中學より大學と順を追ふて、寄宿舍の賄ひ飯に不足も云はず、何年かを無事に送り過ごし、これといふ不品行もせず落第の耻辱も取らず、試驗の度に一級一級、何時も中央位の席順で及第し、遂に今年は六號文字で大學卒業式の記事の末に我が名の揭げられし新聞紙を眼にする運びに會ひたるなり。

傳今年二十六歲、貧家に生長して夙くより自活の苦みをせしものならば老成といふまでにはあらずも既幾分か世の中の酸も辛きも覺えつべき年齡なれども、北の涯の豪家といふまでならざるも土藏

きつた事、極りきつた事の頂上、二十一日母鷄に抱かれた鷄卵がひよ〳〵と鳴き出すまでの話し、たゞ聖代の德澤の溫氣を受けて罪の無い結構な御坊樣が學士といふものに孵化つたばかりなり。されど當人は中々〳〵以て左樣は思はず、やつとの事で卵殼を飛び出したばかりなを、朝比奈が門破りしたほどの手柄に心得、早速名頭に冠り着た寸五分幅の大名刺、オホンと出して頭を擡ぐるを扨も其後の見參の禮式に定め玉ふやうな調子の有り勝なるを數々拜見に及ぶより口惡き世上の男ども何日と無く然る方樣には新學士といふ稱呼をば負はせ奉りて、慢氣の强い彼の挨拶も未だ高利貸に揉まれ足らぬ新學士の事なれば無理も無いと笑つて赦すやうになりしが、こゝにこれも新學士と世間から云はれずには居られざる大學を出しばかりの男あり。親は奥州津輕在の某村にて其むかし帶刀も許されたる家の事とて木末繁藏といふ其名をいへば住居の周圍の一二里が間では草刈る童子にも大盡と知られたもの、跡取りの兄は茂助とて親讓りの堅い一方、足袋穿いて疊の上にばかり坐つて居ても濟むべき身で鍬柄執つて日を暮らさねば身躰の遣り所に困ると云ひ、樂みといへば植付前一度收入濟ませて一度朶華の溫泉に湯治して眞の養生するばかり、無比無類の挊ぎ手にて村内若い衆の手本になるほどのものなるが、其弟に生れし傳といふは即ち今度芽出度も學業成就して木末の家に光りを添へし天晴のもの、兄には似つかず幼少より野山に出でゝ遊び駈けるを好まで兎角讀みつ書きつすることをのみ好きければ、此の兒は泥土踏んて一生は終るまじき樣子、行く〳〵は

新學士

人通り少き路の傍にさへ電氣燈瓦斯燈の光り輝き渡れる御代の有り難さには、嚢の螢窓の雪と悲しい苦しい目をせざるも、志さへあれば學問修行はたやすきことにて、よしんば柳陰に車を置きて毛布に夜風をいとひながら蹴込に腰をやすむるものも落ち散りたる引札拾ふてなりと一字二字は覺えらるべく、それを手繰つて倦まずんば大低の書物には假名付きのが得らるゝ重寶の世界とて、むづかしいものも覗いて覗けぬことは無く、段々と進みさへせば頓てはどんな學者にもならるべし、加之印刷の術の進みてからは古人が百日二百日かゝつて寫したるものも二子縞一反買ふた剩錢で需めらるゝほど書を得るにも譯無ければ、今古書生の幸不幸は比較にも何にもなるものならず。これでも無師無錢を口實にして學問成就せずといふものあらば、よくよくの腑拔け膓無しの大痴呆、懷手して居て井戸の底から出られぬを喞つやうな懶惰漢なるべし。まして親兄弟から毎月書留郵便の厄介に預り、普通學からそれ〴〵の專門學までの學校は蜘蛛の巣のやうに順序立つて聯り、道々の眞師巨匠は蒼穹の星の數ほど多き大日本帝國の首都東京といふ結構なところに居て、手に筆墨、眼に縱行横行の文字よりほかは執るもの看るものゝ心配いらずに何年の光陰を送るものが首尾よく大學乃至は他の專門學校卒業して世間並の男兒一匹となり上がるは、三五十五のあたりまへの數、知れ

御喩しに小生が就かば貴卿は貴卿が主のために泰山の上に土壤を添ふるの功を成したまふならん。小生は小生の主に對して何を爲したるに當り候はん。一身の利害は仰せまでも無く存じて候が、大六は利害を夢の中の痛さ痒さほどにも存ぜねば、御喩しには就き難く候。明日にも死を賜はらば死せんばかり、左なくば飽までながらへて、時を俟ち此處を逃れ出て、唯一人にても甲斐へ歸りて、やがて陣頭に貴卿等が主人家康の面を見んのみ。ハヽヽ、若さることも候はゞ其時こそは富永殿、快く貴卿と戰ひて今日の爭ひの埒明けん。まさかに酒井殿も其時は老婆くさう留だてもせられまいほどに。と云ひさしてまた高く笑ひぬ。

其二十

其後武田勢また出てゝ勝頼高天神の後詰せし時、猶殺されてありたりし笠井大六、如何にして其を知りたりしや、番卒あまたに傷を負はせて方廣寺を逃れ出てしかば、人々驚きて其始末の不審き由を家康に訴へけるに、家康も少時打案ぜしが、忽ち笑ひを面に浮めて、好いは、捨て置け、大事無い。甲斐の見窄け追付け皆此家康が手ちやに足ぢやに。と云ひ終つて常の如くなりし。

祿をもては貴卿が意を引かんこと固より成るまじけれど、噂にも大概は知り給はん、主人が人となり、心ざま、士に對しての情の濃さ、武道に寄する志の誠さなんどは聊貴卿が愛を得るに足るものなしとせんや。男兒の世に經る榮枯究通いづれにしても不可は無けれど、主其人にあらざれば、盲者に名畫のあつかはれ、聾に笙笛のあつかはれて、棄てられざれば媢り破され果てんが如くに、心の色も人に見られず、吹かれなば出さん淸き音も立つる時無く終らんこと、誰か惜むに足らずといふべき。三河ノ人となり玉はゞ我等及ばざるものどもながら貴卿と長く睦まじく丹心をもて相交はり、互に助け互に競ひて、今麻の如く亂れたる天下に手を執り聲掛けあふて面白く橫行もせんものと思ふに、貴卿は其を如何に思ひ給ふや、をかしからんとも思はれずや。小生も愚なれど邪意は持たず、富永殿も見らるゝ如く竹を破つたる氣質の仁なり、大久保、本多を首として成瀨菅沼大須賀小栗、我等が朋輩三河の者は、智慮の足る足らず經驗の有る有らぬこそはあれ一人として腹ぎたなく厭はしき奸人も無ければ日頃皆交際美はしく、樂しく語らひて過ごし候が、貴卿三河にとゞまりたまはゞ、上我が主人の悅びはもとより申すまでも無し、下は我等一同良き朋友得たるを深く悅び申さんに、如何で我が言葉には就きたまはずや。空しく可惜しき器量をいだきて日蔭の谷の埋木の身の成る果の由無き目を見んとせらるゝは妙ならず、貴卿のために口惜きことゝ存じて候。と情をも理をも交ぜて說けば、大六から〳〵と打笑ひて、御喩しは有り難く存じ候。さりながら貴卿の

す上は包まず申すべし。まことは小生も心の底には貴卿を小太郎貞春が仇と知りてより眼近きところに其儘在らすが胸悪くて、我君へ窃に訴訟申し、貴卿を得んと欲せしが、御仁慈深き我君は俘虜を得んなどとは以ての外と御氣色あしくて御許し無く候ひし。さりとて心に貴卿の上を思ひ放しは爲し得ざれば、これなる老僧に頼み置きて日々貴下の樣子を告げしめ、また何なりと少にても貴下の上に事あらば急ぎて使を馳せ我に知らせよと云ひ置きし下の心は貴卿若し此地を逃れんなど仕玉はゞ好き機會として小太郎が恨を霽らさんと構へしなり。さればこそ今宵も富永氏と女性一人との貴下を訪ひしといふことを早く知り得しなれ。富永氏は小太郎につき今申せし如き事情あれば、さてはと猜するところあり、且又一人の女性といふも玉枝殿ならんと猜せしまゝ、是は餘處に仕難し、如何樣の事の湧かんも知るべからず、と早速に馳せつけしに、此寺に來て後、委細を承はりては小生とても玉枝殿同樣露いさゝか貴卿を怨まん心無く、なか〱懐しく存ずるなり。富永殿も今は既別意全く無く、表立つて云はゞ兎に角のこと、室中の人誰も皆朋友を視るごとくに貴卿をば心には思ひ居るに、あはれ笠井殿、願はくは貴卿みづから聊か枉げて三河の人となり玉ひ、裏表とも長く我等が朋友となりては玉はらずや。我等が主人は所領も少く世に幅も猶無きものながら、心老實にして胸ひろく、思ひ遣り深くして下を使ふに苟にも暴威をもつてせず、且は人を觀ること疎からねば、仕ふるに心樂みの有る主なり。國を擧げて貴卿に與ふるとも掌ほどの小き地なれば、俸

れば、あれよ〳〵と弱き心のあだに揉まるゝばかりなる時、室外に刀槍觸れて鳴る音、夥しき人の足音して、やがて明るき火の急に射し來ると見る間にがらり〳〵と、板戸引退けて現れ出でしは豫て警護に付けられし鎧はふたる武士二三十名、手にせし炬火の光にそれと、明らかに知るゝ眞先立ちし酒井忠次聲高く、やあ狼籍なり、止まれ富永。笠井大六も刀收めよ。それ分け隔てよ、ものども、と烈しき下知にばら〳〵と前後左右より二人にかゝれば、大六は人々の爲すがまゝに刀を引きしが肯かぬ富永、汝等邪魔すな、退けや其處退け默つてすつ込んで見て居よ酒井、必ず彼奴が血を見ん、と怒號の聲を猶絶たず。忠次みづから孫太夫が腕を捉つて辛くも制しつ、聞分け無し富永、誰か貴卿に笠井を擊てと頼みしぞや。公の浮虜に私の刄傷、我君に對し不埒なり、といふ間に今宵の警護の頭人多門傳十郎等折重なりて漸く刀を手より奪ひ、強て鎮まらすれば、膨れ顏して、どつかと坐りつ、猶大六が方を睨みてきり〳〵と齒を咬み絞りぬ。

其十九

沈香かすかに薫じて短檠の燈のしづかに瞬く方丈の室中、眉白く垂れて背の屈まりたる老僧に茶を點ぜしめて打語らう笠井大六酒井忠次、富永孫太夫柳玉枝、たゞ僅に今一刻前の有樣には全く打てかへて、言葉さへいと長閑なる中にも忠次滿面に笑を浮めて笠井に對ひ、如是打解けて御物語り致

の思ひは妾思ひ忘れて候なり。たゞ我弟あはれと思して御經讀誦の砌にも弟が後世の菩提のため御廻向の唱題など爲させ玉はゞ嬉しく存じ候べし。と言々眞實の涙に沈む聲さへ重く云ひ終るを、待ちに待ち兼ねし孫太夫。やあ云ひ甲斐無き玉枝殿かな。さすがは女性の、婦人の仁。弟を撃たせ置きて何たることぞや。ゑせ仁慈立て要無き業。敵の甘言に載せられて小太郎貞春が姉らしくも無き弱腰の振舞苦々しい。ゑゝ苦々しい見苦しい。其處退き玉へ、退き玉へ。よし〳〵御身は髯面めを、ゆるし棄つるとも我は許さず。此儘には我が一分立たず、幸の長髯引攫んで汝が首を逆に提げ、酒井殿に見せいては合點ならぬは。大六立上つて勝負せよ。と躍り上つて足踏み鳴らす、大六眼を刮と開きて、はて、物解りせぬ土下司奴め。玉枝殿にこそ撃たれもすべけれ。それさへ明日は死に定まりしと思ひ込みたりし上の事。今の玉枝殿が言葉により殺さるゝに定まりしにもあらずと知りては、飽まで生きやうずと思ふ大六、汝等如きに生命呉れうや。當の敵が我をゆるすに、自己が友への義理立てばかりに、しやしやり出て我を打たんとか。フ、、フ、、フ、、憎くは無い奴ながら左樣ほざかれては、勝負せぬとも云はれまい。さあ大六が首ほしくば汝が手柄に取つて見よ。殊勝に持て來し此一刀の刄味の試しとならぬがよい哩と。きらり引拔いて片膝立つ。何をと喝して山をも劈く勢、鋭く切り下す。制めんとせし玉枝は後れて、既眼の前には勇士と勇士が免さず退かず切り結ぶ劍光線亂れて風の曉に竹の葉落つる水霜の朝日に射られて輝く如く、割つて入らんに隙間も無け

んと思ひ浮めば、何とは無しに醉へるが如く、茫然として我を失し、急に我が眼の前なりし燈火明きが眼に眩きを覺えて後方へ一ト歩二タ歩、理由無く退りて手に持ちし兵器もぽろり取落しぬ。是は怪しからず、玉枝殿、怯り玉ひしか云甲斐無し、富永孫太夫これにあり。臆せず擊つて取り玉はずや。と勵ます富永が大聲を制して坐につく玉枝は靜に、怯れたりやとは御情無し。弟の仇に打對ひて女なればとて怯れうことの有る筈は無けれど妾は既、笠井殿を怨まん心無し。思へば笠井殿はなか〳〵に怨まうにも怨まれぬ情有る仁。小太郎が仇と取るべくもなし。弟も泉下に怨みはせて今日の今までの御心入れを却つて懷かしう思ひても居らめ。我君より御生命召し玉ふとも、今は一度は遮つて申し宥めんとまで思ふ笠井殿をば、公の御沙汰も測りがたきに私に擊たんなどゝは思ひも寄らず。弟は悲しくも自己が心を果して戰死なしたるにて、柳の家には遺憾なれど、死ぬるも生くるも人の身は人の心の爲すならで神の知ろしめして爲せたまふか、拙き心には窺ひ難く、ひとり不思議の神々しき天運か將定命か、世に因縁といふもの歟の露より脆き自他の頭の上に見えず聞えず朧氣ながら在るやうなるを身に覺えて、心の底に寒氣立ち、哀しき口惜しき憾めしさの淚の外の名の無き淚が何かは知らず催さるゝ。あゝ此の大なる畏ろしき天運とやらいふものゝ下に力無く立つ敢果無き人と人との其間に、語れば見えぬ心も通ひ見れば譬無き思も知らるゝ此の人と人との其間に、怨みも怍みも仇敵も眞實在るものにて候べきかや。笠井殿よ今は安くおぼせ。貴卿を擊たんと

と定まらば今宵貴卿等に頭を授けんも一ト入をかし。織田が手に死なで三河に死し、公の手に死なで貴卿等に生命與ふるも約束事か。作りし業の報を取らす天の配劑も味あり。いで我終らん、騷ぎ玉ふな。ハヽヽ、酒も盡きたり、一滴も無し。此盃中の本來空に我も今歸る時節到來、天地に遺す念も無く、ぐわらりと夜明けの天空同樣、御經讀誦の功力により無邊際なる身とならんに、刀劍と名のつくばかりの一尺二尺の鐵の缺片がたゞ一片の雲に等しき假現の此身を二タ段三段になさんとするをば何か拒まん。いざ玉枝殿擊ち玉へ。弟御の敵擊ち玉へ、快く刄を受け申さん。女性に對抗は要も無し、たゞ此儘に擊たれんに疾く〳〵刄を加へ玉へ。と泰然として頸を伸ばせば、仔細を聞きしに心も鈍りて遲疑する玉枝は言葉も無し。此態を見ていらだつ富永、玉枝殿何をか憚り玉ふ、得知れぬ物語に耳假したまふな。眼前御弟の仇を置きて躊躇ひ玉ふ法やある。と破鐘聲して吼え立つるに、心誘はれてまた燃え立つ玉枝は我知らず立上りさま弟の仇と呼びかけて、あはや突かまく振り冠れる逆手に把りし小刀の鋒輝く端より目を張つて敵を見下せば、小山の如き大の男の毛ほども動がず自若とてし聊か仰げる覺悟の態、面は冴えてみづ〳〵と赤子の如く紅色に、屹と結べる一字の口元緊りたれとも憎氣ならず、胸に濁りの無きも知らるゝ眼のすゞしさ額の明るさ、笑も含めるかと見ゆるばかりの頰の邊より顎かけて鬚髯美しう生ひ出でたる天晴立派の大丈夫振り、那處に惡まんところも無きに、まことや此人我が小太郎を敵ながら可憐と優しくも思ひて吳れしやら

なし、雨打ち風吹くに委せ置きて名を埋まんも心無し。嗚呼如何にせんと心迷ひて少時は其處を去り得ざりしが、圖らず思案し得たりければ小刀を取りて腰に帶び、髻を切取つて少年が着たりし戰袍の袖に包み、我が懷にして其處を去り、其時得たる上方勢の袖印なんどに敵營へ紛れ入る便宜の出來しかば、いよ〳〵紛れ入らんとする前に、事の大概姓名とも一ト筆彼の戰袍に記し置きて、我打たるゝとも我が遺骸を檢むるものあらば柳小大郎宗春といふもの如是〳〵にして終りたりといふこと自然知るゝやうになし置きて、扨明智が陣には入りたりしなり。其後の事は云ふまでも無し。血族も無きにあらざれば仄になりと小太郎死せしと、三河の者の耳に傳へてよと少年が云ひしを仇にせぬ我が志、捕虜となりて當家へ來し時、直に此仔細を云はゞ云ふべきなりしなるが、身に受くべき怨を輕くして三河の人を悅ばすことと云ふやうにも當りてをかしからねば、いよ〳〵死に決められし時、委細を語らんと思ひ居しなり。しかるに今夜貴卿等二人の來りしは其小大郎が爲とは知らず、我は我が生命逼りしと思ふばかりに語り出でしに、思ひがけ無く玉枝殿とやらんは我が手にかけたりし少年が姉にて御坐せしよ。小刀は既手に入れ玉ひぬ。これ見玉へ、これこそ我が手にかゝりし人の遺髮を戰袍の袖に包みて我が持ち居れるものなれ、と取り出す品は僞ならず、玉枝が眼には記憶ある袖もなか〳〵涙を誘へば、流石女の黯然として言葉も出し得ず咽ばんとす。大六これには眼もかけず。語らんとせし委細は語りぬ。はや死するとも憾なし。とてもかくても死すべき身

道にては三河ものぞ敵ながら見堪へある振舞すと山縣殿の噂されし由を聞きたることありしが、羨ましや三河の士は、額に角の入るか入らぬに如是潔き料簡立つる少年を、子として弟として又朋友として持つとか。あはれ此少年の心掛の半分なりとも我が甲州の某々等の有ちて耻といふものを知り呉れんには、此戰も斯様はならで濟みしならんに、口のみ賢くてまさかの時には生命を惜む所存の故に大事をも過つて今日の如くなりしかと思へば情無し。嗚呼、これにつけ、かれにつけ、敵と味方との二つの名は抑誰が設けし無慙のものぞや。味方が味方にも定まればこそ、敵が憎きにも決定まればこそ。さるに敵味方といふばかりの慘酷き名が下す嚴命は氷の山野を包み果てゝ草木に一分の動きをも許さぬ如く一人の心の自由を全く鎖して、味方といへば松を枯らす藤蔓をも獨変らず、敵と名のつけば見どころも無き蔦の實に來る連雀の風情あるにも鏃を向けでは濟ませぬに定まれることぞ憂き。我は助けんと思ひしも唯敵といひ味方といふ名が此少年と我との間に斷つこと難き鏈となりて在りしより、一方は特に生をすてゝ一歩も去らず死を肯てしつ、一方は空しく心に負く。定まれる業果の免れ難きといふは是等のことならんが、惜みて今更甲斐も無く、悔みてかへることにもあらねど、同じくは我が勝軍の砌にもあらば、此少年の健氣にも天晴男らしかりし始終を述べて其遺骸を禮をもて送り屆けもすべきが、我は火を取る夏蟲の、それより危き場に望まんと思へる矢先なれは、それも叶はず。さりながら天晴若者を此儘にして敵味方も知れざる野外の骨と

息も絶え〴〵になりながら猶も放さず追ひかくる。斬つて捨てんは心に忍びず、行かんとすれば控制めらる。時を過ごさんは我が利益ならぬに悶え困ずる折も折、端武者ながらも物具わざやかに、上方勢と一ト目に知るゝが三人ばかり來かゝりて、逃げまどひせし甲州者よ、膾にして呉れう、と叫きわひつゝ鎗刀もて一齊に我を目がけて烈しく蒐るに、今は逃げもならず別れもならず、立木を背後の楯に取りて嚴しく防ぎ鬪ひしが、多人を相手のことなれば、たゞさへ眼も忙しく手も忙しきを、中にも傷けじ殺さじとおもふ若者は眞先立つて人一倍手痛く我に當るに、我が働きの不自由さ。手は意に任せず意は手に任せず、幾度か敢なく敵の刄にかゝらんとせしが危くも身を保ちて爭ふ中、前なる一人を一刀にと思ひて斜に薙ぎたる途端、それと目ざせしは躰を退きたるに刄は空を斬りて生憎も身を側めて進みたる小太郎を、ハッと思ふも早遲く、我がものながら我刀の切味却つて恨めしきまで切下げたり。ゑい仕損じたるか口惜し、今は何をか憚からんと暴れに暴れて立處に二人を倒し、殘る一人の逃げ行くを背より割りつけて仕舞ひしが、血の灑る刀を手にして立戻り見れば、無殘にも我が拙さより可惜助けんと思ひたりし姿ばかりか心も花の匂ひ深かりし少年を、地に横へて見る悲しさ。かくまで潔き性質ならずば、我が助けんと云ひし時、助かりて生命ながらふべきに、飽まで磨きし武士の、意氣地の冴に身を果して、きたなくも敵の情の蔭に生きつ復び世の春に會はんともせざりしは年こそ若けれ大人羞かしき心掛、味方が原の戰の後、武道に眞の勵み強きは海

ん、我生きば貴卿を得こそゆるさじ。兩死はありとも共に生くることはなか〳〵あるべからず。所詮死活の分ち取り、如是なりても助からんと三河のものが、思ふかと思すかや心外なり。死に定めたる我なれば、生かして恥辱を取らせんとせで、とく〳〵心よき死を得させ給へ。力及ばず組敷かれし今、死は唯一つの譽なり。貴卿に授くるは燃やせば灰となるほどのもの、頭一つ、代へて得るは柳が家累代の前人を辱めざる名なり、はた我が本懷滿足の悅びなり。何條これを棄て彼を取る卑怯の振舞を敢てせん。貴卿強てゆるし棄て玉はゞ我はふたゝび薙刀とつて貴卿をゆるさじと追ひかけ見參せでは濟ますまじきに、疾く我が頭召し玉へ。同じく敵の手に死するにも貴卿の如き人の手にかゝるは特に悅ばし。殘る血族もあるなれど、願ふは柳小太郎といふもの戰死なしたりとばかりを三河に仄にも知らせたまはんとのみなり。これよりほかに心も惹かれず、いざ我が頭召し玉へ。と思ひつめたる一徹氣、云ひ解かんに暇もあらねば、兎角を云はず引起して突放しさま我は南を指して走りしに、また薙刀を拾ひ取りて、那處にか行く笠井大六、南へ走りて何とする、我が眼を今更逃れうとや、と飛鳥の如く追ひ來りて眞實に我を放さぬ顏つき。我が振り顧りしを見るよりも、眼前の敵をおめ〳〵と我猶生きて見逃さうや、潔く勝負せよと罵つて、みす〳〵我には及ばざるを知りつゝ死を決めて打て蒐る。一且ゆるさんと思ひしものを斬らんも心外と、好きほどにあしらふて、やかて戰ひ捨てんと身を退けば、獨追ひかけて斬りかくる。又少時あしらふて突と退けば、氣

呉れうず。名乘れ、赤顔奴。疾く我を突け、殺せ漢子。聞かさうず、聞け。三河にさるものありたりしと知られし柳貞春が一人子の小太郎宗春、此月此日戰死するなりと烈しく叫んで觀念の眼を閉ぢたる健氣さ。惡びれざるにいぢらしさも一トしほ增して、且はそゞろに微笑まるゝまで男兒に嬉しき心入れ、明かに名を聞かされては我も默りてあるべくもなく、おゝ、潔き言かな、我が名聞きたくば名乘つて呉れん。甲州には人の數にも入らねど笠井大六高英とぞいふ。名は如是名乘つたれど汝は殺さむ。今の言葉が胸に響いて、嬉しかつた哩、嬉しい哩。天晴好い男になりやろうず。頓て其時面をあはさば此首遣ろうか其首貰はうか、心地よく新に勝負せう、さらばぢや、これまでぢや、好う生立つて面に我が如鬢髯生ふるまで月日の功を積んで呉れい。立派な好漢となるが好い。其時まで此世を在るか無きかもとより知れざる我身ながら、生きて汝の噂聞かんも面白かるべく、我まづ死して彼世より見んもいよ〳〵をかしかるべし。人の見ば疑ひ咎めん、いざ我は我が指すかたへ行かんに汝は汝が思ふところへ行け、と僞ならぬ心を示して引起さんとすれば、覺悟の眼をむつと開きて我が面をしけ〳〵見詰めしが、起さんとする我が手を拂ひ、優しき御言葉を承はるかな。我が私の出陣を諭し止められし懷しの人の言葉を聞くおもひして、修羅の心も碎け散り、貴卿を恨みのかたわれの敵とも覺えぬ心地ぞする。さもあらばあれ刄先に情を見る眼も持たぬに定まりたる兵器と兵器とを一旦交へて譯無く赦す法も無く又赦さるゝ法もなし。我擊たれなば貴卿生き

加ふるを得べき。と、突かまくなせし手をとゞめて、如何に若者。汝が齢の猶若くて膽の太きが殊勝さに、取るべき掌中の生命ながら、赦して呉るゝは、殺さぬは。力及ばずと諦めて復び我が前に立たんとすな。生ひ先長きを要も無く殺さんが慾然にて如是云ふなれば、我が功名にして此場の態を後日に語り出づるやうのことも無かるべき間我名も云はじ、汝が名もまた聞かんとせじ、我は汝を見しことなく、汝は我を見しこと無き分にして別るればこれまでなり、構へて我に抵抗ふな。北なり南なり行きたき方へ疾く自由に去れ、と云ひかけしが、美濃尾張の勢に紛れ入りて信長めを撃たんといふ意を懐けるなれば、若此若者の上方勢にてあらんには助けぬかた却つて好かるべし、可憫にはあれど是非も無し、今云ひたる言葉を今反古にすとも修羅道の習ひ已む能はず、殺して大事の破れを防ぐに若くこと無しと心付きて、手にせし鎧刀は猶捨てず、さりながら汝は上方勢か三州勢か此點だけ聞かん、と言葉を足せば、其時の小年の答への立派さ、今思ひ出しても心地の好いほど、九死の塲合にありながら、些も怯れぬ聲高く、やあ忌々しき痴言聞かすな。突かば疾く突け、斬らば疾く斬れ。組んで敷いたるに遠慮の要らうや。元は喪ふとも敵の仁慈に活きやうとする未練は持たず。無念なれど力及ばずして如是組み敷かれし上は生命はもとより汝の功名に呉れて遣る、相見ぬ分にして別れうごとき卑怯の振舞を誰かする。我が瞻る大空、汝が瞰る地、天地に對して羞かしき思ひを忍びて男兒が活かうや。名も聞かじとは無禮過ぎたり、冥土の土産に汝が名も聞いて

に語り置かむと思ふばかりのことなるに、玉枝殿とやらんも氣を靜めて少時聞き玉へと云ひかけて、孫太夫が大概合點せし樣子を見るより膝の下なる玉枝を援け起し座につかしめ、二人が眼ざし猶鋭くて各自白刃をそばめ持てるを心にも旣かけざる如く、まづ〳〵貴卿等急き玉ふな。身を動かさいで飮みし冷酒が劍の舞の御馳走にて一時にほつかりと發してまゐつた。あゝ大分よい心持、久々にて娑婆の外の春風を吸ふやうな此快さ。どりや今一つ賜はろうか、酒を蹴返し玉はざりしはハ、有り難し。と獨酌みて獨で仰ぐ傍若無人。さて聞き玉へ。今物語り申せし如くに、小生は彼の若武者を、一旦取つて抑へはせしが、兵器は旣に奪り盡しぬ、膂力は畏るゝに足らぬほどなり、跳ね返さんと腕き暴るゝを隻腕に制して餘りあれば、心寛に我が帶びたる鎧通しを引き拔きて今や首かゝんと刄を咽喉に、ほと〳〵觸るゝべかりし時、近々と敵を熟く視れば、湯に洗はれし白玉の露乾ぬごとく氣の勵みに蒸されてしつとり香汗を持つ面飽まで潔らに白く、引結びたる唇の花燃ゆるほど鮮紅に、眉打煙りて匂ひ深く、無念と睜る眼の中の光り優しく水照りして、あはれ手暴く觸らんも痛はしきほどの美少年なり。敵味方といふ名こそあれ、怨恨も實は無きものを、如是いたい氣な美しき人の生命をむざ〳〵と我が手に縮めんも情無し。女子にしても相應しかるべきかゝる孱弱き身をもちて、戰場に臨むさへあるに、我が如き荒くれ男にも取つて蒐りしほらしさ。可愛や齡もまだ足らぬに末頼もしき不敵の性根、助けたりとて仔細無きを、何として酷くも刄をば雪なす肌に

る間あらねば弓手を伸ばして、虚空に丁と受くる大六。陣刀手にせしを見るよりさてはと、逸りに逸りし玉枝は躍つて、本懐此時と切かくる。太刀の鐺をかへして拂ふ。鷲にむかへる鶺鴒の身は輕けれど心猛く踏み込み〳〵切り立つる。大磐石と坐したるまゝ動ぎもせいであひしらふ。一念の鋒刄いと鋭く肩先發矢と斬り削りしが、斬らせし刹那に腕首緊乎と執る大六が大力に引伏せられて力無く、車輪を欺く翠葉の陰に一朶の雪白く咲きし蓮花のくねるが如くに刀持つ手を膝の下へとあはれ忽地引敷かれし此時彼時疾しや遲しや野牛の吼ゆるばかりに喊いて、横薙に薙ぐ孫太夫が太刀風に唸りつゝ笠井が頸に恰も臨めば、大六かつしと左手に持つたる大刀の欛もて受け止め、堂屋も震ひ動く聲して、待て。ゑい、奴、扱いたか、乃公が。見い、あわてものめ、不覺者め。手向ひせぬをも遮に無に斬るが、三河の武士には譽れとなるか。云ふことあり、聞け、やい富永。笠井大六が恐ろしくば太刀振りかぶつてなりと聞け。但し譯も無く斬つてかゝらば膝の下なる此女手間隙いらせず踏み殺さうか、踏み殺させて汝は濟まうか。太刀ひけ。ひかぬか。さあ引かぬか。壓し殺さうか。さあ、何とした。アッハ、ハ、ゝ、ゝ。いやなに富永孫太夫殿。女を質にして虎口を少時逃れんとする如き大六でもない。うろたへまい騷ぐまいと云ふまでぢや。逃げも隱れもせぬ大六。殺すにしても言ふだけのことを言はせて可からずや。我が物語り半にして我死なば誰か貴卿等が惜しと思ふ小太郎が上を能く知らん。如是言はんとするが我が爲にすることにてもあればこそ。亡き人のため

うか、死なうか汝。いづれなりとも疾く擇み、疾く覺悟して返答せよ。と云ふ尾について孫太夫も一ト足踏み出す居合腰。此世の名殘に聞けや大六。酒井忠次に預けられし柳小太郎を汝に打たせて一分立たぬ此孫太夫。我君の御怒には觸るゝとも、身を投げ出すと料簡して、今宵來し上は免さぬ汝。汝が談話を釣り出さうと思ひし壺に我から落ちて、柳が最期を語りしは汝が天命盡つくるところ、然無くとも生甲斐は無き汝ぢや。さあ其生命其方から吳るゝか、此方から貰はうか。酒井は汝を賜はらんとの存念を得貫かいで樂まず、玉枝殿は柳が家の血のこゝに斷えんを哭かるゝ。中に立つてたゞは居られぬ此孫太夫。汝に深き憎みは無けれど、骨肉の親を亡ひしと、托孤の義をば空にせしとの、歎きと恨とを眼に見ては、汝を引裂いて我も共に腹かき破り死にたき程。知らずば是非なきも汝が持ちし其小刀より、傷い氣な彼小太郎を酷らしくも手に掛しを汝と知つては、是に非に安穩には居らせ難し。兎にも角にも此孫太夫が一人あればとて容し難き汝。まして玉枝殿が存念もあり、到底今宵は過さじ。汝が我から死なうや又、此孫太夫が手に掛うや。敵對せうなら差詰め我が手で先荒こなしを仕て吳う。俘虜なればとて手無き汝を殺さんとはせじ、死にたからずば此一ト振の陣刀汝に貸して吳れうに、見ん事生きたくば生きて見よ。孫太夫を打つて生きて見よ。さあ何とした、怯れたか、返答せよと罵りながら、突と立上りて、座側に置たる陣刀一つを足蹴に蹴つくる、途端に自己は手にせし刀の鯉口早くもくつろぐる。面上望んで蹴られし大刀の勢猛に飛び來るを避く

ば打物棄てゝ我も組みしが、もとより我が力を勞するほどの手強きものといふにはあらず。されば苦も無く捻ぢ伏せしに、思ひのほかの捷敏き働き、下より小刀をもて我を突きたり。今少し眼遲くば喉輪下を、刺さるべきを危くも避け得はしたれど、見たまふ如く此の頸の左方に一條負ひたる傷は當時の我が不覺の痕跡なり。シテ何とせしと尋ねらるゝか。さればなり小生驚く同時に、敵の手を捉らへて左足に引敷き、彼が拳を踏み開きて、放さじとする小刀をこじ離しさま遙に蹴退け、と、云ふ時二の句を續がせもあへず、春の野に立つ山雉の岩も裂くべき聲ふり絞り、其小刀はこゝに在り、白檀の欄、赤木の鞘、見覺えあるべしと叫びさまに、燈下の女奮然として懷中深く忍ばせし小刀抽き出す、鞘投げ付くる、青蛇躍つて水を出でたる劒の光を大六が眉間に近く逼つて視す。思ひもかけざりしことなれば、流石一度は愕きしが、勇士のならひか聲も立てず、眼を張つて屹と睨返せば、片膝立てたる女は烈しく武者ぶるひして匂ひ深き千筋の髮も搖らがせつ、月下の露と照る眸、曉の梨花と白き面を紅光動く燈の前に怖れ氣も無く露して、汝がために終りを取りし弟が恨みの籠れる刄、定めしそれと見知りつらん。自ら妾が前に語りたりし汝が功名は此方の恨み、柳小太郎宗春が唯一人の姉の玉枝とは、妾がことなりと知らざるや、弟の仇敵、たゞは置かじ。此小刀を贈らんとて此宵此處には來りしぞ。さあ此刄に汝自ら汝が命を縮めうか、但し厭とならば是非に及ばず、人一人並の念の力は女の腕にも寓らいてや。さあ、汝の頸の血を釁つて呉れうか。さあ死なせ

るべきに、北へ／＼と美濃勢三河勢の趨せし間を、よくも南へ行かれしことかな。途中定めし幾人か咎めしものを斬り捨てなんど仕玉ひしならんに、とてもの事なれば語り玉へ。といふ。如何にも御不審は御道理なり。事々しく云はんは烏滸なれど、明日は既無かるべき身なり、御尋問につけて其處に一つ、死に定まらば云ひ置かんと豫て思ひしこともあれば、今御耳に入れ置かん。死を誓ひたる叔父の肥後に訣れたる後のこととなりし、獨戰場の光景を見つゝ今申せしごとく心を決めて、織田が陣中に紛れ入らんと志しはせしが、織田勢の袖印、或は笠肩の徽章を得んとせしに、卑怯なる上方勢は柵の中を餘り出ざるにや追ひ來るもの無し、三人四人に出遇はゞ慥に誰が隊と知りし上、斬り殺して徽號を奪ひ、我か身につけんと思ひし甲斐もなきに樂まず、三河勢が本陣の背後を拔けて上方勢が本陣目がけんと有海より山間を迷ひ行く折しも。ナニ八東穗への路かと云はるゝか。詳しく土地の名は知らぬども有海の原より東に當り、山の根方に近く寄り、東西の路に南北の路の突き當りて撞木になりたるところを折れて行く時大木の陰よりして現れ出でたる若武者一人、逃ぐるなと呼んで斬つてかゝる。見れば賢しげにいでたちて薙刀を揮ひ烈しく逼る。二タ刀三刀合はせしが、敵は齡若く力も足らねば、疾くも彼の兵器をば捲き落したるに、彼猶屈せず、腰刀を拔きてふたゝびかゝる。面倒なりと、鬪ひを戀ふ心無き我は棄て去らんとすれば、執念く追ひかくる。是非無く返しあはせて刀をもまた打落せしに、兩手を擴げて組みつく健氣さ。一刀に斬らんも流石なれ

君を助け兵を強くして、ふたゝび信長家康を信玄公御時の如くならしむるを得ん。自ら顧るに退いて勢を變ずるの計畫立てん大才は我に無きところ。人に劣らじと思ふものは匹夫の志、蟷螂の勇なり。さばれ顆に兩腕の力一身の膽あり、進んでは萬が一に機を轉じ運を奪ふことの成らざらんや。明々白々に長篠の仕場居は信長に踏み取られ、圍みし城は卷きほぐし、將士あまた打たせて引揚げたる敵味方の勝敗は瞭然たれど、此戰鬪の勝敗を世に明らかに知らせては、賴もしき高坂殿の早瀨の流れに動がぬ巖と遺り居たまへばとて、御家の向後萬般のことも計らひ難くなりぬべし。阿修羅が日を攫めば閻浮の黑白、忽地そこに亡ぶなり、いで我臂を伸べて信長めが生命を攫み碎かうず、勝敗共に揉み消さうず。身は當下に膾とならばなれ、相應に多く刄の味も味ふて參り候と地獄で叔父の肥後に遇はゞ告げんもなかく面晴れなり、と思ひ定めて候ひしなり。然るに天運といふもの、世にあることにも候や、十が九までは手の中に入りたりし彼の信長を、殆ど獲んとして逸せしのみか、我が手の刀の鍔元より思ひもかけず折れたるより、斬り死も仕得ず砍られ死も仕得いで、おめおめと繩にかゝりし末、如是生面をさらし、貴卿等にも御世話かくること羞かしく候。と云ひ終りて既干したりし酒盃を孫太夫に屬すれば、孫太夫は少し受けて直にまた大六に擬しつ、例の如く木にても雕りたらんやうの顏して、御思し立の御存意は大概合點致し候。さてまた、それより如何にして明智殿の陣中には紛れ入り玉ひしぞ。貴卿に取りては川の緣も林の中も敵のみなりしな

も小生が當時の胸の中、如何なりしかは御推量に難からざることに候はん。戰闘は既半過ぎて日に蒸されたる血の香の、音もせで吹く生暖き風に煽られ匂ふ中に頭を回して佇みつ、遙に望めば三々五々と算を亂せし死屍の横たふ野末に敵軍の、旗あざやかに猶殘れるが疲れ果てたる眼を射る塲合。土の人形にもあらず木の人形にもあらぬ以上は、大六自己を敗軍の一卒能く爲す無き男ぞと假令思へばとて、念ひも無くたゞあり得べきや。云はゞ自ら是とするに似たれど、敵にも友あり味方にも他人あり、貴卿の言葉我が胸に響けるところあれば、貴卿を敵の中の友として、此心を此處に語らんず。なみ〳〵と一盃賜はり候へ。死前に聊快く談る、かゝる折にこそ酒は飲め。ハヽヽ、醉を借りて憂を消すと嘲み玉ふな。我が所爲を卑怯と云ひ玉ひしよの、如何にも我が所行は卑かりし。我か所爲をきたなしと云ひ玉ひしよの、如何にも我が所爲はきたなかりし。さりながら、卑怯と云ふもきたなしと云ふも、多寡の知れたる言葉のあや、人の舌のへら〳〵と動くぢやまで。此耳假さぬ、聽くに足らぬ、浮世の沙汰が男兒の踏み出す足を障ふるに蜘蛛の圍だけの力もあるか覺束なしと、初より惡く云はるゝを合點して自分は自分が爲んと思ふところを憚りなく遣つて退けしに、遣り損じての其果が此態、此姿、其御言葉。ハヽヽ、をかしいほどの事に候。つもりても見たまへ、彼の如く深傷負ひたる我が甲軍の一人として年若く身分低き大六が生きて殘りたればとて、何の術あつてか

ずとも、せざる風儀にて候や。何とも我等には合點ゆかず。一應此儀も伺ひたし。と詰る如くに嚴しく云ひて、答へ如何にと打護る眼には何時しか稜角を立てたり。卑怯と罵られ、きたなしと云ひ下されても泰然として眉もあげざりしが、大六今は屹として、こは聞き捨になり難し。甲州にては慚づべきことをも恥辱とせざるかのやう云はれしが、人の國を辱しめんとの御意よりか、さらずば愚なる御言葉に候。髮の踵に生ふる國もあるまじきに、那處にか同じ人間の是非の全く顚倒せん。卑怯とも未錬とも我が上を云はゞ云ひ玉へ、我一人の故をもて甲州全躰を彼に斯と沙汰せられんは心外なり。もとより我が所爲、我が視ても善盡し美盡せりとはせざることなり。されども人各々力量の及ぶところあり及ばざるところあり。我が力量の及ぶ分の、中に於て君のために盡さんに、何の忌むべきところのあらん。卑劣とも云へ愚とも云へ、此心だに鄙しからずば、他の是非善惡は烈火の上の纎塵片羽なり、云ふに足らんや。そも〳〵此度の戰爭は云はうやう爲き味方の敗軍、勝敗は天なりと云はば云ふべきも、諦めんに諦め難き無慙の仕誼にて、老將を打たせ勇卒を打たせ、武田の御家あつて以來未だ曾て取らざりし不覺をば一時に取りし口惜さ。敵は舌頭硬き信長なり、二倍三倍に仕て誇らんは定なり、さては重寶の御旗の日月の先も薄くなりて、新羅の御末の威德も地に墜ち、信玄公が御一代御苦心ありて築き立て玉ひし好きこと、悉く一戰の過失より崩れ潰れて不祥此上無きことゝならんかと思へば、思へば無念さ骨に徹し、死なじと思ふに死にも遂げたく、死なんとお

ぬ孫太夫は、如何にも、今日の昨日は貴卿も我を容さず逃がさゞりし敵なりし、今の後また我が貴卿を安穏には置かぬ敵とならんも未だ知るべからざることなれど、現在だけは刃を手にして睨め下しあふといふにもあらず。其は先づ措きて先刻に貴卿が云ひ遺さんことあるやうに云はれしは如何の事なりや。弓矢取る身は相み互、貴卿が生命の明日に盡きんといふにはあらねど、聞き置きて及ぶべき筋ならば力も聊致すべく思ふ間語り置き玉ふて然るべし。さて又貴卿に尋ねたきは此度の戦闘の始より終まで貴卿は如何なることを為して、如何なる所存より織田公が血を見んと竟には企てられしかといふこととの一部始終に候。戦闘の勝敗は整々堂々兩陣相當つて力を較べ智を角べて決すべきに定まつたるに、明智殿が雑卒と身を扮して、勝閧の式行はるゝ際に忽然織田殿に斬つてかゝりは仕玉ひしや。頃日の御所作を承はり今又こゝに見參して御擧動をも見、御物語をも伺ふに、なか〳〵忌み賤しむべき骨柄の仁とは無躾ながら露存せぬが、何とて貴卿ほどの武夫の、野武士山賊も為すことを慚づる卑怯の手段を取られしぞ。戦亂の世の習ひ、奸謀毒計為さゞることなきが一天下の今日の状とは申せ、敵の一卒と身を倣して人の身に譬へば脇腹の如きところに潜み、急に立つて不意を襲はんとは、音無く這ひ寄りて毒牙をば人の肉の中に遺さんとする蝮蛇より甚しきことならずや。卑怯とや云はん、きたなしとや云はん。醜しとも醜きことの頂上、男兒らしからざるにも程のあり、恥辱を知らざるにも程のあるべきに、甲州にては然る擧動を恥辱とも男兒らしから

ころ、知らば包まむまでも無し。兎まれ先づ〱重ね玉へ。して快く興じ玉ひて、語らんと思へることも語り遺してと、今云ひ玉ひしが、抑如何なることを語らんと思ひ玉へるか知らざれど、何事にもあれ語り玉へ。聞き人には我等が成り申さん。と云へば大六また一杯を乾し終へしまゝ少時憮然と髯を撫でつゝ、いづくまでも明かさじとせらるゝや。さほど包まるゝには及ぶまじきに。と云ひかけしが忽地笑顔に復り、富永殿、さだめて可笑く覺されつらむ。疾かれ遲かれ死に定まれるに、我が上をのみ諄々問ひしは愚なることにて候ひし。ハヽハヽ、いよ〱明日は大六が眼に娑婆の暎る終の日に決定つたるに疑無し。念の殘るべき世にもあらず、心の惹かるゝ妻子も無し。今宵は頓て醒めむ夢の一ト歩前なる此岸なるべし。明日の夜は既彼岸に一ト歩かけて立つならんが、ふり反り觀ば貴卿等と藍若の中に敵味方一燈の光を共に用ゐて一味の酒を共に汲む此光景の、生死を界ふ雲か水かの上に遙に浮びて如何にをかしかるらん。今一献賜はり候へ。御酌かたじけ無く候。あら心地よき酒の味かな。氷猶溫きまで冷かにして齒牙動ぎ出づる如くぞ覺ゆる。噂に聞きし智多の清酒とかに候ならん。おもへば一樹の下に休息ひ、一河の水をひとしく掬ぶも他生の縁と承はるに、陣頭には眥をさき、聲を怒らせ、睨め合ひ罵り合ひし中にて、人も多きに特に貴卿等御二方と如是見ゆるは、淺からぬ前世の縁あればにや、何と無く御なつかしく、不思議の心地の致し候。と眼に見ゆるまで衷情をば面にあらはして歎じて云ふを、實に道理と聞きてか聞かでか色も動かさ

敵には却つてなるべし。近き頃又は遠き前の戰物語、御功名の次第なんどにても御物語りありて打寛ぎつ、心ゆくやうにして召上り玉へ。御相手となれる幸には妾も面白き御物語を承はり置きて心にとめ長く語りつぎ申したし。と朱唇を洩れて出づるには似氣なきほどの爽なる言葉をもつて只管に興を發させ物憂さを忘れしめんとするに似たり。笑ひを含みて聞き居し大六。受けたる一盃を飲み乾して、折角賜はりしものなれば、辭退せで充分に頂戴せん。酒は至極の好物なり、失禮なる申し條ながら尊前の二位は勇士なり美人なり、一期の快事これには過ぎず。さりながら富永殿、玉枝殿、とてもの事に大六が身の如何にせらるべく定まりしかを、何故打明けては告げ玉はざるや、知らざる風を粧ひ玉ふは御人躰には似合はず候。大事無きことならば明かし玉へ。今が今此頭顱召さるゝとても、もとより覺悟の小生なれば、まさかに酒を味ふことの成らずなるまで怯れもすまじ。いゝや隱し玉ふな、猜して候、今日小生が生命の詮議の定まりたることゝ存ずるなり。それ故特に世の思出にせよかしの酒肴を御二方して下し賜はりしに相違あらじ。何とて明日は斬らるべしとか死を賜はるべしとは仰せられぬぞ。蟠り無くそれと明かして聞かせられんには、驚き騷がざるは勿論のこと、却つてなか〳〵快く飲みて、酒の興も一トしほ我から機勢を打たせ、豫て語らんと思へることとも語り遺して、小氣味よく此夜を醉はんものを、如何に我が推量は違ひ候はじ。遠慮は要なし、明かし玉へ。と云ふを抑へて、御推量は御身の自由ながら、其は全く我等が知らぬと

胸に疊める彼の事をも云ひ遺せし後死に就かん。さるにても婦女なんどを連れ來させしは家康が意いとをかし、酒に一トさしの舞なりとも下物とせよかしの思はくなるか。平家の公達にもあらぬものを、死前の一夜縱絕代の美人に逢ばとても此大六は何とかせん。ハヽヽ、笑ふに堪へたる哉、と覺悟あれば今更微塵も動かぬ髙英笑を含むで待てば、のしり〳〵と音させて納所を先立て入り來る男、身長は尋常なれど骨太にして橫ひろがりの岩疊作り、顎張り鼻仰いて色黑ければたゞさへ醜きを何時の功名の折にか受けし右の眼の上に眉かけての疵の痕、人品あがらねど勇士とは見ゆ、次いで入り來しは二十四五の色白く淸らなる女とは一ト眼に見しが、能くも見ぬ中男はむづと我が前近く坐を占むれば、女は斜に距たりて燈臺の影に坐りたり。更に姓名を通じ初對面の口誼を終へて後孫太夫は一應大六が不運を慰め、これも一時彼も一時、やがてまた我等が武田家に俘となりて今の貴殿の如くならんも知るべからずなどゝ云ふ間に雛僧共の酒肴を運び出づれは孫太夫先づ一盞を試みて、さて大六大盃を屬しつゝ、いや笠井殿。何獻なりと心のまに〳〵まゐり玉へ。日頃鬱陶しく御座すべきに、責めて今宵は酒なりと過し玉ひて氣を養はれよ。快く過ごされなば我等も滿足の至りなり、不束なる者どもながら、御相手は充分仕らん。と云ふ傍より女もまた、妾は御奥に仕へ居る玉枝と申すものに候。富永殿は御覧の如く武骨一遍の仁なれば、作り飾りの世辭とか申すことこそ拙く御座せ、御胸に裏表無き武士氣質、此方の御身内にも數無き心涼しき方なれば、御話

みか隙あらば逃れ出でゝ高天神あたりの城に入るか甲州領へ舞ひ戻りて生命あらん限り手痛き働きせんと思へど、内を寛にするには引替へ外の護りは士卒日夜に交替して一寸の隙なき嚴重の手配り、逃れんにも身に翼無く手に兵器無ければ叶ひ難く、逃れ損じて此寺を離るゝか離れざるに、雜卒等が亂刀の下に死なんには、屍の上に不覺悟なりとの譏を來すべく、復ふたゝび捕へられんには、人がましからぬ未錬者との評は辭するに由無からんを、見込無きに輕々しく躁ぐべくもあらず。自然殺さるゝに定まらば、これまでなり、是非あるべからず、西方淨土も望みにあらねば、心靜かに北に向つて吾邦に辭し、腹搔割いて終らんのみ。それまでは寺院に在りて御佛の御前に起き臥しするこそ幸なれ、故御屋形は申すに及ばず、潔く戰死したりと聞く我が叔父はじめ馬塲殿土屋殿山縣殿内藤殿等諸將士の修羅の苦を除き聊にても證菩提の縁をなさんため御經讀誦をなすべしと思ひ定めてか晝夜六度の讀經禮讃に餘念無き笠井大六、今しも如是等人、則能信解、汝當爲說、妙法華經と譬諭品を誦し終りて、小机に置き直したる經卷に額づくところへ雛僧出で來て、御城中より、御徒然を慰めまゐらせんとて富永孫太夫殿御一人の女性と共に見えられ候。御酒肴も御齎しあり候へば直に御披露申すべし、先づ御會ひあるべし。と云ひて退く。さては愈我が心の奪ひ難きに詮無くて如何にするかは知れざれど那の道近々に死に就かしむる其爲特に慰めの使なんどに酒肴を持たせて、優しくも差し越したりと見えたり。もとより期したるところなれば快く自ら慰みて、

ど、さりとては口惜し、眼と鼻との間に小太郎が當の仇を置きながら、安穩にあらせんこと、泉下にて我を云甲斐なく頼み甲斐無しと思ふべし。日頃兄顔せし手前も羞かしきに、一應の仰せなればとて此儘に在らんこと忍び難し、如何にもして、放し打なり、踏込んで斬るなりの御許しを得んと再び口を開かんとせしが、躊躇の間に機は奪はれたり。のつと身を伸して屹度此方を睨まへながら低き聲音に、のう、忠次。無理は汝も云ひ度かるまい、と壓へかけての主君が語に、頓には戻き云ふべくも無く、またも少時躊躇ふところへ、許せぬ、是非無い、思ひ棄てえ。と重ねて嚴しく云ひ切られて、斷岸千尺攀ぢ難く、取り付くべきところも無くなりぬ。

其十八

竹徑奧邃ふして螢力無く流るゝ方廣寺の庭の夜の靜かさ。月の猶出でぬに風情こそ見はれね、四はれの身には樹梢黑くて星空少し明るきも中々に感多き眺めなるべし。忘れんとして忘られぬ長篠の戰後に爲し事敗れて、其時より此處に籠め置かるゝ身、萬般ゆたかに接待はるゝは惡くもあらねど、折節は成瀨正一をもて降參を勸めらるゝに心よからず。恩義の枷をかけて此我を鷹犬にせん家康めが自分勝手の細工の五月蠅さ。到底降るべき我ならねば終には自殺を許しもするか或は引出して斬るべきに、なまじ生かし置かるゝが忌々し。如是なればとて遮つて死にたしとは中々思はぬの

聞きしや其後面をあはせし時、彼小刀の柄には刻鏤深く綾杉を彫り鞘には中程だけ標目をあらはし、我ながら面白く致したり、と云ひしことありしも想ひ出さるゝ今眼前の柄の綾杉鞘の標目。さては小太郎を彼奴の打つて、此の小刀の眼につきたるまゝ剝ぎ取つて佩びたるに定まつたりと、悟ると同時に堪へぬ恨みの胸を衝いて起れば、成瀨殿に暇告ぐるもそこ〳〵、立歸つて熟々考へしが、私に手を下しもならず、申さば上を算るに似て恐れ多けれど畢竟ずるに御處刑あるべきことならば、願ふても彼を賜はりて忠次が存分に致し度、御許し下さらば獨忠次のみならで、小太郎は申すに及ばず彼が父の貞春までも、泉下にて如何ばかりか有り難く存すべし。衆人の中にて是の如き我儘を願はんは御叱りの無きまでも餘り辨へ無きに似たりと差扣へ候て、恐れながら夜陰に如是伺ひ奉り候が、何卒御聞屆け下されたく幾重にも願ひ奉る。と誠心籠めて訴ふるに家康面を少し皺めて、頼みの筋は能く心得た。餘の者ならば叱りもせんが、忠次、汝が此のやうなこと云ひ出して予を困らしては、予もたゞ困るのみでは無いか。理解して居ろうがの、知つて居ろうがの、あのしたゝかのいたづらものを、汝が存分にさするほどならば、明智が存分にもさせねばならず、織田殿が存分には猶の事させねばならぬ筈ぢや哩。思ひ捨てえ。許し兼ぬる。其代り汝が責めてもの心ゆかしに其小刀とやらをば汝に與るゝ。明日は成瀨に命じ置かう。それにて堪へよ。との本意なき命なり。道理も無きにあらぬ主君の言なり、且はやさしく云ひ玉はるものを、押返して強ひんやうは無けれ

なる御待遇にて、心をわらため當家に仕へよと我君みづからの御諭し一度、成瀬殿が御意を傳へしは數度に及びたれど、それにも頑固にて今に應ぜず。心憎き彼の鬚男、此末何とか仕玉はん御覺召のほども恐察し難くは候へど、御當家に從はんことを願はざる以上は、何日まで彼の如くわらせも仕玉ふまじく存ず。如何に器量を惜み玉へばとて放ち遣りも、仕玉ふまじく存ず。所詮は織田公への御手前、此方にて美しく終らせ玉ふか、彼方にて慘らしく終らせ玉ふか、二つの中を出でずと存じ候に、あはれ願くは忠次に彼男をば賜はり候はずや。此後の功名の御褒美に代へても、持ちたる御感の御證文に代へても若許し玉はるべくは、此願ひ平に貫かせ玉はり度、深く思ひ入つて御願申すにて候。此四五日の身の閑暇に、柳が墓に參りての後、成瀬殿を訪ひて快よくさま〲の物語致せし折柄、圖らず方廣寺なる囚人の上の談を詳しく承はり候ところ、召し捕られし當時大六は、手にせし大刀の其他に二口の小刀を腰にせし由を聞き、然れば取紀しの命を受けられしにより笠井が持物等も預かり居らるべきに、內々の一覽を許し玉へと强ひ乞ひて一覽いたせしに其一ト揃ひは中身こそ無名の業物なれ裝飾も色無き品なるに引代へ、赤木の刳り鞘、白檀の欄、一つは異樣の好みの品、はて珍らしきものなるが見しとわるやうの心地することそ不審けれ、と取りつ置きつする中打驚きしは、思ひも寄らざりしが思へば是は柳小太郎が嘗て我に唯一度示せしことのわりし品。當時此拵へ面白けれど柄に手がゝり無きは滑り易くて聊か好ましからざるべしと敎へし我言を道理と

君ながら分けて今宵は機嫌よげに見ゆれば、云はゞ今こそと先づ悦びて、夜分の推参恐れ入り奉るに御目通りを許させ玉ふのみならず御懇の御言葉有り難く候。と恩を謝しつ。して予に頼まむとは何事か、との問を得て後、されば候。申し上げなば不埒なりとの御叱りを蒙らんも測り難く候へど何卒成るべくは御許可を得たく、有り躰に申し述べ候は、柳が上より連りての義。既に宗春が私の出陣を遂げ戰死致せし上につきては、小生は御咎めを被らで却つて富永孫太夫殿御不興を被りしに御裁斷は終りたりとは申せ小生も竊に御覺召に違ひたる罪輕からずと恐懼仕り居らぬにもあらず候に今又箇樣の御訴訟申し上げ候はんは、甚だ面皮厚きを我から責むる次第に候が、忍ぶに忍びかねて御願ひ申し候。ほかにもこれ無く、長篠の戰爭濟みて總軍御勝鬨の式ありし時、明智殿組内に紛れ込み居て織田殿に切つて掛りしも事成らで召捕られたる笠井大六を、信長公の御震怒の餘りの御憎しみは罪無き明智殿の上にまで及びて事態妙ならずなりし砌、甲州には長く居りて彼地の將士の委細を知れる成瀨と申すも我が臣下にはあり　旁以て吟味取糺しの便もあれば處刑の逆磔も牛裂も後の事として預け玉へ如何なる所存如何なる手段よりかゝる事爲しか詳しく糺して參らすべし、と信長公に仰せありて此方へ引取り玉ひしが、其後御調べはたゞ一二度ありしばかりにて口を噤める彼奴の意地强さに果敢〱しき事の運びにも至らず。然るに御仁慈深き御覺召より、それよりは詮議も捨て置き玉ひて、御城外の方廣寺に差置かせられ、警護のものこそ付けさせらるれ優渥

さるべしと力無げに答へて持て來たりし首級を包める戰袍の袖の結びめ解かんとすれば、彼の薙刀を見しばかりに胸既塞がりし孫太夫、堪へずやありけん面を背向けて、たッ忠次殿に云ひ譯無い、忞、忞、仕舞ふたは、何とせうず。と云ひさま突と立ち上りぬ。

其十七

長篠の戰爭全く濟みて織田德川の勝と定まり、甲州方が勇武の名も氷柱の折れし如く忽ちにして繕ひやう無くなりし後、家康は美濃に行き、あるは又二俁の城攻するなど、引續きて忙しく働きしが、五月も暮れて六月の末のことなり、日頃の勞苦も此四五日の在城の氣安さに稍忘れて、夏は何より好き樂みは浴後の風の味、湯帷子たゞ一つ着て奧殿の端居に築山の彼方より出づべき月の心當を何氣無く侍女の四五人相手に見遣る折しも、御願の筋ありて酒井左衞門の尉御目見願ひ度き由を申し出でられ、先刻より表に控へ居られまするが、如何取計ひ申しませうやと、是も名ある勇士が戰死したる後に遺りし兒と覺しき年僅に十二三ばかりなるが申せば、何、忠次が今頃にか、むゝ好し、予が出て會ふまでも無い、此處へ呼べとの輕き答へ。侍女等が遠慮して退り出づると驪てに小僮に誘はれて入り來りし忠次、遙距りて室の一端に平伏す。おゝ忠次かうちくつろげよ。予も此姿ぢや、無禮は許す。端近に來よ。好い風を與るは。と隔無き言葉に滿面の笑まで添へて、優しきは常の主

んとして動くべきにもあらず、如何はせんと思慮せしが、やむを得ず部下の眼疾く心利きたるもの十餘人を擇みて尋ね索めに出せしに、いづれも効無く歸り來りて、遂に似たる影のそれぞとおもはるゝも見ずといふ。戰鬪の次第〳〵に一方より終るに連れ、若くは事無く宗春を吾が卒の將て歸るやとの望みの薄らぎ行くに連れ、忌々しさのみ胸に充ち來て、立つも安からず坐るも安からぬ物思ひに悶ゆる中にも、猶一人我が日頃より眼をかけ置ける男の未だ歸り來ざるに一縷の望みを辛く繋ぎて、彼若好き報を齎すこともやと心待に待ちたりしが、待てども待てども歸り來らず。一時二時あまり經て漸く歸り來れるに待ち兼ねし身の手をあげ招き寄せて、其云ふところを聞けば、仰せを受けしより、如何にもして彼の柳殿を見出さんと、石座須長信樂八束穗の山寄りより河添ひの東岸西岸とも殘る隈無く見廻りたれど、それぞと覺しき影も無きに、手を空しく歸らんも心無しと存じ、猶遠く有海大海あたりを詳く尋ね巡りしところ、有海の廣場より八束穗の方へと折るゝ路の傍に、老いたる椎の大木の一本にて枝繁く葉の濃に蔭さへ小暗きほどなるありて、其根方に小き薙刀の横はりあるに眼惹かれ、立寄り見れば小太郎殿の、如何なる敵に打取られ玉ひしや唯一刀に斬り殺され玉ひし屍骸に出あひぬ。情無く口惜くは見まゐらせたれど、時後れて敵にも會はねば是非無くも、御薙刀御首級を携へて歸り候。色變り玉へど萬人にすぐれ玉ひし御容貌、特に見覺えある薙刀もありしことなれば、よも見過ちは致すまじと存じ候が疑がはしきは髻の切りあるばかり。猶御覽下

け出てゝ思ふまゝに働かんか。酒井殿は既那方か知らず。事と望みと違ひ果てゝ、かくなる上は是も非もなし。獨り立ちて甲州勢に駈け入らんに、何の成らぬといふことあるべき。兎ても角ても無きに定めし身なり生命なれば憚るところも忌むところも今更あるべからず。走らんか抜け出でんか。と思ひ逸るも一度二度にはあらざりしが、賴まれし上はと油斷せざる孫太夫が眼も掠め難く、一つは流石に遮つては他の心を無にせんも猶忍びかぬるところあるに、其夜は思ひ止まりたり。されど明けての日の卯の上刻より、兩軍の旗鼓相逼りて、馬は鬣を振つて高く嘶き、人は眦を立てゝ肩怒らすると頓て劒戟は電光と輝き鐵砲の音は雷と震ふに及びては、我知らず氣は上づり心逸り、戰鬪やうやく酣なる時、自然と我が意を果すに好き機會の出でしに我から我を制せん所存全く無くなり、孫太夫への義理、忠次への情合も想ひ浮むる隙無く、只管敵をもとめ北ぐるを追ひて、遙に富永が隊を離れぬ。酒井が依賴を合點したる富永は死急ぎする小太郎が心中を充分に見て取りて、おろそかならず意を注け居しが、流石の若者も忠次が言へるところ我が諭したるところに服したるやうにて、意を飜したるらしく見えたるに、看護らん氣のゆるみたる折と云ひ戰鬪の我隊にも忙しかりし折なりければ、眼も及ばず心も屆かで、柳が見えずなりしを露知らず、戰鬪やゝ緩やかになりて彼はと心づきたる時は既小太郎が影も無く聲も無し。こは濟まぬことと仕たり、公のことにはあらざれど賴まれ甲斐無きものになりて我安閑とあるべくもあらず、さりとて妄に柳が行衞を尋ね

げにける。

其十六

酒井が依頼を合點して小太郎宗春を預かりたる富永孫太夫は、たゞ朴訥の武士なれば心至りこそ深からね、誠實三昧の飾り氣無く小太郎を宥め和げて、決して功を急がずに戰鬪を觀るといふだけにて此度は枉げて過ごされよ。沙彌から長老との俚諺通り、一足飛には何事もならず、眼學問だけなと功を積みて追ひ〳〵武邊者にもなり玉へ。身躰も心掛には率ゐられて強くなり行かんが定なれば努力死急ぎなど仕玉ふな。長き前途に如何樣なる抜群の功名を建て玉ふべき御身か知れねば、必ず自ら愛み玉へと。と優しく諭せば、聞く身の耳にも其親切の通らぬにはあらず且は又兄とも賴める忠次が我を此人を托したる意の汲めぬにもあらざれど、他の心の曉らるれば曉らるゝにつけ我恨めしく、かくまで人〻に腑甲斐無く思はるゝかと無念さ增して、さら〳〵惡き情もて人〻の如是爲し呉るゝ譯にはあらずと千も諦め、萬も諦め、我と我が心を抑ふる下より、踏めども消えぬ焚き火の餘りの山風を得て復ぱつと燃え立つ如く胸の火焔のむら〳〵と起つては身も世もあられず。孫太夫が言葉も我を知らざる烏滸の凡物が愚の談義、我を辱しむるに足るばかりのものゝやうにも聞き做され、義理知らずとも人云はゞ云へ死せんには罪も無かるべきに、いで孫太夫が眼の見ぬ隈より抜

ぢや。關ふな、死損はぬ哩。おのれはおのれ。關はぬ、生損ふな。おもへば馬場殿が昨日汝れに好う生きて殘り玉へと染々と云はれしも、味ありし言葉なりしよ。オヽ、また聞え來る人馬の音、今度は十二十の數ならず確に一隊百餘りなるべし。生きむとする汝は疾く此處を去れ。あれ見よ、味方と敵とを判つて知るかや賜はりし御乘馬の、遠くも去らで流れの對岸に草を食みつゝ此方へ寄り來る。彼駒もろともに快く我は敵刄に世の埓明けむ。云はんと思ひしことも云ふたり。大六、さらばじや、好う生きよ。と云ひ捨に突と起つや鎗を反して、地に突く、流れの對岸に飛ぶ、逸げたる駒を追捉へて、ひらりと跨り徐に此方へ歩ませしは、老いても疲れても場數者の流石に輕き身の扱ひ、急かず周章てず死に赴く心の薫り現はれて視る眼さびしき横顏にも人の肌を粟立たしむべき凄愴の氣を溢らせたり。大刀を手にせしまゝ默然たりし大六は叔父を遣り過ごして後影を熟と見居たりしが、屹と思ひ得たるところありしや大音あげて、叔父上、たしかに承はりたり。大六生損ひは仕らず。必ず好う生きて生き徹し申さん。地獄に在りと聞く望鄕臺に上つて此世を御覽なれ。大六今日の勝敗を捻ぢ潰して與れいでは濟ませ申さず。快く斬り死せられい叔父貴。かすり傷一つも今は負ひたからぬ大六。ゑゝい、捨殺しにする哩、叔父貴を。御免なれ、さらば〳〵。と云ふ聲木魂に響かして此方は水の高きを辭する如くに未練無く横に逸れて、急に走り去れば彼方はまた、潮と推し來る敵の眞中に礫と飛んで走り入り、彌勒の世までの永き別れを夢と現の境ほど短き間に遂

笑を含みて物語られしぞ。大六、おのれは今聞いて何とかおもふ。我は生擒ひの一ト語を耳にせし時は奔雷頭上に落ちかゝりし思ひして、敵味方が吶喊の聲鐵砲の音も少時は全く聞えざりし。甥ながら見上げた汝なれば、かくなりての今何とかする。よも只生きて生擒ひはすまいやい。一人の力は弱くとも一人の意は天にも徹す。生きて働かん勇士が眼中、定まつたる天運なんどいふ生々しき痴物を容るべきや。天運定まらば覆すべし。天運定まらずば我が手に造らん。死に臨みては知らぬこと、生きて意の指す前には憚かるべき天も無ければ、まして、何畏るべき人の有ろうや。遣つて退くるところまでは遣りつけう、といふが生きやうずる大丈夫の踏まへ處とは汝も思はん。口惜き此の今日の戰鬪、信長づらに心を得させて、如何なる難戰にも仕場居を踏まへ、故殿以來何時にても必ず面目を保ち來りし味方が云ひ甲斐無く引揚げたるに、生きやうずといふ汝はただに、生きんがために生くるかい、生擒ひせうために生くるかい。ハヽヽ、御家が取りたる恥辱の恥辱、死なで堪へ得る好漢の好漢の、汝か、汝が生擒ひせう筈も無い。たゞ此儘に甲州方は上方者にやられて候てぬつくりと面上げ居らう筈も無い。必定勝敗を捩ぢ飜すか、但しは勝敗を兩方ともに無にするほどの案じの無くて、汝の生きやうずる筈が無い。ゑい、やい、大六、汝は年も足らず、分も低し、御屋形の御覺えの深きでも無し、此戰の後を御家の爲、おのれの力にて何とすることの成らうぞ。ハヽヽ、然すれば汝が御屋形の御後を徒に追はんとは此肥後を鈍く見て云ひしことの。肥後は肥後

は如是ても猶、只御屋形の御後を追ひさへすれば可いかと思ふや。故殿以來鍛ひに鍛ひ錬りに錬りて築き上げし武田の御家の、武名一朝に土と崩れて、此儘にせんには形も無くならんは必定と見えたる此日、死するものは知らぬこと、生きて殘るものが爲す術無しとは、此肥後は得言はすまい、これ大六郎。爲す術無くて唯生きると云ふでは汝はあるまいの。肥後が甥ぢや、肥後が甥ぢや。おのれは馬場殿にも山縣殿にも日頃親まれた肥後が甥ぢや喃。生損ひは屹度爲まい、必定爲さう術あればこそ生きて殘らうとも仕つれ。それに何ぞや譯も無げに御屋形の後を追はんとは此叔父を談るに足らずとしてか。ハ、ハ、死損ひする叔父ではないが、生損ひする汝でも無いの、鈎閑大炊が後についてのめ〳〵と退く汝でも無いの。卯の刻頃の事なりしが、高處に在りて敵味方の動勢を見居玉ひし馬場殿が、と猶語り續けんとする最中へ那處より湧きしか敵兵四五走り出で丶遮に無に切つて蒐りぬ。蛆蟲めらと大喝一聲、大刀の向ふところ草苅る如くに忽ち大六は三人まで斫り倒せば肥後も一人を突き留めしが、敵の喉輪かけて突き立てたる鎗を其儘杖にして、其時馬場殿が味方の中に白き小旗に井菱を染めたる指物して働くは誰なりや見馴れぬながら健氣に見ゆると賞美の詞面目あることに候、あれこそは甥の大六にて候へ、笠は我が印に用ゐたれば井菱を付けさせて候。と嬉しと思ひて我が答ふれば、さては甥御なりしか、昨日の言葉も思ひ合はさるゝ働き振りよの。生きて殘らんと云はれしが、屹度生損ひはなさるまい。天晴甥御を持たれた和殿。御滿足なるべしと

無い。豫て期したりしが今日の敗軍、これまでになつてのめ〳〵と傷も負はねばとて生命助かり甲州の地に足が入れられうか。此邊に居るは無益で無い、一騎二騎でも御屋形の後慕ふ敵を喰ひ止むるは御後を安くするに當る道理、無益で無いは。今のやうにして我が死のうに、我は志を遂ぐる、敵は功を獲る、心無しの事が何であらうぞ。我が馬餘力ありたれば御屋形に捧げて御屋形が疲馬に跨がり此處まで引返し來しものを、何條此心に自ら違はん。我上は案ずるな、死ぬるばかりぞ。死損ひは得こそ爲まい。唯我が心のひかるゝは、汝が生損ひを爲まいかと案ずるばかりの事ぢや哩。此老やい大六、清井田河原にて馬場殿はじめ歷々に對ひて慮外を申せし汝は生損ひは爲まいがの。此老夫が今生の置土産に、汝に無くば貸さうかい分別を。これ、おのれは何と今云ふた、御屋形の後を追ふて行くと云ふたな。たゞ御屋形の後を追ふとか、た、た、白痴め、うつけめ、心無しめ、そ、それが生損ひではあるまいかやい。これ、戰ひ負けて恥を忘れ仕出さうことの確な目的の有るでも無いてぬく〳〵と生きる、生損ひとはそれを云ふぞ。斯樣とは知れたることながら諦めても諦め兼ぬる今日の狀態、前代未聞の我慢の戰ひ、御家未曾有の大瑕瑾、口幅廣き上方勢に類無き功名させしなれば、輪に輪をかけて誇顏に、武田も今は既何かあらんと云ひ觸らさんは眼に睹る如く、其面憎さは堪忍ならねど、云はれても是非の無いが先口惜く、今日の痛みの其上を有ること無いことの陰言に倍增し三倍增し味方の威は殺がれ敵めが勢は付かんと思へば是も口惜い哩。大六。おのれ

く明きたる脇腹にはや敵の鎗の穗先するどく觸れんとしたる一刹那、岩も裂くべき獅子吼一聲、林木に震ひて起ると共に大刀一揮の銀光影裏に血烟りぱつと立つて敵の倒るゝ背後より朱顏ぬつと見えて、長髯鬖々と風に吹かせし大の好漢のあらはれたり。大六なりしか。いかにも叔父貴。と一句と一句に一歩と一歩、相見ざりしは少時間ながら生命あつての再會なつかしく、互に歩み寄れば肥後は先づ大六が手を取りながら傍の平めなる石に腰掛け、既に此世の埒明くところなりしに、汝が世話にかゝりて又少時惜からぬ身を生き延びることよ、功名させて惜からぬ敵なりしに運無き男なりしと苦笑す。急の場合に生面も見て斬捨てたるは是非なかりしが今になりては些酷かりしやうにも存ず、と敵の伏屍を眼にしつゝ大六もまた苦笑せしが、それにしても叔父上は何となさるゝ。差したる傷を負ひ玉ひたりとも見えねば御屋形の後を追ひて小生と共に行き玉はずや。無益の敵に關らんも愚なることゝ存ずるに、此邊に居たまふて今の如く名も無きものに危く功名を授けんと仕給ふは餘りに御心無しなり、いざ立ち給へ、はて御所存あつてか、何として動き玉はぬ。と叔父が清井田の誓約のことを忘れしにはあらねど、戰鬪も既終りし同樣の今更詮なき死を成るべくは遂げさせまじの情より言葉を輕くして勸むるに、肥後は應ずる色も無く、老いたるは老いたるに任せ置け、若き汝が分別貸さうは要らぬ世話ぢやへ、默れ大六。肥後に釣閑が眞似せいとか、うつけめ、美濃殿修理殿を學べとも得云はぬかい。若いものゝ言葉巧者なは、根性骨が薄手に見えて賴もしく

下方に先づ馬の口をつけさせて、左手に平首かい撫でつゝ、噫、おのれも精盡き力脱ちて、最早幾干も世の味を甞むべくもあらず見ゆるかな。御乘馬となりしからは是非も無けれど、あゝあはれのもの、諦め呉れよ。と馬に語るか我が我に語るか知らず獨語ちつゝ、今日一日に眼の下あたりの常とは痛く衰へたる主君が愛馬の容態を見て歎息すること少時して、再び四圍を篤と見し後、鎗を地に置き、冷水の指もちぎるゝばかりなるを莞爾と笑みつゝ馬柄杓あらねば掌に掬びて、幾度か口を嗽ぐ折しも、歩みよる人の跫音す。油斷無き老功の耳疎からず、疾くも水を噴きて鎗を手にする途端に、叫び聲いと鋭く、突き掛り來るは名こそ名乘らね覺えあるものと見えて武具も鮮に身幹も高く侮り難き好漢なれば、敵ながら卑まん心も無くて、振り向きざまに敵の鎗を拂ふと齊しく身構へ足取り最嚴かに立向ひつ、やゝ少時睨め合ひて言葉も無くありしが、年若きだけ堪へかねしや、一ト聲あらためて突き出す敵の笹穗の鎗の光、鼻の頭に閃いて電光の如く疾し。卷き落さんものと手錬積みたる肥後も同じく鎗を以てあらそふ。彼も鎗なり、此も鎗なり、大身と笹穗の差違はあれど、此より突けば彼は拂ひ、彼方の突くを此方は拂ふ、互に劣らず勝らずの手錬と手錬の烈しき鬪ひ、空に二條の蛇の爭ひて相纏ふ如く、良久しく雌雄も分らざりしが、心は剛に眼は明かなりといへど、老いたり、且は疲れたり、手足は思ふほどに叶はず、やうやく肥後は下鎗となりて、退り〳〵つ受けかねしに、生憎退りて樹末低き蔭に入りしかば返す鎗の石突今や枝に支へられ、全

返し合はせて一ト防ぎ仕るべし、と云ひも果てず鞍上に心深く一禮して南方に向ひ取つて返し、疲れし馬に一角くれて、笠井殿、肥後殿と人々の呼ぶを聞き捨に走り去りぬ。三河方四五十人に甲州方三十人餘り、追ひつ返しつ爭ふ中へ乘り入りたる笠井肥後唯一人、枯れたる老の聲を絞りて、方々、退き玉へ、對手に取り玉ひては不足ある敵、笠井に渡されよ、肥後一人にて、あひしらひ呉れん。と云ひながら、鎗を閃かして突いてかゝれば、信豐が身近く引添ひて必死と働ける青木尾張、これに勢まさりて前なる一人を竪割りになし、返す刀に横なる一人を脇より肩へと抄ひ切りに切り倒しつ、笠井殿、御芳志過分に存ず。今見玉へ、此奴等、押しかたづけん。と疲れし身に我が心の鞭を呉れて奮然と切り立つるに、勵みの付いたる甲州勢、我も／＼と意氣込烈しく捲り返して、色萎みたる三河勢を一段ばかり追ひもどしぬ。されど我が主を無事に護りて退かんばかりを詮とせる尾張は好きほどに敵を追ひ捨て、士卒をまとめて徐々と信豐に引添ひ鳳來寺の方へと志すには引替へて、死を自己から誓ひたる肥後、何を生甲斐に身を惜まんと、十分に勢に乘りて追ひかけしが、敵の遠く去りて隔たりしを見て、路の傍なる若き杉のばら／＼と少し列立てる中に、何を勸請せしか提ぐれは提げも仕得べき小なる宮あり、御手洗に取做したりと見らる些の流れも其傍に見えたるに、渇きたる咽喉には掬ぶほどの水も欲しきあまり、立寄りて見れば案の如く庭の沙さへ透く流れなり。こは有難き神の惠みと四方へ一應屹と心を配りて馬よりひらりと飛び下り、流れの

て。假令打たるゝとも甲斐の四郎は最期まで馬を地道に乗りしと屍の上に噂されん。特さら烈しく今日一日乗り廻したれば我が此駒の如何に疲れしか、擡ぐる足の重氣には見えざるや。畜生とは云へ有らん限りの力を既に竭したるを、鞭つて此上に乗り倒さんこと情あるもの丶所爲ならんや。飼ひ馴らせし馬の生命さへ乗り縮めて退きしと陰言を、云はれても活きたき我ならず。無益言吐くな。と馬には優しく人には酷き強情我慢の恐ろしき暴語に初鹿野は默りしが、老功の笠井肥後屹と密かに思ふところありてや、日の前の霜かと見えて光薄き老の眼に笑を見せつゝ、如前にも御乗馬は甚く疲れて、躓き勝の足元危く、今少時ほどに見え候。老生がのは牧を出てゝの日の淺ければ猶よく堪へ申すべし。恐れあれど、御働きのなるまじきに召し玉はんは御不覺なるべし。御馬を老生に賜はりて、老生がのに召し替へさせ給へ。是非に召しかへさせ給へ。御進退もなるまじきものに召されんは御情は兎まれ御覺悟は乏しと申すべし、と云ひ出づれば、應、よく言ひたり肥後。左まで云ひ吳るゝが嬉しければ我が馬吳れん、汝が馬借らん。惣藏、汝は年若ければ、肥後が馬倒れし時は汝がのを老人に貸し遣れ。と機嫌よし。肥後はひらりと飛び下りつ、やがて我が馬に勝頼の乗れるを見て、おのれも勝頼が乗り捨てし馬に跨がりしが、折しも三河勢の十騎二十騎追ひ來れるもの漸く多くなりて、彼等共頼みの心強く典廐が隊にかゝりしとおぼしく、大刀打の音微に幾千の荒男が男叫びの聲に揉まれて聞ゆれば、好き機とや思ひけん、御暇賜はるべし。若からぬ身の惜からぬ生命、

んと密に思ふも一度二度にはあらざりしが、從ふ面々が精忠を無にもならねば其みならず、三河勢の後より罵り追ふ聲々そよ吹く風の中に揉まれて一つにざわ〳〵と聞こゆるにも耳を潰し氣を呑みて、日頃軍神も宿れるやう誇りし大文字の旗の手前も心外至極ながら、今月今日、はじめて馬の鞍の後輪を敵の葉武者の眼にまで見せさらす口惜さ腹立しさ。自然剛敵の路を塞がんには四郎勝頼が好んで捨つる生命を拾はせ呉れんものを、と悲憤の餘り今は却つて死をだに潔しとすれば、歩まする駒の足もゆたかに、伸び上つては左を望み右を望み、風來らば復餘焔を揚げん猛火の名殘の燼のわづかに鎮まれる如き怪しの眼に、未刻下りの日を浴びたる山角山峽、折矢散りばふ川原川隈を撫づるがごとく見て過ぐる意中を汲みてか汲まずてか、初鹿野ふりかへりて近く寄り、今少し御駒を早めさせ給へや、間距たりて御背後をば典廐殿の抑へ玉へばとて五十人には過ぎ玉はねば、敵の多勢に咬ひつかれては難儀に及び申さんに。と武邊にかけては功者男も言葉は品無く武骨なり。さらでも心の焦れに焦れたる勝頼聞くより赫然として、默れ、初鹿野、不覺者め。慮外のことを云ふ呆漢の。敵に咬ひつかれて何が難儀ぞ。疾駈を逐ふて退く我とおもふや。背後の手薄きは知らぬで無い。信長如きは知らぬこと我は斯程の退口なりとも、地道のほかは得乘るまい。疾駈は利運の時のものぞ。運つたなくして斯樣なつたる上は、ゆる〳〵と馬を打たして敵を飽まで侮り辱しめ呉れうずに、それを何ぞや退口に急げとは、常にも似ぬ意見聞苦い。かくして打たるれば打たるゝま

を射削つて遙に逸れ行けば、一倍增して激怒せる傳十郎飛鳥の如く身をそばめて走り近づくよと見えたるが、弓を捨て身を退らして打物取んとする男を片手なぐりに曳と斬る。間は少し隔てたれど大刀の寸の延びたれば右の胸を打落しぬ。餘るは一人と敵を呑む勢猛く大六目掛け斬りかゝれば、一步退つて、すつくと立つたる大六高英、ハッタと多門を睨まゆる眼は秋の水を凝らして、渥丹の如き面に輝き、漆黑の鬚髯、一字の口、身幹拔群に高くして威風堂々一軍の將たるべくも見え渡りぬ。好き敵、逃すまじと勇みて蒐る多門は矢聲立てゝ切り立つるを、大刀さへ拔かで遣り違はす步取り自在にあしらひしが、好き程と見て猶手に持てりし弓もて橫に引拂ふに、六分餘りの强弓なり、力はいたく優れたり、多門堪へず倒れ伏すを起しも立てず二ッ三ッ續けさまに打つて其儘に、切らんともせず打棄てつ、汝等に鬪ふ我ならずと云はぬばかりに足疾く北を指してぞ走りける。

其十五

天魔鬼神も挫ぐべき猛將勇士の數の中に包み圍まれて意氣盛んに誇りたりしは昨日の夢となりて、今は身近く從ふは初鹿野傳右衛門士屋惣藏笠井肥後等の四五の士と雜兵少許ばかりとなり、無念の牙を咬みつゝも勝賴力無く鳳來寺さして行くに、溫氣の時節なり、戰鬪は長し、ことさら敗軍なれば主從とも〳〵疲勞甚しく、心は猛きも身は任せず、ほと〳〵困じ果てゝは取て返して切り死せ

りて、やがて勝頼の大文字の旗丑寅の間に遙に去りしを見るより、小高き處に上り、千鳥鍮の鎗を杖つきて見送りしが、我君今は猿橋を過ぎ玉へり心殘さん方も無しと自ら名を呼び散々に戰ひし末悠然として終りを取り、眞田信綱、眞田昌輝、川窪備後、小幡備前、小山田盛高、望月義勝、其他名ある勇將等數多く敵の手に殪れ、散々になつて武田勢は鳳來寺を目ざし落ち行きける。

豫て大概は期したるながら此樣までとは思はざりし笠井大六、今更無念やる方なけれどまた如何ともせん方無ければ、せめては御屋形の御後安からせ奉らんと同じ意の男一人と、小戻りなしつ、道路より少し引離れたる低地に生へる老松の枝疎に幹太きを楯として、追ひすがる敵兵ござんなれ、矢種あらん限りは痛き目見せんと矢注速に射立つるほどに、折しも歩さへ今はやゝ亂して追ひ來る三河武士、本多忠勝が一隊の兵眞黑になつて押來りしが、射られて忽ち將碁倒しに四五人倒るれば色めく雜卒、敵あり油斷すなと叫ぶ間も無く、的の多きに空矢無ければ死傷續きてまた五六人、これはと驚くもあれば赫と怒るもあり、中にも先がけて進み來りし多門傳十郎蜂須賀彥助、いづれも經驗ある猛者なれば、騷ぐな、見苦し、關はず押せ、多寡が敗兵の三四人、我等を喰ひ留めんと橫矢射ればとて何程の事のあるべきや、斬り捨てゝ通らん、と冷笑つて大刀を振翳し馳せかゝるに、我は右を射ん汝は左をと大六は友に懸聲しつゝ、弦音高く切つて放てば彥助胸板を正面に射られて箆深に矢を負ひつつ呀と倒れぬ。これに振向く途端の拍子、多門が面門を望みて飛び來し矢は兜の後面

添ひて肩に手をかけたりと見ゆる孫太夫の丈いと高きも眼に入るに、思はず聲をあげて、富永殿、屹度頼んだぞ、と叫べば、頼まれた哩、案ずるな、と應ふる聲す。確と頼んだぞと再び叫べば、くどい哩、未練な、聞苦しい、と叱るやうな聲の答の後に、アハヽヽハヽとの高笑ひ、闇夜の空に濤なして響きぬ。

其十四

敵は大軍なり我は小勢なり、敵は高處に在りて我は低きより押蒐るなり、敵は堅固の柵に據りて我は干となるものも無き廣場を進むなり、彼方は上下一致して此方は將卒おもひ〳〵に、彼方の謀略は一二ならず皆能く行はれたるに此方は全く敵の詐計にかゝりしのみなる此等のゆゑばかりにても勝敗の勢は既定まりたるを、思ひもかけず敵の手に小荷駄を奪られ、根とせし據處を衝き潰されしかば、戰鬪は唯我のみとなりて、無理無躰なる運動の功を收め利を獲べきやうも無く、小男なれど根性骨はしたゝかに太しと世に謠はれし山縣は、大久保忠世が隊に向ひて、彈丸を受くること二十に至り、其の第二十の一彈に鞍の前輪より拂手下を背後まで撃透されて戰死し、土屋直村も亂軍の中に自己が心を表して死し、内藤修理は勝頼が退口に勇戰して矢に中りし後首を朝夷奈彌太郎に授け、馬塲美濃守は此一日九度の蒐合に七百の手兵僅八十餘人となりても思慮ある進退に我主を護

て我が意見に從ひ吳れよ、と言葉に力のあらん限りを籠めて云ふ。云ふより早く、いゝや、仰なれど從ひ申さじ。今生に唯一つの御願なるを疾く快く承諾きて今直召連れ玉へよ、と寸も動かぬ若氣の一徹、止まらすべくもなき勢狀なり。忠次これに憮然として天を仰ぎつ語を絕せしが、忽然鷙鳥の小禽なんどを攫むが如く小太郎をば左手に引抱へて肩にすると同時に右手には地に横はれる眉尖刀を拾ひて外面に突と出て、篠突く雨中を馳せ拔けて遙隔りし富永孫太夫が陣に走り入り、言葉も嶮しく、孫太夫殿。頼む。可惜若者。死急ぎする。私の初陣。其方の隊に屬けて。功名は慾の沙汰、たゞ塲數一つ懸けさせて吳れ。死急ぎする。勝つ戰ぢや死なせいで。貞春が子ぞ。頼む。といへば、戰塲馴れし武士の眼づかひのみにて談話もするまで物の悟りの早きことゝて、ム、、薄々知つた柳の子かよ。合點した。殺すまいぞ。頼まれた哩。と破鐘聲。地に下されて初めて此處に我が連れ込まれし意を解せし小太郎本意無き面色して物云ひたげなるを忠次は笑ひに顧みていとやさしく、我手には屬け難く、此隊に屬くる。敵といふものゝ面、明日覺えよ。死急ぎ無用ぞ、我が言聽け。たゞ不覺すな。慾をすな。と云ひながら抱りあひたる手をば緊しく、締めて、放ちて、さらばと一ト聲、面も見せず、疾風の如く駈け出てしが、四五十步にして顧り見れば、風のためにや左しもの雨の、漸衰へて名殘までに、霧ともまがふしよ〳〵降の中にぼんやり篝火動く光を受けて此方に向へる小太郎が面はくつきりと浮き出でし如く著く見え、追ひかけんとせしを止めたりや其背後に引

りぬ。始終を耳にして心愈躍るばかりの小太郎宗春、時刻は逼りぬ物語るべき間さへ今は無くなりたるに此小太郎を如何にかせんと氣のみ急かるゝ左衞門忠次、此も他人もどかしく、彼も他人もどかしく、互に思ふに任せぬに胸のみ煎れて言葉も促り、はて聞分無きことをいふものかな、連れ行き難からぬものならば今まで何とて口を酸くして汝の望みを抑へんとはせん、到底汝が云ふ如くにせんことは叶はず。と忠次は云ふ。さりとは情無きことを仰せらるゝ。我一人如何程の足手纏ひとなればにや左までに伴ひ玉ふを厭ひ給ふ。と宗春は云ふ。年弱ければとて他の情を推し呉れぬにも程こそあれ。汝が望みを許さぬ譯はあれ迄に云ひたるに猶合點し呉れいで其樣に我を苦むるやと喞つ。これまでに思ひつめて來りしものを淺々しく取り玉ふやと恨む。成るまじきとぞと止む、許させ玉へと乞ふ。肯はじとすると從はじとすると、推しつ推されつの問答に、また降出だせし雨の中、日は何時か知らず沒り果てゝ、人顏定かならずはなりしが其ものごしに其と知らるゝ名倉喜八郎ふたゝび入り來て、何を仕て居らるゝ酒井殿は、總軍をあづかりながら悠長過ぎずや。事に臨みて慌てぬは聞えたることなれど、物になまぬるきは倦怠ならずや。と金森殿は小生に聞けがしに獨語かれて候ぞ。日頃にも似ぬ御事、疾く／＼出でられて然るべし。と不快氣に云ひ捨てゝ、返答は背より追ひかけて爲よと云はぬばかりに立去れば、如何にも心得たり直に出でんと云ひ／＼床几を離れて立ち、着たる鎧の上帶を一ト搖り搖つて締め直し、屹度小太郎が方に向ひ、我既汝と語る暇なし、心を決し

は切なることを宣へど、今日が前、今日が後、死するも、生くるも、今生後世、考へても案じても是れ限りの所存、貫かせ玉はりても可にはあらずや。かくても猶我が申すところを納れ玉はずば是非に及ばず、御許を恨みんやうも無し。今少し筋骨逞しく膂力強く生れつきたらんには、假令私に參りたりとて、伴ひ行かじとも云ひ給ふまじきなれば、云甲斐無く生れつきたる我を恨まんばかりのこと。如何に我が成らんとや思ひ玉ふ、後にて御覧ぜらるべきぞ。さるにても御許は小太郎をこそ日頃いつくしみ玉はりしなりつれ。小太郎が有つたる四五尺ばかりの兜立鐙掛をば重くは視玉はざりしならんと思ひまゐらせしに、今日の御情誼には、小太郎をよしや取りどころ無きものにして終らするとも、小太郎が身躰を世に全うせしめんとの御思召にや。よも然には御坐さじ。必ずもに然は思さじ。さらば小太郎を小太郎が念に任して果てさするも強ち不可といふべくもあらぬことには候はずや。狂げても連れ行き玉へかし。と云ふ此時人の跫音して、頓て物影黒み行く夕間近き薄暗さの中にも知るゝ短髪黒面、眼のみ怪しく大く光れる猪頸の男突と入り來れば、忠次其方に面を向け、おゝ名倉殿、諸手の樣子は、と問ふに、じろ〳〵柳を睨め居し彼方は問ひも終らせず、急込調子の語もそゞろに、もはや那の隊も準備は充分、金森殿等は今までの陣地を既に引拂ひて徐に山寄りへと動き玉へば、御手配りの如く喜八郎は美濃勢が中に屬き申さん。止みつ降りつの雨はわり、屈強の天氣屈強の時刻此方にも既動かるべし、さらば明日こそ、と云ひ終つて一禮なしつ立去

の挨拶よりほかに汝に與ふる返辭は持たぬ忠次なれば、兄とも思はゞ我に免じて枉げても思ひ飜してよ。公の義理、私の情、煮ても煎じてもこれ限り、汝の願ひは許し難し。と心強くも云ひ放てば、小太郎しみ〲忠次が面に視入りてありけるが、亢奮ぶる神經に浪打つ聲の震ふ響きの細く鋭く、其、其は御本心よりの御言葉か、但しは御方便の御諭しか、平生の御教訓は然は無かりしやうに覺えて候ひしに、今日になりて生命惜めとやうの御敎へは、小太郎承はらでもあるべきか、つや〱以て合點まゐらず。思ひ飜せよとの御言葉をなか〱酷しとは存せねど、御優しさの餘りに深くて、若くは一時の御方便を以てまでも此我を賺し宥めんとせらるゝにはあらずやと思ひ到れば聊口惜く、斯程までに思ひ究めてまゐりしものを、脆くも變改するものかのやうに見玉へば歟、近頃心外の至りなり。矢は飛んで虚空に屈曲らぬ一條を描き、男兒は憤つて世を傍眼ふらずの一途に走る。鏃の的に碎くるか、生命が志の犧牲となるかは、運なりとすればそれまでのこと、一旦憤りを發せしからは死にも爲得いで已まんこそ男兒の慚づべきことなれと、彼の何時ぞやのことなりし、京より下りし老法師に昔事を語らせて夜伽させし其時平家を倒さんとして事成らざりし成親等が上を評判仕玉ひしを、身にしみ〲と承はりて、御許が當時の眉目のさまさへ歴々として今睹る如く我が眼には猶遺り居れるに、御許は忘れ玉ひしか、思ひ飜せよと宣ふとも世を傍視ふらずの唯一途に走らんと思ひて既此處まで走り出てたる身の今更重ねて何をか顧みん。煮ても煎じてもと御許

かんと思へる矢先なれば意に任せず。乞ひをゆるして我連れ行かば、胸衝くばかりの山路に岩根木根の足を嚙むそれさへ厭へぬ闇の夜の暗きが中を無二無三に辿り明かさせては叶はず。屈強の男の覺えある身にても、隨分容易にはあらざるを、小太郎が人普通に及ばぬ身をもて、心ばかりはよしや猛くも如何で堪へ得ることとならんや。況して五月の天黑く、今宵は強雨も降るべき摸樣、藤葛に賴り岨を攀ぢて、行く〳〵二時三時四時も濡れ浸らば、鳶巣山の敵營を望まぬ中に虛弱の身躰、如何なることにならんも知れず。所詮我が隊には屬け難し、今一度手強く止めて見んと、千言萬語繰り返せばとて小太郎汝が云ふところに忠次同意は與へ難し。汝が出でゝ戰はぬにせよ今度の戰鬪味方に利運の無しといふにも限らねば、汝が必死と戰へばとて勝負の大勢を動かして勝つべからざる味方の勝つといふにもあらざるのみならず、特に今度の一戰は味方の勝算歷々として火を視るごとく明かなるに、同じくば我君御難儀と見ゆる砌にこそ捨てもすべき身をば、惜むこと無くて今日好んで、決死の覺悟を定めんこと無用の至りといふべからずや。死急ぎをするばかりをば武士の本意のやう思はんは、其齡でも無いに無分別な。小太郎、矢張それはまだ稚氣といふものかと我は思ふぞよ。能く考へ見よ、稚かろうぞ、まづ稚かろうぞ、思案し直して杲るゝがよし。強て汝が悶躁き焦りて如何に忠次に逼ればとて、我が隊に屬けて連れ行かんとは必ず我は云ふまじきぞ。酷しと我を恨まんには酷からぬつもりの我なれど、今こゝに其を辯解かんともせじ。何とあつても如是まで

ひ飜せとは口惜き仰せなり。死は何時にても成ることぞと繰返しての御諭しなれど、死は何時にても成ることなりや。御情濃やかなる御許の御言葉を戻くにはあらされど、小太郎存じ寄にては何時にても成るべき死とは思はず。死すべきは唯此戦の此日此時ばかりとこそ強くも執し思ひ申せ、何の日死しても好しとは存ぜず。死すべき時に死せざれば死にまさる恨みに身を悶ゆることもあるべく、耻辱も取るべし。委細は既に申し盡しぬ。枉げても我念を徹させ玉へ。今生の御仁愛これには過ぎずと有り難く存ずべし。如何で、如何で許させ玉はずや。と面に少し心の火の燃え立つ色の紅潮して逼るもいとゞいぢらし。されどいつかな肯かぬ忠次頭を掉つて澁面つくり、はて聞分無きことを云ふよの。年若くとも一旦氣をのみ左樣は出さぬものぞ、分別仕替へよ、といふ。いや思ひ飜しは致すまじ、枉げて我願許し玉へ、と小太郎はいふ。何とあつても我が言葉用ゐぬかと忠次叱る如くに云へば斯程申しても御隊には入れ玉はざるかと宗春詰る如くにいふ。汝は餘りに片意地なりと此方が喞てば、御許はさりとは平生に似ず御情無しと彼方は怨ず。一人は若武者の必死の覺悟を決めて此地に來れるなり、一人は場數もかけたる功者の先を見越して無用なりと堅く止むることなれば、彼も屈せず此も讓らず、爭ひ果つべくも見えざる中、時刻は漸く逼りくるに、忠次心も心ならず、常の日ならば事委しく合點行くまで說き諭して快く念を立て直させんに、其間も無き大事の前、機は一寸も逃し難し今にもあれ同勢打揃つて此處を打立ち松山越の嶮岨にかゝり押行

ど君の御眼の及ばせ玉ふところを畏み、また我が言の僞り無きをも推量して、其思立止まる方、目前には快からずとも日後には必ず好かるべし。小太郎、小太郎、いや左樣不快の色のみ見せず枉げて我が言葉に就き與れずや、思ふても見よ汝の身に取り不利益のよを此忠次が何で云はうや。さ、さ、厭でもあるべきが枉げて、枉げて、快く思ひ返して與れ。斯程云ふても猶不合點か、其面色は意地強きに過ぎて然りとは聞き分無く、餘りといへば情無いことぞよ。さ、此のやうに頭を下げて忠次が頼む、聞き入れ與れ。これよ小太郎聞き入れ與れ、幾度となく云へるごとく、死は何時にても成ることならずや。自然如何なる機會にか臨みて我君の御爲小太郎汝が生命を捨つる時も出來ば、一人汝を死なさうや、駒の頭を共に聯べて鐙の袖も打交せしまゝ刀山劍樹の間にもあれ傍離れず死せんとまで此忠次の思へるを知らざる汝にもわらざるに、味方勝利と定まつたる此戰に遮つて死急ぎをせんとは恨めしゝ。惡きことは云はず、惡くはせず、忠次が意見に就いて與れよ。と義理恩愛の二筋を糾ふ言葉の緖のしなやかに、控き止むれど若鷹の逸りて搏きする如く心急なる小太郎宗春突と身を退きて屹と構へ、女ゝしきことを仰せあるな。由無き御諭しは承はるも心外候。一旦心に誓つたる義を今更如何に御諭しの候へばとて此小太郎、變改も致すべしと思はるゝや。善惡邪正の詮義によつてならば知らぬこと利害損得の分別につけて人こそ知らね自ら誓ひし誓ひを破らば心に問はれて何とか答へん。好くもあれ、また好からずもあれ、斯樣と思ひ立つたることを果さで思

まで生し立てゝは呉れざりしぞと歎き玉はんは必定なり。さては忠次の云甲斐なきものとならんはさもあらばあれ、汝は不孝の兒となり果つべし。但し死なんと思ひ立てる汝が分別も、君に對して一心の跡を表はさんとの正直なる忠義のほかにはあるべからず、また亡き父の名を潰さじとの孝の道には外れぬながら、生かば生くべきを死しての忠孝、生きんに生き辛きを生きての忠孝、いづれか眞實の大丈夫たらんと糞ふものゝ取るべき路ぞ。此間に深淺正傍の區別の些少ならず在りはせずや。物の理に敏き汝のことゆゑ、既合點はなりつらんか、諄〻しう云ふも誠意の餘り、我が言葉を我は猶足らずやと氣づかふばかりにて云ひ止まむ瀬は今も知らず。一躰汝は身の弱くて思ふに任せぬを日頃より深く憾み慚づる其餘り如是思ひ詰めたる思案をもなせしならんが、自ら嚴しうするばかりが武道の勵みといふにもあらず、自ら寬うする工夫もまた無くては大功立ち難しと我が君も仰せありしことあり。今日の其心を亡はずに自ら寬うして年月の錬磨を其身に加へて呉れなば心確實なる大丈夫となりて天晴我が君の御爲にも無二の良き士たるべきに、然あらば忠次は云ふに及ばず貞春殿も泉下にて如何ばかりか滿足に思はれんをも度外にして、强て死なんとは曲なきことぞよ。短慮は功を成さずといひ、短氣は損とも下世話に云ふ、死は何時にても成ることなり、左まで急ぐは僻事ならん。忠次神以て虛言も云はねば、汝のために惡かるべきことをも云ふことあるべからず、我君も何條忠臣の貞春殿の遺孤なる汝を麁畧に見玉ふべき。さすれば此處は忍び難くもあるべけれ

が君の御仁慈を思ひ知る上は未かけて御仁慈に酬ひ奉るに足るほどの忠功を立つべしと心長に自ら期さでは濟まぬ筈にて、我が身とは云へ我が儘にはなか〳〵輕々しく仕せ難き身なりとも云はゞ云ふべきならずや。それを我から我を見限り、甲斐無き天賓を恨み憤る心より長かるべき生命を我手に短うせんとの思ひ立勇しゝとは人も云ふべし、善盡せりとは最愛しき汝が分別ながら忠次は得云はじ。まだ思慮が若いやうな、まだ思慮が若いやうな。さ、さ、其顏を見るが辛さに、一も二も汝の云ふなり次第、天晴氣味の快い覺悟よのと褒め稱へて汝の欣ぶ態を見たきは山々なれど、眞實淺からず汝を思へば如何に心憂くとも汝に苦き顏さするを厭ふては居難き場合、耳には快からぬ言葉なりとも、聞いて呉れよ能く、又思ふて呉れよ能く。敵は憎き武田なり、汝が身は其如くなり、朋友同輩は彼の如くなり、三方四方の情態に衝き激まされては齡老かぬ汝が其清く濁り無き和らかき胸の波狂ひて、よし巖に碎くるとも珠と散りて快く終らんと思ひ立ちしは、世にも有り難き志にてさら〳〵無理にはあらざれど、思案の要るはこゝの事なり、能く、能く、考へて思ひ快めよ。事快活には似たれども我が私に汝の死なんは、第一我君の御思召を無にする筋には當らずや。また泉下にて春貞殿も、汝が立派に成人して長く我君に忠義を勵み勳功を建てんをこそ望みて居玉はんなれ、實の成るほどの齡にもならで風に堪へぬ花と落ちたる若武者の汝を彼岸にて見玉はん憾みは如何あるべき。賴もしからぬ忠次よの、何故小太郎が分別足らずば足して與りても大人となる

汝は何時か思ひのほかにも天晴大丈夫になつて呉れしなし嬉しや嬉しや、亡せたまひたる貞春殿も泉下より見玉ふて如何ばかりか欣ばしく思ひ玉ふらん。平生兄顔して物言ひ交せし我が面目も今日ぞ立つたる。稀有の功を立て、抜群の働きして、君の御感に預かり衆人の羨望を受けたるにも増して我が胸には云ひも悉せぬ怡悦滿てり。能くも大丈夫になつて呉くしぞ。摩利支尊天も照覽あれ因緣に牽かれ私情に泥みて女々しく悦ぶのみにはあらず、身を殺しても意地を活し涙の中にも微笑を湛ふる武道の上より健氣なる汝が存念を忠次は心以て悦ばしく思ふなり。と天仰ぎつゝ云ひさして、やをら首を此方へ廻し、ちつと宗春が面を視護りありけるが、心の影の聲に射して敷前には變る沈み調子に、さりながら小太郎、猶一應我に免じて思慮して呉れかし。一圖に生命を輕んじて死ぬるばかりが好きにも限らず。虛弱の身を疎みて戰場の塵埃の中に埋め捨てんと思ひ立ちしは然ることながら、是非の定まりたることにはあらず。我君の御思召にも背き戻りて我が私に死なんこと忠次は是なりとも思ひ兼ぬる。汝を具して出でんことは難くもあらず、又其爲に、後日の御咎ありとても我功に代へて申解くべけれど、汝を今死なせんは本意無く思ふ。能く考へて見て呉れよ。汝を止め置き玉ひたる我が君の御意は病身なる汝を役立たずと見玉ひて殘されしにはよもあらじ。忠功ありし貞春が家の一人の男子にはあり、齡は猶若し、身は弱し、今用ゐずとも後に用うるときあるべしと見玉へばこそ日頃も汝を取分けて優しく待遇し此度もまた御供仰せつけられざるなれ。されば我

中さん。さる淺々しき御許には御座さゃりしに御未練ならば、御愛情餘りて情無し。後日我君の御咎めあらんを憚り給ひての事かとは流石に思はねど何として物も言ひたまはざる、眼も閉ぢたまへる、左衞門殿、左衞門殿、兄上。兄上。と思ひ逼りて進み寄り、武者振り繕ひ擬勢張りたる初にも似ず忠次に手を徐とかけて搖り動せば、先刻より獨り我が最愛の小太郎が意を貫し遣りて身を亡はせんか、それも忍びず、意をば儘敎抑ふるまでも身をば全うせしめんか、これも忍びざるところあり、如何にか爲さん如何にか答へん、彼此共に忍び難しと、流石分別逞しき平生にも似ず、思慮に餘れる意氣地と情との板挾みに、眞向の返辭も與へ得で面さへ横向けたるまゝ、緊と小太郎を抱き寄せて、赦しやれ、小太郎。ま、まづ赦しやれ小太郎。忠次が言は餘りといへば、心無してあつた赦して呉れかし。今度の事の前よりして心は通へど面は見ず。わづか二タ月三月ばかり、百日足らず會はざりし間に汝が斯様も心長けて天晴丈夫羞かしき丈夫となりしとは思ひも寄らず。聊爾なる物云ひざませしは我が粗忽、赦して呉れ小太郎。あゝ又濟まぬ、過つたか、氣にも障ろう、云ひ改めう、赦し玉へ宗春殿。えゝ何とやら改まつてこれも可笑い、稱呼なんぞは何様でも可ろう。ムゝ、汝も矢張左様思ふよの、さらば從前通り小太郎、慮外と思ふて呉るゝなよ小太郎。眞實汝がこれほどまでに成つて有らうとは今の今まで忠次思ひもかけざりし。見馴れし眼のしほ聞馴染みたる聲音の急に無くなりしといふにはあらねど今まで見ぬ光りは眸の中に湧き、聲には無かりし幅のつきて、

が墓には是今生の參り納めと御暇乞して御奥に事へまゐらする一人の姉に、打明ざりしは外所〳〵しけれど、女々しき涙見んも無益と其とは無しに別を告げ、見苦しからぬやう後をなして、家隷をも振り捨て唯一人、斯の如くにて馳せまゐりしが、所存の善惡事の可否、御許は何とか思し給はる。かゝるに養生せよとばかりの御諭しを受けし本意なさ悲しさ。左ほどにも無きことに笑ひ傾き、要無き遊戯して面白しとしゝ稚氣に任せたる常平生の小太郎とは見侮り給ふなよ。足らぬかは知らねど我が分別の有丈を錬りに錬り堅めて、柳宗春、男兒一人前となつたるつもり、よし、それでこそ小太郎なれと點頭たまふことは成らずや。今しも外面にて覗へば陣の樣子といひ人の往來といひ、且又今日は心急くと告げ給ひたる言葉と云ひ、餘の隊は知らず御許の隊は今宵にも出陣あるべき態、小太郎が所存過らずば、いや、御許は云ふまでも無く、かくまで思ひ込める小太郎が所存を情無くゐ過つたりとは云ひ做し給はるまじきなれば、願ふは御鎧の袖下になり我をつけ給ひて引連れ給へ。働きは諸人に劣るとも、よしんば骨の粉になるまで、まさかに見苦しき擧動をなし御許の名は傷けまじ。大久保殿本多殿石川殿榊原殿成瀨殿、其他御歷々那位を見ても父の餘光にて我をば優しく仕給はぬは無けれど我君の御許可無き此我を戰場に連れ給へと賴みまゐらすべきは御許ばかり。賴みまゐらす、賴みまゐらす。ゑゝ、斯程申すに御答無きは我を過つたる分別せりと思し給ふか、心得ず。さては我が命失はせんこと慇然と思ひ給ひてか、然らば却つて御愛情の餘りに淺しと恨み

の出陣には我君の御怒りもあらんかなれど、此小太郎は、思ひ極めて候ぞや。つく〴〵思ふに腑甲斐なく生れつきたるが身の不祥、一年に半は療養三昧、此前途長く生きればとて、花々しき功名も成るまじき孱弱き身の取ることを得るものは恥辱のみなるべし。我君は父の些少の功を忘れさせ玉はでか要なき我をば厚く待遇玉はれど、父は父なり我は我なり、御高恩に甘へてあるべきならずと辭し申したるに聴き玉はず。猶其儘に召使ひ玉はれるが、生きて御恩に酬ひんほどの働きは到底成るべきならぬに、其上病み朽ちて爲すことも無く死にもせんにはこれ全く祿を盗みて終れるものなり。小太郎膂力は婦女にも敵せず、弓矢取るとは案山子にだも及ばざる身とは云へ恥辱は知れば、のめ〳〵と君の恩を貪り、暖きものに包まれて藥煎る煙に咽びながら腐れて死なむこと思ひも寄らず。同くは生きて何事の功無くとも死して一片の心をあらはしたし。いづれ病に奪らるゝに定まりたる身を、何時まで惜み立して針灸藥治の未練を盡せし末腐れ死せんよりは、鋒鏑に快く斃るゝ分と自ら決めて、血に渇ける腰刀に運よくば熱きものを吸はせん其を此世の思ひ出に修羅の巷に駈け出でん。病に死なんよりは戰に死に、自然に殺されんよりは自ら殺して、一は九牛の一毛ながら、君のため父のため、深き讎敵の、一鱗をも剝ぎ一髮をも挘り取り、一は自己が死後の名のため、形體こそ人なみならず弱かりつれ、心は流石に柳宗春孱弱にはあらざりしよと謡はれんと、覺悟の臍を堅めたれは、後日の御咎も黄泉まではよも有るまじと思ひ切つて顧みず。月黒く夜淋しき時父

聞いて貰はんと思ふ人等の影さへ全く眼に觸れず。戰の有らんは彼方ぞと、風吹き斷る斷れ雲の速からず又遏まらず緩く動くを端居して見るとも無しに見遣る我が身は靜なれど魂魄は騷ぎて虛空にも跳り上らんと腕き焦躁り、夜は寐難きに癇の高ぶり、衾を蹴て我を忘れ跳起きること數次なりしが、是は强に理無しとのみ御許も云ひ消は仕たまはざるべし。父貞春は那邊の戰に戰死せしか、那の敵の毒手にかゝりしか、又我が君は何日の戰誰を敵としての爭ひに口惜き目を見玉ひしか。返す〲も無念なりしは味方が原の戰にて、我君に取りても吾亡父のためにも憎さの骨に徹るは、腕節臑節ゑせ達者なる甲州漢にはあらざるや。君のため、父のため、往時、現在、兎しても恨み深く、角しても憤り休み難き其仇敵の自ら來つて首を賣らんか買はんかと呼び、我君はまた之に對ひて、鎬削られ鐔割らるゝとも斬らでは已まじ衝かでは已まじ、擊ちてし已まむと仕玉ふといふ此の得難く又會ひ難き時に臨みて戰に洩れ、人がましくも無く安閑として、晝は現の起ちつ居つ夜は夢路の斷え續き、百年千年同じことなる價値無き光陰の送りやうを壽命あればとて爲し居られうや。推量し玉へよ御許と我と假に相代りて御許我が悲しき此身となりたりと思し玉はらば明かなるべし。御許我ならば何とか仕玉ふ。御思ひ遣り深くも御眼の中に淚を堪へ玉はるか、嗚呼忝し、かたじけなし。日頃のあだならぬ御情も新に身に浸みていと嬉しく、憂きが中にも御優しさ肝に銘じて有り難し。かく御淚を灑ぎ玉はる上からは御許も我ならば唯其儘にはあり得玉はじ。されば私

御機嫌の麗はしき時々自ら進みて、病痾にも頃日は犯されず成り候、力も出て候、身も肥え候、酒井殿より貰ひ受けたる馬にて疾驅も逐ひ習ひ、二三間の小川も難なく跳越すほどに乘り得るやう修行も致して候、廣言と思されんは羞かしく候へど打物業も習ひ浮めて無下には人にも負けまじく成り候、と其とは無く戰陣の御供仰せつけらるゝやう申し做せど、何時も御微笑を浮め玉ふばかりにて、猶善く養生せよとの有り難くはあれど我心濟まぬ仰のみ。敵は長篠の城を卷きて後詰に味方の出づるを待ち、見るに餘る我儘の限りを盡せば、一旦は遲疑したまひしかどいよく織田公の旗も出て、我君と兩旗にて勝賴を討ちたまふに定まりし今度の出陣にも、朋友同輩、さては我より齡弱なるものまで御扈從を仰せつかり、目釘竹を檢めて太刀刀揮り試むるもあれば、弓に弦懸け空彎輕う仕て調子の好さに莞爾としつゝ鳴音の幽に遺るを樂むなど、人々は世に嬉しげに勇み立ちて快げに振舞ふを、我は御扈從の數に洩れて空しく傍に觀る憾めしさ。二度三度愁訴申し上げしも、戰鬪は今度に限るべからず心を寛うして猶養生せよ。と孱弱き身なればとて現在は病みても居らぬものを情無くも病人同樣に見做し玉ひてか、御仁慈らしき口惜き御言葉。もどかんに戾きがたければ淚を呑みて咽び伏しつゝ後に殘りしが、恨みある敵なり、剛敵なり、といふに誰も彼も奮つて出でし後には男見らしき男見も見えず、二男三男の瘦悴者まで素肌武者ながら我君御大事の戰に一ト働きなさでやは、男見として此戰に洩れ外れてはと先を爭ひ出立つたれば、せめては我が憂さ辛さ

參會を遂げんとて陣中に御尋ね申しはせず。思ひ決めたる覺悟して今日は此處に參りたり、身を大切にせよかしとの御教諭のみ賜はるは、御芳志まことに淺からず嬉しくは存じ候ものゝ、屍を馬革に裹ますべき男兒の身として其樣なる御言葉ばかりを受くるかと思へば口惜くもまた悲しく、御許を恨みんやうは無けれど、世にも生甲斐なき我恨めしく、優しく言ひ玉はるだけ却つて心痛く覺ゆるを少しは推し玉はりたし。何時の間に御扈從して來りしか毫も我は知らざりしと宣ひしが、御許の知り玉はざりしも道理なり。今日此處に參りたる小太郎は御扈從の命も得ず、誰人の隊に屬けるにも無く、私に一人紛れ入りて、小荷駄付の雜卒なんどの如く人目には見せつ漸く此處まで忍び來りしなれば、恐らくは御大將を首として柳が陣中に在らんとは朋輩衆も心付かじ。さ、さ然驚き玉ふは然る事ながら、他ならぬ御許なれば小太郎が衷情のあらん限りを有りのまゝに申さんほどに聞き玉ひて日頃の御語らひいつはりならず小太郎あはれと思しめさば、我が情願をも許させたまへ。此度甲州勢の平山越して濱松近く犯し入りたるそも〳〵より、今にも御大將の打て出て玉はんには、數まへられぬ身なれども御馬脇にも添ひ奉り、假令我力乏しきにせよせめては矢の一枝も敵に射掛け、聲揚ぐるばかりのことにせよ味方を勇むる足ともなりて、憎しと思ふ武田が兵の矢前に立はだかつたる上、何程の嚴しさ以つて世には鬼神の如く云ひ囃さるゝか私に下墨して吳れんと思ひ樂みしは空となりて、吾が君は小太郎を召連れられず。病身と思ひ居玉へばぞと思ひまゐらすれば、

にも三里の灸を据ゆるといふは眞の武士の心掛なり。平生汝は自己が身の孱弱きを憤り恨めるならずや。されば彌が上にも身を厭ふて天晴の丈夫とならんものと末を頼みに養生を心掛けては協ふまじ。我が君にも自然汝をば刀鎗の鳴り矢彈の雨る間に驅使し玉ふことも無かるべければ、上は我君の御意を汲み、次には自己が前途を思ひ、下は愚なる此忠次が汝に寄する僞ならぬ誠實を汲みて、少しは女々しと朋友同輩に笑はるゝまでも衣服飮食自ら意を注け呉れよ。此戰果てなば暫時は休息の間も得べければ汝が健康なる顏を見て例の老夫の佐治平に鷄を烹、魚を燔さしめ、知多の諸白にても汲み交せし後、澁茶に鹽打豆、心靜かに我が眼に移りし敵味方の健氣なる振舞、心地快き働きにても物語りて、其一日を樂しく暮さん。今日は我が心急くことあり。憾めしけれど語り合ふ暇さへ多くは有たざれば後日の參會をくれ〳〵も心にかけて望むなり。と勇士の眞情の濃かに、優しく云ふを口惜く聞く恨みの眼の中や、濕みて露下りる夜の星と照れるを忠次が面上に注ぎしまゝ少時はぢつと視居たりしが、屹と自ら振仰ぎて、こは情無きことをのみ承はるものかな。何日まで小太郎を人一人前の事の成るまじきもとか思ひ玉へる。此の扮裝に御眼留まりて、經驗ある兵士が夜襲朝駈なんどに出づる風躰なりと見玉はんには、何として又天晴小太郎汝も今は汝が草鞋に血を吸はせて戰場に足踏み入れんと思ひ立ちしか出來したり。善くぞ思ひ立ちし、殊勝なり。と日頃の御好誼には御褒美の御言葉の一つも掛け下し玉はらざるぞや。唯懷しう存ずるのみに要無き

其事其時濟み了りし後汝に始終を物語りて我が爲しことを可とする汝の言葉の一句二句と、我が爲しことに滿足し呉れる汝の面上の微笑とを聞きもし見もしせんものをと想ひ出づる度に、我が心窩の中よりは勇氣不思議にも潮の如く湧き立ちて五躰に漲り四肢に充ち、又此場を能くせず此時に堪へずば後にて我が振舞の汝に知られたる其曉に汝は我を甲斐無しとや云はん汝は眉を顰めやせんと想ひ廻らすごとに、人こそ知らね、滿面火となる心地して羞かしさ云ふばかり無く、それより自ら慚憤の餘りに奮ひ立つが常にて、死生の際にも我心は汝を描きて我が懷中に緊乎と納め置くほどなれば、今日も今日とて聊か我が功名の成るべき任を受けしにつけても、軈て此戰ひの果てし後、汝に逢ふて戰場歸りの土產に我が爲し事の始終を、委曲に語らん其時は如何ばかり我嬉しからんと、下悅びに悅び居たる折なりし。もとより私のためにのみ働くといふにはあらされど、我が働きに勵みあるは全く汝の有ればこそなれ。汝の身は我が爲には玉も寶も比べ難きものなれば心して自ら愛み呉れよ。汝ありて我は生命のほかに生命を包む猶一つの生命を有ち、汝ありて我は勇氣の上に勇氣を發す猶また一つの勇氣を懷ける心地す。汝若し無くば我が愍然さは如何なるべき。病勝なる身をもちて其扮裝は恨めしゝ。それ、ぱつ〳〵と雨の零つる。晝より催ほせし空の景色、雲の堤も切れしと見ゆる。寒さも風雨に踵て來んに、見れば肌薄なる其風躰、經驗ある兵士が夜襲朝寬なんどに出づる時の態としては最も相應かるべけれど、汝の爲べき扮裝ならず、身を愛みて健固なる身躰

澤々しき絹絲の如き髮をも厭はず鍊鐵入りたる白の麻布の鉢卷きりゝと引結びて、いと甲斐々々しく扮裝せる少年の、面は眞白にて稍青みを帶びたるまでなるが、此方を打見て懷かし氣なる色を浮め、脇挾みたる薙刀を徐に地に置き、急がず忙てず武者振り作りて、慇懃に跪づき會釋するは、其思ひがけぬ扮裝と俄に變りし擧動とに一度は眼さへ迷はされつれ、疑ひも無く夢にも忘れぬ亡友柳貞春が孤の、我が弟とも日頃見做して二念無く最憐める宗春なれば、我知らずつか〳〵と將几を立ちて、おゝ、小太郎なりしか、思ひがけざりし。何として此處へは來りしぞ。濱松に在りと思ひ居たるに、何時の間に御扈從して來りしか、毫も我は知らざりし。先づ此の皮を敷きて居よ、冷えては病後の身に好くあるまい、身躰は大切厭ふて呉れ。と手近に在りたる藉皮を自ら執て與へし後自己も復び將几につき、身を屈め背を低くして首近々と差伸ばし、此春會ひし限り機を得で相見ることも無かりしが、日增に健康になり行くと聞きしに違はず思ひ做してか顏も少しは肉づいて見え、何より我は嬉しく思ふ。さりながら地躰が骨細の汝の身躰なれば萬般につけて心を小に用る呉れよ。世は騷がしく事繁ければ、汝と共に駒を列べ雉子兎など狩して遊ぶ唯一日の好き想にても爲さんずものをと汝が馬を使ひ得るやうなりし頃より今だに思ひ貯へ居れど其も叶はず。手を取交はしてしみ〴〵と物語り合ふことさへ稀に今日の今までに及びしが、如何なる難き場合にも又身の危き大事の時にも、戰場平時の別ち無く此忠次は、此場を能くして遣つて退け此時を蹈み堪へて堪へ果せて、

雲霧を分けて松山越より敵の後を襲ひ申さん。明日長篠の奥にあたつて煙りあがらば小生等が、首尾よく鳶巣久間山の敵營を砍りしと覺し召せ。姥が懐、山中山、君が伏床の敵の砦も必ず焼き立て捲り立てゝ、此方の戰起らぬ前に先勝頼めが肝を煎らせ必ず顚倒させ申さん。御心安く思し玉はれ。奥平貞能名倉信光菅沼定盈等、眼なしになりても道路迷ふ惧はあらぬものどもに嚮導させてまゐるべければ鳶巣には夜も明けぬ中に到るを得べく候はむ。明日の戰我等さへ仕損じ申さぬほどならば、君の御勝利は疑ひも無き事に候へば、死生は知らず此計畫惡鬼となりても此忠次必定果し申すべし。御大將は御心しづかに巣を焚かれたる禽となつて狼狽廻る四郎めが醜き態を御覽あれ。斯く申す忠次が此言葉たゞ廣言には仕らず。明日長篠の背にあたつて舞ひのぼる煙を御覽あるべし。時刻移らんには準備足らじ。既御暇申すなり。と威風凜々述べ終つて一拜すれば、信長悦びて打頭點き、おゝ勇ましゝ心地快し。如何にも明日は我四郎めが狼狽態を能く見覺え置きて事濟みたる後汝に委細語り聞かして共に笑はん。アハゝゝハゝ。と笑を漏らしぬ。

其十三

忠次自己が陣所に歸りて出發の準備悉く整へ、暮るゝを今やと待ち居けるが、忽然として部下の一卒見馴れぬ漢子を伴なひつゝ我が前指して入り來るに、眼をあげて見れば小具足のみ仕て、翠の色の

色には引代へて信長莞爾に聲打潛め、近う寄れ忠次、と呼びかけつ、座前にありたる打鮑を取つて忠次に自ら與へ、ハヽヽ忠次恨みなせそ。先に汝が告げしところは上無き妙策に疑ひ無し。されど謀計は漏るれば詮無く、成るまでは密なるを專とすること汝も知れることならむ。諸將悉く座に在りたる大會の席上汝が言を直に用ゐんには如何なることより敵に洩れんも計られねば僞りて罵りしまでなるぞ。汝心に滯むるなかれ。と復び案の外なる言葉に、忠次兎角の返辭も無く唯平伏して恩を謝すれば、信長もまた滿足して、忠次見よかし、これはこれ我が秘藏する忍びの轡なるが今汝に與ふるなり。受けて用ゐよ。金森長近いづこにある。佐藤六左衞門青山新十加藤平左衞門と呼び立つるに既命を得て伺候せる面々あつと答へつゝあらはれ出づ。金森長近は隊長たるべし。佐藤則定青山幸忠加藤景村は目付たるべし。總兵四千鐵砲五百を副へて、忠次汝が助勢たらしむ。疾く準備して過失無く敵の後面を衝き崩せ。能くせよかし一同、過つな。と命令きはめて嚴重なれば、勇み立つたる金森等、酒井殿隔意無く御指揮あるべし、自他ともに期するところの大功を立てゝ我が君の御感に預らんに遠慮立は事に取て得あるとこならず、一心同躰の働きこそ願はしう候へ。と會釋すれば忠次もまた會釋し返して、貴意御尤に承はり候。仰の如く一致して御互に功を成し候はむ。と靜に答へつ、改めて信長に打向ひ、さらばこれより小生は深溝形原竹谷、長澤松井松平等を主人家康より借り受けて、雨にやなるべき今宵直ちに任地大風雨とならばなれ風雨は忍ぶに却つて屈竟、

は定。其圖を拔かさず其機を見留めて本軍より激しく嚴しく打立て玉はんには、勝頼等假令心は焦つとも大勢を何とも爲る由無く、崩るゝ味方の渦に引かれて退かんは萬々疑ひ無し。不肖なれども忠次路次の地の理は熟存じて候。あはれ御下知を得て間道より一隊を率ゐ馳せ向はんと存じ候。御許容を賜はりたく候。と額づきて云ひ終りしが心の中には、好く申したり忠次汝が望に任すと云はるゝならんと思ひ居たるに、思ひしこととは全く外れて、信長勃然として面色を變へ、默れ忠次云ふな云ふな。無益の顎をたゝく奴かな。汝は智略あるものと思ひたりしに拙きことを賢ら立ちて云ふものよ、おもふに平生四百五百多くて千か二千かばかりの兵を扱ひつらんなれば大軍を以て大戰を爲す作法をば知らぬなるべし。鹵莽のことを云ひ出てゝ衆の心を迷はすべからず。小軍小戰の上にこそ汝が策も用ゐるべけれ。此度の合戰を何とか思ふ。敵は甲信の精兵なり、味方は尾濃遠三の大軍ならずや。それに何ぞや汝の云ふは山野の草賊を敵としてあしらふごとき小細工なり。婦人の譎謀小兒の機變、大丈夫は用ゐるを慚づるところぞ。草苅鎌は大樹を斫り得ず、小細工如何で大軍に用ゐるところあるべきや。無益の獻策聞く耳持たず、退り居れ。と其聲雷の如くに罵り懲らされて忠次は面目を失ひ望みを失ひ顏を赤めて退きける。かくて軍議も果てければ家康も竹廣の自己が營に歸り諸將もそれ／＼自己が陣に引退りけるに、頓て信長が陣中より近習の士ひそかに酒井が許に來りて主君の召し玉ふといふ。心得難くは思へど辭むべくもあらねば忠次伴はれて本陣に到るに、先刻の景

恐るゝもあらん歟なれど、昔は信玄なり今は勝頼なり、日を同うして語るべからず、何條疑ふところかあらん味方の全勝に定まつたり、たゞ〳〵明日は各位が少しも多く甲州の蝦兒を擒はんことを望むのみ。と相槌打てば人々皆肩を聳かし眉を昂げ、いで〳〵明日は甲軍を一ト挫にして吳れんずと、勇をなして意氣込みぬ。忠次は先に敵の形勢を覗ひて大概推測り得たりければ一つの計を案じ出し居けるが、今こそ云ひ出てんに好き機なれと吾が主人の家康が傍近く寄りて思ふ旨を密に陳べ申すに、其は面白き畫策なり、遲疑することかは、織田殿に疾く其旨を申し出でゝ命を乞ふべし、と家康早速許しければ、心に十分の悅びを含みて信長が前に進み、恐れながら總御大將の御聽を煩はしたき事の候。餘の儀にも候はず此度の合戰、敵は味方の半にも足らざるのみか地の利まで味方に既に占められたれば勝敗は既に定まりたるものにて候へど猶此上にも敵の敗亡を疾からしむる術こそ有らましく存じ候へ。忠次愚昧の身をもつて彼に角申さんは烏乎なれど知つて申さゞるは不忠と存じ聊か愚存を申すべきか。敵は大將勝頼はじめ屈指の者共味方近く推寄せまゐり候へど其根本は此處にはあらで即ち長篠の奧の方に陣取り居るに疑ひ無し。さすれば根本を衝き動かさんに枝葉の全かるべきやうなし。今夜吾が軍一二隊闇に紛れて吉川を渡り松山越の險路を經て敵知らぬ間に鳶巢山久間山に押上り、敵の附城に火をかけて急に攻撃ち、又長篠の敵營を燒き乘本村に斬り入らば、敵は二段に欹り做されて、後を絕切られ小荷駄を取られ、こは叶はじと必ずともに周章狼狽すべき

春の夜あけてあからひく空を染拔く群鴉、聲はがらかに鳴き渡れば、網をかたげて道芝の露踏みしだき昨日見し流れのもとに立寄るに、藻がくれ遊ぶ小蝦兒めは、水苔嬲る小蝦兒めは、心安げに今日もまた、我世樂しと振舞へり。」

今は逃がさじ赦さじと網持ちそばめて覗ひ寄り、さつと撈へば容易も三尾四尾捉り得たり。あらおもしろやと又さつと撈へばふたゝび三四尾。またさつ〳〵とすくへば四五尾、あるは五六尾捉り得たり。驚く蝦兒は是は抑如何にと、騷ぎはすれど蜘蛛の圍に蝶のかゝりし如くにて、網を破らん力も無く、跋ねて躍りて、あがきてもがけど、人の笑となるばかり、鎧兜の身を誇り、鎗薙刀を閃めかせしも昨日の夢とぞなりにける。」

と初は陣扇をもて緩く舞ひ後は薙刀をもて撈網に擬らへつ烈しく舞ふに、其態をかしく興ありければ觀るもの思はず笑壺に入り、箙を叩き掌を拍ち囃して鳴りどよむこと少時は止まず。信長いよいよ機嫌冴かに、面白し面白し、時に取つての好き舞なりし。忠次も聞け衆人も聞け、如何に勝頼めは蝦兒ならずや、何と德川殿も然は思はれずや。彼めが髯を振り搖すも今少時の間にとゝまること、吾等が持つたる撈網にて撈ひて取らんは遠かるまじ。アハヽ、勝頼めは蝦兒ぢや、小蝦兒ぢや、いや心持の快い事かな。と將士を勵ます大言壯語。家康もまた笑ましげに、仰せの如く小蝦兒に等しき勝頼等少しの武威に誇るも、鬚髯の鎗薙刀を閃かして空しく自ら驕るのみ、衆士の中には甲軍を稍

ぐ。くる〳〵〳〵と追ひまはせばつい〳〵〳〵のついと迯ぐ。こは口惜やと手を退きて少時見つむる水の面。波しづまれば傾てまた、武者振りを見よかしに、海老殻胴の鎧被て髯の薙刀ひらめかす奴、そこにもひよろり、こゝにもひよろり、ひよろりひよろ〳〵、ひよろ〳〵。人を瞋るか人に誇るか高く出たる眼をむいて、いきほひ示す上睨み。」

かりそめのわざくれながら已み難く、此度こそはと大男、鵜の鳥ほどに目を睜りて椶櫚の葉ほどに掌をひろげ、捉らんとすればついと迯ぐ。追へば又候ついと迯ぐ。くる〳〵と追ひまはせばつい〳〵ついのついと迯ぐ。逃がさじものとあせるまゝ、肘までも無き小流の水は騒ぎて肩越せど、飛沫は飛んで背を撲てど、手に觸るゝのみ捉りは得ず。」

大男、〳〵。身長ならばもろこしの、圃に立ちて首もかくれず、膂力なら擣臼を、双手に擡げて顔も紅めぬ大漢子の、こん〳〵小蝦見に逃げられて愚魯に見えぬ立姿。花の香送る春風は髯のほつれをからかふて、天の雲雀の誰が事を語り立てゝか鳴きて行く。」

雨ふらぬ日に濡姿、人の見るめも羞かしく、我が袖見るもおぞましゝ。あら口惜とおもへども詮術なくて歸りし夜、松のして燒く火のかげに、急速造りの網針もて、急速造りの目板もて、麻絲むすぶ蘘股、また悔むべき目は見じと玉網一ッすきなしつ、柳の枝に縁つくり、苦竹の竿に柄つくりて、明日はこれもて撈はんと思ひ寐の夢樂しくも肘を枕に睡りけり。」

も快く飲み終り恐る〳〵信忠に獻して頷づくに、信長重ねて笑ましげに、忠次汝は武邊ばかりの無骨者ならで舞さへ舞ふよし。撈蜆蝦の舞とやらいふ舞を自慢致して舞ふ由を信長よつく存じ居るぞ。所望ぢや忠次一トさし舞ふて一同にひとしほ鋭氣を増させよ。一同も見度からん信長も見たい。所望ぢや、撈蝦兒を舞ふて見せよ。と打解けての命に辭みもならず、ハ、何事かと存ぜしに撈蝦兒の御所望は恐れ入り奉る。さりながら既に忠次めの舞ふ由御承知ある上は女々しく隱し立も罷り成らず、花洛の手振りを見慣れ玉へる御眼の笑ひも羞かしけれど、是非に及ばす舞ひ申さんと少し退りて立上り。

音もせてゆる〳〵と行く水に射す春の日かげのやはらかに底まで透きて見せにけり、藻がくれ遊ぶ小蝦兒めを、小苔嬲る小蝦兒めを。田の畔添ひの小流に。」

眼をとめて靜に見れば、あら、小賢しの蝦兒のすがたよ。天より受けし武具をひし〳〵と身に鎧ほふて、龍頭かと疑はす自然なる兜被て、その鍬形にかたどるか二タもと小鬚張り出して、餘る二つの長髯を鎗薙刀と閃めかす。あらこざかしの蝦兒の姿よ。」

可笑の蝦兒め、いで捉ろうよと、下り立つ男は丈高く、日かげゆらめく水は淺し。少時俯みて覗ふに、波しづまれば蝦はまた、藻がくれ遊びて安げなり、水苔嬲りて安げなり。」

すは今こそと翡翠の沒るが如き捷業に、捉らんとすればついと迯ぐ。逐へば又候ついと迯

ろわるもの無きか、柴田瀧川何とか思ふ、佐久間羽柴は何と思へる。と上座より信長眼を配りて一座の諸將の名を呼びかけつ問へど孰れも默々として言葉を出すものも無し。遙に下つて控へたる家康が臣の酒井忠次物言ひたげなる面地するを信長見るより瞋を含める面を直して小手招きしつ、其處に控へたるは德川殿の麾下に聞えたる酒井よな。近う寄れ、進め、此處へ來よ。如何に忠次、敵の形勢、汝は何と見たるぞ、聞かむ。と既其答を知れるが如く急込みたりし調子を變へて聲朗々と緩く問ひぬ。恐るゝ色無く進み出てたる忠次一禮して首をあげ、恐れながら忠次存ずる旨とは御斥候の言は全く違へり。小生間諜を以て窺はせもし且は自ら斥候もしたるに、敵は味方の半に足らず、特に自ら好んで大河を後に取つて陣せること笑ふに堪へたる無謀の振舞、これ然しながら惣御大將の、御謀計に深々と、陥りたると申して然るべきか。明日の一戰疑ひも無く味方の勝利に定まつたり。地を打つ槌は外るゝとも忠次が申す旨は違ふまじく覺えて候。と答ふれば信長莞爾と打笑て、應。左もあるべし左もあるべし。臆病者の眼にて見て臆病者の口より出せし言葉は全く取るに足らず。海道一の剛の者の汝が見決めたる上は此戰ひ勝利疑ひあらんや。敵を蹴散し甲信を取り、頓ては其勢に關東奥州斬靡けんこと今掌に取つて視るが如し。と欣然として手近にありたる大盃を把りあげ、自ら先づいと快げに仰き飲み、忠次、遣はす。受け候へ。して其盃これなる嫡子信忠に擬せ、信長が子を海道一の天晴汝が武勇にあやからせん辭退すな。と過分の褒美に面目を施して忠次

交す折しもあれや姿や那處、空に漂ふ雲の裏にか、啼きて過ぎ行く杜鵑の一聲二聲いと鋭く耳に落ち來るに忽然として我に回りし如く信房は首を回らして振仰げば、はらりと露の幾雫は火よりも烈しく熱したる大六が面に氷より猶冷かに零ち散りたり、いつより出居し涙なりけん。

其十二

同じ空吹く風なれど梅散る里には風情淋しく、柳舞ふ門には眺め長閑なり。音もせで降る春の雨も漁夫は眉をば皺めて喞ち農夫は額に手を加へて悦ぶ習なれば、一つ日の照らし玉ふところながら此處は武田方とは打て變つて、内心恐怖を抱かぬならねど大軍といふを恃みにして外邊は兎に角整々堂々、其隊其隊の旗幟は林の如く立ち列びて遙に馬の高嘶きの聲聞ゆるも勇しき織田方の本陣の勢の陽氣さ。隙間數への大將と名に立つたるだけ拔目も無き信長の指揮に、如才無して思慮密き家康が介添なり、搗て加へて敵は名に負ふ退くこと知らずの甲州武者といふ怖ろしさに、自然各自の料簡も無く士卒の末まで一團塊となつて和合せるは戰ひ勝つべき瑞相と云はゞ云ひつべし。されども美濃勢より出したる斥候のもの二度まで三度まで立歸りては、甲軍の陣營嚴重にして容易近寄ること叶はず犯し難く見えて候、と告げゝれば諸將色を失ひ、流石の信長も少し困じて、竹廣より家康等を喚び迎へ、一同打寄て軍議の席を開き、斥候の云ふところ是の如し、誰かある、別に思ふとこ

も知し召すべし、天命なれば是非に及ばず。恐らくは和殿の猶未だ知り玉はざる節もあり思ひ到り玉はぬところもあるべし。何はあれ、和殿は生き玉ひてあらるべきなれど死するよりほか忠節の致し方既無き身となりたる我等が心の中推量あれ。人誰か我が仕ふる君の榮え玉ふを生命ある間に見んことを冀はざるべき。それを我等は死して後我等を憐れと我が君の思さば非を改め玉はんかとの果敢無き頼みのみを胸にして死せんと決するに至りし悲しさ。されどこれ皆天命と諦むれば是非に貸すべき耳も無し。非と云はるゝとも疚しとせざれば、是と云はるゝとも何嬉しからん。たゞこれまでなり、これまでなり。和殿の如き快き男兒を初めて知り得し今日、和殿が肝膽を披いての其苦言にも酬ひ得で明日は忽ち娑婆の別れ。心を語つて共に興ずる一席の歡笑も催す暇無く、幽明相隔たりて永く再び見參せざるに至らんと、亂れたる世に生れあはせし不祥とは云へ最本意無し。惡くな取り玉ひそ大六殿。和殿は好う生きて殘り玉へ、好う生きて明日の戰濟みたる後を生きたる眼にて必ずともに好う見給はれ、信房屹度御賴み申す。御賴み申したるぞ英高殿、美濃は矢張死に申す哩、見參も恐らく是限ならん。と云ひ終つて兩眼刮と睜開き、緊しく大六が手を執りしまゝ、俯してつく〴〵と鬚髯漢が面を打護れば大六も、思ひ酬さぬ老勇士が胸臆の無量の悲苦を推して今は言葉も出し得ず、仰いで美濃が面をじつと少時は見詰めて目眴もせず。死すると生くると老と壯と二人の勇士が俯して見る眼と仰ぎ見る眼と瞳光互に相照らして神は生死の外の國に無限の思を語り

きたる方は御坐さぬよな、活きんと仕給ふ方は無きか。我が申せしこと過ちありや。御心爽しと承はりたる内藤殿は如何にか聞き給ふ。大六が申し狀道理とは覺さずや山縣殿。眞田殿何と覺しめす。土屋殿川窪殿各位も何とか聞き給ふ。叔父貴も無理とは思はれまいに。ゑゝ、ゑゝ、大六たゞ一人、かくまで悶え訴ふれど、情無くも無言にておはしらひ給ふよ。馬場殿。山縣殿。土屋殿。と呼べども全く答ふるものなし。馬場殿、馬場殿、馬場殿と聲は一ト聲一ト聲に漸く高く呼び立つれど、風さへ音なき夏の野に動くは雲の影ばなり、日にかゞやける鎧武者の裾より徐に兜まで薄墨色に翳り行きて、淋しく光の亡するのみ。今は堪へに堪へかねたる高英やをら身を起して、身分の差違も忘れしや中央の床机に端然たる馬場が側に膝行り寄り、悲憤の思に連れて迸る聲凄まじくも震顫を帶びて、かくても遂に死に給ふか、生き給はぬか、美濃殿よ。と云ひつゝ兩手を肩にかけて、磐石なんどを動かす如くに搖り動かせば、信房ゆたかに其手をば脫しながらに立上りて、大六が身を搔き抱き、天を空振仰ぎて錆聲太く、嬉しくも武田の御家に、和殿の如きが猶ありしよ。云はるゝところも義理至極せり。誰か否と申すべき。さりながら我等は時來りぬ。老いたり。死すべき時來れり。死すべき機會にも臨めり。我存のみにて死なんとならば和殿が意見にも就くべけれど、時なり事情なり機會なり天命なれば是非に及ばず。和殿が意見にも就くとならねば死を甘んずる我等が料簡、推量あれや大六殿。美濃が強辯には候はず。此時此心八幡大菩薩諏訪明神も照覽あり天翔り玉ふ先君の御魂

ても各位の中、生きらるゝだけは生延びて御屋形のため世にあるべしと、思ひ飜し給はる御方は、たゞの一人も御坐さゞるや。たッ、たゞの一人も御坐さゞるや。あゝッ、八幡大菩薩諏訪明神も云甲斐なき神にて御坐すかな。もはや新羅の流れの末の御家を見放し玉ひしか。もとより精忠無二にて御坐す人々のことなれば、其胸の闇に神々の、些少の光をさへ投げ給はんには直に奮つて再び活ける勇士となり御家のため働かれんに、ゑゝ情無し、口惜し、見渡す一坐は悪鬼すら恐るべき勇士のみなれど、寂然として石の如く物も云ひ玉はぬ其風情は形骸こそ猶完けれ死したる人の如く見ゆ。将に死せんとするものは其影薄しと聞きつるも、取るに足らざる冗語と思ひ捨て居しに今日はじめて、影薄き人を見る忌はしさ。各位よ、如何に各位よ。天の日は猶墜ち給はず、草木の花には實を結び、人の念は遂げらるゝ世ぞ。復び世に返り玉はずや。と時雨過ぎたる晴れ空に輝き増る日の如き涙の後の爛々たる眼をば睜りて大音に高英は一人意氣まき喚べと、此時日頃は鬼をも挫ぐ甲陽の勇士何十人何如なる思に沈みてか、たゞ雨露に古されたる神將力士の像の如く、身動きもせず言葉も出さず、いづれも眼を瞑ぢ首を垂て呼吸さへ爲るか爲ぬかの態なり。大六これに眼を怒らし齒咬をなして坐を進め、ゑゝ云甲斐無き人々かな。大六が今申せしことに是非の沙汰さへ爲し玉ふ方は一人も御坐さぬか。思ひ捨てたる世にはあれど今一度立返りて働かんと思ひ給はる方は無きか。かくまで申せど誰殿も有無の一言さへ發し給はぬ御心强さの恨めしさよ。如何に此の中に唯の一人も生

撓形に游がせて手綱絞るな、歩卒は手に手を取組みて、槍の柄取交へ闉つて渡れと、自身眞先に馬を游がせ進まれしに、逆卷波は馬背を流ひ、鎧の總角水面に躍つて、唯指物の將棋の駒のみ水煙の中に立つて見え、さも勇しく打越されしが、其折信玄公は逍遙軒殿に、彼の初鹿野は武勇勝れて好きものなれど朋輩を淩ぐ心强ければ我愛せず、將棋の駒に香車といふ字をあらはせしは是渠が其駒の如く進んでは决して退かじといふ意をは寄せしならんが、よし無き所爲なりと御物語りありし由。小生は耳に聞覺えぬ、各位は眼にや見給ひつらん。初鹿野殿を信玄公の眞實御隣愍無きにどならば如何で御噂のあるべきや。御言葉は即ち御敎訓にて、先君御一代の御所行に香車の駒の指物を由無き所爲との御言葉を照らし考ふれは、我も他も思ひ得て餘りあること。釋迦に說法片腹痛しと思すかは知らざれど御聞あれ。故殿は傳右殿の香車をさへ由無しと仰せられしにあらすや。然るに自他とも甲陽の龍王龍馬とも賴みつきたる古老の馬場殿、內藤殿、山縣殿乃至各位が、たゞ敵陣に突蒐りて、果てんと决し給ひしは、時運か天運か存ぜざれど、武田の御家もこれ限りかと思はれて堪へんにも堪へかぬる悲痛を覺え候ぞや。柱とも礎ともいふ各位が皆亡せたまはゞ、各位はよかるべきが後に遺る御屋形は如何になり玉はんか。それをば思ひ玉はざる各位にはあらざるべきが其の各位が此の决心を爲し給ふにも至りしかと、思へば思へば膓が扯斷らるゝ心地して、この大六は堪へ申さぬ。泣きたるが無理にて候や、泣かさる各位が無理なりや。かくまで愚なる繰言を申しのべ

甚だ御恨めしう存じ申す。屋形の御振舞日に月に、よからぬ方にのみ傾き玉ひて釣閑大炊づれが言を用ゐ、耳に逆ふ忠義の士が諫言は露取りあげ給はず、偏に天魔に魅られて御坐すが如き今日此頃、もはや百計盡きたりと見限り給ひて各位が、生きて主家の覆へるを見んよりはと思し立たれしは然ることながら、何故一應再三應思ひ返しは仕給はざるや。承はり及ぶ前日の軍議の席にての一部始終、古老の御三方が血を吐くばかりの御苦諫も無下に斥けられ、長坂跡部が追從のみを御屋形には御取り用ゐになりしことの悲しさ口惜さ。各位の愈此の憂き世を思ひ捨て給ひて、旗指物によく見る文字の厭離穢土欣求淨土と決められしは斯申す大六とても無理なりとはなか〱存じ申さねど、いや、然もあるべしと推し申して同じ思の涙さへ誘はれぬでは無きなれど、こゝが男兒と生れ來て弓弼太刀欄握る身の蹈み堪へねばならぬ瀬かと此の大六は存じ申す。よも過りには候まじ。弓矢取る身の辛きことは弓矢取る身の避くべきならず、生きてはもとより君のため、死して厲鬼となつてまでも君の御爲に狂はんこそ一旦男兒が主從の契を爲せし上は本意なれ。さるを精忠無二の各位一圖に此世を捨て給はんとは、是非なき義とは申しながら、口惜くも思ひ限り給ひしよ。申さずとても御存じあらんが信玄公猶御在世の時、永祿十二の北條攻の節と覺えしが、大雨降續いて水量増り、酒匂の川の越え難く見えたる砌に、初鹿野傳右衞門殿瀨踏ありて、手の勢二百餘人を下知し、我此川の先陣ぞ、續けや者共猶豫ふなと馬の頭を川上に向け、鞍の跡輪を越して三途に乘下り、鐙

勢の見覺えにとて出しとのこと。我は一度見巡りしなれども繰返して損無き事と後を追ふて處々尋ねし末此處に來りて各位の團坐し玉ふを見受けしが、我は馬場殿を首めとして各位にも御見覺えあるか無きかの、小身者の分際なれば、こと〳〵しく差出でんも如何と存じ、あれなる樹蔭に控へ居しに、朧氣ながら猜せらるゝ一坐の事態たゞ事ならず。是はそも如何にと思ひ迷ひし折しも馬場殿山縣殿內藤殿等が立上りて敵陣の方に打向ひ、心よげに云はれたる言葉の端々、洩れ聞けば正しく明日は是非とも死に決められしに疑ひ無しと合點したる時の悲しさ。ゑゝ後れたり今少し早く此場に來合せなば、身分の差違はあるにせよ思慮の淺深はあるにせよ、其覺悟決め玉はざるに臨んで、其處に跳り出で、叶はぬまでも甲陽の柱石たる馬場殿山縣殿內藤殿其他の各位に打向ひて愚存を申し述べ爭ひ諫めて其御決心を遏めんとなすべかりしに、あら口惜や、御屋形の御不祥か敵の利運か、時ははや過ぎて、言はむに甲斐なく、明日は空しく御屋形に取り股肱と云はんか爪牙と云はんか甲信の兵士が骨とも賴み肝とも賴む各位を憎き敵の手に委ねんかと、思へば思へば大六が胸には氷の張り詰めて、眼に瞻し前途の希望の燈も墨磨り流す黑雲に全く鎖され果し心地、無念とも心外とも云ふべき言葉を存じ申さず。婦女童蒙の愚痴には似たれど高坂殿のあはれ此の陣中に坐さば各位をしてかゝる御分別はあらしめいで、濟まさせ玉はんものをと遺憾に堪へず、黃口若輩の小生如きが申さんは烏滸なれど一向に死をのみ望まるゝ各位の御意見は神以て大六つや〳〵合點まゐらず、

落させ呉れんず。わら心地快や胸涼しや。と遥に敵陣の方を睥睨みて凛然として然も快げに微笑を洩せし其面は、神采溢れて年波の寄せし皺をも見るものに心付かせぬばかりなり。山縣内藤其他の者も共に立上つて敵の方を眺め遣りつゝ、吾等とても美濃殿に劣りはせじ、思ひ置くこと更に無ければ、潔く明日は血戰して、些面白き譚になるほどの事を爲出したる後其土産話を携へて先君を尋ねまゐらせん、アハヽヽと笑ふ内藤の其高笑ひは全くの笑なれども敵若し聞かば頭を削らるゝ思ひすべく、修理殿の言葉の面白や、我もたゞ死ねぬ山縣昌景、一條鐵のやうな根性骨を氣息の絶ゆるまで續かせて、快く狂つて死んで呉れう。と赤鬼と呼ばれし三郎兵衛が抛出したやうな一言は味方が聞きてさへ明日の猛威さぞやとおもはれて物凄じ。土屋川窪眞田笠井の面々も互に顔を見合はせて胸中の無限の感慨を淋しき片頰の笑に語り、いて〳〵明日はと思ひ決めし眼稜鋭く見え渡り、何とも云へぬ肅殺の氣の此の一場を蔽へる折しも、忽然として背後の方に、這ふか立つかの幼兒の心に任かせぬことありて父をも母をも憚からず泣き出でしごとくの大聲あげて、わあつとばかりに泣く聲す。敏捷き内藤屹と顧み、大音あげて泣き玉ふは誰殿にて御坐すぞ。心得ず。各位の中にはあらぬよな。それ眞田殿貴卿の背後の花香しき朴の木蔭の小篠戰ぎて人ありと見ゆ、撿め玉へ。と不審れば、陣扇片手に歩み寄りて、何者と畳輝詰り問ふに、此時小笹の間より身を起して此方へ歩み來り、衆人の眼の蒐まる中に怯れげもなくどつかと坐りて、各位騒ぎ玉ふにおよばず、これは高坂

として馬場が述懐を聞き居けるが、いしくも云はれたり美濃守殿。誰云ひ合はせし事にはあらねど、我が思ひは彼も知り彼が思ひは我も知り、互に知り合へる男兒同士、肝膽相照す武士の交情は違はず皆一樣の覺悟決めし此の團欒、清み透りたる心とひとしき濁りも澱みも無き清水を汲まんは酒より相應しかるべし。と堪へぬ涙片手に答へぬ。少し下りて控へたる土屋直村、土屋備前、眞田昌輝、笠井高利、川窪備後、小山田盛高其他の諸將等も泫然として首を俯しつゝ咽び居しが、馬場殿內藤殿、山縣殿を首として各位にも永き年月の間御懇意を得たる我等今日、よしや酒にはあらずとも清水を汲んで日頃の情を盡さんこと一期の本懷至極、嬉しく存じ候なり。と大の男兒が强てつくる笑顏も中々あはれなり。馬場が從者は意得て檜桶に水を汲み來れば、美濃守徐に腰に差したる水呑杓を抽き出して時に取つての盃とし、一杯干して言葉も無く內藤に渡せば內藤も同く干して山縣に擬す。山縣より以下土屋眞田と次第〳〵に酌みかはして、終れば信房立上りて、あら心地快や胸すゞしや。瀧の水をば酒と飮みし往時は知らず骨にも泌み入る此冷かなる眞清水の、喉を下ると諸共に身內に煙り居たる世の其芥火は消やし去られて、筋骨節々すべて皆氷の如く澄み切つたる無垢の身軀となりし心地、心引かるゝこととては旣一點も此世に無く、迷の殘る念も無し。いで此上は明日の戰、一期の思ひ出に故御屋形の、御鑑識に叶ひたる甲州武士が最期の態を見覺えよと、骨は拆げて絲と飛ぶまて、叱咤の息氣には熱血の霧を噴くまで荒れに荒れて、家康信長め等が膽を

捨てられて然るべし。それは扨置き信房が申すまでも無く明日の一戦は諸君必死に決められしことなるべきが信房も後れはせじと思ふなり。武田の御家傾くべき時來りしや佞人等の言のみ用ゐられて吾等が言は兎の毫の端ほども用ゐられず。血を吐くまでに肺肝を碎きて謀計を立つるとも、刀の刄金の絶ゆるゝまで鎗の穗先の折るゝまで奮戰するとも、如何でかは功を成し益を成し得べき。生命を惜み後日を期して生き長ふるも世に有る例なれども生きて御家の亡びんを見んは忍びぬことなり。こゝに潔く戰死して二無き心の程をもあらはし、君に報ずる微志を遂げんと、思へば方々と語を交へ手を取り交して睦みあふも今生は既今日限りなり。太平無事の世の中に我他とも生れ合はさゝる幸福には、劒の光りの下、鐵砲の丸の響く間にて生死掛けの交りを結べるなれば、互に心の剛愎より氣意の働き方まで知り拔いて、露いつはりもいつはられもせぬ眞の朋友を持ち合ひたるが、參會も今日と限りたれば、此世は愚未來まで鎧の袖を聯ね行くよく〳〵深き緣に搦らむ其眞情を汲みあふて酒宴をなりと催したけれど、此時此地何とすべき樣もあらねば殘多く聊か物足らぬ心地するなり。幸ひ、見られよ、村の名に負ふ潔き清水のとく〳〵と此處に沸き居るは我等が汲まむを待ち設けつゝあるにも似たり。此の清水を汲み酒に擬へ、こゝに聊生前の別を惜み、兼てはまた、死後までも一つ心もて同じ道行も同じく地下に先君の御許を訪ひまゐらする盟ともせんは如何にぞや。內藤殿、山縣殿、土屋殿、眞田殿、笠井殿餘の方々も何とか思すと云ひ出づるに、內藤山縣は肅然

彼等がことは云はずもよし、たゞ重ね〴〵口惜きは美濃殿貴卿の云はるゝ如く、吾輩の誠の吾君に通ぜでかゝる場合に至り、故殿に泉下にて見參しまゐらするにも好き噂を齎らしまゐらすることの叶はぬ事ばかり。それにつけても前年の軍議の折柄長坂を罵つたる我が過失は、彼等をして愈増に吾君と吾輩との間を隔てしむるやう爲せし基と、昌豐は取別け各位よりも悔恨の情に得堪へ申さぬ。一列同坐の間柄なれども各位の忠義をも無にさせ申すは、畢竟吾が思慮深からで釣閑を激させしよりの事とおもへば、現世に於て相見ることも既長かるまじき今日たゞ今、昌豐謹んで各位に吾が疎忽をば詫び入り申す。各位赦し玉はらば思ひ置くこと全く無く、昌豐快く死に得ると申すものにて候。と一同に對ひ首を下げしは匿すもの無き心の底の無邪氣に優しきほども見えて、小兒も馴るべき風情なり。先刻より默然たりし山縣、突と身を起し將几を離れて口よりも先づ手を動かし、急に內藤を制しながら、修理殿謝罪ることもござらぬ。誰も貴卿を怨みはせず。斯樣なることも皆天命、美濃殿左樣ではござらぬ歟。と云へば信房も點頭て、修理殿が蟠り無き心より自己を責むることあるのみと我が云ひしをば身に取りて、釣閑を罵りしを悔いらるゝは然ることながら、悔いて甲斐無し、誰か此中に修理殿を怨まうものゝあるべきや。吾等はいづれも皆戰陣の間に助けつ助けられつして今日までに至りしもの、底の底まで知り拔いたる同士なれば相互の過失は有りしにもせよ、忘るべき間なり、まして彼の事は强ちに修理殿が惡かりしにもあらぬを、隔意がましき挨拶は修理殿

を一度にても那の道にてか爲しことあらば我が身ぐらゐは其の道に捨てゝ遣るとも惜むに足らず。美濃が思ふには人と生れて何の道にもたづさはらで眞實徹底の微笑の一つもせずして終らんこそ悔しくもまた羞かしけれ。身の安逸は云ふに足らず。吾輩はいづれも武士となりて今日まで過ごし、武道の至極の詮義にも各自得るところありしなれば、其各自が微笑の酬として兎ても角ても槍刀に生命は與へて濟まぬ筈の身、蝶鳥樵夫山賤は羨みたうても羨まれず。修理殿貴卿の言葉の如きは仔細ありてにあらざれど聞くもの惡く取做さば君を怨むる言とや云ふべき。返す〴〵も我輩はたゞ我輩の智慮の及ばずして御屋形に由無き御振舞を爲させ奉るを慨くべきのみ。數にもいらぬ吾輩が身は、見られよ頭上の彼の廣大なる天と足下の此の際涯知らぬ地との間の小さき塵、取出で云ふべきことも無ければ、ハ、、修理殿笑ふて仕舞ふて、笑ふて仕舞ふて睦まじく、死出の山路の一番二番、三途の河の佐々木梶原、駒の首を立並べて地獄の鐵の門内に乘入るばかりの事ぢやまで。ハハ、ハハ、フ、、、と打笑ふに、氣作の内藤は我が過ちを遂げんともせず同じく笑ひて、ハ、、、如何にも美濃殿の云はるゝ通りに相違は無し。斯程忠義を勵む吾輩の言葉は聽かれず釣閑づれの云ふことのみを用ゐらるゝ御屋形の御振舞を情無く思ひし餘り、此時候の快さに不圖愚痴めいたることを蒸し出されて、口に出せしは昌豐一生の過ちの終りでがなおろう、ハ、、ハ、、、さりながら假令釣閑狐め等、吾が言を聞きて何といふとも今度は彼等の賢い口も此の昌豐が不在を見舞はう。ハ、、、、

と末は聲さへ少し曇りて愴然として語り掛くれば、美濃も些少悲みの色を面に浮べながら、修理殿の云はるゝところは誰の胸にも恐らくは湧けるところの想にもやと覺ゆるなり。日の沒る前に東の方の山の明るく見ゆる如く、過ぎ來し方の長き夢の今の心に映りて出づるも、明日に逼れる生命をもてる我等が上なれば怪しうもあらず。貴卿の歎息も一々皆道理なるには相違無く、口にこそ云はね其意持たざるものも少かるべし。されど何事も此處に至つて云はんは聊か嫌無からず。たゞ返す〳〵も口惜きは、武田の御家に天運惠まず、我輩の忠義も猶足らずてか明日の一戰に及ばんことなり。云はるゝ如く雲に翔ける禽ほどの自由も身に覺えず、又吹く風に身を任せて思ひも無げに飛ぶ蝶の如く長閑に一日にても暮したる事無き我等が此の夢幻の一生は、今更悲しからぬにもあらねど是も皆天なり。樵夫山賤の境界も今日こそ羨ましきものに思へ、先君の如き御嚴明の御方に逢ひ奉れば、あはれ男兒と生れし甲斐にはかゝる君の驥尾に附してなりと千里を行きて功を立て名を成さんものをと心勇みて、成佛も肯はず死も厭はず、血の汗かきても打笑みて御奉公をば爲しにはあらずや。貴卿にせよ又山縣殿其他の諸士にせよ吾輩にせよ。いづれも肉に骨を包み血に火を宿せる、上からは、爲すこと無くして死ねぬ同士。なか〳〵蝶禽なんどをば學びてあるべきものにはあらず。されば修理殿も思ひ見られよ、我輩にはまた我輩相應、武道にかけて快き思ひも爲て來しものにはあらずや。はて世間の面白きは那の道にせよ我知らず我から微笑むばかりのこと。その微笑

て、遂にひとたび面白くゆたかに花をも月をも見ず。たま〳〵見るは見ながらも、敵の虚實を覗ふ斥候に一騎駈け行く細山徑、木にも萱にも心置きて、畑燒く煙も若や敵かと疑ふ中にて見る花は、山の峽より白雲と假令見ゆるにせよ何が長閑き。侮り難き敵に逢ひて心もしまる霜の夜に夜討や來ると睡りもせで見巡る陣の前後、秋風冷かに吾が兜の吹返へしに當つて身に浸み入る折柄燃ゆる松篝火の煙の中より中天に小く澄める影を仰いで眉庇の端に見る月は、清光よしや千里を照らすも、たゞ悲愴の感の增すのみ。弓矢取る身の花月にまで背く果敢なさを取出でゝ今更云ふにはあらねども此の世の頼み難きをば思ふにつけて、此の樂しげなる夏の初の天地の間に包まれながら、何の禽かは知らざれど、あれ御覽ぜよ雲に冲る彼の禽ほどの身の安さをも得ぬ老武者の此の身はさても可憐のものよと思ふも無理には候はじよ。年若かりし程こそは、人に負くまじ後るまじの一心のみに身を任せ、初老に及んでは故御屋形の一天下鎭め玉はんとの御大志に身をも心をも委ね奉つて仕へつれ、老いて此世の限りも知らるゝ今に至つて恐ろしき常御屋形を頭に戴き、恐ろしき此度の如き戰場に臨むかと思へば未練ながら、御笑ひあるな、甲冑を着け初めし日より忍びの緒を斷る今日が日までの長き夢が一時に眼の前に湧き出でゝ、人生二萬日餘りの非を諭すやう思はるゝまゝ、坐に樵夫山賤の賤き生涯が羨ましく、何とて弓矢取る身には生れ來りて虚榮の名譽に泣きつ笑ひつ今日まで經しかと只管我が身を慚づるなるが、我等に比べては書物も讀まれし美濃殿は何と思はるゝ。

れるが如く枝葉を交へし蔭を畢竟の住家とや頼むべき、と言はず語らず互に皆心に思ふを免れねば、自然と言葉も左右なくは放つものさへあらずして、人數こそは少からざれ、物凄き迄物靜に、蝶も鬼髭生ひたる男の鎧の袖に狎れん程なり。

鎗は秋野の芒と閃き矢玉は雨や霰と散る中に立ちても悠然として、談笑の面に皺一つよせず、何曾／＼一つかけ申さん試みに解き候へと一人が云へば、一人は又、いしくも云はれたり、如何なる難き何曾にもあれ彼の敵切て崩すと共に御身の何曾も解き申さんと戯れ合ひし事もありし程の内藤修理と馬場美濃とは、かゝる際にも一人は心冴／＼しく一人は胸のゆたかなれば、平生とも差して異れる態無く、修理は顧みて調子も輕く、美濃殿何と思はるゝ。五月も中を旣過ぎて花は無けれど梢吹く風は薫しき今日此頃、うらゝかなりとは云ひ難けれど曇れるでも無き天の摸樣、折々洩るゝ日の光を、あらずもがなに思ふほどほか／＼暖き此時候、胸に念も何も無く、身に鎧も無く冑も無き土民の分際にてあらんには、綿脫衣の襟をくつろげて木の根を枕に草を茵に、足踏み伸ばして悠々と長閑な晝睡でも爲べきものを、さて前生の業の拙いゆゑでもあろう歟、吾等風情は風がからかう松が枝の音樂ひとつ靜に味ふ樂さへも得取らいで、柳の芽ざす春から雪の野山を埋める冬の末まで、弓なり矢なり鐵砲なり、楯なり太刀なり薙刀なり、武具いぢりにのみ日も月も暮して仕舞ひ、花なら鍼の名の小櫻に、それかとばかりの風情を忍び、月なら駒の毛の色に通ふ名のみに思を寄せ

三隊、大膽にも亦無法にも、大軍の上思慮深く柵迄結ひて大事を取れる信長家康が勢に向ひぬ。

其十一

如何に諫めても用ゐられず、此上はとて心を死に決せし甲陽勇士の面々、明くれば五月廿日、打連れ立ちて明日の戰場たるべき其邊等の地理を考へ置き、時に臨みて駈引に不覺の名をば殘すまじと馬場山縣を首として内藤土屋小幡河西其他の人々諸共に岩代川の岸を傳ひ、船着山を左に見て足場の善悪、坂の勾配道幅の廣狹、目標たるべき一簇の森、獨立ちの高樹なんどを心に留め、假令屍は空しく朽つとも能く戰ひて終りたりとの好名ばかりも止めんとの心搆に巡覽せしが大概その事終りし頃清井田村と云ふに到り、馬より下り立ち床几に腰を凭せて少時休息したり。

焔硝の煙の靄に咽び、腥き眞紅の血の雨に幾度か濡れて世を經たる覺の強者不敵の勇士も、流石に明日は千に一つも生くるとなく閻魔の廳へ駈込みなんと思入りたることなれば、頃は五月の天暖く、時を得顔に翠を飾りて空に瀰蔓る樹々の若葉の色なつかしく香へるも、陽氣に乗りて翼輕く雲間に翔ける諸鳥の聲美しく鳴き渡るも、思ある眼思ある耳には樂しからず、小高き地のことなれば眺望なきにはあらざれど悲愴の感に胸を撃たれて、誰取出でゝ面白き眺望かなと云ふ者も無く、彼所の小笹の茂れる内に明日は五尺の我身をや横ふ、此所の老木の時を忘れて新緑やさしく絹蓋を張

か、又戰を御止め申しはしたれども身を厭ひてにあらざりしかば、後に知らるゝことあるべし、如何に長阪殿跡部殿、足下等頻りに御屋形に戰を勸められはしたれど、若し敗軍に及びなば、足下等は何とか爲し給ふや、よも戰を言張りて其戰に敗れたらんその曉は命を惜みて、おめ〳〵敵に背を見せ、甲州に逃入り留守の諸士等に生面を見られんとは爲給はざるべし。我等は戰を不可とは云ひしが生きて再び朋輩の高阪彈正其他の者の此度の出陣に與からざる人等に面を見せんとは夢にも思ひ候はず、と內藤一句馬場一句云ひ續ぎ〳〵心を述べて、さらば出陣の用意に及ばんと各自坐をば退きぬ。

御旗楯無をかけての誓を云出だされし事なれば是非に及ばず各自皆出陣の用意にとりかゝり、馬場美濃守信房、穴山梅雪、一條右衞門尉信龍、眞田源太左衞門信綱、弟同苗兵部少輔昌輝、土屋總藏昌恒、併せて五隊其兵八百、大宮前の佐久間羽柴明智が陣に打向ひ、武田逍遙軒信連、內藤修理正昌豐、原胤長、和田左衞門尉、永根雅樂之助、松本兵部、安中左近等四千六百餘兵は柳田の前に控へたる蒲生忠三郎氏鄕丹羽氏次に向ひ、武田左馬介信豐、山縣三郎兵衞昌景、小幡上總介信實、小笠原信嶺、松岡三河守、小山田右兵衞信茂、跡部大炊助信元等四千五百餘兵、正樂寺前竹廣に出でゝ家康が麾下の別隊大久保忠世仝忠佐、松平忠次等が陣に向ひぬ。勝賴自身は望月右近義勝を前軍と爲し武田左衞門介を後軍とし、清井田原に打て出で、家康が麾下に向はんとし、總勢都て十

如く、眼の光り爛々として二言と云はゞ馬場にもあれ山縣にもあれ内藤にもあれ一刀の下に兩斷すべき意も見えたる形相は、見るものもそゞろに心戰ひて髮さへ逆立つを覺ゆるまでなり。

其 十

山縣三郎兵衞昌景は吾主が淺ましき有様を見て何と思ひしか知らざれど、ハッと首を下げし限り默然たること良久しかりし後、左しも勢込みたりし面に忽ち悲しみの色を浮べ、鬼をも睨み潰す可く睜りたりし眼に涙を湛へて、底力ある曇聲に、吾君斯迄のたまふ上は、今更何をか申す可き。兎ても角ても始より身を捧げたる我等なれば、善惡利害はさもあらばあれ、今は御言葉につき候て仰の儘に何れの手へも立向ひ、奮戰致し候可し。馬場殿内藤殿を首め何れも同じ覺悟なるべし。如何に方々何とか覺す、と顧り眄れば熱涙はばらりと散りて朱の鎧の袖に霰と手迸りたり。馬場美濃守信房も内藤修理正昌豐も同じく涙を催しつゝ悄然として凍れる如く身動きもせでありけるが、山縣殿の云はるゝ如く、身は惜しからぬ我等なれば、吾君御旗御鎧をかけて誓言仕玉ひたる此期に及んで何か有るべき、御屋形の御意に從ひて信長家康何とあるとも、石にもあるまじ鐵にもあるまじ、太刀の刄金の續く程切て切て切捲り、鐵砲の筒の裂くる迄も打ちに打つて打懲め、所詮は必死の覺悟を決めて河原の露と身をなすべく思ひ定めんに論も評議も今更あるべき事にはあらず。卑怯なりし

用ゐて過ち給ひし事も無きには御坐さゞりしが、一度その非を悟り給ひしその曉には吝む色なく、前非を捨てゝ直に善に遷り給ひしかば、御一代に大過なくして大功をば終に成し遂げ給ひつるなり。我から己に克ち得ぬは剛きに似たれど實は惰弱と申すものかと昌景は此齢の今まで覺えて候。耳に聞好き言葉を取り舌に心好き味をのみ貪り給はゞその禍恐らくは測り難からん。君を勸めて非を遂げしむるやうなる者は何時も君の御意には召すべきが君の御爲まことは惡しきものゝ頂上なり。說惑はされ給ふ可からず。今度の御一戰然る可しとはそも何者のさは申せし。おもふに其奴は諛ひものか、然らずば軍事に眼先の見えぬ三歲兒同樣の白痴なるべし、昌景其奴と對論せん、昌景非ならば首を授けん、其者非なるに決まらば、君を迷はし奉る敵に內通同然の覺悟の奸物、此の昌景が其場は立たせじ、決して御一戰御無用なり。御無用に候。いや、御無用に候。御無用でござる。と剛强の名を得たる昌景が銳き語氣は叱るが如く面を犯して强諫すれば、勝賴勃然と色を變じて、默れ、昌景。云ふな。聞かぬは。當家の重器旗鎧をかけて是に非に一戰と、勝賴こゝに決したるぞ、諸將も今更諫め立て一向無用なり、誓ひしぞよ、假令敗るればとてそれ迄なり。ましてや勝敗は衆寡に因らずと先君も既にのたまへり。諏訪明神の御冥護もあり八幡大菩薩の御加護もあり、神明の威德衰へずば、武田の家の大事の戰の如何で勝利を得ぬとあるべき。努〳〵疑ふとなくして諸軍心を一致なし、たゞ吾命を聞き候へ。と威猛高になつて大音に、告ぐる勢物凄く、面はさながら火の

所故、必定言說は其所に止むべし、と智慧あり顏に云ひ出でたり。一旦心は是非利害の二途に岐れて迷ひしも、復吾が念に力を添ゆる信元が言葉に執拗の我意の燃え立ては年若きだけ分別錬れざる勝頼は、心を忽ち固くして、好き事思ひ得たるかなと云はぬばかりの得意の笑を面上にあらはして打點頭き、然らば馬場はじめ諸將等を直に喚べと命じたり。

諸將等ふたゝび召出されて本陣にあつまれば勝頼言葉かど〳〵しく、前に軍議は決せざりしが熟考の上決斷せり。是非に一戰を遂ぐるなり。今改めて命ずる上は兎角を云はず用意せよ。と嚴重に命を下したり。前刻に一人ならず二人三人、三人まで口を揃へて諫しからは或は思ひ返へし給はりて我等が言に從ひ給はる事もやあると一縷の望をかけ居たる山縣内藤等は云ふに及ばず美濃守其他の諸士まで今此言葉に、豫て期せぬにはあらざれどアッと計り今更驚き悲しみしが、日頃無口の山縣もこゝに至りて默し得ず、つか〳〵と前に進み出で、洪鐘の鳴る如き聲して、吾君物にや狂はせ給ふ。内藤馬場の兩人のものゝ申せしことを御理解無きや。御合點まゐらぬことは御坐さじ。然るを一圖に御我存を立てんとせらるゝは信玄公より折角殘し置き給ひたる故老を一文半錢の價値なきものとや覺し給ふ。假令ば昌豐信房等取るに足らざる者にもせよ、矢玉の間をくゞり拔けて千軍萬馬の間に年を經、軍法の幾條も編み出し得し程經驗を重ねし強者の、その經驗をも取るに足らざるものと覺さば御過失なるべし。諫言何時も耳に忤ひ良藥何時も口に苦き習に候へば、故信玄公も、諫を

其九

我意を飽迄貫き度は思ひながらも勝頼は、内藤馬場を首として宿將勇士と頼み思へる吾家屈指の面々何れも、吾意に就かざる樣子を見て流石に心引戻さるゝ傾き無きにもあらざれば、思案に餘りて皆々の去りたる後に殘り居たる大炊に向つて、老臣等は皆戰を無用と云ひ我は一戰せんと思ふ、我と老臣等と料簡違ひて、今の軍議も難儀に及べり、汝何とか分別ありやと尋ぬるに、信元も心弱くて眼前の才のみ働く者なれば、主人を諫めん心は無く、只意を迎ふる計りの挨拶、吾君心を決め給ひて一戰を遂げんと思し給ふに臣下の身として御意を阻み奉り御言葉をもどき奉ることあるべからず。先君の御時に候はゞ誰一人能く口をたゝき申さん。吾君未だ御齡若くましませば、諸將等にも廣大の御度量をもて御斟酌あるものから、付上りて賢し氣に思ひ〳〵何とか意見を立つるなるべし。勝負は衆寡に因らずとは先君も既にのたまへり。君固く決斷し給ふて嚴重に令を下し給はば、老臣等も諫むることとあるべからず。それにても猶諫めなば、千言萬語縷陳するとも思返す儀あるべからずと、御當家に定まりたる誓言をたて給はんには、如何で彼等猶口賢く申す可き、御累代の御重器八幡太郎義家公の御旗新羅三郎義光公の楯無の鎧をかけ給ひて御誓言あらんには山裂け海渇くことはありとも復變ずる事あるべからざる定法は、馬場山縣は申すに及ばず雜卒までも知る

き兩將の信長如何で味方の策にかゝりて空しく日を暮さんや。三手の兵の眼前に在るを先づ打拂はんと一戰に及ばゝ何とさるべきぞ、と云ふに信房少しも動ぜず。されば候、釣閑老。其期に臨まば必死にして戰ふより外法も無し、と答凉しく云流すを、得たりと附入りて怪しく頰に笑を浮べつゝ、馬塲殿聞かれよ、その時戰ふも御屋形の仰につきて戰ふも同じ事にはあらざるや、さらば取出で異見を立てゝ賢顏をば爲されんより吾君の仰に從ひ玉ひて然るべきにはあらずや。と飽迄主に諛ひ三昧、是に非に係らず宿將等の意見をも無にして己が舌の滑なるに任せゝつ、單に勝頼が心のまゝ振舞はせんと云募れば、山縣內藤馬塲を始め、精忠無二の面々は、斯迄理を盡し利害を說き、言葉の有らん限を出だして猶も用ゐられぬは情無しと心密に歎ずるもあり、然るにても彼の釣閑奴が多辯の舌先こそ御屋形を誤る者なれと恨むもあれば怒るもあり。眼を閉ぢ悲しむ者あれば、眉を昂げ憤りて釣閑が面を睨み詰むるもあり。一坐白けて果しつかず。何とも收まり難く見ゆれば、跡部大炊は、諸老の意見如是折合はでは重ねての軍議こそ然るべけれ、今は一先づ引退きて諸將にも篤と分別あるべし、と云ふに何れも是非なく退きけるが退くに臨みて猶も美濃は、吾君幾重にも御思慮の程冀はしう存じ奉る、と言葉を殘し心を殘して物思はしげに立去りぬ。

諏訪の一揆に拾首級せしばかりの僅の手柄に依りて辛くも再び召出されし程の者なるに、御屋形には我等をば釣閑にも劣りし者と見做し給ひてか、彼には打明け給へることをば我等には知らせ給はざる悲しさよと、云合はさねど内藤も山縣も心に思へるか、憮然と手を拱み頭を垂れて語なかりしが、信房は、御屋形の御大事此時なり、云はでは叶はじと心を定めて、然らば先づ急に長篠を拔き、吾君は其城に入給ひ、御一族其他は盡く城の後の高みに陣取り地勢の利をば十分占めて渡らせ給へ、我等内藤殿山縣殿と三手の兵を引率して、河をば渡り敵に對し、なるべく戰を避けつゝも、敵蒐りなば一戰を辭せざる躰にて日を彌らば、敵は五畿内美濃近江尾張の軍卒多きを占むれば、小荷駄の運送煩はしく、斯る山間の長陣に勞を來たすは必定なり、信長氣早の將なれば、少時は心も締むべけれ、やがては心に怠生じて倦勞るゝこと知りぬ可し、其時我等機會を見て夜襲或は朝がけに取蒐る者ならば恐らくは利あることを得べし。寡兵を以て衆と戰ふに遠慮なくては叶ふまじ。吾君先に内藤の申せし言をも用ゐ給はず、又小生が長篠を居て退き給へとの議にも從ひ給ふことを物憂く覺さば計はいよ〳〵妙なるにあらねどもせめては此分別につき給はるべし。と三度其議を變じても、歸する所は過失をなるべく少からせんとの所存の外に出づることなく、紆餘曲折して只管に、無謀の戰を思ひ止まり事無く軍を返さしめんとの辯を盡くせど狐の如き釣閑執念く進み出でゝ、馬場殿愈可笑しき事を重ねて云出で給ふものかな、日頃にも似ず、貴殿並に内藤殿も云はれし如

ることのありて、難きが中に安を得る望のあればこそ冀れと云ふなれ。皆々心を一にして切崩さんに尾濃參遠併せて十萬の兵はありとも茅萱を苅るに等しかる可し。大軍なりとて恐るゝ事かは。虎穴に入らずんば虎子を得ずとは唐人さへも既に云はずや。女々しき詮義は爲ずもあれや。と恃む所あり氣に云切りぬ。

其 八

故信玄公御時より西に東に南に北に馳驅奔走の功を積みて終に一度も不覺を取らず、御賞美の證文も數多く持ち、諸士の中にても取分けて御覺え目出度、毎年冬に其翌年の軍議の評定ある際も、馬場山縣高阪内藤この四人だけは必ず機密に與らぬといふこと無く、北の敵をば何と爲す、南の敵には何と爲すとの極秘の議にも批判の口を添ゆることを許され來りしに、何事かは知らず御屋形と釣閑の外知ること無き密事の有りと云はれしこそかへす〴〵も口惜しけれ。殊に計は密なるを貴ぶとならば吾等三人を人無き所に招き給ふて告知らせ給ふとも然るべきを、我等に語り給はんには、其事我等が口よりして漏れんと氣遣ひ給ひてか、知らせ給はぬ御隔心は、御恨めしと申すにあらねど、心苦しき沙汰なり、何咎ありて左迄には我等を今更疎み給ふか。何過失ありて我等をば云甲斐なしに見做し給ふか。釣閑彼は何たる者ぞや、信玄公御世には御咎を蒙りし事も有りしものにて、

はあらねど、斯して退かんは計無く敵に蒐つて無益の敗を取らんより猶有益なるべし。と道理を盡くして諫めしは聞えし程の宿將の練れたる胸より出でし言とて流石若き士の猛き心を慰め和むる情も具へつ、大過を小事にして濟ませし上、軍氣を振ひ、名聲をも墜させまじとの進退用捨の義をも具たる筋なれど、勝賴用うべくもあらず。是非に一度思立ちし事は後へは戻さゞる强情我慢の氣質なれば、猶諾がはぬ色を示すに、釣閑はまた我のみ知れる秘密の魂膽を有てるものから、愈進みて我は顔に、馬塲殿の仰こそ一應は理有る樣なれど再應考ふれば、服し難し。大敵に向ひ味方の兵一千人を殺せし上空しく軍を敗むること抑何の益かあるべき。如かじ、それより勝敗を當の敵なる家康信長二將の、陣に蒐りて決せんには、勇士の本意は那方にありや、云はでも知れたることとなるべし、先より內藤殿をはじめ、各位供に此戰ひ必ず利なき樣にのみ言做さるれど密にわが旣に運らせる計もあり、事前に說かんは無益しければ今は申さゞるも時に臨んで必ず思ひ當ること有るべき筈なれば吾君にも强て戰を望ませ給ふにて强ち利なきのみの筈に殊更進み戰はんとせらるゝ如き事にはあらず。と己が胸には信長の臣佐久間信盛が詐僞の手段に乘るとは露思はずたゞに信盛主を怨みて交戰の砌裏切りする事必定と淺墓にも深く信ぜる故、口硬く、勢を含んで云ひ爭へば、勝賴も亦輕く點頭き、馬塲內藤も聞き候へ、今釣閑の云ひし如く、我とて何條目算も無く漫に無に大敵を輕んじて奮戰なしつ肱股手足と憑む味方を失ふ如き愚なることを悅ぶべきや。心に秘めた

ふ事は全く以て理無からず、釣閑老の云はるゝ如く、見崩れしたり、聞怖したりと、云はれんとも味方に取て此上の不祥なきとなれば、威を立て功を收めて其後本土に引取り、聊か我が出陣の勞に報ふべきとを爲し得可き計あり。事無益には似たれども、目指したる長篠の城を我攻にして唯一時に打破り、奥平九八郎が首級をあげ、武田に背きて敵に心を寄せし報は面の當り、斯の如しと云ふことを示すに足る可き程を見せ、扨しづ〳〵と引取らんには、小城なりとも城一つ踏躪りたる功はあり、逆意の者を誅したるに御當家の威も立つと云ふ可く、岐阜より出てきし信長が後詰の主意も、家康が殊に大軍の助を請ひし主意も立たせで小氣味よし。察するに能は守るとも、長篠一城何程の事か有るべき。火砲の數は先頃よりの爭闘により猜するに五百挺には過ぐ可からず。味方一時に四面より隙間もあらせず吶と叫んで取付かんには敵は必死と有る程の鐵砲に賴りて防がん。其時敵の彈丸は皆、空なしとするも我兵の死傷は僅五百なり、五百の骸を踏越えて息も吐かせず猶我兵再び喊いてかゝるならば、城中も亦一齊に打出だして防ぎ戰はん。然る時には又五百人、味方に死傷ある者と假に定むるものにせよ、勇士强卒競ひ合ふ味方は如何で敵にのみ擊せて何時までであるべきや、骸を踏越え〳〵て一番乘をなすものあるべく、續いて二番又三番電光石火と切入らんには城兵如何て支ふ可き、降るか死するか二つに一つ、鬼神籠り居たればとて夷げ呉れんに手間暇入らず。されば味方に千人の死傷はあるとも、我威は立ち信長家康が鼻は明くべし。これ尤も好き策に

其七

長阪釣閑が言葉の終るを待ちて少しく坐を進みし跡部大炊も釣閑に劣らぬ追從の鳴滸武士なれば、釣閑老の仰こそ誠に動がぬ所なれと某も亦存じて候。と勝頼が方に打向ひて頭を下げつゝ諛へば二人が我意を迎へたるに稍心冴てか勝頼は、言葉こそ猶出ださざれ、能ぞ言ひたると云はぬ計りの容貌なして一坐を見渡し、再び意見を立つるものなかれと心に願ひて居たるに、この躰を見て思慮深き馬場美濃守信房は恭しく口を開きて云ふやう、釣閑老並に跡部殿の御言葉は一應理あるに似たれど再應考ふれば宜しとは猶申し悪き所あり。此度の戰の大體は內藤殿見極の通り一毫も相違あるまじければ兎にも角にも御屋形大事御家大事と思はん上には無謀の所行は用捨幾重にもあるべき義なり。今猶暴虎馮河の勇に誇りて敵と戰はんには殘念ながら必定敗軍、千に一ッも得あるべからず。兵を返すは一旦の恥辱に似たれど恥辱を忍ぶを勇無き事とは誰か云ふべき。敗軍なしたる其曉きたなく敵に背を見せ、足もしどろに退かんよりは、勝敗の數を豫め見て、味方を全ふし歸らんこそ、太功を成す人の振舞、深慮あるものと申すべけれ。あはれ我君此所は是非に、我等が申す所に從ひ、速に本土に引取り給へ。左はさりながら今度の出陣何の手柄も敵に見せず、少しの得も味方に得ず、遙々兵を出せし後、手を空しくして歸る事、敵の嘲、味方の失望、口惜しと覺し給

して兵を損ぜぬはよきに似たれど却て當御館の威光を墜し、故大殿以來武名を四方に輝かせしも漸く光を失ひて、武田の家の御旗蔭に憑らんと思ふ將卒の數も少くなり行く可し。それのみならず又此所に逆心の旗を翻へして當家に楯を突きたる所の奧平父子に花を持たする道理にも當りて、味方一同引上げし後、三河遠州の先方衆奧平を見眞似に引續いて敵に心を寄せ、武田も今は恐るゝに足らずと先を見越して離心せんには、由々敷大事と申すべし。これ戰はずして自ら敗り兵を損せずして自ら傷く大なる拙策には候はずや。且は御館御氣性として大敵に逢ひ背を見せ引取らんとは勇猛の將たるものゝ大耻辱と深くも思し召し入り給ふとなれば、假令內藤殿御言葉の當れるにもせよ何としてその耻辱をば忍び給ふべき。されば否やの論に及ばす、曲げても君の御心に從ひ屍を長篠の篠原に曝さん事を本意として有無の一戰に及ばんこととの外に、何の爲すべきことも取るべき途も之有りと今更申すべきや。大炊助殿は何とか覺す。老夫の考は是より外に今に及んで取るべき道もあらずと存じ候なり。方々も亦必ず然覺し給ふ可きが、萬一にも、假令然らずと覺すにもせよ枉て我君の御言葉に從ひ給ふこそ臣たるものゝ本分なれと存じ申す。と主の意を迎ふる忠義立、非を理に飾る言葉の綾、いと賢しげに述立てたり。

地につけて慇懃に諫む。山縣三郎兵衞も言葉は無けれど同じく共に頭を下げて内藤が意見の用ゐられんことを乞ひぬ。此躰を見て先の程より不快の色は現はし居けれど覺えある老功の馬場山縣まで宿將三人揃ひも揃ひて言葉に擧動に我を諫むることなれば直ちに無下にも云ひ消ちかねて、心の底に憤りつゝ勝頼は釣閑を見返れば、其の意を汲みて知るに賢き釣閑肩を搖りながら進み出でゝ一坐を下眼に見廻し、さて〳〵云はれざる内藤殿の意見立。つや〳〵以て此の老父には合點まゐらず。第一敵の長を說きて味方の氣をば沮ますること最も軍陣に忌むことなるを知られざるにはあらざるべきに、長々と敵を揚げ味方を抑へて言葉を盡されしこと片腹痛し。美濃尾張の兵は多くとも豫て味方の手並は知つたり、怖氣ついたるへろへろ武者何の働をば爲し得べき。敵らしき敵は德川勢のみ。これはた小勢なれば死を決して生命知らずに働くとも怖るゝには足らぬ者なるを、勇名日頃轟きたる内藤殿が此度に限りて、二言めには大軍〳〵と敵を重く見ての軍議は如何に。似合しからぬ御小心、老夫は承服致し難く、内藤殿の御爲にも口惜しき義に存じ申す。勝敗は兵の多少に限るものとは定まることあるべからず。然るを此度此儘にして兵を本國に引揚げんには、成程刄を接へぬとゆゑ安全無事には相違あるまじ、但し世評は何とか申さん。多年敵兵の我が甲陽の軍威を望み見ては引去るを見崩れしたりと冷笑ひしに、酬ひるは此時にありと尾濃遠三の將卒等甲州勢こそ見崩れしたれと箙をたゝき手を拍つて嘲り笑はずにあるべきや。然る時には戰はず

在の働きを爲すことを得て、彼と此との得失の相違は二倍三倍に止まらぬこと明かなり。敵若し味方の隱れ遊の術にかゝりて氣を苛ち總軍長驅する如き愚のとをなすならば其は我が願ふところの首尾、地理も知れざるところへ誘引きて其時こそは十分に手痛く戰ひて信長家康彼等が素首刎ね飛ばさんに手間暇いらぬことなるべし。これ彼我の勢を逆にして利害を換へ、勝つべからざるの時を轉じて勝つべきの時となすの策略には候はずや。何卒我が君危きに近寄り玉はずして萬全の計策を取り玉はり度く、餘人は知らず昌豐は勇にのみ任せ玉ふならば君の御大事と見奉るものから遮つて御諫め申す。昌豐は遮つて御諫め申す。あはれ御賢察下し置かれて此度の一戰は御思召止まり玉ふ義を願はしう存じ奉る。と滔々として辯舌鋭く演べ立てたるは流石に日頃胸中の錬れ固りし程も見え、天賦の剛毅卒直にして飾り無き美しさも露れて、威權に屈せず自信を枉げぬ天晴凜々しき男振り、聞き居し諸士等も感に堪へて、嗚呼内藤殿いみじくも云ひ出されたり云はれたりと思はざるもの幾干も無し。

其　六

馬場美濃守信房は内藤が言葉の尾につきて、恐れながら我等存意の程も内藤修理殿意見の通り相違これなければ幾重にも内藤殿意見を御採用これあるやう願はしう存じ奉る、と恭しく頭を

さりとて家康一人ならば、三面六臂なればとて高の知れたる小身者、我等粉骨碎身致さば打挫がんこと容易けれど、此度は信長出馬に及びて、味方に三倍四倍の大軍、彼方に勇士も少からず、其上機變多き信長、隙間數への奸猾き大將なれば、勇のみにては取蒐らんこと然るべからず。特に陣前に二三重の柵を引結び逆茂木を搆へ、自己は進まずも只管敵に蒐け破られざる用意のみを嚴しく爲せるは是一つには味方の剛勇を怖るゝよりの事にはあれど、味方に取りては上無き不便宜を與へられたることゝ云ふべく、敵は大軍の其上に恰も城に籠りし如き道理なれば、我か勢敵に二倍の數を有ちても互角の勢に過ぎぬ位の事なるを敵の四分一ほどの味方をもつて押懸らんと得失如何候べきや、智者ならずとも知れたることなり。願ふは我が君思召し返させられて此處は一ト先家康信長が思ふ圖を外させられんとにされ度し。如是時には御當家の軍法秘密の隱れ遊の術を行はせられ然るべし。馬場殿山縣殿を差置き、小生申し出さんこと烏乎には似たれど大切の場合聊か遠慮あるべからず、先づ此度は戰ふに利のありとも思はれぬとなれば、此處は手早く味方を收めて甲州に入り候はんに、敵は柵をも結ぶまで怯れたる事ゆゑ喰付きて追はぬは必定、且はまた追はんとなさば捨伏兵を置くなど何程も敵に鹽を付け、鼻を挫ぐ手段は無きにあらざるべし。然ありて敵軍手を空く引返さば味方兵を出し、敵また來らば兵を引き、引かば出て、出てば引き、左すること數回に及びなば、敵は大兵なり、遠路の戰なり、其疲るゝと必ず早かるべく、味方は小勢の取廻し好く、本土にも近ければ、出沒に自

弱き思案は嫌ひ申さるゝこと御存知無きや。些細の事とは違ひたり、粗略になり難き一戰の前に當りて曖昧なる無言は御心底見苦しと此の內藤は存ずるなり。第一各位理の當然と思はるゝところを有躰に申し出でられざるは面從腹議の卑しき所行。吾が君への不忠にはこれあらざるや。意見のほどの底をはたきて差出がましけれど先づ小生より愚存包まず申し出づれば、各位もまた少しなりとも御屋形のため味方のため益ある御存知寄を申さるべし、と默し居たる諸人を睨め廻し、後、少し首を低くして、吾が君少時聞し召されよ。唯今仰せ出されし有無の一戰を決せんとの烈しき御意はさることながら、此は吾が君の御意とも覺えぬ御過失に候べし。蒐るも退くも時のならひ、たゞに血氣の勇に逸るは勇の本意には候はず。既に故法性院殿下の如き弓矢取つては恐らく日本に古今獨步の御大將にて渡らせ玉ひしが、猶時により戰を避け玉ひしこと、小生初め誰も皆眼に視て覺え居ることなり。これ恐れながら御一代敵に背面を見せ玉はず、戰へば必ず芝居を踏まへ、攻むれば必ず乘取り玉ひし所以かと愚考いたし候。勇の本意も其處にてこそ眞に立つたれと申すべき歟。然るに唯今我が君の速かに敵を切り崩さんとの御意は勇あるやうにはあれど、眞の勇の本意には叶ひ申すべきや、未審く候。故御屋形も若手には家康よろしき弓取にて、分別も長け勇威もあり、と敵ながら常々御賞美の御評判ありしを我が君にも知しめされぬことはあるまじ。其家康を侮り玉ふは、第一我が君には故御屋形の御評判をも餘り輕く見過し玉ふと申すものにて、御用心足らぬかに存ぜらる。

信實を將として三枝勘解由、飯尾彌四右衞門、名和無理之介、五味與三兵衞を指添へて鳶巣久間山の附城に置き、小荷駄をこれに打任せ置く傍ら長篠を壓へさせ、高阪源五郎、小山田備中、諸我入道、相木市兵衞、小泉源次郎等二千餘人に專ら長篠を壓へさせ置き、我は自ら瀧川の猿橋鵜の口に一本橋を設けて渡り、向の原へ三十餘町押出し淸井田が原に本陣を居ゑ、瀧川の末岩代川を越えて柳田、竹廣、川路、下宮脇、須澤、淺木、大海、荒海原の邊に鳥の翼を張りし如く搆ふべき諸隊と諸共に大河を背にして敵に對ひ、遮に無に敵を斬り崩さん、と聲朗々といと爽かに、溢るゝばかりの勇威をあげて說き示せば、坐右の長阪釣閑跡部大炊の兩人は、感に堪へたる面地して言葉こそ出さね欣然と、既戰ふて勝ちたるかのやうに肘を張り肩を怒らせ眉尻昂げて揚々たれど、勇に任せて思慮足らず、好んで危きを冒すといふべき大將の言に列居る諸將等默然として口も開かず、いづれも心中安からで、こは理不盡なる計畫かなと眉根を皺め打靜まつて、死せるが如く控へたる中に氣早の內藤修理、甲陽の四將と唱へられたる中にも勝れて心烈しき遠慮知らずの一徹武者、其塲も時も顧みざる誠實無二の强者なれば、假令大將の命なればとて如是無理なる戰鬪の手段に如何で從ふべきや、餘人は兎もあれ此の內藤は露背はじと思ひ込んだる堪へぬ色を面にあらはし、ぢり〳〵と膝行出でゝ屹と仰ぎ見、列坐の各位言葉無きは、吾が君の仰なればとて、事の可否、戰の勝敗を餘所にして盲受に御受申されんとの卑劣思案にあらせらるゝか、武道の詮議嚴密なる御當家には然る

軍容いよ〳〵盛んにして動かざること山の如く、泰然自若と靜に待ちて、敵來りなば矢ごろに寄せて唯一時に擊殄さんと備へたり。

其五

家康は或は打て出づべし、打出て來らば望むところ、有無の一戰を掛け呉れんと待設けたるに、家康のみか來じと思ひたる弱腰の信長めまで大軍を催してこゝに來りしとな。さもあらばあれ口のみ達者に骨細生れの上方勢、踏み散して呉れんに何ほどの事のあるべきや。父亡せてより何につけ彼につけ我を侮る信長、ゑせ賢き軍慮立てに鼻うごめかすとも、それは上方の弱大名等に對ひてこそは甲斐もあれ、我に對ひて何をか爲し得ん。此度こそは彼奴が鎧のあげまきを見て笑つて呉るゝか、左なくば首を刎ね呉れん。父信玄を除きては天下に肩を駢ぶるもの無き謙信さへも年猶若くてありし我に一歩讓りて去りし例もあるに、自己は其謙信の沓の塵拂はぬばかりの事をするをも耻とせぬ分際にて此處まで押出し來りしこと愚にもまた亢りたる奴、左程此四郎を侮り得べきか、侮り得べきものならぬ歟を身に浸みるほど知らせ呉れんと。信長極樂寺に着きし翌日、勝賴は一族諸將を集めて、各自既に知るごとく敵は設樂の原にまで押出し來りて長篠を援はんとする意をあらはせり、信長家康兩將の首を揃へて來りしは思ふに增したる此方の僥倖、長篠一城は云ふに足らねば、兵庫

の將等三遠の鋭兵合せて十三段に犇々と備へ固め、如何に甲州の兵强くて鬼神に勝る働きすとも容易には蒐り得させまじく威勢盛んに搆へたり。家康は當の戰爭の主人の事なり、且は又前日來の憤りもあり、信玄以來武田とは結んで解けざる深き恨みも此一戰に散ぜではと年頃日頃骨に刻みて忘れざる瞋恚の念も新にこゝに燃え立ち上る心地して小勢なれども勢猛に、大久保忠世、同忠佐、松平忠次三軍を一隊とし、松平實乘、松平伊忠二手を同く一隊となし、菅沼定賢、松平淸宗、本多廣孝三手を一手とし、鳥居元忠牛久保黨を一隊となし、大須賀康高、本多重次を一隊となし、植村家政、内藤正成を前軍となし、本多忠勝、榊原康政に各々一軍を領せしめ、家康自は信長が陣より進んで敵に近き竹廣の正樂寺高松山といふに陣し、信康は松尾山に陣し、此戰ひ決して敵の首をあげんなどいふ手緩き義はなすに及ばず、唯ひた討に討つて討つて討捨にすべしと令を傳へ、黑雲も陣頭より立たんばかり充分に戰を持つて控へぬ。信長出陣のうも〳〵より豫て思ひ設け置きしところの心匠なれば諸軍に令して皆各自が持ち來りし柵木幷に繩をもて各陣前面に柵を結び、山手へかけて二重三重後高に柵をしつらひし上隊伍手間へ無きやう組み、隙間無く兵を配り置き、三十間に一處づゝ虎口を設け置くべしと嚴かに傳ふ。心得たりと諸軍は令のまに〳〵杭を打ち柵を振るに、大軍の事なれば束の間に恰も長城を築きしごとく、河路連子橋より濱田まで、又樋の橋より大宮邊まで蜿蜒として聯りたれば、生命知らずの猛者なればとて、此を駈け破るべしとも見えず、

其四

甲州勢の長篠を攻むること十日よりして漸く急に、十一十二十三十四と日に〳〵晝夜を分たず息をもつかせず是非に揉み潰さんと競ひかゝれど、城將九八郎貞昌は吾が弟をも慘く殺され吾が妻孥をも慘く殺されたる恨あるに如何で降りも屈しも爲すべき。城兵もまた降ればとて赦されまじく知れたるに如何で手を束ねて自ら死すべき。同く死なば城を枕に、心地よく刄の鐵味を覺えて彼世の語り種に齎さんと性根を据えて不敵になり、必死となりて防戰すれば、容易に落つべき状は見えず。されど糧米乏しくなりて實は長く支へ難くなりしかば鳥井强右衛門と云へるを使として敵中を拔け、岡崎の城へ此由を貞昌申し入れしめけるに、大剛の强右衛門十五日に岡崎に到りて家康幷に恰も今着きたるばかりの信長にも謁することを得て十分に使命を果すことは得しが、歸路に運拙く敵手に落ちたる其爲復命を仕果すと頓てに荒海原にて磔にせられ、美名をとゞめて終りし始末は詳しく説くべき價値あれど、今は姑く云はざるべし。扨も信長は十五日岡崎に着到し、家康に對面して商議せし後十六日牛窪十七日野田に陣取り、十八日人を遣りて長篠近傍の地理を相せしめ、直に進んで本陣を長篠の手前、左手なる平井村下八劔の宮の前、設樂の郷の極樂寺山といふに設け、信忠を矢部村天神山に陣せしめ信雄を御堂山に陣せしめ、羽柴丹羽瀧川を川上村の茶臼山に陣せしめ、其餘

場馴れたる者の巧に指揮せば假令勝頼無謀の將にて一旦は破を取るといへども味方も損ずべきが上に、引足疾く引取られなば徳川は兎もあれ角もあれ我は勞せるほどの酬を得ること恐く難かるべしと思ひ惱めど如何にかすべき。德川への返辭も今は既遲々すべくもあらず時逼りぬ。よし〳〵彼の設けを時に臨みて用ゐることゝして何はあれ出軍するに定めくれんと、急に諸隊へ令を下し、諸州の兵を驅り催し、各兵此度の戰には一人毎に柵木一本繩一束を準備せよと命を傳へて、いで此度は豹虎の如き甲州武者を一時に屠り與れんずと意氣いと盛んに合戰勝利の祝を籠めて連歌を催し、松高く竹類ひ無き五月かなと信長先づ武田首無しとの意を寄せて發句をすれば夕庵といふもの白うは見えぬ卯の花の垣と脇を付けて四郎は見えぬと言葉を綾取り、鬼と呼ばれし山縣も滅びよかしに紹巴といふもの、入月も山がた薄く消え果てゝと第三をなせば信長再び、小田は盛りと見ゆる秋風とつけて、密に佐久間信盛が謀を用ゐ、勝頼が臣長坂釣閑に僞計をかけ置き、愈々五月十三日、信忠信雄は云ふに及ばず驍名を轟かせし柴田勝家、佐久間信盛、瀧川一益、明智光秀、丹羽長秀、池田信輝、羽柴秀吉、金森長近、蒲生氏郷、森長可、佐々成政、前田利家等頼み切つたる諸將の數を盡して出發したる總軍實は五萬餘、十一萬と法螺の音高く、太鼓の音の勇ましく、曳旺〳〵尾張路にかゝりぬ。

一方ならぬ助けを受けしは我他とも知るところなり。それのみならず四郎めが今囲み居る長篠に籠れる奥平信昌ならびに此度使に家康が遣せし其父貞能二人を甲州に反かせしも、家康が智に九八郎をせよかしと、我が扱ひしより事起りしにて、其爲にこそ貞能が秘藏の仙千代は殺させたれ、然るに貞昌を捨殺しに如何で我今爲し得べきや。云はず語らず家康が現在長篠に敵の的となりて窘めらるゝところの九八郎が親の貞能が面を我に見よかしと差越したるは云ふに云はれぬ痛さ痒さを我に與ふる深き趣意あり。聞けば我が臣矢部善七郎に、我若し出でずば德川武田合躰なさんと小栗重常が云ひし由。云ふまでも無く其は全く家康が云はせしことなるべけれど、家康我を實意なしと全く見限らば、此度特に貞能を差越せしほどの腹密き奴、小身なりとて大志なきにあらねば或は四郎が威を籍り、我に手出をせぬにも限らず。勝頼が勇、家康が智、合躰なさば我安からじ。されど我とて平の信長、勝頼家康二人をば合躰さするほど愚昧にて何と我が世を過ごすべきや。信玄在りし當時より末には甲州信州もと私に圖らざるにはあらで、思慮に月日を經たるものを、甲州の兵の強くとも怖れてのみは誰かあるべき。唯畢竟は戰ふて利あるに決まるか、戰はずば利無きに決まるか、乃至また我動き出さば敵避けて我が徒勞たるべきか、我動くとも徒勞たらず必ず利するところあるに決まるべきかを見定めて其後動かんと思ふのみ。再三の小栗が云ひ狀にて倩德川の樣子を考へ武田が動靜を考ふるに、今は一戰に及ぶとも恐らく利無きことあるべからず。唯勇猛なる武田勢は

景が勢と爭鬪しのみ、それすら危く負けざりしといふばかりなることなりしかば、信長に援助を乞ふよりほかに好き才覺も無きに決め、小栗重常を二度まで遣はして此方の形勢を述べ、豫ての誓約違はずば急ぎ出馬あり度しと促すに、信長もまた甲州勢には氣も進までか直には來らず、兎角躊躇の態なれば重ねて重常に貞昌が父美作貞能を差添へて岐阜に行かしめ猶も促し、いよ〳〵織田殿出陣無きに於ては豫ての誓言を此方よりは破るにあらねど其方よりして破り玉ふと云ふべきなれば是非に及ばず、武田に遠州を餽り物として四郎勝賴と合躰なし、遠州の替りに其方の所領の尾州を攻め取りなんと重常をして諷せしめ、如是しても猶信長出でずば、爲んやうありと一日一日其挨拶を待ち暮しぬ。

其 三

恐るべき信玄が死したるは既隱れなき事實なれば今は心安きことゝは云へ、又彼の四郎勝賴は勇に任せて思慮足らざる小童なりと云はゞ云へ、猶信玄か股肱手足となりて千軍萬馬の間に功を積みたる馬場、山縣、內藤なんどを首として勇士强卒多ければ甲州勢は侮り難し。さりとて此期に臨みて爰に家康を助けずば弓矢取りて天下を靡かせんこと思ひも寄らず、遠國邊土の者までに信長か怯れたる狀を見よやと指さし笑はるゝこゝとなるべし。特に家康には江州箕作ならびに姉川の役に於て

其の妻子八人まで磔に掛けられしかば計略は全く齟齬して寸功無く、作手に兵を進めしも徒勞と成り果てしに勝頼痛く激怒して、二連木邊を攻掠すれど、果敢〳〵しき事にも至るまじき勢なれば、五月朔日吉田を經て彼の奥平が籠り居れる長篠城を屠らんと、小山田、高阪、室賀、小泉、相木等を岩代川邊の篠原に遣りて所々に向城を構へさせ、鳶の巣山には叔父信實を屯なさしめ、山中山、君が伏床、姥が懷などいへるところに各兵營を張り、自己は醫王寺山といふに本陣を居ゑて、要害こそは大に好けれ、高の知れたる少なる長篠城のことなれは唯一揉に揉み潰さんとし、獨一方には牛窪より吉田へかけて働きかけ、家康出でよ、信康出でよ、自己が國をば蹂躙され自己が味方の長篠を取り籠められて後援もならずや、援はんとせば來りて見よと云はぬばかりの風情を示しぬ。

海道一の弓取と譽を得たる德川家康、勝頼が此擧動を見て他所に過ごさん心は無けれど、如何にせん敵は信玄以來鍊れに鍊れたる覺えの兵なり、特に味方は三の一の小勢なり、且は三方が原の一戰に破れてよりは今に猶甲州と聞きては聞怯する傾きさへもある程なれば、よしや貞昌を援はずんは弓矢の道の瑕瑾なりと身を捨て命を惜まず切て蒐るとも、まこと磐石に鷄の卵を打付くるが如く、自ら碎けて亡びんは火を睹るよりも明かなるに、打て出づべきやうは無く、加之甲州有名の猛將山縣昌景、五隊の兵を從へて頭を出さば一鹽付けんと待構へたることなれは、僅に六日七日の二日昌

其　二

說くは往時。天正の三年夏のことなり。信玄が餘威に誇りて四隣の豪傑等を掌の上の塵ほどにも思はざる諏訪四郎勝賴、去年三河先方衆の中に奧平美作貞義、同九八郎貞昌といふ父子のもの別心の段分明なるに怒りをなし、其儘に捨置かんには、武田の家の風も今は何程か吹かんと心太きものは侮り輕しめ、新羅の旗の蔭もこれよりは身を寄するに甲斐無からんと力無きものは賴みとせで背き離るゝに至り、信長家康が輩は時を得たりと手段を廻らし兵馬を動かすに及ぶべしと、直に見懲のため貞能が末子仙千代丸といへるが人質として甲州に置きありけるを特更三州地に送り遣はし、鳳來寺の金剛堂に於て磔に掛けはせしが、今に猶定昌めが死面を見ず、いで遠三に繰り込みて四郎が技倆の程を示し、父信玄は亡せぬとも我またかくて在る上は如是こそあれと憎き奴等に思ひ知らせて呉れつべし、家康來らば來れかし、望むところぞ首受取らん、左無くも敵に雄威を示して、軈ては海道を切り開き上洛なすべき父が遺志を襲ぎて遂ぐべきためとも無し、且は貞昌が首を梟して味方に二心を抱かせざる爲ともなすべしと思ひ立ちて、一萬五千餘の勢を引率へ、遠州平山を撥越して三州宇利に陣取つたり。然るに豫て我が方に内通なせる家康の士の大賀彌四郎といへるもの、同志の山田重英といふものゝ變心のため事を破られ、遂に捕へられて竹鋸に果敢無き死を爲し、

により、位の高き勢により、一身のほか何一つ有つものも無き草莽の士は三尺無反の剛刀一本腕二本、これでも男は千貫萬貫、取る機を得ば取つて見すべし見せいでやと、多寡大小の差違こそあれ孰も自己等が貪むところによりて功名富貴をば、攫み取らんと競ひ合ひ鬩み合ふほか餘念も無く、燃ゆる邪慾の火の前には恐るゝ神もあらばこそ、凝つたる妄執の劍の前面には要無き佛も立たせばこそ、たゞ人生の五六十年、事敗れなば他に與るまで、幸にして運に叶はゞ天晴男兒が片頬笑、するばかりなる榮華に飽かんと、生命を賭けての爭鬪三昧、眞實に修羅の境界を目前に見るがごとくなりしが、誰培養はねど櫻は絲と亂れたる世の春にも花の紐解きて人の見ずとて綻ぶるいと美しき我が邦なれば、然る凄じき頃の際にも、花はづかしき麗しの心の痕を後に遺して、芳しくもまた清らかに、そゞろ床しき行爲なしゝ男も女も少からで、黒雲包める歴史の中に星と輝き燦けるは、喜ぶに足る事といふべし。中にもこゝに說出ださんとする此の一條の物語は、今まで人に知られざりし男の上の事にはあれど、聞かば聞くべき興はあらん。彼の時此の事無かりしとて、或は其のときかゝる情のありしならんと聞きたまへかし、もとより歴史の事實を說かんとするは我が意ならねば。

ひげ男

其一

十萬の我が兵は千里の外に雄威を輝かし大功を立てゝも、皇國の中には塵すら動かず、柳の門に狗安く眠り茅が擔端に鷄ゆるく歌ひて、太平の景色は事無き日に異らず、我も人も各自の業を樂みて暮らす此の明治の有り難き聖代には引替へ、指を屈へて溯り數ふれは僅に三百餘年の前、元龜と云ひ天正と云ひし其頃は、日本六十四州葯萱の亂れに亂れて、私慾と私情との爭ひ絶ゆる間なく、五月闇の暗くも暗くして、公義と公道との光は見る可くもあらず、丈高く生れついたる優れものより才拙く世に出でたる劣りものまで、男は皆おそろしく女は皆あさましく成り果てて、親を質に取らねば誓約も敢て實とせざること男の常例にて、衣を墨に染めても節操を强て破らるゝこと女に希有ならぬほどなれば、萬般の狀態も推測るに餘りありき。されば全く忠恕の道は時に棄てられ、慈悲の敎も人に顧みられぬものから、誰一人密に天理の命ずるところに聽き、冥報の來らんところを畏みて、正きに據り善に遷らんと心がくるものも無く、智あるは智により、力あるは力により、城を有ち國を有ちたるは、城の便の好きにより國の固の堅により、氏を有ち位を有ちたるは氏の尊き光

へ、尚能く親切に醇々と熱情を漲らせた御言葉、然も花の香のせぬてはない其御餘裕が有つて其御愛憐の切なるお心の中、汲んで見れば、慄としてありがた涙が溢れやうではありませんか、あゝ長々と饒舌草臥れました、と云へば、男は先程よりの長談義に聞飽きて何時しか鼾の音を立てたり。女はこれに柳眉を逆立て、星眼を活と見開き、此情無男めと大喝一聲して、男の腦天へ反吐を濺ぎかくる事瀧の如し。一斗の酒我に歸つて男は急に逃出しけるが、其後女も行へ知れず、猿の聲ばかり木の間にあり〳〵。

に居られませうか、斯う申したら妾は理の圏中に落ちぬ代り、情の圏中に落ちた、佛法を情解の眼鏡で覗くか馬鹿なと仰せらるゝか知らぬが、佛法なぞは犬が食ふても鼠が引いても公認とならうが荒神と唱へやうが、私の知らぬ事、若し佛法を眞理と吻合した樣に思ふて珍重するなら、釋迦の捻つた花を打落し、迦葉の笑つた横ッ面を蹴飛ばし、達磨の袈裟を雜巾にして、佛祖的々ぽち〳〵の以心傳心、そんな者は玉屋の符牒を洒落本で讀む樣に心得たが可いらしい事、又何某禪師より印可證明、おほゝゝ、眞理會得の免狀を人間から貰ふたとてつまるまいに、眞理を搜すならそんな者は捨て、燃燈佛以前彌勒佛以後に佛法をさがして貰ひたいが、いや〳〵それより蓮の葉に小便すれば御舍利が出來る、當體即佛の自分を尋ねたが可い、いや〳〵佛法といふ側より、眞理といふ側から尋ねた方がどうせ五十年の草臥まうけであらうが、まだしも男らしい、妾はむづかしい事は蟲が嫌ひ、唯々可愛い殿御の御心根に惚れた計り、普通觀念から佛といふ者の定義を立てたらどんな者か、夫等は後世の四疊半仲間の御相談に任せて、とんと鬪ひませぬが、何せよ氣の毒なは妾の戀人を、諛ふ者は神かと恐れ、嫌ふ者は惡人の樣云ひ做し、世界には類少き粹樣を取つて押へて、野暮の本尊とする輩の多いには悔しうて淚が飜れます、初めにも申した通り、初一念が人情の激動高尙の感情が浮んだが源で、一生想像を歌つた方樣、最後まで始終浮世の半面を歌ひ暮らされ、殊更遺敎經なんど一句一句理窟でやかましう云ふたら善いか惡いか知らぬが、其時の御齡御有樣をむりゝと考

愛情の熱涙を湛へて居られたに相違ない、其で無くばざつと一萬五六千日東西南北に駈廻りて恐しき日に焼かるゝも構はで、御舎利の汗をぽた〳〵と流し、廣長舌の糜爛する程息巻いて、小兒には小兒、大人には大人、牛飼にまで相應な者を賣り付けらるゝ小面倒が出來る者に非ず、若又一代自分の熱情を本に働いたてはなく矢張り冷い理窟捻りのゑせ賢人か偏人ならば、小判ぢやと木の葉で小兒を賺すには當らず、九十六種の外道の大頭ばかりを捕へて、非想非々想の酢の蒟蒻のと蚯蚓の組打見た樣な眞似をせられて居られそうな者、且又五時八教、おほゝ、猫の眼流の極が付ぬ事をいふた揚句、一字不説おや自己は知らぬ、三年前の烏の所爲だと、埒もない事云はずに、眞の理窟ならこッつりと万年變ぬ黄金作りを投出さるべきに、斷常二見を兩方破して、幾何學上の線の上に自分は立つて何方にも墮ちぬ樣な顏なさるゝが、等分の境界を跨ぎ、片足づゝ兩方へ踏み込んで居るでなければ、線には幅なし、立つ瀬がござらぬ、そんな曖昧をやつて、佛は十四の難問に答へずと大智度論に斷らせる樣な事をして置くにも及ぶまい、さアして見ればどうしても理窟ばかりを眼中に存して、肉慾を始め小さな愛を捨てた野暮ではなく、大きな人情を胸に湛へて居て、機に臨み時に應じ、鞠歌も謠へば粉挽歌も謠ふた大歌人、前後終始文句が變り調子が變つたも不審ではなし、兎を鑄ても鳳凰を鑄ても、皆是れ箇々銀光を放つ、妾の胸の爐に情の火で熔かして見れば、般若と阿彌陀と鉢合せもせず、とろ〳〵のとろ〳〵となつて醍醐の味がする大人情、そもや其人戀しく思はず

子の紙に頭をぶつけてはぷん〳〵云ひをる虻は百年たつても頭を突き拔く事の出來ぬ筈、此和郞達が何千万人、銘々自分の取り付いた故紙の上に摺付木の箱程な理窟の四疊半を建てゝ、究屈なにおり口を開け、物數奇な男を引き込み、三文にもならぬ香合を褒める事から稽古をさせ、枝炭の配り樣幅紗のさばき樣、乙にむづかしく敎へ込み、洗ひ米を茶請にしたと云ふ元祖の風流は三千里外に忘れ飛ばして、菓子は春なら羊羮、口切なら蕎麥饅の熱いのに限りやすと、さりとては面倒な話し、一切茶杓定規で推す故、つまりは釋迦樣を理窟屋の大將と見なしたることそ片腹痛けれ、それをまた其理窟に打てかゝるは、一度は蠅をなぐりし韓退之同樣、後世の其角程な幇間坊主にも笑はれるであらうと笑止千萬なり、元來瞿曇樣は人情の火の手滿身に燃えほこつて、權助をもおさんをも最惜い可愛い子の樣に思はれた御方、中々後世の狸和尙山の芋居士の樣なのんきな者ではなし、冷かな理窟じみた歌を垢の多い耳の孔に入れられたとて、何の冷たい理窟屋であらうぞ、はてまア、「ビットル」を見に飮ませする母の心が苦いか甘いか問はでも知るゝと、目前の小さな愛を忍んで後々丈夫になれとの尊く深い愛ぢやに、見透しの付かぬ男ども目前の愛を忍ぶ所だけ見て、大きな愛の匿れて居るに氣が付ぬ白痴、一代の御詠歌冷うて苦いばかりを見てお釋迦樣とは熊膽の凍つた者の如く考へ、其眞似をしても自分には大きな愛情がないに何で小さな愛情を忍び得べき、されば佛一代色々のへぼ理窟を捻られたが、御自分は少しも其理窟に拘泥頓着なされぬは、愈々溢るゝ程大きな

屋に「もゝんちい」の注文なるべし、されば宗教家でも哲學者でもなし、宗教家哲學者としてはあり難からずと妾は思へど、妾の戀ひ焦るゝは全く歌人ぢやと思ふからの事、是も慥に贔負の引き倒しぞとは知れど、迷ひ込んでは中々鷲の山道暗く、敎へ指さす人もなき、天下に妾一人の果敢なき戀に彷徨ひて、右も左も語るべき友ならず、前も背ろも皆胸合はぬ中なれば、露の助けもなく〳〵煩惱に面白からぬ月日を送り越し、無明の夢の長き夜は、羞しながら方様のお姿まざ〳〵と拜み奉つりて後、いやます思ひに、いつか氣も亂れ、髮もくしけづらず、唯々紀念の御歌數々を繰り返し讀み耽り、繰り返しては忍び泣くばかり、遂に親類一家の者に狂女と云ひ倣され、追ひ出されてかゝる深山に迯來り、抛き五慾の塵をさけ爭ひを捨て安らかに住めば、嬉しや片戀も感應ありて語り得ぬ面白味さへあるぞかし、抑々佛は愛執を斷じて、初めは乾慧地より段々と枯木の如く石の如く、無始劫來の情想因緣總べてほどけて、結局は八面玲瓏涅槃の境に入り給ふと、睛の上に魚鱗を掛けたる古今の幾人、當推量に人間らしくない者に取りなし、西施に向つて無鹽をほめる見當ちがひの批評取沙汰、其根本を究むるに第一情理の誤りなり、釋迦一代の御唱歌の文句に泥み宗義に縛られ、三世成程斯うした譯、四大成程斯うした理由、十二因緣斯うした理窟、斷常二見は是故いけぬと、白痴が禪で解く芭蕉集の講釋聞く樣に、一葉々々理窟で斬りさいなんで注解付けて行く故に、一篇の精神どういふ形になつて露はれて居る事やら、どういふ的にそゝいで居るやら、分らぬも道理、障

佛錢たゞの一文ぢや、大負に負けてやるぞとわめき立てたならば、其景氣素敵滅法におもしろく、縮れ其丈で大入は受合ひなるに、要りもせぬ向ふ側に大乘館をたて、威儀堂々と演説仔細らしく、毛の中より電氣燈の簪なんぞ耀かせながら、牛頭馬頭實に其形なし、彼方の趣向は斯うでござると、光學の説明から初めて首切り手品の種をあらはす樣な辯舌を振はれたのは、餘程半間の話しではありませぬか、睡ると打ちますよ、哲學家といふものは妾しの考へではお釋迦樣とは玉と金ほどの違ひ、方便だの神通だの使はれては譬へば眞の哲學者にしても半文錢の價値ない一生の御議論、南京豆の袋となつて果てるがおたりまへらしく思はれまするに、僞作らしい三四部の御經をつかまへて、全躰の御所業四十年間數々の歌は捨置き、高の知れた「おぺらぐらす」で慧星の尾を見た樣な詮議、それを堅く執着して此處「ごうたま」の眞面目なんどと思ふより、唯物論には打込れ、有神論にもつッつかれ、「ぜおろじい」の一冊も讀んだ小供には、佛者の天地創成記毘藍風が吹いたとか、地に餠の皮が有つたとか、又は馬鹿らしい時間と空間と靈と肉とを一鍋にたゝき込んだ見珍料理の須彌山說、耳が痒うて皆まで聞かれぬと寃罪まで負はされて嘲られ、譯の分つた人には白眼で一寸睨まるれ位の事、成ほど御一代の歌は哲學の參考位にはなるか知らねど、浮世の男女に大熱々のお釋迦樣が冷々淡々唯眞理を味はふ哲學者なら、阿含の子守歌歌ふて居るべきにあらず、畢竟大乘非佛說勝を得たらば、不完全な宗敎製造屋とは云はるゝか知らねど、哲學者とは思ひもよらず、魚

追ふ穿鑿、白痴と云はうか、阿呆と云はうか、群盲が象を摸したとは違つて、何れも様方御聰明ぢやとて、黑闇の穴の中で黑豆を見分ける事は、おほゝゝ、笑止や、それはまだしも口惜いはひいきの引倒し、完全な宗敎者ぢや高尙の哲學者ぢやなぞと、燈心蜻蛉の見え透つた羽根を怒らして、蓮の花を東西に動かしたがつて居る樣なが片腹痛い、成程念佛宗題目宗眞言宗なぞと色々のお宗旨、今となつては宗敎かも知れぬが、お釋迦樣は何宗、おほん、自分の宗旨を自分で造つて自分で信仰するならば、丹次郎はのろけ宗、由井の正雪は謀叛宗、勘平が鐵砲宗、團十郎が澁い宗とは聞いてあきれが蜻蛉返りする話し、特更今年の智慧道德の上から拵らへた者に甘んじて、來年の智慧道德は進歩せぬ事受合、是で澤山だと極めて居る樣な馬鹿さ、四歳になつて三歳と同じ衣服が着られるか、さて〳〵をかし、よしや自分で改正增補、去年の者を今年も引延し、來年も引延し、智慧經驗が積むに從ひ延して行くなら都合はよけれど、護謨の尺度、さりとては當にならぬ頂上ぞかし、お釋迦樣が又宗敎製造人て、遠見に極樂佛界の高殿樓閣、金紙銀紙の張子細工、木戸の外には地獄の血の池赤「いんき」を湛へ、針の山に五寸釘を植ゑ、舌をねぢる「ぺんち」脊中をどやす摺小木を備へ、いらつしやい〳〵極樂行きの通券は貪瞋痴三錢を捨らるゝ代りに上げますぞ、五戒の五錢、十戒の十錢、段々と違ひます、上根の方は六度萬行、それ相應の價打ある報は必ずござると、黃色の肌ぬぎになつて大汗かいて呼立つる、阿彌陀殿は横の方の小門で、安い者ぢや〳〵、此方は念

滿の境界に安坐させたく、其時分の學者の門々を叩いてまはられたが、さりとては詰らぬ加持祈禱めくら信心へぼ理窟の外には何もなく、浮世の諸分の話せる粹めもなければ、獨り相手のない山中に物思はしく寂然と、早乙女が戀に沈んだ格の鹽梅に、眼の前に朦朧ちら／＼と立つ者を捕へて、口舌でもやられたり、ぢれッたいと空を打つたり、いッそ死にたいとめそめそ泣いたり、今度逢つたら、突然飛付いてあの御手を腮の下にかい込んで、斯うすねて斯う口舌を仕やうか、おや／＼斯う云はれたらどうしやうと、何もないにどッきりしたり、色々妄想の大長刀を縱横十文字卍字巴に振り廻されしが愈々思ひ切つて出だる曉「みる／＼」屋の配達に一合の乞食の味を覺えられたること可笑くも有りがたけれ、即ち說出されし長歌短歌、之を一切の經と名付けて無暗とありがたくせしは、後世の大痴漢どもの取計らひ、悲しや釋迦樣が天下の木男岩女のあはれを知らぬ人達に、戀ひ焦れて泣きながら口說るゝ濡の文句の根本あはれ深きを、天下の男女親父樣の異見の樣に聞きなすより、蕩樂者は何云はしやると鼻であしらひ、正直娘はへい／＼と頭を無理に下げ、發明息子はそれを肩に被て外の兄弟をいぢめ、怜悧な女は敬して遠ざけ、學問の積んできた男は一鎗突込み、あはれ／＼世界に類なき人情の深い深切極まつた胸中より流れ出たるほんに優しのお言葉を嚙まばどんなに甘味もあらうを、千鍊万鍛一條の鐵理窟と見なし、それでは此處が行けぬ彼處が分らぬと、精神の外は文字も形容も假物の詩歌なるを知らいて、詠み捨ての反故を相手に、蹇驢に跨がつて落月を

はくでお釋迦樣を大歌人ぢやと申す譯は斯うでござんす、お釋迦樣は元來初一念が、悲しいといふ事、果敢ないといふ事、情ないといふ事について動いた者故、其後は始終悲しい敢果ない情ないといふ方から、大千世界をお覗きなされ、お覗きなさるればお覗きなさる程、倘々悲しく敢果なく情なう思し召すより、人の氣のつきもせず知りもせぬ悲しさ敢果なさ情なさまで探し出され、黒塗の馬車靜々と、毛色艶やかな駒に牽かせ、春の彌生に櫻狩りするそんな所その姫君が、花に風輕く來て吹け酒の泡と秀句いふて木の下に停り給ふを見ても、やァぴいどろが櫻につるさがつて居るはと駄評する男とは違ひ、やれ〳〵美人は花に風を恨みてあの和しい心を傷めて居れど、風は遠慮なく、花は時に應じて、頓てほろり〳〵と落散るであらうものを、自分の色香も其通りと氣が注かいで居る笑止さ、又其一類眷屬は此姫を花と見て無事なれと思ふて居るだらうが、無常の風が長うは許さず、翠の黒髮柳清香の井筒油のとお洒落ありたけ仕て居る今こそ不動の縛繩より強く、摩利支天の駈出すをも止むれど、末は蓬が下の塵、山犬も此白髭昆布には閉口と食ひ殘すなるべく、青蓮の巻葉見た樣な細眼うるはしく、じろりと一度情を送られては、英雄も三年の熱病に苦しめらるれど、後は一顆の爛葡萄、嘴太烏が用赦なく抉り出して舌打ちするなるべし、泥に塗れ馬蹄に踏まるゝ花瓣はまだしもの事ぞかし、と大息ついて泣かるゝ質故、どうか此花の散るに恨みのない樣美人を慰めてやりたく、美人の死ぬにも親族當人を平和にさせてやりたく、滿天下の男女をも自分をも福德圓

言も、とんちんかんで合槌うまく合はず、愛惜の大小に、一身の周圍を照らす一時の提灯と、天下の萬年を照らすお月樣とほどの差別あれば、耶輸陀羅御前はもどかしく、これ太子樣、ちッとは打解けてお話しなされてもよさゝうなものを、いつも〳〵物案じのお顔付、何故でござんす、と御尋ねになれば、イヤ別に打解けぬ譯はなけれど、いとしいそなたの死ぬ時はどんなにあらうと、其美しい顔見るたびにあはれを催してならぬ、との仰せ、あれいやな事仰しやらずとも妾をいとしと覺しめして下さるならば、冴々として面白うお話しなされて下さりませ、と云つても背無い御挨拶、左程おもしろい話しもない、と木で鼻縛る御答へなり、ゑゝ意地惡な、あれ御覧なされ、蟲が燈火を取りに參りましたが、蟲は火故に憂き身を焦す、私は君故焦れ候、といふ古い唄は、丁度私を詠んだやうの者でござんす、あの蟲あはれと思しめさぬか、としなだれかゝれど、ふむうと氣のない返辭ばかり、折ふし燈火はばッたりと蟲に消されて眞の闇になれば、兩手をぽんとはたき給ひて、今の燈火は頓死かナなどゝいふ風の調子なれば、父母親類の間も此通り互の思はく違ひけるが、遂に此豪傑發奮して、海燕辭し去る珊瑚の枝、それより幾年の修業、毎日々々泣きッ面の揚句、佛頂面になりすまして四十年の說法、其人のとゝの詰りは扨どうぢやと考へて見れば、意地汚なの菌の中毒、跋提河でのたれ死、矢張り泣きッ面の佛頂面をして終りを御取りなされましたが、其處が妾の惚れた所、どうやら羞かしいやうな、女子だてらにお饒舌ぢやとさげすんで下さるな、妾の思

を知られた分の事、理窟も講釋も有つた者ではなし、もし〳〵寐てはいけませぬ、寐ると打ちますぞ、されば學問は齡と共に進み、浮世の有様も次第々々に能く分つては來たれど、穉い時強く感じた事は中々忘れぬ者、いや死ぬまでも忘れられぬ者なれば、兎も角もお釋迦様ほどの豪傑が烈しく確かりと腦漿の底に印された事、一朝一夕に消え去るべき筈なければ、却つて學問經驗の增すに從ふて其感情の深く大きうなりまさるは當然の事、昔しから物語にある男女が一度思ひ染めては一人の外に三千世界の男も女もない様に思ふて、華奢な姿、意氣な粹の他にあらぬではなけれど、眼につく者皆最初に惚れた人に焦るゝ種となるばかりなると丁度同じ道理、されば彼方の島田髷にも迷ひ、此方の達摩返しにも迷ふ様では、戀も凡人、さもしき境界ぞかし、お釋迦様とて春心つく頃、仇な音締の琵琶に天竺の二上り「まかからきん」の「わほだちやわぺんぴん」とか何とか、おほゝ、まさかそんな歌もありますまいが、洒落た文句で浮かしたてられ、舞ふや乙女の雪の袖、緋縮緬の蹴出しぴらりぱッとした遊興酒宴なんどに、見事々々とお聲かけさせらるゝ様に浮世まぎれし給ひては、假令聰明でも、詰り隣りの國に打入り、結構な姫達を分捕致されて閨の塵を拂はさする位の汚き業で八十年を終られたらんに、流石は鳳凰、群鷄と食を爭はず、一途に高尚の想像に耽り玉ひ、色作りて磨き立て、御意に叶はんと苦勞せらるゝ御后妃憎うはおぼしめさねど、あはれや是も臨終の今夜來るも知られぬ顔に、可惜眉刷毛の幾擦ぞ、とあはれみ給ふ心御胸の中に絕えねば、閨の睦

を、ほッ〳〵、代つて死にたい、ごほん〳〵、と咳入られながら、先立つ不孝の者の面に澆がせ給ふ熱鐵の一涙、あり難さ滿身に鑽りもみする樣に侵み透り、あゝ今まで何十年お世話燒かせた許りに孝行らしい事は肩一つ揉んでおげるだけの業もせず、剩へいつぞや吾が子を叱り給ひしを見たる時は、口には出さゞりしなれど、此老耄の死損ひめと、勿體なくも腹立ちし程の此々〳〵不孝者にも御いつくしみ深く、御老體の殘年榮養なされて幾程ぞ、それを尙も短くなされて我に代らんとの喩へ難き廣大の御慈悲、今爰に不孝の廉々〳〵ありたけ攫み出して懺悔なし、許すぞ、と御一言きいて安く終りたけれど、叱、後れたり、せめては御手をばかりもいたゞいて彼世に行きたきに、無念、それも叶はず、三歳になる男の子、おのれは父に似て呉れるな、あッ、おのれは不孝でないか、あッ、父の死ぬにやさしくも泣いて呉れるか、あゝ罪もない者に悲しみを知らする悲しさ、ひイッといふ高啼の聲ばかり聞えて居ながら、次第々々薄霧の立籠むる樣に、舟に乘つて岸を遠ざかる樣に、朦朧寂寞となり終りて、後はごうッと鳴る大木の梢吹く風の餘りが卒塔婆を吊らひ、枯れ〳〵に泣く蟲の音が變化の少ない音樂を耳のない石塔の前に奏るばかり、是ぞ人間のとゞのつまり、王侯將相士農工商、遊女も哲學者も穢多も婆羅門も、御氣の毒ながらあなたでも妾でも同じ事なれば、其處でお釋迦も子供らしい觀念ではあつたらうが、ぞつとなされて發心なされたと云ふ話し、然し最負の引倒し連中の申す樣な、此發心がなんのかんのと申す譯ではなく、妾が料簡では高が物の哀れ

も別れ、藪蚊に一寸さゝれてもそれ寶丹、小石に躓づいて擦り疵出來たにもそれ即効紙、と騷ぐ程大切にしたる自分の親より子より女房より內々は最惜しう思ふて居た自分の身體にさへ別れて、化し野の空に飛び上るか、黃泉の流れに浮き沈むか知れぬ眞黑々の中に、行きとも無いながら行かねばならぬ悲しさ、今朝結ふた計りの天神髷、鞠ついて遊ぶにも散らけるを厭ひける美し盛りの小娘が、其髮のばらりとなるにも構はずがつくりと泣き伏して、切々と動氣烈しく、父樣いのう、と冷えかゝる左の手につかまりて呼ぶに、いとしの者や、汝を置いて父は何處へ行かれうか、と思ひ迷ひ、わいと一言返辭して、安堵させてやりたけれども舌の强りて意にまかせぬつらさ、長の年連添ふて一厘の隔なく契り交し、私は龜吉お前はお鶴、共に千代まで八千代まで、替らぬ、離れぬ、地雷火が今起つても、噴火山が二人の膝の間に燃え出しても、退かぬは退かぬは、神文くつされ、と惚れ合つた女房は、總身の肉めき〱と剝るゝまで慄へながら、我が胸をゆすぶり〱、取りみだして節糸の小袖ばりゝと口に嚙み裂き、妾を置きざりにして何處へ去れるとの恨み、あゝ可愛い貞節者、おのれその顏を見納めに、と眼は力一杯に開いても見えぬ切なさ、御隱居樣は平常痰持の咽苦しげに、ぜり〱した聲を御惜しみなく、精限りに、息子やッ、と耳につき給ひて、惣髮の白髮を我が杯邊に浪立たせられ、情無や世盛りの男を、ほッ〱、何たる逆さま事ぞ、ほッ、年老いし我は死なで、えゝ阿彌陀さま、我を息子の代りに引取つて下さらば、死別れも却つて嬉しからうもの

通り天竺の國王の息子、日本の高天が原長屋に住む連中の噂では、大名主位の者の惣領の甚六だとの惡口、なんの詰らぬ穿鑿、商人あがりでもマホメットは豪傑、厩の中で生聲あげられたとて、神の子なら、秣の臭みが移つても居まい、よしや我折れ、其親は大名主であらうが半名主であらうが、其の子は生れついての氣象おもしろく、「まくり」も能う飮んだやら胎毒も少く、清々しく生長つた樣子にて、乳の呑み過しから腦病も起さなかつたさうなれば、自然と出來のよい人間並に、智慧も日に增し發けて來たてあらうと思はれますに、やれ三年三月と何日何時胎内に居られたの、横つ腹を蹴破つて躍り出したのと、埒もない冗談、それで椽の下に飛び込めば血塊の妖物、評判〳〵木戶錢は見ての御戻り、おほゝ是はまあ輕率な、私とした事か圖に乘つて横道へはいりました、それから段々大きうなられて、人間は死ぬ者だと云ふ事を初めて心注かれた時、さりとては果敢ない者ぢや、死んで花實が咲くものかと、小聲で唸りもなさられず、あゝ死んで行く人が、お膝の上に抱かれた事もあつたお父さんやお母さんに別れ、馴れなじんだ女房、可愛い子にも別れ、一つ酒盞で獻酬して睦ましく語らひ合つた友達にも別れ、畜生の心にも我を戀しと思へばこそ、出這入每に尻尾をふつてふん〳〵と鼻を擦りつける可愛らしいあの黑斑にも分れ、半分は我が代理をして下女の睡りを每朝起したあの鸚鵡にも別れ、折角苦勞して拵へた家藏、丹誠した庭池、萬年青の鉢植、根上り松にも別れ、我が足音を知つて浮み出る緋鯉龜の子にも別れ、着卸したばかりの好みの衣裳に

ろけ、少しも分らず、釋迦といふは大の嘘つき、小説の苗賣り、其を買つて收穫をした利口者が、貫中馬琴をはじめ、唐土日本の昔しの小説家とは思ふて居ますに、我等友達の洋服男は大「ファロソフアァ」でげすの、珠數かけた男はありがたい宗教家でござるの、如意ひねくる男は打ち殺して狆にやらうのと、銘々勝手の云ひ草、おまへ樣のやうに佛は大歌人なぞと云はれたら、馬鹿も年數の功を積んで、妄想を捏着けた痔持の坐禪家や、不立文字と唱へながら不立公案と氣が注かぬ似非居士輩が怒らうも知れず、無門關一冊位を大事に秘藏して、乙にねぢれた言葉を放つ儕輩は、芥子よりちいさい眼て、達磨の眼睛すべて會せず、尋常呼びなす一聯の詩なぞと撒散した中蜂の法螺をさがし出して、得意顏に威張るでござらうが、夫等はどうせ碗中に濁酒を滿して醍醐を容れぬ阿呆、未來永々到底あやまちを改むる事のできぬ者なれば、おまへ樣の戀の譯もわからぬはあたりまへながら、舟を虛しうして以て人を待たうとして居る拙者にもしても、只今だけでは何やらわからず、最う少しこまやかに、と尋ぬれば、御道理〳〵、能くまあ今迄あなたがお耳に挾んで居らつしやる往古よりのつまらぬ坊主や、又は赤鬚連が己が田へ引く水懸口說をさらりッと投捨て御聞きなされ、秘事は睫毛とやら眞實のおもしろ味は茶をのみ飯を食ふ間にも行なはれてあれば直に分ります、さあ此處でござんす、耻を捨てゝ妾しの心意氣を無暗と曉舌りませうに、笑ふて下さるな、中途で寐たりなどなさると天窓から反吐はきかけますぞ、扨お釋迦樣といふ可愛い殿御は、〽あなたも御存知の

の香なき髮ぐる〳〵とまきて、ぢれつた結に束ね、大縞のどてら引かけたる風情、どうも云へぬ仇な所ありて然も異躰なるには、取つて掛る戯れ男もなく、不氣味の女と言ひ囃して其噂前橋の町に蔓延れば、或る飄輕の男、少しの才學に誇りし者、それは面白し、我出逢ひて談り合ひ、若し氣に入らば引出して妻とせん、左樣の女ならでは我が細君となすには足るまじ、兎も角も無益にしてからが一斗の損、と五升宛を馬の兩脇に付け、身も其に乘りて六里の道を苦勞とせず、晝頃行き着き、案内申す迄もなく忽ち爐の爐に座りて持せの酒を進め出せば、女苦笑ひして、小利口な男め、我を嬲つて遊ぶ氣か、片腹痛し、眞に我が戀の由來聞きたくば中途に逃ぐるな、何にせよ是は御馳走かたじけなし、と飮むは、飮むは。飮んで、亂れず、諸膝崩れざりしが、一時ばかりに一斗滴水も殘さぬ手際、流石の男驚きけるをじろりて眺めて、ほゝと笑ひしより頰の色美しくなりまさり、瞼に紅さして來りける。

男此躰を見すまし、御前樣戀の仔細、世に珍らしくお釋迦樣を相手になさるは何故か、少し伺ひたし、と詰寄るを打消し、はて無粹なお方や。――世の中に心の美くしう洒落れたは歌人と極つてある事、歌人に惚れぬ女は人形喰ひとて是雌犬同樣、我は自然と佛一代の御所行聞きおぼえて、扨も世界の大歌人、天晴美しい方樣、たのもしい男、粹なお人、實のあるお方、今若しござらば少し甘えても見たく、可愛がられても見たい殿御と思ひろめたが無理でござんすか、とい̀ふ。やれ〳〵變なおの

毒朱唇

浮世をすねた山中のさる者。
色氣なき大年増の戀ものがたり。
聞いて給はれ。雲どの岩殿水殿人間殿。

上州に名高き三山の第一と呼ばれたる赤城の景色、殊更勝れた所ろは瀧澤の不動様ある邊りなり。十丈あまりの瀧の音絶えず、溪川白く泡立ちて石を轉ばし流す勢ひ、都の人に見せたきはこればかりならず、大通龍の命とやらんを崇めし巖の鐵鎖あらずば登り難き峻しさ、御獄鎭座の岩も其如く、小通龍は尙恐しく、藤蔓に纏はれし趣き中々面白し。國定忠次が匿れ潜みしといふ洞穴の奥深きも物凄き一つなるに、斯る所を何と見てか溪川のほとりに何時の頃より移り住みけん、樵夫の妻にもあらぬ二十五六の女居りけり。小夜の寢覺に狼の聲を氣味惡くも思はぬか、扨も不思議と折ふし不動へまゐる人の尋ね寄れば、何の〳〵氣味わるき者は都に多しといふ。何とて山中に好い器量持ちながら暮さるゝと問へば、戀故との答へ。誰をと聞けば、釋迦さまを、と途轍ない挨拶して横を向き、白雲打ち眺め、長々しく息を吹き、願はくば一斗の酒を得て、有緣の山川草木禽獸蟲魚人間に我が戀の恍惚聞かせて呉れん、と獨り言したまふ眼付きりゝしく、鼻筋通りて、色淺黑く、油

重ねて笑ひぬ。『いや、吉山さん吉坂さん吉岡さんの企畫も皆おもしろいです。吉岡さんは細工が上手で工夫の才のあるやうに私も豫て思つて居ますから、必ず成功さるゝことと信じます。どうか綿密の注意をもつて成功さるゝやう祈ります。如何にもあなたの御手から活物が出來ましたら汝に取つては非常な愉快な事でせう。吉山吉坂兩君の少年會堂の建築も必ず出來るに違ひありません。たゞ手を切つたり足を傷つけたりなされぬやうに願ひます。其堂が成就しまして其處で皆さんに今日皆樣が述べられた遊びの企望の結果をば皆さんから伺ふのは今日にも增して愉快でせう。あゝ然し今日は面白うござりました。それでは今日はこれで御別れと致しまして、九月の授業初の前一日に吉山さんのところの少年會堂でまた皆樣集會することゝ致しませう。實に其時が樂みでござります。先づそれまでは、皆さん充分に面白く御遊びなさいまし、さてそれでは、君が代を歌つてお別れにいたしませう。』と云ひ終つて君が代を歌ひ出せば一同これに和して其聲明神山にふるひぬ。其日そこに暮れてより、今猶愉快なる少年少女は、餘念無く自己〳〵の樂しとおもへる事して遊び居れる最中なり。

したつもりですから實驗したくて堪らぬのです。幸ひ道具類は吉瀧さんの家にあるものを貸して貰ひ、材料も貰ひ受ける約束が出來、また卵は新鮮なのを吉山君から貰ふことが出來るに定まつたので、わたくしの勇氣は非常に燃え立ちました。母鷄の何程の熱度を持つといふことも知つて居りまするし、それだけの熱さへ間斷なく二十一日間與ふれば、卵子は必ず孵るといふことも定つて居りまするから、わたくしの設計裝置さへ惡くなければ、必定鷄の雛を得る譯です。失敗するか何樣かは知りませぬが、洋燈の小いのも備へて居りまするし、寒暖計も吉山君から借てありまするし、遺るところ無く諸君からさま〴〵の便利を得たので實にわたくしは悦んで居りまする。若し私の手で雛鷄が何羽か孵つたならば實に嬉しかろうと思ひます。ひよ〳〵と鳴く、丸つこい雛が、わたくしの考案の機械の中から生れ出た日には堪りませぬ。必ず其幾羽を吉光君に呈し、吉山君にも吉瀧さんにも吉野君にも餽りたいのです。而して死んだのがありましたり、孵らないのがありましたらば、「活きて居るものが人の力から出來るものか、馬鹿なことを云ふな」と云つた吉熊さんに獻上しやうと思つて居ります。先生、是がとても出來ないことでござりませうか。』と滔々として演べ立てたるは流石に一種の才を抱ける一ト風異りし少年なり。

教師は微笑を含みつゝ、先刻より聞き居しが今吉熊に吉岡が返答の奇語を與へて、卵子の腐りなば獻上せんといふに至りては思はず知らず一同と共に哄然と笑ひて、顔をふくらす吉熊のをかしき態に

しらへた活物を持て行つて吉山君の恩に報じ、吉光君の惠みにも報じ、諸君の驚く顏も見たいものだ。』と叫び出すに、吉熊たちまち聞き咎め、『なんだ吉岡、僕のこしらへた活物、とは何の事だ。活物といへば活きて居るものだ、活きて居るものが人の力から出來るものか、馬鹿なことを云ふな。』と罵りぬ。

其十　巧思ある吉岡才五郎

吉岡は腕力など吉熊に及ぶべくもあらず、勇威も剛情も及ばねど、平生吉熊を愚なりとして、少しも之に屈せざれば、吉熊もまた吉岡を、取るに足らざる弱蟲として、常に侮り輕んずるなり。されば吉岡は今吉熊の言葉を聞くと共に冷笑つて、『默りたまへ吉熊君。君のやうな人は薪でも割つて居るが好い。何も分りもせぬ癖に、理屈らしいことを云ひたまふな。』と云ひ棄てつ身を起して吉井敎師の前に進み出で、吉山と列びて立ちながら笑をつくり、『先生わたくしは活物をこしらへたいと思ふのです。嘗てわたくしは雜誌を此の吉山君に借て讀みました其中で、龜の卵、鷄の卵などは熱さへ與へれば孵るものだと書いてありましたのを見ました。それから私はさま〳〵考へましたので、わたくしは鷄を家に有ちませんが、鷄が欲しくてなりませぬところから、遂に卵子をわたくしの手で孵したいといふ氣になりました。ところが今わたくしが腹中に抱いて居る考案が十分に熟

墾の結果を御話しになり、吉川君は採集なされた植物を陳列なされ、吉沼君吉熊君は何か知れませねど大望の結果を御話しになつたら定めし愉快なことでござりませうと思ひます。』といへば吉坂も後に言葉を添へて、『僕は吉山君から頼まれて最も建築し易くて、最も我々の遊び樂むに適した一小堂を設計し、而してまた鋸を手にし斧を手にして覺束無くはあるが建築者になるのです。幸ひに吉山君のところに空地もあり木材も澤山不用なのがあるので、僕の思ふ通りのが出來れば、隨分諸君が思ひの外なのをこしらへ出すつもりです。』と云ひ足しぬ。例の吉熊はまた憎まれ口、『僕が搖ぶつて破れるやうな家ではあるまいか、アハヽヽ。』と笑ふに吉山泰然として、『いや、大丈夫。吉熊君を閉じ籠めて暴れさせぬやうにすることさへ出來るほど堅固に造るつもりですから出來ましたら搖ぶりに御來臨になりませ。』と云ひ終つて輕く笑を泛めぬ。『吉山君の重厚なると、吉坂君の精密なるとで、必ず其家は出來ませう。僕は其少年會堂が出來る頃必ず土の着いた農產物を持參して、諸君に差上げませう。』と吉野頓作は云ひ出せば、『妾は小な卓子袱でも刺繡したのを其少年會堂とやらに寄付しやうと思ひます。』とおこんは云ふ。吉沼吉熊は默り居れど、吉川は『僕も面白い植物でも採つて來たら其堂の前に植ゑて遣ろう。』といひ、『紙張板張のところなんぞに繪をかくべきところがあつたら僕は摸樣でも繪でも描いてあげやう。』と吉光も云ひ、『妾は此休暇後の集會日に琴でも彈いて餘興を添え、落成を祝ひませう。』とお仙も云へば、彼の吉岡の才五郎は『僕も其時は面白い僕のこ

房をこしらへ、それを我々少年の集會娯樂するところと仕やうと思ひついたのです。決して大人の助力を須ゐず我々ばかりで何樣なものでも建築したいのでございます。勿論何も知らぬ兒童ばかりで小さいながら家を建てやうといふのでございますから隨分むづかしいには相違ございませぬが、十分學ぶべきことは學びまして、考ふべきところは考へまして、急かず忙てず勉めましたら、出來ぬといふことは無かろうと思ひます。定めしいろ〳〵のをかしい失敗も出來ませうが、私は失敗からいろ〳〵の事を學びたいので、決して成功ばかりの夢を見て居るのではありません。失敗も隨分をかしかろうと吉坂君とも話しあつたのです。吉坂君は意匠に富んで居る人ですから、目論見の大躰は吉坂君が立てゝ、繪圖も吉坂君が製する筈なのです。温良で心の急て無い吉坂君の性質は私と事を共にするには最も適して居るのみならず、おもしろい工夫のある人ですから僕は有力な同志として十分の尊敬を以て待遇するのです。僕等の設計した小屋が何樣な風に出來ますか、定めし妙なものが出來ませうが、いづれ此休暇の終りまでには曲りなりにも造り上げて、諸君を其堂に招待し、先生にも來て頂きたいのでございます。今日は此處の會合で、此の明神山は實に我々の希望を吐いた歴史ある地となりましたが、わたくしの少年會堂は他日に於て諸君が暑中休暇のさま〳〵の遊びの結果を御話しになる場處と仕たいのです。わたくし等のこしらへた一堂の中で吉瀧さん吉田さんは吉原君を伴つて御來臨になり、吉光君は成就した繪を御持ちになつて御示しになり、吉野君は開

刺繍をなさろうといふのも悪いことは少しもありませんから、斯様なさいまし、毎日替りあつて看護をなさるのが好うござります、而して其間々に吉田さんは刺繍を、吉瀧さんは音樂をなさるが好いてす。』と云へは二人も賞讃されて、心の勇みは一段増し、『それでは家へ歸つて兩親の許しを得ましてから、屹度看護を代りあつて、二人て致しませう。』と一句、一句、かたみがはりに云ひ合ひて、靜に師の前を退きぬ。

其九　殿様風なる吉山吉太郎、溫良なる吉坂大十郎

級中の首席を占むること多き吉山吉太郎は應揚にして、すべて物事の順序立ちて都合よきを好み、假にも亂雜無法なることを悅ばず、人と爭はず、人と競はず、奇異なるところも特殊なるところも無き代り、人に嫌はるべきところ一つも有たぬ眞に君子の風ある少年なれば、德望おのづから備はれるなるが、今しも敎師に招かれて、悠然と立出でし其風情、何處と無く品高く位有るに、ことさら吉坂大十郎とて、是もむつくりと下豊れの顏つき下品ならぬが後につきたれば、『殿様』『お扈從』との叫聲は忽ち起りぬ。云ふまでも無く吉熊の戲言なり。吉山は更に頓着無く、『先生わたくしは吉坂君と二人して妙なことを企てたのです。ほかでもありませんが私の家には空地も澤山あり、材木も隨分貯へてありますから、父の許しを受けましたによつて、構へ內の景色の好いところに一軒の淨

病を仕てあげるといふ事はどれほど人の爲に好い事であらうかと氣がついて見れば、妾も吉田さんのやうに看病を仕て見たくなりました。先生、何樣でせう。妾も看護仕て見たいと思ひますが。』と云ひ出すは吉瀧お仙なり。敎師の吉井は二人が此の言葉を聞いて痛く感動し、『あゝ、ありがたい御心掛です。實にわたくしも吉田さんの御美しい御心持には感心いたしました、而してまた吉瀧さんの善を好むことと餓ゑたる人の食を求むるやうなのにも敬服いたしました。まことに大人も及びませぬ。休暇の間を看護婦になつて消光さうとは何たる美しい御心でせう。あなた方御二人のやうな生徒を持つたは、わたくしに取つては藍綬褒賞を自身に賜はつたより嬉しいことで、今日のやうに清々しい幸福を得た經驗は吉井善作一生にまだありませぬ。天は必ず御二人の前途に幸福の大なるものを賜はるでございませう。實に涙がこぼれます。わたくしは敎師でございますが、今日は却つて御二人に敎を受けました。善の念ひが何程直に人を樂ませ、世を淨くするものであるか、善の力がどれほど人を感ずるものであるかといふことを、つく／＼身に染みて感じました。吉野さん、あゝ汝も感じて泣て居られまするか。吉山さんも吉岡さんも涙ぐんで居られまするか。あゝ、お二人は實に一同に取つて貴い師です。吉原さんや吉原さんの母樣も定めて泣いて悦ばるゝことでございませう。吉原さんの病氣が傳染病で無い以上は、無論醫師の吉樹さんもお二人が看護婦を事を御學びになるのを賛成致しませうし、お二人の御兩親も御許しになりませう。音樂をなさろうといふのも

うになるだろうと思ひます。妾の家では父も母も病氣を仕た事はありませんが、女のことですから看護の事を知つて居た方が好いには違ありませんから、自分では今は刺繍よりも看護の方を少しなりとも遣つて見やうと思ひます。先生。家のお父樣お母樣が御許しになれば明日からでも今日からでも吉樹先生に心得を敎へて頂いて吉原さんのところへ參つて看病を仕樣と思ひます。此休暇中妾は看護婦になつて見やうと思ふのですが先生何樣でこざりませう。』と云出せは、敎師の言葉を待たずして、『先生妾も吉田さんのやうに看護婦のことを習ひます。』妾は吉岡さんと約束を仕て、吉岡さんに色々の物をあげる代り、何樣な形でも宜いから樂器を一つこしらへて頂く筈に致してあるので、其樂器が出來たら此夏中は其を玩弄に仕やうと思つたのです。吉岡さんは大層物をこしらへることが御上手ですから、妾に琴をこしらへて下さるといふのですが、わたくしは家の兩親が如何に吉岡さんが器用でも琴は出來まいと申すにも拘はず屹度出來ることを信用して、さま〳〵の道具も木や板も進るつもりに致したのでござります。また吉岡さんは屹度御こしらへあげになるに相違無いのです。ですから非常にそれを樂みに致して居りましたが、今吉田さんの御話を伺ふ中に感じまして、わたくしも吉田さんのやうに看病を仕樣と思ひたちました。ほんに吉原さんは可憫です。若し妾が病氣でゞもありました時、吉田さんが看病に半日でも來て下さつたら何樣なに嬉しからうと思ひましたら涙のこぼれるやうな心持が仕ました。想つたばかりでさへ斯樣でござりますから、看

師の吉井は此躰を面白からず思ひてや、誇り騒ぐ吉熊を制して、『吉田さん。』と聲かけて、彼の吉野頓作が企畫に便利を與へんと云ひたる丸顏の少女を呼び出したり。吉田おこんは心優しく活潑したる愛らしき見にて、其笑顏の美しさは人を醉はしむるばかりに、決して人の機嫌を損ふやうなる事をせぬものなれば、必ず好きことを云ひ出づるならんと、『吉田さん、あなたは何をなさる。』と問へばおこんは凉しき眼を敎師の面に注ぎながら、『先生、わたくしは刺繡を仕て此の休暇中を遊ばうと思ひましたが、先刻吉野さんの御話を伺つてから考へ直しました。一旦思ひ立つた事を爲ぬのは惡いことだと先生がいつぞや仰せでしたが、どうも自分で片意地に自分の思ひ立つた事を仕やうとするよりも、考へ直した事をする方がよいやうに思ひます。ほかでもありませんが、吉野さんの御話によれば吉原さんは病氣におなりなさつたといふ事ですが、あの方は左樣申しては失禮ですが、御家も御有福といふでは無し、お母さん御一人で、御手も足るまいと思ひます。斯樣やつて私達は皆樂しく此休暇を遊びますのに吉原さん一人は暑い日を病蓐の中で御送りなさると思へば御慨然で、何とも御氣の毒でなりません。それで妾は先生の修身の御話を伺ひました看護婦の事業の立派で而して美しいものだといふことを想ひ出しましたから、心の內で、いつそ刺繡をやめまして看護に每日吉原さんのところへ行かうかと思ひつきました。わたくしは未だ毫も看病といふことを仕た經驗がありませんが、お醫者さまの吉樹さんに其心得を敎へて頂いたら最初は下手でも段々能く出來るや

ゝに至つて『面白い面白い。僕は此様いふことなら大好だ。危險なことは少しも無い。よし有つたにしろ山鉈を腰にして此吉熊が居る以上は何の恐るゝことも無い。必ず一行を十分保護して、君の目的を達させる。辨當も僕が擔いで遣る、さま〳〵の用具も僕が持つて遣る。嶮しい路は僕が先づ踏み開いて樹から樹へ繩でも張つて君等の攀ぢ登る便にする。何でも不殘僕が引受ける。そして何日から事をはじめる、明日からでも關はぬは。』と思はず大聲に云ひ出づれば、『それでは既よろしい。相談は濟んだといふもの、さあ彼方へ行かう。』と先に立つて立戻るに、皆〳〵はいづれも眼をあげて見るにぞ、吉熊は鼻高々と、『君等は知るまい、僕と吉沼君との試みる大遊戯を。ゑへん、尋常一様の詰らぬ遊びとは違ふは、快絶壯絶の大事だは。これ吉光、汝も同志の一人に仕て遣るから有り難うといつて三拜するがよい。吉川君も同志にする。中々兒童だつて偉いものだといふことを一村のものに示して遣るのだ。愉快々々。山鉈だ。繩だ。長い杖だ。吉熊が勇を奮ふのだ。』と叫び立つて一同を驚かしぬ。

其八　慈悲深き吉田おこん、善に遷ることを敢てする吉瀧おせん

吉沼は自己が遊びかたを云はねば何とも爲がたくて已みしが、之を見て皆〳〵少し樂まぬ色あり。敎

ろところがあるに相違無い。それを發見して、村の人、特に吉山君の嚴父にでも知らせたら、實に我等少年の仕事としては大きに愉快なことゝでは無いか。然し多少危險もある、無人の地にまで行かうといふのだからね。またこれを先へ知らせれば、人々も制しとめるに違ひ無いけれど、僕は川の岸に沿ふて山に入るに左ほど危險は無いと思ひ、危險があるにせよ其を防ぐだけの思慮さへ周密なれば恐るべきことも無いと思ふ。僕は磁石、寒暖計、見取り製圖の用具、懷中時計等すべて及ぶたけの用品を準備して、每日地圖を製し、地理を記しながら、一步一步と極々遲緩に、功を急がないで進むつもりだ。日に一里づゝ進んでも中々四十日といふ日は長いから凡そ四十里は探れる譯だが、左樣も行かぬとしたところで漸々に遣つて行つたら上流二十里は隨分精密に調査することが出來る。植物採集を企てゝ居る吉川も後で說き伏せて同行者とする。必ず僕は彼を同行者にする。植物採集も我々と同行しながら出來るからね。而して三人になれば、いよ〳〵萬事に都合はよい。但し吉川には我々探撿の眞の目的は話さぬのだ。それから吉光もある塲處までは、我々の同行者とする。一行四人の中で特に君の剛健なのに賴る塲合は多いかも知れぬ。君には、山鉈の大い奴を腰にさげて嶮岨を攀ぢるための準備の繩、長い杖などを掛つて行つて貰はねばならぬのだ。すべて僕を助けて事の結果の得られるやうに仕てもらひたいのだ。隨分面白からうではあるまいか、此の企畫は。』と云へば吉熊はぞく〳〵悅び、先刻より肩を搖り上げつ腕に力を入れつゝして樂しげに聞き居しが、こ

人に愚だといはれるか何と云はれるか知れたことでは無い。君は僕の企畫を何樣な事だと思ふか知らんが、僕の遊びは遊びといふもの丶結果次第によつては、隨分此一村の利益ともなれば國益ともなることだ。其代り詰らぬ結果になれば、君と僕とは無益な勞をするばかりで無く、何をして此四十日ばかりを暮したかといふやうに嘲されるやうになるのは是非の無いことだが、なあに君、何と云はれたからと云つて最初に其目的を大業に吹聽さへせねば、僕と君とは或事を研究したが其結果が良好で無かつたと云つて仕舞へば濟むことだ。而して二人は假令好結果を見ぬまでも毎日〳〵自分等の心を滿足させるだけの事を仕て行けば、左まで不快で暮すといふでも無からうから好いては無いか。なあ君、左樣では無いか。そこで僕の遣つて見やうといふのは此吉水川の上流の人跡未だ到らぬところを探撿しやうといふのだが、これには少し思ふところがあるからで、他では無いが嘗て此川に大出水があつた時、それ去年のあの出水の時、その後で僕が水の退いたところを散歩した折に不圖、見出したものがある、僕の家へ來て見たまへ今でも持つて居るが、其品は一片の黒い輕い石で、即ち眞の石炭だ。そこで僕は、何樣して石炭の碎片が川原に殘つて居たろうと猶注意したところ、二三片をまた得た。さては此川上に、必す石炭の露出して居るところが水に臨んで在るに違ひ無いと斷定したが、猶其後も大雨の後など注意して川の邊を視たところ時々一片二片づ丶水に連れて下るのを認めたことも度々ある。して見れば、いよ〳〵此川上の那處かに石炭の存在して居

て、『やあ、吉沼君。おもしろいぞ。やるべし、やるべしだ。僕は先鋒の大將になる哩。君、此川下の村へ闖入して、彼村の學校の生徒とでも大喧嘩を始めやうか、而して戰利品を非常に多く持ち返つて諸君に分配して遣つたら定めし面白からう。やるべしだ、やるべしだ。計略は君施し玉へ、戰鬪は僕が引受けるから。ゑ、ゑ、何時出發するのだ。明日でも好い、今からでも好い。僕の奮戰のありさまの猛烈なところを君に見せる。自慢では無いが五人や六人捻り潰すのは蚤を殺すより譯は無い。吉光君なども些僕の戰ふ狀でも繪にすれば好い、川の畵など描くより幾干好いか知れぬに。』と獨で興ずるに、吉沼徹一は猶眉も動かさず、『吉熊、そんな事を僕はするのでは無い。此方へ來たまへ、君にだけは話すから。』といひながら吉熊の袖を曳いて、敎師の前を去り、樹木茂れる靜なるあたりに去らんとす。敎師の吉井は剛情なる吉沼の事なれば呼び留んともせず、打棄置くに、吉岡、吉坂、吉光等は吉熊の後につきて何事を吉沼の語るべきか、其を聞かんと同じく林中に入りしが、後から來たものを逐ひ拂へといふ吉沼の言葉をきくが早きか振顧りて大聲に、何故ついて來ると怒號する吉熊の勢に辟易して逃げ戻りぬ。吉沼は四邊に人無きを見て、『吉熊君、君は實に大膽で、躰格も好し、勇氣もあり、氣象も快活だから、君にだけ密に話すが、決して君は此事の成功せぬ中は人に語つてはいけぬ。不成功の時はすべての事が人の笑草になつて仕舞ふばかりだ。だから人には成功を見せて遣るが好いので、目的を語るのは愚だと僕は思ふ。特に僕の企ては結果を見ない中は他

遊びます。』との教師の問は下りたり。すは如何なることをか云ひ出づらん、必ず吉沼の云ふところ面白きことあらんと一同は片唾を呑みて扣ふるに、『先生、僕は、或目的を立てることは立てました。而して此休暇を決して徒に費すことは無く消光します積りです。然し僕の爲やうと思ふことを今此處で云ひあらはす必要は無いと思ひますから申し上げ無くても宜しうございませう。たゞ決して僕は四十日間を徒費は致しませぬといふことを誓つて置きましたら宜しいでせう。』と意外の答は放たれたり。教師も少し心安からず、一同も奇異の思をなしつ、誰も彼も少時顔見合せしが、教師は豫て吉沼の剛情にして云ひ出したることを後へ引かぬを知るものから言葉を和らかにして、『然し吉沼さん、惡いことで無い以上は口外なすつても差支は無い筈ではありませんか、諸君も定めし汝が何を爲さろうといはるゝかと聞きたく思つて居られるでせうし、また吉熊さんは特に汝と一處に遊んで汝を保護しやうと思つて居らるゝことですから、取り分け聞きたいと思つて居らるゝに、相違無いのですから成ろうことなら此處で汝の思ひ立つたことを仰あつたが好いではありませぬか。それとも汝が謀反でも起さうと思ひ立つたのなら迂濶に大事を洩らせぬも無理ではありませぬが、』と末は少し滑稽にかけて諭せど、頑として聞き入れぬ吉沼は、いと冷かに色も動かさず、『先生、僕は其謀反を企てるのです。それで迂濶に大事を洩せぬのです。』と云ひ切りたり。『ゑ、汝は謀反を企てたと仰ありますか。』と教師は問ひ返す。『左樣です』と吉沼は眞面目に答ふ。吉熊は此問答を面白がり

は、つか〳〵と進み出でゝ手を取りながら親げに、『おゝ、吉熊、汝は吉沼の黨與になれ。』と云ふ中に同輩に言ふよりは少し傲然と命令するやうなる氣味を帶ばせて威張りて云へど、吉熊はこれを却つて悦び、『おゝ君の云ふことなら僕は聽く、君は何をして遊ぶか、聞かせたまへ。』と無邪氣に其遊びかたを問ひかけたり。

其七　剛邁なる吉沼徹一

一同の眼は吉沼が上に注ぎぬ。色黑くして身幹小けれど、心堅くして情硬く、思ふこと大にして行ふこと嚴なる精悍剛愎の吉沼徹一が何事に日を暮さんとするかは、誰しも知りたく思ふところなればなり。敎師も今は吉熊を放免して復問はず。『吉熊さん。それでは汝は吉沼さんと一處に遊ぶが可でせう。然し、汝は他の人の保護者となると云ふ以上は、第一に他の人の其自由を保護しなければならぬ筈で、決して汝の考へをもつて他の人の爲ることと思ふことに干涉するやうなことは成らぬ筈です。これだけを能く記臆えて居らぬと、一處に遊んで却つて互に不快を感ずるやうなことになります。』と諭すに、吉熊は、敎師に復問ひ詰められぬを悦ぶものから、何と云はれても二つ返事に、『ハイ』『ハイ』『ハイ』といふのみにて、終に一禮して退きぬ。やがて敎師は吉沼を呼べば、吉沼はつか〳〵と歩み出でぬ。衆人の目はいよ〳〵吉沼が面に集まりぬ。『吉沼さん。汝は何を爲て此の休暇を

しらへやうと思ひましたが、彈機を何樣してこしらゆるのやら、雷管を何樣して造るのやら、少も知りませんから止めました。僕の望みは斯樣いふ風に皆出來ぬことになりますから、仕方がありません。僕は戰爭の眞似を仕度いのですが兵隊になる人が無いから困ります。僕は僕の軍人になりたいといふ精神に協ふやうな遊びかたの無いので困ります。釣を仕て遊ばうかと思ひますが、釣も毎日では面白くありません。狗でも打殺さうかと思ひますが、先日吉山君の家の黑狗が僕に吠えたので僕が殺した時先生に說諭されましたから、休暇中に僕の爲ることはありません。僕はこれから諸君がいろ〳〵の遊びを話す中で、僕に面白いと思へるのがあつたら、僕は其人と一處に遊ばうと思つて居るのです。』と眞面目に云ふ。敎師も呆れ、『成程あなたの考へた事は皆無法です。大砲を打放したり御寺の緣の下に地雷火を仕掛けられたりしては堪る事ではありません。煙硝をこしらへたり小銃をこしらへたりするのは危險の事ですから汝等の年頃では爲ぬ方が宜うござります。他の人と一處に遊ばうといふのは好い思ひつきです。汝は軍人になりたいといふ精神に適した遊戲が仕度といふなら、他の人が何事をか企だてゝ、それに障碍のあつた場合に、其人を保護するのを汝の任務としたら好いでせう。但し喧嘩爭鬪をするやうなことは避けなければなりません。』と云へば吉熊も悅びて、『左樣します。左樣します。然し僕は吉光君の保護者などになるのは厭です。吉沼君か吉山君の保護者になら乾度なります。』と云ひ終つて吉山吉沼の方を見るに吉山は敢て口を啓かず。吉沼

『好い事をして遊ぶとは結構な事ですが、して其好い事とは何樣な事で、』と、また問はれて、また困り、『先生、實は僕は知りません。』と牛の吼ゆる如くに唸り出しぬ。一場の少年少女は皆笑ひぬ。教師の吉井も唇のあたりに笑を浮べながら『それでは吉熊さん、汝はまだ自分の遊ぶことも考へなかつたのですか。』といへば『いや。先生。僕は考へたのです。然し僕の考へたことは、屹度先生に叱られるだろうと思ふのです。僕は先生の氣に入るやうな詰らんことは考へ出せないので、困ります。』といふ。一同はまた笑ひ出しぬ、吉熊の考へ出すべきことは大概無法亂暴の事ならんと私に猜すればなり。教師は面を和げて、『いや、大抵の事ならば元來が遊戲の事ですから差支は無い筈ですが一躰どんな事を御考へになつたのです。』と優しく問へば、『それでは云ひますが、僕はいろ〳〵の事を考へました。僕は軍人になりたいのですから、繪も描きたくはありません、開墾も仕たくはありません、植物採集も仕たくはありません。僕は大砲を村の背後山に仕掛けて、川向ふの山に大きな樹のあるのを的とし、澤山の焰硝を籠めて毎日五百發位どん〳〵と打放したいのです。然し是は到底出來ないことですから考へると直に自分から考へを廢めました。それから僕は地雷火をこしらへて村の御寺の大いのを爆裂の聲の中に跳ね飛ばしたら實に愉快だらうと思ひました。先生僕は火藥を製造することを知つて居ます。夫故に十分に出來ることでさへあれば此望みは遂げられるのです。然し是もまた僕自身で到底出來ぬことゝ思ふて止めました。それでまた僕は、鉛でもつて小銃をこ

ひかねたり。『ハア、あなたは』と教師は誘ふ。『先生、僕は、』とまた答ふ。『あなたは』『僕は』『あなたは何様なさるので』『僕は、先生。先生、僕は。僕は、先生。先生、僕は』と一つことを繰り返すのみ際限なければ他の生徒は皆心ひそかに、吉熊が心中に何を仕て此の休暇を過さんといふことをも未だ考へ得ずして此處に來しならんと解るものから、日頃の亂暴活潑に似ず、教師に問はれて行詰り、先生僕は、僕は先生とのみ究して言ひ居れるが可笑くてならず。中にも吉岡才五郎は吉熊のために平生壓せらるゝことあるより、聊か此態を見て心快くてや、『先生僕は、僕は先生』と小聲にて吉熊の眞似をすれば、聲は小かりしが、一同皆笑ひ出して吉熊の方を眺めぬ。吉熊今は眞赤になりて面の色火の如くなり、額の髮際より汗をたら〳〵と流しつゝ教師の前に直立し居しが、吉岡の方を涙にや潤ひたる、濕り光りのしたる眼をもてぎらりと睨めつけつ太き息つくのみなり。教師は猶も追究して、『吉熊さん何様しました。何もむづかしいことでは無し、何様して此休暇を御消光なさるといふことをさへ仰あれば、それでよいのでございます。昨日私から無益に日を送ることの宜くないといふことを申して置きましたからまさかに午睡ばかり仕て此長い休暇を送らうとなさるのでもありますまい。さあ、何をして日を消光さうと汝は御思ひになつて居られますか、それを仰あい。』と責め立つるに、吉熊今は絶体絶命『先生、僕は、僕は、僕は』と云ひ居たりしが、遂に非常の勇氣を起して、『先生、僕は、好いことをして遊びます。』と云ひ出しぬ。

ではあるまいかと非常に心配した。一躰山吹の心を口に入れて玩弄にするのは甚だ危險だ。何故此樣な危險なことを敎へたと腹でも痛み出したら吉瀧さんの家へ議論仕に行かうと思つて居たほどだ。』と云ひ出す。『ハ、、隨分自分勝手な愚論だ。』と吉岡思はず口に出せば、『失敬な吉岡の繪乞兒め。愚論で惡ければ何樣すれば好いか。僕は君のやうに他人の骨を折つて描いた書を貰はうとは云はぬぞ、繪もらひめ。』と大喝するこの雷の如し。敎師は是に笑ひながら、『無益な罵詈をするものではありません。それらの事は擱いて、吉熊さん、あなたは他のことをいろ〳〵と先刻から許をなさいましたが、あなた自身は何樣なことを仕て休暇を御消光なさいますか、それを伺ひたいものです。』と云ふ尾について吉岡は『謹聽々々』と叫び出す、吉光も『謹聽』と之に和す、吉瀧お仙も『伺いたいものです』といふ。吉川は冷かにして鐵の如く默し居れども其他は吉野頓作の沈毅なるまでも掌を拍つて『謹聽々々』と囃し立つるに、如何にしけん吉熊は今のさきまで快濶なりしに似もつかず默然として言葉無し。『何樣しました吉熊さん。あなたは何をして遊びます。』と敎師は再び問へど猶答へず。『あなたは何を仕て御遊なさいます。』と三たび重ねて問へど猶答へず。『これは何樣なさいました、吉熊さん、あなたは何を仕て休暇を送らうとなさるのです。』とまた問はれて吉熊默するに默しかね、『先生、僕は』と云ひかけしが、言葉は其限にして後はまた默す。『ハア、あなたは何樣なさるので、』と吉井敎師は二の語を誘ふに、また默しかね、『先生、僕は』とは云ひ掛けしが後は云はんとして云

ひました。』と答へ終りて揚々たり。『鐵の尺度とは何故云ました。』と糺せば、『先生、竹の尺度は折れることも割れることもありますが、鐵の尺度は恐らくは堅固で、而して精確なもので、こつ〳〵としたものでござりませう。吉川君の物事に精確て堅固て、こつ〳〵としたところは、丁度鐵の尺度と同じことです。それでわたくしは鐵の尺度と申しました、先生、これは皆わたくしが吉川君を惡く言つたりなんぞしたのではありません。また少しぐらゐ惡口をきいても關ふことはありません。吉川君と僕とは交情が惡いといふのではありませんから。』と理屈あり氣に云ふことの更に理無きも中々をかし。教師も此の不理屈には笑を催し、『交情が好いから惡口を云ふても好いといふ道理は奇妙な道理です。たしか然樣いふ道理は修身書には無かつたやうですが。』といへば一同は噴飯して笑ふ。中にもお仙は轉ぬばかりに笑つて『先生、吉熊さんの道理は何時でも左樣いふ工合の道理です。先日も雜魚を他人の家の庭の池から、釣りあげて、僕の鉤にかゝつた魚だから僕の魚だと仰ありながら、昨日吉熊さんの御家の御庭の山吹を妾の妹が取りまして其の心を奇麗に紅で染めて玩物にして居りましたら、不埒のものだ、僕の庭に生へたものだから僕のものだと仰あつて、取りあげて御仕舞ひなさりました。』と云ひ出せば吉熊は頬を膨らせ、『その山吹の御蔭で僕は酷いめに逢つた、吉瀧さんの妹のやうに僕も唇頭で啣へては、ポッン〳〵と吸ひ込んで居たら、其の中にツイ過まつて呑み込んで仕舞ふたので、何樣なことになるかと大いに驚いた、消化の惡るいのはまだしもだが萬一毒

へ育て居けるが、無遠慮過ぎて人を人とも思はぬより兎角に憎まれ口など自己が思ふまゝに云ひ出づるには吉井も弱りかへりて、時々は嚴しく叱らざるを得ざる場合あり。今日は學校の課業に就けりといふにもあらねばと思へるが爲にや、先刻より吉熊の我儘勝手に、さま〲のことを云ひ、人を嬲ること甚しければ、終に堪へかねて面前に呼び出したる教師、『吉熊さん、あなたは先刻から、いろ〲の評を他の上に御加へなさいますが、みだりに人の氣持を惡くするやうなことを云ふのは好くない事です。弗箱とは何です。鐵の尺とは何です。吉川さんの植物採集を爲うとせらるゝのも、其性質の謹嚴で居らるゝのも、共に結搆な事で、毫も嘲り笑ふには當らぬことです。それを弗箱萬歳だの、鐵の尺度だのと汝の言ふたのは何樣いふ御意です。次第によつては汝は謝罪するのが至當ではありますまいか。若し自分で御考へになつて善くなかつたと御思ひでしたら直に謝罪をなすつて、而しく以後を御心づけなさい。』と諭すに、『いゝえ、先生、わたくしは善くない事は致しませんでした。吉川君は弗箱のやうな人です、鐵の尺度のやうな人です。それ故わたくしは賞讃して云つたのです。』と眞面目になつて抗辯すれば、一同はくす〲と笑ひ出せり。吉川は猶例の如く冷かに一場の光景を見るのみ、眉もひそめざれば笑ひも見せず。『それはまた何樣いふ譯です。』と教師は詰る如くに問へば、『吉川君の口の猥に開閉せられないで、加之、一度閉ぢられたら急に開かれない狀は丁度弗箱のやうです。それ故にわたくしは吉川君を讃して弗箱と云ひ、吉川君を祝して萬歳とい

お話しなさい、あなたは何を仕て遊ばうとお思ひですか。』と優しく尋ぬれば吉川は眞實に渾名の鶴の如く、長き身を突と直立させて、『僕は去年の夏期休暇の際の如く、動植物採集を仕て遊びます。』と簡單に答へし限り二の句を續がず。敎師も云ふべき言葉なければ、『それは結構なことです。』との み答へけるに、既我が云ふへきことは終りたりと云はぬばかりの顏つきして、口を一の字に結びしまゝ、莞爾ともせず坐に復れば、誰とは知らず小聲にて、『弗箱萬歲。ゑらいぞ鐵の尺度。』といふものあり。云はずと知たる吉熊なれば、餘り度々の事なるに吉井敎師は今は默せず『吉熊さん一寸此處へ御出なさい。』と緩みなき調子にて儼然と命じぬ。もとより勇氣凜々たる吉熊は怯ず、軍人風に應揚に歩みて敎師の前に直立しけるが、吉熊と敎師との問答は如何なることにや成り行くべき。次の『愛すべき勇士吉熊金太郎』といへる條下に詳しく説くべし。

其六　愛すべき勇士吉熊金太郎

吉熊はいつも學業優等の成績を得たること無く、試驗の時は大抵わづかに及第し得るといふばかりにて、落第も仕かねまじき危きことに臨みたる折少からず。されど正直にして勇敢質朴なれば、敎師もこれを厭はず、苛く責め叱ることをせで成るべく寛大にあしらひ、其天性を傷けずして、自然に持つて生れたる氣質の美きところを長ぜしめんと、他の生徒よりは心を用うること深く骨折りて敎

に『吉光さん充分に御成功なさい。』と聲に力を入れて靜に告げぬ。

其五　謹嚴なる吉川長太郎

同じ此の級中にて、家柄もよく、すべての學科を通じての平均點も常に高く、言語も興味ありて而も明確に、品行正しく、義理堅く愛情深く、德望おのづから備はりて、誰が仰ぐとも無く一級の長者として仰がるゝは村長吉山氏の子の吉太郎といへるなるが、これに對して隱然一敵國をなせるは、精悍剛愎にして何にもよらず屈するといふこと毫も無き吉沼徹一なり。此の二人の間に立ちて、いづれにもつかず、他の人々にも左まで愛せられず、他の人々をも左まで愛せず、吉沼には深く重ぜらるれど、吉沼をもいと冷かに見て優然として別に一頭地を拔くは、丈高きため吉熊より「鶴」と渾名を負はせられたる吉川長太郎といふ少年なり。母をば早く亡ひて嚴格なる父の手に育てられしためにや、將又自己が天性にや、正しきことは鐵の尺度の如く正しくして、人にも物にも動かされざることは大なる弗箱の如くなれば、又の渾名を『弗箱』或は『鐵の尺度』といはれけるが、是等の渾名は皆いふまでもなく吉熊の戯れて付けたるなり。吉井敎師は吉川が吉光に對して一語をも發せざるを見て心中に悅はねど、これもそれ〳〵の性質なりと思へば、他に害を與へざることをば强て咎むへくもあらずと、別に咎め立てもせず、たゞ吉川に打對ひて、『吉川さん。此度はあなたの遊びかたを

君、君は何を作るのだ。畫なんぞは君は描きはすまいね。』と金太郎は又もや口を入れぬ。
吉井教師は吉熊の言葉に關はず吉光に對ひて柔和の面をなしつゝ、『吉光さんあなたの企畫は、あなたに取つては最も適したことでござりませう。校中第一といふばかりで無く村中第一の畫才を有つて生れついた貴下のことですから屹度其企畫も成就しませうし、而してあなたの技術も著しく進歩なさいませう。あなたの爲さる事は忍耐といふものを要する段では無く全く嗜好でなさる事ですから自然に出來上りも仕ませうが、たゞ一つあなたに申したいのは、あなたが何事によらず深い「注意」をせねばならぬといふことです。申すまでもありませんが、『天才は注意の水によつて培養はれ、不注意の水涸によつて害はる。』といふことを御忘れなさらぬやうに願ひます。あなたがまた、功成つてそれに執着すること無く、其畫が出來たら吉岡君に與へて仕舞はうと約束なされたのは、實にあなたの氣高い御氣質が優れた天稟の才能と能く相協ふたと申すもので、感服のほかありません。好きこそ物の上手なれと下世話にも申しますから他日或は世界に鳴るの美術家となるゝかも知れませぬ。美術といふものは無益なものゝやうですが國民の品性と大關係のあるものですから、優れた美術家の無いのは國の憂ひでござります。どうか大天狗などにならずに、自分の技藝に親切な心をもつて、而して綿密な注意をもつて進歩をなすつて頂きたうございます。』といへば皆々『大美術家の吉光君。』『ゑらいぞ吉光君。』『成功せよ吉光君。』など囃し立つる中にも吉瀧お仙女はいと熱心

ていとよく徹る聲にて、『吉熊さん、そんな事を仰るものではありません。貴下の仰ることは無茶といふものです。皆様が笑つて居らつしやりますよ。貴下に釣をさせやうと云つて吉光さんは繪を御描なさるといふのではありませんは。ほゝゝ、而して繪の川からは魚が釣れぬと仰りますが、繪の川の中へ如何して貴下は鉤を沈ませて釣れるか釣れないかを試して御覽なさる。おほゝゝゝ。』と打笑ふに、一同哄然とまた笑ひて、『吉熊閉口だな。』『一本まゐつた吉熊。』と聲々にいふ。金太郎は今更眞赤になつて『吉光君失敬、堪忍したまへ。』と一寸頭を下げしも可笑し。此吉光の家は左まで貧しからねど、是に引代へ此同級の生徒中にて最も貧しき家の兒は病氣になりしと噂されたる吉原茂之助と吉岡才五郎といへるとの二人なるが、つく〴〵聞き居し吉岡は科斗のやうなる形は仕たれど光は麗しき賢げの眼を吉光の面にきらりと向けて、『そして吉光君、君の其繪が出來たらば君は其を何様しますの。』と問ふは此少年自分は繪をかくこと拙けれど畫を愛すること人に超えたる性なればなり。雅之助は才五郎の面を見しが、豫て其性を知れるものから疾くも問ひたる心を猜して『左様さ、別に何様しやうとも僕は思ひませんでした。然し出來た上、君の氣に入つたら君に進上しても宜しうございます。』といと淡泊に言ひ放てば、吉岡は滿面に嬉しさを現して心深く一禮し『君、實にありがたう、僕は大切に保存する。而して僕の此の休暇の中の遊びが若し成功したらば詰らぬものでも君に其物を幾分か獻じやうとおもふから受けて呉れ玉へ。』といふ其言葉の終らぬに、『吉岡

て繪の吉水川では無い水音のする吉水川を諸君の面前に置きたい、僕の筆の端から出したい、これが僕の空な望みです、僕は自分でも仕方がないと思ひます。他に何を仕て見やうといふ野心も何も無いのですから休暇中は畫の勉强を樂みにします。一枚にしろ二枚にしろ結果が出來たらば、これに上越した僕の悦びはありません。僕の同志の友は筆です紙です墨です繪の具です。雪舟だの探幽だのといふ人は名を聞いて居るばかりですから僕の先生にはなつて呉れませぬ。然し僕は吉水川といふ先生を持つて居ます。僕は吉水川の繪をかくもので、吉水川は僕の畫を直しても呉れませう僕に畫を敎へても呉れませう、吉水川は實に僕の畫の先生です。僕は如何に下手な弟子でも數十日吉水川先生の弟子になつたら必ず進歩するだろうと思ひます。而して僕がよく勉强したら先生も僕を可愛がつて種々の事を傳授して呉れるに相違ないと思ひます。これよりほかに僕の望みは無いです、此の休暇はこれて暮さうと存じて居ります。』と云ひ終りぬ。

例の吉熊は無遠慮に、『何だ詰らない、ほんとの川があるのに川の畫をかいたとて面白いものか。そんな水音のするやうな巧い畫が描けたところで、其の畫の中の川の中から雜魚一尾だつて釣れはすまい。何樣だ吉光閉口したか。君の畫の中の川から魚が一尾でも獲れるか。獲れはすまい。それ見ろ、詰らないは。そんなに骨を折つて川の畫をかいても魚が獲れなければ役に立たない。それが眞實の嘘の川だ、わはゝはゝ。』と嘲ければ、吉光の傍近く居たる眉淡く眼清き吉瀧お仙は、淸しくし

色を尋ねあるきづゝ、好い圖になるところに會へば直に腰掛を下して眞を寫し、其後その手帳を臺にして下繪をつくり、さて又一々眞景に照らして彩色をも傅けやうとおもひます。一月餘ばかりの日數ですから思ふやうには出來まいと思ひますが、然し半分出來たにしろ僕の樂みは非常です。吉野君の遊びに比べては僕のは餘り無益のことのやうですが、困難なのは敢て吉野君のに讓るまいと思ひます。だが僕は此の無益の困難をも厭はしいとおもはぬのみならず、是非とも此の左して功能も無い畫卷を作りたくて作りたくて、作らずには居られないやうな心持がするのです。釣をするより、紙牌を弄ぶより、美味を食ふたりするより、僕は竿の代りに畫筆を持ち、紙牌の代りに紙に對つて、美味の代りに筆の首を舐つて繪の具皿を捲き廻して居るのが僕の天性でゝもありまするか大好なのですから是非がありません。赭いや蒼白いや白いやの巖が峙つて居りまする、淺碧深綠の樹が疎や密やに生えて居りまする、岩燕や、鶺鴒や、尾長なんぞの禽が飛んで居ります、面白い雲が往來します、玉簾のやうになつたり藍瓶のやうになつたり、遠くから見れば錬絹のやうになつたりして川が流れまする、すべて是等の景色は、眼を閉ぢても諸君の念に從つて見えるでござりませう。その諸君の念の中に見えるものを捉へて紙の上に復現したいではありませんか。諸君が眼を閉ぢて吉水川を思へば其思ひの中の吉水川は淙々といふ水音を發して流れませう。其如くに紙の上の吉水川にも淙々といふ水音を發させたいのが僕の希望です。眞實の吉水川では無い繪の吉水川で、而し

すから屹度御勝手になすつたつて宜い筈です。家の御父様も悦びませう。』と云へば、皆々も悦びて、『それでは吉野君成功し玉へ。』『成功を祈るぞ吉野君。』などゝ口々に叫びける。

其四　寡慾なる吉光雅之助

色白の少年吉光雅之助は、いと静なる性質なれば、さまでは大きなる聲も立てずに、『僕も吉野君の成功を祈ります。』と云ひ居けるに、いたづらものゝ吉熊に背面より推されしかば、腰掛を離れさまによろ〳〵として辛くも立ち止りしが、此時恰も吉熊に、『先生、此度は吉光君が御話しをします。』と云はれて、いや其樣なことと云ひはせざりしと云ひ爭はんも無益しければ、我が遊びの主意を云ひて仕舞はんと、『先生僕は』と云ひかけたり。吉熊は密に笑みくつがへりて、丈高き吉川の背後に來り『うまく遣つて呉れたらう。』と誇りけるに、吉川は返辭もせず聞き居れば、吉光は言葉滑かに『書をかいて遊びます。此の吉水村の中を流るゝ吉水川の淵となり瀨となり瀧となり渦となり、岩を洗ひ、石を轉し、或は咽び、或は叫び、或は碧を湛へ或は白を沸かして流れまする景色は僕の眼の初めて見えるやうになつた時から見て居るのですが、少しも見飽きたと思はぬのみか此頃ではいよ〳〵其面白いところが僕の眼に映つて來ます。そこで僕は此の吉水川の書卷を作りたいと餘程以前から思つて居つたのですが、此の休假を幸に毎日手帳と鉛筆と腰掛とを持つて上流下流殘る隈なく景

に徹しく見ゆる裏山の方を睨みつ意氣卷けば、敎師の吉井善作は、眞心餘りて見張る眼にや、涙持つ吉野が面をじつと視居たるに、突然鋭き聲を發して『ゑらいぞ吉野君。男兒だ、男兒だ。屹度遣つゝけろ、遣つゝけろ。僕は眞實に君の成功を祈る。』と叫ぶものあり。其聲非常に勇氣を含みて谺に響き渡りしは、熱心に出でしことゝ知らる。誰ぞと見れば、身の丈矮く色黑けれど、精悍の氣は眉宇に溢れて、眼烱々と耀ける校內第一の剛愎ものゝ吉沼徹一といふものなり。敎師は笑を浮べつゝ『吉沼さんの言の通り、吉野さんの企は私も感服いたしました。豫て吉野さんの好んで勞苦に服さるゝのは存じて居りますから、私は信じます、吉野さんの企は必ず幾干かの結果を見ることゝ信じます。此企が多少の結果を見ますれば、吉野さん貴郎は貴郎が豫期なさつたことのほかに、貴郎の頭上に『忍耐』といふ力ある美德の一つを加へ得るといふものです。危險を冒さず功を貪らずに、よく骨を折つて行つて御覽なさい。實に立派な遊びかたです。』と說き勵ませば此時まで腕組みなして考へ居たりし彼の吉熊の金太郎は成程と合點行きしにや、つか〳〵と吉野の傍に來り、其手を手りて懷しげに、『眞實に君はゑらいなあ。』と馬鹿げて大きなる胴魔聲を讚歎の語氣もて洩しければ一同哄然と笑ひたるが、吉熊は少しも感ぜざりけり。

薄紅色の丸顏愛嬌深く、蕾の唇引締りて口元如何にも愛ある吉田おこんは吉野に打向ひて、『妾は屹度御父樣に言ふて、貴郎の御思ひなさる通りに致しませう。彼處は詰らなく捨てゝあるところで

反にせよ二反にせよ畠に仕度いのです。畢竟は來年にでもなつて桑畑に仕て僕の母樣の蠶飼する時の足に仕たいのですが、中々一ト通りのことでは出來ませぬ、彼の地は吉田さんの家のですが、おこんさん貴孃の父樣に左樣いつて許しを私に得させていたゞきたいのです。而して僕は僕と同志の人を一人でも二人でも得たいのです。困難には違ひないのですが、百坪にしろ荒地を畠に爲し得たら其愉快なることは何樣でせう。天地に對して聊か愧ぢない清淨な愉快ではありませんか。何樣です、誰か僕に同意者はありませんか。僕はこれを僕の暑中の遊びとします。毎日辨當を擔ひ笠を頂いては八方平まで上つて一日働いて日暮に家へ歸りましたら學校の初まるころには僕の腕力は吉熊君にも劣らぬやうになりませう。而して僕の遊びの結果は必す多少あるに相違ありませぬ。』と勇氣凛々と述へ立てしは、日頃の心掛の堅固さも見えて、いと眞面目なることなりし。されど吉野が平生好んで勞苦に堪ふる其強さは到底我等の及び得るところならずと思ひ居れる皆々は、さして其遊びを面白しとも考へざるまゝ、聾か啞かの如くに唯口を噤みて、答へもなさず誰一人、君と共に開墾せんと云ふものなし。此躰を見ても屈せざる頓作は猶毅然として、『宜しい。誰君も僕と共に遊ばうと云ひ出し玉はずとも、もとより僕は一人でも爲る。諸君の中に一人も僕と事を共に仕やうといふ人の無いのを見ても愈〻僕のやうなものが此日本に無くてはならぬといふことは明かだ。吉井先生、僕は遣つゝけます、一人で遣つゝけます。乾度幾何かの地を拓きます。』と拳を握りて森の盡頭

葉ですが、もとより遊びの面白い面白くないといふことは其遊びをする當人によつて定まることです。僕の面白いとするところの遊びを他の人が何と言はうとも一向關せぬことでござります。僕は此の休暇中に農業を試みて遊ばうとおもひます。僕は將來に於て必ず大農業者となつて北海道なり內地なりの未墾地を開いて豐饒の地となし大に國利民福を增さうと思つて居るのです。佐藤信淵や大藏永常なんぞは、古の人ではありますが、時世こそ違つて居ますれ、僕の朋友として僕は慕つて居るのです。二の宮金次郎先生は僕の摸範です。僕は誓つて明治天皇の治下の二の宮金次郎となつて、廉潔にして、堅固にして、清淨にして、健剛にして、而して一身一家をも幸福にし一國一世の幸福をも增進するやうな生涯を送りたいと思つて居るのです。二の宮が十人も居れば北海道は既に小さな米國のやうになつて居る筈ですのに、日本の地理の御話を先生から伺つたり、日本地圖を見ましたりする度に、廣大なる北海道が草ばかり生へて居て住民も少いかと思へば僕は殘念で堪りませぬ。ですから將來僕は大農業者となつて、雜草の地を米麥の地となし、無益の地面より貴重の穀物を生じさせ、狐狸の棲處を賑かな村に變じさせやうとおもふのです。其下稽古として平常僕は家の周圍に畠を作つて居りますが、此の休暇にはいよ〳〵勇を奮つて、掌は岩の如く、筋骨は鐵の如くに仕やうと思ひます。僕の家の背後の彼の裏山を上り盡すと、八方平と名のついた高燥の平地があります。十町餘の上りですから隨分太儀ではありますが、彼處を僕は荊棘や篠竹や草を刈り拂つて一

て蒼い顔をして居られました、而して僕をつく〲と御覽になつて、「貴郎は御丈夫な御身體で眞にまあ御母樣も御幸福です、」と悲しい聲で申されましたが、其時僕は吉原君の御母樣を見ましたら淚ぐんで居られました。實に僕は悲くなりました、それて今日は吉原君は參りませんが、吉原君の遊びの主意は僕が知つて居ります、吉原君は此暑中休暇に『吉水志』といふものを作つて、此の吉水村の歷史と地理と其他百般の事とを例の君の美しい優しい文章を以て寫さうと企てられたのです。文章を作ることは吉水君の第一の樂みなのです。これが出來ましたら實に先生の御賞讃をも得、吉山君の御父樣の御褒をも得ること〻思ひますが、病氣になられたのは眞に殘念です。』といへば、聞き居たる皆〻憂色をあらはせる中にも吉田おこんといへるは平生情にいと敦き性質とて深く物思ひに心を碎くか頭を垂れて人一倍深き愁に沈みたり。

『吉原君の事は私も昨日聞きましたが左程とは思ひませんでした。此會が濟みましたら一同で尋ねること〻致しませう。まことに氣の毒な事でございます。』との敎師の言に一同默從したりけるが、陰氣の話にや〻少時物いふ人も絕えたる靜かさを銅鑼聲放つて破る吉熊、『それは此處で諸君が心配しても何にもならぬ。さあ吉野君、ついでだから君の遊ひかたを話し玉へ。どうせ君の遊びかたなぞは面白いことではあるまいが。』と憎まれ口も心易さより出てたる無邪氣なり。吉野も吉熊の憎まれ口に笑ひは仕ながら金太郎の方を覗みて眼に叱り、『それては僕の遊びを申します。吉熊君の御言

て、『先生、私から申します。』と云ひ出でたり。

其三　着實なる吉野頓作

吉野頓作といへるは、村内にて中等の生活を爲せるものゝ兒にて、父は材木伐採を業とし、山又山の奧深く入り、十日二十日を山小屋に暮すことあり。母は村内第一の機織の上手にて、紬とはいへ絹機をも能くするをもて、村内の富める人々の儀式の節などに用うる衣服は大抵其手に成らぬはなし。頓作は性朴直にして、小賢しきことは無けれとも、其代りにはまめ〳〵しく身を働かし、心掟から ぬ代りには耐へ情強く、堅固にして着實なる少年なり。されば平生人より先に發言などすることは無きに、珍らしくも今日は先に立ちて何事か云はんとするなれば、敎師の吉井は不思議に思ひつゝも、『それでは皆さんも御聞なさい、吉野さんは何樣な遊びをなさいませう歟。』と興ありげに二の句を誘へば、『先生私は私の遊びのことを申すより、其前に先づ吉原茂之助君のことに就いて申したいのです。吉原君が昨日學校に居らるゝ中から不快で居られたのは皆さんも御承知でしたろうが私の宅は一番近いので今朝も尋ねましたら吉原君の母樣の御話では昨夜からして熱も強くなり容躰も宜しからず、今日未明に醫師の吉樹先生に見て貰ふたら、肋膜が惡いとかて、大切にせねばならぬと申されましたそうて、僕が參つた時は吉原君は疲れて寢て居ましたが、母樣も非常に御心配と見え

ながら、『まあ諸君、吉井先生が見えるまでは各自の遊びの主意を互に言はずに居やうでは無いか。』といへば、いづれもこれに同意して『左樣した方が宜ろう。』『あゝ左樣しやう。』と、答ふるにぞ、吉熊は少し不平顏に『僕が自分の遊び方を考へ出さないと思ふものだから諸君は僕を困らせやうとするのか。』と、フイト皆々に背を見せて祠の裏手の方へと行きしが、忽ち頓狂の大聲を發して『諸君、先生が見えた、先生だ先生だ。』と叫びながら木立を縫ふて飛び去りける。吉山はじめ一同もばらばらと吉熊の聲せしかたに馳せ出づれば、はや先生は金太郎の肩に手を置きつゝ、此方をさして、白地の衣に綠さす木下蔭を徐に來りぬ。

『皆さん御早うございました、私は今日皆さんの御話を伺ふのを樂みにしてまゐりました。さあ皆さんよいほどの處へ腰をかけるなり坐るなり仕て左樣立つて居ずと樂に御仕なさい。私も此處へ掛かけすから。』と祠の椽へかゝりたる楷の埃を手拭に拂ふて腰を打掛くれば、祠の前の左の方に切倒しある杉の大木を腰掛にして吉山、吉野、吉坂、吉川、吉岡はずらりと居列び、これに對して祠の右なる其木の切株の切られし跡の上に吉光、吉沼、お仙、おこんの四人は中睦まじげに或は居列びしが、吉熊一人は自己が剝ぎたる苔斑なる石の狗に見を寄せながら突立ちて『僕はこれでもつて結構です。』と番兵の如く扣へたり。

『坐が定まりましたら誰君からでも御話しを御はじめなさい。』との敎師の言葉に吉野頓作は直立し

居る狛犬の苔を左樣剝落して虎斑にして仕舞つては見ともないでは無いか、廢し玉へ廢し玉へ。』と兒童ながらに親の氣性を讓り受けての賢さに制し止むれば佛頂面して『おゝ、吉光君か、他のものは何故遲いのだろう、吉沼君や吉川君は何樣したろう、ナニ此狗は斑に仕て遣つた方が可愛らしかろと思つて剝いたのだ、ハヽヽ、斑で惡ければ首をもぎ取つて遣ろうか、僕は君が兒童の癖に美だの風雅だのといひたがるのが癪に觸るよ、ハヽヽ。』といふところへ、瘠せて丈高き吉川と色黑くして眼光る身躰小さき吉沼とは、身躰つきすらりとして面清き女生徒吉瀧お仙といへると共に入り來りぬ。吉熊は吉沼と日頃より大の仲好なれば吉沼が『吉熊君また吉光君を窘めてはいかぬよ』との一言に默して從ひて復言はず。吉光は三人に挨拶して後、餘のもの等とは引離れて、お仙と二人連れ立ちて何事をか語り合ひつゝ森の中を逍遙し居たるが、少時して村長吉山の子の吉太郎といへるを先に立てゝ吉坂大十郎、吉野頓作、吉岡才五郎、吉田おとんの五人打揃ひて此方へ來るを眼早く認めつ、走り迎へて笑ひさゞめき神前に誘ひぬ。

むつくりとして下豐の品よき吉山大十郎は、衆兒に圍まれて中に立ちしが、吉熊金太郎が聲大きく、『吉山さん君は何をして遊びます。僕は先生に云はれたけれど別に遊ぶのに主意も何も思ひつかないのだ、君の爲ることが面白ければ其の仲間に入れて貰ふが、君の遊びが詰らなければ吉沼君の仲間にならうと思つて居るのだから疾く君が何をして遊ぶのかを聞きたいのだ。』と問ふを笑ひに制し

と云ひ終れば生徒は口々に、『先生、それではまた明日。』『先生、ありがたうござります。』『先生御機嫌好う。』など云ひつゝ、いづれも欣々として面に笑を含んで歸りぬ。

其二　明神山の勇ましき會合

雲猶北山の胸のわたりに徘徊して、朝風涼しく梢を渡るに、況して此處は明神山とて老樹いと多く枝を交して天を蓋へる樹下は土さへ打濕りて、古びたる社殿の御前は人通ふ徑を殘せるばかりに鮮苔緑く地を罩めたれば、單衣の袖も寒き心地し、快きこといふばかり無し。

昨日の吉井敎師が言葉を道理あり又趣味あることに聞きたる生徒等の中にも頑要ものゝ大將、活潑過ぎて親困らせ朋友困らせの赭面童子、畫に見る山姥の子をそのまゝ、づんぐり肥えたる岩疊づくり、名を金太郎といふも可笑しく、吉熊といふ姓もまたいと珍らしく可笑しきが、一番に神前に來りたれど、誰一人まだ見えざるに、さらでも膨れて柹のやうに張り出たる頰を愈々膨らし、『皆遲い奴等だ、何して居る。』と、つぶやきながら待遠なるまゝ境內を行きつ戻りつして、せうこと無しの例の惡戲、石の狛犬の苔蒸して綠色の天鵞絨着たる如くになれるを頻りに挘り剝がして、可惜風情あるを虎斑のやうに見苦しくも爲しつゝある折しも、欅の大樹の後より現れ出てたる色白の眉目美しき優しき少年、『やあ吉熊君、早かつたね、おや〳〵君は酷いことをする、折角奇麗に苔のついて

もふ遊びかたを定めることです。そして自分の遊びの結果を見るのです。明日から四十日餘りもある日數の間には隨分樂しい結果をも遊びかたに因つては得られることですから諸君各自に自分の遊びかたを考へて、何によらず結果のある遊びをなさい。宜しうございますか諸君、何をなさつても構ひませぬから『遊びに主意といふものを立てゝ、而して能く遊んで、遊び終つた時に我が遊びより生じたることを觀る』といふやうになさい。どうです諸君。何をして遊ばう歟と、我が遊びの主意を考へ定めるのも面白いことではございませぬか。而して我が好きな遊びを仕て遊びつゝけるのも愉快ではございませぬか。それからまた我が遊びの結果を觀た時に其結果が好かつたら實に樂しいことではございますまいか。今日退校なさつたら、よく〳〵遊びかたを御考へになつて、明朝あの明神山の明神の森で諸君御集會になつて、互に各自の遊びかたを明かし合ひなどなされました上、出來るだけの便利を互に與へつ與へられつなされ。其から暑中休暇の末の日に同じところで復集まつて結果を報じ合つたら實に面白うございませうではありませんか。失敗もありませうし、成功もありませうし、必ずいろ〳〵の珍談奇談の出ることでせう、私も明日明神山へ出かけて諸君の『遊びの御主意』を伺ひますから、私の申したことを御採用になりましたなら諸君も御集まりなさいませ。何樣か諸君と共に午睡などするやうな惰弱なことをせずに、有益にして愉快なる生活をもつて暑中數十日の間を過したいものでございます。今日はこれで御退校になつて宜しうございます。』

ず何事か致して働きます。皆様も生きて居らつしやる上は必ず何事か仕て御働きなさるが宜しい、前にも申しました通り天を見ても地を見ても生命のあるものゝ働いて居らぬはござりませぬ、全て眠つて居るといふやうな惰弱なものはありませぬ。どうか皆様も惰弱でなく日を御暮らしなさいませ、斯様申しますればとて毎日〳〵復讀を仕たり算術を仕たり致して居らるゝが宜しいといふのではござりませぬ。隨分活潑に上品に御遊びなさるのが宜しうござります。遊びといふことは決して無益なものではござりませぬ、大切な働きの一つでござります。然し諸君は既に高等科四年にもなつて居らるゝとですから、遊びをなさるにも相應な良い遊びをなさるが宜しい。卑劣な、無益な、惰弱の悪癖を身につけるやうなことはなさらぬが宜しい。暑中のことですから學事ばかりに身心を使つて健康を損ずるやうなことをなさるのは私の望むところでござりませぬ。寧ろ愉快に、活潑に、高尚に、精悍しく、美しく遊んで頂きたいのです。けれども課業といふものが無ければ、人といふものは自然に自惰落になつて、詰らない不活潑な日の送り方を仕て仕舞ふものでござります。兎角惰弱になるものでござります。ですから私が今遊び方について諸君の惰弱にならぬやうに申し上げます、さて遊び方といふものは、種々あることでござりまするが、畢竟自分〳〵が仕て見たいと思ふことを仕て見るのが一番面白いのでござりますから、危険で無い、不道徳で無い以上は何様な遊びをなされても宜しうござります。たゞ大切なのは豫てよく考へて置いて自分の面白いとお

ぬからでござりませう。奈破翁などゝいふ人は極少しの時間よりほかは睡眠しませんでしたさうです。爲すある人は皆この通りです。これらと反對に、暇さへあれば安逸を仕たがつて、午睡など致しますは惰弱のことでござります。巧言令色は小人の事でござりまするが、それをさへ鮮いかな仁、と寛洪に斥けられた位の聖人が、宰予といふ人の晝寢をした時は、朽木だの糞土の墻だのを譬喩に引いてさん〴〵に御叱りになつて居りまするのを見ますと、惰弱といふ事は我々に取つては甚だ忌まねばならぬことでござります。でござりますから我々は草木が生長することを忘れませぬと同樣に如何なる時なりとも我々自分を進歩さするといふことを忘れてはなりませぬ。決して惰弱の行ひを仕てはなりませぬ、遊ぶことは遊ぶことで宜しうござります、これも矢張人間が爲さねばならぬ働きの一つです。實に遊ぶことも大切な働きの一つですから遊ぶのは宜しうござりますが、遊ぶのも人間に大切な働きの一つとして、充分勉強して遊ばねばなりませぬ。たゞぶら〴〵として、だらだらと詰らぬ日の送りかたを致しますのは、不埒な遊びかたで、遊びといふことを大切に致さぬ惡いことでござります。其のやうな遊びから得まする結果は惰弱の惡癖ばかりでござります。暑氣の甚しいために今日限り休暇にはなりますが、これは學校で皆樣に授業を致さぬといふばかりで、皆樣に午睡をなさいといふ譯ではござりませぬ。棺桶の中に居る人々のやうに生徒諸君は休息して宜しいと申すのでもござりませぬ。學校へ出ませんでも、私も生きて居りますから私は私だけに必

太陽も暑中休暇を致しませぬ。溪水の流れにも休暇といふことはありませぬ。木や草も休暇をして居るといふことを聞きませぬ。日も休まず働き草木も休まず働き溪水も休まず働いて居ります。此の世の中に何一つとして休暇など丶申して午睡やなんぞばかり仕て居るものはござりませぬ。勿論稻や粟が午睡ばかり仕て居て生長して呉れなくつては大變でござりませう。いや笑ひごとではござりません。ですから西洋の諺にも『人は樹蔭に午睡する、傍の小川の水車は何時でも麥を挽いて居る。』と申しまして諭してござります。人間も休暇だと申して眠つてばかり居るやうでは、始終生長致さうとして働いて居ります草や木に對しても、天に耀いて居る太陽に對しても流れて已まぬ水に對しても羞かしいことでござります。天地の中に在るものが皆休暇無しに働いて居りますに人間ばかり休暇を取るといふのは、些勝手なことでござります。蜘蛛のやうな小な蟲でも網を張ることは忘れませぬ。蠅や蚊のやうな劣等のものでも隨分勉强を續けます。ですから人間でも心あるものは決して純くの休息といふことは致しませぬ。人間の全くの休息は棺桶の中へ入つてから致して宜いものです。それまでは決して怠惰心を持つてはなりませぬ。大人君子と云はる丶人、英雄豪傑と云はる丶人に休息ばかりを欲するやうな卑劣な尫弱な人はありませぬ。孔子は寐た間にも道に志すことを御忘れになりませぬ故に先聖の周公といふ方を夢に數々御覽なされたと申します。東坡といふ人は幾度も夢中に好い詩を得たと申すことですが、これも矢張詩を得やうといふ念の常に撓ま

寺も役場も此の如くなれは、聖代の德に潤ふ民の如何で學校といふものを等閑になして置くべきや。役場の後の小高くて、やゝ平なる晴やかな地に板屋なれど其狀鄙しげならぬ廣さ六十坪ばかりの小學を建てゝ、村の名の吉水を頭につけたる稱號さへ易らかに吉水小學と呼ひ、高等科をすら備へたるは、村長の吉山といへる人の首唱の力によりたるながら、質朴にして善に勇む村民の、敎育といふことの大切なるを心優しくも悟りて、分に應したるそれ〳〵の力を致したればなるへし。

今日は風さへ溪水の動きに連れて少し川邊に吹くばかり、日の光を背後に負ひて黃金の笹緣つけたるやうの雲は眞實の山の上に怪しき山の形狀をなして死せるが如く靜に止まり、草木の綠色も眩しきやうに氣の所爲かして思ひ做され、大地の石礫も熱き息吹くばかりなるが、授業は今日を終りにて、明日よりは暑中休暇となると定まりたることなれば、吉水學校の生徒等は厭はしき顏もせず、課業を勵みて、玉の汗かく、淸書かく、いづれも勉强もの(ママ)なれば、頭をかくは一人もなく、いよいよ正午に近くなりて最後の課業と定められたる習字の時間も終にすみぬ。

高等科第四年を受け持てる敎師吉水善作一同を見渡して聲すゞしく、『時間も濟みましたれば直と皆樣御歸りなさつても宜しうござります。しかし學校も今日限りにて、九月初までは此敎場で皆樣に御眼にかゝることも無いやうなことになりますれば、休暇といふことについて五分ばかり皆樣に御話しを致したいと存じます。一躰休暇といふことは此の世界の中には無い筈のことでござります。

休暇傳

其一　遊びについての先生の訓

日の入るところも月の出るところも皆山なるに、北さへ老樹生ひかさなりて晴れたる日の晝すら小雨降るごとき最大きなる某嶽に蔽はれたれば、此地より塵の立舞ふ境へ通ずるは、唯山間を蜿蜒として縈り廻りつ流れ行く谷川の傍の崖の細徑一と條開けて南の方へと爪端下りに下るあるのみ。村とはいへど其處に三軒彼處に二軒といふやうに飛び〳〵離れて立てる人家の、檜原を隔てゝ朝夕炊事の煙に互に有りと知り知らるゝほどなれば、川の彼方と此方とにて上下一里ばかりが間に總計百戸あるか無しのいと小なる一ト區劃なり。住めば何處にも花の嬉しき春の日あり、收獲の樂しき秋の時節もある習ひとて、交通の不便さは郵便配付の日一回しか無きといふにも、思ひ遣らるゝ如是僻地とはいへ、人々各々我が郷好しと思ひ込みて他處へ出んとも望まねばにや、老父老婆となりての果に世話燒かす寺といふものをさへ萱葺ながら相應に立派になし置て、死んでも此處の土となる準備をなしぬ。されば生命ある中の入用なる村役場も見苦しからず、忙しとまでには至らざるべきも筆生一人を村長に使はせて、生るゝ、嫁取る、聟取る、兵役に出るなんどの戸籍の厄介を萬般任せぬ。

候。山下夫人の姓は神着、三郎次といふ船持の二女に候。此由在京諸友にも御傳へ、御悅び之有度候。利運組の其後の狀態、山下君へあて御報道下されたく、やがては夫人同道にて浪乘り舟の音も豐に都へ勢好く上らるゝことに候べく候。先は山下君近狀御知らせ申上候。草々頓首。

辛丑正月吉日　三宅島井上靜一

横見平太郎樣

めて對面致し候ところ、島には珍しき優しき娘にて、此島の濱に生ふるなる萱草の花にも比ふべき色香ありて、なか〳〵可憐におぼえ申候。一旦參らせたるものなればとて山下君は物柔かに諭して、返したるものをまた與へ、再三辭退したる後、さらばとて娘は深く其美しきものを貰ひたるを謝して歸り候。其後、中一日を置きて彼の娘また參り、美しきものを貰ひたる返禮の意にもあるべき歟、三宅島特產のものし織を山下君に餽り申候。これは自身に織り自身に絲取りたるもの丶由に申候。ものし織は方言にて『オリ』と申す草もて作り候ものに候。例の山下君のことゆゑ、か丶る有益の野生植物を等閑に見去るべきならずと、詳しく其娘に尋ね候ところ、僕とは違ひて一より十迄明らかに答へ候由、此の問答及び、しま紬と申す島の產物等の問答の間に、右娘の性質の宜しきところ才能の低からざるところなど、山下君の理解に上り候ものと相見え、且相性と申すものにや互に對座しては時の立つをも忘る丶樣子にて、奇しくも野心强き山下君と無邪氣なる島生れの娘との間に十分愛情の成り立ち候やう見受け申候ま丶、一日同君に右娘のいぢらしき心中申し入れ候處、山下君慨然として、眞情のあるところは即ち美なり、如何で賤しき島人の女なるを嫌はん、と申され、同君が三ヶ條の說の第三條に適當するとの由にて、終に芽出度華燭の典は擧げられ候。媒妁人は不束ながら僕夫婦に候。同君が三ヶ條說の解釋は少し手前勝手に渡り候へども、笑つて濟ませて宜しかるべく、潮風荒き洋中の島も蓬萊の鄕を其儘の千代八千代の睦み、まことに芽出度ことの限りに

妬を教へ玉ふか、と笑ひ申し候。彼の娘のみは最氣の毒なりと思へる顔して面は火の如くになり、物羞して、例の年増女の袖の後に隱れつゝ、只管人々の戯言せざらんことを欲し居り候。山下君は已むを得ず、いと眞面目になりて、例の年増女に打向ひ、卿彼の娘に代りて何卒我が粗忽を免し玉へ、我が僞り無き謝罪の眞誠の徵として、此品を參らするなれば、聊か怒を解きて見免し玉へ、と云ひながら時計の鎖に着きたる黄金鍍の鉛筆管を與へて、輕く頭を下げたるに、例の年増は光り輝く美しきものを掌に載せられて、其價をも計り兼ねたるまゝ、流石に戯言を云ひ過ぎたりと少しは悔めるやうなる顔して、如何はせんと躊躇ひ申候。もとより惡意あらで若き都人に戯れたるのみなれば、山下君が口輕く可笑き分疏などするならんと思ひのほか、價貴かるべく見ゆる斯るものを餽りて眞面目に罪を謝びたるに、氣の毒なることを仕出したりと、思ひしなるべく候。敏捷なる山下君は例の女の疑惑の間に乘じ、遮に無に僕の手を取りて一目散に逃げ出し申され候。さて其日は右一條を笑ひの一つ話として僕の宅に同君とも〳〵歸り候が、其翌日の夕暮になりて、僕の家の傍を徘徊して、入らんとして入り得ざる妙齡の女あることを僕の妻見出し候て、段々仔細を尋ね候ところ、彼の娘に之あり候。わざ〳〵參り候理由は、彼の黄金鉛筆管を例の年増女より强ひて與へられ候へども自己がものと爲すべき理由無ければ、都の若き殿に返しまゐらせんとて持ち參り候由にて、即ち黄金鉛筆管を返し申し候。まことに正直にて優しき心入れなれば、山下君も僕も感心致し、改

は僕も猶知らざりしことなれば、もとより半は年増の女の當座の戯に云ひ出だしたることに疑ひ無く候。しかし女共の數は多し、心長閑に優しく申すことなり、差當つて此方に罪はあることとなり、山下君は手をもて水を掬ひて運ばねばならぬ場合に立ち至り申され候。迷惑此上無きことなれば、僕も傍よりいろ〳〵申し候ところ、例の年増の女また笑を含みて、然のみ詫び入り玉ふな、罪は既免しまゐらせたるなり、たゞ水をだに運びたまひなば、それにて事は足りなんなり、但しまた此處の掟にて、かゝる折女も男の妻たらんことを望み、男もまた眞實に其女を妻とせんことを思ふといふ契約だに成らば、生命をだに互に相與ふべき夫婦の間のことゝして一甕の水に何の言ひあるべき理由も無ければ、男も水を掬まで濟む習なり、されば其人若し妻無くば此娘をいたはりて妻とし玉へ、好き娘多きが中にも勝れて好き娘なり、心も優しく、織り紡ぎも拙からず、得て妻とせん男は幸福多かるべきなり、此の殿も優しく見え玉へば相應しき縁ならずや、と云ふ尾に付きて、他の女共も、彼の娘と山下君との面を見つゝ、嬉しげに笑ひて、然なり〳〵と云ひ、中には彼の娘を輕く撲ちて、嬉しからめなどゝ、云ふもあり候。此時の山下君の顏色御覽に入れたき樣に候ひき。彼娘は眞赤になりて、例の年増の女の袖を引き、餘り深戯して親みも無き人に罪を得ぬやうにと、しほらしくも注意いたし申候。されど女共の中の一人はまた、其人の答無きは家に妻あればならん、惜からずや、疾く水掬ませよ、水掬ませよ、と罵り候。また他の一人は、其女を顧みて、今より旣嫉

き當り候て、右婦人に水を充分浴せかけ、加之水甕を粉に致し申され候。井は其處より遠からずして、椿の花美しく咲きこぼれ居り候ほとりにこれあり。土地の女ども七八人水汲まんとて集り、何か物語り居たる折のことゝて、此態を見るより皆々立かゝり、右婦人とは日比交情宜しき友達の間柄と見え、或は水を拭ひ、いたはり遣るもあり、或は腹立たしげに粗忽致したる我等を打守るもあり候ひしが、全く山下君の過ちに相違無きをもて、僕より謝罪の挨拶致し候。然るところ島の風俗にて八九寸の朱髹の竹の笄に髮を纏ひ綰ね居り候年嵩の女、自分等の多勢を恃み、且は山下君の年猶若くて都びたるを見て聊か嬲り遊びたき意もありてか、笑を含みながら、突き當りたる過失は免しまゐらすべけれど水甕を破りたまひたれば娘の日々の勤めを果す能はずなりたり、此村の掟として若き男若し若き水汲む娘に觸れて其の戴きたる水を覆すことあれば、男は其觸れたる罪を問はれざる代り、自ら掌をもて井より掬ひて其娘の家まで瓶の量ほどの水を運ぶべき定めなり、されば如何なる貴き都人かは知らず、自ら幾度と無く井の水を掬びて此娘の許まで運び玉はでは叶はじ、われらの掟は破るべからず、喃皆樣よ、然にあらずや、と云へば、女達皆笑み傾きて、山下君を取り卷き、君がために濡れひたりたる娘のためなり、水を汲みたまふを厭ひ玉ふことはあらじ、女に罪を得たまひて、殿御の身として自ら免れんと仕たまふや、と口々に滑らなる言葉遣ひ媚いて逼り立て申候。村の若き男女の間には、かゝる戯れたる定めの云ひ習しはありともかゝる掟の有ること

人爲の骨折を加へて早熟の野菜など作るより島にて無雜作に作りて舟廻しにするかた遙に利益ありといふ算盤を立て、島の人の氣風卑屈にて苟安に流れ居ることを憾み、海龜などの動物よりは植物の方將來大に利ありとの見込を立て、船と共に引返して當三宅島に着致され候。何年ぶりにての對顔故談話盡きず、いろ〱聞きも語りも致し候。最初島人を案内にて茅屋へ參られ候節は、餘り突然故、夢かとのみ思ひ申候。段々の仔細を聞きて漸く合點致し候。榮枯屈伸驚くに足らぬことに候。早速島内案内致し候。併ながら觀音堂に遺れる一蝶が筆の風神雷神などは山下君の眼に留まらず、しきりに桑の樹の談を尋ね、大に僕を弱らせ候。桑は先づ日本にて、當島佳き品を出すことなれば道理なる注意に候。ものし織と申す當島特有の織物、是また山下君に根ほり葉ほり尋ね糺され、僕は迂濶にて答に究することと度々、時々苦笑ひを浴せられ候。然るにこゝに意外の一大吉事出來致し申候は、同君圖らずも此洋中の離れ島に參られ候て純くの此の島生れの婦人を妻に迎へられ候ことに之有候。定めし山下君持説の三ヶ條も之有候事ゆゑ、一應は御信用もあるまじきなれど、斯樣のことに虚妄は申しあげず候。右婦人は坪田村と中村にて相應に暮らし候もの丶娘、おとせと申候て品行宜しく、醜からず、至つて心敏きものに候。島の外は知らぬものなれば、風俗言葉づかひなどは可笑く候へども、天稟は甚だ宜しきものに候。最初僕と山下君と木佐伊明神へ參り候節、途中にて山下君談話に浮かれて右婦人の水の甕を戴きて通り過ぎ候に心付かず、振り向き候途端に突

などを知り、牛鳩の聲を何かと訝しみなどして、此處に遠洋漁業の根據地を置くべき考へ、四國中國を壓倒すべき自然力製鹽場設立等の考へを懷胎して、新島へ渡り、前濱の海邊の白砂にして美しく、硝子石交りなるを、何にか用ゐかたあるまじきやと考へ、鰹鳥と俗に申す鳥の御馳走に鳥肉か魚肉かと迷ひ、椿の花の美しきに驚き、女の島田髷を多く結ふを見て、埴輪人形の古俗に照らし考へ、此島も大島と同じく女共の襷を何本と無く有ちて一種の虚飾とするを不審し、それより神津島に渡り、此島も前濱の砂美しく、しかも十勝石のやうなる石、桔梗箔、五色石などあるを見て、船のばらすに此品を俵詰にして東京へ持ち返らせ、いろ〳〵利用の路あるべしなどゝ細微なところまで勘考の由、島名産の椿の油の穿鑿を此處にて根穿り葉穿り聞き取り、三宅島を後廻しにして八丈島に飛び八丈島の本名は八郎島にして、八郎は即ち爲朝のこと、八郎を八丁といふやうに訛るは、今も西國の人などは常に爲ることとなれば疑ふべからずといふとを一寸雜學者めかして考へ、浮田秀家、近藤重藏悴富藏などの逸話を尋ね、宗福寺を見、又所謂八丈縞を詮議し、島にては之を丹後縞といふに驚きて製法の傳來を稽へ、且は内地にて鳶色といふ色を島にては樺色といふに、成程と合點するところあり、二合五勺を一ばいといひ、十四はいを一升といひ、十四升を一俵とし、一俵は即ち四斗二升に當る島の量法の便なるに感心し、爲朝の小姓虎政といふもの物語を聞き出して、それより小笠原島に至り、島の氣候と東京の氣候との差を勘へて、東京にて貴き地面にさま〴〵の

六計の上策を行ふといふ段になつたら上州わたりに潜つて居やうと思つて居たが、幸ひのことだ、何様な遺利が眼につかぬにも限らぬ、小笠原島までの船に乗つて島々を回航して來やう、三宅島に行て久しぶりで井上の面も見て來やう。群馬や埼玉にまごつかうより、同じことなら此の方が可笑からう。むゝ、左様だ〳〵、日數も要らぬことだ。既う日も暮るゝ、店からは人も來ぬ、萬々一と思ふて居たことも全く望無しと定まつた。いよ〳〵横見君、君を煩はさねばならぬ、何分宜しく御願ひ申す。それでは僕は歳暮を逃げに島巡りと一寸洒落て來る。無益に宿屋などに潜つて居るより是は好いことを思ひついた。

其下

拜啓。御近狀は委細山下君より承はり及び候。ます〳〵御健勝、御好運、次第に御立身、杉形に俵を積みし如く傾覆無く御盛大に趣かせらるゝ段、何より珍重と大慶に奉存候。さて山下君、嘗て御地出發、まづ大島へ渡られ、女の黒木綿に花笹の紅入り紋服を着たる風を見て吃驚致され、また水甕を頭に戴きて行くこと遠き外國の熱帶地方の風に同じきを驚き、切り替へ畑と申す無雜作なる自然力利用の農法に呆れ、牛の牧塲、ならびに煉乳事業の少し規模あるを褒め、ぼうけ船、いそつぱり船の作りかた、用ゐかた、一尺も長き泛子を使ひ、海草を餌にしてブダヒを釣る長閑さ加減

しく云ひ出せり。
横見が言葉をば聞き居しや又は聞き居ざりしや明らかならねど、物をも言はで只飲みに飲み居たりし山下は、横見の言葉の終るを待ちていと長々しく息を吹きつ、君は井上の變つたのに感じ玉ふが、僕は今日の僕の意氣地の無さを井上の手紙を見るに付けても口惜しく思つて、井上のやうに暢氣な調子で日を送つて行く人もあるかと思ふと、齷齪するのが馬鹿々々しくなつて仕方が無い。併し僕は飽までも僕の流儀で遣つて行く。井上を羨む心は更に無い。児して小兒のために都を戀しくおもふなぞといふのは僕に取つては取るに足らぬ囈語としか思へ無い。此夏頃の僕の噂を聞いて大に成功仕掛けて居ると思ふて妻を持てなぞと云つて呉れるのも有り難い親切には相違ないが、僕の考へは動かし難い。たゞ僕は折角多少成功したと思ふて居て呉れるのに、實は今年の暮は此樣な狀で居るのが、情無くも思へば氣の毒にも思ふ。今年の暮あたりに成功して、まあ十萬位のところまで遣り上げて居たら、十萬ばかりの成功は論ずるに足らんことだが、今の日本にしては何を爲るにしてもの一小階段を上り得た譯だから井上にも云ふて遣つて悅ばせて、而して、御芳意を空しうせず徐々妻を迎ふる心構へに候、と云ふて遣るのだけれど、今日のさまでは何も彼も、いやはやだ。僕のやうに七顚八倒して騷ぎ廻つて居るよりも、却つて海の中の小島の中で此樣な手紙を書いて居る方が幸福が多いかも知れない。はゝはゝはゝ。おゝ、此や好いことを思ひついた。實はいよ〳〵三十

やあ何だ、自分が俗物凡骨の大將になつて居る。はゝゝ、今に貴族崇拜、人爵尊重を始めるだらう、いや既徐々其氣味があるやうだ。惡口のやうだが金も屹度欲しがり出すよ。君に妻を持て妻を持てと干渉がましく云ふて來るところを見ると、獨善孤立を可とする主張も何時の間にか取り消したに違ひ無い。僕のことを無血蟲だの平凡漢だのと酷く罵倒したことも有つたつけ、當時の僕の說と今の井上の實際と餘り違はんから可笑なものだ。而して僕は早いところは利欲主義金錢主義だつたが此頃ではまさか其點ばかりでも無い。彼や此やを考へて見ると、眞實に十年足らずの月日といふものは、我々同士の是非や分別が、皆草臥儲けの愚な爭ひに過ぎなかつたといふことを示すやうなものだ。併し君だけは感心に大概一定の線路の上を兎に角進んで居るやうだ。勿論一番君が年若だつたから當時は別に君一家の說があつたといふでも無かつたやうだつた。今になつて見ると君と僕とは同じ金錢主義利慾主義でも、僕の方は平凡的で君の方は野心的英雄的とでも云ひたいのだつた手。ハヽヽ、いや此は井上の手紙から往時風に返つて大に書生風の談話になつた。だが君、僕は早くから俗界に入つて、いまだに銀行の下廻りさ。君は今日あたりこそ些威張れないが、兎に角一本立の商人さ。山村は軍人さ。吉野は屬吏さ。星井は奏任官で得意がつて居る。安木は壯士で誇つて居る。それも好い、これも好いが彼の私塾中で一番人物らしくもあり學識も兎に角一枚上だつた井上が、三宅島の小學校の敎師で、此手紙の容態は、實にまあ人世は妙なものぢやあ無いか。と何か仔細ら

も傍より差し覗きぬ。

ぐびり／＼と飲みながら二人は井上の書狀を讀みしが、讀まする一人も讀む二人も共に其昔は同窓の隔無く語らひし中なれば、山下横見は相互に笑を帶びて相視ることも幾度か有りけり。

井上が長き手紙を讀み了りて、横見は一杯を傾けながら、何の氣も無き長閑なるさまにて、いや井上も年を取つて、ひどく芽出度い男になつたナ、兒のことばかり云つて居る、ハヽヽ、彼の詩人的の不平家が酷く穩和になつたやうに見えるが實に妙だ、此の寫眞の此の小兒に感化されて、二重橋の景色が戀しいなぞと、自分が往時は大嫌ひだつた都會を今更懷かしがるといふのは、何とまあ君、變れば變る人の心ぢやあ無いか、厭世家で、無妻主義で、名譽といふもの〻存在して居るのが人世の幸福を破壞する所以だなぞといふ奇怪な議論を立て〻、非常に人爵を憎んで、何を見ても虛榮々々と排斥して、獨善孤立を趣味の高いもの〻やうに云つて居た井上が十年も立たぬのに斯樣ならうとは思はなかつたね、ハヽヽ、此の狀の樣子では、書いては無いが細君をも餘程大切に仕て居るらしい、小兒と來てはいやはや全で眼が無い樣子だ、年の暮が近くなつたと云つて東京のことを思ひ出して、其賑さを小兒に見せたいなど〻云ふのは、いやはや何といふ長閑さ加減だらう。實に自分でも自白して居るが、人の心ほど變るものは有りは仕無い。七八年前の井上と來た日には、いやに議論ばかり強くつて、乙に仙人風を吹かせて我輩を俗物の凡骨のと罵り通しだつたが、今ぢ

内々で爲るが、何分萬事を巧く賴むよ、いや其に就いて可笑かつたのは今出掛けに、店を出ると鐵合せに郵便屋が來たのさ、すると當には仕て居無いのだが其處が慾だから鄕里の方から義俠的の好便でも來たのでは無いかと急に小戾りして其郵便を取つて出たがネ、當事と何とやらで其差出人を見て苦笑ひをせずには居られなかつた、まあ君誰から來たと思ひ玉ふ、君も矢張知つて居る人なのだ、と語れば點頭き點頭き聞き居し横見は、はてね、誰だらう、僕も知つて居るといへば、いづれ舊い友達に相違ないが、何にも當りが無いから知れないね、一躰誰だつた、と問ひ返す。答は爲さず袂より先刻に受取りし封書を出し示せば、横見は手に取りて、ハヽア井上からとは珍らしいネ、僕も此夏頃一度手紙を貰つたから其返事に在京諸友人の近狀を報じて遣つたが、何といつても懸離れて居て、全く今では關係が無くて濟む間になつたのだから、其後は互に無音信になつて居る、君の方へは始終音信が絕えぬのか、彼も意外なところに意外な生活をする人となつて仕舞つたものでは無いか、おやまだ君は此狀を讀まぬのだね、と云ひつゝ山下の膝の上に返す。左樣さ一ト月隔ぐらゐには尋ねて呉れるが、此方からは兎角返事を怠り勝になる、そりやあ何樣も向ふは閑暇で此方は事が多いものだからネ、何を云ふて來たか知らぬが大層な長手紙だ、君が見て惡いやうなことが書いてある譯も無いのだ、飮みながら今讀んで見やう、と山下封を披いて繰りひろぐれば、横見

ろて御互に得るところは實に些細だ、それより寧これは山下めを少し弛めて見て何樣にか此樣にか成り立たせた後、徐ろに取るものは取ると仕た方が宜いと思ふ、彼の男は兎に角に見込がある、諸君が一致さへすれば此私は酋追究せぬばかりで無く少々位は助力して遣つて見ても宜いと思ふ、といふやうな調子に遣らかして呉れさへすれば、いづれも損を仕たがらぬ連中だから、是非無く氣を長くして仕舞ふに相違無い、特に利運組を滅茶滅茶に捗り取つたところで第一の債權者の君に大部分を取られて仕舞ふのが歷々と見えて居るといふのだから、必ず我攻に攻め立てゝ利運組を揉み潰すといふことは爲ぬに相違無い、左樣さへ爲つて此暮さへ過ごせれば、また現れ出て盛り返す方策は無きにあらずなのだから、此處一時の難關を是非とも此狂言で切り拔けねばならぬのだ、うるさいやうだが眞實に確乎と賴むぜ、御禮は他日屹度爲る、ゑ、横見君、横見君、賴み奉る横見大明神だぜ、いや戲談では無い、眞實に賴むのだ、併し今日夕方までに僕の鄕里の知人から援軍さへ到着すれば其にも及ばず大威張で遣つて行かれるのだが、今年の不景氣と云つたら實に酷いもので、那里も同じ正貨流出といふ有樣だから、とても纏まつた金を信用一點で貸して呉れさうにも無いし、今まで何の賴りも無いのだから、百が九十九までは賴みにならんのだ、併し今にも店の方へ心當のところから信書が來れば、此家へ飛んで來て見せるやうにと唯一人殘つて居る店の者は云ひ含めてあるのだ、今三四時間が斷念の瀨門だが、もう程も無いことだし、大概は不結果と知れて居ること

時運に乘じて再擧を謀りさへすりや復物興するのは譯は無いさ、たゞ暫く蟄するといふだけのことだちう須らく笑つて酒を汲んで鼻歌でも迂鳴るべしだ、さあ飮み玉へ、君ほどにも無い、其樣な顏つきは止し玉へ、と一人元氣に酒を强ひたり。山下はたゞ折々に淋しき笑を浮ぶるのみ、言葉も無くて杯を受け居しが、婢等の運ぶ下物のくさ〴〵も一ト通り揃ひし後、聲を低めて、さあ君、其樣に醉ふて仕舞はぬ內に、それ〳〵の手續きを仕て仕舞はう、と小形なる折鞄の其中より何かは知らず書きたるものをいろ〳〵取り出して受けつ渡しつ、少時は酒も餘所にして示し合ひ密語き合ひ點頭き合ひぬ。

やがて其事全く終りて、山下は初めて心安げに手を打ち鳴して酒を呼び、下物を新にし、勢よく自ら進みて盃を取りぬ。一盃一盃又一盃、醉の漸く廻るに連れて心も漸く寛げると覺しき山下は、酒盃を擧げて相手に屬し、あゝこれで先づ助かるといふものだ、實に閉口して仕舞つたが、斯樣して置けば先づ安堵だ、いよ〳〵今日中に僕の鄕里から一書狀一電信の援軍到着せずんばだ、其時は萬事休すだ、三十六計の上策を行はねばならん、左樣なつたら君十分に遣つて呉れなくちやいかんぜ、眞實に賴んだぜ、確乎と遣つて呉れなくちや困る、何でも今の證書類を振り廻して、僕に對する第一債權者の地位に立つて、他の債權者等を追ひ捲つて君の後に付かせて呉れ玉へ、左樣して君がじや〳〵張つて、私は第一金額の債權者ぢやが、今こゝで利運組を諸君と共に拐り壞して仕舞たとこ

ふ聲に振り返りて見つ、小戻りしてまた内に入り、嵩高なる書狀を手にして出て來ぬ。年は若けれど家の主人とは見えたり。忙しげに郵便の差出人の名のあたりを一瞥せしが、いと望みを失へる面色して、其儘袂の中に押し入れつ、北を指して急ぎ歩みたり。容態に似合はぬ徒歩と見るより車夫は早くも寄りて來て御都合までと云ふを頷て答へて、梶棒を下すや否や木原店と云ひさま飛び乘りぬ。心得たりと挽き出す車夫、車上に何をか思ふ若紳士、傍觀にはたゞ威勢好く見えたり。やがて其小巷に入りて只ある小料理屋の前に車を乘り捨て、突と其内に入れば、立出でゝ迎ふる婦の聲々、これも傍の耳には威勢好く聞こえぬ。

婢に導かれて彼の紳士は靜なる一室に入らんとすれば、中には待ち設けたりと覺しき男の三十四五なるが既四五杯は傾けたるらしき顏色して、おゝ山下君か、お先へ始めた、まあ何として遲かつたのだ、ムヽ、やかましい奴と遣り合つて居たのか、フム、そして其奴を返すに手間が取れたといふのか、いゝさ、いゝさ、眞面目に分疏を爲るにも當らない、ハヽヽ、酷く眞面目ぢやあ無いか、まあ飮るべしだ、僕なぞは君の御馳走と定つて居るからといふ譯でゝは無いが、餘り君が遲かつたから先へ始めて既に大分好い心持になつて居るのだ、大層心配らしい顏を仕て居るが、君にも似合は無い、飮み玉へ、飮み玉へ、昨日の談は既に悉皆僕が承知して居るのだから、今日其手續さへ濟ませば論は無いぢや無いか、なあに君、究通命ありだ、其樣なに氣を腐らせ玉ふな、君の腕だもの、

れ候はゞ眞に有り難く、久々にて拜顏の心地致し申すべく候。御用多なるべき中へ、我知らず長々しくも書き候無用の冗手紙を差し出し候段、御一笑御許し下され度、是も島人の事無き餘りの業と思さるべく候。御寸暇に片紙の御返辭にても賜はり候はゞ幸甚。くれ〴〵も御良緣を求め玉ひて早く御世帶御固めの御工夫あり度、御すゝめ申候。先は年末御伺ひを兼ねて近况雜事筆に任せて申進じ候。再々なれば御珍しくも候はねど御褒に預かりしを眞實にして鰺の干物一ト籠椿の油二タ罎進上致候間御笑納下され度候。草々。

十二月十一日　　三宅島　井上靜一

東京芝口　山下勘二樣

其中

芝口は某のところに利運組といふ黑塗に金字の大きからぬ掛札して、商賣は何をするとも知れず表は始終ぴつしやりと磨硝子の西洋扉を閉めきつたる躰裁好き一ト構の商家あり。今しも其家より立出てたる二十八九の鼻高く眼冴えたる男、大島の着物に同じ羽織、白縮緬の帶に黃金の時計鎖の細きを纏はせたるといふ打扮したるが、中折帽子の歪みを直しつゝ二三間ばかり行きしが、郵便とい

眼にだけ見せて遣りたき心止みがたく候。東京土産に貰ひ候二重橋あたりを書きたる綿繪に立派なる服裝したる人これあるを、何時聞き知りしにや大將〳〵と呼びて殊のほか悦び見申候愛度無き笑顔を見候ては、思はず愚になり候て、繪ならぬ眞實の東京を見せて遣り候はゞ如何ばかり悦ぶことならんと、年の始の近きにつけて、親馬鹿の諺に洩れぬ詰らぬ考へを起し、從つて都遠き小島の中に罪も無くて住む腑甲斐無さを打嘆き申候。先頃までは、暴風雨吹く日の其外は何に心の驚くことも無き島住みの心安さは、偸盗や騙詐や爭鬪や損よ得よの競り合に生命縮まる都に住むより何程幸福なるか知れずと、夢にも東京を戀しとおもはず、浪狂ふ磯の秋、月傾く浦の曉の景色なんどを、此上も無う面白く眺めて、何の東京の八百八町、塵埃が舞つて人が蠢めくばかりの土地ぞ、と云ひ下して居たりし身が、打つて變つて都を懷かしみ、松飾りの蔭に絹絲絡りの手毬つく女の子、うなりの音の勇ましきを雲井に響かする紙鳶持つ童など、都の兒童の娛樂多げなるが頻りと晝の想にも夜の夢にも入り來候。笑ひ玉ふな、人は何によりて何と心の變り、何所に何時何樣なる考へを持つ歟、なか〳〵我からは知り難きものに候。近きところならば强ひても君を招きて吾が子吾が妻吾が住居をも見せまゐらせたけれど、御出下されたしとも申し難き小島なれば是非に及ばず、先頃伊豆より參りたる旅寫眞師に撮影させたる寫眞を差出し申候。住居は小けれども諸事取賄ひ易き島内の事なれば聊か物好を加へ候て、これにても島中第一の洒落たる家に御座候。貴君御寫眞御惠投下さ

暮、貴君より年長の身を以て不始末を仕出かし、既に一生の瑕瑾ともなるべき大恥辱を蒙らんとせし折、貴君の御高情をもつて事無きを得たる其御恩は、今に至りて猶報ひ得ざるを憾み居り候へども、然も一日も忘れ申さず、貴君を待つはたゞに親友としてのみならず、また恩人として日夜に貴君の利益よかれと念じ居り候こと故、愚言も實意の餘りとよく〳〵御味ひ下されたく候。私一家皆無事、小兒も來年は四歳に相成り候ことに之あり。いづくも同じ親心、吾兒ほど賢きものは世に無きやう思ひ、愚妻とも〳〵笑ふもこれが爲泣くもこれが爲にて、暮るゝも明くるも知らず日を送り日を迎へ申候。涼しき眼、圓き顏、濁り無き聲、僞り無き態度、御眼にかけ候て褒めて頂きたき心地いたし候。併しながら同じ新年を迎ふるにも、かゝる島の內にて淋しく年を加へさせ候事かと存じ候へば、吾が兒の可愛きにつけて、昔時ならば罪あるものゝ流されどころなる洋中の島守りと成り果てし身の、いと口惜しくおぼえ候。都の賑ひは、歲の末の夜の燈の輝き、年の初の朝の車の響き、いづれか兒童の心を悅ばせざらんと思ひ申候。松竹の飾り、日の御旗、注連繩引き延へたる家々町々の淸らなる光景、金光燦爛たる禮服禮帽の人々の車を走らせ馬を走らせて馳せ違ふ丸の內の樣子、東京にだに我住まば肩車してなりと見せて遣らんものをと、無益にも我が兒の運拙くて見るものも無き此絕島に生れ申し候を憫れがり申候。かやうの事を申し候はゞ定めて御笑ひもあるべけれど、全く自分は高位高官の金光りなどを何とも思はぬこと昔時に異らざるも、吾が兒には浮世の榮華を

必ず御爲惡しかるまじくと存じ候。私儀東京に罷り在り候はゞ、本年の末頃は然るべき婦人を見立て、無理にも貴君を妻帶させ申すべきなれど、齒痒きことにはかゝる離れ島に潜み暮らす身と相成りたれば、十數年の間兄弟もたゞならず御交際申せし甲斐も無くて、貴君のために良婦人を擇み出して娶り玉へかしと勸むるの便を得ず候。横見君よりの書狀に因りて、君が次第に君の御宿志の如く何人の應下にも立たで而も次第に社會に頭角を現し、書生風と云はるゝにも關らず明治の新商人として着々成功し行きたまふことを聞及び、今はいよ〳〵君の事業の進みのためにも君の信用の强みのためにも是非とも妻を迎へて世帶を持ち堅めたまふこと必要の時と存じ候まゝ、遠隔の地にありて親しく御世話致すことは叶はざれども、せめてはと此心此言だけを致し申候。容貌の美しきこと拔群ならずとも、貴君の財産十萬圓以上ならずとも、貴君の年齡三十歲に達せずとも、相應のところにて御辛捧と御覺悟を改め玉ひ、横見君其他在京の人々に御賴みありて、早く內助の人を得たまふかた、差當つての得策と愚考致し候。若また貴君が平生の三ヶ條の說の手前もありて、今更横見君などへも賴み難しとの御含みも之あらば、其點は私より貴君の體面の惡からぬやう取り做し、私の心中より出でたることのやうに繕ひて横見君其他在京の人々に申し入れ、精々美にして賢なる婦人を探り出させ申すべく候。貴君と私との間柄なれば、何事も御明しありて一向御差支へこれあるまじく、善惡陰陽とも必ず貴君の御利益を謀りたき所存に候。想ひ起せば五年以前の年の

縁の絲

其上

追ひ〳〵押詰まり申候。定めし御地は御事多と存じ候が、御近况如何に候や。本年は殊のほか宜しからざる景氣の由、新聞紙上にて承知仕候。併し何と申候ても大都會の賑ひ、年の市の羽子板を三枚五枚買つて取らすやうなる全盛の紳士が別嬪を引き連れて大路を押廻す小面憎きも之有ることゝ存じ申候。かゝる絶海の島人と相成り候ても、淺草神田の人出のさま、市の商人の勇ましき賣聲など思ひ浮め候て、今は風の音濤の響のみの侘しき住居の夜半の寐覺にも、そゞろ都懷かしくおぼえ申候。私には引替へ愈々御繁榮にて都に御住居わりて歳を送り玉ふ御幸福、何より御羨ましく存じ候。但し未だ定まる御眞縁も無之候や。何卒早く御配偶を得玉ひて賑々しく御暮しあるやう心底より祈り申候。自分の經驗にて貴君をも律するといふには無之候へども、縁のことばかりは智惠にも意地づくにも任せ難きもの故に、兼てよりの御說の、年三十にならぬ中は妻を迎へじ、十萬圓以上の財産を作り出さゞる間は妻を迎へじ、容貌の美なること拔群の女ならでは妻とせじ、などゝの三ヶ條も、好きほどに御思ひ捨てなされ候て、大抵なるところに御辛抱御決着なされ候方、

箇ではいけない、左樣いふことをするには汝の器量では押が强い、と何を云つても取上げず、たゞ追ひ出す算段なり。

冬森は意地惡ければとて訪はず、春岡を訪へば奧に聲は仕ながら不在と當り障らず追拂はれ、寅林を訪へば、御全盛で御羨ましい、僕なぞは例の通り薄給な身、君は尾花屋の旦那樣か、耳朶の善惡で斯樣も違ふものかね、と却て此方を上げに上げて口を開かせず。仕方無く空腹を抱へて歸つて來れば、チロリと見たまゝ言葉も掛けて呉れず、お三は飯前と聞て膳拵へなし、坐敷に持ち出づればお末は癇癪聲、其方へ持つてお出よ、わからないねえ、坐敷へ持つて來ずと好いのだよ、臺所で好いのだよ、食べさせるだけがまだ慈悲なのさ、と口の足りるところへ手つきまでを添へて彼方へ／＼と叱り退くれば、あはれや霜六は臺所で食はさるゝに至りしが、それでも生命あれば食はずには居られず、竈の蔭でくしやり／＼。

賴母しき人々には妻を出せし時より見放され、朋友等は富に中りし時より同情を表して呉れず、お末には終に追ひ出されて、右と左と違つた下駄を穿き、袖からも裾からも荒布のやうなものを垂れて、今だに芳町あたりを野犬のやうに行く男あり。あれが千圓紳士の果なりとて評判／＼。

したから一寸屋根へ上つて附け直して下さいな、といふともあれば、あゝ大變な恐しい雲が出て來た、お三は居ないし困つて仕舞ふ、一寸二三杯水を汲んで置て下さいな、といふともあるやうになり、先には下駄の後が少し減れば、香取屋、六文屋から自身見立てゝ好い品を買て來て呉れしが、近來は、あゝもう下駄が穿け無くなつたと、云へば、三十錢ばかりをころりと出して、これで好きなのを買つて入らつしやい、日光下駄が好うございますよ、といふやうになりぬ。それも少時して今度は貴郎と呼んで居たを何日の間にか汝といひ換へ、二階に二つ並べし床をお三に云ひつけて自己は抱へのおてこおしなの間に挾まつて寐るやうに敷き、霜六が床は下の奥まりたる二疊の小座敷、しかも雪隱の傍近きところに敷かせ換へ、使ひは云ふに及ばず、あらゆる凡てのことに、立つてるものは親でも使へといへる金言を楯にして、霜六を使ひぬ。

口惜しけれども詮術無ければおめ／＼として月日を送りしが、朝から晩までごろ／＼して居ずと些は御錢を取ることを心がけたら可からうに、犬もあるけば棒にあたると云ひますよ、家の用を濟ませたら世間の怜悧な人達のところても廻つて好い口を御認けなさるが好い、朋友なんといふものは此樣いふ時の爲ですよ、何處へでも行つて御覽なさい、なんですとへ、手土産を持つて行きたいとへ、酒落臭いことを云つたもんです、土産なぞ持つて行くのは人躰が違ひますよ、御世辭を巧く遣へばそれが無いものゝ遣ひものですはね、人に物を賴むに玄關から大手を振つて行くやうな寐惚けた料

妾は斷念をつけました、と泣きながらの言分に無理は無し。それでは丸々男が惡い、けれども時の機會にかゝつて云過しもあるは誰しも、事、秋谷は左程無法なことをいふやうな氣質の男では無い、秋谷の料簡を篤と糺して其上何とかするが順、と惣右衞門自身秋谷を訪ふて樣子を見るに家は空家も同然にて、家財に眼ぼしきものも見えず、扨はこれもおたよの云ひし通り、何も彼も一寸したものは皆尾花屋へ持つて行きしといふも虛誕ならず、と第一に驚きしが下婢ばかりにて用は足りず、是非無く尾花家へ尋ね行けば往時の霜六とは暫時見ぬ間に變りて、乙に澄ました顏つきをかしく、言葉も何日か下卑た調子になつて、二言と云はぬ間に古代物の惣右衞門は愛想をつかし、亭主に斷り無く駈け出すやうな女に用は無え、離緣までのこと、との無法な言葉に、貴公のやうに腐つた男に其儀ならば此方でも添はして置けぬ、と散々に腹立ちの餘りの毒口をきゝて歸りしが、頓ておたよは親元の警部が方に戾るに至りぬ。

淫酒に心蕩け自然惰弱の身持になりて勤務もおろそかになし勝になりし霜六、重役にも睨まるゝに至りしかば冬森春岡等が陰口も力をなして一日突然免職となりぬ。さて免職となりて見れば、免職さるればとて女が食はして吳れると誇りし霜六も些弱らざるにはあらず。されどお末も慰めこそすれ免職になりたればとて厭な顏もせざれば、少しはこれに心強く、一日又一日と爲すことも無く鼻糞を穿るか煙草を呑むかして暮し居けるが、何日と無くお末は霜六に向ひて、貴郞引窓の紐が斷れま

は物で殘る譯ですから損は無い筈、能く考へて見て下さいと言葉を巧にして云ひ出しぬ。九百圓には前に中りし富の金に我が從前の貯金までを添へねば既足らざれは、霜六も急には答へかねしが、十分お末を信じ居れば、乃公は左樣した金を出すことは出來ずとも云ひ切りかね、且は此事巧く運ばゞ我がためにも惡からぬことなりと慾からの算盤に心も傾き、遂に芳町に藝妓屋を開かせてお末が腕一杯に働かせ見るに及ひけるが、流石はお末が云ひ出して爲せしことだけ、隨分鋭く拔目無く麾を取りておてこおしなの二人の妓を安直專門に驅けあるかせ、二月三月めよりはあぐりかぐりといへる二人の半玉も置き、附木の燃ゆるやうに勢ひ好く流行せ、幾干か利益を見るに至りぬ。

慾と色とに滿足を得て霜六は此上無く面白き月日を送り居けるが、面白からぬは女房の身にて、巣守は好けれど日に增し邪見におしらはるゝに堪忍ならず、媒妁人の土川惣右衞門といへるが許に或夜驅け込み、出て行けと云はれても出樣とは存じませなんだが全然家には歸らぬばかりか勤めの方も疎略にする樣子に今日も今日とてしみじみ異見を申しますれは、汝の知つたことでは無い銀行を假令ば失策つても乃公は女が食はせて呉れる、甚時になつたなら汝も愚圖〳〵云ふた女に食はせて貰ふやうなことになろうも知れぬほどに餘り乃公が餘所に泊つたとても文句を云はぬが好いと、斯樣いふことを申しまする、餘り情無い良人の心、あゝでは迚も行末の見とめが付きませねば、見も無し、

巧い口が湧いて來たので御話仕ますから能く聞いて而して何とか考へて下さい、ほかでも無いが吾家の營業、此處で斯樣やつて行く日には困りも仕ませんが餘りも仕ないで、善惡ともに無しで濟むといふ面白くも無い事ですから、かね〴〵妾も行末の案じをつけて居りましたが、此の營業も自分一人で妾のやうに遣つて行つては出來したことも仕得ませねど、藝よりは面の世の中ゆゑ容貌の好いのを四五人も置て種の好い客のある土地で遣つて行けば、隨分好い財寶の掬へるのは知れた譯ですよ、それで私も何樣か左樣いふ運びに仕度いものと心掛けて居たところへ丁度芳町に居て同じ營業を仕て居ます私の朋輩が今度お芽出度い譯になつて御赤飯を配る仕誼になり、家屋ぐるみ二人の妓をつけて望み人もあれば讓りたいといふのです、云ひ價も可なり廉い方だし、それに妾が買はうといへば幾干か負けて呉れるも知れたこと、場所は彼所なら客の種も隨分好い方でございますし、屹度妾が骨さへ折れば一ト流行流行らせて一年內に大丈夫資本は取つて爲まひますが、それにしても先立つはお金のこと、九百圓ばかりは何樣しても要るです、ところが妾は此の通り、何處を使つて出して貰はうといふ處も無し、ナアニ爲ずとも濟むことですから爲まいとおもへはそれまでゝすが、危險いことをするでは無し、先途の見えて居ることとですから成らうことなら何樣にかして一トお釜起したいのでございますよ、何樣でしやう貴郎妾に一つ遣らせて見ては下さいませんか、妾が儲ければとて妾のものは畢竟貴郎のものですから、好ければ共に好かろうし、惡かつたにしろ資本

に關係の出來しも過ぎたことなれば是非なけれど、此頃のやうに全然家へも歸らず又勤め向も不精勤といふやうでは眼前は兎も角も末に好いことはござりますまい、第一折角無盡で取れた財貨も惡錢身につかずの譬喩の通り消えませうに、と或夜久しぶりにて家に寐し時女房は懇々と意見せしに、其場では何も彼も乃公が惡かつたと眞に後悔したらしき顏色せしも明る夜は矢張家に歸らず、朽木に鉋、糠に釘、斯樣では無かつた人なるにと、やきもきして異見の度を重ぬれば大人しくばかりは聞て居ず、ゑゝ五月蠅い、知つて居る、それほどの事は知つて居るが汝が思ふよりはお末が乃公を思つて呉れるほうが餘程深い、冗費を少もさせやうでは無く、美味ものを食はせて面白く機嫌を取つて呉れるが、汝は何だ、女だてらに出過ぎた說法、そのくせ碌な菜一つ食はせても呉れず、亭主が自分の氣に入るやうに仕て呉れゝば好いと思ふか知らぬが、亭主は女房の家來では無い、汝の注文通りにばかりなつて居られるものか、默つて居よ、と罵りし末は、袂を拂つて尾花家へと駈け去ることも度々あるやうになり行きたり。霜六が言葉も虛妄ならず、お末は眞實に霜六が爲をおもふが如くにて、何一つ霜六に請求もせず、默つて居つて霜六から呉るゝものだけを貰ふのみ、萬般親切に振舞へば、今は長火鉢の向ふに坐つて柄に無い幕を出し居る霜六、高くも無い鼻を大得意に聳かさせて急拵への通人となり、お末が何かを直して呉れたる絹物のねんこを着て情人がるも無理ならず。其中一日いと眞面目に、疾から貴郎に機會があつたら御話し申さうと思つて居ましたが丁度

せんか、見たところ餘り貴郎に親切な方でも無し、御腹の中は大方遊び德といふ料簡で着て廻るのに違ひはありませんから其積りで來て御仕舞ひなさい、斯樣して無益の立つことばかりをなさろうよりも穢くとも妾の家へ御來臨なさいな、愘なことをいふと御思ひなさるか知りませぬが妾はほんとに貴郎のことを思ふから云ふのですよ、と或夜ひそかにお末に智慧を入れられてより、天晴忠義もの、嬉しい心立を持つて居て吳れるぞ、と十分お末に卷かれたる代り、春岡をも夏山をも卷いて捨てゝ、其後はちよこ〳〵尾花屋といふ御神燈の下を潜つては相會ひけるが、此樣なれは夏山も春岡も向ふ面に廻つて、冬森寅林等が居る前にて、秋谷君は頃日奇麗になつたの、いや痔が見えるの、それも其筈大した女に可愛がられ過ぎるからのと嫉み半分忌々しさ半分に嬲りかくれば、勤め向に辛いことは無けれど顏を持つて行くのが厭氣にもなり、出勤時間に些外れゝば今までは駈足をしても馳せつけしものが、また今頃出て行かば、おそい〳〵判官殿尾花御前が傍にばかりこびりついて居らるゝ故其通り、なぞと嘲弄さるゝは知れた事、仕方か無い、いつそ病氣屆けを仕て眞實の病氣に取繕はんと、病氣ならぬ病氣も爲るやうになり、一日休めば翌日は猶出辛く、自然今までの精勤の習慣を我から碎して仕舞へば、時には、これでは濟まぬと思ひ返しても容易十日とは續かず、心は安きを失ひて酒のみ何時か强くなりぬ。

銀行にての噂高ければ女房の何時までも知らであるべき譯無く、無盡に當りたるもお末とかいふ女

なりたれば、宜しい、お末と外に二人ばかり奇麗なのを呼べと云ひ出せば、頓てお末を先頭にしてお辯おちやらなといふが來りぬ。云ふまでも無し、お末はまづ能く入來しつて下すつたことといふやうな極り文句を秋谷に對つて云ひしなるべきが、此日此夜春岡が所爲か但しはお末が機關にかけてか、三人は奧山の某の待合に入りしやあらずや、乃至は草津の温泉にでも浴りしやあらずや、何かは分らず名自が家には歸らざりし。

最初に籤に中りし時、吾が女房に打明て話せしならば好かりしなるべきに、女房のおたよといへるは、親が警部を勤め居れる登戸牛雄とて名からして頑固らしき堅藏が手に育ちたるものとて、富に中りしなどゝ云はば、中りし手柄は措いて何で其樣な惡いことをなされました、と煙たいことを云ふは必定と、隱し置きて知らせざりしなれば、斯樣なつては愈々明かされず、通勤は怠らねど其翌日も我家へは歸らず、淺草へ行きしが、流石に今夜は外で明かしてはと氣が咎めて、更けて吾家へ歸り見るに、洋燈明るき下に居ずまひ正しく、何か知らねど裁縫をなし居れり。歸りしを見て、我顏を讀まんとてか、お歸りなさいまし、と云ひながら此方を見し眼は平常ならざりしが、別に問ひ糺しもせざるに胸を安めて直に眠り、明けての朝は出勤時間より些早かりしも何と無く家に居辛きがため倉皇に銀行へと立出でたり。三度四度は春岡夏山と共に一つ穴に潜る貉同士なれば打連れ立ちて遊びしが、貴郎、あのお二方は御朋輩でせうが何時も貴郎に負さつて御遊びなさるのは酷いぢやありま

二人は急に續いて立出でつ、秋谷君〳〵と呼びかけたり。呼ばれては流石に振切つても行きかね、彼の夏山めは酷い奴と腹では恨みながら立停まれば、夏山やさしげなる調子にて、いや先程は緩りと御話も出來ないで事情の細しいところを御聞に入れることも出來なかつたが昨夜の始末も御話し仕度し、且は君に大層な散財を掛けた其御禮といふには足らないが春岡君も同じ考なので二人で君を招待して、ほんの晩餐だけ上げたいのだが何樣か承引して吳れ玉へ、と云ふ尾について春岡も、別に急ぎの御用事も無いならば何樣か是から直御一所に、と至つて慇懃の挨拶なり。夏山ばかりの云ふことなれば辭みもすべきが春岡までが言葉を添へてのことなれば、好ましとも思はねど、それは千萬ありがたし、左樣まで爲さるゝには當らぬながら折角の御思召なれば御言葉に甘へて、と云へば、滿足の色を面に浮めて、忽ち車を夏山は命じ、三臺勢ひ好く行き着きしは淺草なり。昨日と同じ家にて別にこれといふ興も無き代りには、意此惡く苦めんとするものも無く、苦められもせで至極平穩に飮み居たりしが、酒半酣は及んで、春岡笑ひながら、男ばかりでも淋しい、誰か招ばうか、と輕く云へば、左樣さ、それだけは秋谷君に違つて貰つても可ろう、ねえ秋谷君、と如才無く云ふ時、昨夕の婢口を出して、貴郎お末さんだけは是非お招聘にならなくつては義理が惡うございますよと秋谷の顏を見つゝ云ひぬ。懷中に金はあり、昨夕の念はまだ消えず、一座の機會はかくの如し、夏山は兎に角、春岡に馳走のみさせて澄してのみ居るも一寸出來難き場合なる上、酒に幾干か心は大く

な挨拶のみ、重役等が聞くところもあれば何事も言はず語らずに正午までは濟みぬ。晝飯終りての暫時の休憩の間に夏山千代田の二人霜六を片蔭に呼びて、君にはお氣の毒なとながら騎虎の勢になつて昨日の饗應は概算で君から受取つた金員よりつい超過した故其分だけは借りて來たので何樣か二人にそれだけ渡して呉れ玉へな、なに君に取つては實に僅少だ、たつた二十圓ばかりだ、一切明細の控へはこれだ、僕等に私曲の無いところは能く見て貰はねば幹事に推されたゝけの義務が果てぬからね、と一葉の書付を出しての請求。人の惡い仕方と思はぬにはあらねど金持つたることを知られて居るだけの弱味には澁々承知するより外に詮方無く、氣の無い眼を注いで讀むとも無しに讀めば第三次會山口巴の拂ひ何十何圓と記しあるに、我は知らぬことなれば合點行かず、これはと尋ぬれば、君も知らぬことはあるまい、あれだけの人數の治め處は他には無いから芳原へ持つて行つたのさ、君は寐て仕舞つたので置て行つたが其代りお末が受合つたから多方君の方にも次の一ト幕があつたろう、と笑ひながら云はれて、僕に無斷で僕の懷中を的に概算より費用の超過するも構はず其樣な事を仕たは酷いては無いかとも詰り兼ね、ム、濟んだことゆゑ是非は無い、それだけの金員は御渡し申しませうと、先方の云ふまゝ與へける。あれだけの事をさせながら身に染みた禮ひとつ云ふものも無きかと何程氣の好い霜六も思はざるにはあらねば誰の顏を見ても内心は面白からず、退出時間になりて皆々歸り支度する中にも自己は一番手早く早速と家に歸らんとするに、春岡夏山の

に思ふて居る唐變朴に對つても、挨拶に愛嬌とか世辭とか艶とかいふ者を附加にして遣るが定めのことなり、まして一座の狀況にて秋谷を千圓の富に中つた男なりとは知らぬ筈無きお末なれば、此奴生擒にして吾が食物にせんと思ひしか思はざりしか其處までは知れねど、あらもう貴郞お立ちなさるの、最も遲いから何ですが車か來たからつて左樣お周章なさらないでもですよ、いづれ奧樣が待遠しがつて待つて居らつしやるのが御氣になるからでしやうが、あんまり現金ですよ、ねえ姐々、左樣ぢやあ有りませんか散々妾に世話を燒かせて置てふいと立つて行つてお仕舞ひなさるのは酷うございますよ、明日でも御入來になつて緩りと聘んで頂きでも仕無ければ妾があんまり埋ら無過きるぢやあ有りませんか、と半分は婢をとらへ半分は秋谷をとらへてお末は喞ちぬ。常にある例なれば婢も口輕く、ほんとに姐々の云ふ通りですよ、貴郞は姐々には大變に世話を御燒かせなすつたのですよ、是非お近い中に、ねえ、姐々、今度は姐々に貴郞が世話を燒いてお上げなさらなくては濟まない筈です、ようございますか貴郞、笑ひごとではありませんよホヽヽヽ、と合槌を打ちて、送り出す時にもお末と共に是非お近い中にと繰り返しぬ。

其夜は事無く家に歸りて、酒に疲れたる身の譯も無く眠りしが、翌日は頭少し重きばかり、まさかに病氣といふまでにはあらねば厭々例の如く出勤しけるに、腫れ瞼したるは我のみならず、春岡も冬森も冴えぬ顏、年若き千代田等二三人のほかは大抵同じ氣拔面にて、いや昨日はと寐惚けたやう

るし御眼覺にならないては此家でも困りますゆゑ時々御起し申しましたが斯樣して漸と御眼覺になつたので妾も一人殘つて居たゞけの役も濟みましたよ、何や彼は旣濟んで居りまするし、御歸宅の御車を左樣申しませう、御宅は何方でございます、此處は車が門口まで來ないので不便ですが直一ト跨きですから御不承なすつて、と萬般親切の取り廻しなり。美味きもの〻譬喩にさへ云ふ醉覺の水に何か知らねど香の好い藥まで添へて貰ひ腹に染みる冷さの其一盃を盡して心は稍明瞭となりたれど醉は猶殘れる霜六ちろ〳〵眼に今夜の我が救ひの神とも云はゞ云ふべきお末を見るに、年は少し更けたれど未だ盛りを過ぎし花とも見えず、愛くるしき顏にはあらねど身の仕こなしかたに何處か男を引付くる艶氣あれば、成らうことなら何樣か仕て見たしといふやうなる不所存も内々一寸起せしが、氣の弱き上に經驗も無ければ、他が世話して呉れたらば知らぬこと、自分からは何として可いも知らず、口へ出す言葉も生憎持合せに無く、手を握つたら怒られやうかとの懸念ばかり先立つて空しくもぢ〳〵するばかり、其中車も見えたりとの婢の知らせに、正直こくめいの心持つた身は、立ちたくも無けれど旣立ちあがりぬ。此時お末がたゞ御歸りでございますかと冷淡に云つた限りなりしならば此の小說もこれだけに終り、千圓の當りの中から同僚の饗應費何圓といふものを取除けて差引何百何十圓といふものは無事に銀行へあづけられた限り秋谷が身の上に福が殘つただけにて濟むべきが、營業なれば、神樣の前の狛犬のやうな働きの無い男に對つても、女を怖いもの〻やう

伏せて仕舞ひ、さあ、これはもう濟みました、跡は矢張小いのを流行せた方が好うござんせう、寅林さん頂きませう、おや貴方が御猪口を下さる御手付は御器用だよ、屹度踊りをなさいますよ、いいゑ御隱しなさつても知つてますよ、美ちやん潮來でも御彈出しよ、小花さんが唄ひますとさ、さあ御立ちなさい、おじぶくりなさるなら妾も一處に踊りませうよ、夏山さん冬森さん春岡さん皆一處に御踊りなさいよ、と先に立つて踊り出して有無を云はせず立たすれば、他の妓等はぢやん〳〵と彈き出だす、寅林等も烟に卷かれて、くる〳〵と引き廻され、譯も無く醉ひ狂ひて踊り跳ねぬ。

忽然として我に返れば、冬森めに大椀の酒を强ひられしまでは覺えたれど其後は何とせしか何となりしか知らず、此處は那處と力無き眼を働かせて四圍を見んとする時、御眼が覺めましたか、御胸苦しうはござりませぬか、と云ふものあるに、心やうやく明くなり、首を擡げて聲の起りどころを尋ねけるが、先刻に我が難儀に臨みし時、身に引受けて助けて呉れしお末といへるが我が枕元に居たるを見るより、さては我知らず醉ひ倒れて其儘正躰を失ひたりしかと悟り、身躰に猶惱ましきところあるも省みず起上がりて、あゝ知らぬ間に思はず眠つたが衆人は何樣した、旣歸つたかと眼を擦り〳〵云へば、疾に衆人樣は遊廓へでも入來つしやろうといふ御樣子で一時にお立になりましたよ、貴下は大層あがり過ごして御苦さうに御寢なつた限り身動きもなさらなければ御起し申しても御返事も無いので仕方無く此處に御寐かし申し、妾が御付添ひ申して居ました、實は段々夜も更けます

んとする氣も無し。秋谷は誰か救ひの言葉を出しても呉れなば其語に縋つて何とか爲さんと思ひ居たるに、日頃取分けて親くなせるといふものも無き身の今更悲しく、春岡は默つて煙草を喫し、千代田は人の後に居て面を此方に見せもせず、たゞ少し氣の毒げの顏を爲せるは五十餘りの年輩なる卯原といへる男なれど、此男は我よりも猶酒量の淺きものにて賴みたりとて助けて呉るべき樣も無ければ、詮方盡きて一ト口飲み、各位から下された御盃ゆゑ頂戴は致しましたが此上は到底僕には飲めませねば那位か御助け下されませ、といふに誰一人助けんといはず、左樣云はずと君呑み玉へ、と冬森は免さぬ顏付す。それでも僕は呑めませぬもの、と淚を出さぬばかりになつて云へば、それなら一同を代表して献じたものを御捨てになるか、と些六かしい返辭なり。飲までは怒られん一同の氣に負かんと思ふものから無理に堪へて又一口飲めども酒は更に減ぜず、何樣しても僕は飲めませぬ、と思ひ切て是非無く言ひ出すに、まあ左樣云はずと大勢が君を祝した盃だから乾して貰はんでは氣を惡くする人も無いには限らぬ、と搦んで來る挨拶に霜六は今や男泣に泣かんとしけるが、先刻より默つて見居たりしお末といへるが此時忽ち、御助け申しませう、と云ふかと思へば既秋谷が手より椀を取りて、息もつかずにあらかた飲み乾し、一旦秋谷が手に戻して、さあ秋谷さん其御盃を妾に下さいまし、妾が飲んで納めて終ひませう、と援けて呉るれば、意外の助を得て悦べる秋谷は有無なく言葉につきてお末にさすに、お末は受けて再度なみ〱注がせて見事に飲み終り、椀をば其處に

次會があるのですから、と半は小聲半は大聲で云へば、小聲で云ひたる二次會といふを醉つても慾耳には聞き脫さぬ衆人は、それが宜かろう、秋谷君あげます、秋谷君あげます、と口々に罵り喊き、千圓紳士獻じます、富大盡いたゞきませう、君にあやかる樣に、と攻め寄せたり。秋谷は飮めねど人に逆ひ難き性分なれば、一々受けては返杯するに、幸ひお末が斟酌して注て呉るれば、左まで苦まず一應は獻酬せしが、日頃意地の好からぬ冬森寒三、平椀をとりあげて秋谷が前に出て、諸君、諸君を代表して僕がこれにて一つ飮んで秋谷君に獻しますから其時には、諸君僕と共に、秋谷君萬歲千圓紳士萬歲と御唱へ下さい、と云ひつゝ、ヒヤ〳〵といふを聞捨て、なみ〳〵注せ、ぐく〳〵と飮み乾し、秋谷君萬歲千圓紳士萬歲と叫べば、大勢も一度に、秋谷君萬歲千圓紳士萬歲と叫びぬ。冬森は大酒なれば飮みもしたれ、秋谷は旣先刻より堪へざるまで强ひられし上、平椀をさしつけられて如何で堪ふべき、特更御酌は拙者がと寅林がなみ〳〵注ぎたるにぞ、椀を持ちたるまゝ悲しげに酒の面を見詰るのみ。

如何に心弱き秋谷にても今は我を强ひて此酒を飮むこと能はざるに全く究して、辭み戾かんかと欲ひたり。されど辭まん時は過ぎて旣我が手に一旦受け取りたるに愈々究して、絕躰絕命泣きそうなる色をあらはせば、子日丑山の連中は夏山冬森等が徒と共に心中には笑を含めるなるべし、さあ〳〵秋谷君、飮んだり飮んだり、一同が祝して獻じた酒だ、何卒お心好く召上つて、と逼り立てゝ、救は

位も知るべきが成程大姐と呼ばるゝだけに萬般かしこく取り廻して、我を一座の長と見てか特に我がために心をつけ、痒いところに手の屆く接待を仕て呉るゝに、心弱い霜六剛いものを味方に得た心地して嬉しく、醉の勢に我から心を勵まして名を問へば、お忘れなさらぬように、と少さき名刺を呉れたるが、醉眼にも尾花屋のおすゑといふものとは讀み取れたり。一つ献げやうと、猪口をさせば、快く受けて返し呉るゝに、今まで何時の何處の宴會にても、たま〳〵妓に猪口を與れば、御手許を拜見しませうの、そんな冷くなつた御猪口は厭ですのと、大抵は刎付けられたるとのみなりし秋谷に取りては詰らぬことながら心地よく、自然と談話もぽつ〳〵と此女ばかりに仕掛け、盃も度重ねて此女にばかり擬すやうになり、妓はまた興無き談をも興あるやう取做し、機にかゝつて飲ますやう仕向くれば、愈々霜六は圖に乘りて、姐さん些燒けますねえ、などと他の妓の嫐るも心の底の底には惡からず聞えて、兎角我知らず酒量を過ごし、誰が何を云ひ居るやらも少し隔たりし處の事は耳に入らぬやうになりぬ。

末座に居たる千代平は夏山に向ひて、秋谷の方を指し示しながら、何樣です、もう大抵往生らしいではありませんか、諸君に左樣云つて第二次會を開くと仕ませう、といへば、夏山も笑ひながら傍に居たる妓に、汝此の盃を持つて行つてお末さんの前に居る人に遣つて呉れ、左樣して澤山强ゐつけて呉れ、さあ諸君も秋谷君を祝して一杯つゝ献じたまへ、それで此席は御開きと致しませう、まだ二

吹く風も左まで寒くは覺えぬほどに酒も廻りたる頃其處を引上て、戯言を道の伽に各自ぶら〳〵と歩みを運びて吾妻橋にかゝり、觀音の境内に入るかと思へば、先に立ちて案内したる二人は萬梅といふに突と入りたり。エ、歸路の近くとは云へ、御馳走も此家と相場が極まつたか、夏山も頓間な奴だ、家は惡くは無いが藝妓が淺草では嬉しく無い、と復不滿をいふもの少數はありしが、導かるゝを辭むも無く、どや〳〵と續いて入りぬ。謙遜する秋谷を正座にして大勢づらりと列れば、夏山が千代田が豫め觸れ込み置きしと見えて、多くの手間も取らすこと無く頓て立派なる膳部もあらはれ、此地にしては精選と見ゆる藝妓も少からず現はれて、羽觴は飛び絃歌は湧く賑なる態は忽ち現じぬ。酒は多くも飮めぬ霜六、今日は平常の會にも似ず、嬲り半分秋谷君〳〵ともてはやされ、自然酒杯も多く擬さるれば、醉ひも醉ひたり、一つは我を中心にして、そやし立らるゝに心先づ醉ひて、何時にも覺えぬ嬉しさを感じ、常より多く笑ひ、常より多く語り、常より心も大くなりて、常には如何なる美人に遇ひても眼にも留めず、又眼に留むるほど能く見ることをも得せざりし身が吾が傍近く周旋せる妓輩を覗廻すに、不圖眼につける一人の妓の齢は二十四か五ほどなるべく、眉は男兒らしく秀でゝ眼は冴々しく、口は些大きけれど締り好く、時々笑ふ機會に前歯と絲切歯との間の歯の鬮はれたるが露るゝに不思議の愛嬌を生じて、全躰の顏は那方かと云へは劍のある方なるを全く打消して、さても愛らしきものと思はする者あり。他の妓等の大姐大姐と呼ぶにて彼等が中にての

他との交際にて藝妓の酌で酒を飲みしともなきにはあらねど、然るときは何日も人の後についての み廻りて濟ましゆくを習慣となし、自己から先に立ちては會席茶屋に一度足を入れしことも無き男なれば、夏山千代田を賴みしは秋谷に取りては智慧ありて最出來したる案じといふべし。

翌日は千代田大働きに働きて元氣よく身も動かせば口も動かし、接待の下働きをなせば、夏山は我主人顏に躰能く取廻して、別に秋谷に氣も遣はせず、千代平が準備した辨松が美味の重詰と瓶詰の正宗で江東梅の園中に一寸した一ト酒宴。秋谷は此躰に安心して、ア、夏山君も親切な、成るべく僕に冗費をさせまいと思ふて斯様いふ態で遣つて吳るゝか、いづれ歸路には夕飯といふを名として猶一席はあるとするも此の調子ならば先づ安心、と私に悦ぶに引換へて來賓一同の腹の不平は酒の廻るにつれて口から洩れ、雪とも璧とも云ふべき美しき花の陰で夏山に打向ひ、これ限りの御馳走でもあるまいが幹事になつた君が秋谷の妻にでもなつたやうな氣で居られては仕様が無いぜ、もつと奢らせても好ではないか、と口說くもあれば、千代平を捉へて、汝も根性が卑悋な奴だ、秋谷の懷中だ、遠慮無しに藝妓でも連れゝば好いものを、美味にしろ重詰に冷酒では承知が出來るものか、と責むるものあり。梅林の中に木兎が集まつた様な俗物の鉢合せなれば口々に愚圖つくを宥むる二人も、まあ默つて居たまへ、これから先に趣向があるのだ、何が欲しくて秋谷の爲ばかりを思ふものかと、夫相當の俗な挨拶なり。

て直接に握つて見たり、我が車近く摩違つて行くものを掏賊ではあるまいかと疑つて心配して見たりして、漸く吾が家へ歸りても立つたり居たり尻坐らず、何か惡事にても爲したるもの丶人の見るを怖るゝやうに我から怯れて、妻にも見せず密かに机の抽斗に此金大事と藏ひこみしが、三分も經ぬ内に取り出して坐右の書籍の抽斗に藏ひ換へ、取つ置つして氣を病ませし末は矢張内懷よりほかに懸念の無きところ無しと思ひて、寐るにも其金を懷きつゝ寐しが、無論其夜は夢に入り得で、明日は何とせん、扨其後は何とせんとの樣々の屈托に疲れしなるべし。

其翌日秋谷は我が勤むる銀行ならぬ某の銀行に八百圓だけを預け置きて二百圓は例の內懷に藏ひつゝ出勤したりしに、其日は土曜日なりければ、愈々明日は千圓紳士秋谷先生の御饗應の觀梅の宴の當日だ、左樣だ千圓紳士に招待される筈だ、と寅林千代田の輩先立つて騷ぎ立て、千圓紳士といふ渾名をさへ何日か付けて喚き散らし、重役の耳へ若や此一條の知れて譴責などを被るに至りはせぬかと秋谷の氣遣ひするをも構はず逼り立つるに、當惑して胡亂〳〵となりし霜六は、夏山と千代田とを小蔭に招きて宜敷亭主役の御助勢を願ひます、費用は打明けての御話しなれど思ひ切たところで御一人概算五圓位までゞ濟ませたいのが小生の望でございまする、御承知の通り僕は無骨者で御恥しいが此齡になるまで亭主役を仕たことも無く、茶屋小屋で行渡りよく半間な事無しに巧く遊ぶといふことも知りませねば、と赤い顏して云ひ出せしもいぢらし。眞に霜六は自白の如く、これまで

由にするは我が勝手なれば君等の指揮は待たぬと踏切つて云ふことも得せず、例のにや〳〵笑ひをして、それは勿論冬森君はじめ諸君を袖には致しませぬ、今度の日曜あたりは丁度梅も盛りでござりませうから觀梅の催しでも致しませうか、と人々の機嫌を取り顏なり。下作の寅林早くもつけこみ、それは何より妙でござりませう、然し觀梅も品によりけりて、ぶら〳〵と龜井戸小村井あたりを、山梔子で染めた慈姑の團子横啣への、瓢簞酒の立飮の、歸路に淺草邊の夕飯のなんと申すのは、閑靜とか風流とかいふ悲いことはござりませうが僕等俗物には有難くありませんね、けれど秋谷君そんなことはありますまい、但し其樣で無いにせよ、女連も無して無法歩きの末が柳島の橋本あたりで一酌なんといふ質樸簡古主義は餘り嬉しくはありません、柳橋から船を出してといふ寸法か然らずとも淺草かけて遊廓へでも留まるといふことに願ひたい、と云へば、夏山も春岡も子日も丑山も笑ひ出して、寅林君能く言つた、君も中々隅へは置けない、と云ひつゝ秋谷の面を見たり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

秋谷は夢に夢みし如く千圓の金を受取りしが、妻と二人にて子無き間の覺悟と年月かゝりて貯へし金すら容易五百圓には手の屆かざる位の身が急に千圓といふ大金を得たることとなれば、心は流石に安堵きかねて、其日築地より吾家への歸るさには、用心に用心して、平日に雨が降つても乘らぬ車に乘り込み、內懷に緊乎と藏めたる金を兩手で衣服の上から抑へて見たり、幾度となく手を入れ

君が中つたか、ろして何程のにあたつた、ヤア千圓のだと、ほんとに千圓のに中つたのか、と口々騒がしく逼まり問へは、我が中つた嬉しさに他の中らぬ氣の毒さの交りたる不思議の心持に言語もしどろに聲も慄へながら、わ、わ、私が中りました、と漸く秋谷は返答したり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

いよ〳〵秋谷が中つたるに定まれば、誰も彼も羨ましさの餘りの嫉さに、金といふものは意地惡く用の無いやうなところに行きたがるものだ、花も引かねば藝妓も買はぬ秋谷の寢惚面が千圓取つでも何にするものか、大方銀行へでも預けるか家でも買ふ位なことだろうにと、低い聲して誹るもの十人が六人七人までなり。中にも冬森は自己が發起して他の所得となりたるが一卜しほ悔しくてか、秋谷君、君は大した運を得たものだ、此樣いふと何だか可笑いけれど言はゞ圖らず千圓といふ大金が君の手に入るのも元はと云へば僕はじめ衆人が勸めて進ぜたゝめだ、固より最初に中つたものは一同に馳走する約束だから、如才は無かろが、十分君が驕つて呉れないでは不可ぜ、といへば夏山も尻馬に乘り、イヤナニ冬森君、それは君の入らぬ御配慮といふものでせう、吾輩から申込むことは無くても秋谷君に既に御心算が有るに定つたことですもの、梅は咲くなり、歌舞妓は開くなり、好運の御祝の御振舞には何の御趣向でも付き次第といふ時でございます、何も論は無い一人前に十圓づゝの驕りをなされたとて多寡の知れたことです、と脱れさせぬやう云ひ廻すに、秋谷は我が金を我が自

もあり、彼處も此處も千圓といふ金子の明日でも取るゝやうな心持のする人はかりなるに、元氣よく酒も巡りて、埒無く衆人醉ひ崩れたり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌日千代平は首尾よくも注文通りの札を揃へて買ひ來りけるが是より各自は、中りて欲しや、中らば此樣して彼樣しての空想に身を驅られて、多少はあれど誰も皆心の平和を失ひしは氣の毒にもまた馬鹿氣たりし。さて後一月餘りを經て千代平が手に興行者より當り籤の通知書來りたれば千代平これを報じけるに、發言人の冬森は先づ色を變へ、二枚買ひし丑山はア、九星も賴みにならないと嘆じ、僕は初夢を判じ損つた、僕は辻占に欺されたと喞つもあれば、ゑゝ燒の皮だ、こんな事だろう、と思つたと嗔るもありしが、それではこれだけの人數の中に誰も中つたものがないのか、と冬森の云ふ尾について、一座互に面を見合ひ少時無言となりしも可笑し。敏捷き千代平中り札の番號を繰り返し〱口の中にて云ひ居たりしが、あゝこの三百十八番といふのは私が買つた札の中に何でもあつたやうだ、ハテ誰のだつたか知らん慥に買つた覺えがあるか、春岡さんではありませんてしたか、と云へば春岡膨れ面して乃公のは五百十八番だ、といふ。ハテ何でも買つたに違ひ無いが、ヤ秋谷さんのだ〱、少し下を向ひて莞爾として居らつしやる、秋谷さん貴下中りましたね、と指せば、中らぬ連中羨ましさと嫉ましさとに、眼を一齊にそゝぎかけて、秋谷が中つた、ナニ秋谷君ほんとに

いことだ、立替て置て呉れ給へ、而して君も連中に加入し給へと云ひ出でぬ。腹には頁からぬことゝ思へど抵抗ひて衆人の云ふところを打消さんとの勇氣は無ければ、唯默々たりし秋谷霜六、あらずもがなの企圖には思へど如是云はれては辭み難く、宜うございます、承知しました、と弱々と云へば、さあこれで滿場一致富籤案は通過したといふものだ、たしか明日が札の賣り出し日だと聞いたから、諸君、それ、思ひついた番號の札を千代平に托して買て來て貰つたが手數が省けて好い、其代り千代平が札の分は皆て分擔して遣ることにしやう、と冬森の立つる說また成立ちぬ。

初夢に何を見たから僕は何番、イヤ僕は昨日の辻占に何番大吉といふのを得たから其番號、と各自當にならぬ當をこしらゆる中には、薄覺えに覺えたる九星術幹枝術なんどゝ恐ろしく考へ込むもありしが、兎に角一枚の紙に各自が望みの番號は注され、現金は直に蒐められ、明日の出仕は些遲くとも關はぬから千代平手拔なく望みの札を買つて來い、と事の始末は付けられたり。さあこれからは前祝ひの酒だ、冬森君一つ頂きませう、貴下の御顏が何だか中りさうに見えますぜ、といふもあれは、憚りながら僕が中るよ、せめて僕にあやかつて二か三の中りでも得るやうに一盃あげやう受け玉へと、威張るもあり。君は中つたら如何するつもりだ、一人て仕舞ひ込むなぞは許さないよ、一同と共に日光か箱根の遊びをする位のことは爲ねばならぬよと論ずるもあり。僕は中つたら直に株でも扱つて猶其上の運を出して見せるといふもあり。そんな慾張に中るものか、ナニ屹度中て見せると爭ふ

を噴飯させけるが、上席の冬森は喞へし煙草を口より離して、ハヽヽ、何様も君方のは皆滑稽だ、それより僕が好いことを聞かそう、諸君の中には知つて居る人もあらうが、こゝに一の富籤がある、マニラのやうな大袈裟なのでは無いが一圓で一の當りが千圓取れ、二の當りが三百圓、三が百圓、それから以下段々と何でも總數五十本ばかりの當り籤があるのだ、興行人は横濱のブランディといふ英國人で東京の取次人は築地の舍利別といふ矢張英人さ、中れば千圓、外れたところで一圓ばかり、一月の巻煙草の烟にもなる金さ、何様だ諸君、運試しに札を買て見ぬか、既に僕の知つて居る相應な紳士に三百圓の中りを取つたものもあるのさ、唯の一圓だ、試して見て全で損したにしろ悔むにも當るまい、これよりほかに吾等が一寸金儲の法も無い、勿論甚だ覺束無いことではあるが、と云ひ出すに、いづれも慾氣滿々たる中にも丑山は乘り出して、僕は二枚だけ買ひますと云ひ、夏山子日寅林等も賛成〳〵と云へば、一座誰も〳〵争つて運試しをせんと力み立ちぬ。

心弱き秋谷霜六と春岡梅之助との二人のみは默然として可否を云はねば、冬森は二人に打向ひ、春岡君は何様したものだ、此様いふとには兩手をあげねばならぬ筈だが今日は何として退却仕案だ、秋谷先生は着實家だから一圓でも無益に遣つて仕舞ふは損だと思つて居らるゝか知らぬが一同が賛成して居るのだから、交際といふものだ君一人異母子にならずともだらう、と云へは春岡は頭をかきながら、僕も賛成は賛成だが當時逼迫なので默つて居た、秋谷君、君は貯金家だから何の造作も無

ばれるのは甚だ以て遺憾です、と云ひ出して滿座のものを哄然と笑はせ、年老いたる子日は眞面目くさく、僕の考案は千代平の考案のやうなものでは無い、最も確實に最も數理的に而して最も雄大な計畫だが、惜いかな恐らく餘り大過ぎるので遣り遂ける人が無からうとおもふ、有りさへすれば屹度好いのだ、他でも無いが日本中の立樹を殘らず山主や林主に懸合つて買ひ占めるので、而して其をば向ふ十年其儘居ゑ置の約束を仕て置くのだ、木といふものは材は高いが立樹は廉い、一國大抵大小平均五千万圓と見れば實際よりも倍掛豫算だらうから保證つて好い、先づ三千万圓で買占められる、實際ならば二千万圓位なものだ、勿論幻術で拂ひ下げもするさ、五年山をとめれば其間の金利に輪をかけて材は騰貴する、それからは悠々と賣出せば好いさ、薄々聞けば僕の此の說を竊んで振舞はして歩いて居るものもあるそうだが怪しからぬこともあるものだ、と說き立てゝ一同を又絕倒させ、五十男の寅林は、諸君の御話は大仕掛過ぎて到底實際には行はれぬことゆゑ仕方がござりませぬ、それより小くても吾輩に出來得ることのほうが好いのです、僕の金儲の妙法は先づ兩替の小店を出します、而して扱ふ金銀貨を轆轤細工の器械のやうな器械にかけて知れぬやうに耳を削ります、鑢屑ほどの些少づゝの屑でも金銀のとて見れば侮れぬ金嵩となりまする、但し懲役になりますか否は法律の第何條に照すべきものかといふことが明瞭で無い以上は存じませぬから、那位か試みに行て御覺じませ、して猶罪せられぬものと定れば私も行り出します、と沈着顏に陳べ終りて又一同

、地の某亭といへるに皆々打寄りたり。もとより重役等は身柄違へばかゝる席へはきたるべくもあらず、寄り合ひし役員等の中にては冬森寒三といへるが上席にて次は春岡梅之助といひ、次は即ち秋谷なり。秋谷の次は夏山茂、其次は子日松藏丑山蒙助寅林斑兵衞などいへる輩、それより小僧上りの千代田千代平といへるに至るまで都合二十餘人、兎に角霜六も此座中にては三番目の位地なれば床近くに座りて頭も自然高く端座構へ居しに、酒猶盛んに行はれざる間、丑山蒙助といへるが、去冬僕は一寸自分で商法をして折角叔母から强請り取つたを殘らず失して仕舞つたが何でも今年は巧く遣つて好い年を越さねば承知ならぬと云ひ出せしを、大方君は慾張だから東株か定期でも扱つて失敗したのだらう馬鹿〳〵しいから廢し給へと寅林か調戯しより談起りて、盛んに金儲けの談合流行り、頓狂者の千代平は、私は資本さへあれば他の株は兎に角馬車株ならば屹度儲けて見せまする、其策如何と云ふならば嗚呼殘念だが無代で御話し致します、即ち先づ有る限りの資本を以て無暗矢鱈に賣りますね、而して豫め博勞を一人抱き込んで馬の虎列剌になつて居て猶症狀の明かでない奴を一匹賣りつけさせる、然らずんば虎的の吐瀉物を私に手を廻して馬車會社の馬に御馳走致しますね、すると忽ち傳染します、馬又馬と傳染り傳染つて馬車馬殘らず死亡すれば會社は驚く、人々は虎車には乘り度無いと噂さしますね、そこでどん〳〵株は下がる、それ一攫千金とは此處のことでせう、嗚呼これほどの才子の僕を知る人なくして、今に猶月給十圓は是非も無いが、時々小僧と呼

出させるのも、ハヽヽ君のやうに堅くばかりして居た日には談話の種子が無くなるだらうぜ、なぞと嘲弄半分誘はるれば、にや〳〵と笑つて、返辭より前にまづ相手の男の傍に寄り、ナニ妻なぞは何樣でも好いさ、僕たつて男子だ、何處へでも交際ひますさ、と厭にもあらざるか元氣よき伊達者等の後につきて、電氣燈のありても月のありても提灯で送らるゝ里にも、艶消硝子へみよし野杯と異な名の書かれたる門洋燈の出たる家にも入りしことの無きにはあらず。されど然る席に臨みても自から進んで口をきくべき術をも知らず他人もまた敢て霜六に興を發せしめんとも務めざれは、唯にや〳〵笑ひつゝ人々の語るを聞き居り爲すを見居るのみにて、深く面白くも感ぜず、勿論復其處に足を向くることも無く、翌日の霜六は相變らず昨日の霜六にて何時も平穩無事なりし。さしも平穩無事なりし霜六が身にも變れば變ることの湧くものにて、運は何處より何處へ行くものか知れず。霜六或人の世話にて銀行に入りしより、此處を離れては別に取出でゝ云ふべき材能も無き我身の立行くべきにあらずと、これだけは心弱き性質なれど身にしめて屹度覺悟なせるものから露怠らず勤めて勤め續きし其第六年の正月、霜六年積つて三十三歳の事なりし。今日は事務初めといふ日、退出の刻となりて誰云ふとなく吾輩同士一小宴を張るべしとの議を云ひ出せしが、年の初のことなり初めて打揃ひしことなれば、異議無く談は纏まりて、退出すると其儘、誰にも便利好き

給も四十圓ばかり取り、半季〱の賞與金も少からず受けて、富めるといふにはあらねど、妻のおたよ下婢のお直と三人限りの頭數少き一家なれは、まづ〱苦しからぬ生活を爲し、自分も外へ出づる時は黒の紋付の羽織を引掛け、安直ものながら高き帽子を冠る位のことは爲るとの成り、妻にも南部か節絲ほどの衣服ならば着せて出し得るといふ身柄なりし。

才は無けれど正直にて、事務の捌きの敏捷からぬ代りに少しも怠惰を敢てせず、下役にこそ蔭では侮らるれ、重役に對しては陽ばかりならず誠實謹直なれば、誰にも甚た重んぜられず又誰にも毫も憎まれずして年を經たる霜六は至つて無事に日を送り日を迎へ、風にも朝は出勤の時を違へず、同僚等が小僧を走らせて近處の仕出屋安西洋料理屋より晝餐を取りても晝は必す妻が調へ呉れて自己が携へ來りし辨當を食ひて冗費をなすと無く、退出の刻限には朋友さへ誘はずは、道すがら物を一つ買はんとも思はず眞直に家に歸りて、頓ての夕飯の膳の上の一陶を此上無き樂となし、飯終りては少し雜書など讀めど、腹の皮の張りたるに眼の皮のたるみ來るを自ら抑制へんともせず、ぐず〱と雪佛の潰ゆるやうに罪も無く寐て仕舞ふが日日定まつての事なりしが、さりとて吝嗇などといふ事の出來得べき男ならねは新年宴會の八百松の席の歸り、或は一同へ賞與金の出し日の歸りなど、秋谷君、君のように妻君孝行の人も無い者だ、親へて無けれは幾千孝行しても青銅五貫文米十俵乃至藍綬褒章なぞとい者は政府から出るとは無い交際ひ給へな僕等の仲間に、たまには好いよ妻君に角を

僥倖

其上

足らぬほどの生活にせよ、家内に病人無くて、主人は主人だけに働き、女房は女房だけに身を持ちて行く世帯ならば、福はまづそれにて澤山、其上に正躰の得知れぬ運といふもの丶舞ひ來んで見えたら、人の詐謀の鉤の上を飾る香餌か、天の試驗の火の寓せられたる問題かと、よく〳〵用心してか丶らねば、大抵は愚にも釣られた魚となるか、悲くも燒かるべき罪あるものとなりて、思ひもかけぬ憂目を見るべしと、日頃心學臭きことを得意にして語る老人あり。何處より聞き出し來りしかは知らねど、自己が說の誤謬ならぬ證據として、さま〴〵の人の身の上を語り、か丶る人はか丶る目に逢ひたり、然る人は然る目を逢ひたりなど、例として談す譚も多きが中に、近來特に其老人が極めて熱心に極めて得意に語りあるく一條の譚は、おもふに其老人も多少關係のありしなるべしと猜せらる丶ほど、左まで口功者ならぬ老人の口より、前後の事情光景を如何にも然ありしならんと誰人にも思はするまで、能く整頓ひて且能く周到りて語られぬ。

譚は私立銀行員なりし秋谷霜六といへる男の身の上についてのことなるか、霜六といへるは月

夜の雪

室内こそ榾火の熾なるに、私の暖かさのあれ、戸外は冷えまさる夜の雪、積もりて今は道を埋みぬ。

性質か知らん。

と後半分は三次に話しかく。三次は一寸うなづきしが、改めて平太郎をじろりと見ながら。

『だが取られたら泣くだらうよ。親父は何が何でも怖からうからなあ。』

と、さも輕蔑んだ調子で云ふ。これを聞いて平太郎はぢり〳〵とした顏付しつ、

『大きに御世話さま、御前に詫言を仕て貰はうとは云ひません。』

と、一句鋭く云ひ放つ。三次は頭に手を置きて、

『こりやあ謝罪ました、勘忍〳〵。權十、いよ〳〵違へねえぜ。』

といふ。傳八は好ましさうに、また今更平太の顏を見て、

『ム、、三次殿、一番食はされたな、ハ、、。』

と笑ふ。やがて助作は勝負にかゝり、平太は片唾を呑んで見つむ。五六番の爭ひに危き時もありしが、助作の運直りて幾干錢を自己が手に殘せし上、十錢の利を添へて平太に還しぬ。其十錢の無からましかばいざ知らず、それを手にせしより此錢は無きものとの心の捌きに自ら一番試みる氣の生じて、身の末はいざ何となるとも白銀一片投げ出して、

『さあ、乃公も覺えた、一と注つたぞ。』

＊　＊　＊　＊

『乾度だね。』
『乾度だ、乾度だ。取れないことが何有るもんだ、今の通りに中るだもの。』
『そんならお前に貸してあげやう。勘さんのをぢさんから家の御父さんに渡して呉れろつて云はれた御金だが、貸してあげるから爲て御覽。其代り乾度返してお呉れ。』
助は喜悦意外に出しが、餓ゑたるものは食をなし易して、
『いゝか、借りても、大事ないか。』
と既手を出しさうになりながら空質問に質す。平太郎は笑ひながら、
『だつて、乾度勝てるのては無いか。』
といひつゝ懷中から紙づゝみの銀貨を取り出して助に渡したり。額は僅に二十錢一枚十錢一枚なりし。主人の傳八此態を見て、
『流石に惡くなつたと云つても今でも大盡の家の跡取りだ、なあ助作。』
と云へば、助作は嬉しさに挨拶も無く頭のみ平太郎の前に下げ居たり。權十も振りかへつて此を見つ、
『坊ちやん御止なさりやあ好いに。其奴は下手くそで取られて仕舞ひます。だが何樣せ坊ちやんのものにやあなりさうも無い御家のものだ。いつそそれも宜いか知れねえ。なあ三次、氣象に丈のある

と獨り語す。
『をぢさん、をぢさん。』
と、また呼びかくる。やうやく心づいて、助は
『何だえ、何か用かえ。』
と面白くも無さゝうに、慳貪に云ひしが、僅に氣をかへて言葉やさしく、
『眠くなつたら眠るがいゝだ。始終火を燒いて居るから寒い氣づかひは無い。』
と、小兒に怒を移すでも無しと思ひてか、何氣無く云ひしが、先刻のやうに力の入つたる語調にはあらず、談話仕かけらるゝをも今は好まぬ樣子なり。平太郎はそれに頓著無く、
『をぢさん、眞實にお前は勝てるかえ。』
と問ふ。助作口には煙管を放さず眼には彼方の勝負を放さで、たゞ口だけに、
『左樣さ、負けると思つてかゝる奴は無いだ。少しでも有れば權十が身を打彈いて遣るに譯は無いのだ。』
といふ。其尾について直にまた問ふ言葉には力籠もれり。
『屹度勝てるかえ。』
『ム、、勝てるだ。』

「まがつて居る乃公がのより、三公のを借りるだ。三公少し貸してやるまいか。」

と外らす。三公は苦い顔して、

「物無しに貸すのは御免だ。」

と冷かにいふ。長次新六などいふに、貸して貸してと頼めど、誰一人貸して呉るゝものも無し。權十は此處ぞと、

「ざまあ見ろ頓痴奇め。頓痴奇と云つたが何樣したんだ。」

と、動かぬところを罵る。此間勝負は絶えず行はれて取るものは取り、取らるゝものは取られしが、權十が其一言を放ちし後は助に關ふものだに無く、各自夢中になりて運の强き弱きを爭ふ。勝負には負けたり、酒には醉ひたり、せめてもの心やりに、少しの大言を云ひ居りしをさへ取つて押へられて罵られたり、さらぬだに老いたる酒徒の心激し易ければ助作今はまことに涙組みて、

「あゝ、錢が少しあれば。少しあれば、少しでもあれば。」

と繰返して獨語す。平太郎は忽然口を開きて、ひそかに助が袖をひきながら、

「をぢさん、をぢさん。」

と小聲にて皆に知れぬほどに云ふ。助は猶心もつかず、

「少し。少しても。えゝ、少しでも。」

『やかましい哩、默つて居ろ、頓痴奇め。』

と云ふ。助は先刻より權十を憎く思へば、

『何が頓痴奇だ。まがり屋め。乃公はまがつたて怒るやうなことは仕ないだ。何の生意氣な馬鹿烏め。』

とやりかへす。

『馬鹿烏たあ何だ、頓痴奇め。それほど云ふ目が出せるならば、錢を持つて對つて來い、取つて呉れるは。』

『誰が汝に取られるものだ、此方で捲き上げて呉れるは。小二才め。』

『さあ出ろ、此塲へ。汝の口を捻り上げて呉れうは。フン、ざまあ見ろ、出たくても出られめえ。』

助は打齒して怒つたれど、一文も無きに、一眼ばかりむきて權十が面を睨めつくれば、權十は冷笑つて猶毒々しく、

『えらい爺さんだよ。此塲の錢を悉皆取るも凄じい。空注のまぐれ中りで、何をほざきやがるんだ。』

と辱しむ。こゝに至つて助は堪らず泣きさうになりながら、

『傳八殿お願ひだ、少し貸して呉れ。』

と云ひ出す。傳八も今は運惡きに、

と勢に乘つて助の言ふを、如何なこと、今度は中るまじ、と平太郎のひそかに思へるに、時の拍子といふものにてか、また其出でたる骰子の眼を見れば、こは如何に、助の言葉の如く一なり。助は譯も無く云ひちらせしなれど、時の機運にて幾度か中りしかば、平太郎は少し驚きて、此人さても巧なる賭博者なるかな、此道にも法などあるものにや、と幼き心には思ひわけ兼ねて、たゞ〳〵不思議と思ひ居たり。助も我ながら我が口まかせに云ひたることの能く中れるに、錢なき今となりては如是おもふ目の出づるに、錢わりし先刻少しも思ふ目の出でずて、可惜空拳となり果てしを、遺憾くおもふに堪へかねて、せめてもの心やりにせんとてにや、

『どうだ、小旦那、驚いただかね。乃公が云ふことは一つもはづれまい。ハヽヽ、乃公に錢さへあれば、此塲の奴等の錢を悉皆取つて仕舞ふに譯は無いだ、ハヽヽ。』

と大聲あげて笑ふ。低き鼻は笑ふごとにいよ〳〵平みわたりて、眞黄色なる齒の醜しきは、充分に榾の火の光を浴びつ異樣なる面を彌が上に異樣に見す。平太郎は不思議とおもひ疑ふのみ、答だにせず。

『今度は六だ。それどうだよ、小旦那。ほれ、また乃公が云つた通りではないか。』

またも不思議に助が言葉は中りたり。助はよろこんでいよ〳〵誇る。其聲やうやく大きくなれば、先刻より思ふ目の出でぬに心を焦りたる權十癎癪聲に、

『これが賭博といふものだよ。』

と云ふ。衆人は助の面をぢろりと睨む。平太郎は賭博と聞きて、ハッと驚き懼れしが、助の冷然におちつき拂つたる樣子に何となく心安くなりて、言葉も無く其面を見つむ。

『なあに小旦那、吃驚し無くても好いだ。こんなのは眞實の賭博では無いだ、眞實のはなか〳〵こんなものでは無いだ。これは百姓賭博といつて、賭双六も同じことだ。眞實のは骰子が二つでの、そして立派な象牙での。』

と云ひかゝる時、彼の生意氣の權は、

『下らないことを云つて聞かすな。知りも仕ない癖に、盲碌爺め。』

と叱り止む。助は眞實の博奕を能くは知らざりしや、その談は止めしが、また少時して、

『今度は那處へ注つた人が勝つか中てゝ見せやうか。ゑゑ、小旦那。五に注つたものが屹度取る。そ、それ、何樣だ小旦那。五が出たらう。』

と云ひしが、まことに此時は助の云へる如くに骰子の目出でしなり。

『今度も梅鉢だ。五だよ、五だよ。』

と助は云ふ。やがて不思議にもまた五は出でたり。

『今度は一だ。』

といひながら、少し向き直つて何事か爲始めんとす。助爺のほかは我身に關はんとするものも無ければ、もじ〳〵と仕ながら其邊の樣子を見まはすに、爐のほとりに鍋、燗德利など埒無く置きならべられしは、今しがた温飩など食ひて酒飲みたると覺しく、竹の塗箸のそこ〳〵に散り居りて、猪口の二ッ三ッ香物鉢の中に餘瀝をとゞめながら入れ捨てられたる、丼茶碗の類の積みかさねて片寄せられたる、女無き家の不しだら云ふばかり無し。人々は抑も何事をなせるやと、所在無きまゝ兒心の罪もなく見入るに、一より六までを描きたる紙の上に人々思ひ〳〵錢を置く、やがて一人は骰子を振る、骰子の上に出たる目と同じ目のところに錢置ける人は幾倍かにして取り、さらぬ人は其儘取らるるなり。取りし人の悦び顏、取られし人の本意無げなる顏、よそめにも興無きにあらねば、一心になりて差覗くに、

『どうだ、小旦那、解つたい歟。』

と彼の助爺に背を撲たれ、

『よくは解らないが、双六の疾いやうなことをして遊んで居るのだね。』

と云へば、助をはじめ衆人哄然と笑ひどよむ。助も歸りそびれたり、且は取られ果てたる所在無さに、少しづゝ酒を飲みては先刻より眺め居たりしが、此答に興を起してや、さも此中の傑物は乃公なりと云はぬばかりの面して、

に吃驚し、

『ヤア。鳩井の坊ちやん、何様なすつた。』

と問ふ。後より來れる助は平太郎を室に押上げ、したり顏して座中を見廻はし、

『しめ出しを鄕三殿が食はせたい。苛酷では無いか。他家へ泊る知慧もない兒を、こんな寒い夜に、しめ出しを食はすとは苛酷では無いか。』

と云ふ。一座は助の言葉を道理と聞けり。

『鄕三つて奴は腹が好く無えからなあ。』

と權が云ひ出せば、主人の傳八も平八郎の顏を見ながら、

『左様だ。猪太は出來たし、お清坊は死んだし、しめ出し位は食はせさうなことだ。運の惡いのは此兒だ、かはいさうに。』

といふ。平太郎は此言葉に愕然として、我が初めて今宵知りたる父母の意を此人々は疾より知れるやと不審さに堪へず。しけ〳〵と傳八の顏、權十の顏を覗き居る。權十は何氣も無き調子にかへつて、

『さあ、皆始めやうでは無いか。坊ちやん、そこいらの食物でも喫べて火にあたつて居らつしやい。睡くなつたら御睡なさい。』

『をぢさん、平太郎だよ。』
『や、平太郎ッて、鳩井の歟。』
やうやく心おちつきしと見えて近より來れるが、猶不審におもふも道理なり。
『どうしたのだ、鳩井の小旦那。エ。しめ出しを食つただとかい。やれ苛酷い郷三どんだ。おはや殿もおはや殿だ、起こしても起きないだとかい。なわに、起きても起きない振を粧つて居るだ。二人とも上滑りのいゝ腹ん中の冷い人だ。憫然に寒かつたらう。』
と親切げにいふ。家の内よりは例のどす聲にて、
『助。何を獨語云つてるだい。』
と云ふ。助は聞けども直にそれには答へで、平太郎に對ひ、
『まわ此處では寒くてならないだ。構はない、入るが好いだ。』
と、もとより戸締などはせざりし潜戸を復開け、平太郎を先に立てゝ押入るゝやうに仕ながら自己も續いて入る。
『思ひきりの惡い化物だな。』
と權十は罵りながら此方を見しが、土間と茶間との間の障子を開けたるところに悲し氣に立つて、顏いつぱいに燈の光と、爐の榾の燃ゆる光とを一時に受けたるは助ならで、鳩井の兒の平太郎なる

『助さん。誰も邪魔には仕ないだ。おとなしくして飲んで居なさい。』
と人々は口々に慰む。
『いゝや、邪魔にされるだ。どりや歸るべい。』
よろ〳〵と立上つて、危く倒れかけしさま、爐の火の光の赤きが中に明らかに見ゆ。人々は口にこそ留むれ、まことに留むるものも無し。がた〳〵と障子と戸とを明けて土間臺所の方に出でたる助作、盲目穿に草履つゝかけて、ごち〳〵と潜戸を開け立出づる。
『おやッ。寒いぞ、寒いぞ。雪が降つて居たゞか。』
と身顫して獨語す。よき便と平太郎は、
『をぢさん、をぢさん。』
と呼びかく。立止まりて今や前をまくらんとしたりし助作吃驚して二三歩逃げ退きながら、
『誰だ。をかしな聲をして嚇すのは。ゑゝ、惡いいたづらだ。』
と甚く驚きし樣子なり。
『をぢさん、わたしだよ。』
『何だ、童見のやうだな。』
と身をかゞめて闇を透かし見る。

『フン。よまいごとを吐すない、小うるさい。』
と一言に云ひ消すは彼の生意氣權十なり。
『ナニ、權十の屋根つ葺きめ。頭髮ばかり光らせ居つて男見ぶるかい。山際の後家の着滓を貰つて、旦那面してもいけないだ。』
『何をぬかしやあがる、唐變朴め。』
と權十の聲は忽地激す。
『まあ、權十。醉つてるだ、勘忍して遣れ。』
『助。野譫語つくと逐ひだすぞ。』
前の聲は細く、後の聲は主人がどす聲なり。
『ムヽ、無くなつたて衆人が邪魔にするだな。俠氣の無い手合ばかりだ。面白くも無い、乃公あ歸る。』
『勝手に歸りやあがれ。よい〳〵め。』
と罵るは權十、
『愚圖〳〵云はずと寐て仕舞へ。』
と喩すは主人、其尾について

と叫べるは主人なり。
『遣るべい。左樣だ、左樣だ。さあまた始めろ。』
と口々に叫ぶ聲色大抵は耳におぼえあり。
『まあ好いは、傳八。も少し飲んで居ろ。乃公あ詰らないは。』
と管巻調子で止めるは、文伯といふ醫者の僕、内心の慾張と、口だけの世話燒と、表面の俠氣とに、幾度と無く村内の談話の材料を作るものなるが、大醉したりと見えて言葉もしどろに、
『取られたつて愚痴をいふ助作では無いだ。邪魔は仕ないだ。傳八、も少し飮れといふだ。飮つてろと云へば、飮つてろと云ふに、えい、傳八。』
と繰返して分らぬことをいふ。
『あんだい、助。愚痴云はねえつて、それが愚痴だい。默つて獨りで飮つて居ろ、二三番も受けたら、五六錢は與るわい。』
と傳八は叱る、一座の笑聲は續いて起る。
『取られたつて衆人が左樣笑ふもので無いだ。もう衆人が酒に仕ては何樣だ、惡いこと云はないだ、取られると皆乃公が通りになるだ。』
と力めて助の辯ずるを、

年老いたる人の如き語氣もて一語は卒然其居頭より洩らさる。つゞいて
『けちな御父樣だ。』
と、卑みきりたる口氣烈しく、また一句、勢鋭く放たれぬ。聲は頭上の空に響きわひて、思ひのほかに遠くも聞えつべく闇に傳ひしが、雪の夜なれば、實際は左まで遠きに達しもせざりしなるべし。我と我が聲に驚きたる、平太郎我に反りて心づけば、我が身は村境を流るゝ小川の畔に來かゝりたり。同じ名なるに取別けて親くせる川端の平太が家は、雪の中に朦朧として、屋の棟を見せ、それに隣りて杉村わる彼方の鋤鍬鍛冶の傳八が住居も、心あてに其かとばかり見ゆ。此二軒の前を過ぐれば村の人家は絕え果てゝ、田間の一ト筋道の五六町ほどは何も無きに、平太郎つくねんと立ちとゞまる折しも、傳八が家より燈の光電火の如く洩れ射して、暗きに慣れたる眼を驚かしむ。心嬉しくてや、例の平太が家の前も急ぎ步に過ぎて、傳八が家の前に行きつきけるが、流石に戶を敲かんも遠慮なきにあらず、戶際に寄りて中の樣子を知らんとすれば、
『どうだ。一ト切り暖まつたら、また始めやうでは無いか。』
といふ皺嗄れ聲は生意氣權十とて我家にも出入りする萱屋根葺きを兼業とする小前の者なり。それに答へて醉ひたる聲大きく、
『よかつぺい。』

平常の如く猪太を中に挾みて、其左右に寢たるとおぼしき父母の我身の上につけ淺ましきこと語り合へる聲はひそやかならぬにあらねど、夜靜かなれば戶の罅隙に耳をつけたる平太は其大概を今や聞き得て、そろそろと戶際を離れしが、茫然として心暗くなり、首をたれて、何とはなしの涙にくるゝこと際涯無かりし。

かくて時刻立つをも忘れ果てつ。かしこけれども猶幼き思に沈みて猶泣ける折しも、頭上に怪しき鳥の羽音す。梟に小禽などの襲はれやしけんと、魘えながら思はず振り仰げば、風は何時しか無くなりて雲濃やかに空を掩ひ、ちらり／＼と降り出したる雪は雀の脚隱すほど疾くも地に積り居りたり。

下

平太郎今は寒さをも覺え饑をも覺え、ほと／＼堪へ難き心地すれど、復我が家の雨戶敲きて、心恐ろしき養ひ親に憐愍を乞はん氣も出でず。日頃此村にて我を愛み吳るゝ人は少からねど、我家の人だに是のやうなればと、急に怯氣つきて、那方に行きて身を囑まん心とも無く、譯無しにふらふらと、たゞ我が家のほとり厭はしさに雪ふる中を辿り去りぬ。

『厭だなあ。』

に聞えますよ。』

『関ふものか。』

『いゝえ、いけません。それよりは明日は七右衛門が詫を仕たらそれに任せて置いて、夜遊びも年頃になつて來ての事だから苛くは決して叱らぬがたゞ性の良くないことを仕て呉れるなよ、といふ位に云ふのです。さうすれば七右衛門は妾等を惡くは決して思ひません、却つて義理強い優しい養父母だと思ひます。平太が夜遊びは今のところでは彼の通り將棋をさしに勘次の宅へ行くばかりですが、年にはませた奴だし、此方で甘く仕て置けば勘次の家の酌女か何かにこだはるやうになるのは屹度來年の中に在ることゝ。其時になつて、何樣も憫然だけれども仕方が無いから出す、平太が持參よりは平太が遣つて仕舞つた高が多い、といふ工合にたゝき出して、それから此猪太に跡を遣れば、點の打ちどころはないでせう。一年か半年遲くなるだけの事です。』

『ム、、それも宜いなあ。だが、それなら何故先刻汝は彼奴を入れて遣らなかつた。』

『だつて一日でも早く七右衛門になり誰になり平太が夜遊びをして更けるまで家へも歸らないといふことを知らせて置く方が後になつて利くことになるではありませんか。』

『ム、、それも左樣だ。それにしても彼奴が將棋をおぼえ込んで妙に強いのが、彼奴の破滅のたねになるのだ。妙な譯のものだ、ハヽヽ。何が仇になるも知れないものだ。』

ですから、爺に口をきいて貰ひませうよ。』
『ム、、屹度左様するだらうは。』
『左様したら那様なさる。』
『七右衛門が何といつても、今から夜遊びを仕て他所へ宿つて來るやうではたゞは置けぬ、と散々に叱つて家へ入れない分のことだ。左様すれば七右衛門めが源左衛門のところへ持ち込まうは。そこで源左衛門の世話で貰つたものだから源左衛門の手に返すばかりだ。平太に婿すつもりだつたお清は居ず、平太が不身持だから離縁するといふのに故障の云ひ手は無い。源左衛門は既老耄れて居る、此方で強く出れば云ふなり次第になるに違ひない。平太の實家は死絶へて理屈を捏るものは無いから何とでもなる。』
『たつた一ト晩家を明けた位で平太を出すんでは、彼奴の持つて來たものは、返すとするのでせうね。』
『彼奴の持參金で買つた一町の田と三町の山とをか。』
『それのことです。』
『馬鹿なことを云へ。誰が返すものか。』
『それでも、たつた一ト晩家を明けた位では、出す段になつて左様するのは此方が少し「あこぎ」

此度は家を離れかゝりしが、家の一方は籔離、他の三方は農家の格よきものゝ常とて、シヘイ木と云ふ松欅榎などの大なる立樹の折廻して列べ植ゑられたるが、闇の中にも猶ひとしほ黒く見えて、ことさら欅の梢に風の音ざう／＼と凄じく、雲薄きかたに力無くもそれかとばかり星の光るさへ淋しさを添ふるに、くさめ一つして平太郎立止まり、

『那處へ行くといつて今頃宿めて貰はうとも云へず、アヽもう一時過ぎか知らん。お父さんも母さんもわんまり酷い。いくら猪太が可愛いと云つたつて此樣な目に合はせて、しめだしを食はせて呉れなくつてもよからうに。アヽ、眞實の御父さん母さんなら此樣なめにも合ふまいに。』

と愚痴を云ひながら、初に立ち寄りしところに復立ち歸り、今は戸をも敲かず、人をも呼ばず、庇廂を受けたる外柱によりて、默然と物を思ふ。例の高き梢に水の音を遠く聞く如く聞こゆる風の音のするほかには耳に入るもの一つだに無く、雪にても催すかと見ゆる空の死せる如く靜かなるに、少時して、不圖心づけば、那處にか人の囁く聲するやうなり。これはと疑惑起りて、猶よく心をつくるに聲は戸の内に在りて、いとひそやかに、正しく養父養母の語り合ふなり。

『平太は既ほんとに那處へか行きましたらうか。』

『左樣さ、仕方が無いから七右衛門爺のところへでも泣き込んだらうさ。』

『明日の朝、七右衛門を賴んで一緒に歸つて來ますよ。齡は行かないでも既十七ですし、小怜悧な奴

眠りつきたるが如く挨拶も無し。少し心焦れてか、また雨戸をごと〳〵と云はせて、』『母さん、母さん。開けて下さい、母さん。寒くつて堪りません、母さん。』と聲も次第に大きくして呼べど返辭なし。雨戸の罅隙より内を覗ひ、また少時して其の罅隙に口をつけて、幾度か呼べども、答のなきのみか、頓て男の鼾の聲戸内より洩れ來れり。

『仕樣が無いなあ。』

と獨語して男は其處の庇廂下を立ち去り、大きなる其家について臺所の方に廻り、土間臺所に直に接きたる一室とは、窓の模樣にて、それと知るゝところに寄り近き、手を伸ばして高窓の戸を指もてこと〳〵と敲きつ、

『石藏、石藏。氣の毒だが起きて呉れ、オイ石藏。那處か開けて呉れ、石藏、オイ、オイ。エヽ、よく睡たなあ、睡入り端でも此位呼んだら醒めさうなものだになあ。』

と眼窹めて呉れぬに歎息しながら、唐辛子を小繩もて吊りつけある窓の竹に縋りて頸を伸ばし、内の動靜を覗へば、これは全く睡入りたるとおぼしく快げに鼾聲せり。

『オイ、石藏、起きて呉れないかなあ。オイ。オイ。オイ。石藏。』

と思ひ切つて聲を大きくして呼べど、力業を終日爲しての睡入端と見えて、起き出づべき樣子も無し。藪一つ隔てたる隣家の睡り醒まさんほどの聲出さんことは憚りてや敢へてせず。うろ〳〵と

と云ふ。途端に内よりは前より少し大きく、且は前より圭角の立ちたる語氣にて、

『馬鹿め、誰だといふに。』

と罵る。今は我が名を云はねばならずと思ひたりと見え、是非無げに、

『平太郎でございます。御父様御免なさいまし、つい遲くなりました。』

といふ。如何にも其語氣といひ聲の顫へたるさまといひ、全く自己の罪を認めて、悔いもし謝罪もするやうに聞ゆ。

『ム、、平太郎か、用事なら明日にしてくれ。』

と戶内の人の云へる語氣は冷かにして、戶外の人に對しての言葉ともおぼえられぬほどなり。たゞ先刻の如く面倒なりと思へるらしき氣味合は無けれど、其氣味合すら無きは、いよ〳〵放たれたる其言葉を冷かなるものと聞き做さしめぬ。

『いゝえ。川端の平太郎ではございません。家の平太郎でございます。』

返辭はまた更に聞こえずなりたり。

『どうか御開けなすつて。』

戶内は靜まりかへれり。

『まことに濟みませんてした、恐れ入りますが、どうか此戶を。』

夜の雪

上

『だ、だれだい。』

といふ聲は低けれど錆を帯びて重き調子なるに、ことさら面倒なりとおもへるらしき氣味合をさへ交へたれば、闇に響きて冬の夜の寂靜を破りたり。

『わたくしです。どうか御開けなすつて。』

答へたる聲は問へる聲よりも一ト入低けれど、清みて、やさしく、若し。

『どうか御開けなすつて。』

と戸内の人の返辭無きに、若き聲は復繰り返されしが、此度は少し顫を帯びたり。

『だれだといふに。』

『わたくしです。遲くなりまして濟みませんでした、どうか御開けなすつて。』

また返辭の絶えたるに、雨戸を少しごと〳〵と云はせて、

『どうも惡うございました、御開けなすつて下さいまし。』

は、子を思はざる人のあらんや。但し欲樂の滿足を與へ榮華の十分を享けしむるは、木葉を與へて兒の啼きを賺かす其にも增して愚のことなり。世を捨つる人がまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ、たゞ幾重にも御佛を賴み玉へ、心留むべき世も侍らず、南無佛々々々、と云ひ切りて口を結びて復言はず。月はやがて沒るべく西に廻りて、御堂に射し入る其光り水かとばかり冷かに、端然として合掌せる二人の姿を浮ぶが如くに御堂の闇の中に照し出しぬ。

（完）

きて在らんは拙るべし。もとより女の事なれば世に榮えん願ひも左までは深からず、親の御在さればば身を重んずる念もやゝ薄し。あながち御佛を賴みまゐらせて淨土に生れんとにはあらねど、如何なる山の奥にもありて、草の庵の其内に、荊棘を簪とし、粟稗を炊ぎてなりと、たゞ心淸しく月日經ばやなどゝ思ひたることは幾度と無く侍り。睦ぶべき兄弟も無し、語らふべき朋友も持たず、何に心の殘り留まるところも無し。養はれ侍りし恩惠に答へまゐらすること無きは聊か口惜けれど、大叔母君の現世安穩後生善處と必ず日々に祈りて酬ひまゐらせん。又、情ある人のたゞ一人侍りしが、何と申し交したることも無ければ、別れ〳〵になるとも怪しうはあらず、雲は舊に依つて白く、山は舊に依つて靑からんのみなり。全く世をば思ひ切り侍りぬ。とく導師となりて剃度せしめ玉へ。と雄々しくも云ひ出でたれば、其心根の麗せきに愛でゝ、我また雄々しくも丈なる烏羽玉の髮を落して色ある衣を脫ぎ棄てさせ、四弘誓願を唱へしめぬ。や、何と仕玉へる、泣き玉ふか、淚を流し玉ふか、無理ならず。菩提の善友よ、泣き玉ふ歟、嬉しさにこそ泣き玉ふならめ。淨土の同行よ、落淚あるか、定めし感淚にこそ御坐すらめ。おゝ、餘りの有難さに自分もまた淚聊か誘はれぬ。さて美しき姬は亡せ果てたり、美しき尼君は生り出で玉ひぬ。靑々としたる寒げの頭、鼠色の法衣、小き數珠、珠勝なること申すばかり無し。高野の別所に在る由の菩提の友を訪はんとて飄然として立出で玉ひぬ。其後の事は知るよし無し。燕の忙しく飛ぶ、兎の自ら剝ぐ、親は皆自ら苦む習なれ

も左のみ望まじ、火坑に墜つるも何かわらん。俗に還りて女を叔母より取り返さんと思ひしことも一度二度ならずありたりき。然れども流石年來賴める御佛に、離れまゐらせんことも影護くて、心と心との爭ひに何となすべき道を知らず。幼きより賴みまゐらせたる此地の御佛に七夜參の祈願を籠めしも女の上の安かれとおもふ爲ばかり。恰も今宵滿願の折から圖らず御眼にかゝりて、胸には此事あり此念あるに、情無かりし君が往時の家を出でたまひし時の御光景まで一時に眼に浮み來りしかば、思へば女が四歲の年、振分髮の童姿、罪も報も無き顏に愛度なき笑みの色を浮めて、父上父上と慕ひ寄りつゝ、縋りまゐらせたるを御心強くも、椽より下へと荒らかに蹴落し玉ひし其時が、女の憂目の見初なりし、と思ふにつけても悲さに恨めしさゝへ添ふ心地、御なつかしさも取り交ぜて、文も分かたずなりし淚の抑へ難かりしは此故なり、と細々と語れば西行も、數度眼を押しぬぐひしが聲を和らげていと靜に、云ひたまふところ皆其理あり。たゞし女の上の事は未だ知らずに御在と見えたり、此の五日ほど前の事なり。我みづから女を說き諭して、旣に火宅の門を出でゝ法苑の内に入らしめ終んぬ。聊か聞くところありしかば眼前の迍邅を緣として、身後の安樂を願はせんと、たゞ一度會ひて言ひしに、親羞しき利根のものにて、宿智にやあらん、其言ふところ自ら道に協へる節あり。父上旣に世を逃れ玉ひぬ、おのれも御後に從はんとこそ思へ。世に百歲の夫婦も無し、なにぞ一期の恩愛を說かん。たとひ思ふこと叶ひ、望むこと足りぬとも、娟みを蒙り羨を惹

つけ、嗚呼我が子はと思ひ出でゝ、木の片、竹の端くれと成り極めたる尼の身の、我が身の上は露思はねど、かゝる父を持ち母を持ちたる我が子の果報の拙さを可哀と思はぬことも無し。況して此頃の噂を聞き、又餘所ながら覗もすれば、心に春の風渡りて若木の花の笑まんとする戀の山路に悩める娘の、女の身には生命なる生くる死ぬるの岐れにも差し掛りたる態なる上、生の子の愛に迷ひ入りたる頑凶の老婆に責められて朝夕を經る胸の中、父上御坐さば、母在らば、と親を慕ひて血を絞る涙に暮るゝ時もある躰、親の心の迷はずてやは。打捨て置かば女は必ず彼方此方の悲さに身を淵河にも沈めやせん。然無くも逼る憂さ辛さに終には病みて倒れやせん。御佛の道に入りたれば名の上の縁は絶えたれど、血の聯續は絶えぬ間。親なり、子なり、脈絡は牽く。忘るゝ暇もあらばこそ。晝は心を澄ませて御佛に事へまつれど、夜の夢は女のことならぬ折も無し。若し其儘に擱いて哀しき終を餘所々々しく見ねばならずと定まらば、佛に仕ふる自分は、禽にも獸にも羞しや。たとへば來ん世には金の光を身より放つとも嬉しからじ。思へば御佛に事ふるは、本は身を助からんの心のみにて、子にも妻にもいと酷き鬼のやうなることとなりけり。爽快には似たれども、自己一人を蓮葉の清きに置かん其爲に、人の憂きめに眼も遣らず、人の辛きに耳も假さず、世を捨てたればと一口に、此世の人のさま／＼を、何ともならばなれがしに斥け捨つるは卑しきやうなり。何とて尼にはなりたりけん、如何にもして女と共に經るべかりしに、鈍くも自ら過ちけるよ、今は後世安樂

せきまでの振舞を爲る折多しと聞く。旣に御佛の道に入りたまひたれば、我には今は子ならずと君は仰すべけれど、其君が子はいと美しう才もかしこく生れつきて、加之美しく才かしこくして位高き際の人に思はれながら、心の底には其人を思はぬにしもあらざるに、養はれたる恩義の桎梏に情を枉げて自ら苦み、猶其上に道理無き呵責を受くる憫然を、君は何とか見そなはす。棄恩入無爲の偈を唱へて親無し子無しの桑門に入りたる上は是非無けれども、知つては魂魄も煎らるゝ思ひに、夜毎の夢も安からず。いと恐れあることながら、此頃の亂れに亂れし心からは、御佛の御敎も、餘りに人の世を外れたる、酷き掟なりと聊かは御恨み申すこともあるほど。子といひながら子と云へねば、親にはあれど親ならぬ、世の外の人、內の人、知らぬ顏して過すをば、一旦佛門に入りしものゝ行儀とするも理無しや。春は大路の雨に狂ひ小橋の陰に翻る彼の燕だに兒を思ふては日に百千度巢に出入りす。秋の霜夜の冷えまさりて草野の荒れ行く頃といへば、彼の兎すら自己が毛を咬みて挘りて綿として風に當てじと子を愛しむ。それには異りて我々の纔に一人の子を持ちて人となるまで育てもせず、兒童の間の遊びにも片親無きは肩窄る其憂き思ひを四歲より爲せ、六歲といふには繼しき親を頭に戴く悲みを爲せ、雲の蒸す夏、雪の散る冬、暑さも寒さも問ひ尋ねず、山に花ある春の曙、月に興ある秋の夜も、世にある人の姬等の笑み樂しむには似もつかず味氣無う日を送らせぬる其さへ旣に情無く、親甲斐の無きこととなれば、同じほどなる年頃の他家の姬なんどを見るに

しがため御疑を得たりしなり。其所以は他ならぬ娘の上、深く御佛の敎に達して、宿命業報を知るほどならば、是も亦煩ひとするに足らずと悟りてもあるべけれど然は成らで、ほと〳〵頭の髮の燃え、胸の血の凍るやうに明暮惱むを、君は心強くまします共何と聞き玉ふらん、聞き玉へ。娘は九條の叔母が許に、養ひ娘といふとにて叔母の望むまゝに與へしが、叔母には眞の娘もあり。母の口よりは如何なれど、年齡こそ互に同じほどなれ眉目容姿より手書き文讀む事に至るまで甚く我が娘は叔母の娘に勝りたれば、叔母も日頃は養ひ娘の賢さ可愛さと、生の女の自然なる可愛さとに、孰れ優り劣り無く育てけるが、今年は二人ともに十六になりぬ。髮の艶、肌の光り、人の娟み心を惹くほどに我子は美しければ、叔母も生したてたるを自が誇りにして、せめて四位の少將以上ならでは得こそ嫁すまじきなど云ひ罵り、おのが眞の女をば却つて心にも懸け居ざるさまにもてあつかひ居たりしが、右の大臣の御子某の少將の、圖らずも我が女をば垣間見玉ひて懸想し玉ひしより事起りて、叔母の心いと頑兇になり、日に〳〵口喧しう嘲み罵り、或時は正なくも打擲き、密に調伏の法をさへ由無人して行はせたる由なり。某の少將と云へるは才賢く心性誠ありて優しく、特に玉を展べたる樣の美しき人なれば、自己が生の女の婿がねにと叔母の思ひつきぬるも然るとながら、其望の思ふが儘にならで、飾り立てたる我女には眼も少將の遣り玉はざるが口惜しとて養ひ娘を惡くもてあつかふ愚さ、酷さ。昔時の優しかりしとは別のやうなる人となりて、奴婢の見る眼もいぶ

にてもあれ君に遇ひまゐらせなば、君の家を出て玉ひし後の我が上をも語りまゐらせて、能くぞ浮世を思ひ切りぬる、との御言葉をも得んとこそ日比は思ひ設け居たれ。別れたてまつりし時は今生に御言葉を玉はらんことも復有るまじと思ひたりしに、夢路にも似たる今宵の逢瀬、幾年の心あつかひも聊か本意ある心地して嬉しくこそ、と細々と述ぶ。折から燈籠の中の燈の、香油は今や盡きに盡きて、やがて熄ゆべき一ト明り、ぱつと光を發すれば、朧氣ながら互に見る雑彩無き佛衣に裹まれて、蕭然として坐せる姿、修行に窶れ老いたる面ざし、有りし花やかさは影も無し。これが往時の妻か、夫か、心根可愛や、懐かしや、と我を忘れて近寄る時、忽然ふつと燈は滅して、一念未生の元の闇に還れば西行坐を正うして、能くこそ思ひ切り玉ひたれ。入道の縁は無量にして、順逆正傍のいろ〳〵あれど、たゞ往生を遂ぐるを尊ぶ。往時は世間の契を籠め、今は出世間の交りを結ぶ。御身は我がための菩提の善友、淨土の同行なり、悦ばしや。但し然までに浮世をば思ひ切りたる身としては、懐舊の情はさることながら、餘りに涙の遣る瀬無くて、我を恨むかとも見えし故、先刻のやうには云ひつるなり。既に世の塵に立交らで、法の門に足踏しぬる上は、然ばかり心を惱ますべき事も實は無き筈ならずや、と最物優しく尋ね問ふ。慰められては又更に涙脆きも女の習ひ。御疑ひ誠に其理由あり、もとより御恨めしう思ひまゐらする節もなし、御懐しうは覺え侍れど、それに然ばかりは泣くべくも無し。御聲を聞きまゐらすると齊しく、胸に湛に湛し涙の一時に迸り出

心を安らかにして語り玉へ、昔は昔、今は今、繰言な露宜ひそ、何事も御佛に賴み玉へ、心留むべき世も侍らず、と諭せば女は淚にて、さては猶我を世に立交らひて月日經るものと思したまふや、燈火暗うはあれどおほよそは姿形にも猜し玉へ、君の保延に家を出でゝ道に入り玉ひしより、宵の鐘曉の鳥も聞くに悲く、春の花秋の月も眺むるに懶くて、片親無き兒の智慧敏きを見るにつけ胸を痛め心を傷ましめしが、所詮は甲斐無き嗟歎せんより、今生は擱き後世をこそ助からめと、娘を九條の叔母に賴みて、君の御跡を追ひまゐらせ、同じ御佛の道に入り、高野の麓の天野といふに日比行ひ居り侍るなり。扨も君を放ち遣りまゐらせて、御心のまゝに家を出づるを得さしめ奉りし往時より、我が子を人に預けて世を捨てたる今に至るまで、いづれか世の常としては悲しきことの限りならざらん。別れまゐらせし歲は我が齡、僅に二十歲を越えつるのみ、また幼兒を離せしときは、其が六歲と申す愛度無き折なり。老いて夫を先立つるにも、泣きて泣き足る例は聞かず、物言はぬ嬰兒を失ひても、心狂ふは母の情。それを、行末長き齡に、君とは故も無くて別れまゐらせ、可愛き盛りに幼兒を、見棄てつる悲しさは如何ばかりと覺す。されど斯ばかりの悲しさをも、女の胸に堪へ〳〵て鬼女蛇神のやうに過ぎ來つるは、我が悲みを悲とせで、偏に君が歡喜を吾が歡喜とすればなるを、別れまゐらせしより十餘年の今になりて繰言も云ふものゝやう思はれまゐらせたる拙さ情無さ。君は我がための知識となり玉ひぬれば、恨み侍らざるはかりか却て悅びこそ仕奉れ、彼世

響きいと冴えて神々し。御經は心に誦するとおぼしく、萬籟絶えたるに珠の音のみをたゞ緩やかに響かす。其聲或は明らかに或は幽に、或は高く、或は低く、寢覺の枕の半は夢に霰の音を聞くが如く、朝霧晴れぬ池の面に菡萏の急に開くを聞くが如く、小川の水の獨り咽ぶか、雨の紫竹の友擦れ歟、山吹匂ふ山川の蛙鳴くかと過たれて、一聲聲中に萬法あり、皆與實相不相違背と、いとをかしくも聞きなさるれば、西行感に入つて在りけるが、期したるほどの事は仕果てゝや其人數珠を收めて御佛をば禮拜すること數度しつ、やをら身を起して退らんとす。菩提の善友、淨土の同行、契を此土に結ばんには、今こそ言葉をかくべけれ、と、思ひ入て擦る數珠の音の聲すみておぼえずたまる我涙かな、と歌の調は好かれ惡かれ、西行急に詠みかくれば、彼方は初めて人あるを知り、思ひがけぬに驚きしが、何と仰られしぞ、今一度、と心を壓鎭めて問ひ返す。聞き兼ねけんと猜するまゝ、思ひ入りて擦る珠數の音の聲澄みて、と復び言へば後は言はせず、君にて御座せしよ、こはいかに、と涙に顫ふおろ／＼聲、言葉の文もしどろもどろに、身を投げ伏して取りつきたるは、聲音に紛ふかたも無き其昔偕老同穴の契り深かりし我が妻なり。厭いて別れし仲ならず、子まで生したる語らひなれば、流石男も心動くに、況して女は胸逼りて、語らんとするに言葉を知らず、巖に依りたる幽蘭の媚かねども離れ難く、たゞ露けくぞ見えたりける。西行きつと心を張り、徐に女の手を拂ひて、御佛の御前に亂がはしや、これは世を捨てたる痩法師なり、捉へて何をか歎き玉ふ、

るらん、影だに終に見するもの無し。云ふべきかたも無く靜なれば、日比焼きたる餘氣なるべし、今薫ゆるとにはあらぬ香の、有るか無きかに自然匂ひを流すも最能く知らる。かゝる折から何者にや此方を指して來る跫音す。御佛に仕ふる此寺のものゝ、燈燭を續ぎまゐらせんとて來つるにや、と打見るに、御堂の外は月の光り白々として霜の置けるが如くに見ゆるが中を、寒さに堪へでや頭には何やらん打被ぎたれど、正しく僧形したるが歩み寄るさまなり。心を留むるとにはあらざれど、何としも無く猶見てゐるに、やがて月の及ばぬ闇の方に身を入れたれば定かには知れぬながら、此御堂に打向て一度は先拜み奉り、さて靜々と上り來りぬ。御堂は狹からぬに、燈は螢ほどなり、燈の高は高し、互の程は隔りたり、此方を彼方は有とも知ず、彼方を此方は能も見得ねば、西行は只我と同じき心の人も亦有けるよと思ふのみにて打過ぎたり。彼方は固より闇の中に人あるとを知らざれば、何に心を置くべくも無く、御佛の前に進み出つ、最謹ましげに危坐りて、數度合掌禮拜なし、一心の誠を致すと見ゆ。同じ菩提の道の友なり、其心操の淺間ならぬも夜深の參詣に測り得たり。衣の色さへ辨ち得ざれば面は况して見るべくも無けれど、淨土の同行の人なるものを、呼びかけて語らばや、名も問はゞや、と西行は胸に思ひけるが、卒爾に言はんは惡かるべし、祈願の終つて後にこそと、心を控へて伺ふに、彼方は珠數を取り出して、さや〳〵とばかり擦り初めたり。針の落つる音も聞くべきまで物靜かなる夜の御堂の眞中に在りて、水精の珠數を擦る音の亮かなる

弓張月の漸う光りて、入相の鐘の音も收まる頃、西行は長谷寺に着きけるが、問ひ驚かすべき法の友の無きにはわらねど問ひも寄らで、觀音堂に參り上りぬ。さなきだに梢透きたる樹々を嬲りて夜の嵐の誘へば、はらはらと散る紅葉なんどの、空に狂ひて吹き入れられつ、法衣の袖にかゝるもあはれに、又佛前の御燈明の目瞬しつゝ萬般のもの〻黑み渡れるが中にいと幽なる光を放つも趣きあり。法華經の品第二十五を聲低う誦するに、何となく平時よりは心も緖まりて、身に浸みわたる思ひの爲れば、猶誠を籠めて誦し行くに、天も靜けく、地も靜けく、人も全く靜まりたる、時といひ、處といひ、相應して、我耳に入るは我聲ながら、若くは隨喜佛法の鬼神なんどの聲を和せて共に誦する歟と疑はるゝまで上無く殊勝に聞こえわたりぬ。特に參りたる甲斐はありけり、菩薩も定めしかゝる折のかゝる所作をば善哉として必ず納受し玉ふなるべし。今宵の心の澄み切りたる此の淸しさを何に比へん。あまりに有り難くも尊く覺ゆれば、今宵は夜すがら此御堂の片隅になりと趺座なして、曉天がたに猶一ト度誦經しまゐらせて扨其後、香華をも淨水をも供じて罷らめと、西行やがて三拜して御佛の御前を少し退り、影暗き一ト隅に身を據ち据ゑ、凍れる水か、枯れし木の、動きもせねば音も立てず、寂然として坐し居たり。夜は沈々と漸く更けて、風も睡れる如くになりぬ。右左に並びて立ちたりける御燈明は一つ消え、また一つ消えぬ。今はたゞいと高き吊燈籠の、光り朦朧として力無きが、夢の如くに殘れるのみ。此寺の僧どもは寒氣に怯ぢて所化寮に爐をや圍みてあ

事に遠ざからんかた賢かるべしとて、そこに一日、かしこに二日と、此御佛彼御佛の別ちも無く、それ〳〵の御堂を拜み巡りては、或は祈願を籠めて參籠の誠を致し、或は和歌を奉りて讃歎の意を表し來りけるが、佛天の御思召にも協ひけん、聊か冥加も有りとおぼしく、幸に道心のほかの他心も起さず、勝縁を妨ぐる魔縁にも遇はで、終に今日に及ぶを得たり。既往の誠に欣ぶべきに、將來の猶頼まゝほしく、長谷の御寺の觀世音菩薩の御前に今宵は心ゆくほど法施をも奉らん、と立出でたるが、夜々に霜は募りて樹々に紅は增す神無月の空のやゝ寒く、夕日力無く舂きて、晩れし百舌の聲のみ殘る、暮方のあはれさの身に浸むことかな。見れば路の邊の草のいろ〳〵、其とも分かず皆いづれも同じやうに枯れ果てゝ崩折れ偃せり。珍らしからぬ冬野のさま、取り出でゝ云ふべくはあらねども、折からの我が懷に合ふところあり。情を結び詞を束ねて、歌とも成らば成して見ん、おゝそれよ、さま〳〵に花咲きたりと見し野邊のおなじ色にも霜がれにけり。嗚呼我人とも終には如是、男女美醜の別も無く、同じ色にと霜枯れんに、何の翡翠の髮の狀、花の笑ひの顏か有らん。まして夢を彩る五欲の歡樂、幻を織る四季の遊娛、いづれか虛妄ならざらん。たゞ勤むべきは菩提の道、南無佛、南無佛、と觀じ捨てゝ、西行獨り路を急ぎぬ。

其二

ざるは愚骨なるべし。古の人の、麻の袂を山おろしの風に飜し、法衣の裾を野路の露に染めつゝ、東西に流浪し、南北に行きかひて、幾千の坂に谷に走り疲れながら、猶辛しともせざるものは、心を靈地の靈氣に涵し、念を淨業の淨味に育みて、正覺の曉を期すればなり。鏡に對ひては髮の亂れたるを愧ぢ、金を懷にすれば慾の亢るを致す習ひ、善くも惡くも其境に因り其機に隨ひて凡夫の思惟は轉ずるなれば、たゞ後の世を思ふものは、眼に佛菩薩の尊容を仰ぎ、口に經陀羅尼の法文を誦して、夢にも現にも市鄽榮花の巷に立入ること無く、朝も夕も山林閑寂の郷に行ひ濟ましてあるべきなり。首を回らせば徃時をかしや、世の春秋に交はりて花には喜び、月には悲み、由無き七情の往來に、泣きみ笑ひみ過ごしゝが、思ひたちぬる墨染の衣を纏ひしより今は既指を摟ふれば十あまり三歳に及びて秋も暮れたり。修行の年も漸く積もりぬ。身もまた初老に近づきぬ。流石心も澄み渡りて亂るゝことも少くなり、舊緣は漸く去り盡して胸に纏はる雲も無し。忽然として其初一人來りし此娑婆に、今は孑然として一人立つ。待つは機の熟して果の落つる我が命終の時のみなり。あら快の今の身よ、氷雨降るとも雪降るとも、憂を知らぬ雲の外に嘯き立てる心地して、浮世の人の厭ふ冬さへ、却つてなか／＼をかしと見る此の我が思ひの長閑さは、空飛ぶ鳥もたゞならず。されど禪悅に着するも亦是修道の過失と聞けば、ひとり一室に籠り居て驕慢の念を萌さんよりは、歩を處々の靈地に運びて、寺々の御佛をも拜み奉り、勝緣を結びて魔緣を斥け、佛事に勤めて俗

て此世は修羅道となり、我が眷屬となるべきぞ。あら心地快や、と笑ひたまふ御聲ばかりは耳に殘りて、放たせ玉ふ赤光の谷々山々に映りあひ、天地忽ち紅色になるかと見る間に失せ玉ひぬ。西行はつと我に復りて、思へば夢か、夢にはあらず。おのれは猶かつ提婆品を繰りかへし〳〵讀み居たるか。其讀續き我が口頭に今も途絶えず上り來れり。

彼一日

其一

賴み難きは我が心なり、事あれば忽に移り、事無きもまた動かんとす。生じ易きは魔の緣なり、念を放にすれば直に發り、念を正うするも猶起らんとす。此故に心は大海の浪と搖ぎて定まる時無く、緣は荒野の草と萌えて盡くる期あらねば、たま〳〵大勇猛の意氣を鼓して不退轉の果報を得んとするものも、今日の緣にひかれて舊年の心を失ふ輩は、可惜舟を出して彼岸に到り得ず、憂くも道に迷ひて穢土に復還るに至る。されば心を治むるは靈地に身を寘くより好きは無く、緣を遮るは淨業に思を傾くるを最も勝れたりとなす。木片の藥師、銅塊の彌陀は、皆これ我が心を呼ぶの設け、崇み尊まぬは烏滸なるべく、高野の蘭若、比叡の佛刹、いづれか道の念を勵まさゞらむ、參り詣ら

ひ、おのれが業をあさましく拙かりしと悔い歎きて、心の水の淺ければ胸の蓮葉いつしかと開けんことは難けれど迦る〳〵も闇き世を出づべき道に入らんとて、天へと伸ぶる呉竹の直なる願を獨り立て、他し望みは思ひ絶つ其麻衣ひきまとひ、供ふる華に置く露の露散る曉燒く香の煙の煙立つ夕を疾も來れと待つ間、一字三禮妙典書寫の功を積みしに、思ひ出づるも腹立たしや、たゞに朕が現世の事を破りしのみならず、また未來世の道をも妨ぐる人の振舞。善惡も邪正もこれ迄なりと、入つたる此道、得たる此果。今は金輪崩るゝとも、鐵圍劈裂け破るゝとも、思ふ事果さでは得こそ止まじ。眞夏の午の日輪を我が眼の中に壓し入れらるゝは能く忍ぶべし、胸の恨を棄てなんことは忍ぶべからず。平等の見は我が敵なり、差別の觀は朕が宗なり。佛陀は智なり、朕は情なり。智水千頃の池を湛へば、情火萬丈の燄を擧げん。拔苦與樂の法可笑や、滅理絶義の道こゝに在り。朕が一脚の踏むところは、柳紅に花緑に、朕が一指のそれと指すところは、烏も白く鷺も黑し。天死せしむべく、地舞はしむべく、日月暗からしむべく、江海涸れしむべし。頑石笑つて、且歌ひ、枯草花さいて、しかも芬る。獅子は美人が膝下に馴れ、大蛇は小兒の坐前に戲る。朔風暖かにして、絳雪香しく、瓦礫光輝を放つて、盲井醇醴を噴き、胡蝶聲あつて夜深く相思の吟をなす。聾者能く聞き、將者能く見る。劍戟も折つて食ふべく、鼎鑊も就いて浴すべし。世界はほと〳〵朕がまゝなり。黄身の匹夫、碧眼の胡兒、烏滸の者ども朕を如何にか爲し得べき。心とめてよく見よや。見よ。やが

十三身。三世十方恒河沙數の諸佛菩薩に、妄執煩惱無きものやある。妄執煩惱無きものやある。何ぞ瞿曇が舌長なる四十餘年の託言繰言、我尊しの冗語漫語、我をば瞞き果すに足らんや。恨みは恨み、讐は讐、復さでは我あるべきか。今は一切世間の法、まつた一切世間の相、森羅萬象人畜草木、悉皆朕の敵なれば、打壞さては已むまじきぞ。心に染まぬ大千世界。見よ〳〵、火前の片羽となし、風裏の纖塵と爲して呉れむ。佛に六種の神通あれば、朕に千般の業通あり。ありとあらゆる有情含識皆朕が魔界に引き入れて、朕が眷屬となし果つべし。汝が述べたるところの如きは、圓顱の愚物が常套の談、醜し、醜し、將歸り去れ。猢猻が瞋を賺かす胡餅の一片、朕を欺かんとや、迂なり、迂なり。想ひ見よ、そのかみ朕此讃岐の涯に來て、沈み果てぬる破舟の我にもあらず歲月も、空しく杉の板葺の霰に悲しき夜を泣きて、風につれなき日を送り、心くだくる荒磯の浪の響に霜の朝獨り寢覺めし凄じさ。思ひも積る片里の雪に燈火の瞬く宵、たゞ我が影の情無く古びし障子に浸み入るを見つめし折の味氣無さ。如何ばかりなりしと汝思ふや。歌の林に人の心の花香をも尋ね、詞の泉に物のあはれの深き淺きをも汲みて分くる敷島の道の契りも薄からず結びし汝なれば、嚴しく吹きし初秋の嵐の風に世を落ちて、日影傾く西山の山の幾重の外にさすらひ、初雁音も言づてぬ南の海の海遙なる離れ島根に身を詫びて捨てぬ光は月のみの水より寒く庇廂洩る住家に在りし我が情懷は、推しても大概知れよかし。されば往時は朕とても、人をば責めず身を責めて、佛に誓ひ世に誓

遍虚空の鬼刹、護法の善神ならぬも無しと申す。御敵やそも那處にかある。詮ずるところ、怨親の二つながら空華の假相、喜怒もろともに幻翳の妄現。雪と見て影に櫻の亂るれば花のかさ被る春の夜の月が、まことの月にもあらず。水無くて凍りぞしたる勝間田の池あらたむる秋の夜の月が、眞の月にもあらじ。世間一切の種々の相は、まことは戲論の名目のみ。眞如の法海より一瓢の量を分ち取りて、我執の寒風に吹き結ばせし氷を我ぞと着すれば、熱湯は即仇なるべく、實相の金山より半谷の貲を齎し來りて、愛慾の毒火に鑄成せし鼠を己なりと思はんには、猫像或は敵たるべけれど、本來氷も湯も隔なき水、鼠も猫も異ならぬ金なる時んば、假相の互ひに亡び、妄現の共に滅するをも待たずして、當體即空、當事即了、廓然として、天に際涯無く、峯の木枯、海の音、川遠白く、山靑し。何をか瞋り、何にか迷はせたまふ。疾く、疾く、曲路の邪業を捨て、正道の大心を發し玉へ、と我知らず地を蹴つて諫め奉れば、院の御亡靈は、山壑もたじろぎ、木石も震ふまでに、凄くも打笑はせ玉ひて、おろかなり、圓位。佛が好ましきものにもあらばこそ。魔が厭はしきものにもあらばこそ。安樂も望むに足らず。苦患も避くるに足らず。何を憚りてか自ら意を抑へ情を屈めん。妄執と笑はば笑へ、妄執を生命として朕は活き、煩惱と云はゞ云へ、煩惱を筋骨として朕は立つ。おろかや汝。四弘誓願は菩薩の妄執、五時說敎は佛佗の煩惱。法藏が妄執四十八願。觀音が煩惱三

るは、一婦の毒咒に動かされて總持の才を無にせんとせし阿難陀が過失にも同じかるべき御迷ひ、御傷はしくもまた口惜く、云ひ甲斐無くも過たせたまふものかな。烈日の前の片時雨、聖智が中の御一失、疾く〳〵御心を飜へしたまひて、三趣に沈淪し四生に跉跰するの醜さを出で、一乘に歸依し、三昧に入得するの正きに依り御座しませ。宿福廣大にして前業殊勝に渡らせたまふ御身なれば、一念々頭の轉じたまふを限に、彈指轉眴の間も無く、神通の寶輅に召し、虛空を凌いで速かに飛び、眞如の淨域に到り、光明を發して長へに熾に御座しまさんこと、などか疑ひの侍るべき。佛魔は一紙、凡聖は不二。煩惱即菩提、忍土即淨土、一珠わづかに授受し了れば、八歲の龍女當下に成佛すと承はる。五障女人の法器にあらぬにだに、猶彼が如し。まして十善天子の利根に御座に、如何で正覺を成し玉はざらん。御經には、成等正覺、廣度衆生、皆因提婆達多善知識故、と說かれ侍るを、誰惜しとか思す。恐れ多けれど、そもや誰人惜しとか思す。怨敵まことは道の師なり。怨敵まことは道の師なり。眼をあげて大千三千世界を觀るに、我が皇の怨敵たらんもの、いづくにか將侍るべき。まこと我が皇の御敵たらんものゝ侍らば、瘦せたる老法師の力乏しくは侍れども、御力を用ゐさせ玉ふまでも無く、大聖威怒王が折伏の御劒をも借り奉り、迦樓羅の烈炎の御猛威にも賴り奉りて、直に我が皇の御敵を粉にも灰にも摧き棄て申すべし。さりながら皇の御敵の何處の涯にもあらばこそ。巴豆といひ、附子といふも、皆是藥。障礙の惡神毘那耶迦も本地は即毘盧沙那

爲す業ならばこそ、皆風のさすことなるを、何取り出てゝ憎むに足るべき。夫尺蠖は伸びて而も還屈み、車輪は仰いで而も亦低る。射る弓の力究まり盡くれば、飛ぶ矢の勢變り易りて、空向ける鏃も地に立つに至らんとす。此故に、欲界の六天、天高けれども報盡きては寶殿忽地に崩れ、魔王の十善、善大なればとて果究まれば業苦早くも逼る。人間五十年の石火の如くなるのみならず、天上幾万歳も電光に等しかるべし。御怨恨も復し玉ふべからむ、御忿恚も晴らさせ玉ふべからん、さて其曉は如何にして御座さんとか思す。一旦出離の道には入らせたまひたれど、斷縛の劍を手にし玉はず、流轉の途は厭はせられたりしも、人我の空をば背ひは仕玉はざりしや。何とて厶微の御事に、忌はしくも自ら躓かせたまひて、法の便りの牛車を棄て、罪の齎らす火輪にも駕さんとは思したまふ。生空を唯濫に遮し、我倒を幻炎に譬ふれば、我が瞋るなる我や夫いづくにか有る。瞋るが我とおぼすか、我が瞋るとおぼすか。思ひと思ひ、言ふと言ふ萬端のこと皆眞實なりや、詐かれば詐かしく、疑へば疑はしきものとこそ覺え侍れ。笑ひも、恨みも、はた歡びも、悲みも、夕に來ては旦に去る旅路の人の野中なる孤屋に暫時宿るに似て、我とぞ假に名を稱ぶなるもの丶中をば過ぐるのみ。いづれか畢竟の主人なるべき。客を留めて吾が主と仰ぎ、賊を認て吾が子となす。其悔無くばあるべからず。恐れ多けれど、聰明匹儔無く渡らせたまふに、凡庸も企圖せざるの事を敢て爲玉ひて、千人の生命を斷たんと瞋恚の刃を提げし央掘魔が所行にも似たらんことを學ばせらる

無く申し聞えんも聊か罪淺う思し召されつべくやと、進つて存じ寄りのほどを申し試み申すべし。御憤はまことにさる事ながら、若人嗔り打たずんば何を以てか忍辱を修めんとも承はり傳へぬ。畏れながら、ながらへて終に住むべき都も無ければ、憂き折節に遇ひたまひたるを、世中そむかせたまふ御便宜として、いよ〳〵法海の深みへ溪河の淺きに騷ぐ御心を注がせたまひ、彼岸の遠きへ此土の汀去りかぬる御迷を船出せさせ玉ひて、玉をつらぬる樹の下に花降り敷かむ時に逢はむを待ちおはす由承はりし頃は、寂然、俊成などゝも、御志の有り難さを申し交して如何ばかりか欣ばしく存じまゐらせしに、御納經の御望み叶はせられざりしより、竹の梢にあたつて流るゝ金彈の如くに御志あらぬ方へと走り玉ひ、鳴門の潮の逆風に怒つて天に滔るやうに凄じき御祈願立てさせ玉ひしと仄に傳へ承はり侍りしが、冀はくは其事の虛妄にてあれかしと日比念じまゐらせし甲斐も無う、さては眞に猶此娑婆界に妄執をとゞめ、彼兜卒天に淨樂は得ず御座ますや。訝しくも御意の然ばかり何に留まるらん。月すめば谷にぞ雲は沈むめる、嶺吹き拂ふ風に敷かれて。たゞ御胸の月明からんには、浮き雲いかに厚う鎖すとも、氷輪無爲の天の半に懸り御座して、而も清光湛寂の潭の底に徹することのあるべきものを、雲憎しとのみおぼさんは、そも如何にぞや。降れば雨となり、蒸せば霞となり、凝れば雪ともなる雲の、指して言ふべき自性も無きに、まして夏の日の峯と峙ち、秋の夕の鱗とつらなり、或は蝶と飛び猪と奔りて、緩くも急くも空行くが、おのれから

て、朕を泥犂の闇に陷しぬ、今は朕人を涙に沈ましめて、朕が冷笑の一ト聲の響の下に葬らんとす。おもひ觀よ汝。漸く見ゆる世の亂は、誰が爲すことゝぞ汝はおもふ。澤の螢は天に舞ひ、闇裏の念は世に燃ゆるぞよ。朕は、闇に動きて闇に行ひ、闇に笑つて闇に憩ふ下津岩根の常闇の國の大王なり。正法の水有らん限は魔道の波もいつか絶ゆべき。佛に五百の弟子あれば、朕にも六天八部の屬あり。三世の諸佛菩薩の輩、何の力か世にあるべき、たゞ徒に人の舌より人の耳へと飛び移り、またいたづらに耳より舌へと現はれ出てゝ遊行するのみ。朕が眷屬の闇きより闇きを傳ひ行く惡鬼は、人の肺腑に潛み入り、人の心肝骨髓に咬ひ入つて斷えず血にぞ飽く。見よ見よ魔界の通力もて、毒火を彼が胸に煽り、紅炎を此が眼より迸らせ、弱きには怨恨を抱かしめ、強きには瞋りを發さしめ、やがて東に西に黑雲狂ひ立つ世とならしめて、北に南に眞鐵の光の煌めき交ふ時を來し、憎しとおもふ人々に、朕が辛かりしほどを見するまで、朝家に酷く祟をなして天が下をば掻き亂さむ、と御勢ひ凛々しく告げたまふにぞ、西行あまりの御あさましさに、瀧と流るゝ熱き涙を、きつと抑へて恐る惶るいさゝか首を擡げける。

其六

とは口惜くも正なきことを承はるものかな。御言葉もどかんは恐れ多けれど、方外の身なれば憚り

とは尋ねずもあれ、末葉吹く嵐の風のはげしさに園生の竹の露こぼれける露の身ぞ、よく訪ひつるよ、と聞え玉ふ。あら情無や勿體なしや、さては院の御靈の猶此土をば捨てさせ玉はで、妄執の闇に漂泊ひあくがれ、こゝにあらはれ玉ひし歟、あら悲しやと地に伏して、西行涙をとゞめあへず。さりとてはいかに迷はせ玉ふや、濁穢の世をば厭ひ捨て玉ひつる事の尊くも有難くおぼえて、いさゝか隨緣法施したてまつりしに、六慾の巷にふたゝび現形し玉ふは、いとかしこくも口惜き御心に侍り。假現の此界にてこそ聖慮安らけからぬ節もおはしつれ、不堅如聚沫の御身を地水火風にかへし玉ひつる上は、旋轉如車輪の御心にも和合動轉を貪り玉はで、隔生即忘、梵塵即淨、無垢の本土に返らせ玉はむこそ願はまほしけれ。頓ては迂僧も肉壞骨散の曉を期し、弘誓の佛願を頼りて彼岸にわたりつき、樂しく御傍に參りつかふまつるべし。迷はせ玉ふな迷はせ玉ふな。唯何事も夢まぼろし。世に時めきて榮ゆるも、虛空に躍る水珠の日光により七彩を暫く放つに異ならず、身を狹められ悶ゆるも、闇夜を辿る稚兒の樹影を認めて百鬼來たりと急に叫ぶが如くなれば、得意も非なり、失意も非なり、歡ぶさへも空なれば如何で何事の實在ならんとぞ承はりおよぶ。無有寃親想、永脫諸惡趣、所詮は御心を刹那にひるがへして、常生適悅心、受樂無究極、法味を永遠に樂ませ玉へ、と思入つて諫めたてまつれば、院の御靈は雲間に響く御聲して、から〳〵と異樣に笑はせ玉ひ、おろかや解脫の法を說くとも、佛も今は朕が敵なり、涅槃も無漏も肯はじ。往時は人朕が光明を奪ひ

悋惜、象馬七珍國城妻子奴婢僕從、頭目身肉手足不惜軀命…………………日は全く沒りしほどに山深き夜のさま常ならず、天かくすまで茂れる森の間に微なる風の渡ればや樹端の小枝音もせず動きて、黑きが中に見え隱れする星の折ふしきら〳〵と鋭き光りを落すのみにて月はいまだ出てず。ふけ行くまゝに霜冴えて石床いよ〳〵冷やかに、萬籟死して落葉さへ動かねば、自然と神清み魂魄も凍るが如き心地して何とはなしに物凄まじく、尙御經を細々と誦しつゞくるに、聲はあやなき闇に迷ひて消ゆるが如く存るが如く、空にかくれてまたふたゝび空より幽に出で來るごときを、吾が聲とも他の聲ともおぼつかなく聽きつゝ、濁劫惡世中、多有諸恐怖、惡鬼入其身、罵詈毀辱我と今しも勸持品の偈を稱ふる時、夢にもあらず我が聲の響にもあらで、正しく圓位圓位と呼ぶ聲あり。

其五

西行かすかに眼を轉じて、聲する方の闇を覗へば、ぬば玉の黑きが中に朽木のやうなる光り有てる霧とも雲とも分かざるものゝ仄白く立ち迷へる上に、其樣異なる人の丈いと高く痩せ衰へて凄じく骨立ちたるが、此方に向ひて蕭然と佇めり。素より生死の際に工夫修行をつみたる僧なれば恐ろしとも見ず。圓位を呼ばれしは抑何人にておはすやと尋ぬれば、嬉しくも詣で來つるものよ、我を誰

く捨てむと競ひあへりしも、今かくなりたまひては、皆對岸の人異舟の客となりて、半卷の經を誦し一句の偈をすゝめたてまつる者だになし。世情は常に眼前に着して走り天理は多く背後に見はれ來るものなれば、千鐘の祿も仙化の後には匹夫の情をだに致さする能はず、狗馬たちまちに恩を忘るゝとも固より憎むに足らず、三春の花も凋落の夕には芬芳の香り早く失せて、蛺蝶漸く情疎なるもまた恨むに詮なし。恐れ多けれども一天萬乘の君なりとて、欲界の網羅を脱し得玉はねば、如是なり玉ふこと如是なり玉ふべき筈あり。憎まむ世も無く恨まむ天もあるべからず。おもんみれば、赫々たる大日輪は螻蟻の穴にも光を惜まず、美女の面にも熱を減せず。茫々たる大刧運は茅茨の屋よりも笑聲を奪はず、天子眼中にも紅涙を餽る。盡大地の苦、盡大地の樂、沒際涯の刧風滾々たり、何とりいてゝ歎き喞たむ。さはさりながら現土には無上の尊き御身をもて、よしなき事をおぼしたゝれし一念の御迷より、幾千の罪業を作り玉ひし上、浪煙る海原越えて濱千鳥あとは都へ通へども身は松山に音をのみぞなくなく孤燈に夜雨を聽き寒衾舊時を夢みつゝ、遂に空くなり玉ひし御事、あまりと申せば御傷しく、後の世のほども推し奉るにいと恐ろしゝ。いざや終夜供養したてまつらむと、御墓より少し引きさがりたるところの平めなる石の上に端然と坐をしめて、いと靜かにぞ誦しいだす。妙法蓮華經提婆達多品第十二。爾時佛告諸菩薩及天人四衆、吾於過去無量劫中、求法華經無有懈倦、於多劫中常作國王、發願求於無上菩提、心不退轉、爲欲滿足六波羅密、勤行布施、心無

なり。木立わづかに間ある方の明るさをたよりて、御陵尋ねまゐらする心のせはしく、荊棘を厭はてかつ進むに、そも〳〵これをば、清凉紫宸の玉臺に四海の君とかしづかれおはしませし我國の帝の御墓ぞとは、かりそめにも申得たてまつらるべきや、わづかに土を盛り上げたるが上に麁末なる石を三重に疊みなしたるあり。それさへ狐兎の踏ゆるに任せ草萊の埋むるに任せたる事、勿體なしとも悲しとも、申すも畏し憚りありとこ、心も忽ち掻き暗まされて、夢とも現とも此處を何處とも今を何時とも分きがたくなり、御墓の前に平伏して圓顱を地に埋め、聲を得立てず咽び入りぬ。

其四

實にも賴まれぬ世の果敢なさ、時運は禁腋をも犯し、宿業は玉體にも添ひたてまつると、まことに免れぬ道理とは申せ、九重の雲深く金殿玉樓の中にかしづかれおはしませし御身の、一抔の土あさましく頑石叢棘の下に神隱れさせ玉ひて、飛鳥音を遺し麋鹿痕を印する他には、誰一人問ひまゐらするものもなきかゝる邊土の山間に物さびしく睡らせらるゝ御いたはしさ。ありし往時、玉の御座に大政おごそかにきこしめさせ玉ひし頃は、三公九卿首を俛れ、百官諸司袂をつらねて、恐れかしこみ、弓箭の武夫伎能の士、あらそつて君がため心を傾ぶけ操を勵まし、幸に慈愍の御まなじりにもかゝり、聊か勸賞の御言葉にもあづからむには、火をも踏み水にも没り、生命を塵芥よりも輕

頃は十月の末、ところは荒涼たる境なれば、見渡す限りの景色いともの淋しく、冬枯れ野邊を吹きすさむ風蕭々と衣裾にあたり、落葉は辿る徑を埋めて踏む足ごとにかさこそと、小語くごとき聲を發する中を踽々然として歩む西行。衆聖中尊、世間之父、一切衆生、皆是吾子、深着世樂、無有慧心など、譬喩品の偈を口の中にふつ〳〵と唱へ〳〵、從ふ影を友として、漸く山にさしかゝり、次第々々に分け登れば、力なき日はいつしか光り薄れて、時雨空の雲の往來定めなく、後山晴るゝ歟と見れば前山忽まちに曇り、嵐に驅られ霧に遮へられて、九折なる岨を傳ひ、過ぎ來し方さへ失ふ頃、前途の路もおぼつかなきまで黒みわたれる森に入るに、樅柏の大樹は枝を交はし葉を重ねて、杖持てる我が手首をも青むるばかり茂り合ひ、梢に懸れる松蘿は鬖々として靜かに垂れ、雨降るとしは無けれども空翠凝つて葉末より滴る露の冷やかに、衣の袖も立ち迷へる水氣に濕りて濡れたる如し。音にきゝたる兒が嶽とは今白雲に蝕まれ居る巍々と聳えし彼峯ならめ、さては此あたりにこそ御墓はあるべけれと、密に心を配る折しも、見る〳〵千仭の谷底より霧漠々と湧き上り、風に亂れて渦巻き立ち、崩るゝ雲と相應じて、忽ち大地に白布を引きはへたる如く立籠むれば、呼吸するさへに心ぐるしく、四方を視るに霧の隔てゝ天地はたゞ白きのみ、我が足すらも定かに見得ず。何と思ひも分け得ざる間に、雲霧自然と消え行けば、岩角の苔、樹の姿、ありしに變らで眼に遮るものもなく、たゞ冬の日の暮れやすく彼方の峯に既沒て、梟の羽翥し初め、空やゝ暗くなりしばかり

と見よ。僧青松の蔭に睡れば松老僧の頂を摩す、僧と松とは相應しゝ。我は汝を捨つるなからん。

此所をまた我すみ憂くてうかれなば松はひとりにならんとすらん。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

あら、心も無く軒端の松を寂しき庵の友として眺めしほどに、憶ひぞ出てし松山の、浪の景色はさもあらばあれ、世に潮泡の跡方なく成りまし玉ひし新院の御事胸に浮び來りて、あらぬさまにならせられ仁和寺の北の院におはしましける時、ひそかに參りて畏くも御髮落させられたる御姿を、なくくおぼろげながらに拜みたてまつりし其夜の月のいと明く、影もかはらで空に澄みたる情無かりし風情さへ、今眼前に見ゆるがごとし。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。實に人界不定のならひ、是非も無き御事とは申せ、想ひ奉るもいとかしこし、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛阿彌陀佛。おもへば不思議や、長寛二年の秋八月廿四日は果敢なくも志渡にて崩れさせ玉ひし日と承はれば月こそ異れ明日は恰も其日なり、南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。いで御陵のありと聞く白峯といふに明日は着き、御墓の草をもはらひ、心の及ばむほどの御手向けをもたてまつりて、いさゝか後世御安樂の御祈りをもつかまつるべきか、南無彌阿陀佛、南無阿彌陀佛。

其　三

りて如斯草庵を引きむすび、稱名の聲の裏には散亂の意を攝し、禪那の行の暇には吟哦のおもひに耽り、悠々自ら樂むに、有がたや三世諸佛のおぼしめしにも叶ひしか、凡念日々に薄ぎて中懷淡きこと水を湛へたるに同じく、罪障刻々に銷して兩肩輕きこと風を擔ふが如くになりしを覺ゆ。おもへば往事は皆非なり、今はた更に何をか求めん。奢を恣まにせば熊掌の炙りものも食ふに美味ならじ、足るに任すれば鳥足の繕したるも纏ふに佳衣なり。ましてや蘿のからめる窓をも捨てゝ月我を吊ひ、松たてる軒に來つては風我に戲る、ゆかしき方もある住居なり。南無佛南無佛、あはれよき庵、あはれよき松。

久に經てわが後の世をとへよ松あとしのぶべき人も無き身ぞ。

其　二

眞清水に世に出づべしともおもはねば見る眼寒げにすむ我を、慰め顏の一つ松よ。汝は三冬にも其色を變へねば我も一條に此心を移さず。なむぢ嵐に搖いては翠光を机上の黄卷に飛ばせば、我また風に托して香烟を木末の幽花にたなびかす。そも〳〵我と汝とは往時如何なる契りありけむ、かく相互に睦ぶこと是も他生の緣なるべし。草木國土悉皆成佛と聞くときは猶行末も賴みあるに、我は汝を友とせん。菩提樹神のむかしは知らねど、腕を組み言葉を交へずとも、松心あらば汝も我を友

世と悟りて、ます〳〵勤行怠らず、三懺の涙に六度の船を浮めて、五力の帆を揚げ二障の波を凌がむとし、山林に身を苦しめ、雲水に魂をわくがれさせては、墨染の麻の袂に春霞よし野の山の花の香を留め、雲湧き出づる那智の高嶺の瀧の飛沫に網代小笠の塵垢を濯ぎ、住吉の松が根洗ふ浪の音、難波江の蘆の枯葉をわたる風をも皆御法說く聲ぞと聞き、浮世をよそに振りすてゝ越えし鈴鹿や神路山、かたじけなさに淚こぼれつ、行へも知れず消え失する富士の煙りに思ひを擬へ、鴫立澤の夕暮に筇を停めて一人歎き、一人さまよふ武藏野に千草の露を踏みしだき、果白河の關越えて幾千の山河隔たりし都の方をしのぶの里、おもはくの橋わたり過ぎ、嵐烈しく雪散る日辿り着きたる平泉、汀凍れる衣川を衣手寒く眺めやり、出羽にいてゝ多喜の山に薄紅の花を愛で、象潟の雨に打たれ、木曾の空翠に咽んで、漸く花洛に歸り來たれば、是や見し昔時住みにし跡ならむ蓬が露に月の隱くるゝ有爲轉變の有樣は、色即空の道理を示し、亡きあとにおもかげをのみ遺し置きて我が朋友はいづち行きけむ無常迅速の爲體は、水漂草の譬喩に異ならず、いよ〳〵心を勵して、遼遠なる巖の間に獨り居て人め思はず物おもはばやと數旬北山の庵に行ひすませし後、飄然と身を起し、加茂明神に御暇告して仁安三年秋の初め、鹽屋の薄煙りは松を縫ふて緩くたなびき、小舟の白帆は霧にかくれて靜に去るおもしろの須磨明石を經て、行く〳〵歌枕さぐり見つゝ圖らずも此所讃岐の國眞尾林には來りしが、此所は大日流布の大師の生れさせ給ひたる地にも近く、何と無く心とゞま

空をさまよふ浮雲に磨かれ出づる秋の夜の月の光をあはれ宿す荒野の裾のむら薄の露の白珠あへなくも末葉元葉を分けて行く風に碎けてはら〳〵と散るは眞に即無常、金口説偈の姿なれども、瞿曇として見る無き瞎驢の何を悟らむ由もなく、いたづらに御禊濟してとり流す幣もろともに夏を送り、窓おとづるゝ初時雨に冬を迎へて世を經しが、物に定まれる性なし人いづくんぞ常に惡からむ、縁に遇へば即ち庸愚も大道を庶幾し敎に順ずるときんば凡夫も賢聖に齊しからむことを思ふと、高野大師の宣ひしも嬉れしや、一と歲法勝寺御幸の節郎等一人六條の判官が手のものに搦められしを、厭離の牙種、欣求の胞葉として、大治二年の十月十一日拙き和歌の御感に預り、忝くも勅祿には朝日丸の御佩刀をたまはり女院の御方よりは十五重りたる紅の御衣を賜はり、身に餘りある面目を施しゝも、畏くはあれど心それらに留まらず、ひたすら世路をいでゝ菩提に入り敷華成果の曉を望まむと、遂に其月十五夜の、玉兎も佛國西方に傾く頃を南無佛南無佛、恩愛永離の時こそ來つれと、髻斬つて持佛堂に投げこみ、露惜からぬ妻をも捨て、いとをしみたる幼きものをも齒を　切つて振り捨てつ、弦を離れし箭の如く嵯峨の奧へと走りつき、わりしに代へて心安き一鉢三衣の身となりし以來、花を採り水を掬むでは聊か大恩敎主の御前に一念の至誠を供し、案を拂ひ香を拈つては謹んで無量義經の其中に兩眼の熱光を注ぎ、兀坐寂寞たる或夜は、燈火のかゝげ力も無くなりて熄まる光りを待つ我身と觀じ、徐步逍遙する或時は、蜘蛛の絲につらぬく露の珠を懸けて飾れる人の

二日物語

此一日

其一

觀見世間是滅法、欲求無盡涅槃處、怨親己作平等心、世間不行慾等事、隨依山林及樹下、或復塚間露地居、捨於一切諸有爲、諦觀眞如乞食活、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

實に住時はおろかなりけり。つく／＼静かに思惟すれば、我憲淸と呼ばれし頃は、力を文武の道に勞らせ命を寵辱の岐に懸け、密かに自ら我をば負み、老病死苦の免さぬ身をもて貪瞋痴毒の業をつくり、私邸に起臥しては朝暮衣食の獄に繫がれ、禁庭に出入しては年月名利の坑に墜ち、小川の水の流るゝ如くに妄想の漣波絶ゆる間なく、枯野の萱の燃ゆらむやうに煩惱の火燄時あつて閃めき、意馬は常に六塵の境に馳せて心猿動もすれば十惡の枝に移らんとし、危くもまた淺ましく、昨日見し人今日は亡き世を夢と見る／＼果敢なくも猶驚かで、鶯の霞にむせぶ明ぼのゝ聲は大乘妙典の御名を呼べども、羝羊の暗昧無智の耳うとくて、無明の眠りを破りもせず、吹きわたる嵐の音は松にありて

文明の庫緒言……一六二〇頁
同陶器の卷……一六三二頁
同紙の卷……一六七八頁
同銃器の卷……一六九四頁
同假名の卷……一七一三頁
○
元時代の雜劇……一七三九頁
折々艸……一八一〇頁

醉興記……一三〇一頁
まき筆日記……一三二八頁
客舍雜筆……一三五七頁
地獄溪日記……一三七七頁
易心後話……一三八五頁
春の一日……一四四九頁
うつしゑ日記……一四五七頁
遊行雜記……一四八一頁
旅の心得……一五一四頁
知々夫紀行……一五二一頁

〇

將棋雜考……一五四五頁
將棋雜話……一五九二頁

艶魔傳……………一〇〇四頁
蹄鐵……………一〇四〇頁
あやしやな……………一〇五三頁
箱根艸……………一〇七九頁
銃獵孝行……………一〇九一頁
○
獅子庵……………一一一七頁
鄕成功……………一一三七頁
伊能忠敬……………一一五六頁
日蓮上人……………一一九六頁
二宮尊德……………一二四三頁
○
突貫紀行……………一二八七頁

縁外縁……………………四六一頁
夢がたり……………………四九一頁
是は是は……………………五〇九頁
醉郷記……………………五一七頁
冷于氷……………………五二三頁
新浦島……………………五七七頁
夢日記……………………六四三頁
露團々……………………六五六頁
鐵三鍛……………………七九二頁
封じ文……………………七九七頁
自縄自縛……………………八一七頁
椀久物語……………………九一〇頁
春の山……………………九七六頁

目録

二日物語……一頁
夜の雪……三二頁
饒倖……五四頁
緣の絲……八三頁
休暇傳……一〇三頁
毒朱唇……一四五頁
ひげ男……一六二頁
新學士……二八〇頁
迷霧……三〇一頁
和合樂……三一一頁
川舟……三一九頁
大珍話……四〇六頁

此篇は予が年來書き捨てたる文どもの博文館の有にかゝれる分をば、こたび同館のおもひ立にて、蒐めて刊せるなり。收むるところ、もと多くは他の需めに應じて草率呵筆せしものにかゝる。されば删補校正の任の予に委れられたるを幸として、予は予の及ぶたけの力を盡したれども、刊行の事、着手よりして僅に百日ばかりにして終りたる程なりければ、心飽くほどには删補をも校正をも做し得るに暇あらずして已めること多し。たとへば元時代の雜劇と題せる章の中には、もと馬致遠ならびに其作漢宮秋以下數篇を説ける一段ありて、其文太陽第一卷中に存するに關らず、此篇に之を脱したるが如きは、心づきて之を補はんとせざりしにはあらざりしかど、終に思ふに任せざりしなり。むかしは雪苑吳下に遊びておのが集を刻

せんとするに臨み、集中の文の未だ藁を脱せざるものをば一夕にして補綴せしかば、此の如く苟且にして能く淺薄の譏を免れんやと勺庭に評されたりといふ。雪苑の英才にして猶譏を被る、況や鈍才にして、しかも自ら斥け棄てんと欲するの陋悪の文字をまで沙汰料簡する能はざるの境に立ちて、僅々の時日の間に此篇校刻一切の事を果せるをや。自ら顧みて、其の事をなすの苟且もまた實に極れるを知る、すなはち識者の指彈を免れざるは、もとより予が期するところのみ。此篇の收むるところの駁雜にして觀るに足るもの無きが如きは、實に是予が才の鈍なるが故にして、しかも亦所謂散亂心の所成なるが故にかゝる。今特にこゝに之を言ふの要無き也。

明治三十五年五月下旬　露伴識

PL
810
O3
1902

LIBRARY
FEB 14 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

PL 810 03 1902
Kōda, Rohan
Rohan sōsho

CALL NO:
PL
810
03
1902

AUTHOR:
Kōda, Rohan

TITLE:
Rohan sōsho

VOL: